# 魔法少女リリカルなのはStrikerS～時の英雄～

テッテル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～時の英雄～

【Ｎコード】
Ｎ７４４１Ｏ

【作者名】
テッテル

【あらすじ】
１０年前、一人の少女の目の前で青年は姿を消した。約束と共に・・・。
私は約束した。次に会う時には貴方の背中を守れるくらいに強くなることを・・・。８年前、一人の青年は、その身で一人の少女を守って約束と共に目の前で消えた。私は約束した。もう一度、貴方に会うために強くなることを・・・。時は経ち、ＪＳ事件を解決して数カ月が経ったなのは達の
前に新たな敵が出現する。そこに、時の英雄と呼ばれる９人の戦士

が現れる。その中に二人の少女が会いたかった人物がいた。今、新たな戦いの幕が開かれる。

注意：これは、作者の妄想で妄想で出来たオリジナルストーリーです。

しかも駄文。そのようなものが嫌いな方はブラウザを閉じてください。

また、誹謗中傷は控えていただけると嬉しいです。

# プロローグ（前書き）

初心者なので温かい目で見てください。

# プロローグ

そこは何もない荒野だった。

そこには9人の人影があった。

周りには生きている生物はなく静まり返っていて荒れ果てていた。

???「一体何が起きたんだよ・・・」

一人の男がそう呟いた。

その声は虚しく空気に溶けていった。

誰もその言葉に答えなかった。否、答えることが出来なかったのだ。

なぜなら・・・

???「街が・・・きえた?」

???「街だけじゃない人も自然も何もかも無くなっている。」

???「なんで!?どうしてこんな酷いことを・・・。一体誰が・・・。」

一人の女性が悲痛な思いで聞くが。その質問に答える者は誰もいなかった。

彼らが立っている場所にはかつて町があった。とても栄えていて木々は生い茂り、鳥のさえずりなども響いて
人々は皆、笑顔を絶やさずに平和に暮らしていたのを覚えている。

しかし、今となってはその町は姿かたちすら無い。あるのは、何かが落ちたと思われる巨大なクレーターだけだった。
焼け焦げた臭いがそれほど時間が経っていないのを物語っている。

どうしてこんなことになったのだろうと誰もが思っていた時

???「・・・そういえば、この街を守っていた宝玉はどこいったんだ?」

一人の男が疑問に思っていたのを口にした。

???「この街を消し飛ばすほどのものが落ちたんだぞ。
一緒に消し飛んだんじゃないのか?」

別の男がそう答えた。しかし、それに対し首を横に振る。

???「いや・・。あれは、相当な魔力を秘めている。
そう簡単に消し飛ぶ訳がない。
じゃなければここまで街が栄えるはずがない。」

???「つまり、誰かが奪っていった。ということか?」

???「そういうことなら合点がいく。」

皆がその意見に納得する。

？？？「という訳でこれからの方針は――！？」

皆にこれからのことを言おうとしたその時、微かに周りの空気が変化した。

？？？「ロイド！！あれ！」

一人の少女が指差した先を見ると、数か所から煙が上がっているのが見える。
そこから金色と桃色の閃光が見えた。

ロイド「誰かが戦っている？・・・コレット、何か見えるか？」

コレット「えっと・・・。あっ！！すごいよ！！人が空を飛んでるよ。」

？？？「いやいやいや、俺らも普通に飛べるだろ！？」

？？？「ははは、そう言うな。いつものことだろ、クラウド。」

クラウド「まぁ、そうなんだけどさ・・・。でもよぉガルド、普通そこよりも違うこと言わない？」

コレットという少女がそんなことを言ったのに対してツッコミをいれる青年。
それに対して苦笑いで答える背中に大きな盾を背負っている青年。

コレット「あっ！！そうだね。えっと、何か・・人じゃない何かと戦っているみたい。」

？？？「イモータルか？」

ガルド「いや、少し違うと思うぞシリウス。どっちにしろ放ってはおけんな」

ロイド「そうだな。ガルドの言うとうりだ」

クラウド「ティファ、いけるか？」

ティファ「大丈夫。いつでもいけるよ。」

ガルド「セフィリア、神姫の準備をしとけ。」

セフィリア「分かった。・・・あれ？バルドにカインどうしたの？
さっきからずっと黙って、なにかあった？」

バルド・カイン「「・・・・・」」

皆が戦闘準備を始めた中バルドとカインはじっと煙が上がっている所を見ていた。
そして、

バルド「なんか、いやな気配を感じる。先に行くぞ！！」

カイン「俺もだ！！」

ロイド「おっおい、バルド、カイン！？」

そう言って二人は駆け出して行った。

ロイド「俺たちも急ぐぞ！！」

一同「「「「「「「「「おう（うん）（はい）！！」」」」」」」」」

ロイド達も二人の後を慌てて追いかける。

これが９人の英雄達と少女たちの運命の出会いであった。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～９人の英雄～

始まります。

# プロローグ（後書き）

作者「やってしまった・・・」

バルド「何やってんだよ」

作者「つい、衝動に駆られて」

カイン「出すからには最後まで書けよ」

作者「はい！頑張ります！え～、作者は素人ですので
温かい目で見てください。なお、ご意見、ご感想を
くださるとやる気が上がりますが、誹謗中傷は
やる気を激減させるのでやめて下さると嬉しいです。
読者の皆さまこれからよろしくお願いします」

# キャラクター紹介（前書き）

これからも設定は増えていく予定です。オリジナル設定があります。
それと、少しだけネタばれ要素がありますのでご注意ください。

カインの設定を追加しました。
バルドのレアスキル名を少し変えました。
コレットのレアスキル一部解禁しました。
ガルドのレアスキル一部解禁しました。
クラウドとティファのレアスキル一部解禁しました。
シリウスの使用武器、レアスキル一部解禁しました。

# キャラクター紹介

## キャラクター紹介

### 剣聖九神将

最近になって頭角を現した九人の戦士。圧倒的な戦闘能力を持ちたった一人で大国三つの全戦力を相手にしても勝利すると言われている存在。次元世界を彷徨い多くの世界を救ったことから『時の英雄』と人々から呼ばれている。管理局の上層部の部隊と幾度か交戦経験があり圧倒的な力で退けたことで管理局上層部からは、警戒されている。（六課等はまだこの存在を知らされていない）一部の犯罪者グループからは崇められていて一声かけられれば瞬時に動くほどである。

＊戦闘能力に関してはあくまで推定であり、正確に測るとそれ以上の能力を持っていると考えられる。

名前　ロイド・アーヴィング　２１歳　男

身長　１８１？

体重　６８？

ＴＯＳの主人公。九神将のリーダーである。
世界統合を果たし二度も世界を救った後相棒とも言えるコレット・ブルーネルと共に様々な異世界に行き多くの人々を救ったとされ英

雄として名を知られるようになった。戦闘では近距離を得意とし、我流の二刀流を使いこなし先陣をきる。主に陸戦を得意とするが、エクスフィアの力を使って天使化して空戦をすることができる。剣の腕前は、仲間であるカインに匹敵するほどで剣聖の称号を持っている。管理局の裏の組織とは何度か交戦をしたことがあり次元犯罪者や局員に『赤き剣聖』のふたつ名で畏れられ、又は崇められている。なのは達に出会い民間協力者として機動六課に協力することを決める。手先が器用なため物の修理などが得意である。目の前で困ってたり救いを求めている人達を放ってはおけない性格で自身の心配より他人の心配をする。仲間にはとても優しく傷つけよう者がいれば、容赦はしない。現在、コレットと交際中。

使用武器

エターナルソード

精霊王オリジンより授けられた魔剣。本気で使うと次元断層を引き起こすほどの威力を持った一撃を放つことが出来る。また、資格無き者はこの剣には触れることすら出来ない。この作品では初期から装備している。

エレメントソード

天海王アルファディオスより授けられた聖剣。装備者に火、水、風、土、雷、氷、光の7種類の属性の技を使えるようにする。ロイドだけでなくコレットも貰っている。その一撃は、虹色の輝きを放つ。また、天海王アルファディオスを召喚することか出来る。これも同じく資格無き者は触れられない。

王者の剣（マスターソード）

エターナルソードとエレメントソードが合わさった時に現れる最強の剣。その一撃は、いかなる概念も防御をも無視し空間をも巻き込んだ攻撃で敵に特大ダメージを与える。

レアスキル

天使化

？？？

戦闘能力　（）は天使化

魔導士ランク　ＳＳＳ＋

魔力ランク　Ｂ（ＳＳＳ＋）

陸戦ランク　ＳＳＳ＋（ＥＸ）

空戦ランク　Ｂ（ＳＳＳ＋）

総合ランク　ＥＸ

名前　コレット・ブルーネル　２０歳　女

身長　１６７？

体重　４７？

ＴＯＳのヒロイン。
世界再生の神子でありロイドと同じく英雄の一人である。ロイドと共に旅をして数多の世界を救ったとされる人物として知られている。戦闘では、チャクラムという特殊な武器を使って中～遠距離を得意とする。また、クルシスの輝石の力を使って天使化をすることによって天使術という特殊な術を使い敵に裁きを下す。また、接近戦対策に体術系を取得したことにより死角がなくなる。その一撃は地面をも陥没させるほどである。管理局の裏の組織とは何度か交戦をしたことがあり次元犯罪者や局員の間では『虹色の女神』と呼ばれるようになる。なのは達に出会い民間協力者として機動六課に協力することを決める。天然で何もない所でも転ぶほどのドジっ娘であるがそれが幸運を呼ぶことも・・・。仲間達曰く、「神に愛されしドジっ娘」と言われるほど。優しい性格で戦いをあまり好まないが、命を弄ぶ様な者には容赦はしない。現在、ロイドと交際中。

使用武器

エンジェルハイロウ

天使の輪の様な武器で威力もそこそこある。天使術の詠唱速度を上げることが出来る。また、自身の魔力量を上げることが出来る。

エレメントソード

ロイドのと同じ能力。しかし、天海王アルファディオスは召喚できない。

レアスキル

天使化

アクセルモード　ＮＥＷ！

新たに解放された天使化した時に使える対接近用の姿。物理攻撃力が大幅に上昇し高速移動からの強力な打撃は相手に痛烈な一撃を加える。主な格闘術はＴＯＳのリーガルの蹴り技とＴＯＧのソフィの使う格闘術が基本だが他にもあるようだ。

戦闘能力　（）は天使化

魔導士ランク　ＳＳ＋

魔力ランク　測定不能（測定器が壊れた）

陸戦ランク　ＡＡＡ＋（ＳＳＳ＋）

空戦ランク　ＡＡＡ＋（ＳＳＳ＋）

総合ランク　ＳＳＳ＋

名前　カイン・レオンハルト　年齢不明（２０代に見える）　男

容姿　上の中

目色　青色

髪型　背中まで伸ばした銀髪で先を桃色のリボンで結っている。
（リボンは８年前になのはから貰ったものです）

身長　１８７？

体重　６３？

体系型　中肉中背

ロイドとコレットが異世界を旅をしていた時怪我をして倒れていたのを助けたことで最初に仲間になった神族の男性。剣の腕前も魔術や回復も一級品の実力を持つ。一人旅をしていた時になのは達の世界で用務員をしていた（約８年前）。天海王アルファディオスや精霊王オリジンとも顔馴染みらしく彼らがいうには、『剣帝』、『雷帝』の称号を持っているらしい。戦闘スタイルは剣術による接近戦、魔術による遠距離攻撃と死角がない。魔術に関しては闇属性以外の上級技、雷属性に関しては、最上級まで使える。またなのはの使う魔法のプロトタイプ、原型ともいえる魔法を使うことが出来る。基本は自身の魔力で生成した『雷切』や聖剣『サイフォス』を使って戦う。また、神剣『マクワフィテル』を受け継いでいる。過去に何かあったらしく時々悲しげな表情をする。本気の時は無表情になる。『銀雷の剣帝』の名で畏れられている。

使用武器

マクワフィテル

神剣ということしか分からない謎の大太刀。普段は、別の空間に収納されている。

サイフォス

カインのことを「友」と呼ぶ喋る太刀。サイズフォームがある。長さは2．8メートル。普段は、マクワフィテルと同じように収納されている。

雷切

カインの魔力で形成される太刀で切れ味はかなり高い。長さは2．5メートル。普段はこれを使っている。

レアスキル

？？？

？？？

戦闘能力

魔導士ランク　ＳＳＳ＋

魔力ランク　ＳＳＳ＋

陸戦ランク　ＳＳＳ＋

空戦ランク　ＳＳＳ＋

総合ランク　ＳＳＳ＋

名前　ガルド・ドム・バロム　年齢不明（見た目は２０代）　男性

容姿　上の下

目色　黒色

髪型　肩まで伸ばした黒髪

身長　１９１？

体重　７０？

体型　中肉中背

戦闘時の服装　ＴＯＶのフレンの着ている騎士甲冑のような感じ。

色は白

闇の一族イモータルでありながら兄弟のバルドと共に人との共存を選んだロイド達の仲間。右手に大きな盾、左手に5メートルのパラディンランスを持ち騎士甲冑を着ている。元闇の五大王のひとりでバルドの兄である（正確には不明）。バルドと共に旅をしていた時にロイド達と出会い行動を共にする。その後、魔界を旅をしている時にヴァルハラ王国の姫セフィリアと出会い彼女の命を救う。魔界の戦争や紛争をロイド達と共に止め魔界統合に貢献しヴァルハラ王国近衛騎士団大隊長の階級を授けられた。戦闘スタイルは盾で敵の攻撃を防いだ後高速の突きなどを繰り出すカウンター戦闘を得意とする。防御に関してはトップクラスの実力を持っていてその防御を破ったのは数える程度しかいない。また、氷属性の攻撃や術を使いこなす。特殊能力に原子崩壊（アトミッククラップス）がある。博識であり、敵に対して非常に冷たい。真の姿があるらしい。セフィリアとは結婚している。『不動の将軍』と言われ畏れられている。

レアスキル（アトミッククラップス）

原子崩壊　ＮＥＷ！

ありとあらゆる物体を構築する結合した原子を一つ一つにまで分解し新たに別の物を作る。それは生物とて例外ではなく全力を出せば万を超える生命を一瞬で原子レベルに分解する事が出来る。
基本は彼はこれを自身が使う槍を作り出す為に使用している（つまり、応用で何でも作れるし崩す事もできる）。その大半が神話の時代の神々の武器や防具である。

？？？

使用武器

パラディンランス

近衛騎士団の正式な重槍。基本的には、この槍を使う。特殊な能力はない。けっこう重い。

？？？

レアスキルと関係があるらしい。

戦闘能力（）は魔力解放

魔導士ランク　ＳＳＳ＋

魔力ランク　ＳＳ（ＳＳＳ＋）

陸戦ランク　ＳＳＳ＋（ＥＸ）

空戦ランク　ＳＳ＋（ＳＳＳ＋）

総合ランク　ＳＳＳ＋

名前　セフィリア・ドム・バロム　年齢不明（見た目は１０代後半）　女性

容姿　上の下

目色　翡翠色

髪型　腰より少し伸ばした銀髪

身長　１７１？

体重　４８？

体型　完璧な体型（つまり、女性にとって理想の体型）

戦闘時の服装　Ｆａｔｅのセイバ―の戦闘服

魔界のヴァルハラ王国第６２代国王クロム・ドム・バロムの息女であり第６３代目国王である。国民を第一に考える心優しい女性。他国の刺客に襲われそうになった時にガルドによって助けられる。その後、彼らに協力を頼み彼らと共に先陣をきり魔界統合に成功する。現在は国を父クロムに任せガルド達と共に行動している。戦闘スタイルは、剣を鞘に収めたまま戦う帯刀術、敵に神速の一撃を与える抜刀術と神姫を召喚したり、それを操る操糸術を使う。操糸術は前姫、後姫、赤姫、蒼姫、黄姫を操る戦闘術でそれぞれ攻撃、回復、補助、防御、状態異常の役割を持ち同時に複数を操ることも出来る。魔力量も父クロムも凌駕するとも言われている。コレット、ティファとは仲良しである。女性で唯一剣聖の称号を持っている。『銀の戦姫』と呼ばれガルドと結婚している。

使用武器

ディスインテグレイト

星を切り裂くほどの力を秘めたバロム家に代々受け継がれている魔剣。資格無き者が持つと剣に取り込まれるらしい。いまだ真の力を見せていないと言われている。

レアスキル

？？？

？？？

戦闘能力（）は魔力解放

魔導士ランク　ＳＳＳ＋

魔力ランク　測定不能（測定機爆発）

陸戦ランク　ＳＳＳ＋（ＥＸ＋）

空戦ランク　ＳＳ＋（ＳＳＳ＋）

総合ランク　ＳＳＳ＋

名前　バルド　年齢不明（見た目は２０代）　男

容姿　上の下

目色　金色

髪型　短く切ったツンツンの赤髪

身長　１８９？

体重　６８？

体型　中肉中背

闇の一族イモータルでありながら兄弟のガルドと共に人との共存を選んだロイド達の仲間。身の丈よりも大きい巨大な剣を片手で振り回すほどの膂力の持ち主で黒のロングコートを着ている。１０年前に、フェイトに出会っている（ＰＴ事件ころ）。また、４年前にミッドにある事情で滞在していて、当時起きた空港火災の時スバルとギンガを助けている。（この時バルドは、顔を隠していたためスバルは、顔を知らないがギンガには顔を見られてる。）なお、この時は、なのは達がミッドで働いているのを知らなかった。故に、二人を救った後、目的を達成させ別の世界に旅立った。元闇の五大王でガルドと共に旅をしていた時にロイド達と出会い、その後ロイド達と行動を共にする。戦闘スタイルは、その巨大な剣を振り回して戦う。その一撃は大地を割るほどである。また、火属性の攻撃や術を使いこなす。趣味が釣り、料理、ドライブなど多彩であり、頭の回転が良く仲間に頼りにされている。動物に好かれやすい体質の持ち主。少々面倒くさがりであるが、頼まれると断れない性格。仲間を大切にしているが敵には容赦しない。レアスキルに『無限の創製剣（インフィニットブレード）』がある。真の姿があるらしい。『煉獄の魔神』と呼ばれている。

使用武器

ケルベロス

地獄の番犬の名を冠した喋る魔剣。よく喋るのでバルドに五月蠅がれているが長年共にした仲で互いに「相棒」と呼び合うほどである。重量が半端なく重くて普通の人は持ち上げられない。フォルムチェンジという特殊能力を持っている。

バハムート

竜帝の名を冠するバルドの持つもう一つの魔剣。『ケルベロス』と同じく喋るがこちらは、それほど騒がしくない。バルドのことを「若」と呼ぶ。重量がケルベロスより重くその一撃で山が潰れたという伝説がある。

レアスキル

無限の創製剣（インフィニットブレード）

詳細不明

？？？

戦闘能力（）は魔力解放

魔導士ランク　ＳＳＳ＋

魔力ランク　Ｓ＋　（ＳＳ＋）

陸戦ランク　ＳＳＳ＋　（ＥＸ＋）

空戦ランク　ＳＳ＋　（ＳＳＳ＋）

総合ランク　ＳＳＳ

名前　クラウド・ケリオン　２５歳　男

容姿　中の中　右の頬に傷がある。

目色　茶色

髪型　ツンツンの黒髪

身長　１７６？

体重　７０？

体型　中肉中背より少し細身

戦闘時の服装　ガンダムＷのゼロカスタムのような感じ

機装国家グランディオンで出会ったロイドの仲間。細身の体で６２口径の二丁拳銃『干将・莫耶（？）』を駆使して戦う。ロイド達がグランディオンを訪れた時に出会い、独裁国家レギオンとの戦争を終わらせるために協力を仰いだ。グランディオンの特殊部隊スレイヤーズの部隊長で部隊の唯一の生き残り。ロイド達と共に先陣をきり、戦争終結に貢献した。その後ロイド達の旅に同行する。戦闘スタイルは『干将・莫耶（？）』を使う射撃戦を主体とする。接近戦も得意。また、装備している鎧装（フレーム）に搭載されている１６対の独立攻撃兵装『フェザーファンネル』を使った特殊攻撃もする。『干将・

莫耶（？）』と『フェザーファンネル』の一斉射撃による強力な一撃『フルバースト』ができる。子供と遊ぶのが好きである。『白き破壊の翼』と呼ばれている

使用武器

干将・莫耶

６２口径の二丁拳銃。体内エネルギーをエネルギー弾に変えて撃ちだすことが出来る。一発の威力がかなり高い。銃身が伸びてビーム攻撃ができる『バスターモード』、連結させると『キャノンモード』になり強力な一撃を放つ。また、『干将・莫耶？（ツヴァイ）』もあり、四つを合わせることで『フォースバレットモード』に変わる。

フェザーファンネル

鎧装（フレーム）に搭載されている羽根状の１６対の攻撃兵装。クラウドの脳波から出る特殊な波動を感知して自動で敵に攻撃する。体内エネルギーをビームに変えて撃ちだす。ナノスキンで出来ているため破壊されても暫くすると元に戻る。

レアスキル

ＳＥＥＤ　ＮＥＷ！

某ガンダムの人たちの使うあの能力とほぼ一緒。

？？？

戦闘能力

魔導士ランク　ＳＳＳ

魔力ランク　Ｂ

陸戦ランク　ＳＳＳ

空戦ランク　ＳＳＳ

総合ランク　ＳＳＳ

名前　ティファ・フューストン　２１歳　女

容姿　上の中

目色　青色

髪型　腰まで伸ばした黒髪のポニーテール

身長　１６８？

体重　４８？

体型　中肉中背

戦闘時の服装　ガンダム種Ｄのスフリーダムのような感じ

独裁国家レギオンのスコーピオン部隊に所属していた女性。最初は、ロイド達と敵だったが後に和解し共に終戦に貢献した。現在は、クラウドと同じ部隊に所属、部隊の副隊長である。二丁ライフル『鏡花・水月』を使った射撃戦闘を得意とする。腰にも一対の砲塔『蒼・莱』が付いている。装備している鎧装（フレーム）に搭載されている８対の独立攻撃兵装『ソードドラグーン・システム』を使った特殊攻撃もする。『鏡花・水月』、『蒼・莱』、『ソードドラグーン・システム』の一斉射撃による強力な一撃『フルバースト』が出来る。普段は、落ち着いた物腰だが戦闘になると性格が少し変化する。可愛いものと子供が好き。実はクラウドとは幼馴染である。『青き自由の翼』と呼ばれていいる。

装備武器

鏡花・水月

二丁ライフル。体内エネルギーをビームに変えて撃ち出す。二つを連結させることで超遠距離攻撃が出来る『ロングライフルモード』になる。

蒼・莱

腰に付いている一対の砲塔。腰に付けたまま攻撃することが出来る。体内エネルギーを高速エネルギー弾に変えて撃ちだすことが出来る。若干追尾性能がある。

ソードドラグーン・システム

鎧装（フレーム）に搭載されている８対の攻撃兵装。脳波から出る特殊な波動を感知して自動で敵に多方向からの斬撃攻撃をする。また、体内エネルギーをビームに変えて撃ちだす。ナノスキンで出来ているため破壊されても暫くすると元に戻る。『フェザーファンネル』よりも出力が高い。

レアスキル

ＳＥＥＤ　ＮＥＷ！

クラウドと同じく。

？？？

戦闘能力

魔導士ランク　ＳＳＳ

魔力ランク　Ａ

陸戦ランク　ＳＳ＋

空戦ランク　ＳＳＳ

総合ランク　ＳＳ＋

名前　シリウス　年齢不明（見た目は２０代）　男

容姿　上の中

目色　緑色

髪型　背中まで伸ばした金色

身長　１８８？

体重　６１？

体型　中肉中背

とある名も無き世界に封印されていた人物。ロイド達が、封印を解いてしまいその恩を返すために旅に同行した。真の姿は、（ロイド達には教えた）体長１５メートル以上もある九つの尾を持った巨大な狐（俗に言う九尾）でその力は、指先一つで世界の法則を捻じ曲げるほどである。ゆえに、その力を恐れた者たちによってシリウスは封印されていた。（現在は、強力なリミッターを１０個付けている）戦闘スタイルは、幻術を使って攪乱させながら戦う。またクロー系、ナックル系の武器を作り出して戦う近接戦闘をもでき、魔術を使った遠距離戦闘も可能である。魔術に関しては全属性の最上級魔術また、複合魔術まで使うことができる。人をからかうのが好き（特に、六課に会ってからは、たぬｋ・・・はやてが）だが、いざという時には真面目になる。仲間を大切に思っているため仲間を傷付ける者には非常に冷たい（この時も敵をからかう癖がある）。『夢幻の覇者』と呼ばれている。

使用武器

神威

シリウスが最も使用するナックル系の武器で脚甲も着く。ある程度離れた所からでも空間をジャンプしてあらゆる方向から拳や蹴りを叩きこめる。光属性強化の追加効果を持つ。

朱雀　ＮＥＷ！

シリウスの使うクロー系の武器で火属性強化の追加効果を持つ。ある程度の怪我が一定速度で回復する治癒効果を持っていて魔術攻撃力も全体的に強化される。

レアスキル

魔法連鎖（チェーンマジック）　ＮＥＷ！

魔術や魔法を続けざまに発動させる事の出来る力。最大で幾ら発動できるかは今のところ不明……。

？？？

戦闘能力（リミッター付き）

魔導士ランク　ＳＳＳ＋

魔力ランク　計測不能（測定機爆発）

陸戦ランク　ＳＳＳ＋

空戦ランク　ＳＳＳ＋

総合ランク　ＳＳＳ＋

## キャラクター紹介（後書き）

作者「いかかでしょうか？」

バルド「チートじゃねえか！」

カイン「レアスキルなんて殆ど不明だし。しかも二つ名が酷い（失笑）」

作者「しょうがないじゃん！！思いつかなかったんだもん。レアスキルについては、後々明らかにしていく予定です。後、ロイドとコレットはある生き物を飼っています。それも早めに出したいと思います」

ロイド「おっ！何だそれって、ノイッシュじゃないのか？」

作者「残念ながらノイッシュさんは出る予定は今のところありません。楽しみにしてた皆さんすみません。」

コレット「かわいいの？」

バルド「こいつのことだ、やばい奴じゃね？」

作者「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

カイン「否定しないってことは・・・まさか」

作者「さあ！いったい何が出るでしょうか。それはお楽しみに！！次回から本編です。これからも宜しくお願いします」

バルド「・・・・・逃げたな」

# 第一話（前書き）

作者「ついに本編が始動。果たして彼らは誰と出会うでしょう！」

バルド「大体、予想はつくけどな」

作者「それは言ったらアカ～～～ン！！！」

デバイスは日本語で喋るようにしています。所々英語もありますが・・・。

英語って難しい・・・・・orz

それと、キャラの喋り方ってこんなんですかね？間違ってたらそこは、温かい目で見守って下さい。

ちなみに念話が《》

キャラの考えているのが（）

デバイスや喋る武器や生物は『』となっています。

それでは、本編をどうぞ！！

# 第一話

生き物気配が感じられない荒廃とした大地の上で二つの何かが火花を散らして高速でぶつかり合っていた。

一つは、少女であった。金の髪をたなびかせて舞うその姿はまさに女神の様である。しかし、その手に持っているのは鎌でその身を纏っているのは黒いバリアジャケットで死神の様にも見える。

彼女、フェイト・T・ハラオウンは謎の生命体と交戦中であった。

その姿は悪魔の様にも見える。体長は2メートルを超え、爪は鉤爪の様になっていて背中には蝙蝠のような翼が生えていた。

フェイト「くっ」

目の前に迫ってくる鋭利な爪。それをギリギリで受け止める。しかし、

???「GAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!!」

フェイト「ぐはっ」

力負けして地面に叩き落とされる。

フェイト「はぁ・・・はぁ・・・。くっ」

痛む体を無理やり動かしてその場から急いで離れる。そこに振り下ろされる凶刃のような爪。

ドンッ！！！！

轟音が響く場所は先ほどまで彼女がいた場所。そこは大きく陥没していた。もし体を無理やりに動かさなかったら潰されていたか切り裂かれていたであろう。そのことに恐怖しながらも目の前の敵から目を離さずに少しずつ距離をとる。

？？？「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！！！」

獲物を逃して悔しがっているのか、はたまた、まだ動き回る獲物に対して喜んでいるのかその敵は叫びながら再び突撃を開始した。

フェイト「！？ハーケンセイバー！！」

突っ込んで来る敵に対してフェイトはハーケンセイバーで攻撃する。

？？？「GAAAAAAAAAAAAA！！」

それに対して敵は自身の爪に魔力を込めてハーケンセイバーに振り下ろしハーケンセイバーを両断した。そして黒い魔力弾を形成してフェイトに向かって撃ち出した。

？？？「GAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！！」

フェイト「フォトンランサー！！ファイヤー！！」

その魔力弾をフォトンランサーで迎撃、相殺させることに成功する。

フェイト《バルディッシュ、シグナム達の方は大丈夫？》

バルディッシュ《はい。敵の数は多いようですがなんとか大丈夫です。それよりもマスターの方こそ大丈夫ですか？》

フェイト《大丈夫だよ。まだ・・・まだいける。それにこんな所でやられる訳にはいかないよ！！》

念話でそう受け答えしながら、自分の胸元で光る金色のペンダントを見つめる。

フェイト（そう、私は・・・私はまだ負ける訳にはいかない！！）

そう自分に言い聞かせ眼前にいる敵に向かって再び攻撃を開始する。

フェイトＳＩＤＥ　ＯＵＴ

――――――――――数時間前――――――――――

フェイト「ロストギア反応？」

それに頷いて答えるのは機動六課の部隊長である八神はやてである。

はやて「そうなんよ。それも第７３管理外世界グローリスからなんや。」

？？？「管理外世界から？」

その言葉に疑問の声を上げるのは彼女たちの親友でもあり管理局のエースオブエース、高町なのはである。

フェイト「管理外世界からロストギア反応・・・確かにおかしいね。誰かが持ち運んできたのかな？」

はやて「否定できへん可能性やね。といゆう訳やからスターズ分隊とライトニング分隊に調査に行ってもらいたいんや。かなり危険な予感がするんやけど行ってくれるか？」

それに対して二人は躊躇いもなく頷いた。

なのは「もちろんだよ。これより、スターズ分隊・・・」

フェイト「ライトニング分隊・・・」

な・フ「「グローリスにロストギアの調査にいきます。」」

はやて「了解した。出動は1時間後や。各自準備をしておくように。・・・さてと、」

そういうとはやては、にやりとして、

はやて「二人の無事をそのペンダントの中の想い人にもお願いしとこかな♪」

そう言ってフェイトが着けているペンダントを見つめる。

それを聞いたフェイトは顔を真っ赤にして、

フェイト「は、はやて!!そんなんじゃないから!!」

なのは「にゃはは、フェイトちゃん顔を真っ赤にして言っても逆効果だよ。」

そう抗議するがはやてはニヤニヤしている。どうやら本当に逆効果だったらしい。フェイトは焦ってしまいついつい・・・

フェイト「そっそういうなのはだっているんでしょ、好きな人」

なのは「ふえっ!?」

親友を巻き込んでいまった・・・。

はやて「そういえばそうやったね。ええなぁ～うちもはよう見つけんとな♪」

そういうはやてはニヤニヤして二人をみる。二人は顔を真っ赤にして俯いた。どうにかしてこの状況を打破するか考えていた二人は結局・・・

フェイト「そっそれじゃあはやて、調査に行ってくるね。」

なのは「あっ！まっ待ってよフェイトちゃん！！」

戦略的撤退を選んだ・・・・

フェイト「ここが第７３管理外世界グローリス・・・」

なのは「なんか殺風景な世界だね・・・」

グローリスに着いたフェイト、なのはとライトニング分隊のシグナム、エリオ、キャロ、スターズ分隊のヴィータ、スバル、ティアナは目の前の風景に唖然としていた。

スバル「なにもないね・・・」

ティアナ「おかしいわね・・・。グローリスは緑豊かな世界っていう情報があったのに・・・何もないわね。」

グローリスについて調べた時に出た情報と明らかに違う現状に全員戸惑いを隠せない。フェイトは、ふとなのはを見ると彼女は首に掛けているペンダントを握りしめて不安そうな顔で荒廃とした大地を見ていた。

フェイト「なのは、大丈夫？」

その声に、はっとしたなのはは慌てて笑顔のなり

なのは「うん。大丈夫だよフェイトちゃん。それに・・・カイン君が守ってくれるはずだから。」

そう答えると握りしめていたペンダントをフェイトに見せる。それは、翼をモチーフにした桃色のロケット式ペンダントだった。

ヴィータ「でもよぉ、ＪＳ事件の時助けに来なかったよな。本当に助けてくれんのか？」

シグナム「だが実際に８年前に高町の命を救ったのは確かだ。ヴィータは見たのだろ冬のあの時に・・・」

ヴィータ「そうだけどよぉ・・・でも、あれ以来姿どころか噂すら

発たないんだぞ。」

ヴィータとシグナムがそう会話してた時、

バルディッシュ「マスター、北に１０キロの地点にロストギアの反応があります。」

フェイトの相棒のデバイス、バルディッシュからロストギアの反応を捉えたという言葉に一同に緊張がはしる。

フェイト「ありがとう、バルディッシュ。皆行こう。」

皆が頷き反応があったらしき場所に向かって移動を始めた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

ヴィータ「なんなんだよ・・・・いったいどうなってやがんだ・・・・」

ロストギアの反応ポイントに到着した一同はただ呆然と目の前の光景を見つめていた。そこには、巨大なクレーターがある以外なにも

なく、焦げた臭いが周囲を漂っていた。どうやら、このような状態になったのにそれほど時間は経っていないようだ。

なのは「ここって・・・確か街があったはずだよね・・・？レイジングハート、生存者は！？生存者はいないの！？」

なのはは、一縷の望みをかけて相棒であるデバイス、レイジングハートに聞くが・・・

レイジングハート「・・・・・・周囲に生体反応は・・・確認できません・・・全滅したかと・・・」

返ってきたのは無情にも全滅ということだった。

エリオ「一体どうしてこんなことに・・・・・」

キャロ「エリオ君・・・」

誰もがその報告に暗い表情になった・・・が、

レイジングハート「！？マスター！！ロストギアの近くに魔力反応、魔導士かと思われます！！」

なのは「えっ！？」

そのことに彼女達は驚く。先ほどまで反応が無かったのに突然現れたのだ。

慌てて現場の近くに行く。するとそこには、ロストギアらしき宝石

を持ったフードを被った二人の人（？）が立っていた

？？？「誰か来たようだぞ・・・・」

？？？「へへへ、そのようだな。どいつもこいつもなかなかよさそうな奴らじゃねーか」

声からして男のようだ

フェイト「次空管理局の者です。それは、ロストギアという危険な物なんです！！だｋ――」

男２「ああ！？んなもん知ってんだよ！！五月蠅せぇな！！！」

男１「・・・お前の方が五月蠅い・・・」

男２「んだとぉ！？」

男１「それよりもここでの任務は完了した。早く撤退せねば奴らに気づかれるぞ。」

フェイト《奴ら？》

なのは《いったい、誰のことを言っているんだろう・・》

フェイト《少なくとも彼らに敵対している組織かも・・・》

男２「ちっ、しゃあねーな。分かったよ。撤退すりゃいいんだろ。」

男1「ポイントDに集合だ。いくぞ。」

スバル「あっ!!逃げた!!」

なのは「スターズ分隊はあっちを追うよ!!フェイトちゃん達は向こうをお願い!!」

フェイト「分かった。なのは達も気をつけてね。」

---

男1「私に着いてくるか仕方ない・・・」

フェイト「武器を捨ててこちらに投降してください。いまなら、まだ弁明の余地があります。」

そう言ったフェイトに対して

男1「フフフ・・・ハハハハハハ」

突然、男は笑い出した。

シグナム「何が可笑しい！！」

男１「フフフ・・・いや、すまない。管理局と言ったか？ずいぶんとお気楽な組織なのだな。街を滅ぼした奴らにまだ、弁明の余地をあたえるなどと・・・」

フェイト「なっ！？」

シグナム「この状況を貴様らが作ったというのか！？」

男１「正確には俺達ではないがな。まぁそんなことはどうでもいい。俺は忙しいのだ。それに、早くせねば奴らが来るしな・・・」

フェイト「奴ら？奴らっていったい誰のこと？」

フェイトはすかさずそれについて聞くすると、

男１「奴らはこの次元世界を旅する放浪者のことだ。多くの世界を救ったということから“時の英雄”または“剣聖九神将”と呼ばれている。・・・長話してしまったようだなでは失礼する。」

シグナム「待て！！このまま逃がすと思っているのか！！」

男１「貴様らの相手はこいつらで十分だ」

男が指を鳴らすと、

キャロ「魔力反応！？こんなにたくさん・・・・もしかして召喚魔法！？」

シグナム「テスタロッサ！！上だ！！」

上を見ると自分に向かって何かが突っ込んできた。

フェイト「くっ！？」

ギリギリで回避して距離をとる。そこには、悪魔のような出で立ちの生物がいた。

？？？「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！！！！」

シグナム「なんだ・・・・あれは？」

それはフェイトをじっと睨みつけていた。

フェイト（狙われているのは私だけ・・・なら）

フェイト《シグナム、あれは私がひきつけておくからエリオ達をお願い！！》

シグナム《テスタロッサ！？なにを――！？》

念話を切って目の前の敵に集中する。

フェイト「バルディシュ！」

バルディッシュ［ｙｅｓ，ｓｉｒ。ハーケンフォーム］

そして、私は目の前の敵に突撃していった・・・・

――――――――――――――――――――――――――――――

時は進んで今

フェイトＳＩＤＥ

？？？「ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ
ＡＡＡＡＡＡ！！！」

フェイト「ぐはっ！？」

蹴り飛ばされて地面に再び叩き落とされる。落ちた時頭を少し打っ
たのか意識が朦朧とする・・・
あれから1時間くらいたっただろうか疲れきっている自分に対して
敵はいまだ余裕がみえる。スピードは自分と同じくらいだが圧倒的
な体力とパワーを持っている。もう魔力もそんなに残っていない。

？？？「ＧＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ
ＡＡＡ！！」

フェイト「くっ、バルディッシュ、ザンバーフォーム」

バルディッシュ「ｙｅｓ，ｓｉｒ，ザンバーフォーム」

なら、これで決める！！

？？？「ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ
ＡＡＡＡＡＡ！！！！」

再びこちらに突撃を開始する敵・・・・けど・・・

それを・・・待っていた！！

フェイト「カートリッジ、ロード！！」

バルディッシュ「ロードカートリッジ！！」

フェイト「雷光一閃！！プラズマザンバーブレイカーーー！！！」

放たれる魔力の奔流それは寸分狂わず・・・・

？？？「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！？」

敵をのみ込んだ・・・・

フェイト「はぁ・・・・はぁ・・・・はぁ・・・・」

思わず地面に手をつける。もう魔力もほとんどない。
けど・・

フェイト「かっ、勝った・・・」

私はあの悪魔に勝ったんだ・・・そう思ったその時・・

???「GOAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

フェイト「えっ!?きゃあ!?」

それは、まだ生きていた。両腕を少し焦がしただけの状態で・・・
吹き飛ばされた私にもう立つ力は残っていない。

フェイト（もう、だめ・・・・）

そう思った時ふと脳裏を掠めていく仲間たちの顔、そして・・・

――――――――約束だ。いつかまた会おう、フェイト――――――――

時の庭園で聞いた、彼の笑顔と最後に聞いた言葉だった。

フェイト（ごめんね、みんな・・・ごめんね・・・）

目の前には悪魔が振り上げた凶刃のような爪
思わず目をつぶる。

フェイト（ごめんね・・・バルド・・・）

ドンッッ！！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？

くるはずの衝撃がこなかった。それどころか誰かに抱きしめられて
いるような感触が伝わってくる。

？？？「言ったよなあ、また会おうって・・・」

それは懐かしい声・・・１０年前に聞いた・・・自分を助けてくれ
た人の声

恐る恐る目を開けると・・・・

バルド「よっ、１０年ぶりだなフェイト」

フェイト「あっ・・・あっ・・・」

燃えるような赤髪と月の様な色の瞳に、右手に巨大な剣を持って背中越しに悪魔の爪を受け止めながら
左手で私を抱きしめて笑っている・・・私の大切な人がいた・・・・・

フェイトＳＩＤＥ　ＯＵＴ

バルドＳＩＤＥ

バルド「おらっ！！」

とりあえず、背中越しにうー、うー唸っている野郎を弾き飛ばして一端距離をとる。そして、改めて、彼女・・・フェイトを見てみると、目をパチクリさせて俺を見ていたから思わず昔の様に頭を撫でてしまった。すると、落ち着いたのか、

フェイト「ほっ本当にバルドなの？」

バルド「俺以外に誰がいんだよ。」

不安そうに聞いてくるから苦笑しながらとりあえずそう答えた。

バルド「おい、ケルベロスお前も黙っていないで何か言えよ。」

そう言って自分の持っている剣に話しかける。

ケルベロス「いや～～いい雰囲気だったから邪魔しちゃぁ～悪いかなぁっと思って黙っていたのにそりゃねぇぜ相棒、ヒャハハハハ！！」

相変わらずふざけた野郎だ。折るぞ・・・

バルド「まぁこいつの処分は後にして［えっ！？］とりあえずここはまかせなフェイト」

フェイト「えっ・・・あ・・う、うん・・・」

とりあえずは、あの野郎をぶっ潰す！！

バルドＳＩＤＥ　ＯＵＴ

## 第一話（後書き）

作者「最初はフェイトさんとバルドの再開で始まりました」

フェイト「バルドに久しぶりに会えて嬉しいな♪」

バルド「まあ、１０年ぶりだもんな」

作者「そして、後は、愛の劇場になるんですね。分かります」

バルド「そんなんなるか！！」

フェイト「ならないの・・・・？」↑すごくショックを受けたような顔

バルド「何を期待してんだよ・・・」

カイン「俺たちの出番は？」

作者「それは・・・・未定です」

カイン「壱の太刀、月閃光！！」

作者「ぎゃーーーーーーーーーーっす！？」

作者はログアウトしました。

カイン「ったく。えーっと次回はバルドの戦闘とガルド達の登場だな。・・俺の出番ないし・・・・ｏｒｚ」

バルド「あの蝙蝠野郎をぶっ潰す！！」

作者「それでは、読者の皆さん次回もよろしくお願いします。」↑

何時の間にか復活！

## 第二話（前書き）

作者「前回予告したとおりバルドの戦闘とガルド達の登場です。」

バルド「俺らの実力が分かるわけだな」

作者「まあ、その片鱗ですがね。ちなみに前半がバルドで後半がガルド達です」

バルド「何人登場すんだ？」

作者「３人ですかね」

なのは「私達の出番は？」

作者「・・・・・・すんません」

なのは「ディバインバスターーーーー！！！」

作者「ぎゃーーーーーっす！？」

作者はログアウトしました。

なのは「まったく。それでは、本編をどうぞ！！」

## 第二話

バルド「さてと、さっさと片付けるぞ相棒！！」

ケルベロス「ヒャハハハ！！派手に暴れるぜ！！！」

バルドは準備体操をしながら楽しそうにケルベロスと会話をしている。

バルド「よしっ、行くぜ・・・デカブツ！！！」

？？？「GOOOOAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！！！」

一瞬で接近するバルドに迎え撃つように右腕を振り下ろす悪魔のそれを寸前で避けてケルベロスを横に一閃、それを悪魔は逆の手で受け止めるが・・・

バルド「おらっ！！！」

？？？「GOA！？」

勢いは止まらずそのまま悪魔を吹き飛ばした。態勢を立て直した悪魔は魔力弾を１００個ほど撃ち出して攻撃。それをケルベロスで高速で斬り、または、かわしながら再び近づいて今度は振り下ろす。それは、悪魔の左腕を切り落とした。

？？？「ＧＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！？？」

鮮血を流しながら悲鳴を上げる悪魔にバルドは懐に潜り手をかざす。

バルド「吹っ飛べ！！戦迅狼破！！」

狼の形をした闘気が悪魔を地面に叩き落とした。

バルド「はっ！、たいしたことねぇな。期待はずれだ・・・フェイトを追い詰めれたのはまぐれってことか。」

ケルベロス［パワーの方は確かにいい方だが、それだけだな。嬢ちゃんに勝てたのも持久戦に持ち込んだからかそこらへんだろ。］

バルド「まっどっちにしろフェイトに怪我させたんだ覚悟は・・・・・できてんだろうな」

バルドから表情が消える。

バルド「ケルベロス、一気に決めるぞ。」

ケルベロス［ヒーーハーー！！派手に決めようぜ！！］

ケルベロスの刀身に黒い炎が纏う。そして、また一瞬にして目の前に移動して反応される前にケルベロスを振るった。

バルド「燃え尽きろ！！魔王炎撃波！！！」

？？？「ＧＵＧＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！！？？？」

至近距離で刀身から放たれた黒炎が敵に当たり巨大な火柱を上げる。炎が治まった時にはあの怪物の姿は何処にもなかった。

ケルベロス［ふうー、終わったかー］

バルド「この程度でくたばるなんてな・・・雑魚が」

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

フェイトＳＩＤＥ

ケルベロスを背中におさめながら呟く彼・・・・

フェイト（圧倒的過ぎる・・・これが・・・今のバルドの実力・・・・）

１０年もたったのに未だ彼の実力の足元にも及ばない・・・・

バルド「さてと、フェイト？・・・おーい」

いったい何時になったらバルドに追いつくのだろう・・・・このままではバルドはまた、自分の前からいなくなってしまうのでは・・・・

フェイト（いや・・・それだけは、絶対にいや！！）

なら、いったいどうすれば――――――

バルド「てい！！」

フェイト「ふみゅっ！？」

突然来た頭への軽い衝撃・・・どうやらデコピンをされたみたい。

フェイト「いたい・・・」

バルド「当たり前だ。痛くしたんだからな。・・・・まったく世話の焼けるやつだな。」

そう言いながらバルドは、私を持ち上げた。・・・・お姫様だっこで・・

フェイト「ふぇ！？／／／／／」

バルド「フェイト、さっきなにを考えていたんだ？」

そう聞きながらバルドはシグナム達がいる方に向かって歩き出した。

フェイト「なっなんのこと？」

バルド「とぼけんなよ。まっ大方、自分は足手まといだ、とか考えていたんだろ？」

フェイト「そっそんなことないよ。」

図星をつかれて思わず声が上ずる。

バルド「別に足手まといじゃねーから安心しな。」

そう言って笑いかける。

フェイト「う、うん／／／・・・あ、あのバルド。私の他にもまだ仲間がいるの
お願い、助けて。」

バルド「それなら、安心しろ今俺の仲間が向かったからなんとかなる。あいつらは、強いからな。」

そう言うバルドの顔は本当に信頼しているようだった・・・

――――――――――――――――――――――――

――――――

シグナム「はあっ！」

相棒のデバイス、レヴァンテインを振るって目の前の敵を切り伏せる。その姿は、赤い色の骨だけの身体に剣を持った異様な出で立ちをしていた。しかし、ただの骸骨という訳ではなかった。先ほど切り伏せた骸骨もシグナムに体を吹き飛ばされ頭部のみを残した状態になってもその下から新しい体を構築して再び襲いかかってきた。

ガキン！！

シグナム「くっ！？」

振り下ろされる剣を受け止めて弾き飛ばし再び切り伏せる。しかし、何度倒しても先ほどと同じように復活する。

骸骨「カカカカカカカカカカ！！」

シグナム「ならば！！」

今度は体ではなく頭部を吹き飛ばす。少し踏鞴を踏でいたがすぐに復活、先ほどからこの繰り返しである。

シグナム（剣の実力はそれほどではないが・・・この再生能力と・・・）

エリオ「うわぁ！？」

キャロ「きゃぁ！？」

シグナム「くっ！？紫電一閃！！」

レヴァンテインを振るい二人に襲いかかっていた骸骨４体を吹き飛ばす

シグナム「二人とも無事か？」

キャロ「はっはい。すみません」

エリオ「ありがとうございます。シグナムさん」

シグナム（数が多いのが厄介だな・・・）

現在シグナム達は総勢５０体ほどの骸骨の群れと戦っている。数的に見れば大したこともないが問題はその圧倒的な再生能力である。切り伏せてもすぐに復活してしまうのでなかなかに厄介である。エリオとキャロも善戦しているがすでに疲れの色が見え始めていた。

骸骨「カカカカカカカカカ！！」

シグナム（どうすれば・・・）

シグナムがそう考えていた時――――

――――ヒュン、ヒュン――――――

何か聞こえた様な気がしたと思った瞬間

――――ドスッ、ドスッ――――

シグナム「ぐっ！？」

エ・キ「「シグナムさん！？」」

両肩に突然、衝撃と激痛がきた。見ると大きな矢が深く刺さっていた。その先を見ると骸骨剣士の群れから少し離れた所に2体の弓を持った骸骨がいた。

シグナム「な・・・・に・・・・・・」

先ほどまではいなかった新たな敵に混乱する。そこにさらに・・・

――――ドスッ、ドスッ――――

シグナム「ぐあっ！？」

両太ももにも同様に矢が刺さった。思わず膝をつく。見ると正面にも同じように弓を持った骸骨がいた。そして、周囲の地中から突然現れる弓を持った骸骨。その数は２００体ほどだった。その手には５本の矢をすでに持っていた。

シグナム（伏・・・・兵・・・・だと・・）

まさかの伏兵に驚愕する。そして、伏兵は矢を放った。総本数１０００本の矢が自分たちに降り注ぐ

なんとかエリオとキャロ（フリードも）を守るため自分の身体を盾にする。

ここまでか。そう思った時・・・・

???「我が前にその力を示せ、花片の如き七枚の守りよ“熾天を覆う七つの円環（ロー・アイアス）”!!」

突然目の前に男が現れたかと思うとその手から巨大な花の様なものが現れ矢を全て弾き飛ばした。

???「大丈夫・・・ではなさそうだが、無事か?」

エリオ「はっはい、助けていただいてありがとうございます。」

???「「ガルド!」」

ガルドと呼ばれた男に女性と男性が近づいてくる。

ガルド「セフィリア、シリウス、怪我人を頼むぞ。俺はスケルトン共の所に行く」

セフィリア「え？・・・うわ、だっ大丈夫ですか？」

ガルドは、セフィリア達にシグナム達を任せて槍を構えて、骸骨の群れに突撃して行きセフィリアはシグナムの状態を見る。

エリオ「あなたたちは？」

セフィリア「それは後で説明するね。・・・傷はそれほど深くはないみたいだね、来て“後姫”」

すると、彼女の後ろから黒髪の花柄の赤い着物を着た女性が現れた。

セフィリア「“ヒール”を。矢を全部抜いたらすぐに発動して。」

セフィリアがシグナムに刺さっていた矢を全て抜き、傷口に後姫が手をかざすと瞬く間にシグナムの傷が消えてなくなった。

キャロ「すっすごい・・・」

セフィリア「どこか、痛い所はありませんか。」

シグナム「いや、問題ない。すまない、助かった。」

礼を言うとセフィリアは微笑んだ。

セフィリア「よかった。後姫、ありがとう。戻っていいよ。」

そう言うと後姫は消えていった。

セフィリア「あとは・・・来て、前姫、蒼姫」

彼女がそう呼ぶとまた何処からともなく、手に大きな薙刀と腰に６本の剣を着けて鎧を着た黒髪の女性と両手に巨大な盾を持った騎士甲冑の青髪の女性が現れた。

セフィリア「蒼姫はこの人たちのことをお願い。前姫は私と行くよ」

それに、前姫、蒼姫は頷く。そして、セフィリアは前姫と共にガルド同様、骸骨の群れに飛び込んで行った。

ガルド「紅龍槍・破!!」

ガルドはパラディンランスから赤い龍のような衝撃波を

セフィリア「魔神剣・蛟」

セフィリアは蛇のように動く衝撃波などを繰り出す。前姫も薙刀を振り回し次々と薙ぎ払っていく。スケルトン（剣士）は復活することなく次々に倒されていった。

シリウス「じゃあ、俺はあっちの弓隊を・・・」

そう言うとシリウスの足元に見たこともない魔法陣が出現する。

シリウス「蒼溟たる波濤よ、戦禍と成りて厄を飲み込め“タイダルウェイブ”!!」

巨大な津波が現れ、シグナム達の身体をすりぬけて行きスケルトン（弓隊）を飲み込んでいった。波が引いた時には、弓隊の姿は無かった。

その光景を見ていた3人のうち、

キャロ「すっすごい！！」

エリオ「あの数を一瞬で！！」

子供二人組は目を輝かせて見ていた。シグナムもまた、

シグナム（一度、戦ってみたいものだ・・）

戦闘マニアの血を疼かせていた・・・

程なくして、スケルトンの群れを全て倒し戻ってきた。

ガルド「もう大丈夫だぞ。」

シグナム「すまない。あなた方がいなければ我々は、負けていただろう。」

ガルド「礼には及ばん。元々こういうのを生業にして生きてきたからな。」

感謝を述べるシグナムに対してそう答えるガルド

エリオ「あっあの！！」

突然、エリオがガルドに声をかける。

ガルド「なんだ、小さき騎士よ。」

その鋭い眼光に思わず竦みあがったが意を決してガルド達にお願いをした。

エリオ「お願いします！フェイトさんを・・フェイトさんを助けてください！！」

セフィリア「フェイト？」

シリウス「誰なんだそいつは？」

シグナム「我々、ライトニング分隊の隊長でありこの子らの保護責任者の者だ。今、悪魔の様な敵と一人で戦っている。助けて貰ってずうずうしいと思うが彼女も助けて欲しい。」

そう言って頭を下げるシグナムにセフィリアが笑顔で答える。

セフィリア「大丈夫だよ、もうすでに仲間が一人行ったから。」

キャロ「仲間・・・ですか？」

ガルド「ああ。先に行ったからそろそろ終わるころだと思うぞ。」

ガルドが言い終わると同時に遠くで轟音と共に巨大な黒い火柱が上がった。

シグナム「なんだあれは・・・」

シリウス「おっ、今日は派手だな。“バルド”の奴、なんか良いことでもあったか？」

そうガルドは言って笑った。

エ・キ（（バルド？・・・どこかで聞いたような・・・））

それを聞いた子供二人は首を傾げていた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

エ・キ「フェイトさん！」

火柱が上がった所に向かって進むと向こうからバルドとフェイトがやってきた。

フェイト「エリオ、キャロ！」

バルドがおろすとフェイトは二人に駆け寄り無事を確認する。

フェイト「二人とも怪我はない？」

エリオ「はい。あの方達が助けてくれたんです。」

そう言ってエリオはガルド達を見る。そのガルド達はバルドと少し離れた所で何やら話し合っていた。

ガルド「今回の事件はやはり――――――か？」

バルド「いや、奴らじゃないな。もっと、何か大きな存在だと思うぞ。」

ガルド「どちらにしろ、このまま放っておく訳にはいかないな。とりあえず、――と合流しないとな。」

フェイト（何を話し合っているんだろう・・・？）

意見が一致したのかバルド達は頷き合ったあと、こちらにやって来た。

バルド「俺たちはこれから仲間の元に向かうが、お前達はどうする

？」

シグナム「仲間？・・・まだ他に仲間がいるのか？」

シグナムが聞くと、

ガルド「ああ。こっちとは別の方から煙が上がっていたからな、そっちに向かった。」

フェイト「えっ・・・それって・・・・」

シグナム「高町達か！」

そうガルドが答えるとフェイト達は驚きの表情を見せ、そう言った。

ガルド「なんだ？知り合いか？」

フェイト「私の友達なんです。今、別の方向に逃げたもう一人を追っているんだけど・・・」

状況から察するにどうやら交戦状態らしい。

バルド「高町？・・・もしかして、なのはか？」

ケルベロス「おやおや！まさかあのなのは嬢ちゃんがねぇ。なんた

る偶然、ウヒャヒャヒャヒャ！！」

エリオ「うわっ、剣が喋った！？」

突然バルドが背負っている剣が喋り出すのでシグナム達はビックリする。

バルド「うっせーぞ、ケルベロス。叩き折られたいか？」

ケルベロス「すんませんでしたーーーーーー！！」

五月蠅い相棒を黙らせてフェイト達に聞く

バルド「俺達と行くか？」

フェイト「うん！」

それに、即答するフェイト。シグナム達も頷いたのを確認したバルドはふっと笑い、

バルド「それじゃ、行くか！！」

それを合図に皆は移動を開始する。

なのは達がいる方に向かって・・・。

## 第二話（後書き）

作者「如何でしょうか？」

バルド「戦闘描写が酷いな。もっと分かりやすくできないのか？」

作者「これが、今の自分の全力です・・・・ｏｒｚ」

ガルド「次回は、なのは達の方だな」

なのは「やっと出番が来たの♪」

バルド「次は何が出てくるのやら・・・・」

なのは「誰だろうと、悪いことをする人はＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＩなの♪」

作者「さてそう上手く行くかな？・・・フッフッフ」

なのは「え？」

作者「さあ！次回は、なのはとカイン達の会合です。読者の皆様、次回も宜しくお願いします！！」

なのは「ねえ！さっきの含み笑いは何なの！？」

## 第三話（前書き）

作者「今回は、予告通りなのは達とカイン達の会合です」

なのは「やっと出番が来たの」

作者「ダメな作者ですいません・・・・ｏｒｚ」

カイン「今回で全員登場するんだよな？」

作者「そうですね。今回で皆出ます」

ロイド「俺達が飼っている生き物は？」

作者「ああ～、それはまだです。もう少し進んでから登場させる予定です」

コレット「早く見てみたいな～」

作者「期待はしないでね・・・。さて謎の男を追ったなのは達は、いったいどうなるでしょうか」

なのは「負けないもん！」

作者「それでは、第三話、始まります！」

原キャラの性格が・・・・分からない・・・・ｏｒｚ

ヴィータさんのセリフが・・・・・

# 第三話

現在、なのは達スターズ分隊は、逃げたフードの男を追っている。
追跡を始めてかれこれ、１０分程たった。

男２「ちっ・・・しつこい奴らだ」

男は逃走をやめて、なのは達に向き直る。

なのは「今、あなた達が持っているものは、ロストギアと呼ばれる危険な物なんです。武装を解除して、それをこちらに渡してください。」

男２「はっ！そんなんで、はいそうですかと言うと思っているのか？こっちはな、今忙しいんだよ。分かるか？ああ？」

ヴィータ「口の悪りー野郎だな。」

男２「てめーもな！」

ヴィータ「んだと!?」

なのは「ヴィータちゃん、喧嘩しちゃだめだって。」

喧嘩腰になるヴィータを落ち着かせて再び、交渉してみる。

なのは「どうしても、渡して頂けないでしょうか?」

男2「しつけーな。渡す気はねーって言ってんだろガキども!!それになな、奴らが来ると面倒なんだよ。」

ティアナ「奴らとは誰のことですか?」

すかさずティアナが聞く

男2「知るかよ!名前を調べたことはないからな。ただ、次空世界では“時の英雄”とか“剣聖八神将”とかって呼ばれて有名らしいぜ。」

その質問に答える男、その答えになのは達は首をかしげる。

なのは《時の英雄?・・・ティアナ聞いたことある?》

ティアナ《いえ、聞いたことありません。しかし、あの人が嘘を言っているようには見えないです。》

次空世界で有名になるなら管理局にも情報があるはずなのに、

そのような、名前は今まで聞いたことが無かった。

男2「奴らには見つかりたくねーからな。あばよ、ガキども！」

男はそう言うと転移魔法を発動した。

ティアナ「転移魔法！？」

ヴィータ「逃がすか！」

逃げようとする男をヴィータが阻止しようとした時、突然、地面が揺れ始めた。

スバル「ティ、ティアなんか、足元が凄く揺れてるよ！？」

ティアナ「そんなの分かってるわよ！」

ヴィータ「てめ、何しやがった！」

男2「てめーらにはそいつが相手するぜ！んじゃな！」

そう言うと男は消えっていった。

なのは「一体何が・・・」

レイジングハート［マスター！こちらに、猛スピードで接近する何かの反応があります。］

レイジングハートからの報告に緊張がはしる。周囲を確認するもその姿を確認できない。

なのは（まさか！？）

なのはが、そう思った瞬間、

？？？「キュオォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

地中から巨大な生物が出現した。その姿は・・・

スバル「うわ！？ティア、でかい、でっかい虫が！！」

ティアナ「うっさい！見ればわかるわよ、落ち着きなさいよバカスバル！」

騒ぐスバルを叩くティアナ。スバルが言うようにそれは、巨大な虫の様だった。体長はおよそ３０メートル、見た目はカマキリの様な姿だが目が一つしかなく、足が合計１０本。腕は非常に長く先には手の様なものが付いていてさらに、関節や目が異様に赤く光っているなんとも不気味な出で立ちであった。

ヴィータ「なっなんだこいつ！？」

レイジングハート［マスター、データに該当生物なし。この世界の原生生物ではありません。］

なのは「えっ！？じゃあ、この生物は別の世界の生き物なの！？」

別世界の生物がいるのに驚く一同、しかし、向こうはそんなことはお構いなしに腕を振り下ろす。

？？？「キュオォォォォォォォォォォォ！！」

なのは「くっ！？」

巨木の様な腕を矢鱈めったらに振り回す。それを、なのは達はギリギリで避ける、すぐ横で風切り音が聞こえて背筋に冷たい汗が伝わる。あれを食らえば、ただではすまないだろう。

なのは「アクセルシューター、シュート！！」

魔力弾を作り出してそれを飛ばす。それを、敵は避けずに直撃した。・・・が、煙が晴れるとそこには、傷一つ付かずに佇む姿があった。

なのは「効いてない・・・」

アクセルシューターが効いていないことに唖然とする。

スバル「うおぉぉぉぉぉぉ1！！」

ティアナ「クロスファイヤー、シュート！！」

スバルは、ウィングロードに乗って接近し、近くの右足をティアナは左足を攻撃するが・・・

ガンッ！！

スバル「うわっ！？」

ティアナ「スバル！？」

スバルの一撃は、当たった瞬間に弾かれ、ティアナの魔力弾は、あっさりと打ち消された。そして、攻撃が弾かれて動きが鈍ったスバルに腕を振り下ろす。スバルはギリギリで避けるも余波で軽く吹き飛ばされる。狙いをスバルにしたのか、近づいてくる怪物。そこに・・・

ヴィータ「あんたのあいては、このあたしだ！！」

鉄槌の騎士ヴィータが、相棒のグラーフアイゼンを右足に振り下ろす。

しかし・・・

ガンッ！！

ヴィータ「なっ！？」

これも、あっさりと弾かれてしまった。

ヴィータ「何なんだこいつ！めちゃくちゃ堅ぇ」

自分の一撃を易々と弾く頑丈さに唖然とする。そこに・・・

なのは「みんな！下がって！！」

砲撃魔法の準備が整ったなのはが声をかける。

なのは「ディバイィィィンバスターーーーー！！！」

得意のディバインバスターを怪物に放つ。それは、寸分狂わず・・・

ドゴーーン！！！

？？？「キュオアアアアァァァァァ！？」

頭部に直撃した。煙が晴れるとそこには、頭部が吹き飛んだ状態の怪物がいた。動く気配はない。

なのは「やったかな？」

ヴィータ「みてぇだな。しっかし何なんだこいつ」

スバル「この世界にいない生物がなんでこんな所に？」

――――――ドクン――――――

ティアナ「知らないわよ。けど、さっきの男が関係しているのは間違いないわね」

――――――ドクン――――――ドクン――――――

ヴィータ「とりあえず、フェイト達と合流した方がいいかもな」

――――――ドクン――――――ドクン――――――

なのは「そうだね、急いでフェイトちゃん達の所ｎ――――」

？？？「キュオアアアアァァァァァァァァァァ！！！！」

突然、背後から聞こえた雄たけびに振り向くと、そこには、頭部を

再生させた怪物がいた。それに、驚き一瞬動きが止まったなのはにそれは、巨大な腕を横なぎに払った。

なのは「えっ！？」

？？？「キュオォォォォォォォォ！！」

ブンッ！！

レイジングハート［プロテクション］

レイジングハートがプロテクションを発動するもあっさりと破壊されなのはに直撃し２０メートルほど弾き飛ばされる。

ヴ・ス・テ「「「なのは（さん）！」」」

なのは「あっ・・・ぐっ・・・・つっ・・・・・」

あまりの痛みに返事も出来ない。口の中で鉄の味がする。なのはを心配して一瞬だけ顔をそらす3人。

そこに・・・

？？？「キュオォォォォォ・・・・ゴアァァァァァ！！」

怪物が集束したエネルギーを口から青い極太の光線にしてヴィータ達に発射した。

ヴ・ス・テ「「「うわあぁぁぁぁ（きゃぁぁぁぁ）！！」」」

3人はまともに攻撃に飲み込まれた。3人を仕留めたのを確認した怪物がなのはに近づいていく。

なのは「ぐっ・・・はぁ・・はぁ・・・」

動けないなのはに徐々に近づいてくる。そして、なのはの目の前にやって来た怪物が静かにゆっくりと腕を振り上げた。

なのは（ここまで・・・なのかな・・・・）

そう思ったなのはの頭の中で様々な記憶が走馬灯のように現れた

その中に・・・・

――――――――なのは、楽しかったぜ。お前達との生活は。またな・・・・――――――――

8年前の冬、そう言って自分の前から消えてしまった大切な人との日々の記憶が現れた。

なのは（カイン君・・・）

スバル「ぐっ・・・な・・の・・はさん・・・」

ヴィータ「やめろ・・・やめろぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

ヴィータの叫びも虚しく怪物はその腕を振り下ろす。それは、なのはにはスローモーションに見えた。

なのは（フェイトちゃん・・・・はやてちゃん・・・・ごめんね。
・・・ごめんね・・・カイン君・・・）

目を閉じる。そして、その腕はなのはに落ちた。

---

あまりの衝撃に砂煙が巻きあがった。勝利の雄たけびを上げる怪物

スバル「あっ・・・・あっ・・・・・」

ティアナ「う、うそ・・・・」

ヴィータ「なのは・・・・なのはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

砂煙が晴れてくる。そこには、無残にも潰されたなのはの姿が・・・・・・・無かった。

ヴィータ「・・・・・・・えっ？」

なのはがいた所になのはがいないことに驚く。怪物の方もどうやら仕留めたはずの獲物がいないことに気がついた。

？？？「キュオ？」

あたりをしきりに探す。すると、怪物から少し離れた所に・・・

？？？「ふぅ～～～ぎりぎりセーフってところか・・・」

なのはを抱きかかえている銀の髪と白いマントを棚引かせている青年の姿があった。

なのは「・・・・・・あれ？」

何時までも来ない衝撃に思わず目を開ける。

するとそこには・・・・・

カイン「よっ、８年ぶりだな・・なのは。」

ずっと会いたかった大切な人がいた。

なのは「カイン君？」

カイン「おうよ。ずいぶんと成長したな、なのは」

そう言って昔のように笑うカインの姿を見てなのはは思わず・・・・

なのは「カイン君！！」

カイン「おわっ！？」

首に腕をまわして抱きついた。

なのは「ずっと・・・ずっと会いたかったんだよ！今までどこに行ってたの！？」

カイン「なのは・・・すまなかっｔ」

？？？「キュオォオオオオオオオオオ！！！」

ゴドンッ！！

カイン達のいる所に怪物が腕を振り下ろす。しかし、それを右にかわしてバックステップで距離をとる。

カイン「やれやれ、感動の再会を邪魔するなんてひどい奴だな」

怪物の空気の読めなさにため息をする。そこに・・・

？？？「カイン！！」

？？？「まっ待てよロイド！」

カインのもとに青年と少女がやって来た。

カイン「ロイド、コレット良い所に来てくれた。俺は、こいつと向こうにいる奴の治療をするからあれのあいてをしてくれ。」

ロイド「ああ、まかせろ！」

コレット「それにしても大きいね。何を食べたらあんなに大きくなるんだろう？」

ロイド「さぁな、いっぱい食って、寝て、運動すりゃあそこまでいくんじゃないか？」

コレット「そっか、すごいねぇ～～」

そんなことを言いながら2人は怪物のもとに向かった。怪物は、ロイド達に腕を振り下ろす。それを、二人は、左右に散ってかわす。その後も矢鱈めったら振り回される腕を右へ左へ上へ、偶に相手の腕に乗ったりと危なげなく避け続けながら攻撃を仕掛けてカイン達からドンドン離れていく。

なのは「カイン君、あの人達は？」

カイン「あぁ、俺の仲間だ。結構強いんだぜ。あっちは任せとけ」

そう言うとヴィータ達のもとに向かう

ヴィータ「なのは！無事か！？」

なのは「うん。大丈夫だよヴィータちゃん。カイン君が助けてくれたから。」

ティアナ「この人が・・・」

スバル「なのはさんの命の恩人ですか・・・」

なのは「そうだよ。この人が8年前に私達が会った人だよ。」

8年前、なのはに迫る正体不明の敵の凶刃から彼女を守るために彼は、自らの身体を盾にして瀕死の重傷を負った。大怪我をしながらもその後一瞬で正体不明の敵を殲滅、それを操っていた敵にも甚大な被害を与える（最終的に逃げられたが・・・）が救護班が到着する前に、なのは達の目の前から消えていった。その後、彼の行方を知る者はいなかった。元々、彼は管理局の人間ではないことも後に明らかにされて騒ぎになったのも有名な話である。ちなみに、彼が、なのはやフェイト、はやてたちが小学生のころの学校の用務員だったのは彼女たちとはやての家族のシグナム達だけの秘密である。そんな、なのはの命の恩人をまじまじと見るティアナとスバル。カインは“なんか照れるな”とか言いながら苦笑した。ヴィータはすこし機嫌が悪そうな顔をしていた。

なのは「ヴィータちゃんどうしたの？」

ヴィータ「カイン、てめぇ、今まで何処行ってやがった・・・なのはが・・・なのはがどれほどお前に会いたかったのか知ってんのか！？」

その言葉にカインはすまなそうな顔になった。

カイン「そのことに関してはすまないと思っている。だが、あの時の俺はもう限界寸前の状態だった。
だから、療養のために別の世界に行かなければならなかった。それに、あの世界に留まっていたらお前達を巻き込むかもしれないからな」

そう言うとカインは、なのはを下ろすと何かの呪文を唱え始めた。

カイン「癒しの風よ、かの者らを癒したまえ“ヒールウィンド”」

彼の足元から見たこともない魔法陣が現れると、なのは達の足元にも出現した。すると、なのは達の周りに風が吹き始め彼女らを優しく包み込むと一瞬で傷を治していった。

ティアナ「すっすごい・・・・」

スバル「痛い所が全部なくなっている。それに・・・前よりも体が軽い！」

その治癒力に驚く一同。そこに、カインの腕についている腕時計型の通信機に通信が来る。カインは時計をトントンっと軽く叩くと彼の前にウィンドウが開き男性が現れる。

???「カイン、こっちの準備は完了した。ロイド達を下げてくれ。」

カイン「了解した。クラウド、遠慮なくやってくれ。」

そう答えると、通信を切り、ロイド達にかける。

カイン「ロイド、コレット。クラウド、ティファの準備が完了した。すぐにそこから離れろ。」

ロイド「わかった。」

短く答えると通信を切る。

すると、向こうからロイド達がやって来た。暫くするとその後を追うように怪物がやって来た。慌ててデバイスを構えるなのは達をカインは手で制する。

カイン「まぁ見てなって」

そう言って、カインは空を指差す。なのは達はカインにつられて空を見上げる。すると、上空から緑色の砲撃が5発怪物に飛んで行った。それは、全弾怪物の頭部の赤い部分に直撃した。

???「キュアァァァァァァ!?」

突然の攻撃に怪物はのけ反り動きを止める。

なのは「今のって・・・砲撃魔法!?」

カイン「少し違うな。あれは、魔法じゃない・・・ただの射撃攻撃だ」

ロイド「皆、この後すぐに強力な砲撃が来るから衝撃に備えていたほうがいいぞ」

その言葉になのは達は驚くしかなかった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

雲より高いはるか上空一人の女性が飛んでいた。白い装甲のようなものを身に纏い背中には機械質な青い翼をはやしていた。彼女、ティファ・フューストンこそ先ほどの射撃を行った人である。

ティファ「全弾命中を確認。引き続き足止めを行います。」

再び彼女は、『ロングライフルモード』の二丁ライフル『鏡花・水月』を構える。

ティファ「ターゲット確認・・・誤差修正・・・ファイヤー」

そして、先ほどの4倍の数ほどの射撃を怪物に放つ。それぞれが、狙いどうりに、頭部、全右足の間接に全左足の間接にヒットして怪物はバランスを崩し倒れる。それでも、ティファは、攻撃をやめずに撃ち続けた。

ティファ「クラウド、後は頼むね。」

そう言いながら彼女は足止めに集中するのであった。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――

クラウド「・・・・今だ」

ティファから少し離れた所にクラウド・ケリオンはいた。青い装甲のようなものを身に纏い背中には機械質な白い翼をはやしていた。彼は、二丁拳銃『干将・莫耶』を合わせると銃身が伸びた。照準を怪物にあわせて反動に備えて背中のバーニアを吹かす。

クラウド「エネルギー充填１２０％。ターゲット照準（ロックオン）・・・・・破壊する」

銃口に高密度のエネルギーが収束するそれと同時に銃身からバチバチという音が鳴る。クラウドは、その銃の引き金を引いた。

ズドオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォン！！！！

轟音と共に周りにあった雲すら吹き飛ばす巨大な破壊の奔流が怪物に向けてまっすぐに放たれた。

――――――――――――――――――――――――――――――

―――

先ほどから続く射撃の雨に怪物は身動きが取れないでいた。ティファの放つ射撃は全て赤い部分にヒットしている。しかし、しばらく続いた攻撃がふと止んだ。それと同時に空が赤く染まり始めた。

なのは「えっ・・・空が急に赤くなってｋ「皆、伏せろ！！」！？」

カインの言葉になのは達（ロイドたちを除いて）は全員伏せる。怪物も空が赤くなってきたのに気がついて見上げると・・・

ズドオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォオン！！！！

周りの雲を吹き飛ばして巨大な光の柱が落ちてきた。それは、怪物の体を易々と飲み込んだ。

？？？「キョオアァァァァァァァ・・アァア・・アァ・・・アァ・・・・ァ」

光に飲み込まれた怪物の断末魔が徐々に消えていく。怪物を飲み込み大地に着弾した光の奔流が収まった瞬間

ゴドォォォォォォォォォォォン！！！

そこに、巨大なキノコ雲が現れた。爆発の衝撃で発生した爆風が２キロも離れたこちらにも届いた。爆風が治まりなのは達は立ち上がる。そこには・・・・

なのは「えっ・・・・」

ヴィータ「何だよあれ・・・・」

目の前の光景に驚愕するなのは達。そこには、怪物がいた場所を中心に半径１００メートル程のクレーターができていた。

クラウド「おーい、みんな無事か？」

上空からクラウドとティファが下りてくる。その背中から生えている翼はまるで天使のようだった。

カイン「ずいぶんと派手にやったな。」

クラウド「そうでもないさ。出力を１．２倍程度に上げただけだよ」

ティファ「クラウドが本気になったら、大型要塞も一瞬で蒸発するからねー」

ロイド「あれは、もうやるなよ。今回はモンスターだったからいいけど・・・」

クラウド「人にはもう撃たないよ。俺だって命の尊さは知ってる。

まぁ、例外とかあるかもしれないけど・・・」

コレット「例外？」

クラウド「さっきみたいなモンスターや仲間を襲うやつら、人を蔑ろにする奴とか・・ｅｔｃ」

なのは「あ・・・あのぅ・・」

カイン「ん？あ、悪ぃ。話に夢中になってた。紹介するよこの４人は、俺の仲間のロイド、コレット、クラウド、ティファだ」

ロイド「ロイド・アーヴィングだ。よろしくな」

コレット「コレット・ブルーネルです。よろしくね」

クラウド「クラウド・ケリオンだ。よろしく」

ティファ「ティファ・フューストンです。よろしくお願いします」

ロイド達がそれぞれ挨拶をする。なのは達もそれぞれ挨拶をする。

カイン「自己紹介も済んだことだし他の奴とも合流するか」

スバル「えっ、他にもいるんですか？」

ロイド「ああ。とりあえず、合流地点に行こうぜ」

ロイドの言葉に皆は頷き仲間との合流地点に向かうことにした。

## 第三話（後書き）

作者「どうでしょうか?今回ちょこっとカインとなのは達の過去も載せてみましたが・・・え?分かりにくい?すみません・・・ｏｒｚ」

カイン「やっと、なのはと再開できたか」

なのは「嬉しいの♪」

作者「バルドといいカインといい、何か書いててイラッとするのはなんでだ?」

ロイド「作者自身がそんなこと言うなよ・・・」

作者「まあ、いっか。えーっと、次回は六課へ皆さん移動します」

コレット「六課のみんなと早く仲良くなりたいな♪」

作者「因みにロイド達は、自分達が時の英雄だということは伏せています。ですので、なのは達は暫くは知らない状態です。次回も出来るだけ早く更新できるように頑張ります。こんなダメな私ですが、これからも宜しくお願いします」

カイン「早く文章力を上げて欲しいものだ」

作者「ほっとけ!!」

## 第四話（前書き）

作者「やっと更新できました」

カイン「毎日ボヘーッとしてるからだ」

作者「ちょっ！？毎日授業中も物語の構成を考えてる人にそれ言う！？」

バルド「授業を頑張れよ。まあ、小説も頑張ってもらいたいけど」

作者「う～～、同時進行は脳が疲れるぜ」

カイン「どの頭がいってんだよ」

作者「よし、表に出ろ。ケンカだケンカ（＾―＾メ）」

ロイド「ってか顔文字それで合ってるのか？」

作者「知るか！！今の俺には世界の定義など無意味！！チェストーーー！！！」

カイン「壱の太刀、朧！！」

作者「あべしっ！！？」

カイン「そこで大人しくしてろ。っという訳で第４話始まります」

原キャラ達の性格が変わってるかもしれないですがそこは、温かく

見ていただけると助かります。ってかロイドが大人びてる・・・・
如何してこうなった・・・ｏｒｚ
オリジナル設定ですのでロイドさん達は、階級があります。それでは、長くなりましたがどうぞ！！

# 第四話

なのは「フェイトちゃん！」

フェイト「なのは！」

ロイド達と共に合流地点に行くとそこには、フェイト達が先に来ていた。お互いの無事を確認できてほっとする。フェイト達のほかに見知らぬ人たちがいる。どうやら、先ほど言っていた仲間たちのようだ。その中に見知った顔があった。その人は、こちらに気づいてやってくる。

バルド「よぉ、なのは久しぶり」

なのは「バルドさん！？」

彼、バルドの姿があることに驚くなのは。なのはもまた、１０年前に彼にお世話になっている。

カイン「あれ？バルド、もしかして、なのは達の知り合い？」

バルド「おぉ、１０年前にちょっとな。ひょっとしてカインもか？」

カイン「まぁな、８年前くらいかな。久しぶりだな、フェイト」

フェイト「カインとバルドって仲間だったんだ・・・・」

バルド「2年前くらいにな」

そう言い頷く二人。そこにシグナムがやってきて、なのはとフェイトに話しかける。

シグナム「高町、テスタロッサ。この者たちに今回の事件のことを聞いてみたらどうだ？なにか情報が手に入るかもしれん」

なのは「あっそうだね。あの、カイン君。今回のこの事件で何か知っていることとってない？」

フェイト「どんな些細なことでもいいから知っていることがあるなら教えてほしい」

カインたちに事件のことを聞いてみるも彼らは、首を横に振った。

カイン「いや、逆に俺たちが聞きたいぐらいだ。」

なのは「そっか・・・」

ティアナ「あの、なのは隊長。一端はやて部隊長の所に戻って今回のことを報告したほうがいいと思います。これ以上この場に留まるのも危険だと思いますし・・・・」

なのは「うん、そうだね。じゃあ一回はやてちゃんの所に戻ろっか」

なのはの言葉にフェイト達は頷く。

なのは「カイン君たちも出来れば事情徴収で同行してもらいたいんだけどいいかな？」

カイン「う～～ん。ロイドどうする？」

ロイド「カインとバルドは二人の知合いなんだろ？だったら今回は、二人に任せるよ」

バルド「俺は別にかまわんぞ。カインもそうだろ？」

カイン「まぁな。んじゃ、なのは、よろしく頼む。ところで何処に連れていくんだ？」

なのは「私たちが、働いている所。機動六課だよ」

その質問になのははは、笑顔で答えた。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――

～ＩＮ機動六課～

ロイド「うっわ～～。すっげ～～！！」

コレット「大きいね。」

ロイドとコレットは六課の大きさにはしゃぐ。

クラウド「かなりの大きさだな。これぐらいの規模の施設は久しぶりだな」

なのは「にゃはは。それじゃあ、私達の部隊長の所に案内するね」

そう言うなのはの後をロイド達はついて行った。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――

～部隊長室～

コンコンッ！

？？？「どうぞ」

なのはとフェイト、シグナム、ヴィータがロイド達を連れて部屋のはいる。そこには、茶髪の少女と小さな妖精（？）のような少女がいた。

はやて「初めまして、私は古代遺跡管理局機動六課の部隊長の八神はやてといいます。まずは、なのはちゃん達を助けてくれてありがとうございます」

リイン「リインは、リインフォース？（ツヴァイ）なのです。」

そう言い、はやてはロイド達に頭を下げる。

カイン「当然のことをしたまでだ。それよりもはやて、そろそろ元に戻していいぞ」

はやて「そうか？ほんなら、遠慮なく。久しぶりやね、カインさん」

カイン「ああ、久しいな。しかし、お前ら随分と立派になったもんだ」

はやて「カインさんは昔とあんま変わってへんね？っとそれよりも皆さんに聞きたいことがあんねんけど・・・・今回の事件、どう思うん？」

そう言って神妙な顔をする。

カイン「そうだな・・・今回の事件は、何か裏がある感じがするな」

バルド「なのは達が見たっていう二人組はおそらく何処かの組織の幹部クラスの奴らだと思うぞ。今回みたいに街一つを滅ぼしてまで何かを奪うようなのは今まで色んなことをしてきたが珍しいな」

そう言い首を傾げながら答える。

フェイト「あの・・・バルド、今まで何をしてたの？」

バルド「ん?う~んとだな。ロイド達とは、2年くらい前に知り合ってそこからずっと行動を共にしていたんだがまぁ、仕事内容は大抵は魔物の討伐依頼や盗賊の撃退とかやったな」

カイン「後は、国同士の戦争にも介入して和解させたり、紛争を止めに行ったり、街の復興の手伝いをしたりしたな」

ロイド「そんな感じで、色々な世界を今まで旅したんだ」

カイン「っとまぁ、そこらへんの話は後にしてまずは、自己紹介からだな」

そういうとカインはクラウドをみる。クラウドは、それに応えて一歩前に出る。そして、ビシッ!っと敬礼をした。

クラウド「機装国家グランディオン特殊部隊スレイヤーズ部隊長クラウド・ケリオンです。よろしくお願いします」

カイン「ちなみに、クラウドの階級は一等空佐だ」

シ・ヴ「なっ・・・」

な・フ・は「一佐~~!?」

慌てて五人は敬礼をする。それに、クラウドは苦笑いをしていた。

クラウド「そんな驚くなよ。俺なんかに驚いてたら後の奴らの聞いたら身が持たないぞ?」

次に、ティファが前に一歩出て同じく敬礼する。

ティファ「次は私だね。元独裁国家レギオン特殊部隊スコーピオン所属のティファ・フューストンです。現在は、グランディオンでクラウドと同じくスレイヤーズ部隊に所属していて、そこの副隊長をしています。階級は、一等空佐です」

それに、なのは達も敬礼で答える。

あいさつが終わった後ガルドとセフィリアが前に出る。

ガルド「魔界ヴァルハラ王国近衛騎士団大隊長のガルド・ドム・バロムだ。よろしく頼む階級は中将だ」

なのは（今度は、中将・・・）

フェイト（なんか、すごいパーティ・・・）

ガルド「んで、こちらにいるお方は・・・・」

セフィリア「もう！ガルド、普通に喋ってよ！えっと、同じくヴァルハラ王国第６３代目国王のセフィリア・ドム・バロムです。皆さん宜しくお願いします」

そう言ってぺこりと頭を下げる。それに、なのは達は口を開けたまま固まった。

シグナム「国・・・王だと？」

バルド「そっ。ヴァルハラ王国の・・・魔界の新王セフィリア・ドム・バロムこの中じゃ一番偉い人。んでもって、ガルドの奥さん」

それを聞いてなのは達は「失礼しました！！！」と言って慌てて敬礼をする。
それに対してセフィリアは苦笑いをする。

セフィリア「あはは・・・、出来れば普通に呼び捨てで呼んで欲しいな。身分なんて必要な時以外は飾りなんだし・・・ねっ♪」

なんとも国王らしからぬ、発言である・・・・

次にシリウスとバルドとカインが前に出る。

シリウス「シリウスだよろしく。階級は、グランディオンじゃあ中将だ」

バルド「バルドだ、階級はグランディオン、ヴァルハラ王国共に同じく中将だ。あと、相棒のケルベロスとバハムートだ。宜しく頼む」

虚空から二本の大剣が現れる。

ケルベロス［俺が、ケルベロスだ宜しくな！フェイト嬢、なのは嬢また宜しく頼むぜ！！］

バハムート［私の名前は、バハムートと言います。皆様、若共々どうぞ宜しくお願いします］

カイン「カイン・レオンハルト、後、相棒のサイフォスだよろしくな。階級は同じく中将。まぁセフィリアの後だからそんなびっくりしないと思うけどな」

同じく虚空より太刀が現れる。

サイフォス［サイフォスだ。以後お見知りおきを］

最後にロイドとコレットが前に出る。

コレット「コレット・ブルーネルです。皆さん宜しくお願いします。階級はえっと・・・・グランディオンもヴァルハラ王国も中将だったかな？」

ロイド「ロイド・アーヴィングだ。皆宜しくな！階級は・・・・・なんだったっけ？」

ロイドの発言に皆ずっこける。クラウドがやれやれといった感じで立ち上がる。

クラウド「大元帥だろ！？俺たちの中で二番目に偉い階級持ってんのに忘れんなよ！！」

コレットを除いて皆呆れた顔でロイドをみる。

テェファ「さすがロイド・・・他の元帥達の前で「階級なんてただの飾りだろ？」なんて言っただけはあるね・・・」

シリウス「その後、激怒した元帥共と乱闘騒ぎになったな。結局他の元帥達を一人で黙らせていたな。ハハハ！さすがはロイドだ」

ロイド「忘れてたんだからしょうがないだろ！それに、階級なんて飾りなのは当たり前だろ？というかなんで、あの時皆（元帥達）が怒ったのか未だによくわかんねぇんだけど」

その時の事を思い出して首を傾げるロイドに苦笑いする仲間たち。
一方、なのは達はというと・・・・・

なのは（一佐から中将それに大元帥って・・・）

フェイト（国の王様までいるよ・・・）

はやて（なんやろ・・・この出鱈目チームは・・・）

出鱈目チームに唖然とするしかなかった。

はやて「とりあえず、皆さんは民間協力者としてうちで働いてることにしたいんやけど・・・ええか？」

ロイド「ああ、んじゃこれからよろしくな」

暫くなのは達はロイド達と談笑していたが、シグナムが「主はやて！彼らと摸擬戦をやらせて下さい！」と戦闘マニア（バトルジャンキー）よろしく言ってきたのでじゃんけんでセフィリアが決定し後日行われることとなった。

その後、なのは達に六課内を案内され、シャマル、ザフィーラ、ヴァイスらと挨拶をして（ザフィーラはコレットに「くぅーちゃん」と呼ばれた）そして、今はＦＷ陣の前にいる。

スバル「スバル・ナカジマです。よろしくお願いします」

ティアナ「ティアナ・ランスターです。よろしくお願いします」

エリオ「エリオ・モンディアルです。よろしくお願いします」

キャロ「キャロ・ル・ルシエです。こっちにいるのは使役竜のフリードリヒです」

フリード「きゅくー！」

そのままフリードは、パタパタとバルドに近づいてその頭の上に乗って丸くなってしまった。

バルド「ん？」

キャロ「フリード！？」

フリードの行動に慌てるキャロ。

バルド「まあ、気にするな」

そう言ってキャロの頭を撫でて落ち着かせる。

その後フォワード陣に自己紹介をするが階級を聞くたびに皆「一佐ーーー！？」「中将ーーー！？」等と仰天していた。（その間もフリードは、バルドの頭の上で寝てる）

紹介を終えてなのは達は次の所に案内しようとしたとき・・・・

――――ぐぅ～～～――――

ロイドのお腹が鳴った。

ロイド「腹減った・・・」

コレット「そういえば、朝から何も食べてなかったね」

時刻は午後6時過ぎだった。丁度いい時間なので、FW陣も連れて食堂に行くことにした。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

～～IN食堂～～

ロイド「おっ、これうめ～～！」

コレット「おいしいね」

現在なのは達は、食事中である。様々な料理がテーブルに並んでいる。

なのは「よかった。口に合わなかったらどうしようかと思ったよ。」

フェイト「料理長達も喜んでくれると思うよ」

陰で料理長もホッとしている様子。

ティアナ「そっそれにしても・・・クラウド一佐とティファ一佐は

よく食べますね・・・」

皆クラウド達を見る。そこには、山のように積まれた皿があった。
軽くあのエリオ、スバルの食べた量を超えている。さすがの二人も驚いて動きを止めている。

クラウド「ん？これくらいはまだ余裕だぞ。それと、俺たちのことは呼び捨てでいいぞ」

ティファ「そうだね。まだまだいけるかな」

その言葉に唖然とする六課メンバーにカインが説明する。

カイン「クラウドとティファは体内エネルギーを消費して戦うから常人よりも数十倍の量を摂らないといけないんだ」

シリウス「おかげで、太ることもないんだよな～」

六課女性陣「えぇ～～～～～～！！？？」

シリウスの発言に驚いた女性陣はティファに詰め寄り色々と聞こうとする。その光景を苦笑しながら見ていたロイドの元にエリオがやってくる。

エリオ「あの、ロイドさん一つ聞いても良いですか？」

ロイド「ああ、答えられる範囲ならいいぜ。あと俺のことは呼び捨てで呼んでも良いぜ」

エリオ「あっ、えっとさすがにそれはちょっと・・・・えっと、

ロイドさんはどうしてそこまで強くなれたんですか？」

エリオの質問に“別に呼び捨てでもいいんだけどなぁ”と苦笑して呟きながら答える。

ロイド「う～ん、強くなれたか・・・。別に俺はそこまで強くはないぞ今の俺がいるのは仲間がいるからかな。・・・・あとはこいつのお陰さ」

ロイドは左手の甲に付いている青い宝石のようなのを見せる。

エリオ「それは？」

ロイド「エクスフィア。人の中の潜在的能力を引き出す・・・・人の命でできた宝石だ」

エリオ「え？」

その言葉に皆静まり返る。

コレット「ロイド・・・・・」

ロイド「いいんだコレット。ここの人たちは皆いい人達だ。だから話しておいたほうがいいと思う。皆にお願いしたいんだけど、このことは他言無用・・・ここだけの秘密にしといてくれ」

それに皆頷くのを確認したロイドは、エクスフィアのことを話し始める。エクスフィアの使い道とその作り方、それを制御する要の紋のこと、エクスフィアを生産していた人間牧場のことそれを統括す

る組織クルシスの計画のことを、それにより何千、何万の人の命が使われたこと。自分とコレットの装備しているエクスフィアは特別なものでクルシスの輝石≪ハイエクスフィア≫と呼ばれるものだというと。エクスフィアの病気にかかったコレットを助けるためにしたこと。そして、ロイドとの装備しているエクスフィアはエンジェルス計画というもので被験体とされた自分の母親の形見だということ。できるだけ皆に分かるように説明した。

ロイド「っと、大体こんな感じかな・・・・」

なのは「そっそんなことって・・・・」

フェイト「許せない・・・人の命をなんだと思っているの!?」

人の命を軽視するような実験が四千年という途方もない時間行われていたことに皆憤慨する。

シグナム「それでロイドよ、その組織はどうなったのだ?」

シグナムの質問にロイドは皆を安心させるように答える。

ロイド「俺たちの・・・今ここにはコレットしかいないけど昔の仲間達と一緒に戦って首謀者を倒してクルシスは壊滅したよ。地上に残ったエクスフィアは俺とコレットで回収した」

その言葉になのは達は安堵の表情をする。

ロイド「良い奴だったんだけどな・・・・・」

ロイドは、悲しげな表情で低く呟いた。

なのは「え？」

ロイド「いや、なんでもない。それよりも皆ごめんな。食事時に暗い話をして。さっきのはいったん忘れて飯食べようぜ」

そう言って食べ始めるロイド達をなのは達はそれぞれ様々なことを考えながら見ていた。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

その晩・・・・・

バルド「フェイト・・・・なぜお前がここにいる？」

フェイト「あはは・・・えっとそれは・・・その・・・」

あの後、シリウスの“今日からどこに泊まるんだ？”の一言にはやてが“ここに住んでええよ”と言ったのでバルド達はそれぞれ部屋を借りることにした。時刻は夜の１２時過ぎそろそろ寝ようとしたところバルドの部屋にフェイトが入ってきて今に至る。

フェイト「今日、ここで寝ていいかな？」

バルド「はあ！？」

フェイト「えっと・・・だめ・・・かな？」

涙目&上目づかい。世の男はこれだけで大抵なんでも許してしまうだろうそれほどの破壊力を持つこの攻撃。（作者の私でも鼻血出ます）だが残念なことにバルドにはこの攻撃は効かないのだが・・・・

バルド「はあ～～～、好きにしろ・・・」

悲しいかな。バルドは親しき者の頼みは断れない性格のためにこの要求をのんだ。

バルドはベッドから降りソファーの方に向かおうとしたところフェイトに袖を掴まれる。

フェイト「一緒に寝てくれないの？」

バルド「あのな・・・さすがにそれは拙いだろ」

そう言って振り向くと今にも泣きそうなフェイトの顔があった。

フェイト「お願い・・・」

バルド「わかったわかった」

その言葉を聞いた瞬間フェイトの顔に笑顔が戻る。

バルド「ところでフェイト、なんで自分の部屋で寝なかったんだ？」

ベッドに入った後バルドは聞く。バルドの質問にフェイトは困ったような顔をする。

フェイト「ちょっと居づらくなって・・・・それに・・・昔みたいに寝たかったし・・・」

最後は小さくなったためバルドは聞き取れなかった。その返答にバルドは首を傾げた。

フェイト「な、なんでもない！おやすみバルド」

そう言ってフェイトは布団に頭まで被って目を閉じた。

バルド「ああ、おやすみフェイト」

昔のように頭を撫でながらバルドも目を閉じた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

～なのは・フェイトの部屋～

？？？「やだやだ～～～～！！」

カイン「困ったな～」

今カインはなのはの部屋に来ている。目の前には金髪の緑と赤のオッドアイの小さな少女が泣きじゃくってカインの裾にしがみ付いていた。

なのは「ヴィヴィオ。カイン君が困っているから離れなさい」

ヴィヴィオと呼ばれた少女は首を横に振って更に強くしがみ付いた。
今この現場には一つの謎があった。それは・・・

ヴィヴィオ「やだ～～～！カインパパと一緒がいい！！」

カイン「なあ、なのは・・・どうして俺がパパなんだ？」

カインとヴィヴィオは初対面なのだがなぜか『パパ』と呼ばれていることだ。

なのは「じ・・実は・・・・」

なのはは、数ヶ月前のことを話し始めた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

～～数ヶ月前～～

ヴィヴィオ「なのはママ！！」

その声に振り向くとこちらにヴィヴィオが走って来るのが見えた。

なのは「ヴィヴィオ！」

なのははしゃがみ腕を広げる。ヴィヴィオはなのはの胸に飛び込んだ。ヴィヴィオを抱き上げたなのははそのまま自室に戻った。

ヴィヴィオ「なのはママそれなぁに？」

ヴィヴィオが指差す所を見る。どうやら首から掛けていたペンダントを見ているようだ。

なのは「ん？これはね、私の大切なものだよ」

そう言ってヴィヴィオを降ろして見えやすいようにしゃがんでペンダントを開いて見せた。その中には一枚の写真があってなのはと一人の銀髪の青年が写っていた。その青年は、なのはの頭に手をのせて優しげな顔をしていた。

なのは「これは、昔のママの写真だよ」

ヴィヴィオ「わぁ～。あれ？この人だぁれ？」

写真の中にいる青年にヴィヴィオが指をさす。

なのは「この人は・・・カイン君っていう人で私を助けてくれた人・・・今一番会いたい人だよ」

そう言って昔を懐かしむなのはを見てヴィヴィオは改めて写真の中の青年を見た。

ヴィヴィオ「・・・・・パパ」

なのは「え？」

ヴィヴィオ「カインって人、パパになってくれないかなあ」

それを聞いてなのはもカインの写真を見る。

なのは「大丈夫だよ、カイン君ならきっとヴィヴィオのパパになってくれるはずだよ」

ヴィヴィオ「うん！！」

そう答えるとヴィヴィオもうれしそうに笑った。

――――――――――――――――――――――――――――――――

なのは「っと言う訳なの・・・」

カイン「なるほどな・・・」

そう言うとカインはヴィヴィオの目線に合わせる様にしゃがんだ

カイン「ヴィヴィオ、俺みたいなのがお前の父親になってもいいのか？俺は、お前の思っているほど綺麗な奴じゃないぞ。それでもいいか？」

ヴィヴィオ「うん！パパでいい！」

元気に答えるのを見て「そうか・・・」と言いカインは優しげな表情で頭を撫でる。ヴィヴィオは気持ち良さそうに目を細める。

カイン「なら、大事な娘のお願いに応えるとするか。なのは、それでいいか？」

なのは「うん！」

ベッドにヴィヴィオを挟むようにに寝るなのはとカインその二人の手を握る小さな手。

ヴィヴィオ「おやすみ、ママ、パパ」

なのは「おやすみヴィヴィオ、カイン君」

カイン「ああ、おやすみヴィヴィオ、なのは」

六課の夜は静かに過ぎて行った・・・・・・

――――――――――――――――――――――――――――――――

～～？？？～～～

闇に満ちたとある空間に複数の影があった。

？？？1「時は満ちた・・・・」

？？？2「今こそ我らの力を世界に見せる時だ」

？？？3「問題はあの九人ですね・・・・」

？？？4「それと、管理局のエース共だな。なかなかに厄介だ」

？？？5「問題ねぇよ。誰が相手だろうが俺たちは殺し尽くすだけ

だ」

？？？６「油断するな、相手は最強と謳われる戦士たちだ」

？？？７「彼らはどんな悲鳴を聴かせてくれるのかしらね。ウフフフフ！」

？？？８「そうだね、楽しみだねお姉様。アハハハハ！」

？？？９「まずは小手調べと行きましょうかね。ウヒヒヒヒヒヒ！！」

？？？１０「お前うざい。いっそのこと私達全員で行けばいいじゃん。そうすれば
すぐ片づくよ」

？？？１１「それは、まだ早い。奴らの力を測ってからだ」

？？？１２「フフフ、真の王・・・・皇帝の目覚めは近いぞ」

？？？１３「宝玉は手に入った・・・残すは６つだ」

？？？１４「せいぜいつかの間の休息を楽しむがいい」

？？？１５「真の戦いはこれからだ・・・」

？？？１６「我ら『使徒』は、皇帝と共に・・・」

？？？１７「剣聖九神将よ覚悟するんだな。フハハハハハハハハハハ！！！」

？？？１８「・・・・・・・・・・・・」

新たな闇が静かに動き始めた。

## 第四話（後書き）

作者「チェストーーー！！」

カイン「あぶなっ！？いきなり日本刀振り回すな！！」

バルド「いきなりどうした！？」

作者「喧しい！！何嬉しいイベント発動させてやがんだこの野郎！！」

カイン「お前が書いたんだろ！？」

なのは「私としては嬉しいな。作者さんありがとう♪」

作者「ぐはっ！！！？」

バルド「あ、鼻血と吐血して死んだ・・・・・」

カイン「そこは、ほっとけ。まずは、俺達とんでもない階級もった部隊なんだな。ロイドは大元帥か・・・・」

バルド「まあ、全部作者の妄想だからな。何でもありなんじゃないか？」

カイン「そうなんだろうな。後、グランディオンとヴァルハラの設定とか書く予定らしい。そんなことよりも早く続きを投稿しろっていう話だがな」

フェイト「でも、それがあった方が読者の皆さんも分かりやすいんじゃないか？って作者さんは、考えてるみたいだけどね」

バルド「え～っと、次回は模擬戦とか書く予定らしい。じゃ、今回はこの辺で。次回もお楽しみに！！」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第五話（前書き）

作者「何時の間にか総合ＰＶが１万オーバー、ひゃっほ～い！！！」

コレット「おめでとう！」

ロイド「やったじゃん」

作者「これも、この小説を読んでくださる皆様方のお陰です。もう私感動しすぎて涙の海に水没しそうです」

バルド「今回は予告通り模擬戦とちょこっと日常を混ぜるんだってな」

セフィリア「私とシグナムの対決だね」

作者「書いてて可笑しな所とかあるんでないかと内心ビビってます。」

カイン「下手な文章ここに極めりって感じだもんな」

作者「うるさい！！これでも全力投球なんだよ！ああ～～他の作者様の様な素晴らしい文が書きたい！！」

バルド「まあ、頑張ることだな」

作者「努力します・・・・。さて長くなりましたが本文をどうぞ！！」

シリウス「情報を整理できなくて無駄に文が長いもんな」

作者「ほっとけ！！」

シグナムさんの紫電一閃って中距離攻撃できます？

# 第五話

〜〜訓練場〜〜

ガルド「セフィリア、刃は潰しておけよ」

セフィリア「分かってるよ」

ガルドにそう答えるセフィリアの元にシグナムがやって来る。

シグナム「セフィリア、その格好でやるのか？」

今セフィリアは白を基調としたドレスを着ているのでシグナムが聞くとセフィリアは「まさか」と答えた。

セフィリア「今から戦闘服に変わるから待ってて」

そう言うとセフィリアの周囲を魔力が包み込み晴れたころには青い騎士甲冑（Ｆａｔｅのセイバーの様な感じ）を着たセフィリアがいた。

シグナム「バリアジャケットと違うのだな」

セフィリア「うん。私はデバイスって言うのがないから自分の魔力でこういう服を形成しているの」

そう言いシグナムと共に移動する。

セフィリア「それじゃあシグナムお願いします」

シグナム「うむ。こちらこそよろしく頼む」

現在なのは達隊長陣とＦＷ陣、ロイド達は訓練場に来ている。先日約束した、摸擬戦をすることとなった。今回は街のフィールドである。

なのは「勝敗は相手を気絶させるか戦闘意欲を奪った方の勝ちで決めるね。それじゃあ二人とも準備はいい？」

それに二人は、頷いて答えた。

なのは「レディー、ゴー！」

シグナム「ヴォルケンリッター烈火の将、シグナム」

セフィリア「ヴァルハラ王国国王、銀の戦姫セフィリア」

シ・セ「いざ、参る！！」

合図と共に二人は突撃を開始した。

―――――――――――――――――――――――――――――――

フェイト「始まったね」

はやて「せやね。セフィリアちゃんの実力はどれほどのもんか見させてもらおうか」

スバル「エリオ、セフィリアさんってどれくらい強いの？」

エリオ「えっと、すごく強かったです」

バルド「そりゃ、そうだ。セフィリアは俺達の中で４番目に強い剣士だからな」

フェイト達が話し合っているとバルドがやって来た。

フリード「きゅく～～」

バルドを見かけたフリードは近づいてきてそのままバルドの頭の上に乗って寝てしまった。

キャロ「フリード！？だめだよ～！」

フリードの行動に慌てるキャロにバルドは笑いながらキャロの頭に手を載せる。

バルド「気にすんなって。ここが気に入ったんだろ？」

そう言ってキャロを撫でるバルドの表情は、父親のような優しげな表情を見せる。撫でられてキャロは、気持ち良さそうに目を細める。

フェイト「バルド、４番目に強いってことは１番は誰なの？」

バルド「正確には剣術の実力の強さだがな。そうだな・・・ロイドかカインあたりだろうなまあ、見てなって」

――――――――――――――――――――――

シグナム「はあーーー！！」

先に動いたのはシグナムであった。レヴァンテインを上段から振り下ろす。それをセフィリアは腰に挿していた剣を鞘ごと抜き受け止める。暫しの拮抗の後、次に横一閃、それをセフィリアは屈んで避けてそのまま懐に潜る。

セフィリア「潜身脚！」

足払いからの回し蹴り。足払いによりバランスを崩すシグナムだが回し蹴りを腕でガードして受け流してその勢いを利用して距離をとる。セフィリアは、シグナムが着地する前に接近、追撃を加える。

セフィリア「双衝！！」

鞘で殴りかかるが、シグナムは、上空に飛ぶことで回避する。

シグナム「それが、セフィリアの戦闘スタイルか」

セフィリア「ええ、これが私の戦闘スタイルの一つ帯刀術です」

そう言いシグナムと同じ高さに立つ。久しぶりの骨のある戦闘にシグナムは燃えていた。

シグナム「ならば、もうひとつのスタイルを見せてもらうぞ！」

再び、シグナムはセフィリアに肉薄する。それに応える様にセフィリアも突撃する。それを、見ていたなのは達は、唖然としていた。

なのは「空を・・・駆けている？」

そう、セフィリアは空を飛んでいるのではなく駆けていたのだ。それも、ものすごい速さで。

カイン「セフィリアは足の裏に魔力で作った足場を形成して空を駆けるんだ。」

カインの説明に驚きながら戦いを見つめる。空を飛んでいるとは違い足場があるセフィリアにとって陸も空も関係はない。先ほどと同じく“潜身脚”を使う。それを見切ったシグナムは高度をさらに上げて避けレヴァンテインを振り下ろす。セフィリアはバックステップで避け着地と共に足の裏の魔力を爆発させ再び接近する。

セフィリア「烈震虎咆！！」

シグナム「ぐあ！？」

両手に集束させた闘気を放つ。虎の形をした闘気は、シグナムを吹き飛ばす。そのまま、背後にあったビルにぶつかり粉塵が舞う。

シグナム「はあぁぁぁぁ！！」

煙を吹き飛ばしながら、セフィリアに斬りかかる。それを受け止め

られたが、次に放った蹴りがセフィリアの脇腹を捉える。吹き飛ばされるもセフィリアは態勢を整える。

シグナム「レヴァンテイン！カードリッジロード！！」

レヴァンテイン［エクスプロージョン］

レヴァンテインから薬莢が飛び出す。

セフィリア（・・・・来る）

それを見たセフィリアは居合いの構えになり目を閉じる。彼女を中心に静寂に包まれた。

シグナム「紫電一閃！！！」

放たれる魔力の奔流それは真っ直ぐセフィリアに向かう。

シグナム（なんだ？あの構えは・・・・）

見たこともない構えに警戒する。

セフィリア「・・・・・・・・・・っ！！！！」

シグナム「っ！！」

瞬間、セフィリアが目を見開く。一瞬背筋に寒気が奔ったシグナムは慌てて上に飛ぶ。そして・・・・

セフィリア「神速一閃“葬刃（ソウジン）”！！！」

その言葉と共にキンッ！と鳴り鞘に剣が収められる音がした。それと同時に・・・

スパッ！！ズウゥゥゥゥゥゥン！！！

シグナム「なっ・・・・・！」

シグナムの放った紫電一閃は、真っ二つに割れあらぬ方向に飛んで行った。そして、シグナムの背後にあった二つのビルが綺麗に横に切れて崩れ去った。

セフィリア「初見で避けるなんて流石です」

シグナム「それが、セフィリアの二つ目のスタイルか」

セフィリア「ええ、抜刀術と言います」

これを見ていたなのは達は今の光景に驚いていた。

なのは「フェイトちゃん・・・今の見えた？」

フェイト「ううん・・・全然見えなかった。それどころか、鞘から剣を抜いた所も見えなかった」

はやて「なっなんや今の攻撃。ビルをバターみたいに切ったで」

バルド「セフィリアの得意技“葬刃”神速の一撃で放たれる居合い切りだ。距離に関係なく対象を一刀両断する。そもそも回避するのも難しいから防御しないと危ないけどな」

バルドからの説明を聞いてセフィリアの実力がどれ程の凄いのか思い知らされた。

セフィリア「次は、こちらの番です」

そう言ってセフィリアは鞘から剣を抜き放つ。それは赤黒い色をしていた両刃の長剣だった。その剣からは途轍もない魔力が放出していた。

シグナム「それがセフィリアの武器か」

セフィリア「ええ。我がバロム家に代々伝わる魔剣ディスインテグレイト」

そう言ってセフィリアは構えた。

セフィリア「行きます」

足の裏の魔力を爆発させ一気に詰め寄る。距離が半分まで縮まった時セフィリアは剣を振る。

セフィリア「魔神剣・蛟!!」

蛇のように動く斬撃がものすごい速度でシグナムに向かう。それを、紙一重で右に避けるが少し頬を掠める。避けた後シグナムは、セフィリアに肉薄、激しい切り合いが始まる。一合、二合・・・空に幾つもの閃光が煌めく数十合切り結んだあと互いに距離をとる。

シグナム「はあ・・・はあ・・・」

息が乱れるシグナムとは逆にセフィリアは全く乱れていなかった。
その立ち姿はまさに王の風格を見せていた。

シグナム「レヴァンテイン、シュランゲフォーム！！」

レヴァンテイン「エクスプロージョン」

薬莢が飛び出し、形態が変わる。

セフィリア「連結刃・・・ですか」

警戒しながら構える。

シグナム「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

鞭のように襲いかかるレヴァンテインを受け止め、受け流し、弾き飛ばす。セフィリアは不規則な動きに翻弄され始め、ついにバランスを崩す。そこを、見逃さなかったシグナムは必殺の一撃を繰り出す。

シグナム「飛龍一閃！！」

レヴァンテインは真っ直ぐ伸びていき爆発が起こる。辺りが爆風による煙に包まれる。煙が晴れるとそこには・・・

セフィリア「ふう・・・今のは少し危なかったです」

レヴァンテインの上に立つセフィリアがいた。

シグナム「なっ！？」

その光景に驚く。まさかあの体勢からあの一撃を避けられるとは思ってもいなかった。

セフィリア「行きます！」

セフィリアはそのままレヴァンテインの上を駆け、シグナムに接近する。慌ててレヴァンテインを戻すもその時には目の前にセフィリアの姿があった。

セフィリア「抜刀奥義、“紫電滅閃翔”！！」

雷を纏った光速9連続突き、その後切り上げ、切り下ろしその全てはシグナムを捉えた。

シグナム「ぐあぁぁぁぁぁ！」

吹き飛びビルに激突、シグナムは気を失った。落ちていったシグナムを地面に激突する前にセフィリアが受け止める。

摸擬戦はセフィリアの勝利で終わった。

――――――――――――――――――――――――
―――

フェイト「すっすごい・・・・」

はやて「シグナムに勝ちおった・・・・」

シグナムの実力を知るフェイト達はシグナムが負けたことに驚いていた。

今の戦いを呆然と見ていたなのは達のもとにシグナムを抱えてセフィリアがやって来る。

セフィラ「あのシグナムが気絶してしまったんですけど、医務室ってどこでしたっけ？場所がまだ覚えられなくて・・・・」

セフィリアは、申し訳ないという表情を見せる。

なのは「あっ、私が教えるね。」

そう言って二人は移動しようとした時・・・・

シャーリー「しつれいします！」

シャーリーが入って来た。そしてシャーリーはセフィリアに近づいて何かの装置を翳す。

シャーリー「やっぱり・・・」

フェイト「シャーリー、何がやっぱりなの？」

シャーリー「えっとですね、これはリンカーコアを調べる機械なんですけど・・・セフィリアさんは、リンカーコアが無いんですよ」

フェイト「え・・・・？」

カイン「そりゃそうだ。つーか俺達全員リンカーコアはないぞ」

六課一同「ええ〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！」

本日最大の声が、六課内に響き渡った・・・・・

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――

その後数時間後にシグナムは目を覚ましたので現在フェイト達は、デスクワークをしている最中である。

バルド「お〜い、フェイト。なにしてんだ？」

フェイト「あっ、バルド。今デスクワークしてるんだ」

へぇ〜っと言いながらバルドはそれを見る。

バルド「なあ、フェイト。ここ間違ってないか？」

フェイト「えっ！？どこどこ？」

バルド「ほらここだよ、ここ」

そう言って指差す所を見ると確かに間違っていた。

フェイト「あっ本当だ」

慌てて修正する。

フェイト「ありがとうバルド。全然気付かなかった」

そう言って横を見ると肌が触れ合いそうな距離にバルドの顔があった。

フェイト「～～～／／／／／／／／／／／／／／／！！」

バルド「ん？おお、どういたしまして」

そう言ってニッっと笑うバルドにフェイトは更に顔を赤くするのだった。

バルド「それにしてもフェイト、それまだ持っててくれたのか」

突然、そう言ってバルドはフェイトの首から掛けてあるペンダントを見る。

フェイト「あたりまえだよ。私にとっては大切な・・・とても大切な日々だったんだものその思い出の証を捨てるわけないよ。バルドは・・・持ってないの？」

もしもう捨てたと言われたらいやだなあっと思う。バルドは、フッと笑い首にかけていたペンダントをフェイトに見せる。

バルド「俺にとっても大事な日々だったよ。捨てられるわけがないだろう？」

それを聞いてフェイトは嬉しそうに笑うのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

スバル「あう～～、終わんないよ～～～！！」

ティアナ「ちょっとスバル、あんたまだそこ終わってないの？」

相棒がまったく進んでいないのに呆れた顔をする。それにスバルは助けを求める様にティアナを見る。

スバル「うう～～～ティア手伝っｔ「自分で頑張んなさい」最後まで言わせてよ～～！」

カイン「よっ！二人とも、頑張っているな」

そこに、カインがやって来た。

ティアナ「カインさん、どうしてここに？」

カイン「いや、なのはに用があったんだがここにはいないのか？」

ティアナ「なのはさんなら、今はたぶんシュミレーターの所にいると思います」

ティアナが答えるとカインは「そうか。ありがと」と言いその場を離れようとするが視界の端でスバルが唸っているのを見て声をかける。

カイン「スバル、どうしたんだ？」

スバル「う～～、カインさん。助けてください」

そう言って目の前の画面を指差す。

ティアナ「こら！少しは自分で頑張んなさいよ！」

救援を求めるスバルをティアナが窘める。

カイン「まあまあ、そう怒るなって。スバルちょっと見せてみろ」

スバルは自分の席をカインに譲る。カインは、それに座って暫し画面と睨めっこをする。

ティアナ「ちょっと、スバル。あんた、カインさんが局員の人でもないのに
なにしてんのよ」

スバル「う～、だって・・・・」

二人がそう言っている瞬間・・・・

――カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ――――――

目の前で恐るべき速度で画面にあるものを処理していくカインの姿があった。

カイン「はい、おしまい」

ティ・ス「「はやっ！？」」

あっという間に片付けてしまったカインに思わずツッコミをいれる。慌てて確認すると、完璧にできていた。

カイン「今回は、特別だ。これからは、バルドに頼めよ。あいつなら基本頼めば手を貸してくれるからな」

そう言いつつその場を去っていくカインをただ見つめる二人であった。去り際に「管理局ねえ～～」と呟いていたのは二人には聞こえなかった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

～～シュミレーター室（訓練場）～～

なのは「う～～ん・・・」

現在なのははは、ＦＷ陣のためのメニューを新く考案中である。今回

の戦闘で隊長である自分達が苦戦するほどの強敵が出現したためＦＷ陣だけでもあれに対抗するための力を得るにはどの様なメニューにすれば良いかと考えているのだが・・・・・

なのは「だめだ・・・いいのが思いつかないよ・・・・」

そう言い椅子に凭れかかる。主に対人戦闘等を中心とした訓練をしていたため、あのように怪物との戦闘に関してどのように攻めればいいのか中々思いつかないのだ。如何しようかと考え始めた時・・・・

カイン「なーにしてんだ？」

突然、なのはの顔のすぐ横にカインが顔を出した。

なのは「にゃあーーー／／／／／／／／／／！？」

ビックリして、椅子ごと引っ繰り返る。

なのは「う～～、痛い・・・・」

カイン「おいおい、大丈夫か？」

そう言ってなのはに手を差し出す。それに掴まって立たせてもらうとなのはは、頬を膨らませる。

なのは「カイン君が驚かすからでしょ！！」

カイン「悪い悪い。ところで、それはＦＷ陣の訓練メニューか？」

画面を指差すカインになのははは頷いた。

なのは「そうだよ。今回の戦闘で色々内容を変更しようと思うの」

それに「ふ～ん」と答えて近くにあった椅子を持って来てなのはと並んでメニュー内容を見る。

カイン「なあ、なのは。ここをこうしたらどうだ？」

そうして、少し内容を変えて見せる。

なのは「あっ、それいいかも。でも、カイン君それだとここが変になっちゃうよ？」

カイン「なら、ここをこうして・・・・ありゃ、そうなるとここも変えないといけないか？」

「う～ん」と頭を抱えるカインをなのはは、見てて思った。

なのは（夢じゃないんだ・・・・）

８年間ずっと会いたかった人が今、肌が触れ合いそうな距離で一緒にＦＷ陣の練習メニューを考えてくれている。最初、助けてくれた時は夢じゃないかと思っていた。でもこうして話をしながら作業をしていて夢じゃないことが実感できる。そう考えると、自然と笑みが零れる。思わずクスッと笑う。

カイン「ん？どうしたんだ？」

なのは「えっとね、こうしてカイン君と一緒に訓練メニューを考え

られるなんて夢のようだなあって思って。あの時みたいにまた一緒になれたんだって思うとうれしくて」

そう言って、首から掛けていたペンダントを見せる。それを見たカインは驚いた顔をする。

カイン「それは・・・・まだ持っていてくれたのか・・・・」

なのは「あたりまえだよ。私にとっては、大切な思い出なの。カイン君は？」

そう聞くとカインもまた同じ形で銀色のペンダントを見せる。

カイン「俺にとっても大切な思い出だったよ。なのはのおかげで俺も救われたんだからな」

そう言ってフッとなのはに笑いかける。それに笑顔で応えて二人は再び、訓練メニューの作成に取り掛かかたった。

---

ロイドたちが来て一週間がたった。

今、はやては管理局のデータベースである組織を探していた。

はやて「・・・・だめや。全然見つからへん」

そう言って溜め息をつく。調べているのは勿論、なのは達が会った

という謎の二人組が言っていた『時の英雄』という人達である。それが、組織なのかどうかは不明だが、なのは達を苦しめた怪物（モンスター）を操るほどの存在が危惧するほどの者達だ。それならば、管理局の方も何か情報があるかもしれないと思ったのだが。目の前の画面には『該当組織なし』の文字が光っているだけなのだった。他にも少し名前を変えて検索しても結果は同じだった。

はやて「管理局でも知らん組織か・・・」

再び、溜め息をついて椅子に凭れかかる。ふと眼の端に数枚の資料が目に入る。それを取って眺める。

はやて（いくらなんでもこれはチートやろ・・・）

その資料はロイド達のデータであった。シャーリーに、彼らの能力の検査をお願いしたのだが終わった後、彼女は顔を真っ青にして戻ってきた。どうしたのかと聞くと「あれは異常すぎるよ。超人ってレベルを超えてるよ！！」と言った。資料を見て最初は、はやても自分の目を疑った。そこには最高ランクのガジェット１５０体をＡＭＦを物ともせず2分も満たないうちに瓦礫の山にしたということだった。お陰で正確なデータも取れずじまい。また、魔力量もコレット、セフィリア、シリウスに関しては測定不能という恐るべきことが報告されていた。実際その現場にいたなのは達も自分の目を疑ったという。それを思い出したはやてはふと、一つの仮説が頭を過る。

はやて（もしかしたら、ロイド君達がそうなんかな？）

可能性としては、かなり高いほうだろう。しかし・・・

はやて（確証がないんよねぇ～）

確かにロイド達は異常なまでに強い。しかし、これほど強ければ管理局も何かしらの情報か或いは有名になっているはずである。

はやて（何にもないちゅうことは、ほんまに知らんか或いは・・・）

隠蔽・・・。過去に彼らと何かあってそれを知られまいと隠しているのではないかと考える。なのはやフェイトには黙っているが管理局も一枚岩ではなく何処かで違法な研究をしているはずだとはやては考えている。

はやて（直接、聞いたほうがええかもしれへんね）

そう物思いに耽っていると・・・

シリウス「ハロー、はやて遊びに来たぞ」

そう言って、ノックもなしに入ってくるのは、シリウスだった。それを見て、溜め息をつくはやて。ここ最近彼は、どういう訳かここに遊びに来ているのだった。

はやて「また、来たんか。自分ほんまに暇なんやね。あとノックしてから入ってほしいんやけど」

シリウス「そう固いこと言うなって。あれ？そういえばリインはどこ？」

辺りを見回すとはやての近くで眠っているのを発見した。

リイン「スー、スー」

シリウス「なんだ、寝てんのか。って、そのままじゃ風邪ひくぞ」

そう言うとシリウスは掌からリインにあったサイズの毛布を出しそれを掛ける。それに反応してもぞもぞと動くリインを見て小さく笑う。

シリウス「やれやれ、これじゃあ、あまり騒げないか」

そう愚痴りながらも、その目は娘の成長を見守る父親のような優しい感じだった。

はやて（普段はふざけとるのにこういう時は優しいんよね・・・・）

最近、シリウスを見てて分かったことは、本当は聡明な人物だということである。普段は人をからかったりしているのだが、本当は皆を気遣ってくれる優しい人なのだ。前日も訓練で疲れているＦＷ陣にタオルと飲み物をさり気無く置いていったのをはやては見ていた。優しいのにそれを仮面で隠している不思議な人。それが今のはやての評価である。ルックスもかなり良くて顔を近づけられるとドキッとする時もある。頭脳もスポンジが水を吸い込むようにこちらの世界の知識をどんどん吸収していく。偶に、手助けしてくれたりしてくれる為最近は頼もしくも感じられる。

はやて（・・・・っは！うち何考えとんのや！？）

慌てて今考えていたことを消そうと頭を振る。それでも、自分の顔が赤くなっていくのが分かった。

シリウス「ん？どうした顔を真っ赤にして。熱でもあんのか？」

そう言って自分の額をはやての額に当てる。

はやて「～～～っ／／／／／／！？」

シリウス「熱は・・・無いみたいだな。けど無理はするなよ？」

そう言って離れる。硬直していたはやては、ハッとなり慌てて自分を落ち着かせる。

はやて「心配せんでも自分のことは自分がよう知っとるから気にせんといてや」

シリウス「そうか？ならいいんだが・・・・・お？これは・・・・・」

そう言って、自分達のデータを見る。はやては、聞くなら今しかないと思い聞いてみることにした。

はやて「なあ、シリウス君。『時の英雄』って言葉聞いたことないか？」

資料を見ていたシリウスは視線をはやてに移す。

シリウス「・・・・・いや、聞いたことないな。・・・・・そもそも俺、最近目覚めたばっかりだから、あんま世界事情まだ分かんないだよね」

はやて「・・・・・は？」

シリウス「なんでもないよ。そんじゃ、またねぇ～～」

そう言ってシリウスは資料を置いて部屋から出ていった。

はやて「どういうことなんや・・・・？」

その場に立ち尽くしたまま呟いた。

## 第五話（後書き）

作者「シリウス、はやてにフラグを立てる（？）の巻」

バルド「あれ、立てたって言うのか？」

カイン「ってか最後意味分からん」

作者「オチが見つからなかった・・・・ｏｒｚ　気になる方はキャラクター紹介に少し載せていると思うのでそちらを参照ください」

ロイド「模擬戦の方はセフィリアの勝ちなんだな」

作者「流石に国王があっさり負けるのもどうかと思いましてね。因みにセフィリアの戦闘スタイルはＴＯＧのア○ベルさんとほぼ同じ感じです。」

カイン「てか、ビルぶった斬る攻撃をすんなよ。当たったらどうすんだよ？」

作者「そのことに関しては心配無用。刃は潰されているので当たっても打撲＋気絶で済みます」

クラウド「最高ランクのガジェット１５０体を2分以内ってテラチートｗｗｗ」

作者「まあ、書いてたら何時の間にかこうなった」

カイン「まったく・・・。次回は遂に敵が動きます。ってやっとか・

・・」

作者「因みに出るのは下っ端中の下っ端です。現在進行形で執筆中です」

なのは「次はいつ出すの？」

作者「それは、わたし次第（笑）」

カイン「・・・・・・なのは」

なのは「何時でもいいの」↑作者にレイジングハートを向ける。

作者「え、ちょっと待って下さい二人とも。何をしてるのです？」

カ・な「「少し、頭冷やそっか・・・・」」

作者「待って！それはまだ開発途中の――」

カ・な「「ディバインバスター・ゼロ！！！」」

作者「あばんちゃ――――！！？」

作者は消し炭になりました。

カイン「ったく、えー長くなりましたが次回も読者の皆さま宜しくお願いします」

なのは「ご意見ご感想もお待ちしてます」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第六話（前書き）

作者「初めに謝っておきます。すみませんでしたーーーーー！！」

カイン「突然どうした？」

作者「いやね、今回、複数回に分けようと思いまして分けたら何か主人公達の出番があんまない・・・・敵キャラが何かめっさ活躍してる。何気にヴァイスのキャラが変わっていると思います」

バルド「ほお、俺達を差し置いてなんてことしてんだお前！！」

作者「すみませんすみません！！石投げないで！！このままだと新しい自分に目覚めそう！！」

クラウド「目覚めんな！！」

フェイト「作者さん、覚悟はできてるよね・・・・・」

作者「あ、あの・・・皆さん・・・何で此方にデバイスとか向けてるんですか？」

一同「「「「天誅！！！！」」」」

作者「へぶらっ！？」

作者はログアウトしました。

カイン「ふぅ～、取りあえずこの阿呆な作者は上手く文章をまとめ

られずに結果、複数回に分けて出すそうです。何でも書いてたら合計８０ＫＢをオーバーしたとか・・・そんな訳で次回の文を修正して早めに出せるように頑張っています」

バルド「長くなったがどうぞ！」

管理局の船が弱体化してる可能性があります。ご注意ください。

ってか、作者は原作知らないんでどれぐらい凄いのか知りませんけど・・・。

『』が通信です。

# 第六話

次の日、ＦＷ陣の訓練が行われていた時、突如辺りに警報音と共に赤いランプが点滅する。

なのは「アラート!?皆、訓練は中止。はやてちゃんの所に行くよ!」

ＦＷ陣「はい!!」

はやての所に行くとフェイトが先に来ていた。なのは達が着いた後、ロイド達もやって来た。

ロイド「はやて!さっきの警報はいったい・・・」

ロイドが聞こうとしたと同時に通信が入った。

はやて「グリフィス君!」

はやての呼び声にモニターの一つにグリフィスが映る。

グリフィス『はい!管理局本部から緊急要請です!』

はやて「状況は？」

グリフィス『はい！ミッド海上に突如所属不明の大型航空機が出現。現在、首都クラガナンに向けて進行しています。』

はやて「なんやて！？」

グリフィス『本部からも進行方向に艦を一隻配備して置くとのことです』

時空航行艦一隻を配備するほどの事態に驚く六課メンバー。

はやて「了解したで。うちらも出撃するって連絡しといてな」

グリフィス『了解しました！！』

そう言って通信を終える。そして、なのは、フェイトに向く。

はやて「スターズ、ライトニング分隊は出撃準備を急いでな。うちも出るから」

なのは「はやてちゃんも出るの？」

はやて「なんかいやな予感がすんのや。せやからうちもいくで」

な・フ「「了解！」」

そう言ってなのは達は部屋から出ていった。

シリウス「はやて、俺達も行くぞ」

はやて「おおきに。せやけど、ヘリに全員はちょっと無理なんや」

クラウド「問題無い。俺とティファは飛んで行くから」

ガルド「セフィリア、俺達も飛んで行くぞ」

セフィリア「うん、分かった」

4人が飛んで行くということではやて達はヘリポートに向かった。

---

ヘリポートに着くとそこには、なのは達がすでに集まっていた。

はやて「ヴァイス君、準備はええか？」

ヴァイス「はい！いつでもいけますぜ！」

クラウド「んじゃ、俺達は先に行くぜ」

振り向くとそこには、いつの間にか戦闘服に変わっている
クラウドとティファがいた。その姿は、全身を装甲で包み
機械質な翼をはやしていた。

なのは「それは？」

ティファ「これは、私達の世界で使われている装甲。通称『鎧装（フレーム）』
そっちで言うバリアジャケット・・・っというよりアーマーかな？」

そうなのはの質問に答えるティファ。そこに同じく戦闘服に変わった
ガルドとセフィリアがやって来る。

ガルド「まったく、クラウドとティファ以外の『鎧装（フレーム）』がメンテ中
だったていうのが問題だな。銃弾が来たら大変だぞ」

セフィリア「しょうがないよ。でも、当たらなければ問題はないと
思うよ」

フェイト「えっと・・・４人は飛んで行くの？」

ガルド「ああ、定員オーバーだからこのままヘリについて行くよ」

そう言って４人は、空に舞い上がった。

はやて「グリフィス君、何かあったら連絡してや。
それじゃ、皆出動や！」

一同「はい！（おお！）」

はやてたちを乗せたヘリは合流するために飛び立っていった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――

～～航空機　ブリッジ～～

ミッドの海上を、その航空機は飛んでいた。全長は８０メートル以上はあるだろう。全体を、黒一式のカラーに統一した機体だった。

通信士「司令、前方に航行艦一隻を確認。多数の魔導士と共に進路を封鎖しています」

司令と呼ばれた男は、一つのモニターを見る。そこには、次元航行艦一隻と総勢約８０人ほどの魔導士が展開されていた。それを見た司令は、目を細める。そこに、再び、通信士から連絡が入る。

通信士「司令、前方の艦から我が航空機に対して停止命令が来ています
如何いたしますか？」

司令「・・・・無視しろ」

そう一言言って、再び航行艦を見る。いや、睨みつけていた。

司令「ついに、この時が来た。我らの野望が成就する時が・・・」

そう言って手を強く握りしめる。野望に燃えた瞳が輝く。

司令「イノセントとバラウールの状態は?」

そう隣にいる副官に聞く。

副官「はっ!イノセントの状態は良好。いつでも行けます。バラウールに関しても異常はありません」

司令「よし。バラウールのエネルギー充電をしておけ、それとゲシュマイディッヒ・パンツァーと対空兵装の展開準備もだ」

副官「はっ!」

それに敬礼で答えた副官はブリッジから出ていく。司令は、機内全体に放送を入れる。

司令「これより我らは時空管理局に対して攻撃を行う。手始めに首都クラガナンを攻撃する。そして、無能な管理局の奴らに我らの力を見せるのだ！野望に身を焦がす者たちよ今こそ奴らに裁きの鉄槌を下そう！！」

その言葉に、機内全体が歓声に包まれる。心と心が鼓舞され合い更なる興奮を呼び覚ます。今この機内に恐怖を感じている者は誰もいなかった。航空機は、ただ真っ直ぐにクラガナンに進む。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

～～艦内～～

通信士「艦長、航空機に停止命令を送っているのですが応答がありません」

艦長と呼ばれた男は、その言葉を聞いて溜息を出す。

艦長「再度呼びかけろ。・・・・・はあ～～
面倒だな・・・発砲許可はまだこんのか？」

物騒なことをいうこの男こそこの艦の艦長である。魔導士ランクはＳＳ＋とかなり優秀なのだが陰では如何わしいことをしていると噂されている男である。そして今も彼はブリッジではなく一人、自分専用の部屋で寛いでいた。

艦長「はあ～、せっかくの休日だってのに邪魔しやがって
　さっさと撃ち落として終わらせたいもんだな」

そう呟いたとき通信士から再び連絡が入る。

通信士「艦長、再度通達しても応答がありません。それと、上からの発砲許可が下りました」

艦長「あっそ、なら撃っていいよ」

投げやりな言葉でそう答える。それには、さすがに通信士も戸惑いの色を見せる。

通信士「しっしかし・・・・」

艦長「二度も停止命令送っているのに無視した奴らが悪いんだよ
　ブリッジ狙ってさっさと落としてやれ」

その会話に彼の副官が割って入った。

副官「艦長!!こちらに戻ってください!それに何てこと言っているんですか!私たちは管理局で働いているんですよ、攻撃は控えるべきです!!」

副官の彼は、S＋の真面目で優秀な魔導士で艦内で彼を慕う者たちも多く彼こそが艦長になるべきだと言う者も多い。そして、彼もまたいつもこの様に怠けている上官にうんざりしていた。

艦長「いいから早くしろ!!これは、上官命令だ!!」

上官命令には逆らうことはできないので副官は渋々「・・・・・了解しました」と言って、通信を終える。

副官「砲撃の準備をしろ」

顔に皺を作りながら副官は命令する。

局員1「よろしいのですか?」

副官「あの人の命令だ。断ればどうなるか分かっているはずだ
俺は、あの人の勝手で優秀な君達を失わせたくない」

局員1「・・・・・わかりました、副官」

そう言って敬礼をする。それに副官も敬礼で答える。

副官「いいか、翼だけを狙うんだ決してブリッジを狙うんじゃないぞ」

局員達「了解！！」

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

通信士「司令、敵艦の砲台が此方に向きました。狙いは・・・・翼です！！」

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

司令「そうか・・・ゲシュマイディッヒ・パンツァーの展開準備をしろ
　発射とともに発動させる」

通信士「はっ！」

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――――

はやて達の乗っているヘリにグリフィスからの通信が入る。

なのは「グリフィス君どうしたの？」

なのはの質問にグリフィスは緊迫した表情で状況を伝える。

グリフィス『大変です!!艦が砲撃体制に入りました!!』

はやて「なっなんやて!!?」

その報告に驚く一同、「今、そちらに映像を送ります」とグリフィスが言うと彼の隣りに別のスクリーンが現れる。そこには、彼の言った通り航空機に砲台を向けた管理局の船があった。

フェイト「どっどうして・・・」

戸惑いの色を隠せないフェイト。皆ただ、今の状況を見守るしかなかった。

局員2「副官、攻撃準備が整いました。」

副官「よし、狙いを絞れ・・・・・・今だ!撃て!!」

艦から放たれた砲撃は航空機の翼目掛けて飛んでいく。

通信士「司令！管理局からの砲撃です！！」

司令「ゲシュミディッヒ・パンツァー起動！！」

航空機は表面上にうすい緑色の膜を展開する。

管理局の砲撃はその膜に当たった瞬間、砲撃は航空機を避けるように飛んで行った。

司令「今だ、お返しにバラウールを撃ちこめ！奴らをこの海の藻屑にしてやる！！」

通信士「了解！バラウール起動！！」

航空機の背にある大きなハッチが開きそこから巨大な砲塔が現れる。敵のブリッジに照準を合わせる。そして、音速を超える白い閃光が撃ちだされた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

副官「なっ！？砲撃が曲がっただと！？」

砲撃は翼に命中せず、航空機を避けるように通り過ぎて行った。

通信士「副官！！向こうの砲台が此方に向いています！！」

スクリーンにはエネルギー充電の完了した砲台をこちらに向ける航空機の姿があった。

副官「（まずい！！シールドが間に合わない！！）回避だ！急げ！！」

防御が間に合わないと判断した副官は、回避を命じる。操舵士は慌てて左に舵をとる。その瞬間、白い閃光と共に激しい震動と轟音が艦を襲った。

艦長「なっ何が――――！？」

震動に驚いて慌ててブリッジに行こうとした彼を光が包み込んだ。管理局の艦はブリッジの直撃は避けたものの、右半分を吹き飛ばされ航行不能となり海に落ちて行った。

この光景を見たはやて達は信じられなかった。

なのは「う、うそ・・・・」

フェイト「そ、そんなことって・・・・・」

目の前の映像には、右半分を吹き飛ばされ彼方此方で小爆発を起こ

しながら海に墜落していく艦の姿があった。

通信士「敵艦撃沈を確認。敵空戦部隊は混乱しています」

司令「よし！イノセント？型を出せ。空戦部隊を叩き落とせ。」

通信士「了解！イノセント投下！！」

航空機の下にあるハッチが開きそこから丸まった何かが次々と落ちていく。暫く重力に任されて落ちていたそれは、突然目が赤くなり始める。そして、次々と丸まっていた体を伸ばし背にある羽を広げ、前方にいる魔導士達に向かって飛んで行った。

司令「あれに此処は任せて我々は先に行くぞ！！」

部下一同「はっ！！」

司令の言葉に皆敬礼で応えた。

――――――――――――――――――――

魔導士1「船が・・・・」

魔導士2「何だ今のは！？」

自分達の船が目の前で落とされて混乱する魔導士達。慌てふためき、隊列を乱し始める。

部隊長「お前達、落ち着かんか！！」

部隊長の一喝に皆動きを止める。

部隊長「いいか！まずは、目の前の敵に集中するんだ。もしここを突破されたらどうする！市民に被害が及ぶんだぞ！！その前に何としても止めなければならない」

その言葉に部下達はハッとなり乱れていた隊列を元に戻す。そこに、部隊長のもとに一人の部下がやって来る。

魔導士４「部隊長、敵航空機から複数の生体反応を確認しました。こちらに向かって来ます」

その言葉に一同は緊張が走る。航空機のほうを見れば幾つもの黒い点が航空機から離れて此方に向かってくる。それは、段々と大きくなりその全貌を現した。

魔導士１「なんだあれは・・・・？」

魔導士３「・・・・トンボ？」

その姿は、正に蜻蛉のようだった。しかし、トンボにしては異様な姿だった。体長は２，３メートルはあるだろう。鋭い爪をもった６本の足がある。その内前足は異常に長かった。翅は４枚ではなく６枚あり、背中に筒のようなのを背負い、目は深紅の様に赤かった。総数７０匹の虫の群れは真っ直ぐ此方に飛んでくる。

部隊長「総員デバイスを構えろ！！あれを片づけて一気に敵航空機を制圧する。行くぞ！！」

部隊一同「了解！！」

其々が複数の魔力弾を形成してイノセントに飛ばす。それにイノセント？型の群れは、反応して散開する。魔導士達は追撃するべく其々標的を決め魔力弾や砲撃魔法で攻撃する。イノセント？型は、その攻撃を不規則な軌道を描く様に飛び回避する。

魔導士２「くそ！当たらない！！」

中々当たらなくて焦れ始める。魔力弾を形成し再度攻撃する。その瞬間イノセント？型が視界から消え一瞬にして局員の背後に回り込んだ。

魔導士2「なっ、速い！？」

イノセント？型は前足を前に構える。

――――――――ズダダダダダダダダダダダダッ！！！！――――――――

魔導士2「ぐあぁぁぁぁぁ！！？」

そこから銃弾が飛び出し局員は回避する間もなく銃弾を浴び海に落ちて行った。

魔導士5「銃弾！？敵は質量兵器を持ってるぞ！！」

その時、彼の背後からイノセント？型が襲ってきた。銃弾が来るのに気がついた彼は、プロテクションで防御、弾くことに成功する。攻撃が効かないことに気がついたイノセント？型は、背中に付いている
筒を展開する。その先に光が収束する。

魔導士5「なんだ？」

そう彼が言った瞬間、筒から音速に近い速度で光弾が飛んできた。
それは、プロテクションに当たった瞬間大爆発を起こした。

魔導士5「ぐあぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

直撃こそ免れたものの爆発でプロテクションが破壊され爆風を諸にくらいその魔導士は海に落ちていった。イノセント？型は、それを一瞥して次の標的を見つけて撃ちまくる。

魔導士6・7・8「「「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」」」

イノセント？型達の攻撃によって次々と魔導士達は落とされていった。その間に航空機は、悠々とクラナガンに向かって進んで行った。

部隊長「くっ、させるか！！」

それに気づいた部隊長が後を追おうとするとイノセント？型が前に立ち塞がり銃撃する。それを回避して迎撃をするも、避けられてしまう。

部隊長「くっこのままでは・・・・」

周りを囲うようにイノセント?型に囲まれて進めないことに焦り始める。

ロイド「・・・・ヴァイス。ハッチを開けてくれ」

そう言ってロイドは、ハッチの前に移動する。それにコレット、バルド、カイン、シリウスも続く。

なのは「ロイド君、どうする気なの?」

ロイド「決まってるだろ。あそこの魔導士達だか何だかを助けに行く」

はやて「なっ!?むっ無茶や!危険すぎる!!」

慌ててはやては止めに入る。

シリウス「大丈夫だって、こんなんじゃ俺達はやられないよ。それに、早く行かないと全滅するぞあいつら」

スクリーンに映る映像を見るに初めは70人もいた魔導士達も今では、30人程にまで減らされていた。しかし、イノセント?型達は一匹も撃墜されていない。

明らかに劣勢な状況である。

はやて「せっせやかて・・・・」

バルド「はあ～～。ヴァイス！ハッチを開けろ！！」

ヴァイス「・・・・了解しました」

なのは「ヴァイス君！？」

ヴァイスが了承したのになのは達は驚きの表情を見せる。

ヴァイス「皆さんも気づいてるはずです。あそこで戦ってるのはＡＡＡランクからＡＡＡランクの魔導士達だというのは。数も此方の方が多かったはずなのに今じゃ３０人まで減らされたんです。それほどまでにあの虫達は強い・・・強すぎるんです。いくら皆さんが強くても隊長達はリミッター付いてるし、数ヶ月前の事件のせいで皆さんは本調子じゃない」

そこまで言って一度呼吸を整えて再び言う。

ヴァイス「このまま行けば皆さんも怪我どころじゃなくなってしまう。なら、彼らに頼るしかないじゃないですか。聞きましたよ、最高レベルのガジェット１５０体を2分以内に倒したっていう話を・・・彼らならこの状況を打破してくれると思います」

そう言ってロイド達に「お願いできますか？」と聞く。それにロイド達は頷いて応える。

ロイド「まかせろ！！」

そう答えて腰に帯刀していた二本の剣を抜く。片方は鮮やかな紫色の刀身、もう片方は無色透明な刀身をした剣だった。それぞれ途轍もない魔力を放っていた。

ロイド「行くぜ、コレット！！」

コレット「うん！！」

二人はハッチ前に並ぶ。

ロイド「ロイド・アーヴィング！」

コレット「コレット・ブルーネル！」

ロ・コ「行くぜ！！（行きます！！）」

二人は同時にヘリから飛び降りた。そして、二人の背中に大きな虹

色の翼が生えた。

スバル「うわぁ・・・・・」

ティアナ「綺麗・・・・・」

輝くその翼は天使の如く。美しく煌めくロイドとコレットの翼になのは達は見惚れていた。

バルド「フェイト、俺達も行ってくる」

カイン「なのは、先に行ってるぜ!!」

バルド、カインもヘリから飛び降りロイド達に続く。

シリウス「やれやれ・・・皆元気だねぇ～～。あっ、先に行ってるよ皆」

そう言って飛び降りた。ヘリと並走していたガルド達にロイド達は並ぶ。

ロイド「クラウド、ティファ、シリウス、バルド、カインは空を頼む。ガルド、セフィリアは俺とコレットと一緒に地上の援護に行く

ぞ！」

一同「了解！！！」

そう言ってロイド達はヘリの速度を上回るスピードでイノセントの群れに向かって行った。

なのは「フェイトちゃん、はやてちゃん、私達も行こう！！」

フェイト「うん、行こうなのは、はやて」

はやて「せやね。ロイド君達だけに任せる訳にはいかへん。ヴァイス君うちらも行くで。ヴィータとシグナムとＦＷ陣は地上部隊と合流な」

ＦＷ陣「了解！！」

ヴィータ「はやて、なのは、フェイト無理すんなよ」

シグナム「主はやて、気をつけてください」

三人（リインも一緒）はそれに頷きヘリから飛び降りた。

なのは「レイジングハート！！」

フェイト「バルディッシュ！！」

はやて「シュベルトクロイツ！！」

な・フ・は「「「セットアップ！！」」」

三人を光が包み、バリアジャケットを纏う。

はやて「リイン、ユニゾンや」

リイン「はいです～！！」

は・リ「ユニゾン、イン！！」

リインとユニゾンが完了したのを確認したなのは達はロイド達の後を追い始めた。

## 第六話（後書き）

作者「如何でしょう?え?よく分からない?ごめんなさい・・・・ｏｒｚ」

カイン「今回、敵モンスターと航空機が出たな」

バルド「全長八〇メートルってでかくね・・・?」

作者「仕様ですから、本当は最初二〇〇メートルにしようと考えていたんです」

クラウド「最早、戦艦ｗｗｗｗ」

ロイド「てか、ゲシュマイディッヒ・パンツァー搭載すんなよ。戦艦であんなの付けたら向こうの方がチートだろ」

作者「それを覆すのがあんたらだろ」

一同「ええ～～～」

作者「という訳で今回はここで区切って次回に繋げようと思います。次回の文を頑張って修正していますので少し時間が掛かると思われます。それでは、今回は之にて。読者の皆さま次回も宜しくお願いします!!」

一同「大いなる力で未来を切り開け!!」

カイン「てか、この最後の言葉って厨二だな・・・・」

作者「それは言うな・・・・orz」

# 第七話（前書き）

作者「修正してたら何時の間にか更に文字数が増えていました」

ロイド「おいおい・・・」

カイン「修正って言わないだろそれ。むしろ付けたし.j――「それは言うな！！」」

バルド「で、今回もまた区切るのか？さっさと終わらせろよ」

作者「ダメな作者ですみませんね！！」

フェイト「逆切れはよくないと思うよ！？」

シリウス「作者の無駄話なんかほっといて本編をどうぞ！！」

作者「俺の話は無駄話か・・・・ｏｒｚ」

# 第七話

魔導士「くそ！このっこの！！」

先ほどから攻撃し続けているがちょこまかとイノセントは動き回り避けまくる。目の前で高速で飛びまわるイノセントに気を取られていた彼は背後から接近するもう一体に気がつかなかった。

魔導士「この！！――――うわ！？」

背後にいたイノセントは、彼をその足でがっしりと掴み動きを封じそのまま、空高く舞い上がる。

魔導士「はっ離せ！！」

暴れる彼をその大きな赤い目で見ていたイノセントは突然顎をカチカチ鳴らしながらゆっくりと引き寄せ始めた。

魔導士「まっまさか・・・」

その行為が何を意味するのか分かった彼は先ほどよりも激しく暴れる。しかし、がっしりと掴んだ足は解けることはなく目の前には大きな顎が迫っていた。

魔導士「やっやめろ!う、うわあぁぁぁぁぁぁ!!」

あと少しで、彼の頭に大きな顎が届きそうになったその時・・・・

??「マーレシスハント!!」

脇から飛んできた複数の緑色の閃光がイノセントの頭部を飲み込みさらに、胴体、翅を貫きイノセントは爆散した。

魔導士「な、なんだ!?」

間一髪助けられたことによる安堵と今の攻撃に戸惑う魔導士。そこに現れるのは・・・

ロイド「大丈夫か?」

コレット「怪我はしてない?」

虹色の翼を煌めかせるロイドとコレットだった。

魔導士「あ、は、はい。大丈夫です。ありがとうございます」

一瞬その美しさに見惚れるも、助けてもらったことに気が付き慌ててお礼を述べる。

ロイド「お礼なら向こうにいるティファに言ってくれ」

指さすほうを見ると二丁ライフル『鏡花・水月』を構えているティファの姿があった。そこにバルドがやって来る。

魔導士「あ、あなた達はいったい・・・・」

バルド「それには、今は答えることはできん。それよりもお前ここを仕切る部隊長に俺達より前に出るなと連絡しろ」

魔導士「な・・・・!?」

それは簡単に言えばここに居る全員が体長を含めて戦力外通告された様なものだ。それには、納得できない彼は抗議の声を出す。しかし・・・

バルド「さっさとしろ・・・・・」

魔導士「ひっ！！」

どすの利いた低い声でそう告げると彼は逃げるようにそこを後にして体長のもとに行った。やっと動いてくれたことにバルドはため息を吐く。

バルド「はあ～～、ったく。・・・・で、ロイドあれは何だと思う？」

そう言って隣に立つロイドに聞く。ロイドは、う～～んっと唸りながら首を傾げて答える。

ロイド「虫・・・・だよな？」

バルド「・・・見りゃわかる。つーか、質問してるやつに逆に質問すんなよ」

質問を質問で返されてまたため息を吐く。そして、視線をイノセントに向ける。向こうは新手が現れたと警戒してか先ほどの積極的な攻撃から一転して静観している。おそらく先ほどまで一体も落とされずに戦っていたのに突然現れた新手に仲間が落とされたのに驚いているのだろう。イノセントと睨み合いを続けるロイド達の元に他

の仲間も集結する。

シリウス「さて、目の前の障害物を突破してロイド達を向こうに行かせないとな」

ロイド「行くぞ!!みんな!!」

一同「おう!!」

それぞれの得物を持ってイノセントの群れに突撃を開始する。イノセントの群れはロイド達を攻撃対象と認識してロイド達に銃弾を撃ちまくる。銃弾の雨を?い潜り、接近する。

バルド「行くぞ!ケルベロス!!」

ケルベロス「皆さん、いらっしゃいませーー!!ヒーーーハーー!!」

一番近くにいたイノセントに肉薄し、ケルベロスを叩きつける。イノセントはその一撃で両断され墜落する。バルドを標的とした5体が肉薄し銃撃する。それに気付いていたバルドは素早くそこから離れ回避してそこに接近、ケルベロスに黒い炎が纏いそれを自分を狙っていた5体の中央にいるイノセントに打ち下ろす。

バルド「爆炎剣!!」

イノセントに当たった瞬間爆発を起こしそれは、爆散する。その爆風の余波で他のイノセントも吹き飛ばされバランスを崩す。それを、見逃さなかったバルドは、一体に近寄り斬り伏せ、それを踏み台にしてもう一体に飛び頭を斬り落とす。その間に残りの二体は体勢を立て直してバルドから距離を取ろうとしたが・・・

バルド「逃がすかよ！燃えろ！フレアストライク！！」

二つの大きな火球が飛んでいきイノセントは炎に包まれ落ちて行った。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

シリウス「鬼さんこちら、手の鳴る方へ〜〜♪」

手を叩きながら挑発するシリウスに8体のイノセントが銃撃を加えながら突っ込んでくる。それを右に左にステップを踏むように避ける。そして、すれ違いざまにその内の一体に回し蹴りを加える。その一撃はイノセントの頭部を潰し、墜落させた。残りの7体は反転して再度シリウスに肉薄し内一体が突撃しその鋭利な爪で切り裂こうとする。

シリウス「遅い、遅い。孤妖天衝脚！！」

その爪の猛襲を神威を装着した腕で受け流し、光を纏った足で連続蹴り、蹴り上げ、蹴り下ろし、最後に回転蹴りと繋げる。爪を的確に弾きながら蹴りを胴体に打ち込んでいく。そして、最後の回転蹴りが頭部に決まり、潰されて撃墜される。

シリウス「まだ終わりじゃないぜ。唸れ、烈風！！サイクロン！！」

６体のイノセントを中心に巨大な竜巻が発生し、６体は風の刃によって切り裂かれていき跡形もなくなった。さらに、その周囲にいたイノセントもこれに巻き込まれていった。

――――――――――――――――――――――――

クラウド「ターゲットを確認。排除開始。くらえツインバレット！！」

二丁拳銃『干将・獏耶』からエネルギー弾を連射、クラウドを標的とした８体の内２体が蜂の巣にされ爆散する。残りの６体は二手に分かれてクラウドを挟み撃ちにしようとする。

クラウド「古典的な戦術だな・・・。もう予測済みだ。『バスターモード』、くらえ！！」
銃身が伸びライフル形態になりそれぞれの銃口から極太の赤いビームが打ち出された。
纏まっていたので回避もできずそれに飲み込まれて跡形もなく消し飛んだ。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――

ティファ「マーレシスハント！！」
二丁ライフル『鏡花・水月』からビームを連射一体をクラウドと同じく蜂の巣にして倒す。そこに、上下左右からイノセントが銃撃、それを掻い潜り、鏡花・水月を構え左右のイノセントを撃ち落とし右手のライフルをしまい、腰に挿してある鞘からビームサーベルを抜き上空にいるイノセントに接近、
すり抜け際に横一閃し両断する。そして、反転しサーベルをしまいライフルを連結させロングライフモードに切り替える。最後の一体に照準を合わせて引き金を引く。
ティファ「さようなら・・・」

放たれたビームは頭から尾まで貫通しイノセントは爆散した。

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――

カイン「ライトニングブラスター！！」

右手に収束した雷の砲撃を出す。前方にいる8体のイノセントは左右に展開しこれを回避する。回避したことによりそこには大きな道ができた。

カイン「今だ、4人とも行け！！」

ロイド「サンキュー、カイン！」

コレット「皆、気をつけてね」

ロイド、コレット、ガルド、セフィリアはその道を通って航空機の後を追った。4人を逃がすまいと追跡をしようとしたイノセント達の前にカインが立ち塞がった。

カイン「お前たちの相手は俺だ！！」

右手に『雷切』を持ちイノセント達に肉薄する。イノセントは銃撃で応戦、雨のようにカインに殺到する。自分に向ってくる弾丸の雨をカインは避け、雷切で斬り一体に接近する。

カイン「はあああああああ！！」

雷切を横一閃、頭から尾まで両断する。その勢いのまま切り伏せた一体の横にいたもう一体を返しの手で斬り伏せる。

カイン「まだだ！貫け、サンダースピア！！」

足元に魔法陣が現れ彼の周囲に雷の槍が5本出現する。それは、まるで意志を持っているかの如く別々に動き残りの5体を串刺しにした。

――――――――――――――――――――――――――――――――

遅れてなのは達もやって来る。そして、目の前で繰り広げられている戦いに唖然としていた。

なのは「すごい・・・。これがカイン君達の実力・・・」

たった5人でAランク～AAAランクの魔導士達が一体も落とせなかったイノセントを次々と落としていく。

はやて「とりあえず、航空部隊には怪我人の救助を優先してと連絡しといたけど、二人ともどうするん？」

なのは「カイン君達のところに行こう。」

なのはの答えにフェイトとはやては頷き、3人は戦場に飛び込んだ。なのは達を確認した3体のイノセントがこちらに向かってきた。

フェイト「フォトンランサー、ファイヤー！！」

なのは「アクセルシューター、シュート！！」

雷の槍と桃色の魔力弾を幾つも飛ばし牽制、それを散開して避けるイノセント。

フェイト「ソニックムーブ！！」

その内の一体に高速で接近しハーケンフォームのバルディッシュを振りおろして両断する。

なのは「アクセルシューター、シュート！！」

なのはは、誘導弾を幾つも飛ばす。それから逃れようとするも回り込まれて避けきれず全弾をくらい落ちて行った。

はやて「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストルティン！！」

はやては、石化砲撃魔法をイノセントに放つ。それをくらったイノセントは、徐々に石化していき完全に石になって海に落ちて行った。仲間が落とされたことに気付いたイノセントの群れはクラウド達から半数が離れ、三人を囲む。三人が来ていることに気付いたバルド、カイン、シリウスは、周囲のイノセントを蹴散らしつつやって来る。

バルド「フェイト！！」

フェイト「バルド！！」

二人は背中合わせになり周囲を囲むイノセントに向かい合う。

バルド「こうやって、一緒に戦うのも１０年ぶりだな！」

フェイト「そうだね。けど、あの時みたいに足手まといにはならな

いよ」

その言葉を聞いてバルドはフッと笑う。

バルド「だろうな。・・・背中は任せたぜ！！」

フェイト「うん！！」

二人は、再び高速でイノセントの群れに飛び込む。一条の金と黒の閃光が駆け抜ける所で次々と爆発が起こった。

シリウス「お～い、はやて、今、人生エンジョイしてる？」

呑気にそう言いつつも、イノセントからくる銃撃の雨を掻い潜ってはやての元にたどり着いた。

はやて「こんな時にイエスと答えられたらすごいで、って、あぶなっ！！」

それにツッコミを入れるはやての横を銃弾が飛んで行く。はやてとシリウスの前方には無数のイノセントが壁のように展開されていた。

シリウス「こりゃすげーな。まるで壁だぞ。どうする、はやて？」

はやて「ほんなら、シリウス君は前で頑張ってな。うちは、後ろで援護するから」

そう言ってこちらを見るシリウスにはやてはそう答える。

シリウス「だろうな～。はやては、後衛型だもんなー。よし、任せろ！！はやてには近づけさせないぜ」

はやて「期待してるで。それじゃあ、行こか」

シリウス「了ー解！！」

そう言ってシリウスは敵陣に突っ込んでいく。次々と殴り、蹴り飛ばし、吹っ飛ばす。はやては、そんなシリウスの背後を襲おうとするイノセントの群れを得意の範囲魔法で倒していった。出会って間もないのにも拘らず、息の合ったコンビネーションを見せる二人だった。

なのはとカインは次々と飛来するイノセントを魔力弾で落とし、雷切で斬り伏せていた。

カイン「なのは、大丈夫か？」

なのは「うん、まだ大丈夫だよ」

カイン「無理すんなよ。聞いたぞリンカーコアが少し損傷してんだってな」

なのは「にゃははは。ちょっと無理したんだ」

カインの問いかけになのはは苦笑して答える。それを聞いてカインはやれやれと肩を竦める。

カイン「お前が無理をする性格なのは知ってるがな・・・・まあ、さっさと終わらせてお前の負担を減らすのが今は最善か・・・」

そう言った瞬間、カインは、なのはの前から一瞬で消え、イノセントの群れの中で雷切を振るっていた。

なのは「私も頑張んなきゃ、行こうレイジングハート」

レイジングハート「Ｙｅｓ，Ｍａｓｔｅｒ」

そして、なのはもイノセントに攻撃を再開した。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

クラガナン　ＳＩＤＥ

陸士１「来たぞ！！」

一人の陸士の声に皆、空を見上げる。その視線の先には、独特なエンジン音を響かせて飛ぶ巨大な航空機の姿があった。

陸士２「で、でかい！？」

ミッドにあるどの航空機よりも比べ物にならないくらい大きくその巨体は、陸士達を照らす太陽を隠した。

部隊長「市民の避難はどうだ？」

陸士３「はっ！約７割弱は避難が完了しました」

部隊長「急げよ。敵は待ってはくれんぞ」

陸士３「はっ！」

そう言って部下は、引き続き避難の誘導を始めに行った。その彼の姿を見ていたが別の陸士の通信が入る。それを確認して視線を戻す。

陸士４『部隊長！敵航空機の腹部のハッチが開きました！』

部隊長「爆撃が来るかもしれん。いつ何が起きても対処出来るよう部下たちに伝えよ。」

陸士４『はっ！』

敬礼して部下たちに伝えるべく一端通信を切った。

部隊長はデバイスをセットアップしバリアジャケットを纏う。

部隊長「市民は、俺達が守ってみせる！！」

固い意志と共に、彼は、部下たちの元に行った。

---

航空機　ＳＩＤＥ

操舵士「クラガナン上空に到達しました」

司令「よし、イノセント?型投下！奴らを血祭りにしてやれ！！」

通信士「了解！イノセント、投下！」

腹部にあるハッチが開きそこから先ほどのイノセント?型よりも大

きな球体が複数個落ちる。それは、中腹辺りで目を赤く輝かせ、体を伸ばす。そして、地面に轟音と土煙を上げて着地した。その姿は・・

イノセント?「「「「「キュオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!」」」」」

グローリスでなのは達が戦ったカマキリの怪物(モンスター)だった。

――――――――――――――――――――
――――

陸士1「な、何だあれは!?」

陸士2「巨大な、虫?」

陸士3「なんにせよ、敵だ迎え討て!!」

陸士達は、次々と攻撃を始める。数十発をまともにくらうイノセント?型。しかし、爆風が晴れるとそこには、無傷の姿があった。

陸士1「な!効いてない!?」

イノセント?「キュオオオオオオオオオオ!!!」

陸士1「がっ!?」

ダメージを全く受けてない姿に驚いた陸士にイノセント?型は、腕を横に薙ぎ払った。それは、周囲の無人のビルを薙ぎ倒しながら一人の陸士を殴り飛ばした。直撃をくらい、数十メートル吹っ飛ばされた彼は、体がビルにめり込んだ形でようやく止まり気を失った。

陸士2「な、何というパワーだ。気をつけろ!まともにくらうと危険だ!!離れて戦え!!」

陸士達は、イノセント?型から離れ遠距離攻撃を始める。

イノセント?「キュオオオオオオオオ・・・・・・ゴアアアアアアアアア!!!!!」

陸士達「「「「な!ぐあああああああああ!?」」」」

陸士達が近づかないのに気づいたイノセント?型は、エネルギーを収束、口から極太の青い光線を打ち出した。まさか、遠距離攻撃が出来ると思わなかった陸士達は、まともにその光に飲み込まれた。その光線の勢いは、止まらず正面に立っていたビル群を倒壊させてやっと勢いが止まった。

部隊長「第二班は怪我人の救助を、第四、第七班は右奥のモンスタ

ー達を第一、第三班は左奥の奴らを頼む。第五、第六班、第八班は私と共に続け!!ここから先には、まだ避難していない市民がたくさんいる。何としても死守するんだ!!」

一同「了解!!」

其々が自分達の指示された場所に向かう。第一、第三班、第四、第七班は、其々イノセント?型を引きつけて移動を始めた。部隊長率いる部隊も目の前のイノセント?型に肉薄する。イノセント?型は前進しながら巨大な腕を振り回し周囲を動き回る陸士達を薙ぎ払う。部隊長は、その攻撃を紙一重で避けながら重い一撃をくらい次々と戦闘不能者になる仲間を見て歯軋りする。

部隊長「くそっ!たった一体の進軍も止められないのか俺達は!!」

右腕の攻撃を右に避ける。しかし、それを読んでいたようにイノセント?型は、左腕を待機させていてそれを部隊長に振り下ろす。

部隊長「ぐあああああああ!!!?」

直撃こそ免れたものの飛んで来た大きめのコンクリート片に当たり吹っ飛ぶ。数メートル転がり、近くのビルにぶつかる形で止まる。その彼に近づき、止めを刺すべく腕を振り下ろす。彼は、来るであろう衝撃に目を瞑った。

しかし・・・・・・

――――ガキンッ!!――――――

何時まで経っても衝撃が来ないので恐る恐る目を開けると・・・・

???「大丈夫か?」

二本の剣を交差させてイノセント?型の腕を受け止めている。赤い服を着て背中に虹色の翼を生やした天使がいた。

そう、ロイド・アーヴィングである。

ロイド「はあ!!」

イノセント?型の腕を押し返すロイド。イノセント?型はそれには堪らずその巨体を揺らし、踏鞴を踏み後退する。すかさずロイドは、肉薄する。

ロイド「虎牙破斬!!」

斬り上げから斬り下ろす高速二段攻撃を放つ。それは、イノセント?型の胴を縦に斬り裂いた。

イノセント?「キュアアアアアアアア!!!?」

緑色の体液を撒き散らしながら悲鳴を上げるイノセント?型。そこに・・・・

???「グランシャリオ!!」

二つの戦輪が交差するように飛んで行き当たった瞬間上空から雷が落ちた。雷に打たれ崩れ落ちるイノセント?型。戦輪は弧を描きながら戻って行き持ち主の手に収まった。

ロイド「ナイス、コレット!」

そこにはロイドと同じように虹色の翼を生やしたプラチナブロンドの髪をした白い服を着た天使がいた。コレットと呼ばれた彼女は、ロイドの元に来て、一度、微笑み、再び表情を引き締める。

コレット「ロイド、あの生き物って・・・」

ロイド「ああ、あの世界にいた虫だな。」

コレットの問いかけに短く答える。なぜなら、目の前で倒れていたイノセント?型が再び立ち上がったのだ。雄たけびを上げて二人に

腕を振り下ろす。衝撃で砂煙が上がる。しかし、そこには、すでに二人の姿はなくロイドは、イノセント?型の目の前に、コレットは遥か上空に移動していた。

ロイド「獅子戦吼!!」

一気にイノセントの胴体に接近し体当たりから獅子の闘気を放つ。それをくらったイノセント?型はその巨体を浮かせ轟音を立てながらひっくり返った。

その間にコレットは、術の詠唱に入る。

コレット「御許に仕えることを許したまえ、響け奏麗たる歌声よ、慈愛の光よ今此処に、『エンジェルソング（天使の賛歌）!!』」

コレットを中心にクラガナンに不思議な歌声と共に虹色の波紋が広がるその波紋から同じく幾つもの虹色の羽がゆっくりと落ちてくる。その一つが動けないでいた部隊長に触れた瞬間・・・・

部隊長「な、何だ?体に力が湧いてくる?」

そう、羽が触れた瞬間傷が治り身体の奥底から力が湧きあがって来た。それは、部隊長だけではなく、周囲で倒れていた部下たちも同じようで戸惑いつつも立ちあがった。

ロイド「極・魔神剣・双牙！！」

左右の剣を順番に振り上げ巨大な衝撃波を放つ。猛スピードで迫るそれをくらい仰け反ったイノセント?型。ロイドは、イノセント?型より高く舞い上がった。

ロイド「鳳凰天駆！！」

炎が身を包み火の鳥と化したロイドがイノセント?型に突撃、頭から腹部まで貫き着地。イノセント?型は、炎に包まれ爆散した。

ロイド「次行くぞ、コレット！！」

それに上空で応える様に頷いた彼女と共に羽を羽ばたかせその場を猛スピードで後にした。それを、魔導士達はただ見つめるだけだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

FW陣　SIDE

クラウド達がイノセント?型の注意を引きつけてくれたおかげで何事もなく無事にクラガナンに到着した。ヘリから降りたティアナ達が見たのは燃え上がる街だった。その中を暴れまわるイノセント?型を見て、ヴィータ、ティアナ、スバルが「あっ!!」っと驚きの声を上げる。

シグナム「どうした、ヴィータ?」

ヴィータ「あの虫、あたし達がグローリスで戦った虫じゃねーか!!」

シグナム「何?」

それを聞いて改めてイノセント?型を見る。その周囲から幾つもの魔力弾が飛び交う。それを物ともしないで腕を振り回していた。

スバル「あそこで、地上部隊が戦ってるんだ、もしかしたら、ギン姉も・・・」

シグナム「兎も角、あそこの部隊と合流するぞ」

一同「はい(おお)!!」

シグナム、ヴィータは飛行魔法を使い、スバル、ティアナはスバルの作ったウィングロードで、エリオ、キャロはフリードに乗って前方で戦っている部隊に合流するべく移動を始めた。

ヴィータ「シグナム、エリオ、キャロ、あいつ、物凄い堅いからな、あと離れると砲撃してくるから気をつけろよ」

シグナム「どれ程堅いのだ？」

ヴィータ「あたしの一撃を弾くくらいだよ」

エリオ「え！？ヴィータ副隊長の攻撃をですか！？」

ヴィータ「ああ、あと再生能力が高えー。なのはのディバインバスターを頭にくらったのにすぐ立ち上がりやがった」

それを聞きながらイノセント？型に接近するにつれて、地面に倒れてる地上部隊の人が増えてきた。

シグナム「これは・・・・」

キャロ「ひどい・・・」

全員がそう思った。ある者はビルに体がめり込んでおり、ある者はあの足に潰されたのか無残な姿を晒していた。込み上げてくる吐き気を抑えて現場に着くと、そこでは、５人の魔師士が戦っていた。しかし、たった今、巨木の様な腕に３人が吹き飛ばされ、２人になり、もうひと振りで一人が吹き飛ばされたった一人になった。その人物は、

スバル「ギン姉!!」

スバルの姉、ギンガ・ナカジマである。

ギンガ「スバル!それに、皆さん!!」

スバル達は、ギンガの元に並びイノセント?型を見ながら会話する。

スバル「ギン姉、怪我はない?」

ギンガ「私は、大丈夫。けど・・・・他の皆が」

シグナム「ああ、先ほど見た。皆、やられたようだな」

ギンガ「はい・・・・。第四、第七班は、あれの進軍を止められずに全滅してしまいました。」

悔しそうに唇を噛むギンガ。四十人いた陸士達は、イノセント?型の進撃を止めきれずギンガを残してやられたらしい。そのイノセント?型は、彼女らを見たまま様子を窺っているらしく動く素振りはない。

ヴィータ「ともかく、あの虫ヤローにこれ以上好き勝手にさせるわけにはいかねえーな」

そう言ってアイゼンを担ぐヴィータ。それに皆頷き、各々のデバイスを構える。イノセント?型は、それに反応し雄たけびを上げてティアナ達に襲いかかる。振り下ろされる腕を散開して回避する。シグナムは、接近しレヴァンテインを振り下ろす。しかし、それはイノセント?型の堅い装甲に掠り傷程度しか与えられなかった。次に、ヴィータがアイゼンを振り下ろすも、弾かれる。さらにスバル、ギンガも加わり殴りかかるも同じく弾かれた。イノセント?型は、四人を標的にし腕を振り下ろそうとする。しかし、ティアナが放ったクロスファイヤーが当たり一瞬動きが止まる。その間に四人は距離をとり代わりにキャロは、フリードのブラストレイをエリオがフォトンランサーを放った。爆煙に包まれる。煙が晴れるとそこには装甲に煤が付いた程度の状態のイノセント?型が立っていた。

シグナム「七人掛かりで仕掛けているのにダメージは殆どないだと・・・・・」

ヴィータ「規格外にも程があるぜ・・・・」

予想以上に手強い敵にシグナムは驚き、ヴィータは、その堅さを改めて思い知らされた。

ティアナ（このままじゃ、またあの時みたいにやられてしまう・・・・考えろ・・・考えるんだ、あの時クラウドさん達はどうやって

あの生物を倒していたのか・・・・）

ティアナは、幻術を使ってシグナム達をサポートし、クロスミラージュから魔力弾を連射しながら考える。しかし、それでもシグナム達はギリギリで避けている状態である。何度か掠めて吹っ飛ばされたりした。

ティアナ（あの時は、たしか・・・・クラウドさんの放った砲撃で倒していたけど、あんな火力を撃ち出せるほどの人は今いない・・・。けど待って・・・・あの時はロイドにコレットそれにティファさんが足止めしていた。そういえば、ティファさんは、何処かに正確に撃ち込んでいたはず。）

それに気づいたティアナは、動き回るイノセント?型を観察する。すると、エリオがストラーダで斬りかかった付近・・・関節部分が赤いのを発見し、ティアナは、気付いた。

ティアナ（そうだ!ティファさんは、あの時、関節を・・・あの赤い部分を正確に狙っていた!!）

それを伝えるべく急いで皆に念話を飛ばす。

ティアナ《皆!!関節を・・・赤い所を狙って、たぶん其処が弱点なんだ!!》

シグナム《何？弱点が分かったのか、ランスター？》

ティアナ《はい、前回ティファさんが其処を正確に狙っていたのを思い出しまして、もしかしたらと思うんです》

ヴィータ《そういえば、ティファの奴、執拗に同じ所を攻撃してたけどそういうことか！》

エリオ《やってみましょう、皆さん！！》

そして、皆頷き、シグナム達は、再び接近。それをティアナは、幻術でサポートする。一瞬、どれが本物か分からず混乱している内に足の赤い関節部分に接近する。

シグナム「レヴァンテイン！！」

ヴィータ「グラーフアイゼン！！」

スバル「リボルバーナックル！！」

ギンガ「ブリッツキャリバー！！」

シ・ヴィ・ス・ギ「「「「カードリッジロード！！」」」」

其々のデバイスから薬莢が２つ飛び出す。

シグナム「紫電一閃！！！」

シグナムがレヴァンテインを振りぬく。

ヴィータ「ラケーテン、ハンマー！！！」

ヴィータがアイゼンを叩きつける。

ス・ギ「「うおおおおおおおおおお！！！」」

スバル、ギンガが其々、別の足を全力で殴った。

イノセント？「キュアアアアアアアア！！？」

その一撃をくらったイノセント？型の足は、あっけなく関節から折れ、体液を流しながら前のめりに倒れた。

シグナム「今だ！モンディアル、ルシエ！！」

上空でフリードに乗って待機していたエリオは、それを聞きフリー

ドから飛び降りる。

エリオ「ソニックムーブ！！」

重力と高速移動魔法で超スピードで落下するエリオ。

エリオ「ストラーダ！カードリッジロード！！」

エリオのデバイスから薬莢が２つ飛び出す。ストラーダに巨大な魔力刃が現れる。

エリオ「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

全体重を重力と共にストラーダに載せ、真っ直ぐ落ちていき・・・・イノセント?型の目に深く突き刺した。

イノセント?「キュオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！？？」

緑の体液を撒き散らし悲鳴を上げ暴れるイノセント?型。振り下ろされないようにしっかりストラーダを突き刺し踏ん張るエリオは、

キャロと目を合わせた。それにキャロは、頷いて応えた。

キャロ「フリード！ブラストフレア！！」

フリードが放った炎は真っ直ぐイノセント?型の頭に飛んで行く。
エリオは、ギリギリまで待ち当たる寸前にストラーダを抜き、頭部を蹴り離れた。その瞬間、炎は、イノセント?型の頭部――正確には体液を撒き散らす目に直撃した。

イノセント?「キュアアアアアアアアアアアアアア！！？・・・ウオオオオ・・・アアアアア・・オアアアアアアアアア・・・・・・」

燃え上がりながらイノセント?型は、断末魔を上げて倒れ伏した。

シグナム「やった・・・か？」

再生能力が高いことを聞いていたので警戒する。しかし、イノセント?型は、ピクリともしなかった。

ヴィータ「やったみたいだな・・・」

そう言うと、皆ホッとした表情を見せた。ＦＷ陣は疲れたのかへたり込む。

スバル「なんとか・・倒せたね」

エリオ「ティアナさんのお陰ですね」

キャロ「ティアナさんが思い出してくれたお陰で何とか勝てましたね」

ティアナ「ちょ、ちょっと二人ともやめてよ／／／／」

二人に褒められ、顔を赤く染めるティアナ。

スバル「ティア、照れてる～～」

ティアナ「う、うるさい／／／！！バカスバル！！」

そう言って、スバルの頭を引っ叩いた。

スバル「ううう～～、ティア～痛いよ～～」

ティアナ「ふん！あんたがからかうのがいけないのよ」

何時もの二人の会話を聞いて笑う一同。

シグナム「さあ、休憩は終わりだ。次に行くぞ」

そう言って、表情を引き締めるシグナムにＦＷ陣も立ち上がる。

ヴィータ「つっても、あれをまたやんのか・・・結構しんどいな」

シグナム「そう言うな。それに、まだあと４体はいるんだぞ」

彼女達の前方にはまだ４体ものイノセント?型が街で暴れていた。どうやら、他の部隊も殆どの人がやられたらしく周囲を飛び交う魔力弾が少ない。加勢に行きたいものの流石に４体はきつい。後、２体ぐらいが限界だろう。如何すればいいか考えていると上空から虹色の波紋と不思議な歌声が聞こえた。

エリオ「何でしょう?この歌声は?」

キャロ「何だか心が温まる感じがします」

ギンガ「それに・・・力が湧いてくる」

不思議な感覚に戸惑う。すると、上空から虹色の羽が彼女らの前に落ちてきたそれを、皆一つずつ手に取ると、それは手の中で弾け光

の粒子となり彼女らを優しく包んだ。すると、先の戦闘で負った傷が瞬く間に治った。

シグナム「これは・・・いったい・・・？」

ガルド「コレットの天使術、エンジェルソング（天使の賛歌）だ」

エリオ「ガルドさん!?それに、セフィリアさんも!?」

何時の間にかガルドとセフィリアがいたので皆驚く。ガルドの肩には何人もの気を失った魔導士が乗せられていた。彼らを近くの壁に寝かせてシグナム達に並ぶ。セフィリアも後姫を呼び怪我をした局員を治療させる。

キャロ「天使術・・・・ですか？」

セフィリア「皆の使っている魔法とは違う系統の魔術っていうのがあるの。コレットのはその魔術の部類に入っていてその中でも珍しい天使術が使えるの。それで、さっきのは味方全員の身体能力を上げつつ傷を回復させる補助系天使呪文なんだよ」

その説明を理解したものは成程と頷く。スバルは、頭から煙を出していたがこの際スルーという形で・・・・そう話しているとイノセント?型が、此方に気づいたのか周囲の魔導士を無視して４体まとめて接近してきた。

スバル「うわ！？こっちにくるよ！！」

ギンガ「流石にちょっとこれは、厳しいわ」

ガルド「問題無い。そろそろ来るだろう」

ティアナ「え？」

ティアナが疑問の声を上げた瞬間、目の前に天使の羽を生やしたロイドとコレットが現れた。

ロイド「ガルド、セフィリアそれに皆此処にいたのか」

コレット「皆、怪我はしてない？」

セフィリア「大丈夫だよ、皆の怪我もコレットのエンジェルソングで少し回復してるから」

それを聞いて、コレットは「よかった～～」っと安堵の表情を見せる。そして、キッっと表情を引き締め此方に来るイノセント？型の群れを見る。

コレット「これ以上好きにはさせない」

そう言うと彼女の足元から見たこともない不思議な魔法陣が現れる。
そして、詠唱を始めた。

コレット「その御名の下、この穢れた魂に裁きの光を降らせたまえ、裁きの光よ、ジャッジメント！！」

上空から光の雨が幾つも降り注ぎ4体のイノセント?型の体を焼き貫いた。断末魔と共に光の雨に飲み込まれ、光の雨が治まった時には、幾つものクレーターを残してイノセント?型の姿は、何処にもなかった。

キャロ「すごい・・・・」

スバル「あの虫達を一撃で・・・・」

シグナム「これが・・コレットの力か・・・・」

コレットの力の片鱗を見て、シグナム達は、改めて彼女達の圧倒的な力を知ることとなった。

ロイド「後は・・・あの航空機だ」

ロイドがそう言って皆を見る。それに皆頷いて、ガルドとセフィリアに街のことを任せ皆、空に舞い上がった。

## 第七話（後書き）

作者「今回はギンガさんに登場してもらいました！！」

ギンガ「えっと、宜しくお願いします」

ロイド「俺とコレットの新技があったな」

作者「そうですね、では、技の説明を。ロイドの極・魔神剣・双牙は魔神剣・双牙を極めた者だけが使える最強の魔神剣・双牙で普通の魔神剣・双牙の四倍くらいの大きさと威力、射程を持っています。そして、コレットのエンジェルソング（天使の賛歌）は、ホーリーソングの強化版でゲーム風に考えると、味方の体力を約三割回復させ、攻撃力と防御力を約四割上げる中級補助天使呪文です」

カイン「二つともオリジナルの技なんだな」

バルド「そして、コレットの天使術が凄すぎだろ・・・」

ギンガ「予想以上の性能に作者の方も驚いてるみたいだよ」

コレット「今後も増やす予定なの？」

作者「それぐらいはやらないとね。誤字脱字があれば教えて下さい。次回も読者の皆さま宜しくお願いします！！」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

## 第八話（前書き）

作者「今回は、なのは達の方の戦闘です」

カイン「この戦いは何時までやるんだ？」

作者「後一話くらいですかね」

クラウド「では、本編をどうぞ！！」

# 第八話

時は少し戻ってロイド達がイノセント?型と戦っている時

なのは達が戦っている空より少し上に三つの影があった。

???「あいつらが今回の標的(ターゲット)か」

???「ふ〜〜ん。弱そうな奴らだね」

???「誰が相手だろうと瞬殺だぜ」

???「行くぞ」

そう言って三人はなのは達の所に猛スピードで降下していった。

---

レイジングハート［マスター、上空より猛スピードで接近する魔力反応を確認］

なのは「え？」

空を見上げると此方に接近する三つの影を確認した。それは、全身を装甲の様なものを装着している人だった。

？？？「皆、殺してもいいんだよね」

？？？「ちゃっちゃと殺っちまおうぜ」

？？？「行くぜ！！シャル、クロ！！」

三人は近くにいたなのはを見つける。

？？？「まずは、あの白い女からだ！！くらいやがれ！シュラーク！！」

肩に装着した二つの砲台から緑のビームを放つ。

なのは「っ！？」

いきなり攻撃を仕掛けてきたことに驚くも、ギリギリで避ける。そこに接近してくるシャルという名の男。

シャル「はあああああああ！！」

手に持った大鎌『ニーズヘグ』を一閃する。それを上に飛ぶことで避け距離をとる。

なのは「くっ、ディバインバスター！！」

新手と確認したなのはは、ディバインバスターをシャリに放つ。シャルに直撃するかと思われた砲撃は・・・・

シャル「はっ、ゲシュマイディッヒ・パンツァー」

シャルの肩に装着していた二枚の装甲板が前に展開される。それに当たった砲撃はあらぬ方向に曲がっていった。

なのは「砲撃が曲がった！？」

砲撃を曲げられたことに驚愕するなのは。

クロ「たあああああああ！！瞬っ殺！！」

その彼女に向かってクロという名の男が『アフラマズダ』を放つ。
それを避ける。なのはもアクセルシューターで反撃するもクロは、
フェイトのソニックムーブに匹敵するほどの速度で移動してこれを
回避する。

クロ「さっさと堕ちろよ！ミョルニル！！」

右手に持っていた棘付き鉄球の付いた杖を振るうと、そこから鉄球
だけが離れなのはに高速回転しながら迫って来た。なのはは、プロ
テクションを張りこれを防御。接触面で激しく火花が散る。

なのは「くっ！？」

なんとか弾き飛ばすことに成功する。その鉄球は鎖で連結している
杖に戻って行った。三人は再び弾幕を張る。

なのは「あなた達は、いったい・・・」

三人から放たれる凄まじい弾幕を避けながら聞く。

オル「俺達は、革命組織『プロヴィデンス（神の意志）』！てめー
ら管理局を潰す者たちだ！！！」

そう言って彼らはスキュラ、フレスベルグ、ツォーンの砲撃を放った。その攻撃を避けきれないと判断したなのはは、プロテクションを張り防御する。

なのは「くうううう！」

強力な砲撃を何とか耐えきる。しかし・・・

クロ「もういっちょミョルニル！！」

再び放たれた鉄球を耐えることが出来ず、プロテクションは破壊され吹き飛ばされた。

なのは「きやあああああ！？」

シャル「これで堕ちろ。フレスベルグ！！」

赤い閃光がなのはに迫る。

フェイト「なのは!?」

はやて「なのはちゃん!?」

親友の危機に気づいたフェイト、はやてが助けに行こうとするも周囲をイノセント?型に囲まれる。

フェイト「退いて!!」

バルディッシュを振るって蹴散らそうとするもまるで、時間を稼ぐかのようにフェイトの前を飛び交う。

フェイト「くっ、このままじゃ・・・「フェイト、下がってろ!」っ!?バルド!」

フェイトを追い抜いて前を塞ぐイノセント?型に向かう。ケルベロスに黒い炎が纏う。そしてバルドは、ケルベロスを横一閃に振るった。

バルド「覇王灼滅破!!」

煉獄の黒い炎がまるで壁のように向かい、イノセント?型達を焼きつくした。

バルド「行くぞ、二人とも！」

フ・は「「うん！」」

三人はなのはのもとに向かおうとする。しかし・・・・

――――ズダダダダダダダダダダダ！！！！！――――――――――――

バルド「っち！！」

シリウス「はやて！」

それを行かせまいとイノセント?型は周囲から集まりフェイト、バルド、はやてに銃撃する。バルドは、フェイトの前に出て銃弾をケルベロスで斬り、弾き、盾にして防いだ。シリウスもはやての前に割り込み防御壁を展開する。

バルド「畜生！先に行かせないつもりか」

執拗な銃撃に進路を阻まれて四人は動けないでいた。そして、なのはにシャルの放った砲撃が迫る。

フェイト「いやあああ！！！なのはーーー！！」

フェイトの悲痛な声が空に響き渡る。

バルド「っち！仕方がない、ケルベロス！２ｎｄｆ――――」

バルドが何かしようとしたその時・・・・

――――ヒュン――――

一瞬、風が四人を通り抜けた。四人がそう感じた瞬間、目の前にいたイノセント？型の群れが全て真っ二つになった。

フェイト「え？」

一瞬の出来事に戸惑うフェイト。そしてバルドは・・・

バルド「ったく、気付くのが遅いんだよ、バカ野郎」

安堵の表情を、見せていた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

迫りくる赤い砲撃になのはは、目を瞑った。フレスベルグがなのはに直撃しようとした次の瞬間・・・

カイン「壱の太刀、月閃光！！」

なのはと砲撃の間にカインが割り込み刀身から、斬撃を三日月状に放った。それは砲撃を真っ二つに斬りカインとなのはを避ける様に分れ海に着弾した。

カイン「無事か、なのは？」

なのは「あ、うん、大丈夫だよ。ありがとうカイン君」

助けてもらったことに対して礼を述べるなのは。なのはが無事を確認してホッとした表情を見せる。しかし、その表情はすぐに消えなのはを襲った三人を睨みつける。そんな二人をオル達は見下ろしていた。

オル「増援か・・・」

シャル「もう少しで堕とせたのに、邪魔な奴」

クロ「どんな奴だろうと、邪魔する奴は瞬殺！」

カイン「・・・・・・・・・・」

口々にそう言う三人を無言で見るカイン。その瞳には、怒りが少し見えた。そこにフェイト達四人が着いた。

フ・は「「なのは（ちゃん）！大丈夫!?」」

なのは「フェイトちゃん、はやてちゃん。うん、大丈夫だよ」

自分が無事なのを伝えると二人はホッとした顔を見せる。

フェイト「なのは、あの人達はいったい・・・」

なのは「革命組織『プロヴィデンス（神の意志）』って言う組織の一員みたい。管理局を潰す者って言ってた」

はやて「なんやて!?」

それを聞いてフェイト、はやては驚きの表情を見せる。

カイン「なのは」

なのは「え?何、カイン君?」

不意にカインに呼ばれ返事をする。

カイン「そのことについては後回しだ。お前は、少し厳しいだろうが、フェイト達と一緒に虫の相手をしていてくれ」

なのは「え・・・そんな!?私だって一緒に戦うよ!」

そう言ったなのはにカインは首を横に振る。

カイン「無理をするな、それに・・・そんなに肩で息をしているのにこの戦いは厳しいだろうしな。後は俺に任せな」

なのは「――っ!?」

笑顔を見せてそう言うカインになのはは、言葉が詰まる。

８年前のあの時、自分が弱かったから、自分が無茶をしたから殺されそうになり、その結果、カインが庇って大怪我を負いそのまま自分達の前から姿を消した。その時に誰かが、自分みたいに無茶をしないようにするためにそして、何より自分自身も強くなるために教導官になると誓ったのだ。――強くなった・・・。昔よりは、確実に、カインの実力には程遠いのも自覚している。砲撃型と遊撃型、スタイルが違うが少し距離を縮めれたと思っていた。しかし・・

・現実はどうだ?近づいたというより寧ろ更に離れた所にカインはいる。一方的にあの三人に翻弄されカインが間に合わなければ自分は、死んでいただろう。

落ち込むなのはの肩にフェイトが手を乗せる。

フェイト「行こう。なのは」

なのは「うん・・・・。あ、カイン君気をつけてね」

そう言ってなのは、フェイト、はやては、再びイノセントの群れに向かった。バルド、シリウスも一度カインの背を見てからなのは達の後を追った。

オル「逃がすかよ!!」

オルがシュラークを放つ。しかしそれは、下から来る雷撃のよって相殺された。

オル「てめー、邪魔すんな!」

そう言ってカインを見ると・・・・

カイン「調子に乗るなよ、三下が・・・・」

クロ「な・・・・！？」

カインの纏っていた空気が氷点下の様に冷え切っていた。その空気の変わりように思わず三人は後ずさった。

カイン「なのはに手を出すとはいい覚悟だ。その罪、万死に値する！！」

カインは手に持っていた雷切を消して背中に背負っていた、一つの太刀を抜き放つ。

カイン「起きろ、サイフォス。奴らに裁きを下すぞ」

サイフォス［招致］

短い言葉とともに刀身が白く輝く。サイフォスを構え三人を睨む、その眼差しは、さながら龍を思わせる。

クロ「じゃ、邪魔すんならてめーも瞬殺！」

カイン「やれるものならやってみろ。自身の無力さに打ちのめされ

だけだがな」

オルがシュラークを撃つが足を半歩動かしただけでそれを避ける。
そこに、シャルが鎌で斬りかかるもバックステップで回避した。そ
してカインは、右手を構えシャリに告げる。

カイン「忠告しておく。お前にこれは防げない」

シャリ「はあ？僕にはこれがある。防げないものなんて無いよ」

カイン「そうか……なら、受けてみろ、ディバインバスターのプロ
トタイプ……その原型となったこの砲撃を……」

右手に大気中にある魔力が集まり出す。そして、

カイン「ディバインバスター・ゼロ！」

先ほどなのはの放った砲撃の数倍はいく大きさの銀色の砲撃がシャ
リに迫る。シャリは、ゲシュマイディッヒ・パンツァーを展開する
が、

シャリ「な、シールドが！？」

それは、ゲシュマイディッヒ・パンツァーの反射を徐々に削り、ついに・・・

シャル「ぐあああああああああああ！！」

シールドを破壊してシャルを飲み込んだ。

カイン「俺にその程度の防御壁は意味をなさない」

煙が晴れると装甲がボロボロになったシャルがいた。

クロ「お前えええええええ！！」

オル「シャル、無事か！」

シャル「くそー！！あいつうざい！！！」

クロが『アフラマズダ』を連射する。それをカインは一振りで無数の斬撃を飛ばし消し飛ばす。オルとシャルも『スキュラ』と『フレスベルグ』で攻撃する。カインはその二つを左手を前に出しただけで防ぐ。

ク・シ・オ「「「なっ！？」」」

カイン「この程度か？なら、次は、こちらの番だ。壱の太刀、朧」

ＡＡ級の射撃、Ｓ級の砲撃をあっさり防せがれたのに驚く三人。しかし、カインが『サイフォス』を構えたのに気づいて迎撃態勢に移る。だが突然、カインは三人の視界から姿を消した。

――ヒュン！――

一瞬、風が吹く。そして、次の瞬間にはカインは『サイフォス』を横に振りぬいた形で三人の後ろに立っていた。

三人「は？」

三人は、一瞬何が起きたのか分からなかった。

――ズバッ！！――

三人「がああああああああ！！！？」

しかし、突然襲った激痛に斬られたというのが分かった。三人の胴には横に一閃されそこから鮮血が溢れていた。苦痛で身を捩る三人にカインは、呪文で追い打ちをかける。

カイン「まだ終わりじゃないぞ。天光満る時に我はあり、黄泉の門

開く所に汝あり、出でよ神の雷、　インディグネイション！！！」

クロ、シャル、オルの頭上に巨大な魔法陣が現れ、その中心に光が収束する。そして、次の瞬間、

――――カッ！！ゴオオオオオオオオン！！！！！――――――――

轟音とともに眩い光が三人を飲み込んだ。その閃光は、そのまま海にまで届き大量の水蒸気を起こした。水蒸気が晴れるとそこには全身が焦げた状態の三人がいた。満身創痍だがまだ生きてはいた。その三人を今度は逆に見下すように見る。

カイン「ふんっ、千分の一の威力でその様か案外大したことがないな」

クロ「チク・・ショ・・ウ、何・・なんだ・・・こ・・いつ・・は！？」

オル「まさか・・・テメーは！」

その時三人の腕からアラームが鳴る。それを聞いた瞬間三人は顔を顰める。

オル「チクショウ、もう終わりかよ。お前ら撤退だ！！」

ク・シ「「了解・・・」」

そう言って三人は、転移魔法を発動させて消えていった。

カイン「逃げたか・・・・・。なら、なのは達と合流するか」

それを確認したカインはサイフォスをしまい、先に行ったなのは達の後を追った。

---

イノセント?型と交戦を開始したなのは達は、突然背後で物凄い魔力を感じて振り向くと巨大な落雷が轟音と共に先ほどの三人を飲み込んだのを見た。

なのは「今のは・・・・」

バルド「カインの使う雷属性の上級呪文、インディグネイションだ」

シリウス「でも、ありゃかなり威力を落としてるな。だいたい普段の千分の一位か」

はやて「あんな、凄いのにそんな威力落としとるんか!?」

シリウスの発言にビックリするなのは達。そんな彼女たちにイノセント?型が殺到する。

バルド「向こうは心配はいらねえな。はっ!!」

そう言って振り向きざまに背後にいたイノセント?型を両断する。
そして、周囲に炎弾を形成してそれを飛ばし数体を火達磨にした。

フェイト「カインってどれ程強いの?はっ!」

ハーケンフォームのバルディッシュを振りイノセント?型を斬り伏せながらフェイトは聞く。

バルド「そうだな・・・確か、あいつの知人には、『剣帝』、『雷帝』って呼ばれてたぞ。剛・魔神剣!!」

前方に広範囲に広がる衝撃波を放ちイノセント?型を一掃しながら答える。

フェイト「『剣帝』・・・・。」

なのは「確かに、カイン君は、『剣帝』って呼ばれてたよ」

はやて「なのはちゃん、知ってるんか！？」

なのは「うん。８年前に、カイン君を追ってた人達がそう呼んでいたの」

バルド（８年前ねぇ～。そういや時たまカインの命を狙う奴がいたな。蹴散らされてたが・・・そういえば、あいつ堕ちた神族の裏切り者って言われてたな・・・）

その時のことを口には出さずに思い出す。その時のカインの顔は、悲しそうな顔をしていた。

シリウス「そういや、何でなのはは、知ってるんだ？フェイトもはやても知らないのに？」

シリウスがふと気が付いたことを口にしてみる。その間もイノセント？型を殴り、蹴飛ばしている。

なのは「えっと、昔、カイン君って顔を隠して私達の任務の手助けしてくれてたの。それで、私一人が受けた任務の時に一緒に居て、その時カイン君を追っていた人達が現れてそう言ってたの。」

フェイト「そうだったんだ・・・」

はやて「全然気付かんかったわ・・・」

そう言いつつも、フェイトもはやても当時、時々自分達の前に現れていたフードを被った謎の男を思い出し、あれが実はそうではないかと思った。

バルド「昔の話に耽っているのもいいが、今は、目の前の敵に集中しろ。堕とされるぞ」

そう言ってイノセント?型を斬り伏せる。そこに、クラウド、ティファも合流する。

クラウド「大方減ったな。後は、２０体程度か」

クラウドが言うようにイノセント?型の数は最初の７０体から、目の前にいる２０体程度に減っていた。全滅の危機を感じたのかイノセント?型は、その攻撃頻度が大きく減っていた。

ティファ「後少しですね」

クラウド「だな。なら此処で一気にたたみ掛けるぞ!!」

その言葉に皆頷きイノセント?型の群れに突っ込もうとする。しかし・・・・・・

イノセント?型［［［［カチカチカチカチカチカチカチカチカチ］］］］

イノセント?型の群れは突如、顎を鳴らし始めた。

フェイト「何をしてるのあれ?」

シリウス「何か、いや～～な予感がする・・・・」

クラウド「シリウス、その勘、当たってるぞ」

ティファ「何か来ます!!」

ティファの言うとおり、突然、イノセント?型の群れの後方の空間が大きく歪み始める。そして、その空間から何かが飛び出した。それは・・・・・

はやて「な、何やあれ!?」

なのは「っ!?大きい!?」

なのは達の前には、全長３０メートルは下らないだろう巨大なトンボが現れた。その姿形は、イノセント?型と同じだが胸部には翅の邪魔にならない位置に大きな筒状のものが付いていて、さらに背中はハッチの様になっていた。

バルド「でけ～な」

ケルベロス［あの虫どもの母体って感じだな。子供の危機に反応したってところか。面白くなりそうだな、相棒！ウヒャヒャヒャヒャヒャ！！！」

バルド「呑気なこと言ってる場合じゃないぜ相棒。あれ、街に行かせたらヤバいぞ」

そう言ってケルベロスを窘めるバルドだが、彼もいたって慌てている様子もなくのんびりしている。そんな彼らに?型の母体は、一発が拳大の銃弾の雨を降らせる。それに反応したバルドはフェイト、なのはを掴んで回避する。シリウスもはやてを抱えて一端離れる。そこを、フォローするようにクラウド、ティファが援護射撃をする。しかし、その攻撃は、母体の両脇にある筒からの砲撃と翅から出した衝撃波で打ち消される。次にクラウド、ティファが標的とされるが彼らは、銃弾の雨の中を掻い潜って撃ちまくる。それは、全弾ヒットし母体は煙に包まれた。

クラウド「どうだ?」

爆煙が晴れるとそこには何かシールドみたいなものを前面に展開して傷一つない姿で悠然と飛んでいる母体の姿があった。

ティファ「大型のシールドを確認。先ほどの攻撃は全て無効化されたみたいです」

クラウド「ふむ、この程度じゃやっぱ効かないか」

はやて「あんなデカイのどないしろっていうんや」

シリウス「よ～し！次は、俺が行くよ」

そう言ってシリウスが右腕をグルグル回して皆の前に出る。

はやて「な、何言うとるんや！？あんなデカイの一人でやるっていうんか！？」

シリウス「そのつもりだけど、どうかした？」

平然と言ってのけるシリウスにはやてはもう唖然とした。この男は、何を言ってるんだ？あんな巨大生物を一人で倒すなんてそんなこと出来る訳がない。そう思い、シリウスを引き留めようと近づこうとした時、バルドがはやての肩を掴む。

はやて「バルドさん！？」

バルド「はやて、大丈夫だって。あいつはあの程度じゃやられねえよ。なんたってあいつは、『夢幻の覇者』だからな」

シリウスは、紺のジーンズのポケットに手を突っ込んだままイノセント?型の母体に悠々と近づく。

シリウス「さて、今回の観客は美しきお嬢様達かな?今から起るのは全て現実、そして、虚なので片時も目を離さずに・・・・では、開幕と行こうか。レッツ、イリュージョン!!」

そう言ってイノセント?型の群れに突っ込む。ポケットに入れてた手を抜き胸の前で合わせる。そして、何かを呟いた。

シリウス「一から二〜へ、二から四へ〜、四から八へ〜、八から十六へ〜、
十六から三十二へ〜、三十二から六十四へ〜〜♪」

それと同時にシリウスが、虚空より次々と現れ、二人、四人と・・・・そして六四人に増えた。

はやて「な、なんやあれ!?シリウス君が増えたで!?」

なのは「幻術!?でもこれって・・・」

フェイト「凄い!皆、魔力量が一緒だ!どれが本物なの!?」

フェイトの疑問にシリウス（６４人）が答えた。

シリウス×６４「此処にいるのは、全て俺であり、俺じゃない。君達に俺の真実が見えるかな?さあ、虫共、制限時間は約2分それまでに俺を見つけられるかな?それじゃ、行くぜ!!」

６４人のシリウスが一斉に突っ込む。それを、撃ち落とすべく銃弾を撃ちまくる。それを、避け一人がイノセント?型を叩き落とす。一人は、一体の周囲に炎弾を出現させそれで囲み、一気に全てを爆発させ?型を炎に包みこんだ。次々とイノセント?型をシリウスは落としていく。母体も子供を助けようとしているが・・・“ホラホラ、俺が本物だよ”、“違う違う、俺が本物だって”、“あいつらは偽物俺が本物だよ”とか言い、弱い魔力弾を撃ち込みつつ周囲を飛び回るシリウスに翻弄される。おちょくられて怒った母体は、背中のハッチを開いた。そこから・・・

――ズドドドドドドドドドドドドドドドッ!!!!!!――

――――――

大量のミサイルがシリウスに向かって射出される。その一つ一つの大きさは、銃弾と同じように握り拳大のサイズで６４人のシリウスに殺到する。あまりの数の質量兵器になのは達は驚いた。

フェイト「ミサイル!?」

はやて「シリウス君、危ない!!」

直撃すれば間違いなく肉塊所か消し炭になってしまうだろう。しかし・・・

シリウス×６４「おお、凄い凄い！こりゃ、危ないねえ～～。・・・・でもね」

シリウス（６４人）はニヤリと笑った。

シリウス×６４「もう、タイムアップだよ」

そう言って指をパチンと鳴らすとミサイルの雨が突然全て爆発した。

シリウス×６４「因みに、２分っていうのは、君の子供が殲滅される時間だよ」

そう、既に、イノセント?型は全て落とされていた。

シリウス×６４「さあ、フィナーレだ！！」

そう言うと、シリウス（６４人）の姿が消え、次の瞬間には母体の全方向を少し離れたところで囲んでいた。

シリウス×６４「奥義、天孤連牙掌！！！」

離れているにも拘らずその場で超高速の連続パンチを放った。しかし、届かない筈の拳は、全て母体を捉え母体を滅多打ちにしていた。全方向からの拳の雨に母体のシールドも役に立たず一瞬で破壊され、正に、タコ殴り状態にされていた。

シリウス「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！！！チェストーーー！！」

最後に６４人全員が拳を振り上げると、母体の胴体に衝撃が走り、打ち上げられた。そして、シリウス（６４人）は同時に魔法陣を展開、詠唱に入った。

シリウス×６４「ラスト！古より来たりし浄化の焔よ、落ちろ！エンシェントノヴァ！！」

打ち上げられた母体よりも遥か上空から焔の光の柱が降り注ぐその数は、合計六十四発。

焔の雨は母体を焼き焦がし、または爆発で吹き飛ばし次々と落ちてくる。そして最後の一発が落ちた瞬間・・・・

――――ゴドオオォォォォォォォォォォォォォン！！！！！――――

巨大な爆発と共に母体は、その焔に焼かれ、完全に塵も残さず消し飛んだ。

それを確認したシリウス（６４人）は、次々に消え、本物だけが残った。

シリウス「之にて、閉幕。なんてね♪」

そんなことを言って笑うのであった。

それを見ていたなのは達は、ビックリを通り越して唖然としていた。

なのは「本当に勝っちゃった・・・・」

フェイト「何、今の出鱈目な攻撃。届かない筈の拳がなんで届くの？」

はやて「それに、最後の攻撃もや・・・・あんなん、見たことないで」

バルド「シリウスが今装備している神威って武器は、ある程度離れていても空間をジャンプして攻撃が届くようになってるんだ」

バルドの説明を聞きながらそれぞれ今の光景に驚いていた。シリウスが勝ったのは嬉しいのだがまさか、本当に一人であの巨大な生物を倒すなんて想像もしていなかった。彼女たちは、此処で改めて彼らの実力を思い知らされた。

シリウス「お～い、皆終わったぞ～」

遠くでシリウスが手を振っている。皆でそこに向かうとはやてがシリウスに詰め寄る。

はやて「シリウス君！あんま無茶せんといてや！肝が冷えたわ！！」

シリウス「おや？心配してくれるのかい？はやては優しいね」

そう言ってはやてに顔を近づけると顔を真っ赤にするはやて。

はやて「なっ／／／／／／！？べっ別に心配なんてしてへんわ！！」

シリウス「照れてるはやて、かわいい～～！」

クラウド「はやて、遊ばれてるぞ」

それに気づいたはやてはハッとなり次の瞬間には怒りに顔を真っ赤にして持ってたデバイスでシリウスに殴りかかる。しかし、シリウスは避けて逃げる。それを追うはやて。

はやて「逃げんなや！！」

シリウス「そう言われて逃げない奴はいないよ～ん♪というか、怒って顔を真っ赤にしてるはやてもまたかわいいね～ククククw」

はやて「ムッキーー！！その口閉じろや！！」

カイン「こっちは終わったぞ――って、何この状況！！？」

そこに、カインも到着したものの目の前で起きてる状況にビックリする。

バルド「ああ、何時ものことだ」

カイン「ああ、何時ものことか・・・」

バルドの言葉にカインも納得する。なのはとフェイトは何のことか分からなくてキョトンとした顔で首を同時に傾げる。それを見たバルドとカインは、

カイン《バルド・・・・何だあのかわいい生き物は？》

バルド《知るか！くっ、一瞬だけドキッとしてしまった》

カイン《俺もだ・・・・。っというか、あの無防備すぎる顔でどれ程の男が撃墜されたのやら》

バルド《まったくだ》

二人でそう念話のやり取りをした後二人に説明する。

バルド「シリウスは人をからかうのが好きなんだよ」

それに納得した二人は、苦笑いしながら鬼ごっこをしている二人を見る。丁度はやてが疲れて肩で息をしている所だった。

はやて「ゼェー、ゼェー、自分、ホンマにすばしっこいな・・・・・・。うち疲れたわ・・・・」

そんなはやてにシリウスが近づく。

シリウス「まあ、はやてもよく頑張ったよ」

そう言ってはやての肩をポンポンと叩く。その瞬間はやての目が光

った。

はやて「あまいでぇーシリウス君！勝負はまだ終わってへんよ！！」

シリウス「何！？クソッ、今のはフェイクっだったのkー「どりゃーー！！」あべしっ！！？」

かくして勝負は、はやての勝利で決まった。チャンチャン♪

バルド「おーい、そろそろじゃれ合いも終わりにしろよ」

シリウス「へいへ～い」

はやて「せやね。今はこれで終わりにしよか」

そう言ってじゃれ合い（？）をやめて此方に戻って来る。何だかんだでいいコンビである。

カイン「こっちは終わったことだし、次はロイド達の所に急ぐぞ」

バルド「まあ、向こうは問題ないだろう。何たって剣聖が二人もいるんだからな」

なのは「剣聖？」

ティファ「はい。ロイドさんとセフィリアさんが現在、剣聖の称号を貰っているんです」

フェイト「そんなに凄い人だったんだ・・・」

カイン「兎に角、大丈夫だと思うけど俺達も行くぞ！」

一同「おう（はい）（うん）！！！」

そして、なのは達は急いでクラガナンに向かうのだった。

## 第八話（後書き）

作者「今回は、シリウス、カイン無双モードと敵勢力の名前が判明しました」

カイン「シリウス強すぎだろ。６４人でフルボッコって・・・・」

作者「作った私自身びっくりしてます・・・・」

なのは「次回でこの戦闘も終わりだよね？」

作者「そうなる予定です」

カイン「読んで下さった、読者の皆さん、これからも宜しくお願いします」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第九話（前書き）

作者「いよいよこの戦闘も終わりです」

カイン「長かったな」

クラウド「なあ作者、前回カインがディバインバスター使ってるけどなんで？」

作者「えっと、オリ設定ですが、元々カインがなのはの技を使っていて、それを偶然見かけた先人が、それを基にレイジングハートにカインの技を組み込み、それが偶然にもなのはが手に入れたという感じです。分かりにくい？すみませんｏｒｚ」

フェイト「つまり、なのはの使っているディバインバスターとかはカインの技なの？」

作者「派生だから威力ダウンしてるけどね。あれ其の侭組み込んだらデバイスがイカレル」

バルド「変なもん付け加えるなよ・・・」

作者「いいじゃん！二次なんだから！！ちょこっと設定変えてもいいじゃん！！」

ロイド「駄々を捏ねるなよ・・・」

カイン「作者がジタバタしてますが、ほっといて本編をどうぞ！！」

# 第九話

航空機ＳＩＤＥ

現在機内は混乱に陥っていた。何故なら、先ほど出撃したイノセント達の反応が次々と消えていったからである。並みの魔導士では歯が立たないほどの力を持つイノセントが易々と落されれば混乱するのも当たり前だろう。

司令「落ち着け！！現在何が起きてるのか直ぐに調べろ！！」

兵士１「司令！イノセント？型の所に魔導士部隊を確認。所属は・・・機動六課です！」

司令「何だそれは？」

兵士２「最近設立した新しい部隊の様です。情報によれば部隊長の八神はやてなる者はＳＳ＋の実力者である様です。更に他の隊長達もＳ＋の管理局の白い悪魔こと高町なのはやＳ－ランクのフェイト・Ｔ・ハラオウン等優秀な人材が多数いるもようです」

その言葉に周囲の兵士達は騒ぎ始めた。まさかここにきて作戦の大

きな障害が現れることは想像できなかった。

司令「くそっ!!ここに来て作戦を失敗に終わらすわけにはいかん!!イノセント?型に街の破壊を最優先にさせろ!」

通信士「はっ!・・・・っ!?司令大変です!!イノセント?型の反応、全てロストしました!!」

司令「何!?映像を出せ今直ぐにだ!」

通信士「は、はい!!」

慌ててスクリーンを出すとそこには、天使がいた。

兵士1「て、天使・・・・」

皆その美しき姿に見惚れる。その天使の周囲に仲間と思われる人が数人いた。

兵士2「何なんだあの天使は!?もしやあの天使がイノセント?型を倒したというのか!?」

それを見ていた司令がある言葉を零した。

司令「『時の英雄』・・・・・」

その言葉に周りの兵士が驚いた顔をする。

通信士「まさか・・・・あれが・・・！？」

司令「聞いたことがある。その者、赤き衣と白き衣を纏う聖なる力持ちし者也。その身に生える翼、穢れを知らず、その者に集うは7人の英傑、彼ら、時が来しとき災い起こりし街に現れるだろう、その圧倒的な力を持って悪を滅する、人は彼らをこう呼ぶ、時の英雄、又の名を剣聖九神将と・・・」

まさか、こうも早く噂に聞く英雄達に会えるとは想像もしていなかった。兵士達にも戸惑いの色が浮かぶ。

司令「だが、奴らとて人間には違いない。鉛玉一つで奴らも死ぬ。総員、対空システムを起動しろ！奴らが此方に近づき次第攻撃を開始する」

一同「了解！！」

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――

ロイド達は前方を飛んでいる航空機に近づこうとする。すると・・・
・
ーーーズダダダダダダダダダダダダ！！！ーーーーー

一同「っ！！？」

突然此方に向かって航空機から対空砲火が来る。それを慌てて散開して回避する。

ロイド「あ、あっぶねー」

コレット「びっくりしたね」

二人は会話をしつつ警戒を強める。

ロイド「コレット、あれの対空兵器の数見た感じどれくらいある？」

コレット「う～んとね・・・だいたい２０門くらいあるかな？」

ロイド「ってことは、多く見積もって５０門くらいはあるか・・・」

そう考えたロイドは、シグナム達に連絡する。

ロイド「皆、此処は俺とコレットが引き受ける」

シグナム「な!?何を言ってるんだ、我らも戦うぞ!!」

ロイド「いや、皆にはカイン達を呼んで来て欲しい。流石に此の侭だときついからな」

エリオ「大丈夫なんですか?」

コレット「皆が来るまでは何とか頑張ってみるね」

スバル「無理をしないでくださいね」

そう言ってシグナム達はカイン達を呼ぶために移動を始めた。

ロイド「さて、コレット行くぜ!!」

コレット「うん!!」

二人は航空機に向かって突撃を開始する。それを迎え撃つように物凄い数の弾幕が張られる。二人は、それを避けながら接近する。

ロイド「まずは、対空火器を何とかするぞ！くらえ、極・魔神剣！！」

剣を振り上げ巨大な衝撃波を放つ。それは、対空砲の一つに当たり、爆発、破壊に成功する。

コレット「レイントラスト！！」

コレットもチャクラムを投げて対空火器を斬り裂き破壊する。

ロイド「うおおおお！！魔神連牙斬！！！」

三つの衝撃波を放ちそれぞれが対空砲を破壊、そこに技の硬直で動きが止まったロイドに周りの対空砲が攻撃を集中する。それを、硬直が解けたロイドは、その場で二つの剣を振り、目にも止まらぬ速さで向かってくる銃弾の雨を弾き飛ばした。

コレット「聖なる翼よ、此処に集えて神の御心を示さん、エンジェルフェザー！！！」

コレットの翼から三つの光輪が飛びそれは、それぞれが対空火器を破壊、其の侭勢いは止まらず次々とバルカンを破壊していった。

次々と破壊される対空火器にブリッジでは、混乱していた。

兵士１「第４番、第９番大破！」

兵士２「第１８番、第１２番、第１６番共に大破、駄目です！！」

司令「おのれ、之ほどまでに強いとは！！」

思わず爪を噛む。たった二人にいいように翻弄されて機体に搭載されている対空砲がドンドン減っていく。

司令「仕方が無い。対空ミサイル機動！！」

兵士１「了解！！」

機体の背中にあるハッチが開く。

兵士１「ターゲット策敵、ロックオン完了！ＳＡＭ発射！！」

次々とミサイルが射出されロイドとコレットに殺到する。

司令「これでどうだ・・・？」

---

コレット「ロイド！ミサイルだよ！！」

ロイド「分かってる！兎に角撃ち負かすぞ！！」

二人に向かってミサイルが雨の様に殺到する。二人は互いの手を握る。そして・・・・

ロ・コ「「複合奥義、スターダストレイン！！！」」

手を天高く上げると突如上空から流星が降り注ぎミサイルを次々に破壊する。そして、全て破壊し尽くした。そこに・・・

カイン「ロイド、コレット！！」

イノセント？型と決着をつけたカイン達がシグナム達に連れられて

やって来た。

なのは「ロイド君、コレットちゃん大丈夫？怪我してない？」

ロイド「おう！大丈夫だぜ」

顔に煤を少し付けたままのロイドが答える。

カイン「それにしても、ミサイルまで撃って来るとはな・・・」

バルド「まあ、何にしてもこれ以上は好き勝手にさせねえよ」

そう言って航空機を見る。すると、

司令『まさか、ミサイルまで撃ち落とすとは中々面白いな』

一同「っ！？」

航空機から自分達に通信が入った。声からして４０代だろう。

カイン「・・・お前がその航空機の司令官か？」

司令『フフフ、まあそんなところだ』

フェイト「私達は管理局の者です。今すぐ武装解除をしてください。今ならまだ弁明の余地があります」

司令『くだらん』

フェイトの呼びかけを一蹴する司令官と言う男。

司令「そもそも、我らは、貴様ら管理局を潰すためにここに来たのだ。それでなぜ降伏せねばならん?」

ロイド「管理局を潰すだって!?そんなことしたら今のこの世界のバランスが崩れるだろ!!」

司令『ほお、流石はロイド・アーヴィング。そのことに関しては詳しいか・・・・』

ロイド「なんであんた、俺の名前を知ってるんだ?」

司令『何故?フッ、知らぬ者などいるのか?知っているぞ。お前達が次元世界の放浪者にして次元世界の救世主と呼ばれている『時の英雄』だと言うことはな』

六課一同「えっ!!?」

それに六課陣が驚いた様子でロイド達を見た。

――――――――――――――――――――――――――――――――

なのはＳＩＤＥ

ロイド「管理局を潰すだって！？そんなことしたら今のこの世界のバランスが崩れるだろ！！」

ロイド君が驚いた様子で今の言葉に返答する。世界のバランスが崩れる？一体どういうこと？

司令『ほお、流石はロイド・アーヴィング。そのことに関しては詳しいか・・・・』

司令官って言ってた人がどうしてロイド君の名前を知ってるの？彼も驚いているみたい。

司令『何故？フッ、知らぬ者などいるのか？知っているぞ。お前達が次元世界の放浪者にして次元世界の救世主と呼ばれている『時の英雄』だと言うことはな』

六課陣「えっ！！？」

ロイド君達が『時の英雄』！？じゃ、もしかしてあの男達が警戒してる人達ってロイド君達のことなの！？

なのは「カイン君、今の話は本当なの！？」

隣にいるカイン君に詰め寄る。するとカイン君は、頷いてくれた。

カイン「ああそうだ。俺達が『時の英雄』なんてご大層な名で次元世界でそう呼ばれているもんだよ」

まさか自分の身近な人がそんな凄い人だなんて思ってみなかった。でも、納得はできた。カイン君は『剣帝』って呼ばれてるし、ロイド君達も物凄く強いもん。彼らならそう呼ばれても不思議じゃない。

ロイド「俺達は、そんな凄い存在じゃねえ」

そう考えてるとロイド君がそう答えた。

司令『ほお、では何というのだ？』

ロイド「俺達は、ただの偽善者さ。英雄でも何でもない」

司令『そうか、では、偽善者よ。お前達が助けている管理局と言うのはどういう存在か知ってるか？』

ロイド「？秩序とか人々を守る組織だろう？」

そう、管理局は法と秩序を守る組織。この人は、何が言いたいの？

司令『そうか・・・では、お前達が救おうとしていた世界に現れ傍若無人に暴れ、お前達にも襲いかかって来たのもその管理局だというのは知ってるか？』

なのは「え・・・・」

思わず声が漏れた。守るべき世界で暴れたってどういうこと！？

フェイト「そんなことある訳無い！！管理局は法と秩序を守る組織だ。出鱈目を言うな！！お前達こそ秩序を乱す犯罪者だ！！」

フェイトちゃんが怒って言い返す。でも本当に一体どういうことなの？私の頭の中は、その事ばかりで一杯になった。

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

フェイトＳＩＤＥ

フェイト「そんなことある訳無い！！管理局は法と秩序を守る組織だ出鱈目を言うな！！お前達こそ秩序を乱す犯罪者だ！！」

適当なことを言って、許せない！！私達がいるこの管理局はそんなことは絶対にしない。きっと何かの間違いだ！！

司令『ほお、娘よ・・・・いや、フェイト・Ｔ・ハラオウンよ本当にそう思うか？』

フェイト「な、何で私の名前を・・・・？」

司令『我らの組織がその程度のことを知らないと思うか？ならば、そこの男に聞けばいい全ては事実だということを・・・・』

フェイト「くっ・・・バルド、違うよね！？管理局がそんな事をする訳無いよね！？」

否定してほしかった。私達がいるこの管理局が本来やるべきことと

逆のことをするなんて信じたくなかった。けど・・・・

バルド「ああ、そうだ。俺達の前に現れて襲いかかって来たのは間違いなく管理局だ」

彼の口からそんな言葉が出た。

フェイト「嘘・・・・」

バルド「いや、事実だ。俺達が色々な世界を回ってる時にな管理局と名乗る組織がロストギア不正所持の罪で逮捕するなんて言ってきやがった。結局、逃げ切ることが出来たんだが・・・その後クラウド達の故郷の世界にも現れて、今度は質量兵器不正所持とか言って攻撃してきたんだよ。さすがにその時は、守るために撃退したがな。その後も何度か出会う度に交戦した」

エリオ「そんな・・・・・」

司令『どうだ？貴様らが守っているのはそのような腐敗した組織だ。そのような組織など滅び、新たに世界を守る組織を設立した方が良いと思わないか？』

ロイド「それがあんた達だって言いたいのか？」

司令『ククク、そうだ。我らプロヴィデンス（神の意志）は、全ての民を守り導くことが出来る唯一無二の正義の組織だ』

その言葉にロイドがピクリと反応した。

司令『どうだ?お前達もその組織を滅ぼして我ら正義の組織に仕えないか?』

ロイド達が皆無言になる。少しの間の後ロイドが答えた。

ロイド「・・・・・・・・ふざけるな」

司令『何?』

ロイド「ふざけるなっ!!!正義なんて言葉チャラチャラ口にするなっ!!!!!!」

司令『っ!!?』

あんなにロイドが怒る姿初めて見た。彼から物凄いオーラが出てる。あの温厚なロイドは何処に行ったの!?彼は何が気に入らなかったんだろう。

ロイド「俺は、その言葉が一番大嫌いなんだよ!今あんたらがしていることは何だ!罪のない市民にまで危害を加えてるじゃないか。そんな奴らが正義正義って言うんじゃねえ!!お前等こそ平和な世界を崩す屑だ!!!!!」

コレット「そうだよ。今あなた達がやってることは、侵略以外の何物でもない。そんなこと言っても理解なんてできない！全ての民を守るって言いながらその民を襲うなんて私は許せない！！！」

あの優しいコレットまで怒ってくれてる。周りのバルド達も頷いてくれている。

司令『わ、我らに仕えず、その様な腐敗した組織を助けると言うのか！？』

ロイド「うるせー！！目の前で苦しんでる人達がいるのに救えなくて世界なんて救えっかよ！！腐敗してようが俺達に襲いかかって来ようが困ってる奴らは全て助ける。それが俺達だ！！！」

バルド「だな。俺達の目の前で助けを求める奴は全て救う。それが俺達の使命だ！」

シリウス「久々にいい言葉を聞いたね。それじゃ、いっちょやりますか！！」

カイン「侵略者のお前等プロヴィデンスに告ぐ俺達はお前等を壊滅させる。覚悟しろ！！」

フェイト「皆・・・・」

あんなこと言われたのに私達を助けてくれるのが嬉しかった。全然

知らなかったとはいえ、私達管理局がしたことは到底許されることじゃない。でも、彼らは、そんな私達を助けてくれる。

バルド「心配すんなフェイト。俺達はお前等を見捨てたりなんかしねえよ」

バルドが笑いかけてくる。なら私達も戦おう！私達のことは私たち自身で決めなきゃ！！

フェイト「なのは、はやて戦おう！」

な・は「「フェイトちゃん・・・」」

フェイト「確かに管理局がやったことは許されないことだ。けど、バルド達はそんな私達を助けてくれる。なら、私達が変えよう、そしてあの組織から私達の街を守るんだ！！」

なのは「フェイトちゃん・・・うん！そうだね！！」

はやて「せやね、うちらが動けばいいんや。うちらの問題はうちらが片付ける。あんたらの好きにはさせへん！！皆それでええな！！」

六課陣「はい（おお）！！」

そうだ、私達が動かないといけないだ。腐敗したのなら私達で元に戻せばいい。そのためにも・・・あの組織から街を守る！！！

フェイトSIDE　OUT

――――――――――――――――――――――――――――――――――

司令「交渉は決裂か・・・・・いいだろう、それならば貴様らの力で街を救ってみるがいい！！！！」

そう言って通信を切った。

司令「バラウール起動、目標・・・・クラガナン都心部！！」

兵士1「了解！バラウール起動、照準セット、ターゲット、ロックオン！！」

司令「撃てーーーーーーーーーーー！！！」

航空機の背にあった砲台から白い閃光が街に向かって放たれた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――

司令『交渉は決裂か・・・・いいだろう、それならば貴様らの力で街を救ってみるがいい！！！！』

そう言って司令官が通信を切る。

ロイド「行くぜ皆！！街を守るんだ！！」

一同「おう！！」

その時、航空機の背が開きそこから大きな砲台が出る。その照準は街を向いていた。

なのは「街を狙ってる！？」

フェイト「止めなきゃ！！」

そう言って六課陣が向かおうとしたところカインが手で制する。

なのは「カイン君！？」

カイン「大丈夫だ。あそこにはガルドにセフィリアがいる。何も心配することは無い」

シグナム「何を言ってるんだ!我らの船すら一撃で沈めた攻撃だぞ、そんなものを防ぐと言うのか?」

カイン「あいつなら出来るぞ。何たって現魔界最強の戦士にして『不動の将軍』だからな」

そうこうしてるうちに砲台から白い閃光が撃ち出された。六課陣は街が吹き飛ぶことを想像していたが・・・・・・

ガルド「原子の力よ今此処にかの物を具現せよ、全てを防ぐ最強の盾よ『イージス(矛盾の盾)』!!!」

ガルドが右手を構えると街の上空に巨大な盾が現れ砲撃を受け止める。暫しの拮抗の後、砲撃は霧散した。その盾には傷一つ付いていなかった。

はやて「うそやろ!?あの砲撃を受けて傷一つ付いてへん!?」

六課陣が驚いた。まさか、あれを受けきるほどの防御が出来るなんて想像だにしていないのだから。ビルの屋上にガルドとセフィリアが立っていた。

ガルド「お前達の覚悟しかと聞き入れた」

セフィリア「これより私達ヴァルハラ王国はあなた達、機動六課を支援します」

そう言って笑いかける二人だった。

クラウド「おっと、俺達グランディオンも機動六課を支援するぜ！」

セフィリア「改めて皆よろしくね」

クラウド達も笑いかける。

ガルド「さて・・・街には一撃も通させん！『イージス・ファランクスシフト』！！！」

ガルドの前に展開されていたイージスが複数個現れ、それが街を包み込むように展開された。そこに航空機が砲撃、ミサイルを撃ちまくるもそれは全てイージスを傷つけることなく霧散した。

カイン「さて、向こうは大丈夫だ。皆行くぞ！！」

ロイド一同「おう！！」

ロイド達が一斉に航空機に向かうそれに続いてなのは達も追う。航

空機は、ロイド達を迎え撃つために対空砲火とミサイルで攻撃する。

クラウド「ティファ！やるぞ！！」

ティファ「了解・・・」

二人の背中に着いていた羽が外れていく。それは意志を持つように二人の周囲に展開される。そして全て外れた背から赤と青色の粒子状の羽が現れた。

クラウド「ターゲット確認」

ティファ「マルチロック完了」

ク・ティ「「ダブル・フルバースト！！」」

持っている銃と羽と腰の砲台から一斉にビームが撃ち出される。数十発のビームは全てミサイルを捉え撃ち抜き其の侭、敵航空機の対空砲を破壊した。

兵士2「対空兵器大破！！」

司令「残ってるイノセント?型を出せ！！それと、対空砲再度展開しろ！！」

兵士2「了解!!」

イノセント?型がロイド達に襲いかかる。それを彼らは次々落としていく。なのは達も負けてはいない。ロイド達に援護されながらもイノセント?型を撃墜していく。飛び交う銃弾をロイド達は弾き飛ばしながら航空機に接近する。ロイドは斬撃を、カインは雷撃、バルドは炎弾、シリウスも幾つもの鬼火を撃ち込み砲台を破壊していく。

司令「何をしている!さっさと落とせ!!」

兵士1「対空砲全て大破!駄目です!!」

司令「くそ!バラウール起動!奴らを消し飛ばせ!!」

バラウールがロイド達に照準を合わせる。それに気づいたなのはは、皆を呼んだ。

なのは「皆気をつけて!砲台がこっちを向いている!!」

はやて「なんやて!?」

イノセント?型に囲まれ身動きが取れない状態で撃たれたら一溜まりもない慌てるなのは達の前にロイドが立つ。

ロイド「皆には指一本触れさせない！！行くぞ、エターナルソード、エレメントソード！！」

エターナル［承知した・・・］

エレメント［御意・・・］

ロイドの左手の甲にあるエクスフィアと背中の翼が光り輝く。そして、二つの剣もそれと同時に輝きだした。あまりの眩しさに目を細めるなのは達。その時、チャージが完了したバラウールが此方に向かって撃ってきた。

ロイド「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

剣を振り下ろして巨大な砲撃を受け止めるロイド。その背にある羽がさらに輝きを増す。

ロイド「秘奥義、蒼破裂光衝破斬！！！」

剣から巨大な虹色の閃光が撃ち出される。それは易々とバラウールの砲撃を飲み込み撃ち負かした。そのまま勢いは止まらず航空機に向かう航空機はゲシュマイディッヒ・パンッツァーを起動させ耐えようとした、しかし・・・その防御壁は長くは持たなかった。

兵士３「ゲシュマイディッヒ・パンツァー出力低下！もう持ちません！！」

司令「まさか、我らが、我らが負けると言うのか！！」

ロイド「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

勢いは衰えずついに防御壁は破られ虹色の光の奔流に航空機は飲み込まれた。閃光が消えた時には、航空機は何処にも無かった。

―――――――――――――――――――――――――――――――

戦いが終わりロイド達と六課陣は怪我人の救助に動いた。怪我人は地上部隊の迅速な行動のお陰で重軽症者は魔導士のみで民間人への被害はなく、死者もでなかった。空戦魔導士達も航行艦の乗員も無事だったが、艦長の男は行方が分からなくなっていた。

ロイド「ほら、頑張れ。後少しだ」

陸士「うう、すみません・・・」

ロイド「何言ってんだ困った時はお互い様だよ」

ロイドは、怪我をして倒れている魔導士を助け起こして肩を貸し避難所に連れていく。そこには、六課と本局から来た局員たちがいて怪我人を治療していた。

ロイド「シャマル！怪我人を見つけてきた。こっちも頼む！！」

シャマル「は、はい！！今行きます」

シャマルは怪我人の所に行き治療を始める。

シャマル「ロイド君、少し休んだ方がいいわよ」

ロイド「いや、まだ怪我をしてる人達がいるかもしれないもう一回探しに行くよ」

ザフィーラ「ロイド、少し休んだ方がいいぞ、お前は先ほどの戦いで疲れているのだから後は我らに任せてくれ」

シャマルとザフィーラが言うとおり、ロイドは先ほどの戦いから一度も休息を取らずに救助を続けていた。さすがにその顔も疲労の色が見える。

ロイド「大丈夫だって。この位平気さ」

何てことは無いと言うロイド。そこにコレットがやって来る。

コレット「ロイド、無茶しないで・・・。倒れられたら私、怒るよ・・・」

ロイド「うっ・・・・」

コレットは今にも泣きそうな顔でロイドを見る。それを見たロイドは、言葉が詰まって

ロイド「はあ～～、分かったよ。けど少し休んだらまた行くからな」

コレット「うんそれでいいよ♪」

そう答えるとコレットはニコニコする。それを見ていたシャマルとザフィーラは・・・・

シャマル「愛ね・・・・」

ザフィーラ「愛だな・・・・」

二人でそう言った。

コレット「／／／／／／」

コレットは急に恥ずかしくなって真っ赤な顔になって俯いた。ロイドも恥ずかしくなり頬を掻いて明後日の方を向くのであった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

バルド「フレイムヒール」

バルドの手から暖かな光が出て怪我をしている魔導士を回復させる。今バルドは、フェイト、エリオ、キャロと共に避難所に運ばれる怪我人の手当てをしていた。

バルド「取り合えず、こんなもんだろう後は病院で治療を受けた方がいいな」

陸士「すみません。ありがとうございます」

バルド「なに、気にするな」

そう言ってその場を他の者に任せ去る。すでに辺りは暗くなってきた。急いで街に倒れている人を見つけないとヤバそうだ。と彼は考える。

フェイト「バルド！」

そこに、フェイト、エリオ、キャロがやって来る。彼女達も簡易的な治療は出来ると言うので頼んでいたが如何やら終わったようだ。彼女らを見たバルドは何かに気づいて3人に言った。

バルド「フェイト、エリオ、キャロお前等はこれから少し休め」

フェイト「え？如何して？早くしないと日が暮れて捜索が困難になるよ？私達は大丈夫だから・・・」

バルド「何言ってんだ。気づいてるか？お前ら今体震えてんぞ」

三人「「「え？」」」

フェイト達は、自分の手を見ると震えているのが分かった。

フェイト「如何して・・・？」

バルド「しょうがないな・・・三人ともそこに座りな」

言われたとおりに座るとバルドはそんな三人を優しく抱きしめた。

フェイト「バ、バルド／／／／！？」

エ・キ「「バルドさん！？」」

バルド「怖かったろ？」

困惑する三人にバルドはそう言った。

バルド「無理もない。たった一発で自分が死ぬかもしれない銃弾が飛び交うんだそんな中でお前達はよく頑張った。緊張が解けたせいで今になって体が恐怖に襲われてるだけだよ。でももう大丈夫だ」

大丈夫、大丈夫と囁くバルドに包まれて三人の震えは少しずつ治まっていった。程なくして震えが止まったフェイト達から離れる。離れた時にちょっと残念そうな顔をしていたが・・・・

バルド「さて、お前達は少し休んでから捜索を始めてくれ俺は先に行く」

そう言って彼女達の前から去っていった。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

カイン「ヒールウィンド」

優しい風が吹き抜けて傷ついた魔導士達を癒す。

カイン「ふう～、此処はこれで全員か・・・・」

額の汗を拭いながらそう呟く。そして、街の方を見る。

カイン「しっかし、随分とやられたな・・・・」

カインの目の前には、崩壊した街が見える。航空機一機で此処までの損害を受けたのは誰も予想などしていなかっただろう。

なのは「カイン君・・・」

その声に振り向くとそこにはなのはが立っていた。

カイン「なのはか・・・・どうした?」

なのは「えっと、この後のことは本部の方が引き継ぐって言ってたから皆に六課に帰ることを伝えたいんだけどロイド君達ってどこにいるかなまだ連絡先を聞いてなかったから何処にいるのか分からなくて・・・・」

カイン「そういや、教えていなかったな。分かった、皆には俺から伝える。そういやはやては何処に行ったんだ?」

なのは「はやてちゃんならシリウス君と一緒に今回の報告と救助に行ったよ」

カイン「げっ!シリウスが行ったのかよ・・・・。あいつへんなこと言わないよな?」

なのは「にゃはは・・・、大丈夫じゃないかな?」

そう二人で話していると、向こうではやてとシリウスの声が聞こえた。

はやて「こら!シリウス君、今から救助に行くで!」

シリウス「え~~!?さっき報告に行ってクタクタなのに!?少し休ませてよ!」

はやて「そんな悠長なこと言ってられへんで。まだ時間があるんや

から、ほら行くで！」

シリウス「鬼や！仕事の鬼や！！その心の狭さが胸にいっｔ「余計なお世話や！！」ハリセンッ！！？」

スパーンという音が鳴り響いた後何か引きずる音が聞こえた。

カイン「・・・・・・・・・・・仲良くやってるようだな・・・・」

なのは「にゃははは・・・そうみたいだね・・・・」

そう言い終わるとなのはは、突然カインにしがみ付いた。

カイン「なのは？」

なのは「ごめんね、ちょっとでいいからこのままでいさせて」

そう言うなのはの体震えているのに気づいたカインは、優しくなのはを抱きしめてあげた。

カイン（なのは達を守ろう。この先何が起ころうとも・・・・俺の命が尽きるまで・・・・）

彼は固く誓うのであった。

それぞれがこれから起こるであろう戦いのことを思い浮かべながらその日の夜が近づいていく。そんな大事件が起きてもいつもと変わらず空は彼らを見降ろしていた。

## 第九話（後書き）

作者「よくよく考えたらなのは達って結構な修羅場潜ってるからこれぐらいで怖がるのだろうか？と今更気づいた作者です・・・ｏｒｚ」

ロイド「いやいや、誰でも怖いだろこの状況」

カイン「ってか、ロイドとガルド強っ！それにどうすんだよ！敵から局の状態暴露させてんじゃん」

作者「反省はしているが後悔はしていない！！」

シリウス「イージスを複数召喚って・・・最強じゃん」

作者「いや～～、気づいたらこうなってた」

クラウド「次回からどうすんだよ？」

作者「問題ないっす・・・たぶん」

カイン「不安だ・・・・」

作者「さて、オリ技説明です。極・魔神剣は前回の魔神剣・双牙とほぼ同じで単発以外は変わりません。また、秘奥義の蒼破裂光衝破斬は、エターナルソードとエレメンタルソードを同時に振りおろしてそこから強力な魔力の奔流を撃ち出す技です。ＦＡＴＥのセイバーのエクスカリバーの魔力の奔流の三倍の大きさくらいです。」

ガルド「でかいな」

作者「それぐらいの方がいいかと思ったのですが・・・ダメすか？」

カイン「どうだろね？次回は、つかの間の休息だな」

作者「今後ともダメ作者ことテッテルを宜しくお願いします」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

## 追加キャラ紹介（前書き）

最近モンハン３ｒｄにハマっていて執筆速度が低速気味な作者ことテッテルです。

いや～やっぱモンハンは面白いですね。新モンスターのジンオウガ・・・速いっすね～。ナルガ並みっすね、まあもう慣れましたけど。因みに作者は双剣とガンランスが好きです。双剣・・・乱舞、鬼人強化再び乱舞。ガンランス・・・フルバースト、竜撃砲再びフルバースト、フルバーストフルバーストフルバースト・・・・フハハハハハハハハハ！！！！我が世の春がきｒｙ）

すみません、少しテンションがハイになってました。でも、フルバーストのお陰で部位破壊楽なんですよ。数回ぶつけるだけで破壊できるし（尻尾以外・・・たぶん）。今じゃ前はめっさ嫌いだった顎竜さん（ウラガンギン）も楽に相手できますし、ホントガンランスさまさまですね。

因みに何で顎竜が嫌いかというと作者が使用する武器は接近武器が殆どで何時も顎とかに弾かれていたからです。ああ～～忌々しいあのシャクレが！！

さて長くなりましたが追加キャラの紹介です。ロイド達の仲間は何とあれです。
かなり改造されていますがそこはスルーしてください。

# 追加キャラ紹介

名前　アル（アカムトルム）

全長　３５メートル

全高　１２メートル

ロイドが飼っているモンスターの一匹で飛竜種に属する巨大な生物。ロイド達が旅をしていた時に傷ついたアルを見つけ介抱した結果、懐かれて一緒に生活している。変異種なのか背中には、大きな翼が生えている（ミラバルに似た大きな翼）。現在は、グランディオンでウル（ウカムルバス）、レイ（リオレウス希少種）、レン（リオレイア希少種）と生活しているが、今回、召集されることとなった。普段は、フリードの様なサイズでロイドにくっついているが戦闘になると本性をむき出しにし巨大化、その戦闘能力は伝説の古龍種に匹敵するといわれる。必殺技は、口から衝撃波を出して前方の敵を障害物ごと破壊する『ソニックブラスト・オメガ』、灼熱の炎で周囲一帯を焼き尽くす『オメガフレア』である。ロイド達と過ごした為、人語が多少は理解できる。ロイドが大好きで（主として又は家族として）ブラッシングして貰った時、余りの嬉しさに誤って食べてしまうくらいである。基本的にロイドに忠実で仲間を家族の様に大切にしていて傷つける者が居ようものなら完膚なきまでに叩き潰そうとする。固有フィールド『灼熱の決戦場』をもつ。別名『全てを壊滅させる黒き神』と呼ばれている。

固有スキル（又はフィールド）

灼熱の決戦場

火山と溶岩に囲まれた灼熱の巨大なフィールドを発生させる固有フィールド。場所が空だろうと海だろうと強制的に発動させることが出来る。

？？？

名前　ウル（ウカムルバス）

全長　３８メートル

全高　１５メートル

コレットが飼っているモンスターの一匹でアルと同じく飛竜種に属する巨大な生物。アル同様傷ついていた所を助けられてコレットの優しさに触れ彼女に懐いた。本当は、寂しがりやな性格で常に誰かと一緒にいたがる。現在は、アル達と生活していたが、今回、招集されることとなった。アル同様変異種なのか背中に、大きな翼がある（ミラルーツに似た大きな翼）。普段は、アルと同じく体を小さくしてコレットにくっついていて戦闘になれば巨大化し敵を粉砕する。必殺技は超低温の水流を超圧縮して放つ『アブソリュートブラスト・テオ』と大氷塊を口から吐くブレスに載せて撃ち出す『アブソリュートゼログランド』である。アル同様人語が少し理解できる。基本的にコレットの言うことをよく聞き、仲間は家族と考えているため傷つけようものなら全力で排除する。固有フィールド『絶対零

度の決戦場』をもつ。別名『全てを粉砕する白き神』と呼ばれる。

固有スキル（又はフィールド）

絶対零度の決戦場

巨大な氷山と雪に囲まれた絶対零度の巨大なフィールドを発生させる。場所が何処だろうと強制発動させることが出来る。

???

名前　レイ（リオレウス希少種）

体長　２０メートル

全高　６メートル

ロイドが飼っているもう一匹の銀の体を持つ飛竜種のモンスター。まだ子供の時に他の生物に襲われていた時に助けられて以来ロイドが世話をしている。それから、成長し大人になったのだが、完全に懐いたため今も一緒である。人語も理解でき、現在は、アル達と一緒に居るが今回招集されることとなった。体が他のリオレウスよりもかなり堅く銃弾程度は軽く弾いてしまう。皮膜も同じく強靭で鋼の様に堅い（でも飛べる）。移動速度が速く、飛行時間もかなり長い。爪に強力な毒がありそれを使って標的を追い詰める。必殺技は、太陽の様な超高温の火球を空から地面に撃ち込み全てを焼き尽くす『ソルフレア』、自身を炎で包んで突撃する『ドラゴンダイブ』を使う。ロイドの言うことを最優先に実行し、仲間を傷つける輩がい

れば容赦なく焼き尽くす。レンとは仲良しである。別名『陽光統べる空の王』と呼ばれている。

固有スキル

???

???

名前　レン（リオレイア希少種）

全長　22メートル

全高　7メートル

コレットが飼っているもう一匹の金の体を持つ飛竜種のモンスター。人に襲われ傷ついていた所をレイに見つけられロイド達に助けられる。初めはロイド達を警戒していたがレイとロイドそしてコレット達の優しさに触れ心を許すようになり、それからはコレットにくっついている。ロイド達と一緒に生活していたため人語を理解できるようになり少しだけ話せる。体が他のリオレイアよりも堅く銃弾程度は軽く弾いてしまう。皮膜も同じく強靭で鋼の様に堅い（でも飛べる）。移動速度が速く、飛行時間もかなり長い。背中全体と尾に強力な毒があり、それを振り回して相手を追い詰める。必殺技は月の様な輝きを持った火球を空から地面に撃ち込み全てを焼き尽くす『ルナフレア』、自身を炎で包んで突撃する『ドラゴンダイブ』を使う。コレットの言うことを最優先に実行し、仲間を守るために敵対する者は徹底的に破壊する。レイとは仲良しである。別名『月光統べる陸の女王』と呼ばれている。

固有スキル

？？？

？？？

## 追加キャラ紹介（後書き）

やってしまった感がある・・・ｏｒｚ

べ、別に好きなモンスターだから出してみたかったって言うんじゃないんだからね！！

改造しすぎ？気にしないでください。

次回もお楽しみください

# 第十話（前書き）

作者「今回、アル達が登場です」

バルド「無双キャラならぬ無双モンスター出すなよ」

作者「いいだよ！！」

カイン「良いのか？」

作者「そんな訳で（どんな訳だよ！）第十話です。ではどうぞ！！」

# 第十話

あの戦いから数日がたった。

朝、フェイトがヴィヴィオと歩いていると前方にバルドがいた。

フェイト「あ、バルド！おはよう！」

大きな声でバルドを呼ぶと向こうも気づいてこっちにやって来た。

バルド「おお、おはよう、フェイト。ん？その子は？」

フェイトと一緒にいるヴィヴィオに視線を向ける。

フェイト「この子はヴィヴィオって言うんだ。ほらヴィヴィオ、バルドに挨拶して」

ヴィヴィオ「初めまして、ヴィヴィオです！」

ペコリと行儀よく頭を下げて挨拶するヴィヴィオ。それを見てバル

ドは、微笑みながら、ヴィヴィオの頭を撫でる。

バルド「ヴィヴィオか。俺はバルドって言うんだ、よろしくな」

撫でられて嬉しそうに目を細めるヴィヴィオ。それから、軽く会話をして三人で食堂に向かった。

――――――――――――――――――――

――――――――――――

～～食堂～～

食堂に着いてそれぞれ食べる物を選んで座る場所を探しているとスバル達ＦＷ陣がいるのを見つける。

バルド「おはよう皆、此処座っていいか？」

スバル「あ、おはようございます！！」

ＦＷ陣はそれぞれバルド、フェイト、ヴィヴィオの挨拶をして、三人が座れるように席を少しずらす。そこに礼を言ってから座ってＦ

W陣と談笑しながら朝飯を食べる。

エリオ「バルドさんの、戦闘スタイルってどんな感じなんですか？」

バルド「ん？そーだなー、フェイトと同じで俺もスピードタイプかな」

キャロ「そうなんですか？」

フェイト「でも、高速移動しながらパワーでゴリ押しするタイプだよね」

ティアナ「速さとパワーを兼ね備えているってことですか？」

バルド「簡単にいえばそうなるかな」

エリオ「僕もいつかそういう戦いがしてみたいです」

バルド「そうだな、エリオならいつか立派な騎士なれるだろうな」

そう言ってバルドは、エリオの頭を撫でてやる。撫でられた後、エリオは、何かを考える様な顔をする。

バルド「ん？どうしたんだ、エリオ？」

エリオは意を決してバルドにあるお願いをした。

エリオ「あの！バルドさんのことを父さんって呼んでもいいですか？」

それに、続いてキャロも・・・

キャロ「あ、あの！私もお父さんって呼んでもいいですか？」

フェイト「エリオ！？それにキャロまで一体どうしたの？」

二人の発言に皆は驚いた表情を見せる。

エリオ「前にフェイトさんがバルドさんのことを話してくれた時にペンダントの写真を見せてくれましたよね？その時バルドさんが父さんだったらいいなあっと思っていたんですけど・・・・・駄目でしょうか？」

そう言ってバルドを見るエリオ。バルドは、エリオの目をじっと見る。暫くそれは続いていたが、不意に言葉を紡ぐ。

バルド「エリオ、キャロ。俺はお前達が考えているような綺麗な人間じゃない。・・・・そんな俺でも、父親になって欲しいか？」

エリオとキャロは互いの顔を見る。そして頷き合ってバルドを見る。

エ・キ「「はい！お願いします！！」」

それを聞いてフッとバルドは笑った。

バルド「なら、お前達はもう俺の大事な息子と娘だ好きに呼べ」

それを聞いた二人は、笑顔になった。

因みにこの後カインとなのはもやって来てカインがヴィヴィオにバルドをもう一人のパパだよっと言いヴィヴィオのパパにもなったバルドであった。

---

その日の昼過ぎ、六課陣はデスクワークをしている。そんな中なのはは、ふと気になることを隣にいるカインに聞いた。

なのは「ねえ、カイン君。ロイド君達は、何処に行ったの？朝から見かけていないんだけど」

そう、ロイドとコレットそれにクラウド、ティファの姿を朝から見ていないのだ。普段は、ロイドは、ヴァイス達整備班の所にいて、コレットもそれについている。クラウドとティファは施設内を（六課内を知るために）ウロウロしたりしているので直ぐに見つけられるのだが今日は、一度も会っていないのだ。

カイン「ああ、４人なら今朝、グランディオンに帰ったぞ」

なのは「え！？如何して？」

カイン「まあ、あいつ等は向こうじゃお偉いさんだからな今朝招集がかかったんだよ。軽い仕事だと思うから直ぐに帰ってくると思うぞ」

なのは「そっか、ロイド君達って確か中将と大元帥とかだもんね・・・」

ロイド達の分け隔てない性格もあったのですっかりロイド達が自分達よりも偉い人物だというのを忘れていた。

その会話を聞きつけてＦＷ陣も集まる。

スバル「なのはさん。何の話をしてたんですか？」

なのは「ロイド君達が今朝グランディオンに用事で出かけたことだよ」

ティアナ「だから、朝見かけなかったんですね」

カイン「あ、そうそう忘れてた。ロイドがな今日帰りに増援を連れて来るって言ってたぞ」

なのは「え？増援・・・？」

エリオ「どんな方たちなんですか？」

カイン「う～ん、まっ、来てからのお楽しみってことで」

そう教えてくれたカインは、「俺もなんか手伝おっと」と言いその場から去って行った。

新たに来る仲間を想像しながらなのは達は再びデスクワークに取り掛かるのであった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

～～部隊長室～～

シリウス「なあ、はやて之は如何すりゃいいんだ?」

はやて「それはそっちに置いといてな。後、其処の物はこっちな」

シリウス「へいへい～～」

現在はやてとシリウスは部屋の掃除をしている。かれこれ約1時間は経っだろう。

シリウス「これで最後だな!」

片付けが終わり額の汗を拭うシリウス。

リイン「シリウス君、はやてちゃんお疲れ様ですう～」

そこにリインが二人に飲み物とタオルを渡してくれる。

はやて「ありがとーなリイン」

シリウス「サンキュー、リイン丁度喉が渇いてたんだよ」

それを受け取り礼を述べる。そして、二人でソファーに座る。

シリウス「そうそうはやて、今日ロイドが新しい仲間連れて来るって言ってたよ」

はやて「ほんまか？」

シリウス「そうだよ。」

はやて「一体どんな人なん？」

シリウス「ん～～、秘密♪」

はやて「そんなこと言わんで教えて～な」

シリウス「そうだな～。じゃあ特別にはやてにだけヒントを言うね他の人に行っちゃだめだよ？」

そう言うとはやての耳に顔を近づける。突然のことにビックリして顔を赤くして硬直するはやて。シリウスの吐息が首にかかりそして、髪からいい香りがして彼女の鼻孔を擽る。

シリウス「ヒントはね、普段はフリードのサイズでいる生物だよ」

そう言い終えるとはやてからスッと顔を離す。暫くボォーっとしていたがハッとなり表情を元に戻す。それを見ていたシリウスは笑い出す。

シリウス「ククック、はやてはやっぱりかわいいね」

リイン「シリウス君あまりはやてちゃんを苛めないでくださいね」

シリウス「そう言われてもねリイン、はやてのあの顔を見るとつい
つい弄りたくなっちゃうんだよ」

それに、っとシリウスが付け足す。

シリウス「はやては難しい顔をしてるより笑ってたりしてた方が似
合うからね」

そう言ってはやてに笑いかけるその綺麗な笑顔に再び顔を赤くした。

---

ロイド「皆、ただいま！」

コレット「ただいま～！」

クラウド「今帰ったぞー」

ティファ「ただいま帰りました」

昼過ぎにロイド達４人が帰った。そして今部隊長室になのは達を全員呼んで来てもらった。

はやて「皆、おかえり。向こうで何かあったんか？」

ロイド「いや特に、ただの定例会議さ」

クラウド「ロイドは始まった瞬間寝てたがな」

ロイド「しょうがないだろ！？眠くなんだから！」

ティファ「コレットもそんなロイドに毛布をかけるし・・・・」

コレット「え、何で？ロイド気持ちよさそうに寝てたからかけてあげたんだけど駄目だった？」

クラウド「会議なんだから起こせよ・・・」

ロイドとコレットらしい行動に皆笑う。

ロイド「それよりも、はやて達に吉報だ。グランディオンは全面的に機動六課を支援することを決めたぞ」

はやて「ほんまに！？」

コレット「うん♪後、近々こっちに代表の人が来るから」

なのは「代表？それって誰なの？」

クラウド「俺達の国の王、ウルフ・エドワードだ」

フェイト「国王！？」

クラウドの言葉に六課陣は驚いた。

バルド「あの、元レジスタンスのリーダーのチビッ子か。何時狙われてもおかしくないのに何考えてんだか」

ヴィータ「如何いうことだよ？」

カイン「あいつは元はレジスタンスの奴だからな。それが今じゃ国王になっちまったんだ。それをよろしく無いと思ってる奴らがわんさかいんだよ。ま、大体は片付けたと思うがな」

なのは「そうなんだ・・・」

ロイド「そんで、六課の人達に何か幾つか聞きたいことがあるんだってさ」

はやて「了解したで。答えられる範囲のことは何でも答えたる。それとロイド君、増援を連れてくるって話を聞いたんやけど・・・」

ロイド「ああ、それなら紹介するよ。こいつらが新しい仲間さ」

そう言ってロイドは、その場から少しずれるとそこには４頭の生き物がいた。黒い体に棘を幾つも生やしたトカゲの様な体に翼を持った生き物と白い体を持った同じくトカゲの様な生き物、そして、銀と金の体を持った竜がそこにいた。

ロイド「右からアル、ウル、レイ、レンだ。皆よろしく頼む。お前達も挨拶しな。これからはお前達にとっちゃ家族の様なもんなんだからな」

アル「キュッ！」

ウル「ギュッ！」

レイ・レン「「クキュッ！！」」

なのは「その子たちが新しい仲間？」

キャロ「わあ、フリード！新しい友達だよ！！」

フリード「クキュー！！」

そう言ってフリードを見るとフリードも嬉しそうに返事をし４頭に向かうそのまま５頭で何か話した後周囲を楽しそうに飛びまわった。

コレット「ふふ、良かったね皆新しい友達が出来て」

コレットも嬉しそうに笑う。微笑ましい光景を暫し見た後キャロが質問する。

キャロ「あの子達もフリードみたいに大きくなるんですか？」

ロイド「ああ、普段はあのサイズだけど本来はアルとウルは大体３０メートルを超えると思うし、レイもレンも２０メートルはいくぞ」

エリオ「そんなに大きくなるんですか！？」

シグナム「あの子らとはどの様にして出会ったのだ？」

ロイド「う～んと、ある世界に行った時にアルもウルも怪我していたのを見つけて助けたんだ。その後レイが他の生物に襲われていたのを助けてレンは人に襲われて傷ついていた所を助けた。そしたら懐かれちゃって」

コレット「その世界は、人とモンスターが互いの生存のために戦う弱肉強食の世界だったの。この子達は優しいから、その世界じゃ危ないと思ってそれからは、私達が育ててるの」

ヴィータ「へぇー、なあロイド、実際どれ位の大きさになるのか見せてくれよ」

ロイド「いいけど・・・・此処じゃ拙いからな取り合えず外に行こうか？」

そう言って皆で外に向かった。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

ロイド「ここら辺でいいかな・・・・」

そう言うとなのは達を見る。

ロイド「最初に言っておくけど、皆怖がんないでくれよ」

その意味が良く分からなかったが取り合えず頷いた。

ロイド「じゃあ、皆、なのは達に本当の姿見せてやれ」

それに頷いたと同時に４頭の体が光り出した。眩い閃光になのは達は目を瞑る。そして、光が治まったので彼女達は目を開くとそこには・・・・

アル「キュオオオオオオオオオオオオオ！！！」

ウル「バオオオオオオオオオオオオオ！！！」

レイ・レン「「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」」

六課一同「／（◎ｏ◎）／！」

巨大な竜の姿があった。その姿を見た瞬間なのは達は驚愕した。

コレット「これがこの子達の本来の姿だよ。かわいいよね♪」

そう言ってレンとウルを撫でる。二頭は嬉しそうに目を細めて撫でられていた。

ザフィーラ「触っても大丈夫なのか？」

ロイド「当たり前だろ？皆いい子なんだから」

そう言ってロイドもレイとアルを撫でる。二頭も又嬉しそうに目を細めた。

ヴィヴィオ「わあー！かわいい！！」

なのは「ヴィヴィオ！？」

そして、ヴィヴィオもその場に加わる。初めは４頭は小さなヴィヴィオの存在に驚いたものの、その無垢な目を見てされるがままになった。

カイン「ほおー、ヴィヴィオにすぐに懐いたな。ほら、なのはお前も行って来い」

そう言ってなのはの背を押した。なのははおっかなびっくりしつつも、４頭に近づきレイに触った。

なのは「・・・・あれ？結構柔らかい・・・・」

そう、レイの銀色の鱗の部分は堅い装甲の様だったのだがお腹や顎の下はフワフワしていた。レイもそこが気持ちいのか体を震わせていた。残りの皆も少しずつ近づきそれぞれが４頭に触る。

フェイト「あ、本当だ。柔らかい」

エリオ「体の表面は意外とツルツルなんですね・・・」

皆それぞれ思ったことを口にする。如何やら最初の恐怖心は無くな

ったようだ。

コレット「皆仲良くなれてよかったね」

ロイド「だな」

はやて「なあ、ロイド君この子らの食事って何がいいん？」

レンを撫でながらロイドたちに聞く。

ロイド「ん？普通の俺達の食べる食事で大丈夫だよ。分量も普段はフリードのサイズだからそんなにいらないし、腹減ったら自分達で狩りをするから問題ないよ」

フェイト「え？狩りをするの？」

バルド「ああ、魚とか鳥とかを偶に食べるな」

小鳥「チチチチ」

アル「ガウッ！！」

バクッ！！

そう言っている矢先にアルが近くを飛んでいた小鳥を物凄い速さ動きその大きな口で一飲みにした。

六課陣（鳥を食べた！！？）

アル「キュウ～～」

何とも情けない声を上げながらアルはロイドに擦り寄った。

ロイド「え？腹減った？しょうがないな、んじゃあ、元の大きさに戻って飯食いに行くか？」

アル「キュッ！」

そう返事をするとアルだけでなく残りの3頭も小さくなってロイドとコレットの周りに行く。

キャロ「ロイドさん、その子達の言葉が分かるんですか？」

ロイド「何となくだけどな。昔は、全然分んなくて苦労したよ」

そう言って、ロイドとコレットは苦笑いする。その後、皆で昼飯を摂りに食堂に行った。

――

それから、2日たった。なのは、フェイト、はやては休憩時間に3人で楽しく談笑していた。そして、フェイトが気になることをはやてに聞いた

フェイト「ねえ、はやて。昨日からバルドを見ないんだけど何か知らない？」

そう、六課に新しい仲間のアル達が来た次の日からバルドの姿を見てないのだ。

なのは「バルドさんも？」

フェイト「ってことは、カインの方も？」

なのは「うん。2日前から見当たらないの」

そこで二人ははやてを見ると、彼女はニヤニヤと笑みを浮かべながら二人を見ていた。

はやて「なんや二人とも、そんなに心配か？」

フェイト「だ、だって・・・／／／／／／」

なのは「いつも隣にいるから何かいないと不安になるんだもん・・・・／／／／／／」

そう言って二人は顔を赤くして俯く。

はやて「まあ、二人のことなら問題あらへんよ。それよりも二人にうちも聞きたいんやけど・・・シリウス君どこに行ったか知らん？」

そう言った瞬間二人の頭にキュピーンっと某ニュー○イプの様なものが駆け抜ける。今度は逆にニヤニヤした顔をはやてに見せる。

フェイト「あれ？はやて、そんなにシリウスのことが心配？」

なのは「もしかして・・・はやてちゃん、シリウス君のこと・・・・・」

はやて「な、何言うてんねん二人とも！うちはそんなこと考えてへんよ！？」

立場逆転。普段は二人をからかう側のはやてだが、如何やら今回はからかわれる側になってしまった様だ。とそこに・・・

シリウス「二人とも、はやてを苛めるのもそこら辺にしてよ」

シリウスがやって来た。

はやて「あ！シリウス君何処行ってたんや！？」

シリウス「ん？何処ってバルド達と一緒に本部に行ってたんだけど？」

な・フ「「え！？それどう言うこと！！」」

バルド「まあ、こういうことさ」

そこに、バルドとカインもやって来た。そこには、局員の制服を着た姿があった。

カイン「ただいま皆！」

なのは「カイン君！２日間何処に行ってたの？」

カイン「その事について報告したいから取り合えず、皆を部隊長室に集めて欲しいんだけど」

というわけで、部隊長室に皆を呼んだ。

～～ＩＮ　部隊長室～～

バルド「さて、今日からおれとカインそしてシリウスは管理局の職員になりました」

六課一同「え～～～～～！！！」

ロイド「ていうか何ではやてまで驚いてんの？バルド達が行ったのは知ってんだろ？」

はやて「バルドさんとカインさんは行ったのは知っとるんやけど何でシリウス君まで！？」

シリウス「何でって・・・面白そうだからに決まってんじゃん」

バルド「因みに俺、執務官」

カイン「俺、教導官」

シリウス「俺、捜査官に就くことになりました」

バ・カ・シ「「「そして、兼補佐官！！！」」」

な・フ・は「「「嘘ぉ！？」」」

とんでもない報告にもう皆ビックリ。そんな中ティアナが三人に質問をした。

ティアナ「あの～、三人は何をしたんですか？」

バルド「何って、お偉いさん方にちょっとＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＩしただけだが？あれは楽しかったなカイン、シリウス」

カイン「ああ、あれは面白かったな、フフフ」

シリウス「いやあ～、最高だったねあれは・・・ククク」

三人が黒い笑みを浮かべる。そんな三人の凶悪な笑みに身の危険を感じたなのは達は一瞬引いた。

バルド「まあ、そんなこともしたが、ちゃんと試験は受けてきたさ」

カイン「もちろん皆満点合格だ」

六課一同「え～～～～～！！！！」

またもや、とんでも発言に皆ビックリする。

バルド「その後にクロノに会った」

フェイト「え！クロノに？」

バルド「ああ、会った瞬間によ「何でお前が此処にいる！？」何て

言ってきやがった。全く失礼な奴だ」

クロノもまた１０年前に彼に会っています。その時にバルドに喧嘩を売ったため（バルドはそう受け取っている）ボコボコにされましたが・・・・。

カイン「後、六課のことなんだが期限付きのお試しみたいな感じだったんだな。もうそろそろ期限切れになりそうだったんだが、期間を少し延ばさせた」

シリウス「それと、隊長陣のリミッターを解除してもらうことに成功したよ」

はやて「ほんまに！？」

バルド「ああ、街を守るのに枷なんか付けてたら守りきれないだろうって文句言ってやった」

カイン「それと、少しのＯ・ＮＥ・ＧＡ・Ｉをしたから多分明日辺りには解除されてるだろう」

バルド「取り合えず、報告はこんなもんかな？」

カイン「あと階級は最初に自己紹介した時と同じだけどあんま気にしないで気軽にまた話しかけてくれよ」

シリウス「それじゃあ、これからもよろしくな！！」

そう言って三人は笑う。そして、ロイド達がバルド達を労ったりシリウスがまたはやてをからかったりしてその日は過ぎていった。

――――――――――――――――――――

――――――――――

その日の夜・・・・・・

シリウス「なあ、はやて。そろそろ寝たほうがいいと思うんだけどもう12時だよ」

眠そうな声ではやてに話しかけるのは、はやての補佐官になったシリウスである。

はやて「何言うてんねん。まだ今日の分は終わってへんよ」

シリウス「んなもん、明日やればいいじゃん。睡眠は重要だと思うよ。寝不足はお肌の敵だよ？」

それに、っとシリウスは付け加える。

シリウス「早く寝ないとあんな風にされるよ」

はやて「は？」

シリウスの視線の先をはやても見ると・・・・・・

バルド「フェイト・・・・そろそろ寝ろ」

フェイト「ま、待って。あとちょっとで終わるんだよ。もう少しだけ・・・」

バルド「それは1時間前の聞いた。つーかもう我慢の限界だ！」

そう言ってバルドはフェイトを肩に担いだ。

フェイト「ふえっ！？ちょっと、バルド／／／／／！？」

バルド「良い子は寝る時間だ！さっさと部屋で寝ろ！！」

フェイト「私もう１９だよ！？」

バルド「うるせえ！！俺から見れば２０にもなってないまだ子供（ガキ）だ。いくら背伸びしたって変わりはねえんだよ！！」

フェイト「ふえ～～～！？」

フェイトの「降・ろ・し・て～～！！」と言ってジタバタしながら連れて行かれる彼女の声が木霊していった。

一方、なのはの方も・・・・

カイン「なあ、なのは・・・・」

なのは「も、もう少しだけ。あと少しでＦＷ陣の練習メニューができそうなんだよ・・・・・」

カイン「ほお～、あと少しねえ～。それは、１時間前に聞いたんだが・・・・というか、もう待てるか！！！！」

そう言ってカインもなのはを脇に抱えるように担ぐ。

なのは「にゃっ！？カイン君／／／／／／／！？」

カイン「ヴィヴィオも待ってんださっさと行くぞ！」

なのは「で、でもまだ終わっｔ「んなもん知るか！！」え～～～！！」

カイン「娘を待たせるんじゃねえ、行くぞ！！」

なのは「にゃあ～～～～！？」

カインに担がれたまま部屋から出ていく。またもや、部屋に声が木霊した。

シリウス「あんな感じになるけどいいの？」

はやて「ここ２４時間勤務なんやけど・・・・」

シリウス「２４時間って・・・仕事中毒（ワーカホリック）なんですけど・・・・」

はやて「せやかて何時、何が起こるか分らんし、もし寝てたときに事件が起きたら大変やろ？」

シリウス「ほとんど寝ないで働かれる方がむしろ迷惑だっつうの！それに、バルドの言葉を借りるけど１９歳の子がいくら何を言おうと子供なのは変わりないしその台詞は２０歳になってからにして欲しいね」

はやて「せやかて・・・・」

シリウス「はいはい。後のことは俺達補佐官がやりますからしっかり睡眠を摂ってくださいね。俺達がいる限り２４時間勤務なんかさせないよ♪っという訳で自室へＧＯ～～！！」

はやて「はっ！いつの間にか担がれとる！？」

シリウス「ハハハッ！！これに気付かないとはまだまだ甘いな～はやて君！というわけで強制連行だ～～！！」

はやての「離・せ・や～～～！！」とシリウスの「ハ～ハハハハハ！！！」と言う声が部屋に木霊しそれが止んだ時にはもう部屋には誰もいなかった・・・・。

何とも騒がしい1日が過ぎて行った・・・・・。

---

その日の深夜・・・

一人の男は走っていたその表情は鬼気迫る感じで何かに追われているのを思わせる。

彼は、５０代の局の魔導士で階級も小将とそれなりの階級を持っている。

そんな実力のある男が恥も外聞もなく全力で走っていた。

男「ひぃ・・・ひぃ・・・・」

路地の裏に逃げ込み、身を隠す。デバイスは既に追っている者に壊され戦う武器がない。

――――カツン、コツン――――

男「ひっ！！」

足音が聞こえ思わず体が強張る。そして彼の目の前に一人の影が現れる。

？？？「何時まで逃げるんだ？局の汚点が・・・」

怒気の籠った言葉に体が震える。彼の目の前には赤いフードを目深に被った人物がいて、その手には大きな赤色に光る鎌があった。声からして男のようだ。

？？？「よくもまあ、こんにまで犯罪を犯したものだ。汚職、横領、違法行為はたまた婦女暴行まで探せば探すほど出てる」

男「た、頼む！もうしないから、ゆ、許してくれ！！」

？？？「許せ？・・・ふざけるな」

フードの男から殺気が飛ぶ。それだけで男は顔を青くし歯をガチガチ鳴らす。

???「管理局の人間ともあろう者が、いや、人としてこの様な行為をして許されると思うか?答えは・・・・ノ―だ」

そう言って鎌を持つ手に力を込める。そのフードの中の瞳は血のように深紅の色をしていた。

???「貴様は、罪を犯しすぎた。よって・・・・これより処刑する」

男「ひぃーーーーーーー!!!た、助けｔ――――」

逃げようとした男の前には既に鎌を振りぬいたフードの男がいた。

???「頭と胴は離婚届を提出しました」

そう言い終えると局の男の頭が夜空に飛び辺りは血の海と化した。

???「処刑完了・・・・安らかに眠れ」

そう言いながら血の付いた鎌を振り付着した血を飛ばす。そして、指をパチンと鳴らすと、先ほどまで男だった物が突然黒い炎に包まれ跡形もなく消えた。それを確認し男はその場から消えた。

少し離れたあるビルの屋上にフードの男は、止まりフードを取る。その顔は、

バルド「まず一人か・・・・」

バルドだった。彼は、手に持っていた鎌を消した。如何やら自身の魔力で作り出したもののようだ。

バルド「管理局は前以上に腐敗してしまったか・・・・なら、俺達が変えていくしかないな」

そう呟き空を見上げる。そこには、満点の星空が広がっていた。

バルド「星が綺麗だな・・・・」

暫く、夜空を見て彼は、ビルから姿を消した。

その後、その局員は局内のデータファイルから名前どころか全ての情報が消えていた。

# 第十話（後書き）

作者「改造モンスターワッショイ！！」

カイン「少しは自嘲しろ！！」

作者「ハハハ！わたしは止まらんよ！そう、それは正しく流ｓ「魔王炎撃破！」グッハーー！！」

作者はログアウトしました。

バルド「ったく、これ以上キャラ増やすと俺達の出番が減るだろうが！！」

フェイト「え！？そっちを気にしてたの！？」

なのは「にゃはは、確かにこれ以上増えるとわたし達の出番が減っちゃうかも」

カイン「そこは、作者の腕次第だろう。減ったら・・・処刑だな」

はやて「そういう訳やから、キリキリ働けや」

作者「み、皆さんなぜ私めに武器を向けてるのですか？」

一同「さっさと次回作を書け！！！」

作者「た、助けてーーーーー！！！！」

お気に入り登録をしてくださった読者の皆さまありがとうございます。
これからもこの二次小説を宜しくお願いします。次回もモンハンをしながら早く更新できるように頑張りますので読者の皆さまこれからも宜しくお願いします。

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第十一話（前書き）

作者「ども～、最近課題に埋もれて窒息死しそうな作者ことテッテルです！」

カイン「弁明があるなら今の内に言ってみろ」↑作者の首にサイフォス向ける。

作者「だからね…課題に埋もれていたんですよ（ガクガク）」

バルド「それだけか？」↑同じくケルベロスをあてる。

作者「え～～っと……」

カイン「言ってみろよ」

作者「ああそうだよ！モンハンやってましたよ！やってて執筆遅れたんですよ！
やったが悪いか！？」

一同「悪いわ！！」

作者「ギャーッス！！？」

作者は倒れました（笑）

カイン「え～、読者の皆さま一週間も待たせて申し訳ありません。この様に家の作者は何とも情けない理由で投稿を遅らせました」

クラウド「何とも嘆かわしいな…」

バルド「では、本編をどうぞ！！」

# 第十一話

カイン「今日は皆に新しい訓練をしてもらう」

現在、カインとなのはは、ＦＷ陣の教導訓練をしているが、如何やら今回から新しいメニューが始まる様だ。

ティアナ「新しい訓練ですか？」

チームを代表してティアナが聞く。ＦＷ陣としては新しい訓練を行うことで戦術の幅も広がるで嬉しいのだが、今回からカインもこの教導に加わるので内心どの様な訓練になるのか分からなかった。何せ自分達の教導官のなのはの命の恩人で剣帝、さらに時の英雄と呼ばれているのだ。

なのは「今回の内容は私とカイン君、それにロイド君達が考えてくれたんだよ」

エリオ「え、ロイドさん達もですか？」

まさかロイド達も考えてくれていたのに驚くＦＷ陣。

カイン「ま、実際見た方が早いだろう。シャーリー頼む」

シャーリー『了解です』

そう言ってシュミレーターを動かすと、街フィールドに変わり、ＦＷ陣の目の前に何かが現れた。それは、

スバル「え！これって・・・」

キャロ「あの時の虫ですか？」

そう、ＦＷ陣の前にはトンボの様な姿をした虫、イノセント？型だった。

カイン「ああ、グランディオンで調査したんだがこいつの名はイノセント？型と言うらしい。因みに街を襲ったカマキリみたいなのはイノセント？型らしい」

なのは「そこで、今後これと戦うことになるだろうから皆で動きを調査して

シュミレートしてみたの」

数は合計４体とＦＷ陣と同じ人数に設定されている。しかし、４体と言ってもこれは、Ａ～ＡＡＡクラスの魔導士を相手に圧倒的な実力を見せたのでかなりの強敵だろう。

エリオ「４体を相手にするんですか？」

カイン「ああ、今のお前達の実力を正確に測りたいし、それに訓練にもなる。因みに隊長陣専用のも作った」

なのは「あれ！？何時の間に作ったの！？」

それは聞いてなかったらしくなのはは驚いた様子である。

カイン「それは、置いといて。っま、いくらリミッターが外れても敵は強力なんだ。訓練した方がいいだろ。因みに俺達もやるから皆平等だな」

スバル「カインさん達もするんですか？」

それには、皆ビックリした顔を見せる。その様子にカインは苦笑いする。

カイン「俺達だって訓練はするさ。此処まで強くなれたのも全部訓練の賜物だぞ。そんな事よりも先ずは、お前達の力を見せてもらお

うか。敵は銃で撃ってくるが全部ペイント弾だけど当たったら撃墜と見なして即終了、負けるとしても最低でも5分は耐えろよ。耐えられなかったら・・・・・・・」

FW陣「耐えられなかったら・・・・？」

ゴクリとFW陣は唾を飲む。それにカインはニヤッと笑いFW陣に手の持っていたビンを見せる。

カイン「この中に入っている、ものを飲んでもらう。毒物じゃないから安心しな。けど、死んだ方がマシって思うくらいヤバい味がするから、死ぬ気で頑張れ！」

なのは「それって何？」

カイン「人の体にいいものをとことん入れて混ぜてできた飲み物。因みにこれはFW陣だけじゃない、なのは達隊長陣も飲んでもらうからな」

なのは「ええ！！私たちも飲むの！？」

カイン「当たり前だろ。FW陣だけそんな目に合わせるなんて酷いからな当然のことだろ。さあ、お前たちの力を見せてくれ」

そう言うとカインは手を振りおろす。それに反応してイノセント？型の目が光り動き始めた。

スバル「あわわわ、ティア、イノセントが動き出したよ！」

ティアナ「ここじゃ、地形的に不利ね。一端建物に隠れるわよ」

４人は急いで街の中にあるビルの逃げ込む。イノセント？型はその間に起動完了し標的を探し始めた。

なのは「皆、大丈夫かな？」

カイン「心配いらないだろう。何たって、お前が今まで育てた生徒何だからな。

　まず、負けはしないだろう」

なのは「え？カイン君、それじゃあその飲み物の意味が無いよ？」

カイン「当たり前だろ。これは只の野菜ジュース何だから」

なのは「ええ！？」

それを聞いて驚いているなのはを見てしてやったりっという様な顔をして笑うカインであった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

ティアナ　ＳＩＤＥ

今私達は、近くにあったビルの中に身を潜めながら作戦を練っていた。

ティアナ「今まではガジェットでの訓練とかだったけど、今回は相手にも思考能力があるって考えた方がいいわ」

エリオ「どうしてですか？」

ティアナ「ガジェットはＡＭＦがあったから私達、魔導士にとっては脅威だったけど今度の敵が使うイノセントはそれが無い。その代わりに連携プレイが今回の映像を見たけどかなり良かった」

そう、イノセント？型は、私達人みたいに状況を把握して的確に動いていた。だからＡ～ＡＡＡランクの魔導士達が一方的にやられていた。ガジェットは、ＡＭＦさえ気をつければ何とかなるけど、イノセントに、ガジェット対策の動きで戦ってもあっという間にやられてしまう。

キャロ「では、如何すればいいんでしょうか？」

ティアナ「まずは、敵を引き離して４対１の状況を作りたいわね」

スバル「でも、そう簡単にいくかな？」

エリオ「イノセント達はフェイトさんが言うには集団行動を好むみたいですよ」

集団行動か・・・・。ということは引き剥がして多対一に持ち込むのは無理ね。

キャロ「あの～。それなら無理矢理多対一にするのは如何でしょうか？」

ティアナ「如何言うこと？」

キャロ「この地形を利用してイノセント達を引き寄せて、一体しか通れない通路で待ち伏せするんです」

スバル「そっか！そこで叩いて少しずつ落す作戦だね！」

ティアナ「良い作戦ね。もし駄目でも直ぐに近くの建物を利用して隠れて再度仕掛けてみましょう」

作戦は決まった。後は、私達の力があれを超えるかどうかね！

ティアナ　ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

―――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――

なのは「あ、カイン君！ティアナ達が動き出したよ」

眼下を見るとティアナ達がビルから出て何処かに向かって一直線に走っていた。その方向の先にあるのを見てカインは目を細める。

カイン「ほう、ティアナ達は待ち伏せ作戦をするみたいだな」

なのは「そうみたいだね。でも、上手くいくかな？」

カイン「さあな。ま、ここは、お手並み拝見と行こうか」

ティアナ達は前方にあるイノセント一体が通れるギリギリの空間が空いている場所を見つけそこに身を潜めた。

ティアナ「キャロ、頼むわよ」

キャロ「はい！！行くよ、フリード！」

フリード「キュクー！！」

竜魂召喚によって大きくなったフリードに乗ってキャロは空に舞い上がる。そして辺りを見回すと、イノセント？型が４体組んで飛ん

でいた。

キャロ「いた。フリード気づかれたら一気に急降下して指定ポイントに隠れるよ」

それに、頷いて応えるフリードを見た後再度イノセント?型を見ると如何やら向こうも此方に気づいたらしい。

キャロ「フリード!今だよ!!」

それと同時にフリードは急降下それを追うようにイノセント?型達もついてくる。撃ち落とそうと銃撃する。

キャロ「フリードもう少しだから頑張って!」

避けながら突き進む。後少し・・・・そして、

ティアナ「今!!クロスファイヤー、シュート!!」

フリードとキャロが潜り抜けた後ティアナが潜って来たイノセント?型にクロスファイヤーを連射、いきなり現れた敵にイノセント?型は、急制動をかけて回避しようとするもそれを予測していたティアナは翅に向かって撃っていた。

スバル「行くよ、エリオ！！」

エリオ「はい！！」

その間にスバル、エリオが飛び掛かる。

ス・エ「「うおおおおおおおおおお！！！」」

スバルがイノセント？型の胴体をブリッツキャリバーで殴り、怯んだ隙にエリオが、頭と胴体を繋ぐ細い首とも呼べる部分を斬る。その一撃で頭は吹っ飛び頭部を失くしたイノセント？型は、墜落した。

スバル「やったーー！！」

エリオ「上手くいきましたね」

ティアナ「この調子でいくわよ」

キャロ「はい！！」

目の前で仲間の1体がやられて慌てて高度を上げる。そして、1体のイノセント？型は背中にある砲台を展開隠れているティアナ達に攻撃をする。

それに気づいたティアナ達は慌ててそこから逃げる。着弾し辺りにペイント弾の内液が飛び散る。一旦隠れようとするがしかし、そこに、残りの2体が回り込み退路を塞ぐ。

ティアナ「くっ！如何やらここからは、正面からぶつかり合うしか無いみたいね」

エリオ「でも、1体は倒せました。これで一人は余裕が出来ます。もし、誰かが危なくなってもフォローに回ることが出来ます」

ティアナ「それなら、キャロがフォローに回って。私達が前で戦うから」

キャロ「は、はい！！」

ティアナ「行くわよ！！」

3人はそれぞれイノセントを一体ずつ肉薄する。イノセント達もそれに応える様に3人に突撃、スバルに突っ込んだイノセントはその強靭な爪で斬りかかるが寸での所でこれを避け、逆にがら空きになった胴を狙う。そうはさせまいと翅を羽ばたかせスバルを吹き飛ばす。スバルは、態勢を治してビルの側面に着地、そこにペイント弾が飛んでくる。ギリギリでウィングロードを出して回避する。しかし、

スバル「うわわわわわ！！」

前に回り込んだイノセント?型が銃を連射。慌ててプロテクションで防御ペイント弾がぶつかりベチャベチャと音を立てる。通り過ぎたイノセント?型を確認した後スバルは近くのビルの側面に着地してウィングロードを再度発動そのまま登り始める。その後ろを追跡するようにくっついてくる。しかし、速度ではスバルの方が負けているため徐々に距離が縮まる。そして、イノセント?型の射程圏内に入った時

スバル「今だよキャロ!!」

スバルは、ビルを思いっきり蹴りイノセント?型の視界から消える。そして、イノセント?型の視界の先にはキャロとフリードがいた。

キャロ「フリード、ブラストレイ!!」

炎がイノセント?型に向かって飛ぶ。突然のことに回避も出来ず炎に直撃、激しく炎をあげてイノセント?型は堕ちていった。

スバル「ナイス!キャロ!」

キャロ「上手くいきましたね」

スバル「後は、二人を助けに行こう!!」

キャロ「はい！！」

ティアナ「くっ！！」

目の前を猛スピードで通り抜けるイノセント?型。その後ろに魔力弾を撃ち込むものの不規則な動きで回避される。先ほどからこれを繰り返している。

スバル《ティア、こっちのは落とせたから今からそっちに行くよ！！》

ティアナ《わかった。もう少しだけ耐えきって見せるからキャロはエリオの所に、スバルはこっちに来て》

キャロ《わかりました！》

スバルから来た念話にティアナは答えて、二人に指示を出す。その間にイノセント?型は距離をとって背中の筒を展開音速に近い砲撃を放つ。それにギリギリで気づいたティアナは間一髪のところで回避に成功する。

スバル「ティア～～！！」

そこにウィングロードに乗ってスバルがやって来る。

スバル「うおりゃあぁぁぁぁぁぁ！！！」

そのまま、一気に接近し殴りかかるも後方に下がることで回避。逆に隙が出来たスバルに銃を向ける。しかし、

ティアナ「クロスファイヤー、シュート！！」

そうはさせまいとティアナが援護、その攻撃を銃弾で破壊する。すかさずスバルが突撃、蹴りを入れようとするがそれを見透かしていたイノセント?型はそのまま、スバルに銃撃、直撃する。しかし、直撃したスバルは、蜃気楼のように消えた。どうやら幻術だったようだ。

スバル「うおおおおおお！！！」

声がする方に顔を向けると大きく拳を振りかぶるスバルがいた。そのまま、スバルの拳はイノセント?型の顔に吸い込まれるように飛んで行き、顔を潰した。

ティアナ「これで止め！！」

そこに、追い打ちをかける様にティアナが魔力弾を撃ち込む。それは全て6枚の翅を撃ち抜き、イノセント?型は墜落した。

スバル「やったね、ティアナ!!」

ティアナ「ええ、上手くいった様ね」

そして、二人は残りの1体お倒しにエリオとキャロの元へと急いだ。

エリオ「フォトンランサー、ファイヤー!!」

複数の槍が飛んで行くがそれを、イノセント?型は全て撃ち落とす。逆に今度は、背中の筒から砲撃を放つ。それをソニックムーヴで回避する。そこに、

キャロ「エリオくん!!」

イノセント?型の後方からキャロが此方にやって来るのが見えた。それに気づいたイノセント?型はエリオを無視してキャロに襲いかかった。

エリオ「キャロ!!」

キャロ「え・・・！」

此方に向かって突然飛びかかって来たイノセント?型に驚き回避行動が遅れる。そのキャロをイノセント?型は、フリードの上から叩き落とした。

キャロ「きゃあああああああ！！」

落ちるキャロにイノセント?型は止めを刺さんと銃口を向ける。それに気づいたエリオは、落ちていくキャロに急いで向かう。

エリオ「ストラーダ、ソニックムーヴ！！！」

高速移動でキャロの下に向かう。そして、地面に落ちる寸前に彼女を抱きかかえる。その時、上空からペイント弾がエリオ達に降り注いだ。

エリオ「っ！？プロテクション！！」

ギリギリ発動が間に合い。防御に成功する。しかし、

エリオ「くうぅぅぅぅぅぅ・・・・」

ペイント弾とは言っていたが一発一発は異常に重かった。凄まじいまでの弾幕に徐々にエリオのプロテクションに罅が入り始める。

ティアナ「クロスファイヤー、シュート！！」

しかし、間一髪ティアナとスバルが来た。ティアナは魔力弾を複数作り出し一斉に撃ち出す。それに被弾し銃撃を中断し距離を取る。それと同時にエリオのプロテクションも限界が来て割れる。そして、スバルがイノセント？型の背後をとり思いっきり殴りかかる。

スバル「おりゃあぁぁぁぁぁ！！！」

そのまま、拳を押しこみ止めの一撃を放つ。

スバル「ディバイィィィンバスター――――――！！！！！」

なのはの得意の砲撃魔法ディバインバスターを撃ち込み、イノセント？型は光に飲み込まれた。

スバル「エリオ、キャロ、大丈夫だった？」

エリオ「はい・・・すみません、助かりました」

ティアナ「別に気にしないの。私達はチームなんだから助けあうのは当たり前でしょ」

スバル「それよりも～エリオ、今抱えているのは何だと思う？」

エリオ「え？」

ニヤニヤするスバルの質問に自分が抱えている者・・・・つまりお姫様だっこをしている人を見る。

キャロ「エ・・・エリオくん・・・そ、そろそろ降ろして／／／／／／／／」

エリオ「う、うわ！？キ、キャロ、ごごごごめん／／／／／／／／！！」

慌てて、キャロを降ろすものの二人は顔を真っ赤に染め俯く。そして、同時に相手の顔を見る。

エ・キ「「っ／／／／／／／／／／／／！！？」」

そして、また同時に俯くのであった。

カイン「初々しいなお前ら・・・・」

そこにカインとなのはが下りてくる。

カイン「今日の訓練は此処までだ」

なのは「皆疲れたよね？今日はゆっくり体を休めて明日も頑張ろうね」

カインとなのはの訓練終了の言葉を聞いて４人はその場にへたり込む。

カイン「ま、午後の訓練は無くてもデスクワークはあるがな」

それに追い打ちをかけるカインの言葉にＦＷ陣は互いの顔を見て苦笑いするのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

シリウス「なあ、はやて、此処ってどこ？」

はやて「ここは、地上部隊の本部や。今からある人に会いに行くん

や」

シリウス「ふ～ん、その人って偉いの？」

はやて「当たり前やん」

今はやてとシリウスは地上本部に来ていて今回の襲撃事件の今後の対策をある人物とするために来ていた。

シリウス「陸士１０８部隊部隊長、ゲンヤ・ナカジマね・・・何かどっかで聞いたことあんだけど・・・・」

はやて「そりゃそうや。師匠はスバルのお父さんやから」

シリウス「ああ～～スバルのね～って・・・・何ぃ！？あのスバルの父親！？ってか今師匠って言ったよな！？」

はやて「せやで、スバルの父親で三等陸佐や。うちにとっても信頼できる上司や」

珍しく驚いた顔をするシリウスの顔を見て半ば上機嫌で答えるはやて。

シリウス「ほへ～、やっぱはやての周りは凄いんだな毎日聞いてて話題に飽きないよ」

そう会話しながらゲンヤの下に向かうべく歩く二人が目の前にいた陸士二名を通り過ぎた時・・・・

陸士1「ちっ、また来たのか化け物め・・・・」ボソッ

一人が小さく呟く。

シリウス「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なあ、はやて」

はやて「気にせんでいいよ。何時ものことやから」

そう言ってシリウスに笑いかけるもその表情は、酷く傷ついた顔をしていた。

シリウス「・・・・・・・そっか・・・・」

それに気づきながらもあえて何も言わずはやての後をついていく。

そして、次々と通り過ぎるたびに陸士達から「化け物」だの「局の犬」だの罵声がボソボソとはやてに飛ぶ。それをはやては、唇を噛

み締め俯いたまま通り過ぎた。それをシリウスは、ずっと見ながら後に続く。

そして、陸士が複数人溜まっている所を通り過ぎた時に、

陸士２「おい、あれが来たぞ」

陸士３「ああ、あれか。１９で二等陸佐になったっていう化け物は」

陸士４「何でも今回の襲撃でＡ～ＡＡＡランカーが手も足も出なかったモンスターを一人で消滅させたらしいぞ」

陸士５「マジかよ・・・・さすがは化け物だな」

陸士６「ったく、そんな化け物で尚且つ局の犬がこんなとこにくんだよ。ムカつくなさっさと帰って欲しいな」

――――――プツンッ！――――――――――――

シリウスの我慢が限界に達した。

シリウス「おい・・・・そこでヒソヒソ話しながら溜まってるクソガキども」

立ち止り殺気全開で5人の陸士を睨む。それだけで5人は竦みあがってシリウスを見る。シリウスの瞳からはイライラが全開で出ていた。

―――――――――――――――――――――――――――――――

はやて　ＳＩＤＥ

陸士1「ちっ、また来たのか化け物め・・・・・」ボソッ

また、始まった・・・・・。さっきまでの楽しい空間が一気に凋んでしまった。

シリウス「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なあ、はやて」

シリウス君が心配そうにうちを見てる。あかんあかん、あんまし心配は掛けたくない。せやから・・・・

はやて「気にせんでいいよ。何時ものことやから」

そう言って取り繕う。そして、暫くうちの顔を見ていると、

シリウス「・・・・・・・そっか・・・・」

と言って何でも無かったように元に戻った。

はやて（少しは心配でもして欲しいんやけど・・・・）

そう思って自分が矛盾してることに気づく。もう、こんなのは日常茶飯事や、気にしても意味あらへん。さっさと師匠の下に急ごう。

そう思って先を急ぐと横切る陸士達から、「化け物」だの「局の犬」だの罵声がボソボソと聞こえる。耐えるんや・・・・・耐えるんや、終われば何時もの日常に戻るから気にしちゃあかん。

けど・・・・・

陸士２「おい、あれが来たぞ」

陸士３「ああ、あれか。１９歳で二等陸佐になったっていう化け物は」

陸士４「何でも今回の襲撃でＡ～ＡＡＡランカーが手も足も出なか

ったモンスターを一人で消滅させたらしいぞ」

陸士5「マジかよ・・・・さすがは化け物だな」

陸士6「ったく、そんな化け物で尚且つ局の犬がこんなとこにくんだよ。ムカつくなさっさと帰って欲しいな」

はやて「っ・・・・・！」

それは・・・それは、あんまりやろ！！うちだって・・・・うちだって好きでこんなに凄い力を貰ったんとちゃう！それなのに・・・・何であんたらはそんなこと平気で言えるんや！！

流石に、今のは堪えた。もう心が折れかかったその時、

シリウス「おい・・・・そこでヒソヒソ話しながら溜まってるクソガキども」

後ろからシリウス君の声が聞こえた。それは、今まで聞いたことの無い低くドスの利いた声だった。

陸士2「な、何だお前！？」

シリウス「俺か？俺はシリウスだ。はやての補佐官だよ」

一人の質問に答えるシリウス君は、何時もの調子に乗った感じやなくて落ち着いた、けど・・・途轍もなく怖い感じやった。

陸士３「補佐官？あんな奴に補佐官なんかいらないだろ？何でお前はやってんだよ？」

シリウス「何でって言われてもな、やりたかったからなったんだが？」

強気で聞いてくる一人に普通に答える。

陸士４「は？ってかあんな化け物に補佐官なんていらないだろ？」

陸士５「あいつ、だって１９歳であの、なのは二等空尉やフェイト執務官を取り込んだ機動六課を立ち上げるし、それに今回だってあの化け物を倒してるしそんな化け物に補佐官なんか要らなくね？」

陸士６「ちげーねえ、あんたも苦労してんな」

陸士達「「「「「あはははははははは！！！」」」」」

はやて「っ！！！」

もういやや。こんなに罵倒されるなんて、うちがあんた達に何した

って言うんや！

シリウス「・・・・・・もういいか？」

陸士達「「「「「は？」」」」」

シリウス「もういいかって聞いてんだよ下衆が！！！」

――――ドンッ！！！！――――――

一瞬にしてシリウス君の魔力が跳ね上がった。彼の周囲から魔力が溢れて火花を散らしている。何やこれ！？あの時以上の力や！嘘やろ！？まだ上がってる！！

陸士達「「「「「ガチガチガチガチガチガチ」」」」」

陸士達が凄く震えてる。当たり前やな。こんな後ろにいても体中から汗が噴き出るくらいの殺気飛ばされたらそれに睨まれてる人達はもっと恐ろしく感じるやろな。

シリウス「いい加減はやてを侮辱するテメーら見てっとホント虫唾が走るわ。テメーら何様？自分達の考えは正しいと思ってんの？はっ！鼻で笑える」

冷笑を浮かべて目の前の陸士達を見下してる。

陸士2「じゃあ、何だよ！そこにいんのは１９歳でＳＳ級の魔導士だぞ！！化け物じゃ無かったら何なんだよ！！」

シリウス「はあ？そんなのも分かんないの？お前らホントに魔導士？赤ん坊からやり直せよ」

陸士3「じゃあお前には分かんのかよ！！」

シリウス「当たり前じゃん」

さも当然の如く即答するシリウス君。それには、５人も唖然としてるみたいや。

陸士4「じゃあ言ってみろよ！！そこに居んのは何なんだ！！」

シリウス「女の子」

陸士達「「「「「はあ！？」」」」」

シリウス「だから、女の子だって。物分かり悪い奴だな」

陸士5「ふざｋ「ふざけてねえよ。本気で言ってんだよ」なっ！？」

シリウス「幾ら凄い魔力持ってもたかが１９歳のまだ女の子だぞ？

そんな子に陰で不特定多数で罵倒を浴びせるってこれ如何よ？なあ、そこら辺にいる諸君」

その言葉に何時の間にか騒ぎを聞きつけて集まった陸士達の体が跳ね上がる。そりゃそうやな、シリウス君の目何時もの優しい目じゃない。あれに睨まれたら、蛇に睨まれた蛙、もといライオンに睨まれたネズミや。

シリウス「さて、そこら辺の馬鹿共、今からはやてを侮辱した奴がどんな末路を辿るか見せてやるよ。もし、また陰で、見えない所で言ったらこれと同じ未来が待ってるから安心して逝くといいよ。そうそう、死にはしないから」

そう言って目の前の陸士達に指をポキポキさせながら一歩近づく。

シリウス「良かったなお前ら。地獄行き決定だ。生きていることを後悔しろ」

そう言った瞬間真ん中の一人が視界から消えた。

はやて「え？」

陸士達「「「「へ？」」」」

一瞬、何が起こったのか分からんかった。けど・・・・

――――ゴドンッ!!!――――――

陸士４「ごへらっ!!」

その声が聞こえた方を見ると、２００メートル離れた行き止まりの壁に陸士の一人がめり込んだ形で埋まっていた。

続けて・・・・

――――ドゴンッ!!バゴンッ!!――――――ドポッーーンッ!!

陸士３「へぶぅ!!」

陸士５「ぼへぇ!!」

二人の陸士が吹っ飛んで行きおった。一人は、同じく２００メートル飛ばされて壁にめり込んでもう一人は、勢いが止まらずそのまま近くの海に飛んで行って落ちた。

――――ガツンッ!!!――――――

陸士2「ぶべらっ！！」

一人が天井に打ち上がり頭が天井に突き刺さった。そこで気づいた、シリウス君はうちらの目で見えない速度で殴ってる。一体、どれ程の力が働けばあんなにマンガみたいに人が飛ばせるんや！？残った一人にシリウス君が近づく。

陸士6「ヒ、ヒーーー！！」

シリウス「地獄の果てまで、ぶっ飛べーーーーー！！！！！」

その言葉と同時に残りの一人が視界から消えて、遠くの海面に大きな水柱が上がった。

シリウス「ふう～～、さてと、お前らあれ拾ってきて」

そう言って周囲の陸士達に海とそこらで伸びてる陸士を指差す。

シリウス「もし、断んだったら、こっから飛ばして拾いに行かせるが、如何する？アイ・キャン・フラーイ！！で飛んで行くか？」

陸士一同「「「「喜んで拾いに行かせて頂きます！！！」」」」」

そう言って周囲で伸びていた人を連れて一瞬で姿を消した。

シリウス「さてと・・・ごめんな！はやて！！」

はやて「な、何や急に／／／／／／！？」

普段のシリウス君に戻ったのにホッとしたけど行き成り顔を近づけられたから思わず顔が赤くなった。

シリウス「いやさ、殺気をはやてにも浴びせちゃったから大丈夫かなと思ったんだよ。ほら汗かいてるじゃんはい、ハンカチーフどうぞ」

はやて「あ、おおきに。後で洗って返すな」

渡されたハンカチで額の汗を拭う。その時ハンカチから少しいい香りがした。

シリウス「いいよそのまま返しても」

はやて「何でや？」

シリウス「そうすりゃ、俺のはやてコレクションが増えるもん」

はやて「なんやと！如何言うことやそれ！？」

シリウス「フフフ、気になる？気になるのなら今日俺の部屋に来る？朝までずっと寝かせないよ？」

はやて「なっ／／／／／／／！？」

シリウス「クックックッ、何を考えたのかな？冗談だよ♪やっぱはやては面白いな、かｗ「乙女心を弄ぶな！！」ツッコミハリセンッ！！？」

まったく、この目の前でのびてる男は何考えとんのやろ？いや、何も考えてへんのか・・・。けど・・・・一瞬だけ・・・ほんの一瞬だけさっきの言葉にドキッとしてしもうた。

シリウス「イタタタ、はやて、もう少し優しくしてよ」

はやて「ほんならからかうのをやめな」

シリウス「うん、無理だな。だから・・・・」

――フワッ――――

――――え？――――

今、うち何されとるんや？え？シリウス君に抱きしめられてる！？

はやて「ちょ、な、何しｔ「辛かったろ」・・・え？」

シリウス「此処で全部吐き出しなって、辛い時は辛いって言いなよ。俺達は絶対にはやてを見捨てたりはしないからさ。こういう時は頼ってくれよ」

はやて「あ、え・・・う・・・・・うう・・」

そんなこと・・・そんなこと言われたら・・・・うちは、もう我慢できへん。

シリウス「ほら、今なら俺以外誰もいないからさ、何言っても大丈夫。全部俺が聞いてやるよ」

はやて「う、う、うわあああああああああああああああああああん！！！」

それを聞いた瞬間、今まで堪えていたものが弾けた。目の前にいるシリウス君にしがみ付いて暫くの間、泣き続けた。その間、シリウス君は、何も言わないでずっと頭を撫でていてくれた。

はやて　SIDE　OUT

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――

はやて「も、もうええで」

そう言ってシリウスから体を離す。彼の服は、はやての涙で濡れていた。

シリウス「そうか？どう？いっぱい泣いて、スッキリした？」

はやて「ま、まあ・・・多少は・・・」

今更になって恥ずかしくなり顔を赤くして俯く。何時もならこういう時にシリウスはからかうのだが今回は、何もしなかった。

シリウス「それは何より。それじゃあ、早くゲンヤのとこに行ってさっさと帰ろう」

はやて「なあ、シリウス君」

先に歩き始めたシリウスの背中を見て問いかける。

シリウス「ん？何？」

はやて「如何して、うちをそんなに構ってくれるんや？」

シリウス「如何してか・・・・それはね――――」

そう言ってはやてに振り向くその笑顔は今まで見てきた中で一番ドキッとした。

シリウス「はやてと居ると楽しいからさ！」

それは、本音なのか、はたまた偽物で本当の気持ちは仮面の中に隠しているのかは分からない・・・・。

けど・・・・。分かったことがあった。

シリウスは本当に優しくてそして、不思議な人だということが・・・・。

後日、はやて宛ての大量の謝罪文が六課に届いたのは言うまでもない。

# 第十一話（後書き）

作者「後半少しやってしまった感がある」

シリウス「いや、キーワードどうりじゃん。別に良くない？」

作者「それと前半読んでみて自分でも何じゃこりゃ？っとなってしまった」

カイン「いや、お前の文章が壊滅的なのはもう知ってるから。ＦＷ陣の訓練もまあこうなるとは読者の皆様も予想してたと思うよ？」

作者「鬱だ……穴があったら入りたい。ＦＷ陣の連係プレーが書けない時点でヤバイ、マジヤバイ…ｏｒｚ」

シリウス「俺としてははやてを抱きしめられたから良いんだけど？」

バルド「そりゃ個人的な意見だろが。それよりも作者に今更聞きたい。何故にロイドとコレットがいるんだ？他は全員オリジナルキャラなのに？」

作者「無論それは、私がＴＯＳ大好きだからさ！！その中でもロイドとコレットは特別好きです。始めてテイルズ作品をやったのもこれですし、ゲームで感激感動を始めてしたのもこれでした。だからこの作品に二人を出したんです！！」

カイン「おお、熱心に語るね…」

作者「フッ、今じゃコレットは光、闇、雷はダメージ半減、更に他

属性は全て無効、吸収まで行ったぜ！ロイドも火と地属性は無効だぜ！！リビングアーマー？
無駄無駄！！詠唱無しで撃ってこようがコレットには効かん！！遠くから術連射だぜ！！」

カイン「コレット何気に凄かった！？」

コレット「わー、凄いね」

ロイド「お前のことだよ！？」

作者「話が逸れたね…。さて、次回もまた日常編になるかと思います。戦いが少ない？すみません。これからはドンドン厳しい戦いにする予定なので、え？戦闘描写が酷いからあんまり期待しない？…ごめんなさい。それと感想、評価などお待ちしております。何か気付いたことがあれば教えて下さると助かります。では、次回もこれを読んで下さった読者の皆さま宜しくお願いします！！」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第十二話（前書き）

作者「またも一週間あいてしまった…ｏｒｚ」

バルド「お前というやつは」

カイン「覚悟はできてんだろな！」

作者「すんませんですたーー！！」

クラウド「読者の皆さま遅くなり大変申し訳ありませんでした」

作者「では、前書きはこのくらいにして本編をどうぞ！今回はカインがトンデモナイことしてくれました」

カイン「は？（。ー。）」

# 第十二話

なのは「それでね、カイン君はまた私に早く寝ろって言うんだよ」

フェイト「バルドもそうなんだ。夜更かしするなって何時も言うんだよ」

二人が話しているのは勿論、カインとバルドである。

彼らが自分の補佐官になったことで最近はなのは達は夜遅くまで仕事をすることが無くなった。如何やら、二人は、まだ自分たちのことを子供扱いしている二人に不満があるようだ。

作者的には何て贅沢な不満だろうと思うのですが・・・・。

そうして二人で談笑していると・・・

カイン「おりゃあーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

ヴィヴィオ「きゃあーーーーーーーー♪」↑喜んでる悲鳴

ビューーーーン！！

一陣の風が吹き抜けてった。

なのは「・・・・・今、カイン君とヴィヴィオの声が聞こえたような気がする」

フェイト「・・・奇遇だねなのは。私も、カインとヴィヴィオの声が聞こえたよ」

風が通り抜けたほうを一度見る。すると・・・

カイン「だっしゃあーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

ヴィヴィオ「きゃあーーーーーーー♪」↑再び嬉しそうな悲鳴

ビューーーーーン！！！

再び、風が吹き抜けた。

なのは「今、間違いなくカイン君とヴィヴィオがいたよね！？」

フェイト「というか、何してるのあの二人！？」

そう言って立ち上がり周りを見ると二人の前に風と共にカインと背中に背負われたヴィヴィオが現れる。

カイン「ぜぃ・・・・ぜぃ・・・・お！よう二人ともそこで何してんだ？」

な・フ「「それは、こっちのセリフだよ！？」」

息を荒く吐きながら聞くカインにツッコミを入れる二人。

ヴィヴィオ「なのはママ、フェイトママ！！」

なのは「ヴィヴィオ、カイン君と何してたの？」

ヴィヴィオ「えっとね・・・・ジェットコースターごっこ！」

フェイト「ジェットコースターごっこ？」

カイン「ヴィヴィオが暇そうだったからな、取りあえず、背負って走ったらもっと速くって言ったからジェットコースターごっこをしてみた」

そう言ってヴィヴィオを降ろす。

カイン「なのはもフェイトもやるか？」

なのは「え、遠慮するの・・・・」

フェイト「丁重にお断りさせてもらうよ」

乗ったら間違いなく顔が真っ青になるだろうと確信しているため二人は、全力でお断りさせてもらった。というか、カインの今の速度は間違いなくジェットコースターを超えてただろう。

カイン「そうか？残念だ。そう言えばバルドがフェイトを探してたぞ。なんでも、フェイトと一緒に局の本部に呼ばれてるってさ」

フェイト「え！そうなの？急がなきゃ！なのは、ヴィヴィオ行ってくるね！！」

なのは「うん！頑張ってねーーー！！」

ヴィヴィオ「フェイトママーー！！いってらっしゃーーい！！」

手を振って走って行くフェイトになのはとヴィヴィオも手を振って応えた。

カイン「あ、そうだ忘れてた。レイジングハート、ちょっといいか？」

レイジングハート［何でしょうか？］

カイン「いやさ、お前となのはの使うブラスターシステムってさ結構お前らに負担が掛かるだろ？それで、ロイドとシャーリーに頼んで少し改良したいんだが・・・いいか？」

なのは「え、改良？」

カイン「そ、今の状態じゃ今後は厳しくなりそうだからロイドに頼んでみたんだよ。あいつとシャーリーで頑張れば何とかいけそうだしな。ってことでレイジングハートを拝借したいのだがやっぱだめか？」

なのは「そんなことないよ！寧ろお願いしたいくらいだよ。ね、レイジングハート？」

レイジングハート［はい、マスターの言うとおりです。私も、もっと強くなりたいと思っていましたから大歓迎です］

カイン「そっか、じゃあ、少しの間預けてくるな」

それになのはは、頷いてカインにレイジングハートを渡した。

カイン「さてと・・・早いとこシャーリーに渡して・・・・ってヴィヴィオはどこ行った？」

なのは「あれ？さっきまで此処にいたのに・・・」

ヴィヴィオ「なのはママ、カインパパーーー！！」

すると、向こうからやって来るヴィヴィオ。

カイン「ヴィヴィオ、お前何処にいっｔ――って如何したヴィヴィオ！？」

なのは「ヴィヴィオ！？何でそんなに汚れてるの！？」

そう、今のヴィヴィオは何故か周りに埃等がくっ付いている状態だった。目を離した約５分の間に何が！？

ヴィヴィオ「？・・・・分かんない。気づいたらこうなってた」

カイン「・・・なあ、なのは。この六課には人が気づかないうちに埃を被せるお化けでもいんのか？」

なのは「そんなのいないからね！？」

いたとしても何とも御茶目ではた迷惑なお化けだよ。

なのは「とにかく、ヴィヴィオ一緒にお風呂に行って埃を落とそうか」

ヴィヴィオ「お風呂？うん！行く行く！！」

なのは「ということだからカイン君レイジングハートを宜しくね」

そう言ってヴィヴィオと一緒に行った。

カイン「さてと・・・・シャーリーに渡しに行くか」

カインもまた、レイジングハートのパワーアップを頼むためにデバイスルームに行くのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――――

フェイト「バルド！ごめん、遅くなっちゃって」

バルド「気にすんな。俺も今来たとだ」

そう言って二人は、本局に行った。

～～ＩＮ　本局～～

本局について、フェイトは移動しながらバルドに色々聞く。

フェイト「ねえ、グランディオンとヴァルハラってどんな所なの？」

バルド「そうだな～。ヴァルハラの街並みは中世代みたいな感じだったしグランディオンは科学が進歩した感じだったな。といっても、どっちも大国だけどな」

フェイト「そうなんだ。そういえば、ロイドとコレットってどうやってこっちから移動したの？」

バルド「ああ、あれのことか。グランディオンは、一度座標を確認すれば自由にそこに転送出来る大型の転送装置があるんだよ」

フェイト「え！てことは、六課には何時でも来れるってこと？」

バルド「まあ、そう言うことになるな。けど、めっちゃ燃費悪いから連続で転送は出来ないけどな」

フェイト「そうなんだ。何時か行ってみたいな・・・」

バルド「全員の休暇が取れたらな」

二人で談笑しながら歩いていた。そして、二人が本局で働いている女性職員とすれ違った時フェイトの耳にヒソヒソ話が入った。

女性職員1「ねえ、あの人凄くかっこよくない？」

女性職員2「ホントだぁ～。あ！あの人最近局に入った人だよ」

などと言う声が聞こえフェイトの心中は穏やかでは無くなった。

フェイト（バルドってもうそんなに知られてるの！？）

そしてすれ違うたびに女性局員から黄色い声や熱い視線がバルドに向けられるが当の本人はまったく意に介さない。そして、フェイトは・・・

フェイト（後で、バルドが此処で何をしたか色々聞かないとね・・・・フフフ♪）

彼の後ろで黒い笑みを浮かべていた。

バルド「ブルッ、何だこの感じは・・・。今まで感じたことのない悪寒が・・・・」

女性局員3「あ、あの人って局内三大美男子の一人のバルドさんじゃない！」

女性局員４「かっこいい！お近づきになりたいな」

フェイト（フフフ・・・バルドってばもうそんなに人気なんだ～）

バルド「馬鹿な・・・悪寒が第二段階に入っただと・・・・！？」

嫌な気配の正体を探すべく周囲を見回すバルド。そんな時・・・

男性局員１「おい、あれってフェイト執務官じゃないか？」

男性局員２「何時も変わらず美しいな。スタイルも良いし、美人で仕事もできて、おまけに料理も出来るとは、まさに才色兼備だ」

男性局員３「それに、局内三大美人の一人・・・。ああ～何時かその笑顔を俺達にも見せてくれないかな～」

バルド「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

それが耳に入った瞬間、

――――シュッ、バゴンッ！！――――

一瞬でヒソヒソ話をしていた男性局員ズの前に移動僅かに三人の男性局員の顔の間に出来ていた隙間に右足の蹴りを入れ壁をぶち抜い

た。

男性局員ズ「「「《《ガタガタガタガタガタガタガタガタ》》」」」

バルド「おい・・・下らねえこと言ってないでさっさと仕事しろ。さもないと・・・・社会的に抹殺するぞ」

殺気を全開にして最後の言葉を三人にしか聞えない様に低く言う。それを聞いた男性局員ズは顔を真っ青にして何度も全力で頷いて一目散に各々の仕事場に散って行った。

バルド「ったく、何が笑顔を見せてほしいだ。そんなに見たかったら一生懸命働けっての。そうすりゃ、何時か見せてもらえ・・・・ないか・・・」

そう自己完結してフェイトのもとに戻る。そして気づいた。フェイトの様子がおかしいのに・・・・。

バルド「ん?どうしたフェイト?」

フェイト「フフフ・・・バルド、この前ここで何があったのかキッチリキッカリ、初めから最後まで、詳しく聞かせてもらうよ」

バルド「ブルッ、この感じはさっきの・・・・ってかフェイト、何でバルディッシュをセットアップしてんだよ・・・・」

フェイト「一切合財、全部聞かせてもらうんだからーーーーー！！
！！」

バルド「ちょっ！？あぶっ、行き成り如何した！落ち着け！！」

この後バルドは何でか怒ってるフェイトを全力で止めました。
そりゃもう全力で・・・。↑重要なので二回言ったよ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

バルドとフェイトがそんな風にじゃれ合ってる（？）時、六課でも事件発生。

カイン「すまん、なのは」

なのは「うう、だ、大丈夫なの。ぜ、全然気にしてないから・・・・
／／／／／」

今現在、カインはなのはに頭を下げてました。なのはは、顔を・・・というか首まで真っ赤に染め彼の顔を見ようとしない。

さて、何故この様な状況になったのか説明しましょう。

――――数十分前――――

なのはからレイジングハートを預かり、シャーリーとロイドがいるデバイスルームに向かった。

カイン「入るぞ」

そう断ってから中に入ると部屋にはロイド、シャーリーそしてコレットがいた。

ロイド「カイン、レイジングハートは借りれたのか？」

カイン「ああ、なのはもレイジングハートも了承してくれた」

シャーリー「それじゃあ、始めましょうか」

ロイド「でもいいのか？俺、デバイスなんてよく分んねえぞ」

シャーリー「大丈夫です。そこは、私が説明しますから」

コレット「ロイド、私も手伝うよ」

ロイド「サンキュー、コレット。それじゃあ、レイジングハートよろしく頼むな」

レイジングハート［此方こそよろしくお願いします］

それを聞いた後カインはデバイスルームを後にしデスクワークをしに行こうとしたのだが、はやてから連絡が入る。

カイン「はやてか？如何した？」

はやて『カインさん、今、暇？』

カイン「まあ、デスクワーク位しかないから暇っちゃ暇だな。それで如何した？」

はやて『いやね、ちょっと部隊長室に来てほしいんやけど』

カイン「了解、今からそっちに行くよ」

そう言って通信を切り部隊長室に向かう。

カイン「んで、何か用か？」

はやて「えーとな、寮の電球の取り換えをしてもらいたいんや」

カイン「は？」

はやて「せやから、寮の電球の取り換えをしてもらいたいんや」

カイン「何でまた？」

はやて「いやね、最近寮の明かりが少し暗くなってるところがあるからそこの電球を替えようかなっと思ったんやけど」

カイン「そっか、わかったよ。それで場所は？」

はやて「これに書いといたからそこの交換を頼むで」

そう言ってカインに印が付いている紙を渡す。

カイン「ふ～ん、こんなにあったのか・・・なあ、女子寮まで行かないといけないのか？」

そう、その中には女子寮にも印が付いていた。

はやて「せやけど、どうかしたん？」

カイン「いや、中に誰もいないよな？」

はやて「そのことなら大丈夫や。今は寮内には誰もおらへんよ」

カイン「なら、問題ない・・か？まあ、とりあえず行ってみるよ」

はやて「頼むで～～」

そう言って去って行ったカインに手を振るはやて、その頭には丸い耳が付いている様に見えた。

シリウス（やっぱ、はやてはタヌキだ・・・・）

それを見たシリウスは、そう思ったとかないとか・・・

―――――――――――――――――――――――――――――――――

手早く電球の交換をし終え残すは女子寮だけとなった。

カイン「ホントに大丈夫なんだよな・・・？」

サイフォス［ここで言っても始まらん。さっさと終わらせるのが良いのではないか？］

カイン「それもそうか」

サイフォス［では、私は戻る］

そう言って再び虚空に消える。

カインは、所々暗い電球を取り替えていく。

カイン「ふぅ～～、あと少しだな」

残りはあと少しである。あと少しでこの作業も終わかなと思っていたその時・・・・

ヴィヴィオ「カインパパ！！」

カイン「ぐおっ！？」

背後から腰に突然、衝撃が来た。その一撃はかなり重く危うく腰が折れるところだった。弾丸アタックを仕掛けてきた者に振り向きながら注意をかけようとするが・・・

カイン「痛つつつ、危ないだろヴィヴィ――――」

ヴィヴィオと言いかけて言葉が止まった。何故ならそこには、金色の髪が濡れたままで、しかもタオル一枚しか体に巻いていないヴィヴィオがいたからである。

カイン「なっ！！？なんて恰好してんだお前！！」

慌てて自分の上着を掛ける。

ヴィヴィオ「ん～？さっきまでお風呂に入ってたの！！」

それに元気よく答えるヴィヴィオを見て、カインは嫌な予感がした。

カイン（ま、まさか・・・・！！）

なのは「ヴィヴィオ～～！！まだ濡れてるんだから、ちゃんと乾かしてから――」

そこに廊下の角からひょっこりとなのはが出てきた。

その姿やヴィヴィオと同じくタオル一枚を体に巻いただけであった。

白い磁器のような肌を桃色に上気させ、濡れた長い艶やかな髪も何時ものサイドポニーではなく

下ろしただけで・・・・

うあああああ！！もう駄目！！これ以上私の力では表現できません！！！

カイン「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

なのは「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

暫し二人は互いを見つめあっていた。そして、その沈黙をなのはが初めに破る。

なのは「ど・・如何して・・・カイン・・く・・んがいるの？」

カイン「い、いや・・・はやてに頼まれて・・・・寮の電球の交換にだな・・・・」

なのは「あ・・・そう・・・なんだ。あ、あははははは・・・・」

カイン「そ、そうなんだよ・・・。あ、あははははは・・・」

なのは「きゃああああああああああああああああああああああああっ！！！！」

カイン「うわーーーーー！！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいいいいいい！！！」

なのはの悲鳴が六課の隅々にまで届いた・・・・。

そして、先ほどの会話に至る・・・・。

カイン「ホントにすまなかった！！！はやてから今は誰もいないから大丈夫だって言われていたから、なのはがいるとは思わなかった。完全に俺のせいだ！！」

なのは「そ、そんなことないよ！私だってあんな恰好でいかなきゃ、こんなことにならなかったんだもん。私も悪いよ！！」

カイン「いや、俺が！！」

なのは「ううん、私が！！」

そう言って二人同時に互いの顔を見てしまった。

カ・な「「っ／／／／／／／／／！！」」

そして、また同時に顔を真っ赤にして視線を逸らす。

なのは「ねえ・・・カイン君・・・」

カイン「な、何だ・・・？」

なのは「見たんだよね・・・・？」

カイン「う・・・・」

それを言われさっきの光景を思い出してさらに赤くなる。なのはのあの姿はもはや絵になる様な様でヴ〇ー〇スも布を置いて走って逃げるとカインはそう思った。

なのは「だ、大丈夫だよ!!き、ききき気にしてなんかないから、この話はもうお終い!!わ、忘れよう!!」

カイン「あ、ああ。わかった、今忘れるから待ってろ!!」

――ガンッガンッガンッガンッ!!↑壁に何度も頭をぶつける音

なのは「ちょっ!?カイン君、そんなことしたら駄目だって!!」

カイン「心配するな、俺の頭は丈夫に出来てる」↑頭から大量出血

なのは「すでに手遅れだった!!?」

カイン「う〜〜ん」バタッ!

なのは「きゃあああああああ!!カインくーーん!!」

その後、カインは医務室に搬送されるが大事には至らなかった。

六課でそんな事が起きてる時やっとのことでフェイトを落ち着かせてある部屋の前に着く。

バルド「ったく、だいぶ時間をくっちまった」

フェイト「うう、ごめんなさい・・・／／／／／」

今更になって恥ずかしくなり顔を真っ赤にして俯く。

バルド「ま、いいや。取り合えず入るぞ」

そう言ってドアをノックする。

???「どうぞ」

バルド「邪魔するぜ」

バルドの後を追って入るとそこにいたのは・・・・

クロノ「二人ともよく来てくれた」

リンディ「あら、バルド久しぶりですね」

フェイト「クロノ！？それに母さんまで！？」

そこには、フェイトの兄クロノと母リンディがいた。それを確認した後バルドは周囲に防音結界を６重に張る。

バルド「取り合えず、これで外部には音は聞こえないだろう。それにしても、クロノがいるのは分かっていたがリンディまでいるとはな」

リンディ「あら、私はまだ現役ですよ？それにしても、バルドが局に入ってくれたのは私達としては嬉しいことよ」

バルド「勘違いするな。俺達は、六課を・・・フェイト達が今いるあの場所を守るために局に入っただけだ。お前らに協力するとは一言も言ってない」

クロノ「バルド！お前調子に乗るのも大概にしろ！！」

バルド「はっ！１０年前に俺に２回もボコボコにされたＫＹヤローが何言ってんだか。単純計算すれば今じゃお前よりフェイトの方が十分強いが？」

クロノ「くっ・・・」

リンディ「もう、二人とも喧嘩しないの。此処に呼んだのはそんなことするためじゃないでしょ？」

喧嘩腰の二人をリンディが窘める。

フェイト「それで、母さん達は如何して私達を呼んだの？」

フェイトが疑問に思っていたことを口にする。

リンディ「本当はなのはちゃんやはやてちゃん、それにバルドの仲間の皆さんにも来てもらいたかったけど・・・そう言う訳にもいかないし、だから、二人だけを此処に呼んだの」

バルド「んで？話ってのは何だ？大体予想はつくが・・・・」

そう言ったバルドにリンディが頷く。

リンディ「今回の襲撃事件について少し聞きたいことがあるの」

それを聞いたフェイトは表情を引き締める。革命組織『神の意志（プロヴィデンス）』。

ミッドを・・・いや、局の転覆を狙う組織。

クロノ「今回襲撃してきた『プロヴィデンス』なる組織を調べてみたんだがどうも最近現れた組織の様だ。局で調べてもあまり情報が無い」

フェイト「私の方でも調べてはいるんだけどこっちも同じだよ」

リンディ「情報が少なすぎて此方としても動くに動けない状態なのよ」

バルド「じゃあさ、そう言うのに詳しい奴に聞きゃいいんだよ」

フェイト「え？如何言うこと？」

バルドの発言に皆視線を向ける。

バルド「要するに裏社会に詳しい奴のことさ。ま、実物見た方が早いか・・・・」

そう言うとバルドは何処かに連絡を入れる。すると目の前にウィンドウが現れる。

？？？『はいはい、どなた・・・って、バルドの旦那じゃないっすか！！』

バルド「よお、久しいな、スカー。元気にしてるようだな」

スカー『旦那も元気そうで何よりっす！！おーーーい、皆！！旦那から通信が来たぞ！！！』

そう言うと画面に続々と人が現れる。

部下１『旦那！お久しぶりです！！お元気そうでなによりです！！』

部下２『わーい！旦那の顔を久しぶりに見たぜ！スカーのアニキ、今日は宴ですね！！』

向こうでは何やら騒ぎまくっている。それを見ていたフェイト達は手を震わせながら彼らを指差す。

フェイト「ＳＳ級犯罪組織、『ドルフィン』！？」

ＳＳ級犯罪組織『ドルフィン』、現在、犯罪組織の中で唯一ＳＳ級に認定されている一大組織。主な罪状は窃盗や違法発掘等で、狙った獲物は必ず奪い姿を消す。主に大富豪等の金持ちから物を盗みそこが如何に厳重だろうと突破して誰ひとり捕まることなく逃げ去る。

スカー『ん？・・・っげ！？そこにいるのは管理局の人間じゃないっすか！？』

部下1『えーー！！てことは、俺達捕まんのか！？』

向こうでは何やら慌ててる様子。

バルド「お前ら落ちつけって。取り合えず、三人に紹介するぞこいつらは『ドルフィン』、義賊だ。
スカー、この三人は右からフェイト、クロノ、リンディだ」

フェイト「義賊？」

バルド「ああ、金持ちどもから金品を奪ってそれを貧しい人達に分け与えたり思い出の品を奪った奴らからその商品を盗み返ししたりするのがこいつ等の仕事だ。お前らもそんな慌てんな。こいつ等は信用できる奴らだ」

スカー『そうですかい。で、此方に連絡してきたってことは何かあったんですかい？』

向こうも落ち着いたのかそう聞く。

バルド「お前らに聞きたいことがある。『プロヴィデンス』と言う組織を知ってるか？」

そう言うと向こうは一度考える仕草を見せた後、思い出したように手をポンッと叩いた。

スカー『あー、『プロヴィデンス』っすね、聞いたことありやすよ。何でも管理局を潰す潰すって豪語してる奴らっすね？』

バルド「そのことで何か知ってることはないか？」

スカー『えーっとですね・・・聞いた話だと幹部らしき人がいてそれは、全部で１８人いるらしいですよ。後は、何かを集めてるってことぐらいですね。その他は、分かりやせんが・・・』

バルド「それだけ聞ければ十分だ。情報料として後で金振りこんでやるよ」

スカー『まじっすか！？ありがとうございます！！あのー、旦那。聞きたいことがあんすけど』

バルド「何だ？答えれる範囲ならいいぞ」

バルドは、それに紅茶を飲みながら答える。

スカー『其方にいるフェイトって言う御嬢さんは、旦那の奥さんすか？』

バルド「ぶっ！！」

フェイト「ふえっ／／／／！！？」

それを聞いた瞬間バルドは飲んでいた紅茶を吹いた。その反応に向こうでは『おお～～！！』っと声を上げ何やら勘違いをしてるようだ。それに乗じてリンディがニヤリと笑う。

リンディ「あら、良く分かったわね～」

スカー『あ、やっぱりそうなんですか！いやー見た感じ美人だし、旦那にお似合いの人に見えたんでねえ』

バルドが咽てる間に何やら二人でドンドン話が進んでいく。

リンディ「でもね、この二人は、そういう関係なのにまだ結婚してないのよ～。早く二人の孫が見てみたいのにね～」

フェイト「～～～ッ／／／／／／／／！！！」

それにフェイトはボンッ！！と音をたてて顔を真っ赤にする。そして脳内がショート、固まってしまった。

バルド「ゲホッ！！、ゲホッ！！ちょっと待て！！何勝手に過去を捏造してんだよ！！」

スカー『あり？違うんスか？』

バルド「違うっつーの！そもそもそんなことしてないっつーの！！
ってか、テメ―ら、変なこと聞きやがって覚悟はできてんだろうな
！！」

指をパキポキ鳴らしながらスカー達を見るその形相たるや般若の様である。それを見たスカー達は顔を真っ青にして向こうでは『大変だー！旦那がキレたーーー！！』、『世界の終わりだーーー！！』、『粛清されるーーー！！』っと部下達が半ば混乱状態に陥っているのかドタン、バタン、ガッシャーン！とか物凄い音が聞こえる。

スカー『わーー！！すんませんでしたーー！！そ、そそそそれでは、何か分かりましたら最速で連絡しますんでこれにて失礼します！！！！』

そう言って一方的に通信を切った。

バルド「ったく、あの馬鹿共は、要らんこと言って余計混乱させやがって・・・」

リンディ「あら、でも私としては、さっきのは願望だったりするんだけど？それにしても、あれが今、ＳＳ級犯罪組織なんて予想だにしてなかったわ」

クロノ「何にしても犯罪者には変わりない。早速、逮捕に向かうべきだ」

バルド「お前はまだその“自分達は正義です”思考持ってんのかよ。さっき言っただろ、あいつ等は、私利私欲のために動いてんじゃないって」

クロノ「だが、罪を犯したことに変わりはない。そいつ等だけ見逃すわけにはいk―「人のこと言えないだろ、お前ら管理局も・・・」―何？」

バルド「リンディ、気付いてんだろ？この局はかなり腐り始めてるってのは・・・」

リンディ「・・・・・ええ、昔よりも更に悪化してしまったわ」

クロノ「なっ！母さん、それは如何言うことですか！？」

そこで、バルドは、管理局が裏で行っていた行動を話す。初めはクロノは信じられなかったが今回の襲撃事件もこれに関係がある事を話すと頭を抱えた。

クロノ「何ということだ・・・。まさか、僕達が守るべき世界でその様なことが起きていたとは…」

フェイト「うん・・・私も最初は認めたくなかったよ。でも、世界を旅していたバルド達が言うことだから本当のことなんだって思ったよ」

クロノに説明してる間にフェイトも元に戻り、自分達の所属してい

る組織がその様なことを裏でしていたのを言われたことを思い出して苦い表情をする。

バルド「その事については、ゆっくりと進めて行くしかないな。根はあまりにも深く広がってるからな」

リンディ「そうね。今は、目の前の事件に集中しましょう。早速だけど、二人には、ある世界に行ってもらいたいの」

バルド「急な話だな」

リンディ「さっきの話で『プロヴィデンス』は、何かを探している。それで、今、ある次元世界で不審な目撃情報があるの」

フェイト「それが、『プロヴィデンス』の可能性があるってこと？」

リンディ「そうなるわね。場所は、第４７管理世界、エリダリア」

フェイト「エリダリア・・・・。つまり、潜入捜査かな？」

リンディ「そうなるわね。人数は最大で６人までにして欲しいわ。なるべく、怪しまれない組み合わせだと良いわ」

バルド「わかった、それは、こっちで決める。もし何かあったら連絡を入れてくれ」

それに、リンディとクロノは頷き、フェイト達は六課に帰った。

第４７管理世界、エリダリア・・・・そこで、彼らを待ち受けているのは何なのだろうか・・・・。

## 第十二話（後書き）

作者「という訳で次回はエリダリアに行って不審人物の調査及び拘束の話になります。いや～やっちゃいましたねカインの奴」

なのは「見られちゃったの／／／／／／／」

コレット「だいじょぶだよ！カインは悪意はないんだから」

なのは「もうお嫁にいけないの…」

作者「じゃあカインにもらわれりゃいいじゃん」

なのは「カ、カイン君に！？きゅ～～／／／／／」バタッ！

フェイト「なのは！？」

作者「ありゃりゃ、気絶しちゃったか。まあ、暫くすれば目を覚ますからそのままにしといて、次回の旅行には誰を入れようかな？」

セフィリア「考えてなかったんだ……」

作者「アハハハ…え～っと読者の皆さま次回はなるべく早く出せるように頑張りますのでこれからも宜しくお願いします！！」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

## クリスマス直前番外編（前書き）

平日ギリギリ投稿！クリスマス直前の今日、皆様は如何お過ごしでしょうか？
学校の生徒は、昨日から冬休みの人も多いかと思います。会社員の方々は、予想すると年末仕事で書類などに埋もれていると思われますが、少しの空き時間にこれを読んで頂ければいいと思います。

今回は番外編！！懐かしのあのＣＭを使って（パクッてｗｗ）なのは達にハッチャけてもらいました。キャラ崩壊率１００パーセントだと思われるので見たくない方は其の侭スルーしてください。

# クリスマス直前番外編

教師役　コレット・ブルーネル

ガルド・ドム・バロム

ヴィータ

シグナム

バルド

カイン

シリウス

ヴァイス

リンディ・ハラオウン

生徒役　高町なのは

フェイト・T・ハラオウン

八神はやて

ティアナ・ランスター

スバル・ナカジマ

キャロ・ル・ルシエ

エリオ・モンディアル

暴走!!ドラゴン先生!!

なのは「3年C組!」

生徒一同「「「「「「「「「ドラゴン先生!!!」」」」」」」」」

シグナム「ホァチァー!!ホ～～アチョ～～!!!ア～～ホァチョ～～～!!」

生徒一同「（゜Д゜）ポカ～ン」

～～～～～～～～～～～～↑黒板に書かれた字

シグナム「ハイ、此処テストに出ま～す」

生徒一同「Σ（　゜Д゜）！！？」

はやて「やってられへん……」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

意外と厳しい！激安先生！！

フェイト「3年D組！！」

生徒一同「「「「「「「「激安先生！！！」」」」」」」」

シリウス「一九八のビデオデッキが二割引き！！ボーナス一括払いで五パーセントオフ！今ならポイント還元が十三パーセントが着いて、さて！幾ら！！」

その後……テスト返却

ティアナ・ランスター　三十八点

ティアナ「六割引きだってさ……」

エリオ「まだマシですよ。スバルさんなんて…」

スバル・ナカジマ　０点！！　出直してこい！！

スバル「ｏｒｚ」

ティアナ「………ご愁傷さま」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

最後は真面目！？ＤＪ先生！！

はやて「三年Ｆ組！！」

生徒一同「「「「「「「ＤＪ先生！！」」」」」」」

ヴァイス「次、次！次の問題は〜〜♪高、高、高町さん！！」

なのは「3Xです」

ヴァイス「♪、♪、♪、♪〜〜、♪、♪♪〜〜♪、♪、♪〜〜〜…」

違います」

なのは「傷つくの〜」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

授業にならない！！将軍先生！！

ティアナ「3年G組！！」

生徒一同「「「「「「将軍先生！！」」」」」」

ガルド「授業じゃ！！」↑竜に乗って登場

ガルド「この問題が分かる者はおるか？」

生徒一同「「「「「「「……………」」」」」」」↑平伏中

ガルド「居らんのか？」

ティアナ「ハイ」

ガルド「図が高い！！」

ティアナ「如何すりゃいいのよ……」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

かなりの無茶ぶり！！ツッパリ先生！！

スバル「3年J組!!」

生徒一同「「「「「「「「ツッパリ先生!!」」」」」」」」

バルド「漢字テストだ!!」

吐露非狩古鬱

バルド「フェイト!!3年だったら読めんだろこん位!!」

フェイト「……読めません……」

バルド「ト・ロ・ピ・カル・フル・ーツだあぁぁぁぁ!!」

フェイト「そんな無茶な……」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

意外とリアル！？昼メロ先生！！

エリオ「3年H組！！」

生徒一同「「「「「「「昼メロ先生！！」」」」」」」

コレット「芭蕉の句には……」

ロイド「コレット！！」

コレット「今更何よ！！」

ロイド「俺が悪かった……」

コレット「バカ！！寂しかったよ！！」

クラトス「（ガラガラッ！！）この泥棒猫が……」

コレット「お父様！？」

エリオ「授業しようよ……」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

居たら楽しい！！黒ひげ先生！！

キャロ「3年S組！！」

生徒一同「「「「「「「「「「黒ひげ先生！！」」」」」」」」」」

カイン「……」

なのは「（ドキドキ……）サク…」

カイン「……」

エリオ「（ドキドキ……）サク…」

カイン「……」

キャロ「（ドキドキ……）サク…」

カイン「……」

スバル「（ドキドキ……）サク…」

カイン「パシュウ～～！！」

スバル「？ビクッ！！」

生徒一同「ああ〜〜」

カイン「ポンッポンッ！掃除当番です」

スバル「そんなのってアリ！？」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

透明先生変えました！

意外と実在する！？子供先生！！

なのは「3年X組！！」

生徒一同「「「「「「「子供先生！！」」」」」」」

フェイト「先生遅いね？」

エリオ「何処に行ったんでしょうね？」

ヴィータ「いるぞーー！！何処に目を付けてやがんだ！ああ！！」

生徒一同「？（　゜Д゜）！！？」↑目の前にいたのに気付かなかった

スバル「（モグモグ…）「授業中に何食ってんだ！」ビクッ！」

廊下歩行中～～

フェイト「それでね…」

なのは「へぇ～、そうだったんだ」

ドンッ！！

ヴィータ「イテッ！！」

フェイト「きゃっ！せ、先生いたんですか！？」

ヴィータ「いたよ！！」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

永遠と授業を終わらせない！！校長先生！！

フェイト「冬休みだよ！！」

生徒一同「「「「「「「校長先生！！」」」」」」」

バルド「校長の有り難い話だ！！」

リンディ校長「明日から冬休み……の！！筈でしたが！！」

シグナム「ホァチャーー！！」↑校長の服を引っぺがし、中から審判服の校長登場！

リンディ校長「遅刻や居眠りでロスタイムがあるため2学期を続行します！！」

生徒一同「？（ﾟ Д ﾟ；）！！！！？？」

な・フ・は「「「もう～～いや！！！」」」

## クリスマス直前番外編（後書き）

如何でしたか？…つまらない？ごめんなさい、自分のカビの生えた脳ではこれが精一杯ですｏｒｚ

さり気無くＴＯＳのクラトスがいましたねｗ

懐かしいですよね。ファ○タＣＭ。個人的にはヤンキー先生とかが好きです。

あの無茶ぶりがなんともはや…

さて読者の皆さんに突然ですがアンケートを取りたいと思います。

今後新しく小説を書くとしたらどれがいいでしょうか？

？　なのはとカインの過去の出会いの物語

？　フェイトとバルドの過去の出会い物語

？　学園物語系

？そんなの後にして今の小説を書け！！

この中から選んでほしいと思います。期限は大体１～２週間程度でお願いします。

では、本日はこれで失礼します。本編は早くて明後日辺りにアップ出来るかと思います。それでは、読者の皆さま、今後とも駄作者ことテッテルを宜しくお願いします！！

# 第十三話（前書き）

予告通りアップすることに成功！！

バルド「今回からエリダリアに行くんだよな？」

そうですね。今回は残念ながら戦闘は無しです。楽しみにしていた方すみません。

カイン「お前のその下手くそな文の戦闘描写を誰も期待はしてんと思うぞ？」

ぐっ……。それを言われると痛いです。でもでも！これが精一杯なんです！！日々精進を重ねていますがこればかりは自分は進歩していないのではっと常々思う今日この頃です。

ロイド「まあ、これからも努力するしかないよな」

そうですね。さて今回、ロイドとコレットにはオリジナル設定を加えさせて頂きました。知ってる方は知ってるあのイベントをちょこっと変えたり（？）しました。

では、本編をどうぞ！！

コレット「何が出るかな、何が出るかな～♪」

ロイド「コレット！？」

# 第十三話

はやて「エリダリアに潜入捜査やって？」

バルド「ああ、クロノとリンディからの依頼だ」

なのは「クロノくん達から？」

フェイト「うん。何でも不審な人物を確認したみたいだから私達が行くことになったみたい」

フェイト達は、六課に帰った翌々日、一緒に行くメンバーを如何するか考えていた。

バルド「う～ん、どうすっかなー」

此処を守るためにも六課陣はあまり連れて行く訳にもいかない。如何するかと考えていた時、

ロイド「お～い、なのははいるか？」

コレット「お邪魔しま～す」

部隊長室にロイドとコレットが入って来た。

なのは「如何したの？ロイド君」

ロイド「ああ、レイジングウハートの調整が終わったんだよ」

なのは「本当！」

ロイドはなのはにレイジングハートを渡す。

バルド「あ、そうだ。ロイド、コレット二人とも一緒に来ないか？」

コレット「何処に？」

バルドは、二人に今回の潜入捜査について説明した。

ロイド「つまり、観光客になってその不審者を見つけろってことか？」

バルド「そう言うことだ」

ロイド「別に良いぜ。なあ、コレット」

コレット「うん、大丈夫だよ」

ロイド「後、アル達を連れて行ってもいいか？」

フェイト「うん、流石に全員って訳にもいかないけど二体くらいならいいよ」

バルド「残りは2人か・・・・」

カイン「エリオとキャロでいいだろ」

フェイト「二人を？」

カイン「一様、潜入捜査って言う名目だが観光に行く訳だし、家族の二人を入れた方がいいだろ」

バルド「そう言うことか。なら、二人に聞いてみるか」

その後二人を呼び聞くと、行くと答えたので、メンバーは、バルド、フェイト、ロイド、コレット、エリオ、キャロで向かうこととなった。

---

～～翌日～～

～～訓練場～～

なのは「カイン君、フェイトちゃん達大丈夫かな？」

フェイト達は、既にエリダリアに向かった。不審人物がもし、プロヴィデンスの一員の可能性が高いので、なのはは、フェイト達のことが心配だった。

カイン「大丈夫だって。フェイト達には、バルドにロイドとコレットもそれにアルもウルもいる。並みの敵なら歯が立たないさ。それよりも、早くパワーアップしたレイジングハートに慣れる様に頑張ろうぜ」

なのは「うん、そうだね。それじゃあ、カイン君、よろしくね」

カイン「ああ、全力でかかってこい！！」

腕を組んで目の前で飛んでいるカインになのはは、レイジングハートを向ける。

なのは（皆、気をつけてね）

カイン「行くぞ！！ディバインバスター！！」

なのは「簡単には負けないの！！ディバイィィィィンバスターーーー！！！！」

そして、訓練場の上空で銀と桃色の巨大な砲撃がぶつかり合った。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――

～～エリダリア～～

バルド達は、エリダリアに着いた。

ロイド「へぇ～、随分と大きな街だな」

ロイドの言う通り、エリダリアの街並みは大きく、道はコンクリートで舗装されて多くのビルが立ち並んでいた。

バルド「取り合えず、ホテルにチェックインしとかないとな」

はやてが手配しておいたホテルに向かいそこでチェックインを済ませておく。そして、荷物を置いてからこの街を警備している所に向かった。

フェイト「ここだね」

ロイド「結構でかいな」

署内に入り受付に話をすると、署長の所に案内される。そこには、他の所より少し大きめのドアがあった。ノックをすると中から返事があったのでみんなで入る。

署長「皆さん、ようこそ御出で下さいました。私が此処の署長を務めている者です」

署長の挨拶にバルド達も挨拶をして応える。

そして、今回この街で目撃されている不審人物の捜索のために此処に来たことを伝えると、安堵した表情を見せる

署長「我々もその人物を捜索してるのですが、中々、捕まらなくて

困っていたところなんです」

バルド「というと、そいつに被害を受けたのか？」

署長「はい。ここ1週間に6人も被害にあいました」

フェイト「その人達の名簿はありますか？」

署長は、机の中に閉まっていた紙の束をフェイト達に渡す。その紙には、名前と死因、犯行現場等が書かれていた。

一人目　清掃員Aさん　死因　刃物で斬られたことによる失血死

二人目　美術館の受付員Hさん　死因　頭部を何か鋭利な刃物で頭部が貫かれた状態で発見

三人目　警備員Dさん　死因　顔に殴られた跡があることから頭部の損傷による脳内出血が原因と思われる

四人目　警備員Eさん　死因　体をバラバラにされていたため不明

五人目　考古学者Tさん　死因　発見当時壁にめり込んだ状態で、何かで殴られた跡がある

六人目　美術館副管理人Qさん　死因Tさんと同じく壁にめり込んだ状態で発見、何かで殴られた跡あり

ロイド「全員、斬殺か撲殺か・・・」

コレット「ひどい・・・・」

バルド「取り合えず、この紙は暫く借りるぞ。一端現場を見て回るから」

署長「よろしくお願いします」

バルド「それと、俺達が此処に捜査に来ていることは内密にしてほしい。何時何処で聞いているか分かんないからな。俺達は唯の観光客ということにしてくれ」

署長「分かりました。我々も何か分かり次第連絡を入れます」

それに署長が頷くのを確認したバルド達は早々にその場を後にした。

署を出たバルド達は、初めに犯行現場に向かう。

バルド「最初の被害者は、このビルの裏か・・・」

入り組んだ狭い路地を通りそこに向かう。そこは、周囲を高いビルに覆われた薄暗い所だった。

フェイト「此処みたいだね・・・」

エリオ「確かに、外からだと見えませんね」

そこで、フェイト達は何か手掛かりがないか探す。

だが、特に何もなかった。

キャロ「何もありませんね・・・」

ロイド「そろそろ、外に出たほうがいいかもな。あまり此処に居ると犯人に警戒されるかもしれない」

バルド「そうだな。なら此処から出て、後はこの街を観光しながら次の所に行くか」

フェイト達は、路地を後にして次の所に向かった。

コレット「あ！見てみてロイド。このワンちゃんかわいい！」

ロイド「ホントだな、コレットはどんな名前にする？」

コレット「う～んとね・・・ロンがいいかな」

その後も辺りを観光しながら現場に行くが成果はない。そして、現在は、ペットショップの前にあるベンチで休憩中である。

バルド「ほら、これでも飲んで一息つけ」

キャロ「あ、ありがとうございます、お父さん」

バルドからジュースを受け取ってプルを開けて飲む。甘いリンゴの味がする。

バルド「エリオもフェイトも」

エリオ「ありがとうございます、父さん」

フェイト「ありがとう、バルド」

二人にも飲み物を渡した後フェイトの隣に座って自分の飲み物を口にする。

フェイト「全然、成果はないね・・・」

バルド「そんな簡単に見つけれたら署の奴らも苦労しないだろ」

ロイド「まあ、地道に探すしかないな」

そう言ってロイドはショップの壁に寄りかかる。バルドは、ロイドに缶ジュースを二つ軽く投げて寄こす。それをキャッチして、礼を言った後コレットに1本渡した。

コレット「でも、これで4ヶ所は探したよ。残りの2ヶ所に何か手掛かりがあるといいね」

フェイト「そうだね。流石にこれだけ歩き回って手掛かりなしだとちょっと凹むかも」

バルド「まだ此処に来たばかりだ、焦らずゆっくりと探そうぜ」

そう言って飲み終わった缶を投げる。それは、綺麗な弧を描いて空き缶入れに入った。

バルド「さてと、そろそろ休憩も終わりだ。次に行くぞ」

それに皆、頷いて再び捜査に動いた。

フェイト「結局、何もなかったね・・・・」

日が沈みかけていたので今日の捜査は終了。フェイト達はホテルに戻った。夕食を摂った後、フェイトとキャロ、コレットはバルド、ロイド、エリオの部屋に来ている。（部屋は女性陣と男性陣に分けています）

ロイド「路地裏に工場跡それに公園とかか・・・」

コレット「犯行時間も夜に行われてるみたいだね」

バルド「何にしても情報が少ない。次は、犯行時刻辺りまで捜索をしてみるか」

それに皆頷いたのを確認し一度、風呂に入ってから改めて話し合うことを決め一旦解散した。

---

ここのホテルは、大浴場となっており大人数が入っても大丈夫な様になっていた。夜も遅いのでフェイト達以外誰も入ってなく貸し切り状態だった。

キャロ「広いですね！」

フェイト「そうだね」

二人（とフリード）は湯船に浸かると今日の疲れが一気に解けていくほど心地よかった。

コレット「わぁー、凄いね。貸し切り状態みたいだよ」

遅れてコレットとウルがやって来る。今の彼女は、髪を頭の後ろで結って風呂の中に落ちないようにしている（フェイト達も同じ様にしている）。ウルは湯船に入った後気持ち良さそうに泳いでいる。

ウル「ギュッ、ギュッ♪」

コレット「うわ～、温かくて気持ちいいね♪」

そう言って体を伸ばす。その時フェイトは気づいた。コレットの背中に何やら傷のようなものがあることに。その大部分は、体に巻いているタオルで隠れていたがそれは間違いなく小さな傷ではない。キャロもそれに気付いたのか聞くべきかどうか迷ってるようだ。フェイトは、意を決してコレットに聞いてみようとしたが・・・

フェイト「ねえ、コレット」

コレット「ん？なあに？」

フェイト「えっと・・・その・・・」

彼女の過去を無暗に聞いていいものだろうかという思いが駆け抜けて逡巡する。コレットは、フェイトが何を聞きたいのか分からなかったが彼女の視線とキャロの視線が自分の背中辺りに向いているのに気がついた。

コレット「もしかして、この背中の傷のこと？」

フェイト「あ・・・う、うん。ちょっと気になって・・・・」

キャロ「す、すみません・・・」

申し訳なさそうな顔をする二人にコレットは笑う。

コレット「見る？」

フェイト「え？」

コレット「昔のことだから私は気にしないよ」

そう言って彼女はタオルを外した。

フ・キ「「っ！！」」

それを見て二人は絶句する。その傷は、肩辺りから腰にかけて斜めに深く何かに斬られた跡だった。
タオルをまた巻いて湯船に浸かりながら二人を見て話す。

コレット「私が自分の世界再生の旅をしていた時のころについた傷だよ。今じゃ、戒めみたいな感じかな」

フェイト「戒め？」

コレット「うん。あの頃の私は、自分が犠牲になれば私の世界は救われるんだって思っていた。ロイドのいるあの世界を再生するために自分が犠牲になればいいって、私が試練を乗り越えて完全な天使になれば皆を救えるんだって思っていた・・・。最初の試練で私は、味覚と食欲を失ったの」

フェイト「え？それって・・・」

コレット「二つ目の試練で眠くならなくなって・・・・。３つ目には何も感じなくなった。つまり、痛みとか今自分が触っているものが熱いのか冷たいのか分からない状態になったの」

目を閉じ、昔を思い出すようにポツリポツリと話す。この傷は、３つ目の試練を乗り越えた後にある人物と戦って倒したのだが、まだその人物は、生きていて、立ち上がってロイドに斬りかかった。そ

れを防ぐために自らの身を盾にして彼を守った時に出来た傷であると。その後も、４つ目の試練を乗り越え最後の試練だけとなった時、遂に声が出なくなったこと。そして、最後に身中からの記憶と心を捧げることで世界は救われることを話した。

フェイト「そんなことって・・・そんなことって間違ってる！！如何してコレットがそこまで苦しまないといけないの！？」

キャロ「私もそれは、間違っていると思います！！」

コレット「うん、実際は二人の言うとおりだった。お父様と思っていた天使の人は自分の本当の父じゃないことも分かってた。それを最後の最後に聞いたロイドは、私が連れて行かれる前に天使と戦って倒したの。その後、仲間たちと頑張ってくれたお陰で私は助かったけどね・・・。」

その後も続く彼女の過去は想像を絶するほど辛く過酷な状況だった。けど、そんな彼女を救ったのは紛れもないロイドと仲間の存在だろう。たとえ、助ける可能性が低くても、どれだけ危険な場所だろうとコレットを助けるため戦った。その結果、彼女は助かり、また首謀者も倒して世界は本当の意味で再生されたのだろうと、フェイトは、考えた。

コレット「だから、自分の悩みを内に隠して自分を犠牲にした私にとってこれは戒めなんだ」

フェイト「コレットは・・・強いんだね・・・」

それに対してコレットは首を振った。

コレット「私は、強くはないよ。あの戦いから少し経った後、私達の前からロイドが行方を消して周りからある事件の濡れ衣をきせられた時、心が潰れそうになったもん。私が今、強くいられるのはロイドがいてくれるからだよ。」

そう言ってニッコリと笑う。二人は、そんな彼女をやはり強いと思った。自分達だったらきっと挫けてしまうだろう。

フェイト「コレット、ごめんね。昔の嫌なことを話させて・・・」

コレット「大丈夫だよ。それよりも、二人に聞きたいことがあるんだ」

コレットとしては重くなった空気を変えようとしたのだろう彼女は、とんでもない爆弾を落とした。

キャロ「何ですか？」

コレット「二人には、好きな人とかいる？」

フ・キ「「ふえっ！！？」」

突然のことにボンッと音が出そうなくらい顔を赤くする。それを見てやっぱりと言う様な顔をする。

コレット「やっぱりいるんだ～。相手は・・・バルドとエリオかな？」

フ・キ「「な、何で分かるの（んですか）！！？」」

思わず聞く二人。それに、ふふふっと笑って答える。

コレット「私だって女の子だもん。それくらい見た感じで分るよ」

その後、コレットとロイドは交際していることを知って驚く二人であった。

---

一方こちらは男性陣

そちらも同じく浴室内には誰もいなくて貸し切り状態だった。

バルド「おお～、貸し切りか・・・・」

エリオ「僕達だけしかいませんね」

そこにロイドとアルもやって来る。

ロイド「すげ～！こんな広い風呂なんて久しぶりに見るな」

アル「キュ～～！！」

エリオ「あ・・・・」

ロイドを見てエリオは思わず声を上げた。ロイドの体（正確には上半身）には、何かで斬られた大きな傷と心臓付近には何かで貫かれた跡があった。

ロイド「ん？如何したエリオ？」

エリオ「あ、えっと・・・・その」

言い淀むエリオにロイドは首を傾げる。そこで、バルドはエリオの

代わりに言った。

バルド「その傷のことだよ」

ロイド「ああ、これのことか」

エリオ「す、すみません・・・」

ロイド「何で謝るんだ?別に気にしてないって」

立ったままだと風邪をひくので3人と1匹は湯船に浸かる。湯船に入ると同時にアルはスイスイと泳ぎだした。

ロイド「今から2年位前だな。俺達がセフィリアの国を助けるために戦っていたころだな。俺達は、ある国と戦っていた時だ・・・」

昔を思い出す様に喋る。

ロイド「俺は、前線である敵の将軍と戦っていた。後少しで倒せる所までいったんだけど逃げられてさ、その数日後位かな・・・そいつがヴァルハラ王国に忍び込んでコレットに襲いかかって来たんだよ。そいつから守るためについたのがこの斬傷さ」

バルド「その後、俺達が駆けつけてそいつを倒したけど、ロイドは重傷を負った。あの時は、コレットの奴、相当参ってたな。自分が

油断したせいでロイドが死んじゃうって毎日泣いていた。ま、数日後にロイドは目を覚ましたがな」

ロイド「俺があの時、倒せなかったから招いた結果だ。俺の力が足りなかったばかりにコレットを悲しませちまった。だから、その戒めみたいなものかな」

そう言って苦笑いする。次に、心臓付近の傷について語った。

ロイド「こっちは、グランディオンにいた時のだ。ま、原因はさっきと同じで自分の腕が未熟だったから出来たんだけどな・・・」

その説明を聞いてエリオはその傷は守るべき者を守って出来た誇りある傷の様に見えた。それに気づいたバルドはエリオに忠告した。

バルド「エリオ、お前はロイドじゃない。お前はお前でしかないんだからロイドみたいに無茶はするなよ？」

エリオ「は、はい。分かりました、父さん」

それを聞いたバルドはニッと笑ってエリオの頭をガシガシと乱暴に撫でる。その光景をロイドは昔を懐かしむように見ていた。

その後、体を洗って、風呂からあがり、着替えて自室に戻る。

暫くしてコレット達もあがり、ロイド達の部屋にやって来た。

フェイト「遅くなってごめん！」

バルド「いや、俺達も今来たところだったから気にするなよ」

謝るフェイトをそう言って制した後、今後のことを話し始める。

バルド「明日も朝から捜索するか」

フェイト「となると、行動は犯行時間の1時間後までだね」

バルド「そうなるな。よし、明日に備えて今日はもう寝よう」

そして、今日の会議はお開きとなった。

---

皆が寝静まった深夜、ロイドは目を覚ました。自分の隣でアルが丸

くなって寝ている。

隣ではエリオが規則正しい寝息を立て寝ていた。その隣のベッドではバルドが少し鼾をかいて寝ていた。

ロイドは、二人を起こさないようにゆっくりと部屋を出る。薄暗い廊下を歩き階段を昇って屋上に出た。

肌寒い空気が肌を刺す。そのまま、端まで行ってエリダリアの夜景を眺める。その後、空を仰ぎ見ると星空が煌めいていた。

コレット「ロイド」

そこにコレットがやって来る。

ロイド「悪い、起こしたか？」

コレット「ううん、眠りが浅かっただけだよ。気にしないで」

そう言ってニッコリと笑う彼女を見てロイドもつられて笑う。二人は自然に並んで屋上の端に腰かける。

コレット「こうして、二人でいるのも久しぶりだね」

ロイド「そうだな。今じゃ何時も周りに仲間がいるから、こういう

風に二人で話をするのは本当に久しぶりだな」

その後は、無言になって唯、夜景を見ていた。互いの吐息が聞こえる以外は静寂に包まれていた。

コレット「ロイド、ごめんね」

突然コレットは謝る。

ロイド「如何したんだよ、突然？」

コレット「何時も私のせいでロイドが傷ついているのに何も出来なくてほんとにごめんね」

そう言う彼女の表情は暗かった。それを見たロイドは、コレットに笑いかける。

ロイド「バーカ。何も出来ないことないだろ？コレットが傍にいるだけで俺は助かってんだ。そんなことで謝るなって」

コレット「でも、私のせいであの時はロイドが傷ついた。それは、間違いないよ！もしあの時ロイドが死んじゃってたら私っ・・・・！」

そう言って此方に顔を向けるコレットは今にも泣きそうな状態だった。それを見た彼は、一度溜め息を吐いてからコレットを抱きしめる。突然のことにビックリするコレットを優しく抱きしめる。

ロイド「俺が今生きていられるのはコレットが傍にいてくれるからだぜ。寧ろ、ありがとうだ」

コレット「で、でも・・・!!」

ロイド「でも、もしもじゃない。俺は今ここにいる。コレットの傍にいる。それで充分だろ?謝るなって・・・寧ろ俺がお前に謝りたいんだから。何時も心配かけさせてごめんな」

コレット「そんなことないよ!私もロイドが傍にいてくれるから生きていられる。だから、私こそありがとうだよ!!」

ロイド「なら、これでおあいこだ。そのことはもう忘れようぜ!」

そう言ってニッコリ笑うロイドにつられてコレットも笑うのだった。

ロイド「冷えてきたな。そろそろ戻るか?」

そう言って離れようとするロイドをコレットは手を背中にまわして離れなかった。

ロイド「コレット？」

コレット「もう少しだけこのままでいい？」

ロイド「・・・・ああ、いいぜ」

そのまま二人は、夜空の下で暫く互いの温もりを確かめ合った。

――――――――――――――――――――――――――――――

～～翌朝～～

空は、快晴に覆われ暖かな日差しが部屋に入ってきた。それでフェイトは目を覚ました。一度体を伸ばしてから隣を見るとキャロもその隣で寝ているコレットも彼女の隣で丸くなって寝てるウルもまだ起きていないようだ。

時間を見てみるとまだ、5時半だった。朝食まで少々時間がある。

フェイト（昨日は、何時もより早く寝たからかな・・・？）

普段よりも早く寝たせいで如何やらこの時間に目が覚めたようだ。
フェイトは、二人を起こさないようにそっと部屋を出る。

部屋を出ると丁度良く、バルドが出て来た。

フェイト「あ、おはよう、バルド」

バルド「おう、おはよう。早いな、もう起きたのか？」

フェイト「ちょっと目が覚めちゃってね」

二人は外に出て散歩をすることにした。暫く談笑しながら話してるとふとバルドは思っていたことを言った。

バルド「しっかし、１０年も見ないうちに随分と大きくなったよな。前はこの位の大きさだあったんだがな」

そう言って腰の辺りに手を置く。

フェイト「１０年も経ったんだもん大きくはなるよ」

バルド「まあ、そうだろうな」

そう言って笑いあってるとバルドの隣にケルベロスが現れる。

ケルベロス［相棒、おはようさん。お、嬢ちゃんも一緒か］

フェイト「あ、ケルベロス、おはよう。あれ？バハムートは？」

ケルベロス［おはようさん。あいつは、まだ寝てんだよ。所でお二人さんは何を話してたんだい？］

バルド「いや、フェイトも成長しなって言うのを話していたんだよ」

ケルベロス［へぇ～。確かに嬢ちゃんは大きくなったよな～］

バルド「そうだな。背が伸びたし」

ケルベロス［相棒、背だけじゃないぜ～］

バルド「ん？如何言うことだよ？」

ケルベロス［嬢ちゃんを見てみろよ。何か気付くだろ？］

そう言われてバルドはフェイトをじっと見る。フェイトはその視線に意識してしまいちょっと顔を赤く染める。

フェイト「な、何／／／／／？」

バルド「ケルベロス、何に気づけばいいんだ？」

ケルベロス［か～～！！普通気づくぞ相棒！胸だよむ・ね！Ｍ・Ｕ・Ｎ・Ｅだよ！！」

バルド「はあ！？」

ケルベロス［よく見てみろって、なのはの嬢ちゃんもそうだったが、昔は、子供だったけど今じゃ見てみろよ、スタイル抜群で結構な美人さんだぜ？」

バルド「・・・・・・・・・・・・」

そう言われてバルドは再びフェイトを見る。ケルベロスの言うとおり、確かに昔と比べるとスタイル抜群になり十人中十人が振り向くと思われるだろう容姿になりバルド自身久しぶりに会った時一瞬だけ心を動かされたことがあった。自分のこの冷めた心を動かされたのは何時以来かと考えたりもした。

そう思いながらも今のフェイトの姿を上から下まで見る。

フェイト「う、な、なんか恥ずかしかも・・・／／／／／／」

見られるのが恥ずかしくなったのか顔を赤くして体を隠す様に腕を回す仕草をするフェイト。

ケルベロス［ヒャハハハハ！！やっぱ二人がいると弄るのは楽しいぜ！！新婚夫婦みたいで初々しいねぇ～、ヒャハハハハ！！］

バルド「てめっ！現れて早々変なこと言ってんじゃねーよ！！」

ケルベロス［お～怖い怖い。逃げろや逃げろ！ウハハハハハ！！］

言いたいことだけ言ってケルベロスは消えた。残ったのは少々気まずい空気が漂った。

バルド「と、取り合えず、皆の所に戻るか」

フェイト「う、うん。そうだね、そろそろ戻ろうか／／／／／」

二人は、ギクシャクした空気を漂わせながら皆の下に戻るのだった。

## 第十三話（後書き）

という訳でコレットには背中の傷を残してもらいました。知ってる方は知ってますよねあのシーンです。

ロイド「コレットに変な傷をつけるな！！散沙雨！！」

あぎゃ～！！？蜂の巣の刑～～！！？

バルド「次回は戦闘が入るらしいです。まあ、この駄作者の文ですからあまり期待しないで待っていてください」

コレット「読者の皆さま、これからもこの二次小説を宜しくお願いします！！」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第十四話（前書き）

今年最後の投稿！！何とかギリギリ間に合った。

バルド「今回は戦闘を入れるって言ってたな？」

ええ、それと新キャラ登場です。では本編をどうぞ！！

# 第十四話

朝食を終えたフェイト達は、朝から捜査を始めた。

バルド「しかし、改めて見るとこの街も大きいよな」

周りを囲むはビル、ビル、ビル。更に舗装された道路や幾つも見える店など此処が如何に技術が発展しているかが分かる。

フェイト「ここには、美術館があるみたいだよ」

ロイド「へぇ～、てことは此処の作家達の絵を見ることが出来るのか？」

フェイト「うん、それと歴史関係もあるみたいだね」

近くで貰ったパンフレットを見ながらこの街の観光スポットのこと等を話していた。

バルド「美術館か・・・・確か被害にあった人物の中にそこの関係者がいたな。一度見に行ってみるか？」

それに皆頷いたのを確認して、バルド達は美術館に向かった。

美術館に入ると中には沢山の絵画や彫刻などが展示されていた。

バルド「ほお～中々凄い所だな」

コレット「あ！見てみてあそこに大きな熊さんの彫刻があるよ」

ロイド「でっけ～！それに何か生きてるみたいだな」

キャロ「エリオくんこの絵なんかすごいね」

エリオ「そうだね。これを描いた人って凄いね」

様々な絵画等を見ていると進路の先に人だかりがあった。そこにも何か展示されているようだがあまりにも人が多くよく見えない。

エリオ「何でしょうかあれ？」

フェイト「何か展示されてるみたいだけどここからじゃよく見えないね」

バルド「暫くしたら空くだろうから待ってみよう」

バルドの言うとおり暫くその場で待ってると人だかりはドンドン減っていきその展示品が何なのかが見えた。

それは、淡い蒼い色の輝きを放つ綺麗な宝玉だった。

コレット「綺麗な宝石だね～」

ロイド「そうだな。名前はっと・・・・蒼の御珠？」

？？？「それは、嘗て皇帝と呼ばれた者の所持していた物の一つ蒼の御珠の模型です」

その声に振り向くとそこには恰幅の良い５０代の男性が立っていた。

フェイト「あなたは？」

館長「これは失礼しました。私は此処の館長をしている者です」

そう言って頭に被っていた帽子を外して朗らかな笑みを見せる。

コレット「皇帝って？」

館長「嘗て古代ベルカの時代に存在していた最強と言われていた者、皇帝ガレリアスのことです」

バルド「ガレリアス・・・・」

館長「はい。他のベルカの王が束になっても勝つのが難しい程の力を持っていた。そして、その力を引き出したのがこの宝玉だったとも言われています」

そう言って宝玉を見た。

館長「しかし・・・・圧倒的な力を持っていた皇帝に事件が起きました」

ロイド「事件？」

館長「皇帝宅に何者かが侵入して宝玉の一つを奪ったとか。そして、力が弱まった皇帝の前に強敵が現れました」

キャロ「強敵ですか？」

館長「その者は最強の皇帝の力ですら太刀打ち出来ないほどの者でその大きさは星を包み込むほど巨大な存在だったそうです。宝玉が一つ欠けても皇帝は強かったらしいのですが、その者は、皇帝を一蹴しベルカ全土を相手に暴れたそうです。その戦いが古代ベルカは衰退する原因となったようです」

ロイド「へぇ～、詳しいな」

館長「知り合いにこのことを研究していた者がいましてね・・・・一昨日何者かに殺されましたが・・・・」

フェイト「え、じゃああの考古学者の人が・・・」

館長「はい・・・」

気まずい空気が辺りを漂う。ロイドは失言だったことに気づいて謝る。それに、笑って応える館長。

館長「お気に為さらずに。さて、皇帝がその後どうなったかというとその戦いの傷がもとで死亡したと言われています。私もこれ以上はよく分からないんです。すみません」

バルド「・・・・・・・・・・・・」

申し訳なさそうに頭を下げる館長を見てフェイト達は慌てて顔を上げさせようとする。しかし、バルドは、その館長をじっと見ていた。そこに時計が鳴る音が聞こえた。見てみるともうお昼になっていた。

館長「おや、もうこんな時間ですか……。長々と引き止めてしまってすみません。この先の庭にカフェがありますのでそこでお休みになられてください」

彼が指差す方を見てみると確かにカフェが展開されていた。

ロイド「へぇ～、美術館にカフェがあるのか」

館長「何分、経済競争が激しいのでね、この様に副業でもしないと中々此処を維持するのも大変なんですよ」

そう言って苦笑いを浮かべた後、フェイト達に挨拶をしてその場を去って行った。フェイト達は、館長の言っていたカフェに行きそこで昼食を摂ることにした。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

フェイト達が去って行ったのを確認した後、館長は溜息を吐いた。

館長「まさか、管理局の者が此処に来るとは予想外でした。となれば、蒼の御珠を何処かに隠さねばー「やはりあれは蒼の御珠か」なっ!?」

そうブツブツと呟きながら自分の仕事部屋に戻ろうとする彼の背後に突然音も無く現れたのは3人の男女であった。

館長「お前たちはいったい・・・」

???1「あの方の言っていた場所に無かったので少々焦りましたがまさか、この様な下賤の者達の蔓延る場所に展示されていようとは」

???2「しかもご丁寧に魔力を外に放出しないように特殊なガラスでコーティングしやがって、見つけるのに苦労したぜ」

???3「でもこれで任務は完了だね」

そう言って一人がニヤリと笑って館長の首を掴み持ち上げる。足が地に離れて彼はジタバタするしかなかった。

館長「が・・・ご・・・あっ」

???2「散々苦労をかけさせやがってこれはそのお礼だよ」

白目をむきはじめた彼に止めを刺すように掴んでいる手に力を込めた。ボキボキッと音が鳴って館長の首の骨が砕け散り彼は息絶えた。

???2「さてと、さっさと持ち帰るとするか」

その言葉に二人も頷き宝玉の下に向かった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

フェイト「バルド、今何て言ったの？」

バルド「だから、あれは模型じゃなくて本物だって言ったんだよ」

カフェに着いた後昼食を摂っていた時バルドが突然言ったことにフェイトは混乱していた。

あの宝玉は偽物ではない。そうキッパリと彼は言った。

エリオ「あの、どういうことですか？」

バルド「あの時館長が模型だと言っていたんだがどうも違和感を感じてなジッと見ていたんだが一瞬だけあの珠が脈打ったように見えてなもしかするとロストギアの可能性があるぞ」

それには皆驚いた。もし本物だとすればそれは、古代ベルカの王、皇帝が所持していた宝玉なのだからそれはかなり危険なロストギアになる。

フェイト「で、でも魔力は感じられなかったよ？」

バルド「恐らく、魔力を封じる特殊な何かを付けてるんじゃないか？そうすれば、ばれることは先ず無いからな」

ロイド「でもさ、そのロス…何たらは何でこんな所に普通に展示してんだ？暴走でもしたらかなり危険だと思うんだけど」

バルド「ロストギア、な。それに関しては俺も知らん。力が発動するには何らかの条件がいるのかそれともう既に力は失われてただの石になっているのか……。どちらにしろ、あの館長には色々と聞かないといけない様だな」

フェイト「うん、そうだね。もしあれが本物だとしたらロストギア不正所持の容疑で事情聴衆をしないといけないね」

コレット「でも、あんなに優しそうな人がそんなことをするなんて想像できないよ」

バルド「優しそうな顔なんて誰でも上っ面だけで出来る。取りあえずあの館長の下にもう一度行くぞ」

それに皆頷き、再び美術館の方へ足を向けた瞬間、突然美術館から爆発が起きた。警報機が辺りに響き渡る。

ロイド「な、何だ！？」

急いで館内の爆発現場に向かうと辺りは濃い煙で周囲が見えない状態だった。だが、周囲では民間人の呻き声などが聞こえる。

バルド「エリオ、キャロ!!お前達はロイドとコレットと一緒に民間人の救助と避難誘導をしてくれ。フェイトは俺と一緒に来い!!」

フェイト「分かった」

コレット「二人とも待って!この先に人の声が聞こえる。人数は…3人くらい」

それ聞いてフェイトは耳を澄ますが辺りの喧騒などで全く聞こえなかった。

フェイト「何も聞こえないよ?」

ロイド「コレットは、天使の力で視力とか聴覚が強化されているから俺達が聞こえないものとかも聞き取ることが出来る。二人とも気をつけろよこの先になんかいるぞ」

バルド「確かにコレットにはこの手のことで何度も助けられてるからな。フェイト、警戒していくぞ」

フェイト「うん。分かった」

二人はこの場を4人に任せてコレットの言っていた方向に向かう。すると、そこには彼女の言っていた通り3人の人がいた。服に埃すら付けずに立っている様は明らかにこの状況では不自然だった。向こうもこちらに気づいたのか二人を見るや一人がめんどくさそうな顔をして呟いた。

???2「また人が来たようだな?」

それに、隣にいた背の高い白色の髪の女性が呆れたような顔をする。

???1「全く、興味本位で此方に来るのは人間の性、何でしょうかね?いい加減黙らせるのに飽きてきたんですが・・・」

???2「そう言うなって。取りあえず意識を刈り取ればいい。宝玉のことは頼むぞ?」

そう言って女性の隣にいる背の小さい淡い青髪の男に話しかける。

???3「へイへイ、任しといて。後はこれをあそこに持って行けばいいんだよね?」

それに男性が頷いて答えると男は姿を消した。そして、バルド達に得物を構える。黒髪の男のは両手にマン・ゴーシュで女性のは細い

ランスだった。

バルドはケルベロスを取り出し、フェイトもバルディッシュをセットアップする。それを見た二人は驚いた顔をする。

???2「魔導士か・・・」

???3「その様ですね。しかも、あの男は強い気配がします」

バルド「お前ら、何者だ！」

???2「我らは、プロヴィデンスの幹部が一人、第八の使徒、アグリス！」

???1「同じく、第十三の使徒、ナーガ！」

プロヴィデンスの幹部だということに二人は、警戒を強めた。その間に先ほどの背の小さい男が宝玉を持って窓を破って飛んで逃げたのを確認した。

バルド「っち、フェイト！お前はさっきのチビを追え！」

フェイト「えっ、で、でも・・・」

目の前にいる二人は恐らく強敵だ。それをバルドに任せていいのだろうか？フェイトの様子に気づいたバルドは、敵から目を話さずに

フェイトの頭を軽くポンポンと撫でながら言う。

バルド「今此処で奴を逃がしたら奴らの目的が分からなくなる。俺のことは気にするな。こいつ等を相手にするのは面倒臭いが何とかする。だから行け！！」

フェイト「う、うん。分かった。バルド気をつけてね」

フェイトは、外に出て逃げた男の後を追跡した。

ナーガ「行かせると思いまｓ「お前等の相手は俺だ！！」ッ！」

バハムートを取り出し、ケルベロスと同時に振り下ろして二人を攻撃する。それを後方に大きく下がることで避け、バルドを睨む。

アグリス「やはりな、お前は九神将の一人のバルドか」

ナーガ「厄介ですね。もう時の英雄は此処を嗅ぎつけていたみたいですね」

バルド「お前等、あれを如何する気だ？」

そう聞くもアグリスはフンッと鼻で笑う。

アグリス「答えると思うか？おら！」

マン・ゴーシュをバルドに突き出し攻撃をしてきたがそれをケルベロスの腹で受ける。

ナーガ「そこです！！」

そこにナーガが左から槍で突いてきたが左に持っていたバハムートで受ける。

バルド「ふんっ！！」

二人の武器を同時に弾き上げる。その衝撃で一瞬仰け反る。その間にバルドはケルベロスを上に投げる。

バルド「崩襲地顎陣！！」

飛び上がって空中で回転しているケルベロスを掴みその場で一回転しその勢いを活かしてケルベロスを地面に叩きつける。

バルドを中心に円状に周囲の大理石の床が衝撃で浮き弾けて二人に襲いかかる。それを二人は、自身の得物で弾き飛ばす。

再び二人はバルドに飛び掛かる。バルドは、正面から来るアグリスのマン・ゴーシュの突きを右に体を傾けることで避け、背後に回ったナーガが打ち出した槍の刺突をケルベロスを背中にまわして受け止め左足で正面のアグリスの腹を蹴りふっ飛ばし、背後で受けていた槍を弾き上げて瞬時にナーガの目の前に移動、バハムートを横に振る。

ナーガ「くっ・・・！」

それをブリッジして避ける。彼女の顔のすれすれをバハムートが通り過ぎる。ナーガを相手にしている間に体勢を整えたアグリスが肉薄してくる。アグリスは右手に装備しているマン・ゴーシュを突き出す。それは、バルドには届かずケルベロスに阻まれる。だが、アグリスはニヤリと笑った。

アグリス「爆豪掌っ！！」

マン・ゴーシュの先端に魔力が収束し、爆発が起きる。

バルド「くっ！」

その衝撃でバルドは大きく吹っ飛ばされ体勢が崩れる。そこにナーガが追撃する。

ナーガ「水塵槍！！」

水を纏った槍が神速の勢いでバルドに迫る。それをギリギリでバハムートで防ぐがその勢いで今度こそバルドは弾き飛ばされ美術館の壁を壊して外に飛ばされる。其のまま隣のビルにぶつかりそうになるが吹き飛ばされた勢いを利用し回転、ビルの側面に着地する。

バルド「なめるな！！」

ビルの側面を思いっきり蹴り弾丸の様な速さで再び美術館内部に飛び込み二人に剣を振るう。咄嗟に自身の得物でガードするがあまりの剣の重量とバルドの力でガードした状態のまま逆に今度は自分たちが弾き飛ばされ壁を壊していった。

バルド（今の内に・・・）

二人が此処に戻ってくる前にロイド達に念話を入れた。

――――――――――――――――――――――――

エリオ達は館内にいた市民を救助して、彼らと周囲にいる民間人達を応援を呼んだ此処の警備隊に避難を頼み、此処に駐在している魔導士に救援を要請していた。

その時、館内で爆発が起きる。エリオとキャロが慌てて見るとバルドが壁を破って吹き飛ばされている光景を見た。

エ・キ「「父さん（お父さん）！！」」

其のまま隣のビルに激突するかと思ったがバルドは危なげなくビルの側面に着地、其のままビルの側面を思いっきり蹴り弾丸の様な速さで再び美術館内部に飛び込んだ。その後直ぐに物凄い音が聞こえた。

エリオ「ロイドさん、父さんは大丈夫なんでしょうか？」

心配そうに聞くエリオと同じく心配そうにバルドが飛び込んだ場所を見ていたキャロを見てロイドは安心させるように言った。

ロイド「心配すんなって。バルドなら大丈夫だ」

そう言った後、バルドからエリオとキャロに念話が入った。

バルド《エリオ、キャロ！》

エリオ《父さん！大丈夫なんですか？》

バルド《その事に関しては問題ない。それよりも、二人に頼みたいことがある》

キャロ《何でしょうか？》

バルド《フェイトが逃げた敵の一人を追っている。だから、そこはロイド達に任せて二人に援護に行ってもらいたい。出来るか？》

エリオ《はい！》

キャロ《お父さん。気を付けてください》

バルド《ああ、おっと向こうも戻って来たな。じゃあ、任せたぞ》

そう言ってバルドは念話を切った。すると再び美術館から激しい轟音が鳴った。エリオはロイド達に念話の内容を伝える。ロイド達は、それに同意して二人をフェイトの下に行かせる。

エリオ「キャロ、急ごう！フェイトさんが離れてからそれほど経っていないみたいだけどフェイトさんの速さならかなり離れた所にいる筈だよ」

キャロ「うん！」

エリオとキャロがロイド達から離れてフェイトの下に急いで向かうのを道届けた後、ロイドは空を見上げる。

ロイド「……来る」

ロイドの呟き通り街上空の空間が歪みそこから大量の虫が、イノセント達が飛び出してきた。

コレット「イノセント?型と?型だね」

それにロイドが頷く。そして、アルとウルに視線を向ける。

ロイド「アル、ウル」

その声に二頭は頷くとアルの体を巨大な紅蓮の炎がウルの体を巨大な氷塊が包み込む。そして、紅蓮の炎と氷塊が爆ぜる。そこには、巨大化したアルとウルが現れた。

ア・ウ「「キュオオオオオオオオオオオオオオオ）！！」」

雄たけびを上げる二頭。その声は街中に響き渡り、街の人々は避難の最中それに振り向くと其処には黒と白の神々しい姿の見たことも無い巨大な生き物が立っていた。そして上空には、これまた見たことも無い無数の虫の大群があった。それを見て、ああ、此処が戦場になるのか。っと誰もが思った。

ロイド「街の被害を最小限に抑えるぞ！アル、先制攻撃だ」

コレット「ウルも。行くよ！」

ロイドも剣を抜き、コレットも術の詠唱を始める。アルとウルは足を強く地面に押しつける。そして、大きく息を吸い込む。その行為は恰もこの街の大気全てを取り込むのではないかと思う位大きく吸っていた。

コレット「冥界へと導く破邪の煌きよ、我が声に耳を傾けたまえ、聖なる祈り永久に紡がれん光あれ！」

コレットも詠唱を完了する。そして、ロイドも両手の剣に紅蓮の炎を纏わせ一気に振り下ろした。

ロイド「鳳凰列破衝！！」

コレット「グランドクロス！！」

ア・ウ「「キュオオオオオオオオ（バオオオオオオオオ）！！！」」

ロイドの剣から深紅の巨大な火の鳥が放たれる。それと同時にアルはも口から衝撃波を出して前方の敵を破壊する『ソニックブラスト・オメガ』をウルは超低温の水流を超圧縮して放つ『アブソリュートブラスト・テオ』を上空のイノセントの群れに撃ち出す。３つの巨大な砲撃は並んで飛び易々とイノセント達を飲み込み、ある者は、衝撃波で体をバラバラにされ、氷点下の一撃で凍り水流で粉々になり、灼熱の炎で焼き尽くされその通り道には残骸も残らず雲すら吹き飛ばした。そして、上空に巨大な輝く十字架が現れその光に触れたイノセント達は、一瞬の内に浄化され消し飛んだ。

ロイド「これで半数は倒したか？」

コレット「うん。そうみたいだね」

ロイド「よし！アルとウルは地上に降りてきた奴を相手してくれ。コレット、行くぞ！」

コレット「うん！！」

二人は天使の羽を展開、空高く舞い上がった。イノセント？型は銃で応戦。撃ち落とそうとする。しかし、ロイドは自身とコレットに降り注ぐ弾丸を全て斬り、弾く。そして、一番近くにいたイノセント？型が両断される。両断されたイノセント？型は墜落し空中で爆散する。コレットもチャクラムを飛ばして切り裂いていった。地上で見ていた民間人、警備隊、魔導士はその戦いに見惚れていた。二

人だけで無数に群がる虫達を物ともせずに戦うその姿は正に舞と呼ぶべきものだった。

イノセント?型「キュオォォォォォォォ!!!」

そこにイノセント?型が地面に着地、その振動で我に返った人々は前方にいる怪物を見て慌てふためく。魔導士と警備隊が市民を逃がすために攻撃し注意を引こうとするがそれを無視してイノセント?型は歩み、市民にその巨大な腕を振り下ろす。だが……

アル「キュオオオオオオオオオオオオ!!!」

その間にアルが割り込みその身で腕を受け止める。イノセント?型は、一端下がってその姿を見る。黒く刺々しい体に下顎がら飛び出ている巨大な二本の牙。それは、市民を守る様に彼らの前に立ち塞がる。

市民は自分達の前に立っているその姿を見つめる。今のは自分達を守るための行動なのかそれともただ単に気まぐれで起したのか分からない。しかし、その後ろ姿は絶対的な安心感を見せてくれる。

アルは、魔導士と警備隊を見る。彼らは、鋭い刃物の様なその瞳に一瞬体が強張った。だが、その目は自分達に何かを言っているように見えた。そう、「行け。市民を連れて此処から逃げろ」とそう語っている様に見えた。彼らは、その巨躯の横を通って市民の下に行

き再び避難誘導を再開する。

イノセント?型「キュオォォォォォォォォ！！！」

アル「キュオオオオオオオオオ！！！」

イノセント?型の雄たけびにアルも応える。黒い甲殻が興奮で赤く染まる。睨み合いながら一定の距離をとったまま時計回りに互いに回る。

先に攻撃を仕掛けたのは?型だった。

?型「キュオォォォォ……ゴアアアアア！！！」

魔導士を一撃で倒した凶悪な砲撃がアルに襲いかかる。その勢いでアルは押され少し後退する。しかし、ぶつかっているアルの甲殻が少々赤くなるだけでダメージは受けていなかった。暫し攻撃を受けていたアルだが目が光った瞬間イノセント?型に飛び掛かった。

アル「キュオオオオ！！」

?型「キュアアア！？」

自身の攻撃を受けながら突っ込んで来ることなど予想もしていなか

ったイノセント?型はその突進を諸に受け、近くのビルに吹っ飛ばされた。激突のダメージで動きが止まった?型の細い首とも言える部分にアルはその強靭な顎で喰らい付く。鋼鉄よりも堅い?型の装甲を易々と破り其の侭超重量の?型を持ち上げる。そして、地面に思いっきり叩きつける。その一撃で?型は、暫くジタバタしていたがその動きは弱まっていき遂に息絶えた。

アル「キュオオオオオオオオオッ!!!」

勝利の雄たけびを上げるアル。そして、次の標的となる?型を見つけ再び襲いかかる。?型はその巨木の様な腕で殴りかかりアルもその鋭利な爪の付いた前足を振り下ろす。両者の攻撃がぶつかった瞬間、?型の腕はスパッ!と切り裂かれた。

体液を撒き散らし、悲鳴を上げる?型に反対の前足を振りかぶる。それは、?型の頭部を斬り飛ばし倒す。

頭部を失った巨躯が地に伏す。そして、爆散し消えていった。アルはその場を一瞥した後次の標的(ターゲット)を探し襲いかかった。

一方ウルの方も、2体のイノセント二型と対峙していた。互いに威嚇の声を上げて睨み合っていたが痺れを切らしたイノセント?型の一体が飛び掛かった。?型の突進を受け止めるウル。互いに押し合う。しかし、軍配はウルに上がった。下顎を相手の体の下に上手く滑り込ませたウルは思いっきり体を持ち上げる。その拍子に?型は軽く宙に飛ばされ地面に背中から落ちる。もがく?型にその巨躯でのし掛かり動きを封じる。そして、その頭に喰らい付き引き千切っ

た。息絶えた？型の体液が辺りに飛び散る。その中でその頭部をムシャムシャと食べているウルを見て残った？型は恐怖に震える。雄たけびを上げてエネルギーを集束、口から巨大な砲撃を放つ。ウルは迫る砲撃を見て其方に向き直り大きく息を吸う。そして、

ウル「バオオオオオオオオ！！！！」

口から超低温の水流を超圧縮して放つ『アブソリュートブラスト・テオ』を撃ち出す。それは、辺りのビルをも凍結させて突き進む。そして、？型の砲撃と衝突。暫しの拮抗があったが？型の砲撃はウルの攻撃に打ち消される。そして、ウルの超低温の一撃は勢いが衰えずに？型に迫りその巨大な体を飲み込んだ。辺りが氷塊に覆われるその真ん中で？型は凍り漬けになって立っていた。ウルは悠々と近づきその氷山の氷すら削る強靭な爪を持った前足で氷漬けの？型を殴る。それだけで？型はバラバラと音をたてて崩れてただの氷の塊となった。

ウル「バオオオオオオオオオオ！！！」

勝利の雄たけびを上げるウル。そして、次の標的（ターゲット）を探し次々と薙ぎ払って行った。ロイドとコレットも上空の？型を舞う様に次々に撃墜していく。市民達はその二頭と二人の戦いの姿を見て思ったのだった。

救世主が……神が降りてきたと・・・・

バルドは、燃え盛る館内で使徒の二人を相手しながら外の現状を窓から確認した。

イノセント?型と?型が暴れているがそれをロイド、コレット、アル、ウルが次々と撃破していく。

バルド（向こうは問題ないな・・・・）

ナーガ「戦いの中で余所見とは……随分と余裕なのですね!!」

そこにナーガの槍が迫る。それを冷静にケルベロスを振り上げることで弾きがら空きの胴に蹴りを加える。吹っ飛んだ彼女をその後ろに回ったアグリスが受け止める。

アグリス「大丈夫か!ナーガ?」

ナーガ「ええ、すみませんアグリス、大丈夫です」

痛む腹部をさすりながら立つナーガ。アグリスはバルドを睨む。バルドは息を切らさず平然と立っていた。その姿を見てアグリスは呟いた。

アグリス「化け物め……」

バルド「如何した？来ないのか？なら俺から行くぞ！」

バルドは、そんな彼らに再び肉薄する。高速で接近するバルドに得物を構える。バルドは、ケルベロスに黒い炎を纏わせそれを振り下ろす。

バルド「爆炎剣！！」

地面に振り下ろされるとそこから爆発。黒い炎が二人に襲いかかる。それを避けるが今の衝撃で床が崩れ下の階に落ちる。崩れた姿勢を立て直して着地。バルドの姿を探す。

バルド「はあああぁぁぁぁ！！！」

アグリスの上からバルドが剣を振り下ろす。それをマン・ゴーシュで受け止める。防がれた反動を利用し少し離れた所に着地。そして、足の裏に溜めた魔力を爆発させて一気に接近二本の剣を高速乱舞する。それを弾き、受け止め、受け流す。目にも止まらぬ二人の攻防

だが、バルドの背後からナーガが槍を突き出す。それを、バハムートを背にまわして受け止める。乱舞が止まりチャンスが生まれたと考えたアグリスは、マン・ゴーシュを突き出す。

アグリス「爆砕掌！！」

バルドの眉間にマン・ゴーシュが迫る。取った…。そう思った。しかし、

バルド「烈旋衝！！」

その場でバルドが回転、二人の武器を弾く。大きく仰け反った二人の前には黒いコートを舞わせるバルドの姿。バルドは、アグリスに接近、腹に掌を打ち付ける。

バルド「戦迅狼破ッ！！」

そこから狼の闘気が撃ち出され、アグリスは吹っ飛ばされる。その勢いは凄まじく美術館の壁を打ち破って隣のビルに激突して止まった。

ナーガ「アグリス！ッ、貴っ様ーー！！」

粉塵でアグリスの安否が分からないナーガは怒りで頭がいっぱいになりバルドに槍を高速で連続突きを繰り出す。

バルド「くっ！」

その速度は先ほどとは比べものにならない位速く、思わず舌打ちをする。

ナーガ「水刃槍！！」

ケルベロスを打ち上げ、がら空きの胴体を槍で貫こうとする。それを、バルドは体を捻ることでギリギリ避ける。だが、槍に纏った水刃が脇腹を薄く切り裂いた。

バルド「結構やるな……」

ババハムート［若！！］

ケルベロス［おいおい、しっかりしてくれよ？相棒］

ケルベロスとババハムートが声をかける。それに問題無いと伝えて再び構える。そして、同時にバルドとナーガは地面を蹴り再び激突した。

一方吹き飛ばされたアグリスはビルから出て再び中に突入しようとしたが、

アグリス「ん？」

視界の端に何かが入る。その方向を見るとそこには二人の子供が空を飛んでいた。恰好からして魔導士であった。しかも、その二人はもう一人の仲間の逃げた方向に向かっている。それを見てあることを思いついたアグリスはニヤリと笑いその場から消える。

――――――――――――――――――――――――――――――――

エリオとキャロはフェイトの下に急いで向かっていた。自分達の上司であり母親の彼女は高速戦闘が得意なのでその速さたるや圧倒的である。逃げた男を追っているとすればかなりの速さだろう。急がないといけなかった。だが・・・

？？？「おっと、此処から先には行かせねえぜ」

目の前に一人の男性が現れ、二人は止まった。

エリオ「貴方は一体…」

アグリス「俺の名はプロヴィデンスの幹部が一人、第八の使徒、アグリス！」

キャロ「プロヴィデンス！？」

驚きの表情を見せる二人を見てニヤリと笑うアグリス。その間にアグリスはナーガに念話を入れて自身が無事であることを伝え先ほど思いついたことを伝えて念話を切る。

アグリス「さて、ガキを苛めるのは趣味じゃないが局の人間なら仕方が無い。悪く思うなよ？」

得物を構えたアグリスを見てエリオ、キャロも身構える。来る…。そう思った瞬間アグリスが消える。嫌な予感がした二人はその場から後退する。

――――ヒュンッ！――――

風切り音が聞こえ二人が先ほどいた場所を横薙ぎにマン・ゴーシュを振ったアグリスがいた。後少し遅れていたら首が飛んでいただろう。背筋を冷たい汗が流れる。

アグリス「ふむ・・・、今の一撃を避けたか。少しは楽しめそうだな」

そう言って笑みを更に深くするアグリス。

エリオ「キャロ、下がってて」

キャロ「エリオくん!?」

キャロの前に立ってストラーダを構える。

エリオ「フェイトさんの下に行きたいけど、この人を倒さないと行けそうにないみたい。だからキャロは後方で援護して欲しい」

キャロ「エリオくん・・・。うん、分かった」

それを見ていたアグリスは驚いたような顔をする。

アグリス「ほぉ、俺に歯向かうか。面白い、その脆弱な力で何処ま

で持つか試してやろう」

エリオ「ストラーダ！ソニックムーヴ！！」

そして、強大な力を持つ使徒と小さな騎士は激突を始めた。

# 第十四話（後書き）

如何でしょうか？遂に現れました『使徒』、それと対峙するエリオ、キャロ、バルド、フェイトは一体どうなるのでしょうか？

バルド「良い所で切りやがって、気になるだろうが」

それは次回のお楽しみです。使徒の一人アグリスの武器ですが、マン・ゴーシュは
攻防一体の特殊短剣で敵の剣を折ったりできるソードブレイカーの一種ともいえます。フランス語で『左手』と言われているらしく実際に右手に剣で左手にこれを装備して戦ったそうです。まあ、どっちの手に装備してもいいらしいのですが……アグリスは両方に装備しています。

フェイト「あわわわ、エリオとキャロが危ない！如何しよう！？」

バルド「二人に酷いことしないよな……？」

はいはい落ち着いてくださいね。彼らがどうなるかは作者次第だ！
何が起こるかな
何が起こるかな～～？

バルド「……フェイト」

フェイト「うん、何時でもいいよ……」

あ、あれ？二人ともなぜ私めに武器を向けてイラッシャルノデスカ？

バルド「魔王炎撃破！！」

フェイト「トライデントスマッシャー！！」

ぎぃぃぃあああぁぁぁぁぁぁぁ！！！？

作者はログアウトしました。

バルド「二人になんかしてみろ、今度は消し炭にしてやる」

フェイト「次話も早く更新できるように作者を脅ｓ－－Ｏ・ＮＥ・ＧＡ・Ｉ☆するから読者の皆さまこれからも宜しくお願いします」

バルド「後、前回とったアンケートやご意見、評価なども宜しくお願いします」

フェイト「それでは、これからもこの小説を宜しくお願いします！！」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第十五話（前書き）

気がつけばユニークが５０００突破！！……なんだと！？
読者の皆さまありがとうございま～す！！（＾－－＾）
さて、新年初投稿です。

バルド「使徒との戦いの続きだな」

はい。それと彼らの力も見ることができます。何ともはや卑怯臭い能力です。

ロイド「どんな力を持っていたとしても負けないぜ！！」

まあ、負けられると作者的に困りますが……
基本はエリオ達の戦闘です。二人が大変なことに……！！

バルド「なに！？」

では、本編をどうぞ！！

バルド「ちょっと待て作者！！今のセリフは聞き捨てならないぞ！！」

# 第十五話

エリダリアの街上空で激しくぶつかるものがあった。エリオとアグリスである。

エリオ「はあっ！！」

エリオはストラーダを突き出す。

アグリス「無駄だ」

それを右手のマンゴーシュを使って受け流す。エリオは其の侭ストラーダを横一閃する。

アグリス「効かん」

それを受け止め弾くエリオはその反動を利用して回転し反対から攻撃する。しかし、それも受け止められ弾き飛ばされる。エリオは少し離れた所に離れフォトンランサーで牽制する。アグリスは其処から動かずにそれを全て叩き落とす。

アグリス「攻撃に無駄が多いな。よくもまあ、今まで生きていられたものだな」

エリオ「くっ」

アグリス「それに、デバイスを非殺傷設定にしているとは如何いうことだ?俺を嘗めてるのか?」

エリオ「違う!僕達は人を傷つけたくないから、だかｒ「くだらん」っ!?」

アグリス「傷つけたくないからだと?人を虚仮にするのも大概にしろ!!その様な理由で今まで生きていたのか?なら、許せんな!!」

アグリスから魔力が爆発的に溢れ出す。エリオは、その圧力に後退りする。

アグリス「全力で戦う相手にその様な配慮など無意味!その行いが相手を冒涜していることと知れ!!」

そう言うとアグリスは視界から消える。背筋に寒気を感じたエリオは咄嗟に体を伏せる。エリオの頭があった場所にアグリスがマン・ゴーシュを突き出していた。

アグリス「ホッとするのはまだ早い！！」

エリオ「がっ！？」

エリオの腹に膝を打ち込む。くの字に曲がったエリオの頭に肘を打ち下ろす。一瞬視界が真っ暗になり気付いた時は地面に思いっきり叩きつけられていた。

エリオ「ゴホッ、ゲホッ、ゲホッ！」

キャロ「エリオくん！！」

ぼやける視界にキャロが映る。だが、

アグリス「小娘、貴様も落ちろ！！」

キャロ「きゃあああああああ！！」

アグリスの回し蹴りがキャロの腹を蹴り飛ばし、キャロは其の侭地面に落ちる。

アグリス「竜、貴様もだ！！」

フリード「キュクッ！？」

首に踵を落とされフリードも地面に叩き落とされた。その傍らにアグリスは降り立ち痛みに蹲っているキャロを見下ろす。

キャロ「くっ・・・うう」

アグリス「……」

キャロ「ぐあっ！？」

そこにアグリスは腹にもう一度蹴りを入れてふっ飛ばす。地面を数回転がる。

エリオ「キャロ！くそぉぉぉぉぉぉ！！！」

フラフラになりながらも何とか立ち上がろうとするエリオ。それを見てニヤッと笑うアグリス。そして再びキャロに近づきマン・ゴーシュをその細い腕に突き刺した。

キャロ「あああああああああああああああああっ！！！！」

鮮血が其処から溢れ出す。バリアジャケットが鮮血で赤く染まる。

アグリス「如何した？小さき騎士よ。早く立てよ。じゃないとお姫様が痛みに悶えて死ぬぞ？」

そう言って刺したマン・ゴーシュをグリグリと回す。その度にキャロの悲鳴が辺りに響く。

エリオ「やっめろーーーー！！！」

アグリス「フハハハハハハ！！なら早く立て！次はこの柔らかい足を貫くぞ？」

そう言ってアグリスはマン・ゴーシュを抜きキャロの足にそれを構える。それを見たエリオの中で何かが弾けた。

エリオ「やめろって、言ってるだろおぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

一瞬の出来事だった。エリオは信じられない速さでキャロの下に行き彼女を再び傷つけようとしたアグリスにストラーダを振るう。それを受け止めるが今までにない位重い一撃に少々弾き飛ばされた。その間にキャロを抱き上げダメージで起き上がれないフリードの下に移動しキャロを降ろす。

エリオ「キャロ！！」

キャロ「エ…リオ……くん…」

呼び声に応えるキャロに一安心したが、脂汗を額に浮かべる彼女の痛々しい腕の傷を見て拳を強く握る。手の皮が?けてそこから血が出る。エリオは立ち上がりアグリスを睨む。

彼はその場から一歩も動かず此方を見て笑っていた。その顔を見て怒りで頭が一杯になったエリオはストラーダを構えて一気に接近する。その速さたるやフェイト達が見たら驚くだろう。何故なら、今の彼はソニックムーヴを発動させずにそれと同等に速さで動いているからである。今のエリオは何時ものエリオではなかった。その心は憎悪の炎に焼かれ目の前の敵しか見えていなかった。

許さない許さない許さないユルサナイユルサナイユルサナイ許さないユルサナイ許さない許さない！！

それだけが今の彼を形成していた。ストラーダを力いっぱい振り下ろす。それをアグリスは受け止める。あまりの勢いに少し後退する。そして、今のエリオは非殺傷設定を外していた。

エリオ「お前が…お前がキャロをっ！！」

アグリス「フハハハ！！そうだ！非殺傷設定など不要。全力で傷つけ合って、その先にある勝利を手にしてこそ価値があるのだ！！」

エリオ「戯言をっ！！」

互いの武器を弾き距離を開ける。アグリスは着地と共に足裏の魔力を爆発させ一気に肉薄マン・ゴーシュを突き出す。エリオはそれを紙一重で避けて逆に空いた胴体にストラーダを打ち込む。だが、もう一つのマン・ゴーシュで防がれる。激しくぶつかり合う両者、目にも止まらぬ高速戦闘は最早並みの魔導士では肉眼で捉えられるのも難しいだろう。何度も剣を交え鍔迫り合いになる。

アグリス「そうだ！憎め、怨め、その負の力が貴様を強くする！最高だ……今貴様は輝いてるぞ！！」

エリオ「五月蠅い！その口を閉じろ！！」

アグリス「フハハハハ！！如何した？もっと、もっと強くなれる筈だ！！なら、もう一度あの小娘を　甚振ればもっと強くなるのか？」

エリオ「キャロに近づくなあぁぁぁぁぁ！！」

鍔迫り合いから距離をとり再び肉薄、ストラーダを振るう。それを受け止めもう片方のマン・ゴーシュをエリオの脇腹に突き刺した。

エリオ「ぐっ！？」

アグリス「おらっ！！」

突き刺したマン・ゴーシュを抜き傷口を蹴飛ばす。吹っ飛ばされてビルに激突する。

アグリス「ふむ……」

そう呟き右手を見る。僅かに斬られた跡があった。吹っ飛ばされる寸前に斬ったと考えるとアグリスは笑い始めた。

アグリス「ククククク、ハハハハハハ！！！素晴らしいぞ。その相手を倒すまで諦めない精神。気にいった。お前に俺の力を見せてやろう」

エリオはビルから飛び出してストラーダを構える。

エリオ「ストラーダ！カードリッジロード！！」

薬莢が３つ飛び出す。魔力刃が大きくなる。

エリオ「うおおおおお！！紫電一閃！！」

シグナムの使う得意技、紫電一閃で斬りかかる。だが・・・

アグリス「『我が血潮は鋼で出来ている』」

そう呟くアグリス。すると魔力刃があっさりと弾かれた。

エリオ「なっ!?」

斬りつけた場所は一切傷を負っておらず、そこには、平然と立っているアグリスがいた。

アグリス「我がレアスキル、鋼血天鎧（スチールオブブラッド）。貴様の攻撃はもう何の意味もない」

エリオはストラーダで何度も斬りかかる。だが、アグリスの体には掠り傷どころか傷一つ付いていなかった。

アグリス「もうお終いか?今度は此方から行くぞ!!」

そして、アグリスはエリオに肉薄して行った。

バルドはナーガと今だ交戦中だった。だが、何時まで経ってもアグリスという者が戻ってこないことに疑問を感じていた。

バルド（気を失ってるのか？それとも……）

嫌な予感がする。先ほど動きを止めたナーガがあれ以降落ち着いた動きを見せている。それに何か時間稼ぎをされているような感じだった。

ケルベロスを振るう。それを体を仰け反って避ける。ナーガは其の侭手をついて回転蹴りを繰り出す。それをバハムートで受ける。ナーガはその反動を利用し距離をとる。

ナーガ「流石は『煉獄の魔神』。此処まで梃子摺ったのは久しぶりです」

バルド「そりゃどうも」

ナーガ「ですが…それも此処までです。あなたの攻撃はもう当たりません」

バルド「何？」

眉を動かすバルドの前でナーガは目を閉じ何かを呟いた。

ナーガ「『我が眼（まなこ）は全てを見通す』」

そして、目を開くとその目は人の目ではなかった。例えるならそう、猛禽類の瞳に似ていた。

バルド「何だその目は？」

ナーガ「言ったはずです。これであなたの攻撃は私に届かない」

バルド「なら……確かめてやるよ！！」

そう言ってバルドは足裏の魔力を爆発させ先ほどよりも速く移動しケルベロスを振るった。それは、ナーガの頭に吸い込まれる様に迫った。しかし、彼女は一歩下がることでそれを避ける。再びバハムートで斬りかかるも体を少し反らすだけでバハムートは空を切った。

今度は逆にナーガが槍で突いてきた。目にも止まらぬ高速突き。それを冷静に弾き、受け流し、受け止めた。だが、彼女は不意に不規則な動きに変わる。突きと見せかけて薙ぎ払い。薙ぎ払いと見せかけて叩きつけ、一瞬で攻撃動作が変わるその動きにバルドは翻弄され始める。そして、一瞬の隙を突かれて槍の一撃を左肩にくらう。

バルド「ぐっ！」

一度後退する。突きでなく、叩きつけだったため少々痛む程度で済んだ。

ナーガ「如何ですか？自身の攻撃が当たらないのに相手の攻撃は当たる。中々屈辱的でしょう？」

バルド「それが……お前の力か？」

ナーガ「ええ、これが私の力『鷹の目（ホークアイ）』です」

ケルベロス［大変だ、相棒！！］

その会話にケルベロスが割り込んだ。普段のおちゃらけた雰囲気はなく切羽詰まった声を上げる。

バルド「何だ、五月蠅い奴だな。少しは静かに出来ないのか？」

ケルベロス［それどころじゃねえんだよ！！エリオ坊とキャロ嬢の反応が弱まってる！近くにアグリスっつヤローの気配もする］

バルド「何！？」

ババハムート［それは本当ですか、犬！？］

ケルベロス［こんな時に冗談は言わねえよ！！それと犬言うなトカゲヤロー！！］

二人で……いや二本の剣は敵の前だというのに口喧嘩をしていた。

バルド「うるせえぞ！馬鹿共が！！」

そこにバルドの一喝が入る。それに二本の剣は黙った。バルドは、焦っていた。エリオとキャロに危険が迫っていることに全く気付かなかった。それに気づかなかった自分が腹立たしい。

バルド「あのヤローが戻らないと思ったらそう言うことか……」

ナーガ「フフフ、そう言うことです。私を倒さないとあの子達の下には行けませんよ？」

そう言って槍を構えるナーガ。バルドは、それをじっと見つめたまま動かない。

ナーガ「如何しました？早く私を倒さないと間に合いませんよ？」

バルド「……バハムート戻れ」

バハムート［で、ですが若！「いいから戻れ！！」っ！分かりました……］

左手のバハムートを消す。その行動に意味が分からないナーガは内心首を傾げていた。

バルド「ケルベロス……殺るぞ」

ケルベロス［！？いいぜぇ～。やってやろーじゃん！！］

そして、ケルベロスを構えるバルド。ナーガも自身の槍を構える。

バルド「魔王炎撃破！！」

突然バルドは天井に向けて黒炎を撃ち出した。それは天井を破壊して空高く昇り爆発した。

ナーガ「何のつもりですか？」

バルド「なに・・・ちょっとした準備運動だ。これから俺の力の片鱗を見せてやるよ。死ぬ気でかかってこい」

そして、バルドの魔力が一気に跳ね上がった。突然の魔力上昇に驚きを隠せないナーガ。

バルド「ケルベロス！２ｎｄフォルム！！」

ケルベロス［ヒーハーー！！！派手に舞おうぜ！！］

ケルベロスが光り輝く。それが治まると、バルドの手には黒い無骨な大剣のケルベロスではなく両手に一本ずつ黄金に輝く剣が治まっていた。

バルド「２ｎｄフォルム、『一対の燃える剣（コラーダ・ティーソン）』！！」

ナーガ「その姿は一体……」

黄金に輝くその剣に警戒の色を見せるナーガ。その彼女に右手に持った剣『コラーダ』の切っ先を向ける。

バルド「俺の動きについてこれるか？」

ナーガ「？言ったはずです。貴方の攻撃はもう当たらないと」

バルド「それはさっきの俺のことだろう？今から見せるは速さの極限世界。お前はついてこれるか？」

そう言ったバルドは二本の剣を構える。ナーガも槍を構える。

バルド「行くぞ……」

そう言った瞬間バルドはナーガの視界から消えた。

ナーガ「なっ！？」

背筋に寒気が奔る。

ナーガ（後ろっ！？）

咄嗟に伏せる。その瞬間彼女の頭があった部分を何かが通り過ぎる。風と音がその後を追う様に駆け抜けるのを感じて頭を上げるとそこにはバルドが左手に持った『ティーソン』を肩に担いだ状態で立っていた。

ナーガ（風と音を超えただと……！？）

バルド「今のを避けるか。まあいい。ホントの速さはこれからだ」

そして、再び姿が消えた。ナーガは周囲に目を凝らす。美術館というこの狭い空間ではその速度も制限されている。必死になって辺りを見る。周囲で音速を超えた速さで動いているためか衝撃波が辺りを削るような跡ができ彼女の視界には幾つもの残像が飛び交っていた。

ナーガ（残像しか見えない！！ハッ！右！？）

体を思いっきり仰け反る。そこを何かが通り過ぎる前髪が数本斬られた左に視線を向けるがそこにはバルドはもういなかった。

ナーガ「ど、どこに！「お前の後ろだけど？」な！？」

慌てて距離をとる。彼女の背後にはバルドが平然と立っていた。

バルド「なるほど、その目、風よりもいや、音よりも速いものは捉えきれないか……」

冷静に今の戦闘の分析をしているバルド。

バルド「悪いがもう遊んでいる暇がなくなったからな。終わらせるぞ」

ナーガ「くっ……」

そう言うとバルドは再びナーガに肉薄していった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

イノセント?型の群れとロイドとコレットは激しい空戦を繰り広げていた。

四方八方から飛んでくる銃弾を避け、弾き飛ばしながら次々とイノセント?型を撃墜していた。その時上空に黒い炎が立ち昇り爆発した。

ロイド「バルドからの救難信号?」

そう、バルドは本来技の無駄撃ちを嫌う。そんな彼が先ほど打ち上げた炎は救難信号と仲間達はそう受け取っている。それに首を傾げるロイド。バルドの実力を知っているので彼が梃子摺っているのかと思った。

コレット「ロイド！エリオとキャロが誰かと戦ってる！」

ロイド「なんだって！？」

ここにきて二人は気づいた。バルドは自身の救援ではなく、息子と娘の救援を求めていたということに。耳を澄ますコレット。その彼女が拾った音には苦痛の声を上げるキャロと雄たけびを上げるエリオの声があった。

コレット「エリオとキャロが危ない！！ど、如何しようロイド！」

ロイド「くそっ！やっぱレイとレンも連れてくれば良かった。仕方ない、コレット！お前がエリオとキャロの下に行ってくれ！！」

コレット「ロイドは？」

ロイド「俺が代わりにフェイトの下に行く」

コレット「わかった。ロイド、気をつけてね」

そう言うとコレットは一瞬の内に姿を消した。ロイドは、前方にいるイノセント?型の群れに剣の切っ先を向ける。

ロイド「悪いが一瞬で終わらせる」

そう言うとロイドの姿が消え、既にイノセント?型の群れの背後に立っていた。

ロイド「奥義、神光皇烈刃……」

剣を鞘に納めそう呟いた瞬間、数十体いたイノセント?型の群れは綺麗に横に両断され次々に爆散した。

ロイド「アル、ウル！この場は任せた！！」

眼下にいる二頭に大きな声で言う。イノセント?型と戦いながら二頭がそれに雄たけびで応えるのを見た後、ロイドは超高速で飛びフェイトの下に向かった。

アグリス「ほらほら、如何した！動きが鈍くなってきたぞ？」

エリオ「くうっ！」

マン・ゴーシュを連続で振りながらアグリスは楽しそうに笑いながら言う。

アグリス「自分の女を傷つけた俺が憎いんじゃないのか？さっきの威勢は何処行った！！」

エリオ「五月蝿い！！キャロとはそんな関係じゃない！！」

マン・ゴーシュを受け止め鍔迫り合いになる。だが、先ほどと違いエリオの勢いが弱かった。アグリスにはらわれ、体勢を崩したエリオの太腿にマン・ゴーシュが突き刺さる。

エリオ「ぐっ！？」

アグリス「フハハハ！如何した如何した如何した如何した如何したーーー！！！」

無数に来る斬撃を腕をクロスさせて耐えるしかなかった。バリアジャケットが其処彼処斬り刻まれ血が吹き出る。連撃が止まったのを見逃さずストラーダで斬りかかるが、防がれて逆に右肩にマン・ゴーシュが突き刺された。苦痛の表情を浮かべるエリオの顔をアグリスは掴み思いっきり投げる。勢いを殺すことも出来ず鉄柱に激突する。衝撃で鋼鉄製の柱が少し曲がった。

エリオ「がはっ!!」

アグリス「如何した!早く来いよ!!来ないならこっちから行くぞ!!」

再びエリオに接近、頭を掴み地面に向かって投げる。着地の態勢を作ることも出来ず其の侭激突、小規模のクレーターが出来た。フラフラになりながらも何とか立ち上がる。

エリオ「う…ごほっ、ごほっ!!」

アグリス「つまらん……もうお終いか?なら、とっとと死ね!!」

右手に魔力が収束する。そして、マン・ゴーシュをエリオに向かって打ち出した。咄嗟にストラーダがプロテクションを発動させるがそれは易々と貫通される。しかし、このお陰で軌道が僅かにずれ左肩に浅く刺さる程度で済んだ。

アグリス「爆豪掌！！」

しかし、切っ先で魔力が爆発する。その爆風でエリオは吹っ飛びキャロのところまで飛ばされた。

キャロ「エリオくん！！」

エリオ「ぐあああああああああああああっ！！！」

キャロ「っ！！？」

キャロの前で蹲る彼の肩を見るとそこは焼け爛れていて痛々しかった。だが、もしプロテクションが発動しなかったらエリオはこの程度で済まなかったろう。

アグリス「この程度か？つまらんつまらんつまらんつまらんぞおぉぉぉ！！まだ俺は力は解放したが本気ではないぞ！やはり、生温い戦地で生きてきた貴様らはこの程度が限界か。興醒めだ」

そう言って得物を構える。キャロは痛む体を無理やり動かしエリオの前に立ち両腕を広げ壁になるように立った。

アグリス「……何の真似だ小娘？」

キャロ「これ以上エリオくんを傷つけないで！」

アグリス「戦場でその様な言い分など通らん！！死にたいのなら貴様から死ねっ！！」

アグリスはマン・ゴーシュをキャロの眉間に向かって突き出す。自身の最後を見ないようにキャロは目をギュッと瞑った。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

エリオ　SIDE

アグリス「ほらほら、如何した！動きが鈍くなってきたぞ？」

エリオ「くうっ！」

アグリスっていう人が発動した力、鋼血天鎧（スチールオブブラッド）で僕の攻撃は全くと言っていいほど効いていなかった。でも、キャロを傷つけたのが許せなかった！気づいたら非殺傷設定を外して何度も切り結んだ。あの

人の体には幾つかの傷があった。あれは僕がやったんだと思うと目の前が真っ暗になりそうだった。けど、

アグリス「自分の女を傷つけた俺が憎いんじゃないのか？さっきの威勢は何処行った！！」

エリオ「五月蝿い！！キャロとはそんな関係じゃない！！」

この言葉が許せない！僕とキャロはそんな関係じゃない！僕たちは、仲間だ！確かにキャロのことは気になるけど，そんなことじゃない！あの人に……キャロを傷つけたあの人にだけは絶対にそんなことは言われたくない！！

エリオ「ぐっ！？」

アグリス「フハハハ！如何した如何した如何した如何した如何したーーー！！！」

あの人の持っている見たこともない武器で太腿を貫かれる。痛みが全身に電気みたいに走った。その後も何度も斬りかかってくる攻撃に反応できない。唯、斬撃の嵐が去るのを耐えるしかなかった。耐えれば絶対に隙が出来るはず。攻撃が止まった、今だ！！

渾身の一撃を叩き込む！けど、

――ガキンッ!!――

それをあっさりと防がれた。逆に右肩にあの人の武器が突き刺さる。其の侭頭を掴まれて投げ飛ばされた。視界がグルグルと回る。体勢が立て直せない!?

エリオ「がはっ!!」

アグリス「如何した!早く来いよ!!来ないならこっちから行くぞ!!」

背中から何か固い物にぶつかった。それが何なのか分からない。段々と思考が途切れてきた。

目の前にもうあの人がいる。また掴まれた。気づいたら体に重い衝撃が走る。口の中で血と土の味がした。そこで、自分が地面に叩き落とされたのが分かった。何とか立ち上がると喉の奥から何かがせり上がってくる感じがして思わず咽る。

エリオ「う…ごほっ、ごほっ!!」

アグリス「つまらん……もうお終いか?なら、とっとと死ね!!」

肩に痛みが走るそして、何かが爆発した。左肩に今まで感じたことが無いほどの激痛が走った。

キャロ「エリオくん！！」

エリオ「ぐあああああああああああああっ！！！」

痛い、痛い、痛い！！頭がチカチカと明滅する。キャロの声が遠くで聞こえる。

アグリス「この程度か？つまらんつまらんつまらんつまらんつまらんぞおぉぉぉぉ！！まだ俺は力は解放したが本気ではないぞ！やはり、生温い戦地で生きてきた貴様らはこの程度が限界か。興醒めだ」

目をあけるとそこには得物を構えるあの人と自分の前に立ち両腕を広げ壁になるように立ったキャロがいた。

アグリス「……何の真似だ小娘？」

キャロ「これ以上エリオくんを傷つけないで！」

アグリス「戦場でその様な言い分など通らん！！死にたいのなら貴様から死ねっ！！」

エリオ「や…めろーーーーーーーー！！！」

叫びながら思った。自分はこんなにも弱かった。誰でもいい誰か…
…誰かキャロを助けて!!!!

そう思った時……

???「天月閃!!」

キャロとあの人の間に白い流星が割り込んで武器を蹴り上げた。

アグリス「なにっ!?」

???「列蹴脚!!」

其のまま驚愕の表情を浮かべるあの人の脇腹に回し蹴りを入れて吹っ飛ばした。

ふわりと着地するその人を見て驚いた。

コレット「2人とも大丈夫!?」

その人は、いつもの姿と少し違う恰好をしたコレットさんだったから

エリオＳＩＤＥ　ＯＵＴ

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

コレット「２人とも大丈夫!?」

ギリギリ２人の危機を救ったコレットは２人の下に駆け寄る。

エリオ「コ…コレットさん…」

コレット「っ!!酷い……」

２人の傷を見てコレットは怒りよりも先に悲しみが襲った。

キャロは腕から血を流しバリアジャケットがボロボロな状態でいた。
エリオの状態は更に酷く体中裂傷で血だらけ太腿と右肩は何かに貫かれた跡があり左肩は焼け爛れていた。

ここまで酷い仕打ちをしたのはあの男だろう。

コレット「待っててね、今治療するから！」

そう言うとコレットを中心として不思議な魔法陣が現れる。

コレット「御許に仕えることを許したまえ、御身の力よ、此処に苦しむ者に慈悲深き抱擁を！！
天使の抱擁（エンジェルインブレス）！！」

そう唱えるとエリオとキャロ、そしてフリードを光が包み込む。

キャロ「これは？」

コレット「その中にいれば大丈夫。暫くはそこから出ないでね」

そう言って立ち上がるコレット。そこで痛みが和らぎ始めたエリオはコレットの恰好が変わっていることを聞く。

エリオ「コレットさん、その格好……」

コレット「あ、これ？これはね、私のもう一つの戦闘スタイル、アクセルモードって言ったらいいのかな？」

今の彼女は、普段着ている神子服が全体的に大きくなった少し変わった形をしていた。天使の羽を生やし、下は長ズボン（ＴＯＧのア○ベルのズボン風）に金の刺繍が入っている様なのになっており、腕には七色に輝く光の籠手が着いていた。

コレット「兎に角そこから動かないでね？」

エリオ「は、はい。分かりました。あ！コレットさん、あの人はアグリスと言って体が鋼鉄みたいに硬いですから気を付けてください」

コレット「そうなの？ありがと。頑張ってみるね」

そう言いにっこりと笑うコレットは吹っ飛ばしたアグリスの下に歩いて向かった。

ビルに突っ込んだアグリスは傷一つ付かずにそこから出てきた。

アグリス「ん？」

そこに目の前でコレットが立っているの気付いた。

アグリス「テメーか、俺を蹴飛ばした奴は」

それにコレットは拳を作って応えた。

コレット「貴方がエリオとキャロをあんなにまでした人なんですね？」

アグリス「ああそうだよ！あんまりにも弱かったからつまらなかったがな」

コレット「……許さない」

アグリス「あ？」

コレット「2人をあそこまで傷付けた貴方を私は許さない！！」

ドンッ！！という音が聞こえるほど彼女から虹色の魔力が放出され彼女を中心に円状にクレーターが出来た。それを見てアグリスは驚愕の表情を見せる。

アグリス「虹色の魔力光！？お前は『虹色の女神』コレット・ブルーネルか！？」

コレット「エリオとキャロは私やロイドにとって大事な弟と妹の様な存在。その2人をあそこまで傷つけて……私も久しぶりに怒ったよ！！」

アグリス「フハハハ！！久しぶりに骨のある奴が現れたか！」

コレット「今なら、撤退してくれるなら許します」

アグリス「くだらん」

そう言った瞬間アグリスは高速で接近、マン・ゴーシュを大きく振りかぶっていた。

アグリス「女如きが図に乗るな！！」

そう言い、得物を突き出した。高速の刺突がコレットの眉間に迫る。しかし、

コレット「燈籠……」

コレットは、それをその場で回転する様に避けて其の侭目の前を通り過ぎるアグリスの腕を掴む。

コレット「……流し！！」

アグリス「ぐはっ！？」

そして、其の侭一本背負いをしてアグリスを地面に叩きつけた。巨漢のアグリスを小さな体のコレットが何の苦もなく投げる。衝撃で

地面が陥没する。細身の体でそこまでの威力を出したのだった。

地面に陥没したアグリスの足を今度は掴み空中に放る。地面を思いっきり蹴り投げ飛ばされたアグリスを追い越してそこで一回転し飛んできたアグリスに踵落としをする。

コレット「軽岩爆砕撃！！！」

アグリス「ぐっ！？」

咄嗟にアグリスは右手のマン・ゴーシュに付いている盾でガードしかし、その一撃は直撃してないにも拘らず骨が軋むほどの重さで投げ飛ばされた時の３倍の速さで地面に叩き落とされた。

衝撃で周囲の物が吹っ飛び１０メートルほど砂柱が上がる。

アグリス「くっ！なんだ今の一撃は！？」

上空を見上げるとコレットが自分に向って流星のように落ちてくるのが見えた。舌打ちし、その場から飛び去る。それと同時にコレットがアグリスのいた場所にコレットの蹴りが落ちる。先ほどの３倍はあろう砂柱が上がる。

その中からコレットが砂柱を突き破ってアグリスに肉薄する。アグリスはマン・ゴーシュを横に振るう。それを光る籠手で受け止め逆の手で殴る。アグリスも逆のマン・ゴーシュの盾で受け止める。

そこからは高速での斬り合い、殴り合いが始まった。来る攻撃をコレットは次々と避け、籠手で受け、殴り、蹴る。アグリスも突きや斬り払い、斬りおろし等自身の力も活かした力技で対抗する。そして、コレットの拳がアグリスの顔面に迫る。それを紙一重で首を横に逸らすことで避ける。そして、その拳は彼の背後にあった鉄柱に当たる。

――――ゴトンッ！！――――

最初に言っておこうコレットのはただの拳である。それを自身の魔力で生成した籠手で覆うだけの簡易的なものである。だがそれでも…それでも目の前の鉄柱はその一撃でくの字に曲がり折れた。

アグリス「なっ！？」

それには流石にアグリスも驚いた。コレットの一発の攻撃で硬い鉄骨がポキリと折れたのだから。その衝撃で鉄柱の上部分にあった鉄骨が落ちてくる。それをコレットは片手で掴み、思いっきりアグリス目掛け投げた。

数tはあるだろう鉄の塊が猛スピードで迫る。受け止める訳など出来るはずもなく全力で回避行動をする。ゴウッ！！と言う風切り音と共にアグリスの横を通り過ぎ彼の背後のビルに深々と突き刺さった。

アグリス「くっ、化け物め……！」

その後も落ちてくる鉄骨を悠々と片手で掴んでは投げ、掴んでは投げるを繰り返すコレット。何処にそれ程の力があるのかアグリスには分からなかった。唯、一撃でも貰えば危険なのは先ほどの攻撃で分かった。背後のビルは最早剣山のようになっていた。鉄骨が無くなりコレットは再び肉薄する。

コレット「双龍脚！！」

素早い2連蹴りがアグリスを襲う。それを両手で受け止めコレットの足を掴み投げ飛ばす。マン・ゴーシュの剣先に魔力が集中し一気にそれを放った。

アグリス「爆炎砲！！」

ここに来てアグリスは初めて遠距離攻撃を出した。踊る様にステップし綺麗に着地したコレットに紅蓮の炎が迫る。コレットは右手を前に出す。

コレット「ホーリーメイル！！」

彼女の前方に円状の大きな光る盾が出現する。その盾と爆炎砲がぶつかり辺りを爆風で覆う。煙が晴れ中から無傷のコレットが現れた。

アグリス「っち！今のも効かんか」

舌打ちするアグリスに再びコレットは接近、拳の雨がアグリスに降り注ぐ。徐々に余裕が無くなっていく。そして遂に足払いをかけられバランスを崩した。

アグリス「しまっ！」

コレット「砕震脚！！」

そこにコレットが足を突き出す。その脚はアグリスの腹に吸い込まれる様に伸び、腹にめり込んだ。

アグリス「ごふっ！？」

アグリスは弾丸のように飛んでいきビル二つを貫通して漸く地面に足がついた。足を踏ん張り勢いを殺して漸く止まる。その場所はエリオとキャロと戦った場所だった。

アグリス「ごほっ、ごほっ！ま、まさか我が『鋼血天鎧（スチールオブブラッド）』を貫通す

る一撃を放つ者がいるとはな……」

そこにコレットもやってきてエリオとキャロとフリードを確認する。二人と一匹は言われた通りそこから動いていないことにニコリと笑う。そして、直ぐに表情を引き締めアグリスの方を見る。

コレット「まだやるの？出来れば撤退して欲しいのだけど？」

アグリス「くっ！今回は仕方がない。目的も果たしたからな此処にはもう用はない。此処は退かせてもらう。」

そう言ってアグリスは転移魔法を発動させ消えていった。

コレットは辺りを見回し周囲に敵がいないことを確認すると普段の神子服を着た姿に戻りエリオ達の下に急いで向かう。

コレット「二人とも怪我の具合は如何？」

エリオ「あ、はい。少し痛みますがもう大丈夫です」

コレット「そう？よかった～。あ！でもまだそこから出ちゃダメだからね？」

そう言いコレットがエリオ達のいる魔法陣の中に入る。

キャロ「で、でもフェイトさんの所に急いで行かないと……」

コレット「だいじょぶだよ。フェイトの下にはロイドが行ったから」

そう言ってニコリと笑うコレットを見て安堵の顔を見せるがすぐに表情が暗くなる。

コレット「どしたの？」

エリオ「僕達…全然歯が立ちませんでした……」

キャロ「私なんて何も出来ないで真っ先にやられてしまいました……」

エリオ「僕達って世界から見たら物凄く弱いんですね……」

目に涙を浮かべる二人を見てコレットは優しく二人を抱きしめた。

エ・キ「「コレットさん！？」」

コレット「だいじょぶだよ。私だって昔は皆に守られているばかりの弱い存在だった」

それを聞いて二人は驚きの表情を作る。二人から見ればコレットは

強者の部類である。彼女が弱かったというのが想像もつかなかった。

コレット「でもね、私は皆を守りたい、少しでも皆の力になりたい、そう思って努力したから今の私がいるんだよ？だから、だいじょぶ」

そう言って二人の頭を優しく撫でる。徐々に二人の目から涙が溢れてきた。コレットは姉の様に微笑み二人を見る。

コレット「悔しかったら、泣いてもいいんだよ？次に戦う時までにもっと頑張って、努力して一緒に強くなろう、ね？」

それを聞いた瞬間、二人は堪えるのを辞めコレットにしがみ付いて力の限り泣いた。

悔しかった。自身の力を使う前に敗れ、仲間を助けることすらできなかったことが……。

悔しかった。大事な仲間も守れず、怒りに身を任せた挙句、自身の力が通用せず玩具の様に遊ばれたことが……。

しばらく泣き続けて疲れたのか二人は眠りに落ちた。その二人をコレットは優しく抱きしめて起きるのを待った。そこにアルとウルが戦いが終わったのか全身にイノセントの体液を付着させてやってきた。

コレット「お疲れ様、アル、ウル」

それに喉を鳴らして応えて体についてる汚れを落としてコレットの両隣りにその巨体を下した。コレットは二頭の頭を優しく撫でる。それに体を震わせ喉を鳴らし気持良さそうな表情を作った。

コレット「ロイド、バルド、フェイト。無事でいてね」

残る襲撃者は二人。ロイド達の無事をコレットはそこで祈るのだった。

# 第十五話（後書き）

二人のピンチにコレット乱入！そして、無双状態……ヤバイ……
書いた作者が一番驚いてる。

フェイト「よかった。二人とも無事で」

さて、コレットのアクセルモードですが簡単に言うと接近戦専用スタイルです。
下がスカート（？）ではなくズボンに変わって全体的に服が大きくなった以外と国見た目は変わりません。ただ、攻撃力は半端ないです。

まあ、原作でもレザレノ社長を片手で運ぶという離れ業を見せつけたりとプレイヤーもビックリ目ん玉飛び出る様なことしてましたが……。

ロイド「まあ、それよりも壁にヒト型の穴あける方が凄いと思うぞ？しかも、髪型まで分かる穴だし……」

まあ確かに…あれは作者もビックリですあんな跡をつけられるなんてコレットは神か！？と思った時もありました。話が逸れた…次にバルドの２ｎｄフォルムですが、
スペインの英雄、騎士エル・シードの持っていたらしい剣です。まあ、音速を超えた高速戦闘が出来る…は思いついたものですがね。
因みにまだケルベロスには数種類のフォルムがあります。それが何時お披露目になるかは未定ですが…。

バルド「さて作者、言いたいことは言い終えたよな？」

あ、あのバルドさん？ナゼワタシニケンヲムケテイラッシャルノデスカ？

バルド「二人に酷いことするなって言ったよなあぁぁぁ！！」

ヒィーー！読者のみ、皆さん！次回もなるべく早く投稿できるように頑張りますのでこれからも宜しくお願いします！！

バルド「消えろおぉぉぉぉ！！」

ひでびゃーーー！！？

バルド「ふぅ～、次から気をつけろ！！さて、次回はエリダリア編は終了らしい
次回も楽しみにしていてくれ」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第十六話（前書き）

やっと投稿できました。待っていた読者の皆様遅れてしまってすみませんｏｒｚ

バルド「何で遅れたんだよ？」

いや～今まで課題やら何やらかにやらで書く暇が・・・・・・ねぇ？

セフィリア「心苦しい言い訳ですね」

ぐっ！でもでも、課題ださないと単位貰えないんだもん！！今落とすと後々大変なんだもん！！……言い訳でしたすみませんｏｒｚ

バルド「しっかりしてくれよ？」

以後気を付ける様努力します。さて、今回でエリダリア編は終了です。

では、本編をどうぞ！！

# 第十六話

？？？「ああ～～！もうっ！しつこいっ！！」

前方に飛んでいるプロヴィデンスの幹部の一人をフェイトは追跡していた。彼がその手に持っているのは蒼の御珠と呼ばれる宝玉でそれはバルドが言うには本物…つまりロストギアである。

このまま逃がせば後々大変なことになる。フェイトは、何とか逃げた男を見つけて追跡してるのだが……

フェイト（速い……）

前方にいる男はフェイトが追ってきてることに気付いた途端、猛スピードで逃げだしたのだ。その速さは想像以上で見失わないように何とか食らいついている状態である。

フェイト「止まりなさい！！」

？？？「止まれと言って止まる奴はいないよ～。くらえ！緑衝弾！！」

そう言って杖を持った手をフェイトに向ける。その周囲から緑色の魔力弾が撃ち出されフェイトに飛んでくる。

フェイト「フォトンランサー、ファイヤー！！」

それをフォトンランサーを撃ち出し相殺する。爆風でフェイトの前方が煙に包まれる。

それをバルディッシュで払い吹き飛ばす。

しかし、そこにさらに男が放った魔力弾がフェイトに迫る。必然的にそれを避ける為に回避行動をとる。

フェイト「くっ…！また距離が開いた」

先ほどから似たような攻撃でフェイトは徐々に距離を離されているのだった。

フェイト（このままじゃ、見失う……。なら！）

スピードを更に上げて一気に近づく。それに気づいた男は再び魔力弾を複数飛ばしてきた。

フェイト「ハーケンセイバー！！」

魔力刃を飛ばして正面から来るのだけ両断する。

フェイト「ソニックムーブ！！」

ハーケンセイバーが通った場所だけ障害物は無くなり、そこを高速移動魔法で突き進む。

？？？「嘘おぉ！？」

予想外だったのだろう。男は驚愕の顔を浮かべて慌てて迎撃しようと自身のデバイスをフェイトに向けようとしたのだが……

フェイト「はあっ！！」

？？？「あっぶな～～い！？」

フェイトがそれよりも先に射程内に捉えバルディッシュを振るった。
咄嗟に男は防御魔法を使いその一撃を止めることに成功するも飛行魔法が解けてしまい其のまま重力落下した。

???「あわわわわわ!!?」

フェイト「フォトンランサー、ファイヤー!!」

慌てて飛行魔法を使おうとした男に追撃のフォトンランサーを放つ。
男は、飛行魔法の発動を断念し防御魔法を再び発動する。地面に着地した男は上空にいるフェイトに向かって叫ぶ。

???「危ないだろうが!!俺を殺す気か!?」

プンプンと怒っている男。取り敢えずフェイトは地面に降り立ちバルディッシュを何時でも動かせるように構えながら再び交渉する。

フェイト「それは、ロストギアと呼ばれるとても危険なものなんです。大人しくそれを渡していただければこちらは何もしません」

???「と、言われてもねえ……。俺はこれを持って来る様に言われてるし~如何すっかな~」

ウンウン唸っている男を油断なく見る。そこに……

？？？「渡さなくとも良いぞ、ロウ」

フェイト「っ！？」

一瞬、背後に寒気が走り咄嗟に振り向きバルディッシュを構える。その瞬間バルディッシュに何かがぶつかる。その一撃たるや重く危うく手を離してしまうところだった。目の前にいる影は再び姿を消し気づいた時には宝玉を持った男の隣に立っていた。その姿は長身の男で全身を黒で統一した忍服の様な服を着ていた。

ロウ「おお！トールス、お前も来てたのか」

トールス「何時まで経ってもお前が来ないからな、暇を持て余していた俺に行けと言われたのでな……」

ロウ「う……、それはすんませんしたｏｒｚ」

トールス「で？あの女は何だ？」

ロウ「管理局の奴だよ」

トールス「あれがか……」

それを見て目を細めるトールス。フェイトの方はというと新手が現

れたことに内心焦っていた。

フェイト（不味い…今の動き咄嗟に動けたけど姿を捉えきれなかった。それに、相手はまだ本気で動いていない。2対1じゃ分が悪すぎる！）

バルディッシュを強く握り内心を表に出さないように強く相手を睨みつける。

トールスはフムッと呟きながら顎に手を当て考える仕草を見せ何か思いついたのかロウと呼ばれた男に話しかける。

トールス「ロウ、お前は先に行け。俺があの者の相手をしよう」

ロウ「マジか！？いや～助かったよ。俺一人じゃ荷が重すぎて如何しようか悩んでいたんだよ」

トールス「良く言う。俺よりも実力が高いくせに良くそんなこと言えるものだ」

ロウ「だってさ～」

そう言われたロウは、

ロウ「弱すぎて思わずポキリと折っちゃいそうなんだもん。玩具は

大切に扱わないとね～」

満面の笑みでそう言ったのだった。その時の顔は無垢な表情をしていたのにとても残忍な顔にも見えた。

フェイト「っ！」

その小さな体からｈ「誰が小さいって？」……地の文読まないでください。

ロウから発せられる殺気は途轍もなく大きく、思わずフェイトは悲鳴を上げそうになった。それに気づいてるのかロウはクスクスと笑う。

ロウ「それじゃ、俺は行かせてもらうかな？今度は一緒に遊ぼうね？お人形さん」

そう言うと飛行魔法を発動させ悠々とその場を去って行った。

フェイト「ま、まっｔ「行かせると思うか？」っく！」

正面から発せられる殺気に咄嗟にバルディッシュを前に構える。す

るとまたもや衝撃が伝わり手が痺れる。

トールス「お前の相手は私だ」

フェイト「あ、貴方は一体！」

暫し鍔迫り合いになっていたが互いのデバイスを弾き一端距離をとる。フェイトは頬に冷たい汗が流れるのを感じた。自身の本能が警告してくる。目の前の男は…自分では危険すぎると……。

トールス「私の名か？私は、プロヴィデンスの幹部が一人、第十の使徒、トールスだ」

そう言って自身のデバイスを構える。

トールス「起きろ、『雷電』」

雷電［御意］

起動音が聞こえそのデバイスは一つの忍者刀に変化した。刀身は赤く、柄の部分は黒色だった。

トールス「では、行くぞ」

地面を蹴り一気に近づいてくる。その速さたるや幾つもの残像が見えるほどで一瞬だけフェイトは反応が遅れる。

トールス「フッ！」

フェイト「くっ！」

ガキンッ！という音が辺りに響く。間一髪刃が届く前にバルディッシュで防ぐ。暫しの拮抗、だが一気に押し返されフェイトは弾き飛ばされる。

トールス「ピアシングナイフ！」

幾つものナイフを作り出しフェイトに向かって飛ばす。

態勢を立て直して飛んでくるナイフをバルディッシュで弾く。弾ききれないものはフォトンランサーで相殺した。

フェイト「ソニックムーブ！！」

高速移動でトールスに接近しバルディッシュを振る。それを雷電で受け止め弾きフェイトの腹に蹴りを入れる。その一撃は腹にめり込みフェイトは大きく飛ばされた。何とか体勢を立て直し着地するが

痛みで咽る。

フェイト「げほっ、げほっ！」

トールス「ウム、中々速いな。だがまだまだの様だな」

フェイト「げほっ！…っく、バルディッシュ！ザンバーフォーム！！」

バルディッシュ［イエス、サー。ザンバーフォーム］

鎌形態から大剣に変形する。それを構える。

フェイト「はあああああ！！！」

先ほどよりも速く動きバルディッシュを振るう。トールスはそれを自身のデバイスで受け止める。それを予測していたフェイトは、トールスが先ほどやった様に彼の腹に蹴りをくらわせる。

ロクシャ「ぬう！？」

予想外だったのかそれは諸に入り少々後退する。そこに畳み掛ける様にバルディッシュで連撃をくらわせる。幾つもの剣閃がトールスに迫る。

それを的確に受け止め、受け流し、弾く。そしてフェイトが激しく動き、息が上がり動きが鈍ったのを機にバルディッシュを弾き上げる。

フェイト「くう！」

トールス「中々の剣筋。しかし、そこまでの様だな。次は此方の番だ！」

再び残像が残る速度で詰め寄って来る。フェイトは慌てて距離を取ろうとして空に舞い上がる。それの後を追う様にトールスも飛び上がりフェイトに追いつく。其のまま雷電を高速で振るいフェイトに攻撃する。

複数の斬撃が同時に迫る様に見えたフェイトは受け切れないと悟りプロテクションを張る。プロテクションに強烈な衝撃がくる。歯を食いしばって耐えるがその強烈な斬撃にプロテクションに罅が入り始める。

フェイト「プロテクションバースト！！」

咄嗟に自分でプロテクションを爆発させその時に発生した爆風を利用して距離をとった。トールスの方も爆風をくらって少し離れた所に飛ばされた。

トールス「うむ、咄嗟に自身で防御を解いたか……」

冷静に今の戦いを分析する。その間にフェイトもトールスに対抗する策を考えていた。

フェイト（ザンバーフォームじゃ駄目だ。あの速さに対抗するにはライオットフォームか真・ソニックフォームでいくしかない！……けどそうなると短時間で決めないといけない。如何すれば……）

トールス「ふむ、少々考え事をしてしまったか……。貴様には悪いがそろそろ終わらせてもらうぞ」

フェイト（このままじゃやられる。なら、やるしかない！）

そう考えたフェイトはバルディッシュを構える。

フェイト「バルディッシュ！ライオットフォーム！！」

バルディッシュ［イエス、サー。ライオットフォーム］

バリアジャケットが変わりフェイトの両手に剣が一つずつ現れる。

トールス「ほう、これは中々……」

フェイト「行くよ！！」

そう言った瞬間フェイトは一瞬でトールスに接近する。先ほどよりも速いので反応が遅れる。そこに右手の剣を振るう。それは、雷電で防がれるが左手の剣はがら空きの胴体に打ちこんだ。

トールス「ぬう！？」

フェイト「はあ！！」

そのまま剣を振るってトールスを吹き飛ばす。

空中で態勢を立て直して何とか勢いを止めるがそこにフェイトが再び接近、両手の剣の乱舞がトールスを襲う。高速で来る剣を右に避け、左に避け、受け止め、受け流し、弾く。

フェイト「はあああああああああああ！！！」

それでも乱舞は止まらない。フェイトは自身の呼吸を止め出来るだけ多くの攻撃を叩きこもうとしていた。数多の剣閃はトールスを追い詰めていき遂に隙が出来る。

そこを見逃さず、フェイトはありったけの力を込めてバルディッシュを振るった。

フェイト「そこおおおおおおお！！！」

トールス「ぐあっ！？」

それには堪らずトールスも吹っ飛ばされ地面に墜落した。息も絶え絶えな状態のフェイトはそれを見た後膝に手をついた。

フェイト「はあ…はあ…はあ……やった……」

倒したと思うが前回の悪魔との戦いで油断した所を突かれてやられかけたので油断なく何時でもバルディッシュを動かせるように持ってトールスの落ちた付近に降り立った。付近を砂埃が覆っていたが徐々に煙が晴れていく。

そして、その中心にはトールスの姿は、、、、

無かった……

フェイト「なっ！」

明らかに先ほどの攻撃は直撃を受けたはずである。それなら例え動けたとしてもこの付近にいただろう。だが、フェイトの周りには誰もいない。辺りを懸命に見回し探す。

フェイト「一体どこに!?」

その時、フェイトの背中に強い衝撃がくる。

フェイト「がっ!?」

背後を振り返るもそこには誰もいない。だが、間違いない。トールスはここにいる。

フェイト「くっ!」

地上にいるのは危険と判断し上空に飛ぼうとしたが再び背中に衝撃が来て彼女は吹っ飛ばされる。受け身をとって立ち上がった瞬間、今度は鳩尾に何かがぶつかる。

フェイト「うっ、ごほっ、ごほっ!!」

痛みに蹲ると目の前に影が現れる。視線を上げるとそこには少しだ

け衣服に泥を付けたトールスが立っていた。彼は無言のままフェイトの頭を掴み持ち上げて投げる。

地面に衝突する前に何とか着地して前方を見ると、既に目の前にトールスはいて握り拳を大きく振りかぶってフェイトの腹に打ち込んだ。

フェイト「ごはっ！」

それだけで彼女は１０メートル位吹き飛ばされ今度は地面を転がった。

フェイト「げほっ、げほっ！！何今の…速い！」

痛みで立てないフェイトをトールスは冷笑を浮かべて見た。

トールス「フン、少々出来ると思って少し本気になればこの様か…」

フェイト「如何して？さっきのは確かに直撃したはずなのに」

トールス「ああ、あれか。確かに中々いい攻撃だった。だが、それだけだ」

そう言うとトールスの隣にもう一人のトールスが現れる。

トールス「だが、私のレアスキル『幻影招来（シャドーディフェンス）』の前では意味はない」

そう言うとそのもう一人のトールスは溶ける様に消えていきトールスの影に入って行った。

フェイト「影……」

トールス「フフフ、そうだ。今までお前が攻撃したのは全てこの影が受け止めた。最も全てのダメージを受け切ることはできんがな」

再び雷電を構える。それを見てフェイトも何とか立ち上がってバルディッシュを構える。

トールス「では行くぞ！」

一瞬のうちにフェイトに接近、雷電を横一閃。それを受け止めもう一方で反撃する。だがそれを右足の脚甲で受け止める。両方を弾きがら空きになった胴体に掌底を打ち込む。吹き飛ぶフェイトの後を追って再び近き背中を蹴りあげる。体勢が整っていないフェイトは諸にくらい上空に打ち上がる。

トールス「影縛り」

トールスの影から幾つもの紐状のものが飛び出しフェイトを縛り空中に磔の様にした。

フェイト「これは！？」

力を込めるもそれは外れない。

トールス「雷電、ボウガンフォーム」

雷電［御意］

雷電はそれに応え刀からボウガンに変形した。それをフェイトに向ける。

トールス「消えろ…ビーストバスター！」

獣の形をした強力な砲撃を放つ。それは真っ直ぐフェイトに向かって飛んで行く。

フェイト「くっ……」

迫りくる砲撃を前にして思わず目を瞑る。後少しで直撃しそうになったその時、

ロイド「粋護陣！！」

間一髪ロイドが追いつきフェイトごと自身の形成した護身術で包み込みその砲撃を防いだ。

ロイド「ギリギリ間に合ったか」

フェイト「ロイド！？」

ロイドが現れたことに驚くフェイト。ロイドはフェイトを縛っている影の紐を斬りフェイトを自由にする。斬られた影の紐は霧散していった。

フェイト「如何してロイドが此処に？」

ロイド「ホントはフェイトの下にエリオとキャロが行く予定だったんだけど二人がプロヴィデンスの幹部に襲われて怪我をした。だからその代わりだ」

フェイト「二人が！？」

エリオとキャロが怪我をしたとの報告にフェイトはショックを隠せない。

ロイド「心配すんな。そっちにはコレットが行った。それよりも今は目の前の敵に集中しろ。あいつを早く倒して二人の下に急いで向かうぞ」

フェイト「う、うん…分かった」

確かに目の前のトールスを倒さねば二人の下に行けない。フェイトは心配だが一端二人のことを頭の隅においてトールスに集中する。

トールス「フム。剣聖九神将のリーダーにして『赤き剣聖』ロイド・アーヴィングか…厄介な者が現れたものだ」

ロイド「悪いが、エリオ達が心配だからあんたに付き合っていられないからな、一気に決めさせてもらう！いくぞフェイト！！」

フェイト「うん！！」

二人はトールスに向かって肉薄する。先にロイドがフェイトを追い越しトールスに斬りかかる。それを雷電を刀に戻して受け止める。高速で振るわれるロイドの剣技をトールスは受け止める。そして、ロイドの剣を弾き上げトールスのデバイスがロイドに迫る。それを

体を伏せることで避ける。そこに追い打ちをかけようとしたが、

フェイト「はあ！！」

トールス「ちっ！」

ロイドの背後からフェイトが現れバルディッシュを振るう。咄嗟に体を仰け反らすことで避けるが代わりにロイドに対して隙が出来る。そこにすかさずロイドがトールスの懐に潜った。

ロイド「獅子戦吼！！」

トールス「ごふっ！？」

獅子の形をした闘気がトールスを吹き飛ばす。吹っ飛んだトールスだが体を回転させ地面に着地。足裏に溜めた魔力を爆発させ二人に突っ込む。

ロイドが先行しトールスとぶつかる。目にも止まらぬ剣閃が二人の周りで煌めく。トールスが蹴りを入れればロイドも蹴りで受け止め、雷電を振り下ろせば地面を転がってトールスの側面に周り突きを入れる。それを弾き逆に斬り払いをするがそれを受け止め弾き飛ばす。

そこに入れ替わる様にフェイトが入りトールスにバルディッシュを振るう。受け止め隙を見て反撃するがそこにロイドが割り込みフェイトの隙をカバーする。

そして再びロイドがぶつかりフェイトがそのカバーに入る。

ロイド「極・散沙雨！！」

神速の連続突きが迫る。それを雷電で受け流すが全てを受け切れずに何閃か掠った。

トールス「ぐっ！」

ロイド「獅吼旋破！！」

回転を伴った連続攻撃で雷電を弾いた後懐に獅子の形をした闘気をぶつける。吹っ飛ばされビルに激突する。

ロイド「今だ！いくぞフェイト！！」

フェイト「うん！！」

ロイド「エレメントソード！属性変更、光！！」

フェイト「バルディッシュ！カードリッジロード！！」

エレメント［御意。タイプ変更、光］

バルディッシュ［イエス、サー。ロードカードリッジ］

エレメントソードの刀身が不可視の透明色から七色に変わり光り輝く、バルディッシュからは薬莢が３つ飛び出る。

ロイド「二刀流、奥義！」

フェイト「雷光一閃！ライオットザンバァァァ」

ロイド「光凰烈衝破！！」

フェイト「ブレイカーーーー！！！」

振り下ろされたエレメントソードから七色に輝く鳳凰が飛び、バルディッシュからは強力な砲撃が撃ち出される。二つの砲撃はトータスいるビルを貫きそのまま天高く昇って行き雲を突き破って行った。

中央に大きな穴が空いたビルは自身の重みに耐えきれず倒壊していった。砂埃が舞う。暫くして風によって砂埃は吹き飛んでいきそこにはバリアジャケットがボロボロのトータスが何とか立っていた。

トータス「くっ！まさか…これほど…までの実力とは……」

ロイド「まだやる気か？」

トータス「いや、私はもう限界だ。今回は退かせてもらう。だが次はこうはいかんぞ！！」

そう言うとトータスは転移魔法を発動させて消えていった。

フェイト「ま、待って「止せ、フェイト」ロ、ロイド！？でも…」

フェイトの肩を掴んでトータスの後を追跡しようとするのを抑える。抗議の声を上げるがロイドは首を横に振る。

ロイド「今はあいつよりエリオとキャロの所に戻るぞ。それにまだバルドも戦ってるかもしれない。まずは敵よりも仲間の安否を確認した方が賢明だと思う」

フェイト「そ、そうだね……」

ロイドの指摘にフェイトも頷き、二人は来た道を戻っていった。

フェイト達が戦いを終えて此方に向かっているころ燃え盛る美術館内で戦っているバルドとナーガの戦いも終わりに近づいていた。ナーガのバリアジャケットはバルドの猛攻で既にボロボロで自身の持ってる槍を杖にして何とか立っている状態だった。

バルド「随分ともったな２ｎｄフォルムに此処まで耐えた奴を見るのは久しぶりだ」

ナーガ「お…おのれ…この私が此処までやられるとは想像もしていませんでした」

バルド「答えろ、お前等は何が目的であの宝玉を盗んだ?」

ナーガ「答えると……お思いですか?」

バルド「ま、はいそうですかって教えてくれる訳ねぇよな…。なら、続きは本局に行ってから聞かせてもらうぜ」

ナーガ「此処で捕まる訳にはいきません!今回は退かせてもらいます」

バルド「させると思うか!」

バルドは高速で接近しナーガに『コラーダ』を振り下ろす。それを紙一重で避けて槍で突きを入れる。それを『ティーソン』で受け止め弾き腹に蹴りを入れる。それを予測していたのだろう、彼女はそ

の蹴りに合わせて腹を引っこめダメージを軽減しながらその勢いに乗ってバルドから離れ着地、予め発動準備をしていた転移魔法陣を発動させる。それに気づいたバルドだが既に転移魔法は発動しているので追撃を止め２ｎｄフォルムを解除しケルベロスを元の黒い無骨な大剣の戻した。

ナーガ「次はこうはいきません！覚悟していなさい！」

そう捨て台詞を残して彼女は消えていった。

ケルベロス「何か…よくいる雑魚キャラみたいな捨て台詞を残していきやがったなあいつ……」

バルド「一々そんなとこを気にすんなっての…。さて、随分と派手にやっちまったな……」

バルドは辺りの状況を見て呟いた。彼の周囲は燃え盛る赤い炎と黒い炎で包まれていてこれでは消火する前にこの中にある美術品などは全て灰になるだろう。

バルド「残ってるものは少ないかもしれないが取り敢えずそれだけでも被害を抑えるか」

そう呟いて指をパチンと鳴らす。すると辺りで…館内の所々で赤々

と燃えていた炎はその勢いを弱めていき遂に火種も残らず消えていった。

バルド「こんな所か…。後は急いでエリオとキャロの下に急ぐか」

そう言ってバルドは美術館から出て息子達の下に急いで向かった。

バルドが着くとそこには既にロイドとフェイトが到着していてコレットと一緒に何か話し合っていた。

バルド「フェイト!!」

フェイト「バルド!!大丈夫?怪我してない?」

バルド「ん?特に問題はないぞ?」

フェイト「嘘っ!!脇腹から血が出てるよ!早く治療しなきゃ!」

急いでフェイトは簡易的な応急処置用の治癒魔法をかける。バルドはそんな風に慌ててるフェイトを見る。確かにナーガの槍の一撃を受けたが掠った程度である。だが、フェイトから見れば出血してる腹部を見てその様には見えない様だ。

バルド「こんなの大したことないって。唾付けときゃ治るっての。そんな大げさな」

フェイト「何言ってるの！此処から細菌が入って感染症を起こして死んじゃうかもしれないんだよ！！大げさなことじゃないよ！」

涙目で上目づかいで見られてバルドは頭をガシガシと掻いて渋々フェイトに治療を受けてもらった。

治療を終えたバルドは何処かにまだ傷があるかもしれないと自分の体を調べようとしてくるフェイトを落ち着かせてロイド達の下に向かう。エリオとキャロはコレットに抱きついたまま疲れたのか眠っていてその隣でロイドはアルとウルと周囲を警戒していた。

バルド「ロイド、どうだ？」

ロイド「辺りには気配は感じられないな。多分あいつらは全員本当に撤退したんだと思う」

バルド「そうか…なら此処の被害調査なんかは本局に任せて俺達はうちに帰るぞ」

コレット「そう？ならバルドはエリオをお願いね。フェイトはキャロの方を」

そう言って二人にエリオとキャロを渡す。バルドとフェイトは二人

を背負い本局に連絡を入れ、六課に帰還することとエリオとキャロの負傷を伝えて帰路についた。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

～～ＩＮ　六課～～

エリオとキャロが負傷した。

このことが伝えられた瞬間六課内の…主になのはやはやて、主要メンバーに衝撃が走った。なのは達はデスクワークを投げ出して急いで転送ポートに向かう。

そして、バルド達が帰って来た。

なのは「バルドさん！二人は、二人は大丈夫なんですか！」

皆を代表してなのはが二人の容体を聞く。バルドとフェイトは自身の背中で眠っている二人を皆に見せる。

バルド「取り敢えずは二人とも無事だ。只、コレットの治癒術で少しは回復したが此処で本格的に治療した方がいい。シャマル、セフィリア頼むぞ」

シャマル「分かりました！」

セフィリア「分かったよ。後姫、来て」

二人は頷きセフィリアは後姫を呼んで後姫にエリオとキャロを医務室に運んでもらいシャマルと共に治療をするように頼んだ。それに後姫は頷いて二人を抱えてシャマルと共に医務室へ行った。その時なのは達はエリオの怪我が酷いのを見て思わず目を逸らしたくなった。コレットに治してもらったもののそれでも完全に感知した訳ではないのでエリオの体には所々裂傷があり左肩は治癒術のお陰で焼け爛れは無くなったもののそれでも酷い状態だった。キャロの方も腕が剣で貫かれたことで完全治癒は出来なかった様で少し酷い状態だった。

はやて「皆、向こうで何があったんか詳しく聴かせてもらうで？」

バルド「ああ、分かってる」

皆、エリオとキャロが大怪我を負わせた敵がいることに怒りを覚えているがそれを何とか抑えて部隊長室に全員で向かった。

部隊長室で今回起こったことを詳しく説明する。エリダリアの被害は最小限に抑えたもののそれでも博物館などが半壊に近い状態になってしまった為かなりの損害を受けたと思ってもよかった。バルド達は自身が見たことを出来るだけ六課に残っていた皆に説明した。

話している時に後姫が戻って来て二人の治療が終わったことをセフィリアが確認、礼を言うと頷いた後姿を消した。それを見た後再び先ほどの会話に戻る。

バルド「俺達が分かるのは大体こんなところかな」

はやて「プロヴィデンスの幹部、『使徒』か……」

カイン「前回、ミッドを襲ったのは下っ端ってところか…」

なのは「そんな…あれだけの被害を出したのにあの襲撃は軽いほうだったの…？」

シリウス「可能性は否定できないね。あの航空機は向こうじゃ大量にあると考えたほうがいいかも」

はやて「あれが大量にあるやて！？あんなんが仰山おったらうちらじゃ対応できへん」

ロイド「そうなる前に何とかしたいとは思うんだけど……いい案が思いつかないな」

スバル「あれ？グランディオンは協力してくれるんじゃないの？」

ロイド「その事なんだけどな……」

スバルの問いにロイドはバツの悪そうな顔を浮かべる。

ロイド「前回、協力してくれるって言ったんだけどあれ、ウルフの独断で決めたみたいなんだよ」

バルド「はあ！？ってことは、あの重鎮どもに何も言ってないってことか！！」

コレット「そうみたい。それを後で知った重鎮の皆が怒っちゃってね、管理局の代表を呼んで来い！って言ってるんだよ。多分、六課が呼ばれると思うよ」

はやて「えっ何でや！？普通そこは局の本部の上層部を呼ぶもんやろ？」

シリウス「無理無理。向こうはこっちのことを信用してないから俺たちが入ってるこの六課が今一番まともって向こうは考えてるみたいなんだよ。だから、幾ら局の上層部が行くことを進言しても突っぱねると思うよ？」

シリウスの言葉に六課陣は唖然とした。前回の戦いで自分たちの働いているこの管理局が裏で想像もしていないようなことをしていたのを敵から言われたが、このままだと管理局に協力はしてくれなく

なってしまうのでは無いだろうか？

因みに重鎮達とは元帥達の事ではなく、グランディオンで昔からその席にいる権力者達でその多くは金に物を言わせて周囲を困らせる事が多い人達の事です。元帥達はなのは達に協力することを前回聞かされて了承しています。

ティアナ「何とかならいんですか？」

クラウド「難しいところだな……。六課だけってなら向こうも少し審議をしてくれたら了承すると思うが、自国を攻撃してきたこの管理局を全面支援するとなるとな……」

ガルド「最悪、国民達から反発運動が起きるし、此方に酷い条件を突き付けてくることになるかもしれん」

シグナム「お前達から何とか言ってやれないのか？」

ティファ「無理ですよ。幾ら私たちが多くの次元世界で『時の英雄』、『剣聖九神将』と呼ばれ地位が高くてもそれはそれ、審議には何の意味もありません。彼ら重鎮たちは国民が昔選んだ代表者なんですから、私達の言うことを優遇する何てことはありません。彼らは自身の国にそれは利となるか損となるかの範囲で考えているのですから、彼らにとって今の管理局に支援することは大きな損失と考えられているようです」

はやて「せやったら何でうちらは大丈夫なんや？うちらかて局の一

員には違いあらへんのに？」

シリウス「それは、局と手を組むなら如何するかってのを向こうに持ちかけた時に局のことを調べたみたいでね、この六課と地上部隊のゲンヤ・ナカジマ３等陸佐のところが一番まともで更に功績が此方の方が大きくて尚且つ俺達が此処で働いていることが選んだ理由みたい。向こうとしては本当は今は手を組みたいとは思っていないみたいだけどね」

ヴィータ「は？何時こっちのことを調べたんだよ？」

シリウス「２週間くらい前かな。あの世界には凄く優秀なＡＩがいてね、それが調べたみたいだよ」

ロイド「リリスか……」

なのは「リリス？」

ロイド「グランディオンにいるＡＩの名前だよ。どの世界にも負けない演算能力を持っている事実上あの世界最強のＡＩさ。まさか、またハッキングしたんじゃないだろうな？」

シリウス「如何だろうね？それは本人に聞くしかないと思うよ？まあ、何時もの如く「興味があったから」って言うだろうけど……」

シリウス達の説明になのは達は驚愕の表情を浮かべる。知らぬ間に此方の情報がグランディオンにハッキングを受けているかもしれないと言われ内心焦っていた。もし、その中に自分たちの知らない何か拙い情報が入っていて今後の交渉に支障をきたすようなものだっ

たりすると協力を仰げないからである。

そんな時、ロングアーチから通信が入る。

グリフィス『た、大変です！！』

はやて「如何したんや、グリフィス君！」

顔が真っ青のグリフィスが映りなのは達は何事かと驚く。

グリフィス『此処の上空に巨大な戦艦が出現、着陸許可を要請しています！』

なのは「え！此処の上って…それに巨大なって、どの位なの？」

グリフィス『大きすぎて全貌を把握できません！目算では２０００以上はあるかと……』

はやて「なんやて！？そんな大きなもん、何で気づかなかったん？」

グリフィス『そ、それが、何か特殊なコーティングがされている様で此方のレーダーに反応が無いんです』

フェイト「も、もしかして、『プロヴィデンス』！？」

フェイトの言葉になのは達にも緊張が走る。もし彼女の言うとおりプロヴィデンスだったら間違いなく此処が戦火にのまれてＪＳ事件の時の様になってしまう。それどころか、その時よりも更に酷い事になるかも知れない。そんな中ロイド達はグリフィスからの報告で何かに気づいたらしくバルドがグリフィスに話す。

バルド「グリフィス、近くの海上に着陸する許可を出せ」

フェイト「バルド！？」

バルドの発言になのは達は目を見開いた。そんな彼女達を置いてバルドはロイド達とアル達を連れて部屋を出て行った。なのは達も慌てて後を追うことにした。

六課から出ると上空に確かに巨大な戦艦が浮いていた。エンジン音も出さずにその場に停滞している様は技術力がかなり高いことを物語っていた。

着水許可が届いたのか向こうはゆっくりと海面に向かって降下を始める。バルド達がその場所に向かっていくのでなのは達も後を着いていく。

なのは「大きい……」

着水した戦艦の所に着きなのははそう呟いた。彼女の言うとおり目の前には自分の視界では全貌を把握できないほど大きな戦艦が海面に浮かんでいた。

ロイド「やっぱ、ホワイトホエールか……」

はやて「ロイド君、これは何なん？」

ロイド「これは、グランディオンが誇る最強の戦艦、ホワイトホエールさ」

フェイト「これが…グランディオンの……」

それを聞いて改めてホワイトホエールを見る。全身を純白で彩られていてその姿はシロナガスクジラの様であった。遠くから見れば見間違えてしまうであろう。

暫く眺めていると、なのは達の前に何かが転送されてきた。徐々に姿が現れてくる。その人はまだ子供の様な背の少年だった。

？？？「やあ、皆久しぶりだね」

ロイド「ああ、3か月ぶりだな」

バルド「何でお前は之を持って来たんだよ」

???「何でって…今これ位しか動かせないからだけど?他の艦隊は今整備中だし」

クラウド「だからって、主力艦を持ってくるなよ。こっちに知られたら大変だろうが!」

???「それに関しては心配はないよ。レーダー対策の特殊フィールドを周囲に展開してるからもし此処を監視してる奴らでも目視で確認しない限り発見は難しいと思うよ?」

なのは「あ、あの……」

???「この人達は?」

カイン「ああ、前にロイド達が言っていたと思うが機動六課の皆だ」

???「へぇ〜、この子達がね……あ、申し遅れました。私は機装国家グランディオンの現国王、ウルフ・エドワードです」

六課陣「えっ!!?」

その言葉に皆で驚きに表情を見せる。今自分達の目の前にいるのはグランディオンの王、ウルフ・エドワード本人であった。慌てて敬礼するなのは達にウルフも敬礼で応える。

ウルフ「さて、此処の部隊の責任者は誰かな？」

はやて「あ、はい、私です」

普段の口調を封じて一般的な口調になるはやて。ウルフは、まだ若いはやてが部隊長だというのに心底驚いている様だ。

ウルフ「へぇ～、貴方が……。まだ若いのに凄いですね」

はやて「え？国王様の方が若いと思うのですが…？」

ウルフ「あはは……、俺はもう３０だよ」

はやて「え？」

ウルフ「この体のせいで見た目よりも若く見えるだけさ」

自身の失言にはやては青ざめて慌てて頭を下げ謝罪する。相手は国王、自分の発言でもし機嫌を損ねられたら……と思うだけで背筋が冷たくなる。

ウルフ「そんな慌てなくてもいいよ。気にしてないから。ロイド達には初対面の時に子供扱いされたし……」

そう言って頬を膨らませてロイド達を見る。皆、苦笑いするしかなかった。

ウルフ「さて…機動六課の皆さんをこれからホワイトホエール内に招待したいと思います。歓迎しますよ？」

はやて「し、しかし、あれは其方の機密事項に当たる様な物なのではないのですか？その様な物に私達の様な下の者が入るのは些か拙いのでは……？」

ロイドがあれはグランディオン最強の戦艦と言っていたので自分達が入っては拙いと思っているはやてだが、ウルフはその様なことは杞憂だと言わんばかりに笑う。

ウルフ「ははは、そこは心配しないでいいよそちらの使っているデバイスでしたっけ？それが幾ら優秀でも私達のＡＩはそれを凌ぐ性能ですし、それに、貴方方はロイド達が認めた人達です。私達は貴方達を信用していますから別に構いませんよ？」

はやて「は、はぁ……。皆、如何するん？」

なのは達に確認をとる。なのは達は一端考える仕草を見せる。

カイン「別に気にすることはない。皆入りなって」

なのは「で、でも……」

ロイド「心配すんなって、別に入ったからって捕まえはしないから」

そして、暫くしてはやてになのはは頷いた。

なのは「国王様もカイン君達もそう言ってるのだし、はやてちゃん行ってみよう？」

バルド「悪いが俺はパスだ」

フェイト「バルド！？」

バルドが行かないのにフェイトは驚いた顔を見せる。何故かと聞くと、

バルド「エリオとキャロがまだ起きてないだろ？それなのに俺達が全員行ったら不安になるだろうが」

フェイト「あ…そう、だね。ゴメンはやて、私達は此処に残るね」

バルド「二人が起きたら俺達もそっちに行く」

はやて「了解したで」

ウルフ「それじゃ、皆さん準備はいいですか？」

ウルフの問いになのは達は頷く。それに満足した様にウルフは笑うと何処かに通信を入れる。そして、自分の周りに集まる様に皆を集めるとフェイトとバルドを残して転送して消えていった。

バルド「さて、俺達は一端戻るぞ。もしかしたら二人が目を覚ましてるかも知れないからな」

フェイト「うん、そうだね」

二人は、六課に戻るために歩を進める。フェイトは途中で一回振り向いてその目にその純白の戦艦を収めた後バルドの後を追っていった。

# 第十六話（後書き）

あれ？おかしいな～？ここでホントは幹部一人くらい昇天する予定だったのに気付いたら全員撤退してる！？

カイン「如何すんだよ？」

まあそこは何とかなる範囲だと思うので問題はないかと思われます。因みに前回の話でコレットさんが新スタイルを出してましたが使う技の多くはＴＯＳのリーガルとＴＯＧのソフィの使う技が主体です。投げ技はセネルのをちょこっと変えて使います。

さて今回の新技説明、極・散沙雨は散沙雨を極めた者が使える技で攻撃範囲が少し伸びていて剣の長さより少し長い距離まで攻撃が届きます。まあ、それ以外は特に何も変わりありません。次に光鳳烈衝破ですが、鳳凰の形をしたエネルギー波を敵に飛ばす技です。貫通性に優れているためバリアーを破ることもできます。

序でに言うとエレメントソードは属性が変わると刀身の色が変化します。例えば、

火属性だと刀身は赤く染まり、水属性だと蒼に染まります。

ロイド「へぇ～、そうだったのか」

持ってる人が今更気づくかね……？さて、グランディオン最強戦艦に入ったなのは達を待つものは一体何なのか！次回も読者の皆様なるべく早く投稿できる様に頑張りますのでこれからもこの小説を宜しくお願いします！！ご意見ご感想をお待ちしています！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第十七話（前書き）

またもや一週間経ってしまった……。ホンット申し訳ないっす！！
何せもう少しで単位を賭けた定期テストがやって来るんです。

く～る、きっとくる～、きっとくる～♪

ふざけましたすんませんｏｒｚ

バルド「遊んでないで早くやることやれ」

ううﾞ…キャラまで俺に対して冷たい……では、長話もなんなんで本編をどうぞ。

今更ですがキャラの性格が固定出来ていない事に凄く不安でドキドキしています。

# 第十七話

視界を真っ暗な闇が覆っていた辺りは何も見えない。エリオは右も左も分からないその中で一人立っていた。

エリオ「此処は……？」

辺りを見回すもあるのは闇、闇、闇。そして、誰もいない。
その事に段々と不安な気持ちが高まって来た。

エリオ「父さん！！フェイトさん！！キャロ！！皆！！」

皆の名を呼ぶも帰って来るのは静寂だけ。ひたすら皆の名を呼んでいると耳に微かに声が聞こえた。
その方向に向かってひたすら走った。

？？？「――――ォ――――ん」

エリオ「誰！誰なの！」

徐々に視界に光が見えてくる。そこに向かって走り続ける。

そして、闇を抜けた先には…

エリオ「あ……」

目の前には体中を傷だらけにして首を掴まれ苦悶の表情を浮かべているキャロがいた。彼女を掴んでいる手の持ち主は自分達をまるで虫の様にあしらった男、アグリスだった。

エリオ「キャロ！！」

キャロ「エ……リオ……くん……」

アグリス「ほぉ、まだ起き上がるほどの力があるのか…やはり、この娘を甚振ったかいがあるな」

そう言って、ニヤリと笑いながらキャロの首を絞める手に力を込める。苦しさの余り足をばたつかせて必死にその手を剥がそうと力を込めるも相手は大人、子供のキャロには到底外すことはできない。

エリオ「やめろっ！！キャロからその手を離せ！！」

アグリス「フンッ！この娘が大事か？だったら自分の力で助けて見

ろ！！俺を倒してなあぁぁ！！！」

そう言った瞬間アグリスは消え気付いた時には自分の目の前にいた。
そして、その拳を思いっきりエリオの腹部に叩き込んだ。

エリオ「ぐふっ！！？」

胃液が逆流して膝を地面に落してそこで咳き込む。吐瀉物を吐き咳き込みながらアグリスを見上げて睨みつける。それにニヤニヤと笑いながらアグリスはエリオに足を打ち込む。

鋭い蹴りがまた腹に当たり吹っ飛ばされて転がる。既に胃の中にはもう何もないので唯、吐き気などの気持ち悪い気持ちだけが頭を駆けまわりまるで目の前で閃光弾が爆発した様に視界が真っ白になりかける。そんな中聞こえたのがキャロの苦しそうな声であった。何とか立ち上がってアグリスに突っ込む。策も何もなく唯、我武者羅に殴りかかる。

しかし、拳は届かず代わりに自分の顔面にアグリスの拳が当り地面に叩きつけられる。再度立ち上がろうとするも足が鉄の重りを付けた様に動かない。

アグリス「フンッ！！この程度か…つまらんな。この程度の力しか出せん男が俺に傷を付けたのは許せんな」

エリオ「キャロを……キャロを離せ！！」

アグリス「ハハハハハハ！！怨め、憎め、嘆け！！その負の感情が自身を強くする！！そうだその目だ！その憎しみの籠った瞳だ！もっとだもっと負の力を強めろ！！それだけでお前は更に武の高みに進むことが出来る！！！」

エリオ「離せえぇぇぇぇぇぇ！！！」

幾ら体に力を込めても全然力が入らなかった。必死になって自分の脳から動くようにと命令を送っても反応を示さない自分の体。何故だと思い自分の足を見ると……足が無かった。

エリオ「え……？」

よく見ると少し離れた所に自分の足が転がっていた。

エリオ「う、うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

それは、苦痛によるものか恐怖によるものかエリオは今までにない程の悲鳴を上げた。

アグリス「力が無いとは何とも無様なものだな。そんなのでは俺と対等に戦える訳が無いか。興醒めだ……安心しろ、痛みは一瞬だ、一瞬でお前はその苦痛から楽になる」

そう言って手にマン・ゴーシュを装着しそれをゆっくりと構えエリオの頭に高速で打ち込んだ。

―――――――――――――――――――――――――――――――

キャロ「ん……」

キャロは目を覚ました。首だけを動かして周囲を見回すと見慣れた部屋だった。思考が徐々に明確になっていきここが六課の医務室だということがハッキリと分かった。

キャロ「いつっ！！」

体を起こそうとして全身に痛みが走り再びベッドに倒れる。見た所外傷は無くなっており治療されたことが分かった。再び体に力を入れ何とか立ち上がる。隣にはフリードが寝かしつけられていてキャロの寝ていたベッドの隣にエリオは寝かされていた。

キャロ「エリオくん……」

彼に近寄りその寝顔を見る一定の呼吸で胸が上がり下がりしている。

エリオ「うぅ……」

しかし、突然彼が苦しみ出した。シーツを強く握りしめ歯を強く噛み締め何かに耐えるような感じだった。額からは脂汗が出始める。

それを見て不安に駆られたキャロはエリオを起こすべく彼を揺する。

キャロ「エリオくん!!」

エリオ「キ、キャロ……、う、うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

キャロ「エリオくん!!」

――スパーンッ!!――――

突然悲鳴を上げてのた打ち回る。此の侭では拙い!そう直感したキャロは咄嗟に彼の頬を引っ叩いた。

それのお陰でエリオはハッとなって目を覚ましガバッ!と起き上が

る。

エリオ「はあ…はあ…はあ…」

キャロ「エリオくん！大丈夫！？」

脂汗を浮かべながら息を荒く呼吸する。その声にエリオはキャロを見る。

エリオ「キ、キャロ……？」

キャロ「う、うん」

エリオ「キャロ！！」

突然エリオはキャロを抱きしめた。突然のことにキャロはビックリする。

キャロ「エ、エリオくん／／／／／／／！？」

自分でも顔が熱くなるのが分かる。エリオは彼女の温もりを確かめるかのように強くキャロを抱きしめていた。

キャロの脳内ではエマージェンシーのアラームが鳴り響いて脳内会議で大いに揉めていた。

キャロ１（エリオくんに抱きしめられております！！）

キャロ２（本体が硬直しており司令を一切受け付けません！！）

キャロ３（それは仕方のない事かと…。だってエリオくんに抱きしめられるなんて…ポッ／／／／／／）

キャロ４（遂に3号まで！？急いで医務室へ！！）

キャロ５（兎に角、この感触を大いに堪能すべきかと）

キャロ１（仕方ありませんね。では、本体に之を堪能するようにと司令を送る様に）

キャロ２（特別コード機動！！”その感触を堪能せよ！！”）

キャロ４（あれ！？既にこの会議も意味を成していない状態になってる！？）

まあ、そんな会議など開催されている訳もあらず、唯キャロはエリ

オを安心させるべく優しく抱きしめる。

エリオ「よ、良かった、キャロが無事で……」

キャロ「うん、私は大丈夫だよエリオくん」

先ほど見たのが夢だと分かりホッとするエリオ。そこに、

バルド「エリオ、キャロまだ寝てるｋ――」

エ・キ「「あ……」」

何というタイミング！！熱い抱擁をしてる状態の二人の前には父バルドが現れた。

バルド「……失礼した」

そして、再び部屋から出ていく。

フェイト「バルド？如何して出てきたの？」

バルド「二人の逢瀬の時間だ。俺達が入るのは無粋すぎる」

フェイト「ええ〜〜！！すでに二人の関係はそこまで！？」

エ・キ「「違うからね！！？」」

両親の酷い勘違いを正すべく、二人は全力で説明しました。重要なのでもう一度言います。

全力で説明しました！！

――――――――――――――――――――――――――――――――――

エリオ達が両親に必死になって説明してる少し前、なのは達はホワイトホエール内に転移された。

なのは「ここは……？」

辺りを見回すとそこはエントランスホールの様な所だった。辺りでは休憩中なのか此処の職員がテーブル付きの椅子で飲み物片手に談笑をしているものが多かった。

ウルフ「ようこそ、ホワイトホエールへ私達は貴方方を歓迎します」

ロイド「久しぶりだな此処に来るのも」

コレット「そうだね。数ヵ月ぶりかな？」

ロイド達も此処に来るのが懐かしい様で辺りを見回していた。

はやて「シリウス君、此処は何処なんや？」

シリウス「此処は、ホワイトホエールの丁度真ん中にあるエリアで休憩場って言ったいいかな」

シリウスが説明していると何かが向こうから猛スピードで走って来るのがあった。

？？？「ご主人様～！！お嬢様～！！」

その勢いのままロイドとコレットに飛び付いた。

ロ・コ「「うわぁ（きゃあ）！？」」

それを受け止められずそのまま倒れる。その二人に飛び付いてるの

は１４０センチぐらいの身長の少女で二人に頬ずりしていた。

？？？「会いたかったです～！！ご主人様、お嬢様！！」

ロイド「いきなり飛び付くなよ、ビックリしただろ！」

コレット「ふふふ、くすぐったいよ～」

じゃれつくその子を抱き起こして立ち上がる二人。その少女は腰よりも少し長い薄い紫色の髪を腰まで伸ばしておりその瞳も髪と同じ様な色をしていた。

シグナム「その子は誰なのだ？」

ロイド「ああ、紹介するよ。こいつがリリスだ。リリス自己紹介」

リリス「は～い！！初めまして！ＡＩ管理システムのリリスです！」

リリスという名になのは達は驚いた。先ほどロイド達が言っていた優秀なＡＩがこの少女なのだと。見た感じ人懐っこい大きな目をクリクリさせてリリスはなのは達を見つめる。

リリス「ああ～この人達が機動六課の人達ですね。右から部隊長の八神はやて、リインフォース？、高町なのは、シグナム、ヴィータ、スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスターですね」

六課陣「なっ！？」

いきなり自分の名前を当てられて驚くなのは達。そんな彼女達を見ていてリリスはロイドとコレットに首を傾げて聞く。

リリス「あれ？フェイト・Ｔ・ハラオウンとキャロ・ル・ルシエとエリオ・モンディアルは如何したんですか？欠席ですか？バルドもいないようですし……」

ロイド「バルドとフェイトは今エリオとキャロと一緒にいるよ。エリオとキャロは少し前にちょっとプロヴィデンスの幹部と戦って怪我したんだ」

リリス「ふ～ん……そうなんですか。皆さんも大変なんですね～」

ウルフ「相変わらずロイド達以外の事には冷めた反応しかしないな、君は…」

リリス「そうでもないよ？私だって興味を持ったら調べますけど？今回はご主人様達が信用に値する方達だと聞いたから興味をもったので調べさせてもらいました♪」

ロイド「リリス、ハッキングはしてないだろうな？」

リリス「はい！言われたとおり正面から堂々と侵入しました！！」

クラウド「やっぱハッキングしたんじゃないか！！」

リリス「え～～、だって、どうぞ入って下さいっていう感じな杜撰な防御壁なんだもん。入っていいもんだと思ったんだも～ん！！」

そう言ってプウッと頬を膨らませるリリス。ハッキリ言って迫力も無く可愛い。その顔に皆癒される。しかし、

ロイド「でも、ハッキングしたんだよな？」

リリス「う……はい…」

コレット「駄目だよ。他世界に無断干渉は禁じられてるんだからそんなことしたら、めっ！だよ」

リリス「ごめんなさい……」

ロイドとコレットは騙されずリリスの行いを窘める。それにリリスはシュンと項垂れる。

ウルフ「すみません、此方の者がそちらに大変な失礼なことをしてしまい申し訳ありません」

はやて「そ、そんな…寧ろ信用の無い私達の所に此処まで来て頂きありがとうございます」

シリウス「ねえ、はやて」

シリウスがはやての隣に立って話しかけてくる。

シリウス「普通に話しなよ。その喋り方じゃしんどいでしょ？」

ウルフ「おや？もしかして気を遣わせてしまいましたか？気にせず普通に話して下さると嬉しいです」

はやて「そ、それじゃあお言葉に甘えて……こんな感じやけど」

ウルフ「それじゃあ、俺も普通の口調に戻るか。これが普段の俺の口調だよろしく頼む」

そう言って笑う顔は先ほどの無邪気な顔ではなく大人びた精悍とした顔つきになる。

ウルフ「さて、このホワイトホエール内を案内しよう。リリスついてくるか？」

リリス「うん、いいよ。皆の事知りたいし丁度二か月分の仕事も終わったから暇だし一緒に行くよ」

はやて（二か月分のって何時からやってたんやろ？）

そこが気になったが聞くタイミングを逃してしまい聞けなかった。

クラウド「それじゃ、俺達は何時もの場所に行く」

そう言うとクラウドはロイド達とアル達を連れてなのは達から離れていった。

なのは「あの、ウルフ国王様、カイン君達は何処に行くんですか？」

ウルフ「ん？皆にはこれから今後の兵士達の戦闘シュミレートのデータを取ってもらうために訓練場に行って貰うんだ。あと、なのはさん。国王様は要らないよ。普通にウルフって呼んでくれ」

ヴィータ「それって見ていいか？」

ウルフ「別に構わないけど？リリスも行くかい？」

リリス「行く行く！！生でご主人様達の活躍を見れるなんて滅多に見れないから絶対に行く！！」

ウルフ「まあ、何時も録画したものを見てるからな。てかそんなはしゃぐなって」

リリス「だって、剣聖、女神、剣帝、銀閃、将軍、覇者、白凰翼、蒼凰翼の戦闘ですよ！！興奮しないで如何しろって言うんですか！？」

スバル「それって何？」

聞きなれない言葉にスバルが質問をする。リリスはそんなことも知らないのかという様な驚愕した表情を見せた後なのは達に説明する。

リリス「今言った言葉は其々ご主人様達の別名と言うよりはこっちの世界で呼ばれている二つ名みたいなものです。今はいないですがバルドも魔神と呼ばれていますよ」

シグナム「訓練内容が兵達用の戦闘シュミレートと言っていたが何故ロイド達にさせるのだ?」

リリス「え?だってご主人様達はグランディオンとヴァルハラで軍の部隊を率いるリーダーだからだけど?」

六課陣「え……えええぇぇぇぇぇ!!?」

初めて聞く事実になのは達は驚愕の表情を見せる。ロイド達は階級が凄いとは思っていたがまさか二つの世界の軍隊を率いるリーダーだとは……

驚きのあまりポカーンとするなのは達

表すとこんな感じ（゜Д゜）ポカ～～ン

ウルフ「ハハハ、ま、皆は彼らの力を見たことはあると思うけど今

から見せるのは多分想像以上だから気を引き締めないとロイド達の動きについていけないからね？」

そう言ってなのは達を促しロイド達の後を追うのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――

一方バルド達も六課から出て戦艦の前に来ていた。

エリオ「大きいですね……」

バルド「まあ、古代兵器だからな」

キャロ「古代兵器ですか？」

バルド「超古代ＡＩ兵器ホワイトホエール、海底深く眠っていたんだがロイドの力の余波に反応して覚醒、以後グランディオンを守る守護神的存在、象徴みたいなもんになった」

フェイト「これがＡＩ……」

ＡＩが搭載された巨大な戦艦を見上げるするとホワイトホエールはバルド達に気づいたのか目が動き見つめてきた。

フェイト「きゃっ！め、目が動いたよ！？」

バルド「そりゃ動くだろ。ＡＩなんだから。久しいなホワイトホエール。ロイド達は訓練場か？」

ホエール［オオオォォォォォォォォ］

バルドの問いにホワイトホエールは肯定するように吼え潮を噴き上げた。

バルド「なら、俺達をそこに転送してくれ」

ホエール［オオオォォォォォォォォ］

それに応える様に鳴いた後バルド達の足元に円状の転送陣が現れ四人を内部に転送した。

転送された場所は大きな小部屋の様なのが幾つもある所だった。

なのは「フェイトちゃん！」

フェイト「なのは！此処は一体…」

なのは「此処は、訓練場って言ってたよ今からロイド君達が戦うみたいだから見てみよう？」

フェイト「う、うん」

バルド「フェイト、エリオ、キャロ今から俺は訓練に参加してくる。此処で見ていろよ」

そう言ってバルドは奥の部屋に移って行った。そこには既にロイド達がいて、彼らと何度か会話を交わした後自身の得物を出しスタンバイする。

ウルフ「貴方がフェイトさんですね？」

フェイト「え？あ、ウルフ国王様」

ウルフ「国王様は要らないよ。普通に話してくれればいい。俺も普通に話すから」

リリス「貴方達がフェイト・Ｔ・ハラオウン、キャロ・ル・ルシエとエリオ・モンディアルですね？」

フェイト「あ、貴方は？」

リリス「リリスは、ＡＩ管理システムのリリスです！よろしくね！！」

三人もリリスに自己紹介をする。リリスは、「よろしくね！」と言って笑う。

ウルフ「さて、自己紹介も終わったことだし始めるか。皆準備はいいか？」

ロイド『ああ！何時でもいいぜ！！』

通信越しにロイドが答えるのを確認し目の前にあるキーを何度か叩くと先ほどの部屋は荒野に変化した。

なのは「此処は？」

ウルフ「訓練用に作られた特殊空間だ。此処なら幾ら暴れても外部に被害は及ばない。各部システムに異常は無いな、よし、訓練用シュミレート起動！」

キーボードを凄い速さで叩く。

ウルフ「さて、行くぞ！！」

そう言って赤いボタンを押す。するとロイド達の前に数え切れない

ほどの大、中、小の見たことも無い生物が現れる。その数は数百は下らないだろう。

はやて「な、なんて数や！！」

なのは「あの生き物は？」

ウルフ「あれは今までロイド達が戦ってきた生物、魔獣、魔物、悪魔等の群れのデータを元に作られたものだ。全員一癖も二癖もある敵（ツワモノ）だ」

雄たけびを上げるありとあらゆる怪物。あんな奇怪な怪物をロイド達は今まで相手にしてきたのかと思う。

ロイド「行くぜ皆！！」

一同「おう！！」

得物を構えて怪物の群れに飛びこむ迎え撃つように怪物達も殺到する。

ロイドに向かって芋虫の様なものが転がって突撃してくる。それを通り抜けざまに横一閃して両断する。次に４メートルはあろうかという三つ目の狼が牙を向けて飛びかかる。それを顎を蹴りあげ、上体を浮かせてがら空きの胴を斬る。そこにロイドの周りを囲んだ怪

物達が一斉に飛び掛かった。

エリオ「ロイドさん危ない！！」

流石のロイドも全方向からの多重攻撃は防げないだろうと誰もが思った。

しかし、

ロイド「極・魔皇刃！！」

ロイドが剣を地面の叩きつけると彼を中心に円状に地面が割れ全方向に巨大な衝撃波が広がる。それをまともに受けた怪物達は衝撃波の波に飲まれ跡形もなく消し飛んだ。仲間が消されても止まらない怪物達。ロイドは剣を構える。

ロイド「奥義、神光皇烈刃！！」

一瞬ロイドがなのは達の視界から消えた。

フェイト「消えた！？」

シグナム「テスタロッサ、あそこだ！」

シグナムの指差すところにロイドは立っていて剣を鞘に納めていた。

怪物達は一切動かなかった。そして、怪物達の体が徐々に横にずれていきロイドに飛びかかった百はいるだろう怪物は全て真っ二つになった。

なのは「え!?今何が起きたの!」

リリス「ご主人様は神速の速さで周囲にいた敵を斬っただけですよ。はぁ～何時見ても痺れます～」

なのは達に説明しながら目をキラキラさせながらロイドを見ていた。

フェイト「シグナム、今の…見えた?」

シグナム「いや、一瞬だけだ。気付いた時にはロイドはあそこに立っていた。何という速さだ……」

歴戦の戦士の目を持ってしても捉えきれない速さを持ったロイドの一撃、最早、達人の領域だろう。向かってくる新手にロイドは再び突っ込んでいった。

ウルフ「その進撃はまるで百獣の王の如し、いかなる敵もその刃止めること敵わぬ、その者に集うは彼を崇拝する者たち也。グランディオン第一最前衛部隊『獅子』、部隊長ロイド・アーヴィング」

そうなのは達に説明するウルフ。別の所で土煙が上がった。そこにはコレットがアクセルモードの姿で立っていて、その足元には多くの怪物が倒されていた。

ウルフ「戦場を飛び交い、風を詠み全部隊を支援する、その速さ燕の如く、その一撃に敵は恐怖する。第二広範囲支援部隊『燕』、部隊長コレット・ブルーネル」

悪魔の様な姿の怪物がコレットに飛び掛かるが彼女はその鋭利な爪を避けて逆にその手を掴み地面に思いっきり叩きつける。衝撃で地面が割れる。叩き付けられた怪物は暫く痙攣した後動かなくなった。

その光景に恐怖した怪物達が後退を始める。そんな中コレットの前に立ちはだかるは２０メートル以上はあるだろう巨大な竜だった。雄たけびを上げ口から炎が溢れる。

キャロ「大きい！？」

スバル「あわわわ…ティア、あれでか過ぎるよ！！」

ティアナ「そんなの見れば分かるわよ！！」

コレットと竜の間にしばしの沈黙が訪れる。先に動いたのはコレットだった。地面を思いっきり蹴り高速で近づく。彼女を踏み潰そうと前足を降ろす。それを紙一重で避けて飛び上がり竜の顔面に拳を打ち込む。だが、竜の目が光るとコレットの前に障壁が現れその一撃を防いだ。

着地したコレットに何度も足を振り下ろす竜。それを右に左にステップする様に動いて回避する。痺れを切らした竜が口から炎を吐いた。広範囲に広がるブレスは周囲の怪物を巻き込みながらコレットに迫る。

コレット「ホーリーメイル！！」

彼女の手から円状の大きな光る盾が出現する。ブレスはそのまま盾ごとコレットを飲み込んだ。

誰もが焼かれたと思った。だが、

コレット「はあぁぁぁぁぁ！！」

ブレスを突き破ってコレットが飛び出してきた。それには竜も驚きの表情を見せる。

コレット「天月閃！！」

回転蹴りで竜の顎を蹴り上げるそれだけで数トンはあるだろう巨体が仰け反る。そして、一瞬で竜の懐にコレットは潜り込み拳を強く握る。

コレット「行くよ！！宿れ拳神！！轟け鼓動！！インフィニティアソウルッ！！！」

がら空きの竜の腹を力一杯殴る。その衝撃で竜の巨体は空に飛んでいく。コレットも地面を蹴り流星の如く飛び上がる。その一歩だけで地面が大きく割れた。一筋の流星となった彼女は竜の周りを何度も交差する様に飛びその度に強力な一撃を与える。そして、竜の真上に飛び上がり一条の光となって竜の腹に足を振り下ろした。

そのままの状態で地面に向かって落ち、竜を叩きつけた。衝撃で地面が大きく割れて砂が津波の様になり辺りの怪物達を飲み込んでいった。腹に強力な一撃をくらった竜は痙攣した後力尽きた。

コレットは竜から降りて次の敵を探してそこに突貫して行った。

なのは「コレットちゃん…凄い……」

スバル「コレットさんカッコいい！！」

ティアナ「普通あり得ないわよ……あんな巨大な竜を一人で倒すなんて…」

リリス「流石お嬢様！！そこに痺れる憧れるぅ～～！！」

ウルフ「師範のお前が何言ってんだよリリス」

スバル「えっ！？コレットさんの戦い方ってリリスが教えたの！？」

リリス「基本的なことはね。その後は彼女自身が頑張ったからあそこまで行けたんだよ」

コレットの体術はリリスが教えたという事になのは達は驚いた。ということはリリスはコレットよりも凄い事になる。

カイン「壱の太刀、霞！！」

カインの声になのは達はその方向を見る。一振りしただけなのに何重にも斬り裂かれて怪物は倒れた。銀の髪を桃色のリボンで結んで棚引かせるその光景は美しく、なのはは見惚れていた。

ウルフ「その戦いは勇猛苛烈、その刃、見惚れれば即ち待つのは死也、龍の如く、強者の如く戦況を見据え敵を屠る。第三前衛部隊『龍』、部隊長カイン・レオンハルト」

カインの前に剣山の様に体に剣の刃を付けた４本足の怪物が現れその刃を飛ばす。数十はあるだろう刃の雨がカインに迫る。

カイン「弐の太刀、朝菊！！」

再び『雷切』を一振りする。剣閃が幾つも飛び刃を斬り裂いた。そのまま、刃を飛ばした怪物に剣閃は飛んでいき怪物の体を細切れにした。

カイン「雷鳴よ刃となりて敵に降り注げ！！サンダーブレード・レインフォール！！」

隙を見せずカインは術を発動。上空から銀の雷が剣となって怪物の群れに降り注いだ。体を貫かれ雷で体を焼かれ次々と黒焦げになっていく。

残ったものがカインに殺到する。カインはその場から動かず目を閉じていた。

なのは「カイン君！危ない！！」

なのはの声が聞こえた瞬間カインの目がカッ！と開く。それだけしか動いていないが怪物達の中をカインはゆらりと動いたと思ったら

怪物達はカインを通り抜けていった。

カイン「参の太刀、月見草……」

そう呟くと、先ほどの怪物の群れが、百はいた怪物の群れが微塵斬りになって地面に崩れ落ちた。

それを一瞥した後、なのはの方を見る。なのははホッとした様な表情をして此方を見ていたためカインはフッと柔らかく笑った。

なのは「っ／／／／／／／！！」

その笑顔に顔がボンッ！！と音をたてる様に赤くなる。それを見てカインは笑った後、再び怪物の群れに向かって突っ込んでいった。

リリス「流石剣帝！あれでは相手にならなかったみたいですね！」

リイン「す、凄いですぅ～！！」

ヴィータ「何だよ今の…敵が避けたみたいに見えたぞ」

なのはがカインを見ている時、フェイトはバルドを怪物の群れの中から見つける。

向かってくる敵を一振りで次々と戦闘不能にさせる。

ウルフ「その一撃は大地を震撼させる、いかに守りが固くとも、打ち破り、突き崩す、その黒き炎に焼かれる者はその身を跡形もなく消え去るのみ、状況に応じて攻撃スタイルを変える姿は正に鷲の如し。第四最前衛部隊『鷲』、部隊長バルド」

幾つもの炎弾を作り出して敵に飛ばす。直撃した怪物達は黒炎に包まれ跡形もなく消え去った。それを回避した怪物達がバルドに迫る。彼は、黒い炎をケルベロスに纏わせて
一気に振り抜いた。

バルド「魔王炎撃破！！」

正面から愚かにも突っ込んだ怪物達はその炎に焼かれ燃え尽きた。背後から別の群れが迫る。それをバルドは冷静に判断し左手にバハムートを掴み振りかえりざまに斬り裂いた。

バルド「岩砕崩襲撃！！」

地面にバハムートを叩きつけ大きな岩塊を飛ばす。直撃して怯んだ怪物の群れに肉薄、バハムートを再び振り下ろした。

バハムート［若の前にひれ伏しなさい！！］

バルド「重撃爆砕！魔王地顎陣！！」

一体がその一撃に潰れ地面に沈む。そのままバハムートは地面に接触する。すると、地面が黒く染まりそこから黒い溶岩が噴き出す。それは周囲にいた怪物達を飲み込み、溶かしていった。その溶岩の中でバルドは平然と立っていて残りの怪物を見る。

バルド「一気に行くぞ！ケルベロス、２ｎｄフォルム！！」

ケルベロス［ヒーハー！！派手に舞おうぜ！！２ｎｄフォルム起動！！］

バハムートを消し、２ｎｄフォルムを起動させる。両手に金色に輝く剣が現れた。それを構えて足裏に溜めた魔力を爆発させる。

怪物達からすればバルドが消えたと思うだろう……一陣の風が吹き抜けたと感じた時、既に自分の体の上半身と下半身は離れていた。風が通り抜けた先にバルドは立っていた。

バルド「奥義、魔王閃光刃！！」

バルドの姿は消え、彼が奔るとソニックムーヴが起きその場所の地面が大きく抉れる。それならばそこから何処に向かうか分かると思

うだろう。しかし、それは叶わないのだ。それを知覚した時には既にバルドはその者を通り過ぎているからである。

黒い一条の光が怪物達の中を駆け回るそれが通り過ぎる度に次々とバラバラに両断されていく。

バルドが止まった時には既にそこいら一帯の怪物達は地面に倒れ伏していた。

ケルベロス［相変わらず容赦ないね～相棒］

バルド「フンッ！敵に情けを掛けるなんて事今迄したことあるか？」

ケルベロス［う～ん……無いな！！アヒャヒャヒャヒャ！！］

バルド「ったく、五月蠅い相棒だ……」

ケルベロス［そう言うなって相棒。ほら、嬢ちゃんがこっちを見てるぜ］

バルド「みたいだな…」

ケルベロス［笑顔で手ぇ振ってやりなって］

バルド「ああ？何でそんな事―［いいからいいから］…分かったよ、これでいいんだろう？」

バルドはフェイトに向かって手を振る。フェイトには笑いながら手を振ってるバルドが見えた。

フェイト「はうっ……／／／／／」

その笑顔を見て顔を急激に赤くするフェイト。バルドはそれを見て首を傾げたが自分に向かってまた迫って来る怪物達を見つけると表情を引き締めその群れの中に飛び込んで行った。

ガルドとセフィリアを見つけたなのは達は二人の戦いを見る。

二人は互いの背を守る様に立ち周囲を囲む怪物の群れを見据える。

ガルド「行くぞ！セフィリア！！」

セフィリア「はい！！」

同時に地面を蹴り突撃する。二人に殺到する怪物達。ガルドに向かってあらゆる方向から牙や爪、刃の様な刃翼、鋭い刃物を持った尾が迫る。だが、それは全て彼には届かなかった。

ガルド「轟破衝壁！！」

パラディンランスを地面に突き刺すと彼を中心に地面から土で出来

た壁が現れその全てを防いだ。その壁を突き破って槍が飛び出す。
それは一体に突き刺さり絶命させた。慌てて槍の届かない所まで後退する怪物達。ガルドは土の障壁から悠然と出て来た。

何を思ったかパラディンランスを消す。そして、徐に地面に手を付けた。

ガルド「原子よ我が呼び声に応えよ！その刃生み出されし理由を破棄し唯その性能のみ我は求める！！」

そう言うと地面がいきなり粒子状になって彼の周りに集まり出す。
それは徐々に形を作り始め一本の槍を形成した。

ガルド「撃ち穿つ魔の槍（ゲイボルグ）！！」

深紅に染まった槍がガルドの目の前に現れた。

なのは「槍が現れた！？」

ウルフ「ガルドの特殊な力、『原子崩壊（アトミッククラップス）』。俺達の周りにある物は原子で出来てるだろ？ガルドはそれを操って武器を形成したり防御壁を作ったりすることが出来る」

それを掴み手で回しながら目の前の怪物の群れに突撃した。

一体がガルドの飛び掛かる、ガルドはそれに向かって槍を突き出した。しかし、それは避けられて隙が出来る。だが、その怪物は突然動きを止めた。

シグナム「如何したというのだ？なぜあれは動きを止めた？」

疑問に思ったシグナムだがそれは直ぐに分かった。槍を避けた筈なのにその穂先は怪物の心臓を貫いていた。

シグナム「何故だ？あれは確かにあの一撃を避けた筈なのになぜあの槍が刺さっている？」

リリス「魔槍『撃ち穿つ魔の槍（ゲイボルグ）』。その力は”必ず敵の心臓を貫く”。過去にある英雄が使っていた槍だそうだよ」

英雄、クーフーリン。その者が使っていたのがあの槍だった。

ガルド「命惜しくない者は来るがいい。この槍の錆にしてくれる」

その迫力に押された怪物達だが雄たけびを上げてガルドに殺到した。

その群れに高速で槍を突きまくる。一撃ごとに敵は倒れていく。怪

物達の攻撃を原子で構築した盾で受け止めながら敵の心臓を貫いていった。だが、敵は同時に飛び掛かる。これでは受け切れないと悟ったガルドは真上に飛び上がった。

ガルド「原子よ、その力我が前に示せ！」

大地が脈動し辺りから土が粒子状になってガルドの周りに集まり幾つもの槍を形成して行った。それは、全て、ゲイボルグになった。その数……数十個！！

ガルド「破滅の雨よ降り注げ！『死せる魔槍の洗礼（レインボルグ）』！！」

同時にその槍は撃ち出され、下にいた怪物達に降り注いだ。

赤い雨が降る止んだ時そこには心臓を貫かれて絶命した敵の残骸しかなかった。撃破と見なされ怪物の残骸は消えていった。

ウルフ「その守り正に鉄壁也、原子を繰り、敵に破滅を齎す、柔軟な思考で敵を翻弄し確実に勝利を引き寄せるは虎の如し。第五後衛守備部隊『虎』、部隊長ガルド・ドム・バロム。そして……」

そのままセフィリアを見る。

ウルフ「魔界最強の王にしてガルドの妻、その戦いは正に疾風迅雷、5人の姫を操り勝利を?ぎ取る、その剣閃の速さ隼の如し。第六中衛部隊『隼』、部隊長セフィリア・ドム・バロム」

セフィリアは帯刀術と抜刀術を的確に使い迫る敵を斬り伏せ、叩き伏せていた。

一端距離をとり術を詠唱する。

セフィリア「地に伏す愚かな贄を食らい尽くせ、グランドダッシャー!!」

怪物達の足元が割れそこから溶岩と岩塊が噴き出した。それに飲み込まれ多くの敵が焼き尽くされた。

セフィリア「我が呼び声に応えよ!古より我が一族を守りし5人の猛将よ!前姫、後姫、赤姫、青姫、黄姫!!」

彼女の周りに5つの魔法陣が現れる。そこから手に大きな薙刀と腰に6本の剣を着けて鎧を着た黒髪の女性の前姫、着物を着た黒髪の女性の後姫、両手に拳銃を持った賢者の衣の様なのを着た赤髪の女性の赤姫両手に巨大な盾を持った騎士甲冑の青髪の女性の青姫、金に輝く馬に乗った白色の鎧を身に纏って槍を持つ金髪の女性の黄姫

セフィリア「その武、止まる所を知らず！世にその名を刻め！！」

すると、セフィリアのそれぞれの指から一本の魔力で出来た糸がでて2本ずつ神姫につく。

セフィリア「舞え！！我が神姫よ！！繰幻乱舞！！」

それに反応し其々動き出す神姫達。前姫は薙刀を振り回し、後姫は袖からナイフを出し連続で投擲する。接近する敵には小太刀を出し着物を靡かせ斬り裂いていく。赤姫は両手の拳銃を連射し蜂の巣にする。青姫は装備してる盾を棘付きの大盾に変え体ごと体当たりし吹っ飛ばして行く。黄姫は馬上から槍を振り回し薙ぎ払う。神姫達がセフィリアの繰糸術で動き敵を次々倒す。セフィリアも神姫を操りながら来る敵を斬り伏せる。

リリス「流石、現魔王とその夫。並みの敵では歯は立ちませんね」

フェイト「セフィリア、神姫達を指二本で操ってるの！？」

ウルフ「そうだね。2本あれば十分だって本人は言っていたよ」

ヴィータ「すげぇ……」

混戦状態の中、はやてはシリウスを見つける。彼は周囲を数十体の怪物に囲まれ如何見ても脱出不可能な状態に見えた。そんな状況でもシリウスの表情は普段の余裕のある顔を崩していなかった。

はやて「シリウス君！！」

その声が聞こえたのかはやてを見て笑顔で手を振る。それを油断と判断した怪物達が一斉に飛び掛かる。

シリウス「狐妖術、妖孤夢幻」

その瞬間、シリウスの体がまるで蜃気楼の様にぼやけていき消えていった。突然消えたシリウスに怪物達も驚き辺りを仕切り探す。

シリウス「やあ、皆さんご苦労さん」

気付いた時にはシリウスは上空で浮いていた。

シリウス「さて、行くよ！！」

神威を構えて上空から一気に敵の中に飛び込む。地面に着地、右か

ら来る猪の様な生き物の突進をかわして脳天に神威を叩きつけ地に叩き伏せる。次に左から剣を持った骸骨が足を斬り裂こうと剣で薙ぐ。それをジャンプで避け其のまま頭を回し蹴り、骸骨の頭が１８０度回る。それの剣を奪い取り反対に投擲。回転しながら飛ぶ剣は転がりながら突っ込んできた芋虫の眉間に見事に刺さりそれは倒れた。

シリウス「台風警報発令！皆さん家に避難しよう！！サイクロン！！」

シリウスが術を発動、大きな竜巻が敵を飲み込み斬り刻んだ。

シリウス「ふぅ～、良い仕事した！はやて～！！声援ありがとう！！！」

はやてに向かって手を振った後シリウスは再び黒い塊の様に密集した怪物達の中に飛び込んで行った。

ウルフ「その戦い神出鬼没、状況に応じて前衛にも後衛にもなる、相手の不意を突き勝利を呼び寄せるは正に狐の如し。第七中衛部隊『狐』、部隊長シリウス。そして……」

空で幾つもの光の線が奔る。上空で飛行モンスターとクラウドとティファが交戦していた。

ウルフ「敵を確実に葬る事を意味する我がグランディオンの特殊部隊スレイヤーズ、部隊長クラウド・ケリオン、副隊長ティファ・フユーストン」

迫る敵を撃ち落とす二人。だが、二人を銃を持った敵は包囲し一斉にビームを放った。
爆発が起きて爆風で二人を包み込んだ。

しかし、爆風をビームが突き破り敵を撃ち抜く。煙が晴れ、そこには無傷の二人が立っていた。

ク・ティ「「ＳＥＥＤ、発動!!」」

二人の目のハイライトが消る。

ク・ティ「「ファンネル（ドラグーン）起動!!」」

背中に生えてる白の羽と青の羽が二人から離れていくその代わりにその背から
赤い粒子状の羽と青い粒子状の羽が出てきた。

ファンネルとドラグーンは意志を持つかのように不規則な動きを見

せながら
先端からビームを放つ。それは的確に敵のウィークポイントを突いて撃墜して行った。

二人も両手にビームサーベルを持って突撃、次々に斬り倒していく。
今まで以上に速く動く二人を捉えきれず敵は翻弄されるだけだった。

粗方片づくとファンネルとドラグーンを自分の下に集結させる。
それを好機と判断した怪物達は二人に向かって突っ込んでいく。

ク・ティ「「ターゲットマルチロック、フルバースト!!」」

二人は一斉に自身の武器からビームを放った。それは正に光の雨の様で
それは全て敵を貫き撃墜させた。

クラウド達が敵を倒した瞬間アラームが鳴る。

アナウンス［全ターゲットの撃墜を確認。訓練を終了します］

空間が歪んで、先ほどいた部屋に戻る。ロイド達は奥から出てきた。

ウルフ「如何かな?今の訓練兵達に使えるかな?」

バルド「無理だろ!!つーか何なんだよあの数!!俺達を殺す気か!?」ゴツンッ!!

ウルフ「ノオォォォォォォ!!頭が、頭が、割れたあぁぁぁぁ!!？」

そう言ってウルフの頭に拳骨を振り下ろす。辺りに聞こえる位の音が聞こえる。痛そうだ……実際ウルフはゴロゴロ転がって悶絶してるが……。

ロイド「結構疲れたぞ…」

コレット「でもいい運動にはなったよね？」

リリス「ご主人様、お嬢様！飲み物とタオルです!!」

ロイド「サンキュー、リリス」

コレット「ありがとう、リリス」

二人にお礼を言われ頭を撫でなれて幸せそうに蕩ける顔を見せるリリス。

国王のウルフが悶絶してるのに誰も気にしていない。如何やら何時もの事の様だ……

何とも言えないこの状況の中、なのは達はただ呆然と見ているしかなかった……

# 第十七話（後書き）

ロイド達軍を率いてましたっという巻。いやはや、少しやり過ぎたか？
まあ、気にしたら終わりな気がするのでスルーしましょう。

バルド「今回、いろいろな技出たな」

まあ、説明はめんどいので一部だけにします。ロイドの神光皇烈刃ですが目にも止まらぬ神速の速さで中範囲の敵全てを両断する奥義です。囲まれている時とかに使用する範囲系剣術です。次に極・魔皇刃ですが自身を中心に広範囲に広がる衝撃波を展開します。威力もかなり高く、縦にも大きく広がるので低空飛行している者はくらいます。
コレットが使ったホーリーメイルは前方に光の盾を展開して攻撃を凌ぐ防御技です。その防御力はかなり高いです。秘奥義のインフィニティアソウルはＴＯＧのソフィーの使う第二の秘奥義と同じと考えて頂ければよろしいかと…。

それにしても何でグレイセスｆがＰＳ３何だよ！！俺できないじゃん！！

カイン「作者はＷｉｉしかないもんな…」

そうだよ！！お陰で続編に出てくるだろう新技とかシナリオとかソフィーがあの後どんな感じになるのかスッゲ～気になるんだよ！！！はあ～もう一回Ｗｉｉで出ないかな？

因みに作者的にソフィーは可愛いと思います。え？そんな情報要ら

ない？
すんませんでした……ｏｒｚ

コレット「無理だと思うよ？」

くそっ！！損した気分になった。鬱だ……寝よう。

バルド「不貞寝しやがった。まあ、こんな奴ほっといてください」

フェイト「次回はどうなるの？」

バルド「さあ、それはこいつ次第じゃね？と言う訳で読者の皆様、のんびりと次回作を待っていてください」

なのは「作者はこれからテスト勉強に集中するらしいので更新は遅くなるかもしれません」

カイン「これからもこの小説を宜しくお願いします」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第十八話（前書き）

テスト期間中だというのに何してんだろ俺？
今回はなのは嬢のデバイスに新システムを追加してみました。
気がつけば３０ＫＢを超える量を書いていることに気付いた。

シリウス「作者の文才能力の低さを露呈してるね♪」

いや～～！！そんなこと言わないで～。自分でもこの低さを見て絶望してるんだからさ～！！

クラウド「身悶えしてる作者は放っといて本編をどうぞ！！」

# 第十八話

痛みに悶絶していたウルフも立ち直り、皆でホワイトホエール内の休憩室に入る。

ウルフ「痛たた……もう少し優しくしてくれよ。一様俺国王なんだけど？」

バルド「ふんっ！何言ってんだか。国王だのなんだのは俺には関係ねぇよ」

フェイト「バ、バルドそんなこと言っちゃ駄目だよ。自国の王様なんでしょ？」

バルド「そんな事は如何でもいい。それよりもウルフ、こっちに来たってことは…重鎮どもから何か言われたんだろ？」

それを聞いてウルフの表情が真剣になりなのは達を見る。

ウルフ「今回来たのは他でもない。君達にグランディオンに来て頂きたい」

なのは「え！？」

カイン「やっぱりそうか……」

ロイド「如何すんだよ？なのは達にだって仕事があるし、第一、今六課が留守になったら誰が街を守るんだよ？」

はやて「うちら以外にも優秀な部隊はおるねんけど……それが上手く機能するかどうかは不安ね……」

重鎮たちの要請には流石の国王も拒否は出来なかった様だ。だが、最初は重鎮だけが行く予定だったのだがそれをウルフは拒否し自分が行くと言い此処に来たらしい。

シリウス「しょうがないね。クロノに聞こうか」

そう言うとクロノに連絡を入れる。

シリウス「やっほ～クロノ。人生エンジョイしてる？」

クロノ「はぁ～、何だこの忙しい時に」

シリウス「いやさ、俺達休暇が欲しいんだがいいかい？」

クロノ「……なに？」

シリウス「期限は一週間位かな、後はやて達も連れて行くからそこ

んとこ宜しく～～」

クロノ「ち、ちょっとまｔ「ば～～い♪」おい！！」ピッ！

一方的に連絡を入れて一方的に通信を切る。その強引な戦法になのは達は唖然としていた。

シリウス「いいってさ。良かったね皆♪」

一同「いやいやいやいやいや！！！」

ウルフ「ハハハ、相変わらずシリウスは強引に話を進めるんだな」

笑顔で言うシリウスを皆でツッコミを入れる。その光景をウルフは笑って見ていた。

結局なのは達はシリウスに上手い事話をのせられてグランディオンに行く事になった。なのはやフェイトはヴィヴィオに仕事で出張に行く事を伝え、グリフィスらにその事を伝え暫くの間の事を頼んだ。

現在ＦＷ陣は先ほどロイド達が使っていた訓練室で訓練を受けていた。

ランクとしては怪我をさせないようにＣランクと言っていたのだが……

スバル「ティ、ティア！！これもう無理だって！！これホントにＣランクなの！？」

ティアナ「うっさい、バカスバル！！私だってこれはＣランクだって思いたくはないわよ！！」

エリオ「うわっ！？」

キャロ「エリオくん大丈夫！？」

ティアナ達は現在森フィールドで木に隠れながら目の前を飛んでいく銃弾（ペイント弾）をやり過ごしていた。偶に跳弾が近くに当たる。彼女達の前の丘には土嚢を置いてそこに固定式のガトリングガンを
数台設置したものがあってそれから高速で銃弾（ペイント弾）が撃ち出されており近づくことすら出来ないでいた。

ティアナ「クロスファイヤー、シュート！！」

幾つも魔力弾を飛ばすもののそれは全て撃ち落とされる。

エリオ「狙いが正確すぎます！！」

実際此処に来るまで多くの固定砲台を破壊してきたがこれは今までの比ではなかった。
これでもCランクの戦いだというのにティアナ達は驚愕した。

ティアナ「でも、勝機はある！」

そう、幾ら狙いが正確でも銃弾が尽きれば次弾装填のために攻撃を中止しなければならない。
その一瞬の隙を突くしかない。実際、何度か攻撃が止まっているのを確認している。
タイムラグは3秒……

ティアナ「いい？次に攻撃が止まったら一気に攻撃するわよ！！」

一同「了解！！」

暫く続く銃弾の跳弾をプロテクション等の防御魔法で凌ぐ。そして、

攻撃が突然止んだ。

ティアナ「今！！」

一斉に木の陰から飛び出しガトリングガンを目で捉える。此方が出てきても攻撃してこようとはしない。

今がチャンス！！

後3秒…

ティアナ「クロスファイヤー、シュート！！」

スバル「ディバインバスター！！！」

エリオ「フォトンランサー、ファイヤー！！」

キャロ「フリード！ブラストフレア！！」

其々が攻撃を放つ。後2秒……

目の前に障壁が現れるそれによって進行が止まる。

後1秒……

一同「いっけえぇぇぇぇ！！！」

徐々にそれを削っていくそして、障壁を破ってガトリングガンを貫いた。

アナウンス［ターゲットの破壊を確認。シュミレートを終了します］

戦闘終了のアナウンスが鳴りＦＷ陣は床に座り込んだ。

アナウンス［戦闘時間、２８分５３秒、戦闘評価Ｃです］

スバル「え！？あれでＣ！？」

ウルフ「まあ、戦場だったら味方部隊は全滅、君達も包囲されても可笑しくないからね」

バルド「だが、初めてにしては上出来だと思うが？」

そこにバルドとウルフがやって来てＦＷ陣にタオルを渡した。

エリオ「父さん達はこれをやったらどの位速く終わらせるんですか？」

バルド「ん？そうだな……あれ位なら2分掛かるか掛からないか位だろうな」

キャロ「そんなに速く出来るんですか！？」

バルド「ま、ホントの戦場じゃあれに敵を包囲するための別働隊、支援砲撃の戦車を数台、突撃部隊がいるからな」

ウルフ「因みに今のバルドの言った部隊だけでもランクはBだけどね」

バルド達の説明を聞いてFW陣は思った……有り得ない……と

自分達もそれなりに場数は踏んでいると思ってたがバルド達は更にその上……いや、比べるのもおこがましい程の場数を踏んでるのだと理解した。

ウルフ「さて、訓練は終わり。なのは達の所に行ってみようか？」

FW陣「はい！」

隣の部屋でなのはとカインの摸擬戦……と言うよりは訓練が行われていた。

FW陣としてはレイジングハートがパワーアップしたというのでなのはがどれ程強くなったのか非常に気になっていた。

隣の部屋に行くと上空でなのはとカインがぶつかり合っていた。
無数に煌めく光が彼女達は二人が遠距離戦闘をしてるのだと思っていたのだが……
次に閃光がぶつかった時気付いた。なのはが遠距離戦闘をしていなかったのに……
なのははカインと近距離戦闘をしていた。
スバル「なのはさん!?」
ティアナ「うそっ!?如何して砲撃タイプのなのはさんが接近戦をしてるの!?」
鍔迫り合いをしていた二人が離れる。その時に見えたなのはのデバイス、レイジングハートから魔力刃が出ていてデバイス自体も杖ではなく剣の形態をしているのに、
ロイド「おっ!皆、訓練が終わったのか?」
エリオ「ロイドさん!なのはさんのあの武器は?」
ロイド「ああ、新しく加えたシステムさ『ブレードモード』って言ったらいいかな」

キャロ「ブレードモード…ですか？」

ロイド「一様なのはのブラスターシステムの負担を減らすのは出来たんだけどなそれだけじゃあこの後の戦いは厳しいと思ってなあれを加えたんだ」

そう言って上空を見上げる。ＦＷ陣もそれにつられて見上げるとカインにレイジングハートを振るっているなのはが見えた。それをカインは冷静に受け止めている。

カイン「うん、いい太刀筋だな。良い感じだぞ」

なのは「にゃはは、でもカイン君には及ばないよ」

カイン「そりゃそうだ。直ぐに負けちまったら剣帝の名が泣く」

雷切を構える。それになのはもデバイスを構えて応える。

カイン「行くぞ？」

そう言った瞬間カインが視界から消える。右から何かが来る気配がした。咄嗟にデバイスを動かす。

ガキンッ！！という音と同時に雷切が見えた。

なのは「クッ！！」

カイン「反射神経は少しずつだが良くなってきたな、前は反応すら出来なかったのに」

なのは「そ、そう…かな？でも、何となくな感じしかしなかったから反応したとは言えないと思うの」

カイン「最初はそんな感じだ徐々に慣れてくるはずだ。それにしても……流石は士朗の娘だ。成長が早い。恭也は驚くだろうが士朗が知ったら凄く喜ぶと思うぞ？」

なのは「そ、そんなことないよ／／／／／」

そう言った後互いの剣を弾き距離をとる。次になのはが動きカインに剣を振り下ろす。

それを受け止め弾き蹴りを入れる。なのはは体を仰け反らせて避ける。それを予測していたのか

そのまま流れる様な動きで足払いを掛ける。バランスを崩した彼女の手を掴んで地面に投げた。

地面に激突する前に体勢を立て直し地上に着地、魔力弾を複数形成しカインに飛ばす。

カイン「壱の太刀、霞！」

一振りで何閃もの剣閃を繰り出し魔力弾を全て切り裂いた。だが、
それはフェイク、

なのは「レイジングハート！『バスターモード』！！」

レイジングハート［イエス、マスター］

形態が変わり杖に変わる。それをカインに向ける。既に魔力の充電は完了している。

なのは「ディバインバスター！！」

強力な砲撃がカインに迫る。魔力弾がフェイクだと気付いたカインは雷切では間に合わないと判断し左手にサイフォスを取り出し構える。

カイン「弐の太刀、夕顔！！」

サイフォスの刀身が白く輝き刀身が伸び５メートルほどに伸びる。
それを振るいディバインバスターにぶつける。切っ先からなのはの砲撃は綺麗に二つに分かれてカインを通り過ぎていった。

砲撃の先を見るとなのはがいなかった。

カイン「しまった！今のもフェイクか！！」

その時背後に気配を感じ振り向くと、そこにはブラスターモードを起動させたなのはが砲撃準備を完了していた。彼女の周囲は５つのブラスタービットが展開されていた。

なのは「全力全開！！」

カイン「ちっ！！」

なのは「スターライトォォォブレイカーー！！！」

６つの砲撃が巨大な砲撃がカインを飲み込んでいった。辺りが煙で包まれる。

なのは「レイジングハート、まだだよね？」

レイジングハート「ええ、あの方ならこの位で負けるとは思いません」

煙の向こうにカインがいるだろうと警戒を緩めないなのはすると、

カイン「中々いい感じだな」

煙を魔力を周囲に爆発させる様にすることで吹き飛ばしカインが姿を現した。

怪我らしい怪我も無く、腕を組んだままの姿で立っていた。

カイン「今のは流石に焦ったぞ」

なのは「予想はしてたけど全力で行ったのに……実際見ると少し傷つくな～」

カイン「防御魔法、ヤタノカガミ」

そう言うとカインのマントが広がり、彼を包み込むように動いた。

カイン「さっきのはこれで防いだ。さて、今度はこっちの番だ！！」

そう言うとカインは右手をなのはに向けた。

カイン「今から使うはディバインバスターの原型、プロトタイプの様なものだ。今のなのはにならこれを継承する事が出来る」

右手に魔力が集中するそれだけで大気が震動している様になのはは感じた。

カイン「耐えきれよ?行くぞ!!ディバインバスター・ゼロ!!」

白銀の大きな砲撃が猛スピードでなのはに迫る。

なのははプロテクションを発動させる。ぶつかった瞬間、凄まじい衝撃がなのはを襲った。

なのは「くうぅぅぅぅぅぅ!!」

意識を集中して防御が崩れない様に必死に堪える。だが徐々に罅ができ、それは広がっていく。

なのは「はあぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

自身に残る魔力を全て注ぎプロテクションの維持を続ける。

砲撃が止みカインはなのはを見る。彼女は息を荒くしながらも辛うじてプロテクションの維持に成功したようだ。

つまり、あの砲撃を耐えきったということになる。その事にカイン

は嬉しい気持ちになった。

魔力を殆ど使って飛行魔法の維持も難しくなって落ちそうになったがカインがなのはを抱きとめた。……お姫様だっこで……

カイン「よく耐えたな、なのは」

なのは「はう……／／／／／／／／／」

笑顔で笑うカインになのはの顔がボンッ！と音をたてて赤く染まった。

引き締まったカインの体の感触がなのはの体に伝わってくる。
それだけで彼女の鼓動が速くなる。もしかしてカインに聞こえているのではないかと恥ずかしく
思うほどだが、それでも暫くこの感覚を楽しみたいと思う自分もいたりする。

カインが地上に降りる。

カイン「なのは、立てるか？」

とカインが聞いてきたのでついついなのはは、

なのは「ちょっと、まだ無理かも…／／／／／／／／／」

と答えてしまった。

カイン「そうか？ならもう少しこのままでいるか」

その後、なのはをお姫様だっこして戻って来たカインをシリウスがからかい、
ケルベロスがなのはを弄り彼女を赤面させたのは此処に記しておこう。

---

ウルフ「皆、こっちの料理は口にあったかい？」

フェイト「うん、どれもおいしかったよ」

あの後、皆で食事を摂って、今はブリッジに向かう廊下を歩いている。

本当ならば転送ポートなどで一気にブリッジに行けばいいのだがな

のは達に此処の内部が如何なっているかを見せるため歩いているという訳だ。

すれ違う職員達は、ウルフやロイド達を見るとその場に立ち止まり敬礼する。

それにロイド達も応える。

職員1「おい！見たか？あの噂の英雄達を生で見れたぞ！！」

職員2「ああ！今日はこの感動を忘れずに仕事を頑張ろうぜ！！」

時たまこの様な発言が聞こえる。

ロイド「なあウルフ、さっきの奴らは新しく配備された人員か？」

ウルフ「ああ、前は使用されていなかった部屋が幾つかあったから増員したんだ」

ウルフが言うには、職員の募集をしたら予想を上回る様な人員が手に入ってしまって空いた部屋があったのを思い出しそこを提供し入った職員全員が仕事が出来る様に調節したりしたらしい。

武器長「お！ウルフの旦那丁度いい所に！！」

ウルフ「ん？武器長か、如何した？」

武器長「いやね、ついさっき搭載兵器の点検を全て終えたからその報告さ」

ウルフ「そうか。何時もすまんな大変だろ？」

武器長「そんなことないっす！我々としては充実した日々を送れて楽しいですから」

そう話した後、報告を終えて武器長は去っていった。

衛生長「セフィリアさん、コレットさん。新しい新薬が出来たんですけど……」

セフィリア「そうなんですか？では…」

コレット「それじゃあ、この薬は……」

衛生長「分かりました。その様に手配します」

コレットとセフィリアが何かを話していて、それが終わり衛生長は頭を一度下げた後去っていった。

なのは「コレットちゃんとセフィリアさんは何を話してたの？」

コレット「えっとね、細胞活性剤の新薬が出来たって言うから薬の配列を整理してって言ったんだよ」

はやて「細胞……活性剤？」

シグナム「何なのだそれは？」

セフィリア「えっとですね、簡単に言うと細胞活動を速くして怪我の回復速度を上げる薬って言った方がいいですかね。主に軽傷者に使用して重症者への人員を削減させないようにするのが目的で作られたんですよ」

簡単にいえばモンハンのあれです。自然治癒力上げる薬、活力剤……

はやて「そんな薬があるんか！？」

コレット「うん、実際それで助かった人も多いから改良して更に効果を上げる様に調整してるみたいだよ」

ウルフ「そろそろ、ブリッジに行こうか？」

ウルフに促されなのは達は移動する度に次々に驚かされていくのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

ブリッジに入るとそこには見たことも無い機材が幾つもありそこで何人かの人がキーを叩いたり、目の前にある画面と睨めっこしたり、逆立ちしてたり……逆立ちしてたり！！？

ないない（￣。￣）y―

最後のは無視して、ウルフ達が入って来たのを見た職員が皆敬礼する。

それにウルフ達も敬礼した後なのは達をブリッジの隣にある会議室に案内した。

職員達がなのは達を見てヒソヒソ話をするのが聞こえた。

それをウルフは気にせずなのは達を会議室に入れ席を進める。なのは達が全員座ったのを確認しウルフ達も座る。

？？？「失礼します」

そこに一人の女性が現れる。スラリとした長身の十代後半の女性で藍色の髪は腰まで伸ばしていてその端正な顔と鋭い眼つきは見ただけで相手を射殺せるのではないかというほどであった。

ウルフ「おや？サラ、如何したんだい？」

サラ「いえ、貴方が客人を連れて此処に入ったのを見たので飲み物を持ってきただけです」

ウルフ「ああそうか。ありがとな。六課の皆紹介するよ、この子はサラ、俺の秘書みたいなものだよろしく頼む」

サラ「サラ・アルベルトです。よろしく」

はやて「こ、こちらこそよろしくお願いします」

お辞儀するサラにはやて達も慌てて会釈する。顔を上げた後サラははやて達を睨むように見る。

なのは「え、えっと……サラさん？」

サラ「貴方達が管理局の人達なのですか？」

フェイト「えっと……はい、そうです…」

サラ「ウルフが認めても私達職員はまだ認めませんから」

はやて「え……」

ウルフ「サラ、敵を作るような発言は控えなさい」

サラ「ふん！！」

ウルフの言葉にソッポを向く事で応え飲み物を置いて部屋から出ていった。

ヴィータ「いきなり何なんだよあいつ！」

ウルフ「すまない皆。サラも悪気はないんだ、唯、まだ貴方達を知らないから信用が出来ていないだけでホントはとっても優しくて良い子なんだよ」

ウルフがサラの行いに対してはやて達に謝罪する。

シグナム「我々はそこまで信用が薄いのか？」

ガルド「言いにくい事だが、前にグランディオンに管理局が攻めてきたって言ったよな？
その時市街に被害は無かったんだが市民の耕した田畑や農場とかに被害が出たんだ。それでそこに住んでる人達が怪我をしてしまったんだ。だから、皆はやて達みたいな良い奴らがいないって思ってるんだよ」

エリオ「そ、そんな……」

ウルフ「そこに関してはゆっくりと話を進めたいと思っている。さ

て、そろそろ出発しようか」

話が暗くなる前に切り上げてブリッジに連絡を入れる。

ウルフ「そろそろ帰還する。総員、準備に入れ！！」

職員「イエッサー！！」

ホワイトホエールの目が光り海面からゆっくりと浮上する。その真上で空間が開き、黒一色の空間が見える。その中に入っていきホワイトホエールの全身が入るとそれは閉じた。

ホワイトホエールの姿が再び現れたのは黒い空間に星が煌めく所だった。
ワープした所は宇宙の様だ。なのは達の視界には多くの宝石のように輝く星が見えた。

そして、目の前には青く輝く星があった。

なのは「あれが…もしかして」

カイン「そう、あれがグランディオンの統括する世界さ」

その時艦内に赤いランプが点滅しアラームが鳴る。

ロイド「第一級警戒警報!?」

ウルフ「如何した何があった!!」

職員『報告します!我が領域を次元海賊団が不法侵入し暴れている模様です!!その多数が国内に侵入しています!!』

クラウド「またか…」

その報告に彼等は溜息を吐いた。

フェイト「次元海賊団?」

バルド「此処ら周辺を中心に暴れている奴らだ。幾ら追い払っても喧嘩を吹っ掛けてくるならず者集団だ」

職員『現在、第一五艦隊と第六艦隊が展開中!救援を求めています!』

ウルフ「ならば直ぐに向かう事を伝えろ!!到着まで一五分程度だ。それまで持ちこたえろ!!」

職員『イエス、サー!!』

通信が切れるとウルフはなのは達を見る。それは先ほどまでの緩んだ顔でなく一人の王がそこにいた。

ウルフ「皆さん、これより我が艦は戦闘に入ります。巻き込んでしまいすまない」

はやて「それよりも、大丈夫なんか？」

ウルフ「それには問題ない。この艦は我が国の最強の戦艦だ。早々やられはせん。
それに皆屈強な兵達だ。そこいらの敵には遣られはしない。皆、後これの整備が完了したから渡しておく、頼むぞ！！」

ロイド「任せろ！！」

ウルフの問いかけにロイド達は頷き、ウルフから何かを皆受け取って部屋から出ていった。ホワイトホエールは全速力で戦闘空域に向かって進む。その先に、幾つもの閃光が見えた。そこには黒一色に統一した艦隊と多種多様な色をした艦隊がぶつかりあっていた。

ウルフ「俺だ、そちらの状況は如何だ？」

そう呼び掛けると目の前に画面が現れそこに中年の男性が現れた。

艦長『ウルフ陛下！？なぜ貴方様が此処に！？』

ウルフ「そんな事は後だ、現在の状況を教えろ」

艦長『はっ、現在一五の艦隊と交戦中！その内六隻が国内に侵入しました！！』

ウルフ「そうか、それなら問題ない。今ロイド達をそちらに送った。彼らに地上に降りた賊の退治を頼んどいた」

艦長『えっ！？あの剣聖ですか！？り、了解しました！！我等は前方の敵に集中します！！』

ウルフ「そうしろ。では、後は、どの様に戦うかは分かるな？」

艦長『イエス、サー！！』

そう言って通信を切った。これを見ていたはやて達は思った。管理局の誤解を解く為に自分達が何をすべきなのかを……

そして、意を決してウルフに進言した。

はやて「ウルフさん、うちらも手伝わせてほしいんや」

ウルフ「え？駄目だよ。貴方達は客人だ、そんな自国の戦いに巻き込む訳にはいかない」

フェイト「そうだけど。でも私達は黙って見ているだけなんて出来ない！！」

なのは「そうだよ！目の前で苦しんでる人がいるのにそれを見てるだけなのは私達には出来ないよ！！」

その真摯な眼差しをウルフはじっと見つめる。そして、ふうっと溜息を突いた後微笑んだ。

ウルフ「分かった。ですが、気を付けてください。敵は貴方達の禁止している質量兵器を使ってきます。だから、皆はロイド達から絶対に離れないでください」

六課陣「はい！！」

ウルフから今ロイド達のいる場所をデータにして彼女達のデバイスに送る。
それを受け取った後ウルフに礼を言ってはやて達は出ていった。

ウルフ「……さてと、サラ」

サラ「何でしょうか？」

ウルフ「全職員にこれより戦闘を開始する。各々自分の持ち場につけと伝えろ」

サラ「了解しました」

そう言った後、彼女は艦内に通達、職員達は慌ただしく駆け巡る。

その中になのは達もいた。彼女達はロイド達がいる場所をデバイスに送られているのでデバイス達からの進言通り進むとそこには大きな扉があった。その扉を開けて中に入るとそこにはロイド達がいた。突然入って来たなのは達に驚いている様だ。

カイン「なのは!?どうして此処に?」

なのは「カイン君!私達も手伝うよ!!」

なのはの発言にロイド達は驚いた様に眼を見開いた。慌ててシリウスが止めに入った。

シリウス「えええ~!?危険だよ!相手は魔導士じゃないんだ!非殺傷設定なんてないんだよ!?」

はやて「そんなんわかっとる。けどな、うちらだけあそこで見てるなんてのは嫌なんや!」

エリオ「父さんお願いします!僕達にも手伝わせて下さい!!」

キャロ「お願いします!!」

バルド「……」

ガルド「バルド、如何するんだ？」

暫く考えてる素振りをした後考えがまとまったのかなのは達を見た。

バルド「分かった、ついてこい」

ロイド「バルド！？」

バルド「こいつ等の事だ、どうせ来るなって言っても無理やりにでも来るだろし、それに此処でなのは達が活躍すれば局の株もあがる。そうすれば交渉も楽になる」

セフィリア「成程、少しでもこちらが有利になる事をして同盟をし易くする気ですね」

それに頷いて応えるバルド。

バルド「そう言う訳だ。行くぞ、皆」

そう言ってバルドは一人でさっさと奥に行ってしまった。一人先を歩くバルドは、これからの事を色々と考えていた。

バルド（フェイト達がこれで国民から高評価を貰えればこれからの交渉にも優位に立てる。さて、そのために何をすべきか……）

その事を考えているとフェイトが隣に並ぶ。

フェイト「バルド、私達の我儘を聞いてくれてありがとう」

バルド「問題ない。だけどな、俺達から絶対に離れるなよ？」

フェイト「うん、分かってる。ありがとうバルド」

そう言ってバルドに微笑みかけると一瞬バルドの胸が高鳴った。

バルド（何だこの感じは……？）

その感じは昔……ずっと昔に感じたものに似ていた。だが、彼はそれと今のを同じと考えなかった。

なぜなら、彼の心は当の昔に凍てつく氷に覆われているのだから……あの…雨の降る夏の日に…

フェイト「バルド…？」

バルド「いや、何でもない。気にするな」

突然黙ったバルドにフェイトは心配そうに顔をのぞいた。それにバルドは力無く笑いフェイトの頭を優しく撫でた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

フェイトはバルドの様子が一瞬だけ変わった事に気づいていた。昔を憂う様な表情を見せた後力無く笑う彼を見て心配になった。

フェイト（そう言えば、バルドの昔の事全然知らない）

１０年前、少しの間だけ彼と過ごしたがそれだけだ。……気になる。彼の生きてきた軌跡がどの様なものだったのか。

フェイト（如何すればいいんだろう？）

やはりこういう事はロイド達に聞くべきだろうと結論に至った。彼らなら何か知ってると思った。

フェイトはさっそく近くにいたガルドとセフィリアに聞くことにした。

フェイト「ねえ、ガルド、セフィリア」

ガルド「フェイトか如何した？」

フェイト「えっと…バルドの昔ってどんなのだったのかなって思って、ちょっと気になって」

言いづらそうにフェイトが聞くとガルドそしてセフィリアも苦い顔をした。特にガルドは額にしわが出来る位になった。

フェイト「えっと、二人とも如何したの？」

ガルド「フェイト」

重々しくガルドが口を開いた。

ガルド「それは、聞かない方がいい。あいつの過去は生半可な覚悟で聞くべきものじゃない」

フェイト「え……？」

ガルド「そんな事よりも急いでいくぞ」

そう言ってガルドは先に行ってしまった。呆然とするフェイトの肩にセフィリアが手を乗せる。

フェイト「セフィリア…今の……如何言う意味？」

セフィリア「ごめんね、フェイト。あれを話すのはあまりにも重すぎるの…直接本人に聞けるほどの勇気がないと…もしかしたら貴方の心が壊れてしまう。だから言えないのホントにごめんね」

彼の過去を聞いたのだろう、セフィリアはそれを思い出したのか悲しみの表情を見せた。

バルド達がたどり着いた場所は大きな装置がある所だった。

シグナム「これは何なのだ？」

ロイド「この艦に搭載されている大型の転送装置さ。これで一気に地上に行く」

エリオ「あのロイドさん、リリスさんは何処に行ったんですか？」

リリスの姿が此処に来てから見ていないのだ。それを聞くとロイドは「直ぐに来る」と言った。

その言葉の言うとおりリリスは後から走ってやってきた。

リリス「いや～遅れました～」

リリスの姿を見てなのは達は驚いた。そこには背が伸びて大人の女性となったリリスがいたのだから。

なのは「リリスさん!?その姿は……？」

リリス「フフフ～、凄いでしょう?これはＡＩのために作られたもので『疑似肉体人形』って言うんだよ」

クルリとその場で一回転する。如何やらその姿はお気に入りの様だ。

ロイド「さて、リリスも来た事だし一様皆に説明するぞ。俺達は今から地上に降りてそこで地上に降りてきた敵を迎え撃つ。数は多分２万弱くらいいると思う。なのは達の世界じゃ禁止されている質量兵器なんて此処じゃ普通に使われているから気をつけろ」

カイン「なのは達に一番気を付けてもらいたいのは戦車とか高機動兵器だな」

はやて「そんなんのもあるんか！？」

シリウス「まあね。さてと、そろそろ行きますか」

全員が転送装置の中に入る。

アナウンス［座標確認、Ｄ－３２エリア、現在交戦地区です。よろしいですか？］

ロイド「ああ、頼む」

アナウンス［安全装置解除、座標固定完了、転送準備完了、転送開始します］

なのは達が気付いた時には目の前には青空が広がっていた。そう、青空が……青空が！！？

なのは「にゃ？」

一瞬の浮遊感、下を見ると地上が遥か彼方にあった。つまり、今自分達は大空にいるという訳で……

はやて「お・ち・るうぅぅぅぅぅ！！？」

ヴィータ「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

はい、重力に従って皆さん真っ逆さまに落ちます。慌ててなのは達はデバイスをセットアップし飛行魔法で浮く。ロイド達はもう慣れたのか落ちついていた。

ロイド「何時も思うんだけどさ、あの転送装置なんとかならないのか？絶対に悪意があると思うんだけど……」

コレット「そうだね～。リリスなんとか出来ない？」

リリス「う～ん、でも楽しいから此の侭でいいじゃん」

何て事も無いと言うリリスにロイド達も「ま、いいか」の一言で片づけてしまった。

なのは達は思った……治そうよ…と。

その時視界の端に光が見えた。それは幾つもおき地上でも爆発音などが起きたりしていた。

自分達は戦場にいるのだとなのは達は緊張した。

バルド「さてと、リリス、クラウド、ティファは敵艦を頼むぞ。俺

達は地上と空の敵を叩く」

そう言うとロイド達はウルフから渡された物を取り出した。それは、何かのカードの様だ。

ロイド達「鎧装（フレーム）セットアップ！！」

カード達「鎧装起動、専用武装ロードアウト！」

カードが光るとロイド達の前にカードは飛び、大きくなりロイド達に迫り包み込んだ。

光の壁が通り過ぎるとそこには鎧装を装備したロイド達がいた。

ロイドは赤で統一した手甲、脚甲、軽鎧、コレットは白に統一した脚甲、手甲、頭に金の天使の輪の様なものが、カインは鮮やかな銀色に統一した手甲、軽鎧、脚甲を、ガルドは青で統一した鎧を着てマントを纏った姿でセフィリアは翡翠で統一した胸当て、手甲、脚甲、マントを纏い、バルドは黒で統一した胸当て、額当て、手甲、脚甲でシリウスは金で統一した胸当てのみでリリスは薄い紫で統一した軽鎧、手甲、脚甲、マントを纏いそこに立っていた。

なのは「カイン君それは……」

カイン「これが俺達専用の鎧装（フレーム）さ。さて、準備は出来た、なのは、

絶対に離れるなよ?」

なのは「うん!」

全員そこから戦場に向かって飛んで行った。近づくにつれて轟音や爆音が聞こえた上空では戦艦が艦砲射撃を地上にしていた。

上空でも幾つもの爆発や怒号が聞こえてきた。

ロイド「相手は大体は機動兵器だ。遠慮なく叩き壊してくれ!!行くぜコレット!!」

コレット「うん!!」

二人は先に敵陣の中に飛び込んで行った。ロイドとコレットの姿を確認した人型の機動兵器は手に持っていたマシンガンを構えて連射してきた。それを全て回避し擦れ違いざまに斬る。横に両断され一機が爆発、コレットはチャクラムを複数投擲、二機がこれをくらい斬られて爆発した。二人を索敵した

機体が人の姿から戦闘機の様なのに変形し二人に襲いかかった。先端に付いているマシンガンを連射、両翼に搭載されているミサイルを四つ同時に射出、白煙を上げて二人に迫る。それをロイドは四つとも両断し銃弾を弾いた。その隙にコレットがチャクラムを投げて翼を切り裂いて撃墜した。

はやて「何やあれ！？人やないのか！？」

シリウス「違うよ、機動兵器『スティンガー』。人型と戦闘機型に変形して戦うロボットさ」

その時此方に気づいた数機が迫って来た。その速さたるや並みの魔導士よりも速かった。

バルド「来るぞ！皆、迎撃するぞ！！」

一同「了解！！」

皆は散開する。バルドの後をフェイト、エリオ、キャロがついていき、カインの後をなのはがシリウスの後をはやて、ヴィータがガルド、セフィリアの後をスバル、ティアナ、シグナムがついていく。クラウド、リリス、ティファは敵艦隊の方に飛んで行った。

アル達は自身を巨大化させアル、ウルは地上に降り立ち、レイとレンは翼をはためかせてスティンガーの大群の中に飛び込んで行った。ウルは地上にいた戦車に突撃、その足で踏み潰す。アルも前方に衝撃波を放ち複数機を破壊した。

レンは自身に降り掛かる銃弾の雨を縫う様に飛びその強靭な足の爪で一機を捕まえて握り潰した。

レイも同じ様に回避して敵機の背後を取り口から火球を撃ち出す。

直撃して爆発炎上しガラクタになって落ちていった。

地上で戦っていたグランディオンの兵達はロイド達を見つけた。

兵1「見ろ!!剣聖だ、剣聖が来たぞ!!!」

兵2「全軍に伝えろ!剣聖達が来た、総員奮起せよ!!」

兵一同「「「おおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉ!!!」」」

地上で大気を震わせるような雄たけびが上がる。なのははそれを聞きながら前方でスティンガー達を斬り伏せ、魔力弾を飛ばし破壊するカインの後を必死に追っていた。右に動いたと思ったら下にさがったり直ぐさま上昇したりと視界の中を縦横無尽に動く驚異的な機動力を見せていた。

なのは「追い掛けるのが精いっぱいだなんて……なんて機動力なの!?」

そうこうしてる内に周囲にいたスティンガーは撃破されてカインは次の標的を探しそこに突撃して行った。

なのは「負けられ……ないの!!」

なのはも全力で後を追う。そこに一機のスティンガーが迫る。戦闘機型になって銃撃してくる。
それを回避して魔力弾を複数飛ばす。それを掻い潜る様にして避けてなのはに迫って来た。

なのは「え！？うそっ！！」

攻撃を避けられた事に驚いた。その隙に人型になって腰に差していたビームサーベルを抜き放ちなのはに振り下ろした。咄嗟にレイジングハートを『ブレードモード』に切り替えてそれを受け止める。
互いの武器を弾く、スティンガーはその反動を活かして回転切りを繰り出してきた。
その攻撃を体を屈める事でやり過ごす。そして、空振りして空いた胴にレイジングハートの魔力刃を
振り抜く。体が二つに分かれて落ちていき上空でそのまま爆発した。

なのは「何今の機動……ガジェット以上だ……」

自分達が戦った機械を思い出すがそれを上回る機動性をスティンガーは見せつけた。

油断したら一瞬で落とされる。これが、カイン達のいる戦場……。
なのははそう理解し気を引き締めてカインの後を追った。

カインはなのはがスティンガーを倒したのを見てホッとしていた。

カイン「良かった……なのはは無事か」

サイフォス［やはり、彼女の事が心配か？］

カイン「なっ！ち、違うぞ！！」

サイフォス［ククク、そう言う事にしておくか。友として影から応援させてもらおうか？］

カイン「アホ、俺はもう恋はしないさ。……もう、あの時の様な事を起こしたくないからな」

サイフォス［……］

カインの言葉に黙るサイフォス。その時、複数のスティンガーがカインを囲む。

カイン「さて、鉄屑共が。邪魔だ！壱の太刀、霧風！！」

その場で回転斬りをすると全方向に三日月状の剣閃が幾つも飛んでいく。それを避けきれず両断されて爆発し撃墜された。だが、一機だけ上手く避けてカインに迫る。しかし…

なのは「ディバインバスター！！」

脇から来た砲撃に飲み込まれて撃墜して行った。

カイン「いいアシストだ、なのは!!」

なのは「ふぅ～、カイン君速すぎるの!!」

頬を膨らませ子供っぽく見えたなのはを見てカインはフッと笑って直ぐに表情を引き締め前方を見据える。その先にはまだまだ沢山いた。

なのは「いっぱいいるね」

カイン「だな、なのはついてこいよ?」

なのは「今度こそついて行って見せるの!!」

意気込むなのはを見てカインは笑った後二人は隊群の中に突撃して行った。

銀と桃の閃光が駆け抜けていった。

戦場の兵士達を混乱させる存在がいた。それは勿論、なのは達の事

である。魔法を使うのは間違いなく管理局の者達である。
前回此方に攻め込んできた者達が剣聖達と共に闘っているのに兵達は戸惑いを隠せないでいた。

兵1「あれは、管理局って組織の人間じゃないか！何でここにいるんだ！？」

兵2「しかも、剣聖達と一緒にいる！これは如何いう事ですか、隊長！！」

近くにいた隊長に問いかける兵達。だが、隊長も同じく良く分からない。

隊長「知るか！！兎に角、剣聖達といるという事は味方の可能性もある。だが、何時でも撃墜できる様に警戒を怠るな！！それと、剣聖達からの教訓、深追いはするな、危険を感じたら逃げて隠れろ、隙が見えたら叩け、最後まで生きる事を諦めるな、この事を忘れるな！！」

兵一同「イエス、サー！！」

其々持ち場に戻り、戦場で戦っている者達にもこの事を連絡する。

敵艦内では戦場に現れたロイド達を見つけた。

賊１「剣聖共だ！今度こそ落としてやる！！」

賊２「やってやるぜ！！」

賊３「これさえあれば俺達に敗北はねぇぜ！！」

彼らの背後には巨大な影があった。

# 第十八話（後書き）

何でだろう。グランディオンの皆さんには早々に帰って頂く予定だったのに気付けばグランディオンに招待されているのに書いてた作者の方がびっくりしてます。
そして、書いててまたもや連係が取れていないＦＷ陣の描写が出来てしまった……
という訳でそこを削ったら余計に酷くなってしまった……ｏｒｚ

バルド「何やってんだよ」

まあ、ここから上手く軌道修正して何とかしようっと。

なのは「先行きが不安なの……」

カイン「同感だ……」

取り敢えず暫くはグランディオン編になる可能性があります。
今後ともこの小説を宜しくお願いします！！それと、ご意見ご感想、評価など宜しくお願いします。それでは今日は之にて…さよなら、さよならさよなら～

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第十九話（前書き）

残るテストも後僅か！！気合い入れて投稿！！

カイン「最近週一更新になってきたな？」

フッ、だがそれも後僅かだ！もう少しで長期間の休みに入るぞ！！
フフフフフフ……ハァ～ハッハッハッハッハッｈッゲフンゲフン
！！

ヴィータ「此処にアホがいる……」

見苦しい所をお見せしてすみません……。さて、今回は激しく（？）
戦闘開始です。

バルド「（？）を付けんなよ……」

だって自分でも基準が分かんないんだも～ん！！
まあ、そんなことは置いといて（置いとくなよ！？）本編をどうぞ
！！

# 第十九話

バルドに数機が迫る。それを流れる様にケルベロスを振るって一撃で破壊した。

バルド「火旋輪！！」

剣から黒い炎を放つ。それは円状に回転しながら飛んで行き二機を破壊した。

ミサイルが十数発迫るが炎弾を周囲に作り出してそれをぶつける事で相殺する。

今度は人型になってビームサーベルを振るってきたがサーベルごと両断した。

バルド「フェイト達の方は如何だ？」

ケルベロス「スティンガー三機に襲われてるみたいだな。まあ、問題はなさそうだがそれよりも上にいる戦艦の方が問題だと思うぜウヒャヒャヒャ！！」

上空に飛んでいる戦艦を見る。そこからはスティンガーが幾つも射出されているのが見えた。

その中に別の物が落ちているのを発見した。

ケルベロス［おいおい、何だありゃ？］

バルド「拙い！！ケルベロス、全軍に降下戦車隊が来たと伝えろ！今すぐに！！」

ケルベロス［了～解］

相棒の返答を聞きながらバルドは急いでフェイト達の下に急いだ。

バルドについて行ったフェイト達はスティンガー三機に攻撃を受けていた。

フェイト「フォトンランサー、ファイヤー！！」

魔力弾で仕掛けるも散開されて回避された。

その内二機がフェイトに迫り残りの一機はエリオ達に迫った。

フェイト「くっ！！」

弾幕で上手く動けないフェイトに向かってミサイルを四発放つ。
それに気づいたフェイトは急降下、その後をミサイルが追う。
急制動を掛けて直角に曲がり地面すれすれを飛ぶ、ミサイル達はその急な動きに反応できる訳も無くそのまま地面に激突して爆発した。
地面に着地したフェイトに二機のスティンガーがビームサーベルを振りかぶっていた。

フェイト「はあぁぁぁぁぁぁ！！」

ハーケンフォームのバルディッシュを振るい一機のサーベルを受け止め、弾きその後に来たもう一機にその勢いを利用して横に薙ぎ払った。
バルディッシュの刃が胴を一閃、その後すぐに弾いた一機に下から上に向かって斬り上げをし左右に両断した。フェイトはそこから離れると同時に両断されたスティンガーは爆発した。

それを確認したフェイトは空を見るとエリオとキャロも何とかスティンガーを破壊したようだ。

その事にホッとしてると近くを兵達が慌ただしく駆けていた。服装からしてグランディオンの兵だろう。

兵一「バルド殿より連絡！！降下戦車部隊出現！！地上にいる者は物陰に隠れ対艦シールドを展開しやり過ごせ！！」

兵二「急げ敵は待ってはくれないぞ！！」

兵三「上空で戦ってる兵に告ぐ！！降下戦車部隊を出来るだけ叩け！！」

それを聞いたフェイトは上空を見ると確かに何かが降りてくるのが見えた。よく目を凝らすと確かに戦車であった。パラシュートも着けずに重力に従って落ちてくるその砲身は、自分に向いていた。

フェイト「え……？」

バルド「フェイト！！」

フェイト「きゃっ！？」

間一髪、バルドがフェイトを抱き締めその場から飛ぶ。直後その場に砲弾が直撃、轟音が響いた。

バルドに抱き締められたまま地面を転がる。爆発音で少々耳が痛かった。瞑っていた目を開けると目の前にはバルドの顔が数センチの距離にあった。少しでも動けばキスできそうな距離に……

フェイト「バ、バルド／／／／／／／／／／／／／／／！？」

バルド「無事かフェイト！！」

フェイト「う、うん…／／／／／／／／／／」

それに答えた後自分の状態を見るとバルドに押し倒されている様な感じでいるのに気付きそれに抱き締められた時の感覚が甦り更に顔を赤くする。

バルド「なら良かった。……あの鉄屑共が！！」

ホッとした後直ぐに憤怒の表情を浮かべ立ち上がりケルベロスを抜き放つ。刀身に黒い炎が纏う。

バルド「燃え尽きろ！！魔王灼滅破！！」

横薙ぎにはらったケルベロスから黒い炎が広範囲に広がる様に飛び、上空から降って来る戦車達を飲み込み跡形も無く焼き尽くした。

キャロ「お父さん、フェイトさん大丈夫ですか！？」

エリオとキャロが降りてくる。そのすぐ後で上空をレイとレンが飛んでいき空にまだいる戦車に火球を放ち爆発させた。その近くで兵達も持っている銃からビームを放ち破壊して行った。だが、それでも全ては破壊できず幾つかが車体の下から炎を噴射しそれで勢いを

殺して地上に降り立った。

バルド「此処は危険だ。上空に行くz「バルド中将!?」ん?」

その声のする方を見ると数人の兵達がいてバルドを見て驚きすぐさま此方にやってきた。

兵1「やはり、中将でしたか。先ほどは助かりました。お陰で地上の兵達に被害はありませんでした」

バルド「いや、気にするな。先に気づけたから連絡しただけだ」

兵2「中将、そちらの者達は?鎧装を装備していない様ですが?まさか……」

バルド「ああ、そうだ。管理局の者だ」

そう言った瞬間その場にいた兵達が全員フェイト達に銃を向けた。
突然の事にフェイト達も動けなかった。

兵1「中将、離れてください!そいつ等は我々の領土を侵した侵略者の一員です!!」

バルド「まあ、待てお前等。こいつ等とあの時の奴らは似た様で違う」

兵2「如何いう事ですか？」

バルド「簡単に言えば、前回襲ってきた奴らはこいつ等の上層部、しかもその一部の暴走だ」

兵1「では、前回のは……」

バルド「ああ、局の極一部、一握りしか知らない。つまり彼女達は俺達が教え無ければ知らなかった」

バルドがそう言うとフェイト達に向けていた銃口を上げる。バルドの説明を聞いたからだろうそれでも警戒の色は見せているが……。

バルド「彼女達はこの戦場にいるのはお前等や国民を助ける為に関係ない戦場に飛び込んでくれたんだ」

兵2「で、ですが……」

バルド「この者達は、剣聖…大元帥が認めた部隊だ。異論は認めない」

兵一同「大元帥が！？……了解っ！！！」

大元帥と言われた瞬間、彼らは一瞬で態度を豹変フェイト達に敬礼をする。

バルド「さて、お前達に頼みたい事がある。今この戦場で飛んでいる魔導士は味方だ。それを全軍に伝えろ」

兵一同「サー、イエッサー！！」

それに敬礼して答えると兵達は戦場に散り散りに飛んでいった。

大元帥……ロイドの名を出しただけで彼らの態度が変わった事にフェイト達は如何に彼の事を兵達が信頼してるかが分かった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

兵１「報告します！！現在戦闘内にいる魔導士達は味方なり、全軍彼女等と共闘して敵を殲滅せよとバルド中将より連絡が来ました。なお、大元帥が認めた部隊なのでこれに異論は認めないとの事です！！」

指揮官「了解した！！全軍聞いたか！！彼女等は敵ではない！これより共闘して敵部隊を排除する！！
対空ビーム砲展開！！空戦部隊を援護しろ！！」

兵一同「イエス、サー！！」

ロイドが認めた部隊。それを聞いただけで彼等にとっては十分すぎる情報だった。先ほどまでの警戒は無く各々目の前の戦いに集中した。

彼らの脇に巨大なビーム砲を搭載した装甲車が現れる。その砲台は上空で飛びまわるスティンガーに照準を合わせた。

指揮官「狙いを定めろ、撃てーーー！！！」

合図と共に砲撃が空に飛んだ。

シグナム「はあっ！！」

目の前のスティンガーのビームサーベルを弾きがら空きの胴を一閃する。両断されて爆発する。

シグナム「レヴァンテイン、シュランゲフォーム！！」

レヴァンテイン「エクスプロージョン」

シグナム「はあぁぁぁぁ！！！」

連結刃に変形しそれを振るう。数機をそれで破壊する。だが、一機が上手く回避してシグナムの背後に回った。

シグナム「何っ！？」

持っていたマシンガンをシグナムに向ける。彼女は振り向いて撃墜させようとするが

シグナム（間に合わない！！）

ゆっくりと引き金を引く姿が見える。そして、銃弾が自分に襲いかかる前に目の前のスティンガーは下から来たビームに撃ち抜かれ破壊された。

地上を見るとビームが幾つも飛んでいき多くのスティンガーを正確に撃ち貫いていた。
先程の攻撃はあの車がしたのかと思う。

ガルド「如何やら、誰かがお前達六課を味方と言ってくれたみたいだ」

シグナム「そうなのか？」

ガルド「そうみたいだな。兵達の先程まであった困惑も今は感じられん。シグナム、背後は気にしなくてもいいみたいだな」

シグナム「なら、我も彼らに応えねばならんな！！」

自身の得物を強く掴みシグナムは敵陣に突っ込んだ。ガルドもやれやれと頭を掻きながらその後をついていった。

セフィリアはスバルとティアナを連れてスティンガーと戦っていた。

スバル「おりゃあぁぁぁ！！！」

拳を突きだすがそれをその起動を持って回避し逆にその突き出た腕を斬り落とそうとサーベルを振るう。

それを、マッハキャリバーで蹴り上げて弾き、顔面に思いっきり拳を叩きつけた。

その衝撃で頭部が吹っ飛び墜落して行った。その背後に三機のスティンガーがいたが……

ティアナ「クロスファイヤー、シュート！！」

ティアナが幾つもの魔力弾を同時に撃ち出す。それは的確にスティ

ンガー三機を貫き撃墜した。

スバル「ティア、凄〜い！！」

ティアナ「ボサッとしてるんじゃないわよ、バカスバル！！」

自分をほめる相棒を窘め前方から来るスティンガーに警戒する。
しかし、戦場では何にも前だけしか敵がいないという訳ではない。

クロスミラージュ［マスター、地上より此方に高速で接近する何かを確認、ミサイルです！］

ティアナ「うそっ！？」

下を見ると、確かに白煙を上げて接近してくるミサイルがあった。
その数、八発！

地上には先程降り立った戦車がいてそれは如何やら対空戦車だったようだ。

此の侭では直撃する。そう思ったが二人とミサイルの間にセフィリアが入る。

セフィリア「魔神剣・双蛟！！」

剣から衝撃波が二つ撃ち出され、それは蛇の様にくねりながら八発のミサイルを破壊した。

セフィリア「雷鳴よ刃となりて敵を貫け、サンダーブレード！！」

上空で雷で出来た剣ができ、それは落ちていき対空戦車に突き刺さり戦車は火花を散らした後爆発した。

セフィリア「二人とも、此処は戦場なんだから周囲の警戒も怠っちゃ駄目だよ？」

ティアナ「あ、はい。すみませんセフィリアさん」

そう話している内にスティンガー八機が戦闘機型に変形してマシンガンを撃ちながら此方に来る。三人は散開しこれを回避する。セフィリアは回避をした後すぐさま八機の編隊に突っ込み擦れ違いざまに横に一閃。二機が横に両断され爆発、セフィリアを標的にした残りの機体は人型に変形しマシンガンを連射、それを得意の神速の剣術で全て弾く。

セフィリア「幻魔衝烈破！！」

真空破がクロスする様に飛びそれで二機を破壊する。

セフィリアに意識を向けている内にティアナとスバルが攻撃態勢に入る。

ティアナ「ファントムブレイザー！！」

スバル「ディバイィィィン、バスターーー！！！」

二つの砲撃が放たれそれに気づいたスティンガーは回避行動をとるが二機が砲撃に飲み込まれ撃墜。
その間にセフィリアは呪文を唱える。彼女の足元に魔法陣が現れる。

セフィリア「風よ、荒れ狂い、敵を切り刻め！！エアブレイド！！」

風の塊が直線状に飛んでいく。それに飲み込まれ残った二機は原形を留めないほど切り刻まれバラバラになって地上に落ちていった。

敵編隊を撃破した事でホッとするティアナとスバル。その時、セフィリアに通信が来る。

通信兵『戦場にいる全兵士に通達。エース級の敵の反応をキャッチした、各員は警戒せよ！！』

スバル「セフィリアさん、敵のエースってことはその人を抑えれば……」

セフィリア「ええ、この戦いは勝ちです」

ティアナ「じゃあ、そいつを探せば…」

セフィリア「ですが……そう簡単には行きませんね」

彼女の視線の先にはまたもやスティンガーの編隊がいた。その数は先程よりも多い。

セフィリア「行くよ！！二人とも！！」

ス・ティ「「はい！！」」

三人は再び得物を構え敵の群れに飛び込んだ。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

先程の通信を聞いたシリウス達三人は敵の中に此方に高速で向かってくる四つの影を確認した。

（因みにはやてはリインとユニゾン中）

はやて「何か近づいてくるで？」

シリウス「もしかしたら、ビンゴかもね」

ヴィータ「あ？如何いう事だよ？」

その影は徐々に大きくなり、その全貌を現した。それは、周りにいるスティンガー達とは違い機械ではなく人であった。一人は男性で全身を緑色の装甲で覆い筒状のバレルの様なものを二つ背に付けており、左手にシールドを持っていた。一人は男性で青を基調とした装甲で肩に大きなバインダーと手には大きな槍の様なものを持っていた。もう一人は女性で全体が黒の装甲で覆われ左手にシールドを持っていて、最後の一人は男性で全身を紫と白の装甲で覆い、両手に大きなライフルを持って、背中にはバレルの様な筒を四つ付けていた。

？？？「へっ！見つけたぜ！あいつ等を落とせばいいだな！！」

？？？「お～まかせってね！」

？？？「沈めてやる！！」

？？？「では行こうか、慎ましくな！」

カオス「コードネーム、カオス行くぜ！！」

アビス「アビス、行くぜ！！」

ガイア「ガイア、行く！！」

エグザス「エグザス、出る！！」

四人は高エネルギービームライフル、連装砲、連装リニアガンをシリウス達に撃つ。

三人は散開して回避、シリウスにエグザスがヴィータとはやてにカオス、アビス、ガイアの三人が追いかけた。

はやて「何やあんたらは！！」

カオス「教えるかよ！！」

はやての問いかけを無視してカオスはビームライフルを連射、それをはやては回避するがその先に回り込んだガイアがいて両手に剣を持っていた。

ガイア「堕ちろおぉぉぉぉぉ！！！」

グリフォン2ビームブレイドをはやてに振り下ろす。

はやて「くっ！」

体を逸らしてこれを避けて距離を取る。そこにヴィータが入り、アイゼンをガイアに振るうがあっさりと避ける。その隙を埋める様にアビスが連装砲を撃つ。二人はこれを避ける。

ヴィータ「てめぇら、あの黒い機械の仲間か！！」

ヴィータがアイゼンを握り三人に突撃する。
三人はヴィータにビーム攻撃をするがそれを掻い潜りカオスにアイゼンを振り下ろした。
それを左手の盾で受け止め、腰に差していたビームサーベルを抜きヴィータに振るった。それを後方にバックする事で回避する。

距離が空いた事で出来た隙を三人が同時に射撃攻撃する。そこにヴィータの前にはやてが入りラウンドシールドを展開して防ぐ。

はやてとヴィータが三人の相手をしている時、シリウスはエグザスと激しくぶつかり合っていた。

エグザス「ほぉ～、アンタ大将格かい？中々いい動きをするじゃないか」

シリウス「お褒めの言葉、ありがとさん」

そう言った後シリウスは周囲に狐火を展開しエグザスに同時に放つ。
それを回避しながら両手に持ったリニアガンで撃ち落としていく。
次にエグザスはＭ５４アーチャー連装ミサイルを四発シリウスに放つ。当然シリウスはこれを狐火を形成して飛ばし、破壊する。

エグザス「でも、これは如何かな?行け、ガンバレル!!」

そう言うとエグザスの背中のバレルが外れそれぞれ独自の動きをしてシリウスに迫る。

シリウス「おおっと!?」

二つのバレルから二つの砲台が其々出てきてそこからビームが放たれる。
それを横に飛ぶ事で回避するがその先に一つが待機していて直ぐに撃ってきた。
後方にバックする事で回避、だがそこにももう一つが待機しておりシリウスは仕方なく防御魔法を展開しそれの攻撃を受け止めた。

シリウス「中々面倒な攻撃をするねぇ～」

エグザス「こう言うのをオールレンジ攻撃って言うのさ!!」

シリウス「ちっ！！」

ガンバレルを飛ばし、周囲を包囲する様に動かす。それを読んだシリウスは真上に飛翔その後をガンバレルが追跡する。そこで反転し此方に向かってくるバレルに狐火を撃つ。

だが、それを回避しシリウスに再びビームを放つ。それを避けてガンバレルを操っているエグザスにも狐火を飛ばすがそれはガンバレルで撃ち落とされる。そして、シリウスを囲むように再びガンバレルが並び同時にビームを放った。

回避が間に合わないと判断したシリウスは防御魔法を展開する。そのシリウスに攻撃が殺到、爆炎に包まれた。

エグザス「さ〜て、向こうの譲さん達にも悪いが落ちてもらおうかな」

そう言ってその場から飛び立ちはやてとヴィータが戦っている所に飛んで行った。

――――――――――――――――――――――――――――――――

ヴィータ「シュワルベフリーゲン！！」

周囲に４つの鉄球が現れそれを３人に放つ。しかし、それは３人の放った射撃攻撃で破壊される。３人は接近戦を得意とするヴィータを後回しにし遠距離型のはやてに狙いを定めた。

アビス「さっさと堕ちろよ！！」

はやて「くっ！！」

アビスが接近しビームランスを突き出す。それを右に体をそらすことで避ける。距離をとり魔法を唱えようとする。

はやて「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となｒ「やらせない！！」くう！！」

しかし、そこにガイアが突撃、高エネルギービームライフルを連射する。

それによりはやては詠唱を中断、回避行動をとる。

ヴィータ「このやろおぉぉぉぉ！！」

はやてとガイアの間にヴィータが割り込みアイゼンを振るう。それを回避してカオスとアビスと並ぶ。

カオス「一気に決めるぞ！！」

ガイア「沈めてやる！！」

アビス「お～まかせってね！！」

アビスとガイアが前にでる。

カオス「へっ、行けよ！！」

カオスが背に搭載されているポッドが射出される。不規則に動くそれとガイアが並び高速で動きながら同時にビームを放った。

ガイア「怖い奴、消えろおぉぉぉぉ！！！」

アビス「これでお～わりっ！！」

アビスも両肩のシールド裏面に内蔵された　３連装ビーム砲と胸部にあるカリドゥス複相ビーム砲から同時にビームを放った。

その弾幕は正に雨の様だった。

咄嗟に二人は防御魔法を展開する。その二人に砲撃が殺到、爆炎に包まれた。

煙が晴れるとそこにはバリアジャケットがボロボロになった二人がいた。
特にヴィータの怪我が酷く、咄嗟にはやてを守るために前に出てその多くをくらったためか額から出血していた。

ヴィータ「は、はやて…大丈夫か？」

はやて「なんとか大丈夫や…」

肩で息をする二人を静観するカオス等の所にエグザス戻ってきた。

エグザス「おやおや、こっちももう終わりか。俺が来なくてもよかったか？」

エグザスが来たのにシリウスの姿が無いのにはやては嫌な予感がした。まさか……

はやて「あんた…シリウス君は如何したんや！！」

エグザス「そんなの決まってるだろ?俺が撃墜させてもらったよ」

はやて「うそ……嘘や!!シリウス君が負けるなんて有り得へん!!」

シリウスははやてが知る中ではロイド達と同じくらいに強い筈である。

その男がこんなにあっさりと負けるなんて有り得ない!!

エグザス「と言ってもね~。実際、俺のガンバレルをくらったんだから無事じゃないと思うぞ?」

はやて「嘘や……そんなん……信じられへん…」

ヴィータ「はやて!!しっかりしろ!あいつがそんなに簡単に堕ちるかよ!!」

フラフラになり頭を抱えて呟くはやてを落ち着かせようと肩を揺するヴィータ。

彼女の眼は虚ろになっていた。

エグザス「さて、嬢さん達を撃つのは気が引けるが…悪く思わないでくれ」

そう言って背のガンバレルを射出。はやて達に飛ばす。
ヴィータはそれに気づいてはやての前に立って得物を構える。
遣らせはしない！！大事な家族を主を遣らせはしない！！そう思って強く柄を握る。

あと少しで射程圏内に入ろうかとしたその時…

エグザス「っ！！？」

エグザスの脳内に何かが走り咄嗟にガンバレルを戻す。
その瞬間、そこを右から左へ横切るように巨大な砲撃が走った。
その砲撃はなのはのスターライトブレイカーに匹敵する程の大きさでそれは、そこを駆け抜けそのままその先にいたスティンガー達を飲み込んだ。

エグザス「この感じはまさかっ！？」

気配を察知したエグザスの背を冷たい汗が流れた。有り得ない……と先ほど確かに彼を撃墜した筈なのに彼の目線の先には……

シリウス「いやはや、まあ随分と派手にやってくれちゃって……覚悟…出来てんだよね？」

はやてとヴィータの前に傷一つ無く仁王立ちして立っているシリウスがいた。

はやて「シリウス君？」

シリウス「俺がそんな簡単に負ける訳ないでしょ？敵の言うことを信じちゃうなんて酷いなぁ～」

そう言って振り向き笑いかける。

エグザス「おいおい。何で無事なんだろうね？さっきの攻撃は直撃だったはずなのに」

シリウス「何言ってんのお前？」

シリウスが無傷でいる事に首を傾げているエグザスにシリウスはそう言った。

シリウス「一言言っておくけど、お前、俺に、一度も攻撃してないじゃん」

エグザス「なにっ！？」

シリウス「見当違いな方向に撃ってさ、こいつ大丈夫？って思っちゃったよ。ククククク」

笑いながらそう言うシリウスにエグザスだけでなくその場にいたカオス、ガイア、アビス、はやて、ヴィータも驚いた。エグザスは確かにシリウスと戦っていた。それは、闘いながら視界の端で見えていた。だが、シリウスは一切攻撃をくらっていないと言う。これは如何いう事だと皆考えた。

そこにシリウスがたたみ掛けるように発言する。

シリウス「それに今も皆して何処を見てるの？」

一同「は？」

それに皆惚けた顔をするが、直ぐにはやては何故か気付いた。

はやて（目の前のシリウス君は本物じゃないっ！？）

目の前でニヤニヤ笑いながら仁王立ちしている彼は、微かに、本当に微かに普段感じてるシリウスの魔力量より少ない。それに、よく目を凝らして見ると彼の体の周囲に薄く魔力の幕が見えた。

それが意味するのは…目の前の彼は幻術で出来た偽物。

では、彼は何処に…と考えたが直ぐに答えは見つかった。最初彼はエグザスの攻撃を何処で止めたか……横切るように飛ばした砲撃、

つまりは右側、そして、そこから少し下の位置！！

シリウス「正解……」

そう言って目の前のシリウスははやてとヴィータにしか聞こえない程の小さな声で言いニヤッと笑う。
ヴィータには何が正解なのかサッパリ分からなかったが、はやての視線が下を向いているのに気付き自分も敵に悟られないように慎重にその方向を見ると、そこにはシリウスが目の前にいるシリウスと同じ体勢で立っていた。

シリウス「さて、はやて達に傷を付けた代償を払って貰わないとね。御代は……高く付くよ……」

はやて達が見ている本物のシリウスが赤色の魔法陣を出現させると目の前の幻術で出来たシリウスも同じ赤色の魔法陣を出現させた。
身の危険を感じたエグザス達はその場から急いで後退する。

シリウス「もう遅いよ、3倍返しだぜ！！」

右手をかざすとそこに魔力が集中、その膨大な量にはやて達は驚愕した。

先程放ったなのはの最大の砲撃に匹敵するものを再び撃とうとして

る。

発射準備が完了した途端、目の前のシリウスが霧の様に消える。
そこでエグザス達は初めて目の前にいたシリウスがダミーだというのに気付いた。

だが、時既に遅し。

シリウス「天狐赤煌砲っ！！」

手から膨大な魔力が放たれ４つの巨大な砲撃となって４人に飛んでいく。下から来る赤い砲撃に４人は気付き、咄嗟に防御の構えをとる。

４人「ぐあぁぁぁぁぁ（きゃあああああ）（うわあああぁぁぁぁ）！！！」

しかし、その防御すら飲み込んで砲撃は一つになって天高く昇って行った。
爆炎が辺りを覆い尽くす。

砲撃が止み、シリウスははやて達の下にのんびりとやって来た。

シリウス「いや～、皆いつ気付いてくれるんだろうってヤキモキし

てたよ」

はやて「シリウス君……今さっきのは幻術なんか？」

シリウス「御名答、幻術『夢幻』俺の得意な技さ～♪」

夢幻……攻撃対象や周囲に強い幻覚を与え混乱させるシリウスの得意技。
対象は人、植物更に機械にまで通用する。

はやて「……」

シリウス「あ、あれ？はやてさん？如何したんですか？」

突然黙ったはやてにシリウスはうろたえる。拳強く握ってるしそれになんか、肩もプルプル震えている。嫌な予感がすると思ったその瞬間、はやての目が光った。

はやて「仲間まで騙すな～～！！！」

シリウス「えぇ～！？ちょっと待って！敵を騙すには先ず味方からっｔ「問答無用やっ！！」おおうっ！！木製ハリセンッ！！？」

何処から取り出したのか木で出来たハリセンでシリウスの頭を引っ叩く。

戦場にスパ～ンッ！！という快音が響き渡った。……えっ？バキッ！じゃないのかって？そこはあれですよ……ギャグ補正というかあれな訳ですよ。

意外と痛かったのか（当たり前だと思う…）頭を押さえながらはやてを見る。

シリウス「痛たた…もう少し穏便に出来ないのかねえ？」

はやて「うちらを心配させたバツや！」

そう言って怒るはやての目尻にはホッとしからなのか薄っすらと涙が出ていた。

ヴィータ「てめぇ～、はやてを泣かしやがったな！！」

はやての涙を見逃さなかったヴィータがアイゼン片手にシリウスに詰め寄る。

シリウス「えっ！？ちょっとタンマ！それで殴られたら今度こそ昇天するからやめて！！？それにはやてをよく見てよ！嘘泣きだって分かるだろ！？」

ヴィータ「うるせえっ！問答無用だ！！」

シリウス「うおっ！あぶなっ！？」

アイゼンを振り回しながらシリウスを追いかける。シリウスも必死になって逃げる。
3人でじゃれ合っているが…

エグザス「あいたたた、結構派手なの撃ってくれちゃって」

爆炎の中からエグザス達が現れた事でやめる。4人とも相当なダメージを受けたらしくフラフラしていたがそれでも得物を離さずにはやて達を睨みつけていた。

シリウス「おろ？まだ動けるんだ。手加減しなけりゃ良かったかな？」

エグザス「参ったね～。あれでも手を抜いていたってのか……。こりゃあ俺達で如何こう出来る相手じゃないな」

そう呟いて唸るエグザス。その時、彼の通信機が鳴る。シリウス達を警戒しながらそれに出ると彼らの艦長が現れた。

艦長『お前達、戻れ。これ以上の戦闘は意味がない。よって我らは撤退する』

エグザス「おやおや、あんたが言うなんて珍しい。何か問題でもあったのか？」

艦長『ああそうだ。本部であれの起動の準備を確認した。それと剣聖共が現れた。お前達の目の前にいる男もその一人だ』

エグザス「やっぱりな。道理で手強いなと思ったよ」

艦長『よって、これよりガティー・ルーは撤退する。以上だ』

エグザス「了解！」

そう言い終えると通信を切り、カオス、アビス、ガイアの方を見る。

エグザス「という訳で俺達の戦闘は終わりだ。撤退するぞ」

カオス「何言ってやがんだ！俺達はまだやれるぞ！！」

エグザス「元気なのは嬉しいんだが、このまま戦ったら俺達、船に置いていかれるぞ？」

そう言われてカオスはチッ！と舌打ちしアビスもはやて達を睨み、ガイアはしょんぼりしていた。

エグザス「そんな訳であばよ！！」

そう言ってはやて達の前に何かを投げた。それは爆発し、辺りに眩い閃光を放った。
それに思わず目を瞑る。光が収まって目を開けるとエグザス達は遠く離れたところにいた戦艦に戻っており、その戦艦は彼らを収容した瞬間転移装置を作動させて戦線より離脱した。

シリウス「やれやれ、逃げられたか……」

大きく溜息を吐いて然程残念そうな顔もせずそう言った。

シリウス「さてっと……あ～もしもし、此方シリウス。たった今機動六課のメンバーと共に敵エース部隊の撃退に成功した。全軍に通達宜しく！」

通信兵『了解っ！！』

のんびりとした口調で報告するシリウス。それに通信兵は敬礼で応える。
それを確認した後通信を切った。

シリウス「後は……周りの雑魚達か」

そう呟いた後、彼は手を合わせ何かを唱える。すると、彼の周囲に次々と青い炎で形成された狐が現れた。その数、数百にも及ぶ。

シリウス「じゃあ、皆さん後宜しく～♪」

そう言って指をパチンと鳴らすと狐達は散り散り飛んで行き、スティンガーに突進、周りの兵士達と連携を取って次々とスティンガーの体を貫いていった。徐々に追い立てられてはやてとシリウスの前方に追い詰められる。

シリウス「一気に行くよはやて！！」

はやて「了解や！！リイン！微調整頼むで！！」

リイン《了解です～！！》

それに応え、彼女の足元に魔法陣が現れる。シリウスも続いて足元から魔法陣を展開詠唱に入った。

はやて「灰白(ほのしろ)き雪の王、銀の翼(つばさ)以(も)て、眼下の大地を白銀に染めよ。来(こ)よ！」

シリウス「受けよ！無慈悲なる白銀の抱擁！」

はやて「氷結の息吹（アーテム・デス・アイセス）！！」

シリウス「アブソリュート！！」

はやてが周辺に発生した４個の立方体から氷結効果を放つ広域凍結魔法を発動させシリウスも周囲の空間を凍結させる氷属性の上級魔法を発動させた。

二つの異なる魔法が発動し、前方に追い詰められていたスティンガー達の周りの空気が凍り始める。

は・シ「「複合奥義！！終焉の棺（エターナルコフィン）！！」」

前方に集められたスティンガーを巨大な、そして美しい雪の結晶の様な氷塊が包み込んだ。

は・シ「「ブレイクッ！！」」

それと同時に結晶に皹が入り中に閉じ込められたスティンガー諸共砕け散った。

空中にキラキラと氷の破片が太陽の光で反射する。それは、周囲の兵士達を魅了する美しい光だった。

シリウス「流石はやて。今のは素晴らしい出来だったね」

はやて「そう言うシリウス君も中々やったで」

そう言って互いの顔を見てニヤッと笑う。残る敵は、艦隊とそれを守る部隊のみだ。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

~敵艦内~

艦長「くそっ！何なんだあれは！？あれ程の力を持つ者が剣聖達以外にもいたというのか！！？」

彼らにはなのは達がこの世界に来た管理局の者だというのは知らない為、彼女達をグランディオンの新たな戦力かと勘違いしていた。

敵兵１「友軍二隻の反応ロスト恐らく白凰翼と蒼凰翼とあのＡＩにやられたかと…」

敵兵１「艦長これでは全滅させられてしまいます！如何しますか！

？」

艦長「仕方ない。少し早いがＭＡ（モビルアーマー）を起動させろ！！奴らを殺せ！！」

敵兵１「了解っ！！」

敬礼しその場を立ち去る兵を見た後、自身の爪を齧る。

艦長「くそっ！ガティー・ルーも勝手に撤退したしスティンガーも大きな被害が出た、これ以上は拙いか……だが、ここで引き下がる訳にはいかん！！」

そう決意し艦長も何処かに立ち去って行った。

敵艦三隻のハッチが開く。そこには巨大な機体がカタパルトに乗せられていた。

敵兵「「「システム確認……システムオールグリーン！バイオセンサーに異常なし！Ｉフィールドに異常なし！！ＭＡ（モビルアーマー）、エビル・ディーガ、発進！！」」」

それと同時にカタパルトが動き、エビル・ディーガ達を射出した。

目を光らせ自身の周囲にファンネルを展開しロイド達に突撃して行った。

―――――――――――――――――――――――――――――――

通信兵『警告！敵艦より三つの巨大なエネルギー反応を確認！！データ確認、該当する機体がありません。新型の可能性あり、総員警戒せよ！！』

そうカインの通信機に連絡が入った。それを聞いてか周囲の兵達も後退を始め迎撃準備を始めた。

なのは「カイン君、一体何が来るの……？」

カイン「さあな、唯…さっきの様にはいかないかもな」

カインの表情も引き締まっていた。そして、前方から何かの影が接近してきた。
近づくにつれてそれは徐々に大きくなりなのはとカインの前に巨大なその姿を見せた。

なのは「お、大きい！！？」

その巨大な機体になのはは驚愕した。体長は３０メートル程で背に大きな砲台を２門装備しその周囲に何か小さな物が目視で確認出来て３２個ほど飛び交っていた。
モチーフとしてはＳＤガンダムのオリジナル機体のエビル・ドーガに近い形で下が戦車の様になっておりキャタピラが付いている。（バグは搭載してませんよ）

ロイド「カイン、なのは！！」

コレット「二人とも大丈夫！？」

バルド「随分とデカイ機体だな」

フェイト「何これ！？大きい！！」

そこにロイドとコレット、バルド、フェイト、エリオ、キャロがやって来て二人に並ぶ。
エビル・ディーガは、モノアイを動かし、九人を捉えた。

エビル・ディーガ［ターゲット確認……排除開始］

カイン「来るぞっ！！」

敵軍の新型機がロイド達に襲いかかった。

一方此方はガルド、セフィリア、シグナム、ティアナ、スバルの方にも一機接近してきた。

シグナム「でかいっ！？」

セフィリア「敵の新型ですか……」

ガルド「さて、どんな攻撃をしてくるのやら……」

エビル・ディーガは背にある翼の様なものを展開する。するとそこから小型の小さな物が射出され周囲に配置した。それは一つ一つが意思を持つかのように小刻みに動いていた。

セフィリア「クラウドとティファと同じファンネル系ですか……」

ガルド「厄介だな」

そうガルドは呟いた後、何処かに連絡を入れた。

ガルド「此方、ガルド。今お前達は何処にいる？……なら今すぐに来い。少々面倒なのが現れた。……そうだ、敵の新型だ。こっちは、例の部隊と一緒に交戦中だ。今来れば見る事が出来るぞ？……そうか、分かった。早いとこ来てくれよ？」

何処かに確認を取り、通信を切る。
そして、パラディンランスを構えてエビル・ディーガに意識を向けた。

スバル「ガルドさん。今何処に連絡したんですか？」

ガルド「ちょっとな。それよりも此処からはお喋りは終わりだ。目の前の敵に集中しろ。
油断すると撃墜するぞ」

それに皆頷いて、得物を構える。

エビル・ディーガ［敵勢力を確認。……排除します］

機械音を響かせながらエビル・ディーガ戦闘態勢に入り、ガルド達に襲いかかった。

そして此方はシリウス達、彼らの前にもエビル・ディーガは現れた。

はやて「な、何てでかいんや！？」

ヴィータ「反則だろあの大きさ！！」

シリウス「うわ～、こりゃまた面倒臭そうなのが出てきたな」

3人それぞれ思った事を口にする。そこにクラウド、ティファ、リリスがやって来た。

シリウス「あれ、3人とも戦艦相手しないの？」

クラウド「この状況で向こうを相手などしてられん。向こうは兵達に任せた。それに、こいつ等の周りを飛んでるのは……」

ティファ「ファンネル……」

そう呟くティファ。エビル・ディーガの周囲を意思を持つかのように小刻みに動き此方の様子を窺っている様に見える。

クラウド「合計で３２個程か……？いや、もっと搭載されているな。何にしてもはやてやヴィータには少々分が悪い相手だ」

はやて「如何いう事や？」

シリウス「あの飛んでるちっこいのはね、オールレンジ攻撃…つまりあらゆる角度から攻撃してくる兵器なんだ。だから、はやてみたいな遠距離戦闘が得意な人やヴィータみたいに突撃が主体の人は相性が悪いんだよ」

ヴィータ「あたし達があんな機械に負けるかよ！アイゼンでぶっ潰してやるよ！！」

リリス「あははは♪勢いがあるのは良いことだね。ま、私がいればだいじょぶ、だいじょぶ！
それに、少ししたら増援も来てくれる筈だし、派手に暴れるとしますか！！」

ティアナ「敵は排除します！！」

皆得物を構えエビル・ディーガに対峙する。対するエビル・ディーガもファンネルを飛ばしシリウス達に襲いかかった。

## 第十九話（後書き）

はい！敵エースを撃退成功したと思ったら、更に新型機登場です！！

クラウド「ファンネル三十二個以上ってお前…」

フッ問題ない。

全ては予想通りだ……（（（（（（゜Д゜）））））ガクガクブルブル。

カイン「おい、滅茶苦茶震えてるぞ～」

ナ、ナナナナナナンノコトカナ？ナニヲイッテルノカワカラナイヨ？

ロイド「カタコトになってるぞ～」

ヴィータ「コイツブッ飛ばしていいか？」

と、取りあえず次回予告！！なのは達の前に現れた巨大ＭＡ（モビルアーマー）、果たして彼女達はどう切り抜けるのか！？

因みに次回辺りにグランディオンの元帥達を登場させる予定です！！

フェイト「どんな人達なの？」

大体は出来上がっていますがまあ、チートっぽいです。

カイン「またチートキャラが増えるのか？」

そこまで強いという訳ではないっすけどそれなりに…ね。さて、次回も読者の皆様楽しみに待っていてください！これからもこの小説を宜しくお願いします！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

## グランディオンの設定集（初期設定）（前書き）

今回はグランディオンの設定が大まかに出来上がったのでアップしておきます。

これからも設定が増えたり変化する可能性があるのでご注意ください。

# グランディオンの設定集（初期設定）

機装国家　グランディオン

『鎧装（フレーム）』と言う特殊な装備があるクラウド達が住む世界で、現在ロイド達が所属する大国である。今こそは、巨大な国家であるが前は弱小国家であった。現国王のウルフ・エドワードの前の国王は暴政を働いていたため我慢の限界を超えたウルフを中心としたレジスタンスが結成される。しかし、相手は現役の軍隊で此方は素人部隊。結果、敗北の色が濃かった。そこにロイド達が現れ詳細を語ると、協力してくれると言い、辛くも前王を捕らえて処刑することができた。

そして、新国王としてウルフは即位し国民から大きな支持を得る。そして、国を守るためにクラウドがロイド達に再度協力を仰ぎ軍隊を再結成する。そんな中聞き分けの利かない部隊、別名『不良品部隊』が街で暴れるがそれを、ロイドは一人で止め、彼らを諭し、結果、彼らはロイド専属部隊となる。その後、他国からまだ体勢が整っていないグランディオンを取り込もうと侵略が始まりそれが連鎖反応して全土に広まり巨大な戦争が起きる。何時まで経っても終わらない戦いを終わらせるために遂にウルフ達は民を守るため世界統合を決意する。そんな彼らの思想に賛同し多くの諸国が同盟を結び侵略を中心とした考えを持つ国を倒していった。

しかし、快進撃を続ける彼らの前に独裁国家レギオンが現れる。圧倒的な戦力と緻密な作戦で次々と敗戦する。そして、敵の作戦『天使撃墜（エンジェルダウン）作戦』に引っかかったロイド率いる部隊と多くの味方部隊がが包囲され絶体絶命に陥る。ロイドは部下達を守るため単身敵を惹

き付け部隊を脱出させるがロイド自身が凶弾に撃たれて海に落ちる。それを聞いたコレットは、怒りで暴走しレギオンの二個大隊をたった一人で全滅させ周囲の地形を焦土に変えた。人々はこの事件を後に『天災事件』と呼ぶ。海に落ちたロイドだが海底深く眠っていた、超古代ＡＩ兵器『ホワイトホエール』と管理システム『リリス』がロイドの力の余波に反応し目覚め、彼を救いだす。その後、ロイドは『ホワイトホエール』と共に帰還し、多くの人を驚かせる。そして、その『ホワイトホエール』を駆使し戦況を引っ繰り返す。そんな中クラウドの幼馴染のティファもレギオンから抜け出し加わったことで次々に勝利し最後は、皇帝『ブラット』を倒したことで戦争は終結を迎える。

現在は、複数の国に平等に国土が渡され互いに協力しながら平和を守っている。

また『ホワイトホエール』は、宇宙や次空間を渡れることから他の世界に渡り、そこの国と同盟を結ぶ時に役立っている。街並みは科学が進歩した感じ。軍隊はどこの国よりも多く質量兵器などを駆使した戦いをする。そのため、管理局に目をつけられ襲撃を受けるが圧倒的な戦力で返り討ちにする。街には強力なシールドがあるため、ちょっとやそっとの攻撃では傷一つ付かない。

国土は数十万？以上もあり複数の区域に分けられている。現在の人口は約１２億９７６５万人。現在、ヴァルハラ王国や複数の世界と同盟をしている。基本的には法を守れば何しても自由な国なので、自身の夢を叶えたいと考える人達がよく移住してくる。その中には犯罪者グループもいたりするがこの世界や同盟世界、それに関係のある世界に影響を与えない限り排除はしない。

その所為か、居心地が良くてそのまま永住して国のために行動を起こしてしまったりする者たちも数多くいる。そのため、国民達も意

外と親しく話したりしている。基本的にノリの良い人が多い。
しかし、法を破るようなことをすると抹殺されるとの噂もあるので、適当なことをすると消される可能性あり。現在、ならず者軍団の次元海賊団と交戦状態である。

## 鎧装（フレーム）

クラウド達の世界で使用されている特殊な装備。クラウドとティファが装備しているのは第一世代の鎧装で、現在は、技術の進歩により全身装甲ではなく胸当てや手甲など部分部分を守る様な装備に変わりそれだけでも第一世代と同様に全身を防御できる性能を誇る。
ロイド達は、こちらを使用していて戦闘を行った。
性能は、質量兵器からのダメージをかなり緩和させ、さらに、ビーム、魔力弾等も弱ければ打ち消すことが出来る（フェイズシフト装甲とラミネート装甲を合わせたものと考えてください）。
現在は、一般人が空を自由に飛べる様に鎧装を改良し空を飛ぶためだけの鎧装も現れ、一般人にも好評である。偶に会社に遅刻寸前の人が窓をブチ破って登場する等の光景が見られる。

超古代ＡＩ兵器　ホワイトホエール

全長　２０５０メートル

大昔に先人達が残した遺産で高い知能を持っている超巨大戦艦。
搭載されている武器は、８連式バリアントを１０門、１６連式ゴットフリートを６門、大型集束ビーム砲を１２門、対地対空ビーム砲、大型ガトリングガン、大型メガ粒子砲などを数百門搭載し、高火力でマルチロックによる一斉射撃はもはや回避不可と言えるだろう。
モチーフはシロナガスクジラの様な感じである。自身の周囲に光粒子バリアーを展開して敵の砲撃などの攻撃を完全防御できる。また、口の中にある主砲、『超重粒子消滅砲』は赤、青、緑の三色ビームが螺旋を描きながら飛んでいき広域の敵を空間ごと消し飛ばす。
他のホエールと合体できるＦＦ（ファイナルフォーメション）で巨大な人型に姿を変える。基本エネルギーは太陽光や微生物、窒素などらしく更に巨大な核融合炉を使っていることから無尽蔵にエネルギーを作り出せる。

超古代ＡＩ管理システム　リリス

粒子状の時

身長　　１４２？

体重　　２４ｋｇ

容姿　腰まで伸ばした薄い紫の髪の幼女

他は疑似人型時と同じ

疑似人型時

身長　１６９？

体重　４２ｋｇ

髪型　薄い紫色のポニーテール　長さは腰より少し長い

眼の色　薄い紫色

体型　凹凸がない（つまりペッタンコ）

ホワイトホエールを管理するＡＩ。日々進化する特殊なＡＩで姿は女性。粒子状になって姿を顕現させることが出来る。

現在は、疑似肉体人形に入ることで人と同じように生活できるのでこの二つの姿を使って日々を楽しく生活している。少々楽天家で戦況が不利でも気楽に「だいじょぶ、だいじょぶ！！」と言って本当に戦況を引っくり返すほどの高い知能を持つ。

演算能力が非常に高く、他国のコンピューターに侵入し情報を盗むことなどあっさりとやってのけたりひと月はかかる様な膨大な仕事も１時間で終わらせることが出来たりする。

また、他のコンピューターや機械を自身の制御下にすることができる『マスタープログラム』とハッキング攻撃又はウィルスを一切受け付けない『バスタープログラム』を持っており、この力が原因で先人にホワイトホエールごと海底深くに封印されていた。

しかし、ロイドの力の余波に反応し封印が一部破損。そこを突いて封印を解除し瀕死のロイドを救助する。それからは、彼のことを『ご主人様』と呼びコレットを『お嬢様』と呼んでいる。

好きなことは沢山の世界の歴史を学ぶことや人と触れ合うこと。特

にロイド達の冒険話がお気に入りで彼らが帰ると今までどんな冒険をしたか聞きたがる。嫌いなものはつまらない人。戦闘をすることができ、主に格闘とバレットアーツと言う特殊格闘戦闘と長距離からの範囲攻撃を得意とする。
コレットの格闘戦術の師範でもある。長距離攻撃に関しては自分専用の武器収納空間を持っており、そこから取り出して敵に反撃すらさせないほどの密度で攻撃する。狙撃の命中精度は９９．９９９％らしく、誰も外したところを見たことが無い。最近はコレットのドジっ娘が病ったのかよく転ぶ。意外と大食漢。

戦闘能力

魔導士ランク　ＳＳ＋

魔力ランク　ランク外↑ＡＩ故魔力は無い

陸戦ランク　ＳＳＳ＋

空戦ランク　ＳＳＳ＋

総合ランク　ＳＳ＋

疑似肉体人形

ＡＩなどが人と同じ生活を送れるように最近になって作られた物でこれに入ることで人と同じように感覚を得ることが出来る。タイプは様々ある。内部構造は人と何ら変わりないので骨折もするし痛みも感じる。稀に恋に落ち、ＡＩ×人の夫婦がいたりする。だがＡＩの出力などに耐えるために人の肉体よりも若干強化されているため大体は身体能力が非常に高くまた頑丈である。もし故障しても取り換えできるので問題はない。

ホワイトホエール・Ｊｒ

全長　１５２０メートル

ホワイトホエールを解析して出来たホエールで全部で４隻ある。搭載されている武器は、基本はホワイトホエールと同じだがサイズの問題で対空砲やビーム砲の数が少なく武器のサイズも小さい。この４隻がＦＦでそれぞれ、右腕、左腕、右足、左足となって合体し、人型になる。モチーフはザトウクジラの様な感じ。

最終形態　キングホエール　　ＦＦ（ファイナルフォーメション）

ホワイトホエール達がドッキングしたもので人型の姿である。その姿は見るだけで相手を戦意喪失させるほどの巨体で且つ圧倒的

な攻撃力を誇る。ホワイトホエールとホワイトホエール・Ｊｒの搭載されている武器が全て使用できるため合計数百門以上の対空、対地迎撃武器が撃てる。また、両腕からローエングリン、腹部からタンホイザー等ドッキングしただけのはずなのに搭載兵器が増える。さらに、強力なバリアーすら破壊出来るパンチ、マルチロックによる一斉射撃等どれもが高威力で掠めるだけでも対象に大ダメージを与える。
この姿になるのは非常時等でしかならないため、滅多にお目にかかれない。

バトラス（狂戦士）

ホワイトホエールに収納されていた小型戦艦（基本的構造はガンダム種Ｄのミーティアみたいな感じで）で鎧装（フレーム）とドッキングすることが出来る。
大型ビームサーベル（魔力刃）、ソードファンネル、小型ビームサーベル（魔力刃）、マルチロック可能のビーム砲（魔力砲）が搭載されており現在は、接近特化のロイド専用にされている。
サイズが大きいのにも拘らず対象者の機動力を上げる力がある。これで、ロイドは先の戦いで多くの敵と戦艦を打ち倒した。現在使用しているのは２代目、初代は先の大戦で大破した。

ガンナス（狂銃士）

同じくホワイトホエールに収納されていた小型戦艦（バトラスと同じく）で鎧装（フレーム）とドッキングすることが出来る。
改良が加えられビームサーベルの代わりに大型の戦輪、大型ビーム（魔力）砲、マルチロック可能の魔力弾ポッドとビーム砲（魔力砲）、装備者の周囲を守る又は攻撃出来るクルセイダー（シールドビット見たいな感じ）が搭載されており現在は、後方支援型のコレット専用にされている。
バトラスと組むことで力を最大限に発揮でき、それで多くの戦艦を沈めた。

デストロイヤー（破壊者）

リリス専用の小型戦艦でリリスとドッキングすることで驚異的な力を見せる。大型ビーム砲を四門、超長距離迎撃用連射式迫撃砲を四門、長距離誘導エネルギー型小型ミサイル、高性能迎撃ミサイル、クルセイダー、対近距離用迎撃兵器クラスター、サテライトバスターを搭載している完全後方支援型の機体である。小型戦艦の中で唯一固定砲台に変形することができ遠くから敵を滅多撃ちにする。サテライトバスターは滅多に使わない。
理由は、使用すると半径数キロが消し飛んでしまうからである。
ブラットとの戦いにおいてデストロイヤーを使ったリリスは敵四大隊と二十六隻の戦艦を四分で壊滅的な被害を与えている。現在使用しているのは二号機で初代は大昔に大破したらしい。

ミーティア（流星）

バトラス、ガンナスを基に作られた小型戦艦。（姿かたちは、ガンダム種Dのミーティアのまんま）現在、クラウド、ティファが使っている。ブラットとの最後の戦いの時に多くの戦果をあげた。

第一最前衛部隊『獅子』部隊長　ロイド・アーヴィング　（元は『不良品部隊』）

第二広範囲支援部隊『燕』部隊長　コレット・ブルーネル

第三前衛部隊『龍』部隊長　カイン・レオンハルト

第四最前衛部隊『鷲』部隊長　バルド

第五後衛守備部隊『虎』部隊長　ガルド・ドム・バロム

第六中衛部隊『隼』部隊長　セフィリア・ドム・バロム

第七中衛部隊『狐』部隊長　シリウス

十数名で構成された部隊で彼らの直属の部下達である。戦闘能力はグランディオンの何処の部隊よりも高い。現在は副隊長が部隊を仕

切るように言われている。訓練を怠らず日々精進している。

特殊部隊　スレイヤーズ

部隊長　クラウド・ケリオン

副隊長　ティファ・フューストン

確実に相手を葬るという意味で作られた特殊部隊。対象を確実に殲滅し、その進行方向にいるものは仲間だろうと排除することから仲間からもは『味方と思うな』と言われていた。
如何に相手が強敵でも自分の命を引き換えにしても打ち破ることを前提とした思想で数多くの敵部隊が恐れた部隊である。クラウドの父親とティファの父親も此処に所属していた。
現在は、その思想を廃止していてクラウドとティファを含めて一五人程度しかいなく部下は全員新人である。

円卓の騎士団

前王の時代にいた元帥たちを全て解雇し新たにロイド（コレットは補佐としてロイドと同席しています）を含めて８人（コレットを入

れて）で結成されたグランディオンの代表みたいなもので全員が元帥である。
現在は、ロイド達が抜けており事実上６人で成り立っている。其々何か一つに特化した者で歳も十代から六十代である。大元帥のロイドがこの騎士団のリーダーなのだが会議にはそれは関係なく皆、思ったことを遠慮なく言える。
現在、グランディオンの重鎮達の中の利益目的の思想を持った多くの者たちと対立中である。先の大戦で多くの戦果を上げた。因みに第四話でロイドと乱闘したと言う話で出て来たのは前王の時代の元帥達だ。

アリア・セレスタ　十二歳　女

身長　１２１？

体重　はわわ、秘密です～／／／／

髪の色　桃色でショートカットに2本のアホ毛

目の色　茶色

容姿　上の中（美少女に入る）体に凹凸が無い

超長距離狙撃特化

十二歳という最年少の桃髪の美少女元帥。両親が幼い彼女を捨てたらしく孤児院出身。引っ込み思案でいつもオロオロしている。

何時も自分を気に掛けてくれるウクルスに好意を持っている。そのことからシリウス等に『歳の差カップル』と言われからかわれる。
時々、核爆弾級の暴走発言をする。普段はアタフタするのが多いがウクルスの危機を感じると驚異的な戦闘能力を見せつける。先の大戦で敵に囲まれた彼を助けるため超長距離から狙撃しその全てを敵に命中させた。
使用装備はビームナイフ、対艦用大型バスターライフルを二丁、ビームガトリングガンを一丁、中距離戦用ビームピストルを二丁、超長距離対艦迫撃砲、同じく超長距離スナイパーライフル、シールド付きホルスタービット、中距離マイクロミサイルポッド、と遠距離武器が多い。
ウクルスとコンビを組むと驚異的な戦果を見せる。超長距離時の命中精度は九割程で、中距離時の命中精度は八割と正確な射撃が出来る。現在はリリスに指導してもらっている。
ロイド達をお兄さん、お姉ちゃんと呼ぶ。美少女ランキングで3回連続で一位を取っている。クラウドとティファと同じくＳＥＥＤの力を持っている。鎧装はガンダムＯＯのサバーニャに近い形で色は桃色を基調。

戦闘能力

近接戦ランク　Ｂ

中距離戦ランク　Ｓ＋

長距離戦ランク　ＳＳ＋

超長距離戦ランク　ＥＸ

陸戦ランク　Ｓ＋

空戦ランク　Ｓ＋

総合ランク　ＳＳ＋

ウクルス・ハイト　二十歳　男

身長　１７９？

体重　６３？

髪の色　黒髪のツンツン（禁書目録の某不幸少年の髪型に近い）

目の色　黒色

容姿　上の中　（イケメンさん）けど性格が残念

近接戦闘特化

アリアＬＯＶＥ～な二十歳の黒髪の元帥。所謂ロリｋゲフンゲフン……！！。何時もアリアの事を気にしている事から周囲から『歳の差カップル』と言われている。

「アリアの為なら例え火の中、水の中、死地の中っ！！」っと公然の前で叫んだことあり（当然彼女が隣にいた時です）。
実際、先の戦いで死地にいる彼女を助けるために単身乗り込んで敵勢力を壊滅させて彼女を救い出した経歴あり。純粋にアリアが好きらしい。アリアにセクハラ発言を言う時がある（その度に二ーアにファンネルで怒突かれる）。二ーアとは犬猿の仲。一人でも非常に戦闘能力が高く周囲からシェリドと同じく『鬼神』と呼ばれている。
アリアとコンビを組むと他を圧倒するコンビネーション（ロイドとコレット級のコンビネーション）を見せることから多くの兵達に羨望の眼差しを向けられている。
使用装備は対艦用大型多変形ビームサーベルを二本、高エネルギービームガトリング、グリフォンビームブレイド、ソードビット、ビームブーメランを二つ、左盾搭載パンツァーアイゼンと近接攻撃武器が多い。対艦用大型多変形ビームサーベルは普段は連結させてダブルセイバーの様にして扱う。前線で戦うため装甲は他の元帥より重装甲である。実はウクルスも孤児院出身。
最近はアリアと寝食を共にする回数が増えたらしい。↑これトップシークレット！！
意外と女性に人気らしいが本人は眼中に無い。鎧装はガンダム種運命のディスティニーガンダムに近い感じで色は赤を基調。鎧装にはミラージュコロイドシステムが搭載されておりそれを駆使して戦う。

戦闘能力

近接戦ランク　ＳＳ＋

中距離戦ランク　Ａ＋

長距離戦ランク　Ｂ

超長距離戦ランク　使用武器に無いためランク外

陸戦ランク　ＳＳ＋

空戦ランク　Ｓ＋

総合ランク　ＳＳ＋

モーゼス・ディアンディ　六十三歳　男

身長　１６８？

体重　４９？

髪の色　白色（白髪ですもう年故に…）

目の色　青色

容姿　中の中（昔はそれなりにイケていたらしい…）

防御特化

ガルドと双璧をなす防御を得意とするグランディオンの最年長元帥。

騎士団の中ではガルド共に落ち着いている。アリアとウクルスの二人の将来が気になる御爺ちゃん。

使用装備はビームライフル、サブマシンガンを二丁、ビームサーベル、マイクロミサイルポッド、長距離迫撃砲と装備が少ないがそれでもそれを上手く使いこなし敵を倒す。

超大型ビームシールドを持っておりそれで敵の攻撃を防ぐ、物理攻撃に関しては大型シールドビットを展開し安全に且つ被害を最小限に抑える戦いをする。最近腰が痛いらしいが、まだまだ現役だ！と豪快に笑っている。鎧装はトールギス？に近い形で色は青。勝つ戦いよりも負けない戦いを得意とする。

戦闘能力

近接戦ランク　ＡＡＡ＋

中距離戦ランク　ＡＡＡ＋

長距離戦ランク　ＡＡＡ＋

超長距離戦ランク　ランク外

陸戦ランク　ＡＡＡ＋

空戦ランク　Ｓ＋

総合ランク　Ｓ＋

ニーア・ファンネリア　二十一歳　女

身長　１５７？

体重　教える訳無いじゃない！！

髪の色　茶色

目の色　茶色

容姿　上の下

特殊射撃特化

ファンネル等の特殊射撃が得意な二十代の女性元帥。アリアの貞操が危ぶまれているので何時も苦労が絶えない人。元帥の中では常識人。アリアにとってはお姉さん的存在で良き理解者。
ウクルスにとっては煩いおばｓゲフンゲフン！！犬猿の中である。
使用装備はビームサーベル、左腕盾付きパイルバンカー、ビームライフル、フィンファンネル、シザーピッド、拡散ビーム砲、ブレードファンネルと自動攻撃系を多数操る。広範囲を支援でき空間認識力はグランディオン内ではトップクラスである。
鎧装に大型のバインダーの様なものを四つ付けており（クシャトリアみたいなの）そこからシザービットを射出する。鎧装はクシャトリアをスマートにした感じで色は水色。

戦闘能力

近接戦ランク　ＡＡ＋

中距離戦ランク　Ｓ＋

長距離戦ランク　ＳＳ＋

超長距離戦ランク　ＳＳ＋

陸戦ランク　ＡＡＡ＋

空戦ランク　Ｓ＋

総合ランク　ＳＳ＋

フレア・ノーティス　ＡＩ　女

身長　１６３？

体重　秘密ですよ～

髪の色　オレンジ色で背中にまで伸びるポニーテール

目の色　紫色

容姿　上の下

中距離射撃特化

柔らかな物腰のＡＩの女性元帥。元帥の中で唯一人のＡＩでリリスの様な優秀なＡＩになる為に日々研鑽を欠かさない努力家でもある。
中距離攻撃に関しては元帥内でトップクラスである。
使用装備はバスターソード、バスターライフル、ヴェスパー、マイクロミサイルポッド、ドラグーン・システムとプラネイトディフェンサー搭載シールドを装備してる事から防御にも優れている。
どの武器も一撃必殺の威力は無いが安定した戦闘が出来るオールラウンダーである。
アリアのもう一人の良き姉であり、同じ元帥のシェルドとは恋仲である。近々結婚するのでは？という噂が後を絶たない。鎧装はアカツキに近い形で色はオレンジ。

戦闘能力

近接戦ランク　ＡＡＡ＋

中距離戦ランク　ＳＳ＋

長距離戦ランク　Ｓ＋

超長距離戦ランク　ＳＳ＋

陸戦ランク　Ｓ＋

空戦ランク　ＳＳ＋

総合ランク　ＳＳ＋

シェリド・デュナミス　三十一歳　男

身長　１７１？

体重　　５８？

髪の色　紺色で右目を髪で隠している

目の色　翡翠色

容姿　中の上

近接戦闘特化

ウクルスと同じく近接戦闘が得意な男性でアリアにとってお兄さん的存在。

周囲が騒がしい中でもロイドと同じ様に寝る事が出来る強者（つわもの）。

その度に二ーアにファンネルぶつけられて叩き起こされている。だが、一度戦闘が始まるとその戦いは圧倒的で周囲から『鬼神』と言

われるほどである。
フレアとは4年前から交際を始めており、周囲に絶対領域（桃色空間）を形成してしまうほどである。意外とアリアとウクルスの交際を認めている人の一人である。
使用装備はフラガラッハ3ビームブレイド、アンカーランチャー、ビームライフルショーティーを2丁、連装リニアガン、対艦用大型ビームソードを2本とバランス良く武器を使う。
最近はフレアとの結婚を本格的に進めているらしい。鎧装はストライクノワールに近い形で色は黒。

戦闘能力

近接戦ランク　ＳＳ＋

中距離戦ランク　Ｓ＋

長距離戦ランク　ＡＡＡ＋

超長距離戦ランク　ランク外

陸戦ランク　ＳＳ＋

空戦ランク　Ｓ＋

総合ランク　ＳＳ＋

## グランディオンの設定集（初期設定）（後書き）

……最早何も言うまい。何だこのチート国家は！？書いた作者自身がビックリだよ！！

取り敢えず本編は今執筆中です。多分今夜あたりに早く仕上がれば出来ます。
え？そんなの期待しないし待ってないだって？ですよねー……ｏｒｚ

そうそう、今日から長期休暇です。やったね！！これでのんびりとストーリーを執筆出来ると思います。

え？そんな知らせ聞いてもなんも嬉しくない？……ですよね～……
ｏｒｚ

でわでは、今回はこの辺で。これからもこれを読んでくださる皆様、今後とも宜しくお願いします。

## 第二十話（前書き）

何とか更新できました。う、腕が……腕がアァァァ！！

カイン「今回は俺達とガルド側の戦闘だけなんだってな？」

はい、エビル・ディーガの卑怯臭い数のファンネルをどうぞお楽しみください。

バルド「それと、元帥達の登場だ。特にアリア辺りが随分と強そうなんだが？」

まあ、最年少ですからね…。今後もドンドン成長しますよ…きっと……。

ロイド「その内、トランザムでも付ける気か？」

う～ん、それも良いかもね？でも付けるとしてもまだ付けませんよ。なんたって付けちゃったら今後の戦いが面白くならなさそうですからね……。

シリウス「文才の低さが見えるね～」

うっさい！！放っといてくれ！！では、少し長くなりましたが本編をどうぞ！！

コレット「トランザム～♪」

ロイド「コレット！？」

# 第二十話

ロイド達がエビル・ディーガと戦闘を開始したのを地上にいた指揮官は離れた所で確認した。

兵1「如何いたしますか？」

指揮官「我々があの戦闘に介入して如何する？彼らの戦いの邪魔になるだけだ。我等は敵艦隊を撃退するのに集中しろ」

兵1「はっ！！」

兵士は敬礼してその場を去って行った。その後直ぐに指揮官の下に通信が入る。

指揮官「此方、第7防衛隊」

？？？『あ、あのあの、え～っと此方アリアでしゅ！はう～噛んじゃいました……／／／／』

？？？『ごはっ！？行き成りの噛み噛み攻撃！？俺の精神に一万のダメージ！！』

？？？『うっさい！それにアンタ！さり気無くアリアの肩に手を載せるな！！』

？？？『フォフォフォ、相も変わらず面白いのぉ～』

？？？『モーゼスさん、そんなこと言ってる場合ではないかと思うのですが？』

？？？『良いじゃないか。それにしても今日もフレアは綺麗だな』

フレア『まあ、シェリドったら／／／／／』

？？？『おっ！桃色世界展開か！？こっちも負けられねぇぞアリア！！』

アリア『へ、へうっ～／／／／／！？』

モーゼス『フォフォフォ、相も変わらず面白いのぉ～』

？？？『もうヤダこの人達……』

スクリーンに映る６人が何やら楽しげな会話をしていた。だが、指揮官はそれを窘める事は出来ない。それどころか彼らの姿を見た途端に驚愕の表情を浮かべた。

指揮官「こ、これは元帥の皆様!!な、何故この様な場所に!?」

?!?『なに、ロイド達が久しぶりに帰って来るって言うからな。皆で迎えに行こうかって思っていた時に戦闘が始まったし、迎えに行くついでに蹴散らそうと思ってね』

モーゼス『そう言う訳じゃ、後5分程でそちらに着く。状況を知らせてくれると助かるのぉ?』

指揮官「はっ!!」

それに敬礼で応えた後指揮官は状況を説明する。すると6人は少し考えた。

モーゼス『ふむ、となればそのバルドが言っておった機動六課なる者達と共に新型と戦闘しておるんじゃな?如何する?ウクルス?』

ウクルス『決まってるだろ?俺達も参加すんだよぉ!そいつ等の実力も気になるし、何より久しぶりに帰って来たあいつ等の力を見て見たいしな!!そうだろ、アリア?』

アリア『ひ、ひゃい!はう〜、又噛んじゃいました……』

ウクルス『ごふっ!!又も噛み噛み攻撃!?此処はヘヴンか!?』

?!?『うっさい!いい加減アリアから離れなさい、このロリコン!!』

ウクルス『いって！何しやがる、ニーア！！俺とアリアの逢瀬を邪魔すんな！！』

ニーア『逢瀬って……もう我慢の限界よ。今日こそアンタのその腐った精神、あたしが消してやるわっ！！』

ウクルス『おう掛かってこいや！！今日こそテメーを潰してやるぜ！！』

アリア『は、はわわ！？フ、二人とも喧嘩しないでくだしゃい！！』

モーゼス『という訳じゃから私らもそちらに行くではな』

彼の後ろで何かが物凄い勢いで飛び交っているのだがそんなのをお構いなしにのんびりとそう言って、通信を切った。

指揮官「全軍に通達！もう少しで元帥の方々が到着する。皆、奮起せよ！！」

兵一同「「「「「オオオオオオオォォォォォォォォォォ！！！！！」」」」」

天にまで響く様な雄たけびを兵達は上げスティンガーの群れに飛び込んで行き次々に薙ぎ払って行った。

一方通信を切った後、喧嘩してる二人の仲裁をし作戦をたてるモーゼス。

モーゼス「さて、敵の新型は全部で三機の様じゃ。となれば、二人一組で行くのが妥当だと思うのじゃが……如何かな？」

ウクルス「んじゃあ俺はアリアと一緒に行かせて貰うぜ。こいつとなら例え相手が三万の軍勢だろうが潰せる自信があるぜ！」

二ーア「ウクルス！！アンタ、戦闘中にアリアに変なことしないでしょうね？」

ウクルス「するかよ！！ま、終わった後に目一杯愛でる気はあるがな！！」

アリア「へ、へうっ／／／／／／！？」

二ーア「そういう発言止めなさい！！見なさい、アリアが真っ赤になったじゃない！！」

ウクルス「ぐはっ！？流石だアリア……俺のＬＰ（ライフポイント）を一撃で奪うとはその恥ずかしがる顔は正に核兵器を超えた何かだ！！」

二ーア「アンタ…一回脳外科行ったら？そのイカレタ脳味噌取り換

えた方が良いわよ？」

アリア「ニ、ニーアお姉ちゃんそんな事言わないでください。ウクルスさんはホントはすっごく優しいんだから…それに、私はウクルスさんと一緒にいると安心します／／／／／／」

顔を赤くしモジモジしながらそう言うアリアを見て他の二人は思った。

何だこの可愛い生物は！？グランディオンのロリ元帥は化け物か！？…と

モーゼス「では、ワシは二ーア殿と行こうか。どうせ、あの二人は絶対に離れんと思うしの……」

そう言ってフレアとシェリドの方を見ると、まだ桃色空間を形成していた。

二ーア「はぁ～、そうですね。ウクルス！！アリアに変なことしたら塵も残さず消しやるからね！！」

ウクルス「言ってろ！アリア行くぜ！！」

アリア「は、はい！！」

モーゼス「では、行こうかの。シェリド、フレア二人とも頼むぞ？」

フレア「了解です、モーゼスさん」

シェリド「任せてくれ、俺とフレアのコンビは最強さ」

そう受け答えしながら六人は戦場に入る。

そして周囲を確認すると遠くで何か大きな機体が空中で飛んでその周囲を飛び交う何かが見えた。

ウクルス「アリア、今の状況、分かるか？」

アリア「えっと……一組はロイドお兄さん、コレットお姉ちゃん、カインお兄さん、バルドお兄さんと後は知らない誰かが四人程います。それともう一つはガルドお兄さん、セフィリアお姉ちゃんと知らない三人が、最後は、シリウスお兄さん、クラウドお兄さん、ティファお姉ちゃん、リリスお姉ちゃんと知らない二人の編成です」

ウクルス「よし！なら俺とアリアはロイド達の所に行かせて貰うぜ！！」

モーゼス「では、我等はガルド殿の所に向かおうか」

シェリド「じゃあ、俺達はシリウス達の下に行こうか」

其々向かう場所を決め二人ずつに分かれて飛んで行った。

エビル・ディーガ「ファンネル射出……」

フェイト「くっ！！」

フェイトの周囲を複数のファンネルが飛び交いビームを放つ。
その攻撃を掻い潜りフォトンランサーをファンネルに向かって放つ。
だが、それをファンネルは不規則な動きをもって回避した。
そして背後に回り込んだ一つがビームを放つ。

フェイト「このっ！！」

振り向きバルディッシュを振るうがその刃は空を切った。

バルド「フェイト、右だ！！」

フェイト「っ！！」

その声を頼りに咄嗟に右にプロテクションを張る。その瞬間障壁にビームがぶつかる。
バチバチと火花を散らしそれを受け止めながらその先を見るとファンネルがいるのが見えた。

フェイト「ありがとう、バルド。気付かなかったよ」

バルド「気にするな」

そう言ってフッと笑う。そこにファンネルがビームを撃ちながら複数飛んでくる

ビームをケルベロスで弾き、炎弾を複数形成し飛ばす。その炎弾から逃れる様に散開する。
その後を炎弾は追いかけ幾つかに直撃、破壊する。

なのは「ディバインシューター、シュート！！」

幾つもの魔力弾をファンネルに飛ばす。それを不規則な動きで回避し追われていないファンネルが撃ち落とす。なのはに六機が迫り、ビームを放つ。

なのは「くぅ！！」

その猛攻を回避し距離を取ろうとするがそうはさせまいとなのはの後をビームを連射しながら追跡する。それを回避しつつ魔力弾を形成し飛ばすが全て撃ち落とされる。

なのは「レイジングハート！ブレードモード！！」

レイジングハート［イエス、マスター、ブレードモード！］

シューターモードからブレードモードに切り替える。

なのは「レイジングハート！カードリッジロード！！」

レイジングハート［イエス、マスター！カードリッジロード！！］

二つの薬莢が飛び出ると魔力刃が巨大化する。

振り向きざまに横に一閃する。突然の反撃にファンネルは回避できず三機がそれに斬り裂かれ爆発した。更に、彼女の周囲にいたファンネルもこれに巻き込まれる形で斬り裂かれ爆発した。

なのは「やあぁぁぁぁぁ！！」

だが、彼女を追っていた三機は無事でなのはの頭上に移動しそこからビームを雨の様に降らせた。

それに気づくのが遅れ防御魔法が間に合わない。思わず目を瞑るが……

カイン「壱の太刀、霞！！」

間一髪、カインが其処に割り込み雷切を横一閃、それだけでビームの雨は弾かれ霧散した。

なのは「カイン君！！」

カイン「ったく、無茶するななのは。大振りの一撃は隙が出来るからここぞって時に取っておけ」

なのは「にゃはは、でもカイン君はその隙をカバーしてくれるよね♪」

カイン「ったく、言ってくれるぜ」

背中合わせになる二人を囲むようにファンネルが展開する。

カイン「なのは！派手に行くぞ！！」

なのは「うん！！レイジングハート！」

レイジングハート［イエス、マスター］

ブレードモードからバスターモードに切り替わる。

なのは「行くよカイン君！！」

カイン「おうっ！ディバイィィィン…」

な・カ「「バスタアァァァァァ！！！」」

大出力の強力な砲撃が放たれる。其の侭二人は背中合わせのまま回転。周囲にいたファンネルを全て破壊した。

ロイド「はあっ！！」

目の前を飛ぶファンネルに剣を振り下ろす。それを回避し背後に回った一つがビームを放つ。

ロイド「ふっ！」

しかし、その攻撃を剣を傾けて逸らしその方向にいたファンネルにぶつけた。
ロイドはファンネルの束に突撃し剣を高速で振るい次々に破壊する。

ロイド「真空破斬っ！！」

剣から真空の刃を飛ばし数機を破壊する。それにより道が出来る。
そのまま、本体のエビル・ディーガに肉薄する。しかし、

エビル・ディーガ［迎撃開始……］

胸部にエネルギーが集束、そこから大型メガ粒子砲を放つ。咄嗟にそれを回避、しかし、折角開いた道を再びファンネル達が塞ぎそのままビームの雨を降らせる。

ロイド「ちっ！！」

天使の羽を羽ばたかせ踊るようにその雨を掻い潜り、または弾き周囲を飛び交うファンネルを一機ずつ斬り捨てる。

エリオ「キャロ！援護をお願い！！」

キャロ「うん！！」

エリオがファンネルに突撃をする。その間にキャロはエリオに補助魔法をかける。

キャロ「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を、ブーストアップ・アクセラレイション！！」

エリオの速度が急速に上がる。ファンネルはエリオの速度を計算しビームを放ったが、その前にエリオの速度が上がり放たれたビームは無人の空間を通り抜けた。ストラーダを構え飛んでくるビームを掻い潜り三機の前に現れる。

エリオ「うおおおぉぉぉぉぉぉ！！」

ストラーダを一気に振り抜く。その一振りで三機は斬り裂かれ爆発、すかさず、エリオは次の標的に狙いを定め魔力弾を飛ばす。それから逃れる様にファンネルは飛んだがその攻撃は囮だった。本命は……

キャロ「フリード！ブラストレイ！！」

フリードから放たれる炎だ。見事にそれに嵌り炎に焼かれ爆発した。ファンネルの多くは動きの鈍いキャロを狙い迫る。だが、そうはさせまいとエリオが其処に介入しファンネルと激しい攻防を繰り広げ

る。キャロもアルケミックチェーンでファンネルを一つずつ捕縛しそれをフリードが炎で焼き払う。

コレット「リュミエレイヤー！！」

そこにコレットが援護に入る。チャクラムを投げキャロの死角にいたファンネルを破壊する。
そのコレットにファンネルが殺到、多方向からビームを放つがその中にある安全地帯を瞬時に見つけそこを行き交う事で回避する。
コレットを援護するためにバルドとフェイト、ロイドが入り、魔力弾と斬撃を飛ばし破壊する。
そして、コレットは天高く舞い上がり、呪文を唱える。彼女の足元に巨大な魔法陣が現れた。

コレット「聖なる翼よ、此処に集えて、神の御心を示さん、真なる力、解放せよ！！エンジェルフェザー・フルバースト！！」

コレットの天使の翼が巨大化そして、その翼から七色の光が雨の様に降り注いだ。
その一つ一つが意思を持つかのように動き回るファンネルを追尾し撃ち抜いた。

エリオ「コレットさん…凄い……」

あまりの凄さになのは達は呆然とした。先程まで大量にあったファンネルが今の攻撃で飛んでいた殆どが撃ち落とされたのだ。

エビル・ディーガ［ファンネル減少……追加投入します］

だが、敵機はそんなことは些細な問題とでも言う様に再び翼からファンネルを大量に射出した。

フェイト「今がチャンス！！バルディッシュ！！」

バルディッシュ［イエス、サー！ロードカードリッジ！！］

なのは「レイジングハート！！」

レイジングハート［イエス、マスター！カードリッジロード！！］

二人のデバイスから薬莢が三つ飛び出す。

フェイト「トライデントスマッシャァァァァ！！！」

なのは「ディバイーン、バスタアァァァァ！！！」

バルディッシュから砲撃が三つに分かれなのはの巨大な砲撃が本体に迫る。

勝った……誰もが思ったが……

バチイィィィィィィッ！！！！

その砲撃はエビル・ディーガに届く前に何かの障壁に阻まれ霧散した。

フェイト「なっ！？」

なのは「うそっ！？」

ロイド「弾かれた！？」

バルド「まさか……？フィールドか！」

その隙を敵は逃さなかった。再びロイド達に大型メガ粒子砲を放つ。それをギリギリで回避するがその間にファンネルが移動しビームの雨を降らす。それを掻い潜るがキャロはフリードに乗っているため上手く回避できずフリードの翼をビームが掠めた。

フリード「きゅくる～！？」

キャロ「フリード！？」

エリオ「キャロ！！」

キャロとフリードの方に気を逸らしてしまったためエリオは自分の背後にファンネルが一つ現れたのに気付かなかった。

キャロ「エリオくん！！」

エリオ「はっ！」

その声で気づいて振り向く。目の前にはエネルギーを集束するファンネルがあった。それは、まるで世界がスローになったかの様にゆっくりと見えた。

バルド「エリオッ！！」

フェイト「駄目ぇぇぇぇ！！」

もう駄目だとエリオは覚悟を決めた。そして、ファンネルからビームが放たれようとしたその時、

バアァァンッ！！

一発の銃声が鳴り視界の端から一条の光線がエリオの目の前にいたファンネルを貫いた。

その一撃でファンネルが爆発する。

エリオ「うわぁっ！？」

爆風で吹き飛ばされるがバルドが背後に回ってエリオを受け止めた。
そこにフェイトとキャロも集まる。

バルド「無事か、エリオ！！」

フェイト「エリオ、怪我は無い！？」

エリオ「は、はい。大丈夫です。それより、今の攻撃は……？」

攻撃の方向を見ようとする、すると……

？？？「ゴットスラッシュタイフーン！！！」

一つの竜巻がジグザグに動きながら周囲のファンネルを破壊してやって来るではないか！！

その竜巻はバルド達の前で止まりその中からダブルセイバーを持った男性が現れた。

ウクルス「よっ！久しいな戦友！！」

バルド「ウクルス！？ってことは今のは……」

ウクルス「おう！アリアだぜ！！」

そこに丁度良くアリアもやって来る。ロイド達を見つけてペコリと行儀良く頭を下げる。

アリア「バルドお兄さん、ロイドお兄さん、コレットお姉ちゃん、カインお兄さんお久しぶりです」

ロイド「アリア、ウクルス！ナイスタイミングだぜ！」

コレット「久しぶりだね二人とも！ところで如何して此処に？」

ウクルス「おう、お前達が帰って来るって言うから迎えに来たんだよ。それに管理局の職員連れて来るってリリスから連絡が来たしな」

そう言って見慣れない格好をしたフェイト達を見る。

ウクルス「想像してた奴よりまともそうだな。ボウズ、アリアに感謝しなよ」

エリオ「あ、は、はい！先程は助けていただいてありがとうございます！！」

アリア「あ、いえいえ、間に合ってよかったでしゅっ！？…はう～
また噛んじゃった……／／／／／／／」

ウクルス「ごふっ！！」

なのは達「？（　。Д。）！！？」

突然吐血するウクルスになのは達はビックリする。

アリア「ひゃあっ！？ウ、ウクルスさん、大丈夫ですか！？」

ウクルス「さ、流石アリア、戦場でも俺を魅了するかね……」

血を吐きながら何やら幸せそうな顔をするウクルス。

カイン「お前、何時か出血多量で死ぬぞ？」

ウクルス「フッ、心配すんな。そんな事は絶対に無い！何故なら…
…アリアがいる限り俺は不死身だからだあぁぁぁぁぁ！！」

ロイド一同「もう駄目だこの人……早く何とかしないと……」

何やら諦めた様に溜息を突くロイド達とは～はっはっはっｈ…ゲフ

ンッゲフンッ！！と笑いすぎて咽るロリｋ…ウクルスとそんな彼を見てオロオロするアリアの図。

なのは達は思った、何なんだこの人達は……と取り合えずロイド達は気を取り直して得物を構えてＭＡに向き直った。

ロイド「紹介は後だ。今はあれを倒すのに集中しよう」

なのは一同「了解！！」

ウクルス「アリア、援護頼むぜ！！」

アリア「はい！！」

アリアの前に中距離戦用ビームピストルが２丁現れそれを手に取る。そして、彼女の腰に装備されていたシールド付きホルスタービットが周囲に展開する。

アリア「ターゲット全ロック！！……乱れ撃ちます！！！」

ピストルとビットを周囲に滅茶苦茶に撃ちまくる。だが光の雨はまるで予測していた様にファンネルの移動先に飛んでいき次々に破壊して行った。

ウクルス「おらおらっ！！道を開けやがれ！！」

再びダブルセイバーを頭上で回転させ竜巻となりファンネルに突っ込んでいく。

ウクルス「アリア！行くぞ！！」

アリア「はい！！」

何を思ったのかアリアはウクルスに銃口を向けた。

アリア「行きます！！ファイヤーーー！！」

そして、ウクルスに連射。ビームが竜巻となっているウクルスに迫る。

直撃かと思ったがそのビームは竜巻にぶつかった瞬間弾かれてそのままその先にいたファンネルを撃ち抜いた。

ウ・ア「「複合奥義、光弾之暴風（ビームストリーム）！！」」

回転し続けるウクルスにビームを撃ち続けるアリア。あらゆる方向に弾かれたビームは飛んでいく。

しかも、それは全てファンネルに命中している。

一歩間違えれば自身が大怪我をするというのに……何という信頼だ！となのは達は驚愕した。

回転が終わると十数機あったファンネルが殆ど撃ち落とされていた。

エビル・ディーガ「ファンネル減少……追加します」

再び翼からファンネルを射出する。そして、本体も攻撃に参加してきた。

大型メガ粒子砲を、肩に搭載されている砲台からは拡散ビームを撃ってくる。

それを皆回避しファンネルを撃ち落としながら突き進む。

アリアがビームピストルをエビル・ディーガに連射。しかし、またもや？フィールドで防がれた。

アリア「はわわ！？？フィールドを搭載してるんですか！？」

ウクルス「落ち着けアリア！お前にはビーム防御系のシールドに対抗する武器あるだろ？それを使え！」

アリア「そ、そうでした！！了解です！！」

ビームピストルをホルスターに収納し、距離を取って新たに二つ折りになっていた巨大な砲台を取り出した。

それは、自身の身長を軽く超えるほどの大きさで銃口も彼女がスッポリと入れる位に大きかった。

なのは「な、なにあれ!?」

カイン「アリアの武器、超長距離対艦迫撃砲だ」

アリア「皆さん!合図と共に突撃してください!敵の障壁を破壊します!!」

銃口を動かしスコープでエビル・ディーガを捉える。

アリア「ターゲットロックオン!!今です!!」

アリアが合図と共に引き金を引いた。

ゴッドーーンッ!!!

重低音が大気中に響き渡り離れていたなのは達にも空気が震動するのを感じた。

そして、その一発はエビル・ディーガの胸部に直撃する。

ウクルス「よっしゃぁぁ！！行くぜぇロイド！！」

ロイド「おう！！」

それと同時に二人が突撃。ウクルスはダブルセイバーを分離させそう剣に切り替える。

ロイド「行くぜ！！複合奥義！！」

ウクルス「衝破…」

ウ・ロ「「十文字っ！！」」

二人で十字を描く様に交差しエビル・ディーガを斬り裂いた。装甲が裂かれ内部の機械が剥き出しになる。

カイン「行くぞなのは！！」

なのは「うん！！」

バルド「俺達も行くぞ、フェイト！！」

フェイト「うん！！」

４人が空を駆ける。

なのは「レイジングハート！エクセリオンモード！！」

レイジングハート［イエス、マスター！！］

フェイト「バルディッシュ！ザンバーフォーム！！」

バルディッシュ［イエス、サー！］

なのは「ブラスターリミット1！！」

彼女の纏う魔力が上昇する。昔はこれだけでも彼女の体を蝕んだろう。

しかし、強化された今のレイジングハートの補助もあり彼女は痛みを感じなかった。

なのは（これなら……行ける！！）

ブラスタービットを5基配置、そこからも途轍もない魔力が迸る。

フェイト「雷光一閃！！プラズマザンバァァァ」

バルド「黒炎一閃！！ナイトメア……」

フェイトとバルドの魔力も同じく跳ね上がる。バルディッシュの魔力刃から電気が迸り、バルドの持つケルベロスから黒い炎が蛇の形をして溢れ出す。

なのは「行くよカイン君!!全力全開っ!!」

カイン「見せてやれお前の力を!!スタァァライトオォォォォ」

な・カ・フ・バ「「「「ブレイカーーーーー!!!!!」」」」

合計で9つの巨大な砲撃がエビル・ディーガに迫る。エビル・ディーガは最後の悪足掻きの様に大型メガ粒子砲を放つがそれはあっさりと飲み込まれファンネル共々その砲撃に包まれた。

エビル・ディーガ［?フィー…rドt…開……h……可……］

天高くその砲撃はエビル・ディーガを巻き込んだまま飛んでいきそして、

ドッガァァァァァンッ!!!!!!

雲を突き抜けた後、大爆発を起こした。爆炎が晴れるとそこにはエビル・ディーガの姿は無かった。

ウクルス「ひゅ～♪すっげ～」

ロイド「無茶苦茶だなあいつ等」

コレット「皆凄いね～♪」

アリア「はわわ、すごいです～」

ウクルスとアリアも彼女達を絶賛していた。

---

セフィリア「魔神剣・蛟！！」

衝撃波が蛇の様に動きファンネルを数機を破壊した。

シグナム「はあぁぁぁぁ！！！」

シグナムもシュランゲフォルムのレヴァンテインを振り回し周囲を飛び交うファンネルを破壊する。

スバル「リボルバーシュート！！」

リボルバーナックルから魔力弾を飛ばしファンネルを撃ち落とす。そのスバルの背後にファンネルが三機回り込む、そしてビームを連射してきた。

その攻撃をウィングロードを駆ける事で回避する。そして同じくウィングロードに乗っているティアナがそれを撃ち落とす。

スバル「うおりゃあぁぁぁ！！」

拳を振り下ろしファンネル一機を殴り飛ばし撃破、背後に回った一機にも回し蹴りをくらわせ破壊する。

ガルド「氷槍、アイシクルペイン！！」

ガルドが術を発動し上空から複数の氷塊が降り注ぐ。それに複数機が巻き込まれ破壊された。

シグナム「この小さいのが厄介だ。先程から倒しても倒してもキリが無い！」

ガルド「恐らく、あのデカブツの中に大量にあるのだろう」

ティアナ「ガルドさんのあの赤い槍…ゲイボルグでしたっけ？それで何とか出来ないですか？」

ガルド「出来ない事も無いが……敵を確実には破壊できないんだ」

シグナム「何故だ？前回全ての攻撃を命中させてたではないか」

ガルド「ゲイボルグの意味は、確実に相手の心臓を貫くという意味が込められている。だが、相手が機械ならどうだ？」

ティアナ「あ……」

シグナム「なるほど、そうか……」

それに二人は納得した様に頷いた。若干一人だけ頭から煙を出しているが……

スバル「え？え？如何いう事？」

セフィリア「えっとですね…ゲイボルグは相手が生物ならその力を最大限に発揮できるけど心臓を持たない敵……つまり機械とかが相手だと少し力のある唯の槍と何ら変わりないという事だよ」

セフィリアの説明するがスバルは何となく分かっていない様な感じである。

ガルド「兎に角、ゲイボルグでは効果は薄い。だから、別の物で対抗する」

ティアナ「別の物……ですか？」

ガルドは頷き、右手を前に出した。そして、何かを唱え始める。

ガルド「原子よ、我が前にかの武器を生み出し給え、その刃生み出されし理由を破棄し唯その性能のみ我は求める！！」

大地から土やありとあらゆる物が原子に戻りガルドの前に集まる。バチバチ！と電気が迸り彼の右手に一本の槍が生み出された。

ガルド「必中（ブリューナク）の光の神槍！！」

彼の持つ槍は白く輝き穂先は五つに分れた銛の様な形だった。一見普通の槍にも見えるがその槍からは神々しい程の魔力が溢れていた。

シグナム「その槍は……？」

ガルド「とある神が使用していた槍だ。そして、その意味は……」

槍が光った瞬間その槍は五つの光となった。

ガルド「それぞれが敵に必ず当たる……」

光が矢となり高速で飛びまわる。それが駆け抜ける度にファンネルは破壊されていく。

そして、エビル・ディーガに向かって飛んでいく。

だがその槍はＩフィールドに止められる。バチバチと火花を散らしながらそれでも槍は少しずつ進行しついに貫通し本体に直撃し爆発した。

シグナム「やったか？」

ガルド「……いや、まだの様だ」

ガルドの言うとおり煙の中から装甲が破壊され中の機械が見えて無傷とはいかないもののエビル・ディーガは空中に滞空していた。

ティアナ「うそっ！？あんな魔力の塊をくらってまだ動けるの！？」

セフィリア「恐らくさっき展開したＩフィールドのせいですね」

シグナム「何だそれは？」

ガルド「Ｉフィールド。ビーム系の射撃攻撃を無効化する特殊なバリアーだ。まさか魔力攻撃すら防げるとは予想だにしていなかった……」

ティアナ「それじゃあ、私達の攻撃は……」

セフィリア「多分…なのはクラスの砲撃じゃないと届かないかもしれない」

スバル「そ、そんな……」

残酷な現実に打ちのめされる。如何すれば……とシグナム達が考えている時…

？？？「じゃあさ…物理攻撃で行けばいいじゃない」

何処からか声が聞こえ何かが彼女達を追い越して飛んでいく。

それは小刻みに動きながら先端からビームを連射しファンネルを叩きながら進み、エビル・ディーガに接近すると全体をビームで覆い

高速回転、そのまま縦横無尽に動き装甲を切り裂いた。

セフィリア「今のは……ブレードファンネル！？」

ガルド「やっと来たか……」

ブレードファンネルが戻る方向を見ると、二人の男女がいて一人は六十はいっただろう初老の男でもう一人はまだ二十歳になったばかりだろう若い女性がいた。

ニーア「久しぶりね、ガルド、セフィリア」

モーゼス「二人とも壮健そうでなによりじゃ」

セフィリア「ニーア！それにモーゼスさん！？」

ガルド「お前達が来たのか」

ニーア「そうよ。アリアとウクルスはロイド達の方に、シェリドとフレアはシリウスの方に行ったわ」

そう言ってガルド達に並ぶ。ニーアとモーゼスはシグナム達を見た。

ニーア「この人達がアンタ達が認めたっていう人達ね？」

モーゼス「ふむ、確かに前回襲撃してきた者達と違って邪気は感じられんのぉ」

ティアナ「あなた方は一体…？」

モーゼス「おお、紹介が遅れてすまなんだ。ワシはモーゼス・ディアンディ。このグランディオンで元帥を任されておる一人じゃよ」

ニーア「あたしは、ニーア・ファンネリア。同じくこの国の元帥の一員よ」

いま目の前にいる二人がグランディオンを代表する元帥であることを知りシグナム達は驚愕した。

モーゼス「さて、ガルドは次の手を考えておるのじゃろ？それにワシらも混ぜてもらおうかの？」

ガルド「全く……お前には全てお見通しか……」

シグナム「何か手があるのか？」

ガルド「一応な。まずは、原子を集めて奴の真上にそれを集める。次にそれを岩に変換してセフィリアと力を合わせて思いっきり叩きつける。
これを実行すると俺は自分自身しか守れないからお前達のフォローに回ることが出来ない。
それでもいいか？」

シグナム「フッ、問題ない。我等はあの程度で落とされはしない！二人ともそうだろ？」

ティ・ス「「はい！！」」

モーゼス「では、我等は皆さんのサポートに回らせて貰おうかの？」

ニーア「アンタ達の力…見せてもらうわよ！！」

モーゼス「では、行こうかの」

元帥二人が先に先行、その行く手をファンネルが塞ぐが……

ニーア「アンタ等に用は無いのよ！！」

モーゼス「フォフォフォ、退いて貰おうかの？」

モーゼスがサブマシンガンを2丁取り出し其々を連射する。
ファンネルは回避できずに被弾し爆発する。
ニーアはフィンファンネルを展開し攻撃する。
視覚に入っていないのに背後に回ったファンネルすら撃ち落とした。

シグナム達もファンネルを破壊して進む。そこに本体から大型メガ粒子砲がシグナム達に向かって放たれるがその間にモーゼスが入り、何処から取り出したのか１０メートルはあるだろう大きなシールドを持ってシグナム達を砲撃から守った。

ファンネルが次々に射出されているせいで本体に中々近づけない。
だが、シグナム達はいきなり日差しが曇ったのでふと上空を見上げると、

シグナム「なっ！？」

上空には半径１００メートルはありそうな大きな岩……と言うより山が出来上がっていた。

ガルド「皆下がれ！！」

その言葉に弾かれるように全員でエビル・ディーガから離れた。

ガルド「行くぞ、セフィリア！！」

セフィリア「うん！！」

二人が手を翳し上に物を持ち上げる様な動作をすると上空の山も徐々に空高く上昇する。そして、二人は手を一気に振り下ろした。

セ・ガ「「複合奥義、マウンテンストライク！！」」

隕石の如く山がエビル・ディーガに落ちていく。
上空から何かが落ちてくるのに気付いたが時既に遅し…

ズトーーン！！！

重力に従って落ちてきた超重量の山はエビル・ディーガを頭から押し潰しそのまま地面に着弾。エビル・ディーガはその山の下敷きになった。

ガルド「ふぅ～、まっこんなもんだろう」

セフィリア「久々に使ったね♪」

額に浮かんだ汗を拭うガルドと嬉しそうに喜ぶセフィリア。

ニーア「ったく、相変わらず無茶苦茶な事するわね、あの二人…」

モーゼス「フォッフォッフォッ！久々に見たのぉ、前はもっと大きなのを作り出しとったが今回は短時間じゃから仕方ないの」

今の光景を何てこと無いとでも言うように語る二人を見て唖然とするシグナム達であった。

# 第二十話（後書き）

元帥達登場＆コレットの新技登場！＋ガルドのトンデモ技炸裂！！

アリア「コレットお姉ちゃんの技は凄いです」

ウクルス「俺も初めて見た時は驚いたぜ……」

さてコレットの使ったエンジェルフェザー・フルバーストですが、発動時に翼が巨大化しそこから無数の光線が高い追跡能力を持って敵を攻撃する上級天使術です。簡単にいえば超大型のビームがトンデモナイ位の追跡能力を持って敵に向かって飛んでいくと考えて頂ければいいと思います。

そして、ガルドの使うゲイボルグには弱点があり、機械みたいに心臓がない敵にはその力を十分に発揮できません。機械相手だと単に魔力が高い唯の槍……。

けど、核を持つ敵、つまり生命力を維持するものがある敵には効果を発揮するので実質機械以外には強い槍でしょう。

元帥達ですが……ヤバイですねえ、書いててビックリです。

アリア「はわわ……凄いでしゅっ！？はう～また噛んじゃった／／／／／／」

ウクルス「ヘブンッ！？」

アリア「ひゃあ！？ウ、ウクルスさん大丈夫ですか！？」

あ～あまた鼻血出しちゃった。まあ、ウクルスの事はアリアに任せるとして…次回は、はやてたちの戦いです。なるべく早く投稿できる様にこれからも頑張りますので、読者の皆様、どうぞよろしくお願いします！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

## 第二十一話（前書き）

気が付いたらあと少しでＰＶが８万に、ユニークが９千になりそうだった。
え……これはゆ、夢か？

（つД⊂）ゴシゴシ

（；。Д。）夢じゃない！！？

カイン「良かったじゃないか」

シリウス「おめっとさ～ん」

う、嬉しいです！！嬉しさのあまり涙の海に沈みそうです。
だが、俺はこの嬉しさをばねに更に頑張るぞ～！！皆、俺についてこ～い！！

クラウド「何か作者が両手をバタバタさせて飛んでいったぞ」

カイン「放っておけ、どうせすぐに落ちてくる」

シリウス「今回は俺達の出番だね？」

クラウド「そうみたいだな」

そして、今回ははやてがピンチにいぃぃぃ～～～～～！！！

カイン「あ、落ちてきた……それでは本編をどうぞ」

ふぎゃっ！！？

# 第二十一話

シリウス「ども～、現在、ファンネルに周囲を囲まれて袋叩きにされているシリウスで～す」

はやて「シリウス君、誰に言ってるんや？」

シリウス「え？今これを読んでくれている読者の皆さまにだけど？」

はやて「そういうメタ発言は止めた方がええと思うんやけど？」

ヴィータ「さっきから二人して何言ってるんだ？」

クラウド「んな事言ってないで少しは手伝え！！」

まあ、実際ファンネルに囲まれてはやてとヴィータを守るために周囲に障壁を張って攻撃を凌いでいて現状戦っているのはクラウド、ティファ、リリスのみである。

シリウス「いやだってさ～はやて達はもうさっきの戦闘で限界に近

いんだからさこうやって誰かが守らないといけないし～。という訳で頑張ってね～♪」

クラウド「薄情者が～～！！」

リリス「アハハハハハッ！！」

クラウド「そこっ！！笑うなっつーの！！」

ティファ「二人とも少しは真面目にやろうよ……」

シリウスに言い訳されて憤慨するクラウド、それを腹を抱えて笑うリリス、その二人をため息を吐きながら窘めるティファ。

今、ビームの嵐の中でする様な会話ではないはずだが余裕を見せる3人だった。

リリス「別にいいじゃん。こんなの大した事無いし！」

そう言って、背後にいたファンネル一機を見ないで持っていたビームライフルで破壊する。

続けて正面から三機向かってくるがビームライフルを消して、新たにダガーを三つ取り出し投擲して破壊する。更に、両手に一丁ずつマシンガンを持って連射し次々と破壊する。

クラウド「ツインバレット！！」

干将・莫邪を連射し幾つものファンネルを破壊する。そんな彼の死角に潜り込んで攻撃しようとしたファンネルが数機あったが全て見えていないにも拘らずクラウドは背中に銃を回して破壊した。

クラウド「その様に来る事なぞ既に予測済みだ！」

ティファ「マーレシスハント！！」

鏡花・水月を連結させて長距離から連射しエビル・ディーガを攻撃するティファだが、そのビーム攻撃はＩフィールドで阻まれる。

ティファ「Ｉフィールドの展開を確認。ビーム系で行くのは不利です」

クラウド「問題ない。Ｉフィールド発生装置さえ破壊すれば何とかなる」

リリス「じゃあ、私の出番だね！！」

そう言ってリリスはエビル・ディーガをジッと見る。

暫くそのままだったが「ビンゴ…」と呟いた後ニヤリと笑った。

リリス「Ｉフィールド発生装置は頭にあるっぽいね。いやはや、何んとも狙い易い場所に付けたもんだ」

そう言うと何処から取り出したのか大きなスナイパーライフルを取り出した。
その大きさは戦車の砲台よりも大きかった。

はやて「な、なんやあのおっきなのは！？」

シリウス「あれはね対艦用大型スナイパーライフル。中に装填されているのは勿論、榴弾だよ」

ヴィータ「あんなでかいの使えるのか！？」

シリウス「リリスならできるよ。それに…彼女今まで外した事ないよ」

シリウスが説明している間にリリスはスコープを覗き照準を合わせた。

リリス「♪～～♪～～～、狙い撃つぜ～！！」

鼻歌交じりにトリガーを引く。大音量の発射音が大気を震わせる。
そして、１秒に満たない内に弾丸は頭部に直撃、内部で大爆発を起

こした。
バランス感覚を奪われたせいかエビル・ディーガはフラフラと地上に着陸した。
頭部から煙を出しそこには大きな穴が開いていた。

リリス「命中～♪いや～ラクチン、ラクチン♪」

ティファ「待ってくださいリリス。…何か様子が変です」

地上に降りたエビル・ディーガは微かに震えていた。
そして、徐々に装甲に罅が入り始める。まるで虫が蛹から蝶になる様に背中から何かが出てきた。

???［オォォォアアアアアアアアア！！！！］

クラウド「何っ！？」

リリス「おりょりょ？機械の中から蝶……じゃなくて鯰（ナマズ）が出てきた？」

リリスの言うとおりそれは鯰（ナマズ）の様な風貌だった。だが、黒々と光沢する体表を持ち体長は約３０メートル以上ありそうでその体には巨木の様な足が八本生えており体の節々は赤く染まり背中には何か突起の様なのがあり６本の髭を生やし口は裂けている様に大きかった。

はやて「いやいや可笑しいやろ!?何であんなデカイ生き物があの機械の中におるんねん!!」

シリウス「的確なツッコミだね」

ヴィータ「にしても……何だあのテカテカ光る体は……気持悪ぃ」

そう、その鯰は体表が何かの粘膜で覆われているのか日の光を浴びてテカテカ光っていた。

シリウス「何か…よく台所にいる主婦の天敵のG―「それ以上言ったらアカ～ン!!」むぐぐっ!?」

危うく危険因子のGさんの名前を言うところだったシリウスをはやてが両手でシリウスの口を塞ぐ形で止める。

まあ、当然ですね。あの人類最大の敵にして無限増殖するあの黒い恐怖の大魔王、もといゴキｂ――「作者も止めや!!」グボァッ!!?

シリウス「むぐぐっ!むごぉ!!（はやて、そろそろ離して!い、息が……）」

はやて「ん?どないしたんやシリウス君?」

シリウス「ぐぼぁ……」

グッタリ……チ～～ン？

はやて「うおわぁぁぁぁ！！？シリウス君大丈夫か！？」

ヴィータ「アホだこの二人……」

息が出来ず窒息して昇天したシリウスとそれを見てビックリするはやてその二人を見て溜息を吐くヴィータ。

シェリド「おや？見たことも無い生き物がいるね」

フレア「その様ですね、シェリド」

クラウド「シェリドにフレア！？」

ティファ「久しぶりですね…」

久々に会った戦友に驚く二人。

シェリド「やあ、久しぶりだね二人とも、それにしてもティファ…その口調何とかならない？」

ティファ「これが私の戦闘時の性格なので諦めてください……」

戦闘時のティファの口調は何時もと違って淡々としている。相変わらずの事なのでシェリドも肩を竦めた。フレアは向こうで障壁を展開して知らない二人を守っているシリウスを見る。

フレア「向こうにいるのはシリウスと何方ですか？」

クラウド「機動六課、管理局の人間さ」

シェリド「へぇ～、あれが……ね」

フレア「それについては後にしましょう。問題は……」

目の前で此方を静観する謎の生命体を見る。

フレア「あれは何でしょうか？」

クラウド「分からない。だが、あれと同じ様な生き物は見た事がある」

シェリド「へぇ～、それは？」

クラウド「イノセント……前に話したプロヴィデンスの主戦力みた

いなものと似ている」

それについては前にロイド達から聞かされているのでそれを聞いた途端二人の表情も引き締まった。

リリス「ご主人様が言っていましたが私達にかかれば問題ありませんよ」

ティファ「いえ、油断すると遣られますよ」

其々得物を構えると謎の生き物、差し詰めイノセント?型と言えばいいだろうそれは雄たけびを上げると髭がピンッと張りそこから電撃が放たれた。

散開し回避。リリスは対戦車砲を空間から取り出しぶっ放す。直撃して爆炎に包まれるが煙の中から悠然と?型が現れた。

続けてクラウド、ティファ、シェリド、フレアが射撃武器で攻撃するが結果は同じだった。

リリス「おおっ!大型戦車すら一撃で沈めるこの砲撃をくらっても平気とは凄いですねぇ～」

シェリド「リリスの武器をくらって平気そうなんて予想以上に危険な奴なんだなイノセントとは……」

上空で警戒を深める5人に向かって口の中から何かが高速で撃ち出された。
咄嗟に左右に分れてそれを避けるが、それは真っ直ぐ飛んでいきその先にいたシリウス達に向かっていく。そして、シリウスの障壁とぶつかった瞬間障壁が割れた。

シリウス「へ?」

一瞬何が起こったのか分からなかった。
そのまま、その何かははやてに迫りくっ付いた。それはなんと、?型の舌だった。

はやて「なっ!?」

シリウス「はやて!!」

はやて「シ、シリウスk―」

シリウスがはやてに手を伸ばしはやてもそれを掴もうとした。
後少しで届きそうだった。しかし、その手は空を掴んだ。

猛スピードで舌が戻されはやては?型に飲み込まれた。

ヴィータ「はやてえぇぇぇぇぇぇ！！」

クラウド「そ、そんなまさか……」

ティファ「クラウド！！」

ティファの声に反応し咄嗟に背後を見るとそこには抜け殻となったはずの機体が動き出しておりその肩に搭載されていた砲台二つが此方に向いていた。そして、そこからビームが拡散状に放たれた。

クラウド「ちっ！！」

シェリド「うおっ！？拡散ビーム砲か！！」

全員慌てて回避行動をとる。そこに？型がヴィータに向かって電撃を放つ。

フレア「危ないっ！！」

その間にフレアが割り込み盾を構える。その盾から自身とヴィータを包む様に円盤状の物を飛ばし複数展開する。すると周囲に障壁が現れて電撃を防いだ。彼女の使う防御系装備『プラネイトディフェンサー』は如何なる射撃攻撃も無効化する特殊防御である。

ヴィータ「あのヤロー……はやてを……はやてを返しやがれぇぇぇ！！」

フレア「駄目です！！」

突撃しようとするヴィータをフレアが後ろから羽交い締めにして止める。

ヴィータ「離しやがれ！！あいつの…あいつの中にはやてがいるんだ！！」

フレア「駄目です！！貴方まであれに突撃したら食べられてしまいます！」

シリウス「フレア、ヴィータをそのまま抑えていてくれ」

フレア「シリウス…貴方、まさか……！！」

シリウス「ああ、俺が行く…」

何時ものふざけた表情は消えており、その顔には怒りが浮かんでいる。

歯を食いしばり手を強く握りしめそこから血が滴り落ちた。

シリウス「はやてが食われたのは俺のせいだ。だから、俺が行く」

ヴィータ「だったら、あたしも連れて行け！！」

シリウス「ヴィータは待っていてくれ。はやては必ず俺が連れて帰るから」

そう言って振り向く。その顔は普段の笑顔の表情に戻っていた。

ヴィータ「……本当だな」

シリウス「ああ、もし……連れて戻ってこれなかったら」

そう言って目を閉じた後一呼吸を吐いた後キッと鋭い目線になった。

シリウス「俺もあの中で死んでやるよ……」

ヴィータ「……絶対に連れて帰ってこい。絶対にだ……それ以外は認めねぇからな」

シリウス「ああ、任せてくれ」

そう返答し足裏に溜めた魔力を爆発させ一気に突撃する。
自分に迫って来るシリウスに?型は雷撃を連続で放つ。
それを避けて地上擦れ擦れ、超低空飛行をして真っ直ぐに突き進む。

?型「オオォォォアアァァァ！！！」

一鳴きした後、6本の髭にエネルギーを集束、同時に放った。
巨大な雷撃がシリウスに迫る。それを回避行動すら起こさず真っ直ぐ突っ込んだ。

シリウス「うおりゃあぁぁぁぁぁ！！！」

直撃する寸前両手を突きだし受け止める形で雷撃にぶつかった。
その雷撃に指を突っ込み扉を抉じ開ける様に開いていく、するとそれに従う様に雷撃も左右に分かれ始めた。

シリウス「ふんっ！！」

完全に開ききる。雷撃は二つに分れて別々に地面に着弾した。
それに見向きもせずシリウスは再び突撃、?型はそんなシリウスに先程の舌を飛ばした。

シリウス「うおおおおぉぉぉぉぉぉ！！！」

それを紙一重で回避しそのままシリウスは体内に飛び込んで行った。

クラウド「頼むぞ、シリウス。リリス、シェリドはあの抜け殻を、俺とティファはあの?型を抑える。フレアはそのままヴィータの守護に回ってくれ」

ヴィータ「クラウド!!あたしも戦う!!」

アイゼンを強く持ち?型と抜け殻となった機体を睨む。
その瞳の奥では激しく炎が燃えている様に見えた。

クラウド「……分かった。フレア、ヴィータの支援を頼む。ヴィータ、まず最初にあの抜け殻の機体を破壊してくれ。そうすれば脱出した二人の安全を確保できる」

ヴィータ「分かった……」

リリス「じゃあ、行こうか!!」

ヴィータ「ああ!!ぶっ潰してやるよ鉄屑が!!」

クラウド「ティファ、俺達も行くぞ!!」

ティファ「任務了解……」

それぞれ散開し標的との戦闘を開始した。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

はやて「ん……」

気を失っていたはやては目を覚まし起き上がる。
フラフラする脳を動かして辺りを見回す。
周囲は何かの粘液で覆われた不気味な肉壁で囲まれており自分が倒れていた場所を囲むように謎の液体の海が広がっていた。

はやて「此処……何処や？」

リイン《はやてちゃん！大丈夫ですか！？》
はやて《リイン、此処何処なんや？》
リイン《よく分からないですけど、多分、あの生き物の胃だと思うです～》

確かに見た感じ胃みたいな感じがする。その時はやての頭上に液体がポトリと落ちた。
そして、ジュ～っという音が聞こえたため慌ててそこから飛びのいて帽子を確認すると液体が落ちた場所の部分が煙を上げて溶けてい

た。

はやて（これって胃液かいな！？）

もしかすると足元も危険なのではと思い飛行魔法で浮遊する。
幸いにも少しついた程度だったので直ぐに治まったが、此処にこれ以上いたら溶かされてしまうと判断し脱出しようという決断に至った。

はやて（とはいうても……どっちに行けばええんやろ？）

道は二つしかない。一つは口から出られる道、もう一つは……想像しただけで怖気が立った。そこからだけは絶対に出たくない！！

取り敢えず周囲を確認するべきだと判断して行動を移そうとしたその時……

――ヒュウ……――

一瞬だけ風が吹いた様な気がした。

はやて（なんや？今の……風？いや、こんな壁に囲まれとる場所に風なんて起きるはずがあらへん）

壁際に（触れない程度離れて）寄り警戒を強めて辺りを見回す。
視界には暗い空間しか見えない。だが、何かがこの住めない様な空間にもう一人、いやもう一体いるのは間違いなかった。

はやて《リイン、周囲に生体反応があるか確認してや》

リイン《了解です～》

暫しの沈黙、その沈黙が自身の精神を徐々に擦り減らしていく。
浅い呼吸を繰り返し辺りを頻りに見回す。汗が頬を伝った。

リイン《はやてちゃん！！この空間内にもう一体何かがいます！！場所は……っ！？上です！！》

念話で聞こえた瞬間はやてはそこから飛び退いた。すると先程までいた場所に何かが落ちてきた落ちた衝撃で胃液が周囲に飛び散る。
それを回避して何かが落ちた場所を確認するとそこには何もいなかった。

はやて「いない！？」

そこに、風切り音が聞こえた。すぐさま後ろに下がる。何かがバリ

アジャケットを掠めた。
だが、それだけでその部分だけ…腹部のバリアジャケットがパックリと裂けた。

はやて「なっ！！」

その鋭さに恐怖した。この見えない空間でしかもまだ敵の正体が掴めていない状況で自身を守る鎧ともいえる存在があっさりと裂かれたのだ。その恐怖心は想像以上だろう。

徐々にだが目も暗闇に慣れてきて段々と周囲の状況が分かってきた。
そして、辺りを見回し襲撃者を探す。

それはあっさりと見つかった。

はやて「なんや……あれ…？」

その姿は奇怪な姿だった。頭部が花の蕾の様な形でそこから直接細い一本足が5本生えている不気味な形をしていた。

？？？［ギチギチギチ……］

足の関節を動かし上下に揺れる度に不気味な音が鳴る。
この生物は『ブラッディフラワー』、体長は5メートルで?型の体内に寄生し?型が取り込んだ獲物を少々食し生きている。自分の身を守ってもらっている代わりに?型が生きたまま取り込んだ獲物を仕留め、養分を取り込み易くする為に溶かすのを手伝い更に体内の不純物を自身に取り込んで浄化し共存している生き物である。
また、無性生殖で増える為この数が増える事に比例して?型の食欲も増える。

そのブラッディフラワーは仕留め損ねた事を悔しがる様に啼いた後再び姿を消した。

はやて（速いっ!?）

この狭い空間内で敵を確実に仕留める為には圧倒的な速さと一撃で仕留める強靭なまでの爪が必要である。故にブラッディフラワーは独自に進化しこの姿となった。胃内を縦横無尽に飛び交いはやての死角を探す。ハッキリ言ってこの戦いは、はやてにとって非常に不利である。長距離からの攻撃を得意とするはやてにとって逃げ場の無く、高速で動く敵しかもその一撃は必殺級でくらえば死ぬかも知れない。

はやて「くっ!!」

足を広げて全身を使って拘束し仕留めようとブラッディフラワーがはやてに仕掛ける。咄嗟に避けるがその時あの生き物の口が足が集

まる中央部分にあり円状に牙が幾つも並んでその口からは絶えず唾液が垂れているのが見えた。

はやて「魔法を使いたいのに、速すぎて、唱える時間ができへん！！」

右、左、上とまるで飛び、滑る様に動いてはやてを翻弄するブラッディフラワー。

そして空中から地上に降りる様に誘導されてはやては地上に再び足を着けた。

その時視線の端に何かの動物の死体……というより骨が落ちているのに気づいた。

自分ももしかしたらあれの仲間入りになるのか、と考えただけで鳥肌が立った。

その一瞬の隙を突いて再び飛び掛かる。慌てて飛行魔法を発動し飛び去ろうとしたが一瞬の遅れで敵の爪の一本が羽を斬り裂いた。

はやて「しまっ――――！！」

その所為で十分な高度を得る前にバランスを崩し背後にあった何かの骨に足を引っ掛け仰向けに転んだ。その隙を逃すはずも無くブラッディフラワーは天井の肉の壁を蹴りそのままはやての上に覆いかぶさった。２本の足がそれぞれ器用に両腕のバリアジャケットの部分のみ突き刺さり、残りの足が羽を貫き拘束する。

はやて「くっ、離せや！！」

幾ら力を込めても体自体が拘束されているため必要以上に力がだせない。
そこに徐々にブラッディフラワーの大きな口が迫る。その口の端から唾液が落ちてはやての胸元に掛かった。するとジュ～っと音をたててバリアジャケットがそこだけ溶けだし始めたではないか。

はやて「なっ！！嘘やろ！！？」

この生き物もバリアジャケットを溶かす程の酸性の液体を出すのかと驚きの表情を浮かべるはやて。
その間にも徐々にそれは近づいてきてバリアジャケットの所々を溶かしていく。

リイン「はやてちゃんから離れろです～！！」

その時、リインがユニゾンアウトしブラッディフラワーに攻撃をしようとするが…

ブラッディフラワー［ギッギッギッ！！］

リイン「きゃあっ！？」

それは叶わずブラッディフラワーの足の一撃をくらい吹き飛ばされて壁に叩きつけられた。
そのままリインは気を失い落ちていった。

はやて「リインッ！！」

幸いにもその場所は酸の海ではなかったが何時そこも海の中に沈むか分からない。

邪魔者を排除したので再び大きな口を近づけて来たブラッディフラワー。
その奥の暗い世界が視界に広がっていく。

もう駄目だ、そう思った瞬間、脳内に色々な情景が浮かんだ。親友、家族、職場の仲間達、そして…最後に浮かんだのがシリウスだった。

彼は何時も自分の隣にいた。そして、何時も馬鹿騒ぎし怒られるのに懲りない。でも、やる事はしっかりとやってくれて、気付いた時には自分の仕事の分を引き受けてくれたりした。

何時もふざけているのに時折見せてくれる優しさがはやてにとって何よりもうれしかった。自分の事を罵倒する奴がいても彼はそれに向きあい訂正させた。

はやて「助…けて……」

彼ならこんな絶望的な状況になっても助けに来てくれんじゃないだろうか？

はやて「助けて……」

彼が自分の事を如何思っていてくれているのか分からない。…けど、そんな彼に助けに来てほしい。
親友や仲間達以外の人間に恐れられて遠ざけられた自分の手を握ってくれた。

はやて「助けて……！！」

如何か孤独な自分を助けてほしい！！その優しさで自分を包んで欲しい！！

はやて「助けて、シリウス君っ！！！」

辺りに大きな声が響き渡った、そして、後少しでブラッディフラワーの口が届きそうになったその時、、、

シリウス「流星ブ〇ボー脚っ！！」

何処かのブラボーさんの真似をして猛スピードで飛んで来たシリウスがブラッディフラワーを思いっきり蹴飛ばしその反動を利用して気絶しているリインの所に着地し拾い上げてはやての隣に飛びゆっくりと着地する。

ブラッディフラワーは何度か跳ねたが難なく着地し滑るように体を動かし勢いを殺した。

はやて「あ……」

来て欲しいと願っていた人がそこにいた。

シリウス「やあ、はやて、迎えに来たよ」

振り返って満面の笑顔ではやてに笑いかける。
その笑顔を見て安心からか目から涙が出てきた。
リインをはやてに渡す。その時彼の手を見たはやては驚いた。

はやて「シリウス君その手……」

そして、はやてはシリウスの両手が焼け爛れているのに気づいた。

シリウス「あははは、ちょっと無理をしました～♪」

痛々しい両手を何て事無いとでも言う様に振る。

シリウス「いつっ！」

だが、痛みが奔ったのか苦痛に顔を歪めた。それは直ぐに消えて元の笑顔に戻った。

そして、改めてはやてを見て「うっ…」と唸ってそっぽを向く。

シリウス「はやて……」

はやて「ん？如何したんや？」

シリウス「その格好…／／／／／／」

はやて「え？……きゃあっ／／／／／／／／！！」

自分の姿を確認してはやては体を隠す様に縮こまった。

今の彼女の姿は所々バリアジャケットが溶かされたため素肌が見えてたり何というかエロイ……そんな彼女が身を捻る様にして隠すため更に艶めかしさが上がる。

はやて「あ、あんま見いんといて／／／／／／／／」

シリウス「うぅ～／／／／／／はやての……はやてのバリアジャケットをこんなにまでしやがって…」

プルプル体を震わせ手を強く握る。

シリウス「最初にはやての服を脱がすのは俺の役割なんだよぉぉ「さらりと変態発言すんなやっ！！」柳ハリセンッ！！」

またも何処からともなく取り出したハリセンで打っ叩く。スパーンと音が響き渡った。

最早お約束と化しています。

痛みでゴロゴロ転がっていたが直ぐに立ち直り頭を擦りながら立ち上がった。

シリウス「痛たた、はやて～少しは優しくしてよぉ～」

はやて「ふんっ、変なこと言うからや／／／／／／」

シリウス「うう～、損した気分だけど…まあいいか」

早々に切り替えて前方で此方の様子を窺っているブラッディフラワーをシリウスは睨む。

シリウス「さて、はやてをこんな格好にした罪……払ってもらおうか」

そう言った後シリウスは何処からか赤い衣を取り出しはやてに掛ける。

シリウス「その衣は火鼠の毛皮で出来ていて強酸攻撃でも耐えられる衣だよ。それを着ていれば大丈夫だからね」

ニッコリ笑った後シリウスは表情を引き締め神威を装備し構えてブラッディフラワーに突撃した。

ブラッディフラワーは滑るように移動し姿を眩ませてすぐさまシリウスの背後に着いたがシリウスはその動きが見えていたのかその場で回転し裏拳をお見舞いする。

並みの敵ならそれで吹き飛んだだろうその攻撃を何とブラッディフラワーは踏ん張り耐えた。

シリウス「っ！！神威の攻撃が効いていない！？」

神威はシリウスにとって最も使用頻度の多い武器だ。
それは何故かと言うと、神威の能力、中距離から攻撃を空間転移させて多方向から拳をお見舞いできる優れた能力と多くの敵が耐性を持っていない光属性の威力を上げることが出来るからだ。
故にシリウスにとって神威とは非常に使い勝手が良い武器なのだ。

しかし、その攻撃に目の前の敵は耐えた。つまり、光に耐性を持っているという事だ。

一瞬の動揺が走る。その隙を逃す訳も無く敵はその鋭利な爪を付けた足で斬りかかってきた。

咄嗟に体を捻り回避するが頬と肩を掠めた。バックステップしてその場から離れてはやての前に立つ。肩から流れた血が服を濡らし、頬から血が流れ、床…というより？型の肉壁に落ちた。

はやて「シリウス君、大丈夫！？」

シリウス「いや～参ったね～。神威が効かない敵なんて何時以来だろ？」

心配するはやてを余所にシリウスは至って問題なさそうに笑った。

シリウス「今迄鍛練を余りしなかったのが祟ったかな？こんな下級生命体に後れを取るなんてね……」

流石にイラッと来たのかブラッディフラワーは怒っている様に激しく体を揺すった後猛スピードで迫ってきた。

シリウス「調子に乗るなよ？……下等生物が」

その瞬間シリウスが纏う魔力の質が変化した。それはまるで黄金の様に輝く金色の魔力になる。

シリウス「？ｓｔ（ファースト）リミッター、解除……」

パキンッという何かが弾ける音が鳴った瞬間、更に魔力量が上がる。溢れ出した。

その魔力量は尋常ではない程出ており、はやては鳥肌が立った。

魔力はそのまま彼を包み形作り魔力の塊で出来た一本の金色の尾と頭に耳が生えた。

シリウス「神威、解除。駆けよ紅蓮、朱雀」

神威が消えて、新たに別の武器が現れた。赤色をベースにした猛禽類の足の爪の様な鋭い爪が４本武器から生えており微かに熱を帯びていた。足の脚甲も似たような形に変わった。

拳を強く握り足裏に溜めた魔力を爆発させ一気に突っ込む。
突然シリウスの様子が変わったため敵も後退し様としたが一度爆発させた突進は止められる筈も無くそのままシリウスに向かった。
それに向かってシリウスは大振りに振り被って…そして、拳を打ち込んだ。

シリウス「紅蓮拳！！」

見事に直撃し自身の突進の勢いとシリウスの勢いがブラッディフラワーに襲い掛かり５メートル以上も吹き飛ばされた。直撃時にシリウスの朱雀から炎が迸りブラッディフラワーを焼く。吹き飛んだ体勢を立て直して着地し体を揺すって炎を消して雄たけびを上げて頭にある蕾をシリウスに向ける。そこから、大量の種が機関銃の弾の様に超高速で撃ち出された。その種を一つ一つ殴り、蹴りを当てることで弾き飛ばしていく。そして、瞬時に炎で出来た障壁を展開しそれを殴り、敵に向かって打ち出す。
種を弾き飛ばしながら敵に迫り当たる。それで怯んだブラッディフラワーに一瞬で近づき、拳を作り構える。

シリウス「朱雀連牙突っ！！！」

炎が手甲を纏い高速で打ち込まれる。赤い軌跡が幾つも暗い闇に奔る。
その攻撃が当たる度にブラッディフラワーの形が歪んでいく。
そして、最後に炎を纏った強烈な踵落としを頭（蕾）に落とし押し潰した。

それ以降ブラッディフラワーはピクリとも動かなくなった。

それを確認した後、シリウスは無言ではやての下に行き彼女の腕の中で眠っているリインを見てほっとした後はやてを抱き上げた。勿論、お姫様だっこで……。

はやて「シ、シリウス君／／／／／／！？」

シリウス「さあ、はやて。皆の所に帰ろっか」

恥ずかしくなって顔を朱に染めるはやてにシリウスは満面の笑みを向けそのまま歩きだした。その先に酸の海が広がっているのだがシリウスは気にせず歩いていく。そして、その酸の海の上を歩いた。
如何やら足裏を魔力で纏いそれを浮力に変えて海の上を歩いているようだ。

暫く歩いて行くとそこには肉の壁があった。詰まる所、行き止まりである。

はやて「ちょ、ちょっとシリウス君。行き止まりやないか？」

シリウス「ううん、違うよ。この先は食道でこれは胃液が逆流しないようにするための弁さ」

見たところちょっとやそっとの攻撃では動きそうに見えなかった。

シリウス「はやて、これからちょっとスリルを味わって貰うね♪」

はやて「は？それは一体如何いうｋ――」

シリウス「紅蓮蹴撃！！」

右足に炎を纏わせてそれを高速で目の前の壁に打ち込んだ。その瞬間全体が激しく揺れて目の前の壁が開いた。

そして、彼女達の後ろから胃液が津波となって迫ってきた。

胃液が迫ってきた……

胃液が迫ってきたあぁぁぁぁぁ！！！？？

はやて「嘘やろ！！？」

シリウス「行くぜ！！」

足裏の魔力を爆発させ飛び立つ。その後を胃液が食道を遡って追ってくる。はっきり言ってかなり怖いです。

シリウス「はやて！しっかり掴まっててね！！」

はやて「もう、いややぁぁぁぁぁぁ！！？」

前方に光が見えた。そして――――

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――

シリウスがはやてを連れて脱出を行っている時、ヴィータ達の方の戦いも終わりが近づいてきていた。執拗に攻撃をくらってエビル・ディーガはもうボロボロである。

ヴィータ「おらあぁぁぁ！！」

エビル・ディーガ（抜け殻版）にアイゼンを振り下ろす。しかし、装甲が堅くアイゼンは弾かれる。

何度も何度もそこにアイゼンを振り下ろし続ける。徐々に装甲が歪んでいく。
そのヴィータにファンネルをぶつけて止めようとするがフレアのドラグーンがそれを阻止する。

ヴィータ「グラーフアイゼン、ギガントフォルム！！」

アイゼン［ヤー］

ヴィータ「うおおぉぉぉ！ギガントハンマー！！」

大きなハンマーとなりそれを大きく振り上げる。

リリス「よ～し！支援するよ。チタン超合金装着～！！」

何処からともなく取り出した合金を飛ばしアイゼンの攻撃面に多重に装着させる。
一気に重量が増して一瞬フラつくが持ちこたえて振り下ろした。

ヴィータ「ギガントーーストライクーーーー！！！！」

超重量のハンマーがエビル・ディーガ（抜け殻）の完膚なきまでに

頭を叩き潰した。
そのまま勢いは止まらず地面にまでハンマーは届いた。
見事に頭から胴体を巻き込んで左右に分断されたエビル・ディーガ（抜け殻）は倒れて大爆発した。

それと同時に？型が突然苦しみだし暴れ始めた。
そして、口を大きく開けた時、そこからシリウスがはやてとリインを連れて飛び出した。

ヴィータ「はやて！！」

主の無事を確認しホッとした後急いでそこに向かう。シリウスはヴィータにはやてを任せると再び踵を返して？型のもとに向かった。

シリウス「お前には消えてもらうよ……」

そう呟いた後、シリウスの右手を翳すとそこから巨大な魔法陣が出現する。

シリウス「古より来たりし浄化の焔よ、裁きの洗礼と成りて、焼き尽くせ！！エンシェントノヴァ・カラミティ！！」

そして、続けざまに左手を翳すとそこからも同じ大きさの魔法陣が

出現する。

シリウス「大地の咆哮よ、怒りの権化と成りて、敵を葬れ！！グランドブラスト！！」

？型の上空と足元に巨大な赤い魔法陣が出現する。空が割れ、大地が引き裂かれ、空から焔が雨となって降り注ぎ、大地から溶岩や灼熱の焔に包まれた岩塊が噴出した。

――ズドドドドドドドドドドドドドッ！！！！――

？型［オオオォォォォアアアアアアア！！？］

上下から挟まれる様にくらい悲鳴を上げる？型。その体表が焼かれていき光沢が無くなっていく。

はやて「な、何やあれ！？今、シリウス君、二回魔法を唱えた！？」

クラウド「シリウスの力、『魔法連鎖（チェーンマジック）』。魔法を間髪入れずに連続で詠唱して発動させる事が出来る特殊な力さ」

クラウドが説明終えた時には既に黒焦げに近い状態の？型がいた（元々体表が黒いから分からんが）。

シリウス「これで終わりだ……」

そこにシリウスが一瞬で移動し?型の目の前に立ち思いっきり顔面に拳を打ち込む。
その衝撃は凄まじいものでそのダメージは体を貫通し?型の後方の大地すら大きく抉る衝撃波となった。その一撃で超重量の?型の体が空中に浮き上がった。

シリウス「刹那の一瞬よ、我はそこにこの全てを捧げる、その拳よ光すら凌駕する速さと成れ!!!」

次々に拳を?型に超高速で打ち込んでいく。その速さは尋常ではなく残像を残しシリウスの手が２０にも３０にも見えた。その拳が当たる度に衝撃が?型の体を貫通し後方の大地を抉っていき衝撃で土砂が浮き上がる。徐々に?型を浮かしていき上空にその巨体を持っていく。そして、大量の土砂ごと空高く?型が打ち上がると拳打の嵐は止み、上空から?型が降ってくる。シリウスは魔力を右手に圧縮させて構える。
そして、目の前に?型が落ちて反動で浮いた瞬間、焔を纏った拳を眉間に打ち込んだ。

シリウス「秘奥義、朱雀無限掌!!」

当たった瞬間弾丸の様に吹き飛んでいく。その先にはガルドが作り出したあの山がある。
だが、その勢いは凄まじくその山すらぶっ壊して飛んで行った。

シリウス「これにて、閉幕……」

そして、シリウスが吹き飛んで行った?型に背を向けて呟いた瞬間、?型は大爆発し跡形も無く消し飛んだ。

---

新型機が破壊された事により浮足立っている敵勢力をグランディオンの兵たちは次々に捕縛して行き上空の戦艦にも制圧部隊が突入していくのをなのはは見た。

なのは「もう、大丈夫かな?」

レイジングハート［恐らく……］

戦いが終わりに近付いているのを肌で感じてホッとする。しかし、

？？？「貴様らか……貴様らがいたから作戦に支障をきたしたのか」

なのは「っ！？」

背後からくる尋常では無い殺気に振り向く。

そこには、背中に飛行用の装備を付け軍服に幾つものバッチを付けた４０代の男がいた。如何やら制圧されつつあるあの戦艦の内のどれかの艦長のようだ。

艦長「見た事も無い装備……この世界の住人ではないな？」

そう呟いた後腰のビームサーベルを抜き放つ。なのはもレイジングハートを構えて相対する。

初めに艦長が背中のバーニアをふかして突撃してきた。それを魔力弾を放ち牽制するも全て切り伏せて向かってきてサーベルを振ってきた。空気を切り裂く様に迫ってくる攻撃を身を捻る事で回避する。

慌てて距離をとるなのはにビームライフルを取り出して射撃する。

それを防御魔法を展開する事で防御するが続けざまにミサイルを撃ち込まれる。

爆風で辺りが煙に包まれる。

なのは「しまった！！」

カイン「なのは！？」

爆音で気づいたカインがなのはの方を見ると誰かと交戦しているのを確認し急いでそこに向かう。

周囲を煙で覆われて動きが止まったところを男は追撃のミサイルを撃ち込んだ。

なのは「そこ！！ディバインバスター！！」

防御壁に当たったミサイルから男がいる方を予測して砲撃魔法を放つ。

煙を吹き飛ばしながら放たれた砲撃はしかし、無人の空間を飛んで行った。

なのは「うそっ！？［マスター！後ろです！！］え……？」

振り向くと此方に向かって複数のミサイルが突っ込んで来る。守りの薄い背後にそれは直撃爆発する。

なのは「きゃあああぁぁぁ！！！」

プロテクションが破壊され爆風で吹き飛ばされる。衝撃で脳を強く揺さぶられて視界が明滅する。

刺突の構えで突っ込んでくる男が見えた。
その刃は吸い込まれる様になのはの左胸…心臓のある位置に迫る。

艦長「死ねっ！小娘が！！」

その瞬間、なのはの脳裏にある光景が駆け抜けた。

それは、8年前のあの時の光景だった。庇ってくれた人の血で染まってる自分、その腕の中で腹部から大量の血を流しながら徐々に光の粒子となって消えていく男性、カイン・レオンハルト。

周囲は正体不明の敵の残骸、カインの流した血が白い雪を赤く染めていく。

自分の頭を優しく撫で、頬を伝う涙を拭ってくれる大きな手、それと無事を確認して安堵している優しい顔、それでも時折苦痛に顔を歪める。

ヴィータが隣にやって来て此処にはいない筈の彼の姿を見て驚きの表情を浮かべ、すぐさま衛生兵を呼ぶ。それを彼は制し、何かを言う彼、それに涙を流しながら何度も頷く自分。それを確認した後笑顔になって最後に一言言って自分の腕の中から消えていった。

その言葉は今も頭の中に深く刻まれている。

――――――なのは、楽しかったぜ。お前達との生活は。またな……

――――――

それと同時になのはは意識を失った。

カイン「させるかあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

迫るビームサーベルが宙を舞う、……敵の腕と共に

艦長「があぁぁぁぁぁぁ！！？」

肘から下を斬り飛ばされて血がそこから勢いよく噴き出す。

そこを押さえて後退する艦長と落ちていくなのはの間に立つ男性、カイン・レオンハルト。手にある太刀、雷切には血が付いている。

カイン「なのはに……触れるな！！」

殺気を辺りに飛ばし敵を見据える。一気に接近し太刀を振るう。それを男は左手にビームサーベルを持って受け止める。

しかし、カインは左手にサイフォスを空間から取り出し目にも止まらぬ速さで振るいその腕もビームサーベルも原形を留めない位に斬り飛ばした。

カイン「血の花弁（はなびら）を舞わせろ……」

雷切とサイフォスを一振りして男に背を向ける。

カイン「終の太刀、桜花斬月……」

呟いた瞬間、何閃もの光が駆け、鎧装（フレーム）を紙の様に切り裂いて肉すら裂き、飛び散る血すら切り刻み、その血はまるで花弁の様に舞う。

驚愕の表情を浮かべたまま艦長は地上に向かって落ちて行った。

それを一瞥もせずカインは瞬時に落ちていくなのはの下に移動し彼女を抱き上げた。

それと同時に辺りから勝利の雄たけびが幾つもあがった。

## 第二十一話（後書き）

ど、如何でしょうか？シリウスのリミッター解除に無双モード。はっきり言って強すぎ……。

シリウス「因みに俺はまだリミッターが掛かってるよ～」

後幾つだっけ？

シリウス「ん～～、八つかな？いや、最終リミッターを合わせると九つかな？」

とまあこの様にうちの狐はチートな訳です。いや、九尾か……

シリウス「次回はやっと町に入るんだよね？」

まあ、その予定です。さて今回はこの辺でお気に入り登録して下さった皆様、これを読んでくださってる皆様ホントにありがとうございます。これからもこのダメ作者を宜しくお願いします！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第二十二話（前書き）

読者の皆様朝ならおはよう、昼ならこんにちは、夜ならこんばんわ！！

バレンタインは誰からも貰えず家に籠って一日を過ごした作者ことテッテルです！

いや～やっと更新できました（汗）

カイン「うちの作者は誰からもチョコを貰えず一人寂しくパソコンと睨めっこしてたな」

放っといてくれ！！くそっ！！リア充め！！うわーーーーん！！

バルド「俺達はリア充じゃないんだが……？」

フェイト「え、えっと……バルド？」

バルド「ん？何だ？」

フェイト「はいっ！！これ／／／／／！」

バルド「おお、サンキュー」

うがーーー！！目の前でイチャイチャすんじゃねーーー！！

クラウド「作者が錯乱し始めているけど放っといて本編をどうぞ！！今回はグランディオンの街中散策です。あと、作者からの伝言ですがなのは達の服装は基本読者の皆様の素晴らしい脳内変換にお任せとのことです。何分うちの駄作者はファッションに疎いので……」

カイン「……哀れだ」

# 第二十二話

夢を見た……。

それは、昔…まだ子供だった頃よく見た夢……。

彼と初めて会ったその日の夜に見た夢……。

彼が自分の前から消えた日から見なくなったあの夢……。

初めは不明慮な感じで声しか聞こえなかった。けど、日に日に少しずつ見えていくとても悲しい夢……。人と神の終わらない悲しい戦い……。

真っ白な――本当に真っ白な世界に二人は立っていた。

一人は太刀を持って、もう一人は大鎌を持っていた。辺りでは銀の

炎が燃えていた。
顔はぼやけていてよく見えない。しかし、それでも表情は何故か見えた。

???「如何しても戻らないのか……剣帝!!」

剣帝「それが彼女の残した最後の頼みだ……死神」

死神と呼ばれた男は怒りの表情を浮かべる。それを物怖じせずに冷淡に見る剣帝と呼ばれている人。

死神「その彼女は、人間に殺されたんだぞ!!誰よりも人と神の繋がりを信じたあの子は、信じていた者達に!!」

剣帝「それが運命だったんだ。彼女も薄々勘付いていた」

死神「ならば何故!何故我らに助けを求めなかった!!我らなら匿えた筈なのに!!」

剣帝「先程お前が言った筈だ。誰よりも繋がりを信じていたと……。自分を匿えば間違いなく人間共は神を見捨てる。そうなれば……今度こそ互いが滅びるまで戦い続ける事になる」

激情に流され語気を強めて語る死神を彼は淡々と真実を語っていた。けれどそれが癇に障ったのか怒りを込めて答える。

死神「貴様は許すというのか！！自分の愛した女を殺した人間どもを！！」

剣帝「っ！！」

死神「許せる訳が無いだろうな？俺達ですら怒りに身を焦がしているのに、彼女に最も近くで寄り添いあった貴様が人間共を許せるはずが無い！！」

剣帝「……」

死神「答えろ剣帝！！貴様も人間共を許す訳が無い筈だ！！」

問い詰められて終始無言になり、顔を伏せる彼。けれど、次に顔を上げた時には元の冷淡な、けれど悲しそうな表情に戻っていた。

剣帝「そんな事は如何でもいい。今は人と神々の争いに終止符を打つべきだ」

死神「ふざけるな……ふざけるな！！剣帝！！！！」

溢れ出す魔力、それは神々しくもあり禍々しくもある。
尋常ではない程溢れる魔力を浴びても尚彼は汗一つ流さずに平然としている。

死神「ならば、我らは人間を滅ぼすべきだ!!その為に我らは作られた!!そうだろ!!」

剣帝「違う……彼女も言っていた筈だ。“生まれてきた命は皆、誰にも束縛する事など出来やしない”と俺達は確かに神々が人間に対抗する為に作られた。だが、この命を如何するかは奴等が決める事など出来やしない。俺は、彼女の信じた未来を信じる。お前は如何だ、死神……。彼女の夢を信じるか、それとも否定するか?」

死神「賽は投げられた……もう止める事など出来はしない。俺達『神人族(みと)』は神の玩具だ!!」

剣帝「哀れだな、死神。もう少し思慮深ければ、俺達と共に彼女の未来を見届けれた筈なのにな……」

その瞬間二人の姿が消える。周囲に響く得物同士のぶつかる音。そして、魔法の嵐、銀の雷が白い風が激しくぶつかり合う。

死神「剣帝!!私は貴様を黄泉の国に連れていく!!」

剣帝「なら、俺は彼女と彼女の未来を信じてくれた『神人族(みと)』の皆を守るために貴様を斬る」

死神「おおおおおおおおおおお!!!黄泉(デスサイズ)へ誘う大鎌!!」

剣帝「天へと誘(いざな)え、天美草!!!」

二人が交差して通り抜ける。暫く得物を振るった状態のまま立っていた……けど

死神「ごふっ……！！」

死神が血を吹きその場に倒れた。剣帝は太刀を収め死神の傍らに膝をついて彼を見る。死神の表情は先程まであった怒りを収めて穏やかであった。

死神「フフフ、やはり俺ではお前に勝てないか……流石だな剣帝」

剣帝「いや、俺を此処まで追い詰め、渡り合えるのはお前と樹帝だけだぞ？」

死神「謙遜するな、それよりも樹帝はそもそも能力が卑怯臭いだろ？」

剣帝「確かにな、あの戦いは些か卑怯だ。今此処に本人がいないのが残念だがな。それにあいつの性格は少々残念だ」

昔を懐かしむ様に語らう二人。先程まで戦っていたのが嘘の様に見えた。

しかし、突然死神は咽る。口から夥しい量の血が出た。

死神「ぐっ!?そろそろ……限界の様だ…」

剣帝「そうか……すまないな『友』よ」

死神「っ!?……フフフ、お前を裏切り、命すら奪おうとした俺をまだ『友』と呼んでくれるのか?」

剣帝「当たり前だ。お前は俺にとって最高の『友』さ」

死神「フフフ…ハハハハハ!それだけ聞ければもう思い残すことは無い」

死神と呼ばれた男の体が光となって徐々に消え始める。
苦痛の色は無く何処か清々しい様にも見えた。彼は懐から剣を取り出す。大きさは掌サイズだったが瞬時に大きくなり2メートル以上になった。

死神「俺の意志をこれに残す。これを如何使うかはお前次第だ」

剣帝「……」

死神「お前は、お前の信ずる道を行け。彼女の……カナリアの望んだ未来を頼むぞ?さらばだ、剣帝、■■■■■■■■■■」

そう言うと彼は光の塊となり弾けて粒子となって消えていった

剣帝「さらばだ、死神…いや、死帝、■■■■■……」

？？？「死帝は逝ったのか？」

剣帝「樹帝か……」

彼の背後に突如現れた一人の男性。先程彼らが語っていた『神人族（みと）』の一人のようだ。

樹帝「良い奴だったのにな……で、これから如何するんだ？」

剣帝「お前は、他の『神人族（みと）』の皆と俺達の思想に賛同してくれた人間達を連れて旅立て」

樹帝「君は如何するんだ、剣帝？」

剣帝「俺は戦いを終わらせに行く」

樹帝「死ぬかも知れないよ？」

剣帝「俺は死なない、いや死ねない。あいつとの約束があるからな」

鋭い目を樹帝に向ける。彼は肩を竦めるだけだった。

樹帝「ま、君が如何なろうと如何でも良いけどさ、天に召された彼女の望みはそれだけじゃない事も忘れるなよ？」

剣帝「如何いう意味だ？」

樹帝「そのままの意味さ。何時か死ぬ自分の代わりに君を支えてくれる人が何時か現れる。その子を大切にしろって言う意味さ」

剣帝「それは無いな。俺には二度とその様な事は無い」

樹帝「如何だろうね？ま、俺は君に運命の人が現れる方に賭けさせて貰うね。当ったら何か奢ってね～♪」

剣帝「だが断る」

樹帝「ｏｒｚ」

その時周囲の空気が一変し張りつめた。

剣帝「来たようだ。樹帝、そろそろ行け」

樹帝「そうだな。それじゃ、またな剣帝■■■」

剣帝「ああ、また会おう樹帝■■■」

樹帝が姿を消しその地から幾つもの命が旅立っていくのを肌で感じた。それと同時に上空から幾つもの光が降りて来た。それは徐々に形を作って人の姿になった。その数は数万にも及んだ。

彼は再び太刀を抜く、そして、死帝の残した太刀も握る。その彼の

表情は何処か悲しそうだった。

剣帝「俺は、あと何回神と天使と人を殺さなければいかないのだろうな……些か疲れた、もう休みたいものだな……」

休んでいいよ――――もうそこまで貴方が傷つく必要は無いんだよ!!

心の底から叫ぶ彼に届けと必死になって…。

けれど、それは何時も届かない。夢だから?それとも、自分はその隣に並ぶ資格が無いから?

止めたい。この悲しい争いを……けど、届かない……

剣帝「我が名は、剣帝■■■■■■■■■ッ!!いざ、参る!!」

数万にも及ぶ人達に向かって駆ける彼。彼を止める為に手を伸ばす。けれど、何時もその手を掴む事は出来ない。

武器を構える人達に飛び込んでいく彼の後ろ姿が遠のいていく。夢が覚める前の予兆……

そして……再び視界は白に覆われた……

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

なのは「う……んん……」

日の光を浴びて目を覚ます。そして、自分がベッドで寝ているのに気付く。誰かが着せたのだろう、今着ているのは寝着だった。

起き上がった瞬間彼女の頬を何かが伝う。
そっと指で触れて見るとそれは涙だった。彼女は泣いていた。

なのは「また、あの夢……また…止められなかった……」

幼いころ見たあの夢……。あの悲しい表情をした彼を助けたい。けれど、届かない事が悲しい。目から涙がボロボロと零れ落ちる。

なのは「う…ひっく……うう……」

嗚咽を堪える様にし顔を手で覆い泣く。

その時、

――コンコンッ！！――

なのは「っ！？」

扉からノック音が聞こえてビクッと肩が跳ねる。すぐさま涙を拭い扉の方を見るとカインが入ってきた。そして、彼女が起きているのに気づいた。

カイン「なのは！目が覚めたのか？」

カインは心配そうになのはを見る。体に痛みが無い事を伝えるとホッとした顔をする。

なのは「カイン君、此処は……？」

周囲を見回す。見た所何処にでもある様な一般家庭の家の様だ。

カイン「ああ、此処は俺達の家だ」

ベッドから起き上がり窓の外を見ると、そこには街が広がっていた。
幾つもの高層ビルや建物、ショップや雑貨屋などが見える。
そして、鳥と共に人が空を飛んでいた……人が空を飛んでいた…
……人が空を飛んでいたっ！！？
なのは「ええっ！？」
見たところ一般人のようだ。しかも一人だけではなく沢山……。
一体如何いう事なのだろうか！？
カイン「ああ～それについては後で説明するから取り敢えず服着て
皆の所に行くぞ」
カインはそう言うと近くのハンガーに掛っていた六課の服ではなく
桃色のワンピースをなのはに渡して部屋を出て行った。それ以外の
服が見当たらないのでそれを着て部屋を出てカインと共に階段を下
りた。
ロイド「お！なのは、目が覚めたのか！」

その声に振り向くとロイドが肩にレイとアルを乗せて此方にやって来た。手には男物の服が積まれた籠を持っている。如何やら洗濯をしていた様だ。

ロイド「如何する?飯にするか?丸一日寝ていたし腹減ってるだろ?」

なのは「え!?私、一日も寝てたの!?」

ロイド「まあ、疲労がピークに達したんだろ?しょうがないさ」

そう言って洗濯籠を廊下の脇に置いてなのはを台所に案内する。

そこは、十数人が入っても大丈夫なくらい広く調理場が座っていても見える空間だった。

なのはを座らせた後ロイドは調理場に入り直ぐに出てきた。既に準備してあったのだろう、ご飯とみそ汁、煮魚等朝食向きの料理が並んだ。

ロイド「皆は先に食ったから遠慮しないで食えよ!」

なのは「えっと…いただきます」

料理を口にすると味はかなり美味しかった。料理を食べながらロイ

ドの方を見ると彼は皿洗いをしている。壁に立て掛けてある時計は9時を指していた。

なのは「ねえ、ロイド君。皆は何処に行ったの？」

ロイド「ん？フェイトとエリオ、キャロはバルドと一緒に市街地に行ったぞ。シグナムは外で今ウクルスと模擬戦してる」

そう言った瞬間外で轟音が鳴る。続いて何かがぶつかる音とシグナムの声が聞こえた。

シグナム「はあああああああああ！！！」

ウクルス「ちょっ！何だよその武器、反則だって！！？」

シグナム「飛竜一閃！！」

ウクルス「ぎゃーーーーっす！！」

アリア「はわわわ～！！ウ、ウクルスしゃん！？」

何やら凄い事になっている様だ。気になりはするが行ったら何か巻き添えをくらいそうなので止めておく。

ロイド「はやてはシリウスと追いかけっこしてたぞ」

そして、上の階でドタバタと暴れる音が聞こえる。

はやて「シリウス君！！今日という今日は許さへんで！！」

シリウス「いいじゃん、寝顔見たくらいでそんなプリプリしないでよ。まあ、昨日のはやても今日のはやても可愛いけどね！！」

はやて「なっ／／／／／／／／！！う、うるさいうるさい！！今日こそ折檻や！！」

シリウス「え～～、説教は嫌いだからドロンチョさせてもらうよ。ではさらば！！」

はやて「待たんか～～～！！」

激しい音が断続的に響く。よくもまあ朝からそんなにエネルギッシュに動けるな、と私こと作者は思うね。え？いきなり入ってくるなって？すんませんした…。ではさよなら＝＝３

ロイド「ヴィータはコレットとセフィリアと洗濯してるしクラウドとティファ、ガルドは今後の予定を決めるためにウルフに話をつけに行ったぞ」

因みにリリスはまだ寝てるとか……「寝る子は育つのです！！」と

言っていたとか何とか……。
成長するか甚だ疑問だが……。

洗い物を片付けながら皆の事を話すロイド。カインもそれを手伝い食事を取り終えたなのはも食器を持っていき洗うのを手伝う。
ロイドはサンキューと礼を述べる。そして、片付けが終わった後ロイドは壁に立て掛けていた二本の自分の剣を持って廊下に置いてきた洗濯籠を拾う。

ロイド「俺はこれを干した後、午後まで仕事あるから、カイン、此処の説明頼んだ!!」

カイン「ああ、分かった。後でコレットも行かせる様に言っとくからな」

それに笑顔で応えた後外に出て行ったロイド。すぐさま轟音が聞こえる。

ウクルス「おお!?ロイド急に出てくるな!!あぶねぇぞ!!」

ロイド「って、玄関前で暴れんなお前等!!」

ドタバタと凄い音が聞こえるので外に出るのはもう少し後にしよう……。

なのは「ねえ、カイン君。此処は何処なの？」

カイン「さっきも言ったが此処はグランディオンの中枢地区にある俺達の家だ。そうだな、外に行って見た方が早いか……」

そう言って席を立ち外に向かうカインになのはもついて行く。外に出ると広めの庭があって、そこでウクルスとシグナムがぶつかり合っていた。ウクルスは対艦用大型多変形ビームサーベルを二本持って高速で振るっていてシグナムはそれを避け、受け流し、弾き、隙を見てはレヴァンテインを振るう。鍔迫り合いになった時シグナムは視界の端になのはの姿をとらえた。

シグナム「む？高町、目が覚めたのか？」

なのは「うん、シグナムさんは摸擬戦をしてるの？」

シグナム「ああ、この者も中々に強くてな。久々に燃える！！」

ウクルス「あんがとさんっと！！」

互いの武器を弾き一端距離を置く。そして再びぶつかった。

アリア「あ、あのっ！」

なのは「え？」

声がする方に視線を向けるとそこには少女が立っていた。モジモジしながら此方を見ている姿は愛らしく見える。なのははこの子はあの時の戦闘でエリオを助けてくれた子だというのに気付いた。

なのは「貴方はあの時の……」

アリア「は、はい。アリア・セレスタと言いましゅっ！？…はう～また噛んじゃった／／／／／」

最後の最後で噛んでしまい恥ずかしくなって顔を赤くし俯く。

ウクルス「ぐっはぁぁぁ！！」

シグナム「うおっ！？だ、大丈夫か！？」

ウクルス「さ、流石はアリア……意図せずとも俺を魅了するかね……」

後ろでウクルスが突然吐血、それにビックリしているシグナムが見えるが取り敢えずアリアに視線を戻す。

アリア「あ、あのお身体は大丈夫ですか？えっと……」

なのは「あ、ごめんね。私の名前はなのは。高町なのはだよ」

アリア「なのはさん……。えっと、なのはお姉ちゃんと呼んでもいいですか？」

なのは「うんいいよ。にゃはは、ちょっとくすぐったい感じがするの」

自分の事をお姉ちゃんと呼ぶ人が周囲にいなかった為少々くすぐったい感じになる。

実際家族では自分が一番末っ子であり、ヴィヴィオも自分の事をママと呼ぶしエリオ達もさん付けで呼ぶのでアリアにお姉ちゃんと呼ばれると嬉しくもありちょっと恥ずかしくもある。

そこに摸擬戦を止めて此方にウクルスとシグナムもやって来る。

ウクルス「そういや、俺もちゃんと挨拶して無かったな。俺はウクルス。ウクルス・ハイトだ。よろしく！！」

挨拶しつつ後ろからアリアを抱きしめる様に腕を回し彼女の頭に顎を乗せるウクルス。

アリア「はわわ！？ウ、ウクルスさん／／／／／／／！？」

カイン「ウクルス……またニーアにどつかれるぞ？」

ウクルス「フハハハハ！！そんな事くらいで俺が彼女を愛でるのをｙ「止めなさいって言ってるでしょ！！」ぐぼあぁ！？」

何処からともなく飛んで来たファンネルに怒突かれひっくり返るウクルス。
そこにニーア、モーゼス、フレア、シェリドがやって来る。

ニーア「ったく、隙あらば直ぐにアリアに抱きつくなんて……一度刑務所に引っ張って行くわよ？」

モーゼス「フォフォフォフォ、ワシとしては二人がこれからどの様に成長するのか気になるからそれは勘弁して貰いたいのだがの？それに……ウクルスの事じゃ、牢から出た瞬間、アリア成分を摂りに彼女をそのまま持ち帰ってしまうかも知れんぞ？」

ニーア「う……それは困るわね……」

フレア「二人の将来が心配です……」

シェリド「フレア、愛に歳も種族も関係ないさ。僕たちみたいに……ね？それにしてもフレア……今日も一段と綺麗だね」

フレア「まあ／／／／シェリドったら……／／／／／／」

ニーア「また始まった……。あっ！紹介が遅れたわね。私の名前はニーア。ニーア・ファンネリアよ」

モーゼス「モーゼス・ディアンディィじゃ」

フレア「フレア・ノーティスです」

シェリド「シェリド・デュナミス。以後お見知りおきを」

それぞれが自己紹介をした後なのはも自己紹介する。その間にウクルスも立ち上がりニーアを睨む。

ウクルス「ってめ、ニーア!!また俺とアリアの逢瀬の時間を邪魔しやがってシバクぞ!!」

ニーア「公衆の面前でそんな事すんじゃないわよ!!私達が変態集団みたいに見えるじゃない!!」

ウクルス「変態だと……?俺はだな…アリアが純粋に好きなだけなんだよおぉぉ!!!」

ニーア「だから、そう言う事を言うなって言ってんでしょ!!」

アリア「え、えとえと、あの……ふ、不束者ですがどうぞ宜しくお願いします／／／／／／」

アリアの突然の爆弾発言に場の空気が凍りつき鎮まる。その間にウクルスにペコリとお辞儀するアリア。そして、突然ウクルスはアリアの両肩を掴む。

ウクルス「アリアッ！！」

アリア「ひ、ひゃい！！」

ウクルス「式は何時挙げる！？明日か！？明後日か！？いや、いm

「気が早いっ！！」ぐはっ！？」

暴走しかけたウクルスにカインの鉄拳制裁が飛ぶ。

まったくもって愉快な人達である。

そこにティアナとスバル、ヴィータやシリウス、はやてがやって来てなのはが目を覚ました事にホッとし、洗濯物を干し終わったコレットやセフィリアが街に行くなら皆で行こうという案が出たので皆で行くことにした。

---

アリア達と別れ（あの後、彼女達は仕事があるらしい）、なのは達は街に入る。

街に入ったなのは達はその風景に呆然とした。何故なら目の前では沢山の人が空を飛んでいたのだ。

はやて「人が空を……飛んでる？」

地上にも人は沢山いる。店前で店員と楽しげに会話をしていたり、酒場で昼間からドンチャン騒ぎをしていたり、子供達が楽しく駆けまわったりと中々賑やかである。

シリウス「ああ、空を飛んでる人は全員、鎧装（フレーム）装備してるからだよ」

ヴィータ「鎧装って軍の装備じゃないのかよ？」

コレット「ううん、違うよ。あれは民間人用に作られた鎧装で衝突事故から身を守る位の防御力を備えただけなんだ」

カイン「時々、遅刻寸前の奴らがそれを活かして窓をブチ破って行く光景があるがな」

そこに丁度よく物凄い勢いで飛んでいる人がいた。その人は何の躊躇いも無く一つのビルに突っ込み窓をブチ破って中に入って行った。

他の所でもそれと似た光景が見られる。時々というよりしょっちゅう発生している様に見える……。

ティアナ「あんなに派手に壊して大丈夫なの？」

カイン「まあ、ガラス程度は幾ら壊しても問題は無いな。……後で壊した事を上の人間に怒られるがな」

上の階で何やら怒鳴り声が聞こえるが、そこはまあスルーしましょう。

そんな感じで会話をしながら街を歩いていると周囲から視線を感じる。見ると市民が此方を見てヒソヒソ話をしている。

特になのはに視線が多く集まっている。

なのは「何か視線を感じるの」

コレット「それは仕方が無いよ？」

なのは「如何して？」

シリウス「なのは、君が気を失っている時、誰が君を俺達の家まで運んだと思う？」

そう問いかけられてなのはは首を傾げる。シリウスはキョトンとしてるなのはを見てクックックと笑いながら答えてあげた。

シリウス「正解は……カインさ」

なのは「ふえ？」

シリウス「今、街で噂が持ち上がってるよ？『剣帝には女がいた！！』っていう噂がね。そして、その女は…なのは、君だよ」

なのは「え…えええぇぇぇぇぇぇぇ！！？」

街中に大きな声が響く。それにより更に多くの視線がなのはに集まってしまった。

それすら気にならない位になのはは混乱の境地にいた。

なのは（わ、私が…カ、カカカカイン君の……／／／／／／／／）

話によればあの戦いはなのはが気を失った後直ぐに終了し、そのまま街に凱旋。

その時にカインはなのはを背負っていた…いや、お姫様だっこしていたためその様な噂が広まったのだとか……

カイン「あいつ等はそういう話が好きだからな……」

カインは溜息を吐きながら周囲を見ると、一部では何処かに連絡し、一部は口笛を吹き、一部は何やら熱くなって何かを語っている。

子供Ａ「あっ！！兄ちゃん達だ！！」

その声の聞こえた方を見ると子供達が沢山やって来た。

シリウス「おっ！久しいなお前等」

子供Ｂ「シリウス兄ちゃん！久しぶり！！」

子供Ｃ「遊ぼ、遊ぼ！！」

子供Ｄ「コレットお姉ちゃん、旦那さんのロイドお兄ちゃんは何処？」

コレット「ええっ！？そ、そんなんじゃないよ～／／／／／私とロイドはまだそんな関係じゃ……／／／／／」

子供Ａ「“まだ”？って事は何時かはそうなるんだね！！」

子供Ｃ「早く子供が見てみたいよ～！！」

コレット「こらっ／／／／／！！」

コレットは困った顔をしながら頬を赤く染める。そして次になのは達を見る。

子供Ａ「お姉ちゃん達は誰？」

子供Ｂ「見かけないね？新しく引っ越してきた人？」

子供Ｃ「ねえねえ！！何処出身？」

カイン「こらこら、お前等そんなに一遍に聞くな一人ひとり順番に質問しろ」

周囲を囲まれ質問攻めに遭い困っているなのは達を助けるべくカインが子供らを窘める。
それに、子供達は「は～～い！！」と元気よく答える。

子供Ｄ「あ！カイン兄ちゃんの嫁だ！！」

なのは「ええっ／／／／／／！？」

噂は子供にまで広まっているのかなのはを見た途端に指を指して一人の子供が言うと次々に「ほんとだぁ！！」と言う子供達。

カイン「アホ、なのはは嫁じゃねえよ。仲間だ」

子供Ａ「ええ～。つまんない（ε-）！！」

子供Ｃ「シリウス兄ちゃんはいないの？」

シリウス「ん？いるよ」

はやて「え……」

あっけらかんと言ったシリウスに思わずはやては言葉を漏らした。
そんな彼女をシリウスは隣に引き寄せてとんでもない事を言った。

シリウス「この人が俺の奥さんさ！！」

はやて「へ？……はあぁぁぁ！！？」

突然の発言にはやてはビックリする。

子供Ａ「え～、うそだ～」

シリウス「むっ！信じていないな？それなら証拠を見せてやろう」

そう言うとシリウスははやてと向き合いはやての顎を少し持ち上げる様に手を動かす。
そして、徐々にシリウスの顔が近づいてくる。

シリウス「はやて……」

はやて「シ、シリウス君／／／／／／……って、何してんねん！！」

シリウス「ぶっ！？」

突然の事で混乱の極みにいるはやてだったが直ぐにハッとなってシリウスをぶん殴る。

顔面を思いっきり殴られ痛みで転がるシリウス。それを見てキャハハハッ！！と笑う子供達。

シグナム「貴様……主に何をしている……（怒）」

ヴィータ「はやてに迫るなんていい度胸してんじゃないか……（怒怒怒）」

その光景を見て既にデバイスをセットアップして構える二人。

シリウス「おうっ！もう少しでファーストキス貰えたと思ったのに！！」

シ・ヴ「「死ねぇ！！」」

シリウス「ぎゃーーーっす！！」

はやて（うぅ……段々恥ずかしくなってきた／／／／／）

要らんこと言って天誅をくらうシリウス。哀れだ……。

そんなシリウスを体を隠す様に捻って息を荒くして顔を真っ赤に染めて見るはやて。

先程近づいてきたシリウスの顔が何時もよりカッコ良さ三割増しになっていたなっと思い返し更に頬に熱が伝わる。

カイン「公衆の面前であんな事をするなよお前……アホか？」

シグナムとヴィータに天誅をくらい倒れていたシリウスだが直ぐに立ち上がった。

最近このキャラ、頑丈になって来たなぁ……。

シリウス「痛たた、もうちょっとで行けそうだったのに……」

子供Ａ「やっぱり嘘なんじゃん」

シリウス「嘘じゃないよ！何時かはそうなるんでい！！」

カイン「確証も無いのに余計な事を言うなよ。あ、そういえばコレット、ロイドが仕事に行って来るって言ってたぞ？」

コレット「えっ！そなの？なら急がなくちゃ！！」

なのは「コレットちゃん何処に行くの？」

コレット「鍛冶屋だよ。ロイドはね時々そこに行くんだよ。みんなも見に来る？」

何処かに行く予定もないので子供達と別れ、取り敢えず行く事にした。

――――――――――――――――――――――――――――――――

街中に煙突から煙を出している家があった。
そこには人が何人か集まっており何かを待っているようだった。

コレット「やっぱり凄い事になってるよ…」

予想していたのかコレットは人だかりの中に入っていく。
その度に住人から挨拶がありそれにコレットは丁寧に答える。

市民「おや？コレットさん今日は何時までロイドさんはいるんですか？」

コレット「えっと、多分午後までいると思います。久しぶりなんでロイドが張り切っているはずだから」

市民「流石未来の剣聖の奥さん！！剣聖の事は何でも御任せってか？」

コレット「そんなんじゃないよーーー／／／／／／／！！」

頬を膨らませながら両手をブンブン振るって言うコレットだがそう言いつつも何処か嬉しそうに笑っている様にも見えた。

ロイド「お？コレットも来たのか？」

コレット「あ、ロイド！手伝いに来たよ！！」

ロイド「それじゃあ、何時ものやつ頼むな。ほい、刃毀れ直したぞ」

そう言って市民の一人に包丁を渡す。

市民「ありがとうございます！！流石ロイドさんですねもう出来たんですか」

ロイド「まあ、親父にはまだまだひよっ子だって言われるけどな」

街の住民と楽しく会話をするロイド。街の人達もとても楽しそうにしている。
彼が会話をしている内にコレットがカイン達の方を向く。

コレット「それじゃあ、皆。私はロイドと仕事があるから此処で失礼するね。レイとレンはバルドを探して見つけたら皆に教えてね」

レイ・レン「「キュクー！！」」

カイン「分かった俺達はこのままなのは達に街の中を案内してくる。多分、夕飯辺りに帰ると思う」

コレット「うん、それじゃあまたね！！」

手を振りながらロイドとアルとウルと共に建物内に入って行く。それと同時にレイとレンは二人の肩から飛び立ちパタパタと翼を羽ばたかせながら空高く飛んで行った。

それと同時にセフィリアに通信が入る。

セフィリア「あ、ガルドからだ。……はい、もしもし？如何したのガルド？……ええっ！？うん…うん……分かった今からそっちに行くね！！」

驚いた顔をした後、何時に無く真剣な顔をするセフィリア。
通信を切った後カイン達に申し訳ない顔を見る。

セフィリア「ごめんね皆。私も用事が出来たからちょっと抜けるね？」

シリウス「何かあったの？」

シリウスが聞くとセフィリアは二人を手招きして耳打ちする。

セフィリア「ウルフがね、なのは達管理局との一部同盟を結ぶって事を重鎮達に話したんだけど凄い反発が起きてるってガルドから連絡が入ったの。だから、私も行って説得に行くから二人はこのままなのは達と行動を共にしていて。多分あの人達何かアクションを起こす可能性があるから」

カイン「分かった。警戒しとくよ」

シリウス「取り敢えずアリア達とまだ寝てるリリスにも連絡入れといたら？」

セフィリア「うん、そうするね。……それじゃあ、皆またあとで！」

周囲に聞こえない様に声を落として会話し今後の予定と周囲の警戒を頼んだ後セフィリアは二人から離れ笑顔で手を振りながら足早に

去って行った。

はやて「シリウス君、何かあったん？」

シリウス「んにゃ？特に何も起きてないよ？」

シグナム「その割には随分と深刻そうな顔をしていたみたいなんだが？」

ティアナ「もしかして……私達の事ですか？」

カイン「特に問題は無い。また、ウルフが城から脱走して街をウロウロしてるんだと」

シリウス「ホント、彼の放浪癖には困ったもんだね～。書類とか山の様にあんのに……後でサラにボコられるんだろうな～」

そう言うとなのはとはやては苦笑いし、シグナムとヴィータ、ティアナは呆れた顔をしてスバルは頭に？をつけていた。

カイン（こいつ等に無駄に負担を掛ける訳にもいかない……さて、如何したものか）

取り敢えず、誤魔化した後なのは達を連れて街中を散策する事にした。その途中でバルド達が資料館の付近にいる事を聞いたので皆で向かう事にした。

あの後レイとレンがバルド達を発見しそれをカイン達に伝え合流する。
そして、資料館などの多くの施設に入る為に必要なパスを作る為に役所に行きなのは達全員のパスを発行をしてもらった時には日が暮れ始めていた。

バルド「そろそろ日が暮れて来たな。今日はこの辺にして明日資料館に行くぞ」

一日中歩きっ放しだったので疲れていたなのは達もこれに同意する。
家に帰ると既にロイドとコレットは帰っていて夕飯の準備を始めていた。
それをなのは達も手伝い準備が終えたと同時にウクルスらも家にやって来てワイワイ騒ぎながら食事を摂った。

そして、夜が更けて皆が寝静まった頃フェイトは物音で目を覚ます。
扉を開けて見るとバルドが玄関から出て何処かに向かおうとしてい

た。

フェイト「バルド？」

バルド「ん？フェイトか。わるい、起しちまったか？」

フェイト「ううん。ちょっと眠れなかったから気にしなくても良いよ。それよりもバルドは何処に行くの？」

バルド「ああ、ちょっとな。眠れないなら一緒に来るか？」

断る理由も無いのでフェイトは頷き一緒に行く事にした。

夜の街は幻想的で色彩豊かな街灯で照らされていた。それに満月が二人を照らす。

フェイト「綺麗……」

思わず吐息が漏れる。昼とは違った賑やかさを見せる。

二人の横を仕事帰りの飲み会で酔ったのか会社員らしき人とその人を支えて帰る女性が通り過ぎる。

社員「う～～ん。羽目を外しすぎた……」

女性「もう！明日も仕事なのに飲み過ぎですよ！！」

社員「だ、大丈夫だ……明日にはリカバリー出来る様に頑張るから」

女性「ふふっ、もし二日酔いでもしたら介抱は私がしますから安心してくださいね？」

社員「む……それなら尚更明日も頑張らないとな！！そんで、明後日に休暇を頼んで二人で酒でも飲むか！」

女性「ふふふっ、そうですね。それなら明日は頑張って書類を全部片付けてくださいね？」

介抱しているのが楽しいのか女性は頬を緩め笑い、男性も苦笑いして足取りをしっかりしようとしているらしく奮闘している様だった。

フェイト「何だかあの二人、とても仲良さそうだね？」

バルド「ああ、あの二人は最近結婚した二人だな」

フェイト「そうなんだ」

バルド「因みに女性の方はＡＩだがな」

フェイト「え、えええ～～～！？」

予想外の事を言われフェイトはビックリする。人とＡＩの夫婦など聞いた事も無いのだから無理も無いだろうが……

バルド「『疑似肉体人形』、内部構造は人間と何ら変わりないものでＡＩが人と同じ様に生活する為に作られた特殊なものだ。だから、ああいう風にＡＩも結婚して幸せな生活を送れるという訳さ」

その後も結婚したＡＩの数は数百組あると言う事やその中で子持ちのＡＩは数十組いると言う事を聞かされて驚いていると一つの店でバルドは止まる。

見た所バーの様だ。バルドはその中にフェイトを促して入る。

バルド「マスター、久々に来たぞ」

マスター「いらっしゃい、旦那」

挨拶を軽く交わした後、窓際の席に着くと直ぐにカクテルを出す。

バルド「フェイトは酒を飲んだりした事はあるのか？」

フェイト「うん。時々あったかな」

バルド「二十歳になってないのに飲んだのかよ……」

フェイト「あ、あはは、断れない状況だったんだよ」

フェイトも何度か飲んだ事を話すとバルドはやれやれといった顔をするがマスターに頼むと直ぐにカクテルが出される。

フェイト「おいしい……」

体の隅々にまで沁み渡る様な味が口の中に広がる。

マスター「恐縮です」

バルドを見ると彼もまたそれを味わう様に口を付ける。その動きの一つ一つが様になっていたのでフェイトは思わず魅入っていた。

バルド「綺麗だよな……」

そう呟いて外を見る。バルドの視線は街並みではなく夜空を見ていた。
その視線を追ってフェイトも空を見ると満天の星空が輝いておりそれを際立たせる様に月が金色に輝いている。
まるで…そう、バルドの瞳の様に綺麗だった。

バルド「あの星達の中にはフェイト達みたいに生命が息づいている

ものがある。知ってるか？銀河ってのは一つだけじゃない、幾つも、幾つも存在している。俺達の生きているこの銀河系、未知の生き物達が住み、育む銀河系もある……。俺達と同じ人間がすむ世界、見た事も無い生き物が独自のコミュニケーションをとりながら生きている世界、滅んだ世界、新たに芽吹いた世界、それ以外もこの銀河の隣に存在している。そして、次元を隔ててその隣には似たような世界が息づいている。それもまた、消滅と再生とを繰り返して、繰り返して長い年月をかけて俺達が生きているような世界を形成しているんだ」

きっとこの時フェイトは既にカクテルの影響かそれとも何時もより凛々しい顔で語るバルドに酔ったのか少しぼんやりした感じで話を聞いていた。

何故彼はそこまで宇宙に……星に……銀河系に詳しいのだろうと考える。結論からいえば、分からない。

意図せずフェイトはつい聞いてしまった。

フェイト「バルドは……バルドは如何してそんなに詳しいの？」

バルド「フェイト？」

フェイト「知りたい……貴方の事をもっと知りたい…。バルドは今までどんな風に生きていたの？」

バルド「……」

フェイト「お願い……」

ジッと此方を見てくるバルド。フェイトは視線を逸らさずその金色に輝く瞳を見つめる。

すると、バルドの方が視線を逸らし星空を見上げる。彼も酒に酔っていたのだろうか、ポツリポツリと語り出す。

バルド「……昔々、ある所に一人の子供が産まれました……」

突然昔話を始めるバルド。この時すでに眠気がフェイトを襲っていた。だが、これを聴き逃すといけない気がしてフェイトは必死に耐えて少しでも彼の手掛かりを掴むべく聞く。

バルド「両親は、黒髪の黒目の人でした。しかし、その両親から生まれたのは髪の色も瞳の色も全く違う子供でした。周りの人はその子を忌み児として恐れ殺す様に進言しました。しかし、両親は初めはそれを拒否し数年間子供に愛を注いでいました。しかし――」

段々と眠気が強くなり声が途切れ途切れになり始める。こんな時自分の酒に対する免疫力の低さを怨んだ。

バルド「子供が――――s――――に――ある――じけn――それ――おそr――こど――――」

だめだ、今眠っちゃいけない！最後まで聞かないと駄目なのに！！
もう……

そして、最後の最後にフェイトは聞こえた。

バルド「そして、その子は両親に殺された……」

憂い顔で語る彼の顔と衝撃の言葉を聞いてフェイトの視界は真っ暗になった。

フェイトが眠っているのに気づいたバルドは小さな寝息を立てる彼女を見てフッと笑う。

バルド「眠ったのか……マスター今夜は此処までにしておく」

代金をテーブルに置いた後フェイトを抱きかかえる。……お姫様だっこで。

マスター「良き夢を、旦那」

バルド「俺にはそんないい夢は無いさ」

マスター「そうですかな?そのお嬢様と一緒の貴方は随分と嬉しそうでしたが?」

それに一瞬驚いた顔をしたが直ぐにフッと笑い店を去って行った。

帰り道、バルドの隣にケルベロスとバハムートが現れる。

ケルベロス［随分と良い雰囲気だったな、相棒］

バルド「何がだ?」

ケルベロス［……まあ、そう言う事にしておくか。んで、如何してあんな事を喋り出したんだ?］

バルド「フフッ、さあな。何でだかは分かんないがそうしたいと思っただけさ」

バハムート［ですがもしフェイトさんがそのまま起きていたら如何する気だったんですか?］

バルド「その時はその時だ……運命がそうさせたんだろ?」

ケルベロス［けどよ、良いのか?相棒の過去を話しちまって］

バルド「何度も言わせるな…。もしフェイトが最後まで聞いていた時はその時はその時だ」

それ以降は二つの剣も黙り彼の隣を飛び続けている。そして、家に着きフェイトを部屋に連れて行く。

彼女を起こさない様に静かに降ろし寝かしつけて離れようとしたのだが……

――ギュッ――

バルド「む……」

彼女はバルドの胸元をギュッと掴んでおり離れようとしなかった。

バルドは慎重に手を剥がそうとしたが……

フェイト「んん～……やぁ～……」

掴んでいたのが片手だったのが両手になり更に状況が悪化してしまった。

そして、フェイトはバルドを引っ張る。急に引っ張られたので踏ん張れずにそのまま倒れてしまい向かい合う様な形になってしまった。

そこに追撃する様にフェイトは掴んでいた手を離し、腕をバルドの背に回してガッチリホールドしてしまった。

バルド「おい……起きろフェイト」

そんな声など聞こえませぬと言った感じでフェイトはバルドの胸に顔を埋める様にして小さく寝息を立てている。

その顔はとても幸せそうだった。

ケルベロス［いや～～、良いもん見せてくれますね御両人、ウヒャヒャヒャ］

バルド「ケルベロス、何とかしろ」

ケルベロス［そいつは無理な相談だぜ。引き剥がしちまったら後で譲ちゃんに怒られるもんな。さ～てとこれを酒のツマミにしてバハムートと語り合いますか］

バハムート［犬と話す事などありません……］

ケルベロス［いい度胸してんじゃねえか、テメー。あっちでちょっとツラ貸しな］

バハムート［いいでしょう。たかが犬風情に高貴な竜の私を倒せる訳がない事を教えてあげます］

ケルベロス［上等じゃねえか、たかがトカゲ風情が哺乳類舐めんなよ？そっちこそ地獄の番犬の力に屈してヒイコラ言わせてやるぜ。

んじゃ、相棒そう言う訳で良い夜を…ウヒャヒャヒャ」

バハムート［良い夢を見てください、若］

そうその光景を見て嬉しそうにそう言って二振りの剣は虚空に消えていった。

バルド「ったく、あいつ等は要らん事に気を使いやがって……だが」

一度フェイトを見る。その寝顔はとても安らかだった。バルドは何とか片手だけ上手く出してフェイトの頭を撫でる。すると更に蕩けた様な感じになってバルドの胸に埋まる様にモゾモゾと動く。

バルド「っま、偶には悪くは無いか……」

そして、バルドも目を閉じる。その夜、彼の夢はとても温かな光の中に包まれていたという事を此処に記しておく事にする。

# 第二十二話（後書き）

如何でしょうか？最初の部分はある人の過去ですが……何となく分かりましたよね？さて、今回は比較的穏やかに終わったと思います。偶にはノンビリするのも良いですよね？

バルドは、随分と次元や銀河系には詳しいですがそれは後々分かるようにする予定です。……あくまで予定ですが…。

ガルド「バルドの奴、最後は良い雰囲気で終わったな」

ですが、彼は今のところフェイトさんには特別強い感情は持っていません。強いて言うなら世話のかかる妹（？）辺りでしょうかね。因みにカインの方もなのはの事を似たような感情で接しています。

クラウド「二人は鈍感なのか？逆にシリウスは凄えアプローチ紛いの事してるぞ？」

シリウス「はやて、ＬＯＶＥ～～♪」

はやて「やかましいわ！！」

シリウス「へぶっ！？」

ハハハ……。どこまで本気か分からないけどね～。バルドとカインについては段々とそういうイベントを増やして感情を揺さぶろうかと考えています。今のところだけど……。さて、次回も街中散策をしようかと考えていますがイマイチ出来が悪くなりそうな予感です。ってか嫌な予感しかしないのは何故だ……？

ヴィータ「そりゃ勿論、作者がダメダメだからだろ？」

……ｏｒｚ

クラウド「落ち込んじまったぞ？それでは、これを読んでくださった読者の皆様これからもこの小説を宜しくお願いします！！それでは、さよなら～」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第二十三話（前書き）

やっとここさ更新できました……。もう私のライフはゼロに近いです……。

何かもう…一言でいえばグダグダです！！そしてもう何にが何やら分かんなくなりました！！

バルド「所謂、迷走ってやつか？」

多分それだと思います……。そろそろ軌道修正せねばならんのに動く気配が全く見られんのは何故だ！？

シリウス「それが作者クオリティーなんだろ？」

……（。Д。）

シリウス「あ、あれ…？お～い作者～？」

ロイド「立ったまま気を失ってるぞ……」

クラウド「今の結構効いたんだろうな…ボディブロー的に……」

リリス「少ししたら戻ってくると思いますので本編をどうぞです！！」

# 第二十三話

気付いたらフェイトは雨の降り続ける荒野に立っていた。

フェイト「ここは……？」

見た事も無い場所だ。周囲には何もなく唯、草木の無い荒野が続いている。

これは夢なのだろう。いや、夢だと確信が持てた。何故なら降りしきる雨は自分にも当っている筈なのに自分の服は全く濡れていないのだからそうなのだろう。

――――S――――!!

雨の音に混じって何か聞こえた。その方向に無意識に歩を進めた。

フェイト「あ……」

そこには地面に膝を突いている一人の赤い髪の少年とその少年をまるで蔑む様に見降ろしている二人の男女がいた。男性の方は手に剣を持っている。そして、少年は腕を手で押さえており足元には血が広がり始めている。掠れた少年の声は離れているフェイトにも聞こえた。

少年「とう……さん…？何で……？」

少年の言葉を聞いてフェイトは驚愕した。少年を傷付けたのは目の前の男性で少年の父親なのだ。
その隣にいるのはきっと彼の母親だろう。信じられないという風に少年も驚愕で目を見開いている。
そんな少年に父親は淡々と語り出す。

父「今迄お前を育ててきたが今回でハッキリと分かった。お前は忌み児だ。このまま村に留まらせれば何時か村が滅びてしまうかもしれん。だからお前を殺す」

少年「そ、そんな……で、でも村の人を守れたのに何で……」

母「その力こそが忌み児の力だと察しなさい」

父「最早、お前をあの村には置いておけん」

そう言って剣を構える父親。少年は少しずつ後退りを始める。

少年「じ、じゃあ僕が村を出ていくからお願い……殺さないで……」

悲壮に少年は懇願するが、父は首を横に振った。

父「いや、お前は生きている事事態が問題なのだ。お前が生きているからこの地に災いが降りかかる」

母「死になさい。今すぐに」

目の前で繰り広げられる会話にフェイトは声を失った。実の両親に死ねと言われて心が耐えられる筈がない。実際少年は最早動きすら止まって目を大きく見開いて口を震わせて二人を…両親を見ていた。

少年「とう……さん……かあ……さん……」

父「その名で私達を呼ぶな!!呪われし忌み児が!!」

フェイト「だめ……だめえぇぇぇぇぇぇ!!」

フェイトが止めようと叫ぶも聞こえていないのか父は少年に激昂して剣を振り抜いた。少年の体から血が噴水の様に噴き出る。驚愕に目を開いたまま少年は地面にうつ伏せに倒れた。

その少年を見下しながら父親は剣に付いた血を振り落とし鞘に納め

る。

父「これで終わった。これで、村に平和が戻るだろう……」

そう呟いて二人は去って行った。フェイトは彼の下に駆け寄ろうとするがしかし、足が動かなかった。

フェイト「ど、如何して!?」

必死になって動かそうとするが全く動かない。夢だからなのか!?早くしないと彼の命が……と思ったその時少年の体がピクリと動いた。

少年「う…うぅ…な…ん……で?如何…して……僕は……皆を守り……たかっただけ……なのに」

少年の目から涙が溢れて雨と混じる。土を掻き毟り歯を食いしばって、その目は憎悪に燃えていた。

金色の瞳を輝かせて両親が去った方を睨んでいた。

その時……

――――憎いか？……人間が憎いか？

空間に声が響き渡る。そして、少年の倒れている真上に黒い巨大な何かが現れた。

フェイト「な、何……あれ……」

それは、黒い、闇の様に……いや、闇より濃い暗い色をした球体だった。何かが蠢いている様にそれは時折形を変えており、中央に巨大な目があった。辺りに強烈な寒気が奔る。

それから発せられているのだろう魔力が禍々しく見えてフェイトの目の前に広がり、彼女は自分の体が震えるのを自分の体を抱きしめる様にして抑えた。

少年「誰だよ……アンタ……」

――ほう……私の姿を見ても何とも思わないのか？クックックック……面白い――

――貴様、自分に刃物を振りかざした者が憎いか？――

少年「だったら……何？もう、僕は死ぬんだ……。憎いけどそれは果たせないんだよ……」

――クックックック。ならば、貴様を生き返らせてやっても良いぞ？――

少年「アンタは一体……」

――私の名は……銀河意思、ダーク。貴様ら人間を……いや、この星を……銀河系を数多の星星（ほしぼし）を生み出した原初の暗黒の神（イモータル）だ――

――貴様が生きたいのであれば我が力を授けても良いぞ？さあ、思い出せ。貴様を虐げて来た人間どもを！！貴様を殺そうとした両親を……いや、人間を！！さあ、その力を開放しろ！！人知を超えた圧倒的な力を！！その力を持って愚かで傲慢な人間どもを滅ぼすのだ！！――

少年「あ……あああ……あああああああああ！！！」

少年から黒い魔力が溢れだす。それを見てダークはニヤリと目を細めて笑い球体から一本の針の様な物が形成される。

――さあ、我が力を授けよう！！存分にその力を使い人間を滅ぼせ！！貴様も今日から我ら暗黒（イモータル）の住人の一員だ！！――

そう言って少年にその針を突き刺した。一瞬ビクリッと体が跳ねた後、動かなくなった。暫くして少年は立ち上がった。

少年「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ッ！！！！」

人間の叫びとは言えない様な雄たけびを天に向かって上げる。空を覆っていた雲が黒く濃くなり完全に太陽の光を遮ってしまった。

地獄の業火の様に黒い、漆黒の闇の炎が天高く立ち上る。

そして、一瞬にして視界の風景が変化した。次に見えた景色は黒い炎が燃え盛る村だった。

フェイト「アステナ村？」

黒い炎に燃えていたが看板が炎に焼かれ消える寸前にフェイトはその村の名前を見た。

突然村の中で爆発が起きる。それは断続的に起きてその度に人の悲鳴が聞こえた。

フェイト「ひっ！」

大地が赤く染まっており村の所々に人が倒れている。それはとても凄惨な状態だった。
ある人は倒壊した家の尖った柱に胸を貫かれた状態で宙に浮いており、ある人は頭部が吹き飛んで首から上が無かった。ある人は体の中から何かが爆発した様で原型すら留めていなかった。

まるで地獄絵図の中に先程の少年は平然と歩いていた。だが、その体は人の血で赤く染まっていた。

そして、ある家に入って行く。その中には先程少年を斬った両親がいた。

父「ば、化け物め！！」

少年「……」

そんな父を少年は見下して見ている。

少年「……捻じれろ」

父「ぐっ、がぁぁぁぁぁぁ！！？」

少年が呟くと父親の両腕が突然捻じれた。骨が折れる音が響く。

母「こ、この化け物！！」

母が拳銃を持ってそれを少年に放つ。それは頭部に直撃し少年は吹っ飛んだ。

しかし、倒れる寸前に足を踏ん張り平然と立つ。額には潰れた銃弾が張り付いておりそれが落ちる。
その頭部には撃たれた跡が全くなかった。

少年「やっぱり、そうか……」

そして、何かを諦めた様に溜息をついた後少年は両親を再び見る。
その表情には悲しみの色が濃く映っていた。

少年「……爆ぜろ」

その瞬間両親の体が膨らみ爆発。周囲に臓物を撒き散らして絶命した。

それに一瞥もせず少年は家の外に歩き出す。その目は金色ではなく血の様に赤く染まっておりその目には黒い六芒星が描かれてあって

その中央には黒い十字架があった。

――フッフッフ、素晴らしいな。それほどの力を持っていたのか――

少年「で？俺を如何する気なんだ？」

――お前はこれから私と共に来てもらう。安心しろそこに散らばってるゴミよりは素晴らしい暮らしが待ってるぞ――

少年「そんな事は如何でも良い。行くんならさっさと連れて行け。っとその前に……」

虚空を見上げてると上空に巨大な空を覆い尽くす様な魔法陣が現れた。

――ほう、これはこれは……――

ダークもそれを見て少々驚いていた。

少年「星よ……その生涯を終えて……滅びよ。さよならだ、俺の世界」

大地に向かって漆黒の稲妻と火柱が落ちて大地を貫いた。そして、世界が揺れ始める。

少年「これでいい……じゃあ、俺を連れて行け」

――フフッ、では参ろうか――

崩れ始める大地、空間。その中で少年はダークと共に闇の中に消えていった。
そして最後にダークという者の笑い声が聞こえる。

――ようこそ、永遠の闇の世界へ……新たな闇の住人よ――

闇が消えると同時にその星は……死を迎えた。そしてフェイトの見ていた夢もそこで終わりを迎える様に白く染まった。

フェイト「ん…んん……」

フェイトは寝返りを打とうとしモゾモゾと動こうとしたが自分が何か暖かいものに抱き着いているのに気付いて目を開けると、目の前には誰かの胸板があった。視線を上げるとそれはバルドだった……バルドが隣で寝ていた……バルドが隣で寝ていた!!?

フェイト「えっ!?バ、バルド!?」

気付けばフェイトは充てられた自分の部屋で寝ているのに気付く。如何やらあの後寝てしまったらしい。そして、今、自分はバルドに抱き着く形で寝ている事が分かり体が熱くなって来るのが分かった。今自分の顔を鏡で見たら間違いなく真っ赤に染まっているのが分かるだろう。

ケルベロス「よぉ、おはようさん。嬢ちゃん!!」

フェイト「ひゃあ／／／／／／!?」

突然ケルベロスが寝ている二人の上に現れて話しかけて来たのでフェイトは驚いてビックリした。

フェイト「ケ、ケルベロス!ど、如何してバルドがと、とと隣で寝てるの／／／／／!?」

ケルベロス［何でって…嬢ちゃん直ぐに寝ちまったから相棒が此処まで運んで来たけど嬢ちゃんが相棒を離さなかったから相棒は此処で寝ただけだが？］

フェイトはそれを聞いて驚いた。まさか自分が寝ぼけてバルドを離さなかったなんて……恥ずかしさのあまり慌ててフェイトはバルドに回していた腕を離して起きようとしたが……

ケルベロス［ああ、嬢ちゃん急に離れようとすると――］

バルド「んん……」

フェイト「え？きゃあっ！？」

離れた瞬間今度はバルドがフェイトの背中に腕を回して逆に引き寄せた。

起きた時よりも更に密着する形になってしまった。

ケルベロス［あ～あやっぱこうなっちまったか～］

フェイト「バ、バルド／／／／／／！？」

ケルベロス［無駄だぜ譲ちゃん。相棒は朝に弱いんでね中々起きようとしないぜ、知ってるだろ？起したいんだったらおはようのキスでもしたらどうだい？ウヒャヒャヒャ！！］

フェイト「キ、キキキキス／／／／／／／／／／！？」

目の前では何時もの端正な顔からは想像も出来ない位に安らかに眠っているバルドがいて今フェイトはそのバルドの胸板に押しつけられており彼の心音が体を通して聞こえる。

一定のリズムを刻むその音は聞いていて落ち着けるものだったが、脳裏にケルベロスが言っていた言葉がリフレインしそっとバルドの顔を見る。

寝ている彼におはようのキスをする……想像しただけで心臓が爆発しそうに脈打ち、恥ずかしさに頬を朱に染める。

バルド「んん～～……」

フェイト「あっ……」

その間に再びバルドが更にフェイトを引き寄せる。最早全身が彼にくっ付く状態になってしまった。

フェイト「あ……ん…ふぅん……だめ、バルド……起きて……」

これ以上抱き寄せられたら……でも、このままでもいいかも……と思う自分が何処かにいたりする。

そして、こう言う時に限って親友とはタイミング良く現れるものだ……。

なのは「フェイトちゃん、起き……て…る……？」

フェイト「あ……」

ＯＫ、なのは視点で考えてみよう。親友は起きている。これは間違いない。だが、今、親友は…フェイトは彼女が好意を寄せている人に抱かれている。しかも……ベッドの上で／／／／／／つまりは、既にそういう関係になったという事か！？いやいやまて！こう言う事には親友は非常に奥手だ。だが、今の現状がそれを物語っている。何とも羨ましいシｔｙ…ゲフンゲフン！！自分もカインとは寝た事もあるがそれはヴィヴィオも一緒だ。……いやまて、昔何度かあったはず。そういえば、今はカインは一人で寝てる。これはつまり……

ＯＫ、フェイト視点にそろそろ戻そう。

なのは「フ、フェイトちゃん……」

フェイト「ち、違うのなのは／／／／／／／／！！これには訳が……！！」

なのは「そ、その手があったの！！」

フェイト「え、えええぇぇぇぇぇ!?ちょっ、なのは!?」

なのははそのまま部屋の扉を開けっぱなしにして何処かに駆け出した。

フェイト（せめて扉だけは締めて～～!!）

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――

所変わって此処はカインの部屋。

カインはぐっすり寝ている。実は昨夜は少々遅くまである事をセフィリアやガルドと話し合っていて寝不足なのだ。

寝返りを打った時に何か柔らかいものに触れる。何だろうかこれは？取り敢えず握ってみる事にした。

――フニフニ――

なのは「あ……そ、そんな所握っちゃ……んっ、やぁ…／／／／／」

何か聞こえた様な気がしたが何となく感触が気持ちよかったので引

き寄せて抱きしめる。

なのは「あ……」

何やらシャンプーの良い匂いがする。それに暖かくて気持ち良くて更に抱き寄せる。

なのは「そ、そんなに抱き寄せられたら……ふにゅ～／／／／／／」

ギュ～っと抱きしめていたがそこでふとカインは疑問に思った。自分の部屋にそんな柔らかいものなんて置いてあっただろうか？いや、無い……

カイン「んん……」

目を開けるとそこにはなのはが自分に抱きしめられた状態でいた。上目づかいで此方を見ておりその瞳はウルウルしていた。

カイン「なの…は？」

なのは「あ、カ、カイン君……おはよう／／／／／／／」

暫しの思考停止……

カイン「なに……やってんだ……？」

なのは「え、えっと……ふにゃ～～／／／／／／」

抱き合ったまま会話する二人……。取り敢えずそろそろ離れてくれ。書いてる人の身にもなって欲しい……。身悶えしながら書いてます。

――――――――――――――――――――――――――――――――

あの後バルドも目を覚まし何故か自分がフェイトを抱きしめているのに気付いてアタフタし朝の二組の嬉し恥ずかしいイベントは終了。

朝食を摂った後、アリア達は再び仕事に行き、ガルド、セフィリア、クラウド、ティファ、もそれについて行き、今日はリリスが一緒な以外昨日とあまり変わらぬメンバーで資料館に向かう事にした。

パスを見せ受付を通り、資料館内に入る。

はやて「こ、これは……」

なのは「凄い……」

そこには沢山の本棚に数え切れないほどの本がキッチリ整頓されて置かれていた。

バルド「此処にあるのは電子文章化し終えたものを置いていてな、貸出し出来る様に複製して置いてあるんだ」

カイン「此処にあるのは貸出し出来るから借りたいのがあったら一冊くらいなら借りても良いよ」

コレット「ロイド、ロイド！！新しい本が並んでるよ、見に行こ！！」

ロイド「コ、コレット！そんなに急ぐとまた転ぶぞ！！」

ロイドはコレットの後を追いかけて去って行く。

そして、直ぐに「ふみゅっ！？」と言う声とガッシャーンッ！！という音が聞こえてくる。

ロイド「だから急ぐなって言っただろう！？」

呆れた声が聞こえて来た。案の定転んだのだろう……。「ぎゃーー

っす！！」と言う本の山に埋もれた哀れな犠牲者の声と職員が慌ただしく動いているのが見えた。

と言う訳でなのは達も資料館内を散策する事にした。シグナムは何やら剣術系の事が書いてあるエリアを見つけたらしくそこに足を踏み入れ読み耽っていた。

シグナム「むっ？この様な剣術がベルカの時代にあったのか？……む、このデバイスは！？」

ニートな…ゲフンゲフンッ！！バトルマニアな…エフンエフンッ！！戦闘ｋｙ…じゃなくて彼女が本を読んでいるのが珍しくてそこを通り過ぎたフェイトはシグナムに話しかけた。

フェイト「シグナム如何したの？」

シグナム「テスタロッサか。この本になベルカの時代にあった剣術が記されているのだがその中にレヴァンテインに似たデバイスがあったのでな」

そう言ってその部分を見せる。そこを見ると確かにレヴァンテインにそっくりだ。

フェイト「バル……ムンク？」

シグナム「うむ。それで、次はそのデバイスの事を調べようと思うのだ。テスタロッサも何か気になる事があるのなら探してみるのも良いと思うぞ？」

そう言ってシグナムは探しに去って行った。

フェイトはそこでふと今朝の夢を思い出した。もしかしたら……

そう思いフェイトは、イ行の欄にある本棚を見つけてそこを探し始める。数多の本が並んでおり中々に困難だったが……

フェイト「あ……」

『イモータル』という文字の書いてある本が一冊だけあるのを見つけた……。著者名は書かれておらず不思議に思ったがそれを取って表紙を見て見る。

フェイト「『銀河生誕時代』？」

本を開き目次を見る。そこには注意文が書かれていた。

――これを手に取った方に一つ忠告しておきます。此処に書かれ

ている文は全て空想事に近いです。これを信じる信じないは貴方に任せます。ですが、これだけは覚えておいてください。人は万能ではありますが全ての生命体の頂点に立つ者ではありません。私達人間は生態系の中で下の位置です。本当に頂点に立っているのは彼らなのだ。彼らにとって我々は唯の傲慢な存在なのだ。――

彼らとは一体……そう思いつつフェイトはページを捲る。

フェイト「原初の神（イモータル）？まさか……」

気になる文があったので読んでみる事にした。

――ビッグバンによって今の宇宙は……世界は生み出された。それは一つだけではない。幾つもの宇宙が我々がいるこの世界と隣り合わせで存在する。さて、そもそもこの銀河系に存在する数多の命を育む星はどの様にして生まれたのか……古き民の伝聞では次の様な事が伝えられていた。『銀河が誕生したと同時に一つの闇が生まれそれが世界を星を作り出した。その者の名を銀河の根源、銀河意思、ダークと呼ぶ』と…。そして、それは数多のイモータルを生み出した。生きとし生ける者の頂点に立ちその強大な力で他の生命体を滅ぼす。そして、その原初の存在、ダークの姿は黒い球体と言われている。と言うが誰がその存在を見たのか一切不明なので確証がないが。その大きさも伝承が幾つもありそれに綴られている大きさもまちまちで、人のサイズだった、星と同じサイズ、いやいや、銀河よりも大きい、等と最終的には宇宙と同等のサイズとまで綴られているものもある。

そして、彼等は人間の生き血を飲むらしい。そして、血を吸われた者は皆、イモータルの下僕の吸血鬼（ヴァンパイヤ）となり人を襲う。――――

ページを捲りながら次々に綴られている文を読んで驚愕した。

フェイト「質量兵器が効かない……？」

そう、イモータルやヴァンパイヤには拳銃も戦車の砲撃も意味を成さないという。過去に人間と闇の一族との抗争があったそうだが敵に攻撃が通用しない為にその戦いで多くに人が闇の下僕となった様だ。幾つもの敗戦を繰り返し人々は恐れ慄き彼らから逃げる様に星を去る。そして、散らばって行った人々は多くの世界に逃げ込み命を育み今の自分達が存在すると言う。だが、今この瞬間にも一つ、また一つと生命のある星は彼らの強大な力によってその生涯を終えて新たに誕生しているらしい。

――――さて、そんな圧倒的力を持つ者たちですがやはりそれでも実力社会は存在する様でイモータルの中にも階級と言うのがある様です。下級、上級と分けられそれより上の者は最上級の位置に入る。そして、その中でも更に強大な力を持つ者には王の位置に入る。此処まで来るとその力は神にも等しい存在となる（あくまで憶測だが……）。そして、王はその圧倒的な力から質量兵器はおろか魔法すら無力化していたそうだ。――――

次々と現れる驚愕の文章にフェイトは釘付けになっていた。

バルド「フェイト？」

フェイト「あっ、バルド！？」

咄嗟に何故かフェイトは読んでいた本を背中に隠す。

バルド「何か読みたい本があったか？」

フェイト「う、う～ん。今悩んでるところ……かな？」

バルド「そうか、決まったらそこで借りる事を進言しとけよ。後、そろそろ昼食の時間だからな」

フェイト「ええっ！？」

時計を見て見ると確かにそろそろ針が１２時を指そうとしていた。

バルドはそう言った後、その場を去って行ったのでフェイトは慌てて先程読んでいた本を借りる事にして資料館を出た。

昼食を摂りにある店に入る。名前が『恋恋（こいこい）』とは何とも変な名前だ。

店員「いらっしゃいませ～！！何名様ですか？」

カイン「大人12人、子供4人、ドラゴン5匹だ」

店員「は～い！かしこまりました～！！大部屋へごあんな～い！！」

キャロ「あれ？子供4人ですか？ってことはヴィータさんも……」

ヴィータ「あたしは大人だ！！」

シリウス「知ってるよ？だからヴィータも大人に数えたんだけど？」

エリオ「じゃあ残りの1人は？」

シリウス「はやての胸ポケットで寝てるじゃん」

そう言われて全員が「あ～」と納得した。ポケッ～トの中にはリインが一人～♪

フェイト「それよりも皆……ドラゴンって言っても店員さんが驚いてない事に気づいて……」

なのは「にゃはははは……」

大部屋への通路を通る時、周囲の席には多くの客が座っているのが見える。

はやて「随分とこの店は人気あるんやね？」

シリウス「まあ、今グランディオンの中で一番人気の店だからね～」

部屋に通されて座っていると再び店員がやって来た。

店員「は～い！！アル達のご飯お待ち！！」

なのは「な、何これ……」

ドンと置かれたのは長さ1メートル、厚さ1メートルというトンデモステーキだった。

アル「キュ～♪」

ウル「ギュッ♪」

レイ・レン「「キュク～♪」」

アル達はフリードも食べる事を促し、フリードは恐る恐る食べる。

だが直ぐに……

フリード「きゅくる～？」

何とも幸せそうな声を上げてアル達と楽しく食べ始めた。

シグナム「見てるだけで腹が膨れそうなんだが……」

ロイド「まあ、そうなんだけどな。取り敢えず皆も何か選んでくれ」

選んだ料理を注文すると数分で注文した料理が運ばれてくる。

ティアナ「はやっ！？」

店員「当店はお客を待たせませんよ～♪速さが当店の自慢です～。あ、後、味も一級品だと自負してます～♪」

「では、ごゆっくり～♪」と言ってた去って行く店員。数分では出来ないと思われる量の料理を注文した筈なのにこの速さ……唖然としているなのは達

スバル「あ～！！ホントだ！！これ美味しい！！ティアティア！！これホントに美味しいよ！！」

だが、唖然としてる六課陣の中、唯一人スバルだけその状況を気にせず食べてるのは大物なのか、胆力があるのか、はたまた唯の馬鹿なのか……多分後者だろう……。

バルド「皆も早く食わないとスバルに全部持ってかれるぞ？」

ティアナ「え？って、スバル！！アンタ何私の頼んだ料理にまで手を付けてるのよ！！」

スバル「だって～、こっちも美味しそうなんだもん！！」

バルドの声に我に返ったティアナがスバルを叩き、抗議の声を上げるスバル。

そんな感じでギャアギャアワイワイと騒ぎながら皆で食事をする。

コレット「ロイド、やっぱり此処の料理は美味しいね♪」

ロイド「だな！……あ、コレットちょっと動くなよ」

そう言ってコレットの唇付近に付いてるご飯粒を取りそれをパクッと食べた。

ロイド「うん、やっぱり此処の店のは美味いな！！」

コレット「ロイド、行儀が悪いよ～」

ロイドの行為を窘めるコレット。皆の前で桃色世界を展開しないでほしい……。

カイン「ったく、こいつ等はデフォで桃色世界を作りやがって……」

多分本人達も全く気付いてないだろう……。

コレット「あ、リリスちょっと動かないでね」

リリス「ん～～～」

ロイドとコレットの間に座って栗鼠の様にご飯を詰め込んで頬を膨らませてるリリスの口の周りをハンカチで拭くコレット。

コレット「はい、これでだいじょぶだよ」

リリス「ふぁりふぁとうふぉふぁいまふ、おひょうふぁま（有難うございます、お嬢様）！！」

ロイド「食い終わってから言えよ……」

そう言って苦笑いしながらリリスの頭を撫でるロイド。それに幸せそうな顔をして撫でられてるリリス。

なのは「3人はホントに中が良いね。家族みたいに見えるの」

ロイド「ん?そうだな…リリスは俺やコレットにとって妹みたいなもんだからな」

コレット「でも、そんなリリスには頭脳じゃ負けるね」

リリス「エッヘン!!リリスは頭が良いのです!!」

まな板の様な胸を張るリリス。今は子供の容姿ゆえ子供が背伸びしている様に見えて何とも微笑ましい光景である。

バルド「フェイト、如何だ?此処の店の味は?」

フェイト「うん美味しいよ」

バルド「なら良かった……。そう言えば借りた本は何ていう本だ?」

フェイト「ふぇっ!?えっと……それは……」

ケルベロス[相棒、それを聞くのは野暮ってもんだぜ?]

突然二人の間にケルベロスが現れる。

バルド「如何いう意味だ？」

ケルベロス［か～～！！分かってねえな！！女が調べるっていやぁ～夜の特別じゅｇｙ「それ以上は言わないで！！」スパムッ！？」

何やらとんでもない事を言いそうだったので咄嗟にバルディッシュをザンバーフォルムにしてケルベロスに叩きつけ黙らせる。危うかった……。

バルド「む…そうだったのか……すまんフェイト聞いてはいけないものだった様だな。だが、あまりそう言うのはオススメ出来ないな」

フェイト「あ、あう～～／／／／／／」

バレなかったのは良かったのだが何やら酷い勘違いをされているので素直に喜べないフェイト。

いっその事夜に本当に襲うべきか！？いやいやまてまて！！自分は攻めよりも受けの方が……って何を考えてんだ自分は！？ああ…でも、彼になら激しく――って違う違う何を考えているんだ／／／／／／！？

一人で真っ赤になって悶々としているフェイトを見てバルドは不思議そうに首を傾げるのだった。

シリウス「ねえねえ、はやて」

はやて「なんや、シリウス君？」

シリウス「はい、あ～ん」

はやて「なっ！？」

呼ばれたのでシリウスの方を見るとシリウスが箸に料理を乗せてはやての口元に持ってきていた。

シリウス「はやて、あ～んだよ？」

はやて「な、な…そ、そないな事、恥ずかしくて出来んわっ／／／／／／！！」

シリウス「え～～、それじゃあ仕方ないな～」

そう言って箸に乗ってた料理を自分が食べる。それを見てホッとするはやてだが、シリウスはそのままはやての肩を掴み自分の方に向けさせて、

シリウス「んじゃ、口移しで……」

はやて「な、なななななな／／／／／／／／／／／／！？」

シリウス「はやて……「やめんかいっ!!」鉄ハリセンッ!?」

遂に鉄にバージョンアップしたハリセンにぶった叩かれて撃沈するシリウス。

だが、読者のみなさん、よくお考えください。正座して向かい合ってる人に向かって思いっきりぶった叩くと如何なりますか?正解は……

はやて「なっ!!シリウス君!?」

はい、足の間に頭がダイブで~す。

シリウス「イタタタ……」

はやて「か、顔今あげたらあかん!!」

シリウス「あ……白……」

シリウスは如何やら見てしまった様です……。シリウスは見たっ(家政○は見たっ)!!的な感じで……

はやて「うが~~!!忘れんかい!!」

シリウス「いやだ!!これは俺の心のメモリーに三重プロテクトを

掛けて保存するぜ！！」

はやて「うちがお嫁に行けんわ！！恥ずかしいから忘れてや／／／／／！！」

シリウス「心配無いさ！羞恥心も行き過ぎれば快感にｎ「ならんわ！！」本日二度目！！」

スパーンと音が響きシリウス撃沈……これにて本日のはやて劇場閉幕～チャンチャン♪

シリウス「俺……何時か透視ではやての着てる下着を当てるんだ「当てんでええわ！！」本日三度目！！」

二人の愉快な会話を見ていたエリオは苦笑いをしていた。そして、ふと隣にいるキャロの様子がおかしいのに気付く。

エリオ「キャロ？如何したの？」

キャロ「あ……え、えっと、その／／／／／／／」

頬を朱に染めてモジモジしている。そして、箸に料理を乗せてエリオに向く。

キャロ「はい、あ～ん／／／／／／」

エリオ「伝染してる！？」

慌てるエリオは周囲に視線で救援を求めるが……

なのは（わ、私もカイン君にやってみようかな／／／／／／／？）

カイン（何故だろうか…隣から寒気を感じる……）

バルド（男を見せろ、エリオ）

フェイト（ドキドキドキドキ／／／／／／／／）

スバル「モグモグモグモグ！！」

ティアナ「こらスバル！！私のを持っていくなって行ってるでしょ！！」

リリス「はい、ヴィータちゃん落さない様に気を付けてね～♪」

ヴィータ「テメーあたしを馬鹿にしてんだろ……？」

シグナム「うむ、美味いな」

何でだろう……今更になって此処にいる人達がまともな人が一人もいないというのに気付いちゃったよ……

キャロ「やっぱり……嫌だったよね……」

エリオ「そ、そんな事ないよ！あ、あ～ん／／／／／／」

意を決して箸に乗ってる料理を食べる。

キャロ「エリオくん、如何…かな？」

エリオ「うん……美味しいよ」

中々に良い雰囲気である。そして、こういう時には必ず茶化す奴がいるのだ。

ケルベロス［熱いねぇ二人とも～！ウヒャヒャヒャヒャ！！因みにさっきの箸はキャロ嬢がさっきまで使ってた箸だぜ！！］

エリオ「え、ええ～～～／／／／／／！！」

つまり……間接キッス～♪

驚いてキャロの方を見るとキャロは既にその箸で料理を食べていた。

そして、ケルベロスの言葉が聞こえたのだろう。口に銜えたままキャロは顔を真っ赤にオーバーヒートさせて機能停止に陥っていた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

そんなこんなで騒がしくも楽しい食事を過し、午後もその様に楽しい時間を皆で過ごしてその日の夜……、

エリオは自室で本を読んでいた。本の題名は『グランディオンの歴史』と書いてある。

エリオ「やっぱり、ロイドさん達は凄かったんだ……」

読みながら思った事が口から出た。最初はグランディオンは弱小国家だった。
しかし、ロイド達の活躍もあって徐々に勢力を伸ばし今に至ったと此処に記されている。

その中でも最も苛烈な戦いだったのが『レギオン軍』との戦いだった。
この戦いで数千もの死者が出たという。だが、本当なら数万以上にも及ぶとの計算が出ていたのだ。
それが何故そこまで抑える事が出来たのかと言うと、ロイド達の活躍があったからである。

特にロイドの活躍は目覚ましく、『天使撃墜作戦（エンジェルダウン）』で自分を犠牲に

して数千もの兵を救ったとされるその結果、ロイドは敵の凶弾に倒れ海に沈んだ。それを後に聞かされたコレットは怒りで暴走し単騎で敵の大部隊に戦闘を仕掛け、周囲を焦土に変え敵に壊滅的被害を与えたという。この事件を『天災事件』と呼ぶ。

エリオ「もしかして、ロイドさんの胸にあったあの傷は……」

前に見たロイドの傷を思い出す。それはきっとこの戦いで負ったのだと確信が持てた。

その後も読んでいると不意に外で空気を斬る音が聞こえた。

外を見ると庭でロイドが剣を振るっている。それは洗練された動きで闇夜に剣閃の軌跡が幾つも煌めく。その傍らでは、コレットがいて彼女も体術の練習をしている様だ。

エリオは寝ているキャロを起こさない様に静かに部屋を出た。

キャロ「んん……？」

エリオが部屋を出た後、キャロは目を覚ました。

キャロ「エリオくん……？」

キャロはエリオがいないのに気付いて外を見てコレットとロイドがいるのを見つけると、何かを考える素振りをした後、部屋を出て行った。

―――――――――――――――――――――――――――――――

ロイド「フッ…フッ……ハァ！！」

ロイドの周りで空気が入り乱れる。それは全て剣によって巻き起こされている。

ロイド「コレット、今日はこの位にするか？」

コレット「ん～、そだね。明日は皆と一緒にウルフの所に行かないといけないし」

そう言って軽く出た汗をタオルで拭く。今日はこの位にしようかと思っていたが……

エリオ「ロイドさん！！」

如何やら、今夜は長くなりそうだ……。

ロイド「エリオか…。如何したんだ、こんな夜中に？明日は何が起こるか分からないから早めに寝た方が良いぞ？」

エリオ「え、えっと……あの、その……」

いざ言おうと思うと中々上手く伝える事が出来ないものだ。シドロモドロしてるエリオの下にコレットがやって来てエリオの頭を撫でる。

コレット「ロイドは無茶なお願い以外は聞いてくれるからだいじょぶだよ」

そう言ってニッコリ笑うコレットに勇気をもらったエリオは意を決してロイドに向き合う。

エリオ「ロイドさん！！僕に戦いを教えてください！！」

ロイド「エリオ……」

エリオ「僕は前回、プロヴィデンスの幹部の一人に全く歯が立ちませんでした……。それだけでなく、キャロも助けられなかった……。だから、僕は強くなりたい！！皆を守れるような強い騎士になりたいんです！！」

お願いします！！と言って頭を下げるエリオ。それを見てロイドは参ったな～という風に頭を掻く。

ロイド「言っとくけど、俺はエリオの思ってるほど強くも何ともないぞ？」

エリオ「え？だって、ロイドさんはあんなに……」

ロイド「前にも言ったけど、俺が強くなれたのはこのエクスフィアのお陰だ。これが無かったら俺はエリオ達よりずっと弱いぞ？」

そう言われてエリオは驚愕に目を見開く。自分達より弱い？そんなの有り得ない。ロイド達は確かに強い。例えエクスフィアと言うのがなくても自分達よりは絶対に強いと思った。

ロイド「う～ん、まあ、その事はいいか。……エリオ、一つ聞きたい事がある。正直に答えてくれ」

何時に無く真剣に聞くロイドにエリオは、自然と背筋を伸ばした。その傍らでコレットは静かに聞いている。

ロイド「お前は、その背に命を背負う覚悟はあるか？」

エリオ「え？」

ロイド「お前が、もし人の命を奪ったとしてその命を背負っていけるか？」

エリオ「ぼ、僕達は、そんな事……」

ロイド「絶対にやらないという確証は無い。いつか必ずその日はやって来る。その覚悟は出来てるのか？そうじゃなきゃ、今俺達のいる所には一生掛かっても並ぶ事は出来ない！！」

エリオ「ロ、ロイドさん達は……その覚悟があるって言うんですか？」

ロイド「ああ、もう随分と前に決めている。エリオ達には話していないけど、俺達は既に数え切れないほどの人を倒してきてるんだ。今、俺達が此処に生きていられるのもその結果だ。そして、俺達はその奪った命を背負ってその人達の分も生きて何かを成し遂げなきゃいけない。エリオ、お前にその覚悟はあるか？人を殺めても自分を見失わないでいられるか？それくらいの覚悟を持ってなきゃ、俺の剣は教える事は出来ない」

エリオは逡巡した。如何応えるべきなのか。是か…それとも非か…。けど今の自分の想いに従うべきだと決めロイドを再び見る。

エリオ「僕には、その覚悟を持てるかどうかは今は分かりません。僕は、人を殺めたくない。人を斬らずに解決できるならその道を探します！！無くても必死になって探すと思います！！探して、探し

てそれでも無かったら僕は……」

ロイド「……合格だ」

エリオ「え？」

ロイド「それを聞きたかったんだ。エリオ、人は皆生きている。誰も死んで良い命なんて何処にも無い。どんな理由があっても俺達はきっと分かり合える。それを信じて相手と向き合って、その中できっと手を取り合えると俺は思うんだ。でも、もし手遅れだったら、俺達の手でまだ人間である内に人として終わらせてあげるのが出会った俺達の成すべきことだと思う。そして、奪った命を俺達が背負って、奪った命の分だけ生きて未来を変える為に努力するべきなんだ」

そう言ってフッと笑ってエリオに近づき頭を撫でる。

ロイド「俺の戦いは我流だ。型も何もない。そんなんでもいいのか？」

エリオ「はい！！」

コレット「フフフ、良かったねエリオ。後はキャロ……そこにいるんでしょ？」

そう言ってコレットが振り向くと物陰からキャロが出て来た。

エリオ「キャロ！？」

コレット「キャロはどしたの？」

キャロ「え、えっと……コレットさん！！私に体術を教えてください！！」

コレット「うん！！いいよ！！」

ロイド「よし、そうと決まったら、エターナルソード！周囲に結界を展開してくれ。エレメントソードは防音結界を3重展開してくれ」

エターナル［承知した］

エレメント［御意］

周囲に結界が展開して世界から隔絶される。ロイドは剣を構える。
エリオもストラーダをセットアップする。

ロイド「今日は遅いから一時間だけだ。何処からでもかかって来い！！」

エリオ「行きます！！」

コレット「キャロはこっちで基礎から始めよね？」

キャロ「はい！！よろしくお願いします！！」

それから一時間、二人は鍛錬に勤しんだ。此処で得たものが何時か自分の大切なものを守る力になると信じて……。

# 第二十三話（後書き）

という訳でグダグダで終わった二十三話！はっきりと言おう…何だこれは…！？
ロイドが大人びてる！？ああ～何を書きたかったんだ俺は！？

シリウス「いや、何だって俺達に聞かれてもね？それにしてもエリオがロイドに稽古してもらう為に行くなんてビックリだな～」

ロイド「いいのかよ、俺で？」

ご心配には及びません！！後々エリオは父のバルドにも頼み実質二人が師の様にする予定です！！

ケルベロス［キャロ嬢に体術って、作者何考えてんだよ～。ウヒャヒャヒャ！！」

いや、何となくさ常に後方で戦える事なんて現実的には無理だと思うんで、取りあえず彼女には申し訳程度でもいいから身に付けて貰った方が良いと思うのですよ…はい。

コレット「次回はどなるの？」

そこは未定っす！もう何が起こるか分からないっす！まあ、期待して待っていてください！！

クラウド「いや、それは無理な相談だ」

……ｏｒｚ

カイン「え～、作者が落ち込んでいるので代わりに…。読者の皆様、これからも宜しくお願いします。あと、感想とかあればばくれると跳ね跳びますとうちの作者は言っているのであればお待ちしています。と言ってもうちの作者は何分パソコンに疎いので返答とか遅れたりする可能性があります。それでは、皆様さようなら～」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第二十四話（前書き）

更新遅れてすみません。最近体調を崩してぐったりしてました。

カイン「しっかりしてくれよ……」

戦闘不能に近い状態です。その状態で書いたから何か内容がすんごい事になったような気がします。あ～今回は前書き書く気力が殆どないっす。

では、本編をどうぞっす……。

# 第二十四話

次の日、ロイド達に連れられてグランディオンの中央にある大きな城に案内された。

なのは「街の中央にお城があるんだね」

クラウド「国民達ともっと近くで触れ合いたいって言うウルフの考えさ。これなら、何か要望があれば直ぐに聞きに行けるだろ？」

ティファ「それに、ウルフ自身が街に降りて直接聞きに行くので民衆からは非常に高評価です」

大きな門の前に門兵が立っておりロイド達が軽く会釈したり労を労う言葉をすると敬礼したりお礼を言われたりした。

城内にはいると中では沢山の人が駆けまわっている。書類を山の様に抱えて駆ける人や電子キーボードを叩きながらブツブツ呟いて歩く人、市民の話に応対している受付嬢、休憩中なのか談笑している人達。

城内は城内で街と同じ様な賑やかな所だった。そんな中一人の職員が走って此方にやって来た。

職員「剣聖殿！！今日はどの様な御用件で此方に？」

ロイド「ああ、今から緊急会議をするんだ。ウルフ達は大会議室にいるか？」

職員「緊急…会議ですか……？それは、もしや今、城内で話題になってるあの……」

クラウド「そうだ。その為の緊急会議だ。あまり騒ぎを立てるなよ？」

職員「はっ！了解しました！！ウルフ国王陛下なら、大会議室にてお待ちです。ですが……元老院の方々もいらっしゃるようですが？」

ティファ「それは知っています。この話は元老院ともしなくてはならない案件ですから」

そう言われて納得したのか職員は再度敬礼した後、足早に去って行った。

なのは《何だか……物凄く緊張してきたの……》

はやて《うちの方が緊張してるで？この六課を仕切ってるもんやし、何聞かれるのか……》

フェイト《二人とも落ち着いて。緊張してたら答えられるものも答えられないよ？それに、皆にも不安が広まっちゃう》

そう言われて二人は、エリオ達を見ると確かに不安で少し顔色が悪い。シグナムらも少し緊張してるのだろう表情が硬い。

なのは「皆、大丈夫だよ。きっとうまくいくよ」

シグナム「うむ、高町の言うとおりだな。我等は普段通りにしていれば何も問題は無い筈だ」

そう言われて少しだが皆の顔色も良くなった。暫し歩き続けて、エレベーターに乗り、最上階に行き、廊下を歩くと大会議室と書かれた札が付いている扉がある。その扉をノックすると、

ウルフ「入っていいぞ～」

と返答があったのでロイドはその扉を開ける。すると中には数十人の人が入ってもさして問題なさそうな特に飾り気も無い大きな空間に幾つもの椅子が置かれていた。
そこには、国王のウルフとアリア達、そして此方を睨みつける様な視線を送るグランディオンの重鎮、『元老院』と思われる老人達が座っていた。

ウルフ「皆、よく来てくれたね。そこに座ってくれ」

促されてなのは達は席に着く。ロイド達も場所を決められているのかロイドとコレットはアリア達のいる席の方に、残りはウルフに近い方の席に座った。

元老院一「これはこれは、円卓の騎士団の皆さま方が勢ぞろいとは随分と物々しいですな？」

ウクルス「っけ、思ってもいないこと言ってんじゃねぇよ……」

なのは「ねぇ、カイン君。円卓の騎士団って……？」

カイン「ロイド達、元帥達の事だ」

小さな声で聞くなのはにカインは彼女にだけ聞こえる様に答える。

元老院二「では、彼女達の紹介をしてもらいたいのだが？」

ウルフ「うむ、そうだな。自己紹介をお願いする」

なのは達は自己紹介をしていく。その間、自己紹介している人を元老院達は猛禽類の様に睨んでいた。

はやて「私が、この古代遺跡管理局機動六課を率いております部隊長の八神はやてと言います」

元老院三「ほお、若いのに既に部隊長か……。階級は？」

はやて「二等陸佐です」

元老院一「ふむ、その若さで既に二佐か……中々に優秀なのだな？そなたらの部隊は」

はやて「あ、ありがとうございます」

元老院五「自己紹介の時は静かに聞くのが礼儀じゃぞ、お主？」

元老院一「っち、……それは確かにすまなかったの…謝罪しよう」

はやて「い、いえ……お気に為さらないでください」

明らかに仲の悪そうな雰囲気が空気が出ている。その空気を崩す様にウルフが咳払いする。

ウルフ「さて、元老院の皆様に来て頂いたのは他でもない。時空管理局と我ら機装国家、グランディオンの同盟の件ついてだ」

元老院一「ワシは断固反対じゃ…。特に何もしとらんのにいきなり攻撃を仕掛けた世界とは同盟する気にもなれん」

元老院二「右に同じく……」

次々に拒否の声が上がる。だが、

元老院五「ワシは、どっちでもいいんじゃが？」

元老院七「ワシも同じく」

数名はどっちでもよさそうな感じで返答する。

ウルフ「反対多数か……。……で、どちらでも良いというのは棄権と判断しても良いか？」

元老院五「その判断をするのは国王であるそなたに任せる」

元老院一「貴様！何故反対せぬ！？」

元老院五「その判断をするのは個人の自由じゃろて。そう思わんかね？」

元老院一「フンッ！！」

如何やら二つの勢力に分れている様だ。

アリア「で、でもでも、六課の皆さんはこの事を知らなかった様ですから、これはあちらの裏の組織が関係してるのではないのでしょうか？」

元老院三「確証も無いのにそんなこと言っても意味がないわ!!少しは考えろ!!」

アリア「へ、へうっ!?す、すみません……」

ニーア「ちょっと!!憶測だからって何でアリアにそんなにキツク当るのよ!!」

アリア「ニーアお姉ちゃん、私が悪いんです。私が向こうの事も知らないのに余計な事を言ったから……」

ウクルス「いや、アリアの考えは的を射てるかも知れないぜ?」

ウクルスの声に元老院は皆そちらを向く。そんな中堂々とウクルスはアリアを自分の膝の上に乗せる。

元老院二「ほう、ウクルス殿、それは一体如何いう事ですかな?」

ウクルス「まず、情報によればはやて達、機動六課は最近発足した部隊で一年だけの特別に結成された部隊だ。そんな部隊を妬ましく思う奴らなんて腐るほどいるだろうし、そもそも、一部隊にそんな重要な情報を簡単に掴まれたら今の上層部もやってられんだろ?まあ、俺がそっちの上層部だったらもし、はやて達に情報が漏れたら闇に紛れて背後からブスリと刺して殺すと思うね。けど、皆は優秀な魔導士だし、情報によればそちらは今人材不足とやらじゃないか?そんな時に高ランクの魔導士の彼女達を葬る事なんて自殺行為に等しい。だから、そう言うのも含めて細心の注意を払ったと俺は考

えるね」

ニーア「ふ～ん、成程ねそれも一理あるわね。……けどウクルス、幾らかっこ良く言ってもね、そろそろアリアをその膝の上から降ろしなさい！！」

ウクルス「いやだ！！アリアは俺の癒しだ！！誰にも渡さん！！」

アリア「へ、へう～～／／／／／／／／！！」

ニーア「セクハラ発言は止めなさい！！」

シェリド・ロイド「「ぐぅ～～ＺＺＺ」」

ニーア「寝るな！！」

シェリド・ロイド「「ぐはっ！？」」

アリアを抱きしめながら変態発言をするウクルスにアリアは怒鳴り、その傍らで寝ている二人にファンネルを飛ばして叩き起こす。多方面に忙しい彼女である……。

元老院五「成程の……その考えは大いに納得できる。優秀な人材は何処も捨てる事は出来んからの～～」

数人は納得しているが反対派はあまり納得していない様だ。

はやて「私達を信頼できないのならそれでも構いません。けど、それなら如何すれば私達は皆さんから信頼を得る事が出来るのか教えてもらえませんか？」

元老院二「それなら、そちらのデバイスと言うものの基本構造等の情報を此方に提供して貰いたいな」

はやて「そ、それは、私達見たいな一介の部隊が許可出来る様なものでは……」

元老院三「ふん、それならもう止めじゃ」

クラウド「おい、お前等。それは此方が向こうに鎧装の基本構造を教えるのと同意義だぞ。知りたいのなら向こうの上層部に掛けあえ！！」

元老院達に睨みをきかせるクラウド。他も同じ様に今発言した者を睨むがその中でも元老院は汗一つ流さずに平然としていた。だが、

元老院八「それなら、彼女らに此方の仕事を手伝ってもらうのは如何じゃ？」

一人の言葉に反対派の者達がニヤリと笑う。

元老院一「それはいいの～。ワシらとて国の宝の市民達を失うのは

嫌じゃし、此処に丁度良いのがおるな？」

元老院三「上手く行けば、事故と見せかけて消すことも可能じゃしな」

ヒソヒソと会話をする反対派達。そして、話が纏まったのか不敵な笑みで此方を見てくる。

元老院二「では、実力テストをしよう」

はやて「実力テスト……ですか？」

元老院三「そうじゃ、もし、此方の信用に値する実力があり、更に此方の仕事を少しだけ手伝ってもらえるのなら私らも認めよう」

フレア「何やら良からぬ考えをしてるのではないのですか？」

元老院一「そんな事は考えてもおらんぞ？如何かな、機動六課の皆さん？」

はやて「……それで、信じて貰えるのでしたら」

シリウス「はやて……」

はやて「大丈夫やて。そないに心配せんでもええって」

元老院三「話は纏まったのです。如何ですかな国王陛下？」

ウルフ「う～～ん、まあ、はやて達がいいって言ってんなら別に俺はとやかく言う事は無いよ」

そういう事ではやて達はこの後に実力テストを受けることとなった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

場所は変わってなのは達は訓練施設と記された別の建造物に案内された。

カイン「なのは」

カインに呼ばれてなのははは彼の方を向くカインは周囲を警戒する様に目配せした後なのはの耳元に顔を近づけて小さく話しかける。

カイン「気をつけろ、なのは。元老院の死損ないはきっと何かする気だ」

なのは「何かって？」

カイン「それは分からない。俺達も向こうに気づかれない様に行動するが如何なるか分からない。この事を皆に伝えといてくれ」

なのは「うん、分かったの」

カインの髪から良い香りがしておりなのははその香りに少々酔いしれながら頷いた。

言いたい事を言い終えたのかカインはなのはから離れその場を去ろうとするがその裾をなのはがキュッと掴む。

なのは「カイン君」

カイン「ん？如何したなのは？」

なのは「もし、危なくなったら助けに来てくれる？」

そう聞かれてカインは一瞬呆気に取られていたが直ぐにフッと笑って頭を撫でる。

カイン「当たり前だろ？俺にとってなのはは大事な仲間なんだからな」

なのは「やっぱり、仲間なんだ……」

カイン「なのは、何か言ったか？」

なのは「ううん、何でも無いよ！！」

何でも無いと言って笑うなのはを見て首を傾げるカインだったが、あまり長い時間一緒にいると怪しまれるので直ぐにその場を去って行った。

なのは（やっぱり……今も仲間のままなんだ……）

しょ気てるなのはの下にフェイトとはやてがやって来る。

フェイト「なのは？如何したの？」

なのは「フェイトちゃん……何でもないよ。にゃははは」

明らかに様子が変なのはだがそれ以上何もいえず二人も黙った。

元老院一『では、準備は良いかな？』

アナウンスが聞こえデバイスをセットアップし何時でも良い事を伝える。

すると、空間が歪み始め次の瞬間にはなのは達は海上の上空にいた。

元老院一『では、これより戦闘訓練を開始する。現れる敵を排除せよ』

アナウンス［ターゲットの位置を表示します。これを速やかに排除してください］

アナウンスが流れるとなのは達のデバイスにマップが表示されその中に赤いマークが表示される。

陸地に３つ、海上に４つだ。

なのは「皆如何する？」

フェイト「先ずは、近い海上の敵を倒して行こう」

はやて「せやね。奇襲とかに気を付けて進もか」

皆頷きポイントに向かって移動を開始した。

それをカイン達は映像で見ている。

コレット「皆だいじょぶかな？」

ロイド「もし危険と判断したら俺達が割り込めばいいさ」

元老院五「ロイド殿……」

その時元老院の一人の男性が話しかけて来た。彼は他にいる反対派とは違いロイド達の考えを擁護する賛成派の一人である。

カイン「シュナイダーか如何した？」

シュナイダーという男性、と言うよりお爺さんは不自然にならない様な動きでさり気無くロイドの手に一枚の紙を渡す。

シュナイダー「如何やら奴らは新型のテストに彼女達を利用した様じゃ」

ロイド「何だって……？」

モーゼス「ふむ、新型と言うとあれかの？」

カイン「あれって何だ？」

モーゼス「最近になって誕生した機体じゃ。水陸空両用の戦闘兵器じゃ」

シュナイダー「今回、反対派の爺達はそれのテストを兼ねて彼女達の力を試してるようじゃ」

ウクルス「っけ、あの食えない爺共め。面倒なもんを登用しやがって」

その紙には『新型兵器、ゲルズザー』と書かれた資料がある。人型と蜘蛛型、そして飛行型に変形できるらしい。
陸戦と海上では蜘蛛の足の様なもので高速で動き、海中や空中を移動する時は足をたたみ飛行できる水陸空を行動できる高スペックな機体の様だ。これは時空海賊団の使うスティンガーや戦艦対策に完成した機体の様だ。
搭載されている兵器は両手にビームライフル、脚部先端ビーム砲、連装滑腔砲、Ｍ５３４ガムザートフがあり更に脚部はカニのハサミの様に展開でき超帯電クラッシャー『ヴァシリエフ』と言う武器になるという。見るからに危険そうな兵器である。

ウクルス「ん？おい、陽電子リフレクターも搭載してるのか！？」

陽電子リフレクター、フレアの使う『プラネイトディフェンサー』と似たものでビーム射撃を無効化する強力な防御壁である。装甲も鎧装で作られていることから非常に強固な機体だろう。

ウクルス「おいおい、これだけで昔の一個中隊を簡単に撃破できるぞ！？」

アリア「はわわ、凄く強そうです！？」

ニーア「まさかとは思うけど……これ、一機だけじゃないって事は無いわよね？」

そう聞くとシュナイダーは苦い顔をする。如何やら最悪の展開の様だ……。

コレット「そんな……ロイド！！急いで止めないと！！」

バルド「待て、コレット」

バルドが急ぐコレットを止める。

バルド「少しだけ待ってくれ」

ロイド「何言ってんだよ！！このままだとなのは達が危ないかもしれないんだぞ！？」

バルド「今不用意に動いたら、それこそ折角のチャンスが水の泡だ。今は耐えてくれ、ギリギリまで待ってホントに危険と判断したら止めに入る」

ウクルス「けどよぉ……」

バルド「それに向こうにはクラウド達がいる」

そういった時、皆の前にスクリーンが現れそこにはクラウド、ティファ、リリス、セフィリア、ガルドがいた。

バルド「クラウド、今の話聞いていたろ？頼めるか？」

クラウド『問題無い。その事も想定の範囲内だ』

リリス『ご主人様、お嬢様、リリスがいるからだいじょぶです！！彼女達の命は保証するのです！！』

バルド「危険と判断したら俺達もそちらに向かう。お前達はその前に行動をしてくれ」

ティファ『分かりました』

ガルド『危険と判断したら直ぐに救助に当たる』

リリス『それでは、作戦開始なのです～♪』

通信を切り、行動開始するクラウド達。彼等は元老院の反対派に気付かれぬように行動してくれるだろう。

そんな事が起きているとは露知らず、なのは達はポイントに到着したが周囲にターゲットの敵の姿は無い。

フェイト「確かこの辺りだったね？」

シグナム「うむ、だが何処にもいないな」

ティアナ「ですが確かにポイントは此処を示しています」

周囲を探すも見渡す限り海だけである。その空間には敵どころか鳥すら見当たらない。まあ、シュミレーターで作られた空間なのでそんなものは存在しないと思うが……。

周囲を警戒している彼女達をそれは見ていた。そして、タイミングを測って飛び出す瞬間を待っている。……そして、目を光らせたと思うとそれは、一気に彼女達の下に動きだした。

レイジングハート［マスター、高速で接近する熱源を確認しました］

他のデバイスからも同様に伝えられて警戒するが何処にもその姿を確認できない。

フェイト「まさか……皆此処から離れて！！」

フェイトの声に弾かれる様に散開すると同時に彼女等の下……海中よりビームが襲いかかって来た。
ギリギリで気づけたので何とか回避できた。そして、海中から彼女等を襲った機体、ゲルズザーが姿を現した。

体長１０メートルで緑のカラーを基調とした上半身が人の様で下半身が蜘蛛に近い形をしており８本の足を今はその足をたたんで空中に浮かんでいる。

ヴィータ「何だよこの変なの？」

なのは「これを倒せってことなのかな？」

ターゲットは如何やらこの機体の様だ。ゲルズザーは両手に持っているビームライフルをいきなり連射してきた。

一同「っ！？」

正確に一発ずつ此方に撃って来たので慌てて回避、なのは達も応戦する事にした。

スバル「リボルバー、シュート！！」

スバルが先制するがそれは回避される。次にエリオ、フェイトのフォトンランサーが迫るがそれを両手のビームライフルで撃ち落とす。次にシグナムが接近を試みようとするがゲルズザーの足が展開しそこから脚部先端ビーム砲が火を噴き接近を許さなかった。

ティアナ「クロスファイヤー、シュート！！」

ティアナの魔力弾が複数迫るがゲルズザーはＭ５３４ガムザートフを放ちながら高速回転、魔力弾を破壊しつつティアナ達に攻撃してきた。フェイトとエリオは高速移動で回避しはやて、シグナム、ヴィータはキャロ達を守る為に防御魔法で凌ぎ、敵の動きが止まってるのを好機と見たなのはが上昇してレイジングハートを構える。

なのは「ディバインバスターーー！！」

得意の砲撃魔法を放つ。回転中は動けないのかガムザートフを撃ち続けるゲルズザー。だが、そのゲルズザーの前に障壁が展開されディバインバスターはそれに衝突、霧散した。

なのは「えっ!?ディバインバスターが効かない!?」

シグナム「高町!!」

なのは「っ!?」

驚愕で動きの止まっているなのはに向かって今度はゲルズザーは連装滑腔砲を連射してきた。

プロテクションを発動させてそれを受けるが威力が高く、徐々にプロテクションごと押され始める。

なのは「えっ!?これって擬弾じゃない!?」

はやて「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストルティン!」

はやてがミストルティンを放ち援護するが、それもまた陽電子リフレクターが発動し防がれる。だが、その隙を逃さずヴィータが突貫しアイゼンを振るった。殴られた事により大きく飛ばされ海に落ちていくゲルズザーだが、すぐさまたたんでいた足を展開し海上に着地、高速移動を始める。

なのは「はやてちゃん、ヴィータちゃんありがとう」

はやて「無事なによりや。にしても何て強力なバリアーを使うんや

……」

ヴィータ「アイゼンでぶっ飛ばしたのにピンピンしてるぞ」

エリオ「でも、確かにダメージは通ってる筈です。このまま押し切れば」

ティアナ「そうですよ、いくら強くても隙はあります。そこ突いて行けば勝てます！！」

ティアナの言葉に皆頷き、再び攻撃を再開する。なのはは砲撃を一端止め魔力弾で牽制する。フェイト、ティアナも同様に魔力弾を放つがそれを滑る様に動きながらゲルズザーは回避して行く。

キャロ「我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。錬鉄召喚、アルケミックチェーン！」

キャロがアルケミックチェーンで拘束しようとしたがゲルズザーの前足が変形しハサミ状に変わった。
そして、それでキャロのアルケミックチェーンを破壊する。

はやて「皆下がって！！一気に片付ける！！」

はやてを中心に魔法陣が出現する。

はやて「来(こ)よ、白銀(はくぎん)の風、天よりそそぐ矢羽となれ、フレースヴェルグ！！」

ゲルズザーを中心に広範囲に魔法が炸裂、水蒸気と海水を高く巻き上げた。

水蒸気が晴れるとそこにはゲルズザーの姿は何処にも無く海面に残骸が浮かんでいた。

はやて「うっし！！」

思わずはやてはガッツポーズをとる。その光景をスクリーンで見ていたロイド達は感嘆していた。

ロイド「すっげー！あんな広範囲に攻撃できるのかー！！」

コレット「はやて凄いねー」

シリウス「でも、今のはホントラッキーだったね～。初撃が海面に着弾して急激な海面上昇にバランスを崩した所に連続で攻撃が来て大破したって感じだったね。あれを狙ってやったって言ったら凄いけど多分まぐれだろうな～」

ロイド「何だよシリウス？もっと喜ばないのか？」

シリウス「何時もなら喜んでるけどね～。今回は流石に素直に喜べないかな？何たって海中にはまだ三機、陸地にも三機いるし、多分今の戦闘で殆どがはやて達の方に向かう筈だよ。あの爺達の指令でね……」

そう呟いて反対派の方に目線だけ送る。なのは達の戦いを見ている様に見えるが彼らの手が時折不自然に動くので如何やら何かをしていると見る。

シリウス「しょうがないな……。お邪魔しよ～っと」

そう言ってシリウスが自然な形で反対派に絡み始めた。

シリウス「やっほ～、死損ないの皆の衆！！如何かな、はやて達の実力は？」

元老院二「っち、……まあ、悪くは無いな……戦闘技術もチームプレーも申し分ない」

シリウス「だよね～！！それに皆まだ若いのに強いなんてさホント貴重だよね～！！」

元老院一「う、うむ……」

シリウス「俺としてはさ特にはやてが可愛いと思うんだよ！！普段

はピシッとしてるけど時々、からかう時に顔を赤くして見せる所なんてもう最高に可愛くてさ～、ギュッと抱きしめたくなっちゃうんだよね～！！それにさ――」

急に始まるシリウスのマシンガントークと言うより惚気話……流石の老い耄れもたじたじの様だった。

はやて「クシュン！！」

なのは「はやてちゃん、大丈夫？風邪でも引いたの？」

はやて「なんや、何処かでうちの事噂しとるんかな？」

はい、シリウスが向こうで惚気話をしてます。

なのは「……皆、今ね戦って気付いた事があるの」

シグナム「何かに気付いたのか、高町？」

なのは「さっき、私が砲撃を受け止めた時に気付いたんだけど、あれ摸擬弾じゃなかった……」

エリオ「と言う事は実弾と言う事ですか！？」

なのは「そうみたい……だから皆、何が何でも食らわないように気を付けて」

各々それに頷き次のポイントに向かおうとしたところ……

バルディッシュ「マスター、此方に接近する反応を数機確認しました！！」

フェイト「えっ！？」

それぞれマップを開いて確認すると確かに赤い点が此方に向かって急速に接近してくるのが分かった。その数……三機！！

ヴィータ「なんか嫌な予感がすんだけど……」

シグナム「ヴィータ、それは当っていると思うぞ」

あの歴戦のシグナムですら額から嫌な汗が流れるのを感じる。その予感は的中した。

海中から再びゲルズザーが出現する。出現と同時に三機はガムザートフを放つ。

なのは「うそっ！？同型機が三機も！！」

フェイト「くっ！！なのは！！スバルとティアナと行動して！はやてはシグナムとヴィータと、エリオ、キャロは私についてきて！！」

一同「了解！！」

散開するなのは達に一機ずつ追跡して行った。フェイト達に迫るゲルズザーはビームライフルを連射、フェイトとエリオは持ち前の高速移動で回避し、キャロは回避より防御に専念し防御魔法を展開し身を守る。

二人がフォトンランサーを放つが先程と同じ様に陽電子リフレクターに阻まれる。

フェイト「くっ、あの防御壁が問題だ」

ゲルズザーは脚部先端ビーム砲を放ち牽制する。其々が回避して肉薄しようとするがそこにガムザートフで邪魔をされて接近できない。

キャロ「フリード、ブラストレイ！！」

フリードが炎を放つとゲルズザーは海中に潜り潜水、炎を回避する。そして、再び海中から上半身だけ出してビームライフルを連射する。

エリオ「こうなったら……！！」

何かを決意した様にエリオは単身でゲルズザーに突貫する。

フェイト「エリオ！？」

迫るエリオに集中砲火する。それを回避し防御魔法を展開しつつ接近を試みる。

キャロ「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士（そう）に、駆け抜ける力を！！ブーストアップ・アクセラレイション！！」

キャロがエリオの速度を強化させる。スピードアップしたエリオがビームの弾幕を縫う様に移動し徐々に接近する。

キャロ「猛きその身に、力を与える祈りの光を！！ブーストアップ・ストライクパワー！！」

更に打撃力を強化させる。一定の距離に達した時にエリオはストラーダを振り抜く様な構えをする。

エリオは、昨夜の事を思い出す。ロイドと少しの間だけ打ち合った

時、ロイドが教えてくれた技を……。彼はそれを教えた後エリオに忠告した。

ロイド「これは、ここぞって時に取っておけよ?まだエリオは完璧にマスターした訳じゃないから使ったら肩から先が痺れて動けないかもしれないからな。後は、バルドにも聞いておくと良いぞ。あいつなら沢山の事を教えてくれるぜ。何たってお前達の父親なんだからな」

そう言われていたが、今こそその時だろう。魔力では無い、純粋な打撃攻撃…いや、斬撃!!

体の奥から力を放ち、それを腕に集束させ、それをデバイス先に溜める。そして、一気に抜き放つ!!腕が軋むがそれを堪えて振り切った!!

エリオ「はあぁぁぁぁぁぁぁぁ!!魔神剣!!」

ストラーダから斬撃が飛びゲルズザーに飛んでいく。
キャロのブーストアップ・ストライクパワーで強化されたそれは大きな斬撃となり、陽電子リフレクターを無視して本体のゲルズザーの上半身に直撃した。

フェイト「えっ!?エリオ、今の技って!!」

ロイド達の使っている技をエリオが放ったのに驚きを見せるフェイト。それはスクリーンで見ていた皆も驚いていた。

バルド「エリオの奴……何時の間に？」

ロイド「無茶するなーエリオの奴……」

バルド「ロイド……まさかお前が教えたのか？」

ロイド「昨日の夜にエリオに頼まれたんだよ……でも、まだ完璧に覚えた訳じゃない。多分暫く腕が動かせないと思う」

それを心配そうに見ているロイドにバルドもエリオを心配そうに見る。確かに、放った後エリオは腕を押さえている。あの場に行き治療してやりたいが今はその時ではないので我慢した。そして、反対派の元老院共を睨む。

バルド（後で、こんな事した事を後悔させてやるよ……！！）

静かに怒りの炎を燃やすバルドはそう決意して再びスクリーンを見る事にした。

エリオ「くっ……！！」

振るった時に途轍もない衝撃が腕を襲ってきた。骨の髄にまで響く様な衝撃はエリオの神経を一時的に麻痺させたのだ。今まで使った事の無い筋肉もそれによる過度の疲労で損傷しエリオの腕は赤く腫れていた。

フェイト「エリオ!!何て無茶をするの!!」

エリオ「フェイトさん、チャンスです……今なら止めを刺せます…」

キャロ「エリオくん大丈夫!?」

エリオ「うん…大丈夫だよ……けど、ちょっとだけ休むね。キャロ、フェイトさんの援護をお願い」

キャロ「エリオくん……うん、分かったよ!!フリード?」

フリード「キュクルー!!」

一鳴きしてエリオの襟を銜えて、自分の背中に乗せる。

キャロ「フェイトさん!!」

フェイト「……うん、そうだね。此処で終わらせよう!!」

ザンバーフォルムになって大剣を握りしめる。

フェイト「キャロはこのまま、上空からフリードと一緒に足止めをお願い、止めは私が行く！！」

キャロ「はい！！」

返事が返った瞬間にフェイトは急降下する。それと同時にキャロがアルケミックチェーンを発動させてそれを飛ばす。

キャロ「フリード、ブラストレイ！！」

フリードの炎がゲルズザーに迫る。ゲルズザーは陽電子リフレクターを展開し炎を防ぐが先程の斬撃によるダメージで何処かを損傷したのか一部が欠けていた。その隙間にアルケミックチェーンを滑らせて上手く捕縛した。

フェイトは急降下から直角に曲がり水面ギリギリを高速で飛行する。

フェイト（エリオの作ったチャンス…絶対にものにして見せる！！）

フェイトの接近に気付いたゲルズザーは無理矢理体を動かしてフェ

イトに連装滑腔砲を放つ。
それをフェイトは流れる様な動きで回避して行き目の前まで接近する。それと同時にゲルズザーが超帯電クラッシャー『ヴァシリエフ』を振りかぶるがフェイトの姿はそこには無かった。

フェイト「ソニックムーブ……」

その時には既にフェイトは高速移動魔法で瞬時に移動しており真上を飛んでいた。

フェイト「雷光一閃っ！！」

そして、バルディッシュを突きの構えにして再びソニックムーブを発動させ突撃する。
その切っ先はゲルズザーの体に深々と突き刺さった。

フェイト「プラズマザンバアーーーブレイカアアアア！！！！」

ゼロ距離からのフェイトの最強の砲撃をくらい海をカチ割って閃光と共に沈んでいく。
そして、閃光が止んだ瞬間に海中でゲルズザーは大爆発した。

なのは「ディバインバスター！！」

得意の砲撃を放つが陽電子リフレクターにより阻まれる。
お返しとばかりにガムザートフを放ってくる。

ティアナ「クロスファイヤー、シュート！！」

なのはが攻撃を引き付けてる間に背後に回ったティアナが魔力弾を飛ばすが連装滑腔砲を背後に回して連射して魔力弾を撃ち落としていくが数発撃ち漏らし直撃する。煙に包まれるが晴れるとそこには装甲を焦がしたゲルズザーが飛んでいた。

ティアナ「防御壁は一方しか展開できないようね」

冷静に分析しつつ幻術を混ぜながら来る攻撃を回避して行く。

スバル「うおりゃあぁぁぁぁ！！」

スバルがウィングロードに乗って肉薄する。そして、頭をカチ割る様に拳を撃ちこむがゲルズザーは両手に持っていたビームライフルを収納しその手を持ってスバルの拳を受け止め投げそして、ビームライフルを連射する。バランスを崩しながらも何とかプロテクションを展開して防御する。

ティアナ「スバル！あまり先行しないの！！」

スバル「けど、ティア！！打撃はあの防御壁じゃ防げないみたいだよ！！」

如何やらスバルは魔法攻撃が駄目なら打撃は如何だと考えて実践した様だ。
こう言う時の相棒の行動力には毎回驚かされる。

ティアナ「なのはさん、如何します？」

なのは「う～ん、私の砲撃も無力化されるしそれしかないのかも……」

ティアナ「そうみたいですね……スバル、なのはさんと私が隙を作るからその間に全力の一撃を撃ちこんで」

スバル「任せて！！」

話はまとまり作戦を開始する。なのはが先行し再びディバインバスターを放つ。陽電子リフレクターに阻まれ反撃の両脚先端ビーム砲を放つがそれは予想済み、ティアナが幻術を使いその攻撃を回避しなのはが再び砲撃をする。二度に渡る高威力の砲撃で少しだけ押されるゲルズザー。

ティアナ「そこ！！」

そこに再びティアナが防御壁を展開しているゲルズザーに射撃する。展開している陽電子リフレクターを上手く回避させゲルズザーの両手に持つビームライフルを腕ごと破壊した。

スバル「おりゃあぁぁ！！」

そこにスバルが突貫、ゲルズザーの頭部に思いっきり拳を叩きこみそのまま魔力を集束させる。

スバル「ディバイィィィン、バスタアァァァ！！」

ほぼゼロ距離からの砲撃はゲルズザーの上半身を飲み込み吹き飛ばした。

そして、機体は傾き海中に墜落した。

スバル「よっしゃーーー！！」

ティアナ「ふぅ～、何とかなりましたね……」

なのは「うん、結構手強かったね」

撃破した事により安堵する。だが、彼女達は気付いていなかった……。

この時自分達の足元の海面に機影があるのを……。

レイジングハート［マスター！！海中に熱源反応！！まだあの機体は生きています！！］

なのは「えっ！？」

それに驚き海面を見ると確かに機影が確認できた。……ティアナの足元に、

なのは「ティアナ！！」

ティアナ「えっ！？」

海面から先程倒した筈のゲルズザーが飛び出してきた。それは確かに上半身の人の部分は消し飛んでいたが下半身だけで動いていた。

そして、前足を変形させてハサミ状に切り替えそれでティアナの首を挟みこむ。そしてそこから強力な電撃が走った。

ティアナ「きゃあああああああ！！！！」

スバル「ティア！？くっそーー！！」

急いで相棒の救助に向かうがスバルの接近となのはの砲撃準備を確認した途端に海中にティアナを掴んだまま潜水した。

スバル「ティア！！ティア！！」

周囲を見るもその機影が見当たらない相当深く潜った様だ。
このままでは、ティアナの命が……焦りを見せ始める。

この光景を上空で見ていた者がいた。クラウドである。先程からジッと彼女達の戦いをこの場で見ていたのだ。ティアナが海に引きずり込まれたのと新たにもう一機の接近を確認した。

クラウド「バルド、タイムアウトだ。これより救助を開始する」

バルド『分かった。俺達も急いでそっちに向かう。ロイドとコレットは奴等を頼む』

ロイド『分かってる』

バルドの隣では怒りを現してるロイドとコレットがいた。

クラウド「ティファ、リリス。そっちも救助に移行だ」

リリス『了解なので～す！！』

ティファ『任務了解……』

通信を切ってクラウドは一気に海面に向かって突っ込む。

なのは「クラウドさん！？」

クラウドがいるのに驚いている二人をそのままにクラウドは海中に飛び込んで行った。

海中ではティアナが首を掴まれたまま沈んでいた。

ティアナ（息が……）

先程の電撃で神経が麻痺したのか口から絶えず空気が漏れる。このままでは窒息で死んでしまう。
視線をゲルズザーに向ける。上半身を吹き飛ばされても起動していたことからこの機体は上半身が吹き飛んでも動ける様に作られている様だ。

そんな風に危険な状況だというのに冷静に分析してる自分に少なからず驚いている。
そして、息が持たなくなりもう駄目だと覚悟した。だが、そこに……白き翼が舞い降りた。

ティアナ（クラウド……さん？）

ビームサーベルを両手に持ち高速で振るう。それによりティアナを掴んでいた腕を斬り裂きティアナを開放する。そして、ビームサーベルをしまい彼女を抱きとめた後、片手に『干渉・莫耶』の『干渉』を持ってゲルズザーの眉間にくっ付け引き金を引いた。

その途端、銃口から巨大な砲撃が放たれゲルズザーを飲み込み、その反動を利用して二人は急上昇し海面から飛び出した。

ティアナ「けほっ、けほっ！！」

クラウド「大丈夫か？」

ティアナ「はー、はー……はい…大…丈夫です」

咽た後、空気を一杯吸い込む。生きている事が実感できた。クラウドに礼を言った後、自力で飛べる事を伝え離してもらった。

スバル「ティアーーー！！」

そこに今にも泣きそうな相棒と隊長であるなのはがやってくる。ティアナの無事を確認できホッとしている。スバルはティアナに抱き着いて泣きじゃくった。

スバル「よかったよー！！ティアが無事でよかったよー！！」

ティアナ「スバル……」

なのは「クラウドさん、ありがとうございます。けど、如何して此処にいるんですか？」

クラウド「死損ないどもがお前達に新型のテストを実行した様でな、その情報を得たから見つからない様に行動していた。それに、もう一機来るぞ」

クラウドの視線を追うと確かに此方に飛んでくる機影を確認した。

クラウド「あれは俺に任せろ……」

デバイスを構えたなのはを制しクラウドは『干渉・莫耶』を取り出す。
銃身が伸び更にそれを連結させて肩に担ぐようにして構えた。
クラウドの使うキャノンモードである。

なのは「クラウドさん！あの機体には砲撃が効かないんです！！」

クラウド「問題無い……天候良好……太陽エネルギー充電開始」

エネルギーが収束し始めると同時にクラウドの翼が黄金に輝き始める。そして、翼が全て染まると銃口から光が溢れだしてきた。

クラウド「エネルギー充電１２０パーセント、くらえ……ソルブライトキャノン！！」

銃口から特大の砲撃が放たれた。それは海すら蒸発させて突き進みゲルズザーを飲み込んだ。

当然、ゲルズザーは陽電子リフレクターを展開してこれを防御するがその守りはあっさりと消し飛ばされ蒸発していった。

クラウド「ターゲットの消滅を確認……任務完了」

『干渉・莫耶』を元に戻し腰のホルスターに収納した。

なのは「す、凄い……あの防御を打ち破った……」

強力なあの防御壁をいとも簡単に破壊して敵を撃破したクラウドの火力になのは達は驚いた表情で見ていた。

# 第二十四話（後書き）

どうですか？やっぱり変でしたよね～ｏｒｚ
修正はしたんですが如何にも私の腐敗した脳では限界ですた……。

ゲルズザーに関してはガンダムに出てきたゲルズゲーとザムザザーを足した感じの機体です。ヴァシリエフは本当なら超振動なんですがそれにすると人体に多大なダメージを与えそうなので帯電に替えさせて頂きました。……え？それでも危険だろって？ですよね～～ｏｒｚあ、そうそう元老院には二つに割れていて反対派の方も自ら嫌われ役を買って出ているっていう感じですかね。それでも少しは私情は挟んでいると思うけど。まあ、そうしないと政治ってのは上手くいかないと勝手に作者は思っていますので。

クラウド「次回は如何するんだ？」

次回辺りからミッドに戻ろうと考えております。取り敢えず無理やりにでも戻しさねば……。って言うかもう二十話超えてたんですね（気付くの遅っ！？）。
それでは、次回も（期待してはいないと思うけど…）気長に待っていてください。
これからも宜しくお願いします。

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

あ、もうだめ……

ロイド「うわ！？大丈夫か！？」

クラウド「衛生兵！衛生兵！！」

# 第二十五話（前書き）

二十五話更新！！毎回の如く難産です……。

フェイト「前回、エリオが腕痛めたけどあれは何で？」

その説明をし忘れていたので今説明をば…簡単に言えば常人が出来ない技を無理やり使ったからです。

フェイト「……それだけ！？」

あたりまえじゃん！！普通人間は目視できる衝撃波なんて出せませんよ！？それを使えるのはホントテイルズキャラとかその他多くのＲＰＧ位希少ですよ！？そんなのに耐えられるのは彼らだからこそ出来るもので一般の人が使える様なものじゃないと勝手に作者は解釈、勝手に想像、勝手に執筆したのだ！！

クラウド「はいはい、熱弁乙～（笑）」

くっ……自分のキャラにすら軽く扱われるとは……ｏｒｚ

まあ、気を取り直して今回なのはさん達には帰って頂きます。そこ、やっとか……とか思うんじゃない！！

これでも全力投球してるんです！！ですからせめて生温かい目で見て下さい。

シリウス「書く度に文章崩壊してるもんね～」

否定できない……ｏｒｚ

# 第二十五話

ウルフ「皆さん、今回はうちの者達が大変申し訳ないことしてしまい、本当にすみませんでした」

なのは達の前でウルフが頭を下げる。あの後、実力テストと言う名の新型機テストは中止した。
そして、やり過ぎた反対派の者達をウルフが怒り彼らに数カ月の謹慎処分と給料の半減を言い渡したらしい。

因みにティアナやエリオはカインとバルドの治癒術によって怪我を回復してもらい後遺症も特になかった。

そして、その日の晩に管理局との一部同盟を結ぶ事が各方面で可決された。

そんなこんなで慌ただしく時は進み滞在日数も残り僅かになった頃、

ミッドにある一つの建築物に数人の人影があった。

???「これが……奴らの探している宝玉と言うものか？」

???「如何やらその様らしい。これが奴らに渡らぬように封印しておかねば……」

彼等は管理局の上層部の人物で皆、二佐クラスである。彼等は独自の調査ルートを使ってプロヴィデンスがこの謎の宝玉を探しているのに気づき遂にある次元世界で存在を確認し入手する事が出来た。

局員三「しかし、よかったのか？あの老人を消して」

局員一「所詮は老い耄れ……何時死んでもおかしくない奴だ。別に消そうが問題は無いだろう？」

だが、この宝玉は一人の老人が守っていた。彼等はこれがロストギアだという事を伝えて持ち去ろうとしたが老人は「この宝玉は持って行ってはならん！！持ち出せば世界に破滅が待っているぞ！！」と言って彼等を止めに入る。しつこく迫る老人に嫌気が差した彼等は老人を殺害し此処に持ち出してきたのだ。

局員二「取り敢えず、一端此処に封印処置を施して置いておこう。明日の朝、回収に来るぞ」

それに頷き宝玉に封印処置をして彼等は去って行った。

だが、この時彼等は気付くべきだった。その老人が何故、それを持ち出す事を頑なに拒み続けていたのかを……

宝玉はそこに静かに緑色に鈍く光りながら浮いていた。まるで……時が来るのを待っているかのように……

---

同時刻、グランディオンの城ではウルフとガルド、セフィリアがいた。

ウルフ「ふ～ん、プロヴィデンスにそいつらが探している宝玉ね……」

ガルド「ああ、グローリスから消えた宝玉、エリダリアから奪取された宝玉、奴らがそれを探しているのは間違いないだろう」

セフィリア「ガルド、貴方の知識の中にはあのような宝玉について何か知らない？」

セフィリアに問われてガルドは「ふむ……」と言って顎に手を当てて暫し考える。

ガルド「宝玉は間違いなく皇帝ガレリウスの物だろう。だが、奴は太古の昔に死んだ筈……」

セフィリア「その者の宝玉とは誰にでも使えるの？」

ガルド「いや、あれに内包されている魔力は並みの存在が使いこなせる様なものじゃない。使った途端に肉体がその容量に耐えきれずに崩壊するだろう。扱えるとしたらセフィリアやシリウス並みで無ければ無理だ」

セフィリア「では、ガルドも……バルドも扱えるという訳だね？」

ガルド「……まあな」

ウルフ「流石、闇の王だけではあるね。いや、今はイモータルの王の一人と言っておこうか？」

そう言ってニコニコと笑いながらガルドを見る。それにフンッと鼻で笑いながらウルフを見る。

ガルド「その呼称はとうの昔に捨てた。今此処にいるのは魔界王セフィリアに永遠の忠誠を誓った男がいるだけだ」

セフィリア「ガルド、そうじゃないでしょ？永遠の愛を……でしょ？」

そう言ってガルドを見つめてくるセフィリア。その瞳は出会った頃から変わらず純真無垢で美しかった。

ウルフ「ヒュ～ヒュ～♪熱いねぇ～二人とも。俺もう悶えて死んじゃいそうだよ～」

セフィリア「はうっ……／／／／／」

ガルド「セフィリア……そう言う恥ずかしい言葉をサラっと言うなよ……聞いてるこっちが恥ずかしい」

ウルフに茶化され頬を真っ赤に染め俯くセフィリア。何時も思うが恥じらう彼女は何とも可愛らしいなとガルドは心の中で思った。

ほぼ同じ時刻、此方はロイド達の自宅皆が寝静まった廊下を忍び足で歩く人影……

それは、一つの部屋の前で止まり音を立てない様に静かに開ける。ベッドに寝ている人を発見し息を小さく吐き、更に慎重に接近する。

そして、布団を少し捲り静かにゆっくり入っていくそして、その暖

かな体温を感じる。

なのは（暖かい……）

彼女……なのははその部屋の主、カインの背に頭をくっつけて至福の時を過ごしていた。
彼のサラサラの髪から仄かの香る良い香りが鼻孔を擽る。それはまるで陽だまりの様な感じだった。

サイフォス［なのは嬢よ……今夜も来たのか？］

なのは「あ……サイフォスさん」

二人の上にサイフォスが浮遊して現れる。初めは驚いて思わず悲鳴を上げたが今ではすっかり慣れた。

サイフォス［ふう～、なのは嬢も大変だな……毎晩夜這いをするなどと］

なのは「よ、夜這い／／／／／／！？ち、違うよこれは…その、えっと…」

何と言えば良いのか分からずにオロオロするなのはを見てクックックと押し殺した笑いをするサイフォス。

サイフォス［冗談だ。にしても『友』は幸せ者だな…。こんな風にしてくれる女性が隣にいるなんてな］

そう言われて恥ずかしくなって頬を朱に染めるなのは。その時寝づらいのかカインがモゾモゾと動き寝返りをしてなのはの方に体を向ける。普段の凛々しい顔立ちからは想像できない様なあどけなさを見せる寝顔を見て思わず頭を撫でてみる。サラサラした髪の手触りが手から伝わる。

カイン「ん……んん……」

なのは「あ……」

カインの手が撫でていた手を掴み手繰り寄せる。それにつれられ、なのはも引っ張られてカインの胸元に引き寄せられてカインの手がなのはの背に回り抱きしめる形になった。

彼の心音がトクントクンと伝わり彼が生きているという事を再確認でき思わず涙が毀れた。

サイフォス［む？なのは嬢よ如何したのだ？］

なのは「カイン君が生きているのが分かって凄くうれしいの……だから…」

サイフォス「……」

無理をして働いた結果が彼が傷付くという事に繋がってしまった。
あの日の事は今でも悔やんでいる。

なのは「ねえ、サイフォスさん。カイン君はあの後如何なってたの？」

サイフォス「……カインは、なのは嬢の目の前から転移した後、とある世界に降り立ちそこで力尽き倒れた。だが、幸運にも倒れた『友』を見つけ助けてくれたのがロイドとコレットだ。二人は友の治療をしてくれた。そのお陰で友は一命を取り留めそして、二人がある存在より依頼された事を成す為に世界を旅していると聞いてそれについて行くことを決め、結果、数多の世界を旅し今に至るという訳だ。尤も、時系列の歪みが起きた所為か二，三年しか経っていないのになのは嬢達とは八年も経って十九歳になっていたのには驚いたな」

初めにカインを救ったのがロイドとコレットだと聞き驚いた。サイフォスが言うには、カインが転移した世界が運良くロイド達が旅をしていた世界であったというのだ。そして、助けてもらったお礼にロイド達の手伝いをしていると言う事らしいが、今ではそれを忘れてロイド達との日々を楽しく過ごしていたとサイフォスは語る。

カイン「ううん……」

なのは「あ……」

五月蠅いのかカインの眉間に皺がより更になのはを抱きしめてくる。体を押しつける形になり彼の体から香る良い香りが全身を駆け抜けるのを感じて顔が真っ赤に染まるのが何となく自分でもわかった。それを見てサイフォスは再びクックックと押し殺したように笑う。

サイフォス［これ以上騒ぐと友が起きてしまうな。では、お二方、良き夢を……］

そう言ってサイフォスは虚空に消えていった。周囲がシーンと静まり返りカインの表情が再び柔らかくなって規則正しい呼吸が聞こえる。それを聞きながらなのはもカインの背に腕を回して抱き合う様にして深い眠りについた。

翌朝、カインがなのはと抱き合って寝ているのに気付いて驚きの声を上げたと言う事は此処に記しておこう……。

次の日、ミッドの一つの建物に局員たちが集結する。

局員一「では、回収を始めるか……」

建物内に入るが一歩踏み出した瞬間に全身に強力な寒気に襲われる。

局員一「な、何だこの感覚は……？」

まるで、首に鎌を当てられているかの様な感覚に襲われる。
慌ててその感覚がする方に行くとそこには緑色に輝く宝玉があった。
それは、封印したにも拘らず魔力が溢れ始めていた。

局員一「バカな……。昨晩確かに封印を施した筈なのに……」

？？？「その程度の封印術式で緑の御珠が封印できると思っていたのか？」

局員二「誰だ！！」

振り向くとそこには四人の人が立っていた。全員フードを目深に被っており顔が見えない。

???「クスクス、何この人達？この程度の存在で主の御珠を封印しようなんてお馬鹿さん♪」

???「クスクス、そうだね姉さん」

???「さっさと片付けて回収するぞ」

???「……」

局員一「き、貴様ら、プロヴィデンスか！？」

気付いた者が慌てて本部に連絡を入れようとしたが……

――ヒュンッ！！――

風切り音が鳴り三人の男の前に先程目の前にいた一人の男が何かを振り抜いた形で立っていた。

そして、振り抜いたものを鞘に収めた瞬間連絡を入れようとした男が崩れ落ちた。

局員二「なっ！？」

？？？「クスクス、余所見はいけないよ？」

？？？「クスクス、直ぐには殺さないよ？たっぷり苦しませてあげるね♪」

魔力が溢れ視界が闇に包まれた。そして、暫くの間その建物から断末魔が響き続けた。

叫び声が止みそこには局員だったものが散らばっていた。

？？？「あ～あ、壊れちゃったね♪クスクス」

？？？「そうだね、姉さん♪クスクス」

クスクスと笑い合う子供の二人。まるで、今行った事が遊びであったかの様にその表情は無邪気なものだった。

二人がキャッキャッと笑っている二人を通り抜けて封印を施されている宝玉を掴み手を翳すとその封印は破壊された。

？？？「これで三つ手に入った。残るは四つだ」

？？？「クスクス、もう少しだね～」

？？？「後少しであの人が来るんだね？楽しみだね～ジーク？」

ジーク「……」

ジークと呼ばれた男は無言で彼らから少し離れた所で空を見ていた。

？？？「もう！！相変わらず無愛想だね」

？？？「しょうがないよ、エリス姉さん。ジークはあれを殺して使徒になったばかりなんだからしょうがないよ」

エリス「クスクス、そうだねクラレンス。ねえ、フォスティル？次は如何するの？」

フォスティルと呼ばれた宝玉を持った男にエリスが問いかける。

フォスティル「次の事か……そうだな、あれを設置してイノセント達を呼び出すぞ」

クラレンス「わ～い！！人が死ぬんだね？楽しみだね姉さん？」

エリス「クスクスそうね。い～っぱい死ぬね。死にかけの人を甚振るのも楽しそうだね♪」

フォスティル「航空隊も呼ぶために準備に入る。お前達手伝え」

ク・エ「「は～～い！！」」

フォスティルに二人はチョコチョコついて行った。
だが、ジークだけは三人について行かず、ずっと空を見ていた。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

カインの部屋で起きた朝の嬉し恥ずかしいベントも終了し（この時フェイトは「私もバルドと…」と呟いたとかいないとか……）

さて、そんなこんなで時間は進み人の往来が激しくなりそうな時間帯になった時、なのは達に通信が入った。

はやて「ん？グリフィス君からや」

嫌な予感がする……。そう思い通信に出ると顔面蒼白のグリフィスが出て来た。

はやて「グリフィス君如何したんや？」

グリフィス『はやて部隊長!!今ミッドで大変な事態が起きています!!先程クラガナン上空に次元の歪みを確認しそこから夥しい数のイノセントが出現、首都を襲撃しています!!』

一同「なっ!?」

グリフィス『現在、地上部隊が交戦していますが全く歯が立ちません!!既に多くの部隊が戦闘継続が出来ない状態です!!』

はやて「局の人達は何してたんや!?行く前に頼んどいたはずや!!」

グリフィス『そ、それが……二度も襲撃されないと高を括っていたのか警戒していなかったそうです』

はやて「そ、そんな……」

ロイド「はやて!!急いでミッドに行くぞ!!」

はやて「せ、せやね。グリフィス君うちらも急いで戻る。現状を送ってや」

グリフィス『了解!!』

通信を切ると同時にはやて達のデバイスに情報が入る。如何やら一般市民にも被害が及んでいるらしい。急いでロイド達にも伝えると皆、城に向かって急いだ。

城に着くとウルフとリリスそれに円卓の騎士団が揃っていた。

ロイド「ウルフ！！」

ウルフ「分かっている。ミッドにあれが出現したんだろ？」

バルド「ああ、だから転送装置を使わせて貰うぞ？」

ウルフ「許可する。後、少ししたら援軍を送る。その時どこに降ろせばいいか連絡をしてくれ」

ロイド「援軍って…ウクルス達か？」

ウルフ「残念だが今回はウクルス達は出撃しない。別の奴らだ。まあ楽しみにしていてくれ」

ウクルス「何だよ～、折角出番かと思って張り切っていたのに如何すんだよ昂ったこの感情をどうやって抑えればいいんだ！？」

アリア「ウ、ウクルスさん、お、落ち着いてくだしゃいっ！？……はぅ～また噛んじゃった／／／／／／／／」

ウクルス「ヘブンッ！！」

恥ずかしくなって俯き頬を染めるアリアを見て鼻血を吹きだすウクルス。

何とも幸せそうな表情である。流石、ロリコ――ゲフンゲフンッ！！

ウクルス「ア、アリア……その恥じらう顔が何とも可愛らしい。もういいや、今日はアリアを愛でる事でこの感情を抑えようかな」

ニーア「ちょっと！！アリアに変なことしないでよね！！」

ウクルス「ああ！？別に良いだろ？」

ニーア「良くないわ！！」

アリア「え、えとえと、あの……初めてなので優しくしてくださいね／／／／／／？」

何を勘違いしたのか両手をモジモジさせて恥ずかしそうに語るアリアの核爆弾級の発言により世界の時が一瞬停止した。時々この子はとんでもない問題発言をするなあ……。

ニーア「ア、アアアアリア／／／／／／／／！？そう言うのはもっと大人になってからにしなさい！！」

アリア「ふぇ……？」

首を傾げるアリア。分かっていないのに言ったのかこの子は……なんとも恐ろしい子だな……。

ウクルス「アリア！！」

アリア「へ、へうっ！？」

がっしりとアリアの両肩を掴み彼女の瞳を捉えるウクルス。

ウクルス「今夜、何処でや―「真に受けるなボケエェェェ！！」はまちっ！？」

段飛ばしのステップアップを危うくしかけたウクルスにファンネルでどついて黙らせる。

一撃でのびたウクルスをアリアがアタフタしながら看病してるのを尻目にシェリドがロイド達の方を向く。

シェリド「もし何かあったら連絡してくれ。ウルフに駄目と言われても直ぐに飛んで行ってやるからさ」

フレア「そうですね。困った時は連絡をください」

カイン「分かった。それじゃあ、行ってくる」

軽く挨拶した後なのは達を連れて転送装置がある部屋に入る。そこには巨大な装置があった。

その大きさは２０メートル位はあるだろう大きなものだった。

アナウンス［起動準備を確認、座標設定をしてください］

バルド「ポイントＥ－３０－０１、場所、ミッドチルダ、クラガナン」

アナウンス［座標特定完了、次元歪曲開始、転送します］

なのは「なんだろう……嫌な予感がするの」

何やらデジャブを感じるなのは。
景色が歪み始め気付いた時には青空の真っただ中に立っていた。

なのは「やっぱり落ちるの～～～！！？」

はやて「うぎゃ～～！！」

はい、前回と同様青空からのいきなりの急降下。意思を持って自分から飛び降りるのと突然空にほっぽり出されて自由落下するのとはレベルが違うのでハッキリ言って恐ろしいものだ。慌ててデバイスをセットアップするなのは達と最早慣れで特に慌てるそぶりも見せないロイド達。

フェイト「ま、またいきなり空の上なんだね……」

ヴィータ「やっぱり何とかしろよ、あの世界の転送装置！！悪意を感じるぞ！！」

リリス「う～ん、でも楽しいから問題ないよ！！」

コレット「そだね～♪」

ロイド「うん、うん……って、リリス！？何でここにいるんだよ！？」

リリス「遊びに来ました～～！！」

何時の間にかリリスがいるのに驚く一同。先程までいなかった筈なのに……大人の姿のリリスが其処にはいた。

リリス「リリスはイノセントと遊ぶために来たんですよ～♪」

カイン「世界最強のＡＩが自分の世界のデスクワークの仕事をホッポって何してんだよ……」

リリス「心配は無用です～♪今、同時進行で仕事を片付けていますから～♪」

フェイト「ど、同時進行で……デスクワークをやってるの？」

リリス「因みに量はそちらの二カ月分の仕事ですよ～」

なんとでも無い風に笑う。それ程の膨大な量を一度に引き受けているのに平然としているのになのは達は驚きを隠せない。

そうして会話をしている内に処理を終えたらしく「終わった終わっ

た～♪」と言って伸びをするリリス。

バルド「それよりも首都に急いで向かうぞ」

転送された場所は首都に近い場所であった。断続的に何かの音が聞こえる。急いでなのは達は首都を目指す。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

なのは「そ、そんな………」

フェイト「街が……」

首都にたどり着くとそこには赤々と燃える街並みとそこで暴れるイノセントの群れ。
そこで戦っている多くの魔導師達、逃げ惑う民間人を誘導しイノセントの群れを引き付けている。

クラウド「兎に角、奴らを排除する」

干渉・莫耶を取り出し手の中でクルクル回す。皆もそれぞれ得物を構え散開してイノセントの群れに強襲する。

なのは「ディバインシューター、シュート!!」

誘導弾を幾つも飛ばしイノセント?型を撃墜する。
?型にてこずっていた魔導師達は増援のなのは達の登場に気付いた。

陸士「エースオブエースだ!!管理局のエースオブエースが来たぞ!!」

陸士「機動六課か!!」

次々に撃墜していくなのは達に感化されて地上部隊も沈みかけていた力を取り戻し我武者羅に敵を攻撃する。

フェイト「民間人の避難を最優先にして!!」

陸士「了解しました!!」

敬礼して去っていく魔導師。フェイトはそれを確認した後目の前に迫るイノセントの群れに突撃、通り抜けざまに両断して行く。

グリフィス『イノセントの軍勢更に増加!!数、１００，２００，３００……どんどん増えていきます!!』

上空を見ると次元空間に歪みが生じそこから大量のイノセント?型、?型が降りて来た。

地上に降りた?型が巨大化したアルとウル、レイ、レンと激突する。

フェイト「くっ、数が多過ぎる!!」

バルド「何だフェイト、もう弱気なのか?」

隣にバルドが並びケルベロスを肩に担いで笑う。

フェイト「で、でもあんなに数が多いと私達だけじゃ……」

バルド「おいおい、俺達を誰だと思ってる?あれ位の数で焦る様じゃまだまだ俺には届かないぞ?」

そう言ってフェイトの頭をポンポンと軽く叩く。

バルド「それに、直ぐに増援が来る。奴らが良い顔していられるのも時間の問題だ」

そう言った後、バルドはフェイトの目の前から一瞬で姿を消し、気付いた時には前方のイノセント?型の群れの中舞う様に敵を蹂躙していた。

フェイト「バルディッシュ……」

バルディッシュ［何でしょうか?］

フェイト「私はまだ、バルドの足元にも届かないのかな……?」

バルディッシュ［……私からは何とも言えません。……ただ、マスターはそれでいいんですか?バルドさんと、約束しましたよね。背中を守れる様に強くなると。こんな所で蹲いていていいんですか?］

フェイト「っ!?」

バルディッシュ［答えは見えていますよね?］

フェイト「……うん、そうだね!届かないんなら、届くまで強くなればいいんだ。私はこんな所で止まっていられない!!もっと、もっと…もっと強くなってバルドの背中を守れるくらいになるんだ!!行くよ、バルディッシュ!!」

バルディッシュ［イエス、サー!!］

バルディッシュを強く握り前方で戦っているバルドを見据え、フェイトもそのイノセントの大群の中に飛び込んで行った。

シグナム「はあっ！！」

レヴァンテインを振るい、イノセント?型を両断する。周囲から迫って来る?型をシュランゲフォルムに切り替えて撃破して行く。

シグナム「次の相手は誰だ！！」

シグナムの気迫にイノセント達も引き気味だ?型だけでは彼女を止める事が出来ないと本能的に判断しているのだろう。

ジーク「お前たち下がっていろ……」

そこに?型達の中から一人の男が現れた。空色の髪を短く纏め、左手に大盾を持ち、腰に剣を挿して、バリアジャケットは青を基調とした騎士甲冑の男性だった。そして、その騎士甲冑は自分のバリアジャケットにそっくりだった。

シグナム「貴様、何者だ？」

ジーク「プロヴィデンス、第十八の使徒、蒼火の騎士ジーク……。烈火の騎士、シグナムだな……？」

シグナム「だったら何だ？」

そう聞くとジークは腰の鞘に納めていた剣を、デバイスを抜いた。そのデバイスを見てシグナムは目を見開く。そのデバイスはシグナムの持つレヴァンテインに似ていた、いやそっくりと言った方がいいだろう。

シグナム（まさか……バル…ムンクか？）

ジーク「来い、烈火の騎士。今こそ決着を付けるぞ」

シグナム「決着……だと？」

決着？決着とはなんだ？自分達は始めてあった筈だと思うが何処かで会ったのだろうか？

何の事か分からないと言う風に首を傾げるシグナム。それを見て溜息を吐いたジーク。

ジーク「やはり……もうあの約束は忘却の彼方か……」

シグナム「約束？私はお前と前に何か約束をしたのか？」

ジーク「……何でも無い」

この時のジークの表情は何とも悲しそうな顔をしていた。

シグナム（何故、そんなにまで悲しそうな顔をしているのだ……。過去の私は何をしたと言うのだ？）

ジーク「行くぞ、烈火の騎士……」

バルムンクを構えるジークを見てシグナムもレヴァンテインを構える。兎に角、彼を倒して事情を聞こうとそう頭の中で結論を出してシグナムは戦闘に集中する事にした。

シグナム「ヴォルケンリッターが将、烈火の騎士シグナム！！いざ、参る！！」

ジーク「蒼火の騎士ジーク、敵を排除する……」

二人は同時に魔力を爆発させ突撃、レヴァンテインとバルムンクが激突して周囲に大気の衝撃が広がって振動する。鍔迫り合いしながらシグナムはそのデバイスを見る。

シグナム「貴様、そのデバイスは…バルムンクか！？」

ジーク「そうだ。貴方の持つデバイス、レヴァンテインの兄弟機バルムンクだ」

シグナム「やはり……。ジークと言ったな？貴様、何故そのデバイスを持っている！！それは太古の昔に紛失したと記されていたぞ！！」

そうなのだ。シグナムは、この前調べた結果、バルムンクは古代ベルカの時代に起きた戦いで持ち主ごと消息を絶ったと記されている。その者はかなりの実力者でベルカ時代では名のあるものだったらしい。

ジーク「何故？それは簡単な事だ。これは元々俺が譲り受けたものだ。それも……貴方にだ！！」

レヴァンテインを弾き上げ胴を薙ぐようにバルムンクを振るった。それを見を捩じる様にして回避してシグナムは距離を一端とる。そして、ジークの言葉に驚愕の目を向けた。

シグナム「私が……渡しただと？」

ジーク「覚えていないだろうな？既にプログラムとなった貴方には

その様な記憶も無いのだから！！」

魔力を爆発させ一気に詰め寄り、バルムンクを振るう。それを、受け止め蹴りをくらわせるがそれはジークの持ってる盾によって防がれる。防がれた瞬間、シグナムは大きく弾き飛ばされた。

シグナム「なにっ！？」

驚愕の表情を見せるシグナムに更に詰め寄り蹴りを打ち込む。内臓が潰れるのではないかと言うほどの衝撃が伝わる。

シグナム「かはっ！？」

吹っ飛びビルに激突する。全身を強く打って軽く意識が飛びそうになったがそれでも何とか意識を保ちビルの壁を踏み台にして一気にジークに肉薄する。

再びレヴァンテインを振るう、幾つもの剣閃が空中で煌めく弾き、受け流し、受け止め、鍔迫り合いをする。互いの武器を弾きその勢いを利用して回転斬りを二人は同時に繰り出し再び激突する。また、互いの剣を弾きシグナムが高速で連続で剣を振るう。それを見きったのか体を少しずらす事でその攻撃を回避し反撃の連続突きを繰り出しシグナムがそれをレヴァンテインで全て受け切り反撃の一撃を繰り出すがそれは盾によって防御される。それと同時にレヴァンテインが弾き飛ばされた。

ジーク「遅いっ！！」

その隙を逃さずバルムンクを振るって斬りかかって来る。咄嗟に体を捻るが肩を浅く斬られる。
それを見て驚きの表情をするジーク。その隙に距離を取り乱れた呼吸を整える。
そのわずかな隙を突いてくると思っていたのだが、ジークは体を震わせていた。そして、怒りの表情を見せた。

ジーク「こんなものなのか……プログラムとなった貴方は、これ程までに落ちたと言うのかーーー！！！」

全身から魔力を放出させ怒りを露わにするジークを見てシグナムは戸惑った。

ジーク「最早、あのころの面影が無いと言うのか……」

シグナム「くっ！！レヴァンテイン！！カードリッジロード！！」

レヴァンテイン「ヤー！！ロードカードリッジ！！」

ジーク「バルムンク！！カードリッジロード！！」

バルムンク［ヤー、ロードカードリッジ！！］

互いのデバイスから薬莢が二つ飛び出し、デバイスを構え一気に詰め寄る。

シグナム「紫電一閃！！！」

ジーク「蒼電一閃！！」

二人の攻撃が交差する。そして、勝敗は……

シグナム「ばか……な……」

ジークに軍配が上がった。ジークの攻撃はシグナムの胴を捉えており、シグナムの攻撃は当っていなかった。……いや、当っていなかったのでは無く、届いていなかったのだ。
何故ならシグナムの持っているレヴァンテインの刀身が完膚なきまでに破壊され柄だけしか残っていなかったからだ。

ジーク「貴方が再びあの頃に戻ってくれるのを私は待っています。我が師よ……」

消えゆく意識の中シグナムの見た最後の景色は悲しげな顔をして此方を見ているジークの姿だった。

それはとても美しく柄にもなく綺麗だと思いながらシグナムの意識は無くなった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――

グリフィス『ライトニング０２の反応ロスト！！そ、そんな…シグナムさんがやられた！？』

フェイト「うそっ！？シグナムが！？」

シグナムがやられた事を聞いたフェイトは驚愕の表情を浮かべる。エリオやキャロもそれ聞いて驚いている。シグナム程の実力者が負けるなどと皆想像だにしていなかった。

シグナムは１対１の勝負では無類の強さを見せる。その彼女がやられたという知らせを聞いてフェイト達の動きが止まる。

セフィリア「フェイト、私がシグナムの下に行く！！場所を教えて！！」

フェイト「う、うん！お願いセフィリア！！」

バルドとフェイトと同じ空域で戦闘していたセフィリアが申し出たのでフェイトはシグナムの事を彼女に託す。

セフィリアは教えられた場所に全速力で向かった。

――――――――――――――――――――

――――――――――――

倒れるシグナムをジークは抱きかかえ地面に降り立った。そして、辺りを見回し丁度いい木陰を見つけて彼女をそこに寄りかからせる。浅く呼吸をしていることからシグナムは生きている事が分かる。実際のところジークはデバイスを非殺傷設定にしておりシグナムは魔法攻撃で気を失ったと言うところだ。

ジーク「…………………」

彼女の前に手を翳すと優しい光が彼女を包みそれが晴れると彼女の負っていた肩の傷などは消えていた。気を失っているシグナムの隣に座り空を見る。昔を思い出し時々彼女とこうしていたな、と思い出に耽る。

だが、それも最早、昔の事。今此処にいる彼女は彼女であってもう昔の彼女では無い。

ジーク「………………バルムンクよ、如何だった。兄弟と戦っ

てみて？」

バルムンク「……」

その問いかけに応える事も無くバルムンクは黙殺していた。それに苦笑いをしていたが背筋に寒気が走り咄嗟にその場から飛び退く。それと同時に一つの影が飛んで来て横一閃。紙一重で回避して距離を取り襲撃者の姿を確認する。

セフィリア「何者ですか……貴方は？」

その人物はセフィリアだった。全身から溢れる魔力の量を肌で感じる。並みの魔導士なら気を失っている程の量を浴びているがジークは汗一つ流さず平然として立っている。

ジーク「プロヴィデンス、第十八の使徒、蒼火の騎士ジーク……」

セフィリア「シグナムに何をしたの！！」

ジーク「何もしていない。唯一騎打ちをしただけだ……死んではいない」

そう言われて前方を警戒しながらシグナムの容態を確認すると確かに呼吸は規則正しく動いている。

気を失っただけだと分かりホッとすると同時に目の前にいる男の技

量を瞬時に判断する。

セフィリア（シグナムを負かす程の実力、それにこれ程の魔力を当てているのに眉一つ動かさない胆力……実力は一人で何とか出来そうですが…これ程の武人を見るのは久しぶりですね……）

冷静に且つ瞬時に敵の技量を分析し腰に挿している愛剣に手を添える。それを静かに見ていたジークだが突然背を見せ歩き出して行く。それを見てセフィリアは驚いた表情を見せた。

ジーク「烈火の騎士以外と戦う気は今日は無い」

セフィリア「如何いう意味ですか？」

ジーク「なに、唯の手合わせだ。だが、刃を交えて分かった。今日は帰る、烈火の騎士に伝えろ、また会おう…と」

そう言って転移して行った。周囲に気配が無くなり柄に乗せていた手を離してシグナムの下に行きよく容態を確認すると何やら治療をした痕跡を見つけた。恐らくあの男がしたのだろう。
それを確認した後、皆に連絡する為に通信を始める。

セフィリア「此方セフィリア。シグナムを保護しました」

はやて『シグナムは!?シグナムは無事なんか!?』

心配そうな顔で聞いてくるはやてをセフィリアは安心させる様に語る。

セフィリア「ええ、シグナムは無事です。」

はやて『そ、そか……ホッとしたで』

セフィリア「はやて、ヴァイス達に救助を頼んでください。私は神姫を置いて戦闘を継続しますので」

はやて『了解や、直ぐに連絡するで！！』

通信を終えセフィリアはシグナムの下に前姫、赤姫、蒼姫を召喚し彼女達にシグナムの事を頼みセフィリアはその場を飛び立った。

――――――――――――――――――――――――――――――――――

クラガナン付近の海上で次元が歪みそこから一機の航空機と二隻の戦艦が現れた。

航空機は前回襲撃してきたものとほぼ同型機で戦艦は多種多様な色

の戦艦だった。
その艦隊はグランディオンに次元海賊と呼ばれている一団である。

ハッチが開きそこから数多のイノセント達が飛び立ちクラガナンを目指して行く。

兵士「イノセント?型、?型の第一、第二部隊出撃しました」

司令官「よし、艦隊に通達!!これより我等はクラガナンを制圧する。海賊共も我らについてこい!!」

その通達に艦隊からも返答があり了解の旨が伝えられる。そして、艦隊のハッチが開きそこからスティンガーと海賊たちが出撃して行く。

リリス「ん?」

脳内の索敵範囲に新たに熱源が増えてくるのに気付いたリリスがその方角を見る。
海上から接近してくるのは増援のイノセントの群れと見覚えのある軍勢だった。

リリス「おやおや〜?イノセントと一緒に次元海賊が来たよ?」

クラウド「なにっ！？」

周囲のイノセントを殲滅しながらリリスの呟きを聞いたクラウドが驚いた表情を見せる。
ティファもリリスの言葉を聞いてかその方角を見て溜息を吐く。

ティファ「懲りない人達ですね……。私達の世界を襲撃するだけでは飽き足らず此方の世界を襲撃するとは……」

リリス「アホの集団ですね～♪私達の世界に勝ってもいないのに別の世界にも喧嘩売るなんてね～♪」

クラウド「兎も角リリス、ウルフに連絡を入れておけ。俺ははやて達に連絡をしておく」

リリス「了解です～」

クラウドがはやて達に連絡を入れている間にリリスは本国に現在の戦況を送る事にした。

---

～グランディオン～

グランディオンの指令室でリリスからの通信をウルフ達は受信した。

通信兵「リリス殿より通信です。現在、敵勢力多数、その中に次元海賊と思われる組織を確認。これより戦闘を開始するとの事です」

ウルフ「そうか……。サラ、あいつ等の出撃準備は？」

サラ「何時でも良いそうです。久々の隊長との共同戦が楽しみらしく張り切っています」

ウルフ「なら、直ぐに出撃させろ。大気圏突入用の耐熱フィールド発生装置は装備させたか？」

サラ「問題ありません。それと、ディフェンダーの転送準備も完了しています。ポイント指定されれば何時でもいけます」

ディフェンダー、グランディオンの誇る優秀な防衛兵器でフレアの使う『プラネイトディフェンサー』を搭載し多くの迎撃兵器を使う機動兵器だ。両手の大型ガトリング砲、両肩、両足の腿にミサイルポッド、肩にはビーム砲、胸部には対艦ミサイル等々全身武器庫のとんでもない兵器である。

ウルフ「よし！！座標確認ポイントＥ－３０－０２、次元歪曲開始！リニアカタパルト展開、各員発進準備に移れ！！」

？？？「「「「「了解！！」」」」」

カタパルトの上に乗り発進準備を整えると前方の空間が歪み黒い空間が広がる。

それを見据える十五の影。全員赤で統一した鎧装を身に包んでいる。

ウルフ「第一最前衛部隊『獅子』、出撃！！」

合図と共にカタパルトが動き出し黒い空間に彼等を撃ち出す。空間を超えて彼等が次に現れたのは宇宙空間だった。そして、目の前にある星を確認し全員に目配せすると鎧装が展開し彼等を包みその姿を戦闘機に変貌させてバーニアをふかし十五の影は流星となってその星に向かって一直線に飛んで行った。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――

一方此方は、はやてとシリウス。はやては得意の長距離魔法で街に迫りくるイノセントの群れを次々に撃墜して行くが次々に落されて行く仲間を無視して飛んでくるイノセントの群れにはやても流石に面倒臭くなってきていた。

はやて「だあぁ～～！！一体あの虫達は幾ついるんや！！」

シリウス「頑張れぇ～は・や・て♪」

はやて「じぶんも手伝わんかい！！」

はやての目の前でシリウスは何処から仕入れたのかはやてのブロマイドが印刷されているはっぴを着て額に『はやて組』と書かれた鉢巻きに「はやてＬＯＶＥ」の大旗を振るっているだけのシリウス。
周囲の魔導師達からの視線が何か痛い……。

シリウス「いやさ、俺はこれを振るってはやてを応援してるだけで精一杯だから……はやてガンバッ！！」

はやて「うちが先にへばってしまうわ！！魔力切れおこしたどないすんねん！！」

シリウス「その時は俺が手厚く看病してあげるから遠慮なくどうぞ！！」

はやて「あっ、それは如何もおおきに……って何でやねん！！そないな事起こったら後の事が怖いわ！！」

シリウス「酷いわっ！昨夜はあんなに私を求めていたのに！！私の事なんて唯の精の玩具としか見てなかったのね！？」

はやて「誤解招く様な発言すんな！！後、女口調でしゃべんな気色悪い！！」

シリウス「ブゥ〜ブゥ〜！！だったら何すればいいんだよ〜！背後からはやてに抱き着いて胸を揉めばいいのか！？」

はやて「手をワキワキさせながらこっちくんな！！先にじぶんから蒸発させるで！？」

シリウス「俺にそんだけのものぶつけるほど元気があるならまだまだ逝けるじゃん」

はやて「ちょっと待てぃ！最後の字がおかしいで！？」

ギャーギャーと喚き散らす二人を見て呆れた顔をする魔導師達。だが、皆さん気づいて欲しい……。

今、はやては敵の方を見ていないのにも拘らず全ての攻撃をヒットさせていると言う事を……。

シリウス「じゃあ何すればいいのさ！？」

はやて「うちの手伝いをしてと言ってるんやないか！？」

シリウス「分かった」

スンナリ言う事を聞いたシリウスにはやては驚く。そして、シリウスがはやての背後に立ち耳元に口を近づけて背後からそのまま手を回し左手をその細い腹部に回して右手をその白い頬に当てて甘く囁く。

シリウス「ほら、もっと力を抜いて。そんなに力んでちゃ上手くいくのも上手くいかないよ？」

はやて「あっ……」

耳元から聞こえる甘い声に全身が震える。まるで、甘露の様に甘く全身に沁み渡る様な感覚にはやては力んでいた力を緩ませていく。次にその手は首筋に流れる様に滑る様に落ちまた囁く。

シリウス「そう、良い子だね。次は魔力の錬り方を変えようか？魔力を少なくしてそれを圧縮するんだ。そう……そうだね。良い感じだよ……。それを標的に合わせるんだ」

はやて「う、うん／／／／／／／／」

シリウスの言う通り魔力の消費を抑えそれを圧縮すると何かが破裂しそうな感覚を感じる。

そして、それを標的のイノセントの群れに合わせる。

すると甘い口調で耳元を擽りながら今度は徐々に下に手が滑り始め胸元を撫でる様な動きをする。

シリウス「その魔力を一気に開放するんだ。さあ、奏でよう君の美しき調べを……」

はやて「来(こ)よ、白銀(はくぎん)の風、天よりそそぐ矢羽となれ、フレースベルク！！」

その瞬間前方にいた三百以上もいたイノセントの群れが消し飛んだ。過去見て来たフレースベルクの比では無い程の爆発的な弾幕は回避行動すら許さなかった。圧倒的な弾幕……。それは最早魔法とは呼べないものに昇華したと此処にいた多くの魔導師達は思った。

シリウス「良い感じだね～。流石はやてだ♪」

はやて「ありがとうな。それとな……シリウス君」

はやての頬が…いや耳が、いや全身が真っ赤になって震えているのに気付いたシリウスは野生の本能で察知した様に嫌な予感が駆け抜ける。そして、はやての目が光った瞬間、素早くはやては振り向き右手に持っていたハリセンを振り下ろす。

はやて「さり気無く胸を揉もうとすんな！！」

シリウス「鉄ハリセン！？」

スッパーン！！と良い音が響き渡りシリウスは頭を押さえながらゴロゴロ転がる。

ハア、ハアっと全身を真っ赤にさせ息を荒くしてそれを見ているはやて。

シリウス「いったいな～！！良いじゃん、新しい力を手に入れたんだからその報酬としてくれたっていいじゃん！？」

はやて「んなもん報酬として渡せるか！！うちが飢えとるみたいやないか！？」

シリウス「大丈夫！！それでも俺ははやての事がだいすk「黙らっしゃい！！」本日二度目！！」

再び叩かれ地面に突っ伏すシリウスだが直ぐにガバッと顔だけ起き上がる。その視線の先には……

シリウス「今日も白か……」

はやて「なっ／／／／／／／／！？」

その意味を理解したはやては慌てて内股になりスカートを押さえる。だが、時すでに遅し……

シリウス「フッ、再び俺の心のメモリーに新たなはやてが登録された……」

はやて「わ、忘れろやーーーーーーーー！！」

シリウス「ヤダプ～♪これは俺の心のメモリーに四重プロテクトで保存するんだも～ん♪」

はやて「うが～～～～～！！！」

シリウスに向かって新たに力を得たその圧縮した範囲攻撃魔法をぶっ放しまくるはやて。
それを笑いながら華麗なステップで避けまくるシリウス。それを見てガタガタブルブル震えている魔導師達。

魔導師「お、おい……誰かあれを止めろよ……」

魔導師「む、むむむ無茶言うなよ……あ、あああああああんな歩く核兵器みたいになった人を誰が止められるんだよ！？」

魔導師「って、こっちに来たーーーー！！？」

魔導師達「「「ぎゃあーーーーー！！！」」」

ご乱心はやてとそれから笑いながら逃げるシリウス、そしてそれに巻き込まれた憐れな子羊達……。
周囲では激しく戦闘が行われているのに何故かここいら一帯は緊張感が殆ど無いのは何故だろうか……。
これがはやて、シリウスクオリティー……。

リイン「はう～、さっきのシリウスさんの声はとっても気持ちよか

ったです～／／／／／／」

女性魔導師達「同感ですね～～～／／／／／／／／／／」

はやて「リイン！？ってか周囲にまで感染しとる！？」

因みにあの後リインやほかの女性魔導士達が惚けているのにはやては気付いたとか無いとか……。

## 第二十五話（後書き）

さっそく登場していただきました。デバイス、バルムンクとその使い手ジーク。
ええ、オリジナルです。オリジナルですが何か……？ってか使徒がまだ少ししか登場していないのはこれ如何に！？

カイン「このままだと五十話を余裕で超えるんじゃないか！？」

あれ～おかしいな？まあ、不測の事態など日常茶飯事！！この前なんて書いてた文が一瞬で昇天するという作者の脳では理解できない事態に陥り無意識にエラコッチャエラコッチャって踊ってました。

クラウド「それはただの阿呆と書いて馬鹿と言うんだよ」

クスン……お陰で一から書き直し。何書いてたのかもすっかりドロドロに融解した脳に保存されている訳もなく……一体何書こうとしてたんだっけ？

バルド「おい、その年でボケんのは早いぞ！？」

っとまあそんなことはすぐに忘れ気にせず書き直し投稿した訳ですが、はやてさんがシリウスに弄られて覚醒した模様…っと言ってもただ魔法が強化されただけであって弱点に強くなったという訳でもありません。ってか最近キャラ崩壊が絶賛進行中なのに気付く。もう口調とか分かんなくなった……ｏｒｚ
それでも、見捨てないでください。これからも精いっぱい頑張りますので如何か宜しくお願いします！！これを読んでくださった皆様、お気に入り登録して下さった皆様ありがとうございます！！これか

らもこの駄文作者を宜しくお願いします！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第二十六話（前書き）

更新遅れて申し訳ありません。少し前に起きた大地震の影響で自分の住む地域が大停電になってしまい復旧するのに6日掛かり、更にインターネットが使えるようになるのに一日かかってしまいました。今でも水道が機能せず何時復旧するのか全く見通しがなく不安です。

読者の皆様、またそのご家族の皆様はお怪我はないでしょうか？その辺り作者はとても心配です……。

さて、停電攻撃で書いてたのが一瞬でおじゃんになってしまい初めから書き直したのですが……またもや難産ですｏｒｚ

あれ？俺って最初、こんな風に書いたんだっけ？っとこの様に頭を３９０度（無理だからね！？）捻っても思い出せず、こうなりました。

今回の使途はかなりヤバめにしたんですが…ではどうぞ！！

# 第二十六話

前回、はやて、シリウス劇場で終わりましたがまだまだ戦闘は継続中。

そして、管理局本部では……

クロノ「何故です！何故艦隊を出撃させないのですか！？」

我らがＫＹさん…じゃなくてクロノ・ハラオウン提督は目の前にあるテーブルを叩き目の前にいる男に詰め寄る。

彼は、管理局内で大きな力持っているのでクロノはその人に艦隊の出撃許可を取りに来たのだが目の前にいる男は首を縦には振らなかった。

一佐の男「艦隊を出撃させて如何する？また撃墜させられるのがオチだ。そんなのの為に貴重な艦隊を出す訳にはいかんな…」

クロノ「なっ、今街が襲われているんですよ！？」

男「それは、地上部隊が警戒を怠ったからだろう？私達は何の非も無い」

そう言われて愕然とした。この男は自分達の非を認めようとはしないのか……と。
至福に身を肥やして最早昔の面影など何処にもないその醜い姿を見て苛立ちを隠せないクロノ。

男「用件はそれだけか？それなら私は用事があるのでな失礼する」

クロノ「なっ！待て、まだ話は――」

言い終わる前に男がその場から去って行った。クロノは強く拳を握り思いっきり壁に叩きつけた。

クロノ「くそっ！！何処まで腐敗しているんだ此処は！！」

？？？「クロノ」

そう呼ばれて振り向くと一人の青年が立っていた。

クロノ「ユーノか……如何した？」

ユーノ「うん、少し気になって見に来たんだけど……上手くいかなかったみたいだね」

クロノ「ああ、改めて此処の腐敗具合がどれ程のものか思い知らされたよ」

ユーノ、過去になのは達と共に闘い陰で支えた人物で所謂縁の下の力持ち的位置の人物である。
今は無限書庫の司書長を務めている。

クロノ「やっぱり、僕が行くしかないな」

ユーノ「駄目だよ。クロノが行ったら誰がこの混乱した状況を落ち着かせるのさ？」

周囲では慌ただしく動き回る局員が多数いる。艦はなぜ動かないのか、何時になったら出撃できるのか等々戸惑っている者も多数いる。

クロノ「だから僕が呼びかけて行く気のある者だけ集めて出撃する」

ユーノ「そんな事したらクロノが……」

クロノ「分かっている……だが、民間人を守るの事が僕達管理局の、人としての当然の行動だ！」

決意を固めて動こうとした時本部内にアラートが鳴る。

アナウンス［緊急事態発生！大気圏外から降り立つ反応を確認！！急速に落下してきます、その数十五！］

それと同時にモニターが現れその映像が流れる。大気圏に突入して炎に包まれたものが猛スピードで落下しているではないか。それは、其の侭真っ直ぐに落ちていき海面ギリギリで軌道を変え海面を裂きギリギリの高さで飛ぶ。そして、炎が消えてその中から戦闘機が出現した（モチーフはガンダム００のブレイヴ）。

アナウンス［所属不明の勢力を確認！！直ちに局員はこれの調査を、繰り返します直ちに――］

アナウンスが流れると同時に慌ただしさが更に増し蜘蛛の子を散らしたように周囲から局員が消えていく。

しかし、クロノとユーノは動かなかった。ジッとその映像を見てその戦闘機か何かを見つめる。
全身を赤に統一した機体で翼の部分に獅子の紋様が描かれていた。

戦闘機形態になっている第一最前衛部隊の副隊長は安定状態になったのを確認した後、合図を出し急上昇、それに全員がついて行き一定の間隔を開けてＶ字のフォーメーションを取る。

高度が一定になり前方に街に向かうと思われるイノセントの集団を

確認した。
その数は約二千程……

副隊長「獅子部隊、これより敵と交戦を開始する。諸君、今回は殲滅戦では無い。あくまで防衛戦だ、一帯の敵を殲滅後街へと行き民間人の救援を最優先とせよ!!ただし、避難し遅れた者を見つけたら本国に連絡しディフェンダーを転送する様にポイント指定するのを忘れるなよ?」

一同「了解!!」

副隊長「フッ、皆今日も生き延び酒を交わすぞ!!俺達の誓いは!!」

一同「救える命を全て拾う!!」

それと同時に鎧装を展開し元の人の姿に戻り、バーニアをふかす。

副隊長「総員、エンカウント!!」

右手に持っているビームライフル『ドレットノート』を構え一斉に連射、イノセントを多数撃破する。
脇からの新手に気付いたイノセント達だが横から食い破られるかのように獅子部隊は突き破り分断する。

副隊長「総員接近戦を避け離れて戦え！！」

一同「了解！！」

再び、鎧装が展開し戦闘機形態になりイノセントの中を高速で飛び抜ける。

？型達はその後を追跡、両足のガトリングガンを連射するがそれを隊列を崩さずに彼等は回避しサイドバインダーについているキャノンを後方に回して連射し追撃してくるイノセント？型を撃墜して行く。更に急制動かけて機首を変えイノセントに向き合う形にしミサイルを一斉掃射。爆発が次々に起こりイノセント？型の多くがミサイルをくらった。

そして、再び鎧装を展開し人の姿に戻りチャージを完了させた『ドレットノート』の照準を合わせ引き金を引く。銃口から巨大な赤い閃光が放たれ十五の流星となってイノセントの群れを襲う。

一瞬で千もの仲間が消されて怯えるイノセント達に散開して獅子部隊は強襲して行った。

クロノ「な、何だあの機動性は……」

イノセントの群れを包囲してそのまま周囲を回る様に高速移動しながら持っているライフルとサイドバインダーにあるキャノンとミサイルを連射して次々に落して行くその光景を見て見た事も無い連携を見せる謎の部隊を見て二人は驚きで目を見張る。

最後の一匹を撃破した後再び戦闘機になりクラガナンへ向けて飛んで行った。

アナウンス［謎の勢力首都へ向けて進行中！敵は質量兵器を所持している模様、直ちに首都へ出撃せよ！！］

それを聞いてクロノは弾かれる様に駆け出し転送ポートに向かって走り出した。

――――――――――――――――――――――――――――――――

ロイドとコレットが二人でイノセント?型の大部隊を相手に奮闘していると通信が入る。

ロイド「ん?誰だ?」

副隊長『お久しぶりです、隊長！！』

獅子部隊の面々が姿を見せロイドもコレットも驚いた表情をする。

ロイド「お前等!?如何して此処に?」

副隊長『ウルフ陛下より出撃の命が下されたので……。それと隊長

達との共闘戦をする為に来ました！！民間人の救助は我々にお任せ下さい！！』

ロイド「ああ、頼んだぜ！！」

通信を切ると向こうから戦闘機が十五機確認できそれは高速でロイド達の前を通り抜けて街の中に飛んで行った。

コレット「ロイド、今のって獅子部隊の皆？」

ロイド「ああ、あっちは任せて俺達は周囲の敵を倒すのに専念するぜ！！」

それにコレットは頷き。術の詠唱に入る。彼女を中心に大きな魔法陣が展開され天使の翼が光り輝く。

コレット「冥界へと導く破邪の煌きよ、我が声に耳を傾けたまえ、聖なる祈り永久に紡がれん光あれ！グランドクロス！！」

巨大な十字架が現れその光を浴びたイノセント達は浄化され消えていった。

ロイド「はあああああ！！鳳凰烈破！！」

炎を纏った剣を振り抜きそこから火の鳥が空を駆ける。イノセント達はその炎に焼かれ消し飛んだ。

コレットはアクセルモードに姿を変え、二人は空を駆ける。舞う様に戦い次々に周辺のイノセント達を倒していった。

――――――――――――――――――――

――――――――――

ビルの一角に3つの影があった。

クラレンス「何あいつ等?結構強いんだね～」

エリス「クスクス、そうだね～面白くなってきた」

半分が赤で半分が銀の短髪を持つ二人の子供はその光景を見てクスクスと笑い合う。その手に人だった物を持って……彼女達の周囲には幾つもの亡骸があった。魔導師だったもの、民間人だったものなど、

遊び飽きたものは傍らに控えているイノセント?型に与える。それを美味しそうにバリバリと音を立ててイノセント?型は食すのだった。

フォスティル「剣聖九神将か……」

呟く様に喋るフォスティル。その隣にジークが現れる。

フォスティル「ジークか……今まで何処にいた？」

ジーク「……管理局の人間と戦っていた」

クラレンス「死体は持って来てくれたの？」

ジーク「殺してはいない」

エリス「ふ～ん、つまらないわね…クスクス」

エリスとクラレンスは遊びに飽きたのか立ち上がり服をポンポンと叩き埃を落とす。

エリス「あ～あ飽きちゃった。二人とも私達は新しいおもちゃを取りに出かけるね？行こうクラレンス、クスクス」

クラレンス「そうだね姉さん。クスクス」

そう言って二人は一瞬で姿を消した。それを横目で見た後フォスティルは溜息を吐いた。

フォスティル「全く……何故、使徒の多くはこうも戦闘好きが多い

のだ？」

ジーク「…………………………………知らん」

まあ、それが分かれば苦労は無いのだが……何時も纏まり感が無いなこの組織は…とフォスティルは思い再び溜息を盛大に吐くのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――

海上でなのははイノセントの集団と交戦していた。ブレードモードとバスターモードを上手く切り替えながら現在一人でも何ら問題無く戦っていた。

レイジングハート「マスター、戦闘空域に新たに反応を確認しました。この反応は……前の三人組です」

視線をその方角に移すと確かに前回クラガナンを襲撃してきた三人組だった。

オル「見つけたぜ！今度は俺達が勝つ番だ！！」

シャル「皆、殺してもいんでしょ？」

クロ「ちゃっちゃと殺っちまおうぜ」

オルと言う男がシュラークをなのはに向かって放つ。それを見きって回避行動をとりお返しにアクセルシューターを複数飛ばす。その魔力弾を散開する事で分断させ持っているビームライフルで撃ち落とし、クロがアフラマズダを連射してくるがそれを左右に動く事で回避する。
その間にシャルが接近し大鎌のニーズヘグを振るうがそれを後退する事で回避し距離を取る。

なのは「ディバインバスターーー！！」

シャル「はっ、無駄だよ」

砲撃が迫るがシャルは回避行動を起こす素振りも無く両肩にあった装甲板を前方に展開するとなのはの砲撃は曲がりあらぬ方向に飛んで行った。

なのは「やっぱり効かないみたいだね」

レイジングハート［その様ですね……］

前回同様砲撃を逸らされた事に驚かずに冷静に分析するなのは。あ

の装甲板を破るにはもっと強力な砲撃を放たなければいけない様だ。

シャル「そんな攻撃効かないよ、おらぁ！」

なのは「くっ！！ディバインバスターーー！！」

シャルがフレスベルクをなのはが砲撃を同時に放つ。互いの砲撃がぶつかり暫し拮抗が続き最後には爆発し二人の砲撃は相殺された。

なのは「くうっ！」

シャル「あぁ～もう、うざい！！」

爆風で吹き飛ぶ二人だがシャルの隙は残りの二人が射撃する事でカバーされなのはは一度フラッシュムーヴを使う事で離れる。

オル「何やってんだよ、シャリ？」

クロ「なっさけねーの」

シャリ「くそぉ～、あいつうざい！！」

次にどの様な攻撃が来るのかなのはは警戒を強めてデバイスを構えるが……

オル「流石は管理局の白い悪魔だな。っち、めんどくせぇな」

その一言でなのはの中の何かがプツンと切れた。

なのは「フ…フフ……フフフフフフフフ」

突然俯いて笑い出すなのはに三人はビクッと体を震わせた。彼女の周囲が異様に禍々しく……何か黒いオーラが渦巻いている様に見えた。そして、それに呼応する様に周囲で戦っていたイノセント達が本能的に何かを察知したのか猛スピードで彼女の周囲から逃げて行った。

なのは「如何してその名前で呼ぶのかな?、かな?」

その声は低く喋っているにもかかわらずハッキリと聞こえ三人の背筋に冷たい汗が伝わる。

なのは「ちょっと、O・HA・NA・SIしよっか……?」

そして、顔を上げるなのは。その表情は笑っているのに笑っていなかった……。

そして、それは周囲の人も感知した。

カイン「ブルッ！？な、何だこの寒気は……！？」

フェイト「ガクガクブルブル（（（（゜Д゜；））））」

バルド「ど、如何した、フェイト！？」

はやて「あ、あかん……嵐が……嵐が来よったでーー！！」

シリウス「……空は晴天だけど？」

ティアナ「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいぃぃぃぃぃ！！」

スバル「ティ、ティア！？如何したの！？」

一般魔導師ズ「「「ブクブクブク……（気絶）」」」

最早トラウマになってる人は全身を振るわせたり必死に謝っていたり一般魔導師は気を失ったりと色々な所で余波を受けていた……。
流石、砲撃魔王少女なのはさん……
怖いよ～、怖いよ～なのはさん！！（（（（゜Д゜；））））ガタガタブルブル！！

なのは「レイジングハート…ブラスター1」

レイジングハート［イ、イエス、マスター……］

相棒のレイジングハートは何となく察知した。もう自分の相棒は悪魔と化したと……。

なのははゆっくりとした動作でレイジングハートを三人に向ける。

なのは「エクセリオンバスター……」

先程とは比が違う砲撃が三人に迫る。本能が告げる、兎に角避けろっ！！と……。

全力で回避行動をとり砲撃の攻撃範囲から逃げる。その砲撃は真っ直ぐ飛んでいきその先にいたイノセント?型が巻き込まれて一度の砲撃で五十以上同胞が消し飛んだ。

三人「なっ！?」

なのは「逃げないでよ……ちゃんと当って欲しいな～、にゃはははは♪」

笑ってるのに目が笑ってないなのはの視線を感じて寒気が走る三人。

なのは「ブラスタービット…行って」

彼女の周囲からブラスタービットが三つ出現し各々が独自に動き三人に襲いかかる。
その一つ一つから凶悪な砲撃が放たれる。それらを回避しながら三人が同時にスキュラ、フレスベルグ、ツォーンの砲撃を放ったがそれは彼女の張ったプロテクションの前に阻まれて届かなかった。因みに言っておこう彼女は一切動いていません！！

なのは「如何したのかな？、かな？この位の攻撃だったけ？少し…真面目にやろうよ……」

更にブラスタービットが三つ展開され彼女の周囲で回転しながら砲撃を放ってくる。
それを縫う様に他の三つのビットも移動しながら砲撃を放って来るので逃げ場が殆ど無い。

なのは「私はね……そう言う風に呼ばれるの嫌いなの。誰にだって呼ばれたくない名前ってあるよね……？ねぇ、私の言ってる事……間違ってる？」

更にアクセルシューターを発動させ三人に飛ばし段々と逃げ場を削って行く。数発をくらい徐々に動きが鈍って行く三人に遂に彼女は

止めともいえる攻撃の準備をする。

なのは「レイジングハート、カードリッジロード……」

レイジングハート「イ、イエス、マスター！ロードカードリッジ！！」

薬莢が三つ飛び出し、魔力が溢れる。

なのは「ディバインバスター・ゼロ……」

彼女の周囲にあるブラスタービットからも同様の砲撃が放たれ巨大な砲撃が合計四発三人に迫る。

オル「シャル！！何とかしろ！！」

シャル「う、うわあぁぁぁぁぁ！！」

当然、カインのディバインバスター・ゼロの一発すら止められなかったのにブラスター1を開放してのこの砲撃を止められる訳も無く三人は仲良くその桜色の閃光に飲み込まれていった。

なのは「レイジングハート……ブレードモード」

レイジングハート「っ！？イ、イエス、マスター……」

如何やら彼女の何か虫の悪い所を突いてしまったのか彼女の怒りは収まっておらず何とブレードモードになってその切っ先を構える。その間に辛うじて戦闘不能を免れボロボロの姿になった三人は恐怖のあまり撤退をし始める。だが、それを逃がす訳も無く三人にバインドをかける。

シャル「な、何だよこれ！？」

オル「う、動けねえ……！！」

なのは「少し……頭を…冷やそっか……」

既に彼女の砲撃準備も完了している後は……この砲撃をあの三人に放つだけ…とトリガーを引こうとする。その時……

カイン「はい、ストップ」

ギリギリのところでカインがなのはの体を抱きすくめる様に手を彼女の細い腰に回し引き金を引こうとした手を掴み、抱き寄せ、耳元で囁くように語りかける。

なのは「あっ……カ、カイン君／／／／／／／！？」

カイン「それは、まだ使っちゃいけない。それは、あの時言った筈だぞ？」

突然抱きしめられ混乱するなのは。その間にそう言って手を掴んでいた片手を彼女の頬に当てて此方に顔を向けさせる。

至近距離からカインの顔を見る事になり、少しでも動いた瞬間唇が触れそうになる状況に更になのはは赤面する。

カイン「約束を破ったらお仕置きだぞ？分かってるよな？」

なのは「え、えっと……でもぉ～～／／／／／／／／」

カイン「そんな事、言わせておけばいい。なのはは、なのはに変わりは無いんだから、な？」

なのは「あ、あうぅ～／／／／／」

カイン「ハハハ、まっ怒ってるなのはも愛嬌があって少し可愛かったがな」

なのは「か、可愛っ―！？……にゃぁ～～／／／／／／／」

その一言で思考がオーバーヒートしたのかボンっと音を立てて真っ赤になるなのは。ツインテールがピコピコと感情に合わせる様に動くのが少し謎だが……そして、思考停止しているなのはを見て笑っ

た後前方の三人に語りかける。

カイン「取り敢えず、今回は帰ってくれないかな？」

その時カインの表情を見ていて三人は気付いた。ニコニコ笑っている様に見えて実のところ笑っていないのに……。つまり、カインも何か気に入らない事があったらしく今の忠告は暗に「これ以上此処にいるんだったら俺が消すぞ？」と語っていた。

クロ「チクショー、覚えてろ！！」

シャリ「次は……殺す」

オル「ッチ！」

バインドを解除して早々に撤退して行く三人。なのはさんが怖かったんですね、分かります……。

一方何故カインの機嫌が悪かったのかと言うと…

カイン（ったく、俺の事を悪く言うのは別に構わねえんだが、教え子が変な風に呼ばれるとやっぱイライラするな……）

っとまあ、昔の頃についた特性の爆発だった様です。…え？カインは用務員じゃないのかって？実のところカインはその頭の良さから

時々代理教師をやってもらっていました。その評判は非常に高かったと記しておきましょう。

なのは「カ、カイン君／／／／／／そろそろ離して……は、恥ずかしいよ…」

カイン「ん？ああ、わるいわるい。ったく、お前は状況を読んで使いどころを弁えてると思っていたのに意外なところで面白い反応するんだな？」

そう言って笑うカインに頬を膨らませるなのは。この光景を見ていた一般魔導師達は後にカインの事を『白い悪魔のストッパー』とかで呼ぶ様になったとか……。

ところで、二人とも何時まで戦場でイチャついてんだコノヤロー！！

――――――――――――――――――――

――――――――――

～クラガナン～

クラガナンでは陸戦魔導師達が民間人の避難誘導やイノセントの群れを引き付けていたりと所々で起きているがハッキリ言って人員が少ないことから効率が悪かった。

ギンガ「民間人の避難の状況は如何ですか？」

陸士一「はい、避難誘導はしてはいるのですがイノセントを引き付ける役をしている方に人員を大きく割いている為に上手くいってません！！それに、報告によりますと既に多くの部隊が戦闘を継続するのが不可能に近い状態です……」

ギンガ「本局からは！？増援はまだ来ないんですか！？」

前線で戦っているスバルの姉、ギンガがそう聞くが陸士は苦々しい顔をする。
その様子だと如何やら期待は出来ない様だ……。

陸士二「くそっ！こんな数、俺達だけじゃ無理だって！！」

陸士三「大変です！！此処に向かって艦隊と航空機の大部隊が接近中！！到着まであと二十分！！」

その報告に多くの魔導師達は焦った。今の現状ですら厳しいというのに更に増えるというのが予想できたからだ。此の侭では街が壊滅する。

スバル「ギン姉！！」

そこに妹のスバルとその相棒のティアナが周囲のイノセント?型を撃破しながらやって来た。

ギンガ「スバル！」

スバル「ギン姉、避難の状況はどうなの！？」

ギンガ「人員が足りなくてあまり上手くいってないわ」

ティアナ「それなら、負傷している人の中にまだ動ける人を集めてその人達に避難に回したらどうでしょか？」

ギンガ「そうするしかないかもね……。誰か、頼める？」

それに幾つかの魔導師達が応えてその場を立ち去って行く。

その時、上空からイノセント?型の集団が此方に肉薄してきた。両足にあるマシンガンを連射してくる。それを避けてティアナが魔力弾を撃ち出し迎え撃つ。それを散開する事で避け背中にある筒を展開させそこから超高速の弾丸を撃ち出した。

それはティアナに当たるかと思われたが当る前にティアナが幻の様に消えた。

ティアナ「クロスファイヤー、シュート！！」

そして、イノセント?型達の背後の地上で声が聞こえ振り向くと眼前に迫る魔力弾の雨。
それは直撃し多くのイノセント?型が撃墜された。

ギンガ「はあぁぁぁぁ!!」

スバル「うおぉぉぉぉ!!」

そこに、スバルとギンガが飛び掛かり残っているイノセント?型を殴り飛ばし撃破する。
そこに続々と先程より多くのイノセント?型が現れ襲いかかって来た。

ティアナ「くっ!このままじゃ……」

多過ぎる敵の数に対応が遅れ始める。そして、一匹がスバルの背後を捉えた。

ティアナ「スバル!!」

スバル「うわっ!?」

大顎がスバルに迫り思わず目を瞑る。その時、赤い閃光が通り過ぎ目の前のイノセント?型はその光に飲み込まれた。そして、三人の前を戦闘機が通り過ぎる。

ギンガ「な、なにあれ!?」

それは上空で装甲が展開して中から人が現れる。十五人は散開し一人を残して七人編成で周囲を飛び交いイノセント?型を撃破して行く。そして、一人が三人の前に降り立つ。

ティアナ「あ、貴方達は!?」

副隊長「我々は機装国家グランディオンの大元帥ロイド・アーヴィング隊長の部下、第一最前衛部隊『獅子』に所属している者です。今回、我らが国王ウルフ陛下の命により貴君らを援護する」

スバル「ロイドの部隊!?」

ギンガ「機装国家グランディオンって前にスバルの言ってた人達の……?」

副隊長「状況を見るに人手が足りていない様だが……我らがあの虫共と戦いながら救助を待っている者達を探そうか?」

ティアナ「その様な事が出来るんですか!?」

副隊長「特に問題は無い。何時もの訓練の半分の作業にすぎない。

では、」

ギンガ「待って！貴方達が使っているのは質量兵器では無いんですか！？」

副隊長「そちらの世界の言葉で言うならそうだが？ああ、そう言えばそちらは質量兵器の使用は御法度なのだったな。だが、使い道を誤らなければそれは大切な何かを守れる盾となる。そちらは魔法と言うのがあるからいいが、我らにはその様な才能が無いのでな、侵略者共から世界を守る為にはこれを使う以外に無いのだよ。そこのところを理解してもらいたい。何処の世界にも魔法が存在する等と贅沢な考えを持っているのなら今捨てろ。世界はそんなに狭くは無いのだからな」

言いたい事を言って副隊長の男は鎧装を展開して戦闘機になり街中を疾走して行った。

その後を周囲のイノセント？型を殲滅し終えた残りの者がついて行った。

三人「……」

贅沢な考え……確かにそうだ。魔法が無い世界だからと言って文化レベルが低いとは限らない。

現に隊長であるなのは達の世界も魔法文化が全くないのにも拘らずそれなりに高度な技術を持っている。それを、自分達の世界とは違い魔法が無いからと言うだけで文化レベルを低く定めたりするのは間違いである。指一つで人を殺める事の出来る質量兵器を使ってい

るからと言ってその世界が何処かに戦争を仕掛けている訳でもないのに取り上げてしまっては彼らは何をもってして自分達の世界を守ればいいのだ。そう考えざるおえない。

考えを変えてしまえば魔法だって危険なものだ。非殺傷設定を解除してしまえばそれは使用する人物の実力が高ければ高い程、危険なものになり最終的にはたった一人で戦略級核兵器に匹敵する力を持つ人間になる。そうならない為の非殺傷設定(あんせつしょうせってい)だ。だが、もしそれが無ければ、間違いなく質量兵器と同じくらいに性質(たち)が悪く危険なものになるだろう。

これは……改めて魔法と質量兵器の関係について考えを改めなければならないのだろうか……？

そんな風に考えている三人に、

エリス「クスクス、面白そうな玩具を見〜つけた♪」

クラレンス「そうだね、姉さん。少し頑丈そうな玩具がいるね〜♪クスクス」

三人「っ！？」

無邪気な声が聞こえ振り向くとそこには何時の間にか二人の半分赤で半分銀の短髪の子供が立っていた。

その両手に血塗れでズタズタにされた局員を掴み引きずって……。

エリス「こんな玩具じゃ一分も持たなかったし飽きてたところだったんだ～♪」

クラレンス「貴方達は何分持ってくれるの？クスクス」

そう言って二人は無邪気に笑う。その表情は本当に純粋な感じだった。

その時彼女達の掴んでいる局員の一人がうめき声を上げる。

エリス「あら？まだ意識があるんだ？クスクス、タフだねぇ～♪」

クラレンス「そうだ！今度は腕を？ぎ取ってあげようよ？そうすればもっと楽しいかもよ！クスクス」

エリス「そうだね！！楽しそうだね！！じゃあ、お兄さんも良い悲鳴を出してね？」

そう言って彼の肩を掴みそして、一気に引き千切った……。

局員「あああああ、があぁぁぁぁぁぁあっぁぁあぁぁぁ！！！」

エリス「クスクス、良いね！凄くいい悲鳴だよ！！骨の髄にまで響くこの感じ……」

クラレンス「ああ～、本当に最高だね！今度はもう一つの腕で遊ぼ

うよ？クスクス」

街中に響く悲鳴に多くの魔導師達が集まり目の前の光景に青褪める。片腕を？ぎ取られそこから帯びたたしい血を噴水の様に出し狂乱している仲間、それを見て血を浴びているのに何の恐れも抱かずに悦に浸っている二人の子供。ティアナ達も顔を青くし一歩も動けない状態だった。

その間にも二人はもう片方の腕に大気中に出した魔力で出来た針状の物を幾つも、幾つも出しそれを残りの腕に殺到させる。再び悲鳴が響き渡りそれを見て再び悦に浸る。その後も幾つも惨い事を数々と行われ遂に局員は必死に懇願し出した。

局員「もう止めてくれ……もう、一思いに殺してくれ……」

エリス「……あ～あ、もう壊れちゃったの？つまんない！」

クラレンス「壊れた玩具に興味は無いよ。要らない物は……ポイッ！だ」

そう言って手が振るい次の瞬間に局員の首が空を舞い地面に落ち、傷口から血が噴き出す。
頬を伝う血を舌でぺろりと舐め無邪気な顔を見せティアナ達を見る。

エリス「次の玩具は何処まで私達を楽しませてくれるんだろ～ね？クラレンス？クスクス」

クラレンス「そうだね♪何処まで楽しませてくれるんだろうね、姉さん。クスクス」

それを見て多くの局員は最早全身を戦慄かせ後退りを始める。無理も無いだろう、同胞が惨たらしく目の前で殺されれば誰だって恐怖を覚える。ティアナ達も体から込み上げる吐き気と恐怖を必死に堪えながら目の前にいる二人の子供を見つめる。

クラレンス「つまらない玩具には興味無いから邪魔しないでね？」

そう言って周囲に先程の針を形成しそれらを撫でる様に手を滑らせるとそれらの針は一瞬消え次の瞬間には周囲にいた陸士達に突き刺さりそのまま壁に縫いとめた。

エリス「貴方達はそこで待っててね？そこにいるお姉ちゃん達と遊び終わったら遊んであげるから、クスクス♪」

クラレンス「ねえ、お姉ちゃん達は私達を楽しませてくれるの？楽しませて頂戴ね、クスクス♪」

ティアナ「スバル、ギンガさん！気を付けて！！この二人、もしかしたら使徒かも！！」

それに二人も警戒を強めデバイスを構える。エリスとクラレンスは

それを見てクスクスと笑いながら揺れ動く。
その動きで二人が一人に見える錯覚が起きる。声すら重なり始め、
まるでそこにいるのは初めから一人だけの様に……

二人「『プロヴィデンス、第四（五）の使徒エリス（クラレンス）』」

二人「『さあ、遊びましょ♪』」

狂気の二人がティアナ達に襲いかかった。

――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――

町中を飛びながら民間人を探す『獅子』部隊はイノセントの群れが
殺到している建物を発見する。
そこにいるイノセント?型を殲滅し中に入るとそこには十数名の民
間人と傷付いた陸士達がいた。

副隊長「大丈夫か？」

陸士「あ、貴方方は？」

副隊長「そんな事は後だ。此処にいるので全員か？今、応援を呼ぶ」

それに頷くのを確認したあとウルフの所に連絡を入れる。
受け取ったウルフはすぐさま指令を送りディフェンダーの転送をさせる。

ウルフ「ポイントＥ３０－０１－０１、ディフェンダー出撃！！」

ディフェンダーの目が光り、歩き出す。そして、前方にある歪んでいる空間に入り次の瞬間には建物から出て避難を始めたクラガナンの民間人達の前に現れた。

突如として現れた巨大なディフェンダーの姿に驚く人達を無視し周囲を警戒しながら彼らの歩みに合わせてゆっくりとそれは動く。そこにイノセント?型の大群が襲いかかって来た。

陸士「ま、また来たぞ！！」

そう叫び迎撃しようと其々の得物を構えようとした時、

ディフェンダー「敵勢力の接近を確認。排除開始……」

目を光らせ両手に持っている大型ガトリングガンを構え一斉掃射。

轟音を上げて放たれたそれは多くのイノセント?型を撃墜した。
一端反転し距離を取ろうとしたがその時間すらディフェンダーは与えようとはしなかった。
両肩、腿、胸部が展開しそこから夥しい数のミサイルが射出され、逃げ惑うイノセント?型を追いかけ着弾して行った。ディフェンダーは周囲を確認し再びイノセント?型を視界に捉えると両肩にある砲台からビームを放ち撃墜して行く。

ディフェンダー「半径３００メートル内に敵反応なし。待機モード及び防衛モードに移ります」

陸士「な、なんという火力だ……」

副隊長「それがいれば避難は問題無く進む。我等は何処かにいるだろう避難を待っている者達の下に向かう」

陸士「ま、待ってくれ!!アンタ等は一体何者だ!局の者ではないな!!」

副隊長「我々は機装国家グランディオンに所属するある方の部下だ。これより貴君らの援護をする。では、」

そう質問に答えたあと戦闘機形態になり彼らの事をディフェンダーに頼み三人一組の編成で散開して各方面に散らばって行った。

―――――――

クロノ「これは……酷いな」

出撃したクロノは多くの局員を連れてクラガナンに降り立つが現状に多くの局員が呆然とした。
街はイノセントの襲撃で荒れ燃えそこかしこで爆発音が響き渡る。

その時、視界に三つの影を捉える。それは、先程映像で見た赤い戦闘機。イノセント?型を撃ち落とし、連携して?型すらたったの三人で撃破する。そして、周囲のイノセントを倒して建物内に避難していた人達を誘導しそこに何か大きな機体が出現し何かを言ったあと飛び立つ。

すかさずクロノは数人の部下を連れ彼らの前に立ち塞がる。突然現れたクロノ達に戦闘機は形態を変え中から人が現れた。

クロノ「そこの怪しい奴、止まれ!!」

獅子部隊兵士一「何だよこのクソ忙しい時に!!」

クロノ「貴様ら、何処の所属だ!?」

獅子部隊兵士二「さっきからそればっかり聞くな。いい加減答えんのに飽きたぜ……」

獅子部隊兵士三「そう言うなって、この世界じゃ質量兵器は御法度だって事前に調べていただろ?え～っと我等は機装国家グランディオン所属の第一最前衛部隊『獅子』の者です。以後よろしく」

軽い口調で所属を答える男達。如何やらここまで来る時にかなりの回数同じ事を聞かれたのだろう。

クロノ「貴様等が何処の所属かは分かったが、あれは何だ!!質量兵器ではないか!?」

クロノが指差す先には民間人を守る様に隣を並走している巨大な機体、ディフェンダーである。
それは、周囲から襲いかかるイノセントをミサイルやガトリングガンを使って次々に撃ち落として行く。

兵士一「ディフェンダーの事か?別に良いじゃねえか、お前達が守るべき市民を護衛しているんだから。役に立ってないお前らよか十分役立ってるぜ?」

局員「口の悪い奴らめ!!貴様等を質量兵器不法使用で逮捕する!!」

それを聞いた途端に三人の顔に苛立ちが見える。それに気付いたクロノは内心ヤバいと長年の経験から察知した。

兵士一「テメーらも口が悪いってだけで捕まえようとすんのか……？」

如何やら自分達は触れてはいけない琴線に触れてしまったようだ。このままでは拙い！！と思い何か言おうとしたところに一人の兵士が口を開く。

兵士三「止めろお前等。俺達は此処に喧嘩しに来たんじゃないだろ？俺達の事を理解してくれるのはあの方達だけで十分だ。こいつ等が何と言おうと気にする事は無い。それに、今、旦那に頼まれていた事を忘れたのか？」

兵士二「ああ～危うく忘れるところだったぜ。こんな奴らの相手してる場合じゃねえな。今この瞬間にも助けを待ってる市民がいんだしさっさと行くか！！」

クロノ「お、おい待て！！」

そう結論をつけた途端に鎧装を展開し戦闘機となりクロノ達を置いて行って再び飛んで行った。

クロノ達も慌てて追跡をしようとするがビルの角を曲がったのを最後に姿を見失った。

## 第二十六話（後書き）

如何です？作者的には使徒のエリスとクラレンスは残虐な、けど純粋な子供という設定で書いてみたんですけど、迫力がイマイチでしたか？作者的に残虐と純粋は紙一重な感じだと思うんですが？

それと、獅子部隊の面々の名前とかは思いつかなかったので省きました（おい！！）。序でに言うと使徒の名前も適当です！！意味とかは時にないっす！！

それと、副隊長のセリフですが、あれは作者の考えも少し入ってます。だって、何で魔法はおｋで銃はアウトなんだよ！？銃より魔法の方が火力の高そうに見えるのは気のせいっすか！？なのは辺りまで来るとホント並みのミサイルよりも危険だと思うですが？建造物ぶち抜く砲撃ってｗｗｗ最早、歩く戦略ミサイル……。

っと、この小説の話は一端此処までにして置いて、今はこの未曽有の大災害に私達が如何向き合うべきなのかを考えるべきだと思います。そこに関しては活動報告に載せようかと思うのでこれにて……。

なるべく早く行方不明者の皆様が無事で見つかることを心から願っています。

## 第二十七話（前書き）

二十七話更新！凶悪ガールズが大暴走な回です。

……うん、それだけな感じの話です。いや、クラウドとティファも暴走するか？

まあそんな感じだと思うんで本編をどうぞ！！

シリウス「俺達のコメント省いたね……」

バルド「段々面倒になってきたんだとさ」

そこ、うっさいぞ！！！

# 第二十七話

エリス「クスクス、それじゃあ遊びましょ」

その言葉と同時にエリスとクラレンスの周囲に針状の魔力弾が現れそれをティアナ達に飛ばす。
三人はそれを横に飛ぶ事で回避しティアナが魔力弾を複数飛ばし牽制、その隙にスバルとギンガが接近し叩こうとしたがそれは防御魔法で防がれた。

エリス「クスクス、面白いね～。さっきまでの玩具はこんな動きをしなかったから」

クラレンス「うんうん！楽しいね姉さん、クスクス」

楽しそうにステップを踏みながらティアナの放つ魔力弾を避け二人は手を取り合いながら笑っている。そして、再び肉薄してきたスバル、ギンガの拳を手に出現させたレイピアで受け止める。
受け止めたあと二人を弾き飛ばし針状の魔力弾を飛ばす。それをウィングロードに乗って回避しティアナの隣に戻る。

スバルもギンガも自分の拳が受け止められたのに心底驚いた。まさか、片手の持っている細身の剣一つで防がれあまつさえ弾き飛ばされるとは誰が想像できただろうか。

スバル「くっ、強い……」

クラレンス「ほらほら、お姉ちゃん達休んでる暇は無いよ！！」

再び上空から雨の様な針が降り注ぐ。それを散開し避けてティアナがクロスミラージュを構えた瞬間、そこを狙ったかのような魔力弾が降り注ぎティアナに直撃する。しかし、その直撃したティアナは霞の様に消えていった。

クラレンス「あれ？」

エリス「クラレンス、後ろ後ろ♪」

クラレンス「おっとと……」

背後から魔力弾が迫るもそれを余裕をもって避ける。そこに二人の上からギンガが接近し拳を叩きこむ。

重力を加算した拳がクラレンスに迫るがそれをレイピアで受け止める。しかし、強烈な打撃にクラレンスは吹っ飛び地面スレスレで体を捻り着地、そこにエリスがクスクスと笑いながら降り立つ。

エリス「油断大敵だよ、クラレンス？クスクス」

クラレンス「そうだね～ちょっと油断してたよ。クスクス」

笑うエリスにクラレンスも笑い自身の失敗を認める。そして、ティアナを見る。

エリス「それにしても……幻術を使う魔導師がいるんだね～」

クラレンス「凄いよ、姉さん！！あんな高度な幻術を使う人、久しぶりに見たよ！！」

半ば興奮気味に語るクラレンスを見て微笑むエリス。ティアナは笑い合うその二人を見て何故か背筋に寒気が走った。

エリス「でも、ね？」

クラレンス「私達も凄いんだよ～？」

そう言って、ティアナに突撃を仕掛ける。二人が一人に、一人が二人になるような不思議な動きで迫って来る。その間にスバルとギンガが割り込み拳を二人に打ち込む。その光景を見てティアナは嫌な予感がした。

ティアナ「二人とも駄目！！」

その声は一歩遅く拳は子供の使徒を捉えた。しかし、その瞬間エリスとクラレンスは罅割れ始めた。

エ・ク「「残念♪」」

ス・ギ「「なっ！？」」

それを見て驚愕する二人。次の瞬間、目の前でその二人は割れそこから大量のガラス片の様なものが散弾の如く二人に襲いかかった。咄嗟に腕をクロスさせて身を守るもガラス片が体の至る所を切り刻んで最後の爆発し二人は吹き飛ばされる。

スバル「ぐはっ！」

ギンガ「ぐぅっ！」

ティアナ「スバル！ギンガさん！！」

クラレンス「余所見はいけないな～クスクス」

その声に振り向こうとしたが左肩が熱くなるのが伝わりそこを見るとレイピアに貫かれた自分の左肩が……。

ティアナ「あ、あああああああ!!?くっ、うぅぅあぁ……」

痛みが瞬時に駆け抜ける。レイピアが引き抜かれそこから止めど無く血が溢れる。肩を押さえ蹲り痛みでうめくティアナ。その中でも思考はしっかりと動いてはいた。今、何が起きた!?スバルとギンガがあの二人を捉えた瞬間二人が割れて中からガラスの様なのが飛んで来た。そして、次の瞬間には自分の背後にいた。如何いう事だ!?何を使ったのか全く分からない!

エリス「クスクス、良いね～。その悲鳴……とても気持ちぃよお姉ちゃん」

クラレンス「もっと聞かせてよ。壊れる位に、っさ!!」

針状の魔力弾を飛ばしてくる。それを横に飛び回避、そして、反撃の魔力弾を飛ばす。だが、少女達は全く動かずそれを直撃、それと同時に二人が割れ中からガラス片が降り注ぐ。それを再び横に飛び回避したが……

エリス「ほらほら何処を見てるのこっちだよ?」

再び背後にアリスが立っておりレイピアを突きだす。それを身を捻る事で避けるが脇腹を掠めバリアジャケットを切り裂かれる。

スバル「うおおおお！！」

ギンガ「はあああああ！！」

そこにスバル達が殴りかかるが直撃したと同時にエリスが割れ中からガラスの雨が噴き出す。
それをプロテクションを展開し防御する。

クラレンス「クスクス、楽しいね！姉さん！！」

エリス「そうだねクラレンス、とっても楽しいね。壊さないように楽しまないとね～♪」

スバル「ティア！大丈夫！？」

ティアナ「平…気よ。それより、今の…なに？幻術？」

ギンガ「分からない。捉えたと思ったのに手応えが全く伝わらなかった……」

ギンガが言うには捉えた時に手応えが全く感じられなかったという。
つまり目の前にいる二人は幻術で出来た偽物だというのだろうか？
だが、それを発動させた素振りは全くない。
考えれば考えるだけ頭が混乱する。それを見てエリスとクラレンスはクスクスと笑う。

エリス「クスクス、貴方達に見破れるかな？私達の幻術を……『鏡反者』を、さ！！」

クラレンス「もっと悲鳴を聞かせて。一緒に踊ろうよ！！」

二人が同時に飛び出しまた不思議な動きを見せて迫る。スバルとギンガにレイピアを突きだす。
それを受け流し拳を叩きこむがそれを戻したレイピアで受け止め、弾き、連続で刺突を繰り出す。
そこにティアナが援護射撃しスバル達を援護するがエリス達は二人になったり一人になったりとまるで目の錯覚を起こす様な動きを見せ魔力弾を回避して行く。

エリス「う～ん、後ろのお姉ちゃんの攻撃……つまんない」

クラレンス「もっと近くで戦おうよ？」

そう言ってニコニコと笑い上空に舞い上がり針状の魔力弾を周囲に出鱈目に落して行く。
ティアナ達は油断無く身構え次の行動を警戒する。

クラレンス「花開くは針の様～♪」

アリス「撒き散らす種は、散弾の如し～♪」

ア・ク「「辺りを消し去るは、夢の如し！！」」

そう歌うと地面に突き刺さっていた針の先端が開き花の様なものをつけ始める。
そして、瞬時に蕾となり弾け中から超高速で何かが周囲に撒き散らされた。それを見てティアナは嫌な予感がした。

ティアナ「二人とも、逃げて！！」

その声に反応してその場から飛び上がり周囲に飛び散ったものから逃れるがそれと同時に地面に転がっていた種が一斉に光り周囲を吹き飛ばした。
その爆風でスバル達も吹っ飛びビルに激突。ティアナも爆風に吹き飛び激突、あまりの衝撃で視界がボンヤリとする。

頭を振るい視界をハッキリさせると目の前には地面が大きく抉れ、周囲の建物も半分が消し飛んだ状態の光景が広がっていた。もし、あのままあそこに立っていたらそう想像しただけでゾッとした。

クラレンス「クスクス、咄嗟に避けるなんて凄いね～♪」

その声にハッとしてティアナはその場から飛び退く。すると先程いた場所に剣の切っ先が突き刺さる。
バックステップをしながら距離を取り、魔力弾で牽制する。

それをエリスが針状の魔力弾をぶつける事で相殺し上空でクラレンスが同じ魔力弾をティアナに降り注ぐがクロスミラージュの自動詠唱のサポートの下ヴァリアブルバレットを連射し自分に当りそうなのだけを撃ち落とす。

クラレンス「へぇ～それを受けるんだ。なら、これは……如何かな！！」

両手を上に掲げると先程の倍の数の魔力弾が形成され一気に射出した。
幻術を混ぜながらそれを撃ち落として行くが数が多過ぎて幻術が完成する速度よりも撃破される方が速くなり遂にティアナの位置が割り出された。

エリス「クスクス、そこにいたんだ」

ティアナ「くっ！」

エリスが近づきレイピアを突きだす。それを体を捩じる事で回避しバックステップで下がる。

エリス「クスクス、避けちゃ……駄目だよ！！」

レイピアを突きの構えをし離れているのにも拘わらず突きだす。す

ると、切っ先が伸び猛スピードでティアナに迫って来た。

ティアナ「なっ！？」

想定外の攻撃に驚愕する。しかも、今の自分はバックステップを始めた瞬間で横に回避が出来ない。
その切っ先はピンポイントで先程貫かれた左肩の同じ場所を貫いた。

ティアナ「あぁぁぁぁぁ！！」

クラレンス「言い忘れてたけど、この剣って刀身が伸びるんだよね！！」

エリス「クスクス、いいね、いいよぉその悲鳴！体がゾクゾクするよ。もっと聴かせてよお姉ちゃん！！」

今度は二人同時に剣を突き出し攻撃してくる。それを辛うじて避ける続けるがそれでも完璧に避けれず掠め、バリアジャケットを斬り裂いていく。そして避ける速度が間に合わず、腕、腿、脇腹などに次々に刺さる。幻術を繰り出そうにも発動した瞬間に何かによって消された。
そして、ティアナの足元に針状の魔力弾を突き刺し、爆破。爆風で吹き飛ばされ建物の壁に激突した。

エリス「クスクス、如何したの？反撃してよ～」

クラレンス「一方的にやられているのを見ても楽しくないよ♪」

煙の向こうにいるであろうティアナに語りかける。そして、煙が晴れそこには……

エリス「あれ～？」

クラレンス「いないね～？」

ティアナの姿は無かった。周囲を見回すもそれらしき影は無い。

エリス「クスクス、鬼ごっこの次は、かくれんぼだね！！」

クラレンス「クスクス、楽しそうだね！絶対に見つけてあげるぞ～！！」

エリス達から少し離れた建物の中にティアナはいた。幻術の一つオプティックハイドを煙に包まれた時に咄嗟に発動させそのドサクサに紛れて此処まで退却したのだ。安全を確認し座り込み壁に寄りかかる。

ティアナ「はあ……はあ……っつ！！」

痛む肩や体中から走る痛みで苦痛に顔を歪める。体もそこかしこ傷つき血が滲んでいる。血を少々多く流したのが原因か頭が朦朧とし始めていた。

ティアナ（あれが……使徒…。フェイト隊長やエリオ達が苦戦したプロヴィデンスの幹部……。強すぎる）

戦って改めてその強さがどれ程のものか理解した。エリオとキャロが強くなるのに必死になるのが肯ける。

あれは、今の自分達が如何にか出来る敵ではない。見た事も無い幻術、理解できない魔法、不可思議な動き、敵ながら素晴らしいと言えるコンビネーション。

ティアナ（それにしても……何で、何であの時幻術が発動しなかったの！？）

疑問に思った事はそこである。レイピアにより斬り裂かれながらも幻術を発動させて回避しようとしたのにまるで、吹き消されたかのように発動した瞬間に消えたのだ。

スバル「ティア！！」

此処に来る前にあらかじめ念話で合流地点を連絡しておいたので逸

れていたスバル達も合流できた。
あの爆発から何とか逃れる事は出来た様だがそれでも少しだけ軽い火傷の跡が見られる。
スバルとギンガはティアナの姿を確認し彼女の体が傷だらけなのに気付いて驚いた。

スバル「ティア！？大丈夫なの！？」

ティアナ「このくらい何ともｎ――っつ！！」

ギンガ「無理しないで。これ以上戦うのは無理ね。一端退きましょう」

そう言ってティアナに肩を貸し気付かれぬ内に撤退しようとしたのだが……

エリス「何処に行くのかな～？」

三人「っ！？」

クラレンス「見～つけた♪」

後ろから声が聞こえ、振り向くとそこにはエリスとクラレンスが立っていた。
クスクスと笑いながら一歩一歩ゆっくり近づいてくる。それに合わせてティアナ達も退く。

エリス「クスクス、何処に逃げても無駄…。貴方達は私達から逃げられない……」

クラレンス「さあ、遊ぼうよ！」

壁際に追い詰められる。周囲に逃げ道がない。万事休す、その時……

リリス「はいどーー！！」

その声と共に壁を突き破ってリリスが現れた。何故か、イノセント？型の背に乗って……

リリス「ほらほら如何した虫公！！お前の根性はこんなものか！？もっともっと逝ける筈だろ！！」

最後辺りの字がおかしい様な気もするが、そう言って跨っているイノセント？型を叩くが此処に来るまでに何かあったのだろうぐったりとして動かなかった。

リリス「むぅ～、もうへばったのか！？何とも情けない！！そんなんでジャ○イカに行ってワールドカップに出られると思ってるのかあぁぁぁぁ！？」

いや、サッカー出来ねぇだろ……。

リリス「まったく……おや、ティアナ達じゃないか？元気か～い！」

ティアナ「リリス、後ろ！！」

リリス「おっとっと！」

ティアナ達の姿を確認するとイノセント？型の背から降りて三人の下にテクテクと歩いてくるが背後からレイピアの刃先が飛んできて体を捻って反転し攻撃してきた相手、エリスとクラレンスを見る。

エリス「お姉さん誰？」

クラレンス「クスクス、お姉さんも遊んでくれるの？」

リリス「おやおや、子供がこんな戦場にいるなんて危ないですよ？」

スバル「リリス！その子達はプロヴィデンスの一員の使徒って言う危険な人達だよ！！」

リリス「ふ～ん、この子達がご主人様の言っていた組織の幹部ですか～」

あまり興味がなさそうな返事をするリリス。

エリス「お姉さんも遊ぼ遊ぼ！！」

クラレンス「クスクス、目一杯悲鳴を聞かせてね♪」

魔力で出来た針を幾つも飛ばして来る。それをリリスは虚空からビームマシンガンを二丁取り出し両手に持ち連射して全てを撃ち落とす。そしてそのままそのマシンガンでアリス達を攻撃するが弾丸が当った瞬間、二人に亀裂が入りそこからガラス片が飛び出しリリスに襲いかかる。リリスはそれを冷静に当たりそうなものだけ撃ち落とす。

リリス「おおっ！？見た事も無い技ですね！！これが噂に聞く幻術と言う奴ですか！！」

幻術を目の当たりにしてリリスは目をキラキラ輝かせ始めた。まるで新しい玩具を貰った子供の様な感じだ。

リリス「これは真実の探究者として解明せねば！！…っと言う訳で此処はリリスに任せるのです！！」

スバル「リリス一人じゃ危険だよ！！私達も……」

リリス「心配は無用です！！この位リリス一人で何とかなるのです

！！」

エッヘン！とまないｔ…ゲフンゲフン！控えめな胸を張るリリス。

ギンガ「二人ともあの人は誰なの？」

ティアナ「グランディオンが誇るＡＩのリリスです。私達のデバイスの上を行く演算能力を持っています」

ギンガ「あれが……ＡＩ？如何見ても人に見えるんだけど……」

リリスを改めて見る。確かにＡＩと言われなければ完璧に人と勘違いするだろうその感性豊かな表情と動き。一見フワフワした物腰だがその動きには一瞬の隙も見えない。

エリスとクラレンスが刀身を伸ばしリリスを同時に攻撃するが彼女は両手に新たにビームライフルを持ち、その銃身で剣先を受け流しそのまま連射、再び幻術が発動してリリスにガラス片が飛んでくる。それを全て撃ち落とし突撃、クラレンスに回し蹴りを打ちこむ。クラレンスはそれを剣で受け止めエリスが脇から突きを放つ。それをクラレンスの剣を弾き飛ばした反動を利用して避けそのままビームライフルを連射、エリス達は魔力弾を飛ばしそれを相殺して今度は自分達から肉薄して来る。

一人が二人に、二人が一人になる様な不思議な動きでリリスに迫り連続で高速突きをする。

それを銃身を滑らせるように動かして全てを外に逃がす様に逸らさせエリス達が同時に突きを放った瞬間二人の視界から一瞬消える。

エリス「あれ？」

リリス「足元がお留守ですよ♪」

その声に下を見るとリリスが手を地面につけて二人の足を同時に足で蹴飛ばし体勢を崩させてそこに鋭い蹴りを打ち込んだ。

リリス「も一つおまけに、ドンッ！！」

その瞬間、リリスの足で何かが火を噴き、爆発で二人を盛大に壁まで吹き飛ばした。

その光景を見てティアナ達は驚いていた。リリスの両足は何時の間にかライフルが装備されておりそれが最後に火を噴いたのだ。

リリス「ふふふ～♪これを避けれないなんてまだまだですね～」

ティアナ「リリス今のって……」

リリス「さっきのがリリスの得意な戦闘術、バレットアーツですよ。銃使いの最終形態って奴です」

バレットアーツ、リリスが得意とする銃と格闘術の二つが組み合わさった斬新な戦闘スタイルである。格闘技を入れると同時に敵を銃

撃する二段攻撃で敵に致命的な一撃を加える。

リリス「今ので大抵のモブ兵は即死なんですがねぇ～……しぶといです」

煙の向こうを見据えるリリス。そして、煙を突き破ってエリス達は飛び出してきた。その体は如何いう風にして銃撃を防いだのか煤がついていているだけで怪我らしい怪我は全く見受けられない。リリスが両手のライフルで攻撃するがそれを掻い潜り迫って来る。リリスは両手のライフルを消しバズーカを二つ持ち同時に放つ。エリス達の手前に着弾し爆風で一瞬姿が消え晴れた時にはそこに二人の姿は無かった。

リリス「ありゃ、いない！？」

エリス「クスクス、左右がお留守だよ？」

クラレンス「さっきのお返しだよお姉さん！！」

何時の間にかリリスの左右を取って剣を構えている二人を離れた所から見ていたティアナ達は目を疑った。先程まで少し離れた所にいたのに何時の間にリリスの隣を取ったのか全く見えなかった。これも幻術でやったのだろうか！？

リリス「あっそれ♪」

だが、間の抜けた声を出してリリスは床にバズーカをつけ発射しその爆風を利用して真上に飛び上がった。

リリス「空転烈蹴！！」

剣が空を切り通り過ぎる。そして、空中でクルクル回ってその回転力を利用した回し蹴りを二人の顔面に打ち込んで同時に銃が火を噴き打撃と爆風の二重ダメージをくらってエリス達は再び壁まで吹っ飛んだ。

リリス「その攻撃はリリスの脳内で予測していた一億四千三百二十一通りの内の一つだから効かないので～すよ～♪」

全く問題ないという様に笑うリリス。瓦礫の山からエリス達が出てきて二人は並んで武器を構える。
やはり、怪我らしい怪我はしていない。

エリス「む～～！何で攻撃が当らないの！？」

クラレンス「こんなの初めてだよ姉さん！でも……楽しいね！！」

エリス「そうだね、クラレンス！こんなに楽しい戦いは久しぶりだよ！！」

キャッキャッと笑い合う二人。それを見てリリスは引いていた。

エリス「クスクス、もっと遊ぼう！」

クラレンス「もっともっと、楽しませてよお姉さん！！」

リリス「うっわ～、あの子達Mだったのか……」

ティアナ「いやいや違うでしょうが！！」

何やら勘違いしてるリリスに反射的に突っ込みを入れるティアナだがそれが傷口に響き涙目になる。

リリス「あ～そう言えばティアナ怪我してるんだっけか」

スバル「リリスなんとか出来ない？」

リリス「よし、それじゃあ……三人とも伏せろ！！」

突拍子も無くそう叫び両手のバズーカを回し銃口を此方に向け発砲、咄嗟に三人は伏せる。

彼女達の背後にある壁にぶつかり大爆発する。その爆発のお陰か壁が崩れ外が見えた。

ティアナ「ちょっと、危ないでしょうが！！私達を殺す気！？」

リリス「いいじゃん！これで脱出できるんだから結果オーライって事で！！」

三人「良くない！！」

リリス「おおっ！？見事にハモった！？」

スバル「もし当ったら如何する気だったのさ……」

リリス「ふっ、それは聞くだけ野暮ってものさ……」

ギンガ「いや、カッコつけて言うセリフじゃないし……」

リリス「まあ、良いじゃないですか。それより、此処から西に３００メートル行った場所でシグナムが救助されている所だからそこに向かうがいいよ。その周辺には虫いないし」

バズーカを消してライフルを取り出しそれをクルクルと手の中で回しながら言う。

ティアナ「本当に大丈夫なの？」

リリス「う～ん、勝率は七割ですね～。何分相手はまだ本気じゃないみたいだし～」

エリス「クスクス、私達が本気になるなんて滅多に無いよ～♪」

クラレンス「お姉さんは如何かな？見た感じまだまだ余裕がありそうだけど？」

リリス「当然です！私を本気にさせたいのなら今回襲撃してきたイノセントの群れの数倍の数持ってきやがれって話です。それか新型でもいっぱい連れてきたら如何ですか？」

エリス「クスクス、そうだね～♪次からはそうするよ」

笑うエリス。その表情はとてもキラキラと輝いていた。そんな彼女の裾をクラレンスは軽く引っ張る。

クラレンス「姉さん、姉さん。フォルティスが帰ってこいだって」

エリス「もうそんな時間なんだ～。それじゃあ、今日は帰りましょ♪」

リリス「ありゃ？帰っちゃうのですか。もっと幻術を見せて欲しかったのですがねぇ」

エリス「クスクス、次はもっといっぱい遊びましょ、お姉さん。そして……玩具の皆さん♪」

クラレンス「クスクス、またね～♪」

それを最後に二人はニコニコと笑いながら手を振り目の前の闇の中に溶けて消えていった。
リリスは消えてからも少しの間手を振っていた。

リリス「またね～。今度は幻術をもっとたくさん見せてくださいね～！！」

スバル「帰った……のかな？」

ティアナ「そうみたいね……っつ！！」

リリス「重傷みたいですね～。取り敢えず此処から離れますか」

リリスの先導の下、ティアナ達はシグナムが寝かされていた場所に行きそこで救護に来たヴァイス達と合流する。

ヴァイス「おい、大丈夫か！？」

リリス「ティアナの傷が深いです。特に肩を痛めていて剣により串刺しにされたせいで骨まで貫通してるです。早急に治療する事を進めますです」

ヴァイス「だ、誰だ、お前…？」

リリス「おっと、紹介を忘れていたのです。リリスは機装国家グランディオンのＡＩ管理システムのリリスです！！以後お見知りおきを～♪」

そう言って可愛らしく敬礼する。今は疑似肉体人形の姿である為、大人の姿をしているがそれでもやはり可愛らしい仕草である。
ヴァイスは危うく仕事を忘れてナンパし掛けたが今する事を思い出して頭を振って思考を止め、シグナムの治療をしているシャマルを呼ぶ。直ぐにシャマルはやって来てティアナの治療を始める。リリスはその光景を見て何かを思い出したように手をポンと叩き虚空に手を突っ込み何やらゴソゴソと漁っている。

スバル「リリス、何してるの？」

リリス「え～っと、確かこの辺りに……おっ、あったあった、ありましたよ～！！」

手を引き抜くとその手には注射器がありその中に何やら液体が入っていた。ドス黒い緑色をしておりとても怪しい……いや、怪しいなんて生易しい物で無く非常に危険な感じにの物にしか見えない。その針の先から出た液体が地面にポタリと落ちた途端地面から煙が……それを見てティアナは身の危険を感じた。

ティアナ「リリス、参考までに聞くけどそれを……如何するの？」

リリス「決まっているです！！ティアナにぶっ刺すに決まってるじゃないですか！！」

ティアナ「いやいやいや！そんな危険な香りのする物なんか刺され

たくないわよ！！」

スバル「取り敢えず何処に刺すの？」

リリス「脳天に決まってるです！！」

ティアナ「死ぬわ！！何よその嫌がらせみたいなの！？何か私に恨みでもあるの！？」

リリス「冗談ですよ。普通に血管注射です。副作用は……まあ、気にしたら負けですから兎に角逝きますよ～♪」

ティアナ「何故一番重要な所を省く！？そして最後の字がおかしい！！シャマルさん助けて！！殺される！！」

シャマル「えっと～リリスちゃんだっけ？それは一体何の薬なのかな？」

ティアナに注射器を刺そうとしたリリスをやんわりと止めて聞く。

リリス「細胞活性剤をリリスが独自に研究して作った最新の薬ですよ。細胞を一時的に超活性化させて傷の修復速度を上げる薬です。本来なら軽傷者に打つ薬ですけどまあ、在庫はあるのでモーマンタイです！！」

シャマル「それで、副作用ってどんなのかな？」

リリス「……まあ、くらいやがれです！！」

ティアナ「そこはちゃんと説明ｓ「逝くです！！」だから字がおかしいってーーーー！！」

その後ティアナが如何なったのか……皆さんのご想像にお任せします。

放送出来ねぇ……ｏｒｚ

その後、リリスの作った薬は非常に危険と判断され全て処分されたというのを此処に記しておきます。

---

場所は変わって海上、フェイトを含め六課の主なメンバーは街の外にまで増援として来たイノセントの軍勢を押し返し街中にいるイノセント達は獅子部隊が民間人を陸戦魔導師達と協力しながら救助しつつ掃討している。

快進撃を続けているなのは達だがその前方から艦隊が出現し艦砲射

撃を繰り出してきた。

クラウド「っち、やはり数が多いな……」

ティアナ「ですが、まだまだ行けます……」

持っている愛銃を連射し肉薄して来るイノセント?型の団体を撃ち落とす。

周囲から銃弾の雨が降り注ぐがその中を掻い潜り銃をしまいビームサーベルを持ち斬り裂いて行く。そこに艦隊から砲撃とミサイルが飛んでくるがビームサーベルをしまいまた銃を取り砲撃の中を潜りその中で自分に当ると判断したミサイルを全て射抜き破壊する。

海賊兵「ちくしょう!!何でだ、何で此処にあいつ等がいるんだ!!」

海賊兵「だが、数ではこっちが有利だ!一気に畳み掛けるぞ!!」

クラウドとティファの周りにスティンガーと海賊兵が幾つも現れ囲み銃口を向ける。

そんな状態でもクラウドとティファは慌てる事も無く冷静に状況を確認していた。

クラウド「任務継続に問題は無い……」

ティファ「作戦を続行します……」

横暴を繰り広げる賊達を見て我慢の限界を超えた二人の頭の中で何かのスイッチが入りＳＥＥＤを発動させ目のハイライトが消える。二人の翼から羽が一枚ずつ離れていき周囲に展開される。そして、その背から青と赤の粒子状の翼が出現した。

クラウド「フェザーファンネル……」

ティファ「ドラグーン……」

ク・ティ「「敵を排除しろ……」」

その言葉に弾かれる様に三十二のファンネルと十六のドラグーンは飛びあらゆる方向から自分達を包囲していたスティンガーと賊を撃破する。

撃破したあともファンネルとドラグーンを戻さず周囲に展開したまま銃を構え海賊兵の軍勢の中に飛び込み一瞬で通り抜けクラウドはファンネルを賊を囲む様にして置いて行き賊の集団の上へ飛び、ティファは反転しドラグーンを全方向に展開し自分もファンネルとドラグーンに混じってビームの雨を降らせる。そして、上空に飛んだクラウドは干渉・莫耶をバスターモードに切り替え照準を合わせる。その時間、僅か3秒……。

クラウド「一遍の情けも与えず……」

ティファ「唯、己の行いの報いを受け……」

クラウド「その命を大地に還す……」

ティファ「良き来世を……」

ク・ティ「「複合奥義、ギャラクシー・ダンス……」」

そして、ビームの檻で身動きが取れない賊の真上から巨大な光の柱が降りその一撃で賊、イノセント、スティンガーの部隊は飲み込まれ周囲を爆発で巻き込みながら海面に着弾しそれにより海面は一瞬で蒸発した。その爆発の輝きはまるで宇宙に煌めく銀河の様に美しかった。それを見向きもせず次の賊の群れを見つけ鋭い目を向ける。それだけで海賊兵達は竦み上がり、または恐れ慄いた。

海賊兵「ば、化け物だあぁぁぁ！！」

海賊兵「やっぱりあの噂は本当だったんだ！！」

海賊兵「たった一人で超大型戦略級移動要塞を沈めたって言うあの伝説は本当だったんだ！！」

海賊兵「こ、殺される！に、逃げろおぉぉぉぉぉぉ！！」

目の前で一瞬で同志が塵となり恐怖に怯えた賊達は蜘蛛の子を散らす様に散らばって逃げる。

それをクラウドとティファは何の表情も表わさずに銃を構えファン

ネルとドラグーンを展開する。
二人の脳内には前方で逃げ惑う海賊兵全てを捉えていた。

クラウド「ターゲットマルチロック……」

ティファ「一遍の許しもありません。自身の犯した今迄の罪、その命で償いなさい……」

ク・ティ「「ダブルフルバースト！！」」

閃光が幾つも走り前方にいた二百をも超える海賊兵とスティンガーは一瞬で消し飛んだ。

クラウド「任務を再開する……。目標、敵母艦の撃破」

ティファ「任務了解……」

自由を求める者を救うために白き破壊の翼と青き自由の翼は艦隊に向かって周囲を邪魔する敵を打ち倒しながら突き進む。その通った道には決して何も残らない……。

海賊兵「おらあぁ！！」

フェイト「そんな攻撃っ！！」

目の前に迫るビームサーベルをバルディシュで受け流しそのまま流れる様に横一閃して胴を捉え海賊兵を撃破する。先に言っておきますが非殺傷設定をしてますよ。

かれこれ戦闘を始めて数時間は経っただろうか流石に体力的にも魔力量も少なくなってきた。

肩で息をしながらも自分を攻撃してくるイノセントや海賊兵、さらに海賊達が持ってきたのだろうスティンガーを打ち倒していく。

なのは「フェイトちゃん！！」

フェイト「なのは！！」

親友と合流し背中合わせで敵を迎え撃つ。そこに、残りの六課陣も集結する。

はやて「二人とも大丈夫か！？」

なのは「はやてちゃんこそ大丈夫？肩で息してるよ？」

はやて「それはお互いさまやね。それにしても……数が多過ぎるで」

ロングアーチ『ロングアーチより入電、スターズ０３、スターズ０４とギンガ・ナカジマが街で使徒と遭遇、応戦しましたが負傷し戦闘の継続不可なので撤退するとの通信が来ました』

なのは「ティアナとスバルが！？」

はやて「相手は誰や！？シグナムをやった奴なんか！？」

ロングアーチ『いえ、それが二人組の子供の様です。ですが、非常に残虐な性格で局員が数人殺害されたと言っています』

リリス『第四の使徒と第五の使徒て言ってたらしいですよ～』

通信に突然割り込んで来たのはリリスだった。

ロングアーチ『だ、誰ですか貴方は！？』

リリス『リリスはリリスですよ～。先程そっちに連絡を送ったものですよ』

なのは「リリスちゃん、二人は無事なの！？」

リリス『スバルと姉のギンガって人の方は切り傷とか多いけど特に酷い怪我は無いね。けど、ティアナの方は肩を剣で串刺しにされて重傷ですね～』

エリオ「ティアナさんが！？」

リリス『まあ、暫くは肩を動かさない様にしておいてくださいね～！それと……そっちの手伝いをしますか？』

実際のところまともに戦っているのは六課陣だけだ。…え？他の空戦魔導師達は如何したのかって？

イノセント達に追っかけまわされて全く役に立ってません。せいぜいSクラスの局員がやっとの事で数匹撃破しているって現状です。

何とも嘆かわしい……。

リリス『此処から援護射撃できますけど…やります？』

フェイト「え？でも、街にもイノセントはいるからそっちの方を…」

リリス『それは私達の国の部隊がいるからだいじょぶなのです！！』

ガルド「リリスの援護射撃は精確だ。誤射する事はまず無い」

何時の間にかなのは達の隣にガルドとセフィリアがいた。その後も周囲で単独で交戦していたバルド、カイン、シリウスも集合する（ロイドとコレットは街の防衛でいません）。

ガルド「リリス、そこから長距離砲撃でイノセントとスティンガーを叩け。それと信号弾を一発撃ってくれ」

リリス『信号弾です？ってことは、クラウドとティファ二人のスイッチが入っちゃったのです？』

ヴィータ「何だよそのスイッチって？」

バルド「周囲の敵対する存在全てを殲滅することだ。だから周囲の兵達からは殺戮モードと言われている」

カイン「その状態になった二人は敵に容赦はしない」

近くで爆発が断続的に巻き起こる。その爆煙の中から海賊兵達が必死になって逃げる様に出て来た。

そして、その煙を突き破ってクラウドとティファが猛スピードで飛び出し銃口を向け連射し撃破して行きながら敵の艦隊に向けて突き進んでいた。

エリオ「あれは……クラウドさんとティファさん……ですか？」

普段接している二人とはまるで別人だった。敵を見つけては撃ち落とし斬り倒し突き進んでいく。

だが……これでは一方的な嬲り殺しにしか見えない。なのは達は止めようと二人の下に行こうと動こうとしたがそれは、バルド達が遮

った。

シリウス「今二人の所に行かない方がいいよ」

ヴィータ「何言ってんだよ！あれはおかしいだろ！？」

なのは「そうだよ！兎に角止めないと！！」

ガルド「今行ったらお前達も殺されるぞ」

ガルドの一言でなのは達の動きが止まった。何故？如何いう事だ？その様な疑問が思考を埋め尽くした。

セフィリア「二人は、私達と会う前までずっとそうする様に叩きこまれていたみたい。私達と共に闘っていた時も同じ様な事が何度も起きたの。今では随分とあの状態になる頻度は収まってきたけど……」

ガルド「兎に角、リリス急いで信号弾を撃て。場所は見えているだろ？」

リリス『了解なのです！！』

通信を切ると直ぐに上空に何かが打ち上がり青い閃光を放った。それをクラウドとティファが視界にとらえた途端、猛攻が嘘の様に止まり二人から溢れていた強力な殺気は空気中に霧散していった。

クラウド「……また、やってしまったのか」

悲しむに顔を歪めるクラウド。ティファも同じく自分達が進んだ場所を見て悲しむ。

ティファ「そう、みたいですね……」

クラウド「一度沁みついたものは簡単には治らないか……」

ティファ「少しずつでも良い。時間をかけて治せばいいってロイドが言ってたっけ……」

クラウド「ティファ、一端距離を置くぞ。昂った感情を一度抑えた後再度艦隊を襲撃する」

ティファ「了解……」

二人は距離を置きガルド達の下に来る。そこには二人のどう接すればいいのか分からず少々戸惑っているなのは達もいて少し空気が重かった。人を殺す事を前提とした戦闘を目の当たりにし自分達のいる場所と大きく隔たれたところにいるクラウドとティファの二人を見て何と声をかければいいのか分からなかった。無理も無いだろう。なのは達は魔法を使い、それを非殺傷設定によって魔法ダメージによる気絶などで敵を捕らえ罪を償わせるのが管理局の役目で、クラウド達の様に敵や犯罪者を殺す事ではない、寧ろ今眼前で殺人を犯

した二人を逮捕せねばならないのだ。

執務官であるフェイトにとっては忌々しき事であり現行犯逮捕したいところである。だが、二人のいた世界ではやらなければやられる。大切なものを守る為に武器を取りそれを盾として矛として振りかざし人々を守る為に命を賭けて、当れば死ぬ音速で飛ぶ恐ろしい鉛玉や砲弾やビームなどが飛び交う戦場を駆けまわっているのだ。

世界が違う。一言でいえばそうなるだろう。そして、一方的に質量兵器は危険だから取り上げると言って武器も無くなり犯罪が起きても此方が動かなければ抵抗も出来ない状態になる。

そこでふと彼女は気付く。質量兵器を使用していた世界は幾つもありその多くを管理局は管理しているが果してキチンとした対応を取っているのだろうか……？もし、出来ておらずその綻びを管理局の崩壊を目論むプロヴィデンスに突かれたら如何なるか？

バルド「フェイト……？お～い……」

もしかして既に水面下で行われているのではないか！？もしそれが現実となれば人員不足のこの現状だ……一斉蜂起されれば対応しきれずに……崩壊する。

そして、それによって無駄な血が流れてそれが争いを呼び、それによって別の争いが生まれる。

永遠に終わらない戦争のスパイラルが起きるだろう。
だが、それは何としてでも阻止せねば――――

バルド「とりゃっ！！」

フェイト「ふみゅっ！？」

頭部に軽い衝撃が来て思考の沼から脱出する。ジンジンとする額を押さえて顔を上げるとデコピンの形をした手を再び構えているバルドがいた。

フェイト「バルド……痛いよ～」

バルド「アホ、こんな所で考え事をしているお前が悪い。オラ！こんなとこで考え事すんな、死ぬぞ！！」

声を上げその声にハッとなりなのは達も思考の沼から脱出する。

バルド「そんな面倒くせえ事なんてあとで幾らでも考えろ！！今はこの無駄な戦いを終わらせる事に集中しろ。……それとな、一つ言っておくぞ。クラウド達を如何思うかはお前等の勝手だがなこいつ等はこいつ等、お前達はお前達だ。文化も違えば考えも違う。そこはしっかりと汲み取ってやれよ？」

そう言いたい事だけ言ってバルドは一人で戦闘を再開して行った。
呆然とするなのは達だがフェイトが直ぐに復帰しバルドの後を追う。

バルド「フェイト、俺達は敵艦を制圧しに行く。お前はなのは達と残ってイノセントの相手をしておけ」

フェイト「ううん。私も行く！！一人じゃ心配だもん」

バルド「お前を一人にしている方が心配だけどな……」

ケルベロス［嬢ちゃんは別嬪さんだもんな～！変な虫が付きそうで心配だよな～ウヒャヒャヒャヒャ！！！］

バルド「は？」

ケルベロス［おいおい！相棒、嬢ちゃん見てその反応は無いぜぇ。嬢ちゃんほどの存在は中々巡り会えないぜ？そらそら、よ～く見て見ろって。綺麗な金髪に括れた腰そしてぇ～～成長した豊かなむｎ「少し黙ってろ！！」かみゅっ！？］

余計な事を言いそうになった相棒を叩き黙らせる。時折自分の相棒は変になるから困ったもんだ。
そして、言われた本人はと言うと顔を真っ赤にして腕で胸を隠すような仕草をする。
その所為で余計胸が強調されるのに気付いてほしいのだが……。
そして、その格好のまま上目づかいで目をウルウルさせてバルドを見る。
それは最早核兵器クラスの破壊力……ぐはぁぁぁ！！！↑吐血

フェイト「危なくなったら……助けてくれる？」

バルド「……」

それに無言になるバルド。我儘を言った所為で機嫌を悪くさせてしまっただろうか……？

其のままフェイトに背を向けるバルドだがそのまま彼女にも聞き取りにくい位低い声で語った。

バルド「安心しろ、俺の命を賭けてお前は守ってやる」

フェイト「えっ……？」

バルド「行くぞ。しっかり付いて来いよ？」

フェイト「あ、待って！！」

一人でさっさと行くバルドを慌てて追いかける。イノセントやスティンガーの編隊がそれに気付いて迎撃しようとするがバルドが魔王灼滅破を放ち広範囲の敵を焼きつくした。そして、一隻の戦艦に近づく。

バルド「爆炎剣！！」

ケルベロスを黒い炎が纏いそれを艦の装甲に叩きつける。爆発と共に壁に穴が開き中に侵入できるようになった。

バルド「行くぞ、フェイト！」

フェイト「うん！！」

そして二人は艦内に突入して行った。敵の巣窟となっているその中に……。

## 第二十七話（後書き）

エリスとクラレンスホントにまあ無邪気だがとてもおっかないっす！！

武器名は伸縮剣『若若宇摩（邪邪宇摩）』という名前ですたい。お察しの通り思いつきで出来た名前です。もう少しまともな名前が出来ないのか？と言う突っ込みはせんといて下さい…これでもフルパワーです…ｏｒｚ

それにしてもリリスの戦術予測の量が半端なく多いのはなぜだ…？

クラウドとティファは長い間戦場で戦った時に植え付けられた癖の爆発です。

特定の信号弾をみると元に戻ります。無くても自然と戻るよ…敵を殲滅したらね。次回辺りにこの戦いを終わらせようかと現在模索中です。（期待してないと思いますが）気長に待っていてください。

ってか最近なのは達しか会話するとこ執筆してないな…これは如何するべきか？

ではでは、読者の皆様、これからもダメダメ作者ことテッテルを宜しくお願いします！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第二十八話（前書き）

二十八話更新！
ミッド戦も今回で終了！さあどんな結末が待つのやら……

ＰＶ１０万を突破しました！！読んで下さった皆様、ありがとうございます！！
もう私涙で前が見えません＞＜！
ああ、ＰＶ一万を超えた時がもう随分と昔の様な気がします…っと思い返して見てました。

これからもガンガン気合い入れて頑張ります！

クラウド「現在作者は使徒の情報とか出現した敵の事を簡単に纏めたものを執筆中です。で、何時頃出来上がんだ？」

ふっ、それは私の気分次第♪

クラウド「……ターゲットを確認…」

ティファ「破壊します……」

えっ、ちょっ、おまっそれは対要塞様の砲撃じゃ…ってあーーーーー！！！！

作者はログアウトしました。

# 第二十八話

リリスは現在、スバル達が待機している所の高台に立っている。
そこは、なのは達が戦闘を行っている海上から数キロ離れた位置である。

普通の人間なら肉眼で敵の数を数える事など出来ないだろうがリリスはＡＩでありその中でも最強の部類である為、その数をそこから数える事が容易に出来ていた。

リリス「１００、２００、３００……ふむふむ総数は５００とちょっとですか～」

そこから戦闘をしている賊の数を引き大体４００と少しはいると計算する。
緻密な計算をしているリリスの下にスバル、ギンガ、前回酷い薬を打たれたが何とか回復したティアナとシャマルらと何処から湧いたのかＫＹことクロノが来た。

スバル「リリス、こんなとこから援護の出来るの？」

リリス「問題無いですよ～。さて、今日使用する武器は……これだ～♪」

虚空に手を突っ込みそこから何かを掴み引っ張り出す。ドスンと大きな音を立てて降ろしたのは途轍もなく大きな砲身を持ったスナイパーライフルの様なものだった。

ティアナ「な、何よこれ……？」

リリス「超長距離迎撃用連装式ライフルですよ～♪これで援護するです！！」

ヴァイス「いや、これ戦車の砲身よりでかいぞ……。こんなの使えるのか？」

リリス「これくらい訳無いです！！まあ、人が使ったら衝撃波で体がバラバラになりますけどね～」

さらりとトンデモナイ事を言ったリリスはライフルを起動させる。アンカーが周囲に突き刺さり衝撃で銃身がぶれない様に固定する。続いて砲身が１０メートルほど伸び展開されガトリングガンみたいに幾つも銃身が出てくる。
リリスはその巨大なライフルにマガジンをセットしスコープを覗き敵のいる方に微調整する。

リリス「敵索敵完了、各部異常なし、天候良好。エネルギーチャージ開始…」

ライフルから板の様な何かが展開されそれは太陽のある方角を向く。
そして、マガジンが真っ赤に染まっていく。

リリス「エネルギーチャージ完了、目標敵イノセント、スティンガー、あわよくば敵艦の機関部を狙撃し行動不能にせよ。っと、忘れるところでした。皆さんそこで見るならこれを着けてくださいね。じゃないと鼓膜が破けますよ～」

渡れた物は耳栓それを皆が装着したのを確認してリリスは再びスコープを覗く。

リリス「♪～～～～♪狙い撃つぜ～♪」

鼻歌混じりに引き金を引くと轟音と共に砲弾が放たれ衝撃波が辺りに広がる。
その砲弾の行方をリリスは確認せず連続して引き金を引く。一発放たれる度に砲身が回転して次弾を装填されまた放たれる。建物がミシミシと音を立てているがお構いなしにリリスは連射している。そして、数十発放った後に砲撃を止める。

リリス「マガジン交換～♪っと…あちちっ！！」

マガジンを掴み外した瞬間に適当に投げ捨てる。それは、真っ赤に

なって発熱しておりその温度は少し離れているティアナ達にも感じるほどの熱を帯びていた。

ティアナ「何よあれ…熱を帯びてる」

リリス「それは当然ですよ。私の今使ってるライフルは太陽の光を吸収して放つ特殊な物だからです」

耳元からリリスの声が聞こえた。如何やらこれは防音と通信の両方を兼ねた装備の様だ。

スバル「太陽の光を吸収？」

リリス「そうです。光を吸収してそれを圧縮して放つのがこのライフルです。尤も使いすぎるとマガジンが熱を蓄積させていって最後には融解しちゃいますからこうやって適度に交換を……っとあちちっ！！」

適当に投げ捨てまた新しいのを装填し連射する。

ティアナ「一つ聞いても良い？さっきから撃ってる砲弾って全部当ってるの？」

リリス「当然です！！今撃ったのだって艦隊の中にいる航空機の左翼に直撃ですよ～」

撃墜スコアはリリスが頂きです！！と笑いながら連射しているリリスを見て唖然とする一行であった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

場所は変わって艦の一隻の内部に侵入したバルドとフェイトは来る敵来る敵を撃破しながら管制室を目指して突き進んでいた。

賊「死ねぇぇぇぇ！！」

バルド「遅いっ！！」

賊の一人がビームサーベルを振りかざすがケルベロスで弾き飛ばし柄を胴に叩き込んで倒し、その流れに乗って姿勢を落とし横薙ぎに来たサーベルを避けて持ち主に蹴りを打ち込む。

フェイト「ハーケンセイバー！！」

賊「ぐあっ！？」

三人の賊がハーケンセイバーの直撃をくらって吹き飛んで壁にぶつかって気を失う。
最後にバルドが残りの一人を倒した。二人が通った通路には多くの賊が倒れており皆気絶していた。

フェイト「これで……この周辺は……制圧……出来たのかな？」

バルド「大丈夫か、フェイト？」

フェイト「うん……大丈夫、まだまだいけるよ」

長時間の戦闘で既に体力の限界が近いフェイトを気遣うバルドを彼女は珠の様な汗を掻きながらも微笑んで応えるがその顔は既に元気が感じられなかった。

バルド「少し休むぞ」

フェイト「え？」

バルド「俺も疲れた。此処で少し休憩だ」

そう言って通路に座り込み壁に背を凭れる。フェイトも初めは驚いていた顔をしていたが従って彼の隣に座り込む。そっと隣にいるバルドの横顔を見ると彼は全く疲れた表情をしておらず如何見てもまだまだいける感じだった。

バルド「ったく、面倒くせぇな数が多過ぎんだよ。いい加減疲れちまった」

それからも止めども無く愚痴をこぼすバルドをフェイトはジッと見る。その視線に気付いたバルドは彼女に視線を移し同じくジッと見る。暫し互いの視線を絡め合わせていたが…。

フェイト「……はぅ／／／／／／／」

フェイトは恥ずかしくなって俯く。その顔は真っ赤に染まっておりとても愛らしかった。
それでも時たまチラチラと此方の様子を窺って来るフェイト。上気させた顔に瞳をウルウルさせて此方を上目づかいで見る。

バルド「何か言いたそうだな？」

フェイト「ふぇっ！？え、えええっと、あの、その……」

シドロモドロになっていたが一度深呼吸をして心を落ち着かせたあと意を決して前回艦に突入する時に言った言葉の真意を聞こうとしたその時……

バルド「……休憩は終わりだな。敵が来たぞ」

何と言うタイミング！！向こうから賊が駆けてくるのが見える。何かを叫びながらビームサーベルやビームライフルを持って突っ込んで来る。

バルド「行くか、フェイ――」

そう言ってバルドは振り向いて彼女の顔を見た途端彼は動きを止める。その視線の先にいるフェイトは……

フェイト「折角……折角勇気を持って聞こうとしたところに……フ、フフ、フフフフフフフフフフフ」

俯いて笑う彼女がいた。笑ってはいるがその表情は一切笑ってはいない。背後にゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴと言う効果音が似合いそうである。バルディッシュを握りしめ賊の集団を睨みつける。その視線に射抜かれその場に縫いつけられた様に動きが止まる賊の皆々様……。差し詰め蛇に睨まれた蛙……。

フェイト「少し…お仕置きが必要かもね。バルディッシュ……」

バルディッシュ［イ、イエス、サー…］

フェイト「少し、空気を読もうよ……」

一瞬で距離を詰めバルディッシュを振るい一撃の名の下に次々と賊を薙ぎ払っていく。

フェイト「私はね…私は今大事な事を聞こうとしてたんだよ？それを……それを邪魔するなんて」

賊「何だこいつ！？」

賊「は、速い！？」

フェイト「大事な事を聞こうとしたのに……邪魔するなんてえぇぇ～～～～！！」

賊ズ「ギャアアアァァァァァァァ！！？」

一人無双状態のフェイト、それに置いてけぼりにされ呆然としている。

バルド「……」

ケルベロス「ヒュ～♪随分とエネルギッシュに動くね～嬢ちゃん」

バルド「疲れてたんじゃねえのかよ……？」

最早疲れの事など二の次の様だ。ハイペースで賊の皆様を一撃必殺で気絶させていくフェイト。
それは、まさに通常の三倍の速度でくるあの赤いすいｓ――ゲフンゲフン！！
取り敢えず普段よりも高速で動きまわっている。多分本人も気づいてないだろう……恋する乙女とは何とも危険なのだな……
ちゃんと注意書きは必要だな『取扱注意』と、そんな取扱注意な乙女な彼女を扱えるのは彼だけだ。
逝け！我らが主人公の一人、魔神バルドよ！！↑字がおかしい！？

バルド「ったく。おい、フェイトもうその位にしておけって」

今だ地獄を見ている賊が何か可愛そうになって来たのでバルドがフェイトを止める。
ウ～～っと唸っている彼女は傍から見れば威嚇をしている子犬の様で可愛らしいが賊から見たら阿修羅が憤怒の形相で此方を睨んで来ているようにしか見えない。

フェイト「サンダーーーーレイジーーーーーーーー！！！」

賊ズ「ウギャアァーーーーーーーーーー！！！！」

憐れ、最後にとっておきの一撃をくらって全員仲良く気絶……。如何やら彼にも上手く扱えなかった様です。

バルド「ほら、何時までも気失った馬鹿共見てないでさっさと行くぞ？」

フェイト「む～～～」

可愛らしく頬を膨らませて気を失った賊の集団を睨んでいるフェイト。もし、今気を失ってなかったらその可愛らしさに鼻血噴いて気を失ったでしょう。あ、イカン。鼻から血が……。

癒しフィールド展開中！！総員鼻にティッシュを詰めて応戦せよ！！ぐはぁっ！？

くそっ、何という破壊力だ！？体が耐えられん！！ゲボァ……↑吐血

衛生兵！！衛生兵は何処だーーー！！このままでは壊滅だ～～！！

っと、そんな癒しフィールドの中で平然としている男一人、なんと！？

フェイトに近づきその頭にポンと手を下ろして撫でる。

バルド「ほら、行くぞ」

フェイト「ふにゃ～／／／／／／／」

頭を撫でられ蕩けた顔に変わるフェイトさん……。

機嫌が治って良かったと思うが癒しフィールドがトランザムバーストしてしまった。

もうダメポ……ｏｒｚ

取り敢えず彼女を宥めながら移動を再開する。そこに、通信が入りバルドが出ると別の艦と航空機に侵入したカインとシリウスが映し出された。

カイン『バルド、そっちの方は如何だ?』

バルド「進むのが面倒になって来た。この艦沈めていいか?」

フェイト「そ、それはあとが大変だからやめた方が……」

シリウス『ええっ!?ダメなの!?』

フェイト「実行しようとしてたの!?」

カイン『俺の方は特に問題は無いが……二人の方は一番大きな艦だから大丈夫か?』

シリウス『俺は幻術使ってるから皆変な方向に走ってるよ~「ぎゃあ~~~!!」あっ、海に落ちてった』

バルド「どんな幻術かけたんだよ……」

シリウス『扉の位置をずらして俺が侵入する時にぶっ壊した壁を扉の位置に変えた』

その間にも何人もの賊達が海に転落……。と言うかそろそろ気づけよ賊の皆さん!!

バルド「取り敢えず俺達の方は問題は無い。そっちの方こそ気をつけろよ?」

カイン『ああ、分かってる』

シリウス『まあ、何とかなるでしょ』

通信を切り再び移動を開始する。あれ以降賊が現れる頻度が減っている。

フェイト「いないね……」

バルド「油断はするなよ?」

前方にあるのは突き辺りまで隠れる場所が無い一本道。一気に駆け抜ける為に二人は駆け出し中央まで差し掛かったその時、

賊「今だ!!一斉掃射!!」

賊「ブチ殺せ!!」

進行方向と後方から銃を構えた賊の集団が現れる。

フェイト「うそっ！？」

バルド「っち、フェイト！！」

前方にケルベロスを床に突き刺して立たせて盾にしフェイトを抱き寄せその陰に隠れ後方に漆黒の炎の防御壁を発動させる。それが完成すると同時に銃が一斉に火を噴き始めた。
前方から来る銃弾をケルベロスで防ぎ後方の銃弾は防御壁がしっかりと防いでいた。

ケルベロス［おい、相棒……一つ言っていいか？］

バルド「何だ、手身近に頼むぞ」

ケルベロス［何で何時も銃撃の時に俺を盾にすんだよ！？バハムートでも良いじゃん！！］

バルド「お前が一番適任だからだ。それ以外に何がある？」

ケルベロス［確かに銃弾とかは効かないけどよ……痛いのに変わりはねぇんだよ！！アダダダダダッ！！］

バルド「まあ、バハムートも効かないんだが…」

ケルベロス［っけ！俺の影でイチャイチャしやがって！！］

バルド「ああ？如何いう意味だ？」

ケルベロス「そんだけ譲ちゃんを抱き寄せておきながらそのセリフは聞き捨てならないぜぇ、相棒？」

フェイトの表情を見て見ると自分の腕の中で硬直した様に動かないフェイトがいた。

硬直しているフェイトはと言うと突然抱き寄せられた事によって思考が停止していた。
自分の心臓が早鐘を打つように鼓動しているのが分かる。彼の体温が伝わって来てドキドキしていた。そして、バルドの方も彼女の柔らかな感触に今更気付き少しドキッとしていた。
けど、直ぐに思考を切り替え話しかける。

バルド「おい、フェイト」

フェイト「ふえっ／／／／／／／！？な、なに？」

急に話しかけられた事でビクッとする。

バルド「今から奴らの動きを止める。その隙にお前は後ろにいる奴等を叩け、俺が前を叩く」

バルドの足元に漆黒の魔法陣が出現する。

バルド「合図と同時に行けよ？」

フェイト「うん、分かった」

フェイトが頷いたのを確認し術の詠唱を始める。

バルド「彼の地に眠りし怨念よ、我が道阻めし者を縛れ！！プラークマゴッツ！！」

賊「な、なんだこれ！？」

賊「ぐわっ！！」

術が発動すると賊の集団に足元が黒く染まりその底の見えない様な漆黒の沼からその色と同じ手が幾つも現れ彼らに絡みつき地面に這い蹲らせた。

バルド「今だ、行け！！」

その声と同時にフェイトはソニックムーブを発動させ一気に接近しバルディッシュを振るい瞬く間に後方にいた賊達を気絶させた。

バルドも一瞬で接近しバハムートを構え振り下ろした。剣が賊達の

目の前の床に落ちた瞬間そこから爆発が起きて賊達をふっ飛ばし壁に激突、その衝撃で全員がのびた。

フェイト「バルド、怪我してない！？」

バルド「ああ、特に問題は無い。そっちこそ怪我はしてないな？」

頷くとフッと笑い床に突き刺さっていたケルベロスの方に手を翳すとケルベロスが勝手に地面から抜けバルドの方に戻って来て彼の手の中に収まった。

ケルベロス［ふぃ～、やっと終わったぜ……あ～体中いて～］

愚痴を零している相棒をそのままにバルドは歩き出しフェイトもその隣を歩く。
そして、他のと少し違って大きな扉を見つけて歩みをとめた。

フェイト「もしかして、此処が管制室かな？」

バルド「油断はするなよ？」

そう言って扉に近づき開けようとするが全く開く気配がしなかった。

バルド「鍵掛けたのか、面倒だな……」

フェイト「待ってて今解除するかｒ――」

バルド「おらっ！！」

フェイトが解除しようとした時、バルドが一声入れてバハムートをその扉に叩きつけ周囲の壁ごと扉を破壊した。

バルド「うっし、開通」

フェイト「えぇ～～！！？」

賊ズ「「えええええええええええ～～～。。？（Д；）！！！」」

厚さ数センチ以上はある鉄の扉がその一撃で大きくひしゃげ壁もろとも吹っ飛んだのにフェイトだけでなく賊の皆さんも目玉が飛び出るほど驚いていたのだった。

バルド「覚悟しろテメーら！！」

賊ズ「うぎゃあーーーー！！！」

呆然としている賊達にケルベロスを持って突撃して行き無双しているバルドをフェイトは入り口で呆然と見ていた。

多くの賊がバルドによってダウンしている最中一人の賊がコンピュータの前に走りキーを素早く打つのをフェイトが捉える。

フェイト「何をしてる！？」

素早くその男を取り押さえるがそれと同時に艦内に警報器が鳴り天井から緑色の煙が噴出し始めた。
更に壊した扉の部分に鋼鉄の扉が何重にも降りて出口を封じた。

フェイト「なっ！？」

賊「へへへ、これテメーらも終わりだ。今充満し始めてるのは人を一瞬で殺す有毒ガスだ。お前等も俺達と一緒にあの世行きだぜ」

フェイト「くっ！フォトンランサー！！」

出口に魔力弾を飛ばすが直撃しても傷一つ付かなかった。

アナウンス［緊急事態発生、緊急事態発生。艦の管制室を占拠された、各員は速やかに脱出せよ。なお、この艦は機密保持のため自爆する。３分以内に脱出せよ！！繰り返す、艦の管制室ｗ――］

フェイト「自爆！？」

賊「これでお前等も終わりだぜ、ごはっ！！」

目の前で捉えていた男が血を吐きだし崩れ落ちる。毒ガスが充満し始めているのに気付き慌ててそこから離れると背後にバルドが来ており其のままフェイトの口と鼻を手で覆った。

バルド「如何やら閉じ込められたな。爆発まであと三分か……」

そう言って辺りを見回すも脱出する場所も無い。辺りに倒れている人も全員毒にやられて息絶えた様で死の空気が充満している。息が苦しくなって呻くとバルドは手を離しフェイトを自分の方に向きをかえて抱き寄せ黒いコートで彼女を隠し毒から守る様に包んだ。

バルド「爆発まで時間も無い。必要なデータを貰ってここから出るぞ」

フェイト《バルド！！息を止めて、この毒は一瞬で人を殺す猛毒だって……》

バルド「その事なら心配すんな。俺は毒には耐性がある。特に問題は無い、それよりもバルディッシュ」

バルディッシュ［なんでしょうか？］

バルド「今からこの艦の航行データを抜きだす。そのデータをお前がコピーしてくれ」

バルディッシュ［分かりました］

バルドはフェイトを抱き上げてそのまま近くのコンピュータに移動し猛スピードでキーを叩き次々と画面を映し出しそれをバルディッシュが写して行く。

フェイト《バルド……通路に倒れている人達だけでも助けようよ》

彼ならこの状況でも彼等を救ってくれると思っていたのでフェイトはそう頼み込むが……

バルド「残念だが、それは無理だ。諦めろ」

無情にも返って来たのは見捨てると言う言葉だった。

フェイト《如何して！！まだ間に合うはずだよ、なのに何で……！！》

バルド「これを写し終わるのに約二分、周囲に警告するのに約十秒、此処から脱出して安全圏に逃げるのに三十秒、如何考えてもそこから今迄倒した人間全てを救助するのは不可能だ」

フェイト《それならなのは達にも頼んで……》

バルド「お前は彼女達を巻き込むつもりか？」

フェイト《っ！！？》

バルド「もし、彼女達が救助に参加したとしてなのは達が全員を連れ出して無事脱出できると思うか？答えはノーだ。既に制限時間は残り二分、何処で今戦ってるのかも分からないあいつらを呼んでこの後の爆発に巻き込まれたら如何するんだ？」

フェイト《で、でもっ！！》

バルド「お前が命を大切にしたがるのは分かる。だがな、俺にとって今一番重要なのは、フェイト、お前を……いや、お前を含めたなのは達皆の命を守る事だ。これだけは幾らお前の頼みでも絶対に譲らねぇ！！」

そう強く言ってフェイトを無意識にだろう更に強く抱きしめる。まるで、その存在を絶対に離さないように、守る様に……。

返答に詰まり返す言葉を選ぼうとしたと同時にキーを叩くのを止めて周囲に警告する為に通信を開き戦闘空域全てに伝わる様に大きな声で語り直ぐに切る。

だが、脱出と言っても出口は塞がっており何処から出るのだろうとフェイトは思ったのだがバルドは壁際のコンピュータの前に立ちケルベロスを構える。

バルド「ケルベロス、ブチ破るぞ。３ｒｄフォルム開放！！」

ケルベロス［ヒーハー！！派手に行こうぜ！！］

黒い刀身が変わりそこには白い刀身で柄が金色の美しい剣があった。

バルド「３ｒｄフォルム、刃毀れせぬ不折の剣（アロンダイト）！！！」

それを構える。迸る魔力はその力が如何に強大であるかを示していた。

バルド「轟天烈破！！」

アロンダイトを振り下ろす。巨大な魔力の奔流が放たれ目の前の壁を突き破り外にまで飛んでいき天を貫いた。

アナウンス［爆発まであと三十秒です。総員直ちに脱出してください］

バルドはフェイトを抱えたまま一気にその壊した壁から脱出した。

フェイト「バルド、ごめん」

バルド「フェイト？」

そう言ってフェイトはバルドの腕からするりと脱け出して一気に加速して始めに壊して入った壁の所に飛んでいった。

フェイト「バルドは先に避難して!!私も直ぐに行くから!!」

バルド「お、おい、待て!!!っち、ケルベロス!!」

ケルベロス［了解だぜ!!２ｎｄフォルム!!］

普段ふざけているケルベロスですら今回はヤバイと感じたのかすぐさま『燃える一対の剣（コラーダとティーソン）』に変わりバルドは猛スピードで彼女の後を追った。

艦内に再び戻ったフェイトだが辺りが緑の煙に覆われているのを目の当たりにし慌てて口を塞いだ。

フェイト（そ、そんな!?ここにも毒ガスが……。と、とにかく一人でも……!!）

周囲を見回すが周囲にいるのは既に口から泡を吐いて息絶えた者だけだった。

だが、一人の賊が呻いているのを発見しその一人に肩を貸し脱出する。

アナウンス［爆発まであと十秒です］

フェイト「くっ、このままじゃ……」

十秒で安全圏にまで移動する事はほぼ不可能。一人を担いだ状態では満足な速度が出せる訳も無い。

バルド「だから止めとけって言ったんだ、このバカが！！」

フェイト「バルド！？きゃっ！！」

そこにバルドが到着し毒でグッタリしている賊を脇に抱えフェイトも逆の脇に抱えて猛スピードで急降下、安全圏目指して飛ぶ。しかし……

アナウンス［9，8，7……3，2，1……］

次の瞬間、艦が大爆発し爆風がバルド達に襲いかかって来る。バルドは咄嗟に後方に黒い炎で出来た防御壁を展開し爆風と流星の様に降り注ぐ艦の破片からフェイトと賊の一人を守る。だが、そこに一際大きな破片が落ちてきて防御を突き破り落ちて来た。

バルド「くっ！！」

流星の如く物凄い勢いで落ちて来るそれを辛くも回避したがその所為でその後方から降って来たさっきのよりも小さな破片に気付くのが遅れた。

バルド「しまっ――ぐあっ！？」

フェイト「バルド！！」

長さ一メートルに満たない破片だが爆発で得た推進力と重力の力によりそのパワーは途轍もなく膨れておりそれはバルドの背に直撃した。咄嗟にフェイトと賊を守る為に自分を盾にしたおかげで彼女達に被害は無かった。

フラフラっとしたところにまたもや大きな第二波が降り注いで来る。このままでは直撃するっと思われた時……

なのは「全力全開！！スターライトブレイカーーー！！！」

横から巨大な砲撃が飛んで来て落ちて来る破片達を消し飛ばした。

なのは「フェイトちゃん、バルドさん！！」

フェイト「なのは！！」

カイン「ったく、無茶をするな」

フェイト達の後ろに立って落ちて来る破片を次々と破壊するのはなのはとカインだった。

頼もしい仲間のお陰でその後は問題無く退避に成功したのだった。

――――――――――――――――――――――――――――

フォスティル達がいる建物からも先程の爆発を確認する事が出来た。

フォスティル「時間だ。お前達引き上げるぞ」

エリス「え〜〜、もう終わり？もっと遊んでいいでしょ？」

フォスティル「駄目だ。海上の戦闘も終わった、制圧された艦を破壊してイノセント共を転移させて帰るぞ」

クラレンス「は〜〜い」

ジーク「…………………………」

渋々作業を始める子供の二人、その傍らでジークはジッと空を見上げていた。

フォスティル「如何した、ジーク？」

ジーク「来るぞ……」

その言葉と同時に飛んできたのは砲撃だった。ジークもフォスティルもそれを避けエリス達も遊んでいたがそれを余裕を持って回避した。そこにやってきたのは……

クロノ「貴様等がプロヴィデンスの一員の使徒か？」

我らが執務官クロノ氏と数人の魔導師だった。周囲を包囲する様に囲み何時でも攻撃できる準備をしていた。

フォスティル「管理局の人間、しかも執務官か……」

クロノ「貴様等を殺人及び無差別攻撃、ロストギア不正所持の罪で拘束する！！」

クラレンス「クスクス、この人数で拘束するって？この程度じゃあ私達は誰一人捕まえられないよ～」

ジーク「……」

クロノ「抵抗しなければ手荒な事はしない。身の安全は保障する」

フォスティル「……雑魚が、いきがるな」

フォスティルが片手を上げると体から魔力が溢れだす。それを肌で感じ身の危険を感じたクロノは直ぐに局員たちを下がらせた。だが、一歩遅かった。フォスティルが手を振り下ろした瞬間突風が通り抜ける。

魔導師「なっ、ぐあああ！！」

魔導師「がはっ！？」

前にいた二人がその風を受けた瞬間、二人の体が見えない何かに斬り刻まれ血を噴き出して倒れた。

フォスティル「ふん、この程度か……話にならんな」

クロノ「貴様、何をした！！」

フォスティル「黙れ……」

クロノ「なっ、ぐはっ！！」

クロノに手が向けらるとクロノが吹き飛びバリアジャケットの上が弾け近くのビルに激突した。
全身が何か途轍もなく硬い物で思いっきり叩かれたかのように軋んだ。
肋骨が折れたらしく激しく咳き込むと口の中から血が流れた。

フォスティル「ふむ、やはり私ではこれは使いこなせんか……。まあ、貴様等には感謝せねばならないな」

クロノ「如何……いう…事……だ」

フォスティル「貴様等の局の誰かがこの宝玉をある所から持ち出してくれたお陰で奴と戦う手間が省けたのだよ」

クロノ「奴……？」

エリス「これを守ってたお爺さんだよ～♪私達にとっては面倒なくらいに手強いんだけど貴方達のお仲間さんが殺してくれたから相手しなくても良くてとっても楽だったよ～♪」

クラレンス「クスクス、でもその人達もさっき殺したし今日はとっても機嫌がいいからあなた達は殺さないでおくね。良かったね～♪」

フォスティル「では、さらばだ」

四人は転移魔法を発動させてその場から姿を消した。

クロノ「ま、待て！！……ぐぅっ！！」

痛みでバランスを崩し落ちそうになったが無事だった局員が彼を支える。

他の局員が色々な方面に連絡を急いで回し戦いは終わりを迎えた…

…敗北と言う名を残して。

――――――――――――――――――――――――――――――――

地上に降りたなのは達はイノセント達の様子が変わったのに気付いた。

次々と制圧した艦と航空機に集まり始める。

なのは「な、なに…？」

そして、そのイノセント達の背後が大きく歪みその中から巨大な生物が現れた。

その空間から頭だけが出てきたがそれだけでも大きくて竜の様に見える。

そして、口を大きく開ける。エネルギーが収束し始め膨大なエネルギーが火花を起し辺りに散らす。

クラウド「ま、まさか……！！」

フェイト「止めて！！まだ中には沢山の人が……！！」

嫌な予感が全員の中を駆け抜ける。フェイトの叫びも虚しく竜の様な生き物はその膨大なエネルギーを開放した。その閃光は残っていた艦と航空機を全て薙ぎ払い空を白く染めた。

フェイト「いや、いやーーーーーーーー！！！」

エリオ「そ、そんな……」

キャロ「酷い……酷過ぎるよ……」

竜の様な生き物は空に響き渡る様な雄たけびを上げ再び次元空間に出来た穴に戻って行きその後を街や海上で戦っていたイノセント達も空高く飛び上がりそこに飛び込み全て姿を消した。

そして、賊やプロヴィデンスの生存者は海上で戦って気を失い撃墜された者やフェイトが助けたたった一人の賊などが助かり他の者達は全て空に命を消したのだった。

その日、街の被害を調べて救助を待つ人達を探し怪我人を運ぶ等が夜遅くまで行われた。
グランディオンから来たリリス、獅子部隊は戦闘終了と共にディフェンダーを引き連れて転移して帰って行った。
負傷したクロノの方は肋骨を数本折った程度で済み大事には至らなかった。
その後はなのは達はそれぞれ救助に移りフェイトも多方面に動きまわって額に汗を流していた。

フェイト「被害が前よりも大きい……」

そうなのだ。今回は前回の時より被害が大きかった。その原因となるのはイノセントが街中に突然現れ対応が遅れたことが原因である。何故イノセントが街中に現れたのか調べたところ一つの建物の中にそれを呼びだす様な装置がありそれがイノセント達を呼ぶのを助けた様だ。そして、そこには局員の亡骸が転がっており血の匂いが充満していた。

更に今回は死亡者が多く現れており人数は数十人に及んだ。その多くは魔導師だったが民間人も被害に遭っていた。
使徒に殺された者、イノセントに殺された者などの遺族や被害にあった者達は泣いていたり呆然としたりしているのがちらほら見えた。

それを見て心を痛めながら彼女はバルドを探していた。彼は先程まで隣で作業を手伝っていてくれていたのだが気付いた時には姿が消えていたのだ。そして、彼を見たと言う人に海辺の方に向かって行ったという情報を貰い今彼女はそこを目指していたのだ。

そして、海辺に近づいてきた時、耳に綺麗な音色が聞こえて来た。それは、昔よく聞かせてくれた懐かしく優しい音色。彼女はその人の名を呼ぶ。

フェイト「バルド……」

バルド「フェイトか……」

口に当てた葉を外し彼女に視線を向ける。草笛…バルドの得意なものの一つでそれはとても壮麗な音色を奏でる。
隣に座っていいかと聞きそれに頷いたのでその隣に座った。そこからは燃える街が見えるところだった。

バルド「……」

フェイト「……」

何も言わず沈黙する二人。ただ静かに時が流れて行った。

フェイト「バルディッシュに写したデータのお陰で次元海賊達の拠点らしいところが分かったよ」

バルド「そうか……」

フェイト「それと、今捕まえた人達から事情徴収してるから多分近い内に何か分かると思う」

バルド「そうか……」

フェイト「それとね、使徒と戦って怪我をしたクロノだけど命に別条は無いって言ってた……。あと――」

バルド「フェイト……」

そこでフェイトの話を切って彼女を見つめるバルド。

バルド「つらいんだったら今吐きだしとけ。誰も見ていないからな」

フェイト「っ！！う……ひっく……うぅ、あぁあ…」

そう言われてタガが外れたフェイトはバルドに抱き着き顔を彼の胸に埋め嗚咽を漏らす。

それを黙って頭を撫で続けるバルド。

フェイト「如何して…如何して…人が死なないと…いけないの！！私達はこんな事……に、ならない様にする為に頑張っているのに！何で、何でこんな事に！！！」

バルド「……」

フェイト「分からない！！分からないよぅ……。何で人は戦うの！？」

バルド「それが人と言う存在の業だ……」

フェイト「っ！？」

顔を見上げてバルドを見る。彼の表情はとても冷めた、いや冷静な顔をしていた。

バルド「人は自分達と違う存在を恐れる。例えそれが同族であっても、その存在が何れ自分達の脅威になると思った者をそのままにして滅ぼされたら嫌だからだ。それは、個人にもある。特別な力を持ったが故に人に恐れられ殺されたり迫害されたり、弾圧されたりする。人と言う存在がいる限りその業は人と隣り合わせで立っている。決して消す事の出来ない人類の宿命の一つだ」

フェイト「それじゃあ、私達は……分かり合えないの！？」

嗚咽を漏らしながらも聞くフェイトを彼はフッと笑いながら頭を撫

でる。

バルド「いや、その業が存在する限りその隣には相反する存在がある。光が強ければそれに比例して強くなる闇と同じ様に分かり合おうと言う気持ちもその業が強ければ強い程それもまた強く存在する。フェイトは俺の事嫌いか？」

フェイト「そ、そんな事無い！！」

言ってしまってハッとなり恥ずかしくなって赤くなって俯く。それをバルドは軽く笑って頭を撫でる。

バルド「俺やロイド達は強大な力を持っている。それでも俺達はお前達とこうして仲良くやっている。なら、他の奴らも分かり合える筈だ。今は無理かもしれないが……な。だから今はこの戦いで消えた命に鎮魂の歌を奏でるだけだ」

そう言ってバルドは再び葉を口に当て静かだが街や海の果てまで響き渡る様な美しい音色を奏でる。
何時しかそれは周囲で眠っていた動物達を呼び彼の周囲に集まり眠る。
植物もまた風が吹いていないのにも拘らず葉を動かしその音色に合わせてまるで死者への哀悼の歌を奏でる様に歌うのだった。海もまた波を使ってその歌に合わせて歌を奏でる。それは正に世界が彼の奏でる歌に合わせて死した者達の魂を追悼するかのように…そして、その家族を勇気づける為の歌になる様に奏でるのだった。

フェイト「綺麗……」

その音色はとても澄んでいて心に沁み渡る様に伝わってくる。夜空を見上げると星が瞬いており、その輝きさえも自分たちを鼓舞してくれている様に見えた。

フェイトは思う。そうだ、今は辛いかもしれない。けど、自分が親友達と出会い初めは敵だったけど手を取り合えたみたいに今は敵でも絶対何時かは分かり合える日が来る筈だ。

また……彼に救われた。何時も辛い時彼は傍にいて優しくしてくれる、導いてくれる、守ってくれる。

何時も、何時も、何時も……。

そして、彼女は彼の事を自分が如何思うのか改めて再確認するのだ。

フェイト（やっぱり、私は…バルドの事が……）

バルドの肩に頭を寄り掛かり目を瞑りその音色を聞くのに意識を集中する。そして、その音色が悲しみに暮れる者達に届いて、と願いを込めるのだった。バルドは一度フェイトを見てフッと笑い自分が着ている黒いコートを脱ぎ風邪を引かせない様にする為にフェイトに掛ける。

その音色は街中に響き渡り人々を鼓舞して行く。そして、空に吸い込まれる様に消えていき、また風に乗って響き渡るのだった。それは、なのは達にも届いていた。

なのは「綺麗……」

はやて「この音色は……？」

シリウス「バルドだね」

エリオ「父さんがですか……」

その音色に聞き惚れる。怪我をして苦しんでいた者も戦いで失った者もその音色を聞きいっている。

そう、死者への哀悼の音色と生き残った者たちを勇気づけるかのような歌を……。

キャロ「とっても…綺麗な音色……」

ティアナ「凄い……こんな音色始めて聞いたわ……」

スバル「何か、心が洗われていく感じがするよ……」

ギンガ「それに……暖かい感じがする」

コレット「やっぱり、バルドのはとっても綺麗だね……」

ロイド「ああ、そうだな」

その音色を各々感じ入った思いを心に留め作業をする。その音色は救助が終わっても怪我人を搬送した後も続き日が昇り朝になるまで続いた。まるで、日の出と共に魂が天に昇って行くかのように……。

――――――――――――――――――――――――

―――――――――――――

～？？？～

フォスティル「残るは四つ、早急に集めねばならない」

エリス「クスクス、次元海賊も大した事無かったものね～」

クラレンス「折角、技術とか色々提供したのに宝の持ち腐れって奴だね～クスクス」

アグリス「面倒なことしてないでさっさと滅ぼせばいいものを……」

ナーガ「仕方がありませんよ。我々の位置を把握されては少々面倒です。この場は王が目覚めるまでは何人(なんぴと)も穢してはならないのですから」

辺りが闇に閉ざされている世界に彼ら使徒はいた。そして、その奥には玉座があるがそこには誰も座ってはいない。

???「赤、蒼、緑……残るは紫、翡翠、黒、白か……」

???「これの場所は主のお告げ通りの場所にあると思うよ。……まあ、誰かに持ち去られていなければだけど……」

アグリス「前回はクソ野郎に持ち去られてたから探すの面倒だったぜ……」

ナーガ「そう言えば、ジーク。貴方は使徒になって初めての戦闘でしたね？如何でしたか？」

ジーク「……特に何時もと変わりは無い」

エリス「クスクス、相変わらずだね～♪」

???「フハハハハハハハ！！ハァ～ハッハッハッハッハッハッゲフンゲフン！！」

そこに大きな笑い声と笑いすぎて咽る声が聞こえそちらを見ると満

面の笑みを見せる男が一人。

クラレンス「随分と楽しそうだね？何があったの～ギル？」

ギル「ふふふ、遂に…遂に完成したのだよ！！我が力がな！！」

ギルと呼ばれた男はそう言って一つの書物を取り出した。それは…
何処かはやての持っている『夜天の書』に酷似していた。

アグリス「あ～あれか…何だっけ？『編みの書』だっけ？」

ギル「そうだ！！これで世界の編み物の事が全て我が物に……って、
違うわっ！！編み物を得て何になる！？出店でもする気か！？」

エリス「クスクス、良いノリツッコミだね～♪違うよアグリス『ハ
ムの書』だよ♪」

ギル「そうだ、これによって私は生き恥を晒したあの男、ハム仮面
の様に……って、違うわ！！誰がハム仮面じゃボケ！！」

クラレンス「自分で言ったんじゃん、クスクス♪」

ナーガ「もう、皆さん遊んで……。それで、何が出来たんですか？」

ギル「ぜぇぜぇ……出来たのだよ。遂に…遂に『闇の書』がな！！」

息切れをしていたが呼吸を整え自信満々に答える。闇の書と聞いて驚く者と?となる者、反応は様々だ。

アグリス「『闇の書』ねぇ…確か最初に開発したのがお前でそれを何処かに飛ばしたんだよな?」

ギル「そうだ。そして、転生する毎にそれから魔力を少しずつ吸収し今に至ると言う訳だ。尤も、前に『闇の書』はある存在に完膚なきまでに破壊されたがな、こうして復活を遂げた。あとは、これを使って…待っていろよ兄弟!!フフ、フフフ、フハァッハッハッハhゲフンゲフン!!」

アグリス「なあ、やっぱコイツ唯の馬鹿だろ?」

ジーク「……俺に聞くな」

???「ウハハハハ!!こいつはおもしれぇな!!次はお前が行くのか。序でだ俺も行ってやるよ!!」

静かに、だが、確かに再びなのは達に脅威は迫っていた。

# 第二十八話（後書き）

如何でしょうか？段々と使徒も増えてきてそろそろヤバイかな？っと思いつつ気にしないで書きまくってる作者です。最後辺りでフェイトさんが自分の気持ちを再確認しましたね。その思いを何時伝えるのか、作者自身も全く分かりませんね。
そして、はやて達にまたもや怪しい影が使徒が……

ギル「遂に俺の出番だーーー！！」

とは言ってますが彼の出番はまだ先です（笑）

ギル「はっ！？どういうことだ作者！！」

ではでは、読者の皆さまこれにて、これからもガンガン書きまくりますのでこれからもこのダメ作者の小説を宜しくお願いします！！
さよならさよならさよなら～。

ギル「おいっ！説明もなしに帰るんじゃねえ～～！！」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第二十九話（前書き）

二十九話更新！！

今回はあれです！なのは達のA、S時代の過去をちょっと（弄るという名の）改変してみました！！あっ、ごめんなさい。石投げないでください！！

って、岩石はもっと駄目だって！？あーーーーー！！

作者は（粛清という名の）鉄槌によってログアウトしました。

クラウド「という訳で、前半が過去の話で、後半は……作者曰く少しgdgd感が溢れてしまったそうです。では、本編をどうぞ！！」

エリス「作者の死体を弄ってみる、クスクス♪」

クラレンス「ツンツン♪」

・∴（ ゜Д ゜；）……弄らないでぇぇぇ…

# 第二十九話

それは、なのは達がロイド達と出会うずっと前に起きた。
十年前の冬、海鳴市で起きた事件『闇の書事件』当時のなのはとシグナム達は敵対していた。

だが、それでも彼女とその友達のフェイトは諦めずシグナム達と分かり合う為に幾度となく出会い、戦った。その際にリンカーコアを抜き取られてもデバイスを損傷しても諦めなかった。そして、シグナム達の主がはやてと言う少女だと言うのに偶然にもある友達が病院に見舞いに行く時について行ったために分かる事が出来た。シグナム達は、はやての病の進行を止める為に魔力を奪っていたのだ。

だが、彼女達が出会いうのが少し遅かった……。『闇の書』は覚醒、世界を崩壊させようとした。
それを決死の思いで戦いはやてと管制プログラムの『初代リインフォース』から引き剥がしそれを皆の力を全力で放ち宇宙へ飛ばす。
それを『アンカンシェル』で消し飛ばそうとしたが……。

エイミィ「対象に着弾！！」

リンディ「これで、終わったのね……」

なのは「やったんだ……」

エイミィ「っ!?待って下さい!!これは……『闇のプログラム』健在!!うそ……魔力の量が大幅に上がってる!?まさか、アンカンシェルすら吸収したの!?」

その砲撃はあと一歩威力が及ばずその闇のプログラムがギリギリ張った障壁によって防がれたのだった。更にその放った砲撃さえ吸収され闇のプログラムは更に強大な力を得たのだった。

撃つ手が全て効かない、それが意味するのは……諦めかけたその時、

エイミィ「ちょっと待ってください、これは……!?闇のプログラム付近で大きな次元の歪みが発生!!なに、これ!?超巨大な次元断層……いえ、虚数空間来ます!!」

それと同時に宇宙空間が大きく縦に裂けそこから大きな手が出て来た。それは押し広げる様にして空間を裂くのを加速させその向こうには虚数空間が広がっていた。その中から無数の真紅の目を持った巨大な、そう、とても巨大な蛇の様な生き物が出現した。口は頭にかけて十字に大きく裂けており顔全てに目が点在している（ボクタイのヨルムンガンドに近い形）。その頭部だけで戦艦すら優に超える程の大きさだった。

それは地上にいるなのは達にすら見えた。宇宙を裂きそこから現れた存在……その者から迸るのは絶対的な魔力……。

人が決して行きつく事は無いあの今の闇の書ですら遠く及ばないそ

れほどの魔力だった。

エイミィ「何この魔力量!?測定できません!!きゃっ!?」

測定しきれずに測定器が爆発した。

???［ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝アアアアア!!!」

それは雄たけびを上げ宇宙全体を揺るがす。星を震え上がらせ、空が恐怖し、海が泣き、大地が恐れていた。
その存在は溢れんばかりの魔力を存分に放出している。それは地上の者にも届き魔力を感じない者ですら異常に気付く程だった。それを感じたなのは達は全員震えていた。

クロノ「な、何だあれは……?」

リィンフォース「まさか……あれは……!!」

誰もがその存在を見て呆然としていたがリインフォースは小さく震える唇で声を漏らしていた。

フェイト「闇のプログラムが……恐れている……?」

まるで感情を表現するかのようにプログラムは全身を震わせ形を変容させその存在に向かって街すら消し飛ばす様な凶悪な砲撃を放った。

それを、避ける素振りすら見せず体を出す為にそれは動いていた。

そして、それは直撃し爆炎が包んだ。

だが、その存在は何事も無い様に悠然とそこから体を出して行く。

幾つもの砲撃をそれこそ街を消し飛ばす程の砲撃を連射するプログラムだが、それを全く異にかえさず体を少し出した後その存在は動きを止めプログラムを睨む。

そして、口を少し開けるとそこから蒸気が溢れだし隙間から赤い光りが見えた。

エイミィ「温度の上昇を確認!!!１０００，２０００，３０００、うそ、まだ上昇する!?」

徐々に口を大きく開き始め口の中には真紅に染まったエネルギーが火花を散らしながら魔力が溜まっていく。まるで世界中から熱を奪うかのようなそれは膨大な熱量を放っていた。

エイミィ「一憶、十億、百億……一兆!?こんな熱量見た事ありません!!このままだとこの艦にも被害が…」

リンディ「直ぐに後退!!熱の範囲から逃れるのよ!!」

艦が離れている間もそれは熱を蓄積させていく。闇のプログラムも逃げようとしたが蛇の真紅の目が輝いた瞬間見た事も無い魔法障壁に包まれた。プログラムはそれを破る為に何度も攻撃を仕掛けるが傷一つ付かなかった。

それを、蛇は宇宙高く持ち上げる。そして、体を動かしついに白く輝いている膨大な熱量を持ったそれをプログラムに向ける。

エイミィ「一極、十極、百極、千極、万極℃！？こんな熱量ありえない！！」

＊極とは十の四十八乗の単位です。

それ程の熱量を口から溢れさせ一度軽く反った。

エイミィ「来ます！！」

リンディ「全員、衝撃に備えて！！」

それと同時に蛇から巨大な閃光が放たれ世界から音が一瞬消えた。圧倒的な熱は周囲の宇宙空間すら熱し宇宙に存在する隕石やらデブリすら溶かし尽くしプログラムを防御壁ごと飲み込んだ。

プログラム［■■■■■■■■■■■！！！］

その熱に耐えられる訳も無く断末魔の様な叫びを上げて消し飛びその閃光は空に流星の様な軌跡を作り宇宙を駆けて行った。その周囲にある隕石やその軍勢をも焼き尽くしながら……。

そして、閃光は消える。口から止めども無く出ている蒸気を口を閉じる事で止める。

エイミィ「闇のプログラム…完全な消滅を確認……」

クロノ「な、なんという力だ……」

それは暫く宇宙空間でジッとしていたが艦を一瞥して次に輝く真紅の瞳で地球を見る。

地上からは不気味な真紅の光が突然現れたかのように見えた。数多の生き物が恐怖する死を体現したその輝きは美しくも禍々しかった。なのはは何故か自分達が見られている様な気がして震えた。フェイトも何故か自分を特に見られているかのような感覚に襲われた。

???［アゞアゞアゞアゞァァァァァ！！！！］

それは雄たけびを上げて身を翻し裂いた空間に下がっていく。そして、全身が全て虚数空間に消えたと同時に裂けていた空間が閉じ始め元に戻りそこには宇宙が広がっているだけだった……。

そして、空から雪が降りだす。まるで、熱せられた世界を冷ますかのように……。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――

そして、時間は進みとある場所で……

フェイト「ねぇ……リインフォース、本当に何も手はないの？　はやてだってあなたに残って欲しいに決まってる……だから」

フェイトが問い掛けるが、リインフォースはそれを首を横に振る事で否定する。

リインフォース「無理だ、夜天の魔導書の本来の姿はもはや私の中に存在しない。改変されたこの身では再び防衛プログラムを作りだし、主はやてを侵食する……そうなる前に私は消えなくてはならないんだ。お前達二人の魔導師の力によって……」

次に、二つのデバイスに意識を向ける。

リインフォース「短い間だったが…お前達にも世話になった」

バルディッシュ［気にせずに……］

レイジングハート［よい旅を……］

バルディッシュにレイジングハートはそう答える。

そして、目をつむり、お別れだと言い視界を閉じる。

はやて「リインフォース！」

だがそこに、優しげな声が、自身の大切な者の声が響いた。

リインフォース「主、はやて……！？」

はやてが、着の身着のままといった状態で、車椅子の車輪を自分で回しながら来ていた。

そして、あと一歩といった距離で何かに躓いたのか、転んでしまう。

それでも此方に這ってでも行こうとする。脚が自然に出て行きそうになったが、すんでのところで踏み止まる。

はやて「なんで…なんでリィンフォースがいなくならないといけないんや！？そんなことせえへんでも私がちゃんと抑える！だから！そんなことせえへんでええ！」

はやてがリインフォースに叫んで泣きそうな顔をする。

だが、リインフォースも折れるわけにはいかないのだ。

リインフォース「……主はやて、これで良いのです。あなたは救われ、守護騎士達も残り続けます…ですから、大丈夫です」

はやて「良いわけあらへん！マスターは私や！勝手な真似は許さへん！」

涙を流しながらそう言われてもう限界だった。はやてに近づき、その小さな身体を抱きしめる。

リインフォース「一度だけ……一度だけ不義理をお許しください……主はやて……」

はやて「リイン…フォース……」

二人で泣く。

そして、ひとしきり泣いた後、立ち上がり、最後の手順に移ろうと

する。サヨナラの時間だ……もう思い残すことは無い。いや、あった。それは……

リインフォース（出来れば……私も主はやてと共に……！！）

そう願う。だがそれは叶わないのだ。自分の中にあるこの存在がある限り自分は主とは……大切な家族とは居られないのだ。
奇跡などそう何度も訪れはしない。あの時現れた存在が何の気まぐれで自分達を救ったのか分からない。

だけど、もしあの存在が近くにいるなら聞いて欲しい。自分はもう一度……主と、家族と共に……！！

――――なら、その願い叶えてやろうか？――――

リンフォース「え？」

はやて「な、何や今の声？」

その時突然頭の中に声が響いた。空耳かと思ったが如何やら自分の空耳では無かった。抱きしめているはやても聞こえたらしく傍にいたなのは、フェイトも聞こえた様で辺りを見回していた。すると、自分達の前の空間が大きく縦に裂けそこに虚数空間が広がったではないか。そして、その中には……

――貴様の願い……叶えてやろうか？――

闇のプログラムを完膚なきまでに破壊した存在……虚数空間に何故か存在しているたった一つの存在がいた。
それは、そこから顔を出し自分達をその巨躯の影で覆った。見上げる程の圧倒的な存在、そこから溢れるは人知を超えた魔力、その全貌を把握しきれない巨大な体、見た者を震えさせるその真紅の眼。

――今しがた願っただろ？共に生きたい、と。それを叶えてやろうかと言っているんだ――

聞く者にとっては正に棚から牡丹餅…幸運と思えるだろうがリンフォースはその存在を睨みつける。

リインフォース「貴方が私達の様な脆弱な存在に手を貸すなど如何いった了見ですか？」

――これは俺の気まぐれに過ぎない。唯、今の貴様等が永遠の別れをするのを見るのも良いが、別の道を見せるのも悪くないと思ってな……――

なのは「貴方は一体……？」

――答えると思うか？さて、本題だ。貴様は生きたいと願った、そして、目の前にそれを可能にする存在がいる。さて、貴様はそれを掴むか？手放して彼女達を絶望に追いやるか？選べ……――

リインフォースは黙る。そして、腕の中にいるはやてを見る。……
生きたい、共に生きたい。
だが、目の前の存在は何を考えての行動かが分からない。その先にある思惑が見えてこない。
そこでリインフォースは逆に聞いた。

リンフォース「何故、貴方はそうまでして助けようとする？」

――――……――――

リインフォース「私達の世界、ベルカを破滅の寸前にまで追い込んだ貴方が何故、ベルカの住人だった私を助けようとするのですか！？」

はやて「えっ！？」

この存在は嘗て自分のいたベルカの時代を滅亡の寸前にまで追い込んだ者だそれが何故？
気まぐれと言っていたがそれは無いだろう。全面戦争にまで広がったあの戦いで自分たちベルカの住人を滅ぶ寸前にまで追い込み、そして、その気になれば星ごと自分達の存在を消し去る者が、手を抜いても星すら滅ぶ寸前にまで追い詰めたこの存在が何故自分を助ける為に手を貸す？

――――気まぐれと言った筈だが……まあいい、答えてやろう。俺の

テリトリーで存分に暴れていたあれが邪魔だったから消した。そして、その被害に遭ったお前がいた。勝手に死ぬのは別にどうだっていいが俺のいる所で死ぬのは止めて貰いたいな？折角下らん存在を消し去ったのに後味が悪い……これが、俺の理由だ。それに、あの時は貴様等が先に喧嘩を売ったのだろう？俺はあそこを通り掛かっただけなのに傲慢にもテリトリーを侵されたと勘違いした馬鹿者どもが牙を？けたのではないか？そいつ等を一瞬すら与えずに消したのに怒り襲いかかって来たのは貴様達だ。俺は特に悪い事をしたとは思っていないぞ？――

リインフォース「私を助けると言っていましたが、如何するんですか？」

――その身からいらんプログラムを引き剥がすだけだ。だが、それは容易な事ではないぞ？そうだな……最悪その者達が生きている間に二度と戻ってこれないかも分からんがそれでも構わないのなら聞き入れよう。早く決めてくれよ？私は銀河系よりも心が狭いのだからな――

そう急かす蛇。リインフォースは腕の中にいる主をみる。最悪の場合二度と会えない……。

だが、それでも一縷の望みがあるのならば自分は……！！

覚悟は決まった。だから、それを目の前の存在に伝えるだけだ。

リインフォース「私は……生きたい…。生きて主はやてと…家族と共に暮らしたい！！」

――よくぞ決めた。その願い、叶えてやろう！！――

深紅の瞳が輝き大気を震わせる雄たけびを上げる。
目の前に巨大な扉が現れる。錆びた鉄の様な茶色の扉がゆっくりと開く、光が扉の向こうから溢れる。

――その先に貴様の願いを叶えるものがある。さあ、旅立て！！
貴様の求める未来を掴むために！！――

リンフォース「主、はやて。暫しのお別れです」

はやて「リインフォース……」

リインフォース「私は絶対に戻ってきます。絶対に……。ですから、さよならは言いません。また、会いましょう……」

手を差し伸べる。それを、はやてはしっかりと握った。この温もりを忘れない様にする為に、絶対に会えると願いを込めて……

暫くして、手を離しリインフォースははやて達に背を向け背筋を伸ばし光を放つ扉の向こうに歩んでいく。そして、リインフォースの姿が光に包まれ消えると同時に扉は音を立てて閉まり目の前から消えた。

――願いは叶えた。それでは……――

はやて「待ちや！！」

空間に戻ろうとした存在を呼びとめる。それは再び視線をはやて達に向ける。無数の視線が彼女達を刺す。

――なんだ？――

はやて「リインフォースに何かしたら絶対に許さへんからな。もしそんな事してみいアンタを蒸発させたる！！」

――フハハハ！！面白い事を言う娘だ。安心しろ我が名にかけて彼女の願いを叶える。あとはあの管制プログラム、いやリインフォース自身の意思の問題だ。いずれお前達は再会するだろう。それを信じる信じないはお前達次第だ。さて、高町なのは！！――

なのは「は、はい！！」

突然自分の名を呼ばれ背筋を伸ばして返事をする。

――ソナタは自分の体を大切にしろ。ソナタは無理をする傾向がある様だ。いずれそれはソナタに試練を与えるだろう。だが、それを恐れてはならん。前を見続けしっかりと歩むのだ――

なのは「っ！！はい！！」

――良い返事だ。さて、八神はやて！！――

はやて「はい！！」

――ソナタの願いはいずれ叶う。だが、それは何時になるかは分からん。それでも自分の心をしっかりと持ち前に進め。それは何時かソナタの力になる――

はやて「っ！！はい！！」

――そして……フェイト・テスタロッサ！！――

フェイト「はい！！」

――ソナタは今の仲間を大切にしろ。その者達はソナタの事を最後まで信じてくれる。その手は必ずソナタの手を掴んでくれる。そして、ソナタの待つ者は必ず戻って来る。それは何時になるかは分からんが必ず戻って来る――

フェイト「えっ！？そ、それって……！！」

――お喋りが過ぎたな。では、さらばだ小さき戦士たちよ……――

フェイト「ま、待って！！如何して貴方はそれを……！！」

だがその問いかけに応える事無くその存在は虚数空間に戻っていき最後に此方を見てその目を細める。恰（あたか）も笑っている様に……。そして、空間が閉じそこには雪の降る景色が広がっているだけだった…

…。

これが、『闇の書事件』の全容であるが、その存在を録画したものは何故か全て消去されていて結局、その存在の事をリンディはそこに居合わせた者だけの秘密として公開しなかった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

シリウス「はやて～！！って、ありゃ？寝てるのか……」

シリウスが部隊長室に入るとはやては仕事で疲れて休憩していたのかソファーで眠っていた。傍によってその寝顔を眺める。
あの戦いから二週間ほど過ぎた。各方面で忙しく動いているはやてとシリウス、その疲れが溜まったのかスヤスヤと眠っていた。

シリウス「ホント、可愛いな……」

顔に掛かっている髪をそっと掬い微笑む。あどけない寝顔を見ているだけで疲れも吹き飛んでいた。

もっと近くでその寝顔を見ようとして顔を近づけた瞬間……

はやて「リインフォース！！」

ゴチンッ！！

ナイスタイミング！！はやてが突然飛び起きたためおでことおでこがゴッツンコ（笑）。痛みで悶絶する二人……

はやて「っつ～～～！！な、なんや！？」

シリウス「うぐおぉ～～～……鉄ハリセンよりも効いた～～～……」

はやて「シ、シリウス君！？」

シリウス「や、やあ…はやて……本日も麗しゅう……」

はやて「いや、こんな時までボケんでもええって……。って言うか何してんねん」

シリウス「いやさ、はやての寝顔を眺めてただけだよ。今日もはやての寝顔は可愛いな～って思ってた所にこれだもん……」

はやて「ちょい待ち！今、“も”って言った！？」

シリウス「ふっ…今日も素晴しきはやての寝顔を心のメモリーに保存する事が出来た。あっ、因みに始めて会った時から毎日保存していたぜ！！」

サムズアップして歯をキラリと輝かせて語る。

はやて「消す！！今すぐその記憶消したる！！」

シリウス「冗談！！これは俺の心のメモリーの最深部で三重プロテクトで保存させて貰う！！」

はやて「うが～～！！」

本日もまた六課で追いかけっこが始まった……。最早この六課での名物になりつつあるのを本人達は知っているのだろうか……？
ある職員は実況を始め、またある者は『本日の部隊長と補佐官』と言うこの六課内だけ販売している記事を得る為に写真を取っていた。
時たま範囲殲滅魔法を使いそうになるのでその時は全力で皆で止めに入るが……。

そして、今日の追跡は結構長く続き、二人は近くの林まで追いかけっこをしたがはやては此処でバテて倒れこむのだった。

はやて「はあ、はあ、はあ……もう駄目や」

シリウス「今日は随分と持ったね？」

はやて「自分ホンマいい加減にせぇよ……」

シリウス「それは無理だよ～。俺にとってはやてといる毎日が楽しいんだもん」

はやて「うちは疲れるけどな！！」

シリウス「ハハハ、だからこそこうやって外に連れ出したんじゃないか？」

そう言われてハッとなり体を起して辺りを見回すがあるのは木、木、木、木……。
殆ど太陽の日差しが隠されて木漏れ日が少しだけ漏れているだけだった。

シリウス「此処なら誰にも邪魔されないよ……」

はやて「シリウス君……？ま、まさか……！！」

その言葉に背筋に汗が流れた。もしや、シリウスは……！？
シリウスは笑みを浮かべて近づいてくる。それに合わせてはやては一歩下がる。

シリウス「何で下がるの？折角此処まで連れ出したんだし逃げないでよ」

はやて「あっ……」

一瞬で近づきその腕を掴む。

はやて「だ、だめ……」

シリウス「ん？何が？」

はやて「そ、それは言えへん／／／／／／／／。け、けどうちはまだ心の準備ってのが……／／／／／／」

シリウス「はいはい、そんなの待ってたら日が暮れそうだから……よっと！！」

はやて「ひゃあ！？」

倒されてシリウスを見上げる形になる。最早覚悟を決めるしかない！！目を瞑り何時来るのかと身構えていたが……。

ふいに後頭部が持ち上げられてそこに柔らかい何かの感触が伝わる。

恐る恐る目を開くと……。

シリウス「よっし、ミッションコンプリート！！」

はやて「へ…？」

気付いたら何故か自分がシリウスに膝枕されていた。

はやて「………なぁ、シリウス君。一つ聞いてええか？」

シリウス「なに？」

はやて「これは如何いう事や？」

シリウス「如何いう事って…膝枕だよ、ひ・ざ・ま・く・ら♪」

はやて「それは知っとる。何で膝枕なんや？」

シリウス「だって、最近はやてあまり寝てないでしょ？いっつも部屋に籠って仕事、仕事、仕事、仕事。少しは休んだ方が良いと勝手に考え、勝手に決定、勝手に連れ出したのさ！！偶には外で寝るのも悪くないでしょ？」

ニコニコと笑いながら自分の事を見るシリウス。その表情はとてもキラキラしていて邪なものは一切感じられなかった。
如何やら本当に此処に連れ出して休ませたかったようだ。何だそんな事か……脱力しホッとするはやて。

シリウス「そう言えば、心の準備って言ってたけど何の事？」

はやて「っ／／／／／／／！？な、何でもあらへん！！」

顔を真っ赤に染めてそっぽを向く。それを見てクスクスと笑いながらシリウスは後ろにあった木に背を凭れ掛かける。
笑われた事に頬をぷくっと膨らませて睨みつける。それすらシリウスにとっては愛嬌があり可愛らしい仕草であるというのに……。

シリウス「ほら、ゆっくり休みなって。此処は誰にも邪魔されないからさ」

はやて「シリウス君、その言い方だと変な勘違い受けそうやからちゃんとした言葉を使った方がええで？」

シリウス「ん？変な勘違い……？ああ、そう言う事。なんだはやてはそっちの方を考えていたの？」

はやて「なっ／／／／／／／／！？」

シリウス「あれ、図星？クスッ、はやてって結構エッチなんだね？」

はやて「う、うるさい、うるさい／／／／／／／／／！！うちは寝る！！邪魔せんといてや！！」

シリウス「はいはい。……おやすみ、はやて」

そう言って満面の笑みを浮かべるシリウスを見て鼓動が速くなる。ただでさえ気になる男性の膝枕と言う初めての状況にドキドキしているのにこの笑顔はずるいと思う。草木の香りと共にシリウスの髪から漂う良い香りが鼻を擽り木漏れ日から降る日差しが心地よく、

徐々に瞼が落ち始めて来た。
如何やら、予想以上に自分は疲れていたと言うのが実感できた。よく人を見ているとつくづく思う。
だから、その感謝も込めて……

はやて「……おやすみ」

低く聞こえにくい様にして呟くがシリウスはニコッと笑った。少し悔しい……。

何時か彼をギャフンと言わせてやる。そう決めはやては眠りに就いた。

シリウス「ふぅ～、こりゃ一本取られたな……」

溜めていた息を吐き出し空を見上げる。それと同時にはやてはずるいっと思った。

あんなとこで上目づかいで瞳を潤ませておやすみと言うなんて危うく抱きしめるところだった。
心を落ち着かせて視線を下ろす。スヤスヤと安らかな寝息を立てて自分の膝枕で寝ている彼女はとても可愛らしかった。

シリウス「何時もずるいずるいって言ってるけど君の方がずるいよ……。俺の心を癒してくれる君の方が…ね」

顔に掛かった髪を掬う。

シリウス「君がいるから俺は頑張れる。だから……」

はやての額に軽く唇をつけ、直ぐに離れた。始めて会ったときから何故か自分を魅了していた彼女。
如何して自分が彼女に引きつけられたのかは多分一生分からないだろう。だが、それでいいと思う。
分かってしまっては後がつまらない。解けないものは一生解けない、それでいいと思う。
自分に掛けられたこの魔法は絶対に解く事が出来ない……。だから、

シリウス「君を守るよ……何処にいても必ず……命に代えても……」

声に出して自身の意思を固める様にして強く呟くのだった。

シグナム「はあぁぁぁぁぁぁ！！」

あの戦いにより自身のデバイス、レヴァンテインを破壊されたシグナムは簡易デバイスを使って摸擬戦をしていた。
今日の対戦相手はコレットだった。ここ数日、毎日の様に摸擬戦をロイド達に挑み続けていた。

コレット「レイントラスト！！」

シグナム「ふっ！！」

飛んでくるチャクラムを弾き飛ばし距離を詰め持っている簡易デバイスを振るった。
それをバックステップによって回避し距離を取ろうとするがシグナムはそれを許しはしない。
更に踏み込み返しの手でデバイスを振るう。

コレットは背に天使の翼を生やし空高く飛び上がる。その後をシグナムも追従する。

コレット「リミュエレイヤー！！」

三つのチャクラムを飛ばすがシグナムは全て弾き飛ばし距離を詰め

る。

シグナム「はあっ！！」

コレット「くぅ！？」

迫りくるデバイスを持っていたチャクラムで防ぎ逆の手にあるチャクラムを振るいシグナムを離す。
そして今度はコレットが距離を詰めてきた。

コレット「ソルフェージュ！！」

シグナム「くっ！！」

何度もチャクラムで斬りつけ最後に回転攻撃を仕掛ける。それを防御するが大きく弾き飛ばされた。

シグナム「だが、それでも！！」

体勢を立て直し魔力を爆発させ距離を一瞬で詰め再びコレットにデバイスを振るうが……

コレット「アクセルモード！！」

一瞬、コレットが光った途端目の前から彼女は消えデバイスは空を切る。
そして、上空からの強襲、それを受け流し、避ける。

シグナム「まだまだあぁぁぁぁ！！！」

コレット「烈蹴脚！！」

光りを纏った蹴りが迫る。それをデバイスで受け止めるが腕に強烈な衝撃が来て吹き飛ばされた。壁に激突する前に体勢を立て直しデバイスを構える。だが、そのデバイスが大きくひしゃげているのに気付いた。

コレット「あっ、壊しちゃった……如何しよう……」

シグナム「問題無いぞ。シャーリーが治してくれる」

コレット「シグナムごめんね」

シグナム「何故謝るのだ？」

コレット「だって、デバイスを壊しちゃったし……」

シグナム「気にするな。だが、これではもう戦えんな。今回は此処までか……」

コレット「ホントにごめんね？」

何度も謝って来るコレットを宥める。それを見てコレットは一度首を傾げシグナムをジッと見る。

シグナム「む？如何した？」

コレット「シグナム、何か無理してるように見える。ちゃんと寝てる？」

シグナム「ああ、休養を取り不測の事態に備えるのも騎士の務めだ」

実際は嘘だ。此処の所あの敗戦が頭から離れずあまり寝れないでいた。

それを如何やら、コレットは見抜いた様である。

コレット「あまり無理はしないでね？」

一つ忠告の様な事を言ってコレットは心配そうにしながらもお腹を空かしたウルとレンに裾を引っ張られその場を後にするのだった。

彼女の姿が見えなくなったと同時にシリウスから通信が入る。

シリウス『やっほ～、最近の調子は如何よ？』

シグナム「問題は無い。それより用件は何だ？」

シリウス『態度が冷たいな……まあいっか、えっと今日はシグナムお休みです！！だから街に行った行った！！』

シグナム「……は（゜Д゜）？」

突然の休暇を何故かシリウスに言われポカンと口を開くシグナム。暫し思考が停止していたが気を取り直して理由を問う事にした。

シグナム「何故私が休暇を取らねばならん？」

シリウス『隠しても無駄無駄。最近悩みがあるみたいじゃん？そういうのは誰かに聞くあるいは外にでも出てきっかけを掴むそれしかないっしょ！！』

シグナム「主に許可を貰わなくてはそう言うのは駄目だと思うのだが？」

シリウス『あ、それなら大丈夫さ！！ちゃんと許可貰ってるよ～』

シグナム「なら何故直接主が伝えてこないのだ？」

シリウス『はやては今書類の山と言う戦場で戦っているのだ（嘘）。だから俺も忙しい。故に通信はこれで終了！！では、バイビー！！』

一方的に言って一方的に去っていくシリウス得意の戦法。呆然としていたが休みを貰ったのだし何をする訳でもないので何となく、渋々街に出かけるのだった。

とは言うものの街に出ても特に何かあると言う訳でもない為、シグナムは街中をウロウロするだけだった。

此処二週間で街はだいぶ復興できており後一週間で元通りになるだろう。

しかし、中央に近づけば近づくほど被害は酷くなっていた。それもそのはず、今回はイノセントが街のほぼ中央で突然出現した為かなりの激戦区になりなかなか復旧の目処が立っていないのだ。

そう言う理由もある訳で被害の少ない外側から少しずつ復興作業をしているらしい。

一応、この状況の中での犯罪防止の為に街中には地上部隊の者が巡回警備をしているが人員不足が祟りあまり順調とは言えない様だ。

本局からも警備に来てくれた者は多くいるがそれでも街全てを警備する等出来ないでいる様だ。

そんな中一つの公園にたどり着いた。人の影は殆ど無くまだ手付かずの状態だった。

その中に一際目立つ者がいた……。

――ポポッ、クルッポー、ポポポ、クルッポー――

全身が鳩に包まれて立っている何とも怪しい……怪しすぎる人（？）が佇んでいた。

シグナム「……」

周りもチラチラとその立っている何かを見ている。これは……局員として話しかけなければならないのだろうか……？
歴戦の戦士であるシグナムですらその異様な者に近づきたいとは思わない。
いやしかし……だが……ううむ…。と言う感じで少し悩んだが職務質問する事にした。

シグナム「おい、そこで何をしている！！」

シグナムが近づくと辺りの市民がおお～！！と感嘆の声を上げる。
だが、その立っている人は全く返事をしない。と言うかピクリとも動いていない。それでよく見ると……

鳩塗れの人「ＺＺＺｚｚｚｚ……」

立ったまま寝ていた……。顔まで鳩に覆われている所為で寝息しか聞こえずとても不気味だが……だが、このままでは鳩の所為で呼吸困難で窒息死と言う笑えない事件が起こりそうなので意を決して叩

き起こす。

シグナム「この様な所で寝るなバカ者が！！」

大声で叫ぶ。それにビックリして鳩がバサバサと羽音を立てて逃げていく。
そして勿論寝ていた人も飛び起きた。

鳩塗れだった人「はっ！！申し訳ありませんでした！？」

そう慌てて返答して敬礼する。その動きは軍隊の人間の様に素早く一瞬の動きだった。
そして、その寝ていた人とは……

シグナム「なっ！？貴様は……！！」

ジーク「む、烈火の騎士……！？」

ジークだった。使徒の出現に思わず身構えるが生憎と相棒のレヴァンテインが無いのに気付き思わず舌打ちする。デバイスも無い自分でこの男を倒せるだろうか……否、無理だ。

警戒しているシグナムを見てジークは手を上げて制する。

ジーク「安心しろ今日は只此処に来ただけだ…」

シグナム「そんな事信じられると思うか！？」

ジーク「ふむ、ならこれを持っていると良い」

そう言って投げて寄越したのは彼のデバイスのバルムンクだった。
それに驚くシグナム。目の前の男は如何やら本当に何もする気は無いのだろう。

ジーク「それでも信用できないのなら……」

シグナム「いや、分かった。貴様には何も危害を加える意思が無いのは理解した」

ジーク「そうか……」

そこで、二人の耳にヒソヒソ話が聞こえる。更に周囲からは視線が突き刺さる……。

ジーク「む、何故か視線が冷たいのだが？」

シグナム「それは貴様が原因だと思うが……。はあ、まあいい何処かに座るか……」

ジークを引き連れ突き刺さる視線から逃れる為にその場を後にする。
そして、人通りの少ない木陰にあるベンチを見つけそこに二人は座った。

シグナム「それで、何が目的で此処に来た？」

単刀直入に聞く事にする。この男は何が目的で、何の為にこの街に来たのだろうか？
自分達が破壊したこの街に……。鋭い視線を向けるシグナムをジークは全く臆する事も無く答えた。

ジーク「目的など無い。ただ、街を見に来た。それと……」

空を見上げるジーク。それにつられて見上げると上空から沢山の鳩が降りて来た。
それは、ジークの傍に降りてきてポポッと鳴きながら地面を突き始める。

ジーク「鳩を見に来た……」

シグナム「鳩？」

ジーク「鳩は多くの世界で平和の象徴として扱われている。それがこの世界にもいるのかと思って見に来た。……如何やらこの地は平

和なのだと言うのが分かった。だが、あまりにも日差しが暖かかった所為かあの場で寝てしまった様だな」

シグナム「鳩だけでその様な事を決めても良いのか？」

ジーク「鳩は平和な地にしか居着かない。それが街にいると言う事はその地が平和だという事だ。……すまない」

突然謝り出すジークにシグナムは驚く。

ジーク「知らなかったとはいえ平和な貴方達の街を襲撃した事使徒を代表して謝罪する。とは言っても奴らには罪悪感など無いが…」

そして、もう一度頭を深く下げた。シグナムはそれを見て混乱する。何故この男は使徒の一員の筈なのに敵である自分に謝るのだ？鳩がいるから……なのか？

シグナム「何故貴様は謝るのだ？」

ジーク「俺は平和な地で争い事を起こそうとは思っていない。それに俺は強い敵と戦う為に、貴方と再び会う為に使徒に入っただけだ。争い事を作りたくて入った訳ではない。本当に申し訳ない」

ジークの周りに鳩が集まり出す。まるで彼に懐いてるかのように。

シグナム「何度も謝るな。逆にこっちが気まずくなる。……一つ聞きたい、何故貴様は私を探していたのだ。あの時、昔の私を知っているような口ぶりだったが……貴様は私の一体何なのだ？」

その瞳を見つめる。ジークもシグナムの瞳を見つめ暫くして視線を外しシグナムからバルムンクを返してもらい席を立った。

ジーク「それに答えるのはまだ先だ。俺はもう帰る。中々に楽しかったまた会えると思う」

シグナム「お、おい！！待て、ジーク質問に答えろ！！」

その背に呼び掛けると振り向き微笑んだ。それは純粋な笑みで思わずドキッと心臓が高鳴った。

ジーク「また会いましょう。我が師にして最高の好敵手（ライバル）、また此処で何時か……」

そう言って転移魔法を発動させてその場から姿を消したのだった。
残されたのは地面を突く鳩達と何時の間にか手の中に残された古びたロケット式ペンダントだった。

シグナム「これは……」

如何してなのだろうかそれを見るのは初めてな筈なのにどこか懐かしい。
古びてはいるが傷などは一切付いておらずそれをどれ程大切に持っていたのかが見ただけで分かった。カチッと音を立てて開くとそこには今とは雰囲気が少し違う自分と少しだけ緊張した面持ちのジークの写真があった。それはとても仲良さそうに写っている。

シグナム「これは…ジークとそれに…私…か…？」

その背後の風景は少しぼやけてはいるが如何やら何処かの草原で一本の大きな木がそびえ立っていた。

シグナム「お前は一体何なんだ……お前は…私の一体何なんだ、ジーク！！」

その叫びに答える者は誰もおらずその声は虚空に吸い込まれていき消えていった。

## 第二十九話（後書き）

如何でしょうか？後半が少しｇｄｇｄになっていますが。え？最初に出てきた巨大生物は何なのかって？それは、後に分かりますよ～。

それにしても、中盤のシリウスとはやての夫婦漫才もといアツアツ（？）な描写は上手く書けてたでしょうか？

恋愛要素を書くのってすんごい難しいです……ｏｒｚ

何分、作者自身が年齢＝恋愛経験皆無という方程式が出来ているので事恋愛については全く知識と言うのがありませんので読者の皆様には糖分はあまり摂取できなかったのではないのでは？っと思いビクビクしています。

さて、次回も早めに更新したいとは思っていますが、ってか物語の進行速度が遅すぎるような気もする……まあ、気にしたら負けだと思い、現在も頑張って執筆中です！！

でわ、今日は之にて！！これを読んで下さった読者の皆様、そしてお気に入り登録して下さった皆皆様、これからも宜しくお願いします！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

## 第三十話（前書き）

三十話更新！！…三十話か…。これを書いてきて随分と経ったんだなっと思います。

さて、今回もｇｄｇｄＭａｘで行きますよ～！！

カイン「さて、今回は何が起きるのやら……」

シリウス「ダメ作者の事だし味気のない事を書いたのかもよ？」

激しく傷ついた！！ｏｒｚ

# 第三十話

あの戦いから一カ月が経った。…え？時間飛ばし過ぎじゃ無いかって？
そんなの気にしない気にしない！！
べ、別に書くのが面倒だったって訳じゃないんだからね！！

相変わらず忙しい六課ですが……今は…

はやて「あぢ～～～……」

ロイド「大丈夫か？」

現在季節は夏真っ盛り！！記録的な猛暑で六課の中も若干サウナ気分です。
はやて達もグッタリしています。

なのは「ロイド君達は……平気……なの…？」

コレット「うん、だいじょぶだよ♪」

ロイド「まあ、砂漠越えなんて何度もやったしな……殆ど水無しで……」

ティアナ「何で水無しで！？」

ロイド「だってよ、コレットの奴気付いた時には魔物に水殆ど与えてたんだぜ！？お陰でオアシス見つけるまで殆ど水飲まなかったよ……」

昔の体験談を語る。それに皆思い出したのか相槌をついている。

コレット「でも、あの子達も辛そうだったんだもん……」

ロイド「いやさ、別に与えるのは良いんだけどさ……限度を考えてくれよ」

セフィリア「あの時は死にかけたね……」

フェイト「よく、生きてこれたね……」

そんな事になったら正に絶望的だろう……砂漠で水無し……おおう、背筋がゾッとする。

はやて「だぁ～～！！こんなクソ暑い時に暑い話すんな！！」

まあ、それには同感ですが……。そして、こんなクソ暑い日は何かと仕事に就くのは皆億劫なのだ。
皆さんも思い出だしてください。真夏にやる宿題、書類の束ETC……億劫になりませんか！？

はやて「もう我慢の限界や！！」

なのは「にゃははは……確かに暑いよね……」

はやて「こうなったら……実力行使や！！」

一同「………え？」

――――――――――――――――――

はやて「という訳でやって来たで、海へ！！」

目の前に広がるのは青い空に白い雲、そして、広がる海！！

今、なのは達がいる所はそう、彼女達の故郷地球。……え？過程はって？

ふっ、そんな面倒な事は書かんさ！！一泊二日のプチ旅行～イエ～

～イ！！

アリサ「それにしても、なのは達が来るのは久しぶりね」

なのは「アリサちゃん達も元気そうで良かったの」

なのは達といるのは彼女等と長い付き合いであり親友のアリサ・バニングス、月村すずかである。地球に来る時は、なのは達はすずかの家やアリサの家を中継として使わせて貰っている。
因みに今此処にいるのは八神一家、六課陣（主要メンバー含む）、ロイド達、アリサ、すずかである。

アリサ「それと、久しぶりね、カイン」

すずか「お久しぶりです。カイン先生」

カイン「お前達も元気そうで何よりだよ。大学に入ったんだな。今後に期待してるぞ」

二人もカインとは短い期間だったがそれなりに親しくしていた。

アリサ「にしても、八年前になのはを助けてくれたって聞いたわよ。それには感謝するわ」

すずか「もう、アリサちゃんは素直じゃないんだから……」

尊大な態度で語るアリサをすずかは苦笑いで見つめる。カインも相変わらずの性格を知っている為に苦笑い。

ロイド「すっげー！！此処がなのは達の故郷なのか！！」

コレット「綺麗な所だね～♪」

クラウド「空気が澄んでるな……」

セフィリア「それに人々もとても幸せそうに見えますね」

ロイドとコレットははしゃいでおり、クラウドは冷静な分析、セフィリアは浜辺で遊んでいる人や海で遊んでる人等々幸せそうにしている人達を見て微笑んでいる。

アリサ「それにしても……随分と増えたわね」

なのは「にゃはは、皆違う世界から来た人達なんだよ」

立ち話もなんなんで、なのは達はコレット達女性陣を引き連れ着替えに行くのだった。

去り際に「覗かないでね？」と言うが、そんな度胸ある人間…と言うよりやろうなんて考えている人間が一人もいないのだが……。

ヴァイス「っち！！」

あ……一人いた……。

男性陣は一足先に浜辺に行きパラソルを挿す等の仕事を済ませる。

エリオ「父さん……暑くないんですか？」

バルド「何がだ？」

エリオ「その……そんな黒いコートを着て……」

そうバルドは今、何時も来ている黒いコートをこの炎天下の中平然と着ているのだ。

バルド「別に問題は無いんだが……まあ、どうせ着替える時脱ぐし気にするな」

ロイド「バルドは相変わらずなんだな……」↑称号『海が好き』セット済み

その声に振り向くと既に水着に着替えているロイド。シュノーケルも装備して準備万端だった。

エリオ「あの……ロイドさん」

ロイド「如何した、エリオ？」

エリオ「なんで、腰に剣を装備してるんですか……？」

ロイド「だって、海にも魔物っているだろ？」

エリオ「此処には魔物なんていませんよ！？」

ロイド「えっ、そうなのか！？」

心底驚いた表情をする。話によるとロイド達の世界では海にも魔物がいて時折襲撃するので何時も装備は外せないらしい……。取り敢えずこの世界に魔物がいないと言う事を伝えておき剣を置いてもらう事にした。このままでは銃刀法違反で捕まる可能性があるので……。

フェイト「皆ごめん！！待った！？」

バルド「ああ、フェイトか随分と時間が――」

そう言いながら振り向いたバルドだったが、最後まで言葉を紡げずに止まった。

今のフェイトは黒いビキニ姿で白い地肌が太陽に反射しておりとて

も……ぐはあ！！目が、目があぁぁぁぁ～～！！
い、いかん！！鼻血が…鼻血が止まらん！！目からも血が溢れるぞ～～！！

フェイト「え、えっと……如何かな／／／／／／／？」

少し顔を赤く染めモジモジしてバルドにそう尋ねる。暫しボウッとしていたがハッとなって思考を回復させた。

バルド「あ、ああ、結構似あってるぞ…／／／／／」

フェイト「そ、そう……えっと…ありがと／／／／／／」

そんな会話をしている二人を余所にカインとシリウスの元にもなのはとはやてが……。

なのは「カ、カイン君！！」

はやて「皆待たせてごめんな！！」

カイン「ん？なのはか…」

シリウス「全然問題ないｙ――」

そして、カインもまたなのはの姿を見て思考停止……。
ピンクの水着を着ておりモジモジして登場。見事な括れと少し大きめの膨らみが……はぐあぁ！！↑吐血！！

はやても白い水着で登場、控えめな胸が彼女の美しさを更に引き上げる！！
こ、これはいかん！！か、体が耐えられん！！
メ、メメメメディィィィィック！！メディックは何処だあぁぁ！！！∴∴（。Д。；）↑吐血

因みに水着は皆さんの素晴らしき脳内演出にお任せです！！フェイトさんを除いてな！！

さて、そんな二人を見ての反応は……

カイン「……」↑眩しすぎて思考停止

シリウス「ぶはぁ！？」↑鼻血を噴き出す

はやて「シ、シリウス君！？大丈夫か！？」

シリウス「い、今桃源郷が見えたよじっちゃん……」

はやて「あの世に逝きかけてる！？気をしっかり！！死んだらあかんって！！」

シリウス「ハッ！！俺は今何を……」

はやて「良かった、気い付いたんやね……」

シリウス「は、はやて……！！」

はやて「ん、何や？」

突然はやての耳元に顔を近づけ甘く語る。

シリウス「可愛いね……抱きしめたい位に……」

はやて「なっ／／／／／／／／／／／／！！」

顔を真っ赤にして体を隠す様に縮こまるはやてを見てクックックと笑うシリウス。

からかわれた事に気付いて文句を言うはやてをあやすシリウス。

そして、思考を回復させたカインもなのはの姿に少し視線を逸らしながらも答える。

カイン「結構…似あってるぞ／／／／」

少しだけ顔が赤く見るがそれはきっと日差しに当りすぎて熱が帯びたのだろう。

答えられたなのはも嬉しくて少し頬を朱に染めて俯く。

バルド「それじゃあ、俺達も着替えてくるか……」

そう言ってそそくさとその場を後にするバルド達、ロイドはと言うと既にコレットと共に海に遊びに行っていた。ちなみにコレットさんも称号『渚のマーメイド』セット済みです！！

エリオ「コレットさん！チャクラムは置いて行って下さい！！」

コレット「？？？」

危うくチャクラムも持っていく所だったコレット。一応あれも刃物です。
ギリギリ間に合って置いて行ってもらった。

スバル「海だ～～～！！！」

ティアナ「こら！！準備運動してからにしなさいよ、バカスバル！！」

アリサ「なのは、フェイト、はやて如何だったの？気になる人の反応は？」

すずか「ア、アリサちゃん……」

ニヤニヤ顔で三人に問い詰めるアリサ。爆弾発言をされて顔を真っ赤にしてアタフタする三人娘。

なのは「にゃっ！？ち、ちちちち違うの／／／／／／！！わ、私はカイン君の事そんな風に／／／／／／！！」

フェイト「そ、そそそそそうだよ／／／／／／！！バルドの事そんな風に／／／／／！！」

はやて「せ、せや！！何言うてんねん／／／／／！！う、うちはシリウス君の事なんか全然／／／／／！！」

アリサ「誰も名前なんて言ってないけど？へぇ～なのは達はその人が好きなのね～」

三人「「「あ、あうぅぅぅ～～～／／／／／」」」

見事な自爆をして親友に気になる男性がバレてしまった。尤も、なのはもフェイトも既にバレていたが……。

そんな感じで会話をしているとバルド達が着替えて戻って来る。

バルド「皆、待たせてすまんな」

フェイト「あ………」

その姿を見て思わず声を漏らす。ロイドもそうだったが彼らの体は引き締まっており無駄と言うものを省いた感じで見事なものだった。

フェイト達どころかアリサ達ですらその肉体を見て見惚れる。

カイン「ん？お～い、如何したんだ皆してボウッとして？」

なのは「な、ななな何でもないの／／／／／／！！」

アリサ「そ、そうよ！！何でもないわ／／／／／／！！」

顔を赤くして視線を逸らしたなのは達を見て首を傾げる。それからは皆自由行動となり其々今日と言う日を楽しむことにした。

アリサとすずかはパラソルの下で荷物番をすると言ったセフィリアとガルド、ザフィーラの下に行きセフィリアに話しかけた。

アリサ「セフィリアは何処かのお嬢様？」

セフィリア「如何してそう思うの？」

アリサ「なんか、仕草の一つ一つに何か作法が混じってるように見えるのよ。だからそうなんじゃないかって思ったの」

セフィリア「う～ん、何て言えば良いのかな……」

ガルド「何時もの様にスパッといえば良いだろう。自分はある世界の王だ、と」

すずか「え……」

アリサ「は！？王様！？」

セフィリア「あ、あははは……まあ、そんなとこ…かな？」

なのは達に新たに王様が友達になったと言うのに驚きを隠せない二人。

アリサ「って事は…婚儀とか大変なのよね？政略結婚とか……」

そこが心配になったアリサが聞くがセフィリアはそこはもう心配無いと首を振る。

セフィリア「それは心配ないよ」

すずか「如何して？王族ってそう言うのはとても厳しいと思うんだけど？」

セフィリア「だって……」

一つ区切った後、隣で座るガルドの腕に自分の腕を絡め幸せそうな顔をして答える。

セフィリア「この人が、私の旦那様だもん♪」

二人「「……えええええええええええええええええええええええ！！！？？」」

既に結婚していたセフィリアに大変驚く二人。まあ、無理も無いが……。セフィリアは如何見てもまだ十代後半にしか見えない。それなのにもう結婚していると聞かされては驚かない人などいないだろう。

幸せそうなセフィリアと恥ずかしさのあまりしかめっ面をしているガルドを交互に見る。
まあ、結論から言えばかなりのイケメンと美人の夫婦としか言えないだろう。

ヴィヴィオ「なのはママ、カインパパ！！早く早く～！！」

カイン「そんな急ぐと転ぶぞ～！！海は逃げないから慌てるなって」

なのは「にゃははは、ヴィヴィオが喜んでくれて良かったの」

波打ち際で笑顔で遊んでいるヴィヴィオを見て自然と頬が緩む。ヴィヴィオが呼んでいるのでカインはやれやれと言った感じでヴィヴィオの下に向かった。
ただ、気をつけておきたいのは辺りには他の観光客も多くて逸れない様にするという事だ。

それでなのはにとって最も気をつけたいのは……

観光客女性「ねえ、あの人カッコ良くない？」

観光客女性「銀髪の人？ホントだ～。凄いイケメンじゃん！！」

なのは（うう～、やっぱりカイン君自然と目立ってるよぉ～……）

っと、この様に周囲にいる女性だったりする……。銀髪の男性などまずいないだろうしカインは顔立ちも非常に良いので目立つ目立つ。

それはなのはも同じで……

ナンパ男「そこのお嬢さん、俺達と一緒に遊ばない？」

なのは「え、あ、あの…その……」

ナンパ男「なっ？いいだろ？」

そう言って強引に手を掴んだ。

なのは「あ、は、離してください！！」

ナンパ男「いいじゃん。少しだけ、な？」

なのは「い、いやっ！！」

手を振りほどこうとするが腕力で女の子が男に勝てる訳も無く、離してもらえなかった。
そのまま引っ張られて連れて行かれそうになる。
だが、そこに……

カイン「おい、うちの連れに何してやがんだコラ……」

カインが来てその掴んでいた腕を握り潰すかのように掴みなのはから引き離した。

ナンパ男「ってーな！！な、なんだテメーは！？」

カイン「言っただろ、連れだって？俺の彼女に触れるじゃねえよ…
…失せろ、雑魚が！！」

ドスの利いた低い声と殺気をぶつけるカイン。その鋭い眼光にビビった集団は恐怖に顔を引き攣らせてすごすごと逃げて行った。

カイン「ふぅ～、調子に乗るなっつうの……なのは、平気か？」

なのは「あ、うん。大丈夫だよ／／／／／／」

そう聞かれて無事なのを伝える。だが、今なのはにとってそれよりも重要なものがあった。

なのは（か、かかか彼女！？わ、わわ私が／／／／／！？）

そう、先程のカインの発言によりなのはは非常にドキドキしていた。

なのは「カ、カイン君……さっき言ってたのって……？」

カイン「ん？ああ、あれは、あいつ等を納得させる為の言っただけだ」

なのは「そ、そうなんだ……」

あっさりと言われて少しがっかりする。

カイン「それに、お～い！！ヴィヴィオ！！」

ヴィヴィオ「カインパパ、如何したの？」

ヴィヴィオがトコトコと此方にやって来た。そのヴィヴィオの頭をカインは優しく撫でる。

それが気持ち良いのか目を細めてされるがままのヴィヴィオ。

カイン「彼女って言うよりは…保護者、かそんなとこに見えるだろ？ヴィヴィオ、これからは俺達からあまり離れないようにな？」

ヴィヴィオ「は～い！！」

笑顔で答えてカインの手を握るヴィヴィオ。そして、反対の手でなのはの手もしっかりと握った。

カイン「よし、これで大丈夫だな！！」

なのは「う、うん／／／／／／／／」

この時間だけでもそういう役になれるなら別に良いかなっとなのはも思い三人は楽しく会話をしながら散歩をしているのだった。それは傍から見ればとても仲の良い家族に見えた。

ヴィータ「それじゃあ、バルドはロイド達と会うまでずっとガルドと二人で旅してたってのか？」

バルド「まあ、そんなとこだ。まっ、此処に戻って来たのもホント十年ぶりだ……」

ヴィータとバルドがそう会話しながら向かうのは飲料水を売ってる屋台の様な所だ。

バルドが飲み物を買いに行く途中同じ目的のヴィータとバッタリ会いそのまま一緒に行く事にした為に今の珍しい組み合わせとなっている。

飲み物を買いバルドはフェイトの下に戻る。ヴィータも方向が同じな為一緒である。

すると、前方で先程なのはをナンパしてた男どもが性懲りも無く今度はフェイトを口説いていた。

まあ、十人中十人が振り向くレベルのフェイトさんを見たら口説きたくなるのが男の性（？）何ですかね？それに困った感じで応対しているフェイトだがバルドの姿を視界に捉えて満面の笑みでこっちに来て腕に自分の腕を絡めた。

フェイト「バルド、何処に行ってたの？探したよ～。あ、ごめんなさい。この人が私のかｒ――」

ヴィータ「ズズゥ～～」↑バルドの隣でジュースを飲んでいる。

フェイト「……夫です！！」

バルド「っ！？！？」

ヴィータ「ブウゥ～～！？」↑ジュースを吹く

馬鹿一同「？（゜Д゜；）っ！！？」

馬鹿共を上手く追い返した後フェイトは謝って来た。

フェイト「ごめんね。あの時はこう言わないといけないと思って……」

バルド「まあ、俺なんかでよければ盾として使ってくれ」

ヴィータ「あたしは勘弁してほしいんだが……？」

一人納得のいっていないヴィータであった……。

そして、こちらはエリオとキャロ。二人とも仲良く並んで浜辺を歩いていると前方に人だかりが……。

キャロ「あれ？人だかりが出来てるよ？」

エリオ「そうだね。一体何かあったのかな？」

二人もそこに行き人垣を掻き分けていくと、その中心にロイドがいた。
何やらやってしまったという様に額に手を当てて溜息を吐いていた。

エリオ「ロイドさん、この人だかりはなんですか？」

ロイド「エリオ？それにキャロまで…。いや……まあ、その…あれだ」

歯切れの悪そうな顔をして視線を移す。二人もその視線の先を見ると何やら海岸にある大きな岩に大きな穴が開いていた。何処となく人の形に見える……

エリオ「えっ…と……何ですか……あれ？」

ロイド「……コレットだ…」

キャロ「コ、コレットさん……ですか？」

ロイド「ああ、はしゃぎ過ぎて前見なかった所為で転んでまた作りやがった……」

それにしても見事な穴である。二人はそう思った。なんせ、人の形にくっきりと穴が開いており髪型まで分かってしまうほどだ……。

観光客「なあ、さっきの凄い音がしたよな……」

観光客「それよりも、大丈夫なのかあの娘…」

観光客「救急車、呼んだ方が良いかな？」

周囲にいる人達が口々にそう言っているのが聞こえて来た。これは……拙いのでは？っと思ったその時……

コレット「えへへ～…またやっちゃった／／／／／／」

観光客一同「無傷っ　。。？（　Д　；）！！？！！？」

その穴からひょっこりとコレットが顔を出す。怪我は一切しておらず少しだけ額が赤いだけだった。
そんなコレットにロイドは近づいて軽く額を小突く。

ロイド「ったく、お前はよく転ぶんだから前はちゃんと見て歩けよ」

コレット「えへへ、ごめんね／／／／／」

可愛らしく舌をちょっと出して反省するコレット。それをロイドはしょうがないなっと言って笑っている。普段見てる人ならではの反応だが…周囲の人達には最早怪奇現象にしか見えない。

だって…ねえ、岩に激しく倒れて怪我せず寧ろそれに大穴開けるなんて何処のドッキリよ?
そんな少女を見て驚かずに平然と会話してる彼氏（?）にも驚きだと思うが……。

観光客「あ、あれ…人間か?」

観光客「日本七不思議?」

観光客「ナニコノチート?」

ロイド「にしても……なんでこんなに周りは騒いでんだ?」

エ・キ「「それはコレットさんの所為だと思います……」」

コレット「？？？？？？」

周囲の騒がしさを疑問に思っているロイドにツッコミを入れコレットの方も何の事だか分かんないといった風に首を傾げる。

そのまま、ロイドはコレット、丁度お昼に近いのでエリオ、キャロを引き連れその場を去っていった。

後にそこは奇跡の岩と呼ばれそれにお願いすると願いが叶うと噂されこの海水浴場は大繁盛する事になるのだがそれはまた後の話である……。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

昼食を摂り日が沈み始めるまで存分に遊んだあと、宿泊先の旅館に行き夕食を摂り、今皆は温泉に浸かっている。

なのは「うぅ～、ちょっとヒリヒリするかも……」

フェイト「そう言えば日焼け止めとか塗ってなかったね……」

まあ、塗らずとも色白なお陰でそんなに日焼けしてませんがね～。

はやて「それにしても……二人とも、また大きくなったんとちゃう？」

そう言って二人のタオルで隠し切れていない豊かな二つの膨らみをジッと見る。

身の危険を感じた二人は腕を回してその胸を隠そうとするが寧ろさらに強調させてしまっていた。

はやて「これは……揉み魔たるうちこと八神はやては調査しなければいかんで」

なのは「は、はやてちゃん？きっと気のせい……だよ？」

フェイト「そ、そうだよはやて。き、気のせいだよ……」

はやて「フフフ、騙されへんで？うりゃあああ！！」

瞬時になのはの背後をとって豊かなそれを掴んだ。

なのは「ふにゃあっ／／／／／／／！？」

はやて「な、なんと……ま、また大きくなっとる……」

なのは「あ……ふぅ…んんっ…はやて…ちゃん、やめっ…てぇ…／／／／／」

体を上気させされるがままの状態のなのは。フェイトはその内に逃走を図ろうと思ったのだが……

はやて「おっと、逃がさへんで？」

フェイト「ふえっ！？」

何時の間にか自分の背後を取っているはやてに気付いてビクリッとする。

はやては温泉とか水場では通常の三倍の速度を得るとでも言うのだろうか！？

そして、なのは同様フェイトのその福与かなそれを鷲掴みにし測定開始。

はやて「なんと……こっちもかいな……」

フェイト「んっ…ちょっ…だめ…だって、はやて…ああ、んん、ふぅ…やぁ…／／／／／／」

シグナム「あ、主はやて…それくらいにしておいた方が……」

はやて「そう言えば、シグナムのも最近は測ってへんかったな……？」

（？∀？）キラーンと目を光らせシグナムを見る。歴戦の戦士たるシグナムすら身の危険を感じ身震いする。

はやて「測定……開始やぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

シグナム「なっ！あ、主！？」

向こうに行ってドタバタする。そして、開放されて息切れ状態の二人それを見て苦笑いしてるキャロとコレット。

コレット「はやてって何時もあんな感じなの？」

なのは「にゃははは……うん、でも悪気は無いんだよ……」

コレット「やっぱり、大きい方が良いのかな……？」

キャロ「エリオくんも、大きい方が良いのかな……？」

そう言って自身を見降ろす。見事なまでのまないｔ…ゲフンゲフン！！控えめな胸を見ている。

はやて「ついでや、シャマルも、アリサちゃんもすずかちゃんも皆、調べたる！！」

アリサ「ちょっ！？やめなさいよ！！」

スバル「うわわわ！？はやて部隊長！？」

ティファ「身の危険を察知……戦闘態勢に入ります……」ガチャンッ！！

セフィリア「ティファ！？此処お風呂、お風呂！！そんな物騒な物しまって、しまって！！」

最早カオス化し始めている女性陣の風呂場であった……。

隣で何やらギャーギャー言ってる声がする。男性陣側はというと、特に何かしているって言う訳でもなくただ、のんびりと寛いでいた。…と言うより…

クラウド「……」

ガルド「……」

バルド「……」

ザフィーラ「……」↑人の姿をしています

エリオ「……えっと」

会話が殆ど無くて非常に困っていた。

シリウス「なんか、こう……潤いがないね！！」

ロイド「何だよ潤いって？」

シリウス「なんか……むさい…」

ロイド「……時々、お前ってゼロスみたいなこと言うよな？」

エリオ「ゼロス？」

ロイド「ああ、俺の昔の仲間さ。すんげー女誑しで始めて会った時も一緒に旅してたコレット達を口説いたんだよ。まあ、根は良い奴なんだけどな」

懐かしそうに思い出に耽る様な目を空に向ける。

それと同時刻に何処かのアホ神子はくしゃみをしていた。

ロイド「二年位も経ったんだな……あいつら今何してんのかな……

？」

エリオ「ロイドさんはその人達とどんな旅をしたんですか？」

ザフィーラ「うむ、それは是非とも聞いてみたいな」

ロイド「うおっ！？ザフィーラが喋った！！」

非常に失礼な発言だが全く気にしないザフィーラ、流石です……。

ロイド「う～ん、そうだな……まあ、簡単に話すけどいいか？」

エリオ「はい！！」

そして、少しの間ロイド達の旅で盛り上がった。

バルド「……Ｚｚｚｚｚｚ」

ガルド「……Ｚｚｚｚｚｚ」

クラウド「……寝てるし」

一部、風呂で爆睡している者もいたが……。

――――――――――――――――――――――――――――――――

当然のことながら男どもの方が早く出て、暫く待っていると顔が真っ赤になっているなのは達と何故か落ち込んでいるはやてが出て来た。

シリウス「随分と盛り上がっていたみたいだったけど……如何したの？」

フェイト「えっ！？な、何でもないよ／／／／／／！！ねっ、皆！！」

アリサ「え、えええっ。特に何にも無いわよ／／／／／／！！」

ティアナ「もう二度とあんな事はごめんだわ……／／／／／／」

ヴィヴィオ「なのはママ何か楽しそうだったね？」

なのは「にゃっ／／／！？え～っと、ヴィヴィオはまだ早いから交ざっちゃ駄目だよ？」

口々に言うなのは達を見て首を傾げる男一同、まあ、世の中知らなくても良い事だってある。

はやて「何故や……何故うちだけ……コレットちゃんにすら僅差で負けるとは……ｏｒｚ」

一人ヤックデカルチャーになってる人がいるが……。そして、暫く色々と談笑して時刻は２３時を回ろうとしていた。

クラウド「そういえば、部屋割り決めてるのか？」

ガルド「それは確かはやてが割り振っていた気がするが、如何なんだはやて？」

はやて「あ、それならもう決めてるで。ほい、これや」

クラウドが自分達が休む部屋を聞きはやては割り振られている部屋の紙を見せる。

なのはも覗こうとしたその時一瞬ニヤリと笑うアリサとすずかが見えた様な気がした。

そこには……

３０２号室　アリサ、すずか

３０３号室　エリオ、キャロ

３０４号室　なのは、カイン、ヴィヴィオ

３０５号室　フェイト、バルド

・　・　・

という風に書かれている。

フェイト「えっ！？バルドと同室！？」

ヴィヴィオ「わ～い！！カインパパも一緒だ～！！」

なのは（か、カイン君と一緒／／／／／／／／）

っと反応は様々、そして、

３０６号室　はやて、シリウス

３０７号室　シャマル、ザフィーラ

３０８号室　シグナム、ヴィータ、リインフォース

・　・

・

とも書かれていた。

はやて「はっ!?シリウス君と同室!?」

ティファ「はやてって結構行動派なんだ……」

はやて「ええっ!?ち、違うで、うちは書いてへんよ!?」

なのは「え?それじゃあ誰が……?」

頭に?????が出てきて疑問に思う皆だが……

アリサ「ニヤニヤニヤニヤ（。∀。）」

すずか「ニコニコニコニコ（´∀`）」

この二人だけ何故かしてやったりと言う風な顔をしているのに誰も気づかなかった。

シリウス「まあ、いいじゃん。と言う訳で行こうかはやて!!」

はやて「む、無理無理!!そんなん無理やて!!」

シリウス「自分で書いておきながら何言ってのさ?それじゃあ、レッツゴー!!」

何時の間にか脇に抱えられて連れて行かれるはやて。ジタバタしてるがまあ、無駄な事である。

はやて「は・な・せ・や〜〜〜!!!!」

シリウス「ハ〜ハッハッハッハッハ!!それは無理と言うものでござるよ〜!!」

と言う訳で、皆、決められた部屋に行き寝る事にした。

---

ヴィヴィオ「パパと一緒〜♪」

カイン「ほら、良い子は早く寝ろ」

此処はなのは達の割り振られた部屋、そこでカインの布団に潜り込んでその大きな胸板に顔を埋めて幸せそうにしているヴィヴィオと

やれやれといった風な顔をしているカイン。

なのは（うぅ～ちょっと羨ましいかも……）

それを少しいいなぁと思いながら見ているなのは。

カイン「ったく、これじゃあ朝になっちまうっつの。おい、なのはちょっとこっちに来てくれ」

なのは「ふえ？…うん」

カインの呼びかけになのはが近づくとヴィヴィオをあやしてる手とは反対の手でなのはを抱き寄せてヴィヴィオを挟む様にした。

カイン「ほら、なのはも一緒にいるから早く寝ろ」

ヴィヴィオ「わーい、なのはママも一緒♪うん！おやすみママ、パパ」

そう言うと目を閉じる。直ぐに寝息が聞こえ始め、予想以上に楽しんで疲れたのだという事が分かった。

カイン「ったく、ようやく寝やがった。俺達も寝るか、おやすみな

のは」

なのは「う、うん。おやすみカイン君／／／／／／／／」

カインも直ぐに寝息を立てる。しかし、逆になのはが眠れなくなってしまった。

自分の背に手を回したままでありその手からカインの温もりを感じる事ができ目の前にはカインの寝顔があった。

ヴィヴィオがカインの胸にしがみ付く形で寝ている為、予想以上に顔が近く少し顔を近づければキスできそうだった。

なのは（うぅ／／／／／／なんか恥ずかしくなってきたよ……で、でもこれはこれでいいかも／／／／／／／）

そう思い、目を閉じると意外にも早くなのはも眠気が襲ってきて眠りに就くのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

そして此方はフェイトとバルドの部屋。

フェイトは既に寝息を立てて眠っているが、バルドは起きていて窓際に寄りかかって夜空を眺めていた。

バルド「……」

ケルベロス「よぉ、相棒。嬢ちゃんと同室で嬉しいかい？ウヒャヒャヒャ」

バハムート「黙りなさい駄犬。フェイトさんが起きてしまうでしょ？」

ケルベロス「まあ、今はぐっすり眠ってるし起きないだろうよ。それよりも相棒…大丈夫なのか？」

そう答えているものの、声を低くしてそう問いかける。

バルド「……何がだ？」

ケルベロス「恍（とぼ）けるなって。相棒、また魔力量が減っただろ？」

バハムート「まさか、若！？」

バルド「心配すんな、特に影響は無い」

ケルベロス「やっぱしんどそうに見えるが……やっぱりあれした方が良いんじゃねぇか？あれ以来ずっとしてないから力回復して無いんだろ？」

バルド「問題ないと言ってるだろ。それにあまり騒ぐな、フェイトが起きる」

そう言って、フェイトを見るが此方に背を向けた状態で寝ている為良く分からない。
まあ、寝てると判断する事にした。

―――――――――――――――――――――――――――――――――

フェイト　ＳＩＤＥ

ケルベロス「まあ、今はぐっすり眠ってるし起きないだろうよ。それよりも、相棒…大丈夫なのか？」

少し前に私は話声で目を覚ましていた。けど、ケルベロスの声が普段よりも深刻そうな風に聞こえたから動かないで耳を立ててた。

バルド「……何がだ？」

ケルベロス「恍（とぼ）けるなって。相棒、また魔力量が減っただろ？」

バルドの魔力がまた減った？一体如何いう事？……バルドから感じられる魔力は何時もと変わらないし彼自身にも何の異常も感じられなかった。

ケルベロス［やっぱしんどそうに見えるが……やっぱりあれした方が良いんじゃねぇか？あれ以来ずっとしてないから力回復して無いんだろ？］

バルド「問題ないと言ってるだろ。それにあまり騒ぐな、フェイトが起きる」

あれとは何だろうか？と思っていた時自分の名前が出て来たからビックリしたけど、気付かれなかったみたい……。それにしてもあれって何のことだろう？

バルド「夜が来る限り俺は大丈夫だ」

ケルベロス［っけ、何言ってやがる。少しでも当り所が悪けりゃ即死は間違いない状態のくせによくもまあ平然としてられるなあ？］

バハムート［まさか、若!!如何してそこまで……］

ケルベロスの機嫌が凄く悪い。それに、バハムートも凄く心配してるような声がする。

ケルベロス「そんな弱って嬢ちゃんを守れると思ってんのかよ？」

バルド「問題無い、そこいらにいる雑魚には後れは取らねえよ」

ケルベロス「んじゃあ聞くが……使徒全員相手にして生き残れるのか？」

バルド「……」

ケルベロス「っけ！即答できない時点で譲ちゃんなんか守れるかよ！！嬢ちゃんに会う少し前に会ったあいつとの約束を反故する気か、ああ？」

約束？約束って誰との？今言った事の真意が聞きたい……けど、今起きて聞いたらその先の事が分からなくなる。バルドの事をもっと知りたい…だから、今はこの会話をしっかりと聞いておこう。

ケルベロス「もうあいつは死んだんだ！何時まであいつとの約束を守っている気だコラ？そんな事してたらまた、守りたい者を失うぞ！！」

バルド「っ！！！」

バハムート「ケルベロス！！貴様、若に対してその発言は失礼ですよ！訂正しなさい！！」

ケルベロス「俺よりも後に相棒に付いてきた奴は黙ってろ、答えろよ相棒……死んだ人間の約束すら守って生きてる奴の約束も守れると思ってんのか！！」

バルド「黙れっ！！」

ケルベロスが何時に無く感情を激しくあらわしてる。そして、バルドの雰囲気も変わった。凄い刺々した感覚が全身を駆け抜けて来た……。そして、何がを握りしめるような音が聞こえてくる。怖い……バルドが怖いと…一瞬だけ思った。

バルド「約束したものは全て守る……それが俺の答えだ。分かったか？」

ケルベロス「テ、テメー、そうして今度は嬢ちゃんが大変な事になったら如何すんだよ！？あの時みたいに間に合わなくなっても良いのかよ！！」

バルド「くっ……！！」

バハムート「ケルベロス！！あの時は若の所為ではないでしょう！！あれは、傲慢な人間共が……」

バルド「いや、あれは……俺の所為だ……」

バルドの声が急に低くなった。それと同時にさっきまでの刺々しい感覚も消えていく。

代わりに陰鬱とした感覚が伝わって来た。

バルド「あれは、俺の所為だ……。あの時、無理にでももっと早くあの世界から連れ出してれば良かった……」

バハムート［若……］

何が起きたの？貴方がそこまでして守りたかったのって一体何？知りたい……もっともっと知りたい。けど、これ以上聞いたらもう後戻りは出来なくなる。そう、私の中の何かが告げている。けど、私は知りたいんだ。好きな人の……大切な人の過去を…。隠れて聞いてるのが少し罪悪感を感じるけど……。

バルド「……また、この季節が来たな……」

ケルベロス［ああ、また来たぜ。この季節がな……］

バルド「夏は嫌いだ……。得る物が少なすぎて失う物が多い……」

ケルベロス［まだ、引き摺ってんのか？］

バルド「まだ……？いや、違うな。これは永遠だ。永遠に背負い続ける俺の罪だ」

バハムート［ですが……あの時は、若の所為では……］

バルド「いいや、俺が悪いんだ。あの時もっと早く……いや、あの時待たずに迎えに行けば…きっと、あいつは……」

ケルベロス［……嬢ちゃんは如何すんだよ？］

バハムート［ケルベロス？］

ケルベロス［そうやって……過去に逃げて…今此処にいる嬢ちゃんを重ねない様にして遠くで見守って…アホじゃねえの］

バルド「そうかもしれないな……けど、これしか出来ない。あいつとの約束を守るにはこれしかない……」

ケルベロス［そうして最後は力尽きて死ぬってか？冗談じゃねえ、そんなのあいつが望んでるとでも思うか？］

バルド「あいつが望んでなくても俺自身が死を望んでる」

バルドが……死ぬ？嫌だ……そんなの嫌だ！！バルドの死ぬ所なんて見たくない！！死ぬことを望むだなんて……おかしい、おかしいよ！！

そう思っていたらバルドが少し身じろぎしてまた空を見上げている様な雰囲気を感じ取った。

さり気無く向きを変えて目を薄く開けてみる。そこには、月夜の明かりでバルドが光っている様に見えた。とっても……綺麗で、心臓がドキドキする位に恰好良くて寝たふりを忘れそうになりそうなほどだった。そして、この日一番忘れる事のない言葉を彼は紡いだ。

バルド「……お前は、そこで見ているのか？……フィフ」

フィフ……？それは誰？貴方にとってその人はどんな人なの？
沢山の疑問が浮かんでくる。その時、バルドが動いた音が聞こえて慌てて寝たふりを続ける。
少し、卑怯な自分が嫌いになる……。スッと頭の上に何かが乗った。暖かい大きな感覚、これはきっと彼の手だ。撫でられるととても嬉しい。それと同時に心臓もドキドキと音を速める。

バルド「フェイト……お前の事、俺は絶対に守って見せる」

その優しい声が聞こえて手が離れた。そして、彼が布団に潜る音が聞こえた。
暫くして彼を見て見る。スヤスヤと眠っている。少し近づいて顔に掛かっている髪を少し払ってあげる。それでも起きないところをみると深く眠っているみたい。そんな眠ってる彼に小さく宣言をする。

フェイト「私も、もっと強くなるよ。貴方がこれからもずっと生きてくれるように……」

そして、眠ってる彼の額にキスをする。ほんの少し触れる程度のキス。それだけで、体が火照って今にも心臓が爆発しそうだった。慌てて布団に潜って、動悸を抑えようとするけど無理だった。
今日という日は絶対に忘れないと思う……。そう思いつつも目を閉

じて眠れ眠れと強く念じてたら段々思考がまどろんで来て眠れた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

翌朝、はやて達は帰る準備を始め、六課に帰る時間となった。

アリサ「今度は何時来るの？」

なのは「えっと、多分今起きてる事件が終わってからだと思うの」

すずか「それがなんなのかは分からないけど……体に気をつけてね」

はやて「分かってるって、ほな、皆行こうか」

皆が感謝の言葉を二人に言って、そして転送が始まった。

それから少し経ってから六課が大きな戦いに巻き込まれる事はこの時誰も予想だにしていなかった……。

## 第三十話（後書き）

どうです？後半は少しバルドの過去が浮き上がったりしました。そして、徐々にですが彼が弱っていることがフェイトさんが知ることになります。

フェイト「如何してバルドは弱ってるの？それにあれって？」

それは、後々分かりますよ。ただ、その時にはフェイトさんにも選択が迫られますがね…クックック。おっとっと、これ以上は今は言えませんね。

あっ、そういえばタグに書いてありませんが一応この小説のヒロインはなのは達三人娘です。…えっ？今更何言ってんの、そんなのとっくに知ってるだって？

ですよね～ｏｒｚ

フェイト「うぅ～バルドが最後にいってた人の事が気になるよ……」

さて、次回も早く出せるように頑張って執筆します！読者の皆様そして、お気に入り登録して下さった皆様、これからも私、駄作者ことテッテルは頑張りますゆえどうぞよろしくお願いします！！

でわ、これにて……

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第三十一話（前書き）

更新遅れてすいません。一昨日発生した地震でまたもや停電してしまい今日まで電気が復旧しませんでした。
今でも水道が停止中です。

作者は宮城で生息してるのでもろ直撃です…。
震度六強だそうです。まあその辺の事は活動報告にて……

今回は、使徒サイドでと言うより基本エリスやクラレンス、ジークを中心にお送りします。何かエリスとクラレンスが良い子（？）っぽいですが仕様なのでご勘弁を……

# 第三十一話

エリス「ねぇねぇジーク、今日は遊びましょう♪」

ジーク「……断る」

クラレンス「そんな事言わないで、ね♪」

使徒達のいるある空間でジークが鍛錬をしている所に使徒の姉妹が無邪気な顔で近づいてそう聞くとジークはあっさりと断った。

ジーク「すると言っても殺し合いなのだろ？」

エリス「クスクス、そんなんじゃないよ～。ただね、お話したいだけ」

ジーク「話だと？」

クラレンス「うん、そうだよ。お話～♪」

そう言ってニコニコと笑っている。そこでやっと鍛錬を止めて近くに転がっている大理石の柱の一部に腰掛ける。それを了承と受け取

った二人がトコトコと近づいてチョコンとジークの膝に半分ずつ座った。見事なまでにスッポリと収まる。

ジーク「……降りろ」

エリス「クスクス、や～だ♪」

クラレンス「ジークの膝は丁度良いんだも～ん、クスクス♪」

こうなったらいくら言っても絶対に降りないので溜息を吐いて諦めた。

ジーク「それで、何を話せばいいんだ？」

エリス「え～っとね……父親と母親って何なんだと思う？」

ジーク「……は？」

クラレンス「だから、父親と母親って何なんだと思うって聞いたの」

いきなりそう聞かれても困る。ジークも既にその様な事など覚えていない位の年月を生きている。

それに……

エリス「私達って親って言う存在を知らないから如何しても聞きた

かったんだよ～♪」

ジーク「そうか、だが生憎だが……俺には両親というのは存在していない」

エリス「そうなの？」

そうなのだ。彼は生れて直ぐに赤の他人に育てられたのだ。
しかも、まともな教育などされておらず、覚えているとすれば……

ジーク「俺には両親はいなかった。それに、昔の俺は暗殺をする事に特化した戦闘をそいつに叩き込まれていた」

クラレンス「ジークって暗殺業やってたんだ～！」

エリス「今じゃ、想像できないね～♪」

ジーク「そうだな…俺をこんな風にしたのはたった一人の女性だ」

そう言うと姉妹は目を輝かせてジークを見上げて来た。

エリス「なになに、その人ってジークの恋人！？」

クラレンス「教えて教えて～！！」

コイバナとなれば女の子としては非常に興味があるらしい。
しかし、それは勘違いというもの。その剣幕に少し押されながらもジークは説明しておいた。

ジーク「言っておくが、そんな関係ではない。ただの師弟関係だ」

エリス「な～んだつまんないな～」

頬を膨らませて抗議するような仕草をする。
そうは言われても既に過去の事なのだからどうしようもないのだが……と思うが子供にそんな事を言っても言い訳でしかなので口を噤んでいた方が賢明である。

クラレンス「ねえねえ、その人ってまだ生きてるの？」

ジーク「……ああ、今も生きていてくれている。少し、昔と雰囲気が変わってしまっていたがな……」

憂いの混じった微笑を浮かべる。これには二人の使徒も驚いた。まさか、無表情とも言える彼がこんな顔をするなど思ってもいなかった。

ジーク「昔交わした約束すら記憶にないのだ。…だが、生きて出会えただけでも良しとしなければな」

エリス「約束ってな～に？」

ジーク「もし出会ったら、今度こそ決着をつけようと言う約束だ。師と弟子の神聖な戦いの事だ。……っと、話が逸れたな。両親とは何なのかだったな？ふむ……」

逸れ始めた話を無理に戻して考え込む。自分が記憶する中では全くそういう事がなかったが……今度、烈火の騎士にでも聞くべきか？とも考えた。結局、今回は自分が思った事を二人に言って納得して貰おうと思った。

ジーク「両親とは、子供に自身の生き様をその背で語る者だと俺は思うが……いや、これは正確には父親の方か…母親は、その人生で培った作法とかを優しく教えるといったような存在だろうか？」

エリス「優しく……？ん～～～良く分かんない」

ジーク「俺も知らん、ただ……」

一度言葉を区切って片手ずつ二人の頭に手を乗せて髪を梳く様に撫でる。

ジーク「優しさとはこの様なものだと、俺は思う」

撫でられて気持ち良さそうに目を細める姉妹。傍から見れば正しく

娘を見守る父親といった感じだった。

暫く三人で語り合っていると突然、爆発音が鳴り響いた。
一瞬、敵襲か？と思ったが煙がある部屋のある方向から立ち上っているのでその心配は杞憂に終わった。

？？？「ケホケホケホッ！！また失敗か～」

煙の出ている部屋の中から白衣を煤で汚した男性が出て来た。

エリス「クスクス、また失敗したんだね、ディグ」

クラレンス「もう諦めればいいのにクスクス」

ディグと呼ばれた男はその言葉に鋭い視線を送る。

ディグ「研究とはそこで諦めた瞬間に意味などなさないのだよ。理解できない癖に私の趣味に口を挟むな、解体するぞ？」

エリス「キャ～怖い♪ジーク、助けて～クスクス」

クラレンス「解体されちゃうよ～クスクス♪」

ジーク「……ディグ、戦闘でこいつ等にお前が勝てる訳がない。不用意に変な事を言わない方が良いぞ」

ディグ「おやおや、私がこんなガキに負けると？貴様も解体するぞ？」

嫌に喧嘩っ早いこの男は第十一の使徒『ディグ』、日々を研究室に籠って何かをしている生粋の研究者だ。

エリス「クスクス、あなたはジークには勝てないよ♪」

キャッキャッと笑い合う二人。ジークは溜息を吐く。その顔のスレスレを何かが通り過ぎ背後の壁を盛大に破壊した。壁に突き刺さっていたのは魔力で出来た剣だった。それを見もせずにジークはディグを見る。

ディグ「今の溜息は私に対する挑発か！？いいだろう、ならば戦争だ！！」

エリス「クスクス、返り討ちにしてあげる♪」

クラレンス「クスクス、殺っちゃうよ～♪」

ジーク「……はあ」

目の前で狂気の姉妹と永遠の研究者の激しい弾幕が起きている。何時も見る光景だが思わずため息が出てくる。今なら何となくだがフォスティルの気持ちが分からなくないでもない。
周りは穴だらけ流れ弾ならぬ流れ魔法が時々こっちに飛んでくるがそれは盾を出して防御する。

ディグ「今日こそ解体してやるよ、ウヒヒヒヒヒヒヒ！！」

エリス「出来るならどうぞ～クスクス♪」

クラレンス「私達は引き篭もりには負けないよ～♪あれ、引き篭もりってなんて言うんだっけ？」

エリス「クラレンス、それはニートって言うんだよ。あっという事はディグもニートなんだね、クスクス♪」

ディグ「誰がスーパーウルトラ変態駄目駄目大馬鹿究極ニートちゃんだ～～～！！！！！！！！」

素晴らしいまでの言い掛かりである。いや、聞き間違いか？どちらにせよ脱帽する。
火に油、もといガソリンを入れた様に烈火のごとく怒り狂ってるディグ。放たれる弾幕がさらに激しくなっていく。しかし、此処まで激しく暴れると……

？？？「こ～～～～ら～～～～！！！！！」

やって来た……

???「何やってんのよ、このニート研究者が～～～～！！！！！」

ディグ「はまちっ！？」

横から飛んで来た鋭い飛び蹴りがディグを捉え、自分の研究室に吹っ飛んだ。
地面に着地したその人物は腕を組んで仁王立ちしている。

ディグ「何しやがる、このｙ「いいから、さっさと壊した所を直せボケが！！」ぶぎゅるっ！？」

???「ったく、それとコソコソ逃げようとしてるそこの二人待ちなさい」

姉妹「ビクッ！！」

アリスとクラレンスは体を震わせ振り向くとそこには阿修羅の様な形相の者が見降ろしていた。

???「アンタ達言った筈よね？此処で暴れるんじゃない、って。
少しＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＩが必要なのかしら？」

姉妹「ガクガクビクビク（（（（ ゜Д ゜；））））」

ジーク「……パオラ、少し待て」

パオラと呼ばれた女性が振り向いた。彼女の名は第三の使徒『パオラ』、他の使徒たち曰く美人だが怒らせると一番怖い鬼おｎ「ああん？」……すんません、何でもないっす…ｏｒｚ
その隙にトテトテとジークに駆け寄ってその足にしがみ付く二人。

エリス「ジークぅぅぅぅ！！」

クラレンス「怖いよ～～～パオラが怖いよぉぉ！！」

パオラ「あんですって～～～！！」

ジーク「落ち着け、この二人は何もしてないぞ」

パオラ「あら、そうなの？」

キョトンとした顔をして二人に向けていた怒りをあっさりと鎮める。

ジーク「二人も暴れてはいたがその攻撃は全てディグが撃ち落としていた。実質この子達は何も壊してはいない。まあ、ディグを挑発して遊んでいたのは確かだがな」

パオラ「ふ～ん、まっそんな事如何だっていいわ。二人ともお仕置

きが必要なのは変わりないしね」

エリス「やだよ～！尻叩きはいや～～！！」

クラレンス「ごめんなさい！！もうしないから！！」

ジーク「こいつ等もこう言ってる。今回は勘弁してやれ」

パオラ「はあ、分かったわよ。それならジーク、この二人の処分はアンタに任せるわ。私はあの馬鹿に片付けをちゃんとさせてくるわ」

ディグ「誰が馬鹿だと、この鬼おｎ「口じゃなくて手を動かせって言ってだろ、この薄ノロ馬鹿が！！」ベブラッ！？」

遠くで抗議の声を上げたディグに一瞬で近づき回し蹴りを打ち込み壁にぶっ飛ばした。

ジーク（一番暴れているのはパオラではないのか？）

パオラ「何か言ったかしらジーク？」

ジーク「い、いや……何も言っていないが？」

心を読まれそうだった気がするのでジークはそそくさとエリスとクラレンスを引き連れ逃げた。

ディグ「くっそ～なんで私だけこんな事しなければならんのだ！？」

パオラ「そりゃ、アンタが此処まで壊したからでしょ！……それで、まだあの研究を続けてんの？」

ディグ「当たり前だ！！あれを完成させた時こそ私は永遠の力を手に出来る！」

パオラ「ホントにそんな存在がいるのかしらね？第一、私達は文献でしか知らないのよ？」

ディグ「だからこそ解明のし甲斐があるというものだ。あと一歩だ、あと一歩で手に入る…そう…闇の眷族『イモータル』の力が！！」

何処か陶酔した感じで言うディグを小馬鹿にするように見下すパオラ。

その存在は、絶対なる者にして永遠の命を持つ者『イモータル』。

嘗て自分達の主が戦って敗北したと言う恐るべき敵。だが、その存在は自分達は見た事がない。

それ程の力を持った者がいるのなら何故世界を全て支配しようとしないのか。その気になれば銀河すら手中に収める力があると言うのに…いや、既に手中にあるのかもしれないが……故にディグはその力を手に入れたいと考えているのだろうが……

パオラ（触りし神の領域にこいつはどんな世界（もの）を見るのかしらね？不用意に近づいたが為に余計な神（もの）の逆鱗に触れなければいいのだけれど……まっ、その時はこいつを切り捨てればいいわね）

触らぬ神に祟りなし、こいつは如何なるのか見物だと冷徹に考えるパオラだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

エリスとクラレンスを連れてジークはミッドに堂々と転移した。

エリス「ふぅ～助かったよジーク」

クラレンス「ありがとう～♪」

ジーク「………はあ～」

クリクリした瞳で笑いかけてくる二人を見て注意をする事も出来ず溜息を吐く。

エリス「あれ？此処ってこの前に来た街だね？」

クラレンス「また暴れても良いの？」

ジーク「……駄目だ」

クラレンス「えぇ～何でさ～！！」

ジーク「もし暴れて見ろ、その時はパオラと一緒にお仕置きするからな？」

エリス「うっ……それは嫌だよ～！それなら我慢する……」

渋々といった感じで二人も理解してくれたようだ。
ジークは歩きだしその後ろをトコトコと二人も付いて行く。

エリス「ねえねえ、ジークは何処に行くの？」

ジーク「……公園だ」

口数少なく語り歩き続けるが一つの店の前で止まる。
そして、二人を一度その場で待たせてその店内に入る。
暫くして出て来たジークの手には御揃いの麦わら帽子があった。

ジーク「ほら……」

エリス「むきゅ！」

クラレンス「ふわっ！」

その麦わら帽子を二人の頭に雑に被せた。見事にサイズがピッタリである。
二人の髪は赤と白に半分ずつ色が分かれており非常に目立つそれを帽子で隠せば服装はフリルのついたロリータな感じの服なので何処かの令嬢に見えなくもない。
ジーク「お前達の髪は目立つ、それでも被って隠していろ」
姉妹「……ありがとう♪」
年相応な笑顔でジークを見上げて礼を述べる。それを一瞥した後さっさと公園へ向けて歩きだす。
その後を二人も追い掛けるのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――

公園に一人の女性がやって来た。ピンクの髪を風に棚引かせて歩くその姿は見る者によっては目が自然と移ってしまうだろう。
彼女、シグナムは最近はある事で悩んでおり此処に一度は来るのが日課になってしまい、今日もこの場にやって来たが何時もはいない人がベンチに座っていた。ただ……

ジーク「ＺＺＺＺｚｚｚｚｚ……」

エリス「きゃっきゃっ♪」

クラレンス「クスクス♪」

その寝ているだろう者の顔に木の枝や鳩の羽をくっ付けたりして遊んでいる者は誰なのだろうか？
しかし、もう一度会っておきたい者が何ともタイミング良く居る。
という訳でシグナムは話しかけてみた。

シグナム「今日は来ていたのか、ジーク」

ジーク「……烈火の騎士か…」

何時から起きていたのか話しかけると返答が返って来た。
目を開けて自分の顔一杯に付いている枝や羽を落とした。

エリス「お姉さんはだ～れ？」

クラレンス「ジークの知り合い？」

ジーク「……ああ、そうだな。また会ったな」

シグナム「そうだな。……その子達は？」

ジーク「……ああ、そうか。今は帽子を被っているから分からんか？エリス、クラレンス挨拶しろ」

エリス「第四の使徒エリスと申します、クスクス♪」

クラレンス「第五の使徒クラレンスと申します、クスクス♪」

スカートの端を手で掴んで行儀良くお辞儀をする。とても作法のなっている挨拶を見て少し唖然としていたが直ぐに前回ミッドで暴れた使徒だと思いだし、咄嗟にレヴァンテインを構えてしまった。それを見てエリスとクラレンスは気分を害した訳でもなく鈴の音が鳴る様なコロコロとした笑い声を出す。

エリス「クスクス、お姉さんは管理局の人だね？」

クラレンス「ジーク、この人殺しても良いのかな？」

シグナム「っ！？」

逆に敵の一人がノコノコ現れた事が嬉しいのか一瞬にしてシグナムの喉元に伸縮剣『邪邪宇摩』をあてるクラレンスと背後に回って背中に同じく伸縮剣『若若宇摩』の切っ先を突き立てるエリス。まさか、自分の背後と喉元を一瞬で捉えられるなど想像だにしていなかった。

ジーク「二人とも止めろ。この者は俺の獲物だ」

エリス「ふ～んそうなんだ」

クラレンス「じゃあ、仕方がないね」

あっさりと納得して得物を消し座っているジークの膝の上にチョコンと座った。

ジーク「……降りろ」

エリス「クスクス、や～だ♪」

クラレンス「ジークの膝は丁度良いんだも～ん座り心地は最高だよ♪」

ジーク「……はあ、好きにしろ」

姉妹「やった～♪」

ジーク「……烈火の騎士、そんな所で立ってないで座ったら如何だ？」

シグナム「あ、ああ……」

ジークからの了承も得た事で二人はニコニコとした表情で座っている。

そして、ジークに促されシグナムもその隣に座る。

ジーク「……」

シグナム「……」

しかし、特に話題となるものも無い所為か終始無言の二人。

ジーク「烈火の騎士よ一つ聞きたい事がある」

シグナム「なんだ？」

ジーク「両親とは何なのだ？」

シグナム「……は？」

突然の問いに首を傾げる。両親？行き成りなぜそのような事を聞くのだろうか？

困惑しているシグナムを見て掻い摘んで説明をする事にした。

シグナム「そうか……この二人は」

ジーク「元々親を知らん。それで気になったのだろう」

エリスとクラレンスを改めて見る。今の二人はニコニコとしてジークの膝の上で日向ぼっこを楽しんでおりとても幸せそうである。これが、前回襲ってきた使徒で残虐な行為を行ったとは想像だにできない。

シグナム「しかし、私に聞いても私自身良く分からないのだが？私もその様な記憶は既に消えているのだぞ？」

ジーク「やはり、そうか……」

予想はしていたらしくそこまで落胆はしている様子は無い。両親か……とシグナムは考える。両親と言ってもそれは数多だろう、数えれば数えるだけの回答が出てくるだろう。
故に答えなど何処にもないとシグナムは口にはせずにそう思う。
その時、エリスとクラレンスの二人のお腹が同時に鳴った。

エリス「ねえねえ、ジークお腹が空いてきたよ～」

クラレンス「何か食べようよ～」

ジーク「……もうそんな時間か……」

シグナム「な、なら、いい所があるぞ」

このままでは三人は帰ってしまうと思ったシグナムは咄嗟にその様な事を口にした。

それを聞いて目を輝かせる二人。

エリス「ホント！？何処何処！？」

シグナム「この近くだ。……行って、みるか？」

クラレンス「うん！行く行く！！」

シグナム「ジークも……如何だ？」

恐る恐る聞いてみる。ジークは少し思案顔になったが直ぐに肯定する様に頷いた。
それを了承と受け取ったシグナムは三人を近くのレストランに案内したのだった。

---

エリス「ご飯♪ご飯♪」

クラレンス「クスクス、楽しみだね姉さん♪」

テーブルに着いてメニューから料理を選んで注文した後今か今かと

楽しそうに待っている二人、その光景を他の客が見ておりとても朗らかな雰囲気に思わず頬が緩んだ。
その二人が自分達の街を襲撃した者たちとも知らずに……。

まっ、知らぬが仏っという言葉もある。真実を知らなければ平和なのだ。

尤も、シグナムの方は、バレるのではないか？バレたら主達にも迷惑がかかると言うより立場が危うくなるその事で内心心臓がバクバクと音を立てているが……。

店員「お待たせしました。ハンバーグセットのお待ちのお客様は？」

クラレンス「は～い！！」

エリス「クスクス、もうクラレンス、大人げないよ？」

元気良く挨拶するクラレンスをエリスが笑う。元気な声に店員も思わず微笑みエリスとクラレンスの前にハンバーグセットを置いて一度立ち去る。しかし、エリス達は料理には手を付けずにジッと待っている。

シグナム「如何したのだ？食べても良いのだぞ？」

エリス「クスクス、二人の料理が来るまで待ってるよ」

クラレンス「クスクス、皆で食べた方が美味しいもんね♪」

その言葉にシグナムはおろかジークすら驚いた。
少し待っていると二人の料理も来て食べ始めた。

シグナム（それにしても……）

料理を食べながらシグナムは考えていた。まさか自分が使徒の者とこうしてレストランで食べているなんて想像もしていなかった。子供ながら圧倒的な力を持っているエリスとクラレンス、自分の過去を知っている蒼火の騎士ジーク、この三人は恐らく使徒の中でも少し特殊なのかもしれない。
何故そう思うのかというと自分達は使徒にとっては敵である筈だ、それなのにその敵にこうまでして普通に接してくるなどまずあり得ないだろう。いや、もしかすれば自分達など取るに足らない敵と認識しているのかもしれない。だが、エリスとクラレンスの笑顔は如何見ても純粋なものだ、前回人を殺した事など微塵も感じさせない。

シグナムの視線に気付いたクラレンスが頬に一杯料理を詰め込んだままニコニコと笑う。
その口の周りにはソースが付いていた。

エリス「クスクス、クラレンス口の周りがソースだらけだよ」

シグナム「全く…ほら、ジッとしていろ」

クラレンス「む～～」

シグナムがハンカチでそれを拭き取ってあげた。
それに丁寧な礼を述べるクラレンス。それを見てクスクスと鈴の音の様な声で笑うエリス。
そこに先程の店員がやって来た。

店員「お待たせしました。フルーツパフェです」

二つのパフェがエリスとクラレンスの前に置かれた。

シグナム「私達は頼んでいないのだが？」

店員「只今ファミリーキャンペーン期間なのでご家族のお子様には無料で出しております」

クラレンス「家族……？」

エリス「クスクス、意外と良いかもね？」

キョトンとしていたが直ぐにエリスとクラレンスは笑った。
ジークはそれには何も言わずフッと微笑しただけで何も言わなかった。
流石にシグナムも家族ではないと言う事を伝えて下げさせるなんて無粋な真似はしたくは無いと思い、店員に礼を述べるだけにしておいた。

そして、食事を終えて会計をする時にジークが自分が払うと言ってそれをシグナムが私が払うと言い反対し暫しの口論になりそれをエリスとクラレンスがクスクスと笑っていた。

結局のところシグナムに押し負け落ち込んだジークが其処にいた。

---

再び公園に戻った四人は少しだけ会話をしてジークが帰る事を伝える。

ジーク「今日は此処までだ。我々は帰るとする」

シグナム「そうか……」

少し残念そうな顔をしたシグナム。実際のところ今日は凄く充実した時間を過ごせたと思う。

そこにエリスとクラレンスがシグナムの前に来る。

エリス「ねえねえ、烈火の騎士さん」

シグナム「なんだ、それと私の名はシグナムだ。その名で呼ぶのは少し……」

クラレンス「クスクス、そうだね～それよりもちょっとしゃがんでくれないかな？」

シグナム「あ、ああ……」

言わるがままにしゃがむとエリスとクラレンスはその胸に飛び込む様な感じで抱き着いてきた。
その行動に驚き少しふらついたが堪える。そして、自身に抱き着いている二人を見ると二人は顔をその胸に埋める様にして幸せそうな顔をしていた。

エリス「暖か～い、クスクス♪」

クラレンス「これが、母親って言う存在の感触なのかな？クスクス♪」

暫くして離れてジークの傍に駆け寄り此方を見る。
そして、スカートの端と掴み軽く持ち上げてお辞儀する上品な仕草を見せる。

エリス「今日は楽しかったよ、ありがとうねシグナム♪」

クラレンス「そんなシグナムに少しだけ良い事を教えるね。近々私達の一員がある世界に御珠を回収に行きま～す♪」

シグナム「なにっ！？」

エリス「それが何処に世界かは秘密だけど、ヒントは沢山の巨大な生き物が生きている大自然の世界だよ、クスクス♪」

ジーク「……行くぞ、お前達」

姉妹「は～い！！」

三人の足元に魔法陣が現れ徐々に体が消え始める。

シグナム「ま、待て！まだ話は……！！」

エリス「クスクス、それじゃあまたねシグナム♪」

クラレンス「あ～あ、私達の母親がシグナムだったら良かったのにね～それじゃあ、またねクスクス♪」

最後にそんな言葉を言ってクスクスと二人が互いの顔を見て笑いそれを最後に二人は先に転移した。

ジーク「では、また会おう烈火の騎士」

シグナム「ジーク……」

ジーク「一つ忠告しておく今度の敵はお前達の事をよく知っている敵だ。……気をつけろ」

最後に意味深な言葉を残しジークも転移した。

シグナム（私達をよく知る敵…？一体誰の事だ？）

自分達を知っている敵と言われても全く想像できない。過去の自分達の主は皆闇の書に飲み込まれて死んだ。…と言う事は戦った事のある敵と言う事なのだろうか……？

いや、今はあまり深く考えるのは止そう…それにしても……

シグナム「母親、か……」

エリスとクラレンスの二人の言った言葉を頭の中で反芻してみる。

シグナム「……」

しかし、それは言葉には出さずに無言でその場を去る事にした。
その表情は通り過ぎた男性が思わず見とれる程美しく微笑んでいた。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

エリス「♪～～～～♪～～～～」

クラレンス「～～～～♪～～～～♪～～～～」

拠点に戻ったエリスとクラレンスは非常に機嫌が良くて鼻歌を奏でていた。
足取りも軽く時々スキップもしている。

フォスティル「えらくご機嫌なようだな？」

ジーク「……そうだな」

エリス「あっ、フォスティル！今日ねと～～っても楽しかったんだ♪」

クラレンス「こんな日が毎日続けばいいのにね～クスクス♪」

互いの顔を見てコロコロと笑う。

フォスティル「ほう、それほどまでにか？どんな日だったのだ？」

エリス「クスクス、ひ・み・つ～♪」

唇に人差し指を当ててそう言うエリス、その後ジークの傍に来る。

エリス「ジークも楽しかったよね～？」

ジーク「……ああ」

クラレンス「クスクス、いっその事シグナムと結婚してよ～♪そうすれば、私達、養子になれるし♪」

ジーク「なっ！？」

その言葉にジークが仲間の前で始めて狼狽した様な顔を見せた。
その頬が少し赤くなっている。それを見て姉妹も面白がってクスクスと笑う。

エリス「早くそんな事が起きないかな～、楽しみ♪」

クラレンス「それなら姉さん、ジークの願いを手助けしないとね♪」

エリス「そうだね♪私達がジークの望みを叶えるお手伝いをしよ～ね、クスクス♪」

フォスティル「一体何の話だ？」

ジーク「……聞かん方が良い」

そっぽを向いていたがその視線の先にある男がいたので声をかけた。

ジーク「……ギル」

ギル「ん？おお、ジークか如何した？」

その男、ギルはジークを見て機嫌良さそうに声を上げる。差し詰め闇の書が完成したのが嬉しいのだろう。だが……

ジーク「今度の戦いでは手を抜け」

ギル「な～に～！？」

その言葉に眉をしかめた。

ジーク「次にお前が戦う敵の中に俺が決着をつけたい者がいるのだ。

だから手を抜いて欲しいと言っている」

ギル「はっ！手を抜くなど俺の辞書には存在していない！！俺は兄弟を倒しそれを我が物にする」

ジーク「それでは意味がないのだ……」

ギル「ふんっ！そんな願いなど聞くか！だが、安心しろ奴等を闇の書に取り込んだ後は貴様に存分に戦わせてやるよ！！」

ジーク「……今、なんと言った？」

ジークの雰囲気が一変する。差し詰め『静』から『動』に発する力が変わったと言った方が良いだろう。背後に溢れる魔力が生き物の様に揺らめいている。

ジーク「もし、烈火の騎士に何かしてみろ……その時は貴様をこの世から消してくれる」

ギル「ほお、面白い…新参者の分際で俺に刃を向けるか？いいだろう、今此処で貴様を取りこんでやろう！！」

二人の魔力の波動がぶつかり合う。そして、ギルが戦闘態勢に入ろうとした瞬間……

エリス「クスクス、スト～ップだよギル」

クラレンス「こんなとこで戦うのは禁止～クスクス♪」

ギルの喉元に一瞬でエリスとクラレンスが切っ先を突き立てていた。

ギル「お前等、如何いう了見だ？」

エリス「私達の大事な遊び相手を壊そうとするなんて駄目だよ～？そんな事するなら私達が貴方を壊しちゃうよ？クスクス♪」

クラレンス「それに……暴れたらパオラが怒るよ？ほら、あそこで目を光らせているし～クスクス♪」

視線の先を追ってみると……確かにパオラがいる。しかも……

パオラ（壊したら……ドウナルカワカッテンダロウナ～……（？Д？＃））

と言う言葉が言わずとも何となく分かってしまう程の気を放っている。

こ、怖～～（（（（。Д。；））））ガクガクブルブル！

さ、流石鬼おｎ「チェストッ！！」フンバッ！？

作者はログアウトしますた

ギル「ちっ！！」

ギルもその雰囲気を察して舌打ちをしてその場を去っていった。

エリス「ジーク、今度も一緒に行った方が良いかもね～クスクス♪」

ジーク「お前等……」

クラレンス「私達も手伝うね～今日のお返しで、クスクス♪」

ジーク「……ありがとう」

素直に礼を述べるジークに二人はキャッキャッと笑うのだった。

## 第三十一話（後書き）

いかかでしょうか？エリスとクラレンスは純粋ゆえに残忍にも無邪気な子供にもなる。そんな感じです。それで、ジークがお気に入りでどうやらシグナムも気に入りかけているようです。更にジークの過去もちょっとだけ公開しましたがこれも後に明らかにしていく予定です。さり気無く新しい使途も登場させてみましたが若干違和感が…ｏｒｚ

次回もなるべく早く更新できるよう頑張りますのでこれからも宜しくお願いします。

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第三十二話（前書き）

三十二話更新！！

今回はまあ、あれです！色々やっちゃったぜ！！

バルド「何をやったんだよ……」

それは見てのお楽しみ！！言えるとしたら前半の一部は作者の暴走です。
そして、後半に何と！フェイトさんが……！！

バルド「フェイトがどうかしたのか！？」

でわ、本編をどうぞ！！

バルド「おい！！人の話を聞け！！」

# 第三十二話

数日が経って今は夜、フェイトは自分に回された仕事を片付けていた。

フェイト「ん～、終わった……」

粗方今日の分を片付け固まった体の筋肉を解す。

フェイト「あとは……」

バルディッシュに端末をつけてあるデータを引き出す。それは、あの『創世時代の神』の本のデータだ。あの借りた日に滞在中に読み切れないと判断したフェイトがバルディッシュにコピーしてもらったのだ（勿論、向こうの許可を貰っている）。

今自分が読んでいる部分を開きそこから読み始める。この本は、かなり分厚くページ数も千以上を優に超えており読み切るのに非常に時間がかかる。何故これほどまでにページが多いのかと言うとこの本、如何やら幾つもの人物の仮説が書かれておりそれによってペー

ジ数が多くなったようだ。

フェイト「同じ様な文がある……ここは、飛ばした方が良いのかな？あぁ、でも気になる……」

と言う様に同じ様な仮説を書いた人がいると飛ばした方が良いのだが、如何しても気になってついつい読んでしまう。

そんな感じでずっと読み進めていくとある文章と出会った。

フェイト「イモータルの弱点？……これって…」

質量兵器や強いものなら魔法すら打ち消す存在に弱点がある。その気になる文を見つけ意識を集中する。

――――さて、如何に強大な力を持った者でも弱点は存在する。数多の世界を滅ぼし人々を絶望の寸前にまで追い詰めた彼らイモータルだが、曇天に覆われたある日人々の街を襲撃し壊滅一歩手前にまでいったがその時雲の割れ目から光が差し込んだ。そう、太陽である。星に住む者達に光という恵みを与える父なる存在、太陽…その光を浴びた瞬間彼らの僕『ヴァンパイア』その下僕の『不死者（アンデット）』は一瞬で蒸発して消えてしまった。そして、イモータルもまたその光によって焼かれ消えたのだった。それによって、人々は助かる。彼らイモータルにとって強い光は天敵だった。その事を人々は知る事となった。――――

フェイト「太陽……？」

まさか、自分達の身近な存在が彼らの弱点だというのを知って驚く。

――それを機に人々は太陽兵器を開発、それを用いて闇狩りを始めた。それは、あまりにも凄惨で惨かったとしか言えない。一方的な虐殺、その一言で片づけられるだろう…。多くの同胞を闇に呑まれた事によって怒り狂った人々は最早歯止めが効かず、遂に世界を飛び越え別世界にいた何の罪も犯してない『イモータル』すら浄化し始めたのだ。人の傲慢なまでの進撃を見たダークは人に失望し遂に人類を滅ぼす為にある存在を動かしたのだった。それが、闇の一族の中で最も強大な力を持っている最強とも言われた存在、『闇の五大王』である。それは圧倒的なまでの力を持ち弱点の筈である太陽兵器すらことごとく無効化し破壊していった。その最強とも言える者達の名は……――

そこから先が文が擦り切れていた所為か解読できなかった様で白紙となっている。

そこで、フェイトは索引に移り、『闇の五大王』を探す。

フェイト「……ない」

残念な事にその様な単語は先程のページ以外に存在していない様で続きが読めない以上それを知る事は出来ない。

そこでフェイトはある人物に連絡を取る。

ユーノ『あれ？フェイト如何したの？』

そう、無限書庫の司書長を務めているユーノだった。無限書庫なら何かあるかもしれないと思い連絡した。彼曰く「探せば何でも出てくる」らしいので頼んでみる事にしたのだ。

フェイト「ユーノ、忙しい所一つ探して欲しいものがあるんだけど……いいかな？」

ユーノ『うん、いいよ。それでなにかな？』

快く承諾してくれたのでフェイトは今自分の探している物の名を上げる。

それを了承し仕事が忙しいのか早々と通信を終えた。自分の仕事もあるのにも拘らずこう言う事にも手を貸してくれる彼は本当に頼もしい。

フェイトも今日終わらせた仕事の最終確認を始めた。

フェイト「……あれ？これって、バルドの分だ……」

送信ミスか何かでバルドへ送られている筈の書類がフェイトに送られていた。
しかもよく見ると期限が明日までになっていた。
これは拙いと思って、フェイトは急いで彼の部屋に向かうのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

バルドに宛がわれている部屋の前に着き扉をノックする。

バルド「ん、入っても良いぞ～」

返事が返って来たので中にお邪魔すると……

バルド「おう、フェイトか……如何した？」

下をタオルで巻いただけで濡れた頭をタオルで拭いてるバルドが其処にいた。

体も水で濡れていることから如何やら先程までシャワーを浴びていたのが分かるが……今のフェイトにはそんな事を冷静に判断で来ている訳もなく、

フェイト「は、はわわわわわ……／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

見事なまでに混乱状態に陥っていた。如何したのかと聞いてるのに返答がなくあわわ言ってるので首を傾げてフェイトに近づき目の前で手を振って見た。

バルド「フェイト?……お〜い」

フェイト「……っは!バ、バルド、え、えっと…あの、こ、これバルドに送られる筈だった書類があったから教えに来ましたです／／／／／／／!!」

見事なまでのテンパリ具合である……。フェイトから送られた書類を見て確かに自分のだと確認を取った。

バルド「間違い無く俺用の書類だな……って、これ明日までか……。ちょっと座って待ってろ、直ぐに終わらせて来るから」

フェイト「え、あの……ちょっと、バルド!?……きゃっ／／／／／／／!!」

そう言って着替えの置いてある場所に行って着替え始めた。いきなり目の前で起きた事に慌てて両手で顔を覆って見ない様にする。

着擦れの音が聞こえてきて凄くドキドキして来る。音が止んだのでソロソロと閉じていた指を開くと既にバルドは服を着ていて作業に入っているので少しホッとする。

ソファーに座って待つ間、フェイトは作業をしているバルドをぼんやりと見ていた。仕事をしている彼は何処か近寄りがたい雰囲気を醸し出しそれでいて強く引き付けられるような凛々しさをも見せていた。ふと脳内に浮かぶのは彼の肌…。無駄な部分を一切省いたかの様な、しかし筋肉質と言う訳でもなくごく一般的な体系でしっかりとした筋肉があった。

フェイト（バルドの…綺麗な筋肉だったな…って、何を考えてるの私／／／／／！！？）

でも、そんな彼に強く激しく…って、だから変な事考えるなって／／！！

一人でそんな事考えて身悶えている事数分……

バルド「……よし、終わったぞ」

フェイト「はやっ！？」

あっさりと終わらせたバルドに思わずツッコミを入れる。
渡す前にちょっと拝見したがあれは如何見ても数分で終わらせる事など出来ない書類だった筈なのに、だ……。

バルド「ったく、こんなの別の部署がやるもんだろ……なんで俺に回すかな～？」

フェイト「た、多分処理が速いからじゃないかな……？」

バルド「だからって、担当じゃないもん渡されても面倒くさいだけなんだが」

そう言いつつもしっかりとやってくれるバルドはやっぱり頼りになるとフェイトは思うのだ。
そして、バルドはフェイトの片付けた書類もまとめて本部に一気に送信するために彼女からデータを受け取り二人が立ち上がった時、空中にケルベロスが現れた。

ケルベロス［それにしても……如何だい嬢ちゃん？相棒の肉体見ての感想は？］

フェイト「へっ／／／／／／！？」

そう問われて再び脳内に先程の姿を思い出し全身が沸騰する様に真っ赤に染まった。
それを見てケルベロスはケラケラと笑う。

ケルベロス「ウヒャヒャヒャ！！相棒も中々に罪作りな奴だぜ♪」

バルド「……何の事だよ？」

ケルベロス「悦(とぼ)けちゃってこの～♪嬢ちゃんも照れてないでド～ンっと抱き着いてみろってほら！！」

フェイト「きゃっ！？」

バルド「うわっ！？」

ケルベロスがフェイトの背後に回って軽く押したがその拍子でフェイトは前につんのめりバルドにぶつかり押し倒す様にして倒れてしまった。そして、唇に柔らかな感触がしたので瞑っていた目を開けると……

フェイト「～～～～～～っ／／／／／／／／／／！？」

バルド「っ！？」

なんと、バルドとキスをしていた。しかも、今は自分が押し倒して

いる体勢で傍から見れば自分から押し迫っている様な恰好である。
慌てて立ち上がり離れた。

バルド「フェイト……」

フェイト「え、えっと…ご、ごめんなさい！！そ、それじゃ私はもう寝るね！おやすみなさい！！！」

バルド「お、おい！フェイト！！」

それに返事もせずフェイトは大慌てで部屋を出て行った。

バルド「……おい、ケルベロス」

ケルベロス［お、おう…なんだい相棒…？］

バルド「言い残す事は……無いな？」

そう言ってケルベロスを掴みミシミシと音が聞こえるほど握りしめる。
バルドからは途轍もない程の怒気が溢れていて背後に巨大な蛇の様なものが見えたりした。

ケルベロス［あだだだだだだ！！！］

バハムート［余計な事をしましたね駄犬が！！！］

虚空からバハムートも現れ先程の事を窘める。暫くの間、バルドの部屋からケルベロスの悲鳴が聞こえたのは言うまでも無い……。

部屋に戻ったフェイトはすぐに電気も消し、ベッドに頭まで潜りこんだ。
だが、すぐさま先程の事が思い出され顔が火照って来た。
自分の唇を指で撫でる。まだそこにバルドの温もりがある様な感じがして火照って来る。

フェイト（わ、私…さっきバルドと……／／／／／／／！）

事故とはいえキスしてしまった事には変わりがない。
心臓が物凄い勢いで動いている、眠れ眠れと意識を集中するも何度もあの時の光景がリフレインしてなかなか寝付けない。

フェイト（うぅ～～／／／／／明日どんな顔して会えば良いんだろう／／／／／／？）

その事を悶々と考えながら夜を明かすのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

だが翌朝、フェイトはなのは達と仕事部屋でデスクワークをしていたがカインやシリウスが来るのに何時まで経ってもバルドの姿が現れないのに疑問に思った。

フェイト「なのは、バルド見なかった？」

なのは「え？フェイトちゃん知ってるんじゃないの？」

フェイト「ううん。昨日はいたのは間違いないけど……今日は見てないんだ」

スバル達に聞くも全員知らないと言う。それを聞いて徐々に不安になって来たフェイトは近くにいたガルドとセフィリア聞く事にした。

フェイト「ガルド、セフィリア……バルドは何処に行ったの？」

セフィリア「え、バルド？そう言えば今日は見てない様な……」

ガルド「セフィリア…今日はあの日だ」

そうガルドが言うとセフィリアがハッとなってバツの悪そうな顔をする。
やはり二人はバルドの行方を知っている様だ。

フェイト「バルドは!?バルドは何処に行ったの!!」

セフィリア「バルドは……」

ガルド「あいつは……暫くは帰ってこないぞ。場所も俺達すら知らない」

フェイト「そ、そんな……」

ガルド「フェイト、何故にそこまで慌てるんだ?少しの間だけあいつがいなくなるだけだがそこまで不安か?」

そう言われて気付く。何時の間にか自分の隣には当たり前の様に彼がいたのでそんな彼がいないと分かると此処まで不安になる。
何時も隣にいたい。彼がいないだけでこんなにまで不安になる。

ガルド「なんにせよバルドは暫くは帰ってこない。それだけは覚えていてくれ」

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

次元世界のある場所、誰にも発見される事も無く、いや決して見つからない場所にひっそりと存在するその世界にバルドは来ていた。辺り一面緑に覆われた平原、人の気配は…ない。

しかし、生命の息吹は感じられる。何処からともなく鳥が降り立ち彼の肩に止まる。

バルドが来た事を心待ちにしたかのようにその鳥は美しい鳴き声を上げ周囲に知らせる。

すると、周囲から草食動物から肉食動物、はたまた昆虫など数多の動物達がバルドの周りに集まり出す。彼の立っている大地に生えている植物も彼を出迎える様に風が吹いていないのに葉を揺らす。

バルド「ただいま、皆。今年も来たぞ……」

それに微笑んで応えるバルド。そして、動物達を引き連れ歩き出した。

歩き続ける事数十分、目の前には巨大な木々が連なる巨大な森があった。

その木達もバルドが来た瞬間その気配でも感知したのか枝を揺らし葉を擦れ合わせて歓迎する意思を見せる。

そして、樹海の様になっているそこに道が現れる。そこをバルドと動物達は通る。
彼らが通った後、植物達はその道を再び閉じた。

更に歩く事数十分、新緑の世界が終わり開けた空間が目の前に現れる。
その景色は一言で言えば白……。大地一面が白に覆われている。大地を覆い尽くすもの、それは百合の花。それはある人物が最も好きだった花……。失われた自分の心を再び甦らせ自分の闇に染まった心に光を齎した愛する少女……。今となっては二度と出会う事のない最愛の少女……

バルド「ただいまだ……フィフ」

バルドの目の前には百合の花の平原の真ん中に花に囲まれて立っている一つだけある墓石の前に跪く。
簡易な墓だがそれでも風化する事も無く何処も傷んだ様子も無いその墓を見てフッと笑う。
そして、優しくそして、愛しむかのようにそれを撫でる。そこに優しい風が吹き抜ける。
まるで、バルドが来た事を歓迎するかのように……。

ケルベロス［一年ぶりだな～フィフの嬢ちゃん！！今年で幾つになったっけな～？］

バハムート［今年で三億年が経ちました。お誕生日おめでとうござ

います」

ケルベロス「そうだったそうだった！すげぇぜフィフの嬢ちゃん、遂に三億の大台に乗ったぜ！！おめっとさん！！」

そう、今日はフィフと言う少女の誕生日なのだ。バハムートが優しげな声で祝福しケルベロスも讃える。それに風が笑っている様に吹き抜けた。まるで少女が照れているかのように……。

バルド「時が経つのは早いな……。もう三億年が経ったのか……お前が死んでから…」

そう呟いて悲しげに眼を伏せる。脳裏に浮かぶのは彼女の笑顔、怒って膨れた顔、驚いた顔、隣で眠っている時の愛くるしい寝顔…此処に来るたびに必ず思い出す。もう記憶から消えたと思っていたものは此処に来ると必ず思い出せるのだった。

ケルベロス「って言ってもたかが三億年だけどな～ウヒャヒャヒャ！！」

バハムート「人の身としては途方も無い時間ですが……意外と時が経つのは早いのですね」

三億年をたかが…で片づけるケルベロス。

ケルベロス［まあ、そんな事より…フィフの嬢ちゃん喜べ！！相棒にやっと春が来たぜ！！三億かかってやっとだぜ～まったく…］

バルド「何を言ってるケルベロス？」

ケルベロス［まあ、いいじゃねえか。それとな、その子はフィフの嬢ちゃんに似てるんだよ。何て言うか雰囲気とかいろいろな！だから、安心しろや］

そうケルベロスが言うと風が吹き抜ける。安心したかのような優しげな風。

バルド「俺はもう恋などしないと言った筈だ。勝手なことを報告するな…」

ケルベロス［っけ、嬢ちゃんの恋を無下に扱うなっての！！フィフの嬢ちゃんもこの物分かりの悪い相棒に何か言ってやれよ！！］

バルド「気にするなフィフ。このバカが最近イカレテきてるだけだ。戯言に付き合わなくても良い」

ケルベロス［ああ？何時俺がイカレタって？］

バルド「聞いてなかったのか？最近だと言っただろう…アホが」

バハムート［もう、二人ともフィフの前で喧嘩を為さらないでください！！］

人と剣がにらみ合いそれを別の剣が窘めると言うとてもシュールな光景がある。
だが、それを見て楽しげに笑う動物達はいても不思議に思う者などいない。
何故ならこの世界には人だけは存在しないのだから、いや滅ぼされたと言った方が良いだろう。

そして、その人を滅ぼした者こそ…ここにいるバルドなのだから…。

バルド「それに俺はもう二度と恋などしない。俺は今でもお前しか愛せないと思う…」

再び風が吹く。

バルド「なんだ、怒ってるのか?だが、これは俺のケジメだ。俺は人の血はもう吸う事は無いだろう……。まあそろそろ、肉体を維持するのも限界が来てるしな……」

そう言って墓の隣に座る。そこにまるで心配するかのように風が吹く。それを肌で感じ苦笑いするバルド。

バルド「なんだ、心配してるのか?安心しろ、多分まだ大丈夫だ。

もう直ぐお前の傍に行ける。すまないなお前だけあちらに送ってしまって…だが、もう直ぐだ……」

そう言って目を閉じる。今は、彼女だけを……彼女と過ごした時を思い出しながら眠る事にした。だが、眠りに就く前に一瞬だけフェイトが浮かんだ。

バルド「……ありえんな」

そう首を振って否定し深い眠りに就くのだった。バルドや同じく眠りに就き始めた多くの動物達の上空には雲一つない星空が浮かんでいた。そして、そこには美しい月が彼等とフィフと百合の花を照らしその光によって純白の平原はとても幻想的な光景となっていた。

---

それは夢だった。いや、夢であってもとても幻想的なもので夢から覚めても脳裏に焼きつく様に残っていた。

バルドがいなくなってから見る夢。フェイトの見る夢はとても不思議なものだった。

気が付くと自分は真っ暗な空間に立っている。いや、浮いていると言った方が正しいだろう……。
闇が…闇よりも深い闇が世界を覆っていて何も見えない。

フェイト「また、あの夢……」

これで一週間は経った。それでも、見る度に美しいと思う世界の光景……。

そして始まる世界の舞踊（ロンド）。フェイトの眼下に一つの世界が現れる。

そして、その隣にまた一つ…一つ…一つ……次々に現れていき一つの銀河の様なものになる。

そして、またその銀河が一つ…一つ…一つ……美しい世界が集まっていき銀河系となった。

そして、その銀河系が一つ…一つ…一つ……幾つも幾つも集まり巨大な銀河団となり闇しかなかった世界に光を齎した。

フェイト「綺麗……」

その一言に尽きるだろう。他を寄せ付けぬ圧倒的なまでの美しさ、人の描く絵画では表現など到底不可能な荘厳さ、美しき煌めきを放つその世界が自分の眼下で命の灯を灯しながらその一生を生きていた。

その夢は何時もは此処で終わりを告げる。だが、今日は如何やら違うようだ。

終わると思った夢が続いていた。

その世界に来訪者が現れた。長い白い蛇とも龍とも言える様な体に腕を生やし頭部には十字に裂けた口と真紅の無数の目、背には大きな翼。それは、とても神々しく、荘厳で、圧倒的で、壮麗で、美しかった。

フェイト「あれは……あの時の…！！」

そうその姿は嘗て『闇の書事件』で闇のプログラムを破壊しその後初代リインフォースを連れて行ったあの存在だった。その蛇は銀河団よりも巨大な体躯であった。比べるのもおこがましい、それは銀河団をその体で包み込み動きだす。するとなんと、その銀河団が動き始めた。その蛇もまるで迷子を優しく連れて行くかのように扱っておりその連れて行く先には別の銀河団が…。それも連れ、また見つけては連れ……行く先々にある銀河を連れていく。

そして、その先にあるのは幾つもの、そう数え切れないほどの星々の煌めき。銀河団をも超える無数の銀河がまるで寄り添うかの如く集まっていた。そこに連れて来た銀河を置き、それを守るかのよう

に包み込んだ。

フェイト「あの中に……もしかして私達も……」

もしかしたら、自分達が今住んでる世界もあの中にあるのではないだろうか？

その存在を見つめる。あの時はあの存在を見て怖いとしか思えなかった。しかし、今あの光景を見た後はとても優しい存在なのだと思えた。あの銀河団には数え切れない程の命の息吹があるはずだ。それらの命をも守ってくれているかのような感覚がして、フェイトは聞こえてはいないと思うがその存在に……

フェイト「ありがとう……」

そう感謝の言葉を告げるのだった。そして、視界がぼやけ始め最後に見た光景は……

一人の少女と向き合うその存在の姿だった………。

――――――――――――――――――――――――――――――

そんな事がしばらく続いたがバルドがいなくなってから一週間がたったある日、廊下を歩いていた時突然フェイトは耳鳴りと共に酷い頭痛に苛まれていた。

フェイト「くっ、うあぁ……」

頭の中を焼けた鉄でグリグリと穿り回せられるような激痛に思わず壁に寄りかかった。

フェイト「はあ……はあ……」

視界がぼやける。前からなのはがやって来たのが見える。フェイトの様子がおかしいのに気付き駆け足で近付いてきた。フェイトの顔色は真っ青だった。

なのは「フェイトちゃん!?如何したの、大丈夫!?」

フェイト「だい…じょうぶだよ…少し……目眩が…しただけ…」

よろよろと立ち上がり覚束ない足取りで歩きだすフェイトを見て心配そうに隣で様子を見るなのは。

徐々にだが痛みが治まり出してきた。足取りも段々と落ち着きを取り戻し始めて訓練場に着いた頃には酷い頭痛は治まっていた。

なのは「フェイトちゃん…疲れているなら無理しない方が…」

フェイト「大丈夫だよ。もう痛くもないし今日は私がＦＷ陣の訓練を見ないといけないんだしそれに…使徒と渡り合う為には私達も強くならないといけないから休んでられないよ」

そう言って張り切って訓練に参加するフェイトをなのはは心配そうに見るのだった。

時間は過ぎて訓練も終わって休憩時間、フェイトとなのは、はやては自販機から飲み物を買ってベンチに座って談笑していた。

はやて「フェイトちゃんあんま無理せんといてな？」

フェイト「大丈夫だって、もう何ともないから」

はやて「ほんならええんやけど……」

フェイト「それよりも二人とも今日ね、少し変な夢を見たんだ」

なのは「変な夢？」

フェイトは今朝見た夢の内容を話す。何故話そうと思ったのか分からないが何となく話してみたかったのだ。その内容を聞く二人はあの時出会った存在が話の中に出て来た途端に驚きの表情を浮かべた。

なのは「あの蛇が…宇宙を？」

はやて「まさか……ありえへんって」

二人も半信半疑である。無理も無い。夢の出来事が現実と同じではないし、ましてや、はやてにとって大事な家族を連れて行った相手だそんな存在が自分達を…数多の銀河を守っている様な事をしているとは思えなかった。

まあ、夢だし…とフェイト自身も片づけこの話も終わったが、ふとフェイトの脳裏にある光景が浮かんだ。それは、視界が消える前に見た最後の光景……一人の少女と山の様なサイズのあの蛇が向かい合っていた光景だ。

フェイト（何だろう……何か…引っかかる？）

それを思い出し疑問に思った瞬間……弾けるような感覚と激しい耳鳴りと共に再びあの激痛が起きた。

フェイト「ぐっ……うあっ…あああああぁぁぁぁ！！！！」

痛みに思わず床に倒れこむ。脇に置いてあった紙コップが床に転がり入っていた飲み掛けが広がる。

なのは「フェイトちゃん！？」

はやて「如何したんや！？しっかりしい！！」

フェイト「あっ……ぐっ…ううぅ…」

呼びかけにも答える事も無くフェイトは頭を押さえて蹲る。あの焼けるような痛みが駆け巡っていた。吐き気、目眩、頭痛その他諸々の痛みがフェイトに突然襲い掛かったのだ。それに続いて突然脳内に血に染まった大地、山の様に築かれた人の死体、その頂点に立ち月の光を背にする者、それに銃や剣、槍など数多の武器を構えその者を迎え撃つ人々、閉じていた目を開き真紅の眼にその中には黒い六芒星が描かれており更にその六芒星の中に十字架がある。その真紅の瞳で人々を見降ろし背にかけていた巨大な剣を片手で持つ、全身からは漆黒の魔力が噴き出しその背から黒い影の様なもので出来ている漆黒の蛇の様なのが月や星の光を飲み込むなどの不思議な光景が現れては消え、更に映像が切り替わり、まるでこの世の終わりの様な凄惨な大地が広がっておりそこに横たわるは数え切れないほどの人の屍、そして、その者の目が光ると死した者達が立ち上がり咆哮を上げて人々に襲いかかる。

そんな光景が現れては消え現れては消える事を繰り返していた。

フェイト（な…に……これ……この……光…景……は？）

なのは「フェイトちゃん！！フェイトちゃん！！」

はやて「あ、あかん！シャマル大変や！！直ぐに来て！！」

必死にフェイトを何度も呼びかけ揺さぶるなのはとこのままだと拙いと判断したはやてが慌ててシャマルに連絡する光景がぼやけて見える。その声も何処か遠くにあるかのようにハッキリと聞き取れなかった。視界が段々と黒に染まり始めて来る中、フェイトは見た……。

？？？「…………………」

廊下で此方をジッと見ている知らない一人の少女が立っていたのを……。

それを最後にフェイトは意識を失った。

――――――――――――――――――――

―――――――――――

フェイトが倒れた数時間後、バルドが帰って来た。

何やら慌ただしい雰囲気を感じたバルドは慌てて走るなのはを見つけた。

バルド「なのは！如何したんだ！？」

なのは「あっ！バルドさん、今まで何処に行ってたの！？そ、そんな事よりも大変なの！！フェイトちゃんが、フェイトちゃんが倒れたの！！」

それを聞いたバルドは弾かれた様に走り出し先行していたなのはに追いつきフェイトが何処にいるのか聞きだし六課の廊下を物凄い速度で駆け出した。

バルド「フェイト！！」

医務室に着き扉を開けるとベッドで寝かされてるフェイトとそれを心配そうに見ているエリオとキャロ、それにシャマルやはやて達がいた。

バルド「おい、フェイトが倒れたってどういう事だ！？まさか、局

のクソ共が無理な仕事量押しつけたんじゃないだろうな！？」

エリオ「と、父さん落ち着いてください！！」

バルドを落ち着かせフェイトの症状を教える。唯の頭痛などから察するに疲労だろうとの事をシャマルが伝える。それを聞いてほっとしてベッドで寝かされているフェイトを見る。規則正しい寝息が聞こえる。今は落ち着いた様だ。

ガルド「バルド……」

振り向くとガルドとセフィリアが深刻そうな表情で手招きしていた。二人について行き部屋から出る。

ガルド「先程フェイトの症状をセフィリアに診てもらった」

セフィリア「……」

バルド「唯の疲労じゃない…のか？」

セフィリア「ええ、その場にいたなのはとはやてからの証言も聞いたけど……」

バルド「なんだ…随分と言いにくそうだな？」

セフィリア「間違いなくフェイトは『感応現象』を起こしたと思う

……」

その言葉にバルドの表情が険しくなる。虚空からケルベロスとバハムートも現れる。

バルド「……それは、確かなのか？」

ガルド「ああ、そうだ。俺とセフィリアが体験してる、事実だ」

ケルベロス［おいおい、『感応現象』ってやつは一度でも『共鳴者』と出会わなければ発動しない筈だろ？ってことは……］

バハムート［フェイトさんは既にその者と出会ってる……？そして、何かが引き金となって動き出したと言う事ですか？］

セフィリア「ええ、それで……彼女が倒れる寸前に話していた事を聞いたのですが……」

そこでセフィリアはまた歯切れの悪そうな表情になる。それを見かねてガルドが代わりに言う。

ガルド「フェイトは最近、ある夢を見たそうだ。『感応現象』を起こした者が起す症状だ」

バルド「夢……だと？」

その夢の内容を話す。聞いていく度にバルドの表情が更に険しくなっていく。

ケルベロス［おいおい、そいつはまさか……！！］

バルド「ありえんな……」

ガルド「だが事実だ。『共鳴者』と出会う確率は浜辺の中から小さな米を見つける程の確立だ。そして……出会ったら最後…」

バルド「……何かの拍子にその者の記憶が対象者に少しずつ流れ込む……」

『共鳴者』……簡単に言えば運命の相手である。それは何者も覆す事の出来ない宇宙が誕生した頃からの絶対なる真理。その者と出会った者はその相手の過去の記憶、と言うより記録だろうか？
そのようなのが少しずつ流れていく、これを『感応現象』と呼ぶ。最終的には記憶どころか、その者が今何処にいるのかさえ何となくだが分かってしまう、その人の感情を感じ取ってしまうという一種の超能力に近いことすら可能にしてしまう。
フェイトはその『感応現象』を起こしたのだが……相手の記憶の情報量が彼女の脳の許容量を超えてしまったため彼女は激しい頭痛の襲われ倒れたのだろう。

ガルド「どちらにしても、『感応現象』を起こしたことには変わりはない。それは、宇宙が出来てからの絶対真理だ」

それを忘れるなよ？と言って二人はその場を後にした。それをバルドは何も言わずにみているしかなかったのだ。

――――――――――――――――――――――

その日の晩、バルドは一人フェイトの隣に座って眠っている彼女を見ていた。

バルド「まさか、お前が…なんてな…」

顔に掛かった髪をそっと掬う。落ち着いた呼吸をしている彼女をジッと見ている。

ケルベロス「んで、如何すんだよ相棒？何れはバレるぜ？」

バルド「その前にフェイトが寿命で先立つだろうがな……」

バハムート「確かに若が生きてきた軌跡は人の身では全て知る事は無いでしょうけど……」

ケルベロス［まっ、これも定めって奴か……。大事にしていた子がまさかの共鳴者ってのは…意外に世界ってのは狭いな、相棒？］

バルド「そう……だな。だが、そうだとしてもフェイトはフェイトに変わりない。いつもと変わりなく接するだけだ。ただ、あまり触れる様な事はしない方が良いかもな……」

そう一人で完結して立ち上がり部屋を後にしようとしたが……

バルド「ぐっ……！？」

突然バルドが胸を押さえて倒れこんだ。呼吸が浅く額から珠の様な汗が噴き出る。

ババムート［若っ！？］

ケルベロス［おい、相棒！？］

バルド「はあ…はあ…大丈夫だ……」

そう言って立ち上がるがそれでも足取りが重い。仕方がなく再びフェイトの寝ているベッドの隣にある椅子に座る。

ケルベロス［まさか、そこまで弱ってんのか？］

バルド「自分でも驚いてる。既に此処まで力が減っているなんてな……」

自分の手を見つめる。指先が黒い霧状になって消え始めていた。手を強く握りしめ再び開くとそこには何時もの手に戻っていた。

バルド「こりゃ、俺が先に死ぬかもな……」

そう呟いて苦笑いする。意外と近い自分の寿命に笑うしかなかった。

バルド「けど、こいつを残して死ぬ気は無いけどな……まあ、今は少し休ませてくれ……」

---

フェイトの意識は白い空間に立っていた。

フェイト「此処は……？」

辺り一面白一色。まるで色が抜けたかのような景色が広がっていた。

フェイト「そっか…私、確か倒れて……」

自分が気を失った事を思い出し此処が夢だと再確認した。
だが、夢にしてはなんと言えば良いだろうか？浮遊感？フワフワした感覚がなく感覚はしっかりしていた。

フェイト「夢……じゃあ…ないのかな？」

？？？「此処は貴方の意識の中、その最深部にあるところだよ」

フェイト「誰！？」

振り返るとそこには、フードを目深に被った者がいた。声からしてまだ少女だろう。

フードの少女「あっ、ごめんなさい。驚かすつもりは無かったの」

フェイト「貴方は一体誰？今、此処が私の意識の中だって言ってたけど如何いう事？」

フードの少女「う～ん、一つ目の質問には今は答えられないかな……。二つ目は…今の貴方はある現象によって脳が疲れて休憩中ってとこかな？色がないのもその影響……」

フェイト「ある現象……？」

フードの少女「うん、正確には答える事は出来ないけどね……」

そう言って苦笑いしている少女。みたところ武器らしいものは一切持っていない。だが、油断はしてはいけないと思い身構える。

フェイト「貴方は何故私に意識の中に入って来てるの？」

フードの少女「そんなに警戒しないで。私が此処に来たのはお願いをしに来たからだよ」

フェイト「お願い……？」

フードの少女「うん、そう。お願い……」

その声色からして何やらかなり切羽詰まった様な感じだ。そして、目の前に少女は突然頭を下げた。

フードの少女「お願い！！彼を……彼を助けて！！」

フェイト「えっ、か、彼？」

フードの少女「もう時間がないの！！彼の命の灯が消えてしまう前に……早く！！」

突然の事にフェイトも混乱した。その彼は命の危機に瀕しているらしいが彼とは誰の事だ？

フードで表情が良く見えないがフードの中から雫が落ちていった。

泣いている……。誰かの危機に泣いているのだ。だが、直ぐにハッとなって空を見上げる。

フードの少女「…時間だ。もう…行かなきゃ…また会いましょう…」

そう呟くとふわりと浮いていく少女。その頭上に光が輝く。

フェイト「ちょっと待って！彼って一体誰の事！？命の危機って…！？」

フードの少女「お願い……彼を助けて！！手遅れになる前に……！！」

問いかけるも答えは返ってこない。同じ言葉を繰り返すだけだった。

光が眩しくなり始めてフェイトは目を細める。その時、見えてしまった……。

フードの少女「お願い……彼を……」

フェイト「あ、貴方は……！？」

その少女の顔が自分にそっくりだったのが…だが、決定的に違うのがあった。
それは、髪の色、そして、目だった。髪の色は金ではなく月の光を受けてたのように輝く銀髪、そして、美しい青色の目だった。それが一瞬だけ見えたが次の瞬間には光が辺りを埋め尽くしフェイトの思考もそこで途絶えた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

フェイト「う、ううん……」

目を覚ます。今だ視界が少しぼやけていたが徐々に焦点も合って来て何時の間にか夜になっていたのに気付いた。
寝ていたベッドから身を起こすと隣で寝息が聞こえてきた。そこにはバルドが椅子に座ったまま寝入っている姿があった。

フェイト（帰って来てたんだ……）

その事に少しほっとする。そのままでは風邪を引くと思い近くにあった予備の毛布をかけてやった。そっとバルドの頬に手を当てた時……

フェイト「っつ！」

再び頭が痛んだ。だが、それは軽いもので直ぐに治まった。
その一瞬の中フェイトの脳裏には誰かの姿が映し出された。一瞬だったから分からなかったがその姿は何処か寂しげなものだった。
痛みも治まりホッと一息吐くフェイト。そして、ベッドに倒れこみそのまま目を閉じた。
眠気は直ぐにやって来て何時の間にか眠りに着いた。

誰もが寝静まったその日の晩、六課の屋上にバルドが立っていた。

バルド「そろそろ、時が近いな……お前が戻っても差支えないだろう」

彼の周囲には誰もいない。だが、バルドはそこに誰かいる様に語る。

バルド「あいつの事なら心配するな。ただ、戻るタイミングはお前に任せる。ちゃんと戻る時には挨拶をしておけよ？」

そして、背を向けようとしたがその動きを止め再び振り向く。

バルド「なんだ、俺の事が心配だと？フッ此処まで弱ってもお前とあいつらが束になってかかっても負ける気は無いがな。俺の事を心配するよりお前の大事な奴の事を心配しろ。何やら自然がざわついている、近々また何か起きるかもしれん。その時に如何なるかは俺にも分からん、どう判断するかはお前に任せるからな、俺はそこまで面倒な事は世話する気は無いのだからな」

そう言って笑って今度こそ背を向けその場を去っていった。その場には誰もおらず月だけがその場を照らしていた。

# 第三十二話（後書き）

遂にこの小説の中のオリジナル設定『感応現象』発生！！
これが書きたかった……。ここまで来るのにこれ程の話数を使うとは、作者の執筆力の低さを見せつける事態でごわす（＜＿＞）
因みに感応現象を発動させているのはロイド達の中ではガルドとセフィリアの二人だけです。そして、これにはまだまだ秘密があります！！
それにしても……バルドは随分と長生きさんです。という事はガルドもまたそれほど生きているという事です。

バルド「おい作者……何してくれやがんだ…」

おっと！？バルドさんケルベロスを私めに構えてどうする気なんですか！？

バルド「消えろおぉぉぉぉ！！」

うわぁぁ！？ど、読者のみ、皆さん！！これからもダメ作者ことテッテルを宜しくお願いします！！！ふぎゃあぁぁぁぁ！？

作者は消滅しました。

バルド「次回も宜しく頼む」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第三十三話（前書き）

三十三話更新、またまたなのはさん達には別世界に行って貰いました～！！

え？話が脱線すんのかって？いえいえ、今回はしっかりと御珠探しでの出立です。

今回はあの世界に出発だ！！ヒントは“クエストを開始します”、だ！！

クラウド「では、本編をどうぞ！！」

さあ、狩りの時間だ！！

# 第三十三話

見渡す限り砂漠が広がっている。その中を複数の人が歩いていた。

ロイド「あっち～～！！」

バルド「我慢しろ」

そう、ロイド達である。延々と続く様な砂漠を汗を拭いながら歩いていた。

なのは「大丈夫なの？」

ロイド「大丈夫じゃない……いいよな～なのは達はバリアジャケットのお陰で暑くないらしいし……」

なのは「にゃはははは……」

なのはの問いかけに元気なく答えてなのは達をジト目で見る。

彼女達は今バリアジャケットを展開している。バリアジャケットは温度調節が出来るらしくお陰で平気でこのような環境でも歩く事が

出来る。

コレット「ロイド、ガンバ！！」

ロイド「相変わらずあそこに行くのに此処を渡らないといけないのは辛いな……」

はやて「今行く所ってロイド君達の知り合いの村やったっけ？」

カイン「まあそうなるな」

ある日、なのは達の下にロストギア反応があったという事で出動命令が来たのだが、ロストギアの正確な位置が把握できなかったらしく現地に赴き探さないといけなくなったのだ。如何したものかと困っていたのだがそこはロイド達の知っている世界だったらしいので彼らの知り合いの村を拠点に使わせて貰う事にしたのだ。

アル「キュ～♪」

ウル「ギュッ♪」

レイ・レン「「クキュ～♪」」

コレット「ふふっ、もう直ぐで着くからね」

そうこの世界はアル達モンスターの故郷の世界なのだ。何時も以上

にテンションが高い四頭を見るにそこに行くのは久しぶりの様である。

バルド「あんまりはしゃぐなよ？野生のモンスターに見つかったら面倒だからな」

そう忠告するバルド。そうなのだ、此処はモンスター達が闊歩する食うか食われるかの弱肉強食の世界。故に見つかれば戦いになるのは必至、そんな事で体力を消費する訳にはいかないのだ。

ティアナ「空を飛べばいいんじゃないの？何で歩かないといけないのかしら？」

ガルド「この世界には空を飛ぶ事の出来る『飛竜種』や『鳥竜種』なんかが住んでる世界だ。空を飛べば奴らに見つかる可能性が非常に高い。それに、データでも見たと思うがこの世界には魔法と言うのが存在しない、その様な世界で無駄に魔法と言うのを使用するのは極力避けたいんだ、人に見られたら後が大変だからな…」

そう言われて納得せざるおえない。魔法文化の無いところでの魔法の使用は確かに禁止されている。

故に皆空を飛ばずに歩きにくい砂漠を歩いているのだ。だが、モンスターと戦う時は使用しても良いらしい。

まあ、俗に言うご都合主義というやつだ。

エリオ「確か、この世界にはモンスターを相手に戦う『ハンター』と言う方達がいると聞いたんですが？」

バルド「ああそうだ。この世界にはモンスターを相手に命をかけて戦う『ハンター』がいる。そして、その人に合わせて武器も異なる。大剣、太刀、片手剣、双剣、ハンマー、ランス、ガンランス、狩猟笛、ライトボウガン、ヘヴィボウガン、弓、スラッシュアックスと武器は様々だ」

スバル「拳で戦う人はいないの？」

シリウス「そんな事したら一瞬で食べられちゃうよ。モンスターってのは堅い鱗とかで身を守っているのが多いから人の腕力で如何こう出来るものじゃないよ。まあ、俺はやってるけどね～♪」

目の前に大きな何かの生き物の骨が落ちていた。それは頭部だけで優に3メートル以上もあるもので迫力があった。

ヴィータ「でかっ！？」

クラウド「こいつみたいなのが平然と闊歩してる世界だ。油断してると一瞬であの世行きだぞ？」

確かにこんなのが体当たりしてきたら一瞬でミンチにされそうである。

今更自分達が凄く危険な世界にいるのを実感して緊張してきた。

シグナム「この様な生物がいるのか……フフフ、私の実力が何処まで通用するのか楽しみだ」

……一人、逆に燃えていた……。

暫く、砂の海原を歩いていると前方に巨大な岩山が見えて来た。

ロイド「あれの向こうにある」

フェイト「もう少しなんだね？」

リイン「早く休みたいのです～」

シグナム「……むっ」

シグナムは何かを察知しレヴァンテインを構える。

フェイト「シグナム、如何したの？」

シグナム「何か……来る！！」

気が付くと周囲に感じられるのは濃厚な殺気……。シグナムすら額

から冷たい汗が流れた。
それが、砂に落ちた時、微かに地鳴りが聞こえて来た。

はやて「な、何やこの振動……！？」

コレット「こっちに真っ直ぐ来てる！？皆、あの岩山に向かって走って！！」

カイン「っく、もう少しだってのに…！！」

なのは「カ、カイン君！この振動はなんなの！？」

カイン「いいから走れ！！このままだとやられるぞ！！」

身の危険を感じたなのは達は走った。その後ろをロイド達が走る。
すると、先程まで自分達がいた場所が盛り上がり出し、砂を吹き飛ばしてそれは姿を現した。

？？？「ギャアアオオオアアアァァァ！！！！！」

はやて「な、何やあれ！？」

その姿に驚くはやて達。印象的なのはその巨大な二本の角、二本足で立ち翼を生やし車すら握り潰せそうな巨大な足、尾を生やしていてその先にはハンマーの様な瘤みたいなのが付いていた。口からは

鋭い牙が二本見えていて、その眼光は鋭く、睨まれただけで竦みそうなものだった。それが地中の中から突然姿を現したのだ。黒い鎧の様な外殻を見に包んだ『悪魔』が、砂漠の暴君がそこにいた……。

セフィリア「ディアブロス！！」

ティファ「それも、亜種の様ですね……」

バルド「最悪だな……」

そのディアブロスはなのは達を視界に捉えた。低く唸り姿勢を低くし威嚇してきた。

ロイド「やばっ、敵と認識された！？」

カイン「逃げるぞ！！」

シグナム「逃げる？戦わないのか！？」

ガルド「こっちはまともな準備も整っていない。それに皆体力も少ない、ここは……」

シリウス「戦略的撤退だよ～ん！！」

その言葉に皆弾かれる様に駆け出した。兎に角、あの岩山に逃げ込めば此方の勝ちなのだ。なのは達もその者から放たれる濃厚な殺気

に体が強張っていた、それにまだ分からない敵と戦うのは分が悪いのも理解していた。

スバル「ティア、ウィングロードに乗って！！」

ティアナ「分かってるわよ！！」

皆、全力で駆け出した。一方、ディアブロス亜種も低く唸って姿勢を落とし突進を始めた。

この時、なのは達は油断していた。あの体躯だからそこまで速度は出ないだろうと……。

だが……

――ズドドドドドドドドッ！！！！！――

フェイト「うそっ！？」

それは、予想を遥か斜め上をいく様な速度で自分達に突進してきた。慌てて進行方向から逸れるがディアブロスはその速度を維持しながら軌道を微妙にずらしてきた。その先にはスバルとティアナがいた。

二人「なっ！？」

ガルド「ちっ！！」

間一髪、くらう寸前にガルドが二人を脇から攫う様に飛び出し寸での所で二人を救った。
ディアブロスは、その筋肉の塊の様な巨大な足を踏ん張り、急停止し振り向いて再び突進を始めた。
そこまでの動作が終えるまでの時間は僅か3秒……。

ティアナ「なっ！？あの巨体で何て速いの！？」

ガルド「二人とも油断はするな！！直線的な突進と思ってると痛い目見るぞ！！」

二人も先程の突進を思い出し、慌てて大きく回る様に逃げた。ガルドは左右に分れて逃げた二人とは違い正面からディアブロスに突っ込んだ。

フェイト「ガルド！？」

突然の行動にフェイトは驚いた。このままでは激突する……！！だが……

ガルド「……ふっ！！」

ぶつかる寸前にガルドは姿勢を更に低くし地面スレスレまで落して角を避け、地面を転がった。
その上を巨大な足が通り過ぎていく。一歩間違えればあれに踏み潰されていただろうにそれを見切り避けて見せたのだ。

ディアブロスは仕留めたと思っていた敵の手応えがなく急停止して見失った敵を探す為に辺りを見回し始めた。

ガルド「今がチャンスだ、逃げるぞ！」

なのは達も駆け出す。そして、逃げているなのは達を見つけコケにされたと勘違いしたのかディアブロス亜種は怒りに目を爛々とさせ身を捩り、

ディアブロス亜種［ギャアアオオオアアアアアァァァァァァァ！！！］

息を大きく吸って吼えた。それは大気を振動させ破壊的な音波はなのは達を縛りつけた。
バインドボイス、大型モンスターが使う相手を動きを封じる程の巨大な音波を放つ技だ。

なのは「きゃあああぁぁぁぁぁぁ！！」

鼓膜が痛み、両手で耳を塞ぐがそれでも本能的な恐怖が体の動きを縛った。
動きの止まったなのは達よりも早くディアブロス亜種は、硬直が解け、再び突進を始めた。
その先にはなのはがいた。
なのは「くっ……！！」
ギリギリで硬直が解けてそこから大きく飛び退いた。そこを破壊的な突進が通り過ぎた。
なのは「もう怒ったの！！ディバインバスターーーー！！！」
得意の砲撃をブチかますなのは。それは、ディアブロス亜種に直撃、爆炎で包まれた。
なのは「如何……かな？」
レイジングハート［油断はしないでください、マスター］
煙でよく見えない。そこに風が吹き抜け煙を吹き飛ばした。すると

そこにはディアブロス亜種の姿がなかった。

なのは「えっ、いない！？一体どこに……！！」

カイン「馬鹿野郎！！急いで離れろ！！」

なのは「きゃっ！？」

カインが飛び込んできてなのはを抱きとめそこから飛び退くと同時に先程までいた地面が膨らむ。
そして、

ディアブロス亜種［ギャオオアアアァァァァァ！！！］

地面からディアブロス亜種が飛び出した。大量の砂が宙を舞いそれが二人に降りかかったが取り敢えず、カインはなのはを抱き上げ駆け出した。既にロイド達は岩山に避難出来ていた。

ロイド「カイン、急げ！！」

カイン達を見失いキョロキョロしていたディアブロス亜種はカインとなのはを再び捉え突進を始めた。
徐々に距離が縮まって来る。

クラウド「カイン、なのは!!目を閉じろ!!」

クラウドが銃を構え発砲、それと同時に駆けたまま目を閉じるカイン、なのはも目を閉じると瞼を閉じても感じられるほどの強力な閃光が放たれた。

ディアブロス亜種［ギャオアアァァァ!?］

目を焼かれて悲鳴を上げるディアブロス亜種。その隙にカインも岩山に潜りこみロイド達と合流してその奥へと続く通路を駆けた。暫く走り続けていたが開けた場所に出たのでそこで歩みをとめた。

カイン「ふぅ～、此処まで来れば一安心だ」

キャロ「何なんですか、あの生き物は?」

バルド「あれは『ディアブロス』、その亜種だ。そして、あれが『飛竜種』、フリードと似た竜族の種だ」

キャロ「あれが…飛竜種……」

フリード「きゅく～!」

フェイト「あ、あんな生き物が平然といるなんて……」

気が付くと自分の体が震えていた。此処まで走った所為でスバル達も体力を消耗しており地面にへたり込んでいた。あそこまで純粋な殺気を飛ばして襲いかかって来る生物との回合はなのは達の体力を精神力諸共ごっそりと奪っていた。

少しふらついたフェイトをバルドが優しく抱きとめた。

バルド「大丈夫か？」

フェイト「う、うん大丈夫。バルドの方は大丈夫？怪我してない？」

バルド「俺は大丈夫だっての、此処に何度も来てるからまだ大丈夫だ」

ロイド「此処に来る度に必ず襲撃されるな……」

カイン「仕方がないだろ。あそこは砂漠に住むモンスターにとっては結構良質の環境だ。だとすれば、出会う確率も高いだろ」

ガルド「休憩もそろそろ終わりだ、行くぞ」

そう言ってガルド達は再び歩き出した。洞窟内は外の砂漠と違って気温が低く吐く息も白かった。

クラウド「頭上に気をつけろよ？」

そう注意されなのは達も警戒を強めた。すると、上から何かが降って来た。

キャロ「きゃっ！？」

それはキャロの直ぐ傍に落ちてきた。慌ててそこから離れエリオがキャロの前に立つ。暗闇でよく見えなかったが少しずつ暗闇に慣れて来たのでその正体が分かった…。

エリオ「な、何ですかあれ？」

それは白い体でその皮膚はツヤツヤとした芋虫の様なものだった。そして、目を引くものは少し大きな口、そして、目が無かった。その生き物の名は『ギィギ』獲物にくらい付き体力を奪う厄介なモンスターだ。

ティアナ「な、何あれ……気持ち悪いわね……」

ギィギ［ギィ……］

身を竦めて見えない筈なのに此方に向きを変えて……

ギィギ［ギィッ！！］

エリオ「うわっ！？」

大きくジャンプして口を大きく開き飛び掛かって来た。エリオはキャロの手を掴んで咄嗟に右に避ける。その口の大きさたるや人の頭など簡単に丸飲み出来そうなほど大きくなりあれに噛みつかれたら…と思うだけでゾッとした。

ギィギ［ギィッ！！］

バルド「鬱陶しい……」

再び飛び掛かって来たギィギを一撃の名の下に両断した。ベチャッと音を立てて崩れる切り口から体液が溢れだした。それをバルドは近づきビンを取り出してその亡骸を宙に持ち上げビンを下に持っていき落ちていくそのエキスをビンに入れ出した。

エリオ「と、父さん……何をしてるんですか？」

バルド「こいつの体液は精算品になる」

そして、ビンに溜まったのを確認して亡骸を地面に置くとそれは風化していき消えていった。

暫く暗い洞窟を歩き続けていると先の方が明るくなり始めた。
見ると如何やら洞窟も終わりの様だ。

スバル「出口だ！！」

ティアナ「ちょっとスバル待ちなさい！！」

先に駆け出したスバルの後をティアナが追いかけるすると、スバルが洞窟の出口で立ち止まった。

ティアナ「スバル？」

スバル「ティ、ティア……あれ…」

スバルの指さす方を見るとそこには……

ティアナ「綺麗……」

眼下には緑に生い茂った森に巨大な滝そこに架かる大きな虹、先程の荒廃とした砂漠とは全く逆の美しい世界が広がっていた。

後から来たなのは達もその光景を見て息を呑んだ。

カイン「もう少しで目的地だ」

そう言って、崖の下に続く通路を降りていく。レイとレンは巨大化して先にある村に向かって飛んで行った。森の中を歩くと前方に青い色の二足歩行する頭に赤いトサカのある生き物が現れた。

シグナム「あれは何だ？」

カイン「ランポス、その中でもその群れを統率する大型の個体ドスランポスだ」

コレット「あっ、ランちゃんだ！！ランちゃ～ん！！」

それを見つけたコレットがそちらに駆けていく。コレットの声を聞いたドスランポスは彼女の姿を捉えると啼き声を上げる。このドスランポスもアル達と同じ様に怪我をしていた時に助けられた生き物だ。

ラン［ギュオギュオ！！］

コレット「久しぶり、元気そうだね♪」

楽しそうに頭を撫でるとドスランポスも嬉しそうに目を細めるのだった。

そこにロイド達も集まる。

ロイド「久しぶりだな、俺達が留守の間何も起きなかったか？」

ドスランポスは首を縦に振り、そのあとなのは達を見て首をかしげるような仕草を見せる。

ロイド「新しい俺達の仲間だ。村の皆にも紹介したいから村まで乗せていってくれないか？」

ラン［ギュオ♪］

その頼みを快く受け入れドスランポスは大きく鳴き声を上げる。すると茂みの中から一回り小さな個体が幾つも出て来た。ランポスである。

なのは達を興味津々で見るランポス達にランちゃんが一鳴きするとそれに頷いてなのは達の前でしゃがんだ。ロイドとコレットがドスランポスに跨り、他のメンバーもランポスに乗ったのでなのは達も恐る恐る乗る。全員乗ったのを確認しランポス達は立ちあがる。高さ的には馬と同じくらいだろうか。

ロイド「よ～し、行くぜ！！」

ラン［ギュオ！］

合図と共に一団は駆け出した。生い茂る木々の間をすり抜ける様に軽やかに駆ける。

森を抜けると前方に村が見えて来た。その前には門番らしき人が立っておりドスランポスの一団を確認した。

門番「おい、ランの一家が来たぞ？」

門番「誰かを乗せてる……？って、あれはロイド達じゃないか！？」

門番「おい、門を開けろ！！英雄達のお帰りだーー！！」

門の上にある鐘を鳴らすと巨大な門がゆっくりとした動作で開きだす。

完全に開ききると同時にロイド達も村に入る。

村人「大変だーー！！ロイドさん達が帰って来たぞーー！！」

村人「何だって！？こりゃ村の皆に急いで知らせねぇと！！取り敢えず村長に連絡だ！！」

村の中では大騒ぎ、なんせこの村を立ち上げるのに協力してくれた功労者の帰還なのだ。
入り口ではロイド達の出迎えで大きく賑わっていた。

その一人一人に挨拶をしていきそこにやって来た村長とも握手をする。村長は見た目はまだ二十代の若い男性で『竜人族』の人だった。
村長の内に取り敢えず赴き今回来た訳を話す事にした。

村長「なるほどね。その不思議な力を持つ謎の物体の捜索と封印の為にこの地に来た訳だね？」

ロイド「まあ、そうなるな。それでこの村を拠点に活動しようと思ってんだけど良いか？」

村長「うん、それは構わないよ。部屋は空いてるし機動六課の皆さんが泊っても大丈夫だよ」

はやて「ほんまに？せやったらよろしくお願いします」

村長「任せてよ！ただし……」

そこで言葉を区切る。

村長「此処を活動拠点にするなら少し手伝って欲しい事があるんだ」

フェイト「手伝って欲しい事？」

村長は頷いて机のある所に行きそこから紙の山を抱えて来た。それをロイド達の前に降ろす。
そこには『未完遂』と書かれている。

村長「これを請け負って欲しいんだ」

カイン「これって……依頼書だよな？」

その一枚をなのはは取って見ると『動く火山』と書かれた確かに依頼書であった。

なのは「これはなんですか？」

村長「モンスターの狩猟依頼さ。うちにはハンターはそんなにいないし、その代わりに此処で共存しているモンスターに代わりに受けて貰ったりしてるんだけど、こんなに来ると手が回せなくて……」

クラウド「それをなのは達にも受けてもらいたいと……」

それに頷く村長。モンスターの狩猟…つまり砂漠で出会ったあのような生き物を相手して欲しいということだ。だが、此処に暫しの間住まわせて貰うのだ、それくらいの事は手伝いたい。それに自分達で色々な所を歩けばロストギアの居所も分かると思う。ならば答えは出ている。

はやて「分かったで、うちらも出来る限り手伝わせて貰うで」

村長「ありがとう！！これで、少しは依頼も片づくと思うよ！！」

村長も大喜びだ。その後は、ロイド達の帰還を祝っての宴を挙げる為に村長は村人を集めに出かける。

ロイド達も外に出て村の中を案内していく。鍛冶屋、道具屋、農場など幾つもの施設と田畑があった。
その中でも特に驚いたのが、

アイルー「ご主人たちのお帰りにゃ～！！」

アイルー「ニャニャッ、お客さんも一緒ニャ」

アイルー「今日は宴ニャ！目一杯気合いを入れるニャ～！！」

目の前でチョコチョコ動き回ってる生き物、『アイルー』という種族である。猫の姿で二本足でも歩け更に人語も理解できる愛嬌たっぷりの生き物だった。これにはなのは達も……

なのは「か、可愛い／／／／／／」

フェイト「う、うん…可愛いね／／／／／／」

はやて「あ、あかん…お持ち帰りしたくなってきたで／／／／／」

その愛くるしさにすっかり骨抜きにされていた。その間も忙しなく周囲を動きまわっており料理を作る者、運ぶ者、周囲の人に連絡を回す者など役割をきちんと分担している。

そして、宴が始まり皆大はしゃぎ、それを見て苦笑いする。巨大な炎の周りで人々が楽しく踊る。
そんな人込みから少し離れた丘の所にシリウスは一人で寝転がっていた。
何をするでもなく唯、空をジッと見ていた。

シリウス「ふぅ〜〜……」

大きく息を吐く、虫の奏でる音色が聞こえる。人の喧騒と絶妙な感覚で歌を奏でる。
それを聞いていると足音が聞こえて来た。

シグナム「むっ、シリウスか……」

シリウス「ありゃ、シグナムじゃん。どったの？」

シグナム「いや、少し静かな所で休みたいと思ってな。少々疲れた」

シリウス「此処空いてるからどうぞ〜」

そう言って隣をポンポンと叩いた。それに軽く礼を言って座る。此処からは、明るい光に彩られている村の全貌が見えた。そこかしこに人の姿がありその中でロイド達も見えた。
周囲を村人に囲まれて酒を勧められていてそれの対応で忙しそうだ。

シリウス「出会いって不思議だよね～」

唐突にシリウスが喋り出した。

シグナム「いきなり何だ？」

シリウス「俺ってずっと一人だったんだ、それがロイド達と出会ってからはこんなにも沢山の人と関わって語り合って、遊んで、沢山の出会いがあったんだ。一人だった俺の周りには何時の間にか守りたい者がたくさん出来た」

しみじみと語るシリウスをシグナムは驚いた顔で見ていた。普段ふざけている所しかあまり見ていなかったからこの様に真面目な感じで話すのは初めて見たからだ。確かに出会いとは不思議なものだ、自分達も主はやてと出会いそこからなのは達と出会い、そしてロイド達と出会った。幾つもの出会いの中で何時の間にか主はやてだけでなく他にも沢山の守りたい者ができた。そこでふと、懐にしまっていた物を取り出した。
それは、あの時、使徒ジークから渡された古びたペンダントだった。

それを開くと中には自分とジークの二人が写っている写真がある。
シグナムが見ているペンダントが気になってシリウスが覗きこんだ。

シリウス「この写真に写ってるのシグナムと……誰？」

シグナム「前回街を襲撃した使徒の一人蒼火の騎士、ジークだ」

シリウス「使徒の！？へぇ～シグナムの知り合いだったのか～」

シグナム「だが、私には彼との記憶がない。プログラムとなった時に消えたのか…それとも何か別の事が原因で失ったのか…兎に角私にはジークとの記憶がない。だが、出会ってしまった。この者が私とどんな関係だったのか、それが知りたい」

シリウス「案外、シグナムのこれだったんじゃない？」

そう言って小指を立てるシリウス。それを見て見る見るうちに顔を真っ赤にさせるシグナム。

シグナム「ば、ばかな、そんな事ありえん／／／／／！」

シリウス「いやいや、世の中ってのは意外と簡単なもんだよ～？結構進んでた仲だったりして……きゃぁ～意外と積極的なんだね、シグナムって～／／／／！！」

シグナム「なっ／／／／／／！？」

思わずその光景を浮かべてしまってシグナムも赤面する。それを見てケラケラ笑うシリウスを見てからかわれた事に気付いて今度は怒りで顔を真っ赤にした。

シグナム「き、貴様／／／／／／！！」

シリウス「おおっと、こんなとこで抜刀すんなって！？それに、それを想像したのはシグナムじゃん！俺は可能性を言っただけだよ！？」

シグナム「……はあ、貴様に話さなければ良かった……」

溜息を吐いてレヴァンテインをしまう。

シリウス「別にさ、そんな事一々深く考える必要なんて無いじゃん」

シグナム「何故だ？」

シリウス「だって、重要なのは今で、昔なんて如何でも良いって訳じゃないけどあまり必要性は無いと思うな～。だって、思い出って消えたとしても何時かひょっこり顔を出すもんだし必死になって思い出そうとするだけ疲れるだけだよ？大事な事は今シグナムがジークって奴と如何いう関係になりたいかって事で昔の関係なんてその後でも十分じゃん」

シグナム「む……」

言われてみれば確かにその通りだ。昔の自分が彼と如何いう関係だったか知ったとして自分を変えられるか？
答えは否だ。自分は今で満足しているし昔の事が思い出せなくても悲しいと思った事は殆どない。
なら、答えを求めても今は意味があまりない。シリウスの言うとおり今、自分が彼と如何いう関係になりたいのかという方が重要だ。
そこでふと、先程シリウスが言った関係が思い出されて自然と赤面してしまった。

シリウス「おやおや？一体何を思い浮かんだのかな？」

ニヤニヤと笑ってシグナムを見ている。

シグナム「う、うるさい／／／／／！何も考えてなどおらん！！…
…だが、今回の事は助かった…ありがとう」

最後は低く呟く程度で言ったがシリウスには聞こえていた様で凄く驚いた顔をしていた。

シリウス「……ふっ、明日は雪が降るな…」

シグナム「貴様はそうやって人の感謝を無下にして怒らせるのが好きなようだな……（＾＿＾メ）」

シリウス「すんませんでした…ｏｒｚ」

素直に土下座して謝るシリウスに毒気を抜かれ再び溜息を吐いて手にしたレヴァンテインをしまう。
全く、やはりこの男は自分は苦手だとシグナムは思うが、不思議と嫌いにはなれなかった。

シグナム「貴様はもう少し真面目に出来ないのか？」

シリウス「無理無理～♪こっちが俺の地だもん」

ケラケラと笑うシリウスを見て再び溜息を吐くのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

シグナムとシリウスが会話している場所から少し離れた木陰にはやては隠れていた。
シリウスがいなくなっているのに気付いて探したら今の現場に出くわしたという所だ。

はやて「……」

距離が離れているせいで会話の内容が聞き取れない。それでも、シリウスが楽しそうに会話をしている。それだけで胸がチクリとした。時々シリウスが他の女性と話をしているのを見ているだけでその様な感覚が湧き上がるのだ。

はやて（なんでや？何でシリウス君がシグナムと楽しそうに話しているの見てるだけでこんなに……）

また胸にチクリと痛みが走る。この場から逃げたい…この場から逃げて今の事を忘れたい。
けど、そう思うだけで実行しようとは思わなかった。

そうして悶々としているとシリウスが立ち上がりシグナムと別れた。
そして、シグナムが今度は地面に仰向けに倒れ空を見上げ自分の目の前にペンダントを持って来る。

そこになるべく平然とした面持ちで近づく。

はやて「シグナム、そこで何してるんや？」

シグナム「主、少し夜風に当ってたのです」

はやて「ほうか、それは何や？」

シグナム「これは……使徒の一人から渡された物です」

はやて「使徒やて！？」

シグナムは頷いて先程シリウスと話していた内容を語る。

はやて「そっか、シリウス君はそんなこと言っとたんか……」

シグナム「はい、大事な事は今で過去の事等後で知ればいい、と…」

前向きなシリウスらしい言葉である。彼はそんな事に縛られない感じだ。

はやて「そのシリウス君は何処に行ったんや？」

シグナム「もう寝ると言って部屋に戻った様です。主は如何するのですか？」

はやて「ん～、うちも今日は疲れたしもう寝ようかな」

シグナム「そうですか。私も少ししたら休もうと思います、明日は忙しくなりそうなので……」

はやて「ほんなら、先に寝るで。おやすみ」

シグナム「おやすみなさい、主はやて」

シグナムと別れ部屋に行こうとしたがシリウスの部屋の前を通り過ぎた時ふと、動きを止めてしまった。

はやて「……」

そっと部屋を開けてみるとベッドでぐっすりと寝ているシリウスがいた。
近づいてその寝顔を見る。普段は見せないあどけない表情で寝ていた。

はやて「ホンマは寝てなかったりして……？」

そっと頭を撫でるが全く動かない。もう少し近づいてその顔を覗き込む。
だが、やはり起きなかった。暫しぼうっとする。

はやて「……はっ！」

そして気付いたら何時の間にかシリウスのベッドに潜り込んでる自分がいた。

はやて「うちは何してんや……」

自分が起こした行動が理解できないと頭を振ってベッドから抜け出そうとしたが寸での所でピタリと動きを止めた。

はやて「……やっぱ一回だけ…」

そうだ、これは何時もの仕返しだ。朝起きた時目の前に自分がいたら如何いう反応をするのか、それを見てやる。

そんな事を考えていると段々と眠くなってきてそのままはやても眠ってしまうのだった。

---

翌朝

シリウス「……んぅ～」

朝日が顔を照らしシリウスは目を覚ます。起き上がって固まった体をほぐす様に伸びをする。
起きようとして手をついた時何か柔らかいものに触れる。

シリウス「ん？」

その手の先を見て見るとそこには何故か、はやてがいた。

シリウス「……」

寝起きで動きの鈍い脳をフル稼働させ昨日の事を思い出すが、はて？何処ではやてを連れ去ったのだろうか？

昨日の晩はシグナムと軽くお話をした後そのまま寝た様な気がするのだが……？

シリウス「何で此処にはやてが…！？」

もしかして自分が部屋を間違えたのか！？でも確かに自分の部屋で寝た筈なのだが……

はやて「んん～～……」

横になっていたのが仰向けになる。そしてまたリズムよく寝息を立てる。その表情はとても可愛らしかった。

シリウス「うわ／／／／／／」

そして寝返りしたせいで服が少し肌蹴て胸元の白い陶器の様な地肌が見える。
それが何ともはや……艶めかしさを醸し出しておりシリウスも一瞬だけ頭がクラッとした。
だが、何時までもその格好をさせていると風邪を引いてしまうかもしれない。
意外とこの地は昼はポカポカ陽気で非常に住みやすいのだが朝方は少し冷え込むのだ。

シリウス「ふぅ～、全く困ったお姫様だね……」

そう呟いて少し乱れている服を治してあげようとして掴んだその時、

はやて「ん……んん～…？」

はやてがパチッと眼を開けてしまった。

それでは、はやての視線で今の現状を見てみよう。
目を覚ますと目の前にシリウスの顔がある。まあ、これはいい（いいのか!?）、だが、彼の手が自分の服を掴んでいてそこだけ肌蹴ている。……こ、これは…まさか／／／／／／!?

はやて「い、いやあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

結果はまあ予想通りの絶叫。シリウスの手を弾き飛ばしそのまま片手は肌蹴ていた服を掴んで自分の胸元を隠す様にしもう一方の手を大きく振りかぶって…

シリウス「ちょっ!?ご、誤解だって!今のははやての服の乱れを直そうとS――」

はやて「うるさいうるさい!この、変態～～!!!!」

朝一にその声と良い音が村一帯に響き渡った。

――

シリウス「むっす～～～～～～#」

はやて「ご、ごめんなシリウス君…」

そう言って謝るはやてを無視するかのようにむっす～と頬を膨らませズンズンと歩いているシリウス。
普段の彼とは思えない様な怒りっぷりだ。その頬には掌の跡がくっきりと付いていた。

クラウド「シリウスがあんなに怒ってるの見るの久しぶりだな。一体何があったんだ？」

なのは「はやてちゃんが何かしたみたいなの」

ガルド「大方、シリウスの部屋に忍び込んでそのまま一緒に寝て、朝起きた時シリウスがはやての乱れた服を治そうとした時はやてが起きて勘違いされたままビンタされたんだろうよ」

フェイト「何か、凄い推測だね……」

ガルド「俺も三度くらい経験してるからな……」

セフィリア「あう……／／／／／／／」

ガルドがジト目の視線を送る先にはセフィリアがいて彼女は頬を赤くして少し小さくなっていた。
如何やら今朝のあの二人と同じ様な事が起きた事があるらしい。

経験者は語る…だ。

ガルド「っま、少ししたら元に戻るだろ。シリウスもそこまで根には持たないだろうし…多分な」

ヴィータ「でもよ、ホントにシリウスのヤローが事をしようとしかもしれないじゃねえか？」

ガルド「それはないな、シリウスは人に悪戯はするがそういう事は絶対にしなかったぞ」

ロイド「ああ見えてちゃんと人を見てるからな～」

全員シリウスとはやての様子を見る。必死に誤ってるがシリウスは全く返事もしなかった。

はやて「ホンマにゴメンって、うちが悪かったって」

シリウス「……フンッ！」

前に回り込んで手を合わせて謝ってもシリウスはそっぽを向いて話を聞こうとしない。

はやて「ゴメンって、何でも言う事聞くから……」

シリウス「……何でも？」

その言葉にピクッと反応してはやてを見る。だがその眼つきは少し鋭く突き刺すような視線だった。
普段と違う様子に少し怖気づくはやて。

はやて「うっ、で、出来る範囲なら……やけど…」

シリウス「そう……それじゃあ…」

そう呟くと突然はやての腰に手を回して抱き寄せた。
そして、はやての首筋に吸い付く様に唇をつけた。

はやて「あっ……」

痺れるような感覚が襲ってきて体を震わせた。そして、唇が離れてそのまま耳元に近づき囁く様に語る。

シリウス「俺はねそういう交渉の仕方は嫌いだよ？これからは気をつけてね？」

そう言って離れるとそこには普段通りのニコニコしたシリウスがい

た。

シリウス「それじゃあ、今日はその痕は絶対に消さないでね～♪」

はやて「へっ？…ああっ！？」

鏡で見て見ると首筋にはクッキリと痕が付いていた。所謂キスマークと言う奴だ。
しかも、その痕は絶妙な位置に付いており外気に晒される様なつまり人に見えやすい位置に付いていた。

シリウス「はやては可愛いからそこらの馬鹿共に手を付けられない様にしないとね～♪」

ご馳走様～♪と言ってケラケラ笑うシリウス。
それを見てプルプルと震えるはやて、今度はこっちの怒りの臨界点が越えた様だ。

はやて「そ、そんなん出来るか～～～～～～／／／／／／／／／／／／／／／／！！！！！」

シリウス「約束は守ってね～♪もし消したら、もう一回付けちゃうぞ～♪」

はやて「うが～～～～～！！！！！」

追いかけっこが始まる。アハハ～と笑うシリウスとうが～っと怒り心頭のはやて、でもそれは体の奥底から湧きあがる恥ずかしさを隠す為であって、少しでも止まってしまえば全身が恥ずかしさのあまり沸騰しそうだった。

それを呆然と見てる全員。

クラウド「随分とまあ大胆な事を……」

セフィリア「はわわ／／／／／」

なのは（わ、私も…カイン君にしてもらったら…はわわわわわわわ／／／／／／／／／／／／！！）

カイン「アホな事してないで村長のとこに行くぞ～」

シリウスの行いを見て真っ赤に顔を染める女性陣、それを何の事やらと言う風な感じの男性陣。

さっさと行くカインを筆頭に歩くロイド達、その後を慌てて追いかける。

シリウス「照れてるはやて、可愛い～♪」

はやて「うっさいわ、ボケ～～～～！！！！」

……まだ追いかけっこしてたのね……

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――――

村長「それじゃあ、皆お願いね～！」

さっそくクエストを受注する。内容はご覧の通り、

『動く火山』

参加者

高町なのは、カイン・レオンハルト、クラウド・ケリオン、セフィリア・ドム・バロム（保険としてガルドは待機）

場所　火山

狩猟対象

グラビモス通常種

現在の狩猟環境は安定？

『疾風の暗殺者』

参加者

フェイト・T・ハラオウン、バルド、エリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエ＋フリード

場所　水没林

狩猟対象

ナルガクルガ

狩猟環境は不安定

『砂漠に潜む結晶』

参加者

ティアナ・ランスター、スバル・ナカジマ、ロイド・アーヴィング、ティファ・フューストン（保険としてコレットは待機）

場所　砂漠

狩猟対象

アクラ・ヴァシム

狩猟環境は不安定

『翡翠の魚影』

参加者

八神はやて、シグナム、ヴィータ、シリウス

場所　密林

狩猟対象

ガノトトス亜種2頭

狩猟環境は安定

となった。

移動方法はそれぞれ違く、なのは達は飛行船で、バルド達はアプトノスと言う草食竜の引く竜車に乗って、ロイド達もはやて達も比較的近いので同じくアプトノスで移動する事になった。

ロイド「それじゃあ、村長行ってくるよ。アル、レイ、ウル、レンも頼むぜ」

それに頷いて応えてレイ、レンは空高く飛び上がり、アル、ウルは穴を掘って姿を消した。
４頭とも別々の依頼（獲物を捕食するため）をする為に姿を消したのだ。

ロイド「それじゃあ、行こうぜ！」

それぞれ目的地に向かう為に移動を開始するのだった。
彼女達を待つのは弱肉強食の大自然の世界、強い者が生き残り弱い者は強者の糧となる。

手を振って見送る村人達に此方も応えつつ自分達の向かう先に一体どの様な世界が広がっているのかそして、ロストギアは見つかるのか、期待と緊張が綯い交ぜになって進むのだった。

# 第三十三話（後書き）

という訳でやっちゃった。因みにあの村にはまだまだ沢山の訳ありモンスターが共存しています。ってか、ディアブロスやっちゃったぜ♪

カイン「なのはの砲撃くらってビクともしないのかよ！？」

書いてたら何かああなった。野性というテーマで連想して書いていたらあんな感じのスペックのモンスターが出来てしまったのですよ！！

何か今後の戦いが不安だ……ｏｒｚ

ロイド「複数に分かれての戦いになるんだな？」

そこは四人一組という基本に沿って書いていこうと思います。

序でに言うとこれは２ｎｄＧ、３ｒｄ、フロンティアとかごちゃ混ぜです！！それと作者は、フロンティアはやった事ありません！！

だから妄想じゃあ！！まあ、偶に作者のやっちゃったスキルが発動してそこ可笑しいだろ！？って展開があるかも知れなかったりするかもしれませんがそこは生温かい目でスルーして頂くと嬉しかったりします。

因みに今回選んだモンスターの理由ですが…

グラ…なのはの砲撃と互角にやりあえそう……ってか超えるのか！？

ナル…フェイトのスピードを上回るのでは！？

アクラ…堅そうだから…ロイドやスバル辺りが苦戦しそう？

ガノ…水ブレスが火を吹くぜ！！

ってな感じです。あと、クエスト環境が不安定だったりするのはもしかしたら作者の気分で別モンスターが乱入するかもしれないんでご容赦を……。

では、今回は之にて！！これからも精進して頑張りますので（その頑張りが空回りしてる気がする…ｏｒｚ）読者の皆様このダメ作者を宜しくお願いします！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第三十四話（前書き）

第一回モンハン日記～！！

カイン「いきなり如何したんだ？」

いやね、折角モンハンやるんだから何となくこのダメ作者ことテッテルのモンハンしての失敗談ややらかした出来事をこの前書きに書こうかと思います。

では、

友人「よっしゃスーパーサイヤ人を眠らせたぜ！！」

テッテル「大タルGセッツッ！！」

友人「フフフ、二個だけとは片腹痛し！！俺は何と改造して更なる進化を遂げた！！！見よ！！！タルG無限置き～～！！」

テッテル「モンハンなめんな！！貴様のその歪み……この俺が破壊する！！」

友人「ちょっ！？もう少し待て！！あと少しで二十いく……」

テッテル「竜撃砲……ファイヤーーーーー！！」

友人「ギャアアアアアッス！？」

友人は力尽きた……

そんな一時……では、本編をどうぞ！！

皆も改造なんてしちゃダメだぞ？テッテルとの約束だぞ？破ったら

……竜撃砲だぜ！！

# 第三十四話

クエスト名『動く火山』

参加者

高町なのは、カイン・レオンハルト、クラウド・ケリオン、セフィリア・ドム・バロム（ガルドは控え）

場所

火山

狩猟対象

グラビモス通常種

狩猟環境は安定？

なのは「ガルドさん、グラビモスってどんなのなの？」

飛行船に乗っている間になのはは相手がどんなのかガルドに聞いてみた。

ガルド「グラビモスは非常に硬い甲殻で身を包んだ別名『鎧竜』と呼ばれている。その硬さはこの世界にいるハンターの使う近接武器の多くを弾くほど堅いそれ故に銃弾も大した効果が無い事もある」

なのは「そんなに！？」

ガルド「それに、気をつけたいのは防具すら焼き尽くす奴の吐く熱線だ。大抵の者はこの攻撃で一瞬で焼き尽くされる。それに、接近する者には睡眠効果のガスと発火性の高いガスを噴出して迎撃して来る。それに、その重装甲の体を使った体当たりや踏み潰し、巨大な尻尾による攻撃など攻撃バリエーションも豊富だ」

カイン「だが、奴は自重が重い所為でそこまで速くは動けない」

その会話にカインも加わった。その手には緑の液体の入ったビンがあった。

なのは「それは？」

カイン「これは、回復薬。傷の治癒を促すものさ」

話によると相手は強大な力を持つ生物だからこれ位の準備をしないと非常に危険なのだと言う。
人の力はこの世界では非力だ。しかし、それでも人は知恵を絞ってこの様に戦ってきたのだとカインは言った。

セフィリア「もう少しで目的地だよ。皆、降りる準備をして」

その声に三人も降りる準備を始めた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

？？？［ギョオギョオ！！］

火山到着して内部を散策していると目の前に毒々しい赤い体色の大きな生き物がいた。それは、四頭で編成を組んで襲いかかって来た。

カイン「壱の太刀、霞！！」

一振りで幾つもの斬撃が発生してそれを切り裂く、血飛沫が飛ぶ。
しかしそれでもそれは一瞬仰け反るだけで直ぐに体勢を立て直して

再び飛び掛かって来た。

なのは「アクセルシューター、シュート！！」

幾つもの魔力弾を飛ばす。それを持ち前の野生の本能で避けなのはに肉薄してきた。

大きく飛び上がって上から押しつぶそうとしてくるがそれを右にステップして避け、レイジングハートをブレードモードに切り替え斬り払いした。しかし、一撃では倒れずその目は未だ生気を爛々と輝かせていた。

その生物の名は『イーオス』、火山や沼地などに多く生息しており群れで行動する『鳥竜種』と呼ばれる種類だ。姿は初めに見たランポスと似ていてこれもまたコンビネーションが非常に良かった。一頭が突撃して相手の意識を自分に集中させている間に他の者が回り込んだり上から奇襲を仕掛けてきたり毒液を吐きかけてきたりと中々如何して良い動きをする。

クラウド「ツインバレット！！」

両手の銃を連射し一体の動きを止める。

クラウド「まだだ！セッシブバレット！！」

そこで終わらず更に弾幕を厚くし最後の一発が頭部を撃ち抜いて一頭のイーオスは崩れ落ちた。
セフィリアは飛び掛かって来たイーオスを横に滑る様に動いて回避し側面を取った。

セフィリア「水影刃!!」

更に残像が残る程素早く横に滑る様に動きつつ鞘で敵の頭部を叩き怯ませて背後を取った。

セフィリア「一閃!抜刀式、風牙絶咬!!」

そこから素早く抜刀し構えて高速突進突き。イーオスを通り過ぎ鞘を納めると同時にイーオスも倒れた。

カイン「壱の太刀、水蓮!!」

姿勢を落としてそこから水を纏った刀身で連続で斬り最後に斬り上げる。打ちあがったイーオスを追撃する様にカインも飛び上がる。

カイン「弐の太刀、焔桜!!」

炎が纏い空中で連続斬り、最後に斬り落としでイーオスを地面に向かって叩き落とす。
それに瞬時に移動しカインは地面に降り立ち落ちてくるイーオスを雷切を構えて迎え撃つ。

カイン「参の太刀、氷菊！！」

最後に刀身に氷が纏い地面に落ちる寸前に通り過ぎざまに斬る。
雷切を納めると同時にイーオスの胴体が真っ二つになって落ちた。

なのは「アクセルシューター、シュート！！」

なのはの魔力弾をイーオスは初見なのに避ける。これにはなのは驚いている、まさか自分の攻撃を初見だけでまるで見えているかのように横に前に後ろにステップして避け急に飛び掛かって来た。
それをギリギリで避けブレードモードに切り替え斬り払いした。
その一撃で仰け反るイーオス、その隙に離れバスターモードに切り替え照準を合わせる。

なのは「ショートバスター！！」

近い敵に対して有効打となる砲撃を撃ち込んだ。それの直撃を受けてイーオスは吹き飛び再び立ち上がる事は無かった。

なのは「ふぅ～…」

思わず息を吐く。これがカイン達が歩んできた戦いの道の一つ、そしてアル達の生きてきた弱肉強食の世界。自分の眼前に広がるのは本等でしか見た事のないまさに『恐竜』の様な生き物が闊歩している。それだけではない、人と同じ様な大きさのハチや猪、ハッキリ言えばこの世界は何もかもが常識というのが通用しない。生物の一匹一匹が生存本能を全開にして生き残る為に戦っているのだ。

なのは「こんな環境の悪い所にも生物ってるんだ……」

クラウド「そうだな」

その声に振り向くとクラウドがいてその手には剥ぎ取った先程のイーオスの皮があった。それをクラウドは丸めて腰に付けているポーチに入れた。流石になのはは剥ぎ取りは遠慮した。

クラウド「今回のターゲットはこいつじゃない。もっと大きな奴だ」

なのは「もっと大きな……」

そう言われて想像するのは山より大きな巨大生物だった。そんなのを相手にして果たして生き残れるのだろうか?不安そうな顔をしているなのはを見て軽く笑うクラウド。

クラウド「安心しろ。今想像した奴よりも小さい。けど、まっ油断すれば一瞬であの世行きなのは確かだがな」

カイン「クラウドあんまなのはを脅すなよ？」

セフィリア「そうだよ。なのはは始めてこの世界に来たんだから不安になる様な事はあまり言わない方が良いと思うよ？」

そこに二人も来てクラウドの発言を窘める。因みにガルドは一人ベースキャンプで待機となっているが本人はそういうのが嫌いなのでおそらく別ルートで採取などをしているだろう。

カインは地図を取り出し現在位置を確認して再び散策を開始した。段々と山頂に向かって登っていく。その先々でイーオスの群れと戦闘になったが蹴散らしていく。

時折噴き出る火山ガスにも驚かされながらも開けた場所に出た。辺りには溶岩がまるで生きている様に揺らめいていて襲ってくるのではないかと思える。

そして、それはいた。此方に背を向け溶岩が固まって壁の様になっているそれを食べている様だ。

クラウド「いたぞ……」

なのは「あれが、グラビモス……」

それは正しく動く山と表現しても良かった。白というよりは灰色に近いか？その様な体色の岩でも張り付いたかのような甲殻に覆われ体に比べて少し小さな頭、被膜の付いた翼（飛べるのかどうか怪しいが…）、そして一振りで岩の壁すら砕く事の出来そうな巨大な尾、棍とも言えそうな形だ。

カイン「周囲には邪魔な奴は……いないか」

セフィリア「それじゃあ、背後から一撃を加えて戦闘開始かな？」

それに頷いて其々の得物を構えて動いた。その時！

？？？［ギョオギョオォ！！］

先程戦ったイーオスの声と似た、しかしそれよりも野太い鳴き声が聞こえその方向を見るとそこにはイーオスよりも一回りも二回りも大きな個体で紫のトサカを付けた生き物がいた。

セフィリア「ドスイーオス！？」

クラウド「ちっ！厄介な奴が出てきやがった！！」

天に向かってそれが鳴くと何処からともなくイーオスの群れが集結

してきた。
そして、その声に反応してグラビモスも此方を見る。人とイーオスがいたのを見つけグラビモスが姿勢を低くして威嚇の構えを取る。
如何やら敵と認識された様だ。

カイン「くそっ！奴にも気づかれた。なのは！セフィリアと一緒にイーオス共を相手してくれ、クラウド俺達はグラビモスの注意を引き付けるぞ！！」

クラウド「任務了解……」

カインとクラウドが駆けだし前方にいるイーオスを蹴散らし包囲網を突破する。
そして、クラウドが一発撃ち込むとグラビモスはカインとクラウドを敵と認識し二人に襲いかかった。

セフィリア「なのは！早く片付けて二人を援護するよ！！」

なのは「う、うん！！」

ドスイーオス［ギョオギョオォ！！］

ドスイーオスの乱入により戦闘は想像を超えた戦いとなった。

なのは「アクセルシューター、シュート！！」

幾つも魔力弾を飛ばす。それで数匹の同胞が弾き飛ばされたのにも拘らず気にせずになのはに飛び掛かって来た。それを横に避けて再び魔力弾を飛ばすと左右にステップして避ける。

セフィリア「潜身脚！！」

足払いからの回し蹴りで一体を吹き飛ばし、その後ろにいたイーオスも弾き飛ばした。
更に距離を詰め抜刀、敵を×状に斬り裂く砕氷刃を繰り出し一体を沈めた。

セフィリア「邪魔です、衝皇震！！」

前方の広範囲を薙ぎ払う衝撃波と斬撃を繰り出す。数匹が斬り裂かれ崩れ落ちる。それを乗り越えてイーオスが次々に飛び掛かる。

セフィリア「はあぁぁぁぁぁ！！」

来る敵を斬り上げ仰け反ったところに蹴りを打ち込んで吹き飛ばし、背後から来た敵を横にステップして避け頭部目掛けて飛んで回し蹴りで弾き飛ばす。そこに毒液を吐いてくるが闘気をぶつけて吹き飛

ばしそれの首を斬り落とし次に来たイーオスも蹴り上げで浮かせた後上空に飛んだ所を愛剣を縦に振り下ろして両断した。

なのは「レイジングハート、ブレードフォーム！！」

レイジングハート［イエス、マスター！ブレードフォーム！！］

なのは「行くよ！！」

イーオスの群れに肉薄、正面のイーオスをふっ飛ばし左右から飛び掛かって来た二頭を一歩バックステップして避け魔力刃を振るい首を落とす。背後に回った一頭を振り向きざまに斬り捨て、其の侭回転し周囲のイーオスを牽制し動きを止めさせ真上に飛び上がりレイジングハートを構える。

なのは「ブレードシューター、シュート！！」

彼女を中心に剣状の形を取った魔力陣が形成され一直線に射出された。

アクセルシューターの貫通性能が上がったものと考えて欲しい。

多くはその射線上から避けたがそれでも数頭が貫かれ崩れ落ちた。

少し離れた所になのはが着地、そこに突撃して来るイーオスの群れにレイジングハートの刃先を構える。先端には既に魔力が集中している。

なのは「ブレード、バスターーーーー！！！」

刀身の様な形をした砲撃が撃ち出される。その射線から交わし歩みを止めないイーオス。

なのは「はあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

そこに彼女はレイジングハートを構えたまま動いた。砲撃もその後を続く様に動きその先にいたイーオスを飲み込んだ。そのままなのはは横一閃、一気に振り抜いた。薙ぎ払った後にはイーオスはいなかった。

ドスイーオス［ギョオッ！！！］

なのは「くっ！」

そこに痺れを切らしたドスイーオスが肉薄、なのはを押し潰そうと飛び掛かる。それをギリギリで避け胴体に斬りかかる。魔力刃は通ったがその赤い鱗に掠り傷程度しかついていなかった。

なのは「堅い！？」

ドスイーオス［ギョオッ！！］

驚愕するなのはにドスイーオスは噛みつき攻撃を仕掛ける。自分の頭の直ぐ傍を大きな口が通り過ぎる。それは自分の頭など一飲みされそうな大きさでその口からは何か肉が腐敗した様な異臭がしてくる。もし噛み付かれでもしたら…想像もしたくも無い。
そこから連続で噛みつきと爪による攻撃を繰り出す。それを紙一重で避けるが自分の背後には溶岩の海が迫っていた。

なのは（このままじゃっ……！）

セフィリア「なのは、伏せて！！吹き飛びなさい、烈震虎砲！！」

その声に咄嗟に伏せるとセフィリアがドスイーオスの背後から闘気をぶつけてふっ飛ばした。
その先には溶岩の海、その中にドスイーオスは落ちた。
だが、溶岩の海の中でドスイーオスは立ち上がる。ジュ～という音が聞こえるがそんな事等大した事がない様に体を震わせている。その瞳には未だ獲物を狙う狩人の気配を漂わせていた。

なのは「溶岩の上に立っている！？」

セフィリア「流石ドスイーオス……あれくらい大したことない様だね」

ドスイーオスが雄たけびを上げる。如何やらなのはとセフィリアに対して怒りが爆発した様だ。

口からは白い息が吐き出され放たれる殺気が更に鋭くなった。

セフィリア「怒り状態だね……動きが素早くなるから気をつけて」

なのは「う、うん！」

ドスイーオス［ギョオギョオッ！！！］

溶岩を蹴り一気になのは達の上に飛び上がる。それを左右に後退し避けセフィリアが抜刀、斬りかかるがドスイーオスはそれを口で受け止める。そこになのはが背後に回り込んで斬りかかるがその細い尻尾で弾き飛ばした。そして、押し合いでは負けないとでも言う様にドスイーオスはセフィリアを押し返す。そして、喉が膨らみ口から紫色の液体が吐き出された。

セフィリア「くっ！！」

大きく横に飛んで避ける。その液体はセフィリアの背後にあった植物に掛かる。すると、植物は一瞬でジュ～と音を立てて枯れてしまった。あんな物を被ったら……想像したくはないものだ……。

クラウドとカインはグラビモスを上手く誘導してなのは達を視界から外させた。

その巨体を使った体当たりを敢行する。それをカインは避けて、その懐に潜って雷切を振るった。
しかし、それはその鎧の様な甲殻には掠り傷を付けた程度で大したダメージを与えていなかった。

クラウド「ツンバレット！！」

カインに意識を向けたグラビモスを銃を連射して牽制する。
その弾丸は装甲を軽く傷つける。クラウドに意識が向きグラビモスは突進を開始それを余裕を持って回避した。そこにカインが再び肉薄し高速で太刀を振るう。そこでグラビモスは真上に飛び上がり全身を使ったプレス攻撃を仕掛ける。その巨躯の下からカインは飛び退くと同時に地面に落ち周囲を振動させた。

カイン「ちっ、クラウド！なのは達の方は如何だ？」

クラウド「イーオスの数は減ってるがドスイーオスに苦戦してるようだ」

カイン「なら、グラビモスにも手伝ってもらうか！！」

何を思いついたのかカインはわざとグラビモスの正面に立って雷撃を飛ばす。
すると、グラビモスは体を屈めて突進を開始した。

カイン「なのは、セフィリア！そこから避けろ！！」

紙一重でそれを避ける。グラビモスは避けられた事に気付かずそのまま走り抜ける。

なのは「ふにゃ？」

セフィリア「ふえ？」

地響きと共に何かが迫って来る感じがするので視線を向けるとグラビモスが此方に突進してきた。

……グラビモスが来た……グラビモスが…来たあああぁぁぁぁぁぁ！！？

なのは「にゃあーーー！？」

セフィリア「うわわわわ！？」

慌てて進行方向から逃げる。それは、其の侭突き進み目の前にいたドスイーオスを巨大な足で踏み潰した。

ドスイーオス［ギュオォォォォ……］

数トンはいきそうな体重に踏み潰されドスイーオスは低く鳴いて動かなくなった。
親分が死んだのを見てイーオス達も散り散りに逃げて行った。

カイン「よし、上手く行った」

セフィリア「せめてもう少し早く言って!?危うく潰されるところだったよ!?」

クラウド「結果オーライだろ?」

なのは「もし潰されたら如何する気だったの!?」

クラウド「そこは……あれだ、ギャグ補正で何とかなるだろ?」

な・セ「「ならないよ!?」」

カイン「何時までも遊んでるなよ?来るぞ!」

体勢を整えたグラビモスは再び突進、その射線から逃れクラウドが干将・莫邪を連射、堅い甲殻によって弾かれた。なのはも魔力弾を複数飛ばす。全て直撃するが平然とした顔で此方に顔を向ける。

なのは「それなら、ディバインバスター・ゼロ!!」

薬莢が飛び出し強力な砲撃が放たれる。

これなら、いける！そう思っていた。……しかし、

グラビモス［グオォオオォォォォォォォ！！］

軽く頭を擡げると口から炎が溢れだしそこから巨大な熱線が吐き出された。
それはもはやレーザーの様でなのはの放った砲撃と激突した。

なのは「くっ、ううぅぅ！！」

威力は互角しかし、グラビモスが熱線を放ちながら一歩一歩此方に歩き出してきた。
徐々に威力が上がり始めなのはが押され始める。

なのは（そんな、押されてる！？）

踏ん張っていた足が段々と下がり始める。レイジングハートを持つ手が震え始めた。そろそろ限界に近くなってきた。そして、なのはの砲撃が撃ち負けし消し飛んだ。そのまま熱線がなのはに向かって飛んでくる。

セフィリア「なのはっ！！」

なのは「っ！？プロテクション！！」

咄嗟にプロテクションを展開する。そのまま熱線がなのはの張った障壁に激突し防御壁ごとなのはをふっ飛ばし岩の壁に激しくぶつかる事になった。

なのは「かはっ……！」

カイン「なのは！！」

崩れ落ちるなのはをカインが直ぐに抱きすくめ支える。頭部を少し怪我したのか出血していた。
そこに追い打ちをかける様に再び熱線が放たれた。

カイン「くっ！ヤタノカガミ！！」

純白のマントが広がりなのはとカインを包み込んだ。そこに熱線がぶつかるがマントに直撃する手前で張っていた一枚の防御壁にぶつかり四方に避ける様に弾かれた。しかし、その障壁も直ぐに吹き飛びヤタノカガミに直接激突する。

カイン「ぐうぅぅぅぅ！！」

自身の魔力が大きく削られているのが分かる。カインは更に魔力量を上げて耐える。

クラウド「お前の相手はこっちだ！！」

バスターモードに切り替えた干将・莫邪をグラビモスに向け引き金を引く。
巨大な砲撃が放たれグラビモスに直撃！

グラビモス［グオオォォォオオオォォ！？］

突然の強力な一撃で驚き熱線を止めて大きく仰け反る。その隙にセフィリアが青い魔法陣を展開した。

セフィリア「氷刃、アイシクルペイン！！」

グラビモスの上空から超低温の氷刃が降り注ぐいきなり冷たい攻撃に驚いたグラビモスは攻撃してきた二人を標的を絞り二人に熱線を放つ。それを回避してセフィリアは接近して抜刀、砕氷刃を放つ胴体を×状に斬り裂きクラウドが射撃した。

クラウド「カイン！今の内に治療を！！」

カイン「すまない！！」

なのはを降ろし術を展開する。

カイン「癒しの風よ、かの者らを癒したまえ“ヒールウィンド”」

なのはを中心に優しい風が吹き抜ける。その風がなのはを包み込むとあっという間になのはの傷を治した。

カイン「なのは、しっかりしろ！」

なのは「ううん……カ、カイン君？あ、あれ……痛みがない」

カイン「今治癒術を使ったからな。怪我は……大丈夫そうだな」

なのはの傷が治ったのを見てホッとする。

カイン「さてと、反撃開始と行くか！！」

雷切を取り出し一瞬でグラビモスに近づき高速で斬りまくる。
執拗に斬られてグラビモスは一度真上に飛び上がりその巨体で踏み潰そうとする。
それを見切ったのかカインは下がり魔法陣を展開術の詠唱を始める。

カイン「水に呑まれろ、スプレッド！！」

地面に落ちたグラビモスの下から突然間欠泉が噴き出す。それにより大きく仰け反る。

なのは「ディバインバスターーーー！！！」

セフィリア「駆けよ焔、覇道滅封！！」

なのはの砲撃とセフィリアの遠距離攻撃がグラビモスに直撃する。

グラビモス［グオオォォォオオオォォォォ！？］

それには流石のグラビモスも効いたらしく大きく仰け反る。甲殻にも大きな傷が付いた。

そこに追い打ちをかけようとカインが駆け出したその時横合いから突然熱線が飛んで来た。
足を踏ん張り大きく飛び退る。その前を巨大な熱線が通り抜ける。
それが意味するのは……

グラビモス［グオオォォォオオオオオォォォォ！！！］

カイン「もう一頭……だと！？」

溶岩の海から別の一頭が出現した。しかも、その大きさは先程のグラビモスよりも二回りほど大きかった。

クラウド「なにっ！？」

なのは「大きいっ！？」

それを見たなのは達も驚いている。狩り場の情報だと標的は一頭だった筈だそれなのにもう一頭いるとは！？

なのは「ど、如何いう事なの！？」

クラウド「恐らく、今迄この地にいなかったのがこっちに来たか。それとも、発見されていなかったかどっちかだろう」

セフィリア「どちらにしても、一匹は手負いだけど二頭同時にはかなりきついよ！」

だが、悩んでいる暇は無かった。二頭目のグラビモスが此方に突進を開始。

山の様な巨体が地響きを立てて此方に向かって来た。それを避けると一頭目がそれに合わせて熱線を放って来た。クラウドはそれを避

けた後ファンネルを射出一頭目に殺到させる。
その攻撃が煩わしい様に一頭目はその場で回転し巨大な尾でファンネルを叩き落とそうとするがそれを避けてビームを連射して来る。
その執拗な攻撃に遂にグラビモスもキレた。

グラビモス［グオオォォォォオオォォォォ！！！！］

強力な咆哮が周囲に響き渡り本能的に体が竦んだ。動きが止まったなのは達を見て二頭目が頭をもたげる。その口から横薙ぎに熱線が放たれた。

カイン「しまった！！」

クラウド「くっ！ファンネルシールド！！」

一頭目に殺到していたファンネルを全員の前に八つずつ集めファンネル自体がビームに包まれそれが合わさり巨大なシールドとなった。
それと熱線がぶつかる、激しく火花が散り熱線が通り過ぎた瞬間ファンネルが爆発して大破した。

なのは「ファンネルが……！？」

セフィリア「ちょっと、分が悪いかな？」

カイン「戦う場が狭すぎる！一端撤退するぞ！！」

それに首を横に振る者などいない。クラウドが二頭の前に拳大のボールの様なものを投げる。
それは二頭の目の前で破裂し強烈な閃光を放った。『閃光玉』モンスターの目を一時的に眩ませ動きを封じる物だ。尤も、一部のモンスターはくらっても逆に暴れるという事もあるが……
グラビモスにはこれは効いたのかその場でクルクル回転して尻尾を振りまわしたり吼えて威嚇したりと暴れる様子は無い。それを確認してなのは達は一端ベースキャンプに撤退した。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――

～ＩＮ　ベースキャンプ～

ベースキャンプに着いた時には辺りは暗くなり始めていた。
既にガルドは帰ってきており四人の帰りを待っていた。

ガルド「如何だ？狩りは成功したか？」

クラウド「生憎とまだだ。予想外の事が起きてな」

肩を竦めるクラウドの背にファンネルがない事に気付いて少し目を見張る。

ガルド「ほう、ファンネルを捨てる程の強敵だったのか？」

クラウド「違う違う、二頭目が出て来たんだよ。これは仕方がなく、だ」

カイン「取り敢えずその話は後だ。日も暮れ始めている夕飯の準備をしないとな」

そこで一端話は終わりカインはガルドが取ったという袋の中を開けてその中にある食材を選んび始める。それをなのははテントから出した椅子に座ってぼうっと眺めながら今日の戦いを思い出していた。

ガルド「如何だ、なのは？初めての狩りの感想は？」

なのは「あっ、ガルドさん。にゃはは、少し疲れちゃったの……」

苦笑いしながらそう答える。ガルドは今日の食材を集める為に色々と回っていたらしい。

そこにセフィリアが二人を呼びに来たので二人も集まるのだった。

テーブルの上には料理が並んでおりその一つを口にする。

なのは「おいしい！」

一言で言えばおいしかった。肉なんかは口の中に入れた瞬間、溶けていくような感じだった。

クラウド「やっぱ美味いな」

セフィリア「カイン、また腕を上げた？」

なのは「ふえ？これってカイン君が作ったの？」

カイン「まあ、大体はな」

何て事はないという風に言うカイン。それに、と彼は言葉を続ける。

カイン「美味いのはこの食材のお陰なんだがな」

なのは「あれ？そう言えばお肉とかって持ってきてたっけ？」

ガルド「ん？ああ、それは現地調達したもんだ」

現地調達？この辺に店でもあるのか？それはないな。この様なモンスターが蔓延る所に店など展開するなど自殺行為だろう。では、如何いう意味だ？

頭に??を浮かべているなのはを見てガルドやセフィリアが笑いを堪えている。
クラウドが代表して答えてあげる事にした。

クラウド「つまり、此処に生息していた草食竜の肉だって事だ」

なのは「えっ……（。Д。;）」

という事は今食べたのはつい先程まで生きていたものの……。

ゴーンという音が聞こえそうな程のカルチャーショックを受けて思考停止状態になるなのはだった。

そんな彼女を放っといてカインは今日起きた出来事をガルドにも分かる様に話を始めた。

ガルド「ふむ、そうなると手負いの方をさっさと倒した方が良いな」

クラウド「それが妥当だろうな」

セフィリア「けど、今日は警戒されてるだろうから迂闊に近づく訳にはいかないよ。行動するなら明日の方が良いかもね」

カイン「そうだろうな」

話が何時の間にか終了しているのになのはも気づき思考の沼から脱出した。

なのは「そ、それよりもクラウドさんのファンネルは如何するの？」

気になるのはそこだ。ファンネルを破壊されて大丈夫なのだろうか？
それにクラウドは何て事はないと笑った。

クラウド「ああ、それなら大丈夫だぞ。あれは自動修復するナノスキンって言う特殊な物質で出来てるから勝手に治って来る」

ほれ、と背を見せると確かにそこには少しだが修復されたファンネルが戻っていた。

クラウド「見事に大破しちまったが直ぐに治るだろう」

なのは「よ、よかった～」

カイン「それじゃあ今日は早く寝て明日は早めに討伐に行くか」

それに皆同意し決着は明日にしようと決めた。
そして、就寝しようと思ったのだが……

カイン「……なあ」

ガルド「如何した？」

カイン「寝床の数が足りないんだが？」

そうなのだ。此方の人数は五人、しかしテントの中にあるベッドは四つ…一人分足りなかった。

クラウド「そりゃそうだろ。狩りに参加できる人数は四人なんだから」

……という訳で……

カイン「……何故だ？」

なのは「えっと……にゃはははは……」

他のメンバーが寝た後も二人は起きていた。いや、寝付けなかったと言った方が正しいだろう。

結論から言おう今四つの中の一つのベッドにはカインとなのはが一緒になって入っている。

元々一人用のものなので二人ともくっ付くようにしないと転げ落ちてしまいそうだ。

カイン「セフィリアとガルドが一緒になって寝ればいいものを……」

なのは「うん……そうだね……」

眉に皺を作って困った顔をするカインを見て少し落ち込むなのは。
急に声のトーンが下がったなのはに首を傾げる。

カイン「如何した、なのは？」

なのは「ううん。何でもないよ……」

カインは自分と一緒に寝るのが嫌なのだろうか？何時もはヴィヴィオが一緒故こうして二人だけで、しかもくっ付くほど近い状態でいるのはグランディオンにいた時以来だ。

なのは「カイン君は嫌…なの？」

カイン「嫌って言うより……あ～、何て言うか……」

上目づかいで瞳を潤ませて見つめるとカインは歯切れの悪そうな感じでしかも視線を逸らしながら頬を掻く。

カイン「こんな風にくっ付くのが苦手って言うか、何というか…あ

～とっ兎に角！明日は早いんだ、俺は寝るぞ！」

そう勝手に話を切り上げて目を閉じた。如何やら唯恥ずかしかっただけらしい。

一人でさっさと寝てしまったカインを見て少しだけ呆気に取られていたが直ぐにクスッと笑う。恥ずかしかったのは如何やら自分だけではなかった様だ。

カインの事だからそんなこと気にしないと思っていたのだが意外と気にしていた様だ。

目の前で寝ているカインを見て昔を思い出す。

――始めて彼にあったのはある世界に調査で行った時のことだった。

その世界に降り立った時に既に何かの異変に気付いていた。それをハッキリするために歩いていてそれが街が何かによって崩壊していたと言う事が分かった。それを当時一緒だったアースラメンバーに伝えようとしたが通信が何かによって妨害されていて通信が出来なかった。

途方に暮れていた時だ自分の前に怪物が現れたのだ。

必死で逃げた。飛べば空を覆う程のカラスの群れが襲ってきて落され、地上を走れば化け物となった犬に追いかけ回され遂に自分は追い詰められて食い殺されそうになった。

もう駄目だと思った。その時だ、彼が現れたのは……。

当時の彼はフードを被っていて分からなかったが、自分を助けてそこから脱出するのを手伝ってくれた。その道中色々な事があった。

怪物の群れに囲まれたり、二メートルを超えている様な怪物に襲われたり、だがその度に彼は自分を助けてくれた。そして、自分を逃がす為にそれと単身で戦ってその後は街ごと怪物達を巨大な雷で消し去った。その後、彼は直ぐに姿を消してしまった。

それから数日たって自分の学校に新任の用務員が来たと言う噂が立ちある日の朝礼で再び自分は彼と出会った。その時は彼があの時自分を助けてくれた人だったのは知らなかった。

彼は、学校にいる時は生徒達にとっても優しくて時々驚くような事をしてしまう簡単に言えば型破りな用務員の人だった。授業参観の日には担任が風邪を引いて欠席してしまいその代わりに代理教師をやったり、運動会で何時の間にか子供の中に混じっていたりととてもハチャメチャな事をしていた。そんな彼が初めは野宿で暮らしていたのが分かって気付いたら彼を自分の家に招待して泊める様に進めていた。

そんな彼をお父さんとお兄ちゃんは何故か怖い顔をしてみていたけどお母さんに睨まれて承諾してくれてた。唯、時々彼が自分を起こしに来てくれた時に一度は起きてまた彼に抱き着いて寝てしまった事は何度もあった。それをはやて達にはよくからかいの材料として利用されたものだ。

その一年はハッキリ言えばとても充実していた。あれほど楽しかった学校生活はあれ以降無かったかもしれない。何もかもが充実していた……けど、ある時を境にそれは崩れた。

クリスマスの日、友達と一緒に新しく開店したデパートに行った時だ。

そこに何の因果か強盗が数人押し入って自分が人質にされてしまっ

た。
魔法を使えば良かったけど、自分の世界は魔法なんてものがなかったから使う訳にはいかなかった。
それに、体格差の所為で呼吸が出来なくて意識も殆どなかった。
死ぬのかとも思った、けどその時彼は来てくれた。

カイン「うちの大事な生徒に何してんだ！！！」

そう言って一瞬で強盗を持っていた木刀で打ちのめした。けど、その拍子で私はそのまま外に放り出された。彼があの時捕まえてくれなかったら地面に落下してただろう。その所為で彼も怪我してしまいその時は泣いた。その後もまだ続いた。

自分がある世界で犯罪者を追っていた時だ自分の前に謎に人物達が現れた。
その人達は私を見ていきなり攻撃をしてきた。何故いきなり攻撃されるのか全然わからなかった。
結果から言えば勝負は一瞬でついた。相手が圧倒的に強かった。
殺されるかと思った、その時彼は来てくれた。フードを被って始めて会った時と同じ格好で……
彼を見つけた瞬間に三人の人はいきなりこう言った。

？？？「やっと見つけたぞ、堕ちた神族の裏切り者め！！」

彼目掛けて三人は襲いかかった。けど、彼はそんな事は大した事が

なかったように三人をあしらっていたけど、私がそれに巻き込まれそうになった所為で強力な一撃をくらってしまった。
それの所為でマントが消えてその時始めて自分を助けてくれた人が学校の用務員の人、カインだったのが分かった。その後、彼は三人を一瞬で倒して私達の前から姿を消した。

悲しかった。何が如何いう感じで悲しかったのかはよく覚えていない。でも、悲しかった。ずっと泣いていた。それでも管理局の仕事はキチンとやった。でも、無理が祟ってあの雪の降るある日、正体不明の敵に襲撃された。体調が万全だったら遅れは取らなかったと思う。けど、疲労の所為で反応が遅れてその凶刃が自分を貫こうとしたその時、彼が再び来てくれた。
私を庇ってその刃に貫かれて……。

カイン「この子に手を出すんじゃねえ、この鉄屑があぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

一瞬、そう一瞬だった。周囲にいた敵はカインの放った見た事も無い魔法で全て一撃の名の下に吹き飛んだ。その後、それを操っていた者が逃げようとしたらしく彼はそれにすら気づいて攻撃をした。けど、それは相手を倒す事までは出来ず大怪我を負わせただけで逃げられたのだった。

その間、自分を抱きしめてくれていたけど地面に降りた瞬間に彼は倒れた。
慌てて傷口を見た時は絶句した。泣いていた私を彼は優しく涙を拭ってくれて笑っていた。そして、徐々に消えていく彼の体、そして……。

あの時を思い出して再び彼を見る。すっかり眠ってしまった彼を見ているとホッとする。
夢じゃない。夢なら覚めないで欲しい。だって、私は彼の事が……。

なのは「カイン君……」

そっと顔を近づける。こんな事するなんて卑怯だと思う、けどこんな時でしか出来ないだから……

なのは「…んっ……」

その唇にキスをする。長い口づけ彼の熱が自分に流れ込んで来るような感覚に囚われる。
彼の温もりを感じ体が痺れるような感覚に震える。
長い長いキスを止めて唇を離す。銀の糸が一瞬だけ出来て直ぐに切れて消えてしまった。

なのは「私は……貴方の事が――」

その思いを伝えようとした。けど、

なのは「っつ！くぅあぁぁ…！？」

突然頭痛に襲われた。全く原因が分からない突然の痛みに戸惑った。頭を押さえて痛みを堪えていると頭の中で何かがフラッシュバックした。沢山の人が立っている前にある一つの容器の中にいる一人の男性、沢山の人の群れに単身飛び込み太刀を振るう、鮮血の雨が降りしきる中、太刀を振り続ける男性、そして男が太刀を高く掲げるとそこを中心に巨大な雷が落ち全てを飲み込みその中央で太刀を持っていた男を残して全てが消え去り、そんな男性の周囲には沢山の仲間…その様な光景がなのはの頭の中で現れては消え現れては消えてを繰り返していた。

なのは（な、何…この光景…？だ、誰か……の記…憶？）

それは直ぐに止み少しだけ汗を流すなのは。一体今のは何だったのだろうか？

今、自分に何が起きたのだろうか？分からない。けど、今の光景は忘れてはいけない様な気がした。

この時、ガルドとセフィリアが起きていたら確信していただろう。

なのはの頭痛が『感応現象』による記憶の共有だったと……

# 第三十四話（後書き）

どうですか！？グラビモスだけでなく小型モンスターもかなり強そうですが作者的には現実で戦うとこんな感じかな？っていう風に書いてみました。
戦いはまだ終わってませんけどね……。

何か変だったりしたら生温かい目で見て下さい。

そして遂になのはにも感応現象が発生する。いえ～いやっちまったぜ～い♪

それにしても、最近見ているアニメＤＯＧＤＡＹＳに水樹奈々様が～！！
うおぉぉぉぉ！！！奈々さまぁぁぁぁ！！リコッタ役での声、マジコレットさん。
癒される～～～！！ってか他のキャラも素晴らしいですね～！！
あっ、言っておきますが別に犬耳とかそういうのに萌って訳では…いや……でも、ありなのか！？な、な、奈々様！！最高です！！
……すんません。少し暴走してました……ｏｒｚ
穴掘って埋まってきます～＝３

クラウド「あいつは何がしたかったんだ……？」

セフィリア「さ、さぁ～、でも作者は水樹奈々さんは素晴らしいっては言ってるね」

ガルド「あんな腐れ馬鹿はほっとけ。次回も読者の皆様、こんな腐

ったクソ虫を見捨てずにこれからも宜しくお願いします。なるべくこのアホを締め上げてもっと早く投稿させるんで。次回は、ティアナ達の方を書く予定だ」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

## 第三十五話（前書き）

三十五話更新！！

そして、作者のモンハン日記～！！！

ソロでG級ガノトトスを相手していた時だ……

作者「ふはははははっ！！ガノトトスなど恐るるに足らず！」

ガンランスで足元をずっと突いてた時だ、背後から近付く影……大タル爆弾背負って近づく我がオトモ……

オトモ「ニャニャ！！」

ドガ～～ンッ！！

作者「ほ！？（゜Д゜）！？」

見事ガノトトスにヒット！そして私にも～！？吹っ飛んで起き上った瞬間……

ガノトトス「プシャ～～！！」

力尽きたｏｒｚ

作者「コマアアアアアアアアアアアア！！！！！！！」↑オトモの名前

オトモに裏切られた作者である……

皆も爆弾オトモには気をつけよう。立ち位置ミスるとモンスター同士のコンボが繋がる可能性がある。あれは、泣ける！！

それでは、本編をどうぞ！！

# 第三十五話

クエスト名『砂漠に潜む結晶』

参加者

ティアナ・ランスター
スバル・ナカジマ
ロイド・アーヴィング
ティファ・フューストン
（保険としてコレットは待機）

場所　砂漠

狩猟対象

アクラ・ヴァシム

狩猟環境は不安定

夜の砂漠を歩く四人の影、冷え込む気温の中歩きにくい砂の上を歩いていた。

ロイド「さっみ～～！！」

スバル「いないね～」

辺りを見回してもあるのは砂、砂、砂の山何処にも大型モンスターの影は見当たらなかった。

ティアナ「狩猟相手は『アクラ・ヴァシム』って書いてあったけど一体どんな相手なの？」

ロイド「最近になって姿を現した甲殻種のモンスターらしいけど俺達も見た事ないんだ」

ティファ「別名『尾晶蠍』、砂漠に生息しているという位しか私達も分かってない。だから、その調査ってところかな？」

スバル「蠍かぁ～。毒とか持ってそう……うわっ、何か怖っ」

如何やら想像してしまったらしく身震いする。

ロイド「ヘックシュン！」

ティファ「風邪でも引いた？」

ロイド「こんな所歩いてたら体冷えちまうって」

ティファ「ホットドリンク飲んだ？」

ロイド「あっ……」

如何やら忘れていたらしい……慌ててポーチにあった赤い液体の入ったビンを開けて一気に飲み干した。

スバル「ロイド、それなに？」

ロイド「寒冷地帯で行動する時に飲むホットドリンクさ。これを飲めば暫くは寒い所でも大丈夫なんだぜ」

スバル「へぇ～、すご～い！飲んでみても良い？」

ロイド「ああ、いいぜ」

目をキラキラと輝かせているスバルにそれを渡す。スバルはそれを飲んだ。すると見る見るうちにスバルの顔が赤くなり始めた。

ティアナ「スバル！？如何したの！？」

スバル「か、かかかから～～～～い！！！！」

いきなり大声を上げて飛び上がる。その後も辛い辛いと言って飛び跳ねているスバル。

スバル「うぅ～舌がヒリヒリする～。ロイドこれ何が入ってるの！？」

ロイド「何って、トウガラシだけど？」

ティファ「最初は辛いと思うけど温かくなってきたでしょ？」

スバル「あれ？言われてみれば……」

気付けば自分の体の奥底から燃える様な熱が湧き出していた。

スバル「ティア、これすごいよ！何か体の奥底から温かくなって来る感じがするよ！ティアも飲んでみて！」

ティアナ「わ、私はいいわよ！「遠慮しないでさ、ほら！」だからいいって言って――――んぐっ！」

抵抗虚しくスバルにビンを押しつけられてそれを飲んでしまった。

ティアナ「～～～～～～っ！！！」

舌が強烈な辛さで燃えている様だった。だが、その後直ぐに体の奥底から
火照るような感覚が湧きあがって来てポカポカとした。

スバル「ねっ、凄いよね！」

ティアナ「た、確かに凄いわね……」

今なら何時も以上に動けそうだ。その後直ぐに再び捜索を開始する。
だが、歩けども歩けどもその様な生物は見当たらない。

ティアナ「いないわね……」

ロイド「ん？」

ロイドが突然歩みを止めて耳を澄ます。そして、直ぐに腰に差していた剣に手を添える。

スバル「如何したの？」

ロイド「皆気をつけろ、来るぞ……」

？？？［ギャアァアアァァァァ！！！］

それに全員デバイスと武器を構える。そして、それは砂の中から姿を現した。背中に特徴的なヒレを付け、胴にも胸ヒレを付け頭は特徴的な三角形をした生き物が姿を現れた。

ティファ「ガレオスを確認」

ティアナ「ガレオス？」

ティファ「砂中に潜んで音で獲物の位置を捉えて捕まえた獲物を砂中に引き摺りこんで捕食する魚竜種です」

既に戦闘モードになったティファが説明する。

ガレオスの数は全部で十数体、ティアナ達を囲むようにして砂の中を泳いでいた。

そして、一気に全員で飛びかかって来た。それを散開して回避する。避けられたガレオス達は再び砂中に潜り込み数頭ずつに分れて肉薄してきた。

ティアナ「クロスミラージュ！」

クロスミラージュ［イエス、マスター！］

周囲に魔力弾を形成し連射、正面から来る敵を迎撃する。その弾幕を鮮やかに避ける。そして、二頭が左右に分れ残りが正面から突っ込んできた。その中に一頭が砂中より顔を出して口から何かを撃ち出した。高速で吐き出された何かをティアナは魔力弾で撃ち落とすとそれは爆散して降りかかって来た。

ティアナ「なっ、これって……砂！？」

ガレオスの得意技『砂ブレス』砂を圧縮して高速で撃ち出して獲物を弱らせる中距離攻撃。その威力は並みの鉄板すら撃ち抜く程の威力だ。

続いて二頭が吐き出しその隙に一頭が接近する。そして、砂中に深く潜って次の瞬間ティアナの足元から大きな口を開けて飛び出してきた。

ティアナ「くぅっ！？」

咄嗟に体を投げ出す様にして避ける。そこに別のガレオスが襲いかかる。それに一撃を撃ち込むも大した事ではないとでも言う様にそのまま迫って来た。それを避けて魔力弾を撃つが砂の中に潜られてその攻撃は当らなかった。

ティアナ「こんな敵…やりにくいわね！！」

次々に飛び掛かってくるガレオスを避けながら魔力弾を連射するが砂の中に潜られたり大量の砂をかけられたり砂ブレスを吐いて撃破されたりした。そして、背後から一頭が飛び掛かって来た。

しかし、そのティアナは霞の様に消える。咄嗟に幻術を使って回避に成功した。本人は少し離れた所に移動してその周囲にも幻術を配置する。これなら幻術を狙った相手を迎撃して倒す事が出来ると思っていた。砂で足場が悪いが踏ん張りデバイスを構える。ザッ！と砂の音が鳴る。ガレオスは此方に気付いて高速で迫って来る。まさに海中を泳ぐ魚の様な素早さだ。幻術にぶつかるまであと少し……砂の中に潜った、来る！、と思った…だが、ガレオス達はなんと幻術を無視してティアナの前に飛び出して砂ブレスを一斉掃射してきた。

ティアナ「なっ！？」

これには驚かされた。まさかこの生物は幻術が効かないのかと思った。突然の事で動けない自分をクロスミラージュが自動詠唱による魔力弾でカバーしてくれなければ全て直撃していただろう。

後退して砂上に出ている背ビレ目掛け魔力弾を連射する。それを高速で泳いで避けまくる。着弾した魔力弾で砂が宙を舞う、砂ブレスを何頭かが吐き出す。それを撃ち落とし接近してくる数頭を迎撃す

る。ハッキリ言って今の現状は不利だ。周囲を見回し近くにティファの姿を確認する。兎に角、合流しないと拙い。

ティアナ「ティファさん！大丈夫ですか！」

ティファ「任務継続に問題はありません。そちらの援護をしましょうか？」

ガレオスの群れの中で平然と言うティファ、その銃口が此方を向いた。そして、一発のビームが放たれた。それはティアナの顔スレスレを飛び背後から飛び掛かって来た一頭に直撃しビックリしたガレオスが砂中より飛び出した。

地面に落ちるとピチピチと跳ねる。まるで、陸に打ち揚げられた魚の様だ。すぐさまティアナはそれに集中攻撃する。数多の魔力弾をくらい暫く痙攣していたそれは遂に動かなくなった。

ティアナ（あの状況で……こっちのカバーをした！？）

ティファの方は明らかに此方より多くの敵を相手にしている。その多方向から来る攻撃を避け、砂ブレスを撃ち落とし、通り抜けざまにその胴体に斬撃を入れていた。

ティアナ（私…だって！！）

ティアナも負けじと次々に来る砂ブレスと避けて魔力弾を撃ちまくる。

スバル「ティア、あまり無茶しないで！！」

視界の端でティアナが無理しているのを捉え声を上げる。そこに砂中からガレオスが顔を出して飛び掛かる。その顎を蹴り上げ宙に浮かし胴体に拳を打ち込みぶっ飛ばす。背後から別のガレオスが来るが大きくバク転してその背後を逆に取って蹴りを入れる。そこに周囲から一斉に砂ブレスが来る。それを真上に高く飛び上がって避けリボルバーナックルを構える。

スバル「ディバイン、バスターーーーー！！！」

砲撃を放ちそれが地面に着弾し大量の砂と共にガレオス達が打ち上がった。急降下して一体にそのまま鋭い蹴りを入れ倒す。その反動を利用し距離を取る。打ち上がっていたガレオス達は砂中にまた潜り陣形を取ってスバルに肉薄する。

スバル「リボルバー、シュート！！！」

魔力弾を放つ、それを高速で動きながら避けつつ接近し飛び掛かる者と砂ブレスを放つ者、そのまま通り過ぎる者がいた。

スバル「くっ！」

砂ブレスを避ける為に横に飛ぶとその先に別のガレオスが砂ブレスを撃ち出してきた。
それが運悪くスバルの足の動く先に着弾して足元を掬われた。ふらついた所にガレオスの体当たりが来て吹っ飛ぶが体勢を立て直して着地する。足元が不安定過ぎて少しふらついたが何とかなった。

ロイド「スバル、大丈夫か！？」

そこにロイドがやって来て互いの背を合わせて周囲を囲む様に泳ぐガレオスを迎え撃つ。

ロイド「行くぜ、スバル！！」

スバル「おう！！」

一気に駆けだし、飛び掛かって来たガレオスを殴り飛ばし、蹴飛ばす。背後から襲いかかって来たのはロイドが斬撃を飛ばして牽制しつつ自分に襲いかかって来るのを斬り伏せる。

ロイド「エレメントソード、属性変更、火！！」

エレメント［御意］

刀身が赤く染まり炎が溢れる。そこに前方から一頭が飛び掛かって来た。その牙を避けて懐に潜った。

ロイド「獅吼爆炎陣！！」

獅子の顔をした闘気を目の前のガレオスにぶつけ次に剣を叩きつける。次の瞬間、大爆発が起き直撃したガレオスは息絶え周囲には轟音が響く。その音に驚いたガレオス達が砂から飛び上がる。そこに、炎の中からロイドが飛び出し地面で跳ねている数頭を斬り伏せた。

あらかた片づき始めるとガレオス達は種の危険を感じたのか襲うのをやめて砂の中に潜って姿を消した。すると、周囲に溢れていた殺気は消えていった。

スバル「追い払ったのかな？」

ティファ「周囲に敵意を持つ反応なし、如何やら逃げたみたいだね」

ティアナ「ふぅ～」

思わず息が出た。砂漠を少し歩いただけでこんな事が起きるとは想

像もしていなかった所為で今の戦いだけで精神力が一気に削れた気がする。

ティファ「メインターゲットを倒す前に疲れて倒れそうだね？」

ティアナ「そ、そんな事は無いです！まだまだいけます！」

それにしても、同じガンタイプのティファの動きは目を見張るものだった。

一斉に襲いかかられてもその中でどの位置が安全かを瞬時に読み取って必要最低限の動きでそこに移動してガレオスを撃っていたあの動きは凄いとしか言えなかった。

ロイド「まあ、一端休憩しようぜ。無理すると上手くいくのも上手くいかないしな」

近くにあった洞窟に入って休憩する。洞窟からも砂漠が地平線の彼方まで見えておりもし、アクラ・ヴァシムが現れても直ぐに動ける。

スバル「あれ？」

ティアナ「スバル、如何したのよ？」

スバル「あれなんだろ？」

それは砂漠の真ん中にポツンとあった。スバル達はその前に行って見る。
その大きさは人と同じくらいの大きさの綺麗な色をした結晶の様なものだった。

スバル「綺麗だね。何だろ？」

ティアナ「スバル、あまり近づかない方が良いわ」

スバル「え？」

歩みを止めて振り返る。その時結晶が僅かに動いた。

ロイド「スバル、下がれ！！」

スバル「え？うわっ！？」

突如結晶が動き激しく周囲を叩き始める。慌ててスバルも下がりデバイスを構える。
結晶が砂の中に潜っていき次の瞬間砂中より黒い巨大な生き物が出て来た。

？？？「キシャアアアァァァァァァ！！！」

ティファ「これが…アクラ・ヴァシム」

ティアナ「お、大きい……」

体長は約１５メートル程あるだろうか。黒く光る鎧の様な甲殻に大きな鋏そして天を突く様に上を向いている尻尾、そして、鋏と頭と尾の先には結晶の様なものが付いており感情の無い様な無機質な瞳は此方を品定めしているかのようだ。

ロイド「相手がどんな攻撃をして来るか分からない。皆、注意しろ！」

アクラ・ヴァシムはロイド達を敵と見なしたのか生物特有の殺気を出す。

そして、ノーモーションで身を低くしてハサミを広げて突進を始めた。驚きつつも四人は何とか避ける。動きを止めたアクラ・ヴァシムにすぐにロイドが肉薄しその細い脚に斬りかかる。浅く斬り裂くが大したダメージは無い様だ。アクラ・ヴァシムは体の向きを変える動きをしつつ攻撃してきたロイド目掛けて強靭な鋏を振るう。それを姿勢を落として交わしその隙にティアナとティファが遠距離から射撃、スバルが反対の足を殴る。

アクラ・ヴァシム［シャアァァァアアァァァ！！］

接近してくる二人が鬱陶しいと判断したのかその場で回転しその尻

尾を使って攻撃してきた。

ロイド「くっ！！」

スバル「うわっ！？」

ティファ「ティアナ、敵の注意を此方に向けて二人への攻撃頻度を減らさせますよ」

ティアナ「は、はい！」

弾幕の密度を上げる。今度は離れた二人が邪魔と判断したのか尾先を二人に向け体を震わせた。
すると尾先から強力な水流が放たれた。

ティアナ「遠距離攻撃も出来るの！？」

ティファ「中々に面白い敵ですね……しかし…」

その攻撃を避け鏡花・水月を連結させ『ロングライフルモード』に切り替える。

ティファ「当らなければ如何という事はありません……」

強力な砲撃が放たれアクラ・ヴァシムに直撃する。衝撃に驚いて怯んだ隙にロイドが足を斬り付けスバルが正面に飛び上がった。

スバル「おりゃあああぁぁぁぁぁぁ！！！」

頭部に拳を叩きこむ衝撃で頭部にあった結晶が弾け飛び脳を揺さぶられたせいかアクラ・ヴァシムは崩れ落ちた。

ロイド「チャンスだ！一気に叩き込むぞ！！」

三人「了解！！」

ロイド「魔神連牙斬！！」

ティファ「レイジングハント！！」

スバル「ディバインバスター！！」

ティアナ「ファントムブレイザー！！」

ロイドが三つの斬撃を放ち、ティファが高速でビームを連射しスバルとティアナが砲撃を放った。
直撃と同時に爆風でアクラ・ヴァシムが包まれた。

アクラ・ヴァシム［シャギャアアァァァァァァ！！！］

爆炎の中からアクラ・ヴァシムが飛び出し、突進してくる。その瞳は爛々と輝いており未だ獲物を狙う狩人の様だ。その突進を避けロイドが斬りかかる。それを鋏で受け止め弾き飛ばし接近してきたスバルに反対のハサミを振るってくるが、それをジャンプで避けてそのまま回し蹴り、それは堅い装甲で弾かれそこに強靭な尾が振るわれプロテクションで防御するがそのまま吹き飛ばされる。スバルの援護にティアナが魔力弾で牽制し幻術も混ぜる。標的が突然増えたのに混乱し動きを止めたところをティファが高速で周囲を回りながら射撃して動きを制限させる。

ロイドが斬撃を放ち再び接近、連続で斬りつける。ギチギチと関節から音を鳴らしながら向きを変えてロイドに鋏を交互に振るう、それを紙一重で交わし、斬りつける。浅く甲殻を斬り裂きそこから青い体液が噴き出る。明確なダメージが入ったと思ったがアクラ・ヴァシムは感情のない無機質な瞳でロイドを捉えて尾を振るう。それを両手の剣をクロスさせる事で防御の体勢を取るが吹っ飛ばされ距離が出来る。

ロイド「くそっ！」

ティアナ「ロイド援護するよ！クロスファイヤー、シュート！！」

無数の弾幕がアクラ・ヴァシムに殺到する。すると、アクラ・ヴァシムは身を屈めその体格に見合わない程の高さにまで跳躍したのだ。その巨体はティアナの方に……

ティアナ「なっ！？」

ロイド「あぶない！！」

あの巨体で飛び上がるとは想像もしていなかったティアナの動きが止まる。

そして、その巨体がティアナの上から落ちて来る。寸前にロイドが抱きかかえてその下から飛び退く。

それと同時にアクラ・ヴァシムが落ちてきて砂塵が舞う。

アクラ・ヴァシム「シャアァァァアアアアァァァ！！！」

獲物を仕留め損ねて少し悔しそうな声を上げる。尻尾を二人に向かって叩き落とす。それを寸でで避けて距離を取った後ティアナを下ろし再び接近する為に駆ける。

ロイド「虎牙破斬！！！」

素早く上下に斬撃を繰り出しその甲殻に傷を付ける。鋏を振りまわし尾を叩きつけるがそれを紙一重で避け懐に潜り込んだ。

ロイド「驟雨双破斬！！」

アクラ・ヴァシム［シャギャアアアァァアアァ！？］

神速の連続突きからの高速の上下に斬り裂く斬撃にそこから体液を飛び散らせ大きく仰け反る。

スバル「ディバイン、バスターーーー！！！」

そこにスバルが砲撃を放ちそれは見事に鋏に付いていた結晶を吹き飛ばした。
そこにティファが鏡花・水月を連射して追撃しティアナも魔力弾を連射し更にダメージを蓄積させる。

ロイド「うおおぉぉぉぉ、獅子千烈破！！」

アクラ・ヴァシム［シャギャアアァァアアアァァ！！？］

動きの鈍くなった相手に更に連続突きから闘気をぶつける。それにより片方の鋏に罅が入り痛みによってか引っくり返ってもがいている。

スバル「効いてる！？」

ティファ「良い感じです…」

ティアナ「待って、何か様子がおかしい……」

起き上がると同時にアクラ・ヴァシムの赤い瞳が輝いた。

アクラ・ヴァシム［ガアァァアアアアァァアアアアァァァ！！！」

スバル「う、うわ～～！！」

天を震わせる様な咆哮を上げ少しの間動きを縛られた。そして、アクラ・ヴァシムの流れていた体液が青から茶色に変化した。

ティファ「怒り状態…？……いえ、それだけではない様ですね？」

相手の様子が変わった。アクラ・ヴァシムが突進を開始する。それを避けて突撃すると少し体を反る動きを見せる。そして、先程よりも大きな動きでその場で回転し尾を振りまわした。

ロイド「さっきと動きが変わった！？」

近くにいたロイドに尾を振り下ろす。それを避けて肉薄しようとしたが再度向きを微調整して振り下ろしてきた。それを避ける事が出来ずロイドは剣を交差させてそれを受け止めた。あまりの重量に足

元の地面が沈む。

スバル「ロイド！！うおおおぉぉぉぉぉ！！」

スバルが特攻し結晶に包まれたその尾を殴るがあっさりと弾かれた。ならばと近くにあった罅割れていない鋏に向かって全力の拳をぶつけた。

アクラ・ヴァシム［キュアアオアオアアァァ！？］

すると見事に鋏が罅割れて引っくり返った。それによってロイドも脱出できて目の前にある尾に向かって連続で斬りまくる。

ロイド「さっきのお返しだ！驟雨双破斬！！」

アクラ・ヴァシム［キュアアアァァァァ！？］

すると、尻尾が切れてアクラ・ヴァシムが暴れながら前に逃げる。そして、再び咆哮を上げると体液が再び変化し今度は赤色に変わった。

そして、猪が地面を掻く動きの様な真似をした後、前に前進しながら連続で回転攻撃を繰り出してきた。その隙にスバルが背後に回っ

たがアクラ・ヴァシムは真上に飛び上がり、なんとスバルの方に落ちて来た。咄嗟に大きく飛び退いてその影の下から逃れる。それと同時にその巨体が地面に落ち大量の砂が空に舞う。

ティアナ「攻撃が更に激しくなった！？」

ティファ「敵も必至という事です。あともう少しですよ……」

ティアナ、ティファの遠距離からの射撃をくらってもアクラ・ヴァシムは攻撃の手を緩めなかった。苛烈なまでの攻撃にロイドやスバルも接近しにくかった。無機質の瞳はその内を激しい怒気を孕んでるかのような赤い色をしていた。そして、再びジャンプ。今度は少し離れていたティアナ達の上に落ちて来た。慌てて避ける、直ぐに向きを変えて今度はロイドとスバルに狙いを定め、左右に激しく動き鋏を振り回しながら突進してきた。それを避けるとバランスを崩したのか地面に倒れ込んだ。

ロイド「今だ！！」

ティアナ「クロスファイヤー、シュート！！！」

スバル「ディバイィィィン、バスターー！！！」

ティファ「目標を破壊する……フル、バーストッ！！！」

三人の強力な攻撃がアクラ・ヴァシムに直撃する。そして、間髪い

れずにロイドが接近エレメントソードを鞘に収めエターナルソードを両手で持った。

ロイド「見せてやる!!これが秘奥義、天翔蒼破斬!!!」

圧倒的な魔力がロイドを中心に噴き出る。そして、真上に飛んだあと一気に振り下ろした。その一撃で空間が捻じれ肉の潰れるような嫌な音が鳴り最後に爆発した。煙が晴れるとそこにはエターナルソードを構えているロイドと倒れ伏しピクリとも動かなくなったアクラ・ヴァシムがいた。

スバル「倒…した?」

ティファ「そのようですね……」

スバルとティアナは安堵の表情になり極度の緊張から解放された所為かその場にへたり込んだ。その間にロイドとティファが奪った命を無駄にしない様に倒したアクラ・ヴァシムの体から幾つかの甲殻などを剥ぎ取り尾とその先端にある水晶も貰い戻って来た。

ティファ「今回はこれで終わり。ベースキャンプに戻ろう――」

目的を達したのでキャンプにいるコレットと合流して帰ろうとしたその時、

？？？［ゴオオォォォォォォォ！！！］

ティアナ「な、なに！？」

周囲に雄たけびが響いた。慌てて立ち上がり周囲を見回すと夜空から何かが飛来してきた。それは、ロイド達の前で滞空し落ちてきた。目に着くのは赤い顔に灰青色の二つの大きな牙、それはまるでサーベルタイガーの牙の様な形をしていた。そして、その身を包むのは赤銅色の甲殻でその中には毛皮も生えていた。何より目を引くのはレイやレンといった飛竜種特有の二本脚では無く棘だらけの前翼を地に付けた翼を持っており四本足の様になっている事だ。

？？？［ゴオオオォォォォォォォォ！！！］

ロイド「新手か！？」

ティファ「しかし、このモンスターは……！？」

スバル「もしかして、またロイド達も知らない敵？」

ロイド「ああ、こんな奴始めて見たぜ」

知らないのも当たり前だ。このモンスターはロイド達がこの世界で村を作るのを手伝い去った後に出現した新種のモンスターだ。その名も氷原の白き騎士『ベリオロス』その亜種だ。別名『風牙竜』と

呼ばれている。如何やらアクラ・ヴァシムとの戦闘で発生した咆哮を聞き付けやって来たようだ。

威嚇の構えを取り姿勢を低くする。

ティファ「来ます……！」

ベリオロス亜種が地面を蹴り猛然と突進を開始する。その速さは先程のアクラ・ヴァシムの速度を遥かに上回っていた。突進の射線上から四人は飛び退く。ロイド達が避けたのを目で追い急停止した。

ティアナ「なによ、あの速さ！？」

スバル「さっきの蠍よりも断然速い！！」

側面を取ったティアナがクロスミラージュを構えるとそれを視界の端で捉えたベリオロス亜種は地面を蹴りジャンプし逆に一瞬でティアナの横を取った。それに目を丸くするティアナ、追撃するかのようにその巨大な牙の付いた口で噛みつこうとする。寸でスバルがウィングロードを使って接近しティアナを捕まえて横から掻っ攫っていくかのように駆け抜けた。獲物に逃げられたベリオロス亜種はそれを目で追ったあと、次にティファに狙いを定め突進を開始した。それを回避し鏡花・水月を連射、更に腰に付いている蒼・莱も撃ち込む。だが、その弾幕を物ともせず尻尾を振るう。地面を削りながら迫る尾をギリギリ飛ぶ事で回避する。その隙にロイドが接近しその胴体に斬撃を加えるも甲殻の中にある毛皮が斬撃の威力を吸収し

大したダメージが入らなかった。

スバル「ティア、大丈夫!?」

ティアナ「さっきの動きはなに?あいつ地面を滑る様に動いた…うーん、違う低空飛行して地面を滑っている様に飛んだ?」

始めて出会ったディアブロス亜種を思い出す。だが、あれは地面を思いっきり蹴って猛スピードで突進してくる猪の様な奴だ。だが、目の前の敵は違う。奴は敵の死角に一瞬にして移動してそこから攻撃を仕掛けるトリッキーな動きを見せた。こうまでモンスターの狩りの戦闘スタイルが違うのか!?とティアナは内心恐怖した。

ロイド「くそっ!一度撤退した方が良いかもしれない!!」

ティファ「ですが……敵はそれを許すとは思えません……」

ティアナ「数発当てて怯んだ隙に撤退しましょう!!」

ロイド「それしかないな……よし、行くぜ!!」

三人「おう!!」

スバルがウィングロードを駆けて接近し拳を打ち込む。しかし、毛皮によってその一撃はダメージ大半を吸収され上手くダメージが入らない。ロイドが斬撃を飛ばし牽制する。そちらに注意が行ったと

ころでティアナとティファが逆の位置から射撃しロイドに向いた意識を逸らさせる。

スバル「うおおりゃあああああ！！」

そして、スバルがベリオロス亜種の真上から重力を活かした拳を頭部に叩きこんだ。
その一撃には流石に効いたのか悲鳴を上げて仰け反る。
頭を数回振ったあと今攻撃してきたスバルに的を絞ったのか頭を軽く擡げて口から何かを放った。

スバル「うわっ！？」

咄嗟に避ける事に成功、だが、それが地面に着弾するとそこを中心に突然巨大な竜巻が発生した。
慌ててその竜巻に巻き込まれない様にウィングロードを駆ける。

ティアナ「なによあれ！？」

一体如何いう仕組みで出来ているのかそれは直ぐには消えずにいる。
そこに、ベリオロス亜種が地面を蹴り竜巻に飛び込むとその上昇気流に乗って空高く舞い上がりウィングロードで飛行していたスバルの目の前に来た。

スバル「うそ……！？」

ロイド「あぶねぇ！！避けろ！！」

ベリオロス亜種が竜巻から飛び出し突撃しながらその棘だらけの前翼をスバルへ振るった。

スバル「うわあああぁぁぁぁぁ！！！！」

ティアナ「スバルッ！！」

ウィングロードから地面に向かって叩き落とされ砂柱が立ち上った。その後にベリオロス亜種も地面に滑る様に着地する。ティアナが直ぐにスバルに駆け寄り抱き起こす。

ティアナ「スバル！しっかりしなさい！！」

スバル「うぅ……げほっげほっ！！」

咄嗟にマッハキャリバーが棘の直撃を避ける為にギリギリ軌道を修正しリボルバーナックルがプロテクションを発動したのだろうスバルの体にはこれと言った大きな怪我は無かった。

しかし、プロテクションがあっさりと破壊され棘には当らなかったもののその強靭な前翼の一撃で内臓器官がダメージを受けたのか咳

き込む度に口から血が吐き出てくる。

ティファ「これは……拙いですね。一刻も早くベースキャンプに戻らなくては！！」

ロイド「ティファ、ティアナ達と先に行け！！俺がこいつを食い止める！！」

ティアナ「ロイド！？で、でも……！」

ロイド「このままスバルを守りながら戦うのは危険すぎる！！俺なら大丈夫だ、目眩ましの閃光玉がある。頃合になったら撤退する、だから行け！！」

ティファ「……了解、これより撤退します」

ティアナ「ティファさん！？」

ティファ「ロイドの案が今は賢明です……ロイド、無理は禁物ですからね。貴方を待っている者を悲しませない様に……」

ロイド「ああ、分かってるさ！！俺は、こんな所で死ぬ気なんて全くないぜ！！」

不敵な笑みを見せるロイドにティファも笑いティアナとスバルを脇に抱えるとバーニアをふかして上空に飛び上がりベースキャンプに一直線にフルスピードで飛んで行った。

その時、ティアナが何か言っていた様だが気にせずロイドは目の前

にいるベリオロス亜種を見据える。

ロイド「さてと、もう少しだけ……俺の相手をしてくれよ？……行くぜ！！」

ベリオロス亜種［ゴオオオォォォオオオォォォ！！！！」

一人と一頭が同時に駆け出す片や剣を、片や前翼を振りかざし二つの影が砂漠でぶつかった。

――――――――――――――――――――――――――――――

ベースキャンプで皆の帰りを待っていたコレットは遠くから何かが飛んでくるのが見えた。それは、まだ米粒ほどの大きさなのだが彼女はそれがティファだと気付いた。彼女には天使の力がありそのお陰で常人では見えない距離にあるものや聞こえない筈の音まで聞き取る事が出来るのだ。

そして、ティファが脇に抱えているスバルとティアナを見て異変に気付いたコレットは天使の羽を出して飛び立ちティファの下に向かう。

コレット「どしたの!?何があったの!!?」

ティファ「説明は後だよ!今はスバルを早くベッドへ……!!」

事態の悪さに気付いたコレットも頷き急いでベースキャンプに戻る。
その中に設置されているベッドにスバルを寝かせティファとティアナに説明を求める。

コレット「一体何が起きたの?」

ティファ「メインターゲットのアクラ・ヴァシムを倒したのは良かったんだけど、その後にまた見た事も無いモンスターが乱入してきたんだ。飛竜種だと思うんだけど、姿形が『ティガレックス』や『ナルガクルガ』と同じ風貌だった」

コレット「新種?」

ティファ「かもしれない……狩り場が不安定だって書いてはあったけど、まさかあんなのがうろついてたなんてね…少し油断してたかな」

コレット「それで、ロイドは?ロイドは如何したの!?」

ティアナ「ロイドは一人で……」

足止めをしているのか、とコレットも理解した。一瞬だけ不安な顔

になったが直ぐにそれは消えて笑顔になる。

コレット「ロイドなら…だいじょぶだよ。絶対に無事に帰って来てくれる…。それに、今私がするべき事はスバルの治療だもん」

ティアナ「スバルは大丈夫なんでしょうね？」

コレット「うん、治癒術を使って薬を飲ませれば明日までには治ると思うよ」

そう言いながら治癒の準備に入る。そして、魔法陣が展開され詠唱が始まった。

コレット「御許に仕えることを許したまえ、御身の力よ、此処に苦しむ者に慈悲深き抱擁を、天使の抱擁（エンジェルインブレス）！！」

魔法陣がスバルを包み込む。すると、見る見るうちに体に付いている傷が癒えていく。

そして、コレットはポーチからビンを取り出した。緑色の液体の入ったビンでその蓋を開けてその中に別のビンに入っていた琥珀色の液体を流し込み混ぜ合わせた。

ティアナ「なに、それ？」

嘗てリリスが自分に使ったあのデンジャラスドラッグを思い出しビクビクしながら聞いてみる。

コレット「これはね、回復薬にハチミツを混ぜて出来る回復薬Gだよ。普通の回復薬よりも効果は高いんだよ」

ティアナ「それって、何で出来てるわけ？」

コレット「えっと……傷の回復を促進させる薬草に、その効果を向上させてくれる青いキノコに今のハチミツを混ぜたものだよ♪」

そう言ってスバルの口を開けてそれを流し込んだ。すると、あれ程ぐったりしていたスバルが飛び起きた。

スバル「うえぇぇ～～苦甘～～～！！！」

舌をペッペッとしながらヤックデカルチャーな味の感想を述べる。

スバル「うぅ～～口の中が変な感じだよ～。コレット、私になに飲ませたの～～？」

コレット「回復薬Gだよ♪苦いけど我慢してね」

ティファ「そう言う割にはコレット、貴方は今迄これを飲んだ事ないよね……」

コレット「うぅ…だって、苦いって聞くと、どしてもピーマンを思い浮かべちゃうんだもん…色も似てるし……」

ジト目で見られて縮こまるコレット。そして、今更自分がベースキャンプにいる事に気が付いたスバル。

スバル「あ、あれ？そういえば何で此処にいるの？」

ティアナ「アンタねぇ、ティファさんが此処まで運んで来てくれたのよ！！」

スバル「あれ、そうなの？ありがとうティファ」

ティファ「酷い怪我じゃなくて良かったよ。けど、今日はもう安静にしてね。傷が開いちゃうから」

それには納得して頷くスバル。そして、辺りをキョロキョロ見回してある人物がいない事に気付く。

スバル「あれ？ロイドは何処？」

コレット「っ！？」

ティファ「……ロイドは、私達を逃がす為に囮になって……」

スバル「えっ！？そ、それじゃあ…まさか……！！」

最悪の光景を浮かべたのか顔が真っ青になり始めるスバル。だが、そこに……

ロイド「おいおい、俺を勝手に殺さないでくれよ……」

その声に皆ハッとなって振り返ると空から天使の羽を羽ばたかせて降りて来るロイドがいた。
全身に砂を付けてはいるが怪我らしい怪我は無かった。

ロイド「ふぅ～やっと撒けたよ……」

コレット「ロイドッ！！」

ロイド「うおっと」

ロイドに抱き着くコレット、それを受け止め苦笑いしてその背に手を回すロイド。

コレット「良かった……怪我は無い！？何処か痛い所は無いよね！？」

ロイド「大丈夫だって！！上手く逃げて来たから何処も怪我はして

ないって！！」

スバル「ロイド、良かった～無事だったんだ」

ロイド「おう、スバルも怪我は随分と良くなってきた見たいでホッとしたぜ！」

ティファ「ところで二人とも、何時まで抱き合ってるの？見ているこっちが恥ずかしくなって来るんだけど……」

その言葉に抱き合ってる二人はハッとなって慌てて身を離す。恥ずかしくなってコレットは顔を真っ赤にして俯き、ロイドも明後日の方を向いて後頭部を掻いていた。だが、直ぐに真剣な顔に戻ってティファとの会話を始める。

ティファ「それで、一人で戦って如何だった？」

ロイド「如何って言われてもな……『ティガレックス』みたいな攻撃力は無いし『ナルガクルガ』より少し動きは鈍いって事ぐらいしか分かんねえ。まあ、その話は明日にしようぜ、もう腹が減ってへトへトだよ……」

ティファ「それには同感だね…それに、体に付いてる砂を落としたいよ……」

コレット「ふふっ、そう言うだろうと思って準備はしてたよ」

ティアナ「ってか、大食漢が二人もいるんだけどそこんところは大

丈夫なの？」

ロイド「まあ、その位の準備はしてたぞ。ただ……コレット、何もしてないよな？」

コレット「うん！だいじょぶだよ。トカゲさんにはあげたけど」

ティファ「それなら安心――ってちょっと待って！？そのトカゲさんって誰！？」

コレット「トカゲさんはトカゲさんだよ♪こ～～～んなおっきい――」

ロイド「それトカゲと違うぞ！！どっちかって言うと飛竜種か魚竜種だ！！」

野生のモンスターに如何やら餌付けをしてたようだ。
幸いにもそれを予測していたのか少し多めに持ってきていたお陰で何とかなったが……。

そして、近くの井戸から降りてそこの近くにある湖から水を汲んで湯を沸かし体に付いた砂を落して明日ベリオロス亜種を倒す事にして就寝する事にした。

（ちなみにロイドとコレットが一緒のベッドで寝る事になりました～！）なんとぉ～～～！？

皆が寝静まった頃、ロイドはベッドから脱け出し一人で高台に昇り一心不乱に剣を振るう。
昨日戦った事、そして、今日戦った事、ずっと前に戦った事などを思い返しながら剣を振るう。風を斬り裂く音が鳴り一瞬の内に何重もの剣閃が煌めく。

それを岩陰で見ている者がいた。実は彼女も少し練習しようと思って起きたのだが先客がいた所為で出る出られないといった状態だ。
ロイドの振るう剣術は剣の心得は持っていない自分でも何かの型にはまった様な動きではないのが分かる。

ロイド「ふぅ～」

一度呼吸を整えるロイド。そして、再び動き始めそのまま口を開いた。

ロイド「何時までそこで見てるんだ、ティアナ？」

岩陰からティアナが出て来た。

ティアナ「何時から分かってたの？」

ロイド「さっきから、かな！」

そう言いつつ休まず剣を振り続ける。そして、最後に手の中で剣を回転させたあと鞘に剣を収めた。

ティアナ「それって毎日やってるわけ？」

ロイド「まあ、日課かな」

ティアナ「ロイドの剣術って何かの型にはまってるように見えないけど？」

ロイド「ああ、俺の剣術は我流さ。って言ってもまだまだだけどな」

苦笑いするロイドを見てティアナは驚いた。あれ程の剣術を持っているのにまだまだと評価を付けるなど彼の求める頂は何処まで高いのだろうか！？

ロイド「これじゃあ、あいつには勝てないな……」

ティアナ「あいつ？」

ロイド「あ～、今のは気にしないでくれ。それより、ティアナも練習か？」

ティアナ「ええ」

ロイド「あんまり根を詰めるなよ。やる事は今日戦った敵、昨日戦った敵、少し前に戦った敵そして最後に明日戦うかもしれない敵を想像してやればいいぞ」

ティアナ「でも、そんなんじゃあ……」

ロイド「強さって求めるだけじゃ手に入らないさ。自分にとって今どんな力が必要でそれをどう活かすか、自分の戦闘スタイルは一体どの方向にあるのか…まあ、今はこん位か。それを見つけるだけでもティアナが求めている強さってのは手に入ると思うぜ？」

「あまり無理はするなよ？」と言ってロイドは一足先に戻っていった。

今の言葉を反芻してみる。自分が今欲しい力…か…。考えた事はあまりなかった。ただ、自分が他の皆よりも劣っているから少しでも追いつく為に我武者羅に練習はしていた。そう言えば前にそうやって無茶してなのは隊長にこっ酷くＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩ（と言う名の鉄槌）されたなあっと思い返す。

ティアナ「……よしっ！！」

まずは、今日戦ったモンスターから思い返してそこから何かきっかけを探そう！！

そう決意しクロスミラージュを構え精神を統一するのだった。

# 第三十五話（後書き）

ロイドのキャラが崩壊し始めている……ｏｒｚ　彼はこんな性格だったか！？いや、なんか違う。次までに上手く修正せねば……。
今回は割とあっさり倒しました。理由は……作者の実力不足です。
ユーチューブでアクラ・ヴァシム見たんですけどね、うん……表現しにくいんですよあれ。ハサミ壊れるとキレる、尻尾斬れるとキレるのは分かったんですがね…だから３ｒｄのベリオロス亜種を乱入させちゃった、テヘッ♪
いい訳ですね、すんません！！

更新も今日まで遅れてしまい二重の意味で申し訳ない！！次こそは、次こそは！！そんな感じで意気込んでますが次回の更新も何時になるのやら…気長にお待ちください。

これからも、このダメ作者を宜しくお願いします！！次回は、フェイトさん達の方を出す予定です！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第三十六話（前書き）

作者のモンハン日記～！！

仲間とG級ティガレックス狩りしてた時の事です。

友人1「やばっ！！諸にくらった！？」

作者「待ってろ！！今角笛でこっちに引き付ける！！」

友人2「って、何故俺の方に～！？あああぁぁぁぁ！！」

友人2は力尽きた……

作者「何でそっちに行った！？おかしいな～これ壊れてんのか？もう一回……って、吹き始めた瞬間にこっちに来た～！？」

友人1「ガードガード！！」

作者「間に合わな～い♪ぐふっ！？」

作者も力尽きた……そして、続いて巻き込まれる形で友人1も昇天ｗｗｗ

何で失敗したんだろうね？いまだによく分からない作者である。

さて、三十六話更新です。今回は少し長めです。そして、中盤から作者が暴走しました。

# 第三十六話

クエスト名　『疾風の暗殺者』

参加者

フェイト・T・ハラオウン

バルド

エリオ・モンディアル

キャロ・ル・ルシエ＋フリード

場所　水没林

狩猟対象

ナルガクルガ

狩猟環境は不安定

昼に水没林に到着した四人は早速捜索を開始した。キャンプから一歩外に出るとフェイト達を出迎えたのは見事なまでの林、そしてその木々の下を流れる水、深さは大体足首辺りだろうか。草木の独特な香りと水の香りが混じって何とも不思議な感じだった。

エリオ「父さん、ナルガクルガというのは如何いったモンスター何ですか？」

バルド「俺は直接戦った事は無いが確か、別名『迅竜』と呼ばれている。その名の通り移動速度はモンスター界でも1，2を争う程の速さを持っていて相手の死角に常に移動して前翼に付いている刃みたいなのを振るって一撃で標的を仕留めるらしい。それに、奴の尾はよくしなるから気を付けろとも言われている。体色は黒、基本的には夜間に多く見られるが昼でも行動してるみたいだ」

更に補足すれば尾からは強力な棘を飛ばして遠距離攻撃もして、真上に飛び上がったあと尾を思いっきり振り下ろす攻撃もする。これを喰らえば中型モンスターすら一撃で倒す程の威力らしい。

自分達がこれから戦うモンスターがどれ程脅威なのか改めて知ったフェイト達は気を引き締めて周囲に目を凝らすのだった。

探し始めて一時間ほど経っただろうかフェイト達の前にモンスターが現れた。

？？？［ガアァァァァ！！］

バルド「フロギィか……」

フェイト「フロギィ？」

フロギィ、鳥竜種に属するモンスターでイーオス同様毒を吐いて獲物を弱らせて戦う。
彼らの中には大型のもいてそれが『ドスフロギィ』と呼ばれそのリーダーを中心として獲物を狩る。

今目の前にいるのは６頭、駆け出しハンターも相手にはしたくは無い数だ。

バルド「それほど多くは無いな。だが、後で面倒になる。此処で仕留めるぞ」

フェイト「う、うん！！」

其々が武器を構えるとフロギィ達は此方に向かって駆けだす。一頭がキャロに向かって突っ込んできた。

エリオ「させない！！フォトンランサー、ファイヤー！！」

エリオが牽制し注意を此方に向けさせる。

キャロ「フリード、ブラストフレア！！」

フリード「きゅく～！！」

その隙にフリードが火炎砲を放つ。フロギィは直撃し吹っ飛んだが直ぐに立ち上がる。その鱗には焦げ目などが付いているがそんな事大した事ではないとでも言うかのように体を震わせて再び突進を開始してきた。エリオがその一体に意識が向いている内に別の一体が横を取り体全体を使って体当たりをして来た。咄嗟にストラーダで防御するがその攻撃はかなり重く軽く押される。

フェイト「ソニックムーヴ！！」

高速移動でフロギィに反撃の隙を与えさせないフェイト。攻撃をくらってはいるがその目はしっかりとフェイトの後を追っていた。

フェイト（まさか、動きが見えている！？）

一般魔導師が反応できない様な速度で飛べるフェイトをその瞳は確実に捉えていた。
すると、フロギィは頬を膨らませて口から何かを吐きだした。
それは、フェイトの進行方向に紫色の霧状となって空中に舞う。
嫌な予感がして咄嗟に止まる。その霧は前にゆっくり進みその先にある植物に触れる。
すると、見る見るうちにそれは枯れてしまった。

フェイト「毒っ！？」

あれをくらったらヤバい。攻撃が止んだのを良い事にフロギィはフェイトの周囲にそれを撒き散らす。恐らく、彼女の得意な速さを封じようとしているのだろう。此処まで計算できるのか！？と内心この世界の野生生物の狡猾さに舌を巻く。その霧の中を平然と動けるフロギィはフェイトに突撃、噛みつき攻撃を始める。それを避けるがそこに別のフロギィの吐き出した毒が迫って来た。

フェイト「くっ！！」

ラウンドシールドを展開しそれを防御、そこにフェイトの相手をしている一頭が全身を使った体当たりを仕掛ける。

フェイト「フォトンランサー、ファイヤー！！」

だが、そうはさせまいとフェイトは魔力弾で迎撃、直撃して怯んだ隙にそれに突撃してバルディッシュを振るう。吹っ飛ばされたフロギィは立ち上がる事は無かった。

バルド「邪魔だ！」

フェイトに意識を向けていたもう一体をバルドが薙ぎ払いエリオ達の方のフロギィには炎を飛ばして怯ませる。その隙にエリオがストラーダを振るい、キャロがバインドを掛けて動きを封じフリードが炎を吐いて焼き払った。

仲間が一気に減って危険を察知し残った一体のフロギィは林の奥深くに逃げて行った。

バルド「逃げたか……」

エリオ「追うんですか？」

バルド「いや、木の生い茂っている所はあいつらの独壇場だ。無理に追っても返り討ちにされるかもしれない」

ケルベロス「あいつらモンスターは生粋の狩人だからな、寧ろあっちの方が得意な場所だぜウヒャヒャヒャ！！」

と言う訳で追撃を止め本来の目的である『ナルガクルガ』の狩猟を

再開する。と言っても、色々回っては見たが大型モンスターの姿も影も見当たらない。

キャロ「一体どこにいるんでしょう？」

ケルベロス［既に俺達の背後を取ってたりしてな～ウヒャヒャヒャ！！」

バルド「有り得そうな気がして逆に納得しそうなんだが……」

振り返ってみるがやはり何もいない。

フェイト「きゃっ！？」

背後を向いていた所為で足元がお留守になっていた所為かフェイトが何かに躓いて転んだ。

エリオ「大丈夫ですか？」

フェイト「いた～い…一体なにｇ――」

躓いた物を確認しようと思って視線を向けたのがいけなかった。それを見てしまいフェイトは固まった。その視線の先には無残にも何か鋭利な刃物で両断された鹿の様な生き物『ケルビ』の死体が転が

っていたからだ。それは見事なまでに骨まで綺麗に両断していた。まるで体の断面図を見ているかのようだ。頭部の方が何かに貪られたかのようにボロボロになっている。

キャロ「っ！？」

エリオ「こ、これは……！？」

バルド「ケルビか…しかし、この切り口は…」

その無残な死体にキャロは顔を真っ青にして息をのみエリオも青褪めた。吐き気が込み上げるが何とか堪えてその亡骸を見つめる。

バルド「……皆、気をつけろ」

フェイト「バ、バルド、あの死体は……まさか！？」

バルド「間違いない。あれは、さっきまでナルガクルガが捕食してた奴だ。多分まだ近くにいるぞ」

そう言われてフェイト達は周囲を見回す。だが、その様な影は見当たらない。静寂、ただそれだけが周囲に漂っていた。額から汗が流れる、その時ふとフェイトは上を見た。それが、良かった。その視線の先には何かがいた。巨大な樹木の上に全体が黒く体には黒光りする毛皮や鱗があり前翼には鋭く輝く鋭利な刃、そして、それだけが意思を持っているかのように動いている尻尾を持った生き物が此

方を見ていた。

フェイト「皆、上だよ！！」

その言葉と同時にそれが降って来る。全員が慌てて四方に散ってその陰の下から回避して其々の得物を構える。

？？？［ガアアアアァァァアアアアァァァ！！！］

バルド「ナルガクルガ……」

エリオ「これが……ナルガクルガ…」

低く唸りながら尻尾で地面を何度も叩く。やはりその動きは何処か別の生き物のように感じられる。

バルド「油断はするな！奴の速度は半端じゃないぞ！！」

バルドの注意が響く。フェイト達も意識をナルガクルガに集中させる。そして、ナルガクルガが身を屈める。……来る！そう思って身構えた瞬間、目の前からナルガクルガは……姿を消した。

フェイト「え……？」

エリオ「フェイトさん！！右です！！」

フェイト「っ！？」

直ぐに視線を移すと何時の間にかナルガクルガはそこにいて此方に飛び掛かって来ていた。前翼に付いた刃で両断しようと迫って来る。咄嗟にバルディッシュを前に出す。激しく火花が散ってフェイトは吹っ飛ばされ背後にあった木に激突した。

フェイト「かはっ！」

バルド「フェイト！！」

肺の中の空気が一気に抜けて酸欠状態になりかけたが霞んだ視界の中でナルガクルガが此方を向いて尻尾を振るっている。そして、何かが射出される。頭の中の本能が告げる、避けろ！となりふり構わず体を投げ出す形でそこから飛び退くと同時にその木に何かが目にも止まらぬ速さで激突した。

その先を見ると木を貫通して何かがその奥の木に突き刺さっていた。棘の様に鋭利だ。もしあのままあそこにいたら……間違いなく自分は死んでいた。

バルド「くそっ！フェイトばかり狙ってんじゃねえ！！」

バルドがケルベロスを振るう。それを軽やかにジャンプして避けてみせ逆にバルドの横を取って飛び掛かって来た。それをケルベロスの腹で受ける。火花が散り少しだけバルドの足元の地面が沈んだ。そして、押し返して黒い炎を飛ばすがそれすらまるで瞬間移動の様に移動して回避する。

キャロ「我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。錬鉄召喚、アルケミックチェーン！」

キャロがアルケミックチェーンを飛ばしそれがナルガクルガを拘束する。しかし、ナルガクルガは暴れてあっさりと破壊する。そして、キャロに視線を向け邪魔な敵と判断して再び姿を消す。

来ると分かっていたのかキャロはプロテクションを発動させ回避よりも防御を選択した。次の瞬間、その防御壁にナルガクルガの刃が激突、破られはしなかったがプロテクションごと吹っ飛ばされた。追撃されない様にエリオがそこに割り込みフォトンランサーを放つが尻尾から飛ばされた棘によって撃破された。そこに、呼吸が回復したフェイトがソニックムーヴを発動して一気に接近しバルディッシュを振るった。それはナルガクルガの刃にぶつかり火花が散る。

そして、バルドも突撃しケルベロスを振るうが再びナルガクルガは高速で移動しそこから消えエリオの背後を取る。

キャロ「エリオくん！我が乞うは、城砦の守り。若き槍騎士に、清銀の盾を！！エンチャント・デフェンスゲイン！！」

ギリギリでエリオの防御力が上がる。ストラーダで刃を防御するがやはり敵の方が力が強く（当たり前）吹っ飛ばされた。

エリオ「くっ、ストラーダ！ソニックムーヴ！！」

ストラーダ［ソニックムーヴ］

体勢を立て直したあと高速移動魔法を発動させ一気に肉薄する。

キャロ「猛きその身に、力を与える祈りの光を、ブーストアップ・ストライクパワー！！」

エリオ「うおおおぉぉぉぉぉぉ！！！！」

更にエリオとストラーダに強化魔法をかける。その一撃は見事にナルガクルガにヒットしてその体に傷を付けた。相手がいきなり早く動いてきたのに驚いたのか一端距離を取り直した。

ナルガクルガ［ガアアアァァァアアアァァ！！］

雄たけびを上げて此方を見据える。その瞳には一切の油断も感じられない。

そして、ナルガクルガが身を屈め力を蓄えそれを一気に開放し猛スピードで両翼の刃を振って飛んで来た。その先にある細い木なんかはあっさりと両断されまるで、カマイタチの様だ。

その射線上からフェイト達は逃れる。息を整える為か一端動きが止まる。その隙にキャロがシューティング・レイをフェイトとエリオがフォトンランサーをバルドがファイアーボールを飛ばした。それは直撃し悲鳴を上げるナルガクルガ。爆炎に包まれ姿が見えなくなった。

フェイト「やったかな？」

バルド「いや、まだだろう」

煙が晴れると果してそこにはナルガクルガが平然と立っており今の攻撃はさほど効いたとは見えなかった。

エリオ「効いてないんでしょうか？」

バルド「いや、どんな生き物でもダメージは通る筈だ。そう見えないだけで今のは確かに奴には効いた筈だ」

キャロ「では、この調子で…」

バルド「けど、向こうもそう何度も隙を作る訳ないだろうな……」

バルドが地面を蹴り猛スピードで特攻を仕掛けケルベロスを振るう。その一撃を自慢の刃で受け止め弾いた。その反動を利用してバク転して距離を取り斬撃を飛ばし注意を此方に向けさせる。その隙にフェイトがソニックムーヴで背後を取りハーケンフォームのバルディッシュを振るいその黒い鱗に傷を付ける。背後からの衝撃に反応してそちらを向こうとしたが横からエリオが突進を仕掛けてぶつかる。毛皮を魔力刃が焼きダメージが通る。ナルガクルガは前翼を振るい近くにいる三人を攻撃する。それを、バルドは真上にジャンプして避けそのまま体勢を変えて斬撃をもう一発お見舞いしフェイトは一端後方に下がって距離を取り、エリオは姿勢を低くして刃翼の下を潜り抜けた。そこにキャロがシューティング・レイをフリードがブラストフレアを放ち意識を此方に向かせた。

ナルガクルガ［ガアアアァァアアアアァァァ！！！］

フェイト「いける！！」

エリオ「良い感じで決まってます！！」

キャロ「このまま……！！」

コンビネーションが見事に決まってナルガクルガを追い詰めている。このまま行けば勝てる！！そう思っていた。ナルガクルガは近くにいたエリオにそのしなやかな尾を振るう。明らかに長さ的には射程圏外だ。だが、その尾は伸びてきた。

エリオ「なっ！？ぐはっ！！」

その事に驚愕して反応が遅れその尾が直撃、吹っ飛ばされ地面を激しく転がる。腕に激痛が走りそこを押さえて蹲る。

キャロ「エリオくん！！」

バルド「キャロ！余所見するな！！」

その声にハッとなってナルガクルガに視線を向けると此方に刃翼を振るいながら連続ジャンプで迫って来ていた。慌てて横に飛んで逃げ距離を取った。ナルガクルガはキャロの直ぐ近くで停止しその場で回転その尾を振るった。それは急激に伸びて安全圏だと思っていた所にいたキャロ目掛けて鞭のように飛んでくる。

キャロ「きゃあ！？」

フェイト「キャロ！！」

エリオ同様吹っ飛ばされて後方にあった大木に全身を強く打ちつける。肺から空気が出て頭の中でチカチカと明滅する。地面に倒れ伏すキャロに止めを刺すがの如くナルガクルガが刃翼を振るってキャロの命を狩り取ろうとするが……

バルド「させるかぁ！！！」

両者の間にバルドが割り込みケルベロスを盾にしてその一撃を受け止める。その間にフェイトがキャロを抱えエリオの下に行く。

フェイト「二人とも、しっかりして！！」

エリオ「フェ、フェイトさん……僕はだ、大丈夫です。それよりも、キャロの方を…」

脂汗を流しながらも気丈にそう答える。兎に角二人の治療をしないといけない。

バルド「フェイト！！出発前に渡したポーチから緑の液体の入った奴を二人に飲ませろ！！」

ナルガクルガと押し合いをしているバルドが声を上げて言う。慌てて腰に付けていたポーチの口を開け中を探ると確かにビンに入った緑の液体『回復薬』があった。それをフェイトはキャロとエリオに飲ませた。すると、先程まで苦しそうだったキャロの顔色が見る見るうちに良くなった。エリオも同じで痛みは引いてはいないがそこまで酷い激痛は消えており腕は動かす事が出来た。そこでフェイトはポーチの中にあった布切れを取り出して残っていた回復薬をそれに浸してその布切れをエリオの痛めた箇所に巻きつけた。

フェイト「二人とも如何？」

エリオ「は、はい、さっきよりもだいぶ楽になりました」

キャロ「けほっけほっ、大丈夫ですありがとうございますフェイトさん」

二人の容態が良くなってホッとしたその時だった…

フロギィ［ガアァァァ！！］

フェイト「えっ……！？」

背後の草むらからフロギィが一体飛び出てきた。恐らくあの時逃げた奴だろう。今迄自分達をつけていてチャンスを窺っていたのか！？ナルガクルガと戦っていたバルドも目を見開いて何かを叫んだが、フェイトにはよく聞き取れない、と言うより聞く余裕がなかった。まるで世界の時がスローになったかのようにフロギィの口が膨らみそして毒液が吐き出される。このままでは自分はおろか後ろにいる二人にまで毒が当ってしまう。

そう一瞬で判断したフェイトは瞬時に二人を抱き寄せ自らを盾にした。その背にフロギィの毒が降り注ぐ。

フェイト「くっ、あああぁぁぁぁぁぁあああああああああ！！？」

エ・キ「フェイトさん！」

バルド「フェイト！！くそがあぁぁぁ！！邪魔だ、どけえぇぇぇ！！」

背中が焼けるような痛みに包まれる。地面に倒れ伏すフェイト、それに追い打ちをかけるかのように再びフロギィの口が膨らみ始める。

エリオ「させるかあああぁぁぁぁ！！」

キャロ「蒼穹（そうきゅう）を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来（こ）よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚！」

フリード「きゅく～～！！」

エリオが一瞬で距離を詰めストラーダを斬り上げを行い開きかけたフロギィの口を無理矢理閉じさせる。行き場を失った毒が自身の体に戻され怯んだ所にエリオが全力の蹴りを打ち込んでふっ飛ばす。

キャロ「フリード！ブラストレイ！！」

そこにフリードの火炎が放たれる高温の炎に焼かれ崩れ落ちた。それを確認した後、二人はフェイトに駆け寄る。

エリオ「フェイトさん！！しっかりしてください！！」

フェイト「う…っく、二人とも…大丈…夫みたいだね…よかった…」

キャロ「喋っちゃ駄目です！毒がまわります！！エリオくん、ど、如何すれば…」

エリオ「と、兎に角、毒を消さないと！！」

回復薬を取り出してそれを飲ませるが顔色は全然良くならなかった。それもそうだろう、回復薬は傷の回復を促すだけで体の内に回る毒などを癒す事は出来ないのだ。徐々にフェイトの体力が低下して行く。

当たり前のことだがハンター達は元々少しばかり毒の耐性がある。それはこの世界では全ての人がそうであり、抗体があるおかげで一定時間が立てば毒は勝手に体内で中和される。まあ、と言っても体力尽きれば倒れるのには変わりはないが……。だが、フェイト達にはその様な抗体は無い。当然の事だ、彼女達はこの世界の住人でもないしそもそも毒などくらった事も無いのだから……。未知の毒に体の機能は一気に停止して行く。背中だけだった痛みが何時しか全身に転移していた。呻きながら蹲るフェイト、如何すればいいのか分からずただ自身の情けなさに打ちのめされる二人だった。

バルド「くそっ！！どけって…言ってんだろうが、このボケがぁぁぁ！！！」

ケルベロス［相棒！？俺は叩く為の武器じゃあ…って、ぎゃあああぁぁぁ！！］

ナルガクルガ［ガアァァァァァ！？］

ケルベロスを頭部に思いっきり叩きつける。刃先では無く腹で叩いたおかげかナルガクルガの脳が揺さぶられてその場にダウンした。その隙にバルドは急いでフェイト達の下に向かう。

エリオ「父さん！！フェイトさんが……！！」

バルド「分かってる！兎に角、一度撤退するぞ！！」

フェイトを（お姫様だっこで）抱き上げる。弱弱しい呼吸を見て唇が切れる程バルドは歯を食いしばった。

バルド（くそっ！！俺が…俺が…守らなければいけないのに……！！）

急いでベースキャンプに駆け出そうとした時、ナルガクルガがバルド達の前に一瞬で現れて立ち塞がった。

エリオ「こんな時に…！！」

バルド「…………失せろ」

バルドの静かな声が水没林に響く。

バルド「…………失せろって言ってんだ。八つ裂きにするぞ……！！」

ナルガクルガ「っ！！！！？？？？」

その満月の様な瞳を見る事が出来たナルガクルガの脳裏に一つの映像が浮かんだ。それは、自分自身が目の前の男に何の抵抗も出来ずに五体をバラバラのズタズタにまさに八つ裂きにされる映像だった。本能が警鐘を鳴らす、目の前の獲物は危険だ、逃げろ、今は逃げろ！と命令して来る。それに、従わない訳も無くナルガクルガは空高く飛び上がり水没林の奥深くに逃げた。

バルド達は急いでベースキャンプに戻るために慎重に且つ最速で移動した。

――――――――――――――――――――――――――――――

ベースキャンプに戻ったバルド達はフェイトをベッドに寝かせる。
脂汗を浮かべて苦悶の表情を浮かべるフェイト。

エリオ「ど、如何すればいいんですか！？」

バルド「解毒薬を作る。その為にげどく草とアオキノコが必要だ」

その絵が描かれている紙を見せる。げどく草は見事なまでの青一色の葉の草でアオキノコもこれまた見事なまでの青色だった。

バルド「この近くにあるものだ、探せば見つかるかもしれん。エリオは俺と一緒に探しに行くぞ。キャロはフェイトを観てやってくれ、出来るだけ早く戻って来る。行くぞ、エリオ！」

エリオ「は、はい！！」

キャロ「お父さん、エリオくん気を付けて！！」

二人は駆け出し辺りを捜索する。解毒草は直ぐに見つかった。だが、肝心のアオキノコは探せど探せど見つからない。時間だけが過ぎる、このままだとフェイトの体力が危なくなると判断したバルドはげどく草だけを持って戻る事にした。

キャロ「お父さん、エリオくん！フェイトさんの容体が……！！」

今にも泣きそうなキャロがテントから出て来た。慌てて中に入ると状態が更に悪化して呼吸すら乱れ始めているフェイトがいた。

エリオ「と、父さん！ど、どど如何すれば……！？」

バルド「落ち着け！フェイト、口を開けろ」

弱弱しく口を開けるとそこにげどく草を入れた。

バルド「噛め、そんで飲むんだ！」

フェイト「う……っく、…けほっ、けほっ！！」

しかし、今の弱ったフェイトでは中々噛み切れないでいた。そしてあまりにも苦いのか顔を顰めて咳き込んで吐き出してしまった。

キャロ「お、お父さん……」

バルド「……二人とも一旦外に出ろ」

エリオ「えっ…？」

バルド「ちょっとばかし荒療治をする。だから、外で待ってろ」

言われたとおりに二人は外に出た。それを確認したあとフェイトのそばに近づく。

ケルベロス「おいおい、荒療治って何すんだ？まさか、口移しってか？ウヒャヒャヒャ！」

バルド「……」

冗談で言ったのだろうケルベロスの言葉にバルドは返答しなかった。

ケルベロス「おいおい、まさかマジで？止めとけって」

バルド「これ以外に方法があるのか？俺は毒を浄化する術は持っていない。これ以外に何がある？」

ケルベロス「いや、高い確率で嬢ちゃんが助かる可能性がある方法はこれだけどよ……他の方法でも……」

バルド「可能性が一番高いのを選ばなくて如何する？」

ケルベロス「けどそんな事すりゃあ、『感応現象』が加速するぜ？そうすりゃ、相棒の記憶を読み取る速度も上がっちまうぜ？結果的に嬢ちゃんが相棒の事を知っちまう事に繋がるがそんでもいいのか？」

バルド「分かってる。だが、フェイトを助ける為だ。そんな代償など関係ない」

バハムート［ケルベロス、若の意志は絶対です。貴方は黙ってなさい」

ケルベロス［へいへい、すまんこってす～…ったく、心配して言ってやってんのに……」

一人でブツブツ言ってるケルベロスを無視してバルドはフェイトを抱き起こす。フェイトの閉じていた瞼がゆっくりと開く、少し焦点の合っていない感じでぼんやりとした感じでバルドを見た。

フェイト「バ…ル……ド？」

バルド「フェイト、許せとは言わない。嫌ってくれても構わない、けど…俺は、お前を守る…」

フェイト自身朦朧とした意識で彼が何を言ってるのかよく聞けないでいた。ぼんやりと霞んだ意識の中でバルドを見ていた。

バルドはそう言って自分の口の中にげどく草を含み咀嚼して噛み潰しそして……

フェイト「……んっ……！」

バルド「……」

フェイトに唇を重ねた。フェイトの口を舌で無理矢理開かせ噛み潰したげどく草を口移しで無理矢理流し込む。あまりの苦さに当然フェイトはバルドの体を離そうとその体に手をあてて抵抗するが、身じろぐ体を抱きしめて動きを封じ、げどく草を拒絶する様に動く舌を自身の舌で押さえこんだ。

フェイト「…んっ…はぁ……んふぅ……んくっ…」

げどく草がフェイトの中に流れ込む。口の端からげどく草のエキスが零れ伝い落ちる。

喉を鳴らして全部飲んだのを確認してバルドは唇を離した。二人の間に青いされど銀に輝く糸が出来る。それは直ぐに切れ、消える。

そっと、フェイトをベッドに寝かせる。既に彼女は眠りに就いており、顔色も良くなり呼吸も安定していた。解毒効果が効いたようだ。

ホッと息を吐いて安心する。

そして、『感応現象』が発生する。バルドの脳内にある光景が映し出された。

一面の花畑、そこに座って花冠を作っている金髪の可愛らしい少女、それを見て微笑んでいる一人の女性、女性に気付いて出来あがった花冠を見せる。とても幸せそうな風景だ。だが、映像はそこで途切

れ次に映ったのは液体の入った容器の中で眠る少女、そして、さっきの映像とは最早掛け離れたかのように憔悴し、されど野望に満ちた目を輝かせる女性の姿があった。

???「もう少しよ、もう少しで……待っていてね――――」

その容器の中で眠る少女の名を語る。その隣にはその少女と瓜二つの別の少女が眠っていた……。

バルド「……これは…」

眠るフェイトを見る。間違いなく今のはフェイトの記憶の一部だろう。

だが、少し引っかかるものがあった。そう、始めに映し出された映像だ。

バルド（何だ？何かが引っ掛かる……）

しかし、悩んだとこで分かる訳も無いかと考えるのを止めた。面倒な事はあまり深く考えない、それが彼なのだ。

さて、テントから出て二人にフェイトの無事を伝えようと思い外に出ると……

エリオ「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／！！！」

キャロ「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／！！！」

何故か開けて直ぐ目の前には二人がいて両方とも顔がトマトの様に真っ赤になっており頭からは蒸気が出ていた。

バルド「おい、お前等……」

エ・キ「「は、はいっ！！」」

バルド「見たな？」

それに答えず俯く。沈黙は肯定ととれる。溜息を吐いて後頭部を掻く。

バルド「まあ、見ちまったんならしょうがねえ。けど、一つ約束しろ。もし、フェイトが覚えてなかったら絶対に言うなよ！！」

エ・キ「「イ、イエッサーー！！」」

釘を刺され思わず敬礼で答える二人。それを見てケラケラと笑うケルベロスをどついて黙らせバルドはテントに立て掛けていた釣竿を持った。

バルド「さてと、今日は狩りは中止だ。夕飯の材料調達して来るから、お前達はフェイトを看てやっていてくれ」

そう言ってさっさと近くにある池に行ってしまった。それを見てクックックックと笑うケルベロス。

ケルベロス「全く、相棒は恥ずかしくなったからって逃げやがってウヒャヒャヒャ！！」

バハムート「当たり前ですよ。息子娘に見られてしまっては若とて恥ずかしくはなります」

エリオ「えっと、すみませんでした……」

ケルベロス「いいっていいって、あれ位のハプニングはあった方が相棒には良い刺激になるぜ！！ウヒャヒャヒャヒャ！！」

バハムート「若も困った人です。……けど、そこが若の良い所なんですけどね」

――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――

夢を見た……

暗い暗い森の中を走っていた。だが、走っている感覚は無い、ただ…これは誰かの視覚を通して見ているそんな感じがした。何かから逃げる様に自分は走っていた。振り向く、後方から二頭の大きな狼の様な生き物が口から涎を垂らしながら地面を蹴り追いかけて来る。

それは、異様な姿だった。体から骨が浮き出る程痩せ細って目の瞳孔が開ききっているそんな二頭が追いかけているのだ。

???「はあ、はあ、はあ、はあ……」

自分の声ではない幼い息遣いが聞こえる事からこの視覚を共有している者は恐らくまだ子供なのだと言うのが分かった。踏み出す足は裸足で泥で汚れており全力で振っている手もまだ小さかった。着ている服も薄汚れており所々ボロボロだ。

???「なに、あの動物!?一体何処から…あっ!!」

声からして少女だろうその子は後ろを見ながら縮まり始めている距離を引き離そうと必死だ、だが……後ろを見ながら走っていたのがいけなかったのだろう何かに躓いて視界がまわる。

少女「いった～い…」

膝を擦り剥いたらしくそこから血が流れる。

狼？［グルルルル……］

少女「ひっ！！」

唸り声がする方を向くと追いついた二頭の狼が唸っている。後退りするが背中に何か固い物が当る。背後を見るとそれは大きな岩、退路が絶たれた……それはつまり…

狼？［グアアァァァ！！！］

二頭の狼が飛び掛かるのが見える。この子も自身が食い殺されると思ったのか現実から逃れる為に目を閉じた。しかし……何時まで経っても何も起きなかった。不審に思った少女が目を開ける。

そこには……

？？？「やれやれ、人間を助けるなんて何やってんだろ俺は…？」

一人の男性が立っていた。その足元には首を両断され地に伏した二

頭の狼があった。それは徐々に霧状になって最後には霧散して消えていった。彼の片手には身の丈よりも巨大な大剣がありそれはカタカタと揺れていた。

???［いや～相棒がロリ属性持ちだったなんてな～！こりゃおもしれぇ、ウヒャヒャヒャ！！］

男性「そんなんじゃねえっつうの！！へし折るぞテメー……」

???［すんませんでしたーー！！］

男性「ったく、調子に乗りやがって……。それよりも、おいお前怪我は無いか？」

少女「は、はい……」

月明かりが雲の合間を縫って降り注ぎ二人を照らした。

フェイト（え……）

目の前の男性を見てフェイトは絶句した。何故なら……

バルド「って、膝擦り剥いてんじゃねえか…ったくしょうがねえ奴だな」

目の前の呆れた顔をする男性が自分の最もよく知る男性、バルドだったからだ。彼はそのあと、少し微笑してその子に治癒術をかけ始めた。それを最後に景色が歪み始めフェイトの意識は再び闇に消えていった。

---

フェイト「う、ううん……」

キャロ「フェイトさん！気が付いたんですね。良かった～」

エリオ「大丈夫ですか？何処か痛む所とかってあります？」

フェイト「キャロ？それに…エリオまで…此処は…？」

身をゆっくりと起こす。それをキャロが支えてくれその礼を言ったあと辺りを見回した。

エリオ「覚えていないんですか？フェイトさんはフロギィの毒にやられて倒れて父さんが此処に運んで来てくれたんですよ？」

そう言われて思い出した。確かに自分は二人を守る為に自らを盾にして二人を守って毒を浴びた。
そして、バルドが自分を運んで此処に連れて来てそれから……

フェイト「……」

キャロ「フェイトさん？」

フェイト「あっ、ごめん。ちょっとぼうっとしてた。そうだったね、二人が無事でよかったよ」

ニコッと笑うと二人が突然泣き出しフェイトに抱きついた。突然の事で少し驚いたが直ぐにいとおしむ様に優しく二人を抱きしめる。
二人の温もりを感じて改めて自分が生きている事を実感できた。

暫くそれを味わってようやく泣きやんだ二人が離れる。
今更になって恥ずかしくなったのか二人とも頬を赤くしていた。
それを見て思わず微笑む、そして、一度外に出ようと思い立ち上がると二人は慌てて安静にするようにと言ってくるが大丈夫だと言って外に出る。

外はすっかり暗くなっており星空が見えた。
前方にある焚火のある所でバルドが料理をしている。
そして、バルドがフェイトが起きたのに気が付いた。

バルド「目が覚めたのか。体の調子は如何だ？」

フェイト「うん、大丈夫だよ」

バルド「それは重畳だな。いま飯を作ってるから待ってな」

程なくして料理が出来て火を囲んで料理を食べる。始めてバルドの料理を食べたエリオやキャロ、フリードは一口目であまりの美味さに目を輝かせていた。バルドの料理はそんじょそこらの料理には負けない程の美味さで昔、フェイトも家族のアルフと一緒に食べた時は危うく箸を落とす所だった。

フェイトはエリオとキャロと今日の戦いについて話しているバルドをぼうっとして見る。

何だろう?何かを忘れている様な気がする……。一度記憶の整理をしてみる。

バルド達と此処に来てモンスターと戦った→ナルガクルガと戦闘→不意を突かれてフロギィの毒をくらった

ここまでは覚えている。だが、その後だ。確か……バルドがエリオと一緒に何かを取りに行って…戻って来て…それを自分の飲ませようとして…凄く噛みにくて苦かったから思わず吐き出してしまって…それから……

フェイト「あっ……」

バルド「ん?どうかしたのかフェイト?」

フェイト「えっ、あっううん！何でもないよ！！」

思い出した！確かその後、

フェイト（た、確かバルドはく、くくく口移しで／／／／／／／／／／／／／！！！！！）

その光景が記憶の中から浮き出て来た。思い出してしまってあまりの恥ずかしさに心臓が爆発しそうなくらいに鼓動を打つ。そっと、自分の唇を撫でてみる。まだそこに彼の温もりが感じられた。

そっとバルドを見るが彼は気付かず茶々を入れてるケルベロスをどついていた。

そう言えば先程からずっと平然と会話をしているが彼はその事を如何思っているのだろうか？

聞いては見たい気がするが何故か知らないが墓穴を掘りそうな気がしたので今は聞かない方が良いと何となく思った。

フェイト（バルド…何とも思っていないのかな…？）

＊一人釣り場で恥ずかしさのあまり悶絶してました。

バルド「バルディッシュ、この地域にロストギアの反応はあったか？」

バルディッシュ［いえ、反応はありません。恐らく外れかと…］

エリオ「一体何処にあるんでしょう？」

ケルベロス［こればっかりは自力で探すしかないんだな～これが］

フェイト「バルドはどの辺りが怪しいと思う？」

今四人はこの世界の地図を広げてロストギアのありそうな所に目星をつける為に会議を開いていた。

バルド「ここにないとすると…俺的には此処じゃないかと思う」

キャロ「古搭？」

バルド「今じゃモンスターの住処になってるがあそこには秘境と呼ばれる所がある。人もあまり行かないから詳しくは分かってない場所だからな。今度はそこに行ってみるか？」

それに皆頷いて次の行く所を決めて今日はお開きとなり寝る事にした。

皆が眠りについたあと、寝付けなかったフェイトはテントから出て手頃な岩に座り夜空を見上げる。

満天の星空はとても壮大で吸い込まれそうな感覚に陥った。
何処の世界でも夜空はとても綺麗なのかとそう思った。

多くの生命が眠りに着く中、一部の虫達がここぞとばかりに静寂の空間に様々な歌を紡ぐ。
数多の歌が流れる中、フェイトは先程見た夢を思い返す。

フェイト（あの時見たあの子は誰なんだろう？）

何処かで見た事がある様な気がする……。それに、バルドの言っていた言葉も気になる。

“人間を助けるなんて”彼はそう言っていた。如何いう意味だろうか？

考えれば考える程頭の中が混乱する。だが、一番フェイトが寝付けない理由が……

フェイト（あの夢の中のバルド…笑ってた…）

その事がフェイトの心にモヤモヤを生んでいた。最近フェイトは彼がなのは達以外の女性と会話をしているのを見ると胸が締め付けられるような感じになる。あの笑顔を自分だけに向けて欲しい、常に一緒にいたい、いないと不安になる。そんな感情がグルグル回る、そんな欲深い自分に少しだけ自己嫌悪。

それだけじゃない。あの夏のあのホテルに皆で泊った日の夜にバルドの言っていた人の事が気になる。確か『フィフ』と言う名だ。恐らく女性の名だ、その子の名を言っていた彼の表情は少し憂いの滲んだ顔でだけど、凄く愛おしそうな感じだった。その子とバルドの関係が凄く気になる、もしかしたらそういう関係だったのだろうか？

考えかけて必死に頭を振って消し去る。そんな事は嫌だ！！想像もしたくも無い！
だけど、もしそうだったら自分が入りこめる隙間など…無い……

フェイト「……バルド…」

その名を呼んでみる。思いを込めて…失いたくないから…だがその時…

フェイト「っつ！くっ、あああぁぁぁ！！」

再びフェイトにあの謎の頭痛が発生した。
しかも前回よりも痛みが強かった。頭を抱えて地面に倒れ伏す。ま

るで、体が引き千切られそうな痛みが来る。頭がズキズキと痛む、体の中で高温で熱した鉄の棒を入れられたかのような痛みが全身を強く打つ。体の奥底で何かが脈動する感覚が起きる。

フェイト「う、あああああああぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

そして、頭の中に何かが映し出される。朧げに映し出されるのは雨の降る街の一角、そこに倒れている少女、そこに駆け寄る男性、抱き起こすとその腹部から大量に出血している。必死に呼びかける男性にその少女は弱々しく笑顔を向ける。そっと、口付けを交わして離れ涙を流しながら何かを告げる。

口の動きからしてこう言ったのだろう……

――ごめんね、死んじゃってごめんね……――と……

握っていた手がすり抜けて地面に落ちる。雄たけびを上げ涙を流す男性、それを見て笑う幾つかの人の山…その者達の服には金の刺繍の入った十字架があった。そして、その男性に持っている槍を突きつけた。

槍が刺さる、だが、男性はそこから出血もせず全く反応を示さない、それどころか憤怒の形相でその人達を睨む。その瞳は血の様に紅くその中には漆黒の六芒星とその中央には十字架が描かれている不思議な紋様が浮かんでいた。異様なその瞳に人々が後退りする。少女をお姫様だっこで抱きかかえて彼は立ち上がった。その背後には漆

黒の蛇が蠢いており悲しみで、怒りで、憎しみで染まった慟哭を、雄たけびを上げる。雨が激しくなりその雨が黒くなっていく。大地が鳴動する空が悲鳴を上げる、風が怯える、雲が恐れた。

――お前等もか…お前等も……お前等も人と少し違うというだけで俺達を迫害するのかあぁぁぁぁぁぁ！！！！――

次の瞬間、男性から漆黒の闇が広がり世界が闇に染まる。それが晴れた時には人も街も全て消し飛んでいた。

――許さんぞ……この子の優しさをも踏みにじった貴様ら人間を…俺は、絶対に許しはしない！！人間よ…滅びろおぉぉぉぉぉ！！！！――

フェイト「な…に、これ……！？この…光景…って！？あぐっ！！」

何かが頭に流れ込んで来るのに混乱を隠せない。再び激しい激痛が襲い、風景が変わる。

――殺す…全てを…我等を蔑む者全てを……！！――

武器を構える人の大群、その中を身の丈よりも大きな剣を片手で振るって来る人を次々と肉塊に変える。銃弾の雨が彼に当る。だが、

その銃弾は全て彼を止める事は出来なかった。弾丸は潰れ、地面に転がる。大砲が火を噴く、着弾し爆炎に包まれる。その中から平然と彼は出てくる。そして、地面に剣を叩きつける、人々の足元から漆黒の闇の炎が噴き出て全てを飲み込んだ。街も街道も人の痕跡が残るもの全てを飲み込んで……

――破壊する…俺達の未来を奪った貴様等を……全て！！――

再び背景が変化する。戦車が数千も並び一斉に火を噴く。地面が消し飛び火の海となる。その中から彼は歩いて現れる。その服にも体にも一切の傷が付いていない。今度は上空から爆撃機が一斉に爆弾を投下、大地が激しく震動し空気が鳴く程の爆発が起きる。

――許さない……俺とあいつの平和を奪った貴様等を……許さない！！――

だが、それでも彼は止まらない、目が…真紅の瞳が輝くと一瞬にして上空の爆撃機が全て文字通り跡形も無く消し飛んだ。そして、戦車の大群の下から漆黒の炎が噴き出して消し飛ばした。その先にある街に闇の雷が落ちる。街が…消えた……。逃げ惑う人々がそれに飲み込まれ粉々というより跡形も無く消し飛んだ……。

――絶望を…！！貴様ら人間全てに、絶望と闇を…！！殺す…殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す！！破壊と絶望を……奴らに死を…！！

死を…奴らに死を……！！消えろ…人間共めえぇぇぇぇぇ！！――

再び風景が変わり、今度は人の乗った巨大な機動兵器がミサイルやらビームやらを撃ちまくる。その爆炎の中を平然として歩き続ける。当る寸前にその攻撃は全て闇に還り霧散する。目が真紅に輝く、数千、数万はあった機動兵器が一瞬で爆散し跡形も無くなった。そして、その先にある巨大な都市に手を翳す、その下に巨大な魔法陣が出て漆黒の火柱が上がり街を…人を一瞬で消し飛ばした。

――次は……何処だ…何処にいる……人間共がああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！――

フェイト「い、いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

バルド「フェイト！？」

エ・キ「フェイトさん！？」

フェイトの絶叫に飛び起きた三人が慌ててテントから出て地面に倒れて鳴き叫ぶフェイトに駆け寄る。

バルド「おい！！フェイト！しっかりしろ！！」

フェイト「いや、いやあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

その間にも、フェイトの頭の中に次々に映像が浮かぶ。銀河に輝く世界の人々だけが次々に消えていく。フェイトの頭に人々の絶望の声が上がる。そしてどの映像にも血の様な真紅の瞳がフェイトを見ている。闇が……全てを呑み込まんと世界を包み込んだ。
頭を抱えて地面に倒れて悲鳴を上げるフェイト、その尋常じゃない事態にエリオとキャロが戸惑っている。バルドがフェイトを抱きしめる。フェイトの爪が皮膚に食い込んでそこから出血するが構わず抱きしめる。

バルド「落ち付け…大丈夫だ…」

フェイト「くっ……うあぁぁぁ……バ、バル…ド……？」

呼吸も安定し始めて痛みも消え始め落ち着きを取り戻してきた。バルドは、安心させる為にフェイトの頭を何度も撫で続けた。

バルド「落ち着いたか？」

フェイト「う、うん……ごめんね皆…」

エリオ「それはいいんですけど……大丈夫なんですか？」

心配する家族にフェイトは大丈夫と言う事を伝える。そして、バルドに怪我をさせてしまった事を謝る。彼はそんな事は気にすんなと言って笑いながら頭をガシガシと少し乱暴に撫でて立ち上がった。

それに反射的にだろうかフェイトはその手を掴んだ。

フェイト「あっ……」

バルド「フェイト？如何かしたか？」

フェイト「えっと……あのね…」

バルドやエリオ達に今思っていた事を少し恥ずかしげに告げると三人は笑顔でそれに答えてくれた。

フェイト「皆ごめんね……」

バルド「まあ、気にすんな」

エリオ「そうですよ」

今四人はベッドをくっつけて一本多いが川の字で寝ていた。順番は左からバルド、エリオ、キャロ、フェイトの順だ。フェイトは、不安なので今日は皆で固まって寝たいと言ったのだ。

キャロ「フェイトさんとは私もエリオくんも一緒にいたいと思って

ますから…」

バルド「なあ、エリオ、キャロ……」

エリオ「えっと、何でしょうか父さん？」

バルド「何でお前等はフェイトの事をお母さんとかって呼ばないんだ？」

キャロ「えっ！？そ、それはその……」

エリオ「何と言うか…その……」

バルド「恥ずかしくて言えないのか、遠慮して言わないのか分かんないがそれを気にする必要はないだろ？何たってお前達はフェイトの大事な息子と娘だ。言っても大丈夫だ」

エリオ「え、えっと…はい！それじゃあ…母さん／／／／／」

キャロ「お母さん／／／／／」

フェイト「っ！！うん……うん！！！」

そう言われてフェイトは嬉しくなって涙を流しながら何度も何度も頷いて二人を抱きしめる。

それを微笑ましく見るバルド。

そのあと、エリオもキャロも眠り、バルドもそれに続いて寝たのを

確認してフェイトはそっと、バルドの手に自身の手を伸ばして掴み指を絡める。

それだけで、心臓がドキドキと高鳴り高揚した思いを抱えたままフェイトも眠りについた。

# 第三十六話（後書き）

やってしまった……。如何でしたか？えっ？ナルガがチートすぎるだろって？そこは仕様だから仕方ナッシング～ｗｗすんません。調子乗りました…ｏｒｚ

さて、次回ははやての方です。それにしても……コメディ要素が出てこねえな…ネタも思いつかんし自分の非力さが見事に出てるぜ…ｏｒｚ

バルド「おい作者……これは如何いう事だ？」

反省はしている。だが後悔はしていない！！！

バルド「失せろボケが！！」

うぎゃあああああ！？

作者はログアウトしましたｗｗ

バルド「ったく、次回も早く更新されるよう締め上げる。読者の皆様この馬鹿を見捨てずにこれからも宜しくお願いします」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第三十七話（前書き）

作者のモンハン日記～

本日は２ｎｄＧ時代の作者の主要装備を公開！！

剣士装備

防具　暁丸・覇一式

装飾　大砲珠、（大砲モロコシなど装飾が三つの時）鉄壁珠、石壁珠

武器　大砲モロコシ、エンデ・デアヴェルトｅｔｃ…

発動スキル　砲術王、ガード性能＋１ｏｒ２、ガード強化、ダメージ回復速度＋１

見事なまでのチキン装備。もう防御しか考えていないって感じですね…ｏｒｚ

でも砲術王のお陰で砲撃の威力が上がっている…はず？あとは足元でガード突きをやっていれば大抵ノーダメで勝てる。弱点属性は投げ捨てるもの！！

続いてガンナー装備

防具　ザザミＺシリーズ

装飾品　弾製珠×５、拡散珠×４、爆師珠×５（スロット二つ空いてる武器必須）

武器　拡散弾撃てないヘヴィボウガンやライトボウガン

発動スキル　拡散弾全レベル追加、根性、最大数弾生産、ボマー、反動軽減＋1、装填速度－1

根性ついて中々倒れないガンナーになる。結構凄いスキル数だと自分は思う。何時もこれで一撃必殺のメテオや雷を連発するミラバルやミラルーツとかソロで余裕で戦える。基本作者はガンナーも剣士も接近オンリーなんで、離れて戦う、えっ？何それ美味しいの？的な感じでいるんで。装填速度－1は投げ捨てるものだと思っている。拡散弾レベル2撃ちまくり天国になれる。これ結構気に入ってる。

長くなりましたが本編をどうぞ！！今回はあの人が帰ってくる！？

# 第三十七話

クエスト名　『翡翠の魚影』

参加者

八神はやて（リインフォース？）、シグナム、ヴィータ、シリウス

場所　密林

狩猟対象

ガノトトス亜種2頭

狩猟環境は安定

四人は巨大な湖の前で釣り糸を垂らして立っていた。

はやて「なあ、シリウス君うちらは何やってんやろうな……」

シリウス「何って…釣りさ」

はやて「それは見れば分かる。けど、何でうちらは釣りをしてるんや？」

シリウス「何でって…釣り上げる為だよ～」

ヴィータ「釣り上げるって…あれをか？」

シリウス「当然！！今日は魚パーティさ！！」

はやて「そんなんできるか～～～！！！！」

現在四人はガノトトスを釣り上げるという正に無理、無茶、無謀な挑戦を決行中だ。

そして、痺れを切らし始めたはやてが遂にキレた。

はやて「シリウス君！！嘘も程度を考えや！！」

シリウス「嘘じゃないよ～！！実際何人ものハンターがガノトトスを釣り上げたって報告あるんだよ！？」

ヴィータ「いやっ、無理だろ！？あのサイズを釣り上げるってこの世界のハンターは如何かしてるぜ！？」

シグナム「……」

シリウス「はいはい、静かに～。ガノトトスは音に敏感だからそんなに騒ぐとガブッといかれちゃうよ？」

そう言って二人の唇に人差し指を当ててシ～っという仕草をする。

シリウス「シグナムを見なよ。あんなに集中してるし…」

シグナム「……」

シグナムは何も言わずに唯黙って鋭い眼つきで釣り糸の先で泳いでるカエルを見ていた。
シリウスが言うにはガノトトスはカエルが好物らしくそれを使っていたハンターが度々ガノトトスを釣り上げた報告がある。

ヴィータ「にしても、この世界の生き物って無駄にでかくねえか？」

この密林に来てから始めて見たのは人よりもでかい猪だった。
最初見た時はやては、（。Д。）は？となった。足で地面を掻き突進の構えをする。猪の名はブルファンゴ、ハンターを見ると猛スピードで突進してくるなんとも鬱陶しいモンスターだ。卵などを運んでいるハンターや大型モンスターと戦っている時とかに特攻をかます。……あれは作者もイラッときました。良い所でこんにゃろっ！！って感じで……

邪魔なんで先に消えてもらいますが…

さて、そんな猪野郎が特攻をかましてきたので四人は一撃の名の下にそれを潰した。そのあとも人と同じサイズのハチの大群や蟹の大群、まあ見事な想定外モンスターにはやて達もビックリしていた。

それらを倒して今はガノトトスを釣り上げる為に釣りをやっている次第だ。

シグナム「……むっ！」

その時シグナムの釣り針に付いていたカエルが水中に消えて強く引かれる感覚が伝わって来た。

シリウス「シグナムの方に当りが来た！！」

はやて「マジなんか！？」

シグナム「くっ、何という力だ！！」

目の前の水面が激しく揺れる。シグナムが段々と湖の方に引っ張られ始める。

シリウスが加勢に加わり引っ張るがそれでも引きずられる。

シリウス「二人も手を貸して！！」

はやて「わ、分かったで！！」

ヴィータ「マジで釣る気なのかよ！？って、重っ！！」

シグナム「こんな所で負けては騎士としての名が泣く！！」

はやて「いやいや！騎士道と釣りはあんま関係あらへんって！？」

シリウス「いっせ～ので引っ張るよ！！いっせ～の…」

四人「おりゃあぁぁぁぁぁ！！！」

勢いよく引っ張ると水面が大きく盛り上がりそこから巨大な影が飛び出した。

巨大な影がはやて達の上を飛ぶ。

はやて「でか～～～～！？」

真上を飛び越えて地面に打ち上がりビチビチと何度か跳ねた後、立ち上がった。

頭部はサメの様な形をしており歯は何重にも生えている。そして、ヒレや背ビレといった魚類特有のものを持ちながらその胴体からは水掻きの付いた足が生えている。太陽の光で輝く鱗は翡翠色で美し

く煌めいていた。

ただ……その大きさが尋常ではない。大体全長は２０メートルくらいはありそうだ。高さも１０メートルとちょっとした壁の様でその巨体の一撃を喰らえば命の保証はないかもしれない。

ヴィータ「こいつがガノトトスか！？」

はやて「でか過ぎやろ！？」

シリウス「今日はお魚パーティさ！！」

はやて「いやいや、無理やからね！？こんなでかいのどうやって運ぶんや！？」

その大きさには似合わない小さな瞳でガノトトス亜種は此方を見ている。

シグナム「ふむ、足が生えているが見た所あまり陸上は得意ではなさそうだな？」

はやて「なんや、それならうちらの圧勝やないか」

シリウス「そうでもないよ？油断してると――」

ブシャーーーー！！！！

はやての直ぐ脇を物凄い速度で何かが通り過ぎた。恐る恐る後ろを見ると背後にあった大きな岩が水浸しになってバターの様に易々と両断されて崩れていた。

シリウス「あんな感じで水ブレスを吐いて標的を真っ二つにして来るから……」

はやて「そ、それを早くいって下さい…（（（（。Д。；））））ガクガクブルブル」

モンスターの脅威を改めて実感したはやて達は気を引き締めてデバイスを装備する。そんで、リイン専用のバックで寝ていたリインも叩き起こし彼女もガノトトス亜種のでかさにビックリしながらもセットアップする。シリウスは何時もの『神威』ではなく『朱雀』を装備して構える。

シグナム「ガノトトスとやら、私はヴォルケンリッターの将、烈火の騎士シグナム！！いざ、勝負！！」

そう言ってからシグナムは魔力を爆発させ駆け出す。
シグナムの言葉は理解できないものの獲物が接近して来るのは理解しているのでシグナムに向かって切れ味抜群の水ブレスを放つ。それを紙一重で避け飛び上がりその鱗に覆われた胴体にレヴァンテインを振り下ろす。その一撃は鱗が受け流し大したダメージは通らな

い。ならばとシグナムが連続で斬りまくる。

ヴィータ「おりゃあああぁぁぁぁぁ！！！」

ヴィータも加わりアイゼンを足に叩き込む。二人が邪魔だと判断したガノトトス亜種はその場で回転し巨大な尾で二人を叩き落とそうとする。シグナムは地面に降りて姿勢を低くする事で避け、ヴィータはラウンドシールドで防御する。だがその一撃は非常に重かったのかシールドごと弾き飛ばされた。

シリウス「天狐閃月！！」

動きが止まった所にシリウスが飛び込み三日月を描く様に蹴りを入れる。再度シグナムも加わり斬撃を入れる。その二人にガノトトス亜種は全身を使って体当たりを加える。広範囲を巻き込むその一撃は流石に避けきれないと判断し二人はラウンドシールドと炎の障壁を展開する。手に強烈な衝撃が加わり二人とも大きく弾かれた。

シグナム「くっ！！何という力だ！！」

シリウス「これがあるからガノトトスはやりにくいんだよねぇ……」

はやて「それならこれは如何や！！彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストルティン！」

魔法が発動しミストルティンがガノトトス亜種の迫る。そのガノトトスは体を軽く反って口から水ブレスを放った。それは、飛んで来たミストルティンを一撃で全て切り裂きそのままはやて達に向けた。慌てて回避する。

リイン「リインだって頑張るです～！！フリジットダガー！！」

水色の短剣が複数ガノトトスに突き刺さる。
その個所は急速に凍りつき始める。驚いたガノトトスがその場で回転する。

ヴィータ「あたしを忘れんじゃねぇ！！ラケーテンハンマー！！」

余所見をしているガノトトス亜種にヴィータがアイゼンを叩きつける。
当った個所の鱗がひしゃげその周囲の鱗が弾け飛び血が溢れる。

突然の痛みにガノトトス亜種も悲鳴を上げ仰け反る。
立ち治してヴィータに狙いを定め水ブレスを放つ。それを縫う様にして避ける。

シリウス「紅蓮双拳！！」

ヴィータの背後からシリウスが飛び出して拳に魔力を集束して二つの赤い炎を撃ち出す。
頭部に着弾し大きく怯む。その隙にシグナムが接近しレヴァンテインを構える。

シグナム「レヴァンテイン！！カードリッジロード！！」

レヴァンテイン［ロードカードリッジ！！］

シグナム「はあああぁぁぁぁぁ！！！紫電一閃！！」

ガノトトス亜種［ガアアァァァァァァァァ！！？］

強力な一撃に血を噴き出して悲鳴を上げる。
すると、ガノトトス亜種はシグナム達に背を向けて駆ける。その先には湖が……

ヴィータ「逃げる気かよ！？」

はやて「逃がさへんで！！彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストルティン！」

リイン「リインも続くです～！！フリジットダガー！！」

二人の攻撃がガノトトス亜種に飛ぶ。ガノトトス亜種は湖の手前で大きくジャンプして湖に飛び込みその強靭な尾をで水面を大きく叩

き巨大な水の壁を出した。それにフリジットダガーが辺り氷の壁になってはやてのミストルティンの進行を妨げた。氷の壁に直撃し石に変わり崩れ落ちる。その瞬間、その崩れる壁の向こうからガノトトス亜種が顔を出し横に薙ぎ払う様に水ブレスを吐き広範囲を攻撃してきた。

各々がそれを回避しヴィータがシュワルベフリーゲンを飛ばすが水中深くに潜り込み姿を眩ました。

シグナム「……くっ！ならば！！」

はやて「シグナム！？」

シグナムは突然一人で水中に飛び込み周囲を探す。すると意外と近くにガノトトス亜種が此方に突進をして来ていた。

シグナム「なっ！？」

咄嗟にラウンドシールドを展開してそれを受ける。推進力の付いた突進は非常に強力でそのまま押され背後にあった岩の壁にぶつけられる。

シグナム「ぐぅ！？」

痛みを堪えて口から酸素が漏れるのを抑える。突進は終わらずそのまま別の壁に突っ込んだ。全身を強く打ちつける。

シグナム「かはっ！！」

流石に耐えきれず口から空気が漏れる。動きの鈍ったシグナムを捕食しようとガノトトス亜種が一度下がり大きく口を開けて再び突撃をして来る。その両者の間に水を裂いて割り込んできた者がいた。

シリウス「紅蓮拳！！」

自身の目の前に炎の魔力の塊を形成しそれに拳を叩きつけて放つ。それは大口を開けているガノトトス亜種の口に入って爆発、衝撃でガノトトス亜種が水面から飛び出た。その隙にシグナムを水中から引き上げる。

シリウス「今だよ！！」

はやて「仄白（ほのしろ）き雪の王、銀の翼（も）以て、眼下の大地を白銀に染めよ。来（こ）よ、氷結の息吹（アーテム・デス・アイセス）！！」

ガノトトス亜種が水中から何か行動を起こす前にその周囲ごと一瞬で凍らせた。

ヴィータ「シグナム、大丈夫か？」

シグナム「けほっけほっ！！ああ、大丈夫だ。すまない、シリウス助かった」

シリウス「相手は水中で生きてる相手なんだから無理に向こうの土俵に入らなくても良いじゃん。全く無理するね～」

はやて「なあ、あれで倒せたと思うんやけど？」

シリウス「あまいねぇ～はやて、こんなんで倒せるんだったらさ――」

――ピシッ、バキッ、バキバキッ！！――

シリウス「ハンターの皆も苦労しないさ……」

ガノトトス亜種［ガアァァァァアアアアアァァァァ！！！］

ヴィータ「なっ！？」

はやて「嘘やろ！？自力で氷結の息吹（アーテム・デス・アイセス）を破壊したんか！？」

リイン「皆来るです！！」

ガノトトス亜種の口に大量の水が集束される。そして、口から先程

の数倍の大きさの大出力の水ブレスが発射された。

四人「っ！！？」

破壊の奔流が迫り慌てて飛び退る。その後を追跡する様にガノトトス亜種が体の向きを変えて水流の方向を変えて四人の後を追跡して来る。その水ブレスの当った岩石の崖が大きく抉れていく。

はやて「くっ！！何処まで追ってくる気や！！」

シリウス「こうなったら！！」

シリウスが三人の殿に着き水ブレスと向き合う。
既に目の前に迫って来ていた。

はやて「シリウス君！？」

シグナム「シリウス！！何をする気だ！？」

シリウス「炎の塊！！バーンストライク！！」

シリウスの頭上から大きな火球が三発落ちて水ブレスに激突、爆発する。
しかし、それだけでは止まらず迫って来る。

シリウス「バーンストライク、連射♪」

更に火球が断続的に降り注ぎ拮抗する。最後に大爆発して二つの攻撃は相殺された。

シリウス「まだまだ～！！」

魔力を爆発させ一気に接近しガノトトス亜種の目の前に移動した。

シリウス「朱雀連牙弾！！更に～～朱雀空円脚！！」

炎を纏った高速の拳の雨を打ち込み、更に高速で蹴りを打ち込んだあと円を描く様にしてガノトトスの顎を蹴り上げた。その連続攻撃には流石に堪えたのか引っくり返って大きな水柱を上げて水中に沈んだ。

シリウス「まだまだ～！！」

シグナム「シリウスばかりにやらせる訳にもいかん！行くぞ、ヴィータ！！」

ヴィータ「ああ！！」

二人も飛んでいき激しくぶつかり合っているシリウスとガノトトス亜種に突っ込み参戦、水ブレスが断続的に放たれる。それを掻い潜りシリウスがファイヤーボールをヴィータがシュワルベフリーゲンを四発飛ばし牽制してその隙にシグナムがその胴体を斬る。

はやて「うちかて続くで！！」

はやてが魔法の詠唱を始める。

はやて「来(こ)よ、白銀(はくぎん)の風、天よりそそぐｙ――――」

だが、その時…！

ガノトトス亜種２［ガアアァァァァアアアァァァ！！！］

はやての背後から別のガノトトス亜種が飛び出してきた。

シグナム「主！！」

ヴィータ「はやて！！」

はやて「しまっ――！！」

詠唱中で動けないはやてにその巨体がぶつかる。諸にくらって吹き飛ばされ岩の壁に激突する。全身の骨が軋む音が聞こえる。

リイン「はやてちゃん！！」

はやて「ぐぅ……！」

ヴィータ「くそっ！！もう一体来たのかよ！！はやて、今いｋ「ヴィータ！後ろだ！！」っちぃ！！」

はやての下に急いで行こうとするがそれを三人が相手していたガノトトス亜種が邪魔をする。
水面を激しく叩き水の壁を作ったり全身を使って体当たりしてきたり、水ブレスを連射したりと誰かが動こうとすると邪魔をしてきた。

シグナム「まさか、行かせない様にしてるのか！？」

シリウス「邪魔すんなって！！」

三人の焦る気持ちを逆手にとって雑になり始める攻撃を水中に潜ったり水の壁を作って防御したりする。その間にもはやてを狙ってもう一体が迫って来る。

リイン「捕らえよ、凍てつく足枷（フリーレンフェッセルン）！！」

凍結魔法を発動させガノトトス亜種を周囲の水ごと氷漬けにした。
そして、はやての下にリインフォースは駆けつける。

リイン「はやてちゃん！！大丈夫！？」

はやて「っつ～～！もう一体来るなんて予想外や……！！」

如何やらそこまで酷い怪我はしてない様でフラフラしながらも立ち上がる。
心配そうにオロオロしてるリインフォースに痛みで引き攣りながらも笑みを浮かべて安心させようとしたが……

ガノトトス亜種２［ガアアァァァアアアアァァ！！！］

なんと、ガノトトス亜種が氷を突き破って強力な水ブレスを二人に放った。
回避が間に合わない！！

シリウス「はやて！リイン！！」

時間が遅くなったかのようにそれはゆっくりと迫る。
その時、思ったのはあの時の約束だった……

――私は絶対に戻ってきます。絶対に……。ですから、さよならは言いません。また、会いましょう……――

大切なもう一人の家族……今はいないけど絶対に帰って来る大事な家族……

はやて（リインフォース……ごめんな…）

もう駄目だと思い、リインを庇い現実から目を背ける為に目を閉じた。
だが……

？？？「ラウンドシールド！！」

その声が聞こえると共に激しくぶつかる衝撃音が聞こえた。

ヴィータ「なっ！？」

シグナム「ま、まさか…！？」

二人の驚愕の声が聞こえ恐る恐る目を開けるとそこには……

???「私の大事な主、はやてはやらせはしない！！」

銀の長い髪を煌めかせ自身の目の前に立っている女性、その姿を見て目を見開く。

まさか、そんな事は…！？だが、目の前にいるのは間違いない！震える唇でその名を呼んだ。

はやて「リイン…フォース…？」

初代リインフォース「はい、ただ今戻りました。我が主、はやて」

顔だけをこちらに向けて微笑む彼女は間違いなく初代リインフォースだった。

赤い瞳がはやてを映し出す。

初代リインフォース「言いたい事は沢山ありますが今は……撤退しましょう」

シリウス「誰だか知らないけどそれは賛成だね～♪これは流石にはやて達にはきついから…そこの人、手を貸して！！」

初代リインフォース「分かりました！！」

一頭を思いっきり殴り付けて頭部を揺さぶりダウンさせる。
そして、すぐさま二頭目に接近して拳を構える。

シリウス「朱雀轟衝拳！！！」

初代リインフォース「飛炎猛撃拳！！」

シリウスが両手の拳に炎を纏い乱打し最後に火の鳥を拳から放ってその巨体を打ち上げる、初代リインフォースが相手をバインドで捕らえた後、乱打を浴びせて打ち上げ、最後に炎を纏った跳び蹴りで胴体に打ち込んだ。

二人の強力な一撃に二頭目が吹っ飛んで遠くの水面に落ちる。

ってか、あれ死んだのではないだろうか……？

そんなことはお構いなしに呆然としているはやて達を引き連れて一同は一端ベースキャンプに撤退した。

---

初代リインフォース「さて、何から話すべきでしょう…？」

はやて「ホンマに…ホンマにリインフォースなんか…？」

初代リインフォース「はい、ただ今戻りました。我が主、はやて」

それを聞いた途端にはやては抱き着き号泣した。そんな主を優しく抱きしめその温もりを再び感じる事ができ涙が出て来た。暫く抱き合ってから離れてはやては改めて今迄の事を聞く事にした。

はやて「リインフォースは今迄如何してたんや？」

初代リインフォース「話せば長くなります。それに、この事はあまり口外するなと言われているのでそこまで詳しく話せませんが…」

……

……

…

十年前…門をくぐったリインフォースを待っていたのは黄金に輝く広大な草原だった。

リインフォース「ここは……？」

――ようこそ、究極の楽園にして最後の理想郷『全て儚き理想郷（アヴァロン）』へ――

背後にあの存在が現れる。

リインフォース「此処は何処ですか？」

――此処は俺の創りだした究極の世界…ありとあらゆる者達が渇望する真の永遠世界だ――

そう言って目を細める。そこに向こうから誰かがやって来た。

？？？「また来たのか…。今度は誰を連れて来たんだ？」

――ふっ、そう呆れた声を出すなアルトリアよ――

アルトリア「一度外に出たのに直ぐに戻って来て、前回は人とその使い魔、それに魂無き器そして今度は…何か訳ありの人物の様だな」

アルトリアと呼ばれた女性は腰よりも伸びた美しい金のロングヘアーに緑の瞳、その身を包むのは純白のドレスだった。

――すまんがこいつの中で巣くっているプログラムを破壊するのを手伝ってくれ。俺はもう行く――

アルトリア「そうか…何かの被害者という事か…。分かった。では、そこに者付いて来い」

――頼むぞ?アルトリア、いや…アーサー王よ――

アルトリア「その名は私ではない。確かに嘗ての私はそう呼ばれていたが今はアルトリアだ」

――ははっ、すまないそうだったな。今度手合わせしてやるから勘弁してくれよ?では、頼むぞ――

そんの背後に巨大な扉が出現し開く。その向こうは虚数空間が広がっておりそこにそれは飛び込んだ。虚数空間に消えるとその扉は閉じて消えていった。

……

……

……

…

初代リインフォース「そして私はその世界で体の中にあったプログラムを剥がして破壊する事が出来ました。しかし、その時ユニゾンシステムと自身の使える魔法を全て失ってしまい帰れなかったのです。その為私は主達に追いつくために体術を学び魔法が再び使えるようになるまで待つ事にしたのです」

はやて「そうやったんか……」

初代リインフォース「シグナム、ヴィータ。ザフィーラとシャマルも元気でいますか？」

シグナム「ああ、二人は今、主が設立した機動六課で留守番をしている」

ヴィータ「それになのはやフェイトもいるんだぜ！それだけじゃねえ、沢山仲間が出来たんだ！！」

初代リインフォース「そうですか……。それはそちらの方もなんですね？」

シリウス「初めまして～♪現在次元世界で『夢幻の覇者』なんて二つ名貰っちゃてる格闘戦士シリウスで～す！！」

何時もの様にお茶らけた感じで挨拶するシリウスを見て苦笑いするはやて達。

初代リインフォース「初めまして。元夜天の書管理プログラムのリインフォースです。主がお世話になっています」

シリウス「いやいや、俺は最近来たばかりだからその言葉はなのは達にあった時に言って置きなって。俺は特に何もしてないからさ♪」

リイン「そんな事ないです～。シリウス君のお陰ではやてちゃんは

昔ほど張りつめた感じが消えているですからシリウス君のお陰なのです～♪」

はやて「ちょっ！？リイン！？な、何言ってるんや／／／／／／！？」

初代リインフォース「……成程、そう言う事ですか…ふふっ」

はやて「リインフォースまで！？」

シリウス「ん～それじゃあそのお礼は……はやてのキｓ「言わせへんで！！」鉄ハリセン！？」

阿吽の呼吸で見事なツッコミが決まりキャンプ地にスパーン！！と良い音が響き渡る。

地面に伸びてるシリウスを放っといてリインフォースの帰還祝いも込めて何時も以上に気合いを入れて夕飯の支度をする。

はやての手伝いをしようとしたリインを初代リインフォースが呼び止める。

初代リインフォース「もう一人の私よ、主の事を守ってくれてありがとう……」

リイン「それはリインだけじゃないのです。はやてちゃんにはヴィータちゃんや皆が付いていてくれたからです」

初代リインフォース「そうだとしても、だ。ありがとう…」

そう言って頭を下げ感謝の意を告げる。そしてそのあと互いの顔を見てクスッと笑って二人ははやての下に向かうのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

夕飯はまあ、想像通りシリウスがはやてをからかい、それにはやてがツッコミを入れ賑やかなひと時だった。

今は皆がキャンプで寝ている。はやては初代リインフォースと同じベッドで寝ている。

今迄甘えられなかった分そうしてあげようとシリウスが言ったからだ。

その当の本人は一人でキャンプの前にそびえ立っている高い崖の上に立っている。

そこを吹き抜ける風が彼の髪を棚引かせる。

シリウス「家族、か……」

そう言葉を零して目を閉じて風を肌で感じる。思い出すのは自身の身内、ずっと会っていない元気にしているのだろうか？

シリウス「でも……俺は戻る訳にはいかないんだよねぇ…」

戻る訳にはいかない。戻ればどうなるか、そんな事は想像がつく。

シリウス「さて、と…もしもの時の為に何時でも本気を出せるようにリミッターの調整でもしとこうかな～」

先程までのシリアスな雰囲気は消えて普段のふざけた感じに戻ると、意識を集中させる。

すると、シリウスの存在が膨れ始めた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――

シグナム「……むっ」

肌に突き刺さるような感覚を感じてシグナムは目を覚まし手にレヴァンテインを持つ。

初代リインフォース「……気が付いたか、シグナム」

シグナム「リインフォース、お前もか？」

初代リインフォース「ああ、何だこの感じは……？」

得体の知れない感覚に目を覚ました二人は体を起して外に慎重に出る。

正面には誰もいない。だが…確かに感じる大きな力のうねり、静寂の中に圧倒的な存在の力が溢れている。

初代リインフォース「一体、何処に……！？」

その時、崖の上を見て目を見開く。そこには……黄金の毛並みを持つ九つの尾を生やした狐が此方を見ていたからだ。

狐？「……」

その身から溢れる力は神々しく、また畏怖の象徴かの様に荘厳な姿を見せつけていた。

シグナム「なんだあれは……！？」

初代リインフォース「これは……魔力！？この世界にその様な力を持つ生き物はいない筈！？」

狐？「コオオォォォォォォォン！！」

一声上げてそれは崖から飛び降りる。地面に着地する寸前に勢いが止まり悠然と着地、九つの尾が意思を持つかのように動く。二人をその綺麗な宝石の様な緑の瞳で見つめる。油断無く二人は何時でも動けるように構える。だが……

シグナム「な、なんだ！？」

初代リインフォース「か、体が動かない……！？」

まるで、体がその格好で縛られたかのように動かなかった。
そんな二人を無視して間を通ってキャンプの方に歩み寄る。
そして、一定の距離を進んだあと動きを止めてそこに座り一点を見つめている。

シグナム（あ、主を見ている…？）

初代リインフォース（この生き物は…何が目的で…！！）

暫く見つめていたそれは急に立ちあがって無言で地面を蹴り上空に飛び上がるとその身は光に包まれてそこから消えていなくなった。
それと同時に二人を拘束していた何かも消える。

シグナム「何だったのだ、あの生き物は……？」

呆然とその狐がいた所を見つめる。そこに足音が聞こえてその方向を見ると茂みの向こうからシリウスが出て来た。

シリウス「ありゃ？二人ともそこで何してんの？」

初代リインフォース「シリウス、貴方こそこんな夜更けに何処に行っていたのですか！？」

シリウス「いや～、ちょっと夜のパトロールってね。大きな気配を感じたから周囲の警戒をば」

シグナムはシリウスに先程見た生き物の事を伝える。すると、ふ～んと軽い感じで平然としている。

シリウス「そっか～。まあ、それなら大丈夫でしょ」

シグナム「何故だ?あれ程の存在だぞ、警戒をしておいた方がいいのではないのか?」

シリウス「それは心配しなくても良いよ。だってそれは気紛れだからさ。……それよりも、リインフォースは早くはやてのとこに戻った方が良いよ?」

はやてが隣にいる人を探す様に手を動かしている。慌ててはやての下に行きその手を握ってあげると不安そうな寝顔が安らかになり寝息をたてる。

シグナム「あのような生き物が目の前にいたというのに二人とも起きないとは……」

シリウス「しょうがないって、明確な敵意も持っていないんだし、向こうも攻撃する気は無かったろうしね。……ふあぁぁ~~、眠いからもう寝るよ。おやすみ~~」

そのままベッドに横になって寝てしまった。それを、唖然として見る。

あんな強大な力を持った生き物が近くにいるかもしれないのに、よくもまあ寝れるものだとも図太い神経を持っているとも思った。

初代リインフォース「シリウスが言うのです、多分あれはもう此処には来ないのでしょう。私達も休みましょう」

シグナム「あ、ああ…そうだな…」

二人も横になり明日に備えて休息を取る事にした。
微睡の中シグナムはふと疑問に思った。

シグナム（そう言えば……何故シリウスが敵意を持っていなかった事を知っていたのだ……？）

だが、それを深く考える前にシグナムも眠りについてしまった。

---

はやては夢を見る。燃え盛る村、逃げ惑う人々その顔には恐怖、怒り、悲しみ、憎しみその様な負の感情を見せている。

はやて「な、何や此処は！？」

周りにあるのは古びた家々、まるで太古の時代にタイムスリップしたかのようだ。

そして、爆発音が聞こえそちらを見るとそこには数多の異形の者達、魑魅魍魎の化け物が暴れまわっていた。

奇声を上げて人に襲いかかる。首を飛ばされたり体を食い千切られたり吹き飛ばされたりしているそれを見て体が震える。その一部が此方に迫って来た。

はやて「あ……ああ…」

このままだと自分もあんな事に……！！逃げようと思っても体が竦んで動けなかった。
眼前にまで迫って来る。もう駄目だと思い目を瞑ったその時だ…。

？？？「流れ星～！！」

妖怪ズ「フギャアアアアアア！？」

突然、空から何かが隕石よろしく地面に着弾、その衝撃で前方の妖怪の皆様は見事に吹き飛んだ。
煙の中から人影が出てくる。黒髪の端正な顔をした男性だ。そして、突然人々の動きがまるで時が止められたかのように止まった。

???「君達さ…此処が誰のテリトリーか分かってやってるの？」

モブ妖怪１「ナナナナナ、ナンナンダオマエハ！？」

モブ妖怪２「オレタチノジャマスルナラコロスゾ！！」

見事なまでの死亡フラグを立てて特攻をかましてきた一体の大きな爪の攻撃を体を少しずらす事で避けてその額を軽く指先で小突いた瞬間、

モブ妖怪２「アバァァァァァ！？」

???「君じゃあ相手にならないさ～」

その頭部が破裂してあっという間に昇天した。合掌……

???「お前等纏めてる馬鹿は何処さ？素直に吐いた方が良いよ」

モブ妖怪１「ダレガオマエナンカニ！！オイオマエタチヤッチマエ！！」

モブズ「「「「「イーーーーー！！」」」」」

何処かのショッカーよろしく奇声を上げて特攻して来る馬鹿の群れ、

それを見て溜息を吐く人。

？？？「やれやれ、知能が低いと言葉も理解できないのか……邪魔…」

そう呟いて右手を翳すその人、そして何かを掴む様に開いていた手が閉じ始めると目の前の空間が歪み始め突っ込んできた妖怪たちが集められた。突然の事になにが起きたのかさっぱり理解出来ていないそんな彼らに無情にも彼は別れの言葉を投げかける。

？？？「さようなら」

手をギュッと握った瞬間、空間が弾けて目の前の妖怪たちが消し飛んだ。
号令を出した者だけが残りその光景に目を丸くしていた。一歩彼が歩み出す。
そして、今更になって恐怖が込み上げて体を震わせる。

モブ妖怪１「ヒ、ヒィ～～！！」

駆け足で逃げだす。その先には巨大な鬼が立っていた。
如何やら親分の様だ。時が止まったかのように動かなくなった人々に疑問を持っていた親分にさっきのモブが泣き付き事情を話し始める。

？？？「お前が親分？」

そこにゆっくりとした足取りでやって来る彼。

鬼「キサマカ！！コノゲンショウヲオコシタモノハ！！」

？？？「そゆこと。言っとくけどその止まってる人達になにをしても無駄。空間ごと固定してるからね、どんな攻撃してもビクともしないよ♪」

鬼「キサマ、アラテノケショウカ！？オマエタチイッセイニカカレ！！」

モブズ「「「「「「イーーーーー！！！」」」」」」

全方向から一斉に妖怪たちが飛び掛かった。

しかし、そんな状況でも彼は焦っていなかった。いや、寧ろ笑っていた……。

その邪悪なまでの笑みにはやては身震いした。

本能的に悟った、あの人は彼らが幾ら束になっても倒せない、と…

？？？「此処は俺のテリトリーだよ。余所から来たやつは出ていきな！！」

片足を振り上げてそれを地面に叩き降ろす。轟音と共に辺りが光に包まれ視界が封じられる。
思わず目を瞑って光りをやり過ごした。そして、目を開けるとそこには大きなクレーターとその中央に彼がいるだけ。周囲には妖怪たちがいなかった。

鬼「バ、バカナ!?ワガセイエイガイッシュンデ!?」

今になってその人の恐ろしさを理解して後退りする。そこにゆっくりと近づいて行く。
その人の口からは青白い炎が漏れていて彼の周囲にも同じ色をした火の玉が幾つも出ていた。

鬼「コノアットウテキナヨウキ…ソレニ、アオイホノオ…!!マサカキサマハ――!?」

それを言いきる前にその人が鬼を通り過ぎる。その手には途轍もなく鋭利な爪が生えていた。

??「やっと理解したみたいだね。もう遅いけど……」

鬼「オノレ……キ…サマハ…キュウ……ビ……ダッタノカ……!!」

体がズレていき細切れになって霧散していった。

鬼の最後の言葉を聞いたはやては驚愕の出来事に目を見開く。

今自分が見ている男はあの有名な九尾の妖狐なのだ。

だが、九尾と言えば絶世の美女に化けているというのが有名な話だが目の前でケラケラと笑っている九尾は男だ。これは如何いう事なのだろうか？

九尾「残念だったな鬼よ…。俺は九尾ではあるが仙狐でもあり天狐でもあるのさ。おっと、もう死んでいるから聞こえないか……さて、壊れた所と人間共の記憶を弄っとかないとな～」

そう言って背を向けて歩きだす。破壊された村が元に戻っていく中その姿は徐々に霞んでいき消えていった。それと同時に人々が動き出し、自分達はなにをしていたのだ？という風に首を傾げて各々は今自分のやるべき事を思い出して慌ただしく動き始めるのだった。

はやて「九尾……あれが…伝説にいた最強と言われた妖狐…」

確かに圧倒的な力だった。夢の筈なのにそれを肌で感じた。けど、けどだ……

はやて（何であんたはそんなに悲しそうな顔をしてたんや……）

最後に見せた彼の顔には悲しみに染まっていた。それが酷くはやての心を抉ったのだった。その悲しい顔が頭から離れることなく彼女の夢は終わりを迎えるのだった……。

## 第三十七話（後書き）

という訳で、初代リインフォースの登場です！！

初代リインフォース「よ、宜しく頼む」

彼女には格闘技となのは達から得た魔法の改良版を使用してもらう予定です。あくまで予定だけど……。

初代リインフォース「これからは主のためにより一層精進する」

はい、頑張ってくださいね。次回はなのは達の所に戻る予定です。そして前書きには３ｒｄでの装備を紹介したいと思います。

シリウス「どうせチキン装備なんでしょ？」

……ｏｒｚ

シリウス「あり？図星？」

チッキショーーーーー！！！！

シリウス「ありゃりゃ泣きながら飛んでいったよ…。次回もなるべく早く投稿するように頑張りますのでこれからも宜しくお願いします。どこかおかしい所とかあったら知らせてもらえると嬉しかったりします。では、読者の皆様さよなら～！！待ってよ作者～！！」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第三十八話（前書き）

作者のモンハン日記～！！

本日は３ｒｄの装備を紹介します。

剣士装備

防具　アグナUシリーズ

装飾品　砲術珠×５、鉄壁珠×２

護石　闘士の護石　効果　砲術５

発動スキル　ガード性能＋２、ガード強化、砲術王、氷属性攻撃強化＋１、火属性攻撃弱化

はいでました！！２ｎｄＧ時代と同様のチキン装備！！これはきっとガンランスの為にある装備と言っても過言ではない、はず？しかし、今作はガード性能＋２でも完全ガードできない攻撃がちらほらと…苛めか？まあそこは新技フルバーストで何とかおつりが出るので良しとするべきだろう。護石がもっと上のが欲しい！！基本はこの装備でスネオ（アルバ）を相手する。弱点属性はバックドロップするもの！！

もう一つ

防具　荒嵐シリーズ

装飾　強走珠【3】×2、（水属性武器を使う時腰装備に）流水珠【2】、（武器にスロットがあれば）【1】

護石　女王の護石　効果　スタミナ1　空きスロットに強走珠【1】、早食い珠【1】

武器　ドロスドロス＋、ラースプレデター＋、ｅｔｃ…

発動スキル　力の解放＋2、斬れ味レベル＋1、水属性攻撃強化＋1ｏｒ＋2、ランナー

双剣に特化した装備？ランナーでスタミナ消費を抑えて力の解放が発動するとスタミナ消費速度が激減して結構長く乱舞を繰り返せる。強走薬要らず～！！もっと良質の護石が欲しいと日々火山に行ってピッケル振るってる。

ガンナー装備はありません。なぜなら…前作よりも作者的には扱いにくさが増したからだ！！あれはやりにくい！！

おまけ

採取に特化した装備ならレザーシリーズを装備して空きスロットに採取珠【1】、護石で2以上の気まぐれがあれば発動スキル　神の気まぐれ、採取＋2、高速収集が発動します。あくまで採取専用なんでこれで上位モンスター討伐に出ちゃダメだぞ？体当たりされただけで天国への片道切符が発行されるぞ！？

長くなりましたが本編をどうぞ！！今回も難産だった……ｏｒｚ

# 第三十八話

クエスト名『動く火山』　二日目～

参加者

高町なのは

カイン・レオンハルト

クラウド・ケリオン

セフィリア・ドム・バロム

（ガルドは控え）

場所

火山

狩猟対象

グラビモス通常種×２

狩猟環境は安定？じゃねえよ！！

翌朝、目覚めたカインは非常に困った状況にあった。

なのは「すぅ……すぅ……」

カイン「……動けん…」

原因は言わずとも分かるが隣で寝ているなのはだ。寝ている内になったのだろう、彼女は彼を抱き枕の様に抱きしめている。しかも、足まで絡められているというなんとも羨ま…ゲフンゲフン！！けしからん状況だ！

なのは「んん…」

時折りモゾモゾ動く所為で色々な所が当る。寝ている彼女の顔は穏やかでその潤っている唇に視線が吸い込まれる。それに、柔らかい二つの感触が…いかんいかん！！煩悩退散煩悩退散！！

サイフォス［ククク、友よ随分と面白い状況だな？］

カイン「サイフォスか…これを何とかしてくれ」

サイフォス［なのは嬢を起こせと？無理な話だ。安らかに寝ている彼女を起こすなど無粋であろう？］

そうは言ってるがこの状況を楽しんでいる方が大きいだろう。

ガルド「朝からお熱いこって」

そうこうしている内にガルドも起床する。そして、カインの状況に苦笑いする。

カイン「ガルド、こいつを起こしてくれ」

ガルド「生憎と俺にも眠り姫がいるんでな」

そう言って拒否してセフィリアの方に向かう。彼女は布団に丸くなって眠っており何処ぞの小動物みたいな感じである。

ガルド「おい、朝だぞ」

セフィリア「ふにゅ～～、もう少しだけ……」

そんな事をのたまう彼女の布団を引っぺがす。火山といっても此処はそこから少し離れた場所にある。
朝の冷たい外気に晒されて小さくクシャミをして眠たげな顔をして起きる。

セフィリア「うぅ～……寒いよぉ…」

ガルド「ほら、何時までも情けない顔してんな。顔を洗って来い」

そう言って先に外に出ようとしたガルドの服の裾をセフィリアがキュッと掴む。

セフィリア「ガルド…何時もの……」

ガルド「おまっ！此処でか！？」

セフィリア「約束……」

ガルド「お前には羞恥心は無いのか！？……いや、寝ぼけている時はそんなの無いんだったな……はぁ～、しょうがない姫様だ……」

セフィリア「んっ……」

そう溜息を吐いたあと、ガルドはセフィリアにキスをした。互いを求めるかのような熱い口付け、たっぷり一分位経って離れる。

ガルド「目、覚めたか？」

セフィリア「うん／／／／／／／／／／おはよう、ガルド／／／／／／／／」

ようやく覚醒した彼女は顔を真っ赤に染めて朝の挨拶をする。

ガルド「おはよう、セフィリア。さっさと顔を洗ってスッキリして来い」

セフィリア「はい／／／／／／／／」

火照った顔を冷やす為にセフィリアはテントから出ていく。そのあとをガルドも追って出ていった。

カイン（お前等の方が熱いだろ……）

そうツッコミたかったが心に留めておく事にした。今は自分の現状を何とかしたいので頭を動かすのが精いっぱいだからだ。

サイフォス［友も今のを真似したらどうだ？］

カイン「アホか！？そんなこと、教え子に出来るか！！」

サイフォス［ふむ…なのは嬢なら喜ぶと思うんだが……？］

カイン「あのなぁ……」

サイフォス［クックックッ、冗談だ。友のしたい様に起こしてやればいいだろ］

そう言って虚空に消える。いや、手も動かせないこの状況で起こせる方法といったら一つしかない……。

そっとなのはの耳元に顔を近づける。

カイン「なのは、朝だぞ。起きろ」

そう言って耳に優しく息を吹きかける。

なのは「あっ／／／／／／／」

一瞬だけ体が震えて閉じていた目がゆっくりと開く。

なのは「カイン君……？」

カイン「おはようなのは」

なのは「ふにゃ～、おはよう……」

まだ寝ぼけているのだろう猫みたいな状態だ。そう言えば彼女は朝が苦手だったな、と思い出して益々なのはが子猫に見えた。

カイン「さて、起きた所でひとつお願いがあるんだが……」

なのは「……ふえ？」

カイン「この手と足を退けてくれないか？」

そう言われて今の自分の状態を確認する。まず腕だ、彼の背中に回してガッチリホールド状態、次に足、見事に彼に絡めている。完全な密着状態だ……。

なのは「……あっ、ご、ごめん！」

此処でやっと覚醒して慌てて拘束を解いて起き上がる。自分の心臓が朝から大暴走状態だ。まさか、自分があそこまで大胆な…。全身

から熱が出るほど真っ赤に染まり煙が出る。

なのは「ふにゃ～～／／／／／／／／／」

カイン「なのは？……お～～い、しっかりしろ～～」

暫く脳がオーバーヒートを起こしてＮＯＷＬＯＡＤＩＮＧ状態になっていた。

クラウド「お前ら朝から何やってんだ……？」

そしてクラウドにもツッコミを入れられてしまう二人だった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

そんな朝のイベントを終えて火山内部を散策する一行、勿論グラビモス討伐の為だ。

ただ昨日と違うのはガルドも同行している事だ。

そして現在イーオスの群れに囲まれている。

前回出て来たドスイーオスの群れの残党の可能性もある。

群れが一斉に飛び掛かる。散開して避けカインが雷切を取り出し飛び掛かって来たのを斬り捨てる。なのはが魔力弾を幾つも飛ばして牽制し怯んだ所を砲撃で吹き飛ばす。クラウドは干将・莫邪を連射し接近してきた相手を蹴り飛ばし更に踏み台にして真上に飛び上がりそこから銃弾を雨の様に降らす。セフィリアは剣を鞘に収めたまま帯刀術で殴り、蹴り飛ばし抜刀術に直ぐに切り替えて高速で剣を振る、幾つもの真空破が出て相手を斬り刻んだ。ガルドはその大きな盾でイーオスの攻撃を受け止め高速で槍を突き出し相手の体を貫く。更に、槍を地面に突き刺すとそこから岩塊が噴き出しイーオス達を吹き飛ばした。

一瞬で同胞が多くやられてあっという間に生き残った者達は逃走していった。

クラウド「ふぅ～、親玉いないと楽だな」

カイン「あとは、グラビモスだけだな」

とは言っても相手は溶岩の中を移動する奴だ。見つけるのも一苦労である。

ガルド「そう言えば此処にロストギアの反応はあったか？」

なのは「ううん、レイジングハートは何も反応がなかったって言ってたの」

セフィリア「という事は外れなんだね。今度は何処に行くの？」

カイン「それは帰ってから決める。さっさと片付けるぞ」

そうしてしばらく歩き続けると開けた所に奴はいた。
前回あんなにボコスカやったのにも拘らずまるで何でもなかったかのように平然と歩いていた。

セフィリア「居たね……」

カイン「大きさ的に見て一頭目だろう」

クラウド「なら、スピード勝負だ。一気に片付けるぞ！！」

皆頷いて駆け出す。
なのは達の姿を見つけて威嚇の咆哮を上げる。そして、地面を蹴り突進を仕掛けて来る。それを散開して避けてクラウドが素早く武器を構えて連射、それは堅い甲殻に弾かれる。ならばと干将・莫邪をバスターモードに切り替えて強力な砲撃を放つ。その一撃に巨体が動く。グラビモスがクラウドの方に意識を向けて熱線を吐く。それを避け、その隙になのはの魔力弾が逆方向から胴体に直撃、意識がそちらに向く前にカインが懐に潜って連続斬りをして動きを止めさせカインを狙って振るわれた尾をガルドが右手に持つ大きな盾で防ぎその間にカインはバックステップで距離を取る。セフィリアがす

かさず反対側から飛び込んで斬撃を入れガルドも槍で胴を突く。その二人を迎撃せんとグラビモスは真上に飛び上がってその巨体で押し潰そうとするが既に二人はその体の下から脱出しており空振りに終わる。

クラウド「そこだ……」

そこにクラウドの砲撃が放たれ頭部に直撃、痛みでグラビモスが大きく仰け反る。

ガルド「氷刃槍！！」

超低温の冷気を纏った槍を高速で突き出しその胴体に突き刺した。冷たい一撃に驚いて体をねじり苦悶する。そして、体から発火性の高いガスを噴出してガルドを追い払う。

なのは「ディバインバスター！！」

また動きの止まっているグラビモスに今度はなのはの砲撃が直撃する。

グラビモス［グオォォォォォォ！！］

一つ吼えてなのはに熱線を吐く。射線上から逃れて再びレイジングハートを構えるとグラビモスが再度なのはに熱線を放って来た。

なのは「くっ！！」

慌てて横に飛んで避ける。そこにグラビモスの横からセフィリアが接近し足に斬りかかる。激しく火花を散らしながらも振り抜くがその堅い甲殻には傷が付いていなかった。接近してきたセフィリアを追い払うためにその場で回転し巨大な尾を振りまわして来る。それを身を屈める事で回避し通り過ぎた後バックステップで一度下がる。そこを埋める様にガルドが突っ込み槍を突き刺す。甲殻の隙間に先を捻じ込み魔力を集中させる。

ガルド「氷刃爆砕槍！！」

グラビモス［グオォォォォォォ！？］

そこから一気に凍りつき爆発、その衝撃でグラビモスは悲鳴を上げて仰け反る。

ガルド「セフィリア！！」

セフィリア「はあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ガルドの後ろからセフィリアが駆け出しジャンプ、その着地点にガルドがいて盾を構える。彼女はそれを踏み台にして更に高く飛び上がる。

セフィリア「烈空刃!!更に、風牙絶咬!!」

剣を高速で振り真空波を幾つも生み出し甲殻を斬り、更に足の裏に魔力を集中して一気に爆発させ重力も活かした強力な突進突きを入れた。その一撃は見事にグラビモスの甲殻に傷を入れた。入れ替わりにカインが肉薄する。

カイン「まだ終わらん!!壱の太刀、霞!!」

一振りで幾つもの斬撃を叩きこみ更に距離を詰める。

カイン「弐の太刀、天墜!!参の太刀、月見草!!」

高速の斬り上げと斬り下ろしを繰り出したあとグラビモスを一瞬で通り抜ける。
そして、雷切を軽く振るうと無数の斬撃がグラビモスの体に走り甲殻を斬り裂いた。

カイン「四の太刀、天翔草！！終の太刀、無明草！！」

再び神速の速さで懐に潜り雷切を高速でクロスさせる様に振るいそのあとに真空波を伴った斬撃で斬り上げた。その一撃であの超重量のグラビモスの巨体が浮かび上がり軽く宙に飛ばされる。そして、落ちてくるタイミングに合わせてグラビモスをすり抜ける形で雷切を振り抜き鞘に収める。キンッと音が鳴ると同時にグラビモスの体に無数の斬撃が走った。

グラビモス［グオオォォォォォォォ！？］

その衝撃で腹部の甲殻が吹き飛び中の肉が丸見えになる。

カイン「今だ！！」

なのは「ディバインバスターーーーー！！」

クラウド「バスターライフル、ターゲットを破壊する…」

二人の強力な砲撃が迫る。グラビモスも苦し紛れに熱線を放つが流石に二人の砲撃を受けきれず打ち消され急所が丸出しになった腹部にその二つが直撃した。巨体を爆炎が包み込む。

グラビモス［グオオォォォォォォォ……］

断末魔の悲鳴を上げて巨体が地面に倒れ込む。最後に少しだけもがいたあとピクリとも動かなくなった。

なのは「倒…したの？」

クラウド「みたいだな」

まず一体を仕留める事に成功した。体の緊張が一気に解けてホッと息を吐く。

皆がグラビモスから剥ぎ取りをしているのをなのははジッと見ている。

死んだ生き物から甲殻とかを剥ぎ取る行為は慣れない彼女のとっては異様な光景だろう。まるで原始時代にいるかのようだ……。

そこでふとマグマを噴き出している火山のある方を見る。此処まで活発に動く火山を始めて見て自然の凄さを改めて実感する。

その時、視界の端で何かが蠢くのが見えた。

なのは（あれ？……今何か動いた様な…？）

火山の頂上付近で何か動いた様な気がした。此処からだと距離があり過ぎてよく見えない。だが、確かに何かいた様な気がする。真紅

の紅い色をした……

カイン「なのは？如何したんだ？」

なのは「ううん、なんでもないよ」

カインの声でハッとなって気の所為だと思い今のを忘れることにした。

目的はもう一頭のグラビモスの討伐だ。しかも、元気一杯の……

ガルド「残るはもう一体か……」

セフィリア「全然ダメージを与えていない方だね」

カイン「流石に骨が折れる。報酬は弾んでもらいたいな？」

クラウド「そのセリフを聞くと、何かお前が守銭奴みたいに聞こえるぞ？」

カイン「ん？そうか？」

なのは「にゃはははは……」

他愛のない会話をする五人、束の間の休息だ。ずっと精神を尖らせていると戦闘前に精神が参ってしまうのでこういうのは戦いの中では必要な事だ。暫く休んでから再び捜索を開始する。クーラードリ

ンクの効果が切れると皆それを飲み、一息ついてからまた動きだす。
草食竜の『アプケロス』や人と同じ位の大きさのハチ『ランゴスタ』などが見かけられるが本命のグラビモスは姿を見せない。

クラウド「いないな……」

なのは「もう、移動したっていう事は無いの？」

ガルド「その可能性は低いだろうな。奴らは移動してすぐにまた別の所に行くという事はしない。各地を転々と移動するのは『ラオシャンロン』や『シェンガオレン』とかだな」

なのは「『ラオシャンロン』？」

セフィリア「山みたいに大きな竜だよ。『飛竜種』とは違う古代から生き続ける『古龍種』に分類されるモンスターだよ。基本的に攻撃はしてこないけど動く度に天災クラスの被害を出すから此処では監視対象にされているみたい」

クラウド「『ラオシャンロン』だけじゃない。『古龍種』は全てが天災クラスの力を持っている非常に危険な奴らだ。上級ハンターですらその一撃で命を落とす程で奴らの移動した先にある村や町はこと如く破壊されたりする。特徴的なのは『飛竜種』とは違って二本足ではなく四本足だってことだ。さっき言った『シェンガオレン』はデカイ蟹で奴は『古龍種』じゃなくて『甲殻種』に属する。こっちの方も比較的攻撃頻度は低いが一度暴れると手が付けられん」

カイン「まあ、例外として『ティガレックス』とかは特定のテリト

リーを持っていないから何処にでも現れるがな」

今戦っている『飛竜種』のグラビモスよりも危険な生物がいるというのになのははは驚く。
天災クラスの力を持つ『古龍種』…一体どんな生き物なのだろうか？

見てみたいという気持ちもあるが出会ったら最後、朝日を拝めなくなりそうなのでやっぱやめとく。
出来れば出会わない事を切に願うなのはだった。

捜索を再開するが一向に姿を見せない。

セフィリア「こんなに探してるのに見つからないのって、何か変だね？」

ガルド「ああ、それどころかさっきまでいた小型モンスターまで姿を消しやがった」

周囲は静まり返っており異様な空気を孕んでいた。そして、溶岩の海からゆっくりとそれは姿を現した。

カイン「ようやくお出ましの様だな」

先程戦った奴よりも一回りも二回りも大きい巨躯を持ったグラビモス。なのは達の姿を確認して威嚇の咆哮を上げる。空気が振動して身が竦む。先制とばかりにグラビモスが熱線を吐いてきた。それを散開して避けて戦闘開始。

なのは「アクセルシューター、シュート！！！」

セフィリア「魔神剣！！」

なのはが魔力弾をセフィリアが斬撃を飛ばして攻撃する。それをグラビモスは熱線で吹き飛ばしながら二人に攻撃、射線上から飛びのいてセフィラは接近する。その隣にガルドも並び左右に分れた。一瞬どちらを攻撃するか迷ったグラビモスにセフィリアが胴体に斬撃を加えガルドが足に槍を突き立てる。しかし、頑丈な甲殻には一切傷が付かず二人の攻撃が弾かれた。グラビモスはその二人にその場で回転して尻尾を振って吹き飛ばそうとする。セフィリアが身を屈める事でそれを避け、ガルドは持っている盾でそれを防御する。

なのはがグラビモスの注意を逸らさせる為にディバインバスターを撃ち込む。直撃してその胴体が揺らぐ。動きが一瞬止まりその隙に二人が距離を取る。そして、なのはに視線が向こうとするとカインが割り込み雷切で胴体を斬る。クラウドもバスターモードに切り替えた干将・莫邪を構えて砲撃を加える。

セフィリア「裂壊桜！！」

地面に剣を突き刺すと前方に噴出する衝撃波が出てグラビモスを下から突き上げる。
衝撃に少しだけ体が持ち上がりそこにガルドが一瞬で接近し槍を構える。

ガルド「氷塵爆龍槍！！」

槍から氷で出来た龍が飛び出しグラビモスに直撃、その衝撃に巨体が後退した。

ガルド「まだ終わりではないぞ？裂衝槍！！続けて打ち込む、瞬迅槍！！」

そこに追撃の突進を加え、更に神速の速さで突きを連続で行う。

セフィリア「水刃、アクアエッジ！！」

ガルドの作った隙をセフィリアが魔術で援護する。水が刃になって放たれグラビモスを攻撃する。

グラビモス［グオォォォォォォォ！！！］

執拗な連続攻撃に遂にグラビモスがキレる。バインドボイスを発しそれによって耳が痛くなる程の咆哮で全員を縛りつける。

動きが止まっているなのは達に向かって熱線を横薙ぎにはなって来た。

慌てて上空に飛び上がる事で回避した。そこに再び襲いかかる熱線。それはなのはに向かって飛んでくる。

カイン「なのは！！」

防御は……無理だ！前回押し負けている。ならば、撃ち破るしかない！！

なのは「レイジングハート、ブラスター１！！」

レイジングハート［イエス、マスター！！］

力を開放する。眼前には自分を呑み込まんとする巨大な熱線、それに向かってレイジングハートを構え魔力を集中させる。

なのは「ディバイン、バスタアァァァァ！！！」

砲撃を放ち熱線とぶつかる。強烈な衝撃が手に伝わって来て前回同様手が痺れて来る。徐々に押し負け始める。

なのは「レイジングハート！！！」

レイジングハート「イエス、マスター！！！」

レイジングハートから薬莢が3つ吐き出される。砲撃が更に強化され出力が上がる。
だが、それでもまだ不利だ…。

なのは「うあああああああぁぁぁぁぁぁ！！！！」

震える手を何とか抑え気合いの一声を上げる。更に薬莢が飛び出て魔力が跳ね上がる。

なのは（負けられない……負けられないの！！）

そう思い強くレイジングハートを握りしめる。徐々に押し返し始めるなのはの砲撃、そして互いの攻撃が均等になり始めた時に互いの攻撃が爆ぜて爆発する。

相殺されて爆風の衝撃で大きく後退するなのは。そこをカバーする

様にカイン達が前に立ち雷撃や銃撃、斬撃や衝撃波を放つがその直撃を受けても平然としてグラビモスが再び熱線を放って来た。

ガルド「っち！原子よ、我が前にその力を示せ、花片の如き七枚の守りよ“熾天（ロー・アイアス）を覆う七つの円環”！！」

なのは達の前にガルドが立って右手を翳すと周囲の原子が集結して美しき七つの花弁を模した聖なる盾が出現する。それが熱線に直撃し受け止める。バチバチと火花を散らしながらもその強力な熱線を防御している。

なのは「ガルドさん！！」

ガルド「問題無い」

平然と言い放つガルド。その間にグラビモスは熱線を吐きながら此方に少しずつ接近して来る。
自然、その距離が近づけば熱線の威力も上昇する。

ガルド「なめるなよ？俺が防御している間は攻撃できないと思っているのか？」

左手を翳すと原子が集結し始める。それは、ガルドの前に幾つもの槍となって姿を現した。

それは穂先をグラビモスの方に向けて空中に停滞する。

ガルド「我が力を見せよう、スピア・ザ・インフェルノ！！」

一斉に槍が高速でまるで弾幕の様な密度で放たれグラビモスを襲う。
直撃して数多の槍が体に突き刺さった。痛みで悲鳴を上げて熱線を止め仰け反る。

カイン「今だ！！ライトニング・セイバーーーーー！！」

なのは「全力全開！！スターライトブレイカーー！！」

クラウド「撃ち破る、フルバースト・カラミティ！！」

セフィリア「奥義、覇道滅封！！」

カインが剣状になった雷撃を放ち、なのはが一撃必殺の砲撃を、クラウドが全ての火力を一点に集中した一撃をセフィリアが巨大な地を這う灼熱波を放ちそれらが集まって巨大な一つの砲撃となってグラビモスを呑み込んだ。

グラビモス「グオォォォォォォォォ……！！」

爆炎に包まれグラビモスの姿が見えなくなる。

なのは「やったかな……？」

ガルド「……いや、まだのようだ…」

煙が晴れるとそこにはボロボロではあるがしっかりと自分の足で大地に立っているグラビモスがいた。

カイン「今の一撃を耐えたのか！？やはりモンスターは凄いな……」

クラウド「だが、今のは流石に堪えた筈だ。このまま押し切れば勝てる！！」

皆頷き得物を構えた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

なのは達が戦闘を再開しようとしているのをある生き物は見ていた。

眼下にいるちっぽけな生き物は巨大な餌を追い詰めている。

？？？「グルゥウゥウゥウゥウゥウゥウゥ……」

だが、自分が留守にしている間に住処を荒らす輩を許す訳にはいかない。

？？？［ギャアァァアアアアァァアアアアァァァ！！！！］

怒りの咆哮を上げてそれは高台より飛び立ち眼下にいる不届き者に己が姿を見せつける為に、古の龍が降り立つ……。

――――――――――――――――――――――――――――――――

？？？［ギャアァァアアアアァァアアアアァァァ！！！！］

突然響き渡る咆哮に全員の動きが止まる。

直後、空気が急激に重くなるような感覚に襲われた。

なのは「な、なに……！？」

今迄に体験した事のない圧倒的なまでの威圧感を感じて全身の毛が立つような感覚に襲われる。

そして、それは大地に降り立った。

全身を真紅の鱗で覆い美しき鬣を棚引かせ、百獣の王たる存在をそこにいる全ての者に見せつける。
四本足で大地に立つその存在は……

セフィリア「そ、そんな！！」

ガルド「奴は……まさか…！？」

カイン「……『古龍種』、テオ・テスカトル、だと！？」

獄炎の炎を身に纏うは王たる証、『炎王龍』テオ・テスカトルが現れた。この存在こそ先程話した『古龍種』、たった一体で村や町を破壊し尽くす事の出来る恐るべきモンスターだ。

ただ、このテオ・テスカトル普通のとは若干姿が違った。その強者の象徴たる立派な二本の龍角は通常の太さの凡そ二倍の太さで鬣も少しばかり長い。そして、最も目を引くのがその身を纏う炎の鎧だ。まるで荒れ狂う嵐の如く炎が渦を巻いており時折り炎同士がぶつかり合って小爆発を起こしていた。

クラウド「っち！最近姿を見せないと思っていたから安心してたのに、何でこういうタイミングで出てきやがるんだ！！」

小型モンスターの姿が消えたのはこれが近づいてきていたのを本能的に察知したからだろう。
テオ・テスカトルは此方をじっと睨んでいたが視線を変えてグラビモスの方を見る。
そして、突然飛びかかった。

テオ・テスカトル［ガアアァァァ！！！！］

体当たりだけであの数トン以上はありそうな巨体が吹っ飛んだ。地面に倒されたグラビモスにのしかかって暴れるそれを押さえて動きを封じ前足で喉元を一振りで引き裂いた。
夥しい量の血が噴水の様に噴き出し断末魔の悲鳴を上げてグラビモスが息絶えた。

その息絶えたグラビモスの頭部に喰らい突き力任せに食い千切った。骨を噛み砕く音が聞こえる。そして、此方を向き咆哮する。その口の中には頭部の名残が残っておりまるで「次にこうなるのは貴様らだ！！」とでも言わんばかりだった。

なのは「あ……あぁぁ……」

カイン「なのは！！しっかりしろ！！」

そんな光景を見てなのはの顔が青褪める。無理もないだろう。グラビモスの放つ殺気は古龍種にとってはその程度の事など微々たるものだ。そして、これがホントの殺気という奴だと言わんばかりに放たれる殺気は圧倒的過ぎてかなり離れている筈なのに目の前にいるかの様な錯覚が起きる。
その青い瞳に映る自分が一瞬で食い殺されるような感覚に陥った。
足が体が手が震える。失われた本能が警告して来る。

テオ・テスカトル［ガアアァァァアアアアアァァァ！！！！］

雄たけびを上げてたあと此方に向かって突進してくる。その速さたるやグラビモスなど比にならない程速かった。

カイン達は直ぐに射線上から抜ける様に駆けだすが……なのはは動かなかった、いや、動けなかった。

カイン「なのは！！！」

レイジングハート［マスター！！］

恐怖で身が竦み足が動かない。そして、目の前にまで迫って来る……。

レイジングハート［プロテクション！！］

レイジングハートが咄嗟に防御魔法を発動して突進を止めようとした。

しかし、それはあっさりと破壊されてなのはは諸にその突進を喰らった。

なのは「かはっ……！」

吹っ飛ばされて地面を転がる。衝撃で手からレイジングハートが抜けて離れた所に転がった。

全身を鋼鉄の壁に打ち付けられたかのような激痛が襲いただ喘ぐだけだった。

そんな彼女に止めを刺そうと前足を振り上げる。本能的に体が動き横に飛びす去る、胸元のリボンが切り裂かれるがギリギリのところで回避できた。

なのは「ぐっ、ううぅぅ……！」

しかし、動けるのはそこまでだった。体が悲鳴を上げる。立っているのがやっとの状態だった。

そこに飛び掛かってくるテオ・テスカトルを見てもう駄目だと思った。

だが……

カイン「させるかっ！！」

ギリギリでカインが間に割り込みサイフォスでなんとその突進を受け止めた。
テオ・テスカトルも自身の突進が止められるとは思っていなかっただろう。
地面が沈む程の力を込めてカインを吹っ飛ばそうとするがカインは微動だにしなかった。

カイン「なのは、気をしっかり持て！！お前の心はこんな事で砕ける事はない筈だ！！」

なのは「私の…心…？」

カイン「そうだ！！恐怖に飲み込めれるな！！自分の心を勇気を奴に叩き込め！！」

その言葉が彼女を恐怖から立ち上げる力をくれた。
何としてもカインを助けたい、その思いだけが今の彼女を恐怖に立ち向かう勇気をくれた。手をレイジングハートに向けて翳す。すると、レイジングハートが彼女に向かって飛んでくる。それを掴み強い意志の籠った瞳を向ける。今、不屈の心が再び戻った。その強い

目を見てカインは微笑む。

カイン「クラウド、セフィリア、ガルド！！依頼は達成した。撤退するぞ！！コイツをあしらってさっさと帰るぞ！！」

クラウド「任務了解……！！」

セフィリア「分かった！！」

ガルド「今行くぞ！！」

三人も頷き動き出す。カインは一振りでテオ・テスカトルを弾いた。思い一撃にその巨体が後退した。自分が押された事に怒りを覚えたテオ・テスカトルが咆哮を上げてカインに向けて再び突進を始める。

カイン「サイフォス、サイズフォームだ！！」

サイフォス［了解した］

サイフォスが太刀から大鎌に変化した。それを構えて足裏に溜めた魔力を開放する。足元の地面が衝撃で陥没する程の力を込めて一気に駆けだす。テオ・テスカトルが飛び掛かる。サイフォスの刃に銀色の魔力が通る。

その突進を紙一重で避け大鎌を振るう。その刃は炎の鎧すら両断し

その体に一本の傷を付けた。テオ・テスカトルの背後に着地して再び突撃、カインの方に向きを変えようとするテオ・テスカトルを再び通り抜けて着地した。

テオ・テスカトル［ガアァァァアアアァァァ！？］

カイン「俺は、『剣帝』カイン・レオンハルト。貴様を、黄泉へと誘う者（いざな）だ……」

一振りだけで百もの斬撃がテオ・テスカトルの体に走った。痛みと驚愕で悲鳴を上げるテオ・テスカトルに向かってガルドが突っ込む。

ガルド「原子よ、我が前にその力を示せ、奴を止めろ！ロックバインド！！」

大地が脈動し土が変化する。テオ・テスカトルの足元の土がまるで意志を持つかのように動きだしその足を、首を、翼を抑えつけ締め付ける。もがくテオ・テスカトルにセフィリアとガルドが突撃した。

セフィリア「行くよ、ガルド！！」

ガルド「ああ、行くぞ！！清廉なる凍刃よ仇成す者を斬り刻め！！」

セフィリア「複合奥義、白夜無影剣！！」

ガルドの周囲に氷の槍が幾つも並び射出されテオ・テスカトルを貫く、そして、それがセフィリアの剣に集結して極低温の刃となる。その剣を神速の如き速さで振り抜き鞘に再び収める。幾つもの斬撃がその鱗を纏った体を斬り裂き血が飛び散る。そして二人が飛び退いたあとクラウドが干将・莫邪をキャノンモードにして待っていた。そのクラウド目掛けて全てを焼き尽くさんとテオ・テスカトルの口から巨大な火炎が吐き出される。

クラウド「出力１２０パーセント……一点集中……吹き飛べ、ソルブライトキャノン！！」

大出力の砲撃がその火炎と地面を吹き飛ばしながらテオ・テスカトルを呑み込んだ。
辺りの地面を引き飛ばす大爆発が起きる。その爆炎の中テオ・テスカトルはまだ生きている。

カイン「うおおおぉぉぉぉぉぉ！！！！」

そこにサイフォスを太刀に戻してカインが突っ込む。テオ・テスカトルがその鋭利な爪を生やした前足で切り裂かんとする。しかし、それを紙一重で回避し更に懐に潜り込む。その彼を押し潰さんと足を振り下ろすもそこには既にカインはいなかった。

カイン「遅い！！」

通り抜けざまにその体を斬る。その彼に向かって尾を振るうが後退する事で回避した。

カイン「今だ！！」

その視線の先にはレイジングハートを構えるなのはがいる。
その周囲にブラスターービットが展開されていており魔力の充填も完了していた。

なのは「全力全開！！スターライトオォォブレイカアアアアアアアアアア！！！！！！」

大出力の砲撃が放たれそれはテオ・テスカトルを呑み込んだ。

テオ・テスカトル［ガアアアアアアアアアアアアア！？］

悲鳴を上げて始めて倒れもがく。その隙に全員は撤退を開始した。

カイン「此処まで逃げればもう大丈夫だろう……」

暫く走り続けていたが、安全圏に退避出来たと判断して一息ついた。

クラウド「しっかし、グラビモスが一頭増えて更にテオ・テスカトルも乱入して来るとは……」

ガルド「これは、直ぐに村長に報告しないといけないな」

会話をしている二人は深刻そうな顔である。

その時、なのはがふらついて倒れかけたがカインが抱きとめる。

カイン「大丈夫か？」

なのは「うん……少し、疲れちゃっただけなの。にゃはは……」

極度の緊張から解放されたせいだろう、顔色も悪かった。

無理して笑う彼女を見てカインはそうかと言って突然なのはを抱き上げる。

勿論、お姫様だっこで、だ。

なのは「カ、カイン君／／／／／／！？」

カイン「無理はするな」

此方を気遣ってくるカイン。その優しさに胸がドキドキと高鳴る。

拠点に戻り帰り仕度を始める。その間、なのはの治療を後姫がする。
仄かな優しい光に包まれテオ・テスカトルに受けた痛みが引いていく。
そして、今日出会ったあの龍は一体何なのか皆に聞く事にする。

なのは「あの龍は一体何なの？」

ガルド「あれが、前に言った『古龍種』で名前をテオ・テスカトルと言う」

なのは「あれが、古龍種……」

その存在を思い出してみる。あれが古龍種か……。確かにグラビモスとは比べ物にない位の殺気を放っていた。一言で言えば圧倒的な死が目の前に現れたと言っても良いだろう。
あれ程に強大な力を持っていれば街の一つなんかは簡単に滅んでしまうかもしれない。

クラウド「それにしても、奴は普通のテオ・テスカトルとは少し違ったな」

なのは「クラウドさん戦った事あるの！？」

クラウド「なのは達と出会う少し前にな。あの時はロイドとシリウスそれとバルドも同行して戦ったが…まあ、倒すのに時間がかかった。飛竜種とは比べ物にない位の体力とパワー、それにスタミナを持っているからな一日以上も飲まず食わずでぶっ通しで戦ってようやく倒せた」

カイン「因みに俺とガルド、セフィリア、ティファがそいつの雌のナナ・テスカトリと戦った」

セフィリア「それで、如何違ったの？」

クラウド「何て言えば良いかな……？なんかこう、普通のとは雰囲気が違うというか…妙に圧迫感が感じられた」

カイン「それは俺も感じてた。ただ、それが何を意味するのか……」

ガルド「……剛種」

なのは「……え？」

ガルド「この世界には多くのハンターとの死闘を潜り抜けたモンスターをG級モンスターと呼び、更にその上を剛種と呼ぶ。そして、そいつ等の中には特異個体と呼ばれる者もいる」

セフィリア「ガルドはその内のどれかかも知れないって思うの？」

ガルド「かもしれん。もしくはそれ以上の存在だったのかも知れない。差し詰め天種とでも呼ぼうか？」

カイン「此処で討論しても答えは見えない。一度村長に聞くとしよう」

それに皆頷いて飛行船が来るのを待ち、到着すると荷物を運んで火山を後にした。

なのは「……」

火山を見降ろすと赤々と燃える火山が見える。マグマが生きているかの如く脈動しており時折り噴火を起こしていた。

そして見た。その溶岩の上を平然と歩くあの強大な存在が……

なのは（テオ・テスカトル……この世界の強者、『古龍種』……）

その出で立ちは確かに王たる貫禄を醸し出しており先程自分達の攻撃を喰らった筈なのに悠々と歩いていた。

なのは（次は……負けない！！！）

確固たる意志を持って次に出会った時には絶対に心では負けるものかと胸に強く刻み込んだ。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

なのはは夢を見る。

それは悲しい夢。

終わりの見えぬ争い。

人が神を信じなくなって幾星霜経った。

自身が宇宙で最も優良種だという愚かで憐れな思考を手にしてしまった人は遂に神をも恐れぬ愚行を犯した。

そして、神殺しの武器を手に入れ人々は自身が神となろうと神々に反旗を翻した。

数多の神々が殺され、犯される。それに対して神々はある存在を生み出した。

見えるのは人々の怒号、貪欲なまでの欲望に呑み込まれた憐れな人のなれの果て、それは恐ろしくて体が震えた。神々をも恐れぬ進軍、その前に立つのは一人のフードを被った男だった。

無言でその背にある太刀を抜き構える。人々が武器を持って雪崩の様に迫って来る。
その中にその人は飛び込んだ。流れる様にそして、美しく、壮麗な動きで人々の間を縫っていく。
通り抜け太刀を振るう。すると、人々が全て血を流して倒れ伏した。

その人に向けて拍手を送る人がいた。

???「素晴らしいな、そなたなら愚かな民に神の鉄槌を下せるだろう」

???「データでは彼は運動神経、魔術、頭脳も他の者とは段違いの戦闘能力です」

???「あの者なら憐れな人類に裁きを下せよう……」

実験が成功したのが嬉しいのか嬉々として今回の事を確認している。

そこに新たな軍勢が来る。それを見つけると彼は一気に駆けだしてそれも一瞬で殲滅した。

???「素晴らしい……！！人と判断すれば殲滅する。我等にとっては十分すぎる位だな」

???「奴にはこれからも人の駆逐をさせよう…。ハハハッ！！素晴らしい“物”を生み出したものだ！！」

それから彼はずっと戦い続けた。多くの者が戦いの中倒れるも彼は生き残り続ける。
やがて彼は神々と仲間達にこう言われるようになる。

ありとあらゆる剣を使いこなす『剣帝』、と……。

そこに集まるのは新たに生み出された神人族達、戦う為だけに生み出された悲しき命。

人の波の中で戦う彼ら、そして最後に見えたのは『剣帝』と呼ばれた彼が自分のよく知る人と似ていた。

そう、カイン・レオンハルトに……

# 第三十八話（後書き）

如何でした?乱入クエストに更に古龍種が乱入するというハチャメチャ設定。現実的に考えると何かあり得そうだな～って思って出してみたんですけど?厳しいですかね?さり気無く作者の願望も入れてあります。是非３ｒｄＧでは乱入クエストに古龍種も入れてくれっ！！無理かな?……無理だよねぇ……ｏｒｚ

それにしても今作の３ｒｄも物欲センサーバリバリ発動してました。火竜の紅玉を手に入れたいのに全然手に入らない。もう、銀レウス４０体ほど葬ったのに…まだ出てこない！！

クラウド「それは作者の運がないだけだと思うが…?」

うっさ～～いっ！！シルバーソルシリーズ作りたくても作れないこの苦しみ、味わえ！！

クラウド「ツインバレット！！」

蜂の巣～～！！?

作者はログアウトしましたｗｗ

クラウド「次回も早く更新できるよう頑張らせます。これからも読者の皆様宜しくお願いします。では、今回はこの辺で…」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第三十九話（前書き）

作者のモンハン日記～！！

雪山のエリア2からエリア7へのショートカットの崖を上っていてあと少しの時、

作者「此処めんどくせえ……」

友人1「はい、ど～ん♪」

友人1にハンマーで登りきろうとした時ホームランされた。

作者「き、きさま～～！！！」

友人1「まだまだのようなだな～、テッテルよ！」

友人2「そう言うちみもな！！」

友人1「うぎゃあ！？」

哀れ、背後から来た友人2にガンランスの砲撃で作者よりも遠い所に飛んで行った。

友人2「まだまだあまいｎ――おぶっ！？」

作者「おや、友人2も落ちてきた……」

友人２「ブルファンゴてめ～～～！！！！」

崖際で遊ぶ時は周囲の敵を掃討してから遊びましょう。でないと思わぬ伏兵が……この後、皆で登ったらブルファンゴでなく討伐対象のラージャンがいて突進でまたみんな崖下に落とされた……ｏｒｚ

今回はティアナ達の所です。かなり短くしました！！……短いのか？まあ、いいや（おい！！）。

# 第三十九話

クエスト名『砂漠に潜む結晶』　2日目～

参加者

ティアナ・ランスター

スバル・ナカジマ

ロイド・アーヴィング

ティファ・フューストン

（保険としてコレットは待機）

場所　砂漠

狩猟対象

アクラ・ヴァシム　討伐完了

狩猟環境は不安定

出現モンスター　ベリオロス亜種

夜が明けて二日目を迎える。

砂漠を捜索して前回襲撃してきたモンスターを探す。

調べたところあのモンスターは「ベリオロス亜種」で最近出現したモンスターらしい。

「ティガレックス」や「ナルガクルガ」の様に前翼が地に付いている姿からこれらと同じ様に飛竜種の原始的生き物と判断されている様だ。

スバル「今日こそかーーーつ!!」

ロイド「おう!!その調子だスバル!!」

「うおおおぉぉぉぉぉぉ!!!」と高台で気合い十分に吼えている二人を見て額に手を当てて溜息を吐くティアナ。

ティアナ「アホが二人いるわ……」

ティファ「二人ともそんな所で吼えてないで行くよ～」

コレット「皆～頑張ってね～～！！」

拠点で手を振るコレットにスバルとロイドが手を振って応える。

本日も彼女は待機だ。出発前に彼女にモンスターに餌を与えるなと言ったものの多分無理だろう……。

砂漠に一歩踏み出すと待っているのは陽炎の如く揺らめく砂の海……。

今度はクーラードリンクを所持して熱砂を歩く。

そんな彼等を待っていたのは前回同様ガレオスの群れ。

足音を聞きつけて此方に気付いた様だ。一斉に此方に襲いかかって来た。

スバル「行くよ、ティア！！」

ティアナ「ええ、前とは違うとこを見せてやろうじゃない！！」

気合十分の二人は駆け出す。その音に惹きつけられるように数頭が此方に肉薄してきた。まず一頭が砂ブレスを吐いて来る。その隙に二頭が接近する。ティアナは冷静にそれを見て砂ブレスを魔力弾で叩き落とし次に飛び掛かって来た二頭の間をすり抜けて砂から出て来た背ビレに魔力弾をぶつける。

スバルの方にも何頭か接近する。二頭が砂ブレスを吐いて牽制しその隙に一頭が接近する。

そのブレスを避けて噛みつこうと飛び掛かって来た一頭の頭に横から蹴りを入れてぶっ飛ばし、続いて二頭同時に飛び掛かって来たのでその間をギリギリ滑り込むようにして避ける。

ロイドに数頭が同時に砂ブレスを吐いてくるがそれを駆けながら全て姿勢を低くして回避して二つの剣を振るい一頭を斬るその背を蹴って背後から飛び掛かって来たもう一頭の上にジャンプして真上からその背中に剣を突き刺した。暴れもがくガレオスをそのまま斬り伏せる。

ティファは鏡花・水月を構えて接近するガレオス達を撃ち抜いている。ガレオスは砂中深く潜り込んで奇襲を仕掛けてくるがまるで彼女はそれが見えているという位に余裕を見せてそれを避ける。そして、目の前にあるガレオスの頭部に銃口を突き付けて発砲、頭部を撃ち貫いた。

ティアナは魔力弾を連射する。それをガレオス達は砂の中を泳ぐようにして回避しつつティアナに飛び掛かった。

ティアナ「あまい！！」

それを横飛びで回避しながら飛びだした頭部に魔力弾をぶつける。
驚いて砂の中から飛び出すガレオス。それに集中砲火して沈める。
倒れた仲間を無視して数頭が多方向から同時に襲いかかった。

ティアナ「くっ！！」

慌てて回避する目の前で大量の砂が舞い上がりその中から一頭が大きな口を開けて飛びかかって来た。
これは回避が出来ないと判断して咄嗟にプロテクションで防御する。
破られはしなかったが大きく後退させられた。しかも此処は足場の悪い砂だ、自然踏ん張っている足も砂に掬われる。軸が少しずれて放った魔力弾が外れる。そこを好機と見たガレオス達が一斉にティアナに向かって殺到してきた。

だが……

スバル「ディバイィィィン、バスタアアァァァ！！！」

横から砲撃がガレオス達を呑み込んだ。

ティアナ「スバル、ナイスタイミングよ」

スバル「へへ～」

実を言うと先程作った隙はガレオス達を纏めて倒すための罠だ。
音に敏感だというのが分かったので態(わざ)と大きな音を立てる様にふらつき攻撃を外して此方の位置を教えて一斉に飛び掛かって来た所をスバルの砲撃で一掃させたという訳だ。

見事にその罠に引っかかったガレオスは四頭が動かなくなって数頭も弱った。
それでも、此方の隙を窺うようにして周囲を回るガレオス達。
その貪欲なまでの狩猟本能には驚くばかりだ。

だが、此処にいるのは二人だけではない。

ロイド「魔神剣！！」

ティファ「マーレシスハント！！」

ロイドの衝撃波とティファの射撃が一頭ずつガレオスを仕留めた。
自分達を襲ってきたガレオスを片付けてロイドとティファも合流した。
自分達が不利と判断したのか数頭となったガレオス達は逃げていった。

スバル「よっしゃー！！」

ティアナ「何とか追い払えたわね……」

面倒な小型モンスターを撃退して一息つく。
再び砂漠を歩き始め捜索を始めるとそれは直ぐに見つかった。

赤い顔に灰青色の二つの大きな牙、それはまるでサーベルタイガーの牙の様な形をしていた。
そして、その身を包むのは赤銅色の甲殻でその中には毛皮も生えていた。乾燥した土地に適応して体質を変えたモンスター『ベリオロス亜種』がそこにいた。その周囲を囲む様に別の生き物がいる。

？？？［ギャア、ギャア！！］

姿はランポスと似ているがその口から生えているのは立派な牙。
砂漠を主な活動場所として生息するモンスター『ゲネポス』だ。ランポスと同じと思うなかれ彼等は麻痺毒を持っておりそれを獲物に噛み付いたりした時に体内に注入して痺れさせる。獲物となった者は感覚が無くなり生きたまま自分が食い殺されるのを見る事になってしまう。毒で死ぬよりもよっぽどえげつない事をして来る。

そんなゲネポスが数頭いて自分たちの縄張りに入った『ベリオロス亜種』を威嚇していた。そして、一頭が飛び掛かる。その一頭を先が二つに分れている尾で軽く払ってふっ飛ばした。その隙に二頭がその足に噛みつこうとするが堅い甲殻でそれは阻まれる。

正面で威嚇している一頭に向かってベリオロス亜種は口から砂ブレスを吐いた。
それは手前に着弾し直後巨大な竜巻になった。それに吸い込まれて正面にいたゲネポスは空高く舞いあげられてしまった。

そして、その竜巻の中にベリオロス亜種が飛び込み上昇気流に乗って空高く舞い上がりそこから自分の足に噛みつこうとしていた二頭をその鋭利な棘を持った翼で殴った。
諸にくらって一頭は吹っ飛び砂の上を転がる。もう一頭は運悪くその棘に突き刺さり体を貫かれ絶命した。竜巻に飛ばされたゲネポスも地面に落ちる。

起き上がって三頭になったゲネポス達は悔し紛れの咆哮を上げる様に鳴いてその場を開け渡して去っていった。新たな縄張りを手に入れて勝者の雄たけびを上げるベリオロス亜種。

スバル「すごい……」

その光景を岩陰でこっそりと見ていたスバルは目の前で起きた光景を見て震えた。
別にこれは恐怖によりものではない。これは、目の前で繰り広げられたモンスター達の戦いを見てモンスター達の神聖な戦いに心の奥底から興奮していた。

モンスター達の住処が一定周期に変わるのはこの様に戦って強さを競い合って縄張りを譲ったりしているからだと後に村長から聞く事になる。縄張りを奪われたからといってモンスター達もそれを怨むことなく新たな土地を求めて移動する。そして、戦う。それで少し

は怪我をしたりするだろうが軽い怪我だけで済むという。本気の戦いははせずに軽くぶつかり合って強さを競い勝者がその土地を得て敗者は別の所に行く。それが生物の掟、この世界のモンスター達の暗黙の了解となっている。
故に小型モンスターでも数や戦略によっては大型モンスターすら追い払うという。

それを見て心から感嘆しているのはスバルだけではない。ティアナもロイド達も聖なる儀式を見て感嘆のため息を吐いていた。

ティアナ「今の戦い…凄かったわ」

ロイド「モンスターもただ闇雲に襲っている訳じゃない。皆それぞれの生き方を見せている」

ティファ「だから、こんな神秘的な光景も見る事もあるんだ」

スバル「ううう…今から対決するって思うと何か気が引けるなぁ……」

ティファ「そうだね。けど、今ここで帰る訳にはいかないよ。この近くには砂漠で生きる人達が住む村がある。折角アクラ・ヴァシムを倒して安定した交易が出来る様になるのにそこに新しくモンスターが住みつくのは拙いからね。人とモンスターが争い生きるのは仕方がない。モンスター達もそれを知っているから全力で此方の排除に来るから気を付けてね。神聖な儀式を見て少し躊躇うと思うけどそれとこれとは別だから……」

ティアナ「分かってます。スバル、行くわよ！！」

スバル「おう！！」

物陰から出ると直ぐに自分達の気配を察知したのか此方を向きスバル達を見つけると砂漠の騎士は天を仰ぎ咆哮する。

地面を蹴り此方に突進してくるのを散開して避ける。
一瞬だけ誰を狙うか迷ったのか動きが止まった。
そこにスバルとロイドが接近して攻撃を仕掛けるが掠り傷程度でたいして効いていなかった。

狙いをロイドに絞ったのか上空に飛び上がり滞空する。そして、その巨体で押し潰すかのように落ちて来た。それから逃れる為に影の下から後退する。直後砂を巻き上げてその巨体が落ちて来た。すぐさま反転してロイドは斬りかかる。高速の連続突きを繰り出すがやはり弾かれた。ティアナが魔力弾を飛ばして注意を此方に向けさせる。それに反応してティアナに的を切り替えたベリオロス亜種が彼女に突進する。直ぐに横に飛びのいて自分の前を通り過ぎたモンスターに魔力弾を当てる。尻尾が迫って来たので距離を取る。その隙をティファが埋める様に射撃をして注意を引きつける。

スバル「リボルバー、シュート！！」

そこにスバルの魔法が側面にぶつかり巨体が少し揺らいだ。
スバルに目を向け砂ブレスを吐いてきた。避けると地面に着弾し竜

巻が発生した。

スバル「またあの竜巻！！」

ロイド「気をつけろ！！あいつが誰を狙うのか分からねえ！！」

竜巻の中に飛び込み上昇気流で舞い上がる。そして、そこから急降下して来た。
狙いは……ティアナだ。

ティアナ「くっ！！」

慌てて地面に身を投げる様にして飛び退くとそこを棘の付いた翼が通り抜ける。
灼熱の太陽の日差しで熱せられた砂はかなり熱かったがそこをグッと堪えて敵の次の行動を警戒する為に距離を取ろうとするとベリオロス亜種は既に此方に狙いを定めてその棘付きの翼をぶつけるような形で体ごとぶつかって来た。それを諸にくらうティアナだがそれは霞の様に消えた。

ティアナ「クロスファイヤー、シュート！！」

背後からティアナの声が聞こえ複数の魔力弾がベリオロス亜種に殺到する。

今攻撃を受けたのは彼女の作った幻術だった。流石に今の弾幕は効いたのか軽く仰け反る。そこにスバルが突っ込み拳を強く握る。

スバル「ディバイィィィン、バスターー！！！」

ベリオロス亜種［ゴオアアァァァァァ！？］

高威力の砲撃を諸にくらって悲鳴を上げる。距離を取ろうとしたのか軽く後方にジャンプして後退した。そこにロイドが突撃、砂を蹴って上から剣を振り下ろす。しかし、それを滑るように滑らかな動きで地面を蹴って避け逆に彼の横を取った。そして、地面を削る様な勢いで尻尾を振るって来る。
それを喰らってふっ飛ばされた。

ティアナ「ロイド！！」

ロイド「大丈夫だ！！それよりもティアナ、右だ！！」

ティアナ「っ！？」

余所見をしていたティアナが前を向くと目の前にベリオロス亜種が迫っていた。
回避が間に合わない。咄嗟に申し訳程度かもしれないが腕をクロスさせて防御の構えは取った。
その瞬間、全身に強烈な衝撃が来た。

ティアナ「っつあぁ！？」

スバル「ティア！！」

熱い砂の上に転がる。幸い吹っ飛ばされた事でその巨体に踏み潰される事はなかったがそれでも全身に走る激痛は耐えがたいものだ。痛みに悶絶している彼女に止めを刺そうとベリオロス亜種が砂を巻き上げて突進してくる。震える腕で何とか立ち上がろうとするがこのままでは激突するのが早い。

ティファ「させない……！！」

その間にティファが割り込みビームシールドを展開する。そして、激突した。

ティアナ「ティファさん！！」

ティファ「くぅ……」

足場の悪い砂の所為で踏ん張りか効かない。腕にも強烈な衝撃が伝わって来た。だが、歯を食いしばりバーニアを全開にして受け止める。その隙にロイドがティアナを射線上から救出しスバルがティファを助ける為に特攻する。ベリオロス亜種の横からウィングロードに乗って猛スピードで接近しその側頭部を殴り付ける。それによっ

て動きが止まりスバルに向かって尻尾を振るうがその上をジャンプして飛び越えてやり過ごしその隙にティファがビームサーベルで斬り付けた。

一方、一度ロイドはティアナを岩陰に退避させ降ろしてポーチに手を入れて中から回復薬を取り出した。

ロイド「ほら、回復薬だ」

ティアナ「ありがとう……うっ、にっが～……」

軽く一口飲んでの感想を述べる。”良薬は口に苦し”とは言うが確かにこれは苦かった。

だが、効果は直ぐに現れ始めた。先程まで感じていた激痛が今は少し弱まっている。苦みを堪えて少しずつ飲む。

ロイド「全部飲み干したらまた戦闘に来てくれ。先に行ってるぜ」

そう言い残してロイドは再び二人が戦っている場所に加わった。

全部飲み干して一息ついて岩陰から一度ベリオロス亜種の動きを分析する。

相手の死角に飛び体当たりや噛みつき更に棘の付いた翼で殴りかかるなどやはりトリッキーな動きを見せる。そして、此方が接近すると一度軽く後退して攻撃範囲から逃れすぐさま噛みつき攻撃などを

仕掛けたりと相手との距離感を大事にしている仕草も見えた。
それらを頭に入れてティアナは岩陰から飛び出しベリオロス亜種の動きを見ながら思考をフル回転させていた。

ティアナ（あれは相手の死角から攻撃するタイプで敵との距離を意識している様な感じがする）

ただ、巨体にもの言わせて潰そうとするのではなく死角から死角へ移動して一撃で仕留めるタイプだ。
足場の悪いこの砂の上でしっかりと動く驚異的な力を持つ。

ティアナが戦闘に再戦し魔力弾を複数飛ばし牽制する。
ティアナが再び来たのを見て彼女を狙うかの如く突進してくるが予測していたので余裕を持って回避して通り抜けざまに魔力弾をぶつけた。

ティファ「マーレシスハント！！続けて撃つ……ブルータルハント！！」

ロングライフルモードに切り替えた鏡花・水月を高速で連射し続ける。

ティファ「これで如何です……レイジングハント！！」

更に弾幕を厚くした射撃を続けた。雨の様な攻撃に流石にベリオロス亜種も悲鳴を上げて後退する。

ティファ「逃がしはしません……ドラグーン！！」

背にある羽が一枚ずつ離れてベリオロス亜種に殺到する。あらゆる方向からのビーム攻撃に怒りが頂点に達した。

ベリオロス亜種［ゴオオォォォォォォォ！！！］

周囲の空気を揺るがす咆哮を上げる。それに体が勝手に動いて耳を塞ぎ本能的な恐怖で動けなくなる。そこにベリオロス亜種が砂ブレスを連続で三方向に吐いてきた。
慌てて回避すると、三つの竜巻が三角形の様に配置されており自分達がその真ん中に閉じ込められているのに気付いた。

ティアナ「これは……！？」

今の状態が非常にまずい事を逸早く察知したティアナは仲間に念話で危険を伝える。
ベリオロス亜種が竜巻の一つに飛び込み急降下攻撃、スバルを狙ったそれは彼女がギリギリ避けた事で失敗するがそのまま跳躍して別

の竜巻に飛び込み、今度はロイドを狙って急降下してきた。

ロイド「うわっ！？」

間一髪それを避ける。そして最後の竜巻に乗って三角形の中央に全体重を乗せた急降下攻撃を仕掛ける。周囲の砂が波となって襲いかかって来るほどの衝撃で四人は咄嗟に其々防御の構えを取ったがその衝撃で全員が吹っ飛ばされた。

スバル「ペッ、ペッ！！砂が口に入った～～！！」

ロイド「今の喰らったらやべ～ぞ！？」

ティファ「被弾した時のダメージ指数は７０、戦闘継続はほぼ不可能に近いダメージを受けます……」

ティアナ「それって絶対に避けないといけないってことじゃない！？」

怒り状態で威力も上昇しており今のは一撃でも貰えば動けなくなるとティファが冷静に分析する。

つまり、何が何でも喰らってはいけないという事だ。しかし、今もまだ竜巻は継続して展開されている。

ティアナ「この竜巻を何とかしなくちゃ……」

ロイド「なら、エレメントソード！！属性変更、風！！」

エレメント［御意……］

刀身が輝き緑色に染まり風を纏った。

ロイド「風凰烈破！！」

剣を振り下ろすと風が鳳凰の形となって放たれ竜巻の一つにぶつかる。

風と風がぶつかり合い互いを相殺しあって霧散して消えていった。

その開いた場所から包囲を脱出して再びベリオロス亜種に向き合う。

包囲網を脱け出されて悔しいのかそれともまだ元気な獲物を狩るのが楽しいのかベリオロス亜種は一つ天を仰いで咆哮し四人に向かって突進してきた。

ロイド「うおおぉぉぉぉぉ！！！」

ロイドとスバルが接近、途中でスバルは横に回り込む様に移動し、ロイドはギリギリまで引きつけてからジャンプしその背中に一太刀浴びせる。そして、着地。踏ん張りの効かない足場だが何とか堪え再び砂を蹴って背後から接近する。その間にティアナとティファが魔力弾と鏡花・水月、蒼・莱を連射して相手の動きを封じる。そこにスバルが接近してその翼を殴るが鈍い音を立てるだけでダメージ

は通っているのか分からない。踏鞴を踏んでるスバルを狙いベリオロス亜種が地面を滑る様に飛び脇を取って噛みつこうとする。それを寸でで体を捻る様にして避けて後退、そこを埋める様にロイドが入りその頭部に連続突きをする。流石に頭部の肉質は柔らかくダメージが通ったのか血を噴き出しながら悲鳴を上げて仰け反り空中に飛び上がりそこで砂ブレスを地上に向けて発射しつつその勢いを利用して後退した。

スバル「また竜巻!!」

また急降下攻撃が来るのか?と身構えたが今度はその竜巻を突き破って突進してきた。
慌ててこれを避けると横にある竜巻の方に入る。そして、その風の遠心力を利用して身を投げ出しロイドとスバルの背後に着地した。

ロ・ス「「なっ!?」」

驚愕に目を見開く二人にそのまま突進して二人を吹っ飛ばした。
地面を数回跳ねるが何とか体勢を整えて着地、しかし直ぐに立ち直れずに片膝をついた状態で動けないでいた。

ティアナ「スバル、ロイド!!」

ティファ「ティアナ!!私が敵を引きつける。その間に二人の救助を……」

ティアナ「いいえ、ティファさんの方が飛行できる分速いから私が此処は引き受けます！！」

ティファ「……了解。無理はしないように」

それに頷いてティファはバーニアをふかして二人の救助へ、そして、ティアナはベリオロス亜種の注意を引く為に弾幕を張る。

ティアナ「アンタの相手は私よ！！クロスファイヤー、シュートッ！！！」

執拗な弾幕に先にティアナを倒すべきと判断したベリオロス亜種が彼女に向かって突進してくる。
その巨体に見合わずかなりの速度だ。その射線上から走って逃げる。少し前まで彼女がいた場所をその巨体が通り抜ける。そして、獲物が避けたと分かるや突進を停止して直ぐに此方に向きを変えてきた。

ティアナ（やっぱり、速い！！）

滑るように飛び彼女の横を取って噛みつこうとする。それをギリギリで避ける。
そして、距離を取りながら冷静に分析をする。

ティアナ（何であいつはこの足場の悪い砂の上であそこまでの機動性を出せるの！？）

尻尾で薙ぎ払ってきたり、全身を使って体当たりをしてきたりそれらを紙一重で避けつつ距離を取りながらも攻撃する。肩で息をしつつも体はまだ動ける。

ティアナ（何か……何か秘密がある筈！！それさえ分かれば……！！）

ベリオロス亜種が再びティアナのサイドを取る。その時ふと違和感を感じた。
何故このモンスターはあの速度を維持したまま飛んで体勢が崩れないのか、と…。

再び距離を取ってもう一度今の動きをさせる為に誘う。それに乗ってまた彼女の横を取るように飛んで突進してきた時に気付いた。それを避けてもう一度確認する。また飛んで着地、それを見て彼女は理解した。

ティアナ（そうか！！あの翼に付いている棘だ！！あれのお陰であいつはこの不安定な足場であんなにも安定した戦闘が出来るんだ！！）

彼女の分析通りベリオロス亜種はその翼に生えている棘が滑り止め

となっておりそれのお陰で横滑りする事なく相手の死角を取る事が出来る。雪山に生息する通常種の場合、滑り止め以外にも壁にそれを突き刺して少しの間なら壁に張り付く事も出来る。

つまり、それさえ壊せば相手は滑り止めが無くなり踏ん張りが利かなくなってあの素早い動きも制限される筈だ、と判断した。

攻略の糸口を掴むと同時にティアナはこのベリオロス亜種のそこまで計算された体の構造に舌を巻いた。生き物は環境に適応する為に此処まで賢くなれるのか!?とこの世界のモンスターに改めて凄さを教えられた。そこにダメージから回復した二人がティファと共に合流した。

ティファ「ティアナ、待たせました。怪我はしていませんね……？」

ティアナ「はい、大丈夫です。それと、あれの動きを制限する方法が分かったわ」

スバル「えっ！ホント！？さすがティア！！」

手短にこれからの動きを話す。

ロイド「よ～し、良く分かんないけど兎に角あの翼にある棘を壊せばいいんだな！」

ティアナ「手短に話したのに少しは理解しなさいよ！？」

スバル「う～ん……よし、翼を壊せばいいんだね！！」

ティファ「任務了解……」

若干二名ほど話を理解できていないが大まかな戦い方は分かってはくれた様だ。……多分。

ティファが鏡花・水月を構えて連射し敵の注意を引き付けそこにロイドとスバルが接近する。
狙うは一点、ベリオロス亜種の翼だ。

ロイド「うおぉぉぉぉ！！虎牙破斬！！」

素早く斬り上げから斬り下ろしを繰り出して翼を斬る。そして、続けてスバルの拳がブチ当たる。
その二人に狙いを絞るベリオロス亜種の薙ぎ払いが来るが二人が霞の様に消える。
ティアナの幻術でそこには既に二人はおらず反対に回り込んでいた。

ティアナの作りだす幻術に惑わされてベリオロス亜種が翻弄され始める。
形勢が不利だと思ったのかベリオロス亜種は一度後ろに飛んで後退し口から砂ブレスを吐きだし竜巻を形成した。

スバル「また来るよ！！」

ロイド「負けるか！！」

ベリオロス亜種が竜巻の中に飛び込むと同時にロイドが其処に向かって駆けだした。

ティアナ「ロイド！？」

ベリオロス亜種［ゴオオォォォォォオオォォォ！！！！］

ロイド「うおおおおぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

前翼を振りかぶるベリオロス亜種とエターナルソードを構え飛び掛かるロイド。
二つの影が交差して着地する。

ベリオロス亜種［ガアアァァァァァァァ！？］

それと同時にベリオロス亜種が悲鳴を上げて崩れる。その前翼に生えていた棘が見事に破壊されていた。

ティファ「片翼の棘の破壊を確認……追撃を加えます」

鏡花・水月を片手ずつ持って休まずに連射する。
ティアナもクロスミラージュを構え魔力弾を複数展開しベリオロス

亜種に飛ばす。
その圧倒的な弾幕に反対の翼も破壊され棘が弾け飛んだ。

スバル「棘が取れた！！」

ベリオロス亜種は起き上がると同時に邪魔な遠距離の二人を仕留めるべくその横を取る。が、踏ん張りが利かず体勢を崩してしまった。

ロイド「動きが鈍くなったぞ！」

ティアナ「これでいける！！」

やはりあの棘が滑り止めになっていたのかと確信した。体勢を立て直される前に距離を取りすかさずロイドとスバルが斬撃と打撃を加えダメージを蓄積させる。それを追い払うかのように尻尾を振り回したり噛みつこうとしたりするがその動きは鈍く緩慢になり始めていた。

スバル「動きが鈍ってる……？」

ティファ「体力もあと僅かです……一気に決めます、フルバースト！！」

ティアナ「ファントムブレイザー！！」

ロイド「獅吼旋破！！」

ティアナの砲撃とティファの一斉射撃、そしてロイドが懐に潜り込んで回転攻撃を加えた後に獅子の闘気をぶつける。

ロイド「今だ！！行け、スバル！！」

スバル「うおおおおぉぉぉぉぉ！！ディバインバスター！！！！！！」

ベリオロス亜種「ゴオオアアアァァァァ……！」

その顔面にとどめの一撃をスバルが撃ち込んだ。巨大な牙が吹っ飛び断末魔の声を上げてベリオロス亜種が大地に崩れ落ちた。

スバル「やった！！」

ロイド「ふぅ～、手強い相手だったぜ」

そのあと剥ぎ取りを終えて拠点に戻りコレットと合流して村に戻る準備を始める。

ティファ「ティアナ、ロストギアの反応は無かったの？」

ティアナ「はい、この周辺にはロストギアの反応はありませんでし

た」

スバル「一体何処にあるんだろうね？」

ロイド「……」

コレット「どしたの？」

ロイド「いや……なんでもない」

急にロイドが黙ったので問いかけるも首を振り何でもないと言う。

ロイド（なんだ？一瞬だけ殺気を感じたけど…気の所為か？）

その殺気は一瞬だったが先程戦ったベリオロス亜種やアクラ・ヴァシムとは比べ物にならない程の殺気を放ったのは確かであり一度周囲を見回すもそれらしい影は見当たらなかった。

気の所為だと思いロイドは仲間達と岐路に発つのであった。

ロイド達が歩く街道が見える高い崖の上に一つの影があった。その姿はとても荘厳で頭には冠のような角があり口からは鋭い牙が見え体色は美しい青、そして四本足でその身に赤き炎を纏っていた。

？？？［グルゥゥゥゥウウゥゥゥゥ……］

その者から発せられる殺気は他の飛竜種が到底及ばない様な程、強大で圧倒的で小型モンスターなどはその存在が現れると一目散に逃げる程だ。それは、龍族の王妃でありモンスター界でも圧倒的な力を持つ太古から存在する龍。その者は、眼下で会話をしているロイド達を暫く見ていたが翼を広げて何処かへ飛んで行った。

## 第三十九話（後書き）

どうです？ベリオロス亜種にちょっとだけ新技っぽいのをやってもらいました。
正三角形の各頂点に竜巻を発生させて対象を囲んでそこから連続で空中アタック。最後に中央に弾丸の様に落ちる。G級でこんな技出てこないかな～と思ってます。

ロイド「なあ、何で今回は短くしたんだ？」

えっとですね、ホントはある古龍種とも乱入戦闘をやってもらおうかと思ったんですが前回やってるんでそれだとちょっと……。なので、今回は乱入せずに傍観してたって設定です。故にこの古龍種の戦闘も想定した書いてた所為でカットしたら見事なまでに文字数が減ってしまった。

コレット「最後に出てきた古龍種とテオ。この二頭を出したのは何か意味があるの？」

ふふふ、それはあとのお楽しみ。

ティアナ「不気味な声あげんじゃないわよ！！」

次回は、フェイト達です。さて彼女達はあの速さに付いてこれるのか！？
読者の皆様、これからも私、ダメ作者を宜しくお願いします！！
でわ、今日は之にて～

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

## 第四十話（前書き）

作者のモンハン日記～！！

作者「根性焼き大会始めるぞっ～！！」

友人ズ「「「イエ～～イ！！」」」

説明しよう！！根性焼き大会とは下位装備でG級モンスター（テオ・テスカトルあたり）の前で高級肉焼きセットで生肉（一個だけ持って行く）を焼き見事にこんがり焼く大会の事だ！！生焼け、焦げ肉にした者は根性無しである！！こんがり肉にした者が勝ちだがこんがり肉Gにした者が真の勝者。因みに焼いてる最中に死亡した者は失格だ！！

作者「レディ～～……」

友人ズ「「「セッツ！！」」」

♪～～～～～～♪～～↑肉焼き音

テオ・テスカトル［ガアァァァァ！！］

友人1「うわっ！？」↑生焼け肉

友人2「この根性無しが！！」

この大会の難しい所は肉を焼く事が出来るタイミングを計る事だ。

失敗すれば上手に焼く前にあの世行きである。

友人２「うわっ！？焦げ肉なっちまった！！」

作者「俺もだ～！！」

はっきり言おう。怖くて集中できねえ！！

友人３「あと少し…あと少しで……」

友人１「あぶねえ！逃げろ！！」

友人３「ウルトラ上手ｎ――へブッ！？」

友人３は力尽きた……。

作者「全員根性無しだ～～！！！」

友人２「この恨み…誰に晴らすべきか！？」

作者「それは勿論……」

ジ～～～……↑テオを一斉に見る。

一同「「「「ぶっ潰す（。Д。メ！！！」」」」

結果から言おう……無理でした～♪八つ当たりで勝てる相手ではないですねｏｒｚ

そんな訳で（どんな訳だよ！？）四十話更新！！本編をどうぞ！！

# 第四十話

クエスト名　『疾風の暗殺者』

参加者

フェイト・T・ハラオウン

バルド

エリオ・モンディアル

キャロ・ル・ルシエ＋フリード

場所　水没林

狩猟対象

ナルガクルガ

狩猟環境は不安定

朝日が昇り、フェイトは目を覚ます。
目の前にはスヤスヤと寝息を立てて眠るエリオとキャロがいる。その年相応のあどけない寝顔を見て頬が緩む。そして、体を起こすとバルドが既にいないのに気付くと同時に外から料理の香りがしてきたのでテントから出るとバルドが調理をしていた。

バルド「おっ、目が覚めたか？」

フェイト「おはよう、バルド」

まだ少しだけ眠い感じがしたがバルドの手伝いをする。
それを見て少しだけバルドが笑い頭を撫でる。

バルド「一度顔でも洗って来い」

フェイト「うん、そうする」

桶に汲まれていた水で顔を洗い目が覚める。そこで自分の髪が少し乱れているのに気付き慌てて梳かして整えてバルドの下に戻り再び朝食の手伝いをする。

暫くしてエリオ達も目を覚まして朝食を摂り、ナルガクルガの討伐に再び水没林の奥地に足を踏み入れた。

泥濘む足場を踏みしめて周囲の木々の隙間を警戒しながら進む。時折りフロギィが群れで飛び出してくるが撃破して行く。

そして、前回襲撃を受けた場所に来た。周囲を見渡すもナルガクルガは居らずそこには草食モンスターの『ケルビ』が草を食べているだけだった。

エリオ「いませんね？」

バルド「まあ、昨日いたからって今日も同じ場所にいる訳ないしな。別の所も探すぞ」

それから一時間、二時間と時間だけが過ぎ歩きつかれたので小高い丘の上に移動して手頃な倒木に四人は腰を下ろしポーチの中から包みを取り出す。

中にあるのは携帯食料でそれをフェイト達に配る。

パサパサと乾燥していて味も特になく水も一緒に飲んで胃に流し込んだ。

バルド「相変わらずこの携帯食料ってのは味気がねえな……」

キャロ「そうなんですか？」

バルド「ああ、全く、少しでも味付けすりゃいいものを……」

愚痴をこぼすバルドに苦笑いする。

エリオ「父さんはこの世界にはどの位いたんですか？」

バルド「ん？そうだなあ……半年位はいた様な気がするな」

キャロ「その位この世界で暮らしてたんですか？」

バルド「その位っつっても短い期間だ。まあ、その期間はモンスター達も活発に動き回る期間だったから大変ではあったな」

フェイト「そうなんだ。バルドはどんなモンスターと戦った事があるの？」

バルド「そうだな……飛竜種が４種類、鳥竜種が４種類、古龍種が２種類だな」

キャロ「古龍種ですか？」

バルド「そう言えば古龍種については何も教えてなかったな」

休憩時間の合間にフェイト達に古龍種の事について教える事にした。

説明については省くぜ！！前回説明した様な気がするからね。

文字数もあまり増やしたくないからな！！←本音

バルド「っとまあ、こんなもんか？」

エリオ「それほど強力なモンスターなんですか！？」

バルド「まあな。まあ、出来ればもう会いたくはねえけどな」

ケルベロス「そう言ってると会う事になるぜえ？ウヒャヒャヒャヒャ！！」

バルド「うっせえぞケルベロス。へし折るぞ」

ケルベロス「ウヒャヒャヒャ！！ハ～ハッハッハッハッハ―ゲフンゲフン！！」

エリオ「笑いすぎて咽てる……」

バルド「阿呆が……」

フェイト「あははは……」

休憩を終えて再び捜索を開始する。
そして、見つけた。フロギィが四頭威嚇する様に啼いており此処は自分達の縄張りだと言っているかの様だ。それにナルガクルガも吼えて自分の居場所を主張しているかのようだ。
そして、モンスター同士の争いが始まった。

フロギィが噛みつこうとするがナルガクルガがその前から一瞬で消えた。見失い周囲を見回すとその視界の端からナルガクルガが飛び掛かりその刀の様に鋭利な刃翼でその首を斬り落とした。同胞が一撃で大地の肥やしとなり後退する。しかし、その背後には既にナルガクルガが移動していてそのしなやかな尻尾で残りの三頭を弾いた。痛めつけられたフロギィ達は悔し紛れに鳴いて茂みの向こうに姿を消した。

フェイト「やっぱり速いね……」

バルド「だな。まっ、今回は先制攻撃されないだけましだ。今度はこっちから仕掛けるぞ」

エリオ「でも、大丈夫なんでしょうか？」

バルド「心配すんな。危なくなったら俺が助けてやる」

フェイト「バルド……」

何時に無く真剣な眼つきで自分を見て来るフェイトに首を傾げる。

バルド「如何した？」

フェイト「バルドが危なくなったら私があなたを助ける」

それを聞いて驚いた顔をして直ぐに笑みに変わり彼女の頭をポンポンと軽く叩く様に撫でる。

バルド「まっ、期待はしてるぜ。それじゃあ、行くぞ。俺が先に仕掛ける。後は……まあ、成る様になれだ」

ケルベロス［何にも考えてないんだろ相棒？ウハハハハ！！］

バルド「うっせ、少しは静かにしろ馬鹿が。行くぞ、相棒！！」

茂みから飛び出し猛スピードでナルガクルガに接近する。

野生の本能でか殺気に気付いてバルドを見つけ威嚇の一声を上げる。

ケルベロス［いらっしゃいませ～～！！ヒ～～ハ～～！！］

バルド「行くぞ、ナルガクルガ！！魔神剣！！」

大地を削る程の衝撃波がナルガクルガに放たれる。それはナルガクルガに直撃し少しばかり驚いて動きを止めた。周囲に濃厚な殺気を

放ち戦闘態勢になった。

フェイト「行くよ、エリオ、キャロ！！」

エ、キ「「はい！！」」

ナルガクルガ「ガアアァァァァァァアアアアアアアァァァァ！！！」

フェイトが高速で接近し通り抜けざまにバルディッシュでその胴体に斬撃を入れる。
続いてエリオがフォトンランサーを飛ばして牽制、衝撃でナルガクルガの動きが止まる。

キャロ「猛きその身に、力を与える祈りの光を、ブーストアップ・ストライクパワー！！」

エリオの攻撃力を強化させる。

エリオ「ストラーダ！！ソニックムーヴ！！」

ストラーダ「ソニックムーブ」

高速移動魔法を発動、一瞬で距離を詰めて頭部にストラーダを振り下ろす。

それによりエリオに狙いを定めその強靭な尻尾を振るってきた。

キャロ「我が乞うは、城砦の守り。若き槍騎士に、清銀の盾を、エンチャント・デフェンスゲイン！！」

そのエリオの防御力が上昇する。ストラーダを前に構えてその一撃を防ぐ。

手に強烈な衝撃が伝わり弾き飛ばされるが少し手が痺れるだけで勢いを利用して距離をとった。

フェイトがその隙を突いて再度攻撃を仕掛ける。それをナルガクルガは持ち前の速度を使ってそれを回避、一瞬で彼女の視界から消える。そして、彼女の死角から飛び掛かって来た。刃翼が目の前に迫る。

それを身を低く屈め避ける。頭の上を鋭利な刃が通り抜けていった。

フェイト「くっ、動きが見えにくい！！」

バルド「無茶はするなよ？」

フェイト「大丈夫だよ。バルドこそ無理はしないでね？」

それに不敵な笑みを向け応える。バルドが一気に接近しケルベロスを振るう。

それをギリギリで避けるナルガクルガ。振り下ろされた大剣が地面

に降ろされ地面を砕く。
その間にナルガクルガはキャロの方に一瞬で移動、刃翼で斬りかかる。

キャロ「プロテクション！！」

それをプロテクションで防ぐ。重い一撃でキャロがプロテクションごと飛ばされる。
キャロを援護する様にバルドが突っ込みケルベロスで斬り上げる。
胴体に直撃し悲鳴を上げて仰け反る。その間にキャロが体勢を整えてエリオが接近しその刃翼にストラーダで斬りかかるが弾かれた。

エリオ「堅い……！！」

バルド「エリオ！！そこから直ぐに後退しろ！！」

エリオ「っ！？」

その声に咄嗟に反応して後退するとそのギリギリの所を伸びて来た長い尻尾が通り過ぎる。
あのままいたら間違いなく背後からあの伸びる尻尾が当っていた。

キャロ「フリード、ブラストフレア！！」

フリード「きゅく～！！」

フェイト「トライデントスマッシャー！！」

フリードから火炎が吐き出された。それが直撃し爆炎でナルガクルガが包まれる。
更にフェイトがトライデントスマッシャーを放ちナルガクルガを攻撃、それによって悲鳴を上げて仰け反る。

フェイト「まだ！バルディッシュ、ソニックムーヴ！！」

バルディッシュ［イエス、サー！！ソニックムーヴ］

高速移動魔法を発動させ一気に接近しナルガクルガの周囲を高速で飛び交い幾つもの斬撃を加える。
フェイトの猛攻に身動きが取れずいい様に攻撃される。

フェイト（いける！！このまま行けば……！！）

自身の速度に付いてこれていない事に勝利を確信する。だが……

一瞬の事だった。先程まで目の前で斬撃を受けていた筈のナルガクルガが赤い残光を残して姿を消した。

フェイト「え……！？」

突然の事に混乱した。周囲を見回すがその姿はない。エリオ達も一瞬で姿が消えたナルガクルガに戸惑っており周囲を見回していた。

バルド「フェイト！！あぶねえ！！」

それと同時にバルドがフェイトを突き飛ばしケルベロスを前方に構える。
その瞬間、鈍い音と同時に火花が散りバルドが吹き飛ばされ大木にその体を激しく打ちつける。

フェイト「バルド！？」

バルド「くっ！！エリオ！！次は右だ！！」

エリオ「えっ！？うわぁ！？」

その声に反応して右を見ると目の前に煌めく鋭い刃が見え咄嗟に体を大きく捩じる様にして避ける。
刃は当らなかったがその後に続いてきた黒い何かが掠め弾き飛ばされ地面を何度か跳ねる様にして転がった。

キャロ「エリオくん！！」

バルド「キャロ！！上だ！！」

キャロは見上げずにそのまま後退する。それと同時に上から高速で何かが地面に落ちる。

地面を揺さぶる程の激しい衝撃でその周囲の川の水が高くまき上がった。

その中央にはナルガクルガがいた。その瞳が真っ赤に染まった状態で。一層殺気が強くもなった様な気もする。

ナルガクルガ「ガアアアアァァァァァァァアアアアアアアアアァァァ！！！！」

フェイト「なにあれ！？」

バルド「ナルガクルガの怒り状態だ。一段と速くなりやがった……」

大木に埋まった体を何とか出して地面に降り立つ。その傍にフェイト達が集まる。

フェイト「大丈夫なの！？」

バルド「まあ大丈夫だ。肋(あばら)が二、三本折れた程度だ」

エリオ「それって重症ですよ！？」

バルド「そうか？こんなの日常茶飯事だと思うが？」

三人「ありえないからね！？」

何て事無いと言う風に言ってのけるが結構重傷だったりする。まあ、当の本人はケロッとしてるが……

バルド「この程度直ぐに治る。気にするな」

フェイト「気にするよ！！兎に角治療を――！！」

バルド「アホ、そんな事向こうが待たせると思うか？来るぞ！！」

ナルガクルガ［ガアァァァァアアアァァァ！！］

ナルガクルガが猛スピードで刃翼を何度も振るいながら此方に飛んで来た。

散開して距離を取るとその場で回転、そのしなやかな尾を伸ばして周囲を攻撃する。

その一撃は凄まじく近くに生えていた細い木がそれによりあっさりと折れてしまった。

体を捩じる様にしてそれをギリギリで避ける。

ナルガクルガは身を翻して身を屈め力を溜め再び連続ジャンプをしてキャロに飛び掛かって来た。

その射線上から逃げると一瞬でキャロの進行方向に回り込み大きく飛び上がってその巨体で潰そうと飛び掛かって来た。突然の事で彼女は体が反応できず動けないでいた。

エリオ「キャロ！！」

咄嗟にエリオが彼女を抱き上げその下から体を投げ出す様にして脱出する。
それと同時に黒い体が地面に着地した。

エリオ「キャロ、怪我はない？」

キャロ「う、うん。エリオくんありがとう／／／／」

直ぐに起き上がってキャロを守る様に前に立ちながら後退する。その隙を埋める様にバルドが接近してケルベロスに漆黒の炎を纏わせ斬る。
黒い体毛が焼け鱗に傷が入った。バルドに狙いを定めナルガクルガが地面を蹴り跳躍、大木に向かって飛びそれを更に蹴って跳躍しバルドの背後を取り刃翼を振るってきた。

バルド「ちぃ！！」

直ぐにケルベロスを背中に回しそれを受け止める。激しく火花を散

らし互いに弾かれる。
その反動を利用してナルガクルガは身を翻し再び疾風の如く飛ぶ。
バルドは何度も来る刃翼の攻撃をいなし、受け止め、弾く。
目にも止まらぬ速さで繰り広げられる攻防にフェイトも加わった。

フェイト「はあああああぁぁぁぁ！！」

ザンバーフォームに変わってソニックムーヴを発動、高速移動でナルガクルガのスピードに追いつく。
バルディッシュを振るいその胴体に傷を付けた。フェイトに向かって尻尾を振るうがそれは空を切った。フェイトは既にナルガクルガの脇を取っており再び斬撃を加える。これにより完全にフェイトに狙いを定めた。だが、彼女はそれを狙っていた。

フェイト「今だよ！！エリオ、キャロ！！」

エリオ「うおおおぉぉぉぉぉぉ！！」

キャロ「蒼穹（そうきゅう）を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来（こ）よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚！！」

エリオがナルガクルガの真上にソニックムーヴで瞬時に移動し、キャロがフリードを真の姿へと変える。ナルガクルガは突然現れた巨大化したフリードに驚いたのか動きを止めた。一瞬の事だが彼女等にとっては絶好のチャンスだった。

フェイト「バルディッシュ！！カードリッジロード！！」

バルディッシュ［イエスサー！ロードカードリッジ！！］

キャロ「フリード！！ブラストレイ！！」

エリオ「ストラーダ！！カードリッジロード！！」

フリードが火炎を吐きそれにナルガクルガが包まれる。悲鳴を上げてのた打ち回るその隙にバルディッシュとストラーダから薬莢が複数飛びだし二人の魔力が上がる。エリオが重力を活かして上空から高速落下を始めフェイトはバルディッシュを構える。

エリオ「うおおおおおおおお！！！！」

フェイト「雷光一閃！！プラズマザンバーブレイカアアァァァ！！！」

フェイトの斬撃がナルガクルガの翼に当る。それによって右の刃翼は衝撃で割れた。だが、エリオが上空から急速に落下するのを本能的に察知したのかその場から飛び退く様にして逃れるが避けきれずに魔力刃がその頭部を掠めた。

ナルガクルガ［ガアアアァァァァアアアアァァァ！？］

エリオ「外れた！？」

ナルガクルガの顔に傷が入っており右目の方に当ったのようだ。怒りで目が真っ赤に輝きバインドボイスを放つ。本能的な恐怖によって彼女達は体が竦み一瞬だけ動きが止まった。その一瞬が命取りだ。目の輝きが後を追いかける程の速度で彼女達との距離をゼロにし欠けた方の刃翼を振るってきた。

エリオ「母さん！！」

フェイト「うぅっ！！」

ギリギリで体の硬直が解け体を捩じる様にして避ける。バルドが援護に入る為に間に割り込む。
それを待っていたのかナルガクルガが尻尾でバルドを弾き飛ばした。

バルド「ぐうっ！？」

フェイト「バルド！！」

キャロ「お母さん危ない！！」

ハッとなってナルガクルガの方を見る。姿勢を低くしており身構え力を溜めている。

フェイトと向き合う形でいるナルガクルガが真上に軽くジャンプしそのまま空中で反転する。巨木の様な尾がしなやかに伸び上がりフェイト目掛けて全体重をかけて振り下ろされた。

フェイト「きゃああっ！？」

咄嗟にその下から回避は出来たものの地面を砕く程の衝撃が周囲にも広がりその余波でフェイトは吹き飛ばされ地面を転がる。

フェイト「くっ……」

今の一撃は当っていたら間違いなく死んでいた。強烈な余波で全身にダメージが入ってしまい上手く立ち上がれない。そこに追い打ちが来るかのようにナルガクルガが飛び掛かって来た。

フェイト「かはっ！！」

刃翼がフェイトの腹部にぶつかる。骨が軋む嫌な音が聞こえた。ボールの様に何度も地面を跳ね地面に転がる。幸いにも欠けた刃翼の方で殴られたので両断される事はなかったがそれでも強烈な痛みが彼女を襲った。泥水で濡れた全身を強く打ちつけてしまい立ち上がる力が出ず震える腕を使って立とうとするが体が笑っているかのように痙攣していて出来なかった。その彼女目掛けて止めを刺そうとナルガクルガが尾を回転させ棘を射出した。

キャロ「お母さん！！」

エリオ「間に合わない！！」

フェイトの目の前に棘が迫る。防御も間に合わない。思わず目を瞑る。そして、

――ドスッ！！――

肉を穿つ音が水没林に響き渡った。だが、フェイトは痛みを感じなかった。

しかし、周囲には鉄の臭いが、血の香りが漂っている。

キャロ「あ……ああ……」

エリオ「と、父…さん……」

フェイトの耳に二人の震える声が聞こえた。ゆっくりと目を開けると……自分の目の前で両手を広げて盾となっているバルドの姿があった。その背にはナルガクルガが放ったであろう棘が突き刺さっておりそれが腹部を貫通して飛び出ていた。

バルド「大丈夫だなフェイト？」

フェイト「あ、ああ……」

目の前の現実を信じたくなかった。止めども無く溢れ出ている血が彼の体を伝って地面に紅い湖を作っていた。

バルド「ちっ、野郎め。フェイトに向かってこんなもん投げつけやがって」

そう愚痴りながらバルドは背中に刺さっているその大きな棘を引き抜いた。

出血が激しくなりドバッと血が吹き出て地面を流れる川を紅に染める。

フェイト「バルド！！血が……血が…！！」

バルド「心配すんなこの程度じゃ死なねえよ」

止血しようとするフェイトを制しナルガクルガに向かって悠然と歩きだす。

バルドのあまりの異様さに向こうも何やら後退りをしている。

バルド「さてと……」

そう呟いてケルベロスを構えた瞬間、バルドの姿が消える。

一瞬の出来事だった。瞬きもしない内にバルドはナルガクルガの前に瞬間移動したかのように現れた。
そして、ケルベロスを振るいナルガクルガを打ち上げた。瞬時にその上にバルドが現れ斬り下ろす。
それによってその巨体が地面に向かって激しく落ちる。

ナルガクルガ「ガアアアァァァァアアアアアアアアアアァァァァ！！」

バルド「来いよ。お前の攻撃なんぞ俺には届かねえからよ」

怒りの咆哮を上げて起き上がったナルガクルガが地面に着地したバルド目掛けて刃翼で斬りかかる。
それをケルベロスも構えず腕を組む格好で立っているバルド。

――ガキンッ！！――

金属音が聞こえる。バルドの目の前には幾つもの剣が出現しており
それがクロスする様にして展開されて刃翼を防いでいた。

バルド「無限の創製剣（インフィニットブレード）。さあ、始めよう。無限の剣の舞踏会（ロンド）を」

更に剣が出現する。それは短剣、大剣、長剣、歪な形をした剣、細身の剣、波打つような形をした剣など多種多様な形をした剣がバルドの周囲に突如として出現する。その中から大剣と波打つような剣を掴む。

バルド「武器は幾らでもある。行くぞ！！！」

バルドが駆けだす。一瞬で距離を詰めて大剣を振るう。ナルガクルガの鱗を斬り裂いた。ナルガクルガはバルドに噛みつこうとするがそれは空を切る。バルドは既に懐に潜り込んでおり大剣を構えていた。

バルド「轟炎烈壊！！」

漆黒の炎を纏った大剣で胴体を斬り裂いた。斬り口を炎が焼き肉を焦がす。更に返しの手で波打つ剣を構える。

バルド「震炎剛破！！」

傷口にそれを突き刺すと同時に剣先に魔力が集中し爆発。内部から

ナルガクルガを焼いた。爆発の衝撃も合わさりその巨体が吹っ飛ぶ。
バルドは両手に持った剣を離し、今度は長剣と短剣を掴み肉薄する。

バルド「獄炎連衝!!」

長剣を神速の速さで連続で振るい斬り裂き、焼き尽くす。そして、
悲鳴を上げて仰け反ったナルガクルガの真上にジャンプし短剣をそ
の頭に突き刺した。痛みで暴れバルドを振りほどこうとする。

バルド「終わりだ……。浄破爆刃!!」

ドンッという衝撃音がナルガクルガの頭部から聞こえると同時に肉
の焼ける嫌な臭いがする。
体を硬直させて動かなくなったナルガクルガがどうっと音を立てて
崩れ落ちた。

バルド「もう終わりか？呆気ない物だったな……」

何時になく冷徹な笑みを浮かべてその骸を見下してそう告げる。

フェイト「バルド!!」

戦いが終わったのだと分かり震える体に喝を入れて立ち上がりバルドの下に駆け寄る。

バルド「フェイトか。無事で何よｒ――」

フェイト「私にも事よりも自分の心配をして！！」

エリオ「父さん！！死んじゃ駄目です！！」

バルド「ああ？何言ってんだお前等？俺が死ぬわけねえだろ？」

キャロ「で、でも血が……！！」

バルド「掠り傷だって気にすんな」

ケルベロス［いやいや、相棒。そうでもねえだろ……］

バルド「ああ？如何いう事だよ？」

ケルベロス［相棒、体から向こうの景色が見えるぜ？］

……つまり、風穴空いてるって事である。

フェイト「いやあああああああああああ！！」

エリオ「うあああああああああ！！父さん、死んじゃ駄目です！！」

キャロ「お父さん！！いやあああああああ！！」

バルド「だあぁっ！！お前ら落ちつきやがれーーー！！」

結局、大きな声を出して出血が酷くなりそれを見てフェイト達が更に悲鳴を上げそれをバルドが一喝してまた悪化しての繰り返しをエンドレスになる事態となり、彼女等が落ち着くのにかなりの時間が掛かったのだった。

---

バルド「ったく、だから大丈夫だって言っただろうが……」

あの後、直ぐに彼女達の前で治癒術を発動させ傷を治した。
何度も体調を気遣う彼女達を軽く流しつつ帰り支度をして岐路に付いている。

日も沈み辺りも暗くなったので野宿という形でテントを広げている。
火の番をする為今はバルドが見張っている。そんな中で彼は愚痴を漏らしていた。

ケルベロス［ウヒャヒャヒャ！！無理言うなって。相棒の出血量は常人の致死量の二倍は血ぃ流してんだ。嬢ちゃんが涙流しながら悲鳴上げんのも当たり前だろ？］

バルド「そうなのか？始めて知ったぞ？」

ケルベロス［おいおい、人間辞めちまって長く生き過ぎた所為で常識を忘れてんなよ……ってか、だからあの時あんな落ち着いて戦ってたのかよ……］

バルド「長生きすっとそんなの忘れんだ仕方がねえだろ？」

バハムート［若、それ位の知識は忘れないで頂きたいのですが……］

呆れた声で注意するバハムート。それに“まあ、次は気をつけておく”と軽く流す感じで言う。

それを聞いて二振りの剣は確信する。こいつは絶対に次の日辺りに忘れている！！と……。

ケルベロス［んで、本題だ。相棒、体調の方は正直言って如何だい？］

バルド「……だいぶ回復してるが、中核はまだ駄目だな」

そう言って腹部に手を当てる。表面上は全く傷はないが体の中ではまだあの傷が回復しきれていなかった。

バルド「まあ、月の光を浴びてれば問題無いだろ」

ケルベロス［楽観的に言うねぇ。状況は悪化の一途をたどるか……］

バルドは自身の手を見る。そこには普段通りの自分の手がある。
だが、

バルド「っ！？」

鼓動が一際高く跳ねる感覚がした途端、胸に激痛が走る。
そこを押さえて痛みに耐えるが体から黒い霧が溢れだし消えていく。

バハムート［若！！］

バルド「っ、大丈夫だ……」

呼吸を深く着いて魔力を全身に巡らせるとそれは治まる。
手を何度か握ったり開いたりして体の調子を測る。

ケルベロス［こりゃ重症だな。実のところ太陽の光を浴びるだけでも結構きてるだろ？］

バルド「……」

無言という事は肯定という事だ。本来彼は太陽の光を浴びた程度では倒れない存在なのだ。
そんな彼が日の光を浴びるのもキツイとなるとこれはかなりの異常だ。
その彼の体調を安定化させるのが夜に浴びる月の光なのだ。しかし、それも申し訳程度だ。

バルド「あとどれ位持つか……」

そう呟きながら月と闇の力を自身に集める。

---

その日の晩はフェイトは寝付けなかった。何度か寝返りを打っていたが眠気が一向にやってこない。
それどころか彼女の胸の内は不安が満ちていた。

フェイト（一回起きよう……）

不安から一度テントから出ると焚火の前で座っているバルドがいる。

バルド「なんだ、まだ起きていたのか？」

フェイト「うん、何か眠れなくて……」

苦笑いして答えバルドの隣に座る。

ケルベロス［よお、嬢ちゃんいいところに来てくれたぜ］

フェイト「如何したの？」

ケルベロス［相棒を休ませてくれ。俺達が見張るって言っても聞いちゃくれねえんだよ］

バルド「はあ？何時そんな話をしたんだ？」

突然の話に何のことやらと思いながらコーヒーを飲むが……

ケルベロス［だから、嬢ちゃん。相棒に添い寝をしてやってくれ！］

バルド「ぶうっ！？」

フェイト「ふえっ！？そ、添い寝／／／／！？」

当然の発言にコーヒーを噴き咽る。

ケルベロス「何だったら膝枕でも良いぜ！！」

もし今ケルベロスに手があったら間違いなくサムズアップしてるだろう。

ケルベロス「さあ！！嬢ちゃんの色気を使って相棒を悩殺しｔ「余計な事を言うなボケがっ！！」はまちゃん！？」

それ以上は言わせまいとバルドが黙らせる。殴られた場所から煙が立ち上っている。たん瘤が見えそうだ……。

フェイト「えっと……バルド。此処空いてるよ／／／／／？」

そう言って自分の膝を指差すフェイト。顔が真っ赤である。

バルド「……」

無言で額に手を当てて溜息を吐く。もう手遅れだったか、と内心思

った。

フェイト「バルドに無理はして欲しくない。今日はゆっくり休んで？お願い……」

上目遣い＋目をウルウルさせる。必殺の乙女の涙！！百人中九十九人の男は間違いなく鼻血と吐血で一撃必殺だカニ～♪

バルド「分かった分かった！！休むから泣くな！！」

流石の彼も彼女に泣かれては勝てない。渋々といった形で彼女の膝に頭を乗せた。

いや羨ましいぞコノヤロ！！？（。Д。メ）

バルドは疲れていたのか横になった途端に目が下がり始める。

バルド「フェイト……」

フェイト「なに？」

そして、彼は眠りに着く寸前にとんでも無い事を言った。

バルド「お前って…良い匂いがするな」

フェイト「ふえっ／／／／／／／！？」

突然の言葉にボンッ！と音が鳴る程の勢いで耳まで真っ赤に染まる。
顔から蒸気が出てきそうな勢いだ。

バルド「スゥ、スゥ……」

ケルベロス［ほほう、相棒め。最後にとんでもねえ爆弾落としやがったな～。ウヒャヒャヒャ！］

フェイト「あうあうあうあう……／／／／／／／／／／／／／／」

脳がオーバーロードしてしまい最早言葉ともつかない声を発するフェイトであった。

フェイト（ううぅ……バルドのバカ／／／／／／／／）

心臓が高鳴る。そこに手を当てなくとも激しく鼓動しているのが分かりそうだ。
自分の膝寝ているバルド。今なら彼の……。いやいや待て待て！！
今自分は何を考えた！？
寝ている彼にキ、キキキスをしようだなんて／／／／／／／／／／！？誰

だ!?そんな事を考えたのは!?
って、何変な事考えてるんだろうか……。

一人で悶々としていたが寝ている彼を見る。果たして、彼は自分の事を如何思っているのだろうか?親友?それとも家族?もしかしたら大切な人と思っていてくれているのだろうか?そうだといいなあ……。自身の膝の上で眠っているバルドの額に手を乗せる。

その時だ…

フェイト「あぐっ!?」

昨日と同じく激しい頭痛が起きる。まるで全身が脈打つような感覚が襲う。
そして、激しい頭痛と共に彼女の頭の中に無数の世界が…銀河が…
そして、激しい光の奔流が明滅しながら映し出される。

フェイト「あっ…っつ!……うぁあ……!!」

ケルベロス「お、おい!嬢ちゃん大丈夫か!?」

ババムート（感応現象が起きてる!?発動する頻度が速まっている!!）

頭を抑える様に片手を当てて喘ぐ。激痛で額に脂汗が浮かぶ。呼吸

が乱れ始め、視界が明滅し始め周囲の景色が変化し始めた。

燃え盛る大地、そこには巨大な、途轍もない大きさの巨大な蛇がいる。

それは嘗て彼女達の会った蛇でありその存在の周囲には人々の死屍累々が散らばっている。

その死体の山を乗り越えて人々はありとあらゆる武器を携えてそれに立ち向かう。

――人間共がぁ！！自らの滅びに抗うか！！――

――ふざけるな！！俺達はお前等みたいな奴に負けねえ！！――

――俺達は俺達だ！！俺達は、まだ生きていたいんだよ！！！！――

――その身を滅ぼす原因を自ら作っておきながら、よくもぬけぬけと！！――

あの存在の幾つもある目の上にそれと同じ数の緑、紫、赤、青、黄色、黒の光球が浮かび上がる。それが一斉に放たれ人々に降り注ぐ。

その光球に当った人々が次々と毒に侵され、石化し、焼き尽され、凍り付き、光で消し飛び、闇に呑まれた。それを乗り越えて数え切れない数の人達が各々の兵器を使う。銃弾が、光弾が、レーザーが、ビームが数多の、それこそ数え切れない攻撃がその存在に殺到する。

しかし……その存在は傷一つ負わない。

――無駄だ！！俺を殺せるのは、俺のみだ！！如何なる兵器を持ってしても、人間如きが生み出した兵器も魔術も魔法も錬金術も数多の方法も俺を傷つける事罷り成らぬ！！――

その咆哮だけで周囲が消し飛ぶ。それでも、大型の機動兵器が、数多の巨大な戦艦が一斉にその存在に主砲を撃つ。一撃で一つの村や街程度は消し飛ばせる質量が全て直撃し爆炎に包まれる。

――今のはいけたか！？――

――……愚かな。その程度で俺を倒せると思ったのか？――

しかし、その中から悠然と傷一つなくその存在は現れた。その真紅の瞳で眼下の人間と見下ろす。

――そ、そんな……この世界の全ての科学を集結させて造った切り札が……！！――

――人間とは、何とも愚かな存在だな。自分達が優良種と思い込み、本来ならば敬意を払うべき自然を破壊し、弱肉強食の法則を捻じ曲げピラミッドの頂点に更に勝手に居座り、種を滅ぼし、殺し、破壊する！！それどころか同じ種族すら迫害し、禁忌と傲慢にも決め付け殺す。今となってはその世界に存在する全ての種の管理者を勝手

に謳い命を弄くった！！聞こえぬか！？貴様等の行いで苦しみ泣いている全ての種の慟哭が！？聞こえんだろうな！！憐れな貴様等に種の悲鳴など聞こえぬだろう！？そして、挙句の果てには共通の敵が出現して手を組んでも何処かが滅べば勝手に占領し同じ種である筈のそこの者達を奴隷とする！！自分達とは違う力を持ったというだけで同じ人を軽蔑し、蔑み、迫害し殺して！！貴様等みたいな傲慢無礼な種は数多の世界を、次元を飛び交っても何処にでも存在し自らを育んでくれた星を殺した！！そして……俺の、俺の、俺のぉおおおおお！！！！！——

その巨躯を動かし人々に向かってその巨大な尾で薙ぎ払った。山すら砕きその先の基地や街を人ごと潰す。その手に黒い炎の球体を作り出しそれを地上の人々に投げつける。着弾と同時に半径数キロが闇の炎に焼かれて消えた。

——貴様等は、もう生かしてはおけん！！どの世界にも、どの次元からも、人間を滅ぼし尽くしてくれる！！！！——

背にある翼が大きく開き空高く舞い上がる。成層圏を超え大気圏外に飛び立つ。六芒星の中に十字架のある目が紅く、真紅に輝きその口が開きそこに光が収束する。あの技だ。十年前闇の書を葬った圧倒的な光を放つ気だとフェイトは気付いた。

——奢りし愚かな宇宙の小さき種よ、この世界から……消えされ！！！世界滅ぼす終焉（バニシングワールド）の焔！！！！——

放たれるは全てを消し去る光。その光が人々を、機動兵器を、戦艦を呑み込み、星を両断した。星諸共そこから命が全て消し飛び爆発する光に包まれた。宇宙すら燃やすかのような銀河を貫く破壊の奔流が治まりそこには星の名残である小さな粒子だけが宇宙に漂っていた。その一欠片をその存在が掌に乗せる。

――すまぬな名も無き星よ。お前を救えなかった…。私はまた、救えなかった…、俺は、また助けられなった……！！――

真紅の瞳から涙が零れていた。幾つもある瞳からそれは溢れていて無重力空間に漂う。

――俺は……！！あいつも守れなかった！！俺が…俺が…守らなければいけなかったのに！！！大切な者すら守れぬ……！！今も星すら守れなかった！！これでは…俺も唯の愚図だ！！――

一人で、冷たくなった空間に浮いているその姿は何とも淋しくて、辛くて、悲しく見えた。

その時だ。星の欠片が淡く輝く。

――また、生命を生み出したいのか？また、あの人間共が生まれるかも知れんぞ？――

それに応える様に輝きは強くなる。それを見て、その存在は何とも言えないと言った表情になりフッと目を細めて笑った。

――まったく。何処の星も命を育む事を望みたがりおって……。…分かった分かった！お前達の望みを叶えよう――

星の欠片が離れていきある地点で止まる。そこに、幾つもの欠片が集結して形作る。光に包まれ、次の瞬間には新たな青き美しい星がそこにはあった。

――俺が出来るのはそこまでだ。後は、お前が頑張れ。お前の命の危機が来るその時まで俺はお前の意思を尊重する――

背後の空間が裂けそこに巨大な虚数空間が出現する。そこにゆっくりと入っていくそれは目の前にある星を優しげに見ていた。

――俺も、そろそろ前に進まないといけないのかもしれないな……。お前はどう思う？――

風景が霞がかりその存在も星も空間も揺らぎ消え始める。そして、

――お前ならどう思う？フィf――

その存在が言いきる前に景色が消え去った。

フェイト「かはぁ……はあ…はあ…はあ…」

次の瞬間には彼女の前には元の景色が広がっていた。呼吸が荒く、酷く酸素を求める。

バハムート［フェイトさん、大丈夫ですか！？］

フェイト「大……丈夫…だよ」

ケルベロス［無茶はいけねえぜ譲ちゃん。そこに横になりなって］

ケルベロスから魔力が溢れる。それと同時にバルドの体が軽く浮き上がる。

心配はいらないと言いたかったが体が酷く休息を求めていて彼女は何時の間にかバハムートが（どうやってだか）持って来た枕に頭を乗せる。そこに、バルドも横にした。

先程は寝付けなかったのに今は酷く眠気が襲ってきた。重くなり始

めた瞼が下がり始める。

ケルベロス［嬢ちゃんも寝な。俺とバハムートでも十分見張りは出来っからよ！！］

バハムート［私だけでも十分です。駄犬は下がってなさい］

ケルベロス［おいトカゲ野郎…。それは俺に喧嘩売ってんのか？ああ？爬虫類は爬虫類らしく夜は寝てればいいんだよ！！］

バハムート［なっ！？私は高貴な竜族です！！トカゲではありません！！全く、無礼ですよ！！］

ケルベロス［お前こそ！！俺は地獄の番犬だ！！そこらの犬っころと一緒にすんじゃねえ！！］

ギャアギャアと中の良さそうに喧嘩をする二人（？）を見ながらフェイトは一度バルドを見る。

フェイト（バルド……）

そして、体を少し動かして彼に抱き着きその胸に顔を埋め目を閉じその鼓動を子守唄にしてスヤスヤと眠りについた。それを確認すると、二振りの剣は喧嘩を止め眠る二人の上に浮かぶ。

ケルベロス［やれやれ、やっと寝たか……］

バハムート［ケルベロス、さっきのは……］

ケルベロス［間違いねえ、感応現象だ。嬢ちゃんの脳も段々その許容量をオーバーする情報を整理し始めやがってる］

バハムート［だとすれば、フェイトさんは近い内に……］

ケルベロス［ああ。いずれはその膨大な情報を正確に読み取って相棒の過去が分かる事になるだろうぜ］

いずれ来るだろう過去の露呈、それが果して自分達の相棒と相棒の愛した少女に似た彼女にどの様な路（みち）が現れるか如何に何億年生き続けた二人でも分からないのだった。

ケルベロス［最悪の場合、相棒が拒否しても嬢ちゃんの……嬢ちゃんの生き血を吸わせねえとな］

バハムート［ですが、それではフェイトさんは……！？］

ケルベロス［そうさせない為に、あれがあるんだろうが］

バハムート［そう…ですね……］

ケルベロス［まあ、意味するのは永遠の愛の誓い…。失敗すれば、死が待っているだけ……］

バハムート［若…いえ、『イモータル』の禁忌の儀式。『血の契約（ブラッドエンゲージ）』…］

ケルベロス［それは、もう避けられない所まで来ていやがる。相棒は如何する気なんだか……］

二人は確信していた。近い内に決断の時は来ると……。その時、彼女は、フェイトはどちらを選ぶのか？大切な者を守る為に、彼女は……。

抱き合って寝ている二人を見下ろしながら二人は思い耽るのだった。

## 第四十話（後書き）

どうですか?今回は乱入クエストは発生しませんでした。期待してた（かもしれない）皆様申し訳ありません。流石に何度もモンスターが都合よく乱入することはないかな?っと思ってしまい不安定な環境でも出現させませんでした。

バルド「俺意外と頑丈なんだな?」

いや、どっちかと言えば頑丈を高跳びどころか大気圏外にハイジャンプさせてしまった気がするが……まあ、彼は元々そういう者なんで気にしないでください。

それと今回バルドの使用したレアスキルはその名の通り無限に剣を出現させる事のできる力（まだ他にも効果はあるが…）でその力の片鱗を今回は解放したといったところです。

次回は、はやて達ですね。……そろそろ、オリジナルモンスターを出そうか?ぼそり……

はやて「今何て言ったんや?」

では、読者の皆様!次回もなるべく早く出したいと思うのでこれからもこのダメ作者を宜しくお願いします!!では、さよならさよなら~

はやて「チョイ待ちぃ!今のは如何いう事なんや!?」

一同「大いなる力で未来を切り開け!!」

## 第四十一話（前書き）

作者のモンハン日記～！！

モンハン３ｒｄで始めてアマツマガツチとやりあってた時だ……。
アマツがプレイヤーを引き付けた後、巨大な竜巻を起こす技がありますよね？

作者「ガード！！」

この時は前回紹介したチキン装備で挑んだので取り敢えずガードの構えをしたんです。まあ、結果は引き寄せられてしまいました。

――ガツンッ！！――

それで当時は一度ガードしたら攻撃判定消えると思っていた、けど……！

――ガツン、ガツン、ガツン、ガツンッ！！――

作者「ちょっ！？これは……ｗｗｗ」

作者は力尽きた。↑スタミナ切れてガードできなかった。

まさか、連続攻撃とは……ｏｒｚ奴の攻撃見誤ってたわ……。
皆も気をつけよう。あれ以来奴と戦う時は強走薬Ｇが自分の相棒となった。

次の日、友人にその失敗談話たら笑われた。普通はガードしないで

逃げるもんだろ?って言われて始めて気が付いた自分に気づいて落ち込んだｏｒｚ

さて、四十一話更新。今回ははやて達です。では、本編をどうぞ！！

# 第四十一話

クエスト名　『翡翠の魚影』

参加者

八神はやて

（リインフォース？）

シグナム

ヴィータ

シリウス

初代リインフォース

場所　密林

狩猟対象

ガノトトス亜種２頭

狩猟環境は安定

その者は幼き頃より一族の者に言い聞かされていた。

――よいか、我ら一族は人に恐怖、畏怖を植え付け種の不必要な繁栄を抑えねばならない。その為には人間を殺し、破壊し、或いは滅ぼさねばならない――

――お前は我ら一族の中でも突出して力があるこれからはお前がそれを引きうけるのだ――

一族の者達はその子に期待した。いや、その子ではなくその力に期待したのだ。

その子という一個の存在ではなくその力の存在を求めていた。

その子も幼いながらもそれを理解していた。それ故に何も言わず言われるがまま数多の生命に畏怖と恐怖を示し続けていた。そして、一族の操り人形として長い間君臨していた。

――俺は…誰？何を持ってして生きる為に生れたんだ……――

それを求める為に破壊と殺戮、恐怖、畏怖を人々に齎すという歪んだ道を歩む。

――世の民を恐怖に落す悪しき者め！！この私が相手だ！！――

そんな時である。その者の前に現れた人間がいた。周囲の人が恐れる中、彼女は臆せず前に立ち塞がったのだ。

――脆弱な君に俺の相手は務まらないよ。死にたくなければ帰りな――

――私が負けると？ふっ、その慢心が敗因だと知れ！！覚悟！！――

彼女は懐から札を取り出しそれを放つ。聖なる力を持つ巫女のみが扱えるという物だった。

――へえ、その札を使えるって事はそれなりの実力があるんだ～――

だが、数多の妖魔を滅してきたそれはその者に届く事なく燃えて消える。

――な、なに！？――

――君、面白いね。遊んであげるよ♪――

――くっ！！なめるな！！――

それから、半日もの間、両者の間では激しい術の応酬が続いた。地面を抉り、空を裂き、草木を焼き尽くし、雲を吹き飛ばす。珠の様な汗を流す彼女とは裏腹にその者は汗一つ、呼吸すら乱れてすらいなかった。

――うんうん、結構強いね。俺が戦った中では一番ってところかな♪――

――くっ！まだまだぁぁぁぁぁ！！――

当時の最大最強の術を放つ。周りの空間すら呑み込むそれをその者は片手で受け止めた。

――なに！？――

――う～ん、もう少し強く出来るね。頑張ってみよ～！！――

ニコニコと笑いながら逆の手から同じ術を放ってきた。それは彼女の術の倍の威力を持っていた。咄嗟に防御陣を組み受け止める。が、破られ彼女は吹っ飛ばされた。そして、背後にあった大木に背中を

強く打ちつけてしまい気を失った。

彼女が目を覚ましたのは日が完全に沈みきった頃だ。辺りは闇に閉ざされ人ならざる者達が闊歩する時間となっていた。

――目が覚めたかい？――

――なっ！？き、貴様は――きゃあっ！？――

その彼女の隣にその者は座っていた。驚きで慌てて距離を取ろうとして自身の袴の裾を踏んづけてしまい転ぶ。

――あははっ！そんな慌てなくても。結構可愛い所があるんだね――

――だ、黙れ／／／／／！！油断させておいて喰らおうなどと考えているだろうがそうはさせんぞ！！――

――別に食べようだなんて思っていないさ。それに人肉なんかよりも牛とかの方が美味しいもん――

ケラケラ笑うその者を無視して彼女は立ち上がりその場を去る。その後をその者はついて行く。

――付いてくるな――

――え～何でさ！？――

――今から私は見回りをせねばならんのだ――

――そんなにヘロヘロなのに？それだと妖怪に食べられちゃうよ？

――

――その前に滅してやる――

――無理無理～♪今日は土蜘蛛がいるから君はあっという間に捕まるよ――

――なにっ！！今日は土蜘蛛がいるのか！？それならばなんとしても滅せねば！！――

――あれ！？何か焚き付けちゃった！？――

更に燃えるような眼になる彼女は駆け出そうとしたが、またもや袴を踏んでしまった。

――きゃあ！？――

――よっと……――

転ぶ寸前にその彼女をその者は抱きかかえた。所謂お姫様だっこだ。

――な、何をする！！離せ／／／／／／！！――

――なんだよ～折角助けてやったのに――

――妖の施しなど……！！――

――今日はゆっくり休みなよ。周りに奴らには俺から暴れるなって言っておくからさ♪――

その者の腕の中で暴れる彼女に微笑みながらそう言う。その綺麗な笑みに思わず顔を赤くする。

――そう言えば、君の名を聞いていなかったね。ねえ、何ていう名前なの？今後も何度も会うだろうし教えてよ――

――わ、私か！？私は……――

彼女の口が動く。自身の名を告げる為に。そして、それに返す様にその者もまた自身の名を名乗るのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――

シリウス「ふあぁぁ～」

目覚めたシリウスが体をほぐす為に背を伸ばす。
テントの中にはシリウス以外は誰もいなかった。如何やら皆起きた様である。

シリウス「いや～、久しぶりに懐かしいのを見たもんだ」

一人呟く。そして、起きてテントの外に出ると朝食を作ってるはやてがいた。

はやて「あっ、おはようシリウス君」

シリウス「おっは～♪はやて～」

はやて「な、なんや？」

シリウス「目覚めのチュ～「させへんで！！」ぶっ！？」

いきなりのボケにもはやてはしっかり対応して鉄製のハリセンをシ

リウスの顔面に叩き込んだ。
早朝から元気な二人である。

シグナム「シリウス、お前はそこで何をしているのだ？」
シリウス「やあ、シグナム。おはようさ～ん」↑鼻血を垂らしている
ヴィータ「きったねーな。何か詰めてろよ」
シリウス「ふごふごっ！」↑鼻に何かの種を詰める
はやて「いやそこはティッシュを詰めんかい！！」スパーン！！
シリウス「ぶっ！！」
初代リインフォース「１８メートル……残念ですね」
はやて「えっ！？記録測ってるんか！？そして何が残念！？」

毎度おなじみはやて劇場を終え食事を終えて狩りを開始する。
今日こそ依頼を達成しようと気合いを入れる。

はやて「今日で終わりにしたいで」
シリウス「まあ、大丈夫でしょ。人数多いし」

現状、六人編成である（リインを含めて）。

シグナム「登録メンバーをオーバーしてるのでは？」

シリウス「まあ、何とかなるっしょ」

気楽に言ってのけるシリウスに皆呆気にとられる。そして、前回ガノトトス亜種と戦った場所に着く。周囲は鳥の囀りなどが聞こえるだけで静かであった。

初代リインフォース「いないようだな。大型生物の反応はない」

はやて「何処にいるんやろ？」

シリウス「う～ん……」

ヴィータ「なんだよシリウス。突然唸りだしてよ？」

シリウス「リインフォース」

初代・リイン「「はいです（なんだ？）」」

シリウスの呼びかけに二人が同時に反応した。

シリウス「二人とも同じ名前なのは大変だね。どっちか変える？」

はやて「いきなり何言ってんのや！？」

シリウス「リインがツヴァイだから、初代の方はアインスかな？だとすると……アイネでどう？」

シグナム「如何と聞かれてもだな……」

ヴィータ「いきなりそんなの決めれる訳ねえだろ」

はやて「せや！リインフォースはリインフォースやろ？」

シリウス「でもさ、こっちは初代、そっちはツヴァイって呼ぶ訳にもいかないしいっその事リインフォースを姓にして名前作った方が良いと思ったんだけど？」

初代リインフォース「私はそれでも構わない」

はやて「リインフォース！？」

初代リインフォース「主、私は既に過去に死んだ事になっている。なら新たにアイネとリインフォース・アイネと名乗らせ貰えないでしょうか？」

はやて「リインフォースがそれでいいんなら良いんやけど……」

それに初代リインフォース改めアイネは礼を述べる。

エリアを移動して湖の外周を回る。小型モンスターの姿はなくいるのは甲殻種のランゴスタがいた。

はやて「ハチがおるで」

ヴィータ「ぶっ潰しても良いよな？」

シリウス「待った……」

アイゼンを担いだヴィータをシリウスが制す。その間にランゴスタがフワフワと湖の方に飛んで行くと……

――ザバ～ンッ！！――

なんと湖が盛り上がりそこからガノトトス亜種が飛び出しランゴスタを丸飲みした。

シリウス「おお～やっぱいたか」

はやて「ま、丸飲み！？」

ヴィータ「よく気付いたな」

シリウス「まあね♪」

どうだ?という様に胸を張るシリウス。

アイネ「それで、如何する?仕掛けるのか?」

シリウス「そうだね。今は一体だけと願いつつ喧嘩を売ってみよう!!」

ヴィータ「今日こそぶっ倒してやるよ!!」

リイン「リインも頑張るです~!!」

それぞれデバイスを持ち駆け出す。ガノトトス亜種は接近するはやて達に気付き先制とばかりに切れ味抜群の水ブレスを放って来た。それを散開して回避しシリウスが周囲に青い炎の魔力を形成、一斉に放つ。湖に幾つもの柱が立つ。数発がガノトトス亜種に当りその鱗を焼く。シリウスを狙い再び水ブレスを放つ。それがシリウスを両断するがそのシリウスが霞の様に消える。

シリウス「ハズレ~♪」

既に接近しており『朱雀』に魔力を通して構えるシリウスがガノトトス亜種の目の前にいた。

シリウス「紅蓮拳!!」

至近距離で魔力の塊を放ち爆発させる。衝撃に驚き水面から飛び出す。

はやて「来(こ)よ、白銀(はくぎん)の風、天よりそそぐ矢羽となれ、フレースヴェルグ！！」

ガノトトス亜種の真上から周囲をも巻き込む魔力弾の雨が降り注ぐ。その弾幕を掻い潜りシグナムが接近し斬撃を入れる。鱗に傷が入る。そして、入れ替わりヴィータがアイゼンを構えてそこに叩きつける。周囲の鱗も逆立ち弾け飛び血が舞う。

アイネ「ディバインバスター・改！！」

アイネの前に魔法陣が出現しそこから巨大な砲撃が放たれる。それに対抗するべくガノトトス亜種が水ブレスを放つ。一点集中型の水ブレスと周囲をも破壊する広範囲破壊型の砲撃が激しく競り合う。アイネが更に力を込める。砲撃の勢いが更に増し水ブレスを吹き飛ばすが軌道をずらされそれはガノトトス亜種の近くに着弾、湖の水が空高く舞い雨の様に落ちて来る。

シグナム「あれを弾くのか！！」

ヴィータ「無茶苦茶だぜあいつ！！」

シリウス「いやはや凄いパワーだね」

はやて「うちらかて負けてへん！！」

ガノトトス亜種が横薙ぎに水ブレスを放つ。地面を斬り裂きながらそれが六人に迫る。

ヴィータ「あぶねっ！」

リイン「危ないです～！？」

シリウス「いやはや派手に壊すねぇ……」

それぞれが回避行動を取る。はやて、リインが上空に逃げると……

ガノトトス亜種「ガオァァァォォォアァァァァ！！」

は・リ「「っ！！」」

なんとガノトトス亜種が湖から飛び出し飛んで来た。慌てて回避をする。巨体が地響きを立てて落ちて泳ぐように動きながら地面を抉って進む。巨体の突進をギリギリでその巨体に巻き込まれずに済むがそれが撒き散らした水の様な物を被ってしまう。

すると、

はやて「あ、あれ……？」

リイン「ね、眠いです～……」

突然激しい眠気が二人を襲う。ふらつく二人を狙うかのように立ちあがったガノトトス亜種が水ブレスを二人に放って来る。

アイネ「させません！！」

その二人の前にアイネが立ち塞がりラウンドシールドを展開する。何とか受けきるがもう一度発つ体勢にガノトトス亜種は既に移っていた。

アイネ（まずい！もう一度喰らえばもたない！！）

シリウス「危ない！！」

咄嗟にシリウスが狐を形どった青い炎をアイネ達の前に集めた。青い狐たちは集結して巨大な炎の盾となった。そこに放たれた水ブレスが直撃する。炎は消える事なくそれを受ける。

シリウス「こら～二人とも起きろ！！」

はやて「ふぎゃ！？」

リイン「痛いです～！？」

その間にシリウスが二人の下に行き軽く小突いた。それによって目を覚ましそれと同時に防壁が破られる。四人は散開して避ける。

シリウス「戦場で寝るなんてはやてって大胆だね」

はやて「なんかあの水みたいなの浴びたら眠くなってきたんやけど」

シリウス「あ～そう言う事か。いい？二人が浴びたのはあいつが分泌する睡眠性のある体液かなんかだと思うよ。それとヒレにも注意、同じ様な毒を持ったのがあるからね」

リイン「そんなものまで出すんです！？」

はやて「それを早く言って欲しかったで！？」

シリウス「忘れてた。キリッ）」

はやて「いや、恰好よく言っても誤魔化せへんで？」

そこに再び水ブレス。慌てて避ける。はやて達に気を取られている間にシグナムとヴィータが接近する。

シグナム「紫電一閃！！」

ヴィータ「ラケーテンハンマー！！」

ガノトトス亜種［ガアアアァァァアアアア！？］

二人の技がガノトトス亜種の皮膚を斬り裂き、叩き潰した。その二人を追い払うかのようにその場で回転強靭な筋肉を持った尾で二人を弾き飛ばした。凄まじい衝撃を受けて二人が岩の壁にめり込んだ。

ヴィータ「がっ！！」

シグナム「ぐっ！！」

はやて「シグナム、ヴィータ！！」

アイネ「おのれ！！はあああぁぁぁぁぁぁぁ！！」

拳に魔力を集め一気に接近し振りかぶる。

アイネ「紅蓮猛虎撃！！」

高速で拳を打ち込む。煩わしいと判断したのかガノトトス亜種がア

イネ目掛けて全身をぶつける様に体当たりして来る。それを腕をクロスして防御の構えを取るが弾き飛ばされ地面を何度か転がる。

はやて「リインフォース！！」

アイネ「大丈夫です！！」

口の中に溜まった血を吐きだし立ち上がる。ヴィータとシグナムも額から血を流しながらも戦線に復帰する。

シリウス「はやてとリインは三人に治療を！！此処は俺が引き受ける！！」

はやて「シリウス君！！」

一瞬で距離をゼロにしてシリウスは拳を叩き込む。シリウスを狙いガノトトスが暴れる。

当れば一撃必殺となるだろう猛攻をシリウスは幻術を混ぜて避けまくる。自身の周囲に青い炎の狐を召喚しそれを飛ばす。ガノトトス亜種の水ブレスを避けてそれが着弾し鱗を焼く。それを見ていたがシリウスが隙を作っている今の内に三人の治療をしようとリインと共に集まる。

はやて「三人とも大丈夫なんか！？」

シグナム「大丈夫です」

ヴィータ「こんなの痛くも痒くもないぜ！！」

アイネ「まだ大丈夫です、主」

リイン「無茶は駄目です？シリウス君から薬を貰ったので飲んでくださいです～」

回復薬を飲み傷の回復を促す。幾分か痛みが引いた。

ヴィータ「うえっ！にが！！」

飲み干しデバイスを持ち再び立ち上がる。

散開しシリウスの援護に入る。シグナムが接近しその巨体を斬る。

ヴィータがシュワルベフリーゲンを飛ばし牽制してリインがフリジットダガーを放つ。

はやて「リイン！！ユニゾンや！！」

リイン「了解です～！！」

は・リ「「ユニゾンイン！！」」

二人の力が合わさり力が漲る。デバイスを掲げる。巨大な魔法陣が

展開される。

はやて「響け終焉の笛、ラグナロク、ブレイカーーーーー！！！」

正三角形のベルカ式魔法陣の各頂点上から三つの砲撃がそれぞれ放たれ巨大な砲撃となる。

それがガノトトス亜種を呑み込む。断末魔の様な悲鳴を上げる。爆発により周囲を覆う程の粉塵が舞う。それは風に乗って剥がされていき晴れた先にはその巨体は地面に崩れ落ちていた。

シリウス「倒したみたいだね」

アイネ「残るは一体という事か……」

そこに水面が盛り上がりもう一体のガノトトス亜種が姿を現す。

シグナム「休む暇も与えてくれんとはな！！」

ヴィータ「やってやろうじゃねえか！！」

はやて「うちら八神ファミリーの底力見せてやろうやないか！！」

シグナム、ヴィータ、アイネが肉薄。その三人に横薙ぎの水ブレスを放つ。散開して避けてシグナムがその体に斬り込む。ヴィータが

アイゼンで鱗を吹き飛ばす程の一撃を叩き込む。アイネが踵落としでその頭を蹴り脳を揺さぶる。しかし、ガノトトス亜種はその圧倒的なタフネスでそれらを無視し三人を強靭な尾で弾き飛ばした。

全身を強か打ちつける。全身の骨が悲鳴を上げる様に軋む。それでも彼女等は立ち上がる。全身を魔力で纏い、地面を蹴って再び接近して得物を振るう。

はやて「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストルティン！」

彼女等を援護する為に七つの光の槍を放つ。その光をガノトトス亜種は水ブレスを吐き破壊する。
爆発でガノトトス亜種の前が煙で覆われる。

シリウス「うおぉぉぉぉぉ！！」

その煙を切り裂いてシリウスが朱雀を構えて飛び込んできた。炎の魔力を『朱雀』に纏わせ一気に打ち込む。

シリウス「朱雀連牙突！！」

残像をも残す高速の連打最後に踵落とし、鱗を弾き飛ばし肉を叩く。痛みに悲鳴を上げてシリウスに全身を使った体当たりを仕掛ける。

至近距離にいる為に回避が出来ないシリウスは両手をクロスして前方に炎の壁を展開する。
防御壁ごと弾き飛ばされ岩の壁に激突する。

はやて「シリウス君！！」

シリウス「まだまだ～～！！」

全身を魔力が纏い何かを形作る。金色に輝くそれはシリウスを包み頭部に動物の耳の様なものと黄金に輝く一本の尾がついていた。

シリウス「？ｓｔリミッター解除！！いっくぞ～！！」

周囲の待機を震わせるほどの魔力を爆発させ弾丸のように一気にガノトトス亜種の目の前に移動する。

シリウス「紅蓮蹴撃！！」

炎を纏った蹴りを打ち込み仰け反ったガノトトス亜種の懐に更に潜り込む。

シリウス「天狐月光蹴撃！！」

月の光の様な煌きを持った蹴りを幾つもその胴体に打ち込み最後に回転蹴りを加えてその巨体を打ち上げた。それにシグナムが飛び接近する。彼女を撃ち落とす為に不安定な体勢ながらガノトトス亜種が水ブレスを放って来た。

シグナム「叩き斬れ、レヴァンテイン！！カードリッジロード！」

レヴァンテイン［ロードカードリッジ！！］

シグナム「はあああああぁぁぁぁぁ！！紫電一閃！！」

正面から水ブレスとぶつかる。レヴァンテインを持つ手が痺れてくるが気合いを込めた雄たけびを上げて力を込める。水ブレスを切り裂いて行きそのまま通り抜けざまに胴体に斬撃を加える。打ち上がったガノトトス亜種の胴体に大きな斬傷が走る。そして、地面に落ちる。それでもガノトトス亜種は立ち上がり周囲を矢鱈滅多らに水ブレスで破壊する。その中を縫うようにヴィータアイゼンを強く握り締め魔力を通す。

ヴィータ「グラーフアイゼン！！ギガントフォルム！！」

アイゼン［エクスプロージョン！！］

ヴィータ「うおぉぉぉぉぉ！！潰れろぉ、ギガントハンマァァァァ！！」

重量を活かした強烈な打撃がガノトトス亜種の頭を捉えた。
悲鳴を上げて仰け反るその頭部は割れてそこから血が噴水のように噴き出た。

アイネ「響け終焉の笛、ラグナロク、ブレイカァァァ！！」

はやてと同等の質量を持った砲撃がアイネから放たれた。それはガノトトス亜種の巨体を呑み込む。爆煙に包まれた中からガノトトス亜種が姿を現す。ボロボロの体をしているがその体はしっかりと大地に立っており倒れる素振りは見られない。ガノトトス亜種は息を大きく吸い始め、次の瞬間には自身の体と同等のサイズの水流を口から放ってきた。周囲を破壊して進む暴力的なまでの水が迫る。

シリウス「絶望の咆哮よ、大地を裂き、天を貫け！！デアボリックハウリング！！」

シリウスの前に巨大魔法陣が展開されそこから禍々しい黒色の龍が放たれる。
迫る水流を前にそれは口が裂けるほど大きく口を開きそれと激しく衝突する。そこを中心として周囲の地面が吹き飛んで行く。互いに押し合うそれは相殺され弾け飛んだ。だが、シリウスはこれだけで終わらせることはない。既にもう一つの呪文の詠唱を行っている。

シリウス「天を焼く聖なる輝きよ、我に仇成す者を焼き消さん！！

太陽の咆哮、サンバァァァン！！」

ガノトトス亜種の前には巨大な質量を持った光。それが弾け一層激しい光の奔流が眼前にある全てを焼き尽くす。まるで太陽が目の前で吼えるかのように炎が激しく巻き起こった。

ガノトトス亜種「ガアアアァァァアアアアアアアァァァァ…！！」

光りに呑み込まれた者が断末魔の雄たけびを上げる。最後に周囲を破壊する大爆発が起きる。それは肌を焦がすかのような熱を帯びていてはやて達も思わず手で視界を覆う。それが治まって手を退けると目の前には燃え盛る密林が広がっておりその中央にはガノトトス亜種の死体があり、美しかった翡翠の鱗は見事に黒焦げになっていた。

はやて「すっご……」

ヴィータ「てか如何すんだよ！？山火事になるぞ！？」

シリウス「まあ、大丈夫だよ。もう直ぐ……ほら」

はやての頬が濡れる。空を見上げると何時の間にか空を曇天が覆い尽くしていた。そこから雨が降り始めてそれは一気に激しくなり彼女達の火照った体を冷まし、燃え盛る炎をあっという間に消して行

く。

シリウス「うわっ！本降りじゃん！！早く拠点に戻ろう！！」

二頭からシリウスが剥ぎ取りをし終えたのを確認し一行は直ぐに拠点に戻った。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――

暫くして雨が止み村に帰るとそこにはクエストを完了したたなのは達が帰って来ていてはやて達が最後だったらしい。

そして、はやての隣にいた初代リインフォースがいる事になのはとフェイトは驚く。FW陣やロイド達にも彼女の事を話すと驚いた顔をする。そして、初代リインフォースは帰って来たこととこれからはアイネと名乗りこれからは一緒にいられる事を伝えると皆は喜び彼女を迎えた。

シリウス「それで、これから如何するの？」

バルド「俺は古搭に向かおうと思う」

ロイド「あれ？バルドもか？」

バルド「なんだ、ロイドも行く気だったのか？」

カイン「俺達も行こうと思っていた」

なのは「という事は皆行く気だったのかな？」

如何やら全員が古搭に行こうと思っていたらしい。さて、如何したものかと考えているとそこに村長が来た。

村長「それなら丁度頼みたい事があるんだ」

ロイド「なんだ？」

村長「実は古搭に狩りに出かけたハンターから聞いた噂なんだけど、最近あの場所に不穏な空気が流れているんだって。それを調査する為にベテランハンターが何人も送られたらしいんだけど帰ってこなかったんだって」

ヴィータ「何だかすんげぇ不吉な話だな……」

村長「それで数日が経ったらしいんだけどそこから一人だけ帰って来た人がいるんだ。その人の話だと見た事も無いモンスターが現れて襲撃されたらしいんだ。それは彼らでも対処しきれなくて皆散り散りに逃げたらしいよ」

バルド「つまりそいつらの救助をしろってことか？」

村長「ううん、それは専門の人がいるから必要はないよ。今回お願いしたいのはその正体不明のモンスターの調査。出来れば撃退、あわよくば討伐して欲しい。一応此処にそのモンスターに関係するかもしれない書類は渡しておくね」

そう言って村長はその場を去っていった。

ガルド「腐蝕龍、か……」

なのは「名前だけだととても怖そうなの……」

シリウス「腐ってるの？」

ロイド「ゾンビとか何かか？」

ガルド「さあな。で、如何する皆？」

一同を見る。互いの顔を見たあと皆は頷いた。

---

シリウス「という訳で、来たぜ古搭！！」

はやて「誰に言ってるんや？」

シリウス「これを読んで下さっているどくｓ「それ以上は言うな！！」ほぶっ！？」

またもやメタな発言を仕掛けたシリウスを黙らせる。

一同は古搭の前に立っている。そびえ立つその塔はいかにも“何か出ます”という様な不穏な空気を醸し出していた。

フェイト「今度のモンスターは腐蝕龍だっけ？どんなのなの？」

ガルド「正式な名前は腐蝕龍『ギガベロティヌス』。報告によると四本足のモンスターだったらしい」

ロイド「古龍種ってことか！？」

エリオ「古龍種は凄く手強いんでしたっけ？」

バルド「ああ。しかも今回のモンスターは文献にも載っていない未知のモンスターらしい」

シグナム「ふむ正体不明の敵、か……」

なのは「なんか…お化けとかでそうなの……」

シリウス「ヒッヒッヒ、なのは背後には気を付けなよ？振り向いた

瞬間そこには…ウガオオァァァ！！」

なのは「ひぅ！！」

カイン「馬鹿やってないで行くぞ」

シリウス「あだっ！」

なのはを脅かしていたシリウスを軽く叩き一同は古搭に歩を進めた。

中は風化したせいかボロボロで足場も脆く壁からは巨大な木の根が生えていた。

そして、なのは達を迎えたモンスターがいた。

？？？「ウガオァァァァァ！」

ガルド「ガブラスか…」

ガブラス、その小さな体でも飛竜種に属する蛇の様な頭を持ったモンスターだ。その体はツヤツヤとした黒の縞模様の体表が覆っており口から蛇のような鋭い牙が生えている。攻撃パターンは空中からの体当たりや毒液散布、長く細い尻尾を使って叩いてきたりする。またこのモンスターは災いを呼ぶモンスターとしても有名でこれが現れる場所には必ずと言ってもいいほど強力な大型モンスターが出現する。

体力はそれほどないのでなのは達の前には一瞬で撃沈した。しかし、ガブラスがいた事でこの場所には今、強力なモンスターがいる事は間違いないと悟る。周囲を隈なく探すと細い通路を見つける。依頼書に書いてあった遭遇場所へと続く通路だ。そこを慎重に進み抜けると広々とした場所に出た。

コレット「うっ！」

なのは「なにこの臭いは…！？」

まず最初に感じたのは鼻も曲がりそうな強烈な異臭。腐敗した肉が限界までいった様な臭いが周囲に充満していた。そして、辺りに漂うのは死の臭い。異臭が濃すぎる所為か靄となっており視界も悪い。

コレット「皆前に何かあるよ？」

フェイト「なにも見えないよ？」

ロイド「コレットの目は天使の力のお陰で遠くまでよく見えるからな」

これとが見えると言うものを確認する為に歩を進めると、何か柔らかい物を踏みつける感触が伝わって来た。

はやて「へ？」

足元を見ると…そこには、何か腐った様なグロテスクな物があった。

はやて「うぎゃあぁぁぁ！！」

シリウス「うわあ！？ビックリした～」

はやて「シ、シリウス君！！あ、あれはなんや！？」

シリウス「はやてはやて。そう抱き着かれると前が見えないんだけど……」

気付いてハッとして自分の状況を確認する。今自分は、シリウスに正面から飛び付く様な形で抱き着いており彼の顔が自分の胸の間に……

はやて「～～～～っ／／／／／／／／／／／／！！！！」

シリウス「う～む、顔に何やら仄かな膨らみの感触が……」

はやて「ばかーーーーーー！！！」

シリウス「唐竹割り！？」

ヴィータ「二人して何じゃれ合ってんだよ……」

真っ赤になってシリウスに向かって鉄ハリセンを全力で叩き込む。
そんなじゃれ合う二人を放っておきはやてが踏んだと言う物をカインが見る。

カイン「何かの肉か……。随分と腐敗が進んでる」

ロイド「皆こっちに来てくれ！！」

ロイドの声に皆集まる。彼の前には何かの白骨した頭部が転がっていた。その頂点には天をも貫く様な一本の角が生えている。それはとても大きくそれだけでもビルの大きさに匹敵するだろう。その周辺にもそれクラスの骨が幾つも見えた。

ロイド「これなんだ？」

バルド「モンスターの白骨した頭部だろうな。しかし随分と大きいな……」

フェイト「バルド、あそこに何か光る物があるよ」

フェイトの指さす所に、その白骨したモンスターの額に何か光る物が埋め込まれていた。
禍々しい黒い光を放っている。

レイジングハート［マスター、あれから強力な魔力反応を感知しました］

なのは「まさか、ロストギア！？」

？？？「フハハハハハ！！その通り！！」

ロイド「誰だ！！」

突然響いた笑い声に全員が警戒する。その者は白骨したモンスターの頭部にある角の影から姿を現した。

？？？「これこそ我らが集める聖なる宝玉、黒の御珠である！！」

シグナム「貴様、使徒か！！」

ギル「そうだ！！我が名はギル！！第六の使徒なり！！」

その者から発せられるは強大な魔力。肌を突き刺すような感覚がなのは達に襲いかかる。

今此処に、御珠を賭けた戦いが始まろうとしていた……。

## 第四十一話（後書き）

如何でしたか？初代リインフォースさんにはアイネという名前になってもらいました。ホントはアインスとかにしたかったんですがなんか被りそうな気がしたんで…。
もし、こっちの名前の方が良いかもよ？と言う方がいらっしゃったら是非教えて下さい。

ヴィータ「前回、オリジナルモンスター出すとか言ってたのに全然出てねえじゃねえか？」

シリウス「代わりに使徒が最後に出たね～」

次回出す予定ではありますよ？そろそろモンハンワールドの終了のお知らせです。まあ、そろそろっていってもあと４～５話くらいだと思うんですが……。

バルド「駄文重ねすぎなんだよ。もう少しスマートに出来ねえのか？」

……ｏｒｚ

クラウド「あ、落ち込んだ……」

クスン。どうせ駄文ですよ！！こんなダメ作者ですが、これからも読者の皆様宜しくお願いします！！評価をくださった方ありがとうございます。これからも精進して書き続けます。次回、腐蝕龍出現とギルとの戦闘です。お楽しみに！！
では、本日はこれにて！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第四十二話（前書き）

作者のモンハン日記～！！

最近作者は３ｒｄで下位装備で上位モンスターを相手をするという一人ブームにハマっています。いや～楽しいですね。一撃で死亡するかもしれない緊張感を常に感じながら戦う。これこそ狩りだ！！って感じです。
因みに戦績は七勝八敗……負け越してるΣ（ﾟДﾟ；）！？
皆さんもどうですか？

最近、忙しくて中々執筆が進まない！！なんてこった！？

そんなこんなで四十二話です。先に言っておきますが奴は某御大将ではない！！

# 第四十二話

使徒の一人ギル。その男は腕を組みながらなのは達を見下ろす。

そして、はやてやシグナム、ヴィータ、アイネを見た途端にニヤッと笑みを作る。

ギル「ふはははは!!会いたかったぞ兄弟!!」

はやて「な、なんや?シグナムの知り合い?」

シグナム「いえ、私は知りません」

ヴィータ「あたしも知らないぜ?」

ギル「ふふふ、覚えていないのも無理はないな……。まあいい、私の目的はこれだからな」

ギルは白骨したモンスターの額で輝く黒の御珠を抜き取った。

ギル「これで残るは三つか……」

アイネ「ギル……だと?」

はやて「リインフォース？」

あの男の名を聞いた頃からアイネの様子がおかしい。なにか怒りを抑える様に俯き震える手を握りしめる。そして、キッと顔を上げるとそこには憤怒の表情を表している彼女がいた。

アイネ「ギルゥゥゥゥ！！！」

魔力を爆発させギル目掛けてアイネが突然飛び出す。そして、強く握りしめた拳をギル目掛けて叩き込む。

ギル「おっと。……ほお、私を覚えているのか？夜天の管理者よ」

アイネ「忘れるものか！！貴様の所為でどれだけの我等の主達が……！！」

彼女の拳を片手で受け止めるギルは笑っている。彼女の拳を弾き腹に蹴りを打ち込む。

吹っ飛ぶが体勢を立て直し空中に止まる。

ギル「貴様には私は倒せんぞ？だが……此処ではちと不利か……」

そう呟きギルは突然背を向けて飛んで行ってしまった。

アイネ「逃がすか！！」

はやて「リインフォース！！」

シグナム「主！？待って下さい！！」

ヴィータ「お前ら待てよ！！」

フェイト「はやて待って！！」

アイネの後をはやてが追っていきそれを追いかける様にシグナムとヴィータが追う。
それを皆が追おうとしたが突如、地面が激しく振動した。

スバル「わわわわっ！？」

ティアナ「な、何よこの振動は！？」

レイジングハート［巨大な生命反応を感知しました！！］

なのは「まさか……！！」

一同に戦慄が走る。目の前にあった頭骨の目の部分が光りそこには目が現れた。

そして、頭骨と周囲の骨が宙に浮き合体して行く。丸太よりも巨大な四本の足、長い尾、そして体を形成するのは腐肉。ドロドロとした体の皮膚が時折り泡のように盛り上がって弾けると離れているのにも拘らず異臭が強まる。

???［アオアァァァァァガガァァァァ！！！！！！」

フェイト「な、なにあれ！？」

バルド「まさか、あれが……！」

セフィリア「腐蝕龍、ギガベロティヌス！！」

古龍種、腐蝕龍ギガベロティヌス。『死を体現せし者』、『生を破壊する龍』とも言われる。

姿は『ラオシャンロン』に似ていて天をも貫く様な巨大な角を三本生やし、四本足で立つそれは今迄見たモンスター達とは何処か常識を逸していた。皮膚は完全に腐敗しており立っている場所に芽生えていた小さな植物は一瞬で枯れて消えた。体長は３０メートル以上はあり体高も２０メートルはあるだろう。その背には幾つもの突起が生えていてそれは尾の先まで続いていた。足の爪は鉤爪の様になっていて、鋭い牙が並ぶ口からは絶えず腐敗した臭いを出す息を出している。翼は生えておらず顔の周りには何本もの棘が出ていた。

この存在を知る者は今の時代にはもういないが実はこのモンスターは太古のそれもずっとずっと昔の国が最も栄えていた時代に一度人類と雌雄を決したモンスターだ。それも…当時の人類の人口を四分の一にまでしたモンスターである。連日連夜眠れる事のない永遠に

も感じる様な戦闘は半年以上も続き遂にこのモンスターは王国にまで到達しそこで死闘を繰り広げた。結果としてその戦いを人類は征しこのモンスターは倒された。それがこの古搭の立っている場所で此処が嘗て最も栄えた王国の最後の遺産なのだ。それだけではなくミラボレアス亜種、祖なる者『ミラルーツ』とも激闘を繰り広げた事があり実を言うとそれによって傷付いた場所を突いた事によって人類は勝利できたのだ。

ギガベロティヌス「アオガアアァァァァァアアアアアアガアアァァァ！！！」

傷を癒し再び黄泉の国から甦ったギガベロティヌスが咆哮する。周囲を轟かす咆哮はそこにいる者達全員の体に恐怖を植え付ける。そして、ゆっくりとだがなのは達に向けて歩を進める。その度に腐敗した肉を踏む不気味な足音が鳴る。

ロイド「皆気をつけろ！！こいつ、今迄出会ったどのモンスターよりもヤバそうだ！！」

ガルド「ああ、そうだな。こいつはあのイビルジョーを十体同時に相手した時よりも危険だ」

そう言ってパラディンランスを構える。

いや、イビルジョー十体って…そっちもそっちで絶望的な状況だな

……。

全員が其々の武器とデバイスを構える。ギガベロティヌスはそれを見た途端、ノーモーションから突然突進を開始した。

スバル「うわっ！？」

ロイド「速い！？」

その巨体からは想像できない様な速さで来るのに皆驚きつつも回避する。

なのは達の先程までいた場所を駆け抜けると急停止、全身を回転して周囲を薙ぎ払う。

それを上空に飛んで避けたり、姿勢を低くする事で全員が避ける。

フェイトの上空をビル並みの太さを持った尻尾が空を切りながら通り抜けた。

フェイト「フォトンランサー、ファイヤー！！」

魔力弾を複数形成してそれを飛ばす。後ろ脚に着弾する。そこに皮膚が少しばかり弾け飛ぶが全く反応を示さない。それどころか彼女を無視してなのはに向かってその前足を振り下ろして行った。

なのは「くっ！！」

慌ててそこから逃れる。地響きを立ててそれが落ちる。地面が割れ周囲の地面を震動させた。

なのは「ディバインバスター！！」

砲撃魔法を放つ。それは、ギガベロティヌスに直撃し爆発する。だが、それをも物ともしないで悠然と動く。

セフィリア「砲撃すらビクともしないなんて……」

クラウド「戦闘危険度、ＳＳクラスと認定……早急に敵を排除する…」

ティファ「任務了解……」

ＳＥＥＤを発動させ戦闘態勢に入る。

シリウス「……」

ガルド「はやての方が心配なら行けシリウス」

シリウス「いいのかい？俺もいた方が楽でしょ？」

ガルド「問題はない。もしもの時はあれを使えば良いからな」

シリウス「ふ～ん。それじゃあお言葉に甘えさせて貰うよ！！」

シリウスは仲間達にその場を任せてはやて達の後を追うべく飛んで行った。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

ギル「ふむ……ここらでいいだろう」

ある程度飛んだギルはそこで止まり手に持っていたロストギア『黒の御珠』をある場所に転送させる。

無事届いた事を確認したあと振り向く。

アイネ「逃がしはしないぞ！！ギル！！」

ギル「ハッ！！私に挑むとは些か無謀なんじゃないか？昔も挑んで私に負けただろう」

アイネ「昔の事など……！！」

はやて「リインフォース！！」

そこにはやて達も追いつく。

ギル「夜天の書を守りし騎士に……その主も一緒か。フハハハ！！この時を待っていたぞ兄弟！！」

はやて「夜天の書を知ってる！？アンタは何もんや！！」

アイネ「ギル…。嘗て私達が仕えた元主で……私達を闇の書のプログラムに書き換えた張本人！！」

はやて「な…ん…やて！？」

シグナム「では、私達の過去の記憶が無いのは……！！」

ヴィータ「目の前にいるふざけた野郎の所為か！！」

過去の自分達の記憶が全くないのは全部目の前にいる男がプログラムを書き換えた所為でそれによって毎回転生する度に記憶が消されていた事を初めて知った。そして、自分達の使える主達は皆、闇の書となった夜天の書によって消え、目の前の男の糧となった事もアイネから聞かされた。

ギル「フハハハハ！！いやはや会いたかったぞヴォルケンリッター、夜天の管理者。貴様等がもがき苦しむ様を見るのは痛快だった。そして、お初にお目にかかるな？現夜天の主、八神はやてよ！！」

はやて「アンタが…アンタが…リインフォースを、皆を苦しめて来た元凶なんやな……！！」

ギル「そうだ！！お前も感じただろう。あの圧倒的なまでの力を！！どうだ？素晴らしかったろう！？」

はやて「ふざけんな…ふざけるんやない！！アンタのそんな下らない私利私欲のためにリインフォース達がどれだけ苦しんだと思ってるんや！！」

ギル「ハッ！！所詮はそいつらは唯のプログラム。如何なろうと私の知った事ではない！！我が力が高まるのならそれを最大限に利用したまでだ！！」

アイネ「もういい……貴様の戯言に付き合う気はない。今此処で貴様を倒す！！」

シグナム「手を貸すぞ。アイネ」

ヴィータ「あんなくそったれをこのままにしておけるか。アタシ等が倒す！！」

ギル「来るか！ならば見せて見ろ！！我が力の糧となる者よ！！」

アイネが一気に突撃し拳を構え打ち込む。

アイネ「おおおおおぉぉぉぉぉぉ！！」

ギル「正面から来るとは馬鹿め！！」

それを弾きがら空きとなった胴に蹴りを入れて彼女を吹っ飛ばす。
そこにアイネの作った隙を逃さずシグナムが肉薄する。

シグナム「悪いが一撃で仕留める！！紫電一閃！！！」

明らかに回避は不可能。捉えた！！シグナムは確信していた。…だが、

――ガキィィィン！！――

シグナム「なにっ！？」

ギル「フハハハハ！！これが紫電一閃と言うものか！！」

その一撃はギルの手に掴まれた事で止められていた。そして、シグナムも弾かれて飛ばされる。高笑いしているギルの横にヴィータがアイゼンを構えて飛び掛かる。

ヴィータ「アイゼン！！ラケーテンハンマー！！」

ギル「ならば、ラケーテンハンマァァァ！！！！」

ギルのもう一つの手にハンマーが出現する。それを振るい、ヴィータのアイゼンにぶつけるとヴィータが弾かれて軽く後方に後退させられた。

ヴィータ「なっ！？あたしの魔法を！？」

ギル「フハハハハハ！！この闇の書凄いよ！！受ければ受ける程、力が湧き上がる！！さあ、もっと打ってこいやあああああぁぁぁぁぁぁ！！！！」

シグナム「これは……！？」

ヴィータ「マジかよ……！？」

ギルを中心に出現するのはベルカ式魔法陣とミッド式の魔法陣だった。それが現れては消え現れては消えを繰り返し、その度にギルの最大魔力量が上昇して行くのが感じられた。

はやて「響け終焉の笛、ラグナロクブレイカー！！！！」

アイネ「この世から消えなさい！！ラグナロクブレイカー！！！！」

そこに二人の最強の砲撃が同時に放たれる。それは一つになり巨大

な砲撃となってギルを呑み込み周囲の空気を震撼させるほどの爆発が起きた。やったか…？二人は警戒を解かずにその煙の向こうを見据える。

ギル「フフフ、それでいい！！このパワー！！この漲る力！！！我が世の春が来たぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

しかし、煙の向こうには無傷で宙に浮いているギルがいた。それどころか魔力の量が尋常ではない程膨れ上がっておりそれによって彼の周囲の空間が揺らぐほどだった。ギルが一瞬で消えるとシグナムの目の前に瞬時に現れた。

ギル「遅いんだよ！！」

シグナム「くっ！！」

ギルの手にはレヴァンテインを模したかのような剣が握られておりそれがシグナムの首に迫る。咄嗟に受け止めるシグナム。先程よりも上がった力に驚愕する。あっさりと弾き飛ばされた。

ヴィータ「うおりゃあぁぁぁぁぁ！！！」

アイネ「はあああぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ギル「フッ、馬鹿め！！」

挟み撃ちにする様にヴィータが、アイネが同時に殴りかかるが、ヴィータのアイゼンをギルはアイゼンを模したハンマーで叩き弾き飛ばし、アイネの拳を体を少し右にずらす事で避けてがら空きになった胴に自身の拳を叩き込みアイネを吹き飛ばした。

ギル「楽しいな！！アハハハハ！！！！」

はやて「来(こ)よ、白銀(はくぎん)の風、天よりそそぐ矢羽となれ、当たれ！！フレースヴェルグ！！！」

ギル「ハッ！！当る訳ねえだろ！！」

降り注ぐ弾幕がギルに迫る。だが、ギルはどういう魔法を使ったのか体を分裂させて腕、足、胴、頭の四つに分けてその弾幕を避けきったのだ。そして、はやて達よりも高い所まで飛んでいきそこで合体して元の姿に戻った。

ギル「フフフ、貴様等のお陰でこの闇の書は力を取り戻した。これで本能の赴くままに戦う事が出来る！！さあ、貴様等の力、我に見せて見ろぉぉぉぉぉ！！」

魔力を放出して周囲に展開しそれがミッド式やベルカ式の魔法陣に変わる。
それははやて達を完全に包囲する程の巨大な物だった。

はやて「う、うそやろ……！？」

リイン《はやてちゃん！！気をしっかり持ってです～！！》

アイネ「主！！」

リインとアイネの声に我に返り頭を振って沈み掛けた思考を消す。
いかに不利な状況でも今の自分たちなら乗り越えれる！！そう強い意志を持って目の前にいる倒すべき敵を見据える。

はやて「うちも負ける訳にはいかへん！！皆の主として、皆を守る家族として、アンタを倒す！！」

ギル「やってみろ！！未だ力を使いこなせぬ夜天の主よ！！」

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

はやて達がギルと戦闘を開始し始めた時、なのは達の方は腐蝕龍に苦戦を強いられていた。

セフィリア「燃えろ、イラプション！！」

ガルド「氷刃、アイススパイン！！」

セフィリアが地中より溶岩を噴出させガルドが上空より氷塊を降らす。
腐蝕龍の体を焼き焦がし、氷漬けにするもまるで効いていない様だ。

カイン「雷鳴よ、刃となりて敵を貫け！サンダーブレード！！」

コレット「聖なる翼よ、此処に集えて神の御心を示さん、エンジェルフェザー！！」

カインの放つ雷剣がその体を穿ち内部から焼き、コレットが光の輪を飛ばし聖なる力でその体を切り裂き焼くがそれにも全く反応を示さない。

バルド「まるで効いてねえな……」

エリオ「ホントにダメージが通っているんでしょうか？」

クラウド「現状では不明だ。故に戦闘を継続する……」

クラウドが空を舞い正面に回り込み干将・莫邪を構える。

クラウド「バスターモード、くらえ！！」

銃口から大出力の砲撃が放たれる。閃光がギガベロティヌスの頭を包み込んだ。爆発が起きて煙が上がる。

ギガベロティヌス［アオガアァァァオオオォォォォォ！！！］

しかしその煙を突き破って姿を現した。皮膚が所々焼け爛れているのに痛みを感じていないかのように見える。そのギガベロティヌスは口から放射状の黒い液状の何かを放って来た。ガノトトスの水ブレスを数倍の大きさにした様な巨大なブレスがクラウドに迫る。

クラウド「っ！！」

フェイト「危ない！！」

クラウドは驚きで目を見開く。咄嗟の反応でその攻撃を避けるが左の翼に掠める程度に被弾してしまった。

すると、

――ジュ～～――

クラウド「左翼に損傷を確認。ダメージ指数３０パーセント。フェ

ザーファンネルと背甲をパージする」

そこから急速に翼が腐蝕し始める。クラウドはフェザーファンネルを全て展開し背にある装甲をパージする。複数のファンネルが腐蝕によって機能が停止し撃墜された。

ティアナ「クラウドさん!!」

クラウド「任務継続には問題はない…。だが、全員気をつけろ。あのブレス、くらえばただでは済まないみたいだ」

ナノスキンで出来ているファンネルが再構築し始めるもその再生速度が遅い。
残っている二十三基を周囲に展開しギガベロティヌスを攻撃する。ティファもそこにドラグーンを射出してビームを撃ちまくる。煩わしいと感じたのかギガベロティヌスは周囲を薙ぎ払うかのようにその場で回転、尻尾で吹き飛ばそうとして来た。

エリオ「キャロ!!援護して!!」

キャロ「う、うん!!猛きその身に、力を与える祈りの光を、ブーストアップ・ストライクパワー!!」

エリオ「ストラーダ!!ソニックムーヴ!!」

ストラーダ［ソニックムーヴ!!］

キャロの強化魔法によってエリオの攻撃力が上がる。そして、エリオが高速移動で一気に距離を詰めてストラーダを振り上げる。

エリオ「はあぁぁぁぁぁぁ!!紫電一閃!!」

一気に振り下ろしその皮膚を切り裂く。だが浅い、それに手応えが感じられなかった。
まるで刀でティッシュを斬る感じだ。何度も斬撃を加えるも結果は同じ。

ストラーダ［マスター!!］

エリオ「どうしたの?ストラーダ?」

相棒の呼びかけにストラーダを見ると魔力刃の所が刃毀れを起こしておりそこから煙が上がっていた。

エリオ「うわ!?ストラーダ、大丈夫!?」

ストラーダ［大丈夫です。しかし、分析しましたがあの皮膚、如何やら触れた対象を徐々に腐食する効果がある様です…］

その間にも魔力刃の腐蝕が進み始めている。

バルド「エリオ！！」

エリオ「父さん！！」

バルドがそこにやって来てケルベロスを振り下ろしストラーダの腐蝕している魔力刃の部分だけを斬り落とした。エリオは魔力を通して新たに魔力刃を形成する。

ケルベロス［へぇ～、相棒。あの皮膚結構厄介みたいだぜ？］

バルド「みたいだな。触れても駄目、ブレスに当っても駄目。…全く面倒くさい敵だ」

エリオ「父さん、ケルベロスさんは大丈夫なんですか？」

ケルベロス［おうよ！！この程度の腐蝕なんて屁の河童だぜ！！］

バルド「一応こいつは魔剣だからな。この位は余裕だろう」

ケルベロス［おい相棒！！一応とはなんだ一応とは！？俺は正真正銘の魔剣だ！！］

バルドの言葉に激しく抗議を上げるケルベロス。それを完全に無視して肩に担ぐ。

バルド「接近するにはあの皮膚を破壊する必要があるな。行くぞ！！ケルベロス！！」

ケルベロス「ヒ～ハ～！！派手に行こうぜ！！」

バルド「威き焔よ汝に触れし者全てを滅さん！エクスプロード！！」

バルドの足元から見た事も無い魔法陣が出現し詠唱する。術が発動すると上空から巨大な火の塊が落ちてきてギガベロティヌスを包み込んだ。肉を焼き焦がす嫌な臭いが立ち込める。煙の中から姿を現す。そこには右足の皮膚がダメージが蓄積し過ぎた所為で吹き飛び骨が剥き出しとなった姿があった。

バルド「一定以上ダメージが蓄積すると剥がれるみたいだな」

ケルベロス「そんじゃ、破壊活動といこうぜぇ！！」

バルドが一気に接近しケルベロスに黒い炎を纏わせ振り下ろす。剣が触れた所が爆発し皮膚を吹き飛ばす。流石にそれには反応を見せたギガベロティヌスはバルドにその鋭利な鉤爪を振るう。それをケルベロスの腹で防御し受け止める。その隙にロイドが魔神剣・双牙を繰り出しその体に衝撃波を打ち込む。

なのは「ディバインバスター！！」

フェイト「トライデントスマッシャー！！」

ギガベロティヌス［ガアアァァァオオアァァァァ！？］

二人の攻撃を受けて初めてギガベロティヌスは明確な反応を見せた。
腐敗した皮膚が周囲に飛び散る。

なのは「効いてるの！！」

フェイト「このまま…！！」

ティアナ「なのはさんフェイトさん待って下さい！！何か様子が変です！？」

今まで散々いい様に攻撃を受けていたギガベロティヌスの様子が変わった。先程までは肌に突き刺すような異臭だけを感じていたがそれだけでなく今度は非常に重い殺気がなのは達にのしかかって来た。

ギガベロティヌス［アガアァァァァオアァァァァ！！！！！］

フェイト「きゃあああああ！！」

突然二本足で直立したと思ったら胸部が突然開きそこから周囲を破壊する程の強烈な咆哮が出て来た。

それをくらい衝撃波で全員が吹き飛ばされた。

スバル「うあ～、頭がクラクラするよ～……」

ティアナ「なんて声よ…！！結構離れていたのに吹き飛ばされるなんて！？」

ロイド「いって～、皆大丈夫か！？」

ガルド「こっちはなんとか大丈夫だ！！」

全員の無事を確認する。そして、前方にいるギガベロティヌスを見据える。先程まで生気を感じられない瞳をしていたが今では深い闇のように真黒の目は怒りでギラギラ輝かせている。

セフィリア「怒り状態になってるね……」

ティファ「各員は次の攻撃に警戒せよ……」

ギガベロティヌスは徐(おもむろ)に足を上げてそれを地面に叩き下ろす。すると、目の前の地面から衝撃波が発生してなのは達目掛けて迫って来た。慌てて回避行動を取る。衝撃波をやり過ごし反撃に移ろうとしたフェイトにギガベロティヌスはブレスを吐いて来る。ソニックムーヴで回避してハーケンセイバーを放ちドロドロの体表を切り裂いた。

ギガベロティヌスは再び直立しそこからブレスを地面に向かって吐いた。そのまま周囲を薙ぎ払う動作に移る。地上にいたティアナはスバルのウィングロードに乗る事で回避し、ロイド、コレットは天使の羽を出して空を飛ぶ。ガルドとセフィリアは飛行魔術を使いそれを回避した。
地面は見事に汚泥で覆われてしまい足場が少なくなってしまった。

スバル「足場が……！！」

紫色に染まった足場は不気味な蒸気を上げている。その上を悠然と踏むギガベロティヌスの体を周囲の霧と同じ色の蒸気が包み込み姿を消してしまった。

ティアナ「消えた！？」

コレット「足音も聞こえないよ～！？」

カイン「まさか、あの巨体で足音を殺せるのか！？」

コレットの聴覚ですら捉えられない事にロイド達も驚愕していた。
無音の空間に全身が鳥肌になる。

周囲を警戒するフェイト。キャロはその背後に揺らめく影が見えた。

キャロ「お母さん後ろ！！」

フェイト「えっ！？」

キャロの声に振り向くと霧を破って何かが鞭のようにしなってきた。
回避も防御も間に合わずフェイトはその鞭に腹部を強打された。

フェイト「ぐはっ！！」

エリオ「母さん！！」

なのは「フェイトちゃん！！」

弾かれたフェイトは弾丸の様に吹き飛ばされ岩の壁に激突した。崩れ落ちるフェイトをバルドが急いで救助し一度戦線を離脱する。

ロイド「くそっ！！コレット！！」

コレット「うん！！その御名の下、この穢れた魂に裁きの光を振らせたまえ、裁きの光よ、ジャッジメント！！」

聖なる裁きの光が周囲に降り注ぐ。あれ程の巨体だ動いていれば確実に当る筈だ。
……だが、その光の洗礼は当らなかった。

ティアナ「嘘でしょ!?あれが当らないなんて!?」

ロイド「コレット!!」

ロイドが何かに気付いたらしくコレットの前に飛び剣を構える。すると目の前の濃霧を破って鞭の様な物体が迫って来た。それをロイドが剣で弾く。そこに更に複数の鞭が襲いかかって来てロイドは何度か斬り伏せたあとコレットを抱きかかえて回避する。避けられたのを悟りその鞭、というよりは触手は霧の向こうに消えた。

ロイド「なのは!!今だ!!」

なのは「う、うん!!ディバイン、バスタァァァァ!!」

霧の向こうに向かって砲撃を放った。霧を突き破ってそれは飛んでいき何かに衝突して爆発。周囲の霧を吹き飛ばした。そこには……、

ギガベロティヌス［アガアアァァァァオォォォォォ!!?］

ロイド「やっぱりそうか……」

コレット「ロイド、どゆことなの?」

ロイド「あいつは、最初っから動いてなかったんだ。そして、フェイトを攻撃したのが、あれだ……」

ロイドの視線の先にはギガベロティヌスの肩辺りから生えている触手の様な物があった。

カイン「そうか。あれを伸ばしてフェイトの背後に回って攻撃したのか」

なのは「えっ!?でもフェイトちゃんのいたところはかなり離れた所にいたよ!?」

ガルド「伸縮自在という事か……」

予想以上に厄介な存在に改めてなのは達は気を引き締める事にした。そこに体力を回復したフェイトとバルドが復帰して一同は再び戦闘を再開した。

---

ギガベロティヌスに苦戦を強いられているなのは達。その一方、はやて達も……

ギル「フハハハハハ！！どうした！？もう終わりかぁぁぁぁ！！」

ヴィータ「くそ……こいつ」

シグナム「強い……！！」

自分達の魔法が次々と分析され、吸収されそれによって逆に追い詰められていた。

ギル「ヴォルケンリッターも全員揃わなければ唯の烏合の衆！！雑魚が、消え失せろ！！」

ギルの魔力が跳ね上がる。それと同時にその周囲にある魔法陣が光り輝く。

ギル「夜天の力ってのはぁ……こう使うんだよぉぉぉ！！！破壊の光、フレースヴェルグ・アロウ！！！」

上空から降り注ぐ閃光。しかし、その量たるやはやての今使うフレースヴェルグを遥かに凌ぐ数だった。

シグナム「なっ！？ぐあああああぁぁぁぁぁぁ！！！」

ヴィータ「うあぁぁぁぁぁぁぁ！！」

圧倒的な弾幕が周囲を破壊し尽くす。それを前に回避も出来ず二人は直撃してしまい地面に叩き落とされた。

はやて「ヴィータ！！シグナム！！」

アイネ「くっ！おのれぇ！！」

ギル「管理者！！お前も落ちろ！！」

アイネが高速で接近して高速で蹴りや拳を入れるもギルはそれを体を少しそらすだけで余裕を持って避けてしまう。そして、アイネの拳を捕まえニヤニヤと笑う。

ギル「お前は中々気が強くて気にいってたんだがな？どうだ？もう一度我の下に来るか？」

アイネ「戯言を！！誰が貴様の様な者に……！！」

それに嫌悪の顔を見せると同時に身を捻って蹴りを頭に向かって放つ。それを空いた手で受け止め逆にアイネの腹に蹴りを入れて吹き飛ばす。だが、アイネとてやられっぱなしではいない。

アイネ「遠き地にて、闇に沈め！！デアボリック・エミッション！！」

ギル「むっ！！うおぉぉぉぉぉぉ！？」

ギルの目の前に現れたスフィアを中心に広範囲を呑み込む闇が広がった。

アイネ「幾ら貴様が強くとも、これならば……！！」

確実に仕留めたと思っていた。だが……

ギル「なめんじゃあ……ねえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」

その空間を破壊してギルが姿を現した。無傷のままで…。
そして、一瞬で消え次の瞬間には右手にスフィアを掴んでアイネの目の前にいた。

はやて「リインフォース！！」

ギル「もう少し…骨のある奴だと思ってたんだがなあ？」

アイネ「っ！！！」

ギル「吹き飛べぇ!!破滅の洗礼(ルインドバニッシュメント)!!」

驚愕と恐怖の色に染まったアイネの腹に手に持ったスフィアを押し当てた。次の瞬間、アイネを中心に巨大な竜巻が起き、彼女を切り裂く、次に炎が巻き起こり焦がし、最後に大爆発を起こした。アイネは地面に受け身も取れずに落ちる。

アイネ「がっ……あぐっ……あぁ…!!」

シグナム「アイネ!!」

ヴィータ「しっかりしろ!!」

直ぐに同じく地面に倒れていた二人が体に鞭を打って彼女の傍に歩み寄って抱き起こす。彼女は全身を切られてそこから出血しており更に火傷も思わず目を逸らしたくなるほど酷かった。苦痛に顔を歪め咳き込む度に口からは血を吐きだした。

ギル「はっ!!手を抜いたのにそれでお終いとは相手にならんなぁ。貴様は俺を楽しませてくれよ?現夜天の主よ?」

はやて「お前ぇぇぇぇぇぇ!!!!」

アイネをボロボロにしたギルに怒りを爆発させ一気に詰め寄りデバイスを叩きつける。

それを腕で受け止めた。

はやて「うちは…うちは…絶対に、アンタを……！！」

ギル「倒すってか？それなら…やってみろぉぉぉぉ！！！！！」

杖を弾き回し蹴りを放つ。それを体を逸らして避ける。距離を開けて魔法を唱える。

はやて「響け終焉の笛、ラグナロクブレイカァァァァァ！」

普段の彼女からは想像もつかない程の質量をもってその砲撃はギルを呑み込まんとする。

ギル「それが本気か…。残念だが、これで終わりだ！！」

ギルを中心に正三角形の魔法陣が二つ出現した。

ギル「見せてやるよ、我が力を！！響け、終末の叫淵！！ツインラグナロクブレイカァァァァァ！！！」

放たれるのは絶望の一撃。それははやての砲撃とぶつかる。はやて

の砲撃は一瞬だけだが拮抗したがあっという間にその光に呑み込まれてしまった。驚愕に目を見開く。

シグナム「あるじぃぃぃ！！！」

ヴィータ「はやてえぇぇぇぇ！！！」

はやての耳に家族の悲痛な声が聞こえたがそれも一瞬、はやてはギルの放った巨大な砲撃に呑み込まれてしまった。砲撃が消えると爆炎の中からはやてが地面に落ちた。バリアジャケットが所々破れ、翼も全身もボロボロの姿だった。全身が鉛のように重くなり殆ど動かせず、そして、リインともユニゾンが強制的に解除された。

リイン「は…やて……ちゃん…」

はやて「う……うあぁぁ……！！」

リインは必死に立とうとするも力が入らずに地面に倒れる。はやても立ち上がる程の力も残っておらず喘ぐだけである。それでも震える手で何とか立ち上がろうとするも出来ないでいた。

ギル「現夜天の主もこの程度か……。まあいいだろう」

そのはやての前にギルが降り立ちはやてを見下す。はやてもギルを

見上げるようにしながらも睨みつける。その瞳を見てギルもニヤッと笑う。

ギル「その強い目、いいねえ。気に入った。お前、私の女になれ。そうすれば、そこに転がっている雑魚も助けてやらんでもないぞ?」

はやて「だ、誰が…あんたなんかに…!!ぐはっ!!」

ギル「言葉に気を付けな。お前は私に負けたんだよ!!」

拒否の言葉を述べたはやての腹を蹴り飛ばしそう言う。そして、彼女の首を片手で掴み締める。

はやて「ぐっ……かはっ…!!」

ギル「今私の気分次第で此処にいる全員の命が掛かってんのが分かんねえのか?なんだったら今お前の目の前でお前の家族を一人ずつ消してやっても良いんだぜ?」

空いた手を近くで倒れているリインに向ける。ギルの背後には無数のベルカ式とミッド式の魔法が展開される。

はやて「や…やめ……て!!」

ギル「なら、答えは見えているよなあ?」

そう言ってニヤリと笑う。それを見てはやては悔しさのあまり涙が滲んだ。
こんな男に家族を苦しめられて、そして手も足も出なかったのが悔しかった。呼吸のままならない状態だがそれでもその答えを出す為に口を開き声を出そうとしたその時だ……。

シリウス「あまり、はやてにその汚い手で触れないで欲しいな…？」

その声と共にリインに向けていたギルの手を弾き上げるシリウスがそこに何時の間にかいた。

ギル「なにっ！？」

シリウス「失せろ……」

そのままギルに裏拳をかます。それがギルの顔面にめり込み錐揉みしながらギルが瓦礫の山に吹っ飛んだ。ギルの手が離れて落ちるはやてをシリウスが抱き上げる。勿論、お姫様だっこで。

はやて「シリ…ウス君……？」

シリウス「よく頑張ったね、はやて」

そう言って笑顔を向ける。それを見た途端、はやての目から涙が溢れだしそれは止まる事は無かった。そのまま嗚咽を漏らす。

はやて「うちは……うちは……！！」

シリウス「今は何も言わなくても良いよ。ゆっくり休んで」

そう言って歩き出しリインも持ち上げシグナム達の下に連れて行った。
そこではやてとリインを降ろす。

シグナム「シリウス……」

シリウス「そこではやてを守っていてくれ。今からあいつをボコって来るよ」

何時もの飄々とした態度で言うシリウス。だが、その背には嘗てない程の怒気が現れていた。それにシグナムも思わず息を呑み無言で頷いてしまったがそれを分かったのかシリウスは歩き出す。瓦礫の山に埋もれていたギルが瓦礫を吹き飛ばして立ち上がる。怪我らしい怪我はない。

ギル「ほお、私に気付かれずに背後を取るとは中々やるな？」

シリウス「そんなことないさ～。ただの偶然さ。けど、あまり調子に乗るなよ塵滓が……」

シリウスの存在が爆発的に膨れ上がる。魔力が周囲に溢れだす程でそれは彼の周囲を包み形作る。黄金に輝くその魔力は狐の耳の様なものと六本の尾を形作った。その尾は魔力で出来ているのにとても美しい金色に輝いていた。

シリウス「俺が此処まで本気で怒るのも何時以来かな?まあ、そんな事如何でもいいや。お前、光栄に思った方が良いよ?この力を見せるのはそうそうないんだからね……」

口から青い炎が溢れる。彼の周囲にも同じ色の火の玉の様なものが出現し浮遊している。彼を中心に地面が振動する。シグナムもヴィータもその魔力量を感じて背筋が凍りついた。今の彼はギルの魔力量を僅かながら上回っているのだ。ギルもそれを感じるのか驚愕に満ちた表情を見せていた。

ギル「貴様、『時の英雄』の一人か!?よもや今の我が力を僅かばかり上回るとは……貴様は何者だ!!」

シリウス「別に…。自称、ただの現夜天の主のナイトさ。さあ、掛かってきなよ夜天を穢しし愚かな者よ……」

不敵な、不気味なそれでいて恐怖を煽る様な笑みを見せてシリウス

は『神威』を構えて手をクイクイと動かして挑発するのだった。

---

そのシリウス達を観戦する者達がいる。

エリス「クスクス、出番を取られちゃったねジーク？」

ジーク「そうだな」

クラレンス「どうするの？」

ジーク「時間がきたら奴を連れて帰る。それだけだ……」

エリス「それまでは、観戦だね～クスクス♪」

クラレンス「それじゃあ、お茶にしようよ♪」

ジーク、エリスはその場で手頃な岩に腰掛け紅茶を出してのんびりと寛ぎ、ジークは戦いを静かに見ているのだった。

# 第四十二話（後書き）

どうですか？ギルの使う魔法ははやての今使っているベルカ式魔法の強化版です。そして、アイネだけはギルの事を記憶していて過去に闇の書に改造されそうだったのを止めようとして戦って負けたという設定になっています。勿論それはオリジナル設定ですよ。
そして、やっと出ましたオリジナルモンスター。その身に纏う腐敗した体は非常に強力な腐食効果を持っていて魔力刃すら溶かします。ぶっちゃけ何でこんなの出したんだろう……？

ロイド「こいつの説明は？」

次回の更新辺りに出そうかと思います。モンハン的にはクエストの種類は大討伐クエストの部類に入ります。大きさ的にそれほどでかくもないのにね……。
次回もこいつが色々と引っかき回すぜ！！

？？？「おい作者……」

おや？貴方は誰ですか？

？？？「ギルと一緒に行くって言ってた？？？だよ！！俺は何時になったら出る予定なんだよ！？まさか、忘れてんじゃねえだろうな！？」

……ああ！！すっかり忘れてた！！じゃあ、君の出番はカットで！！…たぶん

？？？「えええええええええぇぇぇぇぇぇ！？」

さあ！！次回の更新はなるべく早く出そうと頑張りますので読者の皆様これからも宜しくお願いします！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

## 第四十三話（前書き）

今回は作者のモンハン日記をやめて作者の作ったオリジナルモンスター、腐蝕龍『ギガベロティヌス』の詳細をば。

少し変なところもあるかもしれませんがご容赦ください。

オリジナルモンスター　腐蝕龍　ギガベロティヌス

別名　死を体現せし者、生を破壊する者

全長　３７メートル

体高　２５メートル

非常に好戦的なモンスターで姿はラオシャンロンに似ているが全身が腐敗した肉体に覆われそれが鎧となって近接武器や遠距離武器から身を守る。腐蝕が剥がれていくとその中に収納されている翼が出てきて飛行できるようになる。非常に高い攻撃力と防御力を持ち合わせており動いた足や尻尾に触れると吹っ飛ばされる。古龍種特有の特殊な風圧はないが腐肉が強酸性の為、近接武器で攻撃すると切れ味が通常の二倍の速度で落ち、銃弾の威力が低下する。
遠距離攻撃はブレスと肩の部位破壊をすると発生する伸縮自在の触手が武器。特にブレスは腐食性の高い毒ブレス、雷撃、熱線、氷塊、岩塊の５種類を使用してきて
どれも同じ攻撃モーションの為、攻撃が読みにくい。毒ブレスは当たると猛毒と防御力半減、切れ味低下になり雷撃は麻痺、気絶確立

倍加で熱線は燃焼、氷塊は雪ダルマとスタミナ高速低下、岩塊は気絶と泥ダルマの状態に陥るので避けなければならない。更に周囲の霧に紛れて姿を消したり、胸部の肋骨を開放し特殊な内臓器官を使って周囲を攻撃する『超大咆哮』を使う。この攻撃の射程はティガレックス亜種の『大咆哮』の凡そ3倍の距離まで届く。

ダメージが溜まっていくと身を守る腐肉の鎧がなくなっていき最後には骨格だけの姿になる。弱点は肋骨に守られている内臓器官だが普段は黒い霧に守られていて攻撃が当たらない。体勢を崩させれば霧は消えるので近接武器が効果的になる。骨格時は防御力が高くなっているので注意が必要。時々地面に体を押し付けてハンターの足元に自身の骨を伸ばして突き上げてくるので注意が必要。ダメージが蓄積すると他の古龍種を召喚してくる。瀕死の状態になると自ら生命活動を停止させ仮死状態になって敵をやり過ごす。その死んだフリは『ゲリョス』よりも完璧とされハンターすらクエストを終えたと勘違いして帰るほどだ。

怒り状態になりやすい

怒り状態時

攻撃力　特大

防御力　大

俊敏性　中

弱点属性　◎→○→△→▲→×の順にダメージ補正

腐蝕状態時

火属性◎

水属性×

雷属性▲

氷属性▲

龍属性○

骨格状態時

火属性×

水属性▲

雷属性◎

氷属性○

龍属性×

肉質

腐蝕状態時

切断系武器　○

打撃武器　△

遠距離武器　▲

爆弾　○

骨格状態時

切断系武器　▲

打撃系武器　○

遠距離武器　▲

爆弾　○

状態異常の耐久値　×→▲→△→○の順（×が一番耐性が高い）

毒　×

麻痺　▲

睡眠　▲

気絶　▲

攻撃パターン　危険度　星の数が多い程危険（最大で五つ）　威力　特大→大→中→小の順

腐蝕状態時

突進　☆☆　大

突進（ノーモーション版）☆☆☆☆　特大

高速回転尻尾攻撃　☆☆☆　大

ボディプレス　☆☆　特大

ブレス　☆☆☆☆☆　大

ブレス2（立ち上がって横薙ぎに吐く）☆☆☆☆　中

触手　☆☆☆　中

足振り下ろし　☆☆　大

衝撃波（足振り下ろし時に発生）☆☆☆　中

超大咆哮　☆☆☆☆☆　特大

古龍招来　☆☆☆☆☆　なし

骨格状態時

突進　☆☆　大

突進（ノーモーション版）☆☆☆☆　中

高速回転尻尾攻撃　☆☆☆　中

ブレス　☆☆☆☆☆　特大

触手　☆☆☆　小

超大咆哮　☆☆☆☆☆　特大

足振り下ろし　☆☆　大

衝撃波（足振り下ろし時に発生）☆☆☆☆　中

ボディプレス（追尾）　☆☆☆☆☆　特大

骨突き上げ　☆☆☆☆☆　特大

古龍招来　☆☆☆☆☆　なし

部位破壊

頭部四回

片目→左角→右角→中央の角の順

足四回（それぞれを攻撃する）

爪

肋骨三回

防具

剣士系

腐蝕系防具　腐岱天【嵐丸】　スロット数　１０

属性防御

火耐性－２５

水耐性１０

氷耐性１５

雷耐性－１５

龍耐性－２５

発動スキル

業物

酸性（接触したモンスターに極小ダメージ）

状態異常強化

怒り

防御－３０

ガンナー防具

骨系防具　腐翔天【皇牙】　スロット数　１２

属性防御

火属性１５

水耐性１０

氷耐性－１０

雷耐性－５

龍耐性２５

発動スキル

根性

擬態　（隠密の強化版）

最大装填数強化

怒り

装填速度－１

……こんな感じです。能力が変だ……ｏｒｚ

まあ、そこは華麗にスルーして、では、本編をどうぞ！！

# 第四十三話

クエスト名　『決戦、腐蝕龍ギガベロティヌス』

参加メンバー

高町なのは
カイン・レオンハルト
スバル・ナカジマ
ティアナ・ランスター
フェイト・T・ハラオウン
エリオ・モンディアル
キャロ・ル・ルシエ
バルド
ロイド・アーヴィング
コレット・ブルーネル
セフィリア・ドム・バロム
ガルド・ドム・バロム
クラウド・ケリオン
ティファ・フューストン

場所　古搭　秘境最奥

出現モンスター　ギガベロティヌス

狩り場の状況　超不安定

ギガベロティヌス［アガアオオアアアァァァァァ！！！］

肩から生えている無数の触手がなのは達に向けて伸びて来る。
それを散開して回避するもその後を追って猛スピードで追いかけて来る。

クラウド「この程度……！！」

ティファ「……破壊する」

クラウドとティファは自身に迫る複数の触手に向けてビームを放つ。
幾つかを破壊するがそれでも爆炎の中を突き破って幾つかが迫って来る。
それを身を捻って回避しビームサーベルを持ちそれを斬り伏せる。
ファンネルとドラグーンを飛ばし本体に殺到させる。

なのは「アクセルシューター、シュート！！」

なのはは迫る触手を魔力弾を複数飛ばして破壊する。そして、本体に向けてディバインバスターを放つ。霧を貫いてギガベロティヌスに直撃、腐敗した皮膚を焼く。

徐々にだがギガベロティヌスの腐敗した肉体が破壊されてはいるが……。

なのは（骨になっても…動けるの！？）

ギガベロティヌスはなんと骨が見えているのにも拘らず暴れている。神経がどうやって通っているのか今では骨だけになっている右前脚を動かしている。

常識を逸したそのモンスターになのはは吐き気を堪えながらも対峙する。相手は古龍種、あの火山で出会ったテオ・テスカトルと同じ種。その中でも非常に危険な存在。ギガベロティヌスが口が裂けるほど大きく口を開く。あの腐敗したブレスを吐くのか？油断なくなのはも避ける為に意識を集中させる。だが、そこから岩塊が扇状に放たれた。

なのは「えっ！？」

ブレスではなく岩石を飛ばしてきたのに一瞬だけ驚く。

直ぐにハッとなって目の前に迫る巨大な岩を砲撃で破壊する。崩れる岩石の向こうでギガベロティヌスが此方に向かってブレスを吐いていた。

なのは「っ！！！！」

キャロ「なのはさん！！」

回避が間に合わないと判断したなのははプロテクションを展開、ブレスを受け止めるも張ったプロテクションはジュ～と音を立てて端から融解し始めていた。このままでは防御魔法が崩壊してしまう！！

ガルド「氷塵爆槍！！」

そこにガルドが氷塊を槍状に作り出しそれを飛ばす。それはギガベロティヌスの頭部に突き刺さりそこで爆発、その周辺も氷漬けにする。流石に頭部への攻撃は反応を示しブレスを止めてガルド目掛けて突進をする。それをガルドは盾を前に構えてその身で突進を受け止める。

ガルド「今だ！！」

セフィリア「天に集いし焔よ、恐怖と共に降り注げ！フィアフルフレア！！」

コレット「冥界へと導く破邪の煌きよ、我が声に耳を傾けたまえ、聖なる祈り永久に紡がれん光あれ！グランドクロス！！」

セフィリアが上空から巨大な炎塊を幾つも落し、コレットが聖なる浄化の十字架で焦がした。
それによって触手も焼き尽くされその身も焼かれた。悲鳴を上げてのた打ち回るギガベロティヌス。やがて、動きが止まった。

エリオ「やったんでしょうか？」

ティアナ「だといいんだけどね」

フリード「きゅく～！！」

キャロ「フリードが怯えている……？」

フリードの背に乗っているキャロは様子のおかしさに気が付きギガベロティヌスを見る。

そして、何かに気付いて慌てて皆に伝える。

キャロ「皆さん！！そこから急いで逃げて！！」

その声に一同は咄嗟にその場から飛び退くとそれと同時に全員の足元に何かが地中を突き破って飛び出した。

クラウド「これは……！？」

スバル「骨！？」

そびえ立つ巨大な何かは骨だった。それが地面に潜って消える。そして、ギガベロティヌスが再び立ち上がった。

ロイド「殆ど骨しかないのに動いてる!?」

セフィリア「それだけじゃないよ!!あのモンスター、背中から翼が生えてる!?」

ギガベロティヌス［アガアオォォォォォォォォ!!!］

巨大なバインドボイスに全員がその場に縫いつけられる。その間にギガベロティヌスは直立する。背中にあった翼が開き口からは白い息が吐き出される。そして、肋骨部分が開くとそこからまたもや大咆哮が起き周囲の地面を破壊する程の衝撃波が広がりそれによってなのは達が吹き飛ばされる。

バルド「こいつ、まさか今のは自身の身を守る鎧だったのか!?」

フェイト「それじゃあ、あれが本体なの!?」

最早骨格だけのその姿。唯一残っているのは飛ぶ為にあるだろう翼膜だけだ。

ギガベロティヌスはその翼を動かして宙に浮く。その瞳はギラギラと輝いておりその目になのは達を映していた。ギガベロティヌスが口からブレスを吐く。それを散開して避ける。スバルが接近しその骨だけとなった身に拳を叩き込む。堅い音が周囲に鳴る。

スバル「堅い！？」

ロイド「スバル、下がれ！！虎牙破斬！！」

スバルに続いてロイドが斬り上げから高速で斬り下ろしを繰り出すが接触した所は火花を散らすだけで傷は一つも付いていなかった。
セフィリアも神速の抜刀剣を繰り出したが結果は同じだった。
その三人をターゲットとしたギガベロティヌスは体を大きく見せる様な動きをする。
すると、肋骨が動き出し高速で三本の肋骨がロイド達に向かって打ち出された。

スバル「うわっ！？」

ロイド「あぶねっ！？」

セフィリア「くうっ！？」

ギリギリで避ける。風圧で三人は軽く飛ばされるが直ぐに体勢を立て直した。
伸びた肋骨が元の戻って行く。

なのは「伸縮自在なの！？」

バルド「厄介な能力だな！！」

ギガベロティヌスが吼える。12対の骨が開きそれぞれがなのは達目掛けて襲いかかって来た。
高速で打ち出されるそれを何とか避ける。

フェイト「くっ！それでもっ……！！ハーケンセイバー！！」

自分に向かって飛んでくる一本に向かって魔力刃を飛ばす。高速で回転する刃がそれを斬り裂かんと飛ぶが骨と激突した途端、破壊された。

フェイト「堅い！？」

なのは「フェイトちゃん！！ディバインバスター！！」

フェイトに迫るそれをなのはが横から砲撃を当てる。破壊は出来なかったものの衝撃に反応してそれは本体に戻っていった。ホッと一息ついたなのはの背後から別の肋骨の一部が迫る。それに気付いたフェイトがソニックムーヴを使ってなのはの下に瞬時に移動、バルディッシュを振るって弾く。あまりの堅さに手が痺れる。

なのは「フェイトちゃん、ありがとう」

フェイト「なのはこそ、さっきはありがとう」

互いに背を合わせてそう受け答えする。

なのは「早くはやてちゃんの所に行きたいのに…！！」

フェイト「なのは、今はこの戦いに集中しよう。きっとはやて達は大丈夫だから……」

とは言うものの、フェイトもなのは同様はやて達の事を心配していた。

その気持ちをグッと堪えて今は目の前のモンスターに意識を集中する。ギガベロティヌスが骨だけの体で突進してくる。地響きを立てて迫る巨体を回避してその背に魔力弾をぶつける。

フェイト（それにしても、このモンスター…見れば見るほど不思議な生き物だ）

今彼女達に見えるのは骨格だけで必要な内臓器官などがあるだろう周辺には黒い霧が包んでいて一切見えない。迫る肋骨を避けてフォトンランサーを黒い霧に向かって放つ。着弾すると一瞬だけその巨体がピクリと反応した。ギガベロティヌスがフェイトに狙いを定めてブレスを吐く。どす黒い色をした液状のブレスを回避して再びそこにフォトンランサーを叩き込むとまた体がピクリと動いた。

フェイト（やっぱり、あそこを攻撃されると少しは反応する。とい

う事はあそこは弱点なのかな？）

そう思案しているフェイトに向かってブレスを吐く予備動作が見えたので回避の準備をする。そして、口が開き放たれたのは……黒いブレスではなく、周囲に拡散する雷撃だった。

フェイト「なっ！？きゃあああぁぁぁぁぁ！？」

エリオ「母さん！！」

予想が外れて驚くフェイトに雷撃が直撃、全身に強烈な電撃を浴びる。意識を一瞬だけ奪われたが何とは堪える。フェイトの救助に向かおうとしたコレットに今度はギガベロティヌスは口から巨大な熱線を吐いてきた。

コレット「っ！！ホーリーメイル！！」

聖なる盾が展開しそれを防ぐ。

ロイド「今度は熱線かよ！？」

カイン「まさか奴は多属性のブレスを使えるのか！？」

カインの予想は的中した。薙ぎ払う様にして放たれたブレスは今度は周囲を凍らせるものとなり、次に放たれたのは強烈な水流となった黒いブレス。それを避ける。背後にあった壁に直撃して壁を抉った。そこから腐蝕が始まり壁が崩れた。

バルド「フェイト、大丈夫か？」

フェイト「バルド…うん、大…丈夫……だよ」

バルド「無理はするな。今回復させる。フレイムヒール」

バルドの手から仄かに暖かい炎が出てフェイトを優しく包む。すると、痺れていた体が徐々に回復した。

フェイト「ありがとう、バルド」

バルド「気にするな。行くぞ、フェイト！！」

フェイト「うん！！」

バルディッシュを再び強く握ってフェイトとバルドは戦闘を再開する。

フェイト「バルディッシュ！！ソニックムーヴ！！」

バルディッシュ［ソニックムーヴ］

フェイト「接近戦に持ち込めば…！！」

バルド「フェイトを援護するぞケルベロス！！」

ケルベロス［おうよ～！！夫婦（めおと）コンビネーション見せてやれや！！］

バルドも魔力を爆発させてフェイトに並行する様に飛行して接近する。

ギガベロティヌスが二人に狙いを付けて周囲を凍らせるほどの低温のブレスを放って来る。

バルド「突っ切れフェイト！！魔王灼滅破！！」

フェイト「はあぁぁぁぁぁ！！」

バルドがケルベロスを振るい漆黒の炎を放つ。それはフェイトを包み込み炎の防御壁となる。

炎の弾丸の如くフェイトがブレスの中を突き破ってギガベロティヌスの目の前に現れる。

フェイト「バルディッシュ！！ザンバーフォーム！！」

バルディッシュ［イエス、サー！！ザンバーフォーム！！］

フェイト「はあぁぁぁぁぁぁぁ！！」

剣になったバルディッシュを振るってその頭部に斬りかかる。通り抜けざまに斬り付けそれを高速移動しながら何度も行う。フェイトのスピードに体の方が付いて行けていないのかギガベロティヌスは顔が動くだけである。フェイトの方もギガベロティヌスの堅い頭骨を斬り付けている為に手が痺れるがそれを歯を食いしばって堪え最後の一撃を加える為に魔力を溜める。

フェイト「バルディッシュ！！カードリッジロード！！」

バルディッシュ［ロードカードリッジ！！］

フェイト「雷光一閃！！プラズマザンバァァァブレイカァァァァ！！！」

ギガベロティヌス［ガアオァアアァァァァ！？］

フェイト最大の砲撃が放たれた。流石に頭部へのダメージには反応した。初めて悲鳴らしき声を上げて体を仰け反らす。

フェイト「はあ…はあ…！！」

バルド「フェイト、交代だ！！」

フェイトが呼吸を整える時間を稼ぐためにバルドが今度は接近する。
接近するバルドに鉤爪の生えた前足を振り降ろすがそれは空を切る。
バルドは既に懐に潜っておりケルベロスで首の骨に斬りかかる。が、やはりそこは堅くバルドの力とケルベロスの重量をもってしても弾かれてしまった。

ケルベロス「ヒュ～♪俺の重量に耐えるかね～ウヒャヒャヒャ！！」
バルド「まあ、あれ位は耐えれるだろ。それとなケルベロス……誰が夫婦だ、誰が！？」
ケルベロス「アダダダダダ！？折れる折れる折れる！？」
フェイト「／／／／／／／／／」
余計な事を言って締められるケルベロス。戦闘中だと言うのに何故か少し和やかである。

ティアナ「クロスファイヤー、シュート！！」
ティアナの魔力弾がギガベロティヌスに殺到する。爆炎の中から幾つもの骨がのびて来る。
それを得意の幻術で回避して少ない足場を飛び交いながら撃ちまくる。
スバルがウィングロードを駆けて接近し拳を叩き込む。火花が散る。

そのスバルの拳が弾かれ体勢を崩した彼女に向かって鋭い爪が迫って来る。それをガルドが間に入って盾で防ぐ。
彼の背後からセフィリアが飛び出し斬撃を飛ばす。

スバル「ディバインバスター！！」

ティアナ「クロスファイヤー、シュート！！」

二人の魔法が直撃しギガベロティヌスが踏鞴を踏んだ。その二人に狙いを絞ったギガベロティヌスが身を屈めその場で回転、周囲を尻尾で薙ぎ払ってきた。スバルは地上にいるティアナに手を伸ばす。
それに彼女も応えその手を掴む。
そのままウィングロードを駆け上昇、その直後巨大な尾がティアナの先程いた位置を薙ぎ払う。
ティアナはギガベロティヌスの真上に移動するとスバルの手を離して落ちる。そのままクロスミラージュを構え魔力弾の雨を降らす。
そして、その巨体の上に着地してゼロ距離で更に魔力弾を撃ち込む。
それには流石に効いたのか悲鳴を上げて彼女を振り下ろそうと暴れる。ティアナはそこから飛び降りる。その彼女をスバルが予想していたのかウィングロードを駆け落ちる彼女を拾い再び上昇する。

ティアナ「あれだけ撃ったのにまるで効いた感じがしないわ！！」

スバル「でもダメージは入ってる筈だから大丈夫だよ！！」

ティアナ「そうね。でも…一番気を付けたいのが……」

ギガベロティヌス［ガアァァオアァァァ！！！］

スバルがウィングロードの軌道を急激に変える。その二人の目の前を巨大な岩塊が通り過ぎる。
一体どんな構造をしているのかその口から扇状に拡散する岩塊を避けると今度は低温のブレスが吐き出される。

スバル「うわっ！？」

ティアナ「このブレスが厄介ね！！予備動作が一緒なのに、ブレスの種類がコロコロ変わるのは…！！」

エリオ「ティアナさん、スバルさん！！」

キャロ「大丈夫ですか！？」

ティアナ「なんとかね…。二人も怪我はなさそうね」

それに二人も頷く。そこに突進するギガベロティヌス。飛び退くとそこを通り過ぎる巨体。風圧が凄まじく巻き込まれない様に軌道を修正する。急停止したギガベロティヌスはその場で回転、強靭な尾で周囲を薙ぎ払う。それを回避してティアナはフリードの背に飛び移りスバルとエリオが接近する。
ギガベロティヌスがその二人に巨大な口を開けて噛みつこうとするがそれを身を捻って回避しその勢いを利用してエリオがストラーダを振るいその頭骨を斬る。激しく火花を散らしエリオが弾かれる。
その隙を埋める為スバルが逆の位置から拳を叩き込む。その衝撃に

一瞬だけ意識がスバルの方を向く。その一瞬でエリオは体勢を立て直して距離を取りスバルも後退する。

キャロ「フリード、ブラストレイ！！」

ティアナ「ファントム、ブレイザァァァ！！！」

ギガベロティヌス［ガアオアァァァァァァ！？］

二人に注意のいっているギガベロティヌスに二人の魔法が直撃、悲鳴を上げて仰け反る。

キャロ「効いてます！！」

首を何度も振っていたギガベロティヌスがその目に二人を捉える。そして、二人に向かって首を擡げ次の瞬間、腐蝕効果のある毒性のブレスを吐いてきた。フリードが咄嗟に動いて直撃を免れたがその翼を掠める。焼けるような音がして煙が上がりそこから腐蝕が始まった。

フリード「キュク～！？」

キャロ「っ、フリード！？」

バランスが崩れて墜落する。フリードが何とか翼を動かして毒の沼の上から安全地帯に飛んでそこで力尽きて地面に体を投げ出す形で落ちた。

キャロ「フリード！！しっかりして！！」

ティアナ「フリード、しっかりしなさい！！」

フリードの純白の体が毒に侵されて徐々に紫色に染まっていく。呼吸も乱れているのに気付きキャロは慌てる。その背後よりギガベロティヌスが猛スピードで突進してきた。ティアナがキャロとフリードの前に立ってクロスミラージュを構える。何としても抑えないといけない！！そう思い魔力弾を撃ちまくる。その弾幕を直撃してもなお突進を止めない。このままでは拙い！！

そう思ったその時、

ガルド「させん！！」

ガルドがティアナ達の前に立ち盾を構える。それにギガベロティヌスがぶつかる。衝撃でガルドが押され始める。

ガルド「なめるなあぁぁぁぁぁ！！！」

ガルドが足に力を込めて踏ん張る。ぶつかり合う力が行き場を失い両者の足下の地面を陥没させる。

ロイド「キャロ、ティアナ!!大丈夫か!?」

キャロ「ロイドさん!!フリードが!!」

ロイド「拙い!!毒をくらってる!待ってろ、解毒薬を…」

フリードの口を開かせ解毒薬を流し込む。すると、濁った体色があっという間に元の綺麗な白色に戻った。苦しそうだった呼吸も安定してぐったりしていた首をフリードは持ち上げた。

キャロ「よ、よかった……」

ロイド「キャロはそこでフリードの回復を待っていてくれ。ティアナ、俺達はあいつの意識を此処から逸らさせるぞ!!」

ティアナ「分かったわ!!」

ロイドはキャロに回復薬を幾つも渡してティアナと共に駆け出す。ガルドはまだギガベロティヌスと押し合いを続けている。そこにロイドとティアナが合流、エリオとスバルも上空より集まる。

ガルド「こいつは俺が抑えてる！！今の内に強烈なの叩き込め！！」

ロイド「任せろ！！行くぜ、魔神連牙斬！！」

エリオ「ザンダーレイジ！！」

スバル「ディバインバスター！！」

ティアナ「ファントムブレイザー！！」

ギガベロティヌス［ギャアアオオアァァァァァァァァァ！？］

ロイドの斬撃、エリオの殲滅魔法、スバルとティアナの砲撃がギガベロティヌスに直撃する。

悲鳴を上げて仰け反り踏鞴を踏んだギガベロティヌス。そこにガルドが顎の下に潜り込みそこから槍で打ち上げた。凄まじい衝撃でその頭部が跳ねあがってそのまま引っくり返った。直ぐに起き上がったギガベロティヌスには既にキャロや弱ったフリードは眼中になく散開するロイド達に意識は向いており彼らに向けて攻撃を始めた。

ギガベロティヌス［ガアァァオオアァァァァァ！！！］

ガルド「そうだ、俺達を狙って来い！！」

ガルドは目の前に迫る爪を回避してその足に槍を突き刺す。やはりその体を支える骨は堅く弾かれる。

それでも執拗に何度も神速の速さで突きまくる。その彼を狙おうと

したところにセフィリアの斬撃が側頭部に当り一瞬だけ動きが止まる。その隙に距離を取り続いてエリオが空中から頭部にストラーダを叩き下ろす。

すぐさま後退しその隙をティアナが援護して牽制する。その彼女に向かって尻尾を振るうがその彼女は幻術で霞のように消える。敵を見失って動きが止まった所をスバルが肉薄してその巨大な足に拳を叩きつける。衝撃に反応してそこに爪を振るう。それをバルドが受け止めフェイトがソニックムーヴで高速移動して接近、バルディッシュで頭部に斬撃を入れた。

ギガベロティヌス［ギガァァァオアァァァァ！？］

その一撃で悲鳴を上げて大きく体を擡げる。頭を何度も振るう。フェイトの一撃はギガベロティヌスの頭部、それも右目の所を縦に斬ったのかそこに斬られた跡が残っていた。

フェイト「傷が入った！！」

バルド「ダメージが通っている証拠だ！！一気に……！！」

皆が意気込み攻撃を仕掛けようとしたその時……

ギガベロティヌス［ギュアアァァァオオオァァァァ！！！！！］

エリオ「うわぁ！？」

再び直立して肋骨が開きそこから大咆哮を出した。ギガベロティヌスの使う技、『超大咆哮』だ。その射程はティガレックス亜種の使用する大咆哮の凡そ三倍以上だ。その衝撃波が全方向に広がり全員吹き飛ばされる。鼓膜がジンジンと痛むが何とか体勢を立て直して次の攻撃に備える。だが、ギガベロティヌスは驚くべき行動を取った。

ギガベロティヌス「ギュアアオオォォォォォォォオオオォォォ！！！！」

天に向かって咆哮を上げる。それは空に吸い込まれるように周囲に響き渡り消えた。

すると、厚い雲を裂き空に二つの影が現れる。赤と青の、その身に紅の炎を纏う強者が……

テオ・テスカトル「ギャアァァァァアアアアアアァァァァァアアアアアァァ！！！！」

ナナ・テスカトリ「ギャアァァァァアアアアアアァァァァァアアアアアァァァァッ！！！」

ロイド「嘘だろ！？」

カイン「テオ・テスカトルに…ナナ・テスカトリだと！？」

バルド「まさか…古龍種を呼んだのか！？」

どういう仕組みなのかギガベロティヌスの咆哮で古龍種が出現した。しかも、凶暴な二頭、炎王龍と炎妃龍と呼ばれる古龍種の中でも非常に危険な存在だ。そしてこの二頭は普通のとは違い冠のような龍角が二倍くらい大きくなっており鬣も長く自身を守る炎の鎧は渦巻き時折り炎同士がぶつかって爆発している。

なのは「あの時の…！！」

テオ・テスカトルを見てなのはは火山で出会ったあれと直ぐに理解できた。

ロイド「砂漠で感じた殺気に似ている……！！まさか、ナナ・テスカトリだったのか！？」

砂漠で感じた殺気を思い出し目の前のナナ・テスカトリだと分かった。

周囲に圧倒的な殺気が広がる。それがギガベロティヌスの殺気と混ざり強大な重圧となってなのは達をその場に縛った。

ティアナ「体が……う、うごか……な…い…！！」

エリオ「う、うああ……」

ＦＷ陣の方はその濃厚な殺気で戦意を削がれてしまい体を震わせていた。

なのはは前回会っている為に少なからずその殺気には耐えてみせているがそれも表面上だけで実際は体中嫌な汗で濡れていた。フェイトは初めて会っているのでその瞳に自分が映された瞬間、食い殺されるビジョンが脳に現れた。それに、全身を震わせ珠の様な汗を流す。手が震え、足も震えた。

フェイト「あ……ああ……」

バルド「フェイト！！奴らの殺気に呑み込まれるな！！」

バルドが彼女の肩を揺する。もう少しで殺気に呑まれ錯乱する所だった彼女はバルドのお陰で何とか正気を取り戻す。

頭を何度も振って思考を切り変えて目の前の三頭を見据える。それでも、人間に少なからず残っている本能が警鐘を鳴らしていた。あれは危険だ！！逃げろ！！自分では勝てない！！その様な言葉が次々に頭に浮かんでくる。

バルド「お前等！！気をしっかり持て！！此処にいるのはお前達だけじゃないぞ！！」

その声に恐怖で怯えていたＦＷ陣もなのはもフェイトもハッとなる。

周りを見るとそれに笑みで応える者達がいた。

クラウド「戦闘危険度ＳＳＳ＋に認定…まあ、なんとかなるだろう」

ティファ「戦術レベルを最大に上げる……。大丈夫です。これ位、シュミレータの方が難しい……」

ガルド「普段お前等がどんなえげつないシュミレータを使ってるのかその言葉だけでも十分伝わってくるな……」

セフィリア「皆、心で負けちゃ駄目。一人一人は確かに私達は弱いけど……」

コレット「皆で戦えば、だいじょぶだよ！！」

ロイド「俺達は一人じゃない！！その背中を皆が守ってくれるぜ！！」

ロイド達が不敵に笑いながら前の三頭を見据えてる。彼らの放つ覇気だろうかその様なものがモンスターの殺気とぶつかりあい相殺されていく。

バルド「さて、ショータイムだ！！」

ケルベロス［ヒ～ハ～！！派手に踊ろうぜ！！］

ケルベロスを構えてバルドが駆けだす。それにナナ・テスカトリが反応して突進を開始する。
紙一重でその突進を避けて胴体に叩き込む。彼を吹き飛ばそうと鋭い爪で切り裂こうとするがそこには既に彼はおらず空を切った。当の本人はナナ・テスカトリの上に跳躍しておりそこから斬撃を降らした。

フェイト「バルディッシュ！！私達も行くよ！！」

バルディッシュ［イエス、サー！！］

バルディッシュを強く握り、魔力を爆発させてナナ・テスカトリに接近する。
ザンバーフォームに切り替えてバルドに意識を向けているナナ・テスカトリの胴体に斬撃を入れる。
荒れ狂う熱が揺れ視界の外から来た衝撃にナナ・テスカトリの動きが一瞬だけ止まる。向きを変えてフェイトをその瞳に捉えると立ち上がり咆哮を上げる。本能的な恐怖で体が竦み鼓膜が痛くなる程の咆哮にその場に縫いつけられた。その巨体が地面に降りるとそれと同時に周囲に強烈な風圧が発生してフェイトは軽く飛ばされた。体勢を立て直して再び高速で接近しバルディッシュを振るう。フェイトを切り裂かんと爪が振るわれるが得意の高速移動で避けて再び斬撃を何度も叩きこむ。

フェイト「はあ…はあ…はあ……」

しかし、ナナ・テスカトリの周囲にいただけで体が重くなるのが感じられた。まるで、体力が何もしていないのに奪われているかのようだ。

バルド「馬鹿野郎!!すぐに、そいつから離れろ!!」

フェイト「バルド!?きゃっ!」

横からバルドが一瞬で近づいてフェイトを脇に抱えてナナ・テスカトリから距離を取った。ある程度離れると先程まで感じた重苦しい空気が軽くなる。

バルド「あいつにはあまり近づくな。見えるか?あいつの周りで渦巻いてるあの炎は奴の鎧みたいなものだ。あれがあると接近するだけで体力が徐々に減っていく。幾つか攻撃を加えたら距離を取るんだ」

フェイト「う、うん。分かった／／／／／／」

何やら彼女の顔が赤いのに気付いてその顔を窺うようにする。

バルド「どうした?」

フェイト「え、えっと…そろそろ、手を離してほしいな／／／／／／」

バルド「あん？」

そこで改めて自分の手の位置を見る。彼の手はなんと、彼女の柔らかな二つのやｍ――ゲフンゲフン！！を掴んでいた。

バルド「……」↑思考停止

ケルベロス［おお～、相棒もやるねえ～ウヒャヒャヒャヒャ！！］

思考停止に陥ってるバルドを見てケラケラ笑うケルベロス。そこに……

ナナ・テスカトリ［ガアアッ！！］

ナナ・テスカトリが突っ込んできた。

バルド「ちっ！！フェイト、わりぃが少しだけ我慢していてくれ！！」

フェイト「えっ！ちょっ、きゃうんっ！！」

バルドがナナ・テスカトリから距離を取る為その突進を避ける。す

ぐさまその動きに反応してナナ・テスカトリはその場で回転する様にして爪で薙ぎ払ってきた。それも避ける。今度は飛び掛かって来たのでそれをケルベロスでいなして避ける。

フェイト「バ、バルド！！く、くすぐったい、んぅっ、よ、はうん！／／／／／。そ、そんなに、あんっ、強く握っちゃ、きゃうんっ！だめ～／／／／／」

バルド「変な声を出すんじゃねえよ！！集中できないだろうが！？」

フェイト「だ、だって、ひゃうん／／／／／／！く、くすぐった、やんっ、いんだもん、ふにゃ／／／／／！？そ、そんなに、あんっ！強く掴んだら、ひゃん、だめだよ～／／／／／／／／／！！！」

バルド「だ～～！！しつけえなテメー！！何時まで付いてくんだよ！！」

ナナ・テスカトリの執拗な攻撃に力を込めて回避して苛立つバルド。力を込めるせいでその度に彼女から甘い声が聞こえて余計に集中できない。それに、自分の手が包む柔らかな感触が…いかんいかん！！悪霊退散悪霊退散！！

ナナ・テスカトリも自分の目の前で乳繰り合う二人を見て余計に苛立っているのかその攻撃が苛烈である。それの所為でバルドはフェイトを離せないでいるしそれでフェイトも艶っぽい声を出してしまいナナ・テスカトリが更にキレるという最悪のスパイラルが完成してしまっていた。

ロイド「魔神剣・双牙！！」

コレット「スティアフィンネル！！」

エリオ「フォトンランサー、ファイヤー！！」

そこにロイドとコレット、エリオがナナ・テスカトリに攻撃、その衝撃で一瞬だけ動きが止まった。
その隙に距離を取って二人の下に後退する。

ロイド「二人とも大丈夫か！？」

バルド「ロイド、コレット、エリオか！！色んな意味で助かった！！」

コレット「？？？？」

主に精神的意味で、だが……。やっとの事でフェイトを降ろす。彼女は顔を真っ赤に染めて息が荒くなっていて少しだけ地面にへたり込んでいた。

コレット「フェイト、大丈夫？」

フェイト「う、うん／／／／／／コレット、ロイド、エリオ色んな意味でありがとう」

彼女としてもあの状況はあまり宜しく無かったようです。でも、内心彼女は気持ちｙ――ゲフンゲフン！！

そして、テオ・テスカトルの方にはなのはとカインが立つ。
その隣にはスバルとティアナもいた。

テオ・テスカトル［グルウゥウゥゥゥゥゥ……］

なのは「テオ・テスカトル……」

凄まじいまでの殺気が彼女を襲う。まるで、火山で出会った自分達を覚えているかのようだ。
レイジングハートを持つ手が震えている。自分を心の中で叱咤してその震えを抑えようとする。

カイン「向こうは何時でもいいみたいだな。……なのは、大丈夫か？」

なのは「う、うん。大丈夫なの……」

正直に言えば怖い。一撃でもくらえばその先にあるのは…死だ。非

殺傷なんてない。出会えば生きるか死ぬか…そのどちらかしかないのだ。まだ経験の浅いスバルとティアナにとってこの殺気はかなり堪えている。顔が真っ青で先ほどよりもマシにはなったもののまだ呼吸が荒い。手足も震えていた。

カイン「無理ならお前たちは休め。此処はおれとなのはだけで請け負う」

スバル「だ、大丈夫です！！！」

ティアナ「わ、私たちも…戦えます！！」

反射的にそう言ったのだろう。しかし、その瞳には恐怖に染まっていながらも強い意志が感じられる。
それをカインは見てフッと笑った。

カイン「流石は不屈のエースオブエースの教え子達だ。良い目をしている。おれたちも負けてられないな？」

なのは「うん！！」

怖いけど彼と…カインと一緒なら乗り越えられる！！その強い意志が彼女の心を更に高める。
すでに彼女の頭には幾つかの戦術パターンが出来ていた。だが、これを実行し効果があるのかは全くの未知数だ。なのはは彼に視線を送る。カインは彼女の瞳を見て何を言いたいのか理解したのか無言

で頷きサイフォスを構えた。

カイン「ティアナ、スバル！！まずは、奴の炎の鎧を剥がす！！スバルは奴に牽制しつつ、つかず離れずに戦え！！ティアナはそのスバルの援護だ。俺が接近して奴の動きを封じる間になのはが砲撃を当てろ！！」

三人「了解！！」

カイン「行くぜ！！」

テオ・テスカトル「ガアアアァァァァァァァアアアアアアアアァァァァ！！」

それぞれが与えられた事をこなすべく散開していった。

ガルド「テオをカイン達が、ナナをバルド達が請け負うって事は必然的に俺達がギガベロティィヌスか」

セフィリア「そうみたいだね」

クラウド「人数は四人か」

ティファ「任務継続に問題はない……」

それぞれが自身の得物を構え突撃をする。

ギガベロティヌス［ギャアオォォォアアァァァァ！！！］

それに対してギガベロティヌスは小さき挑戦者に咆哮で応え。四人に襲いかかった。

# 第四十三話（後書き）

如何ですか？古龍種が古龍種を呼ぶ。これはこれで斬新なアイデアだと思うんですが？

バルド「敵モンスターがあまりにもチートすぎるだろ！？」

いやいや、あんたらの方がチートだからね！？

クラウド「それにしても、最近の執筆速度の低さは如何いう事なんだ？」

そ、それは……大学の課題が多くて忙しいんですよ！！↑マジで！！担当の人がこれまた面倒くさい人で……

ガルド「そんなのは理由にならん。このヘッポコ作者が」

う、うわ～ん！！自分のキャラに苛められた！？なんなんだよこいつら！？

ふんっ！！どうせヘッポコですよ！！

ティファ「ふてくされちゃった……」

バルド「ほっとけ。さて、次回も馬鹿曰く更新が遅くなるかもしれないがこれからもこの小説の事よろしく頼む」

これを読んでくれている読者の皆様、これからも精進していきますので宜しくお願いします。それでは、皆様今回はこのへんにて……

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第四十四話（前書き）

読者の皆様おはこんにちばんわ。作者こととテッテルです。最近リアルが忙しくて中々更新が出来ず本当に申し訳ありません。執筆速度も落ちる落ちる……ｏｒｚ

因みに日記も前回で終了です。ネタが切れた！！

という訳で本編をどうぞ！！

# 第四十四話

クエスト名　『決戦、腐蝕龍ギガベロティヌス』

参加メンバー

高町なのは
カイン・レオンハルト
スバル・ナカジマ
ティアナ・ランスター
フェイト・T・ハラオウン
エリオ・モンディアル
キャロ・ル・ルシエ
バルド
ロイド・アーヴィング
コレット・ブルーネル
セフィリア・ドム・バロム
ガルド・ドム・バロム
クラウド・ケリオン
ティファ・フューストン

場所　古搭　秘境最奥

出現モンスター　ギガベロティヌス

狩り場の状況　超不安定

出現モンスター

テオ・テスカトル天種

ナナ・テスカトリ天種

目の前で立ち上る巨大な炎の嵐、それは近づく者全てを吹き飛ばし焼き尽くさんとする。

その鎧を纏う青き鱗と赤き鱗を持つ別名『炎妃龍』ナナ・テスカトリ、『炎王龍』テオ・テスカトル。古龍種の中でも非常に好戦的なモンスターだ。

そして、この二頭は通常種とは比較も出来ない程の実力を持っていた。

炎の鎧、所謂『炎鎧』が凄まじいだけでなく攻撃も激しく動作にも隙が殆ど見られない。

スバル「リボルバー、シュート！！」

ウィングロードに乗ったスバルの魔力弾がテオ・テスカトルの背中に当る…はずだった。
その魔力弾は直撃する寸前にかき消される。サイドからティアナが魔力弾を幾つも撃ち込む。
その全てが鱗に当る前に炎の力で打ち消されていた。

スバル「魔法が通じていない！？」

ティアナ「なによこのモンスター！？」

あまりの力に戦慄する。なのはが魔力弾を形成して放ち、カインも斬撃を幾つも飛ばしてダメージを与えようとする。だが、彼らの攻撃もその激しく猛る炎の前に消し飛んだ。

ティアナ（なのはさんやカインさんの攻撃も通じていない！？なんなのよこのモンスター！！）

あまりに桁違いの力に全身に恐怖が沸き起こる。自分やスバルがロイド達と戦ったアクラ・ヴァシムにベリオロス亜種の放つ殺気の数倍以上の重圧がたった一体の目の前にいるモンスターから発せられている。

テオ・テスカトル［ガアアァァァァァァ！！］

テオ・テスカトルが雄たけびを上げて突進してくる。その速さは並みいるモンスター達の中でも上位に入る速さで地面を抉りながら迫って来た。それだけではない。テオ・テスカトルが通る場所はどういう訳か爆発を起こして周囲を吹き飛ばしながら迫って来るではないか！？

スバル「うわっ！？」

ティアナ「ちょっと、冗談でしょ！？」

少し射線から避けただけでは間違いなくあの爆炎に呑まれる。慌てて大きく距離を取り回避する。ティアナ達が避けると分かるや直ぐに突進をその強靭な足で無理矢理止め急停止しそのまま前足を重心にしてその場で回転、体の向きを遠心力を利用して無理矢理変えて続けて飛び掛かって来た。その真下も粉塵により爆発が起きてその衝撃でティアナとスバルは吹っ飛ばされたが何とか体勢を整えた。殆どの飛竜種は二本脚である為自身の突進を止められない。その為大体の飛竜種は自身の突進を体を地面に落す事で止める。例外的にディアブロス、モノブロスはその強靭な足を使って無理矢理止められるが……。

しかし、古龍種であるこのモンスターはその足を使って突進を止める事が出来る。上手く回避できたからと言って油断すればそれは自

身の死を意味する。それだけでも危険だというのにこのテオ・テスカトルは周囲も巻き込みながら突進してくるのだ。突進を避けれてもこの爆発に巻き込まれては元も子もない。

なのは「ディバインバスター！！」

ティアナ達の体勢が整う時間を稼ぐためになのはが砲撃を撃ち込む。直撃して爆発するが周囲に纏っていた炎が少し吹き飛んだだけでその鱗には傷一つ付いていない。しかし、それだけでも効果はある。なのはの放った砲撃の衝撃にテオ・テスカトルの意識が彼女の方に向いた。濃厚な殺気がなのはに圧し掛かる。まるで自分の周囲だけ重力が増したかのようだ。

カイン「隙だらけだ！！」

なのはに注意が向いていた所をカインが肉薄してサイフォスで斬りかかる。炎の鎧を両断しながらその鱗に斬撃をお見舞いする。無数の斬撃がその鱗に切り傷を生み出す。

テオ・テスカトル［ガアアァァァァァァ！！！］

カイン「浅いか……！！ちっ！！」

接近したカインを倒すべくテオ・テスカトルがその鋭利な爪で切り

裂こうとする。
その前足に炎が収束し振るう。カインがサイフォスでそれを受けるが弾き飛ばされた。
体勢を立て直して地面に着地、魔力を爆発させ再び接近して通り抜けざまに斬り付ける。

サイフォス［ふむ、友よ。奴にはたいしてダメージが通っていない様だぞ？］

カイン「見れば分かる」

サイフォス［流石は古龍種といったところか……。しかし、友も本気を出せば中々凄いものだ］

カイン「まあ、本気を出せばの話だが……」

サイフォス［出さないのか？］

カイン「なのは達の前でか！？」

サイフォス［いずれは知る事になるのなら別にいいのではないか？］

カイン「それは……もう少しだけ待ってくれ。まだ、あいつらには見せたくはない」

サイフォス［ふむ、なら好きにすればいい］

カイン「適当に言ってくれる、っぜ！！」

一気に駆けだしテオ・テスカトルの周囲を高速で駆け回り通り抜けざまに斬撃を加える。
そこになのはも魔力弾を幾つも飛ばしカインが狙われない様に注意を引き付けるべく撃ち込む。
ティアナが幻術を混ぜてテオ・テスカトルを混乱させスバルが接近して側頭部に拳を叩き込み直ぐに後退、そこにカインが斬撃を入れてスバルの後退する時間を稼ぐ。そのカインを狙ってテオ・テスカトルが爪で切り裂こうとする。そうはさせまいとなのはが割り込みプロテクションを展開してそれを受け止める。

なのは「くぅっ！！」

カイン「なのは、無茶するな！！」

テオ・テスカトル［ガアァァッ！！］

なのは「きゃあ！？」

プロテクションごとなのはが弾かれる。それをカインが咄嗟に背後に回って彼女を抱きとめる。
その二人に向かってテオ・テスカトルは息を大きく吸い込み、広範囲を焼き尽くす巨大な炎を吐きだしてきた。

カイン「ちっ！大いなる大水よ、スプラッシュ！！」

カインが術を唱えて発動させる。なのはとカインの前に突如滝の様な勢いで水が落ちてきてそれが水のカーテンとなりその炎の進行を妨げた。その間になのはを降ろしてカインは再び突撃、術が終了すると同時に正面からテオ・テスカトルに斬りかかる。だが、

テオ・テスカトル［ガアァァァアアアアアアアアァァァ！！！！］

カイン「なにっ！？うわっ！！」

なのは「カイン君！！」

突然、テオ・テスカトルが二本足で立ちあがり咆哮を上げる。それと同時にテオ・テスカトルの纏う炎が激しさを増しその衝撃でカインが吹き飛ばされる。テオ・テスカトルの目がギラギラと輝きその身に纏う炎が嵐の様に猛る狂う。周囲にキラキラと何か粒子状のものが散り地面に落ちる。

カイン「まずい……！！なのは、スバル、ティアナ下がれ！！」

テオ・テスカトル［ガアァァァアアアアアアァァァ！！！！］

――カチンッ！！――

テオ・テスカトルが口を開きそれを下ろすと音が鳴る。その瞬間、

テオ・テスカトルの周囲が一斉に爆発。爆風でなのは達は吹き飛ばされた。その爆発の中心にいながらテオ・テスカトルは悠然と歩む。

スバル「ううぅ…。ティ、ティア…大丈夫？」

ティアナ「な、なんとかね……。いつっ！？」

なのは「ティアナ！右腕を怪我してるよ！！」

ティアナ「この位、平気です！！それよりも、今の攻撃は一体……！？」

カイン「奴の得意とする技の一つ、粉塵爆破だ。普通の奴と火力が違いすぎる！！」

一言で言えば爆撃でもされたと言った方が良いだろう。それほどの衝撃が周囲を焼け野原にした。直撃は免れたがそれでも発生した衝撃波で彼女達は弾き飛ばされた。

カイン「なのは！！俺が時間を稼ぐ。その隙にティアナの回復を頼むぞ！！！」

そう言い残してなのはにポーチを投げ渡し、サイフォスを構えて突撃をする。近づくカインをテオ・テスカトルは突進で応戦。それを紙一重で避け爆発の範囲から逃れたら直ぐに術を発動。初級術のライトニングを連発して攻撃を加える。カインを狙いテオ・テスカト

ルが飛び掛かる。その巨体が飛び上がりその真下が爆撃を受けたかのように爆発していく。それを回避して着地したテオ・テスカトルの真上にジャンプしてそのまま斬撃をテオ・テスカトルに降り注がせる。

テオ・テスカトル［ガアァァァアアアァァァ！！！］

カイン「お前には負けん！！」

一撃で人を死に至らしめるだろう凶悪な一撃を自身の剣捌きを持って受け流し、弾く。そして、流れるような形でその赤い龍鱗に斬撃を加える。

カイン「壱の太刀、霞！！弐の太刀、朝菊！！」

一振りで幾つもの斬撃がその炎鎧を両断する。続けて返しの振りで三日月状の剣閃を幾つも放ち鱗を斬り裂いた。そのままテオ・テスカトルの背後に着地するとテオ・テスカトルがその尾でカインを薙ぎ払わんと振るって来る。飛び退いてそれを回避する。カインのいた場所を尻尾が薙ぎ払うとそれと同時にその場が爆発した。もしあのままカインが防御をしていたら大怪我をしていただろう。何時カインが怪我をしてしまうかも知れない状況にハラハラしつつもなのははポーチから回復薬を取り出しティアナに渡す。それをティアナは飲むと痛みがスッと抜けていく感じがした。右腕を動かしても大丈夫そうだ。それを見てなのはは残っている回復薬を布に浸してそれをティアナの腫れている部分に巻いた。

なのは「これで大丈夫だよ」

ティアナ「ありがとうございます、なのはさん」

なのは「それじゃあ、カイン君の援護に回るよ！！」

ティアナ「はい！！スバル、行くわよ！！」

スバル「おう！！」

カイン目掛けて突進するテオ・テスカトルになのはが魔力弾を複数飛ばしてぶつける。
衝撃に反応して動きが停止する。視線が映りなのはがその青い瞳に映された。それだけで感じる圧倒的な重圧。テオ・テスカトルが身構えなのはに飛びかかろうとした瞬間、別の方向から魔力弾が激突する。ティアナがテオ・テスカトルの視界の外から魔力弾を放ちぶつけたのだ。その隙を逃さずカインが肉薄、その巨体に斬撃を叩き込む。カインに意識が向き彼に向かって爪を振りかぶる。

カイン「いまだ！！」

スバル「うおおぉぉぉぉ！！！ディバイィィィン、バスタァァァァァ！！！！」

テオ・テスカトル［ガァァァァァァァ！？］

スバルがテオ・テスカトルの真下に潜り込んで得意の砲撃をほぼゼロ距離で放つ。それが顎を捉えその衝撃にテオ・テスカトルが初めて悲鳴を上げてダウンした。

なのは「ダウンした！！」

カイン「だが、まだだ……」

テオ・テスカトル［ガアァァァァァアアアアアァァァァ！！！！」

立ちあがったテオ・テスカトルが咆哮を上げる。殺気が一段と濃厚になり恐怖で身が竦む。

その身に纏う炎鎧が一段と激しく燃え盛る。地面を蹴って突進してくる。それを四人は回避した。

スバル「うおおおぉぉぉ！！！」

スバルが接近して拳を叩き込もうとする。しかし、直撃する寸前にスバルは何かに押されて吹き飛ばされた。

スバル「うわっ！？えっ、えっ！？なに！？」

ティアナ「バカスバル！！直ぐに下がりなさい！！」

スバル「ほえ?…あわわわわ!!」

吹き飛ばされて地面に尻もちをついてキョトンとしているスバルをティアナが叱咤する。
それに気付いて目の前で前足を自分に振り上げているテオ・テスカトルに気付いて慌てて逃げた。
直後、先程までスバルのいた場所に前足が振り下ろされ地面が音を立てて沈んだ。

カイン「風圧か……厄介だな」

スバル「近づいたら吹き飛ばされたよ!!」

龍風圧。古龍種の持つ固有の力で普通の風圧とは違い接近する者を軽く吹き飛ばす力を持っている。
それもこのテオ・テスカトル、炎鎧の上に更にその龍風圧の強化版『暴風圧』を展開しているようだ。
これでは、接近するだけで吹き飛ばされてしまう。

なのは「どうするの?」

カイン「奴の纏っている鎧を剥がすしか方法はないだろうな。まあ俺が接近して隙を作るからお前達は後を頼むぞ?」

ティアナ「大丈夫なの?」

カイン「まあ、少しの間なら耐えれるだろ？それじゃあ、行くぞ！！」

四人は再び駆け出した。

---

一方、フェイト達の方も苦戦を強いられていた。

ロイド「虎牙破斬！！」

ロイドが素早く上下に斬撃を加えるが掠り傷程度しかつかなかった。その彼を目掛けて爪を振るう。後退してそれを避けるとすぐさま飛び掛かって来た。
地面を蹴ってその巨体の下から逃れる。

バルド「剛魔神剣！！」

広範囲に広がる斬撃をバルドが放つ。衝撃にナナ・テスカトリがその方向に目を向ける。

フェイト「バルディッシュ！ソニックムーヴ！！」

バルディッシュ［ソニックムーヴ！］

高速移動魔法を発動して一気に距離を詰める。何度も斬撃を加えナナ・テスカトリの周囲を飛び交う。

ナナ・テスカトリ［ガアァァァアアアァァアアアア！！］

フェイト「くっ！！」

その動きを捉えて彼女に炎を纏った爪を振り下ろす。身を捻る様にしてそれを避けると今度は尻尾が彼女に迫って来た。咄嗟にバルディッシュで防御、凄まじい衝撃が彼女を襲う。手が痺れそうな一撃でフェイトは弾き飛ばされるがコレットがフェイトの背後に回って受け止める。代わりにエリオが接近してストラーダを振るう。狙いをエリオに切り替えたナナ・テスカトリが飛び掛かる。それを回避する。ナナ・テスカトリが着地したと同時にロイドが肉薄、神速の連続突きを繰り出し鱗を弾き飛ばした。血が舞い上がり炎と混ざる。痛みに反応してナナ・テスカトリが動いた。翼を大きく広げると周囲に何か小さな粒の様な物が宙を舞う。それが翼を羽ばたかせる事で周囲に拡散した。

コレット「これは！？」

ロイド「拙い！！」

バルド「フェイト、エリオ！下がれ！！」

ナナ・テスカトリ「ガアアアァァァァァアアアアアアアァァァァ！！！！」

――カチンッ！！――

ナナ・テスカトリが歯を打ち鳴らすと周囲に舞っていた粉塵が一斉に爆発。周囲を吹き飛ばす程の威力でその衝撃波がフェイト達を吹っ飛ばした。

ロイド「うわっ！あちっ、あちちっ！？」

コレット「ロイド、火が付いてるよ！？」

バルド「くそっ！フェイト、エリオ無事か？」

フェイト「な、なんとか……！！」

エリオ「僕も大丈夫です……」

全員の無事を確認して前を見る。あまりの熱量に大気が陽炎の如く揺らめく。その先には猛る炎の鎧を包まれたナナ・テスカトリがい

る。その瞳には一切の油断はなく、放たれる殺気は尋常ではない。

ケルベロス［ありゃあ本気だな～。こっちが動かなくなるまで全力で来るぜ？］

バルド「モンスターなんてみんなそんなもんだろ」

ロイド「それにしても今迄出会った古龍種とは比較にならない位手強いぞ？」

コレット「可愛いのにね……」

一同「「「「可愛いの（んですか）！？」」」」

コレットの天然発言に全員がツッコミを入れる。

ナナ・テスカトリ［ガアァァァアアアアァァァァ！！］

そんなコレットの天然ボケにツッコミを入れるかのように突撃してきた。

ツッコミだけに、突っ込みを入れる。

……

……

べ、別に上手い事言ったって訳じゃないんだかね！？

ケルベロス［ウヒャヒャ！！コレット、如何やら向こうさんは不服らしいぜ？］

コレット「そなの？可愛いのにな……」

ロイド「いやいや、何処が可愛いんだよ？厳ついの間違いじゃないのか？って、うわっ！？」

ナナ・テスカトリ［ウギャウウアアァァァァ！！！］

如何やらその発言に対して抗議を上げたみたいだ。ロイド目掛けて飛び掛かる。

飛び退くと同時に着地地点が爆発に包まれる。ナナ・テスカトリは粉塵を周囲に撒き散らしながら暴れる。そして、フェイト達から距離を置く為に後方に飛び退いた。

フェイト「い、嫌な予感がする……」

バルド「やばい！！皆そこから下がれ！！」

バルドの声が聞こえると同時にナナ・テスカトリが地面に前足を振り下ろすと……
バルド達の足元が光り出し大爆発を起こした。

フェイト「きゃあ！？」

かなり離れていたのにも拘らず爆発が起き直撃こそ免れたが激しい衝撃に皆弾き飛ばされた。

ロイド「ま、まさか……設置系の粉塵爆破、かよ…」

エリオ「ううぅ……」

フェイト「エリオ……くっ！！」

立ち上がろうとして激痛で倒れる。その彼女達に向かって突進してくる。

バルド「させる、かぁぁぁぁぁ！！！」

その射線上にバルドが立ち塞がりケルベロスを構えて受け止める。
凄まじい衝撃にバルドの体が押し返される。地面を抉りながらもそれを踏ん張り止める。
力が拮抗して行き場のない力が二人を中心に大地を砕いていく。

バルド「おおおおおおおお！！！」

雄たけびを上げてナナ・テスカトリを押し返し始めた。そして、弾き飛ばして漆黒の炎を放つ。

爆炎の中からナナ・テスカトリが飛び出しバルドに飛び掛かる。それを紙一重で避けて胴体に斬撃を入れる。バルドを潰さんと何度も前足を振り下ろしてくる。それを避けて一瞬出来た隙に入り斬り上げた。それは相手の顎を捉えその巨体が軽く浮き上がる。

バルド「吹き飛べ！！戦迅狼破！！」

狼の闘気がナナ・テスカトリを捉えて吹き飛ばす。起き上がったナナ・テスカトリが怒りの咆哮を上げる。バルドはバハムートも持ち突撃、二つの剣で連続攻撃する。ナナ・テスカトリも相手を叩き潰さんとその一撃必殺の威力を誇る攻撃を何度もして来る。バルドが二つの剣に漆黒の炎を纏わせて地面に叩きつける。地面から黒い火柱が走りそれがナナ・テスカトリに直撃した。黒い炎がナナ・テスカトリを包み込むがナナ・テスカトリが咆哮を上げるとその身を包む炎鎧が激しく燃え上がりバルドの炎を吹き飛ばした。まるで火柱の様に燃え上がる炎鎧の中ナナ・テスカトリはバルドを睨む。

暫しの静寂、そして両者は同時に駆け出し激しくぶつかり合った。

ロイド「バルドだけに戦わせるわけにいくかよ！！」

ロイドが立ち上がりその背に天使の羽を出してバルドに加勢しに突撃した。
コレットも立ち上がりアクセルモードに切り替えて突撃した。

フェイト「くっ、エリオ。行けるね？」

エリオ「は、はい……大丈夫です！！」

何時までも寝ている訳にはいかない！その思いがフェイト達に力を与える。震える足に喝を入れて立ち上がりデバイスを持つ手に力を込める。フェイト達の気配に気付いたのだろうナナ・テスカトリが咆える。フェイトとエリオはソニックムーヴを発動して一気に接近してその周囲を高速で飛び交いながら斬撃を入れる。炎鎧の力で体力が徐々に減るがそれを堪えてギリギリまで攻撃を加えた。

フェイト「これでぇぇぇぇぇ！！！！！」

ナナ・テスカトリ［ガアアァァアアアァァァ！？］

フェイトの最後の一撃がナナ・テスカトリの頭部に決まり悲鳴を上げて巨体がダウンした。
呼吸を整える為に距離を取る。再び立ち上がったナナ・テスカトリは怒りの咆哮を上げる。
粉塵を周囲にばらまきながら暴れ突進をして来た。それを避けた瞬間、ナナ・テスカトリは地面に前足を叩く様に下ろす。

すると周囲の地面が一斉に爆発、衝撃でフェイト達は飛ばされる。
体勢を立て直して得物を構える。

ロイド「くそっ！！ダウンさせても炎鎧が消えないのかよ！！」

バルド「恐らく、奴の角をへし折らねえとあれは止められねえんだろうな……」

普通のナナ・テスカトリだったらダウンでもさせれば炎鎧は暫く止められるのだがどういう訳か目の前のモンスターはダウンしてもその鎧は消えず激しく燃え盛っている。かといって今の状況ではイマイチ決め手に欠ける状態だ。どうすれば……そう思ったその時だ。

キャロ「シューティングレイ！！」

ナナ・テスカトリの胴体に光弾がぶつかる。その衝撃を受けてその方向をナナ・テスカトリが見る。
そこにはキャロが立っていた。傍らにはフリードが居らず恐らく彼女は一人で来たのだろう。

フェイト「キャロ！？」

キャロがフリードを残してきたのに驚いた。彼女のとってフリードは優秀な相棒であり彼女の攻撃の主体でもある存在だ。そのフリー

ドを置いて単身でこの激戦に参加するのは非常に危険だ。

キャロ自身も単身で挑む事の危険さは理解しているつもりだ。しかし、自分だけ休んでいる訳にはいかない。フリードに回復したら来るようにと言って傷付いた翼を治療したあと駆けつけた。

今、自分を睨みつけてくるナナ・テスカトリの殺気の籠った瞳で体が震えている。恐怖で全身嫌な汗を噴き出し背筋も凍り付きそうなほど寒くなっている。絶望的なまでの力の差を未熟ながらも感じていた。

ナナ・テスカトリ「ガアアアァァァアアアアアアアァァァ！！！」

フェイト「キャロ逃げて！！」

ナナ・テスカトリが咆哮を上げてフェイト達を無視してキャロに突進してくる。それを震える足に喝を入れて地面を蹴って回避してアルケミックチェーンを放ち拘束する。動きを封じて直ぐにシューティングレイを放つ。直撃するも大したダメージは通っていない。それどころか更に怒りを買ってしまいアルケミックチェーンを破壊したナナ・テスカトリが飛び掛かる。咄嗟に体を捩じる様にして避けるも爪が体を掠めてしまい盛大に弾き飛ばされた。

エリオ「キャロ！！」

キャロ「くあぁっ！！」

地面を跳ねる様に何度も転がった。エリオが直ぐにキャロの下に行き抱きかかえる。キャロとエリオを援護する為にバルドとロイドが注意を引き付けフェイトとコレットが駆けつける。肩を掠めたのかそこの部分だけバリアジャケットが破けて血が流れていた。コレットが直ぐに回復呪文である天使の抱擁（エンジェルインブレス）を発動する。キャロを中心に聖なる光に包まれフェイトとエリオも傷が回復していく。そこにナナ・テスカトリに弾き飛ばされたロイドとバルドも後退してきた。キャロの無事を確認してホッとするもナナ・テスカトリが突進してきたので散開する。

コレット「ロイド……！！」

ロイド「わかってる！！任せろ！！」

掛け声だけでロイドは頷きナナ・テスカトリに肉薄する。ロイドを叩き潰さんと飛び掛かる、それを紙一重で避けて地面を強く蹴り翼を斬る。斬られた衝撃に反応してそこに向かって爪を振るうが既にロイドはそこにはいなかった。

ロイド「おおぉぉぉぉ！！！極・虎牙破斬！！」

反対の位置に瞬時に移動したロイドが大きく高速に斬り上げから斬り下ろしを繰り出す。その一撃が翼に決まりその翼に生えていた爪が斬り飛んだ。痛みで仰け反るナナ・テスカトリ。

ロイド「今だ、コレット！！」

コレット「聖なる翼よ、此処に集えて神の御心を示さん、真なる力、解放せよ！！エンジェルフェザー・フルバースト！！」

コレットの天使の翼が大きくなりそこから虹色の輝きを放つ光が幾つも降り注ぐ。それはナナ・テスカトリの鎧を貫き、鱗を弾き飛ばし、肉を焼いた。明確な痛みにナナ・テスカトリは悲鳴を上げる。

フェイト「バルディッシュ！！ザンバーフォーム！！」

バルディッシュ［イエス、サー！！］

フェイト「雷光一閃！！プラズマザンバー、ブレイカァァァ！！！」

そこに続いてフェイトの砲撃が直撃。ナナ・テスカトリの体勢を大きく崩した。そして、その目の前にバルドが瞬時に移動してバハムートを構える。

バルド「こいつの一撃で終わりだ！！」

バハムート［若の前に平伏しなさい！！］

バルド「重撃爆砕！！魔王地顎陣！！」

バルドの一撃がナナ・テスカトリの頭部を捉えた。その超重量の一撃はナナ・テスカトリの頭部を地面に沈ませ、其の体を漆黒の溶岩で焼き尽くした。

ナナ・テスカトリ［ガアァァァアアアァァァ！？］

バルド「コレット！！止めだ！！」

コレット「行くよ！！宿れ拳神、轟け鼓動！！インフィニティアソウルッ！！！」

がら空きのナナ・テスカトリの腹を力一杯殴る。その衝撃でその巨体は空に舞い上がりその後をコレットも地面を蹴り流星の如く飛び上がる。その一歩だけで地面が大きく割れた。一筋の流星となった彼女はナナ・テスカトリの周りを何度も交差する様に飛び交いその度に強力な一撃を与え最後にナナ・テスカトリの真上に飛び上がり足に魔力を集中させ一条の光となってその腹に足を全力で振り下ろした。

強靭な筋肉で出来ているナナ・テスカトリの腹部をその一撃で大きく凹ませながら流星の如き速さで地面に叩きつける。地面が砕け、衝撃で粉塵となって宙に舞う。メキメキと骨の砕ける様な音が聞こえた。コレットがナナ・テスカトリの上から飛び降りて距離を取り、構える。

なんと、ナナ・テスカトリはあの一撃をくらってもなおフラフラながら立ち上がったのだ。

エリオ「あの一撃を耐えたんですか！？」

バルド「流石は古龍種、か……。だけど、もうあいつは虫の息だ。このまま放っておいても力尽きる。せめて、苦しまずに楽にしてやる……」

そう言ってバルドはケルベロスを構える。フェイトはバルドの魔力が上がるのを肌で感じた。

バルドが駆けだす。それと同時にナナ・テスカトリが大きく息を吸う。恐らく最後の一撃を放つつもりだろう。

バルド「ケルベロス！！３ｒｄフォルムだ！！」

ケルベロス「ヒ～～ハ～～！！派手に決めようぜ！！」

バルド「―アロンダイト（刃毀れせぬ不折の剣）！！」

ケルベロスの黒い刀身が白に変わり柄が金色に変わった。その美しい剣からは魔力が溢れだす。

そのバルド目掛けてナナ・テスカトリは最大出力の火炎放射を放つ。それは、飛竜種ですら易々と呑み込む事だ出来る程の巨大な炎となってバルドやその後ろにいるフェイト達も焼き尽くさんと迫る。

バルド「撃ち砕け！！轟爆烈衝破！！！」

アロンダイトを振り下ろす。刀身から凄まじい光の奔流が放たれ火炎放射とぶつかり合う。
暫し拮抗し相殺する様に大爆発を起こしバルドとナナ・テスカトリを爆炎に包みこんだ。

バルド「おおおぉぉぉぉぉ！！」

その爆炎を突き破ってバルドが姿を現す。そして、アロンダイトを振り上げる。

バルド「これで、終わりだあぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

全力で振り下ろしたそれはナナ・テスカトリの頭部を捉えその象徴たる冠を叩き斬った。

ナナ・テスカトリ［アガアアァァアアアァァァグアアアァァァァ……！！］

天を仰ぎ断末魔の叫びを上げてその巨体が崩れ落ちた。

フェイト「倒した……？」

ロイド「多分な……」

強敵の撃破を確認してホッと息を吐く。すると、体から急に力が抜けて地面にへたり込んでしまった。
極度の緊張と恐怖に晒されて体が限界近くになって悲鳴を上げたのだろう。
エリオもキャロも似たような状態になっている。だが、何時までも休んでいる訳にもいかない。
まだテオ・テスカトルと本命のギガベロティヌスが残っているのだから……。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

バルド達がナナ・テスカトリを撃破した丁度その頃、はやて達の方は……

ギル「フハハハハ！！」

シリウス「……」

上空で高速で交差する二つの閃光、シリウスとギルだ。ギルがシリウスに向かって拳を打ち出す。

それを掌を当てて軌道をずらし逆に頭に向かって回し蹴りを入れる。
ギルはそれを逆の手で受け止め弾く。そのまま高速の拳と蹴りの応酬が続く。ぶつかる度に空気が振動する様な鈍い音が響く。そして、互いに回し蹴りをしてぶつかった反動を利用して距離を取った。

ギル「ほぉ、この攻撃をも受けきるか……。中々楽しいなぁ…！！」

シリウス「俺はあんまり楽しくないなあ。だって、つまらないんだもん」

ギル「なに～？つまらないだとぉぉぉぉ！！」

シリウス「うん」

額に青筋を立てて怒りを露わにするギルをシリウスは馬鹿にしたように欠伸をする。

ギル「……いいだろう。それなら、もっと楽しませてやるよぉぉぉぉ！！！！行け、ラグナロクシューター！！！」

ギルの周囲に三つの赤、青、黄色の光弾が出現してシリウスに向かって放たれる。
それは砲撃を放ちながら螺旋を描く様に迫って来た。シリウスはそれを回避する。その彼の後を追跡する様に動き、砲撃を連射する魔力弾。

ギル「これで如何だ!!フレースヴェルグ・アロウ!!」

更にギルは範囲殲滅魔法を使ってきた。しかもその矛先はシリウスではなくはやて達の方に向けた。

シグナム「なにっ!?」

自分達に驚異の弾幕が降り注いできた。このままでは直撃してしまう。その時だ、シリウスが一瞬ではやて達の前に立ち塞がる。

はやて「シリウス君!?」

シリウス「はやて達はやらせないよ。けどまあ、これは凄いなあ…」

はやてにはシリウスが未だ本気を出していない様な感じられた。そして、シリウスから魔力とは違う何か得体の知れない力を感じた。はやての背筋に寒気が走る。彼女だけでなくそれはシグナム達も感じた様で顔が強張っている。

シリウス「久々に使うけど…五行方陣、水天」

そうシリウスが呟くとシリウスの前に水分が集まり仏の様な姿を形度った。それにギルの殲滅魔法が殺到する。ぶつかる度に変形して行くが直ぐに元の姿に戻り圧倒的な弾幕を耐え抜いた。

ギル「なにっ!?」

シリウス「うん、問題無いね」

ギル「なんだ今のは?今の俺が解析できないとは一体何を使った!?」

シリウス「教える訳ないじゃん」

はやて「シリウス君……」

シリウス「はやて」

シリウスが振り向く。そして、はやてに向かって微笑む。その笑顔はとても綺麗で心臓が高鳴った。

シリウス「はやては俺が守るからね」

はやて「なっ／／／／／／／／／／!?」

シリウス「あはは!やっぱりはやては可愛いねぇ～」

ケラケラと笑いだすシリウス。

シリウス「さて……行くよ？」

シリウスは地面を蹴り上空にいるギルに突撃する。『神威』を構えなにも無い空間に拳を打ち込む。
空間を転移してギルの目の前にシリウスの拳が迫る。それに驚きながらも受け流す。シリウスが高速で打ち出す。ありとあらゆる場所から拳が飛び出しギルを襲う。

ギル「なめるんじゃねえぞぉぉぉぉ！！！」

それを全て受け流してギルはシリウスに接近しレヴァンテインを模した剣を手に持ち紫電一閃を放つ。
シリウスはそれを受け流してそのまま流れる様に体を動かして回し蹴り、ギルの腹に突き刺さり吹き飛ばした。体勢を立て直している間にシリウスは幻術『夢幻』を発動、無数のシリウスがギルを取り囲む。そして、一斉に連打。ありとあらゆる方向から拳がギルに襲いかかる。それをギルは自身を中心に魔力を爆発させ周囲を吹き飛ばす事で全て防ぎシリウス達を吹き飛ばす。更にフレースヴェルグ・アロウを発動、幻術で出来たシリウスを全て撃破する。

はやて「凄い……」

それを見たはやてはそう呟くしかできなかった。自分が、家族が一斉にかかっても勝てなかった相手にシリウスはたった一人で戦っている。思わず手を強く握りしめる。ハッキリ言えば悔しい。自分の家族の仇である相手に全く歯が立たずむしろ家族を殺されかけ助けられた。周囲からは「歩くロストギア」なんて言われていたりもしたその力があっさりと敗北した。

はやて（うちは…うちは……）

復活した闇の書にすら勝てずになにが家族を守るだ！！十年前よりも強くなった筈なのに未だにその力に対抗できない。悔しかった。夜天の力が通用しない事が、それどころか危うくシグナム達が闇の書に捕り込まれる所だった。

シリウスが来なかったら自分は負けた……。強くなりたい、家族を安心させられる位に……その思いは強くなるばかりだ。上空で戦うシリウスを見る。魔力で出来た美しく輝く黄金の尾が見える。六つの尾はそれぞれ意思を持っているかの様に時折り動く。それを見ていると何かが体の奥底で燻ぶる様な感覚が感じられた。

はやて（な、なんやこの感覚ｈ――）

それに疑問を感じた瞬間、はやての心臓が高鳴ったと同時に頭痛が生じた。

はやて「あ、ぐあっ！？」

ヴィータ「はやて!?」

アイネ「主!!」

シグナム「どうしたんですか、主!!」

突然の頭痛にはやては倒れ喘ぐ。熱せられた鉄の棒を頭の中に突っ込まれて掻き回されたかのような激痛にシグナム達に返事すら出来なかった。そして、網膜の裏側に何かが映し出される。

多くの男性が一人の男性を取り囲み札を構えている。それに対してその中央にいる男性はニヤリと笑い次の瞬間、周囲の男性が吹き飛ばされた。何かを呟きその場を去る。それからも映し出されるのは戦い、戦い、戦い。その光景が次々に現れるのだ。

はやて（な、なんなんやこれは……!?）

知らない光景に戸惑いながらもはやての意識は徐々に薄れていきそのまま暗闇に包まれた。

## 第四十四話（後書き）

如何ですか?今回シリウスが新技を出しましたね。

クラウド「五行方陣だっけか?どんな能力なんだ?」

それは、まだ詳細を語る事は出来ないんですよ。色々とあるんで……。

さて、この戦いは次回辺りで終わりかな……?

バルド「確証がないのに言うんじゃねえよ……」

読者の皆様、前書きにも書いたとおり現在、作者は非常にリアルが忙しい状況です。もう、課題を片付けても片づけても湧いて出てくるんですよ!!もう、なんなんだよこの忙しさは!?という訳で次回も一週間以内には投稿しようとは思いますが…時間作れるかな?っという状態です。気長に待っていてくださると嬉しいです。

シリウス「誰も待ってはいないと思うよ?」

黙らっしゃい!!それでは、皆様これからも宜しくお願いします!!

一同「大いなる力で未来を切り開け!!」

# 第四十五話（前書き）

遂にモンハンの世界での戦いもこの回で終了です。
そして、今回はセフィリアとガルドが新たな力を見せます！！

クラウド「それは？」

それは本編を見てのお楽しみ！！では、どうぞ！！

# 第四十五話

クエスト名　『決戦、腐蝕龍ギガベロティヌス』

参加メンバー

高町なのは
カイン・レオンハルト
スバル・ナカジマ
ティアナ・ランスター
フェイト・T・ハラオウン
エリオ・モンディアル
キャロ・ル・ルシエ
バルド
ロイド・アーヴィング
コレット・ブルーネル
セフィリア・ドム・バロム
ガルド・ドム・バロム
クラウド・ケリオン
ティファ・フューストン

場所　古搭　秘境最奥

出現モンスター　ギガベロティヌス

狩り場の状況　超不安定

出現モンスター

テオ・テスカトル天種

ナナ・テスカトリ天種　撃破

ギガベロティヌスと戦うクラウド、ティファ、ガルド、セフィリアは次々に襲いかかる鋭く尖った骨。
それを掻い潜りながらクラウドが干将・莫邪を連射しティファが回避行動を取りながら鏡花・水月を撃つ。

ギガベロティヌス［アガアオアァァァァァァァァ！！！］

ガルド「絶氷槍！！」

セフィリア「烈壊桜！！」

ガルドの一撃とセフィリアの衝撃波が当るが全く反応を示さない。その二人に肋骨の一部が伸びて襲ってくる。セフィリアが飛び乗りガルドは盾で受ける。セフィリアが肋骨の上を駆け上る。その彼女に幾つもの骨の槍が来るがそれを剣で弾き、受け流し捌き切れないものは体を捻る事で回避して飛び上がった。

セフィリア「冥斬封！！」

何度も剣で斬り付ける。最後の一撃を加えたあと後退する。そのセフィリアを囲む様に肋骨を伸ばしてきた。

セフィリア「朧月夜！！」

それをセフィリアはその場で回転して剣で全て弾き飛ばす。代わる様にクラウドが接近して干将・莫邪を連射する。

クラウド「ツインバレット！！続けて撃ち込む…アサルトバレット！！」

高速連射で敵の注意を引き、更に前進しながら連射する。

クラウド「撃ち貫く……バーストバレット！！」

ギガベロティヌス「アガアアァァァァアアアァァァァ！！？」

バスターモードに切り替えて特大のビーム攻撃をする。それが胸部に直撃してギガベロティヌスは悲鳴を上げて仰け反る。追撃を加える為ティファが接近、ロングライフルを構えドラグーンを射出、その巨体を支える足の関節を狙う。

ティファ「精密射撃……マーレシスハント！！続けて撃ち込む、ブルータルハント！！」

幾つものビーム攻撃は正確にギガベロティヌスの関節に命中する。ティファを叩き落とそうと鋭い爪を振るう。それを回避して腰に装備している蒼・莱を放つ。爆炎を突き破って無数の岩塊が迫るがティファはフルバーストを放ち全て破壊する。

セフィリア「まるでダメージが通ってない！？」

ガルド「体力はラオシャンロン級だな！！」

ギガベロティヌス「アガアァァァァァァァァァァ！！！」

まるで効いてない様に暴れる。そして、戦いの中で気づいた事がある。先程吹き飛ばした腐肉が少しずつだが攻撃を受けていない所か

ら集まり覆い始めているのだ。厄介な回復力だ、とガルド達は思いながら再び攻撃を再開した。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

粉塵が舞い周囲が爆発する。肌が焼けるかのような熱風が吹き荒れる。テオ・テスカトルが暴れる度に周囲で爆発が起きなのは達の動きを制限する。なのはの魔力弾が飛び牽制する。意識がなのはの方を向いた隙にカインが肉薄して斬撃を加える。斬られた所を爪で薙ぎ払いカインを切り裂こうとするが既に彼は距離を取って回避していた。そこをティアナが魔力弾を放ち頭部に当てる。

ティアナ（やっぱり、頭部に当てた方が威力が落ちていない！！）

彼女は、戦っていて気付いた事がある。身を守る為に展開されている炎鎧と風圧だがそれは頭部だけはその守りも薄くダメージが効率よく通る事が分かった。だが、それを行うには敵の正面にわざわざ立たなければならない。そんな事をすれば間違いなく標的にされてしまう。ただでさえテオ・テスカトルの放つ殺気に体が震えているのにその前に立ってあの眼で睨まれてしまえば体が固まってしまうだろう。

その事が分かっているからこの濃厚な殺気の中、素早く動け、接近できるカインに頭部を攻撃する役をやってもらっている。まあ、カインばかりにやってもらっている訳ではないが……。

ティアナは幻術で仲間に被弾率を下げ、スバルはその機動性を活かして相手の懐に潜り込んだり攪乱させ、なのはが遠距離から砲撃し、カインが接近戦で相手の鱗を斬る。ティアナが魔力弾を放ち牽制、守りの薄い頭部に当てる。テオ・テスカトルがそれに反応してティアナに突進する。その突進を受けたティアナは霞の様に消えた。幻術に惑わされ彼女の姿を見失ったテオ・テスカトル、その背後にティアナは回り込んでいてそこから魔力弾を連射、尾に弾幕を集中する。背後の敵を倒すべく振り向こうとしたテオ・テスカトルになのはの砲撃が側頭部に直撃その巨体を揺らす。その方角を見る。そこをスバルがなのはをテオ・テスカトルの視界に入らせない様に接近する。テオ・テスカトルはスバルがさっきの攻撃した敵と判断し鋭い爪で切りかかるがウィングロードを上手く操って体を捻る様にしてそれを回避する。隙が出来る。そこにカインが肉薄し炎鎧ごとその鱗を斬る。一振りで幾つも斬撃を打ち込み大気に血が舞う。テオ・テスカトルがカイン目掛けて爪を振り上げて叩きつける。それを紙一重で避け、地面を強く蹴り飛翔、テオ・テスカトルの真上に飛び上がりそのがら空きの背中に三日月状の衝撃波を幾つも叩きつける。

怒りに燃えるテオ・テスカトルが周囲に粉塵を巻き上げる。歯と歯を打ち鳴らす。周囲が爆発に包まれあらゆるものを破壊する。衝撃で弾かれたカインは空中で体勢を立て直して着地、そのカインにテオ・テスカトルが突進する。周囲を爆発させながら突っ込んで来るその攻撃をギリギリで避ける。通り抜けた場所はまるで絨毯爆撃でもされたかのように地面が抉れる。

カイン「壱の太刀、朧！！」

カインの姿が一瞬で消え、次の瞬間にはテオ・テスカトルの背後に立っている。刀を軽く振るうとテオ・テスカトルの体に横一文字の傷が走った。悲鳴を上げるテオ・テスカトルに追撃するべくカインは魔力を爆発させ肉薄、鱗を弾き飛ばす。

テオ・テスカトル［ガアアァァァアアアアアァァァ！！！！！］

粉塵が周囲に舞い散る。カインは一端距離を取る為に後退する。またあの粉塵爆破が来るとなのは達も警戒しそれぞれ回避の準備に入った。宙を舞う粉塵。それを見てカインは嫌な予感がした。

カイン（なんだ？粉塵の量がやけに多い…？）

目の前に舞う粉塵の量が通常の倍以上舞っているのに気付いた。

カイン「まさか…っ！！」

テオ・テスカトル［ガアアアアアアァァァアアアアアアァァァ！！！！］

カインが動きなのは達の前に障壁を張る。それと同時にテオ・テスカトルが歯を打ち鳴らす。周囲を破壊する爆発が起きる。だが、それだけでは終わらなかった。なんと、テオ・テスカトルはもう一度

歯を打ち鳴らした。すると更に威力の上がった爆発が起きる。更にもう一度大きく打ち鳴らす。今度は大爆発を起こし全方向に暴力的な凄まじい熱と衝撃の壁が広がった。障壁がギリギリまで耐えて弾け飛ぶ。その衝撃でカインが吹き飛んだ。

カイン「ちっ！！参段式の粉塵爆破か！？」

なのは「カイン君！！」

咄嗟にカインが動きなのは達の前で防御壁を展開していなければ彼女達は全員弾き飛ばされていただろう。一人だけ衝撃で吹き飛んだカインは体勢を立て直して悪態を吐いた。そこになのはの声が聞こえテオ・テスカトルの方に意識を向けると此方に向かって突進してきているのが分かった。回避行動が間に合わない！！

カイン「くっ……！！」

なのは「危ない！！」

そこになのはがカインごと地面に倒れる様にして抱き着く。そのお陰で突進の射線上からギリギリ避ける事が出来た。しかし、テオ・テスカトルの攻撃はまだ続き自身の周囲に粉塵を纏わせる。

カイン「まずい……！！」

カインが無理な体勢でそこから後退する。それと同時に粉塵爆破が起き衝撃波で二人は吹っ飛ぶ。
なのはを包むよう抱きしめて地面を何度か転がって止まった。

カイン「痛たた……なのは、だいじょうｂ――」

視界がグルグルしている中、なのはの無事を確かめようと起き上がろうと地面に手を置こうとした時だ……

――フニャ――

なのは「ふにゃあっ！？」

何か柔らかい感触となのはの驚いた様な声が聞こえた。何だこの柔らかいのは？取り敢えず握ってみる。

――フニフニフニ……――

なのは「やっ、カ、カイン君／／／！！そ、そこ握っちゃ…やん！だめ、あんっ！なの／／／／！！」

なのはの艶っぽい声が聞こえる。そして、グルグルと回っていた視界が元に戻り改めて今の現状を確認すると……。

目の前になのはの真っ赤な顔がある。

←

なのはに覆いかぶさっている自分…押し倒しているみたいだ。

←

なのはの豊かな（自主規制）を鷲掴みにしている自分↑今此処!?

何と今自分はなのはの豊かなおっｐ…ゲフンゲフン!!を鷲掴みにしているではないか!!?

何とも羨ま…ゲフンゲフン!!けしからん!!

カイン「あ、いや、なのは。これは…その…」

なのは「カ、カイン君の…バカ～～／／／／／／／／!!」

カイン「いて!いてて!!ちょっ、なのは落ち着け!!レイジングハートで叩くなって!!いてっ!!」

なのは「バカバカバカバカバカ～～／／／／／／／／!!!!」

レイジングハート「マ、マスター!気持ちは分かりますが、落ち着いてください!!」

恥ずかしさに真っ赤になってポカポカとカインを叩くなのは。

やべ～よ、なにこのバカップル…戦場でいちゃついてるよ……。

テオ・テスカトル［ガアアァァァアアアアァァァァ！！！］

カイン「うおっ！？あぶねえ！！」

生死を分ける戦いの中で乳繰り合う二人に怒り心頭のテオ・テスカトルが突進してくる。
慌ててなのはをお姫様だっこして飛び退き回避する。
テオ・テスカトルは二人に狙いを何度も飛び掛かってくる。遂に敵の方が早く行動してきた。

回避が間に合わない！！直撃するかと思ったその時…

？？？［グオオオオオオオオオオオオオ！！！］

上空から雄たけびが聞こえそれと同時にテオ・テスカトルの体が横に吹っ飛んだ。
そして、カインとなのはの前に降り立つのは銀に輝く鱗に包まれた竜王と金に輝く竜妃だった。

カイン「レイ、レン！！」

リオレウス希少種ことレイとリオレイア希少種のレンだった。自身のやるべき事を片付けて此処にやって来たようだ。二頭は咆哮を上げて炎王龍を威嚇する。

格下の飛竜種に一撃をくらって怒りを爆発させたテオ・テスカトルが咆哮を上げる。自身を包む炎鎧が激しく燃え上がる。地面が砕ける程の衝撃波となった咆哮が轟く。テオ・テスカトルが地面を蹴って突進してくる。レイも地面を蹴って駆け出す。二頭は全くぶれる事なく正面からぶつかり合う。互いを押し合いその力は拮抗していた。レイは急に首を引っ込める。それによってテオ・テスカトルが前のめりになりそこにレイが回転して尻尾で殴り付ける。そのまま鋭い棘の付いている尾を見せつけながら吼える。まるで「どうだ？」と言っているかのようだ。

テオ・テスカトルは頭を何度か振るったあと吼える。レイも再び向かい合い口を大きく開きそこから炎を溢れさせながら威嚇する。両者は再び頭突きする様に互いの頭をぶつける。何度かぶつかり合ったあとテオ・テスカトルがその鋭い爪で切りかかる。それを受ける。火花が散る。レイは後方に飛び退きながら火球を吐く。それがテオ・テスカトルに直撃、爆炎に包まれる。それを突き破ってテオ・テスカトルが突進してきた。それをレイの後方から突進してきたレンがぶつかる事で止めた。陸の女王たるその力を存分に発揮し大格差をものともせずに押し返す。少しばかり踏鞴を踏んだテオ・テスカトルにレンが口から炎を溢れさせるほど息を溜め撃ち出す。それは周囲を吹き飛ばす程の破壊力を秘めた火球となりテオ・テスカトルに直撃し大爆発を引き起こした。

これには流石に効いたらしく悲鳴を上げて仰け反る。するとテオ・テスカトルは空に舞い上がる。
レイもレンも翼を広げて飛翔する。そこで始まるのは空の大演舞。

テオ・テスカトルが飛び掛かる。レイは空中で体の向きを変えてそれを避けてそのまま通り過ぎたテオ・テスカトルに向かって火球を放つ。それをテオ・テスカトルも避けて再び接近する。レイが更に高く舞い上がる。そして、死角からレンが姿を現しその場で回転、尻尾で殴り付ける。リオレイアの得意とするサマーソルトだ。それがテオ・テスカトルの顎を打ち上げ体勢を崩させる。そこに、空中からレイが急降下。その足に生えた爪をテオ・テスカトルの背中に突き刺す。リオレウスの足の爪には強力な毒がありそれで獲物を弱らせる。押さえ付けたまま地面に落ちる。砂煙の中でレイとテオ・テスカトルがぶつかり合う。

なのは「これが……モンスターの戦い」

ティアナ「凄い……」

激しくぶつかり合う両者を見て思わず呟く。レイが空に舞い上がり代わりにレンが地面に降り立ち突進、テオ・テスカトルは息を大きく吸い込み巨大な火炎放射を放って来た。それは、レンの巨体をも飲み込む程の大きさでカイン達は回避する為に空に舞い上がる。炎に包まれたレンだがその中を突き破って突進を継続していた。そして、目の前まで来て急停止、そこからサマーソルトを繰り出す。顔面に直撃して踏鞴を踏んだ。空中に舞い上がったレイは更に空高く飛び上がり雲を突き破り翼を大きく広げた。その銀の体を照らすの

は輝く太陽、その身に光を集める。口から零れる程の炎を溜め、首を持ち上げる。そして、地上にいるテオ・テスカトルに向かって吐き出した。

雲を吹き飛ばし太陽をそのまま落とすかのようなそれ程に巨大な火球が落ちて来る。レイの使う技『ソルフレア』だ。レンがそれに合わせる様に空に舞い上がってその下から逃れる。火球がテオ・テスカトルを呑み込み、大爆発。巨大なキノコ雲が立ち上る。爆炎の中、テオ・テスカトルが姿を現す。その身がボロボロになってもその瞳には敗北の意思は全くない。

カイン「なのは、ティアナ、スバル！！これで決めるぞ！！！」

なのは「レイジングハート、ブラスター１！！」

レイジングハート［イエス、マスター！！ブラスター１！！］

ティアナ「タイミングを合わせるわよ、スバル！！」

スバル「任せてよ！！」

カイン「これで終わらせる！！天光煌めく邪を祓う光の御剣よ、我が名の下に降臨し悪しき者全てを浄化せよ、その雷は全てを天へと還す最後の裁きなり！！天の裁きを受けろ！！ファイナル、バニッシュメントオォォォォ！！！」

カインの頭上に超巨大な魔法陣が出現する。それは淡い紫の輝きを放っておりそこからは紫電が奔っていた。そこからテオ・テスカト

ルに向かって巨大な雷が落ちた。それだけで街を消し飛ばすのではないかという程の光りがテオ・テスカトルを包み込んだ。地面が吹き飛び空に舞う。その煙の中からまだテオ・テスカトルが立っているのが見えた。

なのはがブラスターシステムの一段階を開放し魔法陣が出現する。複数のブラスタービットを周囲に展開しレイジングハートを構える。照準の先には爆炎の中から雄たけびを上げて此方を睨むテオ・テスカトルがいる。あれ程の一撃をくらっても尚その姿は威風堂々としておりその身に纏う炎鎧は激しく燃えており龍鱗は焦げてはいるがそれでも身を守る機能は保たれている様だ。

モンスター界の頂点に君臨する古龍種、その絶大な力に心の中で感嘆する。

だが、自分達はそれに打ち勝たなくてはいけない。この先待っているのは使徒と次元海賊との激闘の筈だ。此処で足踏みをしていては絶対に乗り越える事は出来ない。ならば、撃ち破るのみだ！！

なのは「行くよ、ティアナ、スバル！！」

ティアナ「はい！！全力……！！」

スバル「全開！！……」

なのは「スタアァァァァライトオォォォォォォ……」

な・ティ・ス「「「ブレイカアアアアアアアアアッ！！！！」

」」

三人の魔力が一つとなり巨大な砲撃となって地上に向かって奔った。
周囲の空間すら揺るがすだろう強大な質量となった砲撃はテオ・テスカトルを呑み込み地面に突き刺さる。

な・ティ・ス「「「いっけえぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！」」」」

テオ・テスカトル［ガアアァァァアアアアアァァァァ……！！］

断末魔の咆哮すら掻き消す程の爆発が起こる。砂煙が風で飛ばされる。そこには地面に倒れ伏したテオ・テスカトルがあった。

なのは「た、倒したの？」

カイン「みたいだな。お疲れさん…っと言いたいところだが、まだあるか…」

そう、まだ戦いは終わっていない。討伐対象である腐蝕龍『ギガベロティヌス』がまだ残っている。
戦闘の疲れを拭いたいところだが休む訳にはいかない。そこに、フリードも怪我から回復したのでなのは達の下に向かっていたフェイト達が合流して全員でガルド達の下に向かった。

ガルドは目の前に迫る巨大な骨となった尻尾の一撃を自身の盾で受け止める。その隙にセフィリアが裂空刃を繰り出す。鋭い爪が迫るそれを身を捩じって避け、その爪の間を潜り抜けたクラウドがバスターモードに切り替えた干将・莫邪で撃つ。爆炎の中から口を大きく開いて来る。それを回避してティファが鏡花・水月をロングライフルモードに切り替えその目に向かってビームを放つ。それが直撃した。悲鳴を上げて二本足で立ちあがる。流石に目のダメージは無視できない様だ。

カイン「皆無事か!?」

ガルド「ボチボチってところだな。そっちは、倒したんだな?」

バルド「ああ、残るは…こいつだけだな」

カイン達も合流する。目の前に立ち塞がる巨体。所々焦げた跡があるが全く疲労を見せていない。
その目は爛々と輝いており口からは腐臭が絶えず漏れる。

なのは「こんな大きいのどうやって倒すの?」

カイン「別に倒す必要はない。適度に痛めつけて人の暮らす集落に近づかせない様にすればいい」

ガルド「それはいいんだが……」

そう区切ってカイン達を見てガルドが不敵に笑う。

ガルド「別にあれを倒してしまっても良いんだろ？」

バルド「まあな。俺たちなら出来そうだしな」

それにバルドも不敵な笑みを浮かべて答える。ケルベロスとバハムートを構える。それぞれ得物を構えて散開する。ギガベロティヌスがその巨体に見合わない速さで突進する。地上を駆けるロイドとコレットは地面を蹴って上空に飛び上がる。その二人に立ち上がって肋骨を伸ばしてくる。その攻撃をロイドが受け流しながら接近する。その後をコレットが続く。

ロイド「くらえ！！極・魔神剣！！」

コレット「リュミエレイヤー！！」

大きめの衝撃波と三つのチャクラムが直撃する。胸を包む黒い霧を通り抜けて当る。続けてフェイトとバルドが接近、魔力弾と同じく衝撃波を放つ。更になのは、カインが魔力弾と剣閃を放ち、ガルドとセフィリアが氷弾と斬撃を放つ。幾ら頑丈な骨で身を守っていたとしてもその間を縫ってくらっては堪えるだろう。内臓器官に諸に

くらって悲鳴を上げる。反撃とばかりに足を持ち上げ地面を強く叩く。衝撃波が広がりロイドとコレットは吹っ飛ぶ。そしてその場で回転、巨大な尻尾が振り回される。接近していたクラウドとティファがそれを避けきれずにシールドで防御するも凄まじい衝撃に弾き飛ばされた。

更に拡散する雷撃を口から放つ。それをバルドはケルベロスで防御しフェイトはソニックムーヴで回避する。仁王立ちになり肋骨を展開して打ち出す。カインはサイフォスで受け流しなのははプロテクションで受け止める。そして、ギガベロティヌスはその巨体で飛び上がり地面に落ちる。地面が割れティアナやガルド、セフィリアの動きを制限し突進してくる。

ティアナ「っ！！」

ガルド「どけっ、ティアナ！！」

ガルドがティアナを突き飛ばし盾を構える。勢いのついた突進をまともに受けてガルドは押し負けてそのまま岩の壁に激突する。

セフィリア「ガルド！！」

ガルド「ちっ！なめるなあぁぁぁぁぁ！！」

ガルドの体から群青の魔力が溢れ立ち上る。岩の壁からガルドはその身を出し、今度はギガベロティヌスの巨体を押し返す。左手に持つパラディンランスを消し、その左手を岩の壁に翳す。

ガルド「原子よ、我が前にかの武器を生み出し給え、その刃生み出されし理由を破棄し唯その性能のみ我は求める！！こい、必中の光（ブリュナク）の神槍！！」

岩の壁が粒子状になり槍の姿を形作る。白く輝き穂先は五つに分れた銛の様な形をした槍となりガルドがそれを掴むと光り輝き五つの光の槍となりその中で一番大きな槍をガルドが持ち残りが宙に浮いた。

ガルド「その力、奴に見せつけろ！！」

宙に浮いていた四つが飛翔して肋骨に突き刺さり爆発した。

ギガベロティヌス［アガアアアァァァオオアァァァァ！？］

悲鳴を上げて仰け反る。直撃した部分を見るとひび割れているのが見えた。ガルドが飛び上がり投擲する構えを見せる。

ガルド「くらえ、烈光神破槍！！」

一条の光となり槍が放たれる。それは内臓器官に吸い込まれる様に

飛び突き刺さり爆発。聖なる光が敵を焼く。鮮血が飛び散り骨が欠けて周囲に飛び散る。肋骨の数本が折れて地面に落ち突き刺さる。

ギガベロティヌス「アガアオオアァァァァァァァ！！！」

再び怒り、超大咆哮する。衝撃波で全員が吹っ飛ばされた。

ロイド「くそっ！どれだけ体力があんだよ！！」

このままだと体力負けでジリ貧だ。どうすればいいか……。

ガルド「……セフィリア」

セフィリア「うん、私も同じ考えだよ」

フェイト「セフィリア？」

セフィリアとガルドが前に歩き出す。

セフィリア「行けるよね、ガルド？」

ガルド「ああ、俺達の絆の力、魂の力見せてやるぞ！！」

セフィリアから銀色の魔力が、ガルドから群青の魔力が溢れ空に昇る程のものとなる。そして、二人の魔力が混じり合い始める。二人から発せられる波紋の様なものが周囲に広がった。その波紋がなのはとフェイトを通過した瞬間、二人の体が脈動した。

なのは（なんだろう……。これ……？）

フェイト（体の奥が……熱い…？）

なのはとフェイトは胸の奥底から湧き上がる感覚に戸惑った。まるで、目の前で起きている現象に自分も反応しているかのような…熱く焦がすかのような、体が鳴動する様な感覚が起きた。

セ・ガ「「魂と魂の開放!!共鳴(レゾナンス)!!」」

二人が光りに包まれる。そして、それは一つとなりその中から黒い髪と目となったセフィリアが一人立っていた。彼女から溢れる魔力は凄まじくそれだけで大地が振動している。

フェイト「あれは……？」

ティファ「共鳴(レゾナンス)。共鳴者同士が魂と魂を一つにする究極の力」

なのは「共鳴(レゾナンス)……」

つまり、今立っているセフィリアはガルドと魂を一つにしているという事だ。セフィリアが地面を蹴る。その瞬間、彼女の姿はギガベロティヌスの目の前にいた。そして、そのまま空中で回し蹴り、それがギガベロティヌスの頭部に当った途端、その巨体が吹っ飛んだ。

ティアナ「速い！？」

スバル「それに凄いパワーだよ！？」

ロイド「二人の力が合わさって互いの力を高め合っているから今の二人の力は数倍以上に膨れ上がっているんだ」

セフィリアが足裏に溜めた魔力で空中に足場を作りそれを蹴って高速接近。態勢が整っていないその巨体に更に蹴りを打ち込みまくる。当る度に鈍い音が鳴る。ギガベロティヌスは痛みを無視してその鋭い爪で切り裂こうとする。

セフィリア「我が身を守れ、矛盾の盾（イージス）！！」

彼女の前に盾が出現しその攻撃を受け止める。そして、セフィリアは身を屈めて鞘に収めていた剣の柄に手を添える。

セフィリア「神速一閃、葬刃！！」

目にも止まらない神速の抜刀技が放たれる。なのは達にはセフィリアは声を発しただけにしか見えないが耳にキンッ！と剣を鞘に収める音が聞こえた。それと同時に…ギガベロティヌスの右足に生えていた鋭い爪が両断され地に落ちた。

セフィリア「我が身の矛となれ！！遍く槍達よ！！」

セフィリアの周囲に粒子が集まりそれが幾つもの槍となった。

エリオ「あれは……ガルドさんの力！？」

クラウド「レゾナンスの力の一部、共鳴者同士は一部だがお互いの力を使用する事が出来る。つまり…今のセフィリアにはガルドと同じく盾と槍を生み出す力が使える」

ギガベロティヌスが腐蝕の毒液を吐く。それを回避して槍を放つ。そして、抜刀して剣に炎を纏わせ斬り上げの要領で火柱を撃ち出す。槍と火柱の直撃を受けて悲鳴を上げて仰け反る。頭部にあった角の一本がへし折れた。自慢の角を折られて眼をギラギラと輝かせて怒りを露わにする。強靭な尻尾を振るってセフィリアを弾き飛ばそうとしてくる。彼女はそれを剣で受け止める。火花を散らし互いに一歩も動くことはない。

セフィリア「はあっ！！」

気合の声と共にセフィリアが尻尾を弾いた。瞬時に相手の懐に潜り蹴り上げる。

セフィリア「遠慮はしません！！斬空塵無刃衝！！！」

蹴り上げた相手を蹴り落とし更に蹴飛ばす。そして、瞬時に接近し通り過ぎざまに抜刀、たった一振りで無数の剣閃がその巨体に奔る。骨が砕け破片となり舞う。破片が散っている中、セフィリアは術の詠唱を始める。

セフィリア「其は竜を貫く暗雲を退ける光となり、我らに勝利をもたらせ！聖剣、ドラゴンスレイヤー！！」

虚空より赤黒い色をした巨大な剣が出現しその周囲にそれを小さくした様な剣が囲むように現れる。

中央にあった巨大な剣が撃ち出されギガベロティヌスの体を貫く。続いて小さな剣が一斉に放たれその体に傷をつけていく。剣に貫かれながらもギガベロティヌスは腐食毒を吐く。術硬直で動きの止まっていたセフィリアは回避が間に合わない。このままでは直撃してしまう、そう思ったが…

セフィリア「はあぁぁっ！！」

全身に魔力を通わせてそれを周囲に纏う。圧倒的な魔力は質量を持ち腐食毒を防ぐ鎧となる。
魔力を爆発させ付着した毒を吹き飛ばす。魔力の爆発によって生じた衝撃はなのは達にまで届きその魔力量がどれ程のものかを知らしめた。あまりの量に背筋が凍りつくかのように冷えた。

セフィリア「魔界に住まう我が従属よ、門を越え我が前に顕現せよ！！サモンデーモン！！」

セフィリアの背後に巨大な魔法陣が出現する。それは、中央から徐々に円を描くように開きその中から巨大な、まさに悪魔を表現したかのような怪物がその半身だけ姿を見せる。

悪魔「メッセヨ……」

そう呟き右手の人指し指と中指をクイッと上げるとギガベロティヌスの足元に巨大な魔法陣が出現し、そこから凄まじい質量をもった青黒い魔力の塊が噴き上げる。青黒い光に飲み込まれ悲鳴を上げるギガベロティヌス。

光の奔流が収まり悪魔は出てきた門の中に戻っていく。ギガベロティヌスはボロボロの状態ではあるがその巨体は全くぶれる事無く立っている。

セフィリア「まだ倒れない……。なら、みんな！！今から最大級の魔術を使う。手を貸して！！」

バルド「行くぞ、フェイト、エリオ、キャロ！！」

フェイト「うん！！」

エ・キ「「はい！！」」

カイン「一気に終わらせるぞ！！」

なのは「わかったの！！」

ティアナ「遅れるんじゃないわよ、スバル！！」

スバル「任せてよ！！！」

セフィリアの足元に純白の魔法陣が出現し詠唱が始まる。

セフィリア「無数の煌めきよ、時空を超え、空間を超え、彼の地より降り注げ……」

詠唱はまだ続く。ギガベロティヌスはセフィリアに向かって巨大な尾を振ってくる。それをバルドがバハムートで受け止める。カインが幾つもの三日月状の斬撃を放ち牽制する。

フェイトがソニックムーヴを発動し真上に移動する。そして、ライ

オットフォームに変わり二つの剣を一つにして巨大な大剣にする。
エリオがその間に接近して紫電一閃を繰り出し、ギガベロティヌスの頭部を斬る。それが運良く相手の目に命中してギガベロティヌスは悲鳴を上げて仰け反る。その隙を逃さずスバルが一気に距離を詰めてリボルバーナックルを強く握り全力で拳を右の後ろ脚に叩き込みそのままゼロ距離でディバインバスターを放つ。バランスを崩して地面に倒れる巨体に向かってティアナが魔力弾を展開し一斉に放つ。その全てが内臓があるだろう黒い靄の中に吸い込まれるように入っていき中で爆発する。

なのは「フェイトちゃん！！」

フェイト「こっちは何時でもいいよ、なのは！！」

なのは「行くよ！！全力全開！！スターライトォォォォ……！！」

フェイト「雷光一閃！！ライオットザンバァァァァ……！！」

な・フ「「ブレイカアァァァァァァ！！！！！」」

二人の最強の砲撃が放たれる。二つの砲撃は一つとなりギガベロティヌスの肋骨を破壊して中心部に直撃した。

ギガベロティヌス「アガアオァァァァァァァ！！？」

セフィリア「悠久の時を駆ける彗星よ、全てを撃ち抜け！！禁呪、クレイジーコメット！！」

亜空間より数多の彗星が降り注いだ。無数の彗星がギガベロティヌスの体を撃ち抜く。

ギガベロティヌス［アギャアオアアァァァァァ！？］

天を仰ぎ悲鳴を上げる。そして、その体を構築する骨格がバラバラと崩れ地に伏した。
それと同時にセフィリアも共鳴（レゾナンス）が解除されそこにはガルドも立っており二人の額には薄らと汗が出ていた。

ガルド「倒したか……？」

セフィリア「だといいんだけど……」

完全に沈黙しているその頭骨を見る。生気も殺気も感じないことから倒したと判断することにする。

カイン「あとはシリウス達のところに急いで行くぞ！！」

それに皆は頷きはやて達の下に急いで向かった。

なのは達が居なくなって暫くして沈黙していた頭骨の目が光る。再びその体を構築し元の姿に戻る。
ギガベロティヌス、その身に危険が近づくと自ら心臓を止め生命活動を完全に停止し仮死状態になることができる。その擬態振りはゲリョスよりも完璧とされ、ハンターも気づかずそのままクエストを終了してしまうほどだ。なのは達の向かった方を一瞥し腐食龍は天に向かって咆哮を上げてなのは達とは反対の霧の向こうにゆっくりと消えていった。

---

なのは達が腐食龍を退けたころシリウスの方は……

ギル「楽しいなぁっ！！フハハハハ！！」

シリウス「……よっと！」

ギルの繰り出す拳を受け流し蹴りを同じく蹴りで受け、それと同時に放たれる魔法を青い炎で出来た狐で破壊する。

シリウス「焔よ、ファイヤーボール!!」

ギル「ラグナロクシューター!!」

三発の火球と三色の魔力弾がぶつかり相殺される。ギルが接近し魔力を纏った拳を振るう。

シリウスも魔力を拳に纏い繰り出す。二人の拳が激突し行き場のない力が衝撃波となって広がる。

たがいに高速で打ち合う打撃の雨、一進一退の攻防が続いていた。

ギル「ほう……、これも受けきるか。ならば!!」

ギルの前に魔法陣が出現する。

ギル「銀の槍よ、全てを撃ち抜け!!ミストルティン・カイ!!」

魔法陣を中心に十二本の槍が撃ち出され、その中央から巨大な一本の光の槍が放たれる。数、質共にはやての使うミストルティンとはケタ違いである。シリウスはそれを避けようともせずその場で不可思議な陣を描く。

シリウス「五行方陣、雷?（らいこう）」

陣が完成するとシリウスの身に紫電が走りその姿が一瞬で消えギルの魔法は通り過ぎて行った。
当の本人は……ギルの目の前に何時の間にかいた。…別の陣を描き終えた状態で。

ギル「なにっ！？」

シリウス「五行方陣、炎陣（えんてい）？！！」

陣がシリウスの足に張り付くとそこから紅蓮の炎が湧き上がる。それを纏ったままシリウスが回し蹴りを繰り出す。ギルはラウンドシールドを展開しそれを受け止めようとしたが、その防御を擦りぬけてその蹴りはギルの鳩尾に突き刺さった。

ギル「ぐぼぉっ！？」

シリウス「そりゃあっ！！」

そのままシリウスが振り抜きギルは地面に流星のように叩き落とされた。

ギル「ぐおおぉぉぉぉ……、何だ、今のは…！？防御魔法どころか、我が魔法鎧すら貫通してきただと……！？」

それだけではない。シリウスの蹴りをくらった時、ダメージがそのまま体の中にまで浸透していた。

シリウス「まあ、こんなもんか……。餓鬼が何時までも調子に乗るとそんな風に痛い目に遭うんだよ」

ギル「貴様、私に何をした！？」

シリウス「何って…直接内臓を叩いただけだよ。痺れるでしょ？それ、暫くは抜けないからね、ケラケラ♪」

シリウスが魔法陣を幾つも展開する。今くらえばまずい！？ギルは内心そう理解していた。

シリウス「これで……おわｒ――」

シリウスが魔法を全てぶつけようとしたその瞬間……！！

？？？「爆砕っ！！」

横からシリウスに向かって巨大な砲撃が飛んできた。それはシリウスを飲み込み爆発した。

シグナム「シリウス！！」

？？？「ギャハハハ！！一匹撃墜だぜ！！」

耳障りな笑い声が聞こえその方向を見るとグレーのコートを着た男が立っていた。
その手には歪な形をした杖がありそれから砲撃を放ったようだ。

シグナム（新手か……！？）

ヴィータ（やべえ……まだ体力が回復してねえのに…！！）

？？？「よお、ギル。随分とやられてんなあ？『闇の書』の所有者も所詮はその程度か？んん？」

ギル「黙れゴルドゥ。貴様、我の戦いに水を差すんじゃねえ」

ゴルドゥという名の男はアハハハハ！！と笑う。

ゴルドゥ「そいつは悪かったな～。生憎と向こうの奴は俺が頂いたぜ～」

ギル「……」

ゴルドゥ「あとは、そこに女共か～？」

ゴルドゥがはやて達を見下ろす。はやては気を失っているしアイネは戦闘などできない状態で実質シグナムとヴィータだけが辛うじて動けるが、相手は新手と手負いながらも闇の書の所有者。明らかに劣勢だ。だが、なんとしてもはやてだけでも守らなければ……！！

ゴルドゥ「お前らも……消えｒ――」

砲撃魔法を放とうとしたその時…爆炎を突き破って砲撃が飛んで来た。
咄嗟にゴルドゥはそれを回避する。そして、煙の中から無傷のシリウスが姿を現した。

ゴルドゥ「ほほお、無傷か……」

シリウス「危ないなあ。当たったら大怪我してるところだったよ」

ヴィータ「シリウス、大丈夫なのか？」

シリウス「まあ、大丈夫でしょ。餓鬼は幾ら増えても餓鬼だし」

ゴルドゥ「俺が餓鬼ってか？ギャハハハ！！オメーの方がもっと餓鬼じゃねえか！！」

シリウス「分かってないねえ……」

呆れた様な表情を見せてシリウスが一瞬で姿を消す。そして、ゴルドゥの目の前に姿を現しそこから鋭い回し蹴りを放った。それは、寸分狂わずゴルドゥの脇を捉える。

ゴルドゥ「ぐうっ！？」

シリウス「相手の力量も測れないなんて、餓鬼と変わりないんだよ！！」

勢いをつけてシリウスが地面に向かって蹴り落とす。ゴルドゥは真っ逆さまに落ちて地面に着弾大きな砂柱が立った。

シリウス「いいよ。二人まとめて相手をしてあげる。掛かってこい」

ゴルドゥ「……なめんじゃあ、ねえぇぇぞ！！」

杖が剣に変形しゴルドゥが一気に距離を詰めて振りかぶる。それをシリウスはニヤリと笑って受けようとする……が、

――ガキンッ！！――

それはシリウスには届かなかった。ゴルドゥとシリウスの間に一つの影が割り込んでいる。それは……

ゴルドゥ「……ジーク！！！」

ジーク「……」

第十八の使徒、ジークだった。ゴルドゥの剣を自身のデバイス、バルムンクで受け止めている。

ギル「ジーク、貴様！？」

ジーク「二人とも引け。……時間だ」

ゴルドゥ「はあ！？コケにされたまま帰れってか！？ざけんなっ！！」

エリス「クスクス、お猿さんみたいに顔真っ赤だね～♪」

クラレンス「クスクス、ゴルは短気だもんねぇ～♪」

更にエリスとクラレンスも加わり無邪気に笑う。

ジークは怒りに真っ赤に染まったゴルドゥを呆れた表情で見る。

ジーク「怒りで状況も把握できないまま戦ってもこの者には勝てん」

そう言って背後に視線を送る。その視線の先にはシリウスがいて、

その彼の前には蜘蛛の糸よりも細い魔力でできた糸が張り巡らされ

ており恐らく、これに触れた途端に爆発をおこしゴルドゥは吹き飛んでいただろう。

シリウス「ありゃ？気付いたの？いや～、君意外とやるねえ～♪」

ジーク「それだけではない。気づいたか？向こうから増援が来るぞ……」

ゴルドゥ「ちっ！！」

なのは達の事だろう、ジークの視線はそちらの方に向いている。そこで冷静になった二人も気づいて舌打ちする。ゴルドゥは剣を消して不機嫌さを全開にしてその場から転移して消えた。

ギル「今回は帰る。夜天の主に伝えろ。貴様は必ず私の物にしてやるとな！！クハハハハハ！！！」

ギルも転移して消え、その場にはジーク、エリス、クラレンスだけが残った。

シグナム「ジーク……」

ジーク「……また会おう、烈火の騎士」

エ・ク「「御機嫌よ～う♪クスクス♪」」

背を向けるジークとスカートの端を軽く持ち上げてお辞儀をするエリスとクラレンスはその場から転移し姿を消した。シリウスは追う気がないようでリミッターを再び掛け魔力の放出を抑える。

シリウス「使徒、ねえ……。何とも個性が強い人が多いんだねぇ～」

そう一人で呟く。その後、なのは達も合流してこの世界での戦いは終わりを告げるのだった……。

## 第四十五話（後書き）

如何でしたか？今回は、この小説のオリジナル設定の共鳴者の持つ真の力『共鳴（レゾナンス）』の紹介です。
共鳴は、互いの魂の波長を同化させて戦闘能力を数倍に跳ね上げる力です。

ロイド「セフィリアの髪と目が黒くなったのは如何してなんだ？」

それは、魂の同化をすると力の一部が相手にそのまま流れるために髪や目の色が変化するからです。つまり、セフィリアは同化したガルドの目と髪の色が浮き上がったという事です。そして、今回は出してはいませんが共鳴時は姿を変えることが可能でセフィリアからガルドに姿が変わったりすることも可能です。
ただ、この共鳴は非常に強力な力なため、数分間しか維持は出来ないです。

カイン「一応欠点はあるんだな……」

まあ、時間無制限にしたら面白くもなんともないしね……

クラウド「それが本音か……」

さて、次回からはミッドに戻りますが……どうなる事やら……。一応、構成は思いついてはいるんですが果たしてそれを上手く表現できるのか……？

バルド「無理だな……」

それを言うな！！えっと、次回もなるべく一週間以内に更新はしたいんですが、リアルが未だに落ち着かない！！忙しいったらありゃしない！！良い訳ですねすんません……ｏｒｚ
それでは、今回はここまでで、読者の皆様さようなら～

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第四十六話（前書き）

四十六話更新。
いやはや、またもや一週間たってしもた……ｏｒｚ

バルド「おい作者。まさか、サボってったって訳じゃねえだろうな？」

バカな……！！この小説を書いている時が俺の究極の癒しだというのに…それを書かない日など……ある訳がない！！

クラウド「今の間は何だ？」

気にするな（キリッ。さて、今回は日常編だ。はっきり言えば…笑いがない！！
おおっ神よ……私にネタの恵みを～！！

神『やるかっ！！』

ガ～～～ンΣ（ ゜Д ゜；）

# 第四十六話

――やっほ～！また遊びに来たよ♪――

夢の中、一人の男性が屋敷にいる女性の所に遊びに来た。それを見た彼女は呆れたように溜息を吐く。

――またお前か。一体どうやってあの防衛網を掻い潜って来るのだ？――

――普通に歩いてきただけだけど？って言うか、あんな紙で俺の進行を止められると思っているのが凄いと思うよ？――

なんて事ない様に語る。此処は彼にとっては、いや、彼等にとっては敵の本拠地とも言える場所だ。

そんな所に目の前にいる彼は飄々とやって来る。彼女の一族もそれを危惧して彼女の周囲を護符で守る様にしているのだが全くと言って良い程、効果はない。そして、二人は長い間語らい合うのだ。彼女も最初は物凄く警戒していたが今となっては満更でもない様子。

二人が話すのは最近の事とか失敗談や今後の予定などだ。それはまるで昔からの旧知の仲の様にも見える。

――はあ、何でお前の様な者が人間ではないんだろうな？――

――世の中そんなに上手く出来てるわないでしょ？もし俺が人間だったら如何した訳？閨にでも呼んでくれたかい？――

――それはないな――

――即答された！？激しく傷ついた……ｏｒｚ――

そんな感じで他愛のない会話をする。平和な日々、周囲では色々と物騒な話がある中、この時だけは穏やかな雰囲気に包まれている。彼女も、そして、彼もこんな日々が続けばいいと思っていたのだ。

――――――――――――――――――――

――――――

はやて「来(こ)よ、白銀(はくぎん)の風、天よりそそぐ矢羽となれ、フレースヴェルグ！！」

機動六課の訓練施設で圧倒的な弾幕が降り注ぎ前方に群がっていたイノセント？型の群れが一気に消し飛んだ。イノセント？型の大半が撃墜された。続けてはやてはミストルティンを放ち幾つか石化させた。

はやて「遠き地にて沈め、デアボリック・エミッション！！！」

純粋魔法攻撃が周囲に広がりイノセント?型が呑み込まれ消し飛ぶ。
それと同時に戦闘終了のアラームが鳴りシュミレーターが荒野から元の風景に戻る。

はやて「はあ、はあ、はあ……シャーリー、もう一度お願いするで……」

シャーリー「はやてちゃんこれで三回目だよ!?あまり無理しない方が……」

はやて「まだや……うちはまだいける！！もう一度だけ頼むわ……」

シャーリーは驚愕している。ロストギア捜索でモンスターの世界に行ったメンバーが帰って来て早々、はやては訓練施設に行ってシュミレーターを使って訓練を始めたのだ。しかも……難易度をSクラスの魔導師すら苦戦する程に上げて、だ……。それを続けて三回もして更にもう一度やると言いだす。
明らかなオーバーワークだ。これをやった後に書類の整理や方々との『神の意志（プロヴィデンス）』の対策の会議、それを彼是続けて四日は経っていた。
心身ともにかなり辛いものがある筈である。

ロイド「はやての奴、かなり無茶してるな……」

コレット「はやてに何があったんだろ……？」

同じく訓練に来たロイドやコレットが心配して見ている。そんな心配している人達を余所にはやては再び訓練を再開するのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――

フェイトは今、無限書庫に来ている。無理をしているはやてが心配で仕方ないがユーノから頼んでいた書物らしきものが見つかったと言われやって来たのだ。数多の書が棚に並んでいる通路を二人は進んで彼の執務室に向かっている。

ユーノ「フェイトの探している本かどうか分からないけど、その言葉に近い事が書かれている本は集めて見たんだ」

フェイト「ユーノも忙しいのに無理言ってごめんね…」

ユーノ「あはは……確かに探すのに骨が折れたのは否定できないけど」

苦笑いで応える。そして、彼の部屋に着き中に入ると、そこには……

山のように積み重なっている書物がフェイトを待っていた……。
暫し……（゜Д゜;）な状態になるフェイト。

フェイト「……ねえ、ユーノ。これって……？」

ユーノ「フェイトの頼んだものを探したら該当するのがこれだけ見つかったよ。多分、もっと探せば出てくると思うよ……」

フェイト「え、えええええぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

よもやこれ程の量が見つかるとは誰が予想が出来ただろうか？流石は無限書庫である。探せば何でも出るのは本当だったようだ。

ユーノ「……これ、持って帰る？」

フェイト「是非データにしてバルディッシュに転送してください！！！」

無論、拝むようにしてそうお願いするフェイトだった……。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――

フェイトが無限書庫でヤックデカルチャーな体験をしている頃、なのはの方はカインに訓練をつけてもらっている。バスターモード、ブレードモード、エクセリオンモードそしてブラスターシステムを上手く切り替えて使いカインとの戦闘を行っている。なのはが汗を珠の様に浮かべ息を切らす程の長時間訓練をしているのにカインは汗どころか呼吸すら乱れてはおらず涼しい顔でなのはの放つ魔法を冷静に撃ち落としている。

なのは「ディバインバスター！！」

カイン「ふっ！」

得意の砲撃がカインの一振りで真っ二つになり彼を避けて背後に着弾する。

カインが雷の魔術を発動。一筋の雷撃がなのはの真上から降ってくる。回避は間に合わないのでプロテクションで防御し攻撃を凌ぐ。

カイン「壱の太刀、朧！！」

カインの姿が一瞬で消え気付いた時には彼女の背後に立っていた。

太刀を軽く振るうとなのはの張っていた防御魔法が両断されていた。

なのは「っ！？」

カイン「防御は悪くはない。だが、相手は高威力の攻撃ばかりして来るとは考えない方が良いぞ？こういう風に一点だけに集中した切れ味の高い一撃をして来る時もあるからな」

そして、何時の間にかなのはの首元には太刀が当てられていた。

なのは「また負けたの……」

カイン「まあ、そこは経験の差って奴だ。あまり気にするな」

気にするなと言われても無理だと思うのだが……。なのはの頭を軽く叩く様に撫でる。
子供を宥めるかのようにされてなのはは頬をぷくっと膨らませる。
それが寧ろ可愛らしさを強調させているのだが……。その表情も直ぐに消え心配する様な顔になる。

なのは「カイン君、はやてちゃんの事なんだけど……」

その言葉にカインも表情を厳しくする。

カイン「なのは。そればかりは俺にはどうしようもないな。あれは来るべき時に来る試練みたいなもんだ。あれを乗り越えられるかどうかははやて次第だ」

はやての運動量は明らかに無茶の領域に達している。それはそう…
…嘗てのティアナを思い出させるかのような程に。なのはもはやて
に言ってはいるが……。
はやてだけではない。初代リインフォース、『アイネ』もあれ以来
強くなろうという意識が強くなったのか只管ロイド達に摸擬戦を挑
むのだ。

カイン「一応、俺からも言ってはみるが、なのは達よりも効果はな
いと思うぞ？」

なのは「それでもお願いするの」

親友にこれ以上無茶をして欲しくない。なのはの思いがそれだけで
も伝わる。

カイン「分かった。それじゃあ、今日はこれで終わりだ。ゆっくり
休む事だな」

カインはそう言い残して訓練を止めその場から去っていった。
それを見送ったなのはだが……

なのは「っ！！あぐっ！？」

突然の頭痛が起きなのはは頭を押さえて膝をつく。此処最近この頭痛は酷さを増し立っていられない状態になる程だ。酷い耳鳴りと吐き気が起きる。体に異常があるのかと思ってシャマルに診察してもらったのだが体には特に異常はなかった。では、この酷い頭痛は一体何なのだろうか？困惑するなのは。

そして、なのはに何かが見え始める。明滅しながら視界がねじ曲がり始めて風景が変化し始める。現れる風景は人と神の終わりの見えない争い。人は神の信仰を止め自ら神に成り上ろうとした。それを良しとしない神々がそれを止める為に説得する。

しかし、その者達は死んだ。いや、殺された。欲望の力に負けた人々に……

何処を見ても争いの音は消えない。神々は人に失望しある存在を生み出す。人でも神でもない、両者の間の力を持ち圧倒的な力を持つ者『神人族（みと）』を……。

彼等は戦う。世界を一度リセットする為に人を全て消し去る為に……。

長い、長い、長い戦いが続く。血を血で洗うかのような苛烈な戦いが連日世界中で起きるのだ。

なのは「こんなの、酷い……酷過ぎるよ……！！」

一体何故自分にこの様な風景が見えるのか、そんな事を考えるよりも先になのはの思った事はそれだった。そんな彼女の悲痛な感情を無視するかのように再び風景が変化する。

一人の銀髪の男性が荒廃した街に立っている。その手には大太刀が握られており彼の眼前には無数の武装した人々がいる。一人が合図を上げると武装した人達が一斉に銃で撃つ。蜂の巣にするかのごとく銃弾の雨が彼に迫る。しかし、彼はそれを擦りぬけて立っていた。

いや、擦りぬけたのではない。そう見える程の速さで彼はその弾幕を避けたのだ。青い瞳が人々を見る。一陣の風が吹く。彼は人々の背後に立っていて大太刀を振るった。その瞬間、人々が全員両断されて倒れ伏した。そんな人々を彼はなにも感情を映さない瞳で見ていた。青い残光をその目から溢れさせながら……。

その人は……まるで……

なのは「カイン…君……？」

カイン・レオンハルトその人である様に見えた。それを最後に視界が捻じれ元の訓練室の風景に戻った。

なのは「はあ、はあ、はあ……」

体中に嫌な汗がべっとりと纏わりつく。呼吸も荒れ、まだ少しばかり頭が痛い。

しかし、今の彼女にはそんな事は気にならない。それ以上に気になる風景が見えたからだ……。

何故、何故、何故カインが人と戦っていたのだ?何故その瞳には今の様な感情がなかったのか?何故この頭痛が起きる度にあの姿が映し出されるのか?そんな疑問がグルグルと思考を埋めている。

カインの事を知りたい。彼の過去の事が知りたい。手掛かりは……『神人族(みと)』。

それがカインとどう繋がっているのかは分からないが、彼は間違いなくそれに関係している。そう理解は出来た。

---

時を同じくしてカインも似た様な事が起きていた。ただ、なのはとは違い頭痛とかは起きていない強いて言えば少しばかり耳鳴りがするだけだった。

彼のみたのは病院の一室。そこで色々な医療機器に繋がれている男がいる。大怪我でも負ったのだろう意識はない様だ。それを見ているのは四人の、恐らくその男の家族だろう。

それを境に家族には変化が生じる。兄と思われる男性は何やらピリピリとした状態が多くなり、姉と思われる女性も店の手伝いなどで妹の相手をする暇すら出来ないでいた。

母親もまた同じ状態で末っ子の相手を出来ず、一番下の少女は一人公園のブランコに座っている。
彼女も幼いながらも理解はしていた。今は自分の相手が出来る程、家族は余裕がない事ぐらい。
だから、少女は良い子であり続けた。普段この年頃になれば親や兄弟に反抗する事もある筈なのに少女は家族を思って良い子であり続けた。自分が良い子でいれば家族には迷惑をかけずに済む。良い子で、良い子で、良い子でそう、良い子であり続ければ……。

一種の脅迫概念に近い状態になった少女はその日を境に幼いながらも心を強く保っていたのだ。
心の中では構って欲しい、一人は嫌だ、怖い、寂しい、不安。沢山の負の感情が彼女を襲っていたのに、だ。それでも、少女はそれらに負けない心を持って成長をしていくのだった……。

風景が捻じれ始め、カインは元の六課の廊下に立っていた。

カイン（今の風景は一体なんだ？）

サイフォス［友よ、突然立ち止まって如何したのだ？］

カイン「サイフォスか…。いや、何でもない。唯の考え事だ……」

耳鳴りは治まりカインは再び歩き出す。それでも、カインは今映し

出された光景について考える。

カイン（あの光景はなんだ？何処かで聞いた様な気がするが……）

前に一度似た様な話を聞かされた事があるのを思い出せたがその後が思い出せなかった。

う～ん、と唸りながら彼は首を何度も捻って今の風景の事を考えながら歩くのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

フェイトはあのあと幾つかをデータにしてもらいバルディッシュに転送し残ったのを持って帰った。その日の晩、一度気分を切り替える為にシャワーを浴びて気分転換したあと寝間着に着換えて本を開き目を通す。

フェイト「う～ん、同じ様な文がある……」

予想はしていたが前に読んだ『創世時代の神』と書いてある内容は殆ど同じだ。

執筆された時代も先の本よりも後の事からこの本はコピーされた本

と考えてもよいだろう。

そんな本が幾つもありあの書が原本だった可能性があると推測した。

外れ、という訳ではないのだがフェイトとしては新しい情報が知りたい。そんな風に思っていた時、

フェイト「闇の王、五つの支柱？」

ある本の目次にあった項目の中に気になるものを発見しそこを開いてみた。

――闇の一族『イモータル』、その力は強大で圧倒的だ。その中に特に強大な力を持つ者がおりその者達は『闇の五大王』と称され数多の闇の一族に畏敬の念を持たれていた。一つ、原初の欠片にして暴食の王、『終末の獣』。彼の者は数多の世界を喰らいそして、世界の安寧を監視する者。一つ、月の一族の生み出した破壊の本能を持つ王『破壊の獣』。彼の者は自らを生み出した者達を消し去り秩序を乱す者を監視する者。一つ、それは全ての終焉を意味する王、『終焉の獣』。彼の者現れし時、それは、世界の終わりを意味する。一つ、それは全てを原子に戻す者。宇宙の均衡を望む王、『崩壊の獣』。彼の者は宇宙の均衡を崩す者を監視し鉄槌を下す者。そして、最後に…一つ、それは人類の過ち、人が生み出しし悲しみの王『創造の獣』。彼の者は生と死を司る。その眼に入りし者、皆、完全なる死を迎える。過ちを犯した我々が生み出した最初の罪の存在……

――

フェイト「これって……」

書かれている事が本当ならば人類の敵とも言える『イモータル』は世界の安定を監視している存在だという事だ。そして、『闇の五大王』は『終末の獣』、『破壊の獣』、『終焉の獣』、『崩壊の獣』、『創造の獣』と呼ばれていた様だ。少しずつだがイモータルの事も分かって来た。それにしても、『創造の獣』が人類の犯した最初の過ちとは一体如何いう事なのだろうか？読み進めると驚くべき事が分かった。

――『創造の獣』は唯の少年からなった存在。異質な力を持ったが故に人々から迫害されてその者の両親の手で殺された――

フェイト「イモータルの一人が、人……？」

人類の敵の中に人間がいたという事実にフェイトは驚愕した。それだけではない……

――その者、『創造の獣』は、人の姿を取り、その者、燃える様な赤き髪に月の如き美しき金の瞳を持っていたという――

フェイト「そ、それって……！！」

そう、それは、まるで自分の最も知る男性。気になる異性のその人に特徴が似ているのだ。
燃える様な赤髪に月の様な金の瞳……それは、バルドの事を言っているかのようではないか！？

フェイト「バルドが……！？」

いや、これは何かの間違いだろう。きっとそうに違いない！！頭でそう否定はしているのに心の何処かでそれを否定出来ていないのだ。
それを振り払い否定しようとしたその時…

フェイト「っ！？ぐあっ、あああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

一瞬だけ胸が高鳴った瞬間、頭に突然何かが奔り激痛が起きる。思わず床に倒れてしまった。
頭を押さえて蹲る。体の奥が燃え滾るかのように熱い。
古龍種『ギガベロティヌス』との戦いでセフィリアとガルドの『共鳴（レゾナンス）』を見てから時折り彼女は体の奥底で何かが胎動する感覚を感じていた。まるで、何かに惹きつけられるかのように……。

呼吸が荒くなり全身から嫌な汗が噴き出る。無数の世界が次々に映し出されては消えるを繰り返しそれらは繋がり始め、大きな花になり咲き誇る。そして、フェイトの頭の中に何かが映し出される。

とある世界…その中にある一つの場所。そこには一面に咲き誇る白い百合の花。その中央にあるのは…墓石。そこに膝をついているのは……。風景が変化する。あらゆる武器を構える人々。その前に立つのは黒いコートを着た人。その手には巨大な剣を持ちそれを構えた。一斉に火を噴く火器を物ともせず人々を一撃の名の下に葬る。

――まだ、過ちに気付かぬか！！自身の犯した罪を、まだ否定するのか！！――

そう叫びながら人を斬り伏せ、粉砕する。その人に向かって光の弾が迫る。それを弾き飛ばす。
その先にいるのは……

――見つけたぞ『イモータル』！！もうこれ以上、人を殺させはしない！！――

――噂に聞く『太陽の一族』か……。面白い、人間に味方するならば貴様等を闇で消してくれる！！――

――太陽は……闇には負けない！！――

太陽の武器を手にその人の前に立ち塞がるのは何十人もの人。それぞれ己の武器を構える。

――歪んだ世界の摂理……その歪みで生まれたお前達も時代の犠牲

者、か……――

――なにを言っているんだ？――

――お前達には関係ない。己が生まれた理由を知らない者達よ、闇に堕ちるがいい！！――

――闇こそ、光で浄化されろ！！――

コートの人から漆黒の魔力が溢れだしそれが天を突き破る程の巨大な蛇の姿を形作る。
その圧倒的なまでの魔力を浴びても臆することなく彼等も全身から不思議な力を放出させる。

光が集まり巨大な太陽の如き輝きを放つ球体になる。対してコートの人も漆黒の、それこそ光りすら呑み込もうとする底の見えない深い深い深淵の闇を剣から迸らせ構える。

――太陽の一撃をくらえぇぇぇぇぇ！！！――

――……全てよ、闇へと還れぇぇぇ！！！――

二つの力が同時に放たれる。巨大な光球とそれを呑み込まんとする漆黒の蛇がぶつかり、世界は闇と光に包まれて…消滅した。

景色が歪み元の自分の部屋に戻る。

フェイト「はあ、はあ、はあ、はあ……」

頭痛が幾分か弱くなる。今の光景は一体何なのか？頭痛が起きる度に見る不思議な光景。それは、まるで誰かの記憶を辿っているかの様だ。その時、ドアをノックする音が聞こえた。

バルド「フェイト、いるか？」

ケルベロス［嬢ちゃ～ん。相棒が夜這いにきｔ「変なこと言ってんじゃあねえっ！！」へちまっ！？」

フェイト「バ…ル……ド？」

バルド「入るぞ？」

そう言って入るバルドの目には床で倒れているフェイトの姿が……

バルド「フェイト！？一体如何した！？」

慌てたバルドがフェイトを抱き起こす。顔色が悪いが大丈夫そうなのを確認する。

フェイト「ごめん、ちょっと……目眩がして、転んだだけ…だよ」

バルド「仕事のやり過ぎか？無茶はすんじゃねえよ」

本当は違うのだが上手く誤魔化した。改めてバルドを見ると、先程の文が頭の中に出てくる。

――『創造の獣』は唯の少年からなった存在。異質な力を持ったが故に人々から迫害されてその者の両親の手で殺された――

――その者、『創造の獣』は、人の姿を取り、その者、燃える様な赤き髪に月の如き美しき金の瞳を持っていたという――

フェイト（違う……！！）

バルド「フェイト！？」

思わずフェイトはバルドに抱きついた。突然の事でバルドは困惑したが彼女の体が震えているのに気付きそっとその背に手を回して優しく抱きしめてあげた。

彼の温もりが寝間着を通して伝わってくる。安心できるとても温かな感覚に落ち着きを取り戻す。

フェイト「ごめんね、いきなり飛び着いちゃって……」

バルド「まあ、ビックリはしたが気にすんな」

恥ずかしそうに顔を真っ赤にして俯いたフェイトをバルドはフッと笑って頭を撫でる。
そんな二人の世界に横槍入れる奴がいる。

ケルベロス「処でよ嬢ちゃん。その恰好何とかしてくれねえか？目のやり場に困るんだがよ～ウヒャヒャ！！」

フェイト「ふえ？」

突然ケルベロスが現れてそう言うのでフェイトは視線を下に下ろすと……

着衣が乱れて胸元が少し肌蹴k……ああ！！もうこれ以上は表現できん！！
兎に角、そこには衣服が乱れてちょっと艶かしい状態の自分がいた……。

フェイト「～～～っ／／／／／／／／／／／／！！？」

ケルベロス「いや～てっきり嬢ちゃんを抱く気になったのかと思ったんだが、実際のところどうよ相棒？」

バルド「あ、あほか！？そんな事する訳ねえだろが！？」

フェイト「バ、バルド……」

バルド「な、なんだ？」

フェイト「見た……よね……？」

バルド「あ～～～……すまん」

フェイト「～～～～っ！ばかあぁぁぁぁ／／／／／／／／／／／／！！！」

バルド「うおっ！？いてっ！ちょっ、フェイト落ち着けって！いてて！！」

フェイト「バルドのエッチ！！変態！スケベ～／／／／／／／／／！！」

バルド「いてぇって！つーか変態って……酷い言い掛かりだぞ！？」

フェイト「バカバカバカバカ～～～／／／／／／／／／／／／／／／／！！！」

ポカポカとバルドを叩くフェイトに押されて徐々にバルドが後退して行く。

バルド「いててて…うわっ！？」

フェイト「きゃあっ！？」

そして、背後にあったベッドの角に引っかかり見事に二人は倒れてしまった。
フェイトは倒れたバルドの胸に向かって倒れてきてそれをバルドが抱きとめる形となった。

バルド「……」

フェイト「……」

暫しの間、見つめ合う二人。そして、二人は同時にクスッと笑う。

バルド「ったく、何やってんだろうな、俺達は？ははははっ！！」

フェイト「そうだね。ふふふっ！！」

一頻り笑い合った二人は互いに見つめ合う。バルドは、フェイトの髪を梳くように撫でる。
彼女の髪はまだ少し濡れており電気の明かりで煌めいていた。それでも、彼女の髪は艶やかでスッと指は流れる。フェイトはくすぐったいのか首を竦めていて、その仕草がとても愛らしかった。

バルド（やっぱり……似てるな……）

ふと、昔の事を思い出してしまった。今は亡きあの子にフェイトが如何しても重なって見える。全く、何時まで彼女に固執しているんだろうな？そう思ったバルドは心の中で自嘲する。今目の前にいるのは守りたい存在。この少ない命を全て賭けて守ろうと決めた悲しき運命の下に生み出された少女。

だが、彼女はもうそれを断ち切っている。過去の事件、ＰＴ事件……。あの事件でフェイトやなのははプレシアが、アリシアがある敵によって殺されたのしか知らない。彼女には伝えていない真実を何時かは話さなければいけないだろうな……。とバルドは考えた。

髪を撫でながらバルドは短い時間にそれらを考えていた。その思考はフェイトがバルドの胸に頭を乗せたことで止まる。

フェイト「……バルドの心臓の音が聞こえる…。トクン、トクンっていってる」

バルド「当たり前だろ？俺だって生きてんんだからよ」

フェイト「うん。でもね……それだけでも、嬉しいんだ」

そして、フェイトが顔を上げ微笑む。その綺麗な微笑みにバルドの心臓が高鳴る。

フェイト「あなたが、隣にいる事が分かるから…」

バルド「フェイト……」

フェイト「バルド、私ね…あ、あなたの事が――」

自分の想いを彼に伝えるのは今しかない。そう思ったフェイトはそれを口にしようとした。

だが、時はそれはまだ早いと判断したのだろう。

なのは「フェイトちゃん、明日のＦＷ陣の訓練内容について話したいことがあるｎ……」

フェ・バ「「あ……」」

なんという事か！！またもや、ナイスタイミングで親友が登場！！さあ！！視点をなのはに変えてみよう！！まず、状況を確認すればフェイトの部屋にはバルドがいた。

まあ、それはいいとしよう。だが、今の二人は着衣が乱れてそして、ベッドの上にいて、そして、フェイトがそのバルドの上に跨っているという状況だ……。

こ、これはつまり、今からこの二人は……！？考えただけでなのははボンッという音が聞こえるのではないかというほど顔を真っ赤にした。

そろそろ、視点を戻そう……。

フェイトも冷静になって今の状況を見てなのはと同じ結果に行き着き顔を真っ赤にした。

なのは「あ、あわわわ／／／／／／／！？」

フェイト「な、なのは／／／／／！？こ、これはち、違――！！」

なのは「すみませんでしたの～／／／／／／／／！！」

空気の読める親友が普段は見せない神速の速さで扉を閉めて駆けて行ってしまった。

フェイトもフェイトで親友に変な誤解を持たれてしまって混乱の極みに陥った。

バルド「フェイト…」

フェイト「は、はいっ／／／／／！？」

バルド「取りあえず、この状況を直してからにしようぜ？」

ハッとなってフェイトは慌ててバルドの上から退き、自身の着衣の乱れを直しながら明日、親友の誤解を解くためには如何すればいいのだろうか！？という事で彼女は頭が一杯になりあたふたする。

その間にバルドも起き上がって乱れた服装を直す。

バルド「なのはに変な誤解を持たれちまったな……」

フェイト「あ、あう～／／／／／／／／ど、どうしよう……」

バルド「んな事俺に聞かれてもな……。そう言えばフェイト、お前何を言おうとしてたんだ？」

フェイト「ふえっ／／／／／！？え、えっとそれは……やっぱり何でもない／／／／／／！！」

バルド「？？？」

タイミングを逸してしまい言うに言えず首を振って何でもないと言う。

それにバルドは首を傾げるだけだった。

フェイト「そ、そう言えばバルドは何か用があったんじゃないの？」

バルド「ん？ああ、三日後に本局に行って会議だか何だかするって事で話を纏めたいと思ってな。俺は補佐官だから出席すっとき何処にいりゃあいいんだ？」

フェイト「えっと、出来れば私の隣にいて欲しいな。終わった後に合流するのに時間掛かりそうだし」

バルド「ん？執務官会議ってそんなに人数がいんのか？」

フェイト「人数はそんなにいないよ。ただ、終わった後に色々誘われるから……」

今迄バルドのいなかった時は終わる度に男性執務官に食事などに誘われる事が多々あったのだ。
その事をバルドに話すと、彼は苦笑いした。

バルド「まあ、お前はどっちかって言うと美人の方に入るからな。誘うおうと思うのも無理はないと思うぜ」

フェイト「び、美人／／／／」

バルド「そう言う事なら分かった。当日はお前と常に行動していればいいな」

フェイト「うん、お願いね。あ、それからティアナを連れて行こうと思うんだ」

バルド「ティアナを？」

フェイト「うん。ティアナも執務官を目指しているから経験させておきたいんだ」

バルド「そうだな。ティアナにもそういう空気を肌で感じてもらった方が大事だろうな」

その後も何度か三日後のやり取りを話した後バルドはフェイトの部屋を後にした。
それを見届けたあとフェイトはふうっと息を吐きバルドの出ていったその扉を見つめる。

フェイト「私はね、私は、あなたの事が…好きだよ……」

バルドが去った後にフェイトは一人そう呟くのだった……。

---

夜が深くなり辺りが漆黒の闇に包まれた深夜に六課の一室に明かりが付いていた。

～部隊長室～

職員が寝静まった中で、はやてはたった一人起きている。別に仕事が残っている訳でもなく只管に新しい魔法を考えているのだ。眠くないと言えば嘘になる。だが、眠れないのだ。目を閉じればあの男

に、ギルに家族を殺される悪夢を見るのだ。それも一度ではなく何度も、何度も……

まるで予告しているかのように……。
だから、彼女は殆ど寝る事なくこうして魔法の開発や対抗策を考えて時間を過ごしている。

はやて「う～ん、眼がしょぼついてきおった…。コーヒーでも飲んで一休みしとこ」

そして、立ち上がった瞬間、はやては倒れた。

はやて「あ、あれ？な、なんや……？力が……」

無理をしたのが祟り、如何やらはやての体が限界に来たようだ。
腕に力を込めても立ち上がる事が出来ないでいた。それどころかなにやら頭がぼんやりとし始め視界が歪み始める。徐々に視界も狭くなり……

シリウス「はやて！？」

シリウスが部屋に入って此方に駆け寄って来るのを最後にはやては意識を失った。

次にはやてが目を覚ました時には見慣れた天井が初めに見えた。

シリウス「あっ、眼が覚めた？」

はやて「こ、此処は……？」

シリウス「無理に起きないで横になってなって」

何時の間にか自分の部屋にいてベッドに寝かされていた。起き上がろうとするはやてをシリウスはやんわりと肩を押さえて再び横にした。それと同時に自分の脇辺りでピピッ！と音が鳴った。シリウスがそこから取り出したのは体温計だった。

シリウス「三十八度九分……。はぁ～風邪だね……」

呆れる様に溜息を吐いてジト目ではやてを見る。

シリウス「全く……。六課の隊長なんだから体調には気を付けないと駄目じゃないか」

はやて「それは、ギャグかなんか？」

シリウス「誰が面白い事言った?今回ばかりは本気と書いてマジで言ってんだよ?」

如何に普段はふざけるシリウスでも今回ばかりはお冠の様だ。その睨みで恥ずかしくなって布団に頭まで被って隠れる。

はやて「そ、そう言えば如何してシリウス君があの時間に…?」

上手く話題を逸らそうとしてはやてはそう尋ねると、シリウスは誤魔化そうとしたのを分かってはいたが桶に汲んだ氷水にタオルを浸しながら答える事にした。

シリウス「最近のはやては夜中も起きてるのを知ってたからね。何時倒れるか分からないから悪いけど見張らせて貰ってたよ」

タオルを絞って額に乗せる。ヒンヤリとした感覚が少し気持ち良かった。

最近シリウスが姿を見せる回数が減っていたのはそう言う事だったのかとまだ思考が整っていない頭で考えた。その間にシリウスが用意していた林檎を慣れた手付きで皮を?いて食べやすい形に切り分ける。

シリウス「一体如何したんだい?何時ものはやてらしくもない。何か悩みがあるなら言ってごらんよ」

何時もの様ににこやかに言うシリウス。だが、今回ばかりはそれが寧ろはやての心を抉るのだ。

はやて「シリウス君には分からへん……」

シリウス「ん？」

はやて「シリウス君には分からへん！！うちが如何して此処まで必死なのか、分からへんやろ！！」

ベッドから起き上がりシリウスに向かってそう言葉を叩きつける。これ以上は言うな。これ以上は彼には関係ない事だ。分かってはいたが一度外れたたがを止める事は出来なかった。

シリウス「はやて……」

はやて「シリウス君は、力があるから…誰にも負けない位強い力があるからうちのこの思いなんて分かる筈がないんや！！八つ当たりなのは分かっとる！！けど、その余裕なところが今は辛いんや……！！」

シリウス「……」

はやて「うちは……うちは……ひっく…」

酷い八つ当たりである。それを分かってはいるが止める事が出来なかった。
力があるのに、ない。その悔しさがはやての心を抉っていた。家族を守りたくても出来なかった。
それが堪らなく悔しかった。

嗚咽を漏らしかけた布団をギュッと握る。涙が溢れそれによって視界が歪む。
だが、それが毀れる事は無かった。そっとはやての目尻を撫でる指があった。

シリウス「ごめんね。はやての気持ちも知らないで」

はやて「あ、ち、違うんや…。今のは…シリウス君が悪いんやない。うちは、そんな事が言いたかったわけじゃ……」

ハッとなってシリウスに謝ろうとしたがそれをシリウスは手で制す。

シリウス「はやては、力が欲しいかい？」

はやて「え……？」

シリウス「力を手にするってのはそれ相応の覚悟がいるんだよ。強大な力を持つ者には必ず強大な壁が立ちはだかる。それは、自然の真理で何者も変えられない絶対の掟。俺は元々生まれつきこんな力を持っているけど、本当だったらこんなの要らなかったんだ。だか

ら、寧ろはやて達が羨ましいな」

はやて「シリウス君……」

シリウス「俺達は覚悟を決めたから…戦う道を選んだ。けど、はやて達は違う。まだ、その世界に飛び込む少し手前にいる。はやては、それでも戦う道を選ぶの？それで、家族も巻き込んじゃうかもしれないよ？」

はやて「うちは……」

何時になく真剣なシリウスの言葉にはやては戸惑った。力は欲しい。けど、家族は巻き込みたくない。これは自分が成さねばならない事だ。過去の夜天の主と今の夜天の主の家族を賭けての争いだ。その為だけに力を欲してそれによって家族が巻き込まれるのだけは避けたい。家族には平和とはいかなくても人並みの幸せな生活を送って欲しいと願っている。だから、此処はどう答えればいいんだろうか……？

悶々と頭痛のする頭で考えているはやてを見てシリウスはボソッと呟く。

シリウス「困った時は、一人で悩まなくてもいいと思うよな～……」

その言葉にハッとなりシリウスを見つめる。シリウスはそれにニコッと微笑むだけだ。

はやて「シリウス君……」

シリウス「なに？」

はやて「うちに、うちに…戦う力を貸してほしいんや。うちを、鍛えて欲しいんや」

真っ直ぐシリウスを見つめてはやてはその答えを語る。それにシリウスは満面の笑みを浮かべて彼女の頭を撫でた。

シリウス「うん。俺に出来る事なら、はやての願い、叶えてあげるよ。だから、今はゆっくりと休んで明日から頑張ろう？」

そう言ってはやてを横にさせ明かりを消しその場から出て行こうとしたがそのシリウスの服の裾をはやては掴んだ。

シリウス「はやて？」

はやて「今日は…傍にいて欲しいんや。目を瞑ると怖くて……」

シリウス「うん、いいよ。はやてが落ち着いて安心して眠れる様に傍にいてあげるよ」

ニコッと笑いはやての手を取って握る。それにはやても離さない様にギュッと少し強く握る。

はやて「ありがとうな。シリウス君、おやすみ……」

シリウス「おやすみ、我が姫君」

最後の最後におどけるシリウスを見てクスリと笑いはやては目を閉じる。暖かな体温が手を通じて伝わってくる。それだけで心の底から安心できてその晩からはやては悪夢を見なくなったのだ……。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

場所は変わって管理局本部にて一人の人影があった。見た目は普通の局員の様だったが、その者は普通の局員とは思えない動きを見せた。監視カメラを掻い潜り、探査魔法の範囲をすり抜け、厳重な監視システムを通り抜けている。

???「ふむ、中々に厳重だが……それ程でもないか。さて、パオラが手に入れた局の者のカードキーで次の角を曲がった先にある扉に入るのか……」

第三の使徒、パオラが御珠の探索時に見つけた局員から身分証明に

もなるカードキーを奪取し（その局員はその後どうなったかは誰も知らない）それを潜入などが得意な彼に渡し、これからあるものを仕掛けるのだ。これが上手くいけば此処は間違いなく戦場と化すだろう……。

？？？「ふむ、此処か……」

部屋の中に入るとそこは幾つもの排気口のパイプが連なる部屋でそのパイプは幾つもの方向に分れている。その者は顔のマスクを取り払う。そこには……トールスがいた。

トールス「この排気口のパイプの中に、これを仕掛けるのだったな……」

トールスは手に持った幾つもの水晶みたいなものが付いた紐状の物をパイプの中に入れ、それを側面にくっ付ける。

トールス「時期が来たらロストギア保管室を襲撃してそこに保管されているだろう『翡翠の御珠』を混乱に乗じて奪取か…それは三日後の『執務官会議』の日、か……これは、大きな混乱を呼ぶのは必至だなフフフッ」

三日後に行われる事になっている管理局の全ての執務官が集まる執務官会議。よもや、この日に大きな事件が起きるとは誰も想像だに

していなかったのだった……。

# 第四十六話（後書き）

gdgd感が拭えない今回……。オチが見つからなかったんだよ！！
ちなみに、『終末の獣』と『破壊の獣』は某太陽ゲームに出てきたあれです。
他はオリジナルだけどね……。『終末の獣』、カッコいいと思うのは俺だけか？

それにしてもフェイトとバルドが最近甘さを強化してきた件について……。
羨まし過ぎる！！！

クラウド「原作にはない設定があるな？プレシアって事故死っぽいのじゃないのか？」

そこがオリジナル設定なのさ！！その真相は近い内に…と言っても多分数話は掛かると思われるが……。

ティファ「カインにも感応現象が起きてるね？」

徐々にあの二人も真実に近づきます。序でに言えばはやてとシリウスもです。
それにしても、なのはとユーノの絡みがなくてよくフェイトと会話をするシーンしか出てこないのは何故か！？無限書庫絡みでないとやっぱ会わないのか！？
いむむむ～～……近々なのはも行かせるべきか？

ロイド「次回も日常編なのか？」

それは分からないっす。最近忙しくてまともに構想を浮かべる時間がなくて上手く作れない。はあ、ゆとりが欲しいです……。次回もこの位遅くなるかもしれませんがなるべく早く出せるように努力しますんで読者の皆様これからも宜しくお願いします！！では、今回はこれにて

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第四十七話（前書き）

四十七話更新！！

またもや待たせてしまい申し訳ありません！！

ロイド「今回は如何いった内容なんだ？」

基本は日常で後半から戦闘が激しくなります。あっ、ちなみに執務官会議なんてのはオリジナルです。実際やりそうな気がするけど、まあ、作者の融解した脳じゃあそこまで濃い会議はしませんので……。

あと、はやてが新魔法を習得します。今回はその内の二つが登場する予定……。

では、本編をどうぞ！！

# 第四十七話

夢を見た、それは悠久の刻を生きる者の戦い。

終わりの見えない悲しき戦い。

純白の巨大な体に無数の六芒星の中に黒い十字架を持った深紅の瞳、
何者も畏怖する強大な魔力を漲らせて荒野で戦っていた。

その者に向かって数千、いや、数万の人が武器を持って挑んでいく。
その人達にその存在は光弾を生み出しそれを飛ばして倒し、またはその巨躯を使って蹂躙していた。

――この世界でも、愚かな真似をするか人間！！――

怒りに満ちた、けど、何処か悲痛な思いも混じったような咆哮を上げる。
その咆哮で多くの人達が、兵士が恐れて後退りする。その時、

――約束された勝利の剣（エクスカリバー）ぁぁぁぁっ！！――

巨大な一条の光が飛びその存在に直撃した。爆炎に包まれる。

――悪鬼か悪魔の一種か……――

――陛下!?如何してこちらに!?――

陛下と呼ばれた人は綺麗な金髪の翡翠の瞳を持った女性だった。その身に纏っているのは王の風格を見せるような騎士甲冑。その手に持っているのは黄金に輝くひと振りの剣だった。

――悪魔がこの地を侵略しようと暴れていると聞いたからな。私はこの国の王だ。民を守るためならば全ての民と兵達を守るために前に出ることも惜しまん――

――……なるほど、この世界の大陸の王は貴様か……――

爆炎の中からその存在が姿を現す。その身には一切の怪我もなく彼女を見下ろしていた。

――う、嘘だろ!?陛下のあの一撃をくらって無傷なんて!?――

――奴は並みのドラゴンとは違うのか!?――

――全軍引け!!此処は私が受け持つ。お前達は負傷者の救助と民

の避難を優先しろ！！――

――陛下！！我らもお供します！！――

――駄目だ！！この者はあまりにも危険すぎる！！私一人で抑え込む！！――

――……その剣、この地に生れし泉の精霊から授かった聖剣か。いや、奪い取ったのか？――

――ふざけるな！！これは、私が泉の精より直々に受け取ったのだ！！断じて奪ってなどいない！！――

――人間に、聖剣を渡すか……。面白い、貴様には全てを背負う覚悟があるとみた。それなら、その思い私にぶつけてみろ！！――

その存在から漆黒の闇が溢れ出し世界を覆い始める。それでも、その剣の輝きは消えないで更に輝きを増した。

――我が名はアーサー王！！この地を、民を守るために……お前を聖剣の名の下に倒す！！――

――人間としての答えを、貴様の覚悟を俺に見せてみろ！！――

両者が同時に動き出しぶつかり合い、世界が光に包まれた。それを最後に景色が黒に塗りつぶされ夢が終わりを告げる……。

フェイトはベッドから飛び起きる。寝汗が酷く寝巻が肌に張り付く。

フェイト「はあ…はあ……夢……？」

その事にホッとする。それにしても、あまりにもハッキリとしていた夢だった。

アーサー王、何処かで聞いたような名前だった。確か、なのはとはやての世界にいた英雄の一人だった様な気がする。だが、そのアーサー王は男性のはずで自分が見たのは女性だった。

少しの違いに首を傾げるも夢だからそういう事に違いはあるのだろうと決める。

フェイト「うぅ…凄い汗かいちゃったよ。早く着替えないと風邪引くかも……」

そう考えいそいそと寝巻から職員用の服装に着替えようとした時……

バルド「フェイト、もう朝だぞ。今日は執務官会議があるんだからはやｋ――」

フェイト「あっ……」

ナイスタイミングでバルド登場！！バルドの前には現在進行形で着替え中のフェイトが……。

黒のしｔ（自主規制）が彼女の大人っぽさを醸し出している。

あっ……いかんいかん。鼻から血が……。警告警告！！総員脳内変換システムの機能をシャットダウンせよ！！現在、フェイトさんが黒の下ｇ：ゲフンゲフンッ！！の恰好で色白の柔肌が陽の明かりで美しく輝いております！！ぐはあっ！？あ、あかん！！その美しさ、彼のヴィー〇スも布投げて逃げ去るほどの美しき光景が～！！メディック！！メディックは何処にいる！？このままでは脳内回路がその美貌だけで焼き切れるぞ！！？

そんな状態のフェイトを生で見たバルドの反応は……

バルド「……わりぃ／／／／」

そう一言、言い残して扉を閉めた。

フェイト「……きゃあああああああああああああああああああああああああ／／／／／／！！！！！」

当然、六課の早朝にフェイトの悲鳴が響いたのは言うまでもない……。

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――

シリウス「今朝は何事か！？って思ってたけどそう言う事があったんだね～」

はやて「せやで、お陰でフェイトちゃんとバルドさんは今朝ギクシャクしたまんま本局に行ってしもた」

シリウス「それについて行くティアナはもっと大変そうだね～あははっ！！」

今朝の事件はあっという間に六課内に知れ渡りフェイトもバルドも逃げる様にして本局に向かっていったのだ。そんな事を二人は会話している内に訓練施設に到着する。

シリウス「さて、今日は俺の教えた魔法の実践をしてみよっか？」

はやて「なあ、シリウス君。一つ聞いてええか？」

シリウス「なになに？」

はやて「これって、扱い難しくない？うちにはちょっと難しいと思うんやけど……」

シリウス「まあ、使いどころは難しいだろうけど、その効果は結構凄いと思うよ。それじゃあ、早速やってみよう！！」

はやて「ノリノリやねえ……。まあ、後ろ向きよりも前向きな方がええけどね」

はやても、気持ちを切り替えてデバイスを起動し騎士甲冑を身に纏う。そして、精神を集中させる。

体の奥底から魔力を練り合わせる様にして魔法を組み立てる。はやての足元には純白の魔法陣が出現した。

はやて「我が身に纏え、清浄たる恩恵の加護よ、フォースフィールド！！」

はやての前に一瞬だけ光の壁が見える。それは直ぐに不可視の壁となり姿を消した。

それを確認したシリウスは手に少し大きめの青い炎の塊を作り出すと突然それをはやてに向かって投げつけた。猛スピードではやてに迫る炎弾は彼女の少し手前で突然霧散する。続いてシリウスがさっきよりも大きな炎弾を作り出しそれを投げつける。またしても、それは彼女の手前で何かに阻まれる様にして霧散していった。それを

確認してシリウスは満足気に頷く。

シリウス「うん。完成に近づいてきてるね」

シリウスの教えた魔法、『フォースフィールド』。あらゆる攻撃から術者とその周囲の者を守る鉄壁の防御魔法である。原理としては受けた魔法の反対の属性を瞬時に計算し同程度のエネルギー波を防御壁に流す事で相殺している。とシリウスは言ってはいるが実際のところ彼もよく分かっていないらしい。欠点としては魔力消費も多く、そう何度も使用は出来ないししかもこの魔法、どんな攻撃からも守ってはくれるがそれは最大で九発までそれ以上は受けきれずに破壊される。
つまり、どんなに弱い魔法でも九発くらえば壊れるという強いのか弱いのか全く分からない魔法なのだ。使いどころを見極めれば強いのだが……。

はやて「あらゆる攻撃から身を守るっていうても結局は九回受けたら終わりやないか？」

シリウス「九回も完全防御できるのって結構重要なことだよ？はやては元々長距離からの殲滅魔法で敵を一掃するのが得意なんだから詠唱中は安全を確保できるのは一番重要なことだよ」

はやて「それは、分かるんやけど……もっと他にこう、ガアッ！！っとかビュッ！！って出来るよな魔法なんかないんか？」

シリウス「いやいや、ジェスチャーで表現されても分かんないって

……。全くもうはやては欲張りだねえ～」

はやて「出来ることがあるんならそれを覚えたくなるのがうちの性分なんやで♪」

シリウス「ははははっ！！はやてには敵わないなあ～♪それじゃあ、もう一つ、二つ魔法を特別に伝授して差し上げよう♪」

はやて「はっ！！有り難き幸せ…」

なんて遣り取りをした後、互いの顔を見てクスッと笑う。そして、シリウスの指導の下、はやては新しい魔法の開発に勤しむのだった。

---

一方此方は本局に行ったフェイトとバルド、ティアナは会議の行われる部屋に向かっていた。

フェイト「ティアナ、そんなに緊張しなくてもいいよ」

ティアナ「は、はい……。で、ですけど…やっぱり緊張はしてます」

多くの執務官の先輩が集まるというだけに流石に彼女も緊張していた。

一行が会議室にやって来ると既に数人の執務官が席について各々の仕事を空いた時間を使って行っていた。多くの男性執務官達がフェイトを見かけると花を見つけた蜂の様に集まって来る。

男性執務官1「こんにちは、フェイトさん」

男性執務官2「お元気そうでなによりです」

まあ、ぶっちゃけた話、社交辞令の様な挨拶ばかりして来る。それをフェイトは全て返事をしている辺り凄いと言うべきか…。その間にも席に幾つもの執務官が座り始める。

バルド「早く座らないと席が埋まるぞ」

フェイト「あっ、そうだね」

此の侭だと三人揃って座れなくなるのでバルドが促す。それにフェイトも頷き会釈をした後にバルドの後を追う。それを恨めしそうに睨む男性執務官達だった。

後方の席をバルドが取りフェイトを真ん中に座らせ左にバルド、右にティアナが座った。
その彼女達に近づく者が一人……

クロノ「フェイト」

フェイト「あっ、クロノ」

執務官のクロノである。提督でもあるが彼はれっきとした執務官。
この会議に現れるのも当然の事である。

バルド「なんだ、ＫＹ野郎じゃねえか。何しに此処に来たんだ？」

クロノ「僕は執務官だ。此処に来るのは当然の事だろ。あと、ＫＹ言うな……」

バルド「はっ！！偉そうなこと言いやがって、随分と偉くなったもんだなぁ？」

クロノ「君よりは今の僕は偉いぞ、新米執務官君」

バルド「ああ？やんのかこのＫＹ（空気読めない）クソ餓鬼が？今すぐミッドの湾に魔法槍で固めて沈めっぞ？」

両者の間に見えない火花が散る。挑発してくればバルドは大抵はあっさりと買ってしまう辺り彼も子供っぽい感じがすると思う。とフ

ェイトは思うがそれは口には出さないでおいた。あとのお仕置きが怖いので……。

暫し両者は何度か文句を言ったあと、クロノはそのままバルドの隣に座る。ホントはフェイトの隣に座ろうとは思ったのだろうがバルドが彼女の隣を完全キープしてしまい動く気配がなかった。反対側のティアナの席を借りようかとも思ったがバルドがいちゃもん付けてきそうなので早々にその考えは消した。バルド、最近クロノに対しての扱いが荒くなり始めている今日この頃……。

程なくして全員が席について会議が始まろうとしていた。
司会役がプロヴィデンスについて分かった事を聞くと幾つかの手が挙がる。

執務官４「プロヴィデンスは現在、十八人の幹部らしき者を中心とした集団で、その者達はロストギア『覇王の御珠』を探しているとの事です。ロストギア『覇王の御珠』は合計で七つありその一つ一つが膨大な魔力を持っているＳＳクラスのロストギアです」

執務官５「プロヴィデンスの幹部、『使徒』で現在確認されているのは九名。それぞれの実力は高く既に別世界に駐屯している複数の魔導師が被害を受けています。現在、彼等はロストギアを四つ所持している模様です」

その後も幾つもの調査結果を上げられる。そして、一通り終わった後に司会が纏める。

司会担当「では、この中で使徒と交戦した者はおりますか？」

沈黙が辺りを包む中に上がる手が一つ。フェイトである。

司会担当「フェイト・T・ハラオウンさん。どうぞ」

フェイト「はい、私が交戦した者は第十の使徒、トールスと名乗る者でした。彼は、高速戦闘が得意で体術と剣術に長けておりレアスキル持ちでした。また、自身の影を自在に操って相手を縛る技をも使用してきます。他にも六課は複数の使徒と交戦を経験していますが、全て逃げられてしまいました」

担当司会「その中で現在危険と判断される者は？」

フェイト「恐らく…第六の使徒、ギルという者かと……。その者はあの『闇の書』を所持しておりました」

それに周囲の執務官がざわめく。闇の書は破壊されたと聞いているのでまさか復活しているとは予想だにしていなかった。

司会担当「静かに！！では、プロヴィデンスと使徒についてはこれからも警戒と調査を続けてください。次に前回のミッド襲撃に加担した次元海賊団なる者達の事についてお願いします」

騒ぎ始めた周囲を窘めたあと進行が進む。一方バルドは……

バルド「……ぐぅＺＺＺ」

クロノ「……起きろ」

寝てた……。

―――――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――

会議が続いている頃……

ロイド「あぁ～～！！わかんねえー！！」

コレット「ロイド、ファイトだよ～！！」

クラウド「せめてこれ位は解いてくれよ……」

そんな声が聞こえてエリオとキャロはその部屋のある方を見る。

何やらロイドが難しい声を上げたりしている。

エリオ「ロイドさんは何をしてるんだろ？」

キャロ「気になるね……」

子どもなりの好奇心が擽られてお邪魔してみる事にした。

エリオ「失礼します……」

キャロ「し、失礼します……」

クラウド「ん？エリオにキャロか。如何した？」

エリオ「いえ、その…ロイドさんの声が聞こえたので……」

視線を横に流すとロイドが頭を抱えて物凄い難しそうな顔をして唸っていた。

クラウド「ああ、今ロイドは勉強中だ」

エリオ「勉強ですか？」

クラウド「そうだ。ロイドの知り合い…と言うより担任の教師だった者からの頼みでな、時間が空いたりしたらロイドに勉強をさせる様にと言われているんだよ」

一体、どんな勉強をしているのだろうか…？きっと自分達では解けない様な難しい事をしているのだろうと思っていた。その時、ロイドが二人に気付いた。

ロイド「おっ、エリオにキャロか。なあ頼む！！これ教えてくれ！！」

エリオ「ええっ！？」

コレット「ロイド、駄目だよ。自分で解かないと意味がないって先生が言ってたよ」

恐る恐るその内容を見た途端、エリオは固まる。続いてキャロも覗くと同じ様に固まった。

エリオ「ロイドさん……」

ロイド「なんだ？」

キャロ「これって…割り算ですよね……？」

間違いなく割り算だろう問題がズラリと並んでいる。しかも内容が、小学二年でも解けそうな問題だった。それがロイドはまだ一問も解けていなかった。コレットとクラウドを二人は見ると、案の定二人

は苦笑いする。

クラウド「残念な事にロイドは勉強が苦手なのさ」

まさかの事実に二人は驚く。色々な世界を旅するだけに頭が良いと思っていたのだが……

ロイド「しょうがねえだろ。勉強は嫌いなんだよ!?」

コレット「でも、最近は掛け算は出来る様になったんだよね♪」

ロイド「ああ!!自分でもすげ〜って思ってるぜ!!」

いや、二十歳にもなって掛け算までしかできないのは色々と問題がありそうなんだが……。

クラウド「これでも俺達のリーダーなんだから驚きだ……」

ロイド「なんだよ、別に良いだろ!?これでも図工と体育はずっとトップだったんだぜ!!」

コレット「うわ〜、ロイド凄いね〜♪」

クラウド「いや、それはあまり自慢にならんだろ……」

エ・キ「「あははははは………」」

額に手を当てて溜息を吐くクラウドを見て最早苦笑いしかできない二人だった。でも、そんな彼の周りには何時も沢山の人が集まるあたり、彼にはやはりそういうのに長けた天賦の才があるんだと二人は思わずにいられなかった。

ロイド「それに“人生には足し算と引き算と掛け算が出来れば基本生きていける！！”ってウルフが言ってたぞ？」

クラウド「後であの国王（バカ）を締めなきゃいけねえな……（。-　。メ）」

要らんこと言った国王は後々報告を受けた秘書のサラに締められているのを多くの者が見たというのを此処に記しておこう……。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

はやてが廊下を歩いていた時だ、

なのは「カ、カイン君…本当にするの？」

はやて「ん？」

なのはの声が通り掛かった彼女の部屋で聞こえたので立ち止まった。

カイン「今更何言ってんだ？自分から言い出したんだろ？」

なのは「う、うん／／／／／／でも……」

カイン「いいからそこに横になれよ」

はやて（なにしてるんや二人は？）

気になり扉に耳を立てて盗み聞きの体勢に入る。

なのは「うぅ……なんか、緊張してきたの／／／／／／／／」

カイン「肩の力を抜け。じゃねえと意味がねえだろう。……行くぞ」

なのは「ふにゃあっ／／／／／／！？カ、カイン君、そ、そこは……／／／／／／！？」

カイン「此処か？」

なのは「ああっ／／／／／、ううんっ／／／／、そ、そこは駄目だよ～／／／／／」

カイン「何言ってんだ?そんな気持ち良さそうな声出しておきながら、よっ!」

なのは「あんっ／／／／／!!そ、そこは駄目、ひゃん／／／／／!く、くすぐった、あんっ、いの／／／／／」

そんななのはの甘い声が聞こえてくる。

はやて（なななななな、何やってるんやあの二人は／／／／／!?）

この扉の向こうで二人は何をやってるのだ!?開けるべきか!?いや、此処は親友として気をきかせて去るべきか!?

カイン「それじゃあ、そろそろ本番行くぞ……」

なのは「えっ!?今のは……!?」

カイン「準備運動に決まってんだろ?」

はやて（ほ、本番っ／／／／／／／!?あかん……あかんで!!そういうのは……家でするもんや!!!）

えっ……ツッコムとこ、そこですか……?

扉に手をあて一気に開いた。

はやて「おのれら何しとんのや～！！！」

なのは「ふえっ！？」

カイン「ん？」

……状況から説明しよう。

目の前にベッドにうつ伏せのなのはがいる。

←

カインがなのはの背に手を当てている。

←

カインの手から電気の様なのが出ている。

←

何やら気持ち良さそうな蕩けた表情のなのはがいる。

はやて「あ、あれ？」

カイン「なんだ、はやてか。如何したんだ？」

はやて「え、えっと……何してるん？」

カイン「低周波マッサージだが？それが如何した？」

はやて「て、低周波マッサージ？」

カイン「ああ、最近なのはが体が凝ってるみたいだからな。疲れを解そうとやってた訳だ」

つまり……自分の早とちりと言う事か？今更になって恥ずかしくなり顔が真っ赤になる。

カイン「ところで、はやては何か用があって来たんだよな？」

はやて「へっ！？あっ、いあやその……あ、あれ～！？此処にもシリウス君おらん！！何処行ったんや？ああ～二人とも邪魔したで、ほな！！」

カイン「お、おう……」

上手く誤魔化す為にシリウスを利用する事にした。心の中で謝っておく。

高速で部屋から出て脱兎の如くその場から撤退した。

カイン「あいつは何をしに来たんだ？」

なのは「さ、さあ……？」

二人揃って首を傾げるのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

――

のほほんとした空気に六課が包まれている頃、

本部の一室でそれは目覚め始めていた。パイプ内で幾つかの水晶に罅が入りそれは生み出された。暗い闇の中、幾つもの赤い目が光る。そして、それは動きだした。パイプの通路を利用して周囲に散らばっていく。

魔導師１「ん？」

魔導師２「如何したんだ？」

魔導師１「いや、何か上から物音が……」

音が聞こえて真上にある配管を見上げると……そこには穴のあいた配管があってそこから幾つもの赤い目が光っていた。

？？？［ギチギチギチギチ……］

魔導師１「なっ！？」

その生物は目の前に光りを集束させせ驚く魔導師に向かって一筋の閃光を放った。

防御すらさせる暇を与えられずにその魔導師は光に貫かれた。

魔導師１「が、あああああっ！？」

魔導師２「な、何なんだこいつは！？くそっ！！緊急事態発生！！本局内に謎の生命体が出現！！至急、応援を——！！」

言いきる前にその者の背後にもう一体が降り立つ。その者が最後に見たのは自分と同じサイズの巨大な…蜘蛛だった。

————————————————————

——————————————

会議が終盤に差し掛かった直後、爆発音と共に辺りに警報が鳴り響いた。

執務官１「な、なんだ！？」

執務官２「第一級警戒警報！？」

周囲で突然の騒ぎに困惑していると幾つもの通信が局全域に流された。

魔導師１『緊急事態発生！！本部内部に正体不明の敵が……うわあっ！！』

魔導師２『此方第四ブロック！！こっちにも出現！！くっ、数が多過ぎる！！至急増援を！！』

魔導師３『此方第七ブロック！！正体不明の敵が……！！一般職員にも被害が出てます！！至急応援を！！』

魔導師４『此方第五ブロック！！敵の数が多すぎます！！突破されそうです！！』

次々に来る通信は局内部からの通信だった。しかも、そのどれもが謎の生命体との交戦中だという状況。

フェイト「ど、如何なってるの！？」

バルド「恐らく…敵はイノセントだな」

何時の間にか起きていたバルドは近くにあるデータバンクにアクセスして局全体を映しだした。
そして、その内部にいる生体反応を探ると、局全体に有り得ない数の反応が映し出された。

ティアナ「こ、これって……！！？」

バルド「局全体に広がってるな……。この小さくて凄い速さで動いているのがそうだろう」

バルドが指差すのは高速で動く小さな生体反応。それが魔導師に接触した途端、魔導師の反応が消えた。その小さな反応は真っ直ぐに此方に迫って来ている。バルドはそれを確認しようと監視カメラの映像を映し出すもそれは既に破壊されており状況が把握できない。
小さな反応はもう直ぐそこに迫っている。

フェイト「皆！！何か来る！！周囲の警戒を！！」

多くの執務官が周囲の警戒を行い、一部がドアを警戒していた。静まり返る室内。時折り何処かで起きる轟音が小さく室内に響く。異様な空気に周囲の者達は徐々に精神がすり減り始めている。
多くの執務官がドアの前で警戒しているが全く襲いかかって来る気配がなく気が緩み始めたその時……天井から埃がパラッと落ちた。

バルド「気をつけろ上だ！！！」

バルドの警戒の声と共に天井が崩れそこから黒い影が落ちて来る。
その陰に下から数人が脱出するも二人程逃げ遅れてその下敷きになる。

執務官１「ぐあっ！？」

執務官２「がはっ！？」

執務官３「な、なんだこいつは！？」

フェイト「く、蜘蛛！？」

黒々とした体色で体長２メートルはありそうな蜘蛛がそこにはいた。
複数の赤い目をギラつかせその節々も赤かった。前足が他の足よりも少しだけ長く獲物を捕え、止めを刺すためにあるだろう牙はヒトの腕程の大きさをもっていた。

蜘蛛［キシャアアァァァァ！！！］

その巨大蜘蛛は足下で呻いている彼等を見つけるやいなやその二人に向かって襲いかかって来たのだ。

フェイト「危ない！！」

フェイトが咄嗟にソニックムーヴで二人を抱えて後退する。巨大な牙が空を切る。そして、直ぐにバルドが接近しケルベロスで斬りかかる。黒い甲殻に剣が当りそこから火花が散る。両断する事は出来なかったものの重量のある一撃にその蜘蛛は吹っ飛ばされて扉を吹き飛ばして通路の向こうに吹っ飛ばされた。何度か跳ねたあとに体勢を立て直して着地する蜘蛛。だが、反撃する暇を与えまいとバルドが直ぐに接近する。

バルド「爆炎剣！！」

漆黒の炎を纏ったケルベロスを叩きつける。激しい爆発が起きる。爆炎が両者を包み込む。
その中からバルドがゆっくりと現れる。背後の煙が晴れるとそこには頭部を潰され更にその内部まで焦がされて息絶えた蜘蛛の死体があった。

バルド「ケルベロス、こいつは……」

ケルベロス［間違いねえぜ、こいつはイノセントだ。ウヒャヒャ！！］

つまり、『神の意志（プロヴィデンス）』の新型モンスターということである。
堅い装甲に鋭い牙、素早い動きと単体だけでも魔導師には十分に脅

威であろう。その様な敵が局内にわんさかいるのだ。
そのことを考えながら視線を戻すと既にフェイトや一部の執務官が人を集めて数人単位に分けて各々の場所に行くように指示していた。

バルド（さて、俺はどうするかな……）

相手の目的を想像しながらバルドは一人考えていた。

---

本局が緊急事態に陥っているとき、ミッドも同様に緊急事態に陥っていた。

本局でイノセントが動き回ると同時にミッド上空で空間が割れそこから夥しい数のイノセントの群れが現れたのだ。
種類も？型から？型までおり、地上部隊が懸命に迎撃に移っていた。
そして、なのは達も通信を受けてヘリに乗ってミッド上空に向かっていた。

なのは「はやてちゃん。本局の通信は……！？」

はやて「だめや！！うんともすんとも応えへん！！一体、向こうで

何が起きてるんや！？」

ここに来るまでに何度も本局に通信を送っているのだが、全く返答がなくただ壊れたテレビの様に灰色の映像がザーっと音を立てているだけだった。

今、次元世界の中にある本局が襲撃を受けているなど誰もが予想だにしていなかった。
考え付くとすれば精々敵の通信妨害を受けているぐらいしか考えていないだろう。

次元世界という多くの人物が行く事のできない隔離された場所にあることによって安全を確保していたつもりが寧ろ、敵に袋のねずみにされるなどこれを建築した人物ですら想像だにしなかっただろう。

そこに地上部隊のスバルの姉、ギンガ・ナカジマからの通信が入る。

ギンガ『みなさん！！』

スバル「ギンねえ！！如何したの！？」

ギンガ『敵勢力のイノセントが手強くなってるの！！すぐに来て！！もう防衛線がもたない！！』

はやて「なんやてっ！？」

ガルド「ギンガ、住民の避難状況はどうなっている？」

ギンガ『まだ、六割程度しかできていないんです！！』

その間にも向こうでは激しい爆発音が聞こえる。ようやくミッドが視界に入る。
煙を上げる街並みと暴れまわるイノセントの大群が見えた。

なのは「皆、急いで行こう！！」

全員がヘリから降りて街に向かって飛翔する。街に入って初めに出迎えたのはトンボの様な姿をしたイノセント？型の集団だった。両前足を構えてそこから銃弾を連射して来る。散開する事でそれを回避し、なのはがアクセルシューターを飛ばす。追跡する魔力弾を持ち前の高機動で回避して再び銃撃して来る。それを避けたロイドに向かって一体が鋭利な爪で切りかかるがそれを受け流してそのままその細い足を斬り落とす。一瞬の動きの鈍りを逃さずそのままクロスする様に剣を振るい、そのイノセント？型を撃墜する。

ロイド「此処は俺が引き受ける！！みんなは他の所に援護に行ってくれ！！」

ティファ「ロイド、私が後方で支援します……」

ガルド「頼むぞ二人とも！」

この場をロイドとティファに任せて、残りは周囲に救援に向かって散開する。

東地区に向かったはやてとシリウス、アイネ、クラウドは大量のイノセント?型が迎え撃ってきた。

はやて「うちの新魔法……うけてみいや!!ラグナロクシューター!!」

はやてを中心に数発の白い魔力弾が展開され一斉に無数のイノセント?型に向かって飛ぶ。

はやて「いまや…!!拡散(スプレッド)!!」

それと同時に一つの魔力弾の中から更に小さな魔力弾が撃ち出された。それが次々に発生しイノセント?型の前にはまるで白い壁となったかのような密度の魔力弾の雨が完成されておりそれが一斉にイノセント?型に向かって殺到した。回避もままならない程の弾幕に次々に?型は被弾し撃墜され、たった一度の魔法で数十体の?型の集団は殲滅された。

アイネ「あれが、主の新しい魔法か?」

シリウス「そうだよ。ラグナロクシューターって言うんだ」

ラグナロクシューター、ギルが使っていた三色の砲撃を撃つ魔力弾とは違い此方は最大十発も周囲に展開する事が可能でその魔力弾の中には更に小さな魔力弾が収納されており、敵の数が無数にある場合はそれをまるで散弾の様に周囲に拡散させて広範囲の敵を殲滅する魔法である。この魔法は消費魔力量もそれほど多くない、しかも最大の利点は、詠唱を必要としない所である。詠唱魔法を使うはやてにとってこれは非常に使い勝手が良いものとなった。

はやて「ガンガンいくでぇぇぇぇ！！！」

シリウス「あらら……はやてがハッスルしてるよ。アイネ、俺達も行かないとはやてがドンドン先に行っちゃうよ」

アイネ「そうだな……。主、待って下さい！！」

新しい魔法によって苦もなく進めるはやてはテンションが鰻登りである。ドンドン先に進み、邪魔する？型を次々に撃墜しながら進んでいた。それをシリウスとアイネはやれやれといった感じで苦笑いして後を追うのだった。

シグナム「はあっ！！」

飛んでくる銃弾を回避して接近して？型を両断する。背後に回った一体がシグナムを切り裂こうと来るが彼女はそこから身を素早く翻し、その振り上げた足ごと両断し撃墜する。

シグナム「レヴァンテイン！！シュランゲフォーム！！」

レヴァンテイン［エクスプロージョン！！］

シグナム「はあぁぁぁぁぁ！！飛竜一閃っ！！！」

連結刃となったレヴァンテインを振るい蛇の如く伸びる刃が次々と？型を打ち破っていった。
そこに迫って来たのは巨大なカマキリの様な姿をしたイノセント？型、その丸太の様な腕を振り上げて薙ぎ払うかのように振るって来る。それを紙一重で避けて、弱点である筈の関節部分に向かってレヴァンテインを振るった。刃は真っ直ぐ？型の腕の関節目掛けて飛んでいき、弾かれた……。

シグナム「なにっ！？」

弾かれた事に驚愕するが瞬時に理解した。今まで弱点であった関節部分が装甲の様に硬い甲殻で覆われているのだ。だが、頭部にある

赤い目は覆う事が出来ない様で弱点が剥き出しである。

？型が腕を振るう。それを避けて距離を詰める。？型は更に口から光線、『集束粒子砲』を放つ。

巨大な砲撃がシグナムに迫るがそれを長年の勘で読み切って回避、レヴァンテインを元の剣の状態に戻し？型の頭部の上に舞い上がり構える。

シグナム「レヴァンテイン！！カードリッジロード！！」

レヴァンテイン［ロードカードリッジ！！］

シグナム「おおおおおおおおおおっ！！！紫電一閃！！」

レヴァンテインを頭部に叩きつけてそのまま唐竹割りをして地面に降り立ちレヴァンテインを軽く振る。？型の巨体が揺らぎ頭部から胴体にかけて一筋の線が奔り？型の頭部が真っ二つになって地面に倒れた。

シグナム「さて、何時までそこで見ている気だ？ジーク……」

ジーク「やはり気付いていたか……」

背後に声をかけると物陰からジークが姿を現した。その手には兄弟デバイス、『バルムンク』を持っていた。近くで戦っていたスバルとギンガがそれに気付く。

スバル「シグナムさん！！いま援護ｓ―「そうはさせないよ？クスクス♪」っ！！？」

その声にハッとなり咄嗟に前に踏み出そうとした足を止めると、上空から魔力で出来た針状のものがスバルの目の前に降り注ぐ。あと一歩動いていたら間違いなく針鼠の様になっていただろう。そして、スバルとギンガの前には二人の幼い少女が降りて立ち塞がる。

エリス「ジークの邪魔はさせないよ？クスクス♪」

クラレンス「そこで観客として見ているなら別に良いけどね～クスクス♪」

あの時の局の魔導師を惨殺した光景が浮かび思わず構えを見せるも二人は全く攻撃を仕掛けてくる素振りはなくただ、空中に腰掛ける様に座ってジークとシグナムの方を見ていた。

ギンガ「貴方達は、また……！！？」

エリス「ううん違うよ～。今日はジークの様子を見に来ただけ～クスクス♪」

クラレンス「あの二人の邪魔をしないんだったら何もしないから安心してもいいよ～クスクス♪」

無邪気に笑うその様子だけでも油断は出来ない。だが、あの二人を邪魔すれば間違いなくこの二人も動くだろう。そんな気配がし、スバルもギンガも動く事が出来ず、ただ、シグナムとジークと言う男を見ている事しかできなかった。

その二人は、暫し互いを見つめあっていた。そして、最初に口を開いたのはジークだった。

ジーク「……前よりは、強くなったようだな」

シグナム「当たり前だ。お前に会う為に……お前にもう一度会って勝つために私は鍛えたのだからな!!」

ジーク「フッ、それでこそ我が師だ……」

シグナム「違うぞ、ジーク…」

ジーク「なに……？」

シグナム「今此処にいるのは嘗てのお前の師ではなく、夜天の守護騎士、烈火の騎士、シグナムだ!!」

魔力が溢れだし彼女を包む。その魔力を肌で感じジークは無表情のままにバルムンクを構えた。

だが、シグナムには分かった。ジークは笑っている。少しだけだが

口の端が上がっているのが見えた。
よく見ないと分からない筈なのにシグナムにはハッキリと分かった。

ジーク「そうだな。では、行くぞ…我が最大のライバル、烈火の騎士!!」

シグナム「ああ、この戦いが出来る事を感謝し……」

ジーク「この神聖な戦いを誰にも邪魔されぬ事を祈る……」

シ・ジ「「いざ、尋常に勝負っ!!!」」

両者が同時に魔力を爆発させ距離を一気に詰める。そして、互いのデバイスを構える。刀身に魔力が纏い光り輝く。

シグナム「はあああっ!!紫電一閃!!」

ジーク「おおおおっ!!蒼電一閃!!」

同時に放たれた必殺の一撃がぶつかり合い大爆発を起こす。爆風で二人が吹き飛ばされるが同時に体勢を立て直し同時に地面を蹴り再び距離をゼロにして振るった。デバイスとデバイスがぶつかる鈍い音が断続的に聞こえる。
高速で振るわれる両者の剣。それは互いに相手の攻撃を受け流し、弾き、押し返す。シグナムが上段から来ればジークが下段から剣を振るい弾く。ジークが胴を狙う様に振るえばシグナムはそれを受け

止め、そこから蹴りを打ち込み距離を離し、シグナムが胴を斬る様に振るえばジークはその場で姿勢を低くして避けてその場で回転し蹴りを打ち込む。互いに一歩も譲らない激しい激突。だが、二人の顔には笑みがあった。

楽しい。二人の心の中にはその一文字のみが映っている。楽しい、心躍るこの戦いが……。楽しい、この様な強者に出会えた事が……。楽しい、全力でぶつかれる相手がいる事が……。楽しい、自分の攻撃を事如く受け流し驚く様な動きを見せる相手がいる事が……。楽しい、この様な相手がいる事が……！！

そして、何より嬉しいのが……。

ジーク「やはり、貴方は最高だ！！最高の……好敵手（ライバル）だ！！俺が望む、最高の頂だ！！」

シグナム「お前も最高だ！！血が滾る様な戦いは本当に久方ぶりだ！！もっと、お前の力を見せてくれ！！それで私は更に高みを見せる事が出来る！！！」

ジーク「いいだろう……！！貴方の力を限界まで引き摺り出す！！そして、私は貴方を超える！！！」

シグナム「なら、私はお前の限界を超えてお前を倒す！！！」

こうまで、自分の限界を引き摺り出そうとする気を放って来る相手がいる事だ。それが、嘗ての自分の師であり、夢であり、辿り着きたかった栄光の存在だったとしても……。それが、記憶がなくとも、

ただ自分の全力を、それ以上の力を体の奥底に眠る熱き心を目覚めさせてくれる様な存在だったとしても……。今、この戦いを止める気は全くない。紡ぐ言葉は少なくとも剣から互いの思いが伝わるのを感じるのだ。

シグナム「やはり、お前は私に関係があったのだな！！動きの中に少しだけ私と同じ節がある！！」

ジーク「そうだ！！貴方がこの戦い方を教えてくれた！！闇夜からでしか相手を葬れない影の俺を光に満ちた騎士の世界に引き込んでくれたのは貴方だ！！」

シグナム「分かる……。分かるぞ！！！お前から来る一つ一つの一撃からその想いが肌に突き刺さる様に感じる事が出来るぞ！！」

ジーク「貴方は、殺しに来た俺を、傍に置いてくれた！！何時闇討ちされても可笑しくないのにそれでも貴方は傍にいてくれた！！それは、暖かかった！！心地良かった！！」

互いの剣を弾き、胴に蹴りを入れて吹っ飛ぶ。呼吸を一度整えて再びぶつかる。顔がぶつかるのではないかという程近づける。

ジーク「だが、今はそんな事は如何でも良い！！この時を……この戦いを存分に楽しもう！！」

シグナム「ああっ！！今は過去の約束など忘れて、共にこの戦いを楽しもう！！」

二人の騎士が戦場で舞う。それは、周囲にいる者達を魅了する程に美しく、そして、荘厳な姿だった。

## 第四十七話（後書き）

如何でしたか？はやての新魔法フォースフィールドとラグナロクシューターはシリウスと合同で編み出した魔法です。フォースフィールドはテイルズでも有名な防御力を上げる魔術ですが、今回は自分とその周囲にいる者をあらゆる攻撃から九回だけ守る特殊な魔法防御壁として登場させました。補足するとバリアブレイクの効果を持った魔法も防げます！！でも、すさまじい魔力を持った奴は流石に数回分消費します。

はやて「使いにくいったらありゃしないで！？」

シリウス「あはははは～、それがこの魔法の面白ささ！！」

弱い魔法ですら九回受けたら消えるから使い勝手わるそうだもんね……。ラグナロクシューターは詠唱いらずの魔法で一度に大量の魔力弾が一発の中に散弾の如く入っていてそれが周囲に弾けるように広がるあたり範囲殲滅にも使えます。しかも消費魔力もそこまで多くないからお得♪

はやて「これは使いやすいで！！」

シリウス「はやての主力になれれば良いね～」

あとまだ魔法はいくつかなのは達にも考えはありますがそれを出すかどうかは分かりません。現在模索中です。

読者の皆様、ホント待たせてしまい申し訳ないです。これからも精一杯頑張りますんで宜しくお願いします！！では、今回はこれにて！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

1999

# 第四十八話（前書き）

四十八話更新！！

……最早何も言うまいｏｒｚ

ガルド「またも一週空いたな……」

セフィリア「しっかりしてよ……」

ホント申し訳ないっす……。さて今回は、新たな使徒も乱入します！

クラウド「そろそろそういうデータを投稿した方が良いんじゃないか？」

それも考えてはいるんですが未だ登場していない使徒も結構いますし……如何しよう？まあ、そこはおいおい考えるとして、では、本編をどうぞ！！

# 第四十八話

イノセントの猛攻は激しく、本局からの援軍も来ない事から地上部隊の防衛ラインは徐々に下がり始めていた。

陸士１「第一防衛ライン突破がされたぞ！！」

陸士２「くそっ！！誰かあの巨大なカマキリの大群の進軍を止める奴はいないのか！！？」

陸士３「無茶言うな！？ただでさえ俺達は本局の魔導師との実力差があるのにあんなの一人で押さえる事なんて無理だ！！」

陸士１「けどこのままじゃ、前回の二の舞だ！！」

爆発が幾つも起き砂煙が立ち上る。イノセント？型が進軍してきたのだ。複数の魔法が殺到するもそれをものともせずに進み、進行先にある邪魔な建物などを破壊する。

陸士３「第二防衛ライン突破がされた！？」

陸士２「くそっ！くそぉぉぉぉっ！！！」

イノセント?型［キュオオォォォォォォ！！！］

悪足掻きの魔法を放つもそれはあっさりと打ち破られる。そして、彼等に向かって?型はその巨大な腕を振り下ろそうとした。
…が、その時、

レイ［グオオォォォォォォォッ！！！！］

上空から銀色に輝く巨大な竜が急降下してその?型を強靭な足で蹴り飛ばした。
数トンはあろう巨体が吹っ飛びビルに激突、その前にその竜が降り立った。雄たけびを上げるそれはレイだった。吹き飛ばされた?型が起き上がり威嚇する。レイはその?型に突進しブチ当たりその巨体を壁に押しつけそこから後方に飛び退く様に下がりつつ火球を吐きそれを?型に叩き込んだ。燃え盛る炎に包まれた?型は悲鳴を上げてその身を焼かれて倒れ伏した。

レイ［グオオォォォォォォォォォ！！！］

天を仰ぎ雄たけびを上げるレイ。その声に反応して?型の群れがレイを視線に捉える。レイに傍らにもう一頭の竜が舞い降りる。金に輝く巨大な飛竜、レンである。二頭は一つ咆哮を上げて地面を蹴り無数の?型の群れに突進して行った。

魔導師１「なんなんだあの竜は！？」

魔導師２「誰か来るぞ？」

空を見上げると上空から舞い降りるのは虹の様な輝きを持つ翼を持った天使、コレットがいた。

コレット「皆さん、此処は私が抑えます。今の内に体勢を立て直してください！！」

魔導師２「あんたはあの時いた……！！」

機動六課といた事を知っている者は応援が来た事にホッとした。コレットはチャクラムを手に持ち飛翔しレイとレンの下に向かう。二頭の八頭のイノセント？型と戦闘を繰り広げている。

長い尾を振り回し、細い首に噛みつき引き千切り、火球で焼く。そこに横から雷撃が飛んで来た。それをコレットがレイ達の前に立ちホーリーメイルで防いだ。その方角には黒く光る体表を持つ生き物、イノセント？型が複数頭いた。

コレット「アル、ウルお願い！！」

その声に地面が盛り上がりそこから巨大な二頭の竜が雄たけびを上げて出現した。覇竜『アカムトルム』のアルと崩竜『ウカムルバス』のウルだ。

その二頭は地面を蹴り?型に向かって突進、その巨体にぶち当たる。ヌルヌルした体表を持つ?型はその攻撃を受け流し逆にその大きな口でアルの頭を呑み込もうとする。アルはその大きく開いた口に向かって大きくて強靭な爪のついた前足を自ら突っ込んだ。そこから力任せに腕を引く、爪が体内を引き裂き?型の口から体液が噴き出た。悲鳴を上げて仰け反った?型にアルは大きく息を吸い、一気に吐き出す。アルの使う得意技『ソニックブラスト・オメガ』である。巨大な衝撃波が周囲のビルをバラバラにしながらそれが?型に直撃、凄まじい衝撃で?型は体をバラバラにされて息絶えた。

ウルの方もスコップの様な顎を敵の下に潜り込ませて打ち上げる。軽く宙に上がり引っくり返る?型に飛び乗り抑えてそのままゼロ距離で強力な水流を圧縮して撃ち出す『アブソリュートブラスト・テオ』を放った。極低温の水流に体組織を氷漬けにされ動きの鈍った敵をウルは容赦なくその巨木よりも大きな太さの足を振り落とし頭を踏み潰す。
最後に二本足で立ち上がりそこから全体重をかけたのしかかりで?型を叩き潰した。体の芯まで氷漬けになっていた相手はその一撃にあっけなく粉砕されてバラバラになった。

一匹ずつ仕留めたのを確認したあと、二頭はまだ残っている?型に狙いを定め咆哮を上げてその群れに突進して行った。

ヴィータ「ラケーテンハンマー!!!」

ヴィータのグラーフアイゼンがイノセント?型の頭部を捉えて吹き飛ばす。その彼女に仲間を落とした恨みを晴らさんと四頭の?型が接近し銃撃する。その攻撃を体を捩じって回避しシュワルベフリーゲンを放ち牽制、回避した所を回り込んでアイゼンを振り下ろして一頭を撃墜し、そのまま回転し背後から爪で切り裂こうとした一頭も殴り飛ばした。

残った一頭が背中から筒状の物を展開しエネルギーを充填、そこから『リニアガン』を発射、音速を超えた一撃はヴィータに直撃、爆炎が彼女を包み込む。

ヴィータ「甘いんだよ!!」

しかし、煙を突き破って無傷のヴィータが飛び出した。彼女は直撃する寸前に咄嗟に防御魔法を展開し何とか防いでいたのだった。相手がまだ生きていたのに驚いてか反応が遅れた?型の脳天にアイゼンを叩き込み頭部を完膚なきまでに叩き潰した。頭部を粉砕され?型は地面に向かって落ちていった。

ヴィータ「くそっ!!数が多過ぎんだよ!!」

数の多さも戦闘能力も負けている状況に悪態を吐くヴィータ。ロイド達がいるお陰で日々レベルアップしている六課メンバーは前と違

って少しだけ余裕があるが他はあまり進歩がない。寧ろ、前回の襲撃で負傷した人達がまだ復帰できていない所為で前よりも戦況は悪化している。周囲を飛び交う虫の大群。これ程の軍勢をどうやって此方に送りつけているのだろうか？

ヴィータ「まてよ……？確か、前回は変な装置から発生していた波動かなんかでこいつ等が大量に転送されていたってフェイトの奴が言ってたな……」

もしかすれば、今回も何処かに設置されてそこを利用して転移しているのかもしれない……。

そう考えたヴィータはあまり得意ではないが探査魔法を展開、周囲を探ってみる。

すると、ある一か所で不自然な反応を捉えた。明らかな妨害魔法をコーティングした形跡のある物がそこにある。

ヴィータ「あれか？」

視線の先には海にポツンと立っている、いや、浮いている物体。何の変哲もない物だがあれから不自然な反応を捉えたのは間違いなかった。つまり、あれを壊せば少しはこの状況を打開できるかもしれない。そう判断しヴィータは？型の攻撃を掻い潜りながらそれに接近する。そして、肉眼でハッキリと捉えられる位になったその時、上空から複数のビームが彼女に降り注いだ。

ヴィータ「っち！！」

咄嗟に体を捻って回避、避けきれないものはアイゼンで弾いた。上空を見上げると飛来する三つの影があった。それぞれ緑、青、黒を基調したクラウド達と同じ『鎧装（フレーム）』を装備している者達……

カオス「それ以上は近づけさせねえぞ！！」

アビス「今ので落ちればよかったのにな！」

ガイア「敵は……殺す……！！」

ヴィータ「テメーらは、あの時の……！！」

クラウド達の故郷、機装国家『グランディオン』に行った時に相対した次元海賊に所属しているカオス、アビス、ガイアと呼ばれていた三人組だった。三人はヴィータと海の上に浮かぶ装置の間に立ち邪魔をする。

ヴィータ「やっぱりそれがこの虫共を呼んでた装置か！！」

カオス「だったら如何した！？テメー一人で俺達三人を倒せると思ってんのか？」

ヴィータ「当然っ！！！」

ヴィータがシュワルベフリーゲンを三つ展開し一斉に放つ。三人はそれを回避、三方向からビーム砲を撃つ。それを紙一重で回避して肉薄する。狙いは、遠距離攻撃の得意としている筒状の武器を背負った男だ。

ヴィータ「おらっ！！」

カオス「ちぃっ！！」

アイゼンを振り下ろす。それをカオスは持っていたシールドで防ぐ。

ガイア「カオス、守る……！！」

ガイアがビームライフルを連射、ヴィータをカオスから引き剥がす。離れたヴィータにアビスが接近、ビームランスで連続突きを仕掛ける。それを避けれるものは避け、弾けるものは弾き防いだ。その間に体勢を立て直したカオスがビームライフルでヴィータの死角から攻撃する。それを長年の勘で反応して体を捩じって回避して体勢を立て直すために一端距離を取り後退する。

ヴィータ（やっぱ三対一はきついな……）

相手は動きは少し粗いがそのコンビネーションは折紙付きだ。きっとＦＷ陣と良い戦いをするだろう。
流石のヴィータでも、今の成長したＦＷ陣を相手にするのは骨が折れるというか多分負けるかもしれない。
このまま戦闘を続ければ何れは回避しきれずに攻撃を受けるだろう……。

ヴィータ（その前に……叩き落とすっ！！）

不利な状況を打開する方法は一つ、相手が三人で一つなら、その中の一人を潰せば間違いなく向こうは連携を上手くとれずに混乱する筈である。そこを突けばまだ勝機はある。

まあ、上手くいく算段はない……。最悪の場合は玉砕覚悟であの装置だけでも破壊するとしよう、とヴィータは考えをまとめてアイゼンの柄を強く握り三人を見据える。

カオス「ちっ！ガキが調子に乗るんじゃねえよ！！」

アビス「とっとと落ちろよ！！」

ヴィータ「あたしは……大人だ！！！」

全身に魔力を漲らせて三人に向かってヴィータは飛翔した。

エリオとキャロの二人は周囲を飛び交うイノセント?型の軍勢を相手に奮闘していた。
キャロが相手の動きを捕縛して封じ、エリオがそれを確実に倒す。
狙いやすいキャロを落とすべく?型が銃撃するとエリオがそれをプロテクションで防御しフリードが火炎を吐いて焼きはらう。

エリオ「キャロ、大丈夫?」

キャロ「うん、大丈夫だよ。エリオくんこそまだいける?」

その問いかけにエリオは頷いて応え、ストラーダを構えて突進、目の前の?型を貫き撃破する。

エリオ「ストラーダ、ソニックムーヴ!!」

高速移動魔法を発動し?型の群れの中を高速で飛び交う。通り抜けざまにストラーダを振るい一体一体を確実に落す。キャロもアルケミックチェーンで捕らえた敵をシューティングレイで撃ち落とし、

フリードも火球を撃ち込み撃破した。順調に敵の数を減らしていきこのまま攻めれば勝てると思っていた、が……

キャロ「っ！！魔力反応！？エリオくん下がって！！」

大きな魔力反応をキャッチしたキャロがエリオに声をかける。咄嗟にエリオは後退する。そこに先程までエリオがいた場所に紅蓮の炎が通り抜け建物に直撃、爆発を起こしてその壁を吹き飛ばした。

エリオ「今の魔法は……！！」

見た事のある攻撃魔法にエリオは無意識にストラーダの柄を強く握り、空を見上げる。その視線の先には……

アグリス「ほお、あれを避けたか……。少しは出来る様になったか……」

？？？「……」

エリダリアで戦った男、アグリスと見慣れぬ男がそこにいた。ボロボロの使い古された様な黒いローブを身に纏いその手には杖を持ち、まるでお伽噺に出てきそうな悪い魔法使いを彷彿させる出で立ちだった。その人物は、第７３管理外世界グローリスで出会った片方の人物だと思いだした。

エリオ「貴方達は……！！こんな事をして何になるんですか！？」

アグリス「餓鬼が…！！俺にものを言うにはあと百年早えよ！！」

アグリスが距離を詰めマン・ゴーシュで突きを放つ。それをストラーダで受け止める。暫しのつばぜり合いしてエリオはそれを受け流しそのまま回転して振るう。アグリスはそれを避ける為に後方に下がる。それと同時にエリオは魔力を爆発させ一気にアグリスに向かってストラーダを構えたまま突進、射程内に入ると同時に一気に打ち込む。
それにはアグリスも流石に驚きの表情を見せた。体を捻って避ける。そして、回避と同時にエリオに向かって刺突をする。エリオはそれに反応してストラーダで受け流した。

アグリス「ほお、前とは違って少しはいい動きを見せるじゃないか。……だが、またお前は非殺傷にしているのか？」

エリオ「僕は、僕達は管理局の魔導師だ！！幾ら犯罪者だったとしても相手を傷つけたくない！！」

アグリス「またお前はそうやって人を虚仮にするのか！！戦場も知らない餓鬼が、一端の口を聞くんじゃねえ！！戦場で相手に情けをかけられるほどムカつく事はねえんだよ！！」

アグリスの魔力が爆発的に大きくなる。一気に距離を詰めアグリス

はエリオに対して猛攻を開始した。

キャロ「エリオくん、援護ｓ――「お前の相手は俺だ……」っ！！」

エリオの援護をしようとした彼女に向かって黒い魔力弾が飛んで来た。咄嗟にプロテクションで防御し防ぐ。

？？？「アグリスは一対一を望んでいる。邪魔をするな小娘……」

キャロ「貴方は一体……！！」

サクリス「俺は第七の使徒、サクリス。小娘、貴様の相手は俺がしてやろう……」

サクリスが両手を広げると足下に黒い大きな魔法陣が出現する。その禍々しい魔法陣から溢れる得体の知れない魔力にキャロは背筋が寒くなる感覚を覚えた。

キャロ（これは、あの時の魔力反応！？まさか、召喚魔法！？）

サクリス「出でよ、この地に眠りし怨霊達よ……『ネクロゲート』」

地面がボコッと一つ盛り上がりそこから赤い骨の腕が飛び出す。そして、幾つもの腕が周囲の地面からも現れ地中からあのグローリス

で戦った骸骨の兵士が出現した。その数、ざっと十二体。

キャロ「召喚、魔法……？」

サクリス「似た様で違う。まあ、今から死ぬ貴様には関係のない事だ。……遣れ」

スケルトン「ケケケケケケケケ～～！！！」

スケルトンの群れがキャロに飛び掛かる。キャロはフリードの高度を上げさせて距離を取りシューティングレイを放ちスケルトンを吹き飛ばす。骨だけの彼等はあっさりとそれによって粉砕されバラバラと崩れ落ちる。が……

スケルトン「カカカカカカカ～！！」

それは、直ぐに再生しバラバラになった体を構築して元の姿に戻った。そして、スケルトンは手に剣、弓を召喚しそれを手に持ち剣を投げ、弓を放って来た。それを回避してフリードのブラストレイを放つ。火球によって炎に包まれるスケルトンは今度は再生する事なく黒焦げになり粉となって消えていった。

サクリス「ふむ、まあこの程度は今まで生きてこれたのだから倒せて当たり前か……」

キャロ「フリード！！」

フリード「キュクル～～！！」

ブツブツと分析しているサクリスに接近し一気に勝負を決めようと考えた。あのスケルトンを召喚されてはまともに戦う事など出来ない。なら、召喚する暇を与えない様に距離を詰めて攻撃するしかない。この手の魔導師は接近されると対抗する手段は少なくなる。これは自身にも当てはまる。だからこそ、こちらに近づかせずに如何に相手にダメージを与えるかが肝になるのだ。

サクリス「舞え、スケルトルセイバー……」

しかし、サクリスが魔法を発動。彼の周囲に骨で出来た剣が八本出現する。それは、その場で回転を始めると弾丸の様に打ち出された。高速回転する剣が四方八方に散り直ぐにキャロを包囲する様に戻って来た。キャロはプロテクションを展開しそれを防御する。激しく両者の間で火花が散る。そして、両者の魔法は相殺され弾けて消えていった。

サクリス「受けよ、スカルストライク……」

サクリスの隣に弓を持ったスケルトンが一体出現。それは素早い動きで弓に矢を載せキャロに照準を合わせて放つ。猛スピードで飛ぶ矢がキャロの心臓目掛けて来る。彼女は反射的に体を捩じってそれ

を避けようと試みたが…それは左腕を掠めていった。

キャロ「つっ！！？」

フリード「キュク～！？」

キャロ「大丈夫だよフリード。まだ、大丈夫…！！」

痛みに声が漏れてそれに反応してフリードが彼女を気遣う様に声を上げる。それをキャロは宥めてサクリスの様子を窺う。矢を放ったスケルトンは役目を終えたのか地面に沈むようにして姿を消して行った。サクリスは最初の位置から全く動いてはいない。

キャロ（やっぱり、強い……！！）

サクリス「如何した、来ないのか？ならば、此方から行かせて貰おう」

改めて実感する使徒の実力。それを噛み締める暇をも与えずにサクリスは再び骨の刀剣を出現させ一斉に射出、キャロはフリードを上手く操りそれを回避、少しの隙を見つけてそこからアルケミックチェーンを放ち拘束しようと試みるがその鎖は回り込んだ刀剣が自身をぶつける事で相殺し防いだ。

キャロ「フリード、ブラストレイ！！」

すかさずフリードのブラストレイを放ちサクリスに攻撃する。サクリスはそれを避けようともせず立っている。

サクリス「蛮骨（スカルフード）の金剛腕……」

そう唱えるとサクリスの前方に魔法陣が出現、そこから天に向かって拳を打ち出す巨大な骨の腕が出現しフリードの火球を防ぎサクリスを守った。あまりにも太いその腕はフリードをも簡単に吹き飛ばせそうな大きさだ。だが、その腕はフリードの攻撃を受け終えるとそのまま地面に潜っていった。如何やら今の魔法は攻撃ではなく防御用の魔法の様だ。相手の魔法の奇怪さに戸惑いながらもキャロは一人、危険な使徒との戦闘を続行するのだった。

---

ミッドで激しい戦闘が繰り広げられている頃、本局でも熾烈な戦いが始まっていた。

魔導師達の前方には無数に蠢く黒い物体。蜘蛛を巨大化させたような生き物が物凄い速さで此方に向かってきているのだ。

魔導師１「迎え撃つぞ！！」

魔導師達が一斉に魔力弾を放つ。弾幕が蜘蛛に直撃し爆炎に包まれる。その爆炎を突き破って二匹の蜘蛛が飛び出す。そして、無数にある眼の前に光を集束、それを一気に放った。一条の光となりまるでレーザーの様になったそれは一人の魔導師の肩を貫いた。

魔導師２「ぐあああああっ！？」

地面に倒れて痛みで悶絶する仲間の一人に意識が一瞬だけ向いた。その一瞬が命取りだった。上を奔る配管を突き破って数匹の蜘蛛が降りて来る。地面に降りた瞬間、赤い眼を光らせながらその強靭な前足を振るい近くにいた魔導師を壁に吹っ飛ばす。別の一匹は蜘蛛の糸を吐き動きを封じてから全身を使った体当たりでその魔導師をぶっ飛ばした。制圧した蜘蛛達は数匹を残して再び進行する。

魔導師１「く……そぉぉ……」

蜘蛛［ギチギチギチギチ……］

もがく魔導師を蜘蛛は牙を打ち鳴らして嘲笑っている様な気もする。そして、彼等に止めを刺そうと足を振り上げた時、通路に奔る魔力弾、それは正確に蜘蛛の赤く光る足の関節を貫き足を切断した。

蜘蛛［キシャアアアッ！？］

緑の体液を傷口から噴出させ悲鳴を上げる。そして、自分の足を吹き飛ばした不届き者を、仲間の足を吹き飛ばした敵を探す為に魔力弾が飛んで来た方に体を向けると……

ティアナ「クロスファイヤー、シュート！！」

複数の魔力弾が一斉に此方に飛んで来てそれは全て其々の足の関節や赤く輝く眼に直撃した。
痛みで仰け反った蜘蛛の集団が次にその水晶の様な眼に映ったのは金に輝く大きな鎌……。
そして、次に移ったのはそれを振り上げる金の女神……

フェイト「はあっ！！」

一瞬でバルディッシュを振り抜き蜘蛛の集団を通り過ぎる。魔力刃に付いた敵の体液を払う。それと同時にそこに立っていた蜘蛛の一団は眼から胴体にかけて縦にパックリと裂け絶命した。

そこにいたのはフェイトとティアナであった。周囲にいるだろう増援は今、バルドとクロノが請け負っている。一応警戒はしているがまず、二人を突破して此方に来る事はまず不可能だと思っている。

フェイト「大丈夫ですか！？」

魔導師１「えっ！？フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官！？」

管理局で有名な執務官にこんな時に会えるとは思ってもみなかった様で驚きに眼を見開く。
そこに、二つの足音が聞こえてきた。

バルド「相変わらずの名声だな、フェイト」

フェイト「あっ、バルド。イノセントは……？」

バルド「ここいらにいるのは取り敢えずはＫＹと一緒に潰したが…一時凌ぎにしかならねえな」

クロノ「このイノセントは何処かに拠点がある筈だ。それを叩かないとこの状況は好転しない。それと、ＫＹと言うな」

睨むように視線をバルドの方に向けるクロノ。それを涼しい顔でスルーするバルド。有名な女神と称されるフェイトどころか若くして提督にまで上り詰めたクロノまでもがいる事に魔導師は驚いていた。

傷つき倒れている彼らを簡易的な治癒魔法で治療しているフェイト達を余所にバルドは一人通路の向こうを睨む。

バルド（おかしい……。奴らの目的が本部の襲撃なら何故此処にいる魔導師を直ぐに殺さずに放置していたんだ？これじゃあ、まるで時間を稼いでるような……。ん？時間を稼ぐ……？）

フェイト「バルド？如何したの？」

バルド「そういう事か……フェイト、悪いが先に行かせてもらう！！」

フェイト「えっ！？バルド、ま、まっｔ…！！」

フェイトの制止を振り切ってバルドは一人、通路の先に向かい姿を消した。

---

混沌とした通路を平然と歩く者がいた。辺りでは傷つき動けなくなっている魔導師達がいるがその者は手を貸そうとは思っていない。その先にあるのは局にとっては敵の侵入を許してはならない場所、『ロストギア保管庫』がある。

トールス「ふん、局の優秀な魔導師も所詮はこの程度か」

その男はトールス。彼はこの混乱に乗じてそこにあるであろう御珠を回収しに来たのだ。此処まで来るのにS級魔導師との幾つかの戦闘があったが全て無難に倒してきた。

トールス「ここか……」

目的の場所に辿り着きその部屋に侵入していった。ありとあらゆるロストギアが厳重に保管されている
中を歩み目的の物の保管されている所に行きつく。封印されているそれを取り出し封印を破壊する。
それは、眩い翡翠の輝きを放ち周囲を照らす。それを懐に隠し早々にその場から立ち去ろうとするが……

バルド「やっぱり此処に居やがったか」

トールス「むっ……」

不意に掛けられた声に咄嗟にデバイスを起動させ声のした方向に構える。そこにはバルドがおり背に掛けてあるケルベロスの柄を掴んで臨戦態勢にすでに入っていた。

バルド「イノセントで襲撃して混乱に乗じて既に封印されていたロストギアの確保、か……」

トールス「英雄が一人、『煉獄の魔神』か！？」

バルドは相手との距離を一気に詰めてケルベロスを振り下ろす。驚愕で目を見開くトールスだが身を捻ってそれを避ける。剣が空を斬る音が聞こえた。バックステップで距離をとりバルドから離れる。

トールス「くっ！！此処はロストギア保管庫だぞ！？誘発して暴走したらどうする気だ！？」

バルド「ああ？そんなの簡単だろ。全部暴走したら覚醒する前に封じ込めりゃいいんだよ」

平然とそう答えるバルドにトールスは化け物を見るような眼で目の前にいるバルドを見た。

此処にあるだけも数百はあるのにそれをその身一つで封じ込めるなど不可能だ。それをあっさりと言ってのけるバルドに初めて恐怖を感じた。兎に角、この狭い場所では埒が明かない。

トールスは壁際に移動しその壁をデバイス『雷電』で破壊し隣の通路に退避、直ぐにその場から離れる。それと同時にトールスのいた場所に漆黒の炎が直撃し壁をさらに破壊した。

そして、煙の中からバルドがゆっくりと姿を現す。

トールス「くっ、行けイノセント?型!!」

イノセント?型［キシャアアアアァァァッ!!!］

騒ぎを聞きつけ駆けつけたイノセント?型と呼ばれたあの蜘蛛達が一斉にバルドに襲い掛かる。

バルドはその蜘蛛の大群をケルベロスを一振りするだけで堅い甲殻を無視しその中にある肉すら引き千切って両断した。同胞をやられた?型が眼の前に光を収束、貫通性の高いビームをバルドに一斉に放った。それをバルドはケルベロスで弾いて撃った本人に返した。

真っすぐ戻ってきたビームは?型の体を貫通し?型は爆散して消えた。

トールス「化け物め……!!」

バルド「ああそうだ。俺は正真正銘の化け物さ」

ニヤリと笑みを浮かべてバルドはトールスに向かって突撃していった。

2024

バルドを見失ったフェイト達は際限なく溢れ出てくる？型を撃破しながら負傷した局員を救助していた。他の執務官も別行動で救援作業をしている事で最初よりも敵の数は減りつつあった。
救助した者の中に動ける者を集めてクロノは指示を出し地上との通信を確保する為に動いてもらうことにした。

そして、進むんだ先で無数の？型に囲まれながらも結界魔法を張って職員を守っているユーノを発見した。強固な守りを突破できずに？型はそれに執拗に攻撃を加えておりそれが破られそうになっていた。

フェイト「はあっ！」

クロノ「スティンガースナイプ！！」

友人の危機にフェイト達が駆け付け？型を撃破する。頼れる友人の到着にホッとしたのかユーノの魔法は役目を終えるかのように消えていった。

ユーノ「フェイトにクロノそれにティアナも助かったよ」

クロノ「司書長が随分と奮闘したみたいだな。流石はフェレットもどきだな」

ユーノ「あははは、僕以外の人は殆どが非戦闘員だからね。少しでも守る事なら僕にもできるからね…って、久々に会ってその言い方

はないんじゃないかな！？久し振りに聞いたよその言葉！？」

事実、ユーノの防御魔法、結界魔法は優秀である。今いる所は無限書庫からかなり離れた位置だ。
きっと彼の事だ、職員たちを転送装置まで連れていって此処から脱出させようと考えたのだろう。
所々に傷を負っており此処に来るまでに何度か襲撃を受けたようだ。

応急手当をしていると通信室を確保した部隊から連絡が入り本部だけでなくミッドも襲撃を受けているという知らせが入った。大量のイノセントに加え、現在は複数の航空機と戦艦までもが出現しておりあと十分ほどで街に到着するという。

クロノは周辺で戦闘を行っている提督階級の者達に連絡を回しＸＶ級大型次元航行艦の出撃を通達する。一部は次期主力艦を出撃させることを渋っていたがこの状況だ。三百メートル級の艦隊を出さねば管理局は間違いなく崩壊し統率の無くなったところを一斉に攻撃され壊滅するだろう。その事を理解している彼らも今回は拒否はせずに出撃する気になったようだ。

クロノ「僕はクラウディアでミッドに行く。此処の事は頼むぞ」

フェイト「うん。分かった」

ユーノ「クロノ、油断しない様にね」

クロノ「ああ、分かってる」

クロノは来た道を戻りそこで他の提督等に合流し戦艦に乗って出撃しに向かった。
フェイトとティアナは一度、ユーノ達をこの場から脱出させる為に転送装置のある場所に向かう事にした。

少しだけ進むとそこには無数のイノセント?型が待ち構えておりフェイト達を視界に捉えると一斉に襲いかかって来た。フェイトが持ち前のスピードで相手を攪乱しザンバーフォームのバルディッシュを振るいその大きな足の赤く光る関節部分を斬る。
仲間を攻撃している彼女の背後に回った一体が襲いかかろうとしたがそれをティアナが射撃で動きを止めて封じる。遠距離から攻撃してくるティアナを仕留めようとする一体がレーザーを放つがそれはユーノが防御魔法で防ぎその?型をフェイトが足を斬り落として行動不能にする。

一気に距離を詰め片側の全ての足の関節を斬り落とし動きを封じ直ぐに体を捻って反対から迫って来た別の一体の頭に斬撃を入れる。悲鳴を上げて仰け反った所を上段斬りで斬り伏せ直ぐにその場に身を伏せるとその上を複数のレーザーが飛び抜けた。視線を前に向けると騒ぎを聞きつけて集まったのだろう?型の新たな軍団が見えた。一斉に放たれるレーザーをフェイトは縫う様にして回避し距離を詰めて一番近い敵の頭部を貫く。
直ぐにその頭部からバルディッシュを抜き取り、その上に飛び上がり体勢を変えながら敵の背後に着地する。ふわりと彼女の美しく輝く金髪のツインテールがその後を追う様に舞う。?型が彼女の方を向くとその複数の水晶の様な眼に映ったのは巨大な金色の大剣、そして、次の瞬間にはフェイトは再び?型の背後にバルディッシュを振るった状態で立っていた。フェイトがバルディッシュの魔力刃に

付いた体液を振るって落すと同時にその？型の軍勢も倒れ伏した。

バルディッシュ［マスター、周囲にイノセントの生体反応はありません。今のでこの周囲の敵は排除できたと思われます］

フェイト「ありがとうバルディッシュ。皆この周辺の安全は確保できたよ。早く転送装置の所に行こう」

転送装置の周りにいた敵を排除しその安全を確保した一同は通路を進み装置のある所にたどり着く。

フェイトはユーノに六課に避難する様に言い彼も今はそれが賢明な判断と思っていたのでミッドで戦っているはやてに許可を貰い職員達を先に転送した。

ユーノ「そういえばバルドは何処に行ったの？一緒にいると思ったんだけど？」

フェイト「バルドは……」

ティアナ「バルドさんは何か気付いたみたいで私達を置いて先に行ってしまったんです…」

ユーノ「そっか…。それなら僕が探査魔法で探してみるね」

ユーノはその場で探査魔法を展開、周囲にバルドの魔力反応がないか探って見た。するとある場所で反応を掴んだ。

ユーノ「え、『ロストギア保管庫』の近くにいるよ!?」

フェイト「な、何でそんな所に……!?あっ、まさか……!!」

ティアナ「この襲撃はロストギアを手に入れる為に起こしたって事!?」

敵はロストギアを集めている。本部にある保管庫ならそれもある可能性がある。

フェイト「急いで行こう、ティアナ!!」

ティアナ「はいっ!!」

ユーノ「待って二人とも!!バルドの他に別に大きな魔力反応がある!!それも……二つも!!」

フェイト「まさか、使徒!?」

ユーノ「可能性は高いかも…。一つはバルドとぶつかっているし、もう一つはそこに猛スピードで向かってる!!」

もしその二つが使徒だとすれば、バルドが危ない!!フェイトとティアナはユーノを六課に避難させたあと、バルドの援護に向かう為に通路を駆ける。その道を?型が阻む。

フェイト「退いてっ！！」

バルディッシュを振るい障害となる？型を斬り伏せる。何処から湧いて出てくるのか？型はしつこく彼女達の邪魔をする。

ティアナ（おかしい……。こんなに沢山のイノセントが今まで一体何処に隠れていたの！？）

あまりにも沢山のイノセントの群れにティアナは思考する。これ程の数の敵を隠せる場所など此処にはあまりない。それに、敵はこの局内全域に瞬時に広がっていた。それはまるでその専用の道があるかのように……。

ティアナ「あ、れ…？専用の道…？あっ！！」

フェイト「如何したのティアナ？」

ティアナ「まさか……！？」

ティアナが上を見上げる。それにつられてフェイトも上を見上げるが天井があるだけだ。しかし、ティアナはその天井に向かってクロスミラージュを構え魔力弾を発射した。直撃し爆発で天井が崩れる。

フェイト「ティアナ!?一体何してるの!?」

ティアナ「フェイトさん、見てください!!」

ティアナの指差す先を見るとそこには……配管があり。破壊された配管の暗闇の中から?型が姿を見せた。

フェイト「イノセント!?」

ティアナ「おかしいと思ってたんです。何故こんなに沢山のイノセントが潜伏していたのか…。それで思い出したんです。バルドさんが局内全体のマップを開いた時に全体に広がる様にイノセントの反応があったのに。それで、局内に一気に広がる事が出来るのはこの配管しかないと思ったんです」

フェイト「じゃあ、この配管の集結する場所に……!!」

ティアナ「おそらく、イノセントを生み出すものがあると思います!!」

配管の集結する場所、それは今の現在地の直ぐ近くだ。だが、そちらに行けばバルドの下に向かうのに時間がかかる。悩むフェイトにティアナは…

ティアナ「フェイトさんはバルドさんの下に向かってください。私

がイノセントの拠点を叩きます」

フェイト「一人じゃ危険だよティアナ。それなら私も……」

ティアナ「いえ、私だけでも大丈夫です。それに、私がバルドさんの下に行っても足手まといになるだけです。だから、私が拠点の方に向かいます」

フェイト「……分かった。ティアナ、お願いするね。けど、無理は駄目だよ？周辺にいる魔導師にも向かわせる様に伝えるから一人じゃ危ないと判断したら直ぐに後退してね？」

ティアナ「はい！！」

それに強く頷いたティアナは駆け出しイノセントの拠点のある配管の集う部屋に向かっていった。
それを見送ったフェイトはバルドの下に向かって駆け出す。

---

ロストギア保管庫の直ぐ近くにある大きめの部屋で二つの影がぶつかり合う。
一つは身の丈よりも大きな大剣を振るい目の前の敵を叩き潰そうとする。もう一つの影はその一撃必殺の攻撃をその細身の刀で受け流し無理と判断したものは身を捻って回避していた。

横に剣を振るうと目の前にいる忍者服の男、第十の使徒トールスは上に飛び剣の腹に着地しそこから小ジャンプしその者の頭部に向かって回し蹴りを放つ。それに対して大剣を持つ男、バルドは逆手でその蹴りをガードし振り払うその勢いを利用してトールスは距離を取る為に後退空中で体を回転させ体勢を整えて着地しようとする。その隙を逃さずバルドは自身の持つ剣、ケルベロスに漆黒の炎を纏わせ地面に振り下ろす。剣から黒い炎が衝撃波となって床を抉りながらトールスに向かってきた。

トールス「雷電、ボーガンフォーム！！」

雷電［御意……］

トールス「獣の咆哮、ビーストバスター！！」

雷電を忍者刀からボウガンに変えてそこから獣の形をした砲撃を放つ。二つの力がぶつかり合い爆発を起こした。立ち上る煙を突き破ってバルドが姿を現し左手にバハムートを出現させトールスに振り下ろす。身を捩じって回避するがそこに更にバルドが距離を詰めて来きた。

バルド「戦迅狼破！！」

トールス「ぐっ、ごぼあっ！！」

狼の形をした闘気が放たれてそれはトールスに直撃。吹っ飛び壁に激突する。

トールス「くっ、これが英雄の力か……！」

バルド「英雄ね……どっちかって言えば俺は反英雄なんだがな……」

トールスの悪態にバルドはそう呟く。まあ、そんな事は如何でも良いか、と思いまずは目の前の使徒を倒すことだけを考えようと思考を切り替える。

バルド「まずは、一人m――「そうはさせないわっ！！」くっ！？」

部屋の壁が吹き飛んだと同時に粉塵の中から一つの影が飛び出した。短く揃えた藍色の髪を持った女性でその者はバルドに一気に距離を詰めてその右手に魔力を纏わせて打ち出してきた。
急な襲撃者にバルドは回避が間に合わないと判断し右腕でその拳を受け止める。骨がミシミシと音を立てた。

？？？「おらあっ！！！」

そのまま女性は拳を振り抜く。凄まじい衝撃にバルドは吹っ飛ばされ壁まで吹き飛ばされた。

???「大丈夫トールス?援護に来たわよ」

トールス「すまないパオラ」

パオラ「全く、隠密が得意なあんたが見つかるなんて随分な敵ね。加勢しようかしら?」

トールス「いや、お前にはこの御珠を持って逃げて欲しい」

トールスは懐から御珠を取り出しそれをパオラに持たせた。

トールス「私がこの者を抑える」

パオラ「あんた…死ぬ気?」

トールス「ふっ、もしそうだとしても道連れにしてくれる」

フッと笑うトールスをパオラは見る。覆面で顔はよく見えないがその目にはまだ死ぬ気はないという気だけは見て取れた。

パオラ「分かったわ。けど、絶対に戻ってきなさいよ」

そう言いパオラは目的の物を手に持ち駆け出して行った。

バルド「逃がすかっ！！」

トールス「貴様の相手は私だ！！」

御珠を持って撤退したパオラを追跡しようとバルドが駆けるがそれをトールスがクナイ型の魔力弾を放ちその進行を妨げた。一瞬だけ動きが止まったバルドに接近し雷電を振るう。それをバルドはケルベロスで弾き、防ぐ。高速で繰り出される斬撃がバルドを追い詰める。そして、一瞬の隙を突いてトールスはバルドの腹に蹴りを打ち込み吹っ飛ばす。

体勢を立て直しバルドは漆黒の炎の弾を周囲に展開し一斉に射出、トールスに当るかと思ったが彼の体が黒い色になりそのまま溶けて消えていき炎弾は回避される。姿の消したトールスを探る様に周囲を見渡すバルドの背後に黒い物体が形作り始める。それは一気に背後からバルドに近づきその首を掻き切ろうと剣を振るった。

バルド「無駄だ……」

しかし、その一撃はバルドに届かなかった。バルドは既に背後から近付いていたトールスに気付いておりその一撃を防いだ。

驚愕に目を見開く彼をバルドは闘気をぶつけて吹き飛ばした。体勢を立て直せずトールスは何度か地面を跳ね転がる。

トールス「くっ……影移動がばれるだと！？」

バルド「生憎と…俺に闇で挑むのは愚策だぜ?俺は……闇に染まった男だからな!!!」

バルドは魔力を爆発させ一気に距離を詰めてケルベロスを振り下ろす。トールスはそれを回避し雷電を振るう。それをバルドは体を逸らし避けるとバハムートを振う。トールスは回避できずに雷電でそれを受け止めるがあまりの重量で弾き飛ばされた。

バルド「これで…おわｒ――!!」

体勢が立て直せない状態のトールスに止めを刺すべくケルベロスを振り上げた瞬間……

――ドクンッ!!――

バルド「ぐっ……!?」

全身に強烈な激痛が奔った。その場に膝をついたバルド。その隙にトールスは距離を取る為に後退する。

ケルベロス［相棒っ!?］

バハムート［若！！如何したんですか！！？］

バルド（くっそ……前の傷が、治ってなかったのかよ！？）

モンスターの世界でフェイトを守る為に負った傷が治ったと思っていたのだがそれはまだ完治しておらずその傷が一気に開いた様だ。
それだけではない。最近の体の不調が今ので更に悪化した様でまともに体が動かない。バルドの様子が変わったのに警戒していたトールスだが彼の動きが止まったのを好機と判断した。

トールス「なんだか知らんが、この好機を逃す訳にはいかん……。
此処で英雄の一人を仕留める！！！」

雷電を構えて駆けだす。バルドは震える手でケルベロスを構えて立とうとするがその意に反して体は全く動いてくれなかった。

トールス「その命……貰ったっ！！」

そして、バルドの命を狩り取ろうと剣が振るわれたその時、

――ガギンッ！！！――

その剣は彼に届かなかった。そして、両者の間に立つ者が一人……。
金の髪が風に乗って舞う。

フェイト「バルドは……やらせない！！」

そう。フェイトが間一髪、両者の間に割り込んでトールスの剣を受け止めたのだ。フェイトはバルディッシュを振るい弾く。トールスは距離を取る為に後退し雷電を再び構えた。

フェイト「バルド！！大丈夫！？」

バルド「フェイト……。お前…何で此処に……？それに、ティアナは如何したんだ？」

フェイト「ユーノにバルドの場所を探してもらったんだ。ティアナは今、イノセントの拠点に行ってる」

答えつつチラリとバルドの方を見る。明らかに体力を消耗している。普段の彼からは想像も出来ない状態だ。今の彼では戦う事は厳しいと分かる。それなら…自分が彼を今度は守る番だ！！

フェイト「バルドは休んでて。私が戦う！！」

バルド「馬鹿言うな！！あいつの相手はお前には無理だ！！」

フェイト「私は……負けない！！！」

バルド「そんな根拠は何処にもねぇ！！いいから代われ！！」

フェイト「嫌だ！！私は、まだ……貴方の背中を守りきれてない！！だから……今度こそ守って見せる！！私は…貴方を、貴方を守る為に……戦う！！！」

フェイトの身を金の魔力が覆う。目の前いにいるのはエリダリアで戦った相手だ。ならば、今度こそ勝つ！！金の女神と影の暗殺者の熾烈な戦いが此処に切って落とされた。

## 第四十八話（後書き）

新たな使徒登場、今回登場した使徒『サクリス』はキャロと同じように召喚魔法が使えますがキャロやルーテシアの様な召喚魔法とは似て非なるものです。
そして、遂にバルドの体に異常が発生！！

フェイト「私は負けるわけにはいかない！！」

と、この様にフェイトさんは意気込んでいますが…さてどうなる事やら……？

次回こそ、次回こそは早めに更新したい！！

シリウス「頑張れ～」↑露骨な棒読み

そこ！！もう少しやる気の出る声を出してほしいぞ！？
え～読者の皆様、待たせてしまいホントに申し訳ないです…ｏｒｚ
次回こそは、時間が空ければ早く投稿できるはず！？それでは、今回はこれにて！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第四十九話（前書き）

四十九話更新！！
や、やっと更新できた……。やっと一週間以内に更新できましたよ！！

シリウス「その分、文章が穴だらけになってるかもね～」

そこ！！人が感動してる所に水を差すな！！
さて戦いも中盤に差し掛かりました！！今回はミッド戦です。では、本編をどうぞ！！

# 第四十九話

街で幾つもの爆発が起きる。その爆発の中から飛び出すのはイノセント?型。
目の前にいる敵を倒す為に銃撃する。しかし、それは当る事はない。
白い翼が羽ばたく。
その者は持っている銃を変形させライフルにして構え、照準を合わせる。

クラウド「ターゲット……ロックオン!……破壊する」

ライフル状に変化した干将・莫邪を構えるクラウドが引き金を引くと銃口から極太のビームが放たれた。その閃光は?型の群れを易々と呑み込む。止まる事を知らないそのビームは地上にいる?型をも巻き込み大爆発を起こした。

クラウド「ターゲットの破壊を確認。次の標的を選定する……」

標的を見つけるとクラウドは距離を詰めてビームサーベルを抜き、高速で敵の集団の中を駆け抜ける。
接近するクラウドを叩き落とそうと?型が巨大な腕を振るうがそれ

は空を切る。
クラウドは相手の懐に潜り込んでおりそこから真上に飛翔、首を斬り胴体と頭部を切り離す。
普通の敵ならこれで戦闘不能だろう。だが、?型は斬り口から傷を瞬時に再生し新たな頭部を作り出す。そして、自身の頭を斬り落とした相手を見上げた瞬間、巨大な閃光に今度は体ごと消し飛ばされた。

クラウド「残念だが、お前の再生能力は既に予測済みだ」

?型を沈めたのを確認したあとクラウドは周囲を確認する。そこに一際大きな力の反応を捉える。

クラウド「……あっちか」

その方向に向かってクラウドは白い翼を羽ばたかせて飛翔して行った。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

エリオ「はあっ!!」

アグリス「遅いっ！！」

エリオの放つ突きをアグリスはマン・ゴーシュに付いている盾で防ぎ軌道をずらし空いた胴に疾風の速度で蹴りを打ち込む。エリオは咄嗟に腕でそれをガードする。骨が軋む様な衝撃が伝わってきて耐えきれずに後方に吹っ飛ばされた。アグリスは吹っ飛ぶエリオに一気に距離を詰めてそこから踵落としをする。エリオは無理な体勢でそれをストラーダで受けて今度は地面に向かって吹っ飛ぶ。

今度は地面に激突する前に体勢を立て直して着地、直ぐにストラーダを構えて魔力を爆発させて弾丸の様に上空に向かって飛翔する。アグリスとの距離をゼロにして一気に突きを放つ。アグリスはそれを防御する。そこからエリオは相手に反撃の隙を与えまいと高速でストラーダを振るい続ける。そして、最後にフォトンランサーを自身の周囲に展開してそれを一斉に放った。回避する間もなくアグリスは諸に直撃し爆発で包まれた。

アグリス「なるほどな……。良い動きをする様になったじゃねえか小僧……」

立ち上る煙の中から無傷のアグリスが姿を現す。予想はしていたが今の攻撃が通じないのは流石は使徒と言ったところである。アグリスは魔力を爆発させてエリオに近づきマン・ゴーシュを打ち込む。それをエリオは可能ならストラーダで弾き、受け流し無理と思ったものは回避した。

エリオ「貴方達は何を目的として戦うんですか！？」

アグリス「答えると思ったか！！」

マン・ゴーシュの先に魔力を集めて突きを放つ。エリオはそれをストラーダで防御するがその瞬間、爆発が起きて吹き飛ばされた。

エリオ「うわあっ！？」

アグリス「まだ終わってねえぞ！！轟破烈風！！」

体勢の崩れたエリオにアグリスの魔力を纏った蹴りが放たれた。回避もままならず鳩尾にまともに入ってしまう。

エリオ「がはっ！？」

アグリス「おらっ！！！」

そのまま上空に蹴り上げられた。視界がグルグル回るのを何とか抑えて吹っ飛ばされた勢いを殺す。
そして、反撃とばかりにストラーダに魔力を送り、一気に突撃した。

エリオ「おおおおおおおおおおおっ！！！！」

アグリス「なにっ！？くっ！！」

エリオが体勢を早く立て直して突撃して来るのが予想外だったのか反応が遅れた。アグリスは両腕を盾の様にして前に構えて防御の姿勢を取った。そこにエリオの弾丸の様な突撃がぶつかり地面に向かって落ちる。

二人が地面に激突して衝撃で砂が舞い上がる。煙の中ではアグリスはエリオの突撃を真正面から受け止めその足を地にしっかりと立てていた。

アグリス「小僧……やるじゃねえか。だがな…気合と根性がまだ足りねえ！！！」

エリオ「くっ！！」

ストラーダを弾きそこから更にマン・ゴーシュをエリオの顔に向かって打ち込む。咄嗟に首を動かして避けるが頬を掠める。そして、そこに蹴りを打ち込んで弾き飛ばす。なんとか体勢を整えて地面に同じく降り立つ。

アグリス「もっとだ…もっとこい！！俺を楽しませろ、小僧！！」

戦闘狂の如く悦に浸るアグリス。その身から発せられる魔力は膨らむ一方でエリオは気を引き締める。

その時だ、少し離れた上空で爆発が起きる。爆炎の中から傷付いたキャロとフリードの姿が見えた。

アグリス「どうやら…向こうの方が早く片がつきそうだな……？」

エリオ「キャロ！！」

失念していた。彼女は後方支援に長けてはいるが前線で戦うには向いていない。
それなのに自分はアグリスとの戦いに集中していた所為で彼女の事を気付くのが遅れてしまった。
キャロを助けに行こうとするエリオ。だが、その前にアグリスが回り込んで立ち塞がる。

アグリス「お前の相手は俺だろうが！！」

エリオ「くっ、退けえぇっ！！」

両者の一撃がぶつかり合い爆発が起きる。その衝撃でエリオは弾き飛ばされる。

アグリス「サクリスは女子供だろうと邪魔する敵は容赦はしない。あの小娘は…死んだな」

エリオ「キャロオォォォォ！！！！」

その言葉にプツンとエリオの中で何かが切れた。目の前の敵を早く倒して彼女を守る！！！
邪魔をする敵は倒す！！エリオは溢れんばかりの魔力を開放し一瞬でアグリスとの距離を詰める。
ストラーダを怒り任せに振るう。強烈な一撃でアグリスの体が少しだけ下がる。
更にエリオはソニックムーヴでアグリスの周囲を高速で飛び交い通り抜けざまに斬り付ける。

エリオ「あああああっ！！！紫電一閃！！」

アグリス「ぐうっ！？」

拳に魔力を込めてそれをアグリスの腹に叩き込んだ。

アグリス「くくくっ…ははははっ！！そうだ！！もっと怒れ、憎め、吼えろ！！それでこそ倒す価値があるというものだ！！」

エリオ「なっ！！？」

腹に強烈な一撃を入れたにも拘らず目の前の男は平然と笑う。それにエリオは驚愕し先程までの勢いを失い後退する。アグリスの身を魔力が纏う。

アグリス「ほら、来いよ。早くしねえとあの小娘はズタズタにされるぞ？」

エリオ「くっ、うおおおおおおおぉぉぉぉぉ！！！！！」

エリオは大切な者を守る為に再び突撃して行った。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

カオス「落ちろ！！」

背中にある筒状のものからファイヤーフライ誘導ミサイルを一斉に放つ。
ヴィータは可能なのは回避して当りそうなものをシュワルベフリーゲンで破壊する。

その彼女にガイアが高エネルギービームライフルで攻撃して牽制しアビスが接近しビームランスで刺突を繰り出す。ヴィータはその刺突をラウンドシールドで防御し直ぐにアイゼンで反撃、思いっきり振り回してアビスに殴りかかる。
アビスはそれをシールドで防御するが衝撃で軽く後方に飛ばされる。
そこにヴィータがシュワルベフリーゲンを放ち追い打ちをかけるが

それはカオスとガイアの援護で破壊される。

アビス「しつこいんだよ!!さっさと落ちやがれ!!」

ガイア「アビス……落ち着いて」

カオス「すばしっこい野郎だな……」

ヴィータ「あたしはそう簡単にはやられねえぜ?」

アイゼンを肩に担いで強気の姿勢で答える。

カオス「しょうがねえ、あれを使うぞ」

アビス「了解!!」

ガイア「分かった……」

カオスの問いかけにアビスとガイアも頷いた。何か来ると分かったヴィータは油断無くアイゼンを構えて次の行動に警戒すると三人の身に纏っていた『鎧装(フレーム)』が変形した。

ヴィータ「なっ!?変形しやがった!?」

カオス「行くぞお前等!!」

アビスは水中に潜り、ガイアが水上を滑る様に動き、カオスが上空を飛んで来た。

カオス「何時までも調子に乗れると思うなよ！！くらえ！！」

ヴィータ「ちっ！！」

カオスのビームとミサイルが一斉に飛んでくる。それを回避したがその先にガイアが回り込んで突撃しながらビームを撃って来る。それをラウンドシールドで防御する。

ガイア「でえぇぇぇぇぇいっ！！！」

ヴィータ「ぐっ！？」

ガイアがヴィータに向かって突撃しグリフォン2ビームブレイドで斬りかかって来た。その衝撃にヴィータが少しだけ後退する。その彼女の背後の水面が盛り上がりそこからアビスが姿を現した。

アビス「落ちろ！！」

ヴィータ「ぐあああっ！？」

背後から連装砲を撃ってきてそれはヴィータの背中に直撃する。よろめいた彼女をガイアが蹴りを放ちそれをくらったヴィータは海面に叩きつけられた。

アビス「やったか？」

元の姿に戻り水面を見つめる三人。すると、水面が盛り上がり、割れた。そして海中からヴィータが飛び出してきた。

ヴィータ「くらえっ！！ギガントハンマァァァァ！！！」

ガイア「二人共危ない！！」

カオスとアビスの前にガイアが立ちシールドを構えたヴィータの強烈な一撃がその盾にぶつかりガイアのシールドが粉砕されそのまま吹っ飛ばされた。海に落ちる寸前に変形して水上を滑る事で沈むのだけは堪える事が出来た。

カオス「ガイア！！大丈夫か！？」

ガイア「大丈夫……。けど、シールドが壊された……」

アビス「あいつ、あれをくらっても動けるなんて何て頑丈なんだよ！？」

ヴィータ「へへっ……あたしをそこら辺の魔導師と一緒にすんじゃねぇよ……」

強がって言うが実のところ背中から激痛が伝わってくる。多分、見えないが大きな怪我を負っているかもしれない。でも、此処で引き下がる訳にはいかない。なんとしてもあれを破壊してこの戦いを有利に進めなくてはいけない。アイゼンを再び構えてヴィータは三人に肉薄して行った。

――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――

ミッド近海で本局から出動したXV級大型次元航行艦の艦隊が隊列を組んで整然と並んでいた。

その中にある黒で塗装された戦艦『クラウディア』にクロノは搭乗しており海の向こうを睨んでいる。

魔導師「複数の大型熱源体が此方に接近中。あと二分で肉眼で確認できる距離まで接近します！！」

クロノ「いいか、此処から先は絶対に通す訳にはいかない。敵を此処で食い止めるぞ！！」

一同「了解！！」

全員が答えると同時に青い空に幾つもの黒い点を目で捉えた。よく目を凝らして見ればそれは『神の意志（プロヴィデンス）』の使用する航空機『グレイヴ』と新たにもう一つ別の機影を確認した。

魔導師「敵艦隊を確認！！敵航空機『グレイヴ』とこれは……！？敵、戦艦を確認！！その大きさ我等の艦隊と同サイズです！！！」

クロノ「なんだと！？」

その報告にクロノは驚愕した。此方の次期主力艦と同サイズの戦艦を敵も持っているなど予想だにしていなかった。しかも、その機影は此方のＸＶ級大型次元航行艦に似ていた。しかし、その装甲には此方には搭載されていない質量兵器をも搭載されている可能性がある。これは、予想以上に激しい戦いになるとクロノは覚悟した。

一方、敵艦隊の方でも管理局の艦隊の姿を確認していた。

兵士「管理局の戦艦を確認！！」

司令官「総員戦闘配備！！奴らに俺達の力を見せるぞ！！」

兵士一同「おおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！」

艦隊から航空機の編隊が前線に出る。その下のハッチが開きイノセント?型が次々に降下し空中で翅を広げて高度を上げて航空機と並ぶ。

クロノ「総員戦闘開始だ!!敵を近づけさせるな!!撃てぇぇぇぇ!!!!!」

提督1「撃って撃って撃ちまくれ!!」

艦隊が一斉に砲撃を開始する。巨大な砲撃が次々にイノセント?型を消し飛ばす。航空機は自身の周囲に薄い緑色の膜を展開しその砲撃の軌道を逸らし攻撃をかわしていた。航空機も対空ミサイルを一斉に発射し管理局の艦隊を攻撃し始める。それを防御フィールドで防ぎ砲撃を撃ち続ける。

司令官「バラウールを起動しろ!!奴等を吹き飛ばせ!!」

兵士「バラウール起動!!ターゲット、敵艦隊!!」

航空機の背にあるハッチが開きそこから大型の砲台が出現する。砲身にエネルギーが集まり出し赤く光り出す。

司令官「狙いを絞れ!!よし、撃てぇぇぇぇ!!!」

合図と同時に砲台から音速を超えた巨大な砲撃、『超大型電磁砲（レールガン）』が撃ち出された。

魔導師「強力なエネルギー反応を確認！！」

クロノ「全軍、防御フィールドを前面に集中展開！！」

艦隊の正面に防御フィールドが展開される。それと同時にそれに砲撃が直撃し大爆発を起こす。艦内が衝撃で激しく揺れる。

クロノ「くっ！被害状況は！？」

魔導師１「防御フィールド、出力六十パーセントに低下！！更に、第十一番艦が防御フィールドを貫通され被弾！！第二装甲まで貫通しました！！」

魔導師２「敵砲撃のデータ解析完了！！これは……『超電磁砲（レールガン）』です！！」

クロノ「『超電磁砲（レールガン）』！？」

魔導師１「敵航空機、再度エネルギー充填を開始しています。もう一度撃ってきます！！」

クロノ「撃たせるな！！砲撃を再開！！あの巨大な砲台を集中攻撃

だ！！！」

艦隊が砲撃を再開。砲台を集中的に攻撃する。しかし、向こうもそれを分かっているので機体の姿勢を傾けて砲撃を回避しミサイルで牽制する。更にイノセント?型も距離を詰めてきており銃撃を始める。艦隊は対空砲撃を開始。イノセントを近づけさせない様にする。その間に航空機の『バラウール』のエネルギーが充填を完了した。

魔導師１「敵砲撃、来ます！！」

クロノ「回避っ！！！」

機体の姿勢を傾け回避行動を取る。そこに『バラウール』が発射される。それはまさに紙一重で艦隊の脇を擦り抜けて後方の空に飛んで行った。

司令官「よし、敵の注意を引き付けつつ後退！！艦隊を近づけてありったけの弾を撃ちこめ！！第一艦隊、突撃！！！」

兵士一同「イエス、サー！！！」

航空機が回避行動を取りつつ後方に下がり代わりに戦艦が前線に出て砲撃を開始する。
管理局の艦隊も防御フィールドを展開しつつ砲撃、激しい艦隊戦が始まった。

管理局側の艦隊が砲撃する。それを回避しつつ砲撃しながら距離を詰めてくる。その中で被弾して撃沈する戦艦も出るが突撃を止める事はない。防御フィールドを展開しつつそれを迎え撃つ管理局の艦隊。

魔導師１「第十二番艦、被弾！！損傷率六十パーセント！！航行不能につき海上に着水します！！」

クラウディアの隣いた戦艦が黒煙を上げて高度を落としていき海面に着水した。その傷付いた戦艦に多数のイノセント？型が集まり出し襲いかかっていった。着水した戦艦も応戦はしているが動かなくなった戦艦など唯の的でしかない。このままでは撃沈するのも時間の問題である。

魔導師２「第四、八、九番艦、損傷率二十パーセントを突破！！」

クロノ「敵艦隊の状況は！？」

魔導師１「敵艦隊、数を半数にまで減少。しかし、イノセントや後方の航空機からの電磁砲の援護射撃で統制が上手く取れません！！」

状況は悪い方に傾いている。更にそれを悪化させる報告が入った。

魔導師１「敵艦隊の後ろより更に大型のエネルギー反応！！空間を

割って何か出てきます！！」

クロノ「なんだと！？」

プロヴィデンスの艦隊の後方で空間が歪む。そして、その中から巨大な、そう、クロノ達の戦艦よりもずっと大きな戦艦が出現した。それはかなり離れている筈なのに此方に近づいてきている戦艦と同サイズに見えた。

魔導師１「敵超大型艦を確認……！！その大きさ、８００！？」

クロノ「ばかなっ！？そんな大きな戦艦が！？」

八百メートル級の超大型戦艦が動きだす。その砲台がクロノ達の艦隊をロックオンする。光が集束して巨大な砲撃が放たれる。戦艦をも飲み込もうとする巨大な砲撃が迫る。慌てて回避行動を取らせる。ギリギリでクロノの艦は回避を成功するが他の幾つかの戦艦が回避しきれずに掠めた様で黒煙を上げて海面に落ちていった。そして、更にその回避したクロノ達の戦艦に砲撃が放たれた。

クロノ「回避だ！！」

魔導師１「無理です！！間に合いません！！」

巨大な光が目の前に迫って来る。もはやこれまでかと覚悟を決めた。

そして、クロノ達艦隊を巨大な光が直撃し大爆発を起こした。

兵士「敵艦隊に直撃！！」

司令官「よし、これより我等は敵の首都に向けて攻撃を開始する！！『ブロンガ』も付いて来い！！」

全ての敵を排除したと確信し艦隊が動き始める。だが、その時、レーダーに熱源反応を捉えた。

兵士「司令！！熱源エネルギーを確認！！これは……管理局の戦艦のです！！」

司令官「なんだと！？あの砲撃を耐えたというのか！？」

兵士「司令！！管理局の艦隊の前に空間歪曲を確認！！何か、来ます！！」

司令官「まずい……！！全軍、回避だ急げ！！」

その号令と同時に爆炎の中から無数の巨大な砲撃が飛んで来た。回避行動も間に合わず幾つもの戦艦が直撃し轟沈した。

クロノ達は一向に衝撃が来ないのに少しだけ目を開けると……

???『面白そうな状況だな。その喧嘩、俺達も買った!!』

クロノ達の艦隊の前に見た事もない戦艦の軍勢が空間を割って出現してきた。
その数、ざっと二十隻以上!!

???『こんにちは、管理局の諸君』

クロノ「お、おまえは何者だ!?」

???『おやおや、前回ミッドの時に助けてあげたじゃないか?まあいっか……。改めて答えよう。我々は、機装国家グランディオン!!そして、私はそこの王、ウルフだ。以後お見知りおきを、クロノ・ハラオウン提督?』

クロノ「なっ!?なぜ僕の名を知っている!?」

ウルフ『おや?君の妹さんから聞いていないのかい?』

そう言われて思い出した。前にフェイトが近々、ロイド達のいる世界の強力な助っ人が来てくれると……。

まさか、彼等の事か?

ウルフ『さあ、パーティの始まりだ!!総員、今日が初陣だ!!派

手に俺達の存在を見せつけるぞ！！』

一同『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！』

そして、クロノ達戦艦の背後の空間が大きく割れる。そして、そこから姿を現したのは巨大な、途轍もなく巨大な白い怪物だった。

クロノ「でかいっ！？」

ウルフ『ホワイトホエール．Ｊｒ、お前の真価、奴らに見せつけろ！！！』

ホワイトホエール．Ｊｒ［オオオオオオオオオオォォォォォォォォォ！！！！］

空間を裂いて現れた白き巨人が咆哮を上げ敵艦隊に向けて進撃を開始した。

――――――――――――――――――――――――――――――

サクリス「如何した、竜召喚士よ？貴様の力はこの程度か？」

キャロ目掛けて無数の骸骨が魔力矢を放つ。回避しきれないものをプロテクションで防ぐ。
先程から防戦一方でまともに攻撃が出来ない状況だ。相手の攻撃を何度か掠めていて徐々に体力が減って来ている。

キャロ「フリード、ブラストレイ！！」

フリードが火炎を吐き攻撃する。サクリスの前に隊列を組んでいた骸骨達がそれに焼かれて炭となって消える。しかし、サクリス目掛けて放った火炎はその骸骨達が壁となっていた所為で届かなかった。
寧ろ、攻撃で隙の出来たフリードに矢が放たれそれがフリードの胴体に命中した。

フリード「キュク～～！？」

キャロ「フリード！！」

サクリス「ふっ、小娘よ。見た所その竜はもうまともに動けない位に疲弊しているぞ？これ以上酷使するのは酷いのではないか？」

確かにフリードは口で息をしている。その呼吸は荒くなっていてまともに動く事も難しいだろう。

キャロ（フリードはもう限界に近い……。でも……）

ここであれを出すべきなのだろうか？真竜『ボルテール』……。ＪＳ事件でルーテシアを破った最後の切り札。絶対なる力を持った最強の竜。だが、向こうの奥の手が見えない。恐らくだが、『ボルテール』と同等かそれ以上の危険な存在だと考えた。

キャロ（だめ……！！まだ、ボルテールは出せない！！）

此処でボルテールで反撃しても向こうは此方を疲弊させてから切り札を出してくるだろう。そうなればいくらボルテールとて倒されてしまう。

サクリス「ふむ、考え事をするのは構わないが。早く決断せねば……あっちの小僧が死ぬぞ？」

サクリスが視線を向けた方向を見ると、爆発が起きて爆炎の中からエリオが吹き飛ばされたのが見えた。そのエリオに向かってアグリスが猛スピードで接近し回し蹴り、鋭い一撃がエリオの鳩尾に入って苦痛の表情を見せる。そして、その衝撃でエリオが向こう側にあるビルにノーバウンドで吹っ飛ばされて激突。大量の粉塵が宙を舞った。

その粉塵の中から頭を切ったのか額から血を流すエリオの姿が現れた。すでに彼も体力的に危険な位置まで来ている。それでも、彼はストラーダを構えるのだった。

キャロ「エリオくん！！」

サクリス「如何する小娘？その竜を使うか？それとも切り札を使うか？まあ、俺はどっちでも良いがな」

キャロ「フリード……」

キャロは突然フリードを普段の小さい姿に戻した。そして、自分で飛行魔法を使って宙に浮く。フリードはキャロの突然の行動に戸惑いの声を上げる。そのフリードの頭を優しく撫でる。

キャロ「フリードは此処で少しだけ休んで。私が行くから……」

フリード「きゅくるっ！？」

サクリス「ほう、小娘自ら攻めに来るのか？……くくく、ははははっ！！面白い、その選択を選ぶとはな！！ならばいいだろう……」

サクリスは不意に周囲に骸骨達を消しキャロと同じ高さにまで浮かび上がる。そして、自身の杖をキャロに向けた。

サクリス「貴様に今からチャンスを与える。今から三分だけ私は一切召喚はしない。その間に私に一撃を入れたなら小娘、貴様の勝ちだ。私はこの場から去ろう。だが、もし私が勝ったらその時は、死ぬと思え……」

キャロはシューティングレイを放ち牽制する。魔力弾をサクリスは自身のデバイスで弾き飛ばし骨の剣を飛ばしてくる。それを体を捻って回避して距離を詰めてアルケミックチェーンを飛ばして拘束しようとしたが戻ってきた剣の幾つかがそれを代わりに受ける。そして、残っていた二本の剣がキャロの背に刺さる。

キャロ「ああっ！！？」

サクリス「あと二分……」

背中から奔る激痛を堪えてキャロは接近を試みる。別にやけくそになった訳ではない。キャロは前にコレットに教わった技を相手に打ち込むことを考えていた。その為には向こうの懐に潜る必要がある。少しのダメージは覚悟の上だ。サクリスは無数の魔力弾を展開し次々に放つ。

サクリス「あと一分だ……」

回避し続けるキャロにサクリスは小さく告げる。もう時間がない。キャロは無数の弾幕を上手く身を捩じってかわして距離を詰める。

あと、三十秒……。

サクリスまであと少し、しかし、サクリスの前に魔力弾が一発だけ

展開されそれが放たれる。かわしきれずにキャロに直撃、爆発が起きる。
サクリスは勝ったと思い、ニヤッと笑った。
しかし……

キャロ「うあああああああぁぁぁぁっ！！！」

サクリス「なにっ！？」

キャロが煙を突き破って飛び出してきた。驚愕で目を見開くサクリス。

残り十秒……。

一撃を与えるだけの時間はある。キャロは右手に自身の残っている魔力を集める。サクリスが一振りの骨の剣を前に出して横薙ぎに振るう。それを身を屈めて紙一重で避ける。そのまま、体重を乗せて下から上に向けて相手の腹に全力の一撃を打ち込んだ。

キャロ「掌底破！！！」

サクリス「ごふっ！？」

見事に相手の腹部にそれはめり込む形で決まった。

残り時間……僅か、二秒……。

キャロ「はあ、はあ……私の、勝ち……です」

息をするのも疲れるくらいに彼女は疲弊していた。それでも、勝ったはずだ。そう思っていたが……。

サクリス「く、くくくく……残念だが……小娘、貴様の負けだ」

キャロ「え……」

自分の打ち込んだ掌底の先を見る。そこには……腹部のギリギリ前でキャロの掌底を受け止めるサクリスのデバイスがあった。

サクリス「ふふふ、まさか貴様みたいなのが格闘術を持っているとは予想だにしていなかった。だが、お前、当てる時に一瞬だけ躊躇っただろ？それのお陰で私はデバイスでの防御がギリギリ間に合った」

キャロ「そ、そん…な……」

サクリス「貴様の敗因は……貴様自身の躊躇いだ！！！」

事実、彼女は打つ瞬間に躊躇った。なぜなら、コレットに教わった

この技は非殺傷などが設定できない。故に当たり所が悪ければ人を殺めることになってしまう。まだ幼い彼女にはその覚悟もなにもない。結果それが一撃を当てる瞬間に出てしまったのだ。
キャロの手を弾き、後方に後退する。キャロは敵との距離を詰めたかったが体が限界に近く、全身が悲鳴を上げていて動けなかった。
その間にサクリスは魔法陣を展開する。

サクリス「小娘……。冥土の土産だ、お前に私のエースを見せてやろう。出でよ、冥界の淵より甦りし怒れる猛将よ……」

サクリスの背後に不気味で巨大な黒の魔法陣が展開された。そして、その中から巨大な何かが出てくる。全長12メートル程もある言葉では形容しがたい不気味な体、その頭には巨大な二本の角、そして、その体を形成するのは沢山の骸骨の山……。その両腕すら何かの生物の頭骨と鋭い爪を持ったものが合わさった様な形をしていた。

サクリス「憤怒の戦将、ダイダロス……」

ダイダロス［……］

ダイダロスの目が光り、キャロを捉える。閉じていた両手にある髑髏がゆっくりと開く。それと同時に地中より無数のスケルトン達が湧き上がる。そのスケルトンの目が同じく輝くとキャロに向かって跳躍、次々とスケルトンがキャロに向かって攻撃を仕掛ける。そして、キャロに群がりその周囲を固めて球体の様になる。

脱出を試みようともがくキャロだが一体一体がしっかりと体を固定しており全く動かない。
その間にダイダロスはゆっくりと近づき手を大きく開きその球体をゆっくりと掴み徐々に力を込める。

サクリス「破壊せよ……」

ダイダロス「……っ！！！」

その命令と共にダイダロスはキャロの包み込んでいる球体を全力で握りつぶした。

キャロ「きゃあああああああああっ！！！」

取り囲んでいたスケルトンが一斉に砕けて鋭くなった骨の欠片が全方向から彼女の体に深々と突き刺さった。口の中で鉄の味がした。
そこに更に闇魔力の電撃が流れ込み全身を駆け廻った。あまりにも耐えがたい激痛に意識が半分飛んだ。

ダイダロスは握っていた手を離すとバラバラになった骨が落ちていきその中に混じってズタズタのキャロが地上に落ちていった。

サクリス「ダイダロス、止めを刺せ……」

ダイダロス「……」

ダイダロスの肩から二つの骨の剣が出現する。

サクリス「さようならだ、竜の召喚士よ……」

それは同時に放たれた。猛スピードで意識のなくなりかけているキャロに飛ぶ。

フリード「きゅくる～～！！！」

キャロ（フリ……ド……エリ…オく……ん、ごめん…ね……）

そして、その剣はキャロに……

――グサッ！！――

キャロ「……え？」

刺さらなかった。何故なら、彼女は今、誰かの腕の中にいる。その者は、白い機械質の翼を羽ばたかせてその剣をその背で受けている男、クラウドが彼女を庇ったからだ。

キャロ「クラ…ウ…ドさん……？」

クラウド「無事か？ギリギリ間に合った様だな……」

クラウドはファンネルを周囲に展開、それは敵目掛けて飛んでいきダイダロスが放って来た剣を体当たりする事で相殺している。

クラウド「損傷率六十パーセントオーバー……戦闘続行……可能…」

サクリス「噂に聞く『白き破壊の翼』か…。だが、その怪我で私を倒す事は出来んぞ」

キャロ「クラ……ウドさ……ん。傷の治療を……！！」

クラウド「任務継続には問題はない。しかし、キャロに少しだけ頼みがある。酷い怪我をしているのに悪いが……」

キャロ「大丈……夫で…す。何ですか？」

クラウド「今から砲撃を一度だけ放つ。その時、銃の反動を抑える為に手を貸してくれ。左腕の感覚神経をやられてしまってな…掴んでいる感触がない…」

キャロ「分かりました……」

クラウドは干将・莫邪をバスターモードに切り替える。そして、そ

れを合わせる。キャロはクラウドの左手ごと銃をしっかりと掴む。銃口から光が溢れだす。

クラウド「エネルギー充填開始……１０…５０…１００……」

サクリス「ダイダロス……。あの二人を殺せ……」

ダイダロス［……っ！！！］

ダイダロスが無数の骨の刃を出現させてそれを二人に向かって降り注いだ。ファンネルが幾つも破壊するが凄まじい弾幕で次々に破壊される。クラウドは避ける素振りもせず銃を構えたままそれを受ける。

彼の『鎧装（フレーム）』が徐々に破壊されていく。それでも、彼は動かない。

キャロ「クラウドさん……！！」

クラウド「キャロ…。先に言っておく、実はバーニアもやられていてな……これを撃てば俺達はその衝撃でそのまま地面に落ちる。しっかり掴まっておけ……！！」

キャロ「っ！！！……はい！！クラウドさん……お願いします！！！」

クラウド「任務了解……！！１２０……１５０…１８０…２００パーセント！！」

膨大な光が銃口から溢れだす。既にクラウドはボロボロだ。それでも彼は引き金に指を当てる。

クラウド「エネルギー充填２００パーセント。ターゲット、照準（ロックオン）…！！破壊する……！！」

そして、引き金が引かれた。巨大な閃光が銃から発射される。そして、その反動でクラウドとキャロは真っ直ぐ地面に落ちる。凄まじい反動がキャロの細い腕を圧迫している。それでも彼女は離さない。既に体力の限界を迎えているがそれでも、この手を離さない！！その強い意志だけでその反動に耐えているのだった。

巨大な極太のビームがぶれる事なくサクリスとダイダロス目掛けて飛んでくる。その大きさを表現するなら二百メートル級の戦艦がそのまま体当たりしてきているかのようだ。それほど巨大な砲撃が全てを破壊せんと迫って来ている。

サクリス「なにっ！？くっ…！！ダイダロス、防げ！！」

サクリスはダイダロスの背後に隠れてそう命令する。ダイダロスは前方に数枚の分厚い骨の盾を召喚し自身も両腕をクロスして防御の構えをする。分厚い盾が一枚、二枚とあっさりと破壊される。全ての盾が消し飛びクラウドの砲撃はその防御ごとダイダロスを呑み込み天に向かって伸びていく。

凄まじいエネルギーがダイダロスをバラバラにしていく。耐えきれ

なくなったダイダロスは光の奔流の中で欠片すら残さずに消滅した。
そして、クラウドの砲撃は雲を突き破り天高く飛んだ所で大爆発を起こす。その爆風は大気を揺るがし周辺にあった雲を一遍も残さずに吹き飛ばした。
クラウドとその腕の中にいるキャロもそれと同時に地面に激しく激突、大量の砂塵が大気に舞った。

クラウドの砲撃を受けたサクリスはというと……

サクリス「くっ……。まさか、ダイダロスがあんな傷付いた者如きに…ぐっ……！！」

砲撃をダイダロスを盾にし、自身も防御魔法を展開した事で直撃を免れたがそれでも防御魔法を貫いて砲撃が飛んで来てサクリスはその光に肩から先の左腕を持っていかれていたのだった。

サクリス「これ以上の戦闘は…無理か…。くっ、命拾いしたな、小娘……。だが、次は確実に私が殺す……！！」

そう言い残し、サクリスは仲間達より一足先に転移魔法を展開しその場から消える。

一方、地面に落ちたキャロは凄まじい衝撃を感じてはいたもののそれ程の激痛が来なかった。ゆっくりと目を開けると彼女はクラウド

の腕の中にいた。そして、クラウドは……

クラウド「敵勢力の……撤退を確認……損傷率九十パーセントオーバー…戦闘継続…限界」

『鎧装（フレーム）』が完膚なきまでに粉砕されてその周辺にファンネルの残骸と思われる白い破片が散らばっている。クラウドはキャロを地面の激突の衝撃から守る為にぶつかる直前に彼女をしっかりと包み込んで残り僅かのファンネルが二人を衝撃から守る様に展開して落ちたのだ。
彼を中心としてまるで隕石が落ちたかのように大きなクレータが出来ていて自分達はその一番深い中央に倒れていた。

キャロ「……っ！！！クラウドさん！？」

クラウド「キャロか……。すまん…これ以上は戦闘は無理だ……。少しばかり休む……」

キャロの無事を確認したのを最後にクラウドは意識を失った。

キャロ「クラウドさん！！クラウドさん！！目を開けてください！！死んじゃ駄目です！！！」

キャロが呼びかけてもクラウドは目を覚まさない。キャロは残り少

ない魔力を使って治癒魔法をクラウドにかける。だが、申し訳程度の魔法だ。傷が治る筈もなくあまり意味を成さなかった。
その時、上空からイノセント?型の軍勢が二人を確認。まだ動けているキャロを見つけて標的として狙いを定めた。フリードがキャロの前に飛んで来てその小さな体で庇う様に飛ぶ。そして、イノセント?型が一斉に攻撃を仕掛けようとしたその時、横から無数のビーム攻撃が?型達を貫き破壊した。

ティファ「ターゲット、マルチロック……フルバースト!!」

ティファが駆けつけて射撃武器の一斉砲火で上空にいた敵を一掃し安全を確保した。危険がないかを確認したあとクラウドとキャロの所に降り立つ。

ティファ「キャロ!!無事……っ!?クラウド……!?」

キャロ「ティファさん!!クラウドさんを急いで…安全な所に……!!」

ティファ「……了解。これより、戦線を離脱します……負傷者、クラウド、キャロを確認。両者ともに傷が深いのを確認…ドラグーンを周囲に展開し敵を迎撃しつつ撤退します……」

直ぐにティファは戦闘モードに切り替わり分析をしながらクラウドとキャロを抱える。そして、ドラグーンを周囲に展開し敵を警戒しながらその場から飛び立ち撤退した。

巨大な光が天に昇っていくのを離れた所でエリオとアグリスは見えた。
そして、閃光が天高く昇っていったあと大爆発を起こして消えた。

アグリス「サクリスの野郎……やられたのか？」

アグリスが一人で呟く。エリオも強大な魔力反応が消えたのに気付いた。
つまり、キャロが勝てたのだろうか？と、未だ安否を確認できない彼女の事を心配する。
そこに、通信が入って来た。

ティファ『キャロとクラウドの負傷を確認しました。これより、戦線を離脱。各員は空いた場所の援護をお願いします』

エリオ「キャロとクラウドさんが……！？」

先程の砲撃はクラウドのものだったのかと理解した。そして、キャ

ロを助けたクラウドも大怪我を負っている事が分かり驚く。

アグリス「はっ、『白き破壊の翼』にやられたのか。情けねえな…。まあいい。俺達はもっと戦いを楽しもうぜ？」

ロイド「悪いけど、そんな時間は与えねえ！！獅子戦吼！！」

アグリス「なにっ！？ぐおおっ！？」

一瞬でロイドが現れたと同時に獅子の形をした闘気をアグリスに当てて吹っ飛ばした。
体勢が上手く整う前に吹き飛ばされたアグリスは近くのビルに激突した。

エリオ「ロイドさん！！」

ロイド「すまねえエリオ。周囲のイノセントを倒すのに時間が掛かっちまった」

アグリス「ほお、噂の『赤き剣聖』も現れたか……これは、楽しくなりそうだな……」

ロイドの出現にアグリスは不敵に笑みを作り魔力を更に上げる。

アグリス「剣聖！！貴様の力、俺に見せて見ろ！！！」

ロイド「あいつが前にエリオが戦った使徒なのか？」

エリオ「はい、第八の使徒アグリス。ロイドさん気をつけてください。あの人は自分の体を硬化させて此方の攻撃を防いできます！！」

ロイド「分かった。それじゃ、エリオ…。行くぜ！！！」

エリオ「はいっ！！」

二人は同時に地を蹴りアグリスに向かって突撃を開始した。

## 第四十九話（後書き）

キャロとクラウドが負傷して戦線離脱してしまった……。そして、ボルテール…。
出したかったけどその戦闘能力がどれくらいか分からなかったので出番カットという始末……全て私の実力不足です、はい！！

ガルド「大丈夫なのか二人は？」

シリウス「あれ？そもそも俺達ってチート仕様じゃなかったの？」

チートはチートですがチート≠最強と作者は思っているので戦闘能力は確かにチートですが負傷もしますよ。という訳でクラウドは戦闘不能になりました。まあ、敵も大怪我負わせましたが……。次回は、他のミッドで戦う人たちの戦闘も決着をつけたいなと思います。上手くいくか分からないけど……ｏｒｚ

これを読んでくださる読者の皆様、これからも精進しますので宜しくお願いします！！ご意見やご感想お待ちしてます。多分、作者はテンション上がる可能性があります。次回も宜しくお願いします！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第五十話（前書き）

五十話更新！！

何時の間にか五十話までいったのか！？初めて書いたあの日を振り返る今日この頃……。

シリウス「最初のころと全く文章能力変化ないね～」

ガルド「むしろ酷くなっていると思うぞ？」

そこ、それ以上言うな！！さり気無く気にしている所だぞ！？

さて、今回は、ミッドにいるなのは達が主体です。では、本編をどうぞ！！

# 第五十話

～管理局本部内部～

猛スピードで交差する二つの影、一つは金の閃光となって縦横無尽に飛び交い、もう一つはその閃光に真っ向からぶつかっている。若き執務官、フェイト・T・ハラオウンとプロヴィデンスの使徒、トールスだ。

トールス「ピアシングナイフ！！」

フェイト「フォトンランサー、ファイヤー！！」

二人の射撃魔法がぶつかり合い互いを相殺する。魔力弾のぶつけ合いではほぼ互角といったところだ、

しかし……

トールス「旋風脚！！」

フェイト「くっ！！」

疾風の如く放たれる蹴りを体を逸らす事で避ける。そこから体を回転させて斬り払いを繰り出すがそれは後方にバク転される事で避けられてしまった。着地と同時にトールスがデバイスをボウガンに切り替えて砲撃を放つ。それを横に飛び退く事で回避する。砲撃は壁を破壊して向こうの部屋を貫通し三つ目の部屋までの壁を破壊した。トールスはその壊した壁から部屋を出る。

フェイトはバルドを此処に残して行くべきか一瞬だけ逡巡したがバルドならきっとケルベロス達が守ってくれると判断してその後を追跡する。トールスは壁を更に破壊して局内にあったシュミレーション部屋に来て止まる。

トールス「ふむ、此処なら広くて戦いやすいか……」

フェイト「逃がさないよ！！」

トールス「逃げる？まさかな…。今回の件で良く分かった。お前とあの男は今後俺達の目的に支障を来す存在だと……。ならば……！！」

トールスが一瞬で姿を消し、次の瞬間にはフェイトの目の前に膝蹴りの構えで現れた。咄嗟にザンバーフォームのバルディッシュでガードする。重い一撃が手を通して伝わって来た。

トールス「今此処でお前達を殺す……！！」

フェイト「くうっ！！？」

弾き飛ばされるフェイト。直ぐに体勢を立て直してトールスを見据えようとしたが既に彼の姿はそこになく、彼女の背後に回り込んでいた。

フェイト「なっ！？」

トールス「空断脚！！」

フェイト「ぐあああっ！？」

空気を切り裂く様な速さで放たれる蹴り。背中に強烈な衝撃が来てフェイトはそのまま地面に向かってふっ飛ばされた。

地面に激突する寸前で体勢を入れ替えて足から着地する。バルディッシュを構えて今度はフェイトがソニックムーヴで高速で接近し大剣のバルディッシュを振るう。それをトールスは自身のデバイス、『雷電』を忍者刀に切り替えて受け止めて弾いた。

トールス「その姿の速度も中々だが……まだ遅い！！」

体勢の崩れたフェイトをトールスは背負い投げで地面に向けて投げ飛ばす。直ぐに体勢を立て直したフェイトにトールスは瞬時に移動して斬りかかってくる。それを回避してそこからバルディッシュで

横薙ぎに振い吹っ飛ばす。追撃を加えようと飛ばしたトールスとの距離を詰めてデバイスを振りかぶる。しかし、トールスはそれを読んでいたのか振り上げた事で空いた胴に鋭い蹴りを打ち込んだ。

フェイト「かはっ！？」

トールス「言っただろう……遅いと！！」

そこからフェイトを地面に向かって蹴り落とす。今度は体勢を立て直せずに地面に落ちてしまい、何度か地面を跳ねる。起き上がろうとして腹から伝わってくる激痛に何度か咳き込む。
その隙を相手が逃すはずもなくトールスはフェイトの接近し下から掬い上げるような蹴りをしてフェイトの顎をかち上げる。衝撃で浮いた彼女の鳩尾にそこから回転し遠心力を活かした回し蹴りが炸裂した。

フェイト「が…はぁぁ……！！」

またもや吹っ飛ばされて地面を転がる。二度も同じところを攻撃されて胃液が逆流してその場で吐いた。口の中に酸っぱい感覚が充満する。何度か咳き込みながらも今度は追い打ちをかけられないように相手を視界に捉えておく。

トールス「如何した。お前の力はその程度か……？この程度で俺を倒そうと思っているのなら片腹痛いわ！！」

フェイト「ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ……！！バルディッシュ……ライオットフォーム……！！」

バルディッシュ［イエス、サー。ライオットフォーム］

防御を薄くして速さを求める。バルディッシュを二振りの剣に変える。まだ胃が痙攣しているがそれが治まるのを向こうが待ってくれる筈もない。痛みを堪えてフェイトは動き出す。

フェイト「はあああああぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

高速で振われる剣をトールスは冷静に体をずらして避けたり可能ならばそれを弾いて逆に斬りかかってきた。フェイトはそれを空いている方の剣に魔力を通して防御を厚くすることで防ぎ、受け流した。常人では見えない速度で飛び交う中でこの様な戦いが繰り広げられている。一度両者は距離をとり互いに得物を構える。

トールス「ふむ……先ほどよりも速い、か。だが……それでもまだ、遅い！！」

そう言った瞬間にトールスは再びフェイトの目の前に出現し『雷電』で斬りかかる。
咄嗟にバルディッシュで受け止める。

フェイト（さっきより…速い！？）

トールス「これ以上速くなくては…俺を倒すことなどできんぞ！！はあっ！！！」

弾き飛ばしたフェイトに更にピアシングナイフを飛ばす。フェイトも魔力弾を幾つも展開して放ち相殺する。

その隙にトールスが接近して斬りかかる。それを間一髪で回避して上空に舞い上がる。そのあとをトールスも追いかけてくる。フェイトはトールスに向かって魔力弾を飛ばす。それをトールスは体を捩じって回避して距離を詰める。そして、あと少しで追いつくところでフェイトは急に速度を落とし急停止した。必然的に距離が一気に短くなりトールスは目測を見誤る。

トールス「なにっ！？」

フェイト「はあっ！！」

目を見開いて驚くトールス目掛けてフェイトは反転してバルディッシュを振う。回避行動の間に合わなかったトールスの脇にそれは命中してトールスを吹き飛ばす。そのトールスとの空いた距離をもう一度詰めて反撃の時間を与えまいと高速でバルディッシュを振りまくる。なんとか攻撃を流して体勢を立て直そうとするトールスだが流石に崩れた体勢から回避するのは難しいのか徐々に攻撃が当たり始める。

フェイト「これでぇぇぇぇぇ！！！」

トールス「があっ！？」

最後にフェイトの強烈な一撃をもらいトールスは地面に向かって叩き落とされた。

体が酸素を求め、フェイトは呼吸を荒くした。

トールス「我が影よ、尖兵と成りて敵を蹂躙せよ。シュピーゲルアーミー！！」

砂塵の舞う中に声が響く。突如風が巻き起こり粉塵を吹き飛ばすとそこには五人のトールスがいてその内の四人は黒一色の影が人の形をした様な者が立っていた。

トールス「行くぞ……！！」

五人のトールスは一斉にフェイトに向かって跳躍する。初めに影の二人が刀で斬りかかる。

それを防ぐとその隙に別の二人が通り過ぎざまに斬撃を入れる。腹の脇を掠める形でバリアジャケットの上から斬られてそこから出血する。痛みに苦悶の表情を浮かべる彼女のデバイスを弾き上げて同時に前にいた二人が回し蹴り、フェイトの両肩に当たる。

両肩の骨がミシミシと音を立てる。吹っ飛ばされた彼女に向って本物のトールスがフェイトを蹴り飛ばした二人の肩を利用して更に跳躍し追いつく。そして、そこから体を回転させ遠心力を利用した回転蹴りをフェイトの胸に叩き込む。

トールス「布陣、影残楼！！」

フェイト「ぐ、あああああああぁぁぁぁぁ！？」

強烈な一撃に弾丸の様な速さで地面に向って叩き落とされた。バリアジャケットがその一撃を受け切れずに弾け飛んだ。元々、防御を捨てて速さを追求した彼女のバリアジャケットは打たれ弱い。今の一撃が耐久値を上回ってしまい吹き飛んだのだ。震える腕に力を込めて立ち上がろうとしたフェイト。喉から込み上げるものに思わず咳き込むと地面に赤い点が幾つも出来た。地に落ちた彼女をトールスは上空で見下ろしている。

トールス「この程度か……。ならば、先にあの男の方を片づけた方がいいな」

フェイト「……っ！！！」

トールス「奴の方があの満身創痍の状態でもお前以上に動けそうだからな。お前を相手して疲弊した状態で挑んでも無事では済まないだろうしな……」

そう言ってトールスはフェイトを無視してその場を去りバルドのいる最初の部屋に向かって行こうとした。

だが……

フェイト「バルディッシュ……真・ソニックフォーム……！！」

トールス「む……？」

フェイトから膨大な力を感じ取りその歩みを止め振り返る。そこには、先ほどよりもバリアジャケットの装甲を薄くしてバルディッシュを構えているフェイトがいた。

フェイト「バルドは……私が…守る！！」

トールス「ふん。そのボロボロの体で何ができる！」

トールスが影ので出来た自分を動かしてそれをフェイトに突撃させる。

猛スピードで四人同時に武器を振り上げて斬りかかったその瞬間に、フェイトはその場から姿を消していた。

そして、何時の間にかフェイトは四人の背後に立っていて本体のトールスを見上げる。

影のトールスは全て横一文字に両断されて霧となって霧散していっ

た。

トールス「……なるほど。それがお前の奥の手か」

フェイト「貴方には負けられない！！私が貴方を倒してバルドを守って見せる！！」

バルディッシュの切っ先をトールスに向けて言い放つ。それに対してトールスはクックックッと笑う。

トールス「俺を倒す、か……。ならば、俺も全力で行かせてもらおう……！！」

トールスから先ほどよりも大きな魔力が溢れ出した。それは彼の身を包み込む。フェイトも自身の魔力を放出させてその身に纏う。

トールス「今度こそ、再起不能にしてくれる！！！」

フェイト「私は……負けられないんだぁぁぁぁぁぁぁ！！」

再び、金と黒の輝きが宙を舞い激しくぶつかり合い始めた。

―――

その頃、バルドはフェイト達が破壊して通った通路を壁に手を当てて自分の体をなんとか支えながらフェイトの下にゆっくりと進んでいた。

ケルベロス［無茶すんなって相棒！！今は無暗に動くのは得策じゃねえぞ！？］

バルド「うっせぇ……。あいつを守るのが俺がプレシアやリニス、それに…アリシアとの交わした約束だ。この命を賭けてもあいつを守らなきゃあいけねえんだよ…ぐっ、ゴホッゴホッ！！」

ババムート［無理です若！！今の若はあまりにも力が落ちています！！今の若では……］

バルド「黙れ、ババムート……！！」

ババムート［で、ですが……！「黙れと、言っている……」っ、は、はい……］

口の端から血を垂らしながらもバルドはフェイトの下にゆっくりとしかし確実に向かっている。その弱った身体の何処にそんな力があるのかは分からないが、フェイトを守る…。ただそれだけで今の彼は身体を動かしているのだった。

～ミッドチルダ都内～

ロイド「うおおおおぉおおおおっ！！！」

エリオ「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

アグリス「そらあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

街中でエリオとロイドがアグリスと激しく激突する。ロイドの素早い斬撃が繰り出される。それをアグリスは自身の得物で弾き、受け流す。そこにエリオがストラーダで高速突きをする。しかし、アグリスの体に当るがその攻撃は全て弾かれてしまった。

アグリス「無駄無駄無駄ぁぁぁぁぁ！！！！俺にはその程度の攻撃は届かん！！！」

ロイド「こいつ無茶苦茶だな…うわっ！？」

アグリス「如何した剣聖！？貴様の力はその程度か！！音に聞く貴様の腕も大した事がないな！！」

ロイド「生憎と、俺はそんな大層な人間じゃねえよ!!くらえ、虎牙破斬!!」

ロイドが斬り上げから斬り下ろしの斬撃を高速で繰り出す。それをアグリスはレアスキル『鋼血天鎧(スチールオブブラッド)』で硬化した体で受ける。剣の接触した所から火花が散るがアグリス自身には傷一つ付いていなかった。

アグリス「火炎衝舞(かえんしょうぶ)!!」

炎を纏った回し蹴りがロイドの頭を狙って放たれる。それを紙一重で回避して再び斬撃を入れる。しかし、やはり攻撃は通らずに弾かれる。ロイドに隙が出来る事になるがそこをエリオがカバーする。エリオはロイドを狙ったアグリスの攻撃をストラーダで受ける。衝撃で両者の体勢が崩れるがそこにロイドがアグリスの懐に潜り込んだ。

ロイド「獅子戦吼!!」

アグリス「うぐおぉっ!?」

獅子の形をした闘気が放たれそれはアグリスを吹き飛ばす。アグリスは少々飛ばされるが地面に足を付けて踏ん張り堪える。
そこにロイドが魔神剣を、エリオがフォトンランサーを放つ。二人の攻撃がアグリスを捉えて爆発、砂塵が舞い上がる。

エリオ「ロイドさん。まだ……ですよね？」

ロイド「ああ…。あいつすげー頑丈だな……」

アグリス「ふふふ、はははははは！！面白い面白いぞぉぉぉぉ！！こんな闘いは久しぶりだ！！もっと俺を燃えさせろ！！滾らせろ！！熱くさせろぉぉぉぉ！！！」

砂塵の中からやはり怪我の一つもないアグリスが現れる。熱く燃え滾るアグリスは魔力を周囲に放出させながら恍惚とした表情でエリオとロイドに向かって吠えた。

ロイド「エリオ、あいつと一回戦ったんだろ？その時はどうしたんだ？」

エリオ「あの時は、コレットさんのアクセルモードの攻撃があの人の鎧を打ち破って撃退してくれました」

ロイド「ってことは、コレットの格闘戦時のあの攻撃力じゃないと貫通しないってことか……。厄介だな～。俺にもあれ位の攻撃が出来るのはあんまりないんだぜ？」

エリオ「そうなんですか？」

ロイド「ああ。俺はどっちかって言えば威力よりも手数で勝負だからな。一撃が重い攻撃はそんなに持っていない……」

エリオ「それじゃあ……」

ロイド「けど……あれならいけるかもしれねえな。エリオちょっと耳貸してくれ」

ロイドはエリオに耳打ちする。始めエリオは驚いた表情を見せる。そして、直ぐに不安げな表情に変わる。

ロイドの考えた案は即興の複合奥義、つまりオリジナル複合奥義だ。普通、複合奥義というのは互いにタイミングを考察した上で長い期間をかけて編み出される必殺の合体奥義だ。それを何の準備もなしに、しかも、いきなりの本番をするというのがロイドの考えた案だ。確かに一人の攻撃が低いのなら二人の攻撃を一つにして強力な一撃を与えて敵を倒すのが定石だろうが……果してそれが上手くいくのだろうか？

不安そうなエリオをロイドはニッと笑いその頭をポンポンと軽く叩く。

ロイド「エリオ大丈夫だって。俺たちなら出来るぜ！！」

エリオ「で、でもロイドさん……根拠なんて何処にもないですし……」

ロイド「根拠なんていらねえよ。必要なのはエリオ、お前の心だ！！お前の強い気持ちが、俺達の思いが強ければ出来ない事なんてないさ！！」

エリオ「僕の……僕達の、心……？」

ロイド「そうだ！どんな逆境でも強い気持ちがあれば乗り越えられる！！だから…行くぜ、エリオ！！！」

エリオ「……はい！！！！」

二人は得物を構えてアグリスを見据える。そして、同時に地面を蹴り飛びだす。

アグリス「二人纏めて打っ飛べ！！地顎崩襲撃！！！」

アグリスが足を振り上げてそれを地面に振り下ろす。地面がアグリスを中心に地割れを起こし浮き上がる。ロイドとエリオの足場が一気に砕けて浮き上がる。二人は浮き上がる足場を次々に跳躍して周囲から飛ぶ岩塊を避けてアグリスに接近する。

ロイド「行くぜ、エリオ！！！」

エリオ「はい！！ユニゾン奥義！！！」

ロイドがアグリスの懐に潜り獅子千烈破を繰り出し神速の連続突きを繰り出している時にエリオが同じくストラーダで高速突きを繰り出す。そして、アグリスの動きを抑えると同時にエリオが斬り上げでその体を浮かせてロイドがそれに合わせて獅子の闘気を飛ばしア

グリスを吹き飛ばした。

ロイド「燃える男の……！！」

エリオ「複合奥義……！！」

ロ・エ「「獅吼、雷獣撃！！！」」

二人が同時にストラーダとエターナルソードとエレメントソードを振り下ろす。二つの異なる魔力が同時に放たれて合わさり合体し姿を形作る。それは……巨大な雷の獅子となって咆哮を上げてアグリスに向かって飛びかかった。

アグリス「なにっ！？」

ロ・エ「「ぶち抜けえぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」」

アグリス「うがあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

咄嗟にアグリスは体を硬化させ防御の構えを取る。その彼を雷の獅子は右前脚で叩き潰し、左前脚で打ち上げる。そして、跳躍して打ちあがったアグリスに向かってその巨大な口を開き噛み砕く。周囲にも雷の余波が広がり雷が周囲にも迸る。そして、最後に大爆発を起こし巨大な一筋の雷となってアグリスを焦がした。

アグリス「がはっ!?お、俺の防御がまた破られただと……!?」

しかし、戦闘不能にするまでには至らなかった様でアグリスは体から蒸気を上げて少しだけ帯電してはいるが動けてはいた。自身のレアスキルによる強固な防御が二度も破られた事に驚愕している様だ。

エリオとロイドは動けないアグリスを捕縛しようと近づこうとしたその時、上空から無数のイノセント?型と?型が銃撃と集束粒子砲を放って来た。それを二人は後方に飛び退く事で回避する。しかし、その結果?型と?型の集団に前方を塞がれてしまった。

ロイド「しまった!!」

エリオもロイドの考えが分かりアグリスを見る。アグリスが一体の?型に脚で持ち上げて上空に飛び立ち始めているのが見えた。

エリオ「アグリス!!」

アグリス「くっ……小僧、この戦いの決着はお預けだ!!次に会った時には必ず殺す!!」

そう言い残しアグリスはそのまま?型と共に姿を消した。後を追おうとしたエリオだがその前を?型達が立ち塞がる。

ロイド「エリオ、まだいけるよな？　さっさと片付けて皆を助けに行くぞ！！！」

エリオ「はい！！」

ロ・エ「「うおおおおぉぉぉぉぉ！！！」」

二人は再び同時に地面を蹴り飛び上がる。二人を迎え撃つように？型と？型の群れが二人に襲いかかっていった。

――――――――――――――――――――――――――――――

海上で無数の艦砲射撃が入り乱れる。その激しい弾幕の中を幾つもの人が飛び回って近づくイノセントを撃ち落としていた。

ウクルス「へえ……此処がミッドチルダねぇ。結構良いところじゃねえか、なあアリア？」

アリア「は、はい。私たちの住む世界とあまり大差はないみたいで

しゅっ！？あう……また噛んじゃった／／／／／」

ウクルス「ごはあっ！？さ、流石はアリア……戦場で恥じらう姿はマジ天使！！！」

ニーア「そこ、うっさいわよ！！」

ウクルス「ああっ！？ニーア、テメーあのアリアの恥ずかしがる顔を見て萌えねえとは一体如何いう了見だ！？」

ニーア「べ、別に萌えてない事はないわよ…。密かにあの萌顔で鼻血が垂れてきた……って、何言わせんのよ馬鹿変態ボケが！！」

ウクルス「変態ボケだと！？俺は変態じゃねえ！！俺は……変態という名の、紳士だ！！」キリッ）

ニーア「あまり大差ないわボケスカタン！！」

ウクルス「なんだと！？ニーア、お前今すぐに全世界の変態紳士に謝れ！！普通の変態と変態紳士は天と地…いや、銀河と星の差があるんだぞ！！」

ニーア「知るか！？」

アリア「ウクルしゅしゃんもアリアお姉しゃんも喧嘩しないでくだしゃいっ！？あう～～連続で噛んじゃったよ～／／／／／／」

ウクルス「ぐぼあっ！？まさかの連続カミカミ攻撃だと！？俺の精神に十億のダメージ！！」

ニーア（耐えろ、耐えるのよあたし！！此処で鼻血を出したらあの変態と一緒になっちゃう……ああ、でも可愛い…）タラ～

アリアのカミカミでウクルスは吐血と鼻血を同時に出して恍惚とした表情をして、ニーアはアリアの無差別攻撃を頑張って耐えようとしたがやっぱり無理で鼻から赤い線を一筋垂らす。

此処は戦場の筈なのになぜか此処を中心として和みフィールドが展開されている。これがアリアの萌えパワーというものだ！！

モーゼス「フォッフォッフォ、アリアもウクルスも毎度毎度見ているだけで楽しいのぉ～」

その光景をモーゼスは日向でお茶でも啜っているお爺さんのような感じで眺めている。そこにイノセント?型が四体で銃撃する。しかし、それをモーゼスは見向きもせずにその方向に盾を展開するだけで全くの無視。?型はモーゼスに接近し同時に爪で切りかかるが、その瞬間、モーゼスは?型達の視界から消える。

モーゼス「フォッフォッフォ、年寄りの楽しみを邪魔すると痛い目見るぞな?」

モーゼスはその時既にその四体の背後におり、手にはビームサーベルがあった。それをゆっくりとした動作で仕舞うと四体は微塵切りになって海の藻屑となった。

モーゼス「やれやれ、年寄りに攻撃するとは、ちと教育せんといかんかもな……。どれ、少しばかりお灸をすえるとしようかの～～」

モーゼスが動き出すとその進んだ道にいる？型達は皆無数のパーツとなって海に落ちて行き魚の餌となる。

これぞ、モーゼス式Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩである。

皆さんもお年寄りは大切にしよう。年寄りなめっと痛い目を見るものだ……

アリアとウクルスそしてニーアに向かって複数の砲撃が飛んでくるがそれを余裕を持って回避する。

攻撃してきた敵の戦艦を自軍の艦が一斉に艦砲射撃を行いハチの巣にして撃沈させる。

そこに戦艦をも飲み込もうとする巨大な砲撃が飛んできた。艦隊はそれを散開して回避する。

ウクルス「向こうも随分とでけえ戦艦持ってんだな？」

ニーア「砲撃が邪魔ね……。アリア、あの砲台を全部破壊できる？」

アリア「えとえと…はい、Ｊｒの上に乗ってそこから砲台を固定す

れば狙い撃てます」

ウクルス「よっしゃ、アリアはあのデカブツの砲台を破壊、俺とニーアは雑魚の殲滅だ！！」

アリアがホワイトホエール・Ｊｒの上に着地し巨大な砲台の様なライフルを取り出した。アリアの使用する武器『超長距離対艦迫撃砲』である。それをその場に固定、二つ折りになっている砲台を連結し照準を確認する。そしてマガジンを取り出してセットしスコープを覗く。

アリア「距離計算…、風速計測…、敵の回避行動パターン予測…、誤差修正…、狙い撃ちます！！！」

轟音とともに砲撃が開始される。発射する度に大きな薬莢が飛び出す。初弾は真っ直ぐに音速を超えた速度で八百メートル級の敵艦の砲台めがけて飛び、その砲台の中に見事に入り爆発し砲台一つを破壊した。

突然の衝撃に司令官は驚く。

司令官「どうした！？今の衝撃はなんだ！！」

兵１「て、敵からの攻撃です！！第十二番砲塔大破！！もう使い物になりません！！」

司令官「馬鹿な!?距離は十分に取っているはずだぞ!?ええい、すぐに敵の位置を見つけろ!!」

その間に二発、三発と攻撃が当たり砲台が破壊されていく。すぐに反撃の艦砲射撃を艦隊に向かって放っているが敵艦隊はつかず離れずの位置から動かずにこちらの攻撃を回避しながら逆にこっちの艦隊を沈めている。

兵1「司令!!敵の大型艦の上に砲撃しているものを発見!!」

司令官「主砲集中!!一斉放火で敵の大型艦諸共沈めろ!!」

破壊されていない砲塔を全てアリアとホワイトホエール・Ｊｒに回して一斉に砲撃。巨大な閃光が迫ってくる。

ウルフ「艦前方に防御フィールド展開しろ」

グランディオン兵「イエッサー!!」

ホワイトホエール・Ｊｒの前方に光の粒子が集まりそれが艦を全て包み込んだ。それと同時に砲撃が直撃し爆炎に包まれた。それを見ていたクロノ達局員は誰もがやられたと思った。

だが、その煙の中から無傷のホワイトホエール・Ｊｒが姿を現した。

無論、その上にいるアリアも無事である。その光景にクロノ達どころか敵全員が驚いた。いくら向こうの戦艦が大きいといっても今の強力な砲撃を受けて無傷で動いているなど誰も予想などできないだろう。

ニーア「相変わらずあの防御壁は堅いわね。ん、ウクルス……？どうしたのよ？」

ウクルス「あ、あいつら…よくも、よくも……」

プルプルと肩を震わせるウクルスを見てニーアは、ああ、ウクルスの病気が始まった……と思い敵に思わず合掌する。顔を上げるウクルスの目がキラーンっと光る。

ウクルス「アリアを…狙うたぁ～どういう了見だあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ウクルスが両手に対艦用大型多変形ビームサーベルを持ち一人敵陣の特攻する。
その彼を狙う無数の艦隊が砲撃してくるがそれを……

ウクルス「だっしゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

気合の雄叫びと共に振るったビームサーベルで弾いた……。

敵兵一同「えええええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！？Σ　。。。（　Д　；）」

人など易々飲み込む砲撃を人が弾いて防ぐという前代未聞の技を見て全員が目玉を飛び出すほど驚いた。

ウクルス「アリアを狙うたぁいい度胸じゃねえか！！アリアはなぁ……アリアはなぁ……全ての紳士（という名の変態）の至高の宝石なんだぞおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

その如何でもいい雄叫びにビームサーベルが応えるかのように刀身を肥大化させて巨大な剣となる。それをウクルスは気合とともに振り下ろし、敵艦一隻を両断。真っ二つになった戦艦はそのまま海に墜落。

ウクルス「貴様らには分からないのか！？あの恥じらう彼女の素晴らしさが！？あの萌えポイントこそ、癒しを与える我らが天使であることになぜ気づかん！？ならば、教えてやろう、彼女こそ俺達の萌え少女！！アリアだぁぁぁぁぁ！！」

変態紳士ことウクルスの暴風雨の如き斬撃が敵艦の装甲をあっさりと両断して次々に撃墜して行った。

アリアの為なら不可能を可能にする。それがこの変態紳士ことウク

ルスなのだ。

ウクルス「アリア～！！俺の勇姿を見ているか～～！！」

アリア「は、はい！！しっかりと見てましゅっ！？あう～～また噛んじゃった／／／／／／」

ウクルス「ヘブンッ！！」

アリアがまた噛み、それでウクルスは鼻血を噴出、恍惚とした表情で幸せそうである。
ホントこのキャラ出血多量で死ぬんじゃないかな……

ウルフ「よし、敵の統制が崩れた今がチャンスだ。ホワイトホエール・Ｊｒを前進させろ！！」

グランディオン兵「サー、イエッサー！！」

巨大戦艦ホワイトホエール・Ｊｒが前線に動く。プロヴィデンスの艦隊と航空機が一斉に攻撃してくるがそれを粒子状の特殊防御壁『光粒子バリアー』を展開して完全防御。敵の大型戦艦と真っ向勝負を挑む。

司令官「くそっ！！残りの砲台を全てあいつに回せ！！近づけさせるな！！」

砲台が動き照準を合わせようとした。が、その準備が完了する前に砲台は次々に破壊される。
アリアがホワイトホエール・Ｊｒから降りて不安定な状態から超長距離射撃で援護しているからだ。
空中で滞空しながらのその狙撃はあまりにも精密で殆どが外れずに命中する。
その援護もあってか殆ど防御壁を展開せずに敵艦に接近する。

ウルフ「全砲塔解放！！目標、敵大型戦艦！！」

体全体の装甲が開きそこから数え切れない数の砲塔が出現しその全てが敵大型戦艦『ブロンガ』に向けられる。エネルギーが充填され光が収束する。

ウルフ「ぶちかませえぇぇぇぇぇぇ！！！」

ホワイトホエール・Ｊｒ［オオオオォォォォォォォォォ！！！！］

合図と共に一斉に巨大な砲撃が次々と放たれた。他の追随を許さない圧倒的な弾幕。その全てがブロンガに集中し直撃する。無論、ブロンガも防御壁を展開しているがそんなものは今の弾幕の前では唯の紙程度の守りしかなさなかった。
あっさりとバリアフィールドを貫通し装甲を破壊し爆発を起こす。
そして、沈み掛けているブロンガに止めを刺す様に管制室をゴット

フリートの光が呑み込みブロンガは制御を失って海に墜落して行った。

グランディオン兵「敵大型艦沈黙を確認！！」

ウルフ「よし、続いて友軍の救助並びに敵残党の掃討を開始する！！みな奮起せよ！！」

一同「おおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

切り札のブロンガが沈んだ事で統制のとれていた艦隊が次々に撤退を始める。それをグランディオン艦隊は追撃して撃ち落とす。クロノはその中で転移しかけの戦艦を発見。それを逃さずクロノは艦から発信機を発射しその艦底に付けた。

---

別の場所で爆発が起きる。煙が晴れるとそこにはバリアジャケットがボロボロの状態のヴィータが息を切らして宙に浮いている。額からは血が流れており頬を伝って顎の先から落ちている。

ボロボロの彼女とは違い、カオス、アビス、ガイアは少しばかりの傷はあるが幾分か余裕が残っている。しかし、自分達三人を相手にしてこれ程までに長い時間戦っていられるとは予想だにしていなかった様で少々驚いている様子だ。

カオス「くそっ、あいつ中々落ちねえな」

アビス「いい加減見飽きたぜその顔！！」

ガイア「二人とも……残りのエネルギーが少ない。これ以上は戦うと危険……」

ガイアの言葉通り戦闘で消費したエネルギーが激しく残りも少ない。

カオス「仕方がねえ、こいつを落として撤退するぞ」

ぼんやりとした視界の中でそれを聞いたヴィータはフッと口角を上げる。残っている魔力も少ない。
ならばせめてあれだけでも壊す！！

ヴィータ「アイゼン……リミットブレイク……ツェアシュテールングスフォルム！！！」

アイゼン［エクスプロージョン］

アイゼンのヘッド部分が巨大化そして、更に先端にドリルが付く。
その巨大な武器に三人は相手がまだ動けるのに気付いた。しかし、
それよりも早くヴィータは動きだす。狙うは三人の背後にある装置
ただ一点……。三人を追い抜きヴィータは突っ込む。

アビス「あいつ、転送装置を……!?やらせるかよ!!」

カオス「まて、アビス!!」

カオスの制止を無視してアビスは変形して海中に潜り猛スピードで
移動し装置の前に飛び出す。

アビス「いい加減見飽きたんだよ、その顔っ!!!」

アビスがカリドゥスを放つ。それはヴィータに直撃、爆発で彼女の
姿が見えなくなる。
仕留めた……とアビスは思っていた。しかし……

ヴィータ「うおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉ!!!」

アビス「なにっ!?」

爆炎を突き破ってヴィータが飛び出す。あの攻撃を受けても動ける

彼女に驚き反応が遅れる。
ヴィータは大きくアイゼンを振りかぶる。

ヴィータ「ツェアシュテールングス、ハンマァァァァァ！！！」

アビス「があっ！？」

ロケット噴射による加速で勢いの付いたアイゼンがアビスにぶつかりそのまま装置にまで届く。

しかし、装置自体にも防御シールドが付いている様でまだ破壊に至らない。

ヴィータ「アイゼン！！カードリッジロード！！！」

アイゼン［ロードカードリッジ！！］

アイゼンから薬莢が幾つも排出される。ロケット噴射の勢いが増し更に先端のドリルが回転速度を増す。先端に込められた魔力はドリル回転により、一点に集中して捻り込まれ、アビスの装甲を削り始める。

それに気付いたアビスの顔が蒼白になる。

ヴィータ「いけえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇつ！！！！！」

アビス「う、うあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

防御と装甲を抜いた後にその衝撃とともに装置の防御シールドを破壊し装置に直撃、対象内部に魔力が捻り込まれ、その魔力は拡散し内側から破壊し尽くす。

罅割れ始めた装置が遂に大爆発を起こす。その炎に腹部をドリルで貫通されたアビスが呑み込まれ装置共々爆発を起こす。その衝撃でヴィータは吹っ飛び海に落ちた。

ヴィータ（へへっ……やっ……てやった…ぜ…ざま……みろ……）

沈む中で意識が薄れゆく彼女、その視界に移ったのは此方に接近する白いバリアジャケットを身に纏う少女。彼女はヴィータを抱き上げて一気に海上に舞い上がる。

なのは「ヴィータちゃん！！しっかりして！！」

その少女、なのはの声でヴィータは意識を少しだけ取り戻す。彼女の後ろではカインがカオスとガイアの攻撃をその大太刀で弾いてやり過ごしている。それを見て、フッと笑う。

ヴィータ「へへへ、なのは。敵の転送装置はあたしが壊したぜ……。

これでもう現れないと思うぜ」

なのは「喋っちゃ駄目！！傷に響いちゃうよ！？」

カイン「なのは、ヴィータを連れて下がれ！！こいつ等は俺が抑える！！」

カオス「テメー等、よくもアビスを！！」

ガイア「お前ら許さない！！！殺す殺す殺す殺すぅぅぅぅ！！！！」

仲間をやった敵を許すまいと怒りに身を任せた二人の猛攻が来る。
それをカインは冷静に弾き右手から雷の波動を放つ。
それを二人は避けてガイアは変形して水上を滑る様に迫り、その援護をする様にカオスが背にある筒状の武器、『機動兵装ポッド　ビーム突撃砲』を射出してカインに飛ばす。カインはガイアの距離を詰めつつ接近してきたビーム突撃砲を通り抜けざまに二つに横一閃、破壊する。

ガイア「お前ぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

カイン「壱の太刀、絶……」

グリフォン2ビームブレイドで斬りかかって来たガイア、その前にいたカインは一瞬で姿を消しその攻撃は空振りに終わる。そして、カインはガイアの背後に何時の間にかいて高速で太刀を振るい2ビ

ームブレイドを両断した。バランスを崩したガイアを蹴り飛ばし海に落とす。
海の中からガイアが元の姿に戻ってビームサーベルを持ちカインに迫る。ビームサーベルを振り上げるガイアだがカインはその攻撃よりも速く太刀を振るいサーベルを両断して顔面に回し蹴りを入れてガイアを吹っ飛ばした。

ガイア「お前、落す！！」

カオス「落ち着けガイア！！悔しいが今の俺たちじゃああいつの相手は無理だ」

エネルギーも残り少ない。これ以上の戦闘は帰還に支障をきたすと判断したカオスがガイアを羽交い絞めにして後退した。
カインはそれを追う事なく見送る。そして、見えなくなった頃にサイフォスを背の鞘にしまう。

カイン「なのは、急いで戻るぞ」

なのは「う、うん！！」

腕の中で気を失っているヴィータを心配しつつなのはとカインは急いで彼女の治療のために撤退した。

# 第五十話（後書き）

如何でしたか？今回はヴィータが玉砕覚悟で特攻して転送装置をアビス共々粉砕しました。確か、原作でもそれっぽいのあったらしいが、作者は知らない、見てない、分からない！！

ロイド「俺とエリオの複合奥義が出たな？」

一度出してみたかった。エリオの雷とロイドの闘気が合わさって巨大な獅子になって相手を叩き潰したあと打ち上げて最後に噛み砕き、周囲を焼きつくす雷を放出しながら爆発する雷属性の複合奥義です。

発動するのに必要な技はロイドが獅子千烈破、エリオが紫電一閃です。

シリウス「ねえねえ作者～」

何だいシリウス？

シリウス「エリオが紫電一閃を出している描写がないんだけど、これ如何に？」

……。。Σ（ Д ；）ホントダッ！？

ガルド「……アホだ」

まあ、このままでいいんじゃね？あっ、痛い！！石を投げないで！？じ、次回も更新を早くできるように頑張ります！！お気に入り登録して下さった皆様ありがとうございます！！これからも精進します

のでこれからも宜しくお願いします！！では、今回はこれにて、さらばっ！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第五十一話（前書き）

五十一話更新！！

今回はシグナムとジークの戦闘とフェイト達の戦闘です。

久々に使った一人称、最早壊滅的だ……ｏｒｚ

ガルド「元々だと思うが？」

言うなそこ！！さて、今回はなんと……フェイトさんが……！！！

バルド「フェイトがどうした！？」

という訳で本編をどうぞ！！意外な人物も登場しまっす！！！

いや、読者的には予想通りか……！？

バルド「おい！！質問に答えろ！！」

# 第五十一話

シグナム「はあっ！！」

ジーク「ふんっ！！」

両者の剣撃がぶつかり合う度に火花が散る。鍔迫り合いから互いのデバイスを弾き回し蹴りを放つ。
同時にその蹴りは両者の脇にぶつかる。苦悶の表情を浮かべ互いに弾け飛ぶ。
体勢を立て直してシグナムは再び接近しレヴァンテインを振るう。
それをジークは盾で防御する。
盾に接触した途端にレヴァンテインが大きく弾かれる。

シグナム「くっ！？」

ジーク「はあっ！！」

体勢の崩れたシグナムにジークがバルムンクを振るう。それを体を逸らす事で回避して距離を取る。

シグナム「その盾、やはり厄介だな……」

ジーク「衝撃防楯（ソニックシールド）……。これも貴方から与えられたものだ」

恐らく触れたものを衝撃波で弾く能力を持っているのだろう。昔の自分は中々厄介な物をジークに与えたのだな、とシグナムは心の中で苦笑いした。だが、この戦いが楽しいのには変わりはない。

シグナム「レヴァンテイン！！シュランゲフォーム！！」

レヴァンテイン［エクスプロージョン］

連結刃となったレヴァンテインを構える。ジークもそれを見て油断無くバルムンクを構える。

シグナムがレヴァンテインを振るう。蛇の様にうねる剣をジークはバルムンクで弾き、受け止めまた時には盾で弾いた。

シグナム「シュランゲバイセン・アングリフ！！」

長い連結刃に魔力を伝わせてジークに放つ。刀身が複数の弧を描く様な軌道を見せてジークに迫る。

ジークはそれを盾で受け弾くが凄まじい衝撃に大きく押し出された。

シグナム「まだだ！！飛竜一閃！！」

ジーク「ぐっ！？」

炎と魔力を纏った連結刃が猛スピードでジークに飛んでいく。ジークは体を傾けてその射線上から体を逸らすが肩に浅く当った。苦悶の表情を見せるジーク。

ジーク「流石は烈火の騎士……。その武勇は今も健在か……」

シグナム「昔の私など如何でも良い。私は今の私、夜天の守護騎士、シグナムだ」

ジーク「ふふふ、そうだな……。だからこそ、貴方は超えるべき存在だ！！」

ジークの魔力量が急激に増大した。シグナムはそれを肌で感じ取り眼を見開く。

ジーク「バルムンク、ファングフォーム！！」

バルムンク［エクスプロージョン］

バルムンクの刀身が欠片となって柄から外れ複数に分れて宙に浮かぶ。そして、柄だけとなった剣に魔力刃が出現する。

シグナム「それが、バルムンクのもう一つの姿か……」

ジーク「そうだ。複数の敵を同時に相手する事を想定されたファングフォーム。その力は伊達では無いぞ！！」

ファングが動きだしシグナムに迫る。シグナムはレヴァンテインを振るい弾こうとする。それに反応してファングは回避行動を取り攻撃を避けた。

驚くシグナムに多方向からファングが襲いかかる。それを幾つも弾くがレヴァンテインを擦りぬけて幾つかがシグナムに迫る。それを後方に飛び退く事で回避するとその隙にジークが距離を詰めて斬りかかって来た。直ぐにレヴァンテインを元に戻して受け止める。飛び交うファングを避け、弾きながらジークと激しい空中戦を繰り広げる。そして、再び鍔迫り合いになる。

シグナム「ファングフォーム……。中々に面白い姿だな！！」

ジーク「ふっ、昔の貴方もこれを初めて見た時、同じコメントをしてたぞ？」

シグナム「そうなのか？だが、如何やらその姿は相当に魔力を消費する様だな？」

ジーク「そうだな。一つ一つを魔力制御せねばならんからな、中々に扱いが難しい。だが、そういう貴方こそ疲れが見えるが？」

シグナム「む……。隠していたのだが、やはりばれたか……」

実を言うと長時間の戦闘で両者とも魔力が残り少なくて疲労の顔を隠しきれないでいる。
互いに飛び退き、ジークはファングを元の刀身に戻し、シグナムは呼吸を整える。

シグナム「お互いに残りの魔力は少ないか……」

ジーク「ああ、普通ならば此処まで魔力が無くなる事はないのだがな……。貴方と戦うとやはり激しく消耗する様だな」

シグナム「ふっ、お前と戦うと血が滾る。気付けば此処まで疲れが見える様になるとはな……」

ジーク「ならば、これが最後の一発だ……」

シグナム「いいだろう。私の残りの魔力を込めた一撃を放つ……！」

両者の魔力が極限まで高まる。二人の魔力は両者の上空でぶつかり合い激しくせめぎ合う。

シグナム「レヴァンテイン、ボーゲンフォーム！！」

レヴァンテイン［エクスプロージョン！！］

ジーク「バルムンク、ボーゲンフォーム！！」

バルムンク［エクスプロージョン！！］

同時にデバイスが変化して弓となる。ジークのバルムンクもシグナムの持つ弓に似ておりやはり兄弟機なのかと改めて感じた。

シグナム「これで決めるぞ！！翔（か）けよ、隼（はやぶさ）！」

ジーク「全力で行く！！飛翔せよ、大鷲！！」

互いの魔力矢に残っている魔力を注ぐ。二つの違う魔力がぶつかり合う事で空気を揺るがす。

互いにカードリッジが二つずつ排出される。一度眼を閉じ精神を集中させる。目を開けずとも見える。

自分とジークの間にある線が……。そこにはきっとジークも放つだろう。ならば、自分もそこを射るのみ。二人が同時に目をカッと開けた。

シグナム「シュツルムファルケン！！」

ジーク「シュツルムイーグレン！！」

同時に放たれた魔力矢。シグナムの矢は天を翔ける隼となり、ジークの矢は天を飛翔する大鷲となる。

二人の音速を超えて飛翔する魔力矢は、二人の中央で激突、絡まり

合い巨大な球体に変貌し二人の魔力光が混ざりあってそして、最後に白く輝いて大爆発を起こした。凄まじい爆風で二人は吹っ飛ばされビルに激突する。
ゆっくりとビルから落ちて何とか地上に着地するが立っていられない程、疲弊しており膝を突いた。

ジーク「引き……分け…か」

シグナム「如何やら……その様…だな」

悔しくはない。寧ろ清々しい気持ちが体を満たしている。これ程にまで全力でぶつかり合ったのだ自然と笑いが込み上がる。それはジークもなのか彼を見ると同じく笑っていた。そして、暫し二人は笑った。楽しくて楽しくて楽しくて楽しくて、そう、とっても楽しかった。今、持てる力を全て出し切った結果が引き分けなのだ。これからもぶつかり合ったら自分達はもっともっともっと高みに行けるだろう。

ジーク「ははは、これ程笑ったのは久方ぶりだ」

シグナム「ふふふ、そうか……。それは、私もだ」

ジークは立ち上がりシグナムに近寄る。シグナムも立とうと思ったのだがまだ足に力が入らなかった。
凄まじい回復力だな……とシグナムは傍まで来たジークを見上げながら思う。

自分の消えた過去の記憶を知る者、ジーク……。そう言えば、何故彼は歳を取らないのだろうか？
自分達は随分と昔の人間だ。そんな人間が今此処にいる筈がないのだ。では、彼は……？

ふと思った疑問に暫し考えていたシグナムは突然体が浮く感覚を感じた。思考の海にいた意識を戻すと何時の間にか自分はジークに抱き上げられていた。それも…お姫様だっこで……。

シグナム「なっ／／／／／／／！？」

ジーク「如何した烈火の騎士？」

シグナム「お、お前こそ何をやってるんだ／／／／／／／！？」

ジーク「何と聞かれれば、烈火の騎士を木陰に移そうと思っただけだが？」

恥ずかしさのあまりにもぞもぞとジークの腕の中で動こうとするが、彼の腕はしっかりと彼女を固定しておりビクともしなかった。それによって服を通して感じるジークの体の感触。しっかりとした筋肉を持っており確かに鍛え抜かれた体つきをしているのが分かる。自分の鼓動が速くなるのが分かる。体も奥底から熱が溢れてきそうだ。
気付かれない様に顔を逸らす。ジークはシグナムの様子に気付く事なく木陰を見つけてそこに彼女を優しく下ろした。そして、自分もその隣に座る。

すると、そこに……

エリス「ジ～～ク～～♪」

クラレンス「シグナム～♪」

エリスとクラレンスが降りてきて二人に駆け寄って来た。

シグナム「お前達も来ていたのか！？」

エリス「クスクス、ジークが決闘する時は何時も近くにいるよ♪」

ジーク「……降りろ」

シグナムの問いかけにエリスは笑いながら答える。ただ、それはジークの頭によじ登ろうとしながら言うものだから愛嬌たっぷりである。ジークは無駄だと思いながらもそう言うがエリスもそして、続いて逆側からも登って来たクラレンスもキャッキャッと笑うだけで降りようとはしなかった。はあ～っと溜息を吐くジークをシグナムは苦笑いして見る。

そこに、

スバル「シグナムさん大丈夫ですか！？」

戦いを見守っていたスバルとギンガが降りて駆けよる。

シグナム「二人も怪我はないか？」

スバル「は、はい。それは大丈夫なんですけど……」

ギンガ「あの、何でシグナムさんはそんなに使徒と仲が良いんですか！？」

シグナム「違う。この三人が可笑しいだけだ」

エリス「ひっど～い。ジークだけだよ変なのは～クスクス♪」

クラレンス「ねえ～クスクス♪」

ジーク「お前達もだ…」

ジークはそう言って二人の首根っこを捕まえて頭から引き剥がす。

キャ～♪と楽しそうに声を上げながらジタバタと手足を動かす二人を見てスバルもギンガはポカーンとしてみていた。

スバル《ギ、ギン姉……。使徒ってもしかしてすっごく個性的なのかな？》

ギンガ《さ、さあ……？けど、悪い奴等だけじゃないって事はこの光景を見れば何となくだけど理解は出来るね…》

敵である筈なのにこの様な光景を見てスバルとギンガは念話でそう話しあった。

ジーク「エリス、クラレンス。俺達はやる事は果たした。帰るぞ……」

エリス「は～い。それじゃあ、皆さん。さようなら～クスクス♪」

クラレンス「お元気で～クスクス♪」

ジーク「また会おう烈火の騎士……」

立ち上がったジークはそのままシグナム達に背を向けてエリスとクラレンスを連れて転移魔法を発動してその場を去っていった。

シグナム（次に戦う時は……負けんからな…）

それを見つめながらシグナムは心の中でそう強く言うのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

～管理局本部内～

一人本部内で暴れているイノセント?型の拠点を攻撃しに来たティアナは壁に背を付けてそこから顔を少しだけ出してその先の様子を確認する。?型が三体ほど視界に見えるところにいる。クロスミラージュからこの周辺の生体反応を確認すると、この部屋の奥にはあの三体ほどしかいない様だ。

しかし、三体を同時に相手をするというのはかなりの危険を伴う。なにせ、相手は本局の優秀な魔導師を倒せるほどの強さを持っているのだ。堅い甲殻にその重そうな甲殻に身に包まれているのにあの素早い動き、狭い所でも動ける辺りあの蜘蛛はこういう建物内での敵制圧に長けているのかもしれない。

さて、一人で如何するか……?　?型は恐らくあの赤い関節部分や目が柔らかい筈だ。そこを集中攻撃すれば倒せるだろう。クロスミラージュを強く握る。息を整え出るタイミングを計る。

……今だ!!

ティアナ「クロスファイヤー、シュート!!!」

出ると同時に魔力弾を複数形成して一斉掃射。十数発の魔力弾が三体に一斉に放たれる。ティアナに気付いた三体が動きだすが一体が行動が遅れて魔力弾を幾つも脚の赤い関節部分にうける。悲鳴を上げて仰け反る一体を残して残る二体がティアナに猛スピードで迫って来る。

眼の前に光を集束させてそれを撃ち出してくる。それを体を少しそらす事で回避して魔力弾を連射、？型はその太い脚を持ち上げて叩き潰そうとする。それを後方に飛び退いて回避して直ぐに前に駆け出すし振り下ろされた脚の上を駆ける。

そして、途中でジャンプして真上に飛び上がり体勢を変えながら一斉にその目に向かって魔力弾を振り注いだ。その弾幕に耐えきれず魔力弾が目を貫通して体を貫き一体が地に伏す。

ティアナが着地すると同時に傍にいたもう一体が体当たりを仕掛ける。しかし、当った瞬間、彼女は霞んで消える。幻術で出来た彼女が消えた事で？型はティアナの姿を見失う。そこに頭の上に軽く何かが乗った。

ティアナ「はあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

何時の間にか？型の上にはティアナが乗っておりそこからゼロ距離で撃ちまくる。弱点を集中砲火されてしまい、二体目も何も反撃できずに地に伏した。そこに、怯んでいた残りの一体が突進してきてティアナにぶつかってきた。

今度は幻術を展開する暇もなくまともに激突してしまい壁に叩きつけられた。

ティアナ「く、ううぅぅ……」

脚に力を入れて何とか立とうとする。その彼女を仕留めるべく?型は眼の前に光を集束する。そして、ティアナ目掛けてレーザーを発射した。
爆発で彼女の姿が隠れる。仕留めたと油断していた?型だが……。

ティアナ「クロスファイヤー、シュート!!」

爆炎の中から複数の魔力弾が飛んで来た。直撃して仰け反る。そして、視線を元に戻した時そこには……目の前でクロスミラージュを構えるティアナがいた……。

ティアナ「ファントムブレイザァァァァ!!!!」

彼女最大の砲撃がゼロ距離で発射される。その砲撃に呑み込まれて最後の?型は消し飛んだ。そのまま砲撃は向こうの部屋の扉を破壊する。薬莢が排出され彼女の足元に転がる。
さっきの体当たりで少し腕が痺れるがこのまま此処で体力を回復する訳にもいかない。ティアナは先を進み破壊した扉をくぐるとそこには無数の卵がパイプから溢れる程あった。

ティアナ「これね……」

これがイノセントの卵なのだろうか？だが、配管から見える程のものだ間違いないだろう。
ティアナは魔力弾を形成して撃ちまくる。次々に卵を破壊していく。

ティアナ「これで、最後！！」

最後の一個を撃ち抜き破壊した。辺りは卵の中身が飛び散っておりベトベトである。
これで、もうイノセントは増える事はない筈だと思いホッとする。
その時、何処かで起きた爆発が起きて局内全体が揺れた。

ティアナ「今のって……！？」

轟音が聞こえた方角は…フェイトの行った方向だ。まさか、隊長に何かあったのか！？と思ったティアナは直ぐに道を戻りフェイトとバルドの下に…急いで駆け出した。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――

～フェイト　ＳＩＤＥ～

フェイト「がはっ！！」

トールス「切り札もその程度か！！！」

私の最後の奥の手、『真・ソニックフォーム』の速さに追いついたトールスの蹴りがお腹に当る。
内臓を押し出されるような感覚に吐き気が起きる。そのまま蹴り飛ばされて地面を何度も転がった。
これで、何回吹き飛ばされて地面を転がったんだろう？もうそれもほとんど覚えていない。

フェイト「はあああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

トールス「無駄だ……！！」

ソニックムーヴを使って一気に距離を詰めて振るったバルディッシュがトールスのデバイス『雷電』に弾かれた。この速さにも反応するなんて！？その事に驚いていた所為で次に来た彼の拳に反応が遅れてしまった。拳が空を切る音を立てながら私の肋骨に強く当った。

フェイト「が、ああっ！？」

そのまま振り抜かれてまた吹っ飛ばされた。肺が衝撃で痙攣してるのか呼吸が……。コヒュー、コヒューと空気が抜ける様な音が自分の喉から聞こえる。バルディッシュを地に刺して杖代わりに何とか立つ。視界が歪んで見える。

トールス「幾ら速度を上げようが俺にはお前の動きは見える！！俺は、お前の速さよりももっと速いからな」

フェイト「はあ……はあ……はあ……」

自分よりも速く動ける……？それはきっと事実なんだと思う。私がこんなに息を切らしているのにトールスは息を切らしていない。バルドは彼を追い詰めていた筈なのに私には出来ない……。バルドの背を守りたいその思いで強くなろうとしたけどまだ、こんなにも差があるなんて……。

もっと、もっと速くなりたい！！バルディッシュを地面から引き抜いてまた構える。

フェイト「私は……負ける訳には……いかないんだ！！」

トールス「ふん、お前の速さはそれが限界だ。俺には届かない。幾らお前が防御を捨てて速さを求めた所で俺やあの男達のいる速さの極地は見える事はない……」

速さの……極地……？それは、いまのままじゃダメなの？それじゃあ、私が今まで努力してきた事は……？衝撃的な言葉で目の前が暗

くなった。ただ速く、速く、速く動ける事を求めて完成したこのフォームもまだ、遅いっていうの！？

フェイト「くっ……！！バルディッシュ、ソニックムーヴ！！」

バルディッシュ［ソニックムーヴ］

認めたくなかった。今までの努力が彼に全て否定された気がしたから……。

一気に距離を詰めてトールスに斬りかかる。けど、それはトールスが雷電で防ぎ弾く。それでも何度も休む暇も与えない様に高速で振るう。それをトールスは雷電で弾いたり脛当で防いだりしてくる。足払いする様にバルディッシュを振るったけど上に飛び上がって避ける。その後を追って私も飛ぶ。トールスが雷電を振るって来る。それをバルディッシュで受け、弾いて、受け流した。

トールス「ふんっ！！」

フェイト「っあ！？」

受け止めた瞬間にトールスがバルディッシュを弾き上げた。そして、がら空きになった私の鳩尾を思いっきり蹴って来る。

トールス「疾風脚！！」

フェイト「きゃあっ！？」

思いっきり振り抜かれて地面にたたき落とされた。頭を強く打ったみたいで視界がグラついている。
立ち上がれない私の前にトールスが降りて来た。そして、髪を掴んで強引に引き上げる。

フェイト「ぐ、あ……っつ……うぁ……」

トールス「ふんっ！！」

そのまま宙に投げられた。そして、そこから回転回し蹴りを受けて私はまた飛ばされた。
部屋の端まで飛ばされて壁に激突した。その衝撃でリボンの片方が解けた。そのまま地面に倒れる。
体が動いてくれない……。目の前に解けたリボンが落ちる。片方の視界が赤い世界で染まる。今ので額を切ったみたいだ……。

フェイト「くっ……かはっ……うぅ……」

動いてよ、まだ終わってない！！自分はまだ動ける！！だから動いて！！何度も念じているのに応えてくれない。

トールス「これで終わらせてくれる。死ね……小娘！！」

トールスが物凄い速さでこっちに来る。

バルド……。私ってまだ、貴方の背中は守れないんだね……。

私は……貴方の事を全然知らないまま……終わっちゃうのかな？

このまま意識を失ったら……そう思ったけど、

――ガキンッ！！――

目の前の光景で私はまた意識を覚醒した。だって、そこには……

トールス「貴様っ！？」

バルド「フェイトは……やらせん！！！」

バルドがトールスの攻撃を受け止めていたから……。

～フェイト　ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

バルド「おおおおおおおおぉぉぉぉぉぉっ！！」

バルドは雷電を弾いて狼の形をした闘気をトールスに当てて吹き飛ばした。トールスは空中で体勢を立て直して着地する。

バルド「フェイトはやらさせねえぞっ！！」

フェイト「バル…ド……」

バルドは地を蹴り駆け出す。それは一瞬で姿が見えなくなり次の瞬間にはトールスの前にいた。そして、ケルベロスを振り下ろす。間一髪それをトールスは避けるがケルベロスの重量ある衝撃で床がバルドを中心に砕ける。

バランスを崩すトールスをバハムートを左手に持って横に振るう。重低音を響かせながら迫るそれを雷電で受け止めるが凄まじいまでのパワーで吹き飛ばされた。

トールス「くっ！！手負いの筈なのになんという力だ！？」

ケルベロス［相棒、無茶すんなって言ってんだろ！？］

バルド「うっせーぞケルベロス。気が散る……ゲホッゲホッ！？」

バルドが咳き込むと床に血が飛び散る。そのままバルドは膝を折る。フェイトは震える腕に喝を入れて何とか体を少しだけ起こし這いずってバルドの傍に寄った。

フェイト「バルド……無茶しちゃ……駄目！！」

バルド「お前こそ無理すんじゃねえ……！！こいつは俺が……ゲホッゲホッ！！」

再び咳き込むバルドの背をさするフェイト。その時だ……脳内に何かが映し出された。

――バルド、貴方に頼みがあるわ…。私の代わりに……ｗ……の大事なｍ……をまｍ……――

フェイト（な、なに……？今のは……？）

聞いた事のある。いや、とても懐かしい大切な大切な……。

バルドが立ち上がった事で手が離れた瞬間にその映像は途切れる。

バルド「フェイト、お前はそこにいろ……。こいつは俺が倒ｓ…っ、ゲホッゲホッ!?」

しかし、直ぐにまた膝を折って咳き込む。フェイトはふらつきながらも脚に力を込めて立ち上がる。そして、バルディッシュを強く握る。バルドが此処まで苦しんでいるのに自分は何をしているんだ!?まともに動けない体を無理に動かして来てくれたのにこのままでいいものか!!

フェイト「バルドこそ、そこで休んでいて……。私が、行く!!」

バルド「フェイト、待て!?」

制止を振り切りフェイトは再びトールスに肉薄する。トールスが雷電を振るう。それを姿勢を低くして回避しそこから斬り上げる。防がれるがそのまま魔力を一気に開放して押し出しトールスごと高く舞い上がる。

フェイト「はあああああっ!!!!」

トールス「なにっ！？」

そして、雷電を弾いてバルディッシュを振り下ろしてトールスを床に叩き落とす。まだ終わらない。
フェイトの足元に巨大な金の魔法陣が出現する。周囲で彼女の魔力が雷になって現れる。

フェイト「雷光……一閃っ！！！」

バルディッシュから薬莢が複数排出される。魔力刃がさらに膨れ上がり魔法陣も更に膨張する。

フェイト「プラズマ…ザンバー…ブレイカアァァァァァ！！！！」

フェイトがバルディッシュを全力で振り下ろした。巨大な砲撃がトールスを呑み込んだ。
爆発が起きてその風圧は放ったフェイトすら感じる程だった。

フェイト「はあ、はあ、はあ、はあ……」

今できる自分の全力を叩き込みフェイトは確かな手応えを感じていた。しかし……

トールス「くっ、やはり生かしておくのは危険か……！！」

フェイト「え……？」

砲撃の当った爆心地にはバリアジャケットがボロボロではあるがその覆面の向こうの目はまだギラギラと輝いているトールスが立っていた。そして、その前にはトールスを模した形をした影が……。

フェイト「幻影招来（シャドーディフェンス）……！？」

トールス「ギリギリ間に合ったが……やはり防ぎきれんか……だが、今のを耐えきれただけ良しとするか……」

トールスは地面を蹴り一気にフェイトに肉薄する。フェイトはバルディッシュを横に振るうがトールスはそれを悠々と弾いた。そして、隙だらけのフェイトに踵落としをして来る。それを腕でガードするがあっさりと地面に叩き落とされた。

フェイト「がっ……くっ…うぁ……」

トールス「最早立ち上がる位しか力も出まい。これで終わらせる…雷電、ボウガンフォーム」

雷電［御意……］

フラフラと立ち上がるフェイトが見えたのは自分に向けられているトールスのデバイス。

その先端に魔力が集まり光輝く。

トールス「これで終わりだ、獣の咆哮、ビーストバスター」

トールスから獣の形をした砲撃がフェイトに向かって放たれた。

---

～フェイト　ＳＩＤＥ～

トールス「最早立ち上がる位しか力も出まい。これで終わらせる…」

…雷電、ボウガンフォーム」

雷電［御意……］

トールスのデバイスから魔力が溢れている。それは分かっているのに体が動いてくれない。
脚が地面にくっ付いたみたいになっていて意思に反して動かない。

トールス「これで終わりだ、獣の咆哮、ビーストバスター」

獣の形をした砲撃が私に向かって飛んでくる。

バルド「フェイトオォォォォ！！！」

バルドの声が聞こえる。その声でぼんやりとした思考の中で私は負けたくないと、強く思った。

フェイト（私は…負けたくない！！私は…まだ…大切な人を…まだ、守り切れていない！！だから、だから……力が欲しい……守れる力が……欲しい！！）

そう強く願った。その時だ……世界が灰色に染まった……。周りの時が止まったみたいに皆の動きが止まっている……。

フェイト「これは……？」

何が起きたの!?景色が変化して行く。そして、次の瞬間には私は花畑に立っていた。

フェイト「此処は……!?」

この花畑は知っている!!もう、二度と見るこの出来ない…大切な場所……時の庭園にあった、私の家の近くにあった花畑だ!!そして、その花畑に誰かがいる。小さな、まだ幼い私と……

フェイト「母さん……!?」

間違いなくそこにいたのはもう二度と会う事が出来ない筈の大切な家族、プレシア母さんがいた。
小さな私が花畑で遊んでいるとそれを手招きで呼んでいる。

プレシア「フェイト、貴方にプレゼントよ」

子供フェイト「な～に?」

プレシア「貴方もそろそろ魔法に携わる年頃、だから貴方のデバイスよ」

そう言って渡しているのはバルディッシュ。それを私は受け取ってはしゃいでいる。

子供フェイト「わぁ～！！凄い！！お母さん、ありがとう！！」

プレシア「名前はバルディッシュよ」

子供フェイト「バルディッシュ……？うん！！私は、フェイト。フェイト・テスタロッサ！！よろしくね、バルディッシュ！！」

バルディッシュ［初めましてマスター。私はプレシアの開発したデバイス、バルディッシュと言います。これからはよろしくお願いします］

プレシア「フェイト、そのバルディッシュにはある特別な力をインストールしているの」

子供フェイト「特別な…力？」

プレシア「ええそうよ。でも、それは今の貴方には使えないの」

子供フェイト「如何すれば使えるようになるの！？」

プレシア「貴方が愛する者を見つけてその人の為に強くなりたいと、そう強く念じれば自ずと見える様になるわ」

子供フェイト「私はお母さんが大好きだよ！！」

プレシア「ふふっ、ありがとうフェイト。でもそういう意味じゃないの。まだ、貴方には早いわ。けど、何時かは必ず見えるわ。今からその封印魔法構築式を教えるけどそれは貴方の頭の中に時が来る

まで封じておくわね」

そして、母さんが何かを紡いでいる。私の中で何かが外れる音がした。

プレシア「さて、リニス……」

リニス「はい、プレシア」

フェイト「リニス……！！」

もう一人の懐かしい人が現れた。それは、私の師であり、大切な家族の一人、リニスだった。

プレシア「フェイトはきっと、いえ、絶対に私を超える立派な魔導師になるわ。その為にも貴方が知識を戦い方を教えなさい」

リニス「はい、分かりました」

プレシア「さて、フェイト……」

そう名前を呼んで私の方を向いてきた。

まさか……！？

震える唇で声を出してみる。

フェイト「かあ…さん……？」

プレシア「大きくなったわね、フェイト…」

そう言って柔らかく笑ってくれた！！それを見た途端に私は駆け出して抱きついた。

フェイト「母さん！！母さん！！！！」

プレシア「まったく、いい歳して泣くんじゃないの。もう直ぐ大人になるんでしょ？」

リニス「全く、そういうプレシアもいい歳して泣いているじゃないですか…」

フェイト「如何して母さんが……？」

プレシア「貴方が答えを見つけたからよ」

答え……？それに気が付いて母さんを見るとそれに頷いてくれた。

プレシア「貴方が答えを見つけた。だから私は此処にいる。ようやく巡り合えた様ね」

フェイト「うん！！バルドって言うんだよ！！」

プレシア「知ってるわ。貴方を守ってくれるって約束してくれた人だもの」

フェイト「バルドが……？」

プレシア「フェイト、貴方も彼を守りなさい。彼には隠された秘密がある」

フェイト「秘密……？それってどういう事！？」

プレシア「それは……ごめんなさい、教える事は出来ないわ。けど、いずれ貴方にはその試練がやって来るわ。彼の事を貴方が守りなさい。いいわね？」

そう言うと母さんは私から離れる。そして、リニスと共に小さな私を連れて歩きだす。

フェイト「母さん……？待って、母さん！！」

プレシア「フェイト、私は貴方とは違う所に今いるの。リニスもアリシアも一緒に……。けどね、私は一度命を失いかけた。だから貴方と同じ世界にいるには時間がまだ欲しいの。だから、待っていて……。フェイト、負けるなんて許さないわよ？貴方は大魔導師、プ

レシア・テスタロッサの自慢の娘なのだからね……」

笑う母さんとリニス、そして、小さな私がアリシアに変わる。アリシアは私に笑いかけている。

景色が再び歪み始めた。

――フェイト、奏でなさい……。閃光を超えた速さの極地を開放しなさい……。その道に敗北はないわ！！さあ、紡ぎなさい！！雷光を超え雷神となりなさい！！さあ、一緒に唱えるわよ……。貴方のデバイスに隠された本当の、真の魔法を……――

元の世界に戻る。時がまたゆっくりとだけど動きだした。

頭の中で母さんの声が聞こえる。私は、その声に合わせてそれを紡いだ。

フェイト「我、今此処に雷光を超え雷神となる…。その輝き、失われる事なく、その道に敗北はない…。我求めるは、速さの極地…。今此処に、封じられし魔法を開放する！！バルディッシュ、ヴァジュラフォーム！！！」

バルディッシュ「っ！！イエッサー、封印魔法起動開始…！！ヴァジュラフォーム、ロードアウト！！」

魔力が、もう殆どなくなっていた筈の魔力が膨れ上がる！！私を中心にそれが雷の壁になって広がってトールスの砲撃を打ち消した。
バリアジャケットが修復されてハーケンフォームと殆ど同じ姿になる。
そして、バルディッシュがコアを七つに分けてそれぞれが剣になった。
一番大きな剣を掴むと残りの六つがそれぞれ腰と両脚の外側と背中にセットされる。

バルディッシュ［ヴァジュラフォーム、起動完了。マスター、これは今のマスターでは二分までの起動が限界です。それ以上使用すれば処理能力が追いつけないくてマスターの体にもダメージが来ますので気を付けてください］
フェイト「分かった。なら、二分以内に勝負をつける！！」

バルドを守る為に私は負けられない！！この力でトールスを倒す！！

フェイト　ＳＩＤＥＯＵＴ

トールス「ほう、まだ姿を変えるか……」

ケルベロス［おいおい、ありゃあまさか……！？］

バルド「まさか、あれがプレシアの言っていたフェイトのデバイスに隠された真の力か！？」

バルドは過去にプレシアから聞いた事のあるフェイトの真の力を目の当たりにし眼を見開いた。

トールス「だが、姿が変わった程度で……」

トールスが一気に距離を詰めてフェイトの前に瞬時に現れる。

トールス「たかが姿を変えた程度で私に勝てると思うな！！！」

トールスが雷電をフェイトに振り下ろした。しかし、それは空を切る。気付いた時にはフェイトは姿を消していた……。

そう、何時の間にかだ。パッとそこにいた所から消えたのだ。

トールス「なにっ！？いったいどｋ「遅いっ！！」ぐああっ！？」

フェイトはトールスの死角から通り抜けざまにバルディッシュを振るった。何時の間にか背後にいた彼女の攻撃をまともにくらいトールスは吹っ飛ばされる。体勢を整えてフェイトを視界に捉えようとしたが彼女はすでにそこにいない。

トールスは横から来る気配を察知して雷電を構えるとそこに重い衝撃がくる。弾き飛ばされながらもフェイトがいる事を確認、着地と同時に地面を蹴り持ち前の速さで肉薄する。フェイトが動く。その瞬間彼女の姿が霞んで消える。

トールス「なんだこの速さは!?先程の速さを遥かに超えている!?」

フェイト「バルディッシュ!!ライトニングムーヴ!!」

バルディッシュ［イエス、サー、ライトニングムーヴ］

フェイトの通った後を雷が付いて行く。眼にも止まらぬ速さでトールスの速さを凌駕して接近しバルディッシュを振るう。

トールスはそれを受け止めたがそれと同時にデバイスを通して電撃が流れ込んできた。彼女の魔力変換質がなんと周囲の魔力を取り込みながらそれを雷に変換してバルディッシュの魔力刃に流し込んでいるのだ。苦悶の表情を見せるトールスをフェイトは弾き飛ばす。

トールスは自身の影を操り四体の自分を召喚して同時に動く。その全ての攻撃をフェイトは掻い潜る事が出来た。

フェイト（見える!!私にも相手の動きが、見える!!!）

世界が広がった気がした。今の自分にはトールスの動きは遅く見える。目の前で振り下ろされた剣を後方に飛び退いて回避する。しかし、思った以上に後退しているのに気付いた。まだこの速さに体が上手く付いてきてくれない様で少しばかり誤差が出る様だ。その彼女に影のトールスが肉薄して来る。

フェイト「バルディッシュ、ソード展開！！」

バルディッシュ［イエス、サー］

鞘に収まっていた六つの剣が空中に展開されて切っ先を相手に向ける。そして、同時に射出され不規則な軌道を描き影を四つ貫いて破壊した。残り時間も少ない、一気に勝負をつける！！

フェイト「この力で……っ！！」

ライトニングムーヴを発動しながら六つの剣と魔力弾を放つ。それはトールスに向かって飛ぶ。それを幾つか弾いていたが剣が掠めた事で動きが鈍った。それを機に剣がトールスを囲み展開される。

フェイト「はあああぁぁぁぁぁぁぁ！！」

フェイトがそこに飛び込み通り抜けざまに展開されている剣を掴みトールスを斬る。直ぐに反転して別の剣を掴み斬る、また別の剣で斬る、また別の剣で斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る！！

そして、六つの剣を自身の下に集め、二つを持ちそれをトールスに通り抜けざまに斬りながら突き刺し、更に二つ、更にもう二つを突き刺した。刺さった剣は刀身と柄が分かれ、残った刀身は変化してバインドに変わり相手を拘束した。フェイトの下に戻った柄はフェイトの持っていた大剣に集まり一つとなる。

フェイト「セブンスコンビネーション……！！そしてこれが……」

フェイトが一つとなったバルディッシュを構える。魔力刃が巨大化し巨大な刃となる。魔力が雷となって周囲に降り注ぐ。彼女の足元の魔力陣が更に大きくなり空間を揺るがす。

フェイト「雷神一閃！！ヴァジュラザンバー、ブレイカーーー！！！」

トールス「うがああああぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

ゼロ距離で放たれる巨大な砲撃魔法。プラズマザンバーを遥かに凌駕する魔法が放たれた。

その巨大な光にトールスは呑み込まれた。フェイトの砲撃は止まら

ず壁を砕く、砕く、砕く、砕く。
その先にいたイノセント達も巻き込み危うく本局に穴を開けかける程の砲撃が飛んでいき大爆発を起こした。

フェイト「はあ……はあ……はあ……」

バルディッシュ「タイムオーバー、ヴァジュラフォーム強制解除」

フェイトが地に降りて膝を折ると同時に時間が来てバリアジャケットが消えて元の執務官の服になった。

魔力はもう空っぽに近いけど、トールスは倒せたはずだ。

そう思った、しかし……

トールス「ウオオオオォアアアアアアァァァァァ！！！」

フェイト「うそ……」

トールスはまだ動けていた。しかも、その体には無数の筒状の物が括りつけられている。

トールス「お前は危険だ。危険すぎる！！俺の命をかけてお前を消

し去ってくれる！！」

バルディッシュ［あれは…火薬反応！？マスター！！彼は自爆する気です！！逃げてください！！！」

トールス「我が魂は主の下にっ！！！」

トールスが突っ込んで来る。体が動かせない状態のフェイト。そして、彼女の目の前でトールスはスイッチを押して光に包まれ次の瞬間にはフェイト諸共、爆発が包み込んだ。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――

――トクン――

心臓の音が聞こえた。

――トクン、トクン――

それは、前にも聞いた事のある落ち着ける暖かい心音。そして、何かに包まれている暖かい感覚…

――トクン、トクン、トクン――

眼を瞑って真っ暗にした視界を徐々に開ける。そこには、

バルド「無事だな？フェイト……」

フェイト「バ、バル…ド……？」

自分を抱き、包んでいるのはバルドだった。

バルド「無事なんだな……？なら、いい……」

それを確認した途端にバルドが横にゆっくりと倒れた。フェイトはバルドを抱き起こそうとその体に手を触れるとヌルッとした生暖かいものを感じた。掌を見ると、そこには……夥しい血が付いていた。そして、彼の背を見ると……何時も着ている漆黒のコートが焦げており、その奥には肉が吹っ飛んで大きく傷ついた背中が……見えて

しまった。

フェイト「バ…ル…ド……？」

信じたくなかった。そっと揺する。けど、彼は起きない。彼の体の下から血が池の様に広がり出して自分の脚を紅く汚す。

フェイト「あ、ああ…ああああ……いや、いやあ…いやああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

フェイトの悲鳴が局内に響き渡る。その声を聞きつけてティアナがその部屋に飛び込んだ。

ティアナ「フェイトさん！！だいj――っ！？バルドさん！！？」

フェイト「いやあ！！バルド！！眼を開けて！！いやあ、いやああああっ！！！」

ティアナ「フェイトさん落ち着いてください！！！くっ、誰か！！！医療班を早くこっちに連れて来て！！！」

バルドの目を覚まさせようと揺するフェイトをティアナは何とか羽交い絞めにして抑えながら通信で医療班の手配を急いだ。

この戦いでキャロとクラウド、ヴィータそして、バルドは酷い重傷を負い聖王病院に緊急搬送されたのだった。

## 第五十一話（後書き）

如何でしたか？バルディッシュには隠された力があってそれが今回解放されました。『ヴァジュラフォーム』は『真・ソニックフォーム』を数倍上回る出力を出す事が可能で並みの人間の反射速度では反応すらできません。
更に、独立軌道魔法、ソードピッドが装備されており縦横無尽に動かせます。バリアジャケットも装甲をパージすることで更に速度を上げることが可能です。
しかし、欠点としてあまりに強力なGが掛かるため今は二分が限界でそれ以上使用すると処理が追いつかなくなり直接、体にそのGを受けることになり危険でもあります。

っとまあ、今考え付いているのはこんなところです。

プレシアとリニス、更にアリシアまでもが登場！！何故彼女達がフェイトに会えたのか？プレシアやリニス、アリシアが生きているのは何故か？この真相は後々判明します。

なのは「フェイトちゃんが凄くなってきてるの……！？」

いやはや、ノリノリで書いて、気づいたらこんなになってた……。
セブンソードコンビネーション……某ガンダムさんがトラ〇ザムした時に使用した
滅多斬りを少しばかり酷似させたものです。

それにしても遂にバルドが倒れてしまった！？

ティファ「バルドは大丈夫なの？」

さあね？

フェイト「バルドに怪我させたな……」

フェ、フェイトさん……！？な、何故に私めにデバイスを向けるのですか……？

フェイト「バルドに何かしたら許さないんだから～～～～！！！！」

ぎゃあ～～～！？で、では読者の皆様。これからも精進しますので宜しくお願いします！！お気に入り登録して下さった皆様、本当にありがとうございます！！

感想・質問など受け付けておりますのでこれからもこの小説を宜しくお願いすます！！

ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁ……

作者はログアウトしました……ｗｗｗｗ

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第五十二話（前書き）

第五十二話更新！！

負傷した四人は果たしてどうなったのか！？今回はそんな話です。

ロイド「結局みんなは無事なのか？」

さあ、それは読んでみてのお楽しみ！！

因みに、後半で作者がまたまた大暴走！！これを読んでいくれている皆様、塩分の摂取の準備をして置いてください！！過度の糖分摂取により大ダメージを受ける可能性あり！！コーヒーは飲まないように！！吹きますよ！！↑実際、作者は読み治して吹いた。

では、本編をどうぞ！！

# 第五十二話

聖王病院の集中治療室の前にある長椅子に一人の少女が座っていた。
頭には白い包帯が巻かれており自身も怪我をしているのだが、彼女は此処に来ていた。
目の前にある扉の向こうには今、大切な人が手術を受けている。その成功を必死になって祈っているのだ。

なのは「フェイトちゃん！！」

はやて「大丈夫なんか！？」

そこに駆けつけて来たのは親友のなのはとはやてだった。

フェイト「なのは…はやて……」

二人をいたフェイトは二人に駆け寄って抱きつく。その不安で震えている彼女を安心させる様に二人は優しくその背を擦る。
そして、扉を見上げる。未だそこにある赤いランプは消えずに暗い廊下を照らしている。

フェイト「なのは…はやて……。バルドは、バルドは大丈夫だよね……？」

はやて「大丈夫やでフェイトちゃん。バルドさんはきっと大丈夫や」

なのは「そうだよフェイトちゃん。バルドさんは大丈夫だよ」

その時だ。赤いランプが消える。そして、扉が開き中から複数の医療スタッフと共にベッドで寝かされているバルドが運ばれてきた。

フェイトが駆け寄ろうとしたがそれをスタッフが抑える。そして、バルドはそのまま運ばれていった。フェイト達の下に主治医が近寄る。

フェイト「バルドは、バルドは大丈夫なんですか！？」

主治医「手術は成功はしましたが、今は絶対に安静にしないといけません。思った以上に体にダメージがある様です」

ただ……。と主治医は言葉を濁して続ける。

主治医「あの人は一体何なんですか？」

なのは「如何いう事なの？」

主治医「治療中に傷が勝手に塞がり始めるなんて、あんな光景、始めて見たよ……」

そう言い残して主治医はその場を去っていった。

―――――――――――――――――――――――――――――――――

一方、此方はヴィータやキャロが寝かされている病室。

ヴィータ「あ～体を動かしてぇ……」

キャロ「駄目ですよヴィータさん。私達は重症患者なんですから、動いたら病院の方達に迷惑が掛かっちゃいますよ？」

ヴィータ「それは分かるんだけどよ……。なんか動かさないとムズムズすんだよ」

アイネ「そう思うんだったら早く怪我を治すんだな」

エリオ「あははは……」

見舞いにきたアイネとエリオが傍におりアイネがヴィータにそうコ

メントをしてエリオはそれに苦笑いしているのだった。

キャロ「ねえ、エリオくん。クラウドさんは大丈夫だったの？」

エリオ「クラウドさんは鎧装がダメージを殆ど受け止めてくれたから大事はないってティファさんが言ってたよ」

キャロ「よ、良かった～……」

ホッとした様にキャロは安堵のため息を吐いた。実際彼の状態を見たキャロにはあの怪我は酷い様に見えたのだが如何やら鎧装は予想以上にダメージを受け止めてくれたようだ。ただ、左腕は流石に完治するには一週間は掛かるらしい。

ヴィータ「にしても、最近、戦闘が激しくなってきてねえか？」

キャロ「そうですね……。それに使徒も活動が活発になり始めている様です」

アイネ「他の世界でつい先程また使徒が現れたそうだ。それに敵に覇王の御珠の一つ、紫の御珠を奪取されたそうだ」

未だその構成員の一部しか姿を見せない『使徒』。その活動は日に日に増してきているらしい。

ヴィータはそこでふと疑問を浮かべた。

ヴィータ「なあ、そもそもあいつらは何でその『覇王の御珠』ってのを集めてんだ？」

エリオ「そういえば何ででしょうね……？」

キャロ「『覇王の御珠』は確か…『ガレリアス』と呼ばれたベルカの王の所持していたものと聞いてはいます」

ヴィータ「あたしはそいつの名前は知らねえな。アイネは知ってるか？」

アイネ「少しだけなら……。その王は嘗てベルカ時代の中でも特に強力な魔力を持って他のベルカ王から恐れられていた者だ。別名『皇帝』または『覇王』と周囲からは呼ばれていたという」

エリオ「ですが、その人は随分と昔の時代に生きていた方なんですよね？確か……ある存在に負けたと聞きました」

アイネ「私の知る中では一文字でしか記されていなかった。『闇』……、それに敗北したと」

ヴィータ「なんだよそれ？」

キャロ「『闇』って何なんでしょう？」

アイネ「心の闇、異世界の敵、外宇宙からの侵略者、または、裏切りか……。『闇』と表現するなら多々あるだろう。……私としては一つだけ心当たりがあるがな」

ヴィータ「ん?何か言ったかアイネ?」

アイネ「いや、なんでもない」

そう言ってアイネは首を振った。そこに丁度良くはやてが入って来た。

ヴィータ「はやて!」

はやて「ヴィータもキャロも元気そうやね?」

彼女の手には籠がありその中にはクッキーが入っていた。はやてお手製のクッキーである。

味の方はヴィータの言葉を借りるなら……ギガうまだぜ!!!

はやて「口に合えばええんやけどね?」

キャロ「そんな、はやて隊長の料理は全部美味しいですよ!」

ヴィータ「そうだぜはやて!!はやての料理は最強だぜ!!」

はやて「ありがとぉな、キャロ、ヴィータ」

談笑する四人。するとヴィータが…

ヴィータ「あ～、やっぱ早く体を動かしてえよ……」

アイネ「だから、それならば早く怪我を治せと言っているだろ……」

ヴィータ「何かおもしれえ事ねえかな……」

何て事を呟いたその時だ……

シリウス「そういう事なら俺にお任せ！！」

シリウス登場！！しかもその場所が……

一同（（（（（なぜ床下からっ！！？）））））

はやて「シリウス君、何してるんや？」

シリウス「やあ、はやて。ご機嫌麗しゅう～♪……今日のはやての下着の色は～……♪」メキッ！！

はやて「何しているんやと聞いてるんや……さり気無くスカートめくろうとすんなや＃」

シリウス「おぉぅ～……ナイス…ミドル、キッ…ク……」

はやてのスカートを捲って見ようとしたシリウスの顔面に見事にはやての脚がめり込んだ。
若干当っている場所から煙が上がっている様に見える。一撃で撃沈したシリウスだが直ぐに回復して立ち直る。

シリウス「あいたたた……。はやて、もう少し加減ってものを知った方がいいと思うよ……？」

はやて「なにいうとんのや。シリウス君に加減しとうたら遊ばれるだけやん」

シリウス「その遊び心が大事なのさ！！っという訳で再び挑戦してみる！！」

はやて「やめろと言うとるやんけ！！」スパ～ンッ！！

シリウス「鋼鉄ハリセンッ！？」

遂に鉄の強度を上回るハリセンを使用し出すはやて。それは見事にシリウスの脳天を捉えて床に再び轟沈する。
しかし、シリウスとてやられるだけでは終わらない！！地面に突っ伏すも直ぐに顔を上げて目標（ターゲット）を補足する！！

シリウス「見えた！！今日は……白！！！！」

はやて「なっ／／／／／／／／！！？」

顔を真っ赤にしてスカートの裾を下に引いて隠す仕草をするはやて。
しかし、その行動はもう遅い。

シリウス「ふっ、今…新たなはやての一ページが俺の心のメモリーに記録された……」

はやて「わ、わわわわわ忘れんか～～～い／／／／／／／！！！」

シリウス「スパムッ！？」

止めの一撃を諸にくらって頭から煙を上げて床に沈むシリウス。その二人のやり取りをヴィータ達はポカーンとした顔で見ている。

ヴィータ「なんか、はやてとシリウスってあんなやり取りしてるけど仲良いよな？」

アイネ「ふふっ、それほど主も彼の事が気に入っているという事でしょう」

はやて「な、なんや二人とも！？何故にそんな優しい眼でうちを見る！？」

ヴィータ「あ～気にすんなってはやて。そこでシリウスとそのまま続けてていいぜ」

はやて「痛い！！その優しい眼が今のうちには痛すぎる！！頼むからツッコミを入れて欲しいで！？」

シリウス「そんな悩みしはやての背後からダイビング抱きつき！！」

はやて「うにゃ～～～／／／／／／／！！？」

シリウス「おぉっ！？はやての頬っぺたはなんと素晴らしきモチモチ肌！？スリスリ～♪」

はやて「あわわわわわわ／／／／／／／／！？」

シリウス「むっ、腕に当るこの仄かな柔らかい感触は……！？」

はやて「～～～～っ／／／／／／／！！？や、やめんか～～い！！！」

シリウス「キムチッ！！？」

本日三度目の一撃が決まりシリウス、再び撃沈……。今日のはやて劇場、これにて閉幕。

チャンチャン♪

シリウス「俺、何時かはやての胸のサイズを透視で当てるんｄ「要らんこと覚えんな！！」ヘチマッ！？」

あっ……まだやってたのか……。

クラウド「なんだか、隣が騒がしいんだが……」

ティファ「シリウスがはやてを弄ってるみたいだね……」

ウルフ「いや～騒がしいのは良い事さ！鬱鬱とした空気も一気に吹き飛ばすこと出来るしね」

クラウド「時と場合によるが、まあ、いいか……」

隣の病室ではクラウドが同じく寝ている。ヴィータ達の病室から聞こえる騒がしくも楽しそうな会話を聞きながらそんな風に会話をしていた。

ウルフ「それにしても、クラウドが落ちるなんて随分と珍しいね？スレイヤーズとしては不味いんじゃないの？」

クラウド「そうだな。そこで頼みがあるウルフ。鎧装（フレーム）に封印したあの機能を解除して欲しい」

ティファ「クラウド、あのシステムを使う気なの！？」

クラウド「ああ、そうだ。あの最後の戦い以降、その力の危険性から封印したシステム……不死鳥（フェニックス）システムを解放する」

ウルフ「そっか、それじゃあ今修復している鎧装（フレーム）にリリスに頼んで解除しておくから」

ティファ「それなら、私のもお願いします！」

ウルフ「レギオンが生み出したフェニックスシステムと対となる力、幸せの青い鳥（ブルーバード）システムをかい？」

ティファ「はい、私もそろそろ今の状態での戦闘継続は危険と判断しました」

ウルフ「それじゃあ、流星（ミーティア）も預ける？」

クラウド「それはロイドとコレットとも話をつける方が良いだろう。あれは単体で軍隊を相手出来る力だ。不用意に使用するのは不味いだろう」

流星（ミーティア）…クラウドとティファの使用する小型戦艦の様な形をしたものでドッキングする事で高火力の弾幕を展開する二人の兵器だ。その力は非常に強力なので現在は使用を控えている。が、もしもの時は使用する事になるかもしれない。そこに関してはロイドやコレット等に話をつけるべきだろう。

ウルフ「この際、序だから鎧装を新調したら？良い機会かもよ？」

クラウド「それはないな」

ティファ「そうですね。あの鎧装は、私達にとっては大事な…掛け替えのない思い出の品ですから」

自分達にとってあの鎧装は思い出の品。自分達の目標となる今は亡き家族の遺品があの鎧装なのだ。

一生戦場にいる限り脱ぐ事はない。その確固たる意志を感じてウルフはやれやれと肩を竦めるのだった。

---

二日ほど経ちフェイトは目的の病室の少し前の角から様子を見る。その部屋の前には一人の職員がおり中に入るのが出来ない状態だった。

その病室にはバルドが安静に寝かされているのだが、フェイトは如何しても見舞いに行きたいのだ。

しかし、初日に行った時は見事に弾かれてしまいそして、今日も来たのである。

フェイト「うぅ……今日も無理なのかな……？」

セフィリア「フェイト？そこで何してるの？」

フェイト「うひゃぅっ！？」

突然背後から声を掛けられて間抜けな声を上げて飛び上がった。振り向くとそこにはセフィリアがおり、今のフェイトの驚き方がつぼにはまったのか口に手を当てて笑うのを堪えている。

セフィリア「ゴ、ゴメンねフェイト…そ、そんなに驚くなんて思ってなかったよ。く、くっくく…！！」

フェイト「もぅ～！！笑わないでよ！ホントにビックリしたんだよ！？」

セフィリア「ごめんごめん。はぁ～少し落ちつこうっと…」

深呼吸して気持ちを切り替えるセフィリア。

セフィリア「フェイトは如何してここにいるの？」

フェイト「そ、それは……」

セフィリア「バルドの様子を見に来た、って所かな？」

フェイト「っ！？……うん。でも、あれじゃあ……」

向こうに視線を向けるのでセフィリアも角からその先を見ると見張りがいるのを確認した。

フェイト「バルドの様子を見に行きたいけど、見に行けないんだよ……」

セフィリア「そっか……。うん、それなら任せてよ！！」

フェイト「え……？」

セフィリア「実は私も様子を見に来たんだ。……一人くらいならガルドも怒らないかな？」

ブツブツと一人で何かを呟くセフィリアは決心してバルドの部屋に向かって歩き出したのでフェイトも慌てて後を付いて行く。

セフィリア「すみません。この部屋に用があるので入りたいんですけど駄目ですか？」

職員「は？何言ってるんですか！？此処は今、重症患者が寝ているんですよ！！立入禁止です！！」

セフィリア「絶対に…駄目ですか……？」

職員「駄目です！！此処にいる患者は絶対安静の者なんですから！

？」

フェイト「セフィリア、もういいよ。また今度来るから今日は帰ろう？」

セフィリア「……ふぅ～……」

フェイトの言葉を無視してセフィリアは腕を組んで一度眼を閉じて呼吸を整える。そして、眼をカッと開き目の前の職員に向かって命令を下す。

セフィリア「我はヴァルハラ王国、第６３代目魔王たる者ぞ！！王たる我が道を阻むな、三下が……退(の)け！！！」

職員「っ！！？……はい、申し訳ありませんでした……」

セフィリアの一喝が職員に叩きつけられた瞬間、目の前の職員の目の輝きが消えて扉の前から退いた。
その光景を見たフェイトは驚きで眼を大きく見開いた。

フェイト「えっ、えっ！？セフィリア、この人に何したの！？」

セフィリア「ん？ああ、それはね…これを使ったんだよ」

振り向いたセフィリアが自分の目を指差すとその瞳は何時もの翡翠

色をしておらず、鮮やかな紫色をしていた。

セフィリア「これは、魔眼『イビルアイ』っていうんだ」

フェイト「魔…眼……？」

セフィリア「そっ、魔族や一部の人の中には強力な力を秘めた魔眼を持っているの。私の魔眼もその内の一つで相手の動きを封じるとか色々できるの」

ガルド「そんで、その力の一つには自身よりも魔力量が多くなければ相手を意のままに操る事が出来る」

セ・フェ「「ふにゃあっ！？」」

突然声が聞こえて二人が飛び上がる。そして、陰からガルドが出てきて呆れた顔をしていた。

セフィリア「ガ、ガルド！？如何して此処に！？」

ガルド「アホ、俺達は『共鳴者』になってるんだぞ。お前の居場所くらい直ぐに分かる。それと……また魔眼を使いやがって」

セフィリア「ふみゅっ！？」

何やら軽く怒っているガルドがセフィリアの頭を軽く小突いた。少

しばかり痛かったのか頭を擦り頬を膨らますセフィリア。

セフィリア「でもでも、これを使うしか道は無かったんだよ！？」

ガルド「王家の力をあまり外で使うんじゃないっての……。ったく、俺に頼めば軽くノシて強行突破してやったってのに」

セフィリア「ガルド、暴力はいけないよ！！？」

ガルド「違うっての、軽くＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩと言う名の肉体的苦痛を味わってもらうだけだ」

セフィリア「一緒だよ！？」

フェイト「ね、ねえ…そろそろ中に入ろうよ。こんな所で騒いでたら人が来ちゃうよ」

ガルド「ん？ああ、そうだな。セフィリア、今晩は覚悟しとけよ？」

セフィリア「あう～……。お手柔らかにして欲しいよ……（泣）」

室内に入る三人。そこには沢山の機材が置かれて寝かされているバルドがいた。

定期的に聞こえる電子音が静かな病室に響く。その様子を不安げに見ていたフェイトの背をガルドは軽く押す。軽く頷いて行けと言っている様でフェイトはバルドの寝ているベッドに近づいていく。

セフィリア「ねえ、ガルド。フェイトは今、何処までバルドの過去を見ているんだろうね？」

ガルド「さあな。だが、少なくとも前回俺達の共鳴の波動を受けたんだ。間違いなく進んではいる筈だ。今回はその確認も兼ねている」

セフィリア「バルドの体はそこまで限界に近いの？」

ガルド「そうだな。お前と契約する前の俺よりも力は弱っている」

二年ほど前にガルドはセフィリアと結ばれた。だが、当時の彼は本来の力の殆どを失っていて魔界での戦争が終わった頃にはかなり疲弊しきっていた。それでも今彼がこうして元気でいられるのはセフィリアと永遠を誓い合った事でその力を回復したからだ。
今のバルドはその当時のガルドよりも力を失っている。このままでは拙いとは思っているがガルドではどうにもならないのだ。

解決するにはバルド自身の意志とフェイトの決断が必要である。

そんな事を知る由もないフェイトはバルドの傍まで来る。

そして、彼女がバルドにそっと触れた瞬間、

フェイト「っ！！？が、ああっ！？うあああっ、くぅあああああっ！！？」

自分の体の奥底から突然何かが胎動する様な感覚と共に激しい頭痛

に襲われた。

その様子を見てガルドとセフィリアは『感応現象』が始まったと思った。

――――――――――――――――――――

――――――――――――

激しい激痛の中でフェイトは頭の中に何かの映像が見え始める。それは、何処かの世界にあっただろう大きな城。そこでは、数人の位の高そうな人物達が激しく一番奥の大きな椅子に座っている女性に向かって激しく抗議を上げている。その彼女を擁護する様に数人がそれに抗議の声を上げる。

そんな終わりの見えない討論は長い時間をかけて終わり。皆去っていった。

奥に座っていた女性も皆が居なくなったのあとに漸く椅子から立ち上がり自分の私室に足を動かした。

――よお、邪魔してるぞ――

すると、そこには既に先客がいた。月明かりを背にして窓の所に座っている男性で、彼はその女性を見ている。

――お前か……――

――随分とシケた顔してるなあ？まだ、この前の戦いの事を馬鹿共は追及してんのか？――

――……――

その問いに無言で答える。つまりは肯定を意味している事だ。それを見てその男性はやれやれといった風に肩を竦めた。

――人間ってのはやっぱ馬鹿だな。そんな事、幾ら追及しても時間は戻らねえのによ、たかが数百人の人間が死んだだけでギャアギャア騒ぐなんてよ――

――お前には分からないだろうな。闇の存在のお前には……人の気持ちなんて分かるまい――

――ああ、知りたくもねえし分かりたくもねえ。俺は人間に殺された元人間だからな。人間なんて如何でも良いんだよ。今まで随分な数の人間を見て来たし消してきた。たかが数百人死んだからって別に何とも思っちゃいねえよ――

そう言いながら彼は月を見上げる。……見事な満月だ。見ているだけで吸い込まれそうな気がする。

――なあ、一つ聞きたい……――

――なんだ？――

――私の選択は……間違っていたのか……？――

俯いて何かに耐える様に震わせている手を握りしめながら彼女はそう彼に問いかける。まるで、見えない答えを求めている様にも見える。

そんな彼女に……

――私の選択は…間違っていたのか……！？答えてくれ……――

――……んなもん知るかよ――

その人はバッサリとその問いを切り捨てた。顔を上げて睨む彼女を彼は涼しい顔で流す。

――そんな事知る訳ねえだろ。俺は預言者でもお前の道標でもねえ――

――だが……！？お前は今まで数多の世界を見て来たのだろ！？それならば……！！――

――言っとくが俺はお前には教える気は一切ねえよ。その世界の人間はその世界の者だ。テメーがそれを真似した所で上手くいく筈がねえよ。その選択が正しいか間違っているかはテメーが努力して周

囲に正しかったと思わせりゃいいんだよ――

――思わせるだと？それでは民を騙しているではないか！？――

――騙す？違うな、多くの賢人が物事を成功させたのはその選択肢が正しいと周囲にも分からせたからだ。テメーが反発を受けたのはその考えが周りには分からなかっただけだ――

そう言われて女性は椅子に腰かけて額に頭を当てる。

――まあ、これからも悩め。悩んだ分だけお前の行く先は輝くかも知れねえからな――

そう言って彼は懐から一本のビンを取り出した。

――１８００年物だ。この世じゃ手に入らねえ一品だ。どうだ？――

――私は……――

――偶にはいいだろう。努力しているお前がそれすら認められないなんて事はねえな――

――……ふっ、私はあまり酒には強くないんだが？――

――任せろ。酔い潰れない程度にしてやるよ――

傍に歩み寄って窓際に腰掛けた彼女にグラスを渡す。そのグラスにワインを注いだ。

――お前は何時までいてくれるんだ？――

――お前が死んだ時にはもういねえよ。この世界で興味を持てたのは出会って早々、恐れも見せずに全力でぶつかって来たお前だけだからな――

グラス同士を軽くぶつける。二人しかいない部屋にそれは響き渡る。

風景が変化する。城内から何処かの森の中に変わっていく。そして、一本の大樹に寄りかかっている先程の女性がいた。
苦痛に表情を歪める彼女は脇腹に手を当てていてそこからは出血をしていた。見ただけで分かる、もう助からないと……。

――はあ……はあ……はあ……――

――随分とやられたな――

別の木の陰から人が出て来た。陽の光がその人物を照らした。その人は……。

フェイト「え……バル…ド……？」

黒いロングコートを身に纏っていて、燃える様な赤い髪、月の様に輝く美しい瞳、間違いなくバルドであった。

――バルドか…。私は、もう駄目なようだ……――

――だろうな。その傷は今の技術じゃ治せねえな――

――バルド……。私は間違っていたのだろうか？――

何処か虚空を見る様に空を見上げる女性。深い森の中、ただ一点だけ青空が広がっている。
そこから鳥達が飛んでいるのが見えた。

――私は王となった。だが、私が王となった所為で多くの民が血を流した。私は、なにも守れなかった……――

――……――

――教えてくれバルド。私が王となったのは…間違っていたのか…

…！？――

そう言ってバルドを見る。その目には何処か救いを求めるような気配がしてた。

それでもバルドは……

――知るかよ……――

しかし、バルドはそう言って彼女の問いをバッサリと切り捨てた。

――前にも言った筈だ。俺は全知全能の神でもねえしお前の予言者でもねえし導き手でもねえ。『たられば』の話なんかされても分かる訳ねえだろ――

――つれないな……。せめて、最後くらい教えてくれてもいいだろう……――

――……一つ聞くぞ？お前は何人の人間を守った？――

――如何いう意味だ……？――

――何時までも失った人間の数を数えんじゃねえよ。お前に後ろには守った人間がいるだろうが。その数を数えた事はあんのか？亡くなった者は戻らねえ…そいつ等に何時までも執着すんじゃねえよ…！！――

女性が大きく眼を見開く。

――　一つだけ言っておくぞ。少なくともお前以上にこの土地を治めれた者はいねえよ――

――っ!?あ…あぁ……そうか……私は、私の歩んだ道は……――

――まっ、俺から言わせれば…御苦労様とだけ言っておくぞ――

女性の頬を一筋の光が流れる。何処か安心した様な、今までの苦痛から解放された様な表情をしていた。

――もう、思い残す事はない……――

――逝くのか?――

――ああ、私は行けるだろうか?あの全ての理想郷……全て儚き理想郷(アヴァロン)に……――

――行けるか、じゃねえよ。行けるんだよ――

女性の前に錆びた鉄の様な茶色の扉が突然現れた。それは音を立てながらゆっくりと開く。その奥から眩い光が溢れて来た。

――この先にお前の求める地はある。ゆっくりと平和を謳歌しな、アーサー王…いや、アルトリア――

アルトリアと言われたその人はゆっくりと手をその扉の方に伸ばす。栄光を手にした彼の英雄は、一人の女性に戻り、その光の先に……

ゆっくりと扉が閉まって消えていった。その時には大樹の前にアルトリアはいなくなっていた。

――人間も…捨てたもんじゃないってことか……。俺もそろそろ前に歩き出す時か……――

バルドがその場から背を向けて歩きだす。風が吹く。それは天高く昇る。

――フィフ……お前の願い、俺が代わりに引き受けるぞ。人が差別もなく平等に生きられる未来を……――

バルドの姿が闇の中に霞んでいき消えていった。それと同時に景色が白く塗りつぶされて全てが真っ白に染まった。

景色が再び病室に戻った。その瞬間、フェイトは凄まじい疲労感に襲われてバルドの方に倒れかけるが何とか堪えて床にへたりこんだ。

フェイト「はあ……はあ……なに、今の光景……？」

アーサー王と共いたバルド。それは何を意味しているのだろうか？全身にびっしょりと嫌な汗が噴き出てくる。

バルド「……う…くっ……」

その時だ、バルドの閉じていた眼が動き、ゆっくりと開いた。

バルドの視界に最初に入って来たのは驚いた表情をしているフェイトだった。

フェイト「バ…ルド……？」

バルド「よお……無事だったんだな…フェイト……」

フェイト「バルドぉっ！！」

フェイトが抱きつく。それをバルドは安心させる様にその頭を撫でる。

セフィリア「ねえ、ガルド……」

ガルド「……ああ、まさか意識を回復させるなんてな。それ程フェイトとの繋がりが強くなっているって事か……」

あと数日は意識は回復しないと思っていたバルドがフェイトとの『感応現象』で目覚めた。
それほどまでに二人は繋がりを強くしてきているという事だ。それはつまり、フェイトはかなり深くまでバルドの過去の記録を見てきているという事になる。予想以上の進行速度に二人は驚くのだった。

---

バルドが目覚めてから数日が経った。その間に六課の皆が毎日の様に見舞いに来てくれた。
未だに彼は入院している。本人はもう動けるから大丈夫だと言って病院から抜け出そうとしたがそれはなのは達が必死になって止め、止めにフェイトの必殺、乙女の涙が発動!!
泣きそうな顔をして止めて来るのでバルドは渋々入院を続けている。

朝が来てバルドは目を覚ます。

フェイト「あ、バルドおはよう」

バルド「おぉ…フェイトまた来t…って、な、なんだその格好は！？」

最近は目覚めると丁度良く彼女は病室に来ており毎朝挨拶を交わすのだが…今日はフェイトに挨拶をしようとしたバルドは彼女の格好を見て驚愕した。

何故なら……

彼女は今……

ナース服を着ているからだ！！！！？（。Д。；）ナンダッテーーーーー！！？

さあ、皆さんも想像してみよう！！白いナース服を着たフェイトさんを！！ミニスカから生える白い磁器の様なスラッとした御御脚（おみあし）！！見事に括れた細い腰！！その服の中から主張する見事なおっぱ…ゲフンゲフン！？そして、ナースキャップを被ってそこからサラサラの長い金髪が流れている！！

眼、眼が！？眼があぁぁぁぁぁぁ！！？眼の前にいるのは天使か！？いや、女神か！？眼、眼から血が吹き出そうです！！？衛生兵！！衛生兵は何処だ！？いや、目の前にいる！？あばあぁぁぁぁぁぁぁ！！！

作者はログアウトしました……ｗｗ

その凄まじい光景を目の当たりにしたバルドは……

バルド「（ °Д° ）ポカ～ン」

その美しさに機能停止していた。

フェイト「ど、如何かな……／／／／／／／？」

顔を赤くしてそう問いかけてくる。バルドはハッとなって頭を何度も振って意識を回復させる。

バルド「ま、まあ似合っているんじゃないか／／／／？」

フェイト「え、あ、う、うん／／／／／／ありがとう／／／／／／」

それにフェイトは顔を赤くしてモジモジする。あ、あかん…凄まじく可愛いです……。

バルド「ところで、何でその格好してんだ？」

フェイト「え？それは……」

～数時間前～

はやて「フェイトちゃん、今日も行くんか？」

フェイト「うん、そうだよ」

はやて「その格好でか？」

フェイトは普段の職員制服である。そう問われてフェイトは首を傾げる。

フェイト「え？何か間違ってる？」

はやて「あかん、あかんでぇフェイトちゃん！！怪我人の看病は…ナース服でやらんと！！」

フェイト「そ、そうなの！？」

ガ～ンッ！！と言う効果音やその様な背景が見えそうな程の衝撃を受けるフェイト。
そして、何やら勝ち誇った表情を見せ胸を張るはやて。
無い胸張っても所詮はまないｔ「ふんっ！！」ひでぶっ！？

はやて「そんなフェイトちゃんに……これやっ！！」

フェイト「こ、これって……！？」

はやて「これ着てバルドさんを看病したらええんねん」

フェイト「うん！！」

その物を受け取って嬉しそうに頷くフェイト。その彼女を見て同じく笑顔になるはやて。……ただ、その彼女には丸い耳と尻尾の様なものが見えていた……。

フェイトは『管理局の白衣の女神』の称号を手に入れた！！

～～～

フェイト「って事があったんだ」

バルド「そうか……。あとではやてにはお礼をしなきゃいけねえな」

フフフと笑うバルド。ただ、その笑みは見る者によっては凄まじく恐ろしい般若の様な顔に見えた。

それとちょうど同じ時間に……

はやて「ブルッ!?な、なんや今の!?」

リイン「はやてちゃん如何したんです?」

はやて「い、いや…なんやか凄い寒気が……」

アイネ「風邪ですか?あまり無理はしないでくださいね?」

はやては背筋が凍えそうになっていた。

バルド「ったく、あの子だぬきが……。変なこと教えやがって」

ケルベロス「いいじゃねえかよ相棒。嬢ちゃんのナース姿見れたんだからよ~ウヒャヒャヒャ!!眼福眼福~♪」

バルド「それの所為で昔の思い出を思い出しちまったがな……」

ババムート「確か、若が怪我をした時にフィフもあの恰好をしましたね……」

バルド「あれは悪夢だった……」

ケルベロス「フィフの嬢ちゃんが料理すりゃあ火事が起きる。手当てしようとすりゃあ自分が包帯でグルグル巻きになる。洗濯すりゃ全身ずぶ濡れになっている。掃除を掛ければ窓が割れる、床が吹っ飛ぶ。終いには、買い物行って迷子になってたなあ～」

バルド「あれほど家庭スキルが壊滅的な奴は初めて見たな……」

フェイト「バルド？何の話をしてたの？」

そこに朝食を取りに行っていたフェイトが戻って来た。

バルド「ああ、何でもない。気にすんな」

ケルベロス「まあ、その点に関しては嬢ちゃんは才色兼備な点で少しばかり勝ってるな～ウヒャヒャヒャ！！」

フェイト「ふえ？？？」

何の事か分からないので首を傾げるフェイト。

フェイト「バルド、食欲はある？」

バルド「ん？おお、あるぞ」

するとフェイトは料理を箸で摘まんでバルドの口元に持って来た。

フェイト「はい、あ～ん／／／／／／」

バルド「……おい、フェイト。何やってるんだ？」

フェイト「え？バルドにはこれをするのが当然だってはやてが言ってたよ？」

バルド「あんのボケだぬき畜生め……（。Д。メ）ゴゴゴ！」

バルドの背後で見えざる般若が怒りの炎でメラメラと燃えていた。

フェイトには見えてはいないが……。

ケルベロス［違う……違うぜぇ嬢ちゃん！！それは間違っている！！」

フェイト「ふえっ！？そうなの！？」

バルド「そうだ。ケルベロス、しっかりと説明してやれ」

ケルベロス［いいか嬢ちゃん？そのやり方は間違っている。料理は

……口移しでやるもんだぜ！！」

バルド「はあっ！？」

フェイト「ふえええぇぇぇっ！？く、くくく口移し／／／／／／／！？」

ケルベロス［そうだぜ譲ちゃん！！それが、嬢ちゃんが相棒を看病する時の正しい礼儀作法だあぁぁぁぁ！！！！」

フェイト「そ、そそそうだったの／／／／／／／！？」？（。Д。；）ガ～ン！？

バルド「待て、フェイト！？お前は激しく勘違いをしている！？」

ケルベロス［さあ、嬢ちゃん！！熱い口付けで相棒をしっかりと看病ｓ―「変な知識を植え付けるなこのナマクラが！！」ダンバランチャ！？］

フェイトに変な知識を植え付けようとしたケルベロスをぶん殴って外に吹っ飛ばし星に変えた。

これで、大丈夫な筈……

フェイト「え、えっと…口に…入れ……あうあぁぁぁぁ……／／／／／／」

バルド「て、手遅れだっただと！？」

フェイト「バ、バルド……／／／／／」

バルド「待て、フェイト！！それ以上やるのは本気でまず―んぐっ！？」

制止が間に合わず、二人の影は重なった……。唇が重なり合い、互いの呼吸が聞こえる。

フェイトの含んでいた料理がバルドの方に移っていき彼はそれを嚥下せざるおえない。

暫しの間、二人は重なり続けたのだった。

～～しばらくお待ちください……～～

そして、ゆっくりと離れる唇。両者の間で煌めく細い糸ができ、プツンと切れた。両者とも顔がトマトの様に真っ赤である。

フェイト「ど、どう？お、美味しかった／／／／／／！？」

バルド「お、お前なぁ……普通の看病はこんなことしねえぞ／／／／／／！？」

フェイト「ふえっ！？そ、そうなの／／／／／／／！？」

バルド「当たり前だ！こんな事するのは恋人同士くらいしかいねえだろ！？」

フェイト「こ、恋人／／／／／／／！？」

よくよく考えれば、エリオやキャロが風邪で寝込んだ時はこんな事しなかった。つまり自分は今、とても非常識な且つ大胆な事をしたという事である。

まあ、実際にリアルでもこんな事するカップルはいないと思う……。居たとしたらどんだけラブラブなんだよとツッコミを入れて見たいね。

フェイト（わ、私…何とんでもない事してるの／／／／／／！？）

バルド「おい、フェイト……」

フェイト「は、はい！！？」

バルド「もうやるなよ／／／／／／？」

フェイト「う、うん、ごめんね／／／／／／。でも、食べさせるのは……良いよね／／／／／／／？」

バルド「はあっ！？」

フェイト「何かバルドにお返しがしたいの！ねえ、お願い……」

必殺の乙女の涙！！！ウルウルと目を潤ませてお願いして来るフェイト。

フェイト「私の所為でバルドが大怪我した……。それが、とても辛いの……。自分が不甲斐なくて、苦しいの……。だから……っ！！」

バルド「フェイト……」

彼女のこの異常な看病には一種の贖罪の意味もあるのだろう。自分の力が足りなかったばかりに怪我を負わせてしまった。

その事が彼女を追い詰めているのだ。だが、それは元を辿れば……

バルド（違う……。お前が悪いんじゃねえ……。俺があの時、守り切れなかったのが悪いんだ）

実際はあの時は自分が悪いのだとバルドは思った。フェイトを守ると言いながら結局は彼女を無理に動かしてしまいその結果が彼女の覚醒に繋がったが、それでも彼女を命の危機に晒してしまったのだ。

だから、彼女には……

バルド「フェイト、もう少し近くに来い」

フェイト「え？う、うん…」

バルドの呼びかけにフェイトは頷いて近づく。その瞬間、バルドはフェイトの腕を掴んで自分の下に引き寄せた。

フェイト「きゃっ！？」

突然の事であっさりと引っ張られてバルドの上に倒れる。そのままバルドはフェイトの背に腕を回して動きを封じた。

フェイト「バ、バルド／／／／／／！？」

バルド「フェイト…お前、お返しがしたいって言ってたよな？」

フェイト「う、うん……」

バルド「なら、笑ってくれ……」

フェイト「え……？」

バルド「お前がありがとうって笑って言ってくれれば、俺は満足だよ」

フェイト「っ！！……うん、バルドありがとう／／／／／／！！」

驚いていたフェイトだが直ぐにその意味を理解して満面の笑みでバルドにそう言う。その花の様な笑顔はとても綺麗でバルドは一瞬だけ目を奪われてしまった。そして、フッと笑ったあとフェイトを降ろそうとしたが今度は彼女がバルドの背に腕を回してきた。

バルド「フェイト？」

フェイト「もう少し…此の侭でいてもいい？」

バルド「……好きにしろ」

フェイト「うん、ありがとう／／／／／／」

そうお礼を言ってフェイトはバルドの胸に頭を乗せた。心臓の音が聞こえてくる。それは、自分の鼓動と重なり合っていて混ざりあっている感覚である。

この時、フェイトも、そして、バルドも確かな幸福感に心を満たされていたのだった。

# 第五十二話（後書き）

如何でしたか？クラウドとティファの新たな力の解除と再びフェイトに発生した感応現象。因みに今回出てきたアーサー王ですが、彼女は某ゲームの人と似て非なる存在です。彼女は王の選定が正しかったとバルドが言って事でこちらは後悔もないという風に設定しました。
それにしても……後半如何してこうなった！？

フェイト「わ、私は何であんな大胆な事を……／／／／／／！？」

いや～、やり過ぎたと思ったんですがね…。修正効かないから、悩んでたんですが、このまま出しちゃえ！！って天からのお告げが……！！

あっ、痛い！石投げないで！？ごめんなさい嘘です！！なんか甘い展開を何度か出そうと思って書いたらこうなったんです！！痛い痛い痛い！？って、岩はダメだって～～！？うぎゃあああああぁぁぁぁ！？

作者は（粛清と言う名の）Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩを受けてログアウトしました。

ガルド「次回はどうなるんだ？」

ロイド「ええっと、カンペカンペ……」

シリウス「ロイド！？ボケるのは俺の役割さ！？」

ティファ「いいえ、コレットの時間ですよ？」

コレット「私はボケてないよ～～！」

ロイド「寧ろ天然……」

コレット「違うもん！天然じゃないもん！！ちょっと皆とズレているだけだもん」

クラウド「なぜ急にカオスフィールド化した！？」

カイン「放っておけ……。次回も更新は早くできるように（粛清された）作者を絞めて更新をさせます。これを読んで下さった読者の皆様、ありがとうございます。これからも精進させますので宜しくお願いします。それじゃあ、今回はこれで失礼する」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第五十三話（前書き）

五十三話更新！！

相変わらずｇｄｇｄな話が続く。もうどうなってんのやら……

ガルド「今回は如何いった内容なのだ？」

いや、それは……うん、色々さ、色々……。

では、本編をどうぞ！！

ロイド「何だそりゃ？」

シリウス「なんだか嘗てないほどに内容がｇｄｇｄしていてどう説明すればいいのか分からないみたいだよ？」

カイン「哀れだ……」

# 第五十三話

機動六課には今、途轍もなく巨大な一隻の戦艦が降りている。その全長は１５００メートルはあるだろう。
純白の体に長い胴体、それはクジラの様な姿をしていた。そして、最も驚く事は、その戦艦は人工知脳を持っているという事。目があり、その目は周囲の景色を眺めているかのように時々動くのだ。極めつけは本物のクジラの様に頭付近から潮を吹く。その巨大戦艦を一目見ようと多くの六課で働く職員が休憩がてらに見に来てたりしてる。

そして、場所は変わって六課の部隊長室……。

そこにはやてとクロノ、そして、その巨大戦艦『ホワイトホエール・Ｊｒ』に乗って来た別世界の人物、『機装国家グランディオン』の現国王のウルフ・エドワードとその秘書、サラがいた。

はやて「ウルフさん、クロノくん達を助けてくれてありがとうな」

ウルフ「いや～、間に合ってよかったよ。もう少し遅れてたら全滅だったからね」

はやて「にしても、今回持って来た戦艦、前より小さない？」

ウルフ「そうだよ。ホワイトホエールを元にして開発した『ホワイトホエール・Ｊｒ』さ。大きさの問題で搭載兵器が少ないけど機動力はこっちの方が高いんだよ」

サラ「ネーミングセンスのなさは今後議論になりそうですがね……」

ウルフ「それを言うなよ……ｏｒｚ」

落ち込むウルフ。そこに、クロノは会話が進まない事に苛立って割り込む。

クロノ「一体何なんだあの巨大な戦艦は!?そちらが造ったと言っていたが、あまりにもでか過ぎるだろ!?」

ウルフ「そりゃそうだ。だってあれは超古代ＡＩ兵器だし」

クロノ「ＡＩ兵器だって!?あのサイズでか!?」

ウルフ「そっ、人工知脳を持った私達の世界の海底深くに封印されたいた戦艦を基に造った戦艦さ。母体は太古の先人達が生み出してその危険性ゆえに封印した古代決戦兵器。言っとくけど、もう一度封印する気はないよ?目覚めたばかりだし、何より…ある力は有効に活用するのが私の信条だからね」

クロノ「あんな巨大な質量兵器は危険すぎる!!」

ウルフ「別にそれは君達の世界での話だ。そもそも、君達だって質量兵器を持っているだろうに?」

クロノ「それは…！！それは、次元世界を航行したり、犯罪者からこの地を守る為に……！！」

ウルフ「私達だってそう言った理由で使用しているんだ。そもそも、君達は自分達だけ武装して周辺の統治した世界を守れると思っているのかい？それだったら、お笑い草だな。その様な政策をした者で成功を収めた愚物は存在しない」

的を射た発言に言い返せなくなる。不穏な空気が流れ始めてきてはやては慌てて本題に移った。

はやて「ウルフさんは、これから如何するんや？」

ウルフ「ん？一応、管理局の本部に人を集めてもらって改めて同盟の話を持ち込むつもりさ。ただ、何時もこの世界に駐屯していられないけどね。まだ、国民や重鎮達の多くが納得できてないからさ」

サラ「無理もないです。管理局は質量兵器を持っていただけで武装解除を命令してきたのです。魔法もない我々にとっては唯一の矛と盾を奪われる事に繋がりますから、民も不安になります」

ウルフ「まあ、そう言った理由で前回は抗戦させて貰ったけどね」

クロノ「僕は今日初めて聞いたよ……」

一枚岩ではない管理局内部…。そういった考えを持つ上層部の者が

いても可笑しくはない。

はやて「ウルフさんは護衛をつけんでもええんか？なんやったらロイド君達を連れてったら？」

ウルフ「心配無用だよ。俺には優秀な秘書のサラがいるからね。並大抵の事は全く問題ないよ」

サラ「過信は慢心を生みます。評価して下さるのは嬉しいですが、過大評価するのは控えてください……」

ウルフ「何言ってんのさ。一人で同時に十五人の話を聞き分ける力があるじゃん」

はやて「それ何処の聖徳〇子やねん！！？」

サラのトンデモスキルにはやてがすかさずツッコミを入れる。
ニコニコとしているウルフを見てサラは溜息を付いた。

サラ「はぁ～、分かりました。ですが、面倒事になっても知りませんからね？」

ウルフ「そうそう、最初からそう言ってくれればよかったんだよ。いや～、流石、才色兼備スーパー秘書のサラだね♪」

サラ「あ、あまりからかわないでください！？」

褒められるのに慣れていないのか慌てるサラを見てクックックと笑うウルフ。

ウルフ「あそうそう、はやてには悪いんだけどウクルスとアリアとニーアやモーゼスの面倒を頼んでいいかな？明日には帰るけどその日まで此処に泊めてもらえると助かるよ」

はやて「了解や。任しとき」

アリア達の許可も貰いウルフはサラと共にクロノに案内される形で襲撃を受けて修繕作業を勧めている本局に移動して行った。

---

なのは「よい…っしょ…！！」

なのははは今、空き部屋の整理の手伝いをしている。
色々な物が詰まった段ボールを抱えて持ち上げて別の場所に移す作業を行っていた。

なのは「え～っと、これはこっちの部屋に移して……」

カイン「なのは？何やってるんだ？」

なのは「あ、カイン君」

部屋に入る前にカインと出会った。なのはが段ボールを運んでいるのに首を傾げる。

なのは「アリアちゃん達を泊める部屋の整理を手伝ってるの」

カイン「ああ、そういやあいつら此処に今日泊るんだってな」

部屋に付いたなのははは少し高い棚の上に台を置いて乗り持っていた段ボールを置こうとしたが……

なのは「う～～～ん！！」

背伸びをしても残念な事に微妙な高さの差で届いていない。脚がプルプルと震えるほど頑張っているがそれでも届かない……。

カイン「代わってやろうか？」

なのは「大…丈……夫！！」

その姿にカインは代わってあげようとしたのだが、なのははもう少し頑張った。そして、

なのは「届いたっ！！」

段ボールを棚の上に置く事に成功する。その時だ、台がグラついてなのははバランスを崩した。

なのは「きゃあっ！？」

カイン「危ないっ！！」

ギリギリカインがなのはの背後に回って彼女を抱きとめる。カインの温もりの中でなのはは硬直した。
一般人と対して変わらない体型のカインだが引き締まった筋肉が服を通して伝わって来る。
体がどんどん熱くなってきてドキドキと自分の心臓が早鐘の様に動くのが分かる。

カイン「なのは、大丈夫か？」

なのは「あっ、だ、大丈夫なの／／／／／／！！」

カインの心配する声にハッとなって慌てて返事をする。それに安心してカインはなのはを離す。
少しだけ残念そうな顔をするなのは。

カイン「ったく、無理なら代われって言っただろうに……」

なのは「もう、カイン君。私だってもう子供じゃないんだよ!?」

カイン「アホ、十九はまだ子供だ。年長者の言葉には耳を貸すのが礼儀だぞ?」

ポンポンと頭を軽く撫でられる。まだ子供扱いされているのになのはは少しばかりカチンときてしまった。

なのは「私はもう子供じゃないの!身長だって昔より随分伸びたの!!脱いだら凄いんだよ!!」

カイン「はあ!?おまっ、何言ってんだなのは!?」

なのは「私の事をまだ子供って言うなら今度一緒にお風呂に入るの!!」

カイン「ちょっと待て!!お前今、自分が何を言ってるのか理解してるのか!?」

なのは「昔は一緒に入ってくれたよね！！」

カイン「それは小学生の頃の話だろうが！？しかも一度だけだし！？第一、そこまで広い風呂なんて六課にはねえだろ！？」

なのは「む～～～！！」

サイフォス［ふむ、ではいいところを教えようか？］

そんな口論をしていた時、サイフォスが突然現れる。

サイフォス［此処から北に六キロ行った先にホテルがあるのだが、そこで泊ればいいだろう］

なのは「ふえ？ふえええぇぇぇぇぇぇぇぇっ／／／／／／／／！？」

カイン「おい、サイフォス。お前そんな情報何処で調べた？」

サイフォス［ふむ、シリウスから教えてもらったのだが？何か拙かったか？］

カイン「あんのクソ狐が……。要らん情報教えたあいつは見つけたら後で折檻だ！！」

サイフォス［なんだか知らんが、して、なのは嬢よ。友を連れてそこに行けばよかろう。そうすれば、自分の成長した姿を見せれるのではないか？］

なのは「えっ！？あ、そ、それは……ふにゃあぁぁぁぁ……／／／／／／」

今更になって自分がとんでもない事を言った事に気付いて顔を真っ赤に染めて俯いてしまった。

サイフォス［クックック、友よ、あまりなのは嬢を苛めてやるな。彼女が幾ら可愛らしくて大事だからといってあまり過保護ではいかんと思うぞ？］

カイン「なっ、サイフォスお前！？」

サイフォス［なのは嬢、友はなのは嬢の事が大事だからこそ構うのだ。その辺りは理解してやってくれ。友は、なのは嬢の事がとても大事なのだよ］

なのは「ふえっ／／／／／／／！？」

カイン「サイフォス！！」

サイフォス［クックック、では、私はこれで失礼する］

言いたい事だけ言ってサイフォスは再び虚空に消えてしまった。残されたのは気まずい雰囲気に包まれた二人だけ……。

なのは「カ、カイン君／／／／／／」

カイン「な、なんだ？」

なのは「今のサイフォスさんの言ってたのは、ホントの事、なの…？」

カイン「……はぁ～、あの馬鹿が」

そっぽを向いて後頭部辺りを掻くカイン。照れているのかその頬は若干朱に染まっている。

様子から見てサイフォスの言っていた事は本当の事の様だ。自分がまさかカインに大事に思われていたとは思ってもいなかったので心の奥からその嬉しさが込み上げて来た。

なのは「カイン君……」

カイン「な、なんだよなのは？」

なのは「ありがとう！！」

ニコッと満面の笑みをカインに向ける。その花の咲いた様な綺麗な笑顔を見てカインは心臓が高鳴る。

カイン「ふっ、この笑顔を守れるなら…俺は……」

なのは「カイン君何か言った？」

カイン「なんでもねえよ」

そう言ってなのはの頭をポンポンと撫でた。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

エリオ、ティアナ、スバルが訓練を受けているとそこにウクルス等がやってきた。

ウクルス「よお、チビッ子ども久しぶりだな！！」

エリオ「あ、ウクルスさんお久しぶりです」

アリア「お、おしゃしぶりでしゅっ！？あぅ～噛んじゃったよ～…／／／／／」

ウクルス「ぐはっ！？」

アリア「ひゃわっ！？ウ、ウクルスさん大丈夫ですか！？」

ウクルス「さ、流石はアリア…意図せずとも俺を魅了するかね……」

挨拶早々、アリアのカミカミでウクルスは吐血して恍惚した表情を見せる。

スバル「うわ～あんなに鼻血が……ねえティア、ウクルスさんは大丈夫なのかな？」

ティアナ「わ、私に聞かれても知らないわよ！？」

モーゼス「フォッフォッフォ、ウクルスはあのくらいでは死にはせんよ。それにしても、相も変わらず面白いのぉ～」

ニーア「笑い事じゃないですよ。あの馬鹿が……。こら！そこの変態！！その汚い鼻血を早く拭きなさいよ！！」

ウクルス「なんだと！？誰が変態だ！？俺は、変態と言う名の紳士だ！！」

ニーア「差して変わりないわボケ！！」

アリア「ウ、ウクルスさん、ハ、ハンカチどうぞです」

ウクルス「ア、アリアのハンカチだと……！？ぶはあっ！？」

アリア「はわわわっ！？ウ、ウクルスさん！？」

アリアのハンカチを見た途端にウクルスが先程より高く鼻血を吹きあげた。最早噴水である……。

ウクルス「ア、アリアのさっきまで持っていたハンカチ……。駄目だ、直視できんくらいに眩しい！？」

アリア「あ、あの、それよりも早く鼻血を止めましょうよウクルスさん！！」

ウクルス「アリア、付き合ってくれ！！」

アリア「はわっ／／／／／／／／！？」

ニーア「何の脈絡もなく告るんじゃないわよ、この変態ボケが！！」

ウクルス「ぐぼあぁっ！？」

アリアの肩に手を置いて真剣な眼差しで告白するウクルス。鼻血が出ている所為で恰好がつかないが……。そのウクルスにニーアのファンネルでの鋭いツッコミが炸裂し引っくり返るウクルス。

ニーア「アリア、真剣に考えたら駄目よ！？」

アリア「えっ、駄目なんでしゅか！？あうぅぅ……また噛んじゃったよ～……」

ニーア（か、可愛い……／／／／／／／／……はっ！？駄目よ、しっ

かりしなさい私!!あぁ～でも可愛い……）タラ～

アリアの恥ずかしさに頬を朱に染めて俯く姿にニーアも顔を上に向けて何かを堪える様にする。
その癒しフィールドに敵はなし!!

ウクルス「いって～…てめっ!ニーア!!ファンネルでどついて来るんじゃねえよ!!」

ニーア「アンタが変なこと言うからでしょうが!!」

ウクルス「誰が何時変な事を言った!?俺は真剣にアリアに愛を告げているだけだ!!」

ニーア「それが拙いって言ってんだろうが!!この変態が!!」

ウルフ「カッチ～ン……。もう頭にきた……。そこまでしてアリアと俺の仲を裂こうってか?いいだろう、ならば戦争だ!!!」

ニーア「上等よ、今日こそアンタのそのドロドロに融解した腐った脳ミソ蒸発させてやるわ!!」

両者の雲行きが怪しくなる。周囲にも見える程の火花が二人の間で激しくぶつかり合っている。
その状況を見てあたふたするアリアとホッホッホと愉快そうに笑いながらそれを眺めるモーゼス。
自分達は如何すべきなのだろう?止めるべきか?等と真剣に考える

ＦＷ陣。
そこに、モーゼスが何かを思い出したのかティアナに近づく。

モーゼス「そう言えば、お主は確か…ティアナ・ランスターじゃったかの？」

ティアナ「え、は、はい。そうですけど……？」

モーゼス「ふむ……」

モーゼスはティアナの姿を上から下までジッと見る。

ティアナ「あ、あの……私に何か…？」

モーゼス「両腕の筋力のバランスが少々偏っておるな。それと、軽い疲労の色が見えるぞ。あまり無理はするでないぞ？」

そう言われてティアナは驚いた。見ただけで筋力のバランスや疲労の具合などを見抜かれたのだ。

モーゼス「若い内は少しばかり無理をしても良いじゃろうが、極端な運動は逆効果じゃぞ？」

スバル「ティア？まさかまた知らない所で無理な事してるの！？」

ティアナ「ち、違うわよ!?ちゃんとなのは隊長やフェイト隊長の考えたメニューだけをやってるし、そういう時はロイド達に無理をしない程度まで見てもらってるわよ!!」

エリオ「モーゼスさんは、見ただけで相手の状態が分かるんですか？」

モーゼス「フォッフォッフォ、これも長年の経験の成せる業よ。ティアナ・ランスター、お主……将来化けるぞ？」

その言葉に一番驚いたのは喧嘩の真っ最中のウクルスとニーアだ。さっきまでの険悪な雰囲気が一気に霧散しティアナを観察してきた。

ウクルス「へぇ～、モーゼスが褒めるなんて久しぶりだな？」

ニーア「そうね、前は……アリアが軍に入る時かしら？」

エリオ「モーゼスさんは普段は褒めないんですか？」

ウクルス「まあ、褒める時は褒めるが…相手を見ただけでそんな風に言うのは中々ないぜ。モーゼスの勘は当るからな、良かったじゃねえか」

スバル「ティア凄～い!!」

ティアナ「そ、そんな事ないわよ!!」

ニーア「まっ、元帥からのお墨付きを貰えた程度に頭の隅に置いて

おけばいいんじゃない？」

アリア「ティアナお姉ちゃんは凄いでしゅ！？あぅ～～また噛んじゃったよ……／／／／／」

ウクルス「ぐはっ！？さ、流石はアリア……恥じらう姿はマジ妖精！！」

ニーア「うっさいこの変態ボケが！！」

鼻血を吹いて恍惚とした表情をするウクルスをぶん殴って撃沈させた。

それを見てあたふたしながらも彼の看病をするアリア、それを見てフォッフォッフォと和やかに笑うモーゼス、「いっその事、海に沈めるべきか？」等と物騒な事を言い始めるニーア。個性豊かなグランディオンの元帥にＦＷ陣は苦笑いするしかなかった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

ウルフが同盟の件の話を終えてウクルス達と国に帰って数日が経ち、怪我から回復したヴィータが復帰した。同じ頃にキャロも復帰を果たしたのだがこちらはリハビリの為に暫くは訓練は控えさせることになった。

相変わらず使徒の情報が手に入らず管理局も必死に行方を捜索しているがそれらしき情報は得られずじまいだった。

今日もＦＷ陣の訓練を終えたなのはは自室に戻った。

なのは「ふぅ～」

そのまま、ベッドに仰向けに倒れる。最近はティアナ達も実力をメキメキと上げてきており教官としては嬉しくもあるが相手をするのが大変になってきていた。

時々、カイン達に相手も頼んでいるが彼らもティアナ達の成長を感じているようである。

ふと、懐からペンダントを出して開く。そこには、幼い自分とカインが写っている。

なのは（カイン君……）

幼いころに助けてくれた人。今、ともに戦ってくれる大事な人。少し前に見た謎の光景…そこにいた人。沢山の人を斬り倒していた彼は今とは違って何の感情も持たない眼でそこに映っていた。

なのは（知りたい……カイン君の過去を！）

最近その想いは強くなってきていた。なぜあの映像の彼はあれほど

に冷徹な瞳をもっていたのか？
彼に何があったのか？それが知りたいとなのはは思った。その時だ
……

なのは「うっ、く、ああ…あああああああぁぁぁぁ！？」

突如として頭に激しい激痛が奔った。脳を直接何かで突かれている
様な云い様のない激痛になのはは頭を押さえて蹲る。
吐き気もしてきて呼吸もまともにできない。水を求める魚のように
口を動かすも酸素が上手く取り込めず意識が薄らいでくる。

景色が歪み始めてなのはの意識はそこで途絶えた。

気がついた時、彼女は何処かの森の中に立っていた。

なのは「ここは……？」

見たこともないところだ。周囲から鳥の囀りや虫の歌が聞こえる。
このまま立っているわけにもいかないので彼女は歩き出した。兎に
角、ここが何処だかを確認するのが先決だ。
暫く歩き続けると、先の景色が明るくなり始めてきた。出口かと思

いなのはは駆け出す。
森を抜けた瞬間、彼女を待っていたのは美しい街の光景だった。

なのは「わぁ……」

思わず声が漏れる。自分がいるのは街全体が見渡せる高い崖の頂上だった。
眼下には人らしき姿が見える。そして、その光景を眺めている者がもう一人いた。自分のいる少し先に腕を組んで立っていて純白のコートで身を包んでいる人だった。その人に話しかけようとしたが…

???「ここにいたのか、剣帝」

なのは「ふにゃ!?」

背後から突然声が聞こえたのでなのははビックリして軽く飛びあがった。あわてて振り返るとそこには同じくコートを身に纏った人がいてその背には黒く巨大な鎌が背負われていた。

声からして男性だろう。

剣帝「何の用だ、死帝?」

死帝「神々からの伝言を預かっている。神人(みと)族が集り次第、街にいる人間を殲滅しろだそうだ」

剣帝、死帝、そして、神人族（みと）。その単語はなのはが随分と前から聞かされてきた言葉だ。
目の前にいるのはその人達でこれはその彼らの過去なのか、となのはも気づいた。

剣帝はそれに返事もせず眼下の街を眺める。平和な風景だ。それなのに彼らはこれからこの街を、人を殺す気なのだろう。
なのははそれを止めさせようと彼らに手を伸ばすがそれは彼らの体を通り抜けてしまった。

これは過去の記録、触ることも話しかけることもできない。

死帝「人間は愚かだな。信仰心を忘れ己が自身が神になったと勝手に思い込み、生命の尊厳を忘れるとはな」

剣帝「仕方ないだろう。それが人間の最も愚かなところだ。人間を一言で例えるなら…飽くなき欲望、か……」

？？？「そして、神々にすら喧嘩を売るアホの集団っときたもんだよな、これが～」

？？？「悲しいですね。元は我々の主の下から生まれおちた一つの存在でしたのに、その感謝の意味を忘れるとは……」

剣帝「樹帝に癒帝か……。随分と早い到着だな？」

樹帝「俺らだけじゃないよ。もうじき闇帝と光帝も来るし、明日に

は水帝と風帝も来るんだよな、これが～」

癒帝「後方支援は私と後から来る風帝に任せてください。樹帝は持ち前の防御を使って先陣を切ってください」

樹帝「ほいほい～了解っと。剣帝、今日はよろしくなんだよな、これが～」

剣帝「別に俺一人でも十分なんだがな……」

癒帝「そういう訳にはいきません。貴方は私たち神人族（みと）のリーダー、もしもの事があっては主に申し訳がありません」

樹帝「つ～かさ、あいつ等なんで俺達作ったんだろうな？その気になりゃ世界を一から作り直せるのに態々面倒な手順選ばなくても良かったんじゃねと思うんだよな、これが～」

話に付いていけないなのは。人が神への信仰を忘れる？それに人が神になり替わろうとした？
混乱する頭でなんとか整理していると樹帝と呼ばれた男がそう問いかけている。
それに答えたのは背に大鎌を背負った人物、死帝と呼ばれている者だった。

死帝「ふむ、神とて万能ではない。今蔓延る全ての人類を相手に無事で済む筈もない。それに奴らは既に神殺しの武具を手にした。我々でなければ多くの神々が死に世界が崩壊する」

樹帝「結局はさ～、俺達は捨て駒って事だよな～」

剣帝「お喋りはそこまでだ。行くぞ……」

剣帝の手に純白に輝く大太刀が現れる。そして、彼等は街に向かって飛んで行った。それと同時に街から警報が鳴り響き彼等に向かって幾つもの砲撃が飛ぶ。

彼等はそれを避けて不思議な術式を展開、街に雷は落ち、大地から巨大な杭が襲いかかる。

瞬く間に街は火の海に呑まれ黒煙がそこかしこで立ち昇った。

剣帝「我は剣帝！！死を恐れぬ者は掛かってこい！！」

剣帝が咆え一人先行して大太刀を振るう。それだけで数人の人が一瞬で斬り伏せられる。

雷が天から落ち周囲を焼き尽くす。一斉に飛んでくる銃弾をその大太刀だけで両断し弾く。

住民「剣帝だ！！剣帝の奴が来たぞ！！」

住民「悪魔の使いめ！！死ねぇっ！！！」

多方向から同時に振るわれて来る剣戟を剣帝はたった一振りで武器ごと人も両断した。

剣帝「神から貰ったこの太刀は貴様ら如きのナマクラで折れるものか！！神剣マクワフィティル、その真価見せてやれ！！」

刀身が神々しい光に包まれる。その刀身に手を添えて先まで撫でる。すると、さらに光が強くなり視界を白に染めていく。

剣帝「終の太刀、月風！！」

虚空に斬り上げを繰り出す。その瞬間、刀身からビルほどの高さにまで及ぶ巨大な三日月状の斬撃が放たれ、大地ごと人々を消し飛ばした。

一振りだ……。たった一振りで百人以上の人が一瞬でこの世を去ったのだ……。

剣帝「俺達が悪魔なら…お前達はそれ以下の屑だ……。人は神にはなれない。なるべきではないのだ！！！」

天から銀の雷が街に落ちる。

そして、大地より白銀に輝く龍が昇っていく。直後、天から巨大な閃光が奔って街を飲み込んだのを最後に景色が歪み、映像が途切れた。

なのは「ん……んぅ……」

意識を回復したなのは、初めに額に冷たい感覚があった。手に取って見るとそれは冷たく冷やされたタオルであった。
そして、何時の間にか自分に布団が掛けられており日も傾き始めて、太陽は沈み始めていた。

カイン「目が覚めたか？」

その声に初めてなのははカインがいたのに気が付いた。彼は、何かの料理をしていて、それを一度中断しなのはの隣に来た。

なのは「カイン君、私は一体……？」

カイン「俺が来た時には高熱にうなされて気を失ってたぞ？全く、焦ったぞ……」

なのは「ご、ごめんなの……」

カイン「何でなのはが謝るんだよ?最近疲れてるんだよ。無理しないで今日はゆっくりしな」

そう言ってカインはなのはの頭に手を乗せようとした。だが、その瞬間、なのはの体がビクッと震え勝手にその手から逃れた。

なのは「え……?私、如何して……?」

カイン「なのは……?」

自分でも訳が分からず戸惑う。この時、一瞬だけなのはの脳裏に人を斬ったカインのあの姿が映りそれで彼女の体が勝手に動いたのだ。だが、何故、避けたのだ?カインは自分にとって頼りになる、いや、信頼できる、いや、大切な人だ。そんな彼を傷つける様な行動をした自分に激しく戸惑いなのはは俯く。

微妙に重くなった空気を変える様に調理タイマーが時間を知らせる為に警報を鳴らす。

カイン「おっと、忘れてた!!」

なのはの傍を離れて火を止め再び何かを作る作業に移る。そして、持って来たのは御粥であった。

カイン「今日はこれ食ってゆっくり休め」

なのはがそれを受け取り食べるのをカインは隣で座って見ている。

なのは「ごちそうさま」

カイン「おう」

食べ終えた食器をカインに渡す、その時、扉が開いてヴィヴィオとフェイトが入って来た。

ヴィヴィオ「ママ！！」

なのはが起きているのを確認した途端、ヴィヴィオはなのはに抱き付く。フェイトもなのはが熱を出してうなされているのを聞いて心配していたが、目を覚ましたなのはを見てホッとした。

カイン「フェイト、俺は用があるから後は頼むな」

フェイト「え？カイン何処に行くの？」

カイン「ちょっと野暮用さ…」

ヴィヴィオ「パパ行ってらっしゃーい！！」

カイン「ああ、行って来る」

そう言って突然カインは部屋から出ていった。

なのは「カイン君……」

フェイト「なのは、如何したの？」

なのは「フェイトちゃん、私、最近変な夢を見るの……」

そこでなのははフェイトに自分の見てきた夢や頭の中で映し出される映像を語る。

フェイト「人と戦う神人族（みと）？」

なのは「うん。それが何で私に見えるのか分からないの」

怖いのだ。何故自分にあのような光景を見る事が出来るのか……。

自分に何を求めているのか……。

自分に一体、何を語っているのか……？

ヴィヴィオを抱きしめながらなのはは悩むしかなかった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

〜？？？〜

パオラ「トールスが死んだわ……」

フォスティル「そうか……」

とある空間に使徒達は集まっている。そして、仲間である第十の使徒トールスの死をパオラが告げた。

アグリス「弱い奴から死ぬ。それは、戦場じゃ当たり前だ」

ナーガ「アグリス!!」

？？？「よせ、ナーガ。あいつはああいう性格だ。それに、ああは言ってるが内心怒っているだろうよ」

？？？「あいつはあの方に忠実で真っ直ぐな奴だった…やっぱ、そういう奴ほど先に逝っちまうのか……」

？？？「管理局の人間……許せないですね」

？？？「今度は俺達が行くか？」

パオラ「あたしが行くわ……」

それに一番に出たのは第三の使徒パオラ。その声は普段通りであるが、その背には怒気が溢れており彼女が怒りに震えているのが容易に分かった。

パオラ「あたしがあの時一緒に戦えばあいつは死ぬ事は無かった。その罪滅ぼしも兼ねてやるわ」

？？？「それなら、私も行きましょう」

？？？「オレッチも行くぜ！！」

？？？「では、俺も行こう……」

パオラ「デミテル、アカギ、オルマ…アンタ達もやる気なのね？」

第三の使徒、第十二の使徒そして第十五の使徒のデミテル、オルマ、アカギが頷く。

ナーガ「皆さん、油断しないでくださいね？」

パオラ「当然よ。やるからには…全力でいかせてもらうわ！！」

パオラ達がそう話し合っていた頃、ジークは一人黙々と鍛錬をしていた。
日に日に強くなっているシグナムに負けていられないと彼も躍起になっている様だ。

そこに、

？？？「よぉ、随分と熱心に鍛錬してんなぁ？」

ジーク「ガイルか……」

ジークに話しかけて来たのは第十七の使徒ガイル。

ガイル「なあ、ジークよぉ一つ聞いてもいいか？」

ジーク「……なんだ？」

ガイル「シグナムってのはいい女なのか？」

ジーク「……貴様……」

ガイル「おっと、別にそういう意味で言ってんじゃねえよ。ただ気になっただけだって」

ジークから殺気が飛んで来た。それをガイルは手を振って否定するがその顔はヘラヘラ笑っている。
如何もこの男は信用ならない。

ジーク「何が目的だ……？」

ガイル「別に何もねえって。ただ、聞きたかっただけだよ。って、如何なんだ？」

ジーク「……彼女は、俺にとっては理想の方だ。俺から言えるのはそれだけだ……」

ガイル「ふ～ん、そうか。……中々に良さそうって事か」

ジーク「何か言ったか？」

ガイル「いいや～。何にも言ってねぇぜ？あぁそうだ。ジークよぉ、一つだけ言っておくぞ～」

ガイルはジークの傍を通り過ぎざまに軽く耳打ちする。

ガイル「もし、裏切ったと思ったら俺が殺してやるぞ」

ジーク「……」

そう言い残して、バ～イとジークに背を向けたまま手を振って去っていった。

彼は、自分がシグナムと時々会っているのを知っている風だ。

ジーク「もう、時間がない、か……」

シグナムとの決着は如何やら今度しかない様だ。もし、負けたらその時は彼女に従う。

もし勝ったら……

……勝った時には如何する？

ジーク「む……？」

よくよく考えると、彼女と約束を交わした時、勝った時如何するか決めていなかった。かといって自分がシグナムに何も求めている訳ではない。今更になってそこに気が付いたジークは首を傾げる。

はて、自分は勝ったら如何すればいいのだろうか……？う～～む……っと唸りながら首を何度も捻って考えるジークだがこれといって

名案は浮かばない。如何したものか……？と悩んでいると…

エリス「ジ～～ク♪」

クラレンス「遊びましょ～クスクス♪」

両肩に軽く何かが乗っかる柔らかい感触と同時に声が聞こえた。鈴の音を鳴らす様なコロコロとした笑い声は最早馴染みの二人組のだ。

ジーク「降りろ……肩が疲れる」

エリス「むっ！？それって私達が重いってこと！？」

クラレンス「ひっど～い！！私達は重くないもん！！」

ジーク「肩の上で暴れるな……」

ジークの失言にプンプンと怒って抗議をする二人。
なんとか宥めてやっと降りてくれたのはそれから一時間以上経った後だった……。

エリス「もう、ジークは女性に対するマナーがなってないよ！」

ジーク「そうなのか……？」

クラレンス「そうだよ、女性には体重の話の類は禁句なんだからね？分かった？」

ジーク「……善処しよう……」

半分分かっている様で分かっていない様な返答。呆れた顔する二人を見てふとジークは聞いてみる事にした。

ジーク「所で一つ聞きたい事があるのだが……？」

エリス「体重の話は駄目だよ？」

ジーク「まだそのネタを引っ張るのか…！？違う……烈火の騎士の事でだ」

シグナムの事で聞きたい事？それに首を傾げる二人。そこで、今自分が悩んでいた事を説明すると…エリスとクラレンスは目を輝かせてとんでもない事を言った。

エリス「それじゃあ、ジークはシグナムと結婚してよ！クスクス♪」

ジーク「なっ、なんだと！？」

クラレンス「それで私達は、養子としてシグナムとジークの子供になる～！クスクス♪」

予想外の答えにジークは戸惑いを隠せない。師である彼女と結婚だと!?全く想像できない領域の為に頭痛がする。額に手を当てて今更ながらに後悔した。……話す相手を間違えた、と……。

エリス「早速シグナムに条件を突き付けないとね～クスクス♪」

クラレンス「シグナムの真っ赤になった顔が目に浮かぶよ～クスクス♪」

ジーク「待て二人とも……もう、彼女に会うのは無理かもしれん」

エリス「え……如何して？」

クラレンス「なんで!?なんでなの!?」

ジークは先程ガイルに警告された。もし、無暗に彼女に近づけば自分は此処にはもう戻れない。それどころか、粛清を受けて決着を付けれずに殺されるかもしれない。その事を二人に語ると嫌な顔をした。

エリス「私、ガイルは嫌い……」

クラレンス「いっつもニヤニヤしてるし、それに私達を見る目付きも何か厭らしいもん」

ジーク「もう会えない訳ではないが、今度は烈火の騎士に決闘を申

し込む時だけしか会えん。次に会ったらその時は、この戦いの決着がつく……」

これで最後だ……。これで勝負がつかなければ、如何なるか分からない。だが、彼女との戦いを全力で楽しもう。
その思いだけは変わる事はない。確固たる意志を持ってジークは最後の決闘の準備をする為に再び鍛錬を再開した。

ディグ「く、くくく……トールス。お前の死は無駄ではなかったぞ！！」

研究室で籠っているディグの笑い声が室内に響く。彼の前にはトールスのデバイス、『雷電』がバラバラになった状態で置かれている。
それからはディグにしか分からない真実が隠されていた。

ディグ「もう直ぐだ……。もう直ぐで俺はなれる……！！完璧な存在にして最強の存在…『イモータル』に！！！」

長年求めてきた真実を得れる事にディグは笑いを抑える事が出来な

い。

その笑いは暫くの間その部屋から聞こえなくなる事は無かった……。

# 第五十三話（後書き）

カイン「ほんっとにgdgdしてるな今回……」

否定できん……orz

エリオ「モーゼスさんは凄いですね。見ただけで相手の力量などが分かるんですね」

まあ、本人も言っていたが長年の勘からくるものです。しかもこれが中々に当たる。

ガルド「ティアナが褒められたが、あれは何かの伏線か？」

さあね～。それは何時か分かるでしょう。ってか、これを回収するのは何時になるのか分からん……orz

クラウド「なんだか雲行きが怪しいが……次回はどうなるんだ？」

次回は使徒再び……！！な回にしようかと思っています。一応、パオラの戦闘能力とかは出来上がったんですが……やべぇよ、超やべぇよ…。

カイン「何が如何ヤバいんだ？」

それは次回のお楽しみ！！え～、これを読んでくださる読者の皆様。こんな駄文を読んでくださってありがとうございます！！
これからも精進しますので宜しくお願いします。では、本日はこれで…さらばなのですっ！！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第五十四話（前書き）

五十四話更新！！

読者の皆様、お待たせして申し訳ありません！！

……え？待ってないって？ですよね～……ｏｒｚ

今回は、またもやミッドに使徒襲来の巻です！！

カイン「やれやれ、一体今度はどんな使徒が来るのやら……」

まあ、それは見てのお楽しみ！！では、本編をどうぞ！！

パオラ、こえぇよ、パオラ……

パオラ「なんか言った……？」

おにばｂ――（血がついてて読めない……）

１０／９（日）アカギの魔法名を若干変更しました。

サーペントは蛇って意味だったね……間違えた！！

# 第五十四話

入院して一週間が経ちクラウドは退院し早速リハビリを兼ねた訓練を開始する。
しかもその訓練法は……

クラウド「ターゲット…照準(ロックオン)！！……破壊する」

バスターモードになった銃でシュミレーターで出したイノセントを攻撃する。
その砲撃は寸分狂わず目標を撃破する。その彼に背後から銃撃する別の一体をそのまま体を反転させてもう一発撃って撃墜する。そして、ビームサーベルに持ち替えてイノセントの集団に飛び込み斬り伏せた。

スバル「す、凄い……」

ティアナ「ひ、左手だけで……！？」

そう、彼は今の訓練で一切右手を使用していないのだ。彼曰く、「

感覚を取り戻す一番手っ取り早い方法」だそうだ。だが、この戦い方は非常に危険である。訓練だとしても治りたての左手しか使わないのはもしもの事があった時に再び大怪我を負うかもしれないのだ。その光景に驚いているスバル達を余所にクラウドは全てのイノセントを撃墜した。

クラウド「任務完了…。……ふぅ、やはり駄目か」

ＦＷ陣には今の動きは完璧な動きに見えたのだが、クラウドからすれば駄目なようだ。
彼は、そう自分の動きに低い点数を付け訓練を終えて戻って来た。

キャロ「ク、クラウドさん、大丈夫なんですか！？」

クラウド「怪我自体は別にどうでもいいが、やっぱり駄目だな。あの動きじゃ２０点だ」

ティアナ「あ、あの動きで……２０点……」

クラウド「軍人ってのはそんなもんだ。あれじゃ、本物の戦場で入って一分と持たない」

エリオ「クラウドさんは、今迄で一番つらかったのは何ですか？」

クラウド「そうだな……。強いて言えば超ド級大型移動要塞を三つ同時に相手した時は流石に骨が折れたな」

想像でえげつない要塞を思い浮かべてしまった。単騎でその三つを相手するクラウドが思い浮かんだ。
せ、戦場とはそこまで厳しいものなのか！？とＦＷ陣はまだ見ぬ本物の戦場に身震いする。

クラウド「まあ、お前達はそういうのには縁がないと思ってもいいだろう。質量兵器を持った者同士の生死を分けた戦場を知るのはお前達はまだ若過ぎるからな……。さて、と運動したし腹減ったからちょっと食堂行って来る」

エリオ「あ、あのクラウドさん！！と、父さんは今どうしていますか！？」

クラウド「俺が退院した頃にはもう一般病室に移されてたぞ～」

食堂に向かうクラウドはそう言って立ち去っていった。バルドがもう少しで退院できる。
それを知ったエリオとキャロは大いに喜び互いの顔を見て笑顔になる。

その頃……当の本人は……

フェイト「はい、あ～ん」

バルド「……フェイト。もうそれは止めようぜ」

未だにフェイトからあ～んをしてもらっていた！！

なんだと？（ ゜Д ゜；）！？

フェイト「駄目だよ、バルド。バルドはまだ病人なんだから私がしっかりと看病するんだもん」

バルド「いや、だもんっじゃねえよ！俺はもう一般の病人と変わりねえし、第一もう自分で飯食える！！」

フェイト「嫌だ！私はまだ看病するもん！」

バルド「お前さ…一つ忘れている事があるぞ」

フェイト「え？」

バルド「此処は一般病室で他に患者がいるってことだ……」

フェイト「ふえ……？」

そこで気が付いて辺りを見回すと、孫を見る様な目でホッホッホと朗らかに笑う御老人、懐かしいそうな目で見ている夫婦、羨ましそうに見ている男性と多々あった……。

フェイト「は、はうあ～～／／／／／／！？」

バルド「だから言っただろう……」

今更気付いて顔を真っ赤にして最早人語では無い何かを声に出すフェイトを見てバルドは額に手を当てて溜息をついた。

バルド「ったく、俺はもう問題ねえのになんでまだ入院しなくちゃいけねえんだ……」

ケルベロス《そりゃあ相棒の怪我は人間にしちゃ大怪我どころの騒ぎじゃねえからだと思うぜ？ウヒャヒャ！！》

バルド《面倒臭せー……脱走すっかな……》

バハムート《若、そんな事すればフェイトがまた泣きますよ？》

バルド《……面倒くせー……》

ケルベロス《相棒は嬢ちゃんに弱いねぇ～ウヒャヒャヒャ！！》

バハムート《後少しで退院なんですから、もう少しの辛抱ですよ》

そう一人と二振りの剣は念話で会話をする。本当に人間ってのは難儀なもんだな、とバルドは心の中で思い再び溜息をついたのだった。

数日後、バルドもようやく退院できて六課に戻って来た。

医者の方はまだだと言っていたのだがバルドがＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩと言う名の脅はｋ…エフンエフンッ！！！をして許可を貰ったのだ。帰って来て早々シリウスに「入院中は如何だった？」と聞かれると彼は「あれは悪夢以外の何物でもねえ……」と返したとか……。

スバル「う～ん！！やっと休暇を貰えたよ～」

ティアナ「最近は特に忙しかったわね～」

そんなある日、スバル達は休暇を貰い街に出た。復興は進んでいる様で最近は警備も強化されている。

まあ、その所為か不審人物扱いされて職務質問をされる件が増えているらしいが……。

エリオ「でも、父さん達は忙しそうでしたけど、僕達は休んでよかったんでしょうか？」

ティアナ「休める時にしっかり休むべし」

スバル「ティア、それ何？」

ティアナ「ティファさんに言われたのよ。働く時はしっかり働いて休める時は思いっきり羽を伸ばせってね」

スバル「ティファさんはそんなこと言ってたんだ～」

そして、エリオとキャロはそこから別行動で別れた。街中を買い物をしながら歩いていたティアナとスバルはそこで工具店から出てきたロイドを見かけた。

スバル「ロイド～！！」

ロイド「おっ、スバルにティアナか。休暇貰ったんだってな？」

ティアナ「ロイドは何してるのよ？」

ロイド「俺は工具買いに来たんだよ。スバル達は買い物か？」

スバル「うん、そうだよ！ティアナを着せ替えしようかなぁって思って……あだっ！？」

ティアナ「私は着せ替え人形か！？」

スバルのその言葉に素早くティアナはツッコミをいれる。
時間もいい頃なのでスバルとティアナはロイドも連れてレストランに入る。

スバル「ロイドは手先が凄い器用だよね？」
ロイド「ああ、それはガキの頃から親父に鍛えられたからな。気が付いたらこん位になってた」
ティアナ「ロイドのお父さんってどんな人なのよ？」
ロイド「親父は、ドワーフなんだぜ」
スバル「ドワーフ？それって……誰？」
ティアナ「お伽噺とかで出てくる力持ちで背の小さい人の事よ。…でも、ロイドって背が高いわよね？」
ロイド「俺はドワーフじゃない。親父とは血も繋がってないし、まあ育ての親は親父だけどな！」
スバル「？？？？？？？」
ティアナ「如何いう事？」

ロイド「まあ、それはまたあとで教えるよ」

そこに丁度良く料理も来たので三人は食事を始める。相変わらずスバルの隣には皿の山が出来上がる。
それをティアナもロイドも苦笑いして見ているのだった。

レストランから出たティアナ達は街中を再び歩き出すと……

ロイド「ん？」

スバル「如何したのロイド？」

ロイドが急に立ち止まり腰に付けた剣に手を伸ばす。その身に纏う空気も何処か張りつめたものに変わる。

ロイド「二人とも下がれっ！！」

ティ・ス「「っ！！」」

その声にティアナとスバルは彼の近くにまで飛び退く、それと同時に先程二人がいた場所に上から何かが物凄い勢いで着弾し大量の砂塵が舞い上がる。

突然の衝撃に周囲の民間人も驚いてそこに集まり様子を窺う。

ティアナ「な、何なの！？」

スバル「ロ、ロイド！今のって……！？」

ロイド「ティアナ、スバル二人ともすぐに周辺の人を避難させるんだ！！」

？？？「その必要はないわ。あくまで用があんのはあんた等だからね」

砂塵の中から人が出てきた。藍色の髪を肩まで伸ばした女性でその身に纏っているのはスバルとギンガのバリアジャケットを足して二で割った様なものだった。

ロイド「あんた、何者だ……」

パオラ「あたしは第三の使徒、パオラ。『赤き剣聖』、そして、機動六課の人間、あんた等を潰しに来たわよ…」

ティアナ「使徒！？」

？？？「おいおい、パオラ随分な登場の仕方じゃねえか」

事態は更に悪化する。パオラの後に上空から三人が降りてきた。

パオラ「別に、派手なら何でもいいじゃない」

ロイド「新手か！？」

アカギ「第十五の使徒、アカギ……」

オルマ「オレッチは第十二の使徒オルマ！！」

デミテル「第二の使徒、デミテルと申します」

更に三人もの使徒が増える。まさかの四人もの使徒が同時に現れるとは想定外の事態である。

スバル《ティ、ティア！！ど、如何しよう！？》

ティアナ《兎に角、なのは隊長達に連絡をしないと！！》

ロイド「二人とも、周りの人を連れて逃げろ……！！」

スバル「えっ！？」

デミテル「さて、パオラ。直ぐにカタを付けるとしましょうか……」

ロイド「皆逃げろ！！」

その叫びと共にロイドが剣を抜いて前に駆け出すと同時に使徒の四人が動きだした。

デミテルが虚空から人と同サイズの巨大な車輪の様な物を取り出してそれを投げて飛ばしてきた。高速回転して来るそれをロイドは弾き飛ばす、後方のビルに激突し粉塵が上がった。その後方からオルマが双剣を持って斬りかかる。それを受け止めて弾き横に一閃するが後方に飛び退いて回避される。

そこにアカギがサーフボードに乗って魔力弾を複数展開して飛ばしてきたそれを全て弾き飛ばしたがそれは全て周辺の建物にぶつかり爆発を起こす。パオラが拳を振りかぶり打ち出す。空気を振動させる様な拳をロイドは剣をクロスして受け止める。ぶつかった瞬間周囲に強烈な風圧が広がり窓ガラスを割った。

それに弾かれる様に街の人が逃げ出す。その中で四人とぶつかり合うロイド。

ティアナ「スバル！！急いでエリオとキャロにも連絡して合流するわよ！！」

スバル「え！？ロイドは如何するの！？」

ティアナ「悔しいけど、私達だけじゃ勝ち目がないわ！！」

今、あの中で戦うのは寧ろロイドの足手纏いにしかならない。悔しいが此処はロイドに任せてなのは達に連絡せねば。

スバルとティアナは四人と激闘を繰り広げるロイドを何度か見ながら

らもエリオとキャロと合流すべく市民を誘導しながら撤退した。

デミテル「パオラ、敵が二人逃げた様ですが？」

パオラ「あたしが仕留めるわ」

ロイド「させるｋ―「お前の相手はオレッチ達だ！！」くっ！？」

パオラが撤退したティアナとスバルを追いかける。ロイドはそれを止めようとしたがオルマに阻まれてしまった。

ロイド「くそっ！！」

オルマ「剣聖！！お前とオレッチの剣術、どちらが強いか勝負だぁぁぁぁ！！！！」

デミテル「剣聖相手に一人では危険です。私達も行きます」

アカギ「了解した……」

高速で剣を交えるロイドとオルマ。そこにデミテルが車輪を飛ばしてくる。ロイドはオルマの剣を弾いてその隙に後方に飛び退き回避、そこにアカギがサーフボードで高速に動きながら魔力弾を一斉に放つ。

ロイドの周辺に着弾し砂塵が舞い上がる。その煙を破ってオルマが首に目掛けて剣を振るうがロイドはバク転の要領でそれを回避した

と同時にオルマの顎を蹴りあげる。直ぐに着地して地面を蹴り距離を詰めて斬りかかるがオルマは体勢を立て直して受け止める。

デミテル「ブリッツコーラル！！」

デミテルの車輪が魔力を帯びて高速回転して飛んでくる。ロイドは、オルマの剣を弾き闘気を当てて吹っ飛ばすと直ぐに体の向きを変えてそれをクロスした剣で受け止める。

ロイド「ぐっ！！」

アカギ「シャークシューター！！」

アカギからサメの形をした魔力弾が飛ぶ。それは空中を泳いでいる様な動きでロイドに接近する。
ロイドはデミテルの車輪を体を捩じって僅かの差で回避して飛んで来たサメの魔力弾を斬り伏せる。

ロイド「魔神剣・双牙！！」

二つの斬撃がデミテルとアカギに飛ぶがデミテルはそれを自身の武器の車輪を盾にして受け止めアカギは高速移動して避ける。

ロイド「くそ……。やっぱつえーな……」

だが、このまま此処で戦う訳にはいかない。ロイドはティアナ達の去った方に向かって駆け出す。
その後をオルマが追い、二人は剣を高速で交えながら路上を駆ける。
アカギのサーフボードに相乗りさせて貰ったデミテルが時折り上空から車輪を投げてくるがそれをロイドは体を捻って避け、又は弾き飛ばす。続けてアカギが再びサメの魔力弾を飛ばしてくるがロイドは地面を蹴ってビルの側面に足を付けてそこから一気に飛び上がりサメの魔力弾を紙一重で避けてアカギに向かって飛ぶ。

ロイド「はあっ！！」

アカギ「くっ！？」

予想外の事にアカギは回避が遅れてデミテルが防御壁を展開した。
それに向かってロイドが両手の剣を同時に振り下ろした。
衝撃で二人は防御魔法ごと吹っ飛ばされ反対のビルに突っ込んだ。

オルマ「お前ぇぇぇ！！」

ロイド「獅子戦吼！！」

オルマ「うおっ！？」

着地したロイドに向かってオルマが斬りかかるがそのから素早く体を捻ってオルマの剣を回避して相手の懐に潜り獅子の闘気を当ててふっ飛ばした。ロイドはその三人を置き去りにしてティアナ達を追ったパオラを追跡する。

オルマ「いって〜〜！！あいつやっぱつえ〜な！！」

デミテル「追いますよ！！」

アカギ「……分かっている」

そのロイドの後を直ぐに三人は追い、再び移動しながらの激しい攻防戦が始まった。

――――――――――――――――――――――――――――

パオラ「逃がさないわよ！！」

ティアナ達に追いついたパオラが二人の前に立ち塞がった。

スバル「ティ、ティア……！！」

ティアナ「エリオ達と合流したかったけど…やるしかないわね！！」

スバル「で、出来るのかな!?」

ティアナ「一人くらいなら、私達だけでも時間は稼げるはずよ！！」

パオラ「随分と舐めた口きくわね。いいわ、なら撃砕するわよ、スパイラルナックル！！」

スパイラルナックル［了解した、お嬢！！］

パオラから魔力とは違う別の波動を感じる。体が嫌な汗でべっとりとする。

スバルが特攻を仕掛け、ティアナは彼女の援護をする為に魔力弾を幾つも作りそれを飛ばす。

魔力弾がスバルを追い越してパオラに牽制を仕掛けるがパオラはその場で動かずに腕組をしている。

その彼女に向かって魔力弾は飛び、直撃……せずに、霧散した……。

ティアナ「なっ!?」

その光景にティアナは驚きで目を見開いた。何が起きた!?何故、魔力弾が当る直前で消えたのだ!?
一瞬の混乱に状況を見失ってしまった。気が付いた時にはスバルは自身の拳の射程圏内にパオラを捉えていた。

スバル「うおおおおぉぉぉぉぉぉ!!」

ティアナ「スバル、駄目!!!」

背筋が凍り付く感覚にティアナはスバルを呼びとめるが既に彼女は攻撃のモーションに入っていた。

パオラ「……ふん」

そのスバルの拳を前にパオラは鼻で笑い、スバルの拳に軽く手の甲を当てた。その瞬間、スバルの拳が大きく逸れてパオラの顔の横を通り抜けた。

パオラ「まるで、児戯の遊びね……」

スバル「えっ!?がふっ!?」

驚愕するスバルの鳩尾に回し蹴りを入れて打っ飛ばす。弾丸の様に

吹っ飛んだスバルはビルに激突してその壁にめり込んで止まる。

ティアナ「スバル！？「これが、トールスを倒した者の仲間ね……」っ！？」

声が聞こえると背筋が冷え、咄嗟に身を屈めると先程までティアナの頭があった場所をパオラの放たれた鋭い蹴りが空を切った。もし、避けなければ…首が折れてたかもしれない。
距離を置く為にティアナは幻術を展開しつつ後退して魔力弾を展開して弾幕で抑え込もうとする。

だが、その全ての弾幕はパオラに当らず霧散する。まるで届く前に撃ち落とされているかのように……。

ティアナ（まさか、見えない速さで拳を打ち込んで私の魔力弾を叩き落としてるの！？）

だが、それならば納得がいく。まさか、シリウス以外にも拳で魔力弾を叩き落とす芸当が出来る者がいるという事実に驚きを隠せない。

パオラ「エリスとクラレンスとは別系統の幻術…。まあ、あたしには関係ないけど」

パオラは攻撃してくる幻術のティアナを一撃で粉砕する。そこにス

バルが特攻して拳を入れるが彼女は片手でそれを受け止めて弾く。
スバルは容赦なく全力で拳を連続で叩き込むがパオラは涼しい顔でそれを受け流している。

ティアナ「クロスファイヤー、シュート！！！」

ティアナも弾幕で援護するが、パオラはスバルの拳を掴んで背負い投げの要領で投げ飛ばし、直ぐに体の向きを変えて構えてティアナのクロスファイヤーを殴って破壊した。

ティアナ「なっ！？嘘でｓ――「まあまあね。…けど、止まって見えんのよ！！」っ！？」

パオラの姿が消え、気付いた時にはティアナの背後にいた。

パオラ「ふんっ！！」

そこから裏拳が飛んでくる。咄嗟に腕で頭を守るようにしたティアナを殴りそこから連続蹴りを繰り出して打ち上げた。

パオラ「機神連拳！！打ち砕け、我が覇気よ！！」

ティアナ「がっ！？」

最後に渾身のパンチがティアナの腹に決まり彼女は打っ飛んでボールの様に何度も地面の上を跳ねて転がった。全身をまるで鉄か何かで殴られた様な激痛が奔る。たった一撃だ……たった一撃で彼女は体が動くのも難しい程にダメージを負ったのだ。

パオラ「これで終わり？呆気なさすぎない？」

ティアナ「ぐっ……が、あぁぁ……っつ…！！」

力の差がありすぎる。腕に力を込めて立とうとするが足が笑って上手く立てない。

咳き込むと地面に幾つもの赤い斑点が出来上がる。

パオラ「もう終わり？なら、死ね…」

スバル「おおおおぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

そこにスバルが拳を振りかぶって突っ込む。打ち出された拳はパオラの顔面に飛んでいくが彼女は平然とそれを裏拳で弾く。お返しとばかりに蹴りが飛んでくる。スバルは体勢を低くしてそれを避けてそこから足払いを仕掛ける。

パオラはそれを後方にバク転して避ける。着地したパオラに時間を与えまいとスバルは再度距離を詰めて殴りかかるもそれは全部受け流される。

パオラ「へぇ、あたしの攻撃くらってまだそんなに動けるのね……」

スバル「ティア、逃げて！！少しでも時間を稼ぐから！！！」

パオラ「逃がさないって、言ってんでしょ！！」

今まで防戦に徹していたパオラが動く。スバルの拳を弾き、空いた胴に肘を打ち込み、そこから足払いをかけた。

視界が一瞬ぐるりと回転するスバルは咄嗟に身を守るように腕をクロスする。

そこにパオラが高速で連続蹴りを入れて打ち上げる。

パオラ「乱獣を打ち込む」

パオラは打ち上げたスバルに向かって何もないところで連続で拳を振るう。それに合わせて彼女の拳から龍を模した魔力でないものが放出されスバルにその顎を大きく開いて襲いかかる。

パオラ「機神、乱獣撃！！！吼えろ覇龍！！」

スバル「ぐあああああああぁぁぁぁぁぁぁ！？」

最後の大振りで放たれた大きな龍がスバルを飲み込んだ。落下して

まともに受け身も取れずに地面に落ちたスバル。そのバリアジャケットはもうボロボロで今の攻撃の凄まじさを物語っていた。

パオラ「話にならないわ。こんなのがあたし達の壁になってるなんてね」

ティアナ（つ、強い……！！これが…使徒の……本当の…力だっていうの……！？）

今まで出会ったどの使途よりも彼女は強かった。魔力量はそれ程でもないのにその身体能力は群を抜いている。地面にうつ伏せに倒れているスバルを放置してパオラがティアナに近づく。
何とか立とうとするがまだダメージが抜け切れていない。

パオラ「あんたから始末してあげるわ」

スバル「ま、待て……！！」

それを止めるようにスバルの声が聞こえる。パオラもティアナもその方を見ると、フラフラではあるがそれでもしっかりと足で地面を踏みしめているスバルがいた。

スバル「まだ、まだ終わってない！！」

パオラ「へぇ、まだ立てるなんて……そう、この気配からして…あ

なた、戦闘機人ね？」

スバル「っ！！？」

パオラ「殴った時に変な手応えだと思ったけど、そういう事ね。いいわ、ならアンタが動けなくなるまで相手してあげるわ」

スバル「うおおおおおぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

仲間を守る為、大事な親友を守る為にスバルは一人、パオラに向かって突撃して行った。

---

エリオとキャロから入った連絡でなのは達は急いでミッドに向けて出動していた。

なのは「ヴァイス君もっと急いで！！」

ヴァイス「無茶言わないでください、これ以上は速く飛べないですよ！！」

エリオとキャロはそこからスバル達の下に急行させ自分達もヘリに乗って出動してる。
ヘリは最大速度で飛ばしているがそれでも時間はかかる。

コレット「ロイド、大丈夫かな……」

ガルド「あいつは仲間の為なら平気で無茶するからな…。あれを使わなければいいのだが……」

フェイト「ガルド、あれって何？」

ガルド「ロイドの天使の力だ。今の天使化のもっと強力な力を持っている」

セフィリア「ロイドはそれをまだ使いこなせていないんだ……」

出現した使徒の数は四人、恐らくロイドはそれを使うかもしれない。
仲間を守る為に……。

コレット（ロイド、無理は絶対にしないで……）

ヘリの中でコレットはそう願っていた。

ロイドは移動をしながらオルマの剣撃を受け流していた。常人では目で追う事の出来ない速さで繰り出される互いの剣を弾き、受け止め、反撃を行っていた。

オルマ「双牙斬！！」

ロイド「虎牙破斬！！」

二人は同時に斬り上げから素早く斬り下ろしを繰り出す。互いの剣がぶつかり合って衝撃が周囲に広がり大気を揺るがす。ロイドがそこから突きを繰り出すとオルマはそれを弾き上げて反対の剣で横に振るう。それをロイドは受け止めて押し返して足払いを仕掛ける。

オルマはそこから飛び退き回避、それと同時にデミテルが車輪を回転させて飛ばして来る。

それを剣をクロスさせて防御し真上に弾き上げる。

デミテル「鋼の一撃、鋼烈弾！！」

打ち上げた車輪が急に勢いを殺して停止し、猛スピードで回転しな

がら落下をしてきた。

ロイド「あぶねっ！？」

咄嗟に後方に飛び退いて避ける。標的がいなくなり地面に激突する車輪。
凄まじい衝撃で地面が割れて凹み、アスファルトの礫が周囲に飛ぶ。

オルマ「どわあっ！！？」

それは仲間のオルマにも飛び火した。慌てて体を仰け反って避ける。
鼻先数センチの所を礫が通り抜けていき、ホッとしたあとにその攻撃をした犯人に抗議の声を上げる。

オルマ「こらあデミテル！！オレッチまで巻き込むんじゃねえ！！
狙いはちゃんとつけろよこのボケが！！！」

デミテル「何を言っているのですか？貴方がそこにいるのが悪いんでしょう。私は悪くないですよ」

オルマ「悪くないって……。ちょっと降りてこい！お前には常識ってのを教えねえといけねえような気がするぜ！！」

アカギ「お前が常識を語るのか……？」

オルマ「おいこらアカギ！！それは如何いう意味だ！！オレッチが馬鹿っていいたのかよ！？」

ア・デ「「違うんですか（違うのか）？」」

オルマ「……一度降りてこいお前等。少し、オレッチに対する見識について会議しようぜ……」

ア・デ「「だが断る！！！」」

オルマ「そこまでユニゾンすんじゃねえよお前等！！？」

三人でギャアギャア騒ぎだす様子を見ているロイドはそっと、視線をスバル達のいる方角に向ける。

あと少しくらいで見える筈だ。この三人も連れ、パオラも合わせれば四人だ。

四人の使徒と戦って果して何処まで持つか……。

ロイド（最悪の場合、あれを使うしかないよな……）

最悪の状況も想定に入れてロイドは意識を三人に向ける。オルマは接近特化、デミテルは遠距離型、アカギは後方支援型といった所だろう。

三人の口論が止まった。来るか……。呼吸を整えてロイドは動きだす。

それに合わせて三人も動きだした。

オルマ「デミテル、アカギ！！これが終わったら覚悟しろよ！！剛裂衝破！！」

デミテル「無事生きて帰れれば、の話ですがね……。双破剛衝弾！！」

アカギ「油断はするなよ、オルマ。シャークバスター！！」

オルマが両手の剣を振り下ろして衝撃波を、デミテルが車輪の数を二つに増やしてそれを同時に飛ばし、アカギが大きなサメの形をした砲撃を放つ。

ロイド「くっ、粋護陣！！」

自身の周囲に防御壁を展開して衝撃に備える。護身術に三人の攻撃がぶつかりロイドは激しく押される。

ロイド「ぐあっ！？」

流石に受けきれずに護身術ごと吹き飛ばされてビルに激突する。
粉塵が舞いロイドの姿が隠れた。

デミテル「攻撃を止めてはいけませんよ！！」

オルマ「分かってるっての！！」

アカギ「攻撃再開だ……」

オルマが剣を何度も振るって衝撃波を放ち、デミテルが一回り小さな車輪を召喚して幾つも飛ばす。
アカギも幾つもの魔力弾を飛ばし断続的に放つ。三人の猛攻でついにビルが耐え消えずに倒壊した。
三人の前には瓦礫の山のようになったビルの残骸がある。

オルマ「幾ら剣聖でも、死んじまったかな？」

デミテル「あれほどの量を撃ち込んだのです。流石に――」

デミテルが言い終えるその瞬間、倒壊したビルの一角が突然吹っ飛んだ。

そう……

そこには……

ロイドが……

天使の羽を展開して立っていた。

オルマ「げぇ！？マジかよ！？」

ロイド「よくもやりやがったな、覚悟しろ！！」

羽を羽ばたかせて三人に肉薄する。最初にオルマに接近して剣を横に振る。
オルマがそれを防御したと同時にロイドは反対の剣で素早く突きを放つ。
それを防御するオルマにロイドは更に追撃を加える。

ロイド「散沙雨！！」

神速の連続突きを繰り出し、オルマの体に切り傷を付けていく。
痛みで表情が曇るオルマ。彼を助けようとデミテルとアカギが車輪と魔力弾を放つ。

ロイド「極・魔皇刃！！」

ロイドは地面に向かって剣を思いっきり叩き下ろす。その衝撃でロイドを中心に巨大な衝撃波が広がりデミテルの車輪とアカギの魔力弾を弾き、打ち消した。
序でに言えばオルマもその衝撃波に巻き込まれて吹っ飛ばされた。

オルマ「うおっ、いってぇ!?」

デミテル「一人だというのに、なんという力ですか!?」

アカギ「これが、『時の英雄』を纏める男、ロイド・アーヴィングの力か……!?」

使徒三人を相手に互角に戦うとは、予想外の出来事に踏鞴を踏む。

ロイド「エレメントソード、属性変更、火!!」

エレメント［御意……］

ロイド「鳳凰烈破!!」

刀身が赤く染まり火が噴き出す。その剣をロイドは振り下ろすとそこから火の鳥が放たれる。三人に迫る巨大な炎の塊、それを回避したがそれはビルに当たり大爆発。爆風が広がり三人の体勢が崩れる。

そこに迫るロイド。一番近かったデミテルを狙う。デミテルは無理な体勢から車輪を飛ばし迎撃に移るもそれをロイドは紙一重で回避して距離を詰めた。驚くデミテルの反応が遅れる。

ロイド「火炎裂空!!」

デミテル「ぐあっ！？」

ロイドが炎を纏って回転してくる。それを間一髪回避したが左肩を浅く斬られてそこを炎で更に焼かれる。地面に着地したロイドはすぐに向き直りデミテルに接近する。そして、剣を振り下ろしたとき、それはオルマが間に入って剣をクロスして受け止めることで止まった。

オルマ「オレッチを忘れんなぁぁぁ！！！瞬連刃！！」

ロイド「くっ！！散沙雨！！」

オルマがロイドの剣を弾き続けて連続突きを放つ。ロイドもそれに対抗して連続突きを放つ。

二人の剣がぶつかり合い火花が散る。オルマがそこから足払いをかけるがロイドは空に飛び上がり回避する。その彼にアカギが接近し、魔力弾を飛ばす。それを斬り伏せて迎撃しアカギに斬撃を飛ばす。

回避が間に合わず直撃して吹っ飛び地面に落ちる。

そこに素早く接近して剣を振るおうとしたがデミテルが車輪を飛ばし、ロイドは後退した。

三人が再び集まり陣形を組む。それをロイドは剣を構えて迎え撃つ。

そこにだ、近くで轟音が鳴り飛ばされて転がる者が視界の端で見え

た。

ロイド「スバル、ティアナ！？」

二人ともボロボロの状態でティアナは既に立つ力がないのかうつ伏せの状態でスバルも立っているのがやっとの状態だった。

パオラ「戦闘機人も所詮はこの程度ね……。ま、良くもった方だと言っておいてあげるわ」

スバル「まだ……まだだ……まだ負けて、ぐぅ！？」

ティアナ「スバル……！！あんた、右腕が……！！」

スバルの右手から火花が散っていて更にリボルバーナックルには罅が入っている。

それでもスバルはリボルバーナックルを構える。相手から感じる気迫にパオラもスパイラルナックルを構える。先に動いたのはスバルだった。マッハキャリバーの出力を全開にして一気に距離を詰める。

スバル「うおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

パオラ「これで終わらせてあげるわ！！」

スバルの目の色が緑から黄色に変わり全身を魔力が包み込む。
パオラの拳がスバルに迫る。それをスバルは寸前で姿勢を低くする事で回避してみせた。
驚愕の表情を見せるパオラにスバルは持てる力を込めて全力の一撃を放った。

スバル「うあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！振動拳！！！！」

パオラ「なめんじゃ……ないわよ！！！」

瞬時にパオラは反対の拳をぶつける。二人の拳がぶつかり凄まじい衝撃が広がる。戦闘機人であるスバルの持つＩＳ『振動破砕』は戦闘機人相手に特に効果が高く、対人・対物においてもかなりの威力を発揮する。

その一撃を受けても尚、パオラはスバルと拳を交えている。しかし、徐々にだがスバルの方が押され始めている。

パオラ「戦闘機人の力、成程ね……。これなら確かに警戒しろって言われる事だけはあるわ。けど……はあっ！！」

パオラが気合の篭った声と共に魔力を注ぐ。その瞬間、スバルのマッハキャリバーの罅割れが酷くなる。押されたスバルは耐えきれずに踏鞴を踏んでしまい決定的な隙が出来てしまった。

それを逃すパオラでは無い。彼女の懐に入り拳を構える。

パオラ「残念だけど、これで終わりよ！！今こそ見せる、我が覇気を！！貫け覇龍、轟破機神拳！！！」

残像すら見える拳の雨がスバルの体を打つ。浮いた体の下にパオラが潜り込み最後にアッパーを繰り出す。それはスバルを見事に捉えて打ち上げ、パオラは右手に集めた気を一気に開放、龍となった覇気は巨大な顎をもってスバルを呑み込んで爆発、その衝撃でリボルバーナックルが遂に破損し砕け、彼女は吹き飛ばされた。吹き飛ばされたスバルは何度か地面を跳ねたあとティアナの近くまで転がって漸く止まった。

ティアナ「スバル！！」

スバル「あ、が……ぐあ、うぅぅぅ、ああ……」

ティアナ「っ！！ひ、酷い……！！」

抱き起こしたスバルの状態を見てティアナは顔を青褪める。右腕が変な方向に曲がっていて、リボルバーナックルは完膚なきまでに破壊されて破片が散らばっている。体を見れば痣だらけで内出血も酷い。内臓もやられたのか彼女が咳き込む度に口から血が吐き出される。

パオラ「まだ生きてるなんて、相当頑丈ね……でも、安心しなさい。今すぐ楽にしてあげるわ！！」

パオラが接近して来る。ティアナも力が出ずに腕を持ち上げられない。ただ、来るであろう衝撃に備えるしかなかった。

そして、パオラの一撃が二人に止めを……

――ゴドンッ！！！――

ロイド「がはっ！！」

パオラ「なっ！？」

ティアナ「え……！？」

刺す事は無かった……。パオラの拳をロイドがギリギリ両者の間に割り込んでその身で受けたからである。

ロイドの口から血が垂れる。

ロイド「こ、のっ！！」

パオラ「くっ！！」

ロイドが剣を振るいパオラを追い払う。そして、膝を付くロイド、咳き込む度に血が地面を汚し血溜りが広がった。

ロイド「ギ、ギリギリ、間に合ったか……！」

ティアナ「ロイド……！？何やってんのよアンタ！？」

スバル「ぐ、ううぅ……ロ…イ……ド？」

薄っすらと目を開けたスバルが目にしたのは自分達の前で膝を付いているロイドだった。それを見て瞬時に自分達を庇ったのが理解できた。パオラの方に視線を向けるとパオラの所に他の使徒も集まっている。

スバル「ロイ、ド……ど、如何して……！？」

二人には理解できなかった。ロイドならあの三人にも時間を掛ければ勝てた筈だ。それなのに、何故、彼は此処にいてしかも、自分達を庇ったのか？自分達が倒れてもロイドならパオラにも勝てた筈だ。その信じられない状況に戸惑っている二人にロイドは苦痛を堪えて笑って答えた。

ロイド「仲間を…見捨てる訳ねえだろ…。皆で無事に帰る為なら、これ位やってやるさ…くっ！」

仲間の為……。
たったそれだけで彼は命すら投げ出して、身を挺して二人を守ったのだ。

オルマ「剣聖の奴、あんな弱っちいのを助けるなんて何考えてんだ？」

デミテル「ですが、これは好機です。今此処で剣聖も殺すべきです」

アカギ「賛成だな……」

パオラ「そうね、あいつは危険すぎるわ。此処で仕留めるわよ！！」

手負いの剣聖ならば自分達で殺れる。そう判断した四人が油断無く近づいてくる。
ロイドは脚に力を込めて立ち上がる。フラッとしたがそれでもしっかりと大地を踏みしめた。

ティアナ「ロイド、無茶よ！！私達はいいからアンタだけでも逃げて！！」

ロイド「ふざけろ！！仲間を見捨てて自分だけ助かるなんて、そんなの出来るかよ！！俺は大事な仲間を守って見せる！！この、エクスフィアに誓ったんだ！！ティアナもスバルも死なせるもんかよ！！」

ティアナ「ロイド……」

ロイドの体から魔力が溢れだす。それに合わせてエクスフィアが青く、何処までも澄んだ青色に強く輝く。

ロイド「ごめん、コレット……約束守れそうにない…けど、仲間を守るためだから許してくれ」

そう一人で呟いたロイドはキッと使徒たちを見据える。その強い意志の籠った瞳に四人は無意識に後退った。

ロイド「エクスフィア、俺に二人を守る力を貸してくれ！！おおおおおおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉ！！！！！」

それに呼応してエクスフィアが眩い光を放った。ロイドの体をその光が包み込み天高くその光が昇っていった。凄まじい魔力の波動で周囲の大地が浮き上がる。

一層光が強くなったあと周囲を閃光が包み込んだ。その場にいた全員がその眩しさに目を覆う。

そして、光が治まりそこにいたのは……

スバル「ロイド……？」

ロイド「……」

茶色の目が金色になった
普段のロイドの魔力とはあまりにも掛け離れた魔力を放出している
彼がそこに立っていた。
そして、その背には普段の虹色の天使の羽でなく……

美しい純白の……

七対の大きな羽があった……

オルマ「おいおいおいおい、あれは一体何の冗談だよ……!?」

デミテル「これが、剣聖の真の力ですか!?」

目の前にいるのは人間なのか!?
まるで、本物の天使が降臨した様な光景にその場にいた全員が見惚れる。

使徒達はその想像を絶する魔力を肌で感じて背筋が凍りつく。ロイドがゆっくりと剣先を四人に向ける。

ロイド「この姿は…加減出来ない……からな?」

そう言っている内に左手の甲にあるエクスフィアの青い輝きが赤く、染まった……。

ロイドの目のハイライトが徐々に消えてそれと同時にロイドの体から凄まじい魔力が放出され始めた。

今、ロイドの真の力が解放される……！！

# 第五十四話（後書き）

如何でしたか？パオラと三名の新たな使徒は？
パオラさんマジパネエっす……。ってか、パオラ、某スパロボにでるヤルダ○オｒｙ）ｗｗｗ

カイン「車輪とサーファー……使徒二人が殆ど趣味に奔っている様に見えるのは俺の気のせいか？」

うん、気のせいだ（キリッ

クラウド「いや、お前がカッコいい顔しても評価は上がらない……」

……ｏｒｚ

シリウス「あっ、落ち込んだ」

もういいよ！！開き直ってやる！！！
え～次回は、ロイドが無双状態になると思います。……多分。

なめ猫様、感想ありがとうございます！！始めて感想貰ってもう作者、テンション鰻登りで、これ見た時、深夜なのにヒャホォォォォイって叫んで家族にぼこられますた……。

これを読んでくださる読者の皆様、この駄文を読んで下さりありがとうございます！！質問や感想、お待ちしております。
次回もなるべく早く更新できるように努力しますのでこれからも宜しくお願いします。

では、今回はこれにてさらばなのです！！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第五十五話（前書き）

第五十五話、更新！！

もう五十話の折り返し地点、長かったような、あっと言う間だった様な……複雑な心境の最近の作者です！！

さあ、遂に登場、ロイドの新能力！！果たしてそれがどれ程のものになるのでしょうか？

シリウス「チートなロイドが誕生するよ～」

作者的にもやっちまったな！？的なロイドの誕生です。やり過ぎた気もする……

詳しくは、本編をどうぞ！！

１０／９（日）

アカギの魔法名変更、五十四話と同じくサーペントと誤字発見、正しくはシャークでした……

# 第五十五話

天を貫く光の柱が立ち昇るのをヘリに乗っていたなのは達は見つける。

なのは「あれは……!?」

カイン「まずいな……」

フェイト「カイン、あれは何なの!?」

離れていても分かる凄まじい魔力。背筋が凍りつきそうな感覚に戸惑いながらもフェイトはカインに問う。カインも、いや、カイン達ですら頬に一筋の汗が通るほどだ。

カイン「ロイドの奴、あの力を解放したのか……!!」

シグナム「あの力とはなんだ?」

クラウド「説明する時間が惜しい。俺達は此処から先に行く。ガルドとバルドは……」

ガルド「分かっている。なのは達と別の所で待機だな」

ヴィータ「はあ？何であたし達は待機なんだよ！？」

バルド「その説明も面倒だがちゃんとすっから、取り敢えずカイン。後は頼むぞ」

カイン「分かっている」

コレット「皆急ご！！」

ハッチを開けてコレット達が飛び降りて光の昇った場所に向かって飛んで行った。
ガルドはヴァイスに近くのビルの頂上にヘリを着陸させた。

ガルド「まず今のロイドの状態だが、恐らく何時暴走を起こしても可笑しくない状態だ」

なのは「暴走？」

シグナム「如何いう事だ？」

バルド「ロイドは今、エクスフィアの力を限界まで引き出した状態で戦っている。前にも一度あいつはその力を仲間を守るために開放した事があるんだが……」

ガルド「その時にロイドは暴走して周囲を焦土に変えた……」

ロイドが暴走状態に陥るというのになのは達は驚きを隠せない。それどころか、周囲を焦土に還る程の暴走を起こすなど想像もつかなかった。

ガルド「その時は俺達は全力を持ってあいつを止める事に成功したが……まあ、俺は片腕を吹っ飛ばされたな」

フェイト「えっ!?で、でも今ガルドは腕あるよね!?」

ガルド「ん?そりゃあ、俺が丈夫だからな」

シグナム「答えになっていないのだが……?」

バルド「兎も角だ。俺とガルドは今のロイドとは相性が悪い。光にある程度耐性を持っている奴が相手しないと体の一部を持っていかれるぞ」

ロイドの隠された力がそこまで強力な物と知り唖然とする。彼ほどの実力者ですら制御不能になるその力とは一体何なのだろうか?

そこに、一際大きな爆発音が聞こえ全員その方向を見ると、地上に幾つもの火柱が断続的に立ち昇っているではないか。

ガルド「あんなに力をバカバカ使いやがって……殆ど意識を持ってかれてきているのか」

バルド「不味いな、此の侭だと街一つが吹っ飛ぶぞ…！！」

なのは「そ、そんなの駄目なの！！私達も急いで止めに行こう！！」

フェイト「そうだね。このまま此処で指を咥えて見ているのは私には出来ない！！」

それにシグナムもヴィータもはやてもアイネ頷いて六人は飛び立っていってしまった。

バルド「お、おいっ！？……ったく、俺達も行くぞ！！！」

ガルド「やれやれ、やっぱり行く事になるのか……。お前はあまり接近はするなよ。今の状態で下手な一撃貰ったら無事では済まないからな？」

バルド「んな事は分かっている！！」

ホントに分かっているのだろうか？いや、こいつの事だから分かってはいないなとガルドは思い、やれやれと首を竦めてその後を追っていった。

---

オルマ「ったく、冗談じゃねえぞ！？」

デミテル「これ程のものとは……！？」

パオラ「これが、剣聖の力！？」

アカギ「……凄まじいな」

四人は目の前にいる男の力を見て悪態を吐いた。惜しげもなく魔力を放出してゆっくりと歩んで来る天使…ロイドが四人に剣を構える。

オルマ「こうなったら、突撃だぁぁぁぁ！！！」

アカギ「……援護する、シャークシューター！！」

パオラ「撃砕する！！」

デミテル「行け、我が鋼輪達よ！！」

オルマとパオラが突撃を開始、それをデミテルとアカギが車輪と魔力弾を飛ばして援護する。

ロイド「……」

オルマの斬撃を体を横に軽く逸らす事で回避して、続けて放たれたパオラの拳を片手の剣で受け止める。次に、その間を縫って飛んで来たサメの魔力弾をもう片方の剣で両断し、最後に飛んで来た車輪をパオラの拳を弾き飛ばしたあと姿勢を変えて蹴りで上に弾き上げる。

オルマが接近して高速で剣を振りまくる。それを体を僅かにずらして避け、その後方から飛び蹴りをしてきたパオラの蹴りを受け止めて弾き、斬り落とそうとする。それを空中で姿勢を変えて回避してその隙をオルマが埋める様に連続突きを繰り出すも全て受け流されてた。

パオラ「機神連拳！！」

パオラがロイドの背後に瞬時に移動して素早く裏拳を繰り出す。それを、ロイドは剣を背後に回してその剣の腹で受け止め、続けて繰り出される連続蹴りを片手の剣で受け流す。そして、パオラが蹴りを止めた瞬間に斬り上げを繰り出す。咄嗟に体を逸らしながら後方に飛び退いて回避する。

オルマ「双牙斬！！」

ロイド「虎牙破斬……」

両者の素早い斬り上げから斬り下ろしが繰り出される。強烈な衝撃がオルマを襲い彼は吹っ飛ばされた。先程とは桁違いのパワーである。体勢を整えて着地して再び剣を構える。

パオラ「機神、乱獣撃！！吼えろ、覇龍！！」

パオラが無数の覇龍と呼ばれる龍を拳から幾つも放つ。大きく顎を開き、ロイドを呑み込まんとするそれを、彼は無表情のまま剣を軽く横に振るだけで次々に上下に両断した。最後の大きな龍すらあっさり両断され霧散して消えた。

再びオルマが突っ込み、それをアカギとデミテルが魔力弾と車輪で援護する。

ロイド「剛・魔神剣……」

同時に迫る魔力弾と車輪を剣を振り下ろして前方に地面を抉る様な衝撃波を打ち出す。

それが、二人の攻撃を弾き、ロイドはその隙に地面を軽く蹴る。

次の瞬間にはオルマの前におり、剣を横に一閃する。咄嗟に自身の剣をクロスして防御するも強烈な衝撃でオルマは後方に大きく飛ばされた。

オルマ「うへぇ～、剣聖の力ってのは此処まですげえのか！？」

パオラ「けどおかしいわ。あいつからまともな覇気が感じられない……」

デミテル「如何いう事です？」

パオラ「攻撃に意思がないって言うか……兎に角、簡単に言うと目の前にある火の粉を掃う感じに近いわ」

オルマ「ってことは、オレッチ達は火の粉って事かよ！？」

アカギ「四人がかりでも雑魚扱いか……。とんでもない敵だな……」

そこに、ロイドから放たれた衝撃波が飛んで来て会話は中断された。地面を抉る様に迫る衝撃波を回避して四人は再びロイドに肉薄する。

ロイド「空間翔転移……」

エターナルソードが光ると同時にロイドが目の前から消えて気付いた時にはオルマの正面にいた。

オルマ「なっ！？ぐあっ！！」

ロイド「次元斬……」

突然の事に反応が遅れて素早い斬撃をくらいオルマが吹き飛ばされ

る。ロイドは再び消えて先程いた場所に戻っていた。続けて、エターナルソードを振り下ろすロイド。その剣が通る先の空間が歪んでいるのを見た四人は咄嗟に大きく横に飛び退く。
直後、先程までいた場所の空間が歪んで一気に裂けた。その先に見えるのは、黒く歪んだ空間、『虚数空間』が一瞬だけ見えた。それが遠くにまで及び先にあるビルなどの建物が空間ごと消し飛んだ。

デミテル「空間移動すら可能なのですか!?」

パオラ「それどころか、空間も歪ませたわよ!?」

アカギ「反則的な技だ……!!」

オルマ「くそぉぉ……この野郎があぁぁぁぁ!!!」

アカギ「よせ!!オルマ!!」

誰もがこれ以上戦うのは危険と思っていたがオルマだけは剣を持ち再び特攻していった。

オルマ「双剣で、オレッチは負けられねえんだよおぉぉぉぉぉぉぉ!!!!くらえ、奥義・双破轟天撃!!!」

オルマの剣の刀身が光に包まれる。そして、剣を振り上げて全力の一撃を振り下ろした。

ロイド「……」

オルマの全力に対してロイドはエターナルソードを軽く振った。両者の得物がぶつかり、次の瞬間にはオルマの剣が両断されていた……。

オルマ「う、うそだろ……？」

ロイド「……極・驟雨双破斬」

ロイドの神速を超えた刺突の雨がオルマの体を穿ち最後に虎牙破斬を繰り出して体に二つの縦線が奔った。

だが、ロイドはそれで終わらなかった。

ロイド「次元双破斬……」

ロイドが十字に素早く目の前の空間を斬る。オルマの体がその瞬間、歪み、四つに分れた……

止めに、ロイドの足元に魔法陣が出現する。

パオラ「オルマ！！」

デミテル「駄目ですパオラ！！もう彼は手遅れです！！」

アカギ「二人とも下がれ、巻き込まれるぞ！！」

ロイド「ジャッジメント・ゼロ……！！」

パオラを羽交い絞めにしてデミテルはアカギのサーフボードに乗りそこから離脱、それと同時にロイドの天使の翼が光り、オルマの真上から一筋の巨大な光の柱が落ちて、オルマを中心に全てを消し飛ばした。光が終息した時にはオルマの姿どころかその周辺の建物すら跡形もなかった。

パオラ「く、オルマまで……！！」

アカギ「……二人とも撤退するぞ。オルマもやられた以上、これ以上の戦闘は危険だ。管理局も動くだろうし、あいつの仲間もそろそろやって来る」

デミテル「そうですね。それが賢明な判断だと私も思います」

パオラ「……分かったわ。此処は潔く引き下がりましょう……」

悔しそうに唇を噛むパオラは自身の心を落ち着かせてデミテルとアカギと共に姿を消した。

パオラ達がいなくなった事でロイドは止まり動かなくなった。

ティアナ「あれが……ロイドの力…」

ロイドの先程までの動きを間近に見てティアナは全身に鳥肌が立っていた。
圧倒的な力で、たった一人で使徒四人を撃破したロイド。
しかし、ティアナはふと疑問に思った事がある。何故彼は今まであの力を隠してきたのか？

それに今のロイドの様子がおかしい。
まるで、今のロイドの瞳には何も映っていないかのようにその目は薄暗くなっている。

エリオ「ティアナさん、スバルさん!!大丈夫ですか!?」

そこにエリオとキャロが到着して二人の怪我の具合を見て慌てる。
その二人を落ち着かせてキャロにスバルを頼み自身も簡易治癒魔法で傷の浅い場所にあてる。
エリオはふと、ロイドが動かないのに気付いて彼に話しかけた。

エリオ「ロイドさん？如何したんですか？」

そう聞くも全く反応がない。疑問に思ってエリオはロイドに触れようとした、そこにカイン達が到着する。

カイン「エリオ、そいつに近づくな！！」

エリオ「え？」

カインの声にエリオは動きを止めたその時だ、

――ビュッ！！――

エリオ「うわぁっ！？」

突然ロイドが振り向いてエリオに向かって剣を振るってきたのだ。それはギリギリエリオに届かず空気が斬られる。エリオは尻餅を付いてロイドを見上げた。

エリオ「ロ、ロイド…さん……？」

ロイド「……エ、リオ……避け……ろ！！」

ロイドは途切れ途切れに言い、今度は剣を振り下ろす。エリオは咄嗟に体を転がしてそれをギリギリ避けた。剣が地面にぶつかる、大地が割れる程の衝撃だった。その衝撃でエリオが軽く転がされる。突然の事に戸惑うエリオにロイドが再び動く。その両者の間にカイ

ンが割り込み振り下ろされた剣をサイフォスで受け止めた。

カイン「くっ、エリオ！！ティアナ達の所まで下がれ！！クラウド、ティファはＦＷ陣を安全な所まで後退させろ！！」

クラウド「了解した……。お前達、こっちだ」

クラウドがスバルを抱き上げてティファはティアナに肩を貸してエリオとキャロを連れて後退した。
ビルの屋上に降り立ちスバルをゆっくりと降ろす。スバルの怪我は如何見ても重傷だ。だが、救助を待つ時間はクラウドとティファにはない。

クラウド「スバル、少し痛いだろうが我慢しろ……」

クラウドは腰にある携帯ポーチから注射器を取り出し、同じくポーチに入っていた液体の入っているビンを取り出して中の液体を注射器に入れる。中に入った気砲を追い出してその注射器をスバルの左腕に刺した。

スバル「うぅぅ……あぁぁぁぁぁ…ぐあああああああぁぁぁぁぁぁ！！？」

ティアナ「クラウドさん！？今スバルに何を刺したの！？」

クラウド「内臓を回復させる治癒薬だ。これは副作用が強くて怪我を治している最中は激痛に見舞われる。そして、この薬は内臓だけしか癒せなくて折れた腕や外傷は治せない」

激痛に暴れるスバルをティアナとエリオとキャロは何とか押さえて動きを抑える。

クラウドはその激痛に暴れるスバルを放っておいて先にカイン達の下に飛んで行ってしまった。

なのは「みんな！！」

そこになのは達が降りてきた。落ち着き始め、苦痛の和らいだスバルの怪我の酷さに顔を顰める。

ティファ「なのは、やはり来たのですか……」

なのは「私達もロイド君を止めるのを手伝うの！！」

ティファ「そうですか……。ですが、その気持ちだけ受け取らせていただきます」

ティファは突然なのは達に向かって鏡花・水月を向ける。既にドラグーンも射出されて取り囲んでいた。

ティファの行動になのは達は驚きで目を見開く。

フェイト「ティファ！？いきなり何を……！？」

ティファ「皆さんには此処で待機して頂きたい……。これから始まる戦いは、皆さんが思う以上に激闘なんです……」

シグナム「ならば、尚更人手がいる筈だ！」

ティファ「……ならば、そこで一度今から始まる戦いを見るべきでしょう。それで判断を決めてください」

ドラグーンを背に戻し、眼下の光景を見るティファに続いてなのは達もロイドの方を見る。

ロイドの前にコレット、カイン、シリウス、セフィリア、クラウドが立つ。

カイン「ロイド、目を覚ませ！！意識をエクスフィアに呑まれるな！！」

セフィリア「ロイド、また大切な人を傷つけるの！？そんな事したら駄目だよ！！目を覚まして！！」

コレット「ロイド……」

ロイド「……」

仲間達の必死の声にロイドはその金色に輝く目を向けて、無言で剣を構えた。

シリウス「ありゃりゃ、既に意識がないみたいだね～。これは、リミッターを外した方がいいかな？」

カイン「シリウス、リミッターは全部外すなよ？」

シリウス「ほいほい、八割でいいでしょ？」

シリウスがリミッターを解除すると彼の体を金色の魔力が包む。そして、獣耳と八つの尾が生えて神威を装備してシリウスは拳を構える。セフィリアもディスインテグレイトの柄に手を添えて戦闘態勢に入る。カインはサイフォスを再び構えてロイドを見据える。クラウドもＳＥＥＤを発動させてファンネルを周囲に展開して銃を構える。コレットは一度逡巡していたが、首を何度か振ってチャクラムを取り出し、背から天使の羽を出した。

カイン「来るぞ……！！」

ロイド「……っ！！」

カイン達が得物を構えた瞬間にロイドが動きだした。地面を蹴って

動いた時にはカイン達の前に現れて剣を振るった。それを全員が飛び退いて回避して散開する。
ロイドはカインに狙いを定めて彼に斬りかかる。それをカインは受け流して、弾いた。一瞬の隙を狙ってサイフォスで刺突を繰り出すがそれは弾かれて逆にカインの隙が出来る。そこにシリウスが加わり神威で殴りかかるが、ロイドはエレメントソードでそれを受けて、弾く。カインも高速で大太刀を振るうもそれをエターナルソードで受け止められた。二人の目にも止まらぬ攻撃をロイドは一人で捌く。

セフィリア「魔神剣！！」

そこにセフィリアが斬撃を飛ばすがロイドはシリウスとカインの攻撃を同時に弾いて上に軽く飛び上がりそこから回転蹴りで二人を吹っ飛ばしてセフィリアの斬撃に対してロイドも魔神剣を飛ばす。
だが、そのサイズが異常だった。普段のロイドの放つ斬撃とは比較できないほど大きくその大きさは四階建てビルすら呑み込めそうな大きさだった。
セフィリアの斬撃はあっさりと破られて彼女に迫る。セフィリアはそれを横に飛んで回避、巨大な斬撃はその背後にあったコンクリのビルをいとも簡単に打ち砕き倒壊させる。セフィリアは地面を蹴ってロイドに肉薄、帯刀術と抜刀術を混ぜた神速の攻撃を繰り出すもロイドは悠々と受ける。そこにカインとシリウスも加わり三人で猛攻するが、あの三人の攻撃をなんと凌いでいた。

クラウド「ターゲット、照準（ロックオン）！！……破壊する！！」

バスターモードにした干将・莫邪を持ったクラウドの砲撃が放たれる。機動兵器すら易々と撃ち貫く砲撃をロイドは、三人の攻撃を凌ぎながら回避してクラウドに斬撃を飛ばす。
それを回避してファンネルを飛ばし無数のビーム攻撃で襲撃した。しかし、その攻撃を三人の攻撃を押し返して避けてファンネルを右に左に縦横無尽に回避しながら斬り落とし次々に撃墜している。

クラウド「敵の動きを抑えた……。コレット、今だ！！」

コレット「聖なる翼よ、此処に集えて神の御心を示さん！！エンジェルフェザー！！」

術を発動したコレットから三つの聖なる光輪が放たれた。ファンネルに意識を向けていたロイドは反応が遅れて回避できずにそれは直撃して爆発、爆煙で姿が見えなくなる。

シリウス「如何かな～？」

カイン「……いや、まだの様だ…」

煙が晴れるとそこには純白の天使の羽がロイドを包んでいて羽が再び開くと中から無傷のロイドが現れた。

今の戦闘を見てなのは達は絶句した。あの五人の猛攻をたった一人で今のロイドは対応してそれを無傷で凌いでいるのだ。

ヴィータ「おいおい、あれは反則的だろ……！！」

はやて「コレットちゃん達の攻撃を全部凌ぎおったで！？」

ガルド「あれが、ロイドの進化するエクスフィアの持つ力だ」

追い付いたガルド達も降り立ちなのは達と並んだ。眼下ではカイン達が再び動き出す。

術が、剣技が、銃撃がロイドを襲うもそれをロイドは表情一つ変えずに全て凌いでいた。

なのは「ロイド君のあの姿は一体……！？」

バルド「熾天使……」

フェイト「え……？」

ガルド「俺達が呼ぶ天使と言う存在にも階級がある。そして、俺達が呼ぶ人の姿をした天使はエンジェルと呼ばれていてそれは、一般的には最下級の存在だ。その上に大天使（アークエンジェル）、権天使（プリンシパティーズ）、能天使（パワーズ）、力天使（ヴァーチュズ）、主天使（ドミニオンズ）、座天使（スローンズ）、智天使（ケルビム）と階級が上がっていく。そして、最も最上級の天使が……」

ティファ「熾天使、セラフィムです。高位の天使になれば成る程、彼等は姿形は不定形になります。私達が人型として見ている天使は全て下位階級の者達です。熾天使になると炎の塊と言われていて最早人の原型はありません……」

ガルド「まあ、ロイドはそんな姿にはならずに普通だがな」

バルド「因みにお前達の知っている天使の中でも最も強いとされている者、ミカエルも大天使の階級だ」

それでは、今のロイドはその天使界の中でも最も強い存在の姿を取っているというのだろうか！？

なのは達の疑問は顔に出ていたのかガルドはそれに首を振って否定した。

ガルド「いや、ロイドは熾天使ではない。奴はその更なる上……熾天使界の中でも更に上の存在、俺達は大熾天使（アークセラフィム）化と呼んでいる」

なのは「大熾天使（アークセラフィム）化……？」

はやて「ほんならロイド君は、文献に載ってる大天使（ミカエル）すら上回っているって事なんか！？」

ガルド「さあな……？俺達だって本物の天使なんぞ見た事ないから勝手にそう名づけただけだ。だが、そう言っても過言ではない程にあいつは強くなる……」

一撃でビルが倒壊した。ロイドの攻撃の破壊力は普段の彼とは遥かに違っている。

その光景を見ているしかないなのは達の下に突然通信が入った。その人物はクロノだった。

なのは「クロノくん!?」

クロノ『なのは、今のロイドは如何したんだ!?何故お前達が戦っているんだ!?』

フェイト「クロノ、実は……」

フェイト達がクロノに事情を説明しそれにクロノは驚いたが直ぐに現状を見て納得する。

クロノ『実は、使徒の反応があったから結界魔導師を数十人集めて出撃したんだが、それなら手配した魔導士達に今から結界を張ってロイドの動きを抑える!!』

バルド「なにっ!?」

そのクロノの言葉にバルド達が焦った。慌ててクロノにその行為を止めようと声を荒げた。

バルド「馬鹿野郎!!直ぐに魔導士達を下げろ!!そんな事すれば、この街一帯が吹っ飛ぶぞ!!」

クロノ『なにっ!?一体如何いう事だ!?』

バルド「今のロイドは敵対行動や近づく者全てを殲滅する破壊者だ!!そんな事すれば、街全てを敵と認識して超大型殲滅術式を展開するぞ!!!」

かつて、一度だけロイドはグランディオンで熾天使化を使った。その時、敵国の戦力を敵国諸共、普段は使えない術を使って跡形もなく消し飛ばした。そう、面影すら残らない、本当の意味で……消し飛ばしたのだ……残っていたのは平面の続く……焼け野原しかなかった……。

ガルド「いま直ぐに結界を張るのを中止しろ!!街すら消えるぞ!!」

クロノ『くっ!!』

クロノはその焦り具合から真実だと知ってもう一人の執務官を見る。彼は、既に結界魔導師達に結界展開の命令を出していた……。

クロノ「おい!!直ぐに結界を張るのを止めろ!!!」

執務官一「何を言ってるんだ?あんなに暴れられては街がもたない。ならば、結界であいつを抑えるしかないだろ」

クロノ「それ自体がトリガーなんだ!!!いいから結界を使うのを止めさせろ!!」

執務官一「大丈夫だろ。たかが一人に優秀な結界魔導師八十人の張る結界が破れる訳がない。早く結界を展開しろ！！」

魔導師「はい！！」

クロノ「止めろおぉぉぉぉぉぉ！！！！」

クロノの制止も虚しく、八十人という大人数の結界魔導師が一斉に結界を張った。ロイドを中心に巨大な結界が張られ外の空間と隔絶された。結界が展開されたのを見てバルド達は苦虫を噛み潰した様な顔になる。

バルド「クロノの奴、間に合わなかったか……！！」

フェイト「バルド！？一体如何なるの！？」

バルド「見ていれば分かる……。俺達が今相手している男が、使徒なんか束で掛かった時よりも数倍危険だってのが嫌でも分かるさ……」

ロイドと戦っていたカイン達は急に結界が張られたのに気付いて動きを止めた。ロイドも結界を張られたのに気付いて動きを止めてその虚ろな目で天に張られた結界を見上げる。

セフィリア「これは……結界！？」

クラウド「誰だ、こんな馬鹿な真似した奴は！？」

カイン「不味い！！ロイドを急いで抑えねえと！！」

だが、そのロイドに幾つものバインドと結界が織り合わさった魔法が幾重にも張られた。

それは、結界の外で結界魔導師が合わせて行った魔法だとカイン達は悟った。

ロイド「……」

ロイドは意識のない眼でそれを見て、周囲を見回す。まるで、結界の向こうにいる人が見えている様に……。

結界魔導士達は突然襲ってくる強大な殺気に鳥肌どころか肝まで冷え青褪める。

ロイド「……っ！！！」

ロイドは全身に力を込める。魔力が膨大に膨れ上がりそれは拘束していた結界を圧迫し、あっさりと力尽くで粉砕された。

結界魔導師「うわっ！？」

結界魔導師「拘束魔法が破壊されたぞ！？」

外でもその事に気付いた魔導士達が再びロイドを拘束すべく魔法を唱えるが発動しても発動してもそれはあっさりと粉砕された。ロイドが宙に浮き純白の七対の天使の翼を広げる。地上に天使の羽が羽ばたきで舞い落ちる。

そして、結界に向かってロイドはエターナルソードを天高く掲げる。ロイドを中心に周囲の空間が大きく歪み捻じれて、遂に結界に罅が入りそれは全体に広がってガラスが砕けるような音を立てて結界が粉々に砕け散った。

結界魔導師「結界が！？」

執務官一「馬鹿な！？八十人もの結界魔導師が張ったものをたった一人で！？」

その宙に浮いている天使を此処にいる結界魔導士達は忘れる事はないだろう……。
たった一人で自身の張った、多くの結界魔導師の張った強固な結界をいとも簡単に砕いたのだから……。

ロイドの天使の翼が大きく開き、彼の足元には見た事のない魔法陣

が現れる。

カイン「不味い！？」

クラウド「回避行動最優先！！」

カイン達が後退したその瞬間……

ロイド「ジャッジメント・レイン……」

ロイドの天使の翼から無数の光がレーザーの如く放たれた。
それは、幾重にも分かれて複雑な動きをして、結界魔導師や執務官、クロノへ、そしてなのは達の所にまで飛んで来た。
クロノは身の危険を察知して咄嗟に防御魔法を前方に集中して張った。凄まじい威力が腕に伝わってくる。魔力を注ぎ込んで堅くして何とか上に弾く事に成功した。

そして、レーザーの様に放たれた光は結界魔導師やもう一人の執務官の体を打ち貫いた。

執務官は当りどころが悪く、胸を貫かれて血を吹いて倒れた。他の魔導士達も結界を張ったお陰で上手く致命傷を避けたが腕や足、肩などを貫かれた。

結界魔導師「ぐあああぁぁぁぁぁぁぁ！？」

結界魔導師「腕が……腕がぁぁぁぁぁ！！！」

クロノ「くっ！！総員後退しろ！！怪我の浅い者は手を貸せ！！」

なのは達の方にまで飛んだ光をバルド達は彼女達の前に立って自身の得物を持って受け流す。
それはあらぬ方向に飛びビルを貫いて一撃で倒壊させ、雲を貫いて吹き飛ばした。

シグナム「な、何だ今のは……！？」

フェイト「動け…なかった……」

バルド「あいつ、完全に暴走に入りやがった……！！」

凄まじい魔力の波動がなのは達にも感じられた。背筋の凍り付く様な全身を突き刺すような感覚に体から冷や汗が出てくる。

ロイド「……」

ロイドの足元に巨大な魔法陣が現れる。幾何学の様な文字が描かれた魔法陣から凄まじい力を感じた。

カイン「くそ！！あの時の魔法を使う気か！？」

コレット「……」

それを見たコレットは何かを決心して一人頷いた。そして、天使の翼を広げて天に舞い上がりロイドと同じ目線にまで浮いた。

コレット「ロイド……ロイドを助ける為に、私も全力で行くね……」

コレットの胸元にあるクルシスの輝石が赤く輝く。先程までロイドの放つ魔力が全てを覆っていたがコレットの魔力が膨れ上がりそれを逆に呑み込んでいった。

そして、コレットから虹色の翼が消えて代わりにロイドと同じく純白の翼が一対だけ生えた。

フェイト「あれは……！？」

なのは「熾天使化……？」

そう、コレットも熾天使になったのだ。コレットの目も金色に光り輝く。

それを見たロイドは術を展開したまま剣を構えた。コレットもアクセルモードに姿を変えて自らの拳に虹色の魔力を纏わせて構える。

二人の姿が消えた。

そして、空間に響くのは何かが激しく激突する音、それがそこかし

こで起こった。

カイン「俺達も加わるぞセフィリア、クラウド、シリウス！！」

セフィリア「うん、分かってる！！」

クラウド「任務を再開する……！！」

シリウス「なる様になれってね！！」

カイン達が動き戦闘に加わる。セフィリアの神速の抜刀剣が放たれるがロイドはそれを受け止めて軌道を逸らして避けた。続けてクラウドがバスターモードで砲撃を撃つがそれを潜りぬけて斬りかかって来た。それをビームサーベルで受け止める。

カイン「壱の太刀、霞！！弐の太刀、朝菊！！」

一振りで幾つもの剣閃が起きてロイドに襲いかかる。ロイドはそれを全て弾くがそこに続けて放たれた三日月状の斬撃が飛んで来た。それを回避できないと判断したのか翼を自分の前に回してそれを受けた。

そして、動きの止まったロイドにシリウスが拳を構える。

シリウス「痛いけど、我慢だよ！！刹那の一瞬よ、我此処に全てを

賭ける！！光を超え、その拳、全てを薙ぎ払う！！これぞ秘奥義、無限掌！！！」

一撃一撃が大気を揺るがす拳をロイドに超高速で打ち込んでいく。
その速さは尋常ではなく残像を残しシリウスの手が２０にも３０にも見えた。その拳が当たる度に衝撃がロイドの体を貫通し後方の大気すら揺らいだ。浮かせたロイドに向かってタイミングを合わせて右手に魔力を集中させそれで一気に殴り飛ばした。
吹っ飛んだロイドは翼を広げて急制動を掛けて停止する。その体には怪我らしいものは見えない。

シリウス「……堅～～～っ！？」

その代わりシリウスが両手をプラプラさせて飛び跳ねた。
しかも、装備している神威に若干罅が入っている。

シリウス「げぇ～！？神威に罅入ったし！？」

カイン「シリウス！！」

カインの声にシリウスはハッとなって前を向くと、目の前には既にロイドが剣を振り上げた状態でいた。これは、くらったな～…と思ってシリウスは来るだろう攻撃に備えて覚悟を決めた。

だが、その剣は届く事は無かった……。

何故なら……

はやて「我が身に纏え、清浄たる恩恵の加護よ、フォースフィールド！！」

両者の間にはやてが割り込み、ロイドの剣撃を不可視の防壁で防いだからだ。

更に……

なのは「ディバインバスターーーー！！」

フェイト「トライデントスマッシャーーーー！！」

なのはとフェイトの魔法がロイドの左右から同時にして放たれ直撃、爆炎に包まれた。

シリウス「はやて！？何で！！？」

はやて「ロイド君止めるんやったらうちらも手を貸すで！！」

シリウス「いやいや！？今のロイドを見て分からない！？意識をなくして暴走してるんだよ！？だから、はやて達にも危害を加えて来るんだよ！？」

フェイト「そんな事は分かってるよ」

なのは「けど、私達は仲間だから……！！」

シグナム「仲間を助ける為なら、少しばかり危険だろうと気にはせん。寧ろ、本気のロイドと剣を交える事が出来るなどと滅多にない機会だ！！私の剣が何処まで通じるか、ふふふ……想像するだけで、燃えて来る！！」

ヴィータ「まあ、あたしは周りの皆が無茶しない様にするのが仕事だしな。特にシグナム辺りは全力で止めないといけない……」

煙が晴れて無傷のロイドが現れる。なのは達を見ても、その目には何も映っていない様で虚ろである。

正直言えば怖い……。今のロイドは仲間にすら躊躇なく攻撃を加えて来るだろう。

濃厚な殺気に手足が震える。

けど……

なのは「ロイド君だって、中できっと戦っている筈なの！！」

肌で感じる時折見せる不安定になる魔力。これはきっとロイドが中で止めようと必死になっている証拠だ。

なら、それを手助けするのが自分達の役目だとなのは達はデバイス

を構える。

彼女達の覚悟を感じ取ったのかシリウスはカイン達を見る。カインはやれやれと半ば折れた様で肩を竦めてしょうがないと言ったポーズを取る。セフィリアとコレットも頷いて、クラウドは既に彼女達も加えた戦術を頭の中で反芻している様だ。

シリウス「あれれ？皆いいの？」

カイン「なのは達は頑固なの知ってるだろ。一度決めたら何言ったって無駄だ」

なのは「にゃははは……」

クラウド「お喋りもそこまでだ……。来るぞ……！！」

アイネ「主、私がカバーします！！ですから、攻撃に集中してください」

ロイドが動き出すと同時になのは達も動きだした。

――――――――――――――――――――――――――――――

激しい空中戦が繰り広げられる。

それをガルドとバルドとティファが見ていた。

ティファ「ガルド、バルド。私も前線に加わります」

ガルド「分かった」

バルド「無茶はすんなよ？」

ティファ「任務了解……。戦闘開始します……」

ティファが飛び立ち、激戦に加わる。ティファが鏡花・水月をロングライフルに切り替えてロイドに向けて撃つ。
それを体を捩じって回避して魔神剣を放つ。そこにはやてが割り込み、フォースフィールドで受けて相殺した。その彼女の後ろからクラウドが飛び出して干将・莫邪で銃弾を連射する。
それを剣で捌くロイドになのはの砲撃が飛んできて彼はエターナルソードでその砲撃を真上に弾いた。
その隙にアイネとシリウスが接近して高速連打を繰り出すが全て受け流されて逆に魔力の波動で吹っ飛ばされた。

ロイドが二人に魔神剣を飛ばすがカインが斬撃を弾いて逆に雷撃を飛ばす。それを、剣をクロスさせて防御したロイドにコレットが背後から蹴りを入れて吹っ飛ばす。体勢を立て直したロイドにシグナムが斬りかかる。高速の刺突を紙一重で受け、避けてシグナムは剣を交え続ける。
そこにヴィータが死角から飛び掛かってアイゼンを振り下ろしロイドを後退させる。そこにフェイトがトライデントスマッシャーを放ち、見事に直撃させた。続けてはやてが殲滅魔法を惜しげもなく叩

き込み追撃を加える。だが、それでもロイドは怪我らしいものが一切なかった。

目の前で繰り広げられる激戦にティアナは……

ティアナ「私達の所為だ……」

スバル「ティア……」

ティアナ「私達が、ううん、私が不甲斐なかった所為でロイドがあの時あれを使ったんだ。もっと早く状況判断が出来たら、きっと……！！」

自分達が無謀にもパオラと戦った事でロイドは自分達を守る為にあの姿を取った。
それが、今回の大事に繋がるなんて考えもしなかった。

バルド「状況は劣勢か……」

ガルド「已むを得んな……原子よ、我が前に集え」

落ち込んでいるティアナとスバルの耳にガルドの声が聞こえた。
そちらを見ると、ガルドの前に原子が集束して一振りの真紅の槍が

完成した。

エリオ「ガルドさん!?それって、ゲイボルグ…ですよね!?何をする気なんですか!?」

ガルド「決まっている。これをロイドに投擲するんだよ」

スバル「っ!?そんな事したらロイドが……!?」

ガルド「ロイドなら仲間を傷つける位なら死んだ方がマシだと言うだろう。なら、これ以上被害が広がる前にあいつを止める」

ガルドが投擲の構えを取る。しかし、それは放たれる事は無かった。

何故なら、ガルドの前にティアナが両手を広げて立ち塞がったから……

ガルド「退け、ティアナ。攻撃の邪魔だ」

ティアナ「ふざけないで!!仲間を殺すなんて正気なの!?」

ガルド「それならば、お前はあいつを止められるか?嘗て俺達が全員本気になって挑み、満身創痍になってやっと止める事の出来たあいつを……?」

ティアナ「っ……!!やってやるわ……」

キャロ「ティアナさん！？」

ガルド「なに……？」

ティアナ「やってやるわ！！！ロイドがどんな状態だろうと、私が止めてみせる！！！」

彼女の啖呵を聞いて、バルドは、ほぉっと少しばかり驚いた様子。
一方ガルドは……

ガルド「く、くくく……。ふっ、ははははははは！！！」

突然笑い出した。そして、

ガルド「なめるなよ、クソガキが……」

ティアナ「がっ！？」

急にガルドの表情が不機嫌になったかと思った時にはティアナは地面に叩き伏せられていてその喉元にゲイボルグが当てられていた。

スバル「ティア！」

ガルド「お前、本気で言ってるのか？ふっ、本当の戦場も知らない

小娘風情が、あの男を止めるだと？冗談にしては些か度が過ぎるぞ……」

ティアナ「私は……本気よ！！だかｒ「黙れ……」っ！？」

自身の覚悟を否定されたティアナは反論しようとしたがガルドが彼女の喉元に更に強く穂先を当てる。
少しばかり皮が裂けて血が垂れる。

ガルド「本当ならお前みたいな夢物語を語る奴は殺したくなるが、生憎と、その考えと同じ考えを持つ馬鹿を俺は一人知っている……」

ガルドは視線を上げる。ティアナも自然とその方向を見ると……そこには、仲間と戦っているロイドがいる。

ガルド「ロイドも、残念ながらお前と同じ様に夢物語を、理想論を語るからな……。だが、あいつは他のどんな夢を語る馬鹿とは違ってその自分の求める未来を己の手で掴んできた。ティアナ、お前はどっちだ？夢見る屑か、夢掴む頂を目指す者か…」

ティアナ「……」

ガルドの問いにティアナは無言で彼に視線を飛ばす。それをガルドは真っ向から受け、暫し両者の間で無言の会話が続いた。

そして……

ガルド「……ふっ」

突然ガルドが柔らかく笑うとティアナの喉元に当てていたゲイボルグを引き、原子に戻して消した。
ティアナは、驚いたが直ぐに起き上がりガルドを見る。ガルドはティアナに手を翳すとその手から暖かな光が放たれティアナに纏わり、彼女の体を癒す。喉に付いた傷が一瞬で消えた。
そして、体の奥から力が湧き上がって来た。

ガルド「何をする気かは知らないが、チャンスは一度きりだ。……絶対に好機を逃すな」

ティアナ「……分かってるわ！！」

ティアナは頷いてビルから飛び降りる。途中で壁にアンカーを撃ちこんで地面に着地しロイド達の戦っている所目指して駆け出す。

そこに……

スバル「ティア！！」

エリオ「待って下さい！！」

キャロ「私達も行きます！！」

ティアナ「みんな！？ってかスバル、あんた大丈夫なの！？」

スバル「えっと……戦う事は出来ないけど、ティアの手伝いくらいは出来るよ！！」

ウィングロードに乗ってティアナと並走するスバルは右手を庇うような恰好だ。

ティアナ「みんな、みんなもいれば確実にロイドを止められるわ！！」

スバル「えっ！？ホントに！？」

ティアナ「殆ど博打だけど…出来るわ！！だから、手を貸して！！」

スバル「うん！！！任せてよ！！」

エリオ「はい！！任せてください！！」

キャロ「で、出来る限り頑張ります！！」

ロイドを元に戻す可能性のある方法……それは殆ど博打に近い。だが、彼が暴走したのはエクスフィアだけの所為ではない。

もう、こんな賭けはこの先二度としたくない。チャンスは一度きり……それを逃す気はない！！

スバルのウィングロードに乗せてもらいながらティアナはそう思い、スバル達にその博打を語るのだった。

# 第五十五話（後書き）

如何でしたか？ロイドのオリジナル能力、大熾天使化（アークセラフィム）。所謂、天使化の強化版です。それだったら、大天使化でも良くね？っと思いますが、それだとなんかワンパターンな気がしたので最上級の者にしてしまいました。

っと言う訳で、ロイドにはぶっちぎってもらいました♪あとコレットも熾天使にしてみました。違いは、ロイドが七対の純白の天使の翼をもっていて、コレットは一対だけです。しかし、二人とも規格外の戦闘能力を誇るのは事実……。

オルマ「なあ、作者。オレッチの扱い酷くね？出てきたのたったの三話しかないんだぜ！？」

だって、君はロイドのやられ役として前々から考えてた人だもん。

オルマ「えええええええええええええ！？ってことはオレッチの出番はもう無し！？」

シリウス「敵キャラの扱いが酷い……」

カイン「悪魔の所業だな……」

うん、お疲れ様～。と言う訳で使徒が少し消えてしまいましたが、まあ大丈夫でしょう。

次回の更新も早くできるように頑張りますが、最近の忙しさは尋常じゃねえ。

いや、それは俺が課題を残したのが悪いのか……。時間を作って早

く更新できるようにこれからも頑張りますので、これからも宜しくお願いします!!
質問、感想などは受け付けておりますので何か気になる事があれば書いてくださると嬉しいです。

なめ猫様、再び感想ありがとうございます!!これからも、テンションハイで頑張りますよ～!!

では、また!!

一同「大いなる力で未来を切り開け!!」

# 第五十六話（前書き）

五十六話、更新！！

いやはや今回は難産だった……。

シリウス「執筆速度が遅いよ、何やってんの！？」

湿気が……湿気が酷くてまともに頭が動かないんだよ！！自分が何書いてんのか分かんなくなるし、頭沸騰するし、汗止まらなくてイライラするしでもう大変なんだぞ！？分かりますよね皆さん！！

カイン「そんな理由なんぞ知るか」

くっ、自分のキャラに軽くあしらわれてしまった……ｏｒｚ

と言う訳で、本編をどうぞ！！

# 第五十六話

なのはの砲撃が、フェイトの斬撃が、コレットの天使術が、クラウドの砲撃が、ティファの一斉射撃が、カインとシグナムの剣戟が、シリウスとアイネの拳が、ヴィータのハンマーが、はやての殲滅魔法が一斉にロイドにめがけて放たれた。

しかし、

ロイド「ジャッジメント・ノヴァ……」

ロイドを中心に眩い光が放たれると砲撃も魔法も射撃も剣戟も全てが弾かれ、打ち消された。
そして、そのまま衝撃波がなのは達を吹き飛ばした。

カイン「くっ！？前回以上に暴走の度合いが増している！！」

なのは「全員の攻撃をたった一度の攻撃で……！？」

かなり長時間戦っているのでなのは達は呼吸を荒くしている。

それを見てカインは苦虫を噛み潰した表情になる。

カイン（やばいな……。なのは達はもう限界に近い、あれを使うべきか……）

だが、これはなのは達には見せたくない。忌むべきこの力を解放するのに躊躇するカイン。

ロイド「……千夜を超え、今此処に聖なる息吹を……」

クラウド「っ！？あいつ、戦いながらあの術を……！？」

ティファ「……状況の悪化を確認！」

ロイドの真上に巨大な……途轍もなく巨大な幾何の文字が描かれた魔法陣が現れた。

そこから感じる魔力は肌に突き刺さるほどに刺々しく、あまりにも神々しかった。

はやて「な、なんて魔力や！？」

アイネ「来るっ！？」

ロイド「ゴッドブレス・エンド……」

嘗て、グランディオンで使用された、街を滅ぼす魔術が天から巨大な質量をもって落ちてきた。

レイジングハート［物質破壊系…威力、測定不能！］

なのは「うそっ！？」

コレット「ロイド！！」

ヴィータ「コレット！？」

一人コレットだけが飛翔する。そして、全身に魔力を漲らせて天使の翼が羽ばたく。

コレット「ホーリーメイル！！」

彼女の前に大きな聖なる盾が現れる。その盾に凄まじい魔力の塊の術が激突、大気が震え大地は激しく振動し地割れが起きる。

コレット「ロイド！！目を覚まして！！」

カイン「くそっ、ロイド！！お前の心はそんなに簡単に飲まれるのか！！！」

クラウド「お前の意思は……まだ消えていない筈だ！！」

カインがサイフォスと雷切を持ち高速で交互に振るい断続的に三日月状の斬撃を放つ。クラウドが干将・莫邪を合わせてバスターモードに切り替えて出力を二百パーセントにして発射して術にぶつける。

なのは「全力全開！！スターライトブレイカーーーー！！！」

フェイト「雷光、一閃！！プラズマザンバーブレイカーーー！！！」

はやて「響け終焉の笛、ラグナロクブレイカーーー！！」

アイネ「響け終焉の笛、ラグナロクブレイカーーー！！！」

なのは達の最大級の砲撃も加わり巨大な光にぶつかる。それでも、光は消えずに徐々に押し返してきている！！

なのは「くうぅぅぅ！！」

フェイト「そんな！？皆の砲撃を合わせているのに！？」

はやて「なんちゅう威力や！？」

アイネ「主！！このままでは、破られます！！」

シリウス「俺も加わって……絶望の咆哮よ、大地を裂き、天を貫け

！！デアボリックハウリング！！」

ティファ「一斉射撃、フルバースト！！」

シグナム「翔けよ隼！！シュツルムファルケン！！」

ヴィータ「ツェアシュテールングス、ハンマァァァァァァ！！！」

更にシリウス、シグナム、ティファ、ヴィータの攻撃も合わさる。
コレットはホーリーメイルを解除してカイン達の下まで下がり天使術を発動する。

コレット「聖なる天の叫びよ、我が前を阻みし厄災を打ち破らん！！エンジェルロア！！」

コレットの前に天使が現れる。それは不思議な歌声を奏でると前に幾何学の魔法陣が展開され、直後、巨大な光が放たれた。ロイド一人の攻撃に全員の攻撃で対抗する。

そして、巨大な光同士が相殺し、大爆発が起きる。その衝撃でなのは達は吹っ飛び地面に叩き落とされた。

カイン「くっ！！」

思った以上にダメージが通り、皆起き上がるのに時間が掛かっていた。そこに、ビルにぶつかって体が痺れて動けなくなっていたなのはの目の前にロイドが降り立つ。

なのは「ロイド…君……」

ロイド「……」

カイン「ロイド、止せ！！！」

ロイドがエターナルソードをゆっくり振り上げる。だが、彼の虚ろの瞳からは涙が流れている。

コレット「ロイド！！だめえぇぇぇぇぇ！！！」

ロイド「……っ！！！」

コレットの叫びが聞こえると同時にロイドが剣を振り下ろす。なのはは覚悟を決めて来るだろう痛みに備えた。

だが……そこに、

ティアナ「ロイド！！止まりなさい！！！！」

ティアナが両者の間に割り込んできた。そして、その剣は…ティアナを両断…出来なかった。

彼女の顔スレスレを通り、背後のビルの壁を斬って途中で止まっていた。

なのは「ティアナ！？」

ティアナ「ロイド、もうそこで止まりなさい！！アンタはこれ以上戦う必要はないわ！！」

ロイド「ティ……アナ…か…？に、逃げろ……」

ティアナ「そういう訳にはいかないわ。私とスバルの所為でロイドがこんな風になったのならそれを止める為に私達はアンタを止める！！」

ティアナの賭け、それは、自分とスバルの無事をロイドに見せる事。ロイドは、大熾天使化を使用する時、自分達を守る為に使用した。なら、危機が去った今、自分達の無事を暴走しているロイドに見せれば止められると思ったのだ。最早、博打もいいところである。

スバル「ティア！！」

ティアナ「スバル、エリオ、キャロ！みんなの魔力も貸して！！」

エ・キ「「は、はい！！」」

スバル「うん！！ティア、全力で行くよ！！」

ロイド「くっ……！！これ以上は、止められない……！！」

ティアナ「ロイド、覚悟しなさいよ。少し痛いどころじゃ済まないからね！」

ロイド「ああ……全力で撃ってくれ…！！」

ティアナ「スバル！！！」

スバル「おう！！！」

スバルの魔力がエリオとキャロの魔力が、ティアナに流れる。彼女はクロスミラージュをロイドに向かって構える。魔法陣が出現し魔力が膨れ上がる。

ティアナ「ファントムブレイザー、フルドライブ、ゼロ距離……シューーートーーー！！！」

ロイドの目の前で放たれる巨大な砲撃。それは彼を包み込み、天に向かって飛んで行った。

ティアナは更にカードリッジをロードして出力を上げる。何度も何度も薬莢が排出されて砲撃の勢いが更に上がる。その反動に耐えきれなくなってきたのかクロスミラージュに罅が入り始めた。

それでも、ティアナはカードリッジをロードしまくる。そして、最

後の一発をロード、薬莢が宙に舞い上がる。

ＦＷ陣「「「「いっけーーーーー！！！！」」」」

最大出力の砲撃が放たれ、光で視界が白に染まる。砲撃が治まり、クロスミラージュから火花と白い煙が上がる。

そして、目の前には立っているロイドが……

ロイド「すまねえ、みんな……」

その彼はそう呟いたあとに前のめりに倒れ込む。ティアナとスバルは慌ててロイドを支える。

彼の背には白い天使の翼は、なかった。彼の左手の甲にあるエクスフィアも赤い色ではなく元の青い色に戻っていた。

シグナム「止まった…のか……？」

コレット「ロイド！！」

コレットは直ぐに駆けよりロイドの容体を確認する。そして、大事には至っていないのが分かったのかホッとした表情になった。その光景を見て回りの仲間も胸を撫で下ろす。

それを遠くで見ていたガルドとバルドは……

ガルド「ふっ、あいつは夢を掴む頂を目指す者か……」

バルド「お前、ティアナを焚き付ける為に態と挑発したんだろ？」

ガルド「さあな？」

バルドの問いにガルドは不敵な笑みを浮かべて流した。

---

ロイドの暴走から数日が経った。

彼は今は暴走の影響か体の調子が悪く今も医務室で療養を続けている。

コレット「ロイド、だいじょぶ？」

ロイド「心配すんなって、もう動けるくらいには回復してきたからさ」

そうは言うもののまだ普段通りの動きが出来るまでには回復していない。

そんな彼をコレットは甲斐甲斐しく看病しているのだ。

コレット「はい、あ～ん♪」

ロイド「……コレット、それ恥ずかしいから止めてくれないか？」

コレット「だめだよ。元気になるまでは私が看てるからね♪」

ロイド「うあ～～、背中がむず痒くなる！！でも、サンキューなコレット」

コレット「うん♪」

そんな風に桃色世界をトランザムバーストする二人。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

このバカップルめ！！！

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

その頃、シグナムは何時もの公園に来ていた。

シグナム「……そこにいるのだろ、ジーク？」

ジーク「気付いていたか……」

木の陰からジークが姿を現す。ただ、何時もと様子が違うのに気付いた。

シグナム「如何したのだ？何時になく気配を殺していた様だが……」

ジーク「烈火の騎士よ、これが最後だ……」

シグナム「如何いう事だ……！？」

ジーク「俺の事を探っている者がいてな。これ以上貴方に接触するのは危険だ」

シグナムはそれを聞いて驚くがよくよく考えればそれも当然の事だ。自分とジークは敵同士。その二人が時々こうして出会っていれば怪しまれるのも当たり前である。

ジーク「次に会う時が……決着の時だ。日時は一週間後の深夜、場所はこの公園の近くの海上だ……」

シグナム「そうか……」

ジーク「用はそれだけだ…では、な……」

シグナム「ま、待て！！」

背を向けて姿を消そうとしたジークをシグナムは呼びとめる。歩むのを止めて背を向けたまま立ち止まる。

シグナム「お前の身が危ないのなら…私達の所に来ないか！？」

ジーク「……」

シグナム「お前の事は、私が主達に頼む！！だから…！」

シグナムの願いを聞いてもジークは首を横に振った。

ジーク「……残念だが、それは出来ない。あそこには、見ていないといけない者がいるからな……」

シグナム「エリスとクラレンスか……？」

ジーク「あの二人はまだ幼い。今は白いキャンバスでいるが、この

先、白にも黒にもなれる。俺は、あいつ等を正しい道に進ませねばならん。……ふっ、何時の間にかあいつ等は俺の中でそういう存在になった」

シグナム「なら……！！」

ジーク「烈火の騎士よ……。願うのなら、勝ち取れ……。俺は勝負に決着がついた時、貴方が勝てばそれに従う。だが、勝った時、もう貴方の前には現れる事はない。では……」

再び歩き出したジークをシグナムは呼びとめようとしたがもう彼は止まる事はなく木々の向こうに姿を消した。

残されたシグナムは、伸ばした手を戻してそれを自身の胸の場所に当てて彼の消えた場所を見つめるしかなかった。

---

デバイスルームでシャーリーは頭を抱える。彼女の前には最早原形を留めていないほどに大破したリボルバーナックルとあまりにも酷使したことで中破したティアナのクロスミラージュが置かれている。

なのは「二人のデバイスは、治せる？」

シャーリー「ティアナの方は時間をかければ…何とかできそうですが、スバルの方はパーツを取り寄せないと修理の仕様がないですよ……」

スバルとティアナが戦った使徒、パオラ。彼女の猛攻の前にリボルバーナックルは完膚なきまでに破壊され、修理するにはパーツを取り寄せねばならない。

シャーリー「二人の戦った相手って、格闘術を使用してたんですよね？」

なのは「そうみたい。けど……」

シャーリー「そうですね。普通、格闘攻撃くらいでは、デバイスにここまでダメージを与える事なんて出来ない筈です」

普通、デバイスは敵からの打撃などに対して壊れないようにそれなりの強度を持っている。

それこそ、なのはの砲撃クラスで直接ダメージを与えたら壊せると思うが……。

それほどに頑丈なデバイスに更にスバルのように格闘用のアームドデバイスは他の種類のデバイスより幾分か強度も高いのだ。その彼女のデバイスすら此処まで破壊されて、なのはだけでなくシャーリーも驚愕していた。

一度、ティアナがデバイスに辛うじて撮影した相手の動きを取り出してフェイト達と見たが、その時は驚きよりも唖然としていた。

使徒、パオラの戦闘技術は今まで出会った使徒の中でも最も苛烈で尚且つ、動きが捉えきれなかったのだ。腕が何本も見えるほどの連打や魔力とは違う力、アイネ曰く『覇気』というものらしい。その力で二人を圧倒していたのが終始、映像で映し出されたのだから。

なのは「兎に角、二人のデバイスの修復を急ぐしかないよ……」

シャーリー「そうですね……」

悩んでいる時間はない。今は、二人のデバイスの修復に専念するしかない、と二人は判断し修復を開始するのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

～？？？～

日が進み一週間が経った。

場所は変わって使徒の本拠地。ジークは一人、暗い廊下を歩いていた。

決着をつける事をエリスやクラレンスに語った時は物凄く怒られた。だが、その彼女達は今はぐっすりと眠っているだろう。今の内に移動するかとジークは考えていた。

だが……

ガイル「よお、そんなに急いでどこに行く気だよぉ？」

ジーク「ガイルか……」

廊下の先でガイルが壁に背を預けて腕を組んで立っていた。何時もの様にニヤニヤと笑みを浮かべながら此方に近づく。

ガイル「なんだよぉ、そんなつまんねえもの見ちまったって顔はよぉ？」

ジーク「……そんな顔をしてたか？」

ガイル「いやいや、普通にしかめっ面だったっての……。んで、どこ行く気なんだよぉ？」

ジーク「……」

ガイル「だんまりかぁ？仲間にも秘密にする程の場所かぁ？」

ジーク「……用はそれだけか？俺はお前の様に暇ではない。失礼する……」

ジークはその問いかけを無視してガイルの横を素通りしようとしたが……一瞬感じた殺気に地を蹴って後ろに下がる。それと同時にジークの今いた場所に大剣が振り下ろされていた。

ジーク「…何の真似だ……？」

ガイル「な～に、仲間の反応速度の確認だよぉ。まあ、今のに反応できるんなら十分な評価に値するねぇ、ハッハッハ～」

ジーク「……くだらん」

ガイル「はぁ？」

ジーク「貴様の様なヘラヘラとした者に付き合っているほど俺は暇ではない。退(の)け……」

フンッと鼻で笑ったジークは地に下ろされた大剣をバルムンクで軽く振り上げて上に弾き上げて退かし、さっさと廊下の先に歩いて行った。

彼の姿が闇に消えたあとに宙をクルクルと回っていた大剣がガイルの脇スレスレの地面に突き刺さる。

ガイル「おぉ～怖い怖い。けどよぉ……」

視線を彼のいなくなった先に向けてニヤリと不気味に笑う。

ガイル「今のお前の選択肢は……間違ってるぜぇ～。…おい、お前ら」

その声に影から三人の人影が現れた。それは、ミッドを襲撃したあの三人組だった。

ガイル「獣狩りだ。裏切り者を始末するぜぇ～、ヒャヒャヒャヒャ！！」

シャル「邪魔するなら殺してもいいんでしょ？」

クロ「ですね」

オル「うっせーぞお前等！」

ジークの背後に魔の手が迫ってきていた……。

―――――――――――

同時刻、シグナムは公園の近くの海上でバリアジャケットを着て待っていた。
周囲に味方はいない。何故なら、彼女は決闘の事を誰にも話さずにたった一人でこの場に来ていたのだ。

もし、敵が複数来たら…？などとは考えていない。ジークは嘘は吐かない。彼は必ず一人でこの場にやってくる。数回しか会った事はないが、剣を交えてそれは分かっていた。

シグナム「……来たか」

ジーク「すまない、待たせたか？」

シグナム「いや、私も今来たところだ…」

話だけなら何処にでもいそうなカップルの会話の様にも聞こえる。
しかし、今の二人は普段以上に表情が硬い。

ジーク「これが最後だ。今ある俺の全てを賭けて貴方を超える……」

シグナム「それしかないのか……？」

ジーク「なに……？」

シグナム「それしか、私たちには道はないか！？決闘ならこんな形でなくとも…私たちと一緒に来れば、幾らでも出来るだろう！？これが、お前との戦いの最後だなどと……私は、認めたくない！！」

シグナムの悲痛な想いがジークに放たれる。これが最後なんて嫌だ！！もっと、共に剣を交えたい！！もっと遥か高みまで二人で登りたい！！そんな彼女の想いがその言葉からでも感じ取ることができた。

だが……

ジーク「それは不可能だ。今日、此処で勝敗を決める！勝者は、俺か、貴方、どちらかだけだ！！」

シグナム「エリス達は如何する気なのだ！？彼女達はお前に懐いている！！なら、あの二人と一緒に……！！！」

ジーク「お喋りはそこまでだ……。剣を構えろ、烈火の騎士……」

シグナム「……っ！……分かった」

シグナムはレヴァンテインを構える。

そして、

シグナム「決めたぞ。私はお前に勝ったら、お前も、エリスもクラレンスも一緒に六課に連れていく！！」

ジーク「果たして、それは出来るのか？」

シグナム「出来るか出来ないか、ではない……。実現させるまでだ！！！」

二人が同時に踏み出し、一気に距離を詰めてゼロにする。振り上げた二人のデバイスは同時に振り下ろされて両者の間で激突し激しい火花を散らす。

ジークのデバイスを弾き上げて蹴りを繰り出す。それを彼は盾で防御し衝撃でシグナムが弾き飛ばされた。吹っ飛ぶシグナムに魔力を爆発させて一気に距離を詰めて斬りかかる。それをレヴァンテインで受け止めるが体勢が整っていない状態で受けたので海に向かって弾き飛ばされた。

海面に落ちる寸前で止まり得物を構え直して再び突撃、ジークに斬りかかる。ジークはそれを受け流して回し蹴りを放ちそれはシグナムの脇を捉える。

シグナム「くっ！？」

ジーク「ふんっ！！」

振り抜かれて大きく後ろに飛ばされる。なんとか踏ん張り止まる事が出来たがそこにジークが接近して来る。

ジーク「蒼電一閃！！！」

ジーク必殺の一撃が迫って来る。咄嗟にシグナムは自分の前にレヴァンテインを構えて受け止めるが受け止めきれずに振り抜かれた。

ジーク「はあっ！！」

シグナム「ぐあっ！？」

猛スピードで落下して海面に叩き落とされた。海面に落ちたシグナムの行方を空中でジッと見るジーク。

ジーク「……まだ、だな」

シグナム「はあああああああぁぁぁぁぁ！！！」

海面を割ってシグナムが飛び出しレヴァンテインを振るう。それをジークはバルムンクで流し、受け止める。

だが、シグナムは目にも止まらぬ速さでレヴァンテインを振るい続ける。徐々に対応が遅れ始める。

シグナム「そこだあっ！！」

ジーク「なめるなっ！！」

二人が同時にデバイスを振るった。

シグナム「くっ！」

ジーク「ちっ！！」

両者の一撃は互いの脇腹を掠める。一度距離を取る為に後退する。痛みで脇に手を当てる。

その痛みを堪えて肉薄して激突、鍔迫り合いになる。

シグナム「くっ、何故だ……。何故それほどの力を持っていて、使徒に協力しているのだ！？」

ジーク「これが、貴方と戦うに最も適した選択と思ったからだ……」

シグナム「そんな事しなくとも…私なら何時だって！！」

ジーク「互いが敵同士だからこそ、全力を出す事が出来る！！敵だからこそ、俺達は互いを超える為に、倒す為に全力を出す事が出来るのだ！！」

シグナム「そこまでして、私と戦いたいのか！？」

ジーク「今更何を言う！！これが、俺達の運命だ！！！」

シグナム「運命、だと……！？」

ジーク「そうだ！貴方があの時、夜天の守護騎士として選ばれたあの日から…こうなる運命は決まっていた！！」

シグナム「教えてくれ、ジーク！！私は、お前と一体如何いう関係だったのだ！？」

ジーク「前にも言った筈だ！！俺と貴方は師と弟子の関係だ！！それ以上もそれ以下もない！！」

シグナム「そうではない！！そうではないのだ……！！私が言いたいのは……！！」

互いの剣閃を避けて、受け流して、弾きながら二人は言葉を投げ合う。バルムンクを体を仰け反らせて回避して、突きを放つ。それをジークは蹴りで上に打ち上げて弾き回転斬りを繰り出す。それを、身を屈めて回避してそこから鋭い斬り上げを繰り出す。
ジークは体を逸らして回避して回し蹴り、シグナムもそれと同時に回し蹴りを繰り出し二人の蹴りがぶつかり合った。その反動を利用して後方に飛び退きシグナムはシュランゲフォームにジークはファ

ングフォームにデバイスを切り替える。

シグナム「私は、お前を知りたい！！」

ジーク「なにっ！？」

シグナム「お前の事を全て…私は分かりたい！！私の事を知るお前の全てを理解したいのだ！！」

飛んでくるファングを弾き、レヴァンテインを振るう。不規則な動きで飛んでくるそれをジークは弾くが軽く肩を掠めて苦悶の表情を浮かべる。だが、止まることなくシグナムはレヴァンテインを振るい続ける。縦横無尽に襲いかかるまさに蛇の様に予測できない動きでジークを抑え込もうとするが……

シグナム「ジーク！！私にお前の全てを教えてくれ！！」

ジーク「ふざけるな！！」

ジークが周囲に魔力を放出し、その波動でレヴァンテインが弾かれる。その隙にジークはファングを飛ばしシグナムに襲いかかる。

ジーク「今の俺と貴方は敵同士だ！！貴方に教える事など、なにもない！！！」

ファングが多方向から同時に斬りかかる。それをレヴァンテインを元に戻して弾くが背後から来た一つを捌き切れずに腕を掠める。苦痛で顔を歪める彼女に魔力刃を展開したバルムンクで斬りかかる。それを、辛うじて受け止めるシグナム。腕から血が滲む。

シグナム「くっ……！」

ジーク「俺は、敵だ！！貴方と雌雄を決する、それだけの目的で戦う兵士だ！！！」

シグナム「ふざけるなっ！！」

ジーク「っ！？」

シグナムは魔力を爆発させてジークのデバイスを弾く。がら空きの胴に蹴りを入れて吹っ飛ばしレヴァンテインを構え直す。

シグナム「お前は、ジークは、それでいいのか！？」

ジーク（なんだ！？烈火の騎士の魔力が上がった！？一体何故っ！？）

シグナム「お前がその様な理由で私と刃を交えるか！？」

ジーク「決着を付けると前にも言った筈だ！！俺達はそうなる運命だった！！」

シグナム「そんな事は如何でも良い！！お前は、それいいのかっ！？」

ジーク「如何いう事だ！？」

シグナム「お前は、私の過去を知っている……。それはいい。だが、それを打ち明けずに自分の中だけに押し留めているのは間違っている！私は、お前の事も、過去の私の事も全て知りたいのだ！！！」

シグナムが肉薄する。ファングを飛ばすがそれを彼女は紙一重で避けたり、弾き、受け流す。

そして、ジークの目の前まで来てレヴァンテインを振るう。それを受け止めるジークはその感覚に驚愕する。先程よりも威力が段違いに上がっているのだ。

シグナム「だから、私と共に来い！！私と、私の仲間や家族と共に、共に歩もう！！」

ジーク「っ！？」

その言葉を聞いてジークの目が大きく見開く。それは、彼が初めて彼女に敗北して死を覚悟した時に聞いた言葉に似ていたから……。

――ジークと言ったか？なら、私と共に来い！！私と、私の仲間と

共に、共に騎士の道を歩んでみないか？――

ジーク「うあああああああああああああああああああ！！！！！」

ジークが咆えてシグナムを吹っ飛ばす。バルムンクを元に戻しシグナムに向かって突撃する。

ジーク「俺は、貴方を超えるだけ、その為だけに生きているのだあぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

シグナム「この分からず屋があぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

両者の剣撃が高速でぶつかり合う。互いのバリアジャケットを何度も掠めて傷だらけになる。

シグナム「ジーーーーク！！！」

ジーク「烈火の騎士ーーーー！！！」

魔力を放出してぶつかる両者。衝撃で同時に大きく後ろに吹き飛ぶ。

互いの息が荒い。

どうやら、あと一撃が限界の様だ。

シグナム「これが最後だ、これでお前との決着を付ける……」

ジーク「いいだろう。俺の全てを、これに込める！！」

二人の魔力が激しく猛る。両者がデバイスを構える。だが、シグナムの構え方が普段と違っているのに気付いた。

ジーク「あの構えは…まさか！？」

その構えをジークは知っている。嘗て、彼女がベルカ時代でその名を広める要因となった必殺の剣！！

シグナムは、その構えを知ったのはこの戦いの最中だった。ジークとぶつかり合っている時に不思議と頭の中に鮮明に浮かんで来たのだ。だから、彼女は最後の一撃をこれに賭けて見る事にしたのだ。

レヴァンテインを両手で握り、右腰の近くにまで下げて軽く引く。突進力を上げる為に姿勢を低くする。魔力が巻き起こり彼女のポニーテールを揺らす。

シグナム「行くぞっ！！」

ジーク「……こい！！」

二人が同時に突撃、カードリッジがロードされ薬莢が宙を舞った。

ジーク「蒼電、一閃っ！！！」

ジークの必殺の一撃がシグナムに放たれる。シグナム目掛けて迫る刀身。それを彼女は寸前で左足を踏ん張り、姿勢を更に落としそこから、レヴァンテインを振り上げてバルムンクの刀身の腹にレヴァンテインを当ててそのまま、回りながら受け流した。そして、そのまま遠心力と突進を抑えた時に起きる反動を利用して一気に回転し……

シグナム「皇竜一閃っ！！！」

横に一気にレヴァンテインを振り抜いた。二人の間で暫しの静寂が起こる。

ジーク「……相手の必殺の…一撃を、受け流し、その威力を利用し…自身の回転速度を上げて遠心力と共に振り抜く、奥義・皇竜一閃……か」

シグナム「お前と刃を合わせていた時に頭の中で浮かんだのだ。その言葉からすれば、これは、昔の私が使っていた様だな？」

ジーク「ああ、貴方の生み出した、ベルカ時代で貴方が若くしてその名を世に広げた、必殺の剣技……」

よもや、最後の最後で彼女の最強の魔法が復活するとは、ジークはそう思っていたが、それでも心の奥では満足していた。これこそ、自分が唯一人、師として仰いだ女性だと……。

シグナム「ジークよ。私の勝ちだ……」

ジーク「そう、だな……。ならば、俺は貴方に従うだけだ……」

シグナム「ならば――」

シグナムはジークに共に六課に来るように、と言おうとした。その時だ……！！

突如、シグナムの背後から赤い砲撃が飛んで来たのだ。

シグナム「なにっ！？」

突然の攻撃に反応が遅れた。直撃を覚悟して目をつぶり衝撃に備える。

ジーク「シグナムっ！！！」

しかし、ジークが咄嗟に彼女を引き寄せ自分の背を盾にした。そして…その背に砲撃、いや、ビーム砲が直撃した。

ジーク「ぐあああああっ!?」

シグナム「ジークっ!?」

ジーク「烈、火の騎士…無事か……？」

シグナム「私の事よりも自分の心配をしろ!?」

彼の背はバリアジャケットが弾けており、酷い火傷が出来ていた。急いで、応急手当をしようとするがそれを彼は手で制し砲撃が飛んで来た方を睨む。

クロ「へったくそ!!何処撃ってんだよ!?」

シャル「アイツうざい!!何で割り込むんだよ!?」

オル「うっせーぞお前等!!」

そこには、オル、シャル、クロがおり、今の砲撃はシャルの放ったものの様だ。

シグナム「貴様等は…！？」

オル「管理局の女！！テメーを落す！！」

シャリ「殺してもいいんでしょ？」

クロ「ちゃっちゃと殺っちまおうぜ」

ジーク「……ふざけるな」

シグナム「ジーク……？」

ジークから明確な殺気が溢れる。

ジーク「俺と烈火の騎士の聖なる戦いに水を差すな！！！」

ジークが魔力を爆発させ三人に向かって肉薄する。三人は突然此方に飛んでくるジークに驚くも直ぐに散開してビームライフルを撃って来る。それをジークは背中の痛みなど何でもない様に素早く動いて回避する。

クロ「目障り！！」

シャリ「コイツうざい！！殺してもいいでしょ？」

オル「ああ、こいつも抹殺対象だ。落ちやがれ！！」

オルのシュラークが飛んでくる。それを紙一重で避けるとそこにクロのミョルニルが飛んでくるがそれをバルムンクで弾き上げる。その隙にシャリがフレスベルクを撃つ構えを取る。

シャリ「お前うざい！！死ねっ！！」

放たれたフレスベルクはジークを捉え彼は爆炎に包まれた。しかし、

ジーク「おおおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉ！！！」

シャリ「なっ！？」

ジークは無事でバルムンクで煙を吹き飛ばして突っ込んできた。シャリはニーズホックを慌てて持って迎え撃とうとしたが、それよりも早くジークがシャリの両腕を一振りで斬り落とし頭を掴んで押さえ付け胸をバルムンクで貫いた。

シャリ「があああぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

ジーク「ふんっ！！！」

バルムンクを引き抜いて離れる。胸を貫かれたシャリはそこから鮮

血を噴き上げる。鎧装が火花を起こして海に落ちる途中で何かに引火して大爆発。シャリは爆発に呑まれて消し飛んだ。

クロ「何やってんだよ!?」

オル「あの馬鹿が!?」

ジーク「次は……貴様ｒ「そうはいかねぇな、裏切り者」っ!」

その声にハッとなって振り向くとそこには、ガイルがおり、大剣を振り下ろした。
それはジークの左肩から右脇まで斬り裂き、そこから鮮血が吹き出した。

ジーク「がはっ!?」

シグナム「ジーク!?」

ガイル「駄目駄目だなぁ、ジークよぉ？ヒャハハハ!!」

大剣を肩に担いでニヤニヤと笑うガイル。そして、その姿は直ぐに消えて気付いた時にはシグナムの背後を取っていた。咄嗟にシグナムはレヴァンテインを振り向きざまに振るうが、それを弾かれてしまいそこにバインドを何重にも掛けられ動きを封じられた。

シグナム「くっ！？」

ガイル「へぇ～、アンタが烈火の騎士か……」

シグナム「貴様、使徒だな！？」

ガイル「ウヘヘ、俺は第十七の使徒、ガイルってんだ。中々に良さそうな容姿だと思ってたが、こりゃ予想以上に良い珠だぜ」

シグナムの顎を軽く持ち上げてその顔を見てニヤリと笑う。その厭らしい眼つきに凄まじい嫌悪感が体を駆け巡る。

ジーク「ガイル…彼女を離せ！！」

ガイル「おっと、そうはいかねえな。こいつは俺達の敵、離したら何されるか分かんねぇからなぁ～。それに、裏切り者の言う事なんて聞けるかよぉ」

彼に向かってクロとオルがビームライフルとミョルニルを放つ。それを受け流すが体に激痛が入り動きが鈍りそこにクロのミョルニルが彼の腹を捉えた。出血が更に酷くなり彼の胸は血で真っ赤に染まる。

ジーク「がっ！？」

シグナム「ジークっ！！」

ガイル「惨めだなぁ、ジークよぉ。テメーは此処で終わりだ」

ジーク「待てっ！！貴様、烈火の騎士を如何する気だ！！」

ガイル「決まってんだろぉ？少しばかり遊んでから殺すんだよぉ。じゃあな、ジーク。お前の大事な師は俺がゆっくり遊んでからお前の後を追わせてやっからよぉ～」

シグナム「ジーク、ジーーーーク！！！」

ガイルの姿がシグナムと共に消えた。

ジーク「烈火の騎士！？くっ、貴様ら邪魔だ！どけぇ！！」

ジークがデバイスを振るうもそれは空を斬るばかりだ。血を流し過ぎたせいか視界が霞み始めてきた。
そして、動きの弱った彼にクロとオルが同時にスキュラとシュラークを放つ。回避は……間に合わない。

ジーク（くそ、俺は……守れないというのか！？）

絶望的な状況に膝を折りそうになる。

だが、

その二つの攻撃は……防がれた。
何故なら、ジークの前には……

エリス「ジーク、私達を置いて行くなんて酷いよ～クスクス♪」
クラレンス「クスクス、ジークはやらせないよ～」

エリスとクラレンスがその砲撃を防いだのだ。

ジーク「お前達……!?」
エリス「ジーク、シグナムは何処？」
クラレンス「決闘したんでしょ？何処に行ったの？」
ジーク「……ガイルに連れ去られた」
エリス「……へぇ～、ガイルがねぇ……」
クラレンス「シグナムとジークの戦いに水を差すだけじゃなくて、シグナムを連れ去るなんていい度胸だね、クスクス♪」
エリス「クラレンス、分かってるよね？クスクス♪」
クラレンス「うん、そうだね。こんなつまらない事する所にもうい

る気はないよ～クスクス♪」

ジーク「お前達……」

エリス「只今をもって、一抜けた～クスクス♪」

クラレンス「二抜けた～クスクス♪」

狂気の姉妹が今、檻から放たれた……。そして、その二人の最初の獲物は……。

エリス「ジーク、この二人は私達が相手をするからシグナムを助けに行って」

クラレンス「遊んであげるよ、お二人さん。一杯、い～～っぱい悲鳴を聞かせてね？クスクス♪」

ジーク「……すまない二人とも！」

ジークは二人に背を向けて飛んで行った。痛む体に鞭を打ち、霞む視界を何度も頭を振ってハッキリとさせてガイルの後を追っていった。

それを確認した姉妹は笑顔を作ってクロとオルを見る。そのおぞましい程の笑顔は相手に恐怖を植え付ける。

エリス「クスクス、さあ、遊びましょ？」

クラレンス「どこまでこの玩具は耐えてくれるのかな？一杯足掻いてね？クスクス♪」

自身の手に伸縮剣、若若宇摩（邪邪宇摩）を持ち、一人が二人に、二人が一人になる様な不思議な動きをして、二人は邪魔する雑魚を玩具として遊ぶべく襲いかかった。

---

近くの公園にガイルは降りてシグナムを地面に投げる。

シグナム「くっ！この卑怯者が！！あそこまでしなければ、ジークに勝てんのか！？」

ガイル「戦いに卑怯もクソもあっかよぉ。俺はお前らじゃねぇし、そもそも騎士道なんてクソくらえさぁ。それよりもよぉ…」

ガイルは地面に転がされているシグナムを下から上まで舐める様に見る。その不愉快な視線に唇を噛み、睨みつける。そんな彼女を見て、ニヤリと笑う。

ガイル「何度見てもいい体してんじゃん。六課ってのは上物がさぞや多くいるんだろうな」

シグナム「外道が……ぐっ!?」

ガイル「その外道に今拘束されてんだぜ、お前はっよ!!」

シグナムの腹を蹴って愉悦に浸る。苦痛に顔を歪ませる彼女を見て高笑いする。

ガイル「はっはっは!!ジークよぉ!!お前の師も大した事ねぇな!!テメーは馬鹿だぜ!!ヒャハハハハハ!!!」

シグナム「……彼を侮辱するな」

ガイル「……あぁ?」

シグナム「貴様の様な外道が、あいつを、ジークを侮辱するな!!貴様は、ジークの足元にも及ばn「黙ってろよ女!!」がっ!?」

ガイル「俺があいつより下だぁ?そんじゃ、あいつに勝てたテメーが俺に負けたって事は俺が最強なんだよ!!」

シグナム「貴様に負けたとは思わん!!私は、貴様には敗北などしていないっ!!ぐっ!?」

強い意志を持ってガイルを睨むシグナムだがその彼女をガイルは蹴る、何度も蹴る。何度も転がり視界がグルグルと回る。体中が痛みで悲鳴を上げて徐々にシグナムは弱っていく。

ガイル「ふぅ、漸く黙ったか…。そんじゃぁ、お楽しみといこうかな、ヒャハハハ！！」

ボロボロの彼女に近づきその手が伸びる。歪む視界の中、シグナムは……

シグナム（こんな男に……！！そんな事ならいっそ、ジークに……！！）

ジーク、彼ほどの男になら許せる事でもこの男には絶対にされたくない。
動けない自分が腹立たしい。……助けてほしい、彼に、今頼れるのはたった一人だ。
自分と刃を交えその力を最もよく知る男。

シグナム（ジーク……！！！）

目をギュッと閉じて願いを込めてその名を心の中で呼んだ。

そして、

その願いは……

叶えられた……。

ジーク「彼女を……離せっ！！！」

その声にガイルは動きを止めて振り返る。シグナムもハッとなって目を開きその声がした方向を見ると、そこには血で汚れた蒼い騎士甲冑を身に纏い、ボロボロの体でいるがしっかりと大地に立っているジークがいた。

ガイル「よぉ、ジーク。まさか、あいつ等を凌いで来るとは予想外だったぜぇ？」

ジーク「……」

ガイル「生憎と俺は今忙しいんだよぉ。今からお前の師とお楽しｍ――」

ジーク「それ以上語ると、その減らず口を削ぎ落すぞ……！！」

ドンッ！！とそんな音が聞こえそうな程、彼の体から魔力が放出され彼を中心に大地が震動し罅割れる。凄まじい殺気がガイル唯一人に叩きつけられる。

ジーク「俺と烈火の騎士との神聖な戦いに水を差すだけでは飽き足らず、不意打ちを仕掛け、挙句、彼女を犯そうだなどと……騎士の風上にも置けぬ！！」

ガイル「はっ！！生憎だったなぁ、俺は騎士道なんて溝（どぶ）に捨てる程の価値しか感じねぇ、それにな…ベルカなんぞ、もう滅びてんだよぉ！！そんな世界の風習なんぞ俺にはこれっぽっちもすげぇとは思っちゃいねえよ」

ジーク「……下衆が。貴様のような存在が今まで同志だったとは吐き気がする……。使徒として、最後の仕事を果たす…。ガイル、貴様を殺す……！！」

バルムンクの切っ先をガイルに向ける。ガイルはシグナムを近くの大木に投げる。幹に激突し体を強く打つ。咳き込むシグナムをジークは一瞬だけ目に収めて再びガイルを竜すら怯える様な気を纏った目で睨む。それを平然として肩に大剣を担いでニヤリと笑う。

ジーク「烈火の騎士は、貴様が触れていいほど安い存在ではない…。彼女に触れた事、万死に値する！！」

ガイル「寝言は寝てから言えよぉ！！手負いのテメーなんぞに俺は負ける事はねぇよ！！！」

シグナム「ジー……ク……」

ジーク「烈火の騎士、待っていろ。今からこの下衆を倒して、貴方を再び檻から解放する！！」

ガイル「ほざけよ、滓が！！！」

ジーク「我は、中央ベルカ騎士団、第三番隊副隊長…蒼火の騎士、ジーク・フローレンス！！！我が師、烈火の騎士の歩む道を邪魔する者を排除する！！！」

ジークが吼えて地面を蹴りガイルに向かって突撃する。

今、過去の約束から解放され、再び元の剣の下に戻った鞘が剣を守る為にその牙を向ける。

自分の師を…憧れの存在の騎士の道を阻む怨敵を排除する為に……！！

# 第五十六話（後書き）

ロイドの暴走タイムの終了とジークとエリス、クラレンスの使徒脱退の巻。
スバルのデバイス、リボルバーナックルが他のデバイスより頑丈かどうかの件は…あまり気にしない方向で！！作者の想像だから！！アームドデバイス＝接近型だから頑丈でないとヤバいのでは？なんて言う安直な考えから来ました。
痛い！？すんませんホントに、痛い痛い、石投げないで！？

ガルド「ジーク達が如何やら使徒を抜けたらしいな？」

そのようですね。しかも、ジークの姓まで出ましたね。はてさて、今後如何いった展開が起きるのやら……？

読者の皆様、何時もこの駄文を読んでくださってありがとうございます！！
これからも、夏バテなんぞに負けないように頑張ります故、この小説を宜しくお願いします！！
次回の更新は、って？それは、作者も分からないｗｗ

いたたた！？ごめんなさいごめんなさい、石投げないで！？これからも、精進しますので宜しくお願いしまーす！！
って岩石はもっと駄目だって、あああ～～～！？

作者はログアウトしましたｗｗ

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第五十七話（前書き）

五十七話更新！！

最近中々時間が取れなくて更新できずに申し訳ないです。
今もわずかな時間を見つけて更新しているッス！！

シリウス「時間配分をしっかりしない君が悪いと思うよ～？」

うっさいぞ、そこ！！さて、今回はジーク達の戦闘が終わります。
果たして彼は無事にシグナムを救えるのか！？

ＰＶ２０万、ユニーク２万を突破しました！！

これは夢ですか……？（′・Д・？）

痛いから夢じゃない……ごふぅ・∴（ ゜Д（〇＝（ ゜∀ ゜）

では、本編をどうぞ！！

# 第五十七話

六課では慌ただしく廊下を駆ける者がいた。

烈火の騎士、シグナムの主にして家族、八神はやてと同じく家族のアイネだ。

はやての胸ポケットにはリインが寝不足で目を擦りながらも寝まい寝まいと奮闘する。

はやて「シグナムがいないって如何いう事なんや！？」

アイネ「分かりません！！ですが、此処最近のシグナムは何処か様子がおかしかったです！！まるで、何か時間がない様に切羽詰まった様な感じで……！！それで、聞きにいこうと思って彼女の部屋に行ったのですが蛻（もぬけ）の殻でした！！」

シグナムの部屋には誰もおらず、彼女の姿がなかったのにアイネは直ぐに主であるはやてに通信をして眠っていた彼女を叩き起こして二人は外に向かっていた。

そこに……

フェイト「はやて!?如何したの!?」

夜遅くまで執務官としての仕事と『イモータル』の情報を、文献を読んで探していたフェイトが休憩がてら廊下を歩いていて、丁度よくはやての走るのを見つけ、追いかけて並走する。

はやて「フェイトちゃん!!大変なんや!!シグナムが、シグナムが何処にもおらへんのや!!」

フェイト「シグナムが!?」

シグナムが此処最近様子がおかしいのは彼女も知っていた。それを問いかけた事もあるが、シグナムはそれを頑なに答えようとはしなかったので深く追求はしなかった。だが、その彼女が姿を消したのにフェイトも驚く。

はやて「兎も角、シグナムを探さへんと!!」

フェイト「そうだね!!今からなのは達も起こすよ!!!」

フェイトは直ぐに通信を開いて寝ているだろうなのは達を起こした。クラウドやティファは軍人としてこの様な事には慣れている様で直ぐに動いた。ロイド達も不意の緊急事態には直ぐに対応する癖が付いている所為か直ぐに覚醒して動き出す（しかし、ロイドは、体調

が悪いので今回は待機。スバル、ティアナは怪我とデバイスの修復が終わってないので同じく待機）。なのは、エリオやキャロも慌てて起きて動き出す。

なのは「ふにゃ～……」

カイン「シャキッとしろコラ！！」

なのは「ふにゃあああああぁぁぁぁ！？」

まあ、なのはの場合、ほぼカインに寝起きでフラフラっとしている所を顔に水魔術をぶっかけられて強制的に目覚めさせられてた……。

ヴィータ「はやて！！」

アイネ「ヴィータ！！」

ヴィータ「シグナムがいなくなったって、如何いう事だよ！？」

アイネ「分からない、シグナムが何故姿を消したのか…兎に角周囲の捜索を……！！」

シリウス「その必要はないよ～」

フェイト「きゃあ！？」

突如シリウスが天井から降りてきた。ビックリしてフェイトは悲鳴を上げ、はやてはずっこけそうになった。

シリウス「おや？何故に皆してそんなに驚くかね？」

はやて「そんな急に上から声掛けられたら誰だって驚くわ！！」

シリウス「鋼鉄ハリセンっ！？」

要らんボケかましたシリウスに鉄槌を下すはやて。見事に脳天に決まり床に轟沈。頭のてっぺんから白い煙が立ち上る。

だが、直ぐに立ち直るシリウス……。こいつ、頑丈になったな……

シリウス「あいたたた……。はやて、俺の頭をカチ割る気かい？もう少し穏便なツッコミを入れて欲しいんだけど？」

はやて「なんや？鋼鉄よりも、この……ダイヤモンドの方がええんか？」

シリウス「是非鋼鉄の方でお願いします……orz」

見事なジャンピングDO・GE・ZA！！を繰り出すシリウス。

って言うか、ダイヤモンドハリセンって……はやてよ、アンタそれ何処で入手したよ？

アイネ「それよりも、探す必要はないとは、如何いう事だ？」

今は流石に二人のコントを見る時間が惜しい。アイネはシリウスに問いかけるとシリウスも状況を理解しているので直ぐに立ち上がる。

シリウス「シグナムが一人で出ていったんでしょ？皆知ってるんじゃないかな？シグナムがそうまでして行く理由を持つ人物がいるのを……」

ヴィータ「まさか……！！」

はやて「第十八の使徒、ジークなんか！？」

シリウス「そうだと思うよ？シグナムが一人で出かける理由を持つのはそいつだけだからね。恐らくだけど行き先も、決まってると思うよ？」

はやて「……公園や！！皆急ぐで！！」

シグナムがジークからペンダントを受け取った場所、その公園に彼女と使徒はいる。

そこに、通信が入り、公園付近の海上で爆発音が聞こえたという通報が入る。

確信を得たはやて達は急いで集合してその公園に向かって出動したのだった。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

公園の近くの海上でオルとクロは恐怖していた。目の前にいる二人の幼い少女のその凶暴性に……

エリス「クスクス、ほらほらもっと逃げないと当っちゃうよ～♪」

クラレンス「クスクス、当たれ、当たれ～♪」

上空から無数の針状の魔力弾が降り注ぐ。それを辛うじて避けるとそこに回り込んだエリスが剣を構えて突きを放つ。咄嗟に持っているシールドで受けるが凄まじい衝撃に吹っ飛ばされた。

オル「くそがっ！！ガキの分際で、こんな力があってたまるかよ！？」

クロ「目・障・り！！」

エリス「クスクス♪私達からすれば……」

クラレンス「貴方達の方が目・障・り♪」

エリスが伸縮剣で刺突を繰り出す。刀身が急速に伸びオルに向かって飛んで行く。それを回避すると今度はエリスの背後からクラレンスが飛び出し、同じく伸縮剣で刺突、それが飛ぶと同時にエリスが剣を引き刀身を縮ませ、クラレンスの刀身が引かれると同時にエリスが再び刺突、それを交互に高速で繰り出す。

目にも止まらぬ刺突の雨がオルとクロに飛んでくる。それを紙一重で何とか回避する二人だがそれでも幾つかを掠める。攻撃の合間にクロはアフラマズダをクロがビームライフルで反撃する。
それは見事にエリスとクラレンスに当るが……。

エリス「クスクス♪外れ～♪」

クラレンス「罰ゲ～ム♪」

二人が急に罅割れ砕ける。それと同時にそこから無数のガラス片の様なものが放たれた。
それを体を捻って回避し、当りそうなものを撃ち落とす。幾つかが二人の背後に飛んでいく。
しかし、肝心のエリスとクラレンスが前方にいなかった……。

オル「何処行きやがった!?」

クロ「あの餓鬼は…「何処見てるの?こっちだよ~クスクス♪」うぎゃあっ!?」

背後から声が聞こえ慌てて振り向こうとしたクロの左肩に若若宇摩が突き刺さった。
何時の間にかエリスとクラレンスは二人の背後に移動していたのだ。

エリス「鏡反者は貴方達程度じゃ破れないよ~クスクス♪」

クラレンス「もっと悲鳴を聞かせて♪もっと私達をゾクゾクさせてよぉクスクス♪」

互いの手を合わせて口が三日月の様になるほど口の端を上げて不気味な笑みを浮かべる。
そして、二人の上空に大きな魔法陣が出現する。

クラレンス「姉さん、一気に行くよ~♪」

エリス「そうだねクラレンス。目一杯悲鳴を聞かせてもらおうクスクス♪」

クラレンス「ニードルシューター・レインバースト~♪」

魔法陣から高密度の弾幕が降り注ぐ。それは回避すら許されないかの様な弾幕でオル達は回避よりも自分達に被弾しそうなものだけを撃ち落として受けるダメージを減らす事を選んだ。

だが、

クラレンス「それで上手く凌げたと思っているの？クスクス♪」

エリス「残念でした～♪そ～れっ、大爆発～♪」

エリスが手を上げて振り下ろすとオル達の周囲を通り抜けた弾幕が一斉に光り次の瞬間、二人を包んで大爆発を起こした。

オ・ク「「ぐあああぁぁぁぁぁ！？」」

無論、回避など出来る訳もなく二人は爆発に包まれた。煙が晴れるとそこには鎧装が所々損傷している二人がいた。

エリス「クスクス♪いい悲鳴だね～。もっと、もっと聴かせてよ～♪」

クラレンス「クスクス♪でも姉さん、そろそろ片付けないとジークの方も終わっちゃうよ？」

エリス「クスクス♪そうだね～。それじゃあ……終わりにしようか」

今までニコニコしていた二人が更に口が三日月になる程の深い笑みを作る。その表情に言い様のない寒気を感じ背筋を凍りつかせる。

エリス「飽きちゃった玩具は……」

クラレンス「ゴミ箱へ～♪」

姉妹が同時に動く。伸縮剣を構え、突きを放つ体勢になる。それを止めるべくオルはシュラークを放つがそれが当るとエリス達は罅割れて砕け、無数のガラス片が雨の様に降り注ぐ。

オルはそれを避けるが、何時の間にか……エリスが自分の真上に、クラレンスが背後を取っていた。

エ・ク「「伸縮剣、若若宇摩（邪邪宇摩）は何も刀身が縦に伸びるだけじゃないんだよ～♪」」

刺突を同時に繰り出しオルの背にある砲台を貫き破壊した。そして、一度引き今度はエリスは剣を振り上げクラレンスは剣を水平に構える。すると、刀身の幅が広がり巨大な大剣に変貌した。
その大きさたるや彼女達の身の丈の数倍はいく。

エ・ク「「伸縮剣は横幅も自由自在～～クスクス♪」」

エリスが剣を振り下ろす。空気を裂いて迫るそれをオルは後方に飛び退く事で回避する。
しかし、ワンテンポ遅れて背後からクラレンスが剣を水平にした状態でオルの横を通り抜け蛇蛇宇摩を振るう。

オル「がああああぁぁぁぁぁ！！？」

クラレンス「飽きた玩具は…さようなら～～♪クスクス♪」

一気に剣を振り抜き両断。上半身と下半身が別れてオルは絶命。鎧装の爆発に呑まれて消し飛んだ。

クロ「う、うあああぁぁぁぁぁ！！！」

エリス「クスクス♪次は…貴方の番♪」

クロ「落ちろ、落ちろ、落ちろよぉぉぉぉ！！！！」

アフラマズダを連射して突進するクロ。それを踊っているかの様に華麗なステップで避けて通り抜けたクロの背後に二人で同時に若若宇摩（邪邪宇摩）を伸ばしてその背を何度も穿つ。クロの体中を穴だらけにし、姉妹は左手を合わせて右手をクロに向ける。

エリス「要らない玩具は……」

クラレンス「焼却処分～♪」

エ・ク「「スティンガーブレイカーβ♪」」

二人の前に現れた二つの大きな魔法陣が一つになりそこから凄まじい砲撃が放たれた。
それは、墜落するクロを呑み込む。

クロ「あ、あはは……僕は、僕はｎ――」

クロを呑み込んだ砲撃はそのまま天へと昇り爆発した。

エリス「焼却完了～クスクス♪」

クラレンス「跡形もなく消し飛んで、星にもとってもエコだね～クスクス♪」

今、人を殺めた事など微塵も感じさせない笑みで互いを見てクスクスと口に手を当てて上品に笑う。

エリス「それじゃあ、クラレンス。ジークとシグナムを助けに行こう？」

クラレンス「そうだね、姉さん。でも、ジークなら、ね？クスクス♪」

エリス「そうだね。ジークなら大丈夫だもんね。ジークはとっても凄いもんね～クスクス♪」

姉妹はクスクスと楽しげに笑いながらジークが向かった方角に飛んで行った。

---

公園の一角にて、金属同士が激しくぶつかる音が響く。

ガイル「はっはぁ～！！この程度かよぉジークよぉ！？」

ジーク「ちっ……！！」

ガイルの大剣、『クレイモア』でバルムンクを弾き上げられた。

ジーク「しま――っ!?」

ガイル「おらっよ!!!」

がら空きの胴に横一閃。そこから新たに鮮血が吹き出しジークは吹っ飛ばされる。

シグナム「ジーク!!」

ジーク「くっ、大丈夫だ。問題は、ない……」

地面を赤く汚す血を見て思わずシグナムも目を逸らしたくなる。だが、満身創痍の状態でも、まだ立ち上がるジークのその雄大な姿にそれ以上にシグナムは惹かれていた。

ガイル「はっはっは～!!ジークよぉ、随分と無様だなぁ～!そんなんで俺に勝てると思ってんのかぁ?」

ジーク「……くだらん」

ガイル「はぁ?」

ジーク「相手が手負いだからといって格下と思っているなら貴様はあまりにも下らぬ存在だ。俺はこの程度の傷で貴様如きに遅れを取る事はない!!」

ガイル「言ってくれるじゃねぇか。なら、無様に地面さ這い蹲らせてやるよぉ！！」

ジーク「地に這い蹲るのは貴様だ！！」

ガイルが一気に近づき大剣を振り下ろす。それを衝撃防楯（ソニックシールド）で受けて衝撃波で弾き上げる。そして、空いた胴にバルムンクで横一閃。だが、ガイルは体を捻ってそれを避けて後方に飛び退いて距離を取る。

ガイル「テメー、俺の一張羅に傷つけやがったな……！！」

しかし、ガイルの服、正確には胸辺りの部分が横に大きく斬られていた。それを見たガイルは怒りに顔を真っ赤に染める。

ジーク「ふっ、手負いの者に一張羅を斬られるとは…随分と反応が鈍いのだな？」

ガイル「ジーク、テメーはミンチにしてやるよぉぉぉぉぉ！！！」

ガイルの体から膨大な魔力が放出される。それに合わせて大剣が振動する。

ガイル「刈り取るぞ、クレイモア！！」

刀身が変化して、鋸の様な刃に変貌した。それに魔力を通すと刀身が光る。

ガイル「ギロチンカッターーー！！」

下から上に掬う様に剣を振るうと刀身から魔力が放たれ、それは鋸の様な鋭利な刃を持った円状の魔力となり高速回転しながら地面を抉ってジークに迫る。

ジークは、その攻撃をバルムンクで受けて上に弾く。そこにガイルが突っ込みクレイモアを振り下ろす。それを体を捩じって回避し、回し蹴りで刀身の腹を蹴り横に弾き素早く突きを放つ。

ガイルは、それを蹴り上げて上に弾いて避け、脚を狩り取る様にクレイモアで足下を薙ぎ払う。それを真上に軽く飛んで避けてそこからバルムンクを振り下ろす。

ガイルは、素早くクレイモアを戻してそれを受けて押し返し宙にいる彼を狙うがその反動を利用してジークは一度、軽く後方に飛び退きそれを避けて着地。地面を踏ん張り反動を抑え、そこから脚の瞬発力だけで距離を再び詰めてガイルの脇を狙う様にバルムンクを振るう。

それをクレイモアで受けて弾き、逆にジークの頭に向かってクレイモアを振り下ろす。

ジークは持っている盾でそれを受けて衝撃波で弾く。そこから素早く足払い、ガイルの脚を掬って体勢を崩させる。

ジーク「蒼電一閃！！」

ガイル「ぐおっ！？」

直ぐにバルムンクから薬莢が弾け飛び、刀身に青い魔力が炎になって纏う。それを振り下ろしガイルを狙う。ガイルは咄嗟にクレイモアで受け止めるが激しく火花を散らし衝撃で後方に大きく弾き飛ばされた。地面に落ちる寸前で体勢を変えて着地、クレイモアを地面に刺し、地面を削りながら止まった。

ジーク「まだだ……バルムンク、ファングフォーム！！」

バルムンク［エクスプロージョン！！］

ジーク「奴を穿て、ディバイトファング！！」

刀身が幾つも別れて外れてジークの周りに滞空する。バルムンクに魔力刃が通るとジークの周りのファングが別々に意思を持つように飛行、その中をジークも駆け抜けてガイルに肉薄する。

ガイル「うぜぇんだよ……このドチクショウがぁ！！ギロチンブレイク！！」

ファングを弾いていたガイルが咆えて地面に向かってクレイモアを振り下ろす。
地面がそれによって割れてそこから鋸の刃状の魔力刃が波の様に周囲に舞い上がる。

衝撃でファングが吹き飛ばされジークだけが残る。隙だらけだとガイルは思い、ジーク目掛けて肉薄、大きく振りかぶる。

ガイル「頼みのファングが吹き飛んじゃぁ、丸裸だぜぇぇぇぇ！！！」

ジーク「……何を言っている？」

その言葉にジークは涼しげにその大振りの攻撃を突撃を止め、足を後ろに一歩下げるだけで避ける。
そして、通り過ぎるガイルに語る。

ジーク「ファングは元々集団を相手する為の攻撃でしかない。最初からあれには期待はしていない……」

ガイル「なっ！？」

ジーク「貴様は勝手な憶測で自ら死地に脚を踏み込んだのだ！！」

バルムンクを素早く振るい横一閃、ガイルの脇腹に一筋の傷が入りそこから鮮血が飛ぶ。

ガイル「がああぁぁぁぁぁぁぁ！？」

ジーク「如何した、この程度で我が師に手を出そうと思ったのか？ふっ、何ともお笑いだな……」

ガイル「この…腐れ騎士がぁぁぁぁぁぁ！！！」

ジーク「貴様如きが、騎士を愚弄するな……下郎が！！！」

ファングを戻し、元に戻ったバルムンクの柄を強く握り再びガイルとぶつかる。

ガイルがクレイモアを水平にして薙ぎ払う。それを姿勢を低くする事でクレイモアが上を通過する。

通り過ぎた瞬間にバルムンクで刺突を繰り出すがガイルはそれを読んでいて蹴り上げて弾き、大地を軸足で強く踏みそのまま回転し遠心力を利用した回転切りを繰り出す。

それを盾で受けるが衝撃波で弾けてもその勢いにジークも吹っ飛ぶ。

それを逃さないガイルではない。

ジークに一気に詰め寄り刀身に魔力を通して振りかぶる。

ガイル「ゼロ距離でくらいなぁ！！ギロチンカッター！！！」

至近距離で放たれた回転する魔力刃がジークに迫る。咄嗟にバルムンクで受けるが凄まじい勢いで押し返される。
そのまま背後にあった大木にぶつかる。ギャリギャリと火花を散らし回転する魔力刃に押さえ付けられてジークは動けないでいる。その隙だらけのジークに止めを刺すべくガイルは突撃する。

ガイル「その木と一緒に刈り取ってやるよぉ！！！」

シグナム「ジーク！！！」

ジーク「なめるなっ！！！」

なんとジークは、魔力刃の前からバルムンクを素早く引いた。そして、自分を刈り取ろうとする魔力刃の下に体を素早く折って避けたのだ。髪が数本切れて宙を舞う。凄まじい集中力で彼は僅かな差でギロチンカッターを避けた。背後の大木が刈り取られて倒れる。

そして、逆にクレイモアを振り上げていたガイルが好きだらけとなる。地を蹴ってガイルの懐に入り軸足を踏ん張り地を大きく踏みしめる。驚きに目を見開いているガイルにジークは語る。

ジーク「貴様程度が、彼女に触れるのは……千年早い！！！」

ガイル「このっ！！ちくしょうがあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ジーク「烈火の騎士より授かった剣技、受けて見ろ！！奥義・天竜一閃！！」

クレイモアを駄目元で振り下ろすガイル。それに向かってジークはバルムンクを下から上に掬いあげる様に振るう。互いの武器がぶつかり激しい衝撃波が周囲に広がる。

軍配は……ジークに上がった。

クレイモアが接触面から罅が入り、砕け散る。目を見開くガイルに映るのは……

竜すら射殺さんばかりの覇気を放つ目をしたジークの顔と命刈り取る、バルムンクだった……。

振り抜かれたバルムンクから魔力が放たれガイルを包む。斬撃によって体を縦に斬られたあとにガイルはその光に呑み込まれる。その魔力の奔流は天高く昇る。

そう、まるで天へと飛翔する竜となって……。

雲を貫き一際強く輝いた竜は顎を大きく開いて咆哮したあと更に飛翔し天高く昇って周囲に爆風を起こす程の爆発を起こして消失した。

バルムンクから薬莢が二つほど排出され地に落ちた。
ジークはバルムンクを手の中で軽く回して鞘に収める。キンッ！！と音が鳴る。それと同時に上空からガイルが地面に墜落、派手に大地に叩き落ちた。

ジーク「俺に勝てん者が、彼女に勝てるものか……。貴様の様な下賤な輩が烈火の騎士の輝きを奪く事など出来ん…いや、俺がさせん！！」

そう動かなくなったガイルに言葉を投げて、シグナムの下に歩きだす。

シグナムは此方に歩むジークを見て…ああ、やはりこの男は、素晴らしい剣豪だ。とその剣技と勇ましい姿に見惚れていた。

ジークはシグナムを拘束するバインドを手で触れて破壊し、彼女を自由にする。

ジーク「大丈夫か、烈火の騎士？」

シグナム「あ、ああ。大丈夫だ、すまないジーク……」

ジーク「いえ、俺の方こそすまない……。少…し……無理…をし…た……」

急にジークの体が横に傾く。咄嗟に彼を抱きかかえるシグナムは自分のバリアジャケットと手にべっとりと血が付き広がるのに目を見開く。よく見ると、彼の傷は浅くなく、かなり深いのに気が付いた。

シグナム「ジーク！？お前……！？」

ジーク「ふふっ、貴方に気付かれない様に上手く隠していましたが……流石に、限ｋ―ぐふっ！？ごほっごほっ！？」

突然咳き込むと口から大量の血が吐き出された。その血の量は尋常ではない。

流石のシグナムとて青褪める。

シグナム「ジーク！？」

ジーク「ふっ……最後の最後で…この命…貴方の為に…使えて……良かったと思います……」

シグナム「喋るな！！傷に響く！！」

止血しようにも道具がない。シグナムはバリアジャケットを解除して元の職員服に戻るとその上着を脱ぎそれを破いて胸にある傷口を圧迫して止血を試みる。しかし、当てた途端に血が広がる。

状況は更に悪化する……。

ガイル「ざ……けん…じゃ…ねぇぞ……！！」

何と倒したと思われたガイルが立ち上がった。その足取りはあまりしっかりしていないがそれでもその目には怒りの炎が巻き起こっている。

シグナム「貴様、まだ立てるのか！？」

ジーク「くっ……仕留め損ねたか……！！」

ガイル「ジークよぉ……テメーは此処で殺してやるよぉ……その女と一緒になぁぁぁぁぁ！！！」

叫えたガイルが折れたクレイモアを持って突っ込んで来る。ジークはシグナムを守ろうとしてそのボロボロの体でバルムンクを掴み、切っ先を向ける。シグナムもジークを離す訳にもいかないので彼を支えたままレヴァンテインを抜き、構える。

そして、ガイルが目の前で大きくクレイモアを振り上げる。

ガイル「死ねよぉ……時代遅れの騎士共がぁぁぁぁぁ！！！！」

振り下ろされるクレイモア。

それは……

二人を……

両断……

出来なかった……

その両者の間には二つの影が……

エリス「クスクス♪ガイル…あなたって本当に……」

クラレンス「下らないね～♪」

ガイル「エリスにクラレンス!?このっ、裏切り者があぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

エリス「貴方みたいなのは……ハッキリ言って反吐が出るよ、クスクス♪」

クラレンス「貴方とは遊びたくないから…一気に終わらせてあげるよ、クスクス♪」

クラレンスがガイルのクレイモアを弾き上げ、エリスがクレイモアを持つ両手を斬り落とす。
そして、二人合わせて刺突の構えを取る。

エリス「さよなら、ガイル♪」

クラレンス「貴方の事は三秒後まで忘れないで上げる～クスクス♪」

エ・ク「「千年魔鏡閃……」」

超高速の刺突の雨がガイルの体を穿つ。エリスとクラレンスは刺突を超高速で打ち続けてガイルを宙に浮かす。そして、高く宙に浮かすと刀身の横幅を広げ、巨大な大剣に変えて同時に地を蹴る。

ガイルに向かって二人は同時に大剣を突き出す。その二つはガイルの体を穿ち、そのままエリスとクラレンスは若若宇摩（邪邪宇摩）を左右逆に振り抜いてガイルの体を三等分に両断した。

エリス「壊れた玩具は～♪」

クラレンス「私達は要らないの～クスクス♪」

地に着地して剣に付いた血を払い落す。そして、上品に手を口に当てて笑う二人は何処かの令嬢にも見える。だが、その顔に返り血が付いて、背後にガイルだった物が落ちていなければの話だが……

姉妹は、嘗ての仲間の亡骸を見向きもせずにジークの傍に駆け寄る。

エリス「ジーク！！」

クラレンス「ジーク、大丈夫？」

ジーク「お前達か……すまない。助かった……」

だが、ジークの視界は徐々に歪み始めている。その輪郭を捉えるのも難しかった。

ジーク「すまない……少しだけ休ませて…貰う」

そして、ジークの体から力が抜けて気を失った。

エリス「ジーク、駄目だよ！今寝たら危ないよ！！」

シグナム「ジーク！！寝るな！！起きろ、起きるんだ！！こんな所で死ぬなんて私は許さんぞ！！」

何度も揺するがジークは目を覚まさない。それどころか、段々と体が冷たくなってきている様な錯覚まで起きる。

シグナム「ジーク！！起きろ！ジーク、ジーーーク！！！！！」

その声が公園に響き渡る。

コレット「皆こっちからシグナムの声が聞こえたよ！！」

それを聞きとったコレットの指さす方向にはやて達は急ぐ、そして、そこには……

シグナムとその腕の中でぐったりしている使徒、ジーク、そのジークを呼びかけるエリスとクラレンスがいた。

はやて「シグナム！！」

シグナム「主！」

クラウド「これは、一体……？」

ガルドは、近くに転がっているガイルの死体を確認する。

ヴィータ「最近、別世界で目撃された使徒じゃねえか！？」

エリオ「う……」

クラウド「エリオ、キャロ。あまり見ない方がいい……」

ガルド「仲間割れか……？」

シグナム「主！！ジークを…ジークを助けてください！！」

はやて「シグナム!?そいつは敵なんやないんか!?」

シグナム「いいえ違います!!ジークは…ジークは味方です!!そして、この子達も…ジークの仲間です!!」

コレット「はやて……」

はやて「……分かったで。皆、六課に急いで運ぶで」

アイネ「分かりました、主」

クラウド「いいのか?敵を匿うという事は本局に目を付けられる格好の的だぞ?」

はやて「そうはさせへんって。使徒を捕縛して取り調べ中って言えば別に問題あらへん」

セフィリア「はやて、それナイスアイデアだね!!」

はやて「ふふ~ん♪この理由がある限り、本局も変な行動はせぇへんやろ。うちこそが六課の正義や!!」

シリウス「うん、その『私、ゴッド、ナウ!!』みたいな発言は控えた方がいいね…。何だか、独裁者臭がs「ふんっ!!!」ごぼぁっ!?」

余計な事を言ったシリウスは鋼鉄ハリセンで打った叩かれて憐れ撃沈……。

そんな彼を放っておいてはやて達はジーク等を連れて六課に帰還し

た。

六課の医務室にジークを寝かせ、セフィリアが五姫の一人、後姫を召喚しシャマルと共に治療をさせる。はやては、シグナムの方を向き事の詳細を聞く。

はやて「シグナム、うち等が来るまでに起きた事、話してくれへんか？」

シグナム「はい……」

彼女は、先程あった事を全て話した。決闘の内容、そこに乱入した使徒ガイルと三人組、自分が捕まった時にジークが助けてくれその時に大怪我を負った事…自分の分かる事をはやてに分かりやすく語った。

はやて「第十八の使徒、ジーク・フローレンス……前にも聞いたけどシグナムの弟子やったんよね？」

シグナム「はい……。今回で決着を付ける事は前々から言われていたんです。それに勝ち、ジークは私に従うと…」

ザフィーラ「ベルカ時代のお前の弟子か……。記憶にはやはりないな…」

ヴィータ「あたしらの記憶は使徒の一員のギルって奴の所為で闇の書が転生する度に消されてたから覚えてないのも無理ないぜ」

アイネ「奴とはいつか決着をつけねばならん」

シャマル「その時は私達も行きます」

ザフィーラ「うむ。我々夜天の守護騎士が今度こそ闇の書を葬らねばならないな……」

はやて「せやね。今度こそうちらで終わらせよう。けど、その前にジークの治療をするのが最優先やで。それにしても……」

はやてはシグナムの後ろに隠れている二人を見る。赤い髪と銀の髪が半分ずつ分かれていてその身はゴシックロリータの様な服に着ている少女達エリスとクラレンスだ。

はやて「随分とその二人に懐かれとるんやね？」

シグナム「お前達、主達に挨拶するんだ」

エリス「第四の使徒、エリスです。クスクス♪」

クラレンス「第五の使徒クラレンスです。クスクス♪」

アイネ「一つ聞く、お前達はあのロストギアを集めて何をする気だ？」

上品にフリルの付いたスカートの端を持って軽く持ち上げてお辞儀する。その二人にアイネは使徒の目的を聞くが、二人は口元に手を当てて何処かの令嬢の如く上品に笑う。

エリス「クスクス、それは秘密で～す♪」

クラレンス「教える事はないで～す♪」

シグナム「お前達……」

エリス「幾らシグナムでもそれはまだ教えられないよ。私達はジークが元気になるまでこれは教える気はないも～ん♪」

クラレンス「ね～♪」

クスクスと笑う二人に、これは骨が折れそうだ……、とはやて達は思ったのだった。

---

一方、使徒達の拠点では……

フォスティル「トールス、オルマに続いてガイルも死んだか……」

デミテル「それだけではありません。如何やらジーク、エリス、クラレンスが裏切った様ですよ？」

アグリス「あの野郎ども……！！」

ナーガ「落ち着きなさいアグリス。怒っていても事は変わりません」

アグリス「んな事は分かってんだよ……。だから餓鬼どもは嫌いなんだよ。平気でコロコロと心変わりしやがる。俺達は王を守る為にいるってのによ……」

ロウ「裏切り者には死を与えないとね～」

アグリス「ロウの言う通りだ。今からあいつ等をぶっ殺しに行って来る！！」

エリス達の始末をする事を進言するのは第八の使徒、ロウ。それに続いてアグリスも始末する事を選択するが、それに待ったをかける者がいた。

？？？「よさぬか。裏切った者など放っておけ」

パオラ「クロヴィス、アンタそれ本気で言ってんの？」

第一の使徒、クロヴィス。彼はパオラの問いかけに軽く頷いて答える。

クロヴィス「我々の第一の目的はなんだ？我等の王、その復活だ…それ以外の事など捨て置け」

アグリス「お前それ本気で言ってんのか？裏切り者を放っておいたら俺達の居場所もその目的も知られるんだぞ！？」

クロヴィス「その心配はないだろう。それよりも、最後の御珠の場所が特定できた。そこにアグリス、ナーガは向かえ」

ナーガ「分かりました」

アグリス「まだ納得はしてねえが、まあいい。行って来る」

ナーガとアグリスは背を向けて姿を消す。その時、突如爆発音が響き渡る。

パオラ達は、またか……、と一瞬思った。だが、次の瞬間には背筋に冷たい感覚を駆け抜けた。

爆発音のした方から一つの人影が出てくる。

ディグ「く、くくく……」

デミテル「ディグ……なのですか？」

その者は第十一の使徒ディグだった。だが、明らかに様子がおかしい。普段の彼からは想像できない程に、有り得ない程に魔力が溢れていた。それだけではない。彼からはもう一つ、別の力を感じる。

魔力では無い、別の、もっと禍々しい力を……

デミテル「何ですかこの得体の知れない感覚は……！？」

ロウ「うわ……、この寒々しい気配はディグから来るぞ～？」

パオラ「アンタ、まさか……本当なったっていうの！？闇の一族『イモータル』に！？」

ディグ「クカカカ、ウハアハハハハハハハハハ！！チカラガ、チカラガワキアガル！！ツイニ、ツイニオレハカミノリョウイキニテガトドイタ！！」

声高らかに笑うディグ。しかし、その目には何時もの彼らしい眼ではなく歪んだ濁りきった眼の様に見える。

クロヴィス「闇に堕ちたのか……哀れな」

ディグ「クロヴィス…フザケルナ！！オレハ、ヤミヲセイシ、イマ、カミノチカラヲエタノダ！！キサマラガ、タバニナッテカカロウトモ、モウオレハトメルコトナドデキナイ！！」

クロヴィス「……ふんっ」

それに対して返って来たのはクロヴィスの鼻で笑う冷笑だった。

ディグ「ナニガオカシイ！！」

クロヴィス「お前は勘違いをしている。嘗て我等の主が敗北した存在、『イモータル』はその程度の低俗な力では無かった。貴様のやっているのは、ただの遊びだ」

ディグ「フザケルナ！！コノチカラハ、スベテヲスベルサイキョウノチカラ！！ソレナラバミテイロ！！オレガ、カンリキョクヲホロボシ、セカイヲテニイレテヤル！！」

ディグはそう言うと闇に姿を消した。それに合わせて嫌な空気も消え去り重苦しい空気は無くなった。

パオラ「あの馬鹿は、もう駄目ね……」

クロヴィス「そうだな。せめて最後は華々しく散ればいいが……」

デミテル「ディグのあの豹変ぶりは異常です！何とも出来ないのですか？」

パオラ「無理ね。前に一度、あいつの研究室で資料を見たけど、一度闇に堕ちたら……もう止まらないわ。あいつを止められるのは、太陽と……」

最早いるかどうかも定かではない存在だが、今回の事で確信した。
『イモータル』は存在する。
そして、闇に堕ちたディグを止めるには太陽ともう一つある。それは……

パオラ「同じ『イモータル』しかあいつを止める事は出来ないわ……」

---

ディグ「カンジル、カンジルゾ…オレトオナジソンザイガ、『イモータル』ガイルノヲ！！」

闇に包まれた街のある一角にディグは現れた。彼には感じる事が出来た。場所は特定できないが間違いなくこの近くにいる。闇の一族『イモータル』が……

ディグ「オオォォ……コレホドマデニ、カンカクガトギスマサレルノカ!?スバラシイ、シュウイニイルニンゲンノチノニオイガワカル!!!」

自らの鼻孔を擽るのは、街に滞在する人々の血の香り。それにも様々なものがあるのを感じる事が出来る。
紅茶の様な香り、果物の様な香り、あっさりとした香り、濃厚な香り、ありとあらゆる匂いが彼の鼻を通して伝わってくるのだ。

ディグ「コレガ、『イモータル』のチカラカ!?スバラシイ、スバラシイ…コレコソオレノモトメテイタチカラダ!!マッテイロ『イモータル』よ…!!オレトキサマラガ、ドコマデタイトウナノカ、ジッケンサセテモラウ!!ファギィィィィィィィィィィ!!!!!!」

闇夜に響く不気味な叫び。それは眠りし者達をも起こし恐怖を与え、起きている者達は少なからず残っていた本能が警鐘を激しく鳴らした。闇を滑る統べる者なった者の雄たけびがその日、人々を眠りに就かせる事は無かった……。

人々にもう、安息の夜はやって来る事はない……。

止める事が出来るのは太陽と……

同じ闇だけなのだから……

## 第五十七話（後書き）

ジークらの活躍で、ガイルら撃破。そして、新たに不穏な動きがミッドに迫る。
ガイルの事ですが、まあ、彼は最初からこうする予定だったので欠けてもあまり気にしない。

カイン「使徒の一人が不味い状況になってるな？」

このディグも早くも死亡フラグが立ってしまっているんだが……如何しよう？
まあ、そろそろフェイト達の話も進めんといかんだろうから良い時期かもしれないと作者は前向きに考えてたりする。

次回の更新は早くしたいのですが、時間取れるかな……？試験も近いし、そこは時間と相談しながら頑張りたいと思います。
読者の皆様、この小説を読んで頂きホントに感謝感激です！！
まさか、これ程の方が見て下さっているとは思ってもみなかったのでテンションがバルブになってます。これからも精進しますので、是非このダメ作者の小説を宜しくお願いします！！

では、本日はこれで！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第五十八話（前書き）

更新遅れて申し訳ございませんでしたぁぁぁぁぁぁ！！！

カイン「一体何があったのか、懇切丁寧に説明してもらおうか……？」

じ、実は……最後に更新した日の次の日の朝にですね……

普段通り私、マイノートパソコン（略してＮＰＣ）を起動したんです。そしたら…

――キュイィィィィィィィ……ン――↑空気の出ていく音しか聞こえない

――ホワットッΣ（ﾟДﾟ；）！？――

何故か起動音ではなく、空気の抜ける音しか聞こえなかったんです。それで、慌ててケーズ（略してＫＳ）に救援要請……。店員に見て貰ったら…

――あ～、これは、ＨＤ（ハードディスク）が死んだかもしれませんね～（´Д｀）――

――……（ﾟДﾟ；）――

――最近は、地震の影響でＰＣの修理が殺到してますから、ＨＤだけ交換となると二週間から三週間かかります（ﾟ∀ﾟ）――

――。。？？（　Д　）ポロリ……――

なんて事が……。そして、携帯でその事を活動報告に書こうと思えばＮＰＣのアドレスとパスを忘れて入れなかった。
友人にはその間はまるで禁断症状の様な幽鬼の私を見てノリで精神科に連行しようとしてきた……。
試験期間だというのに何という精神的大ダメージを受けてしまいましたのよ……。

ロイド「それで、今日ようやく更新出来たってことか……」

そう言う訳です。修理を終えたＮＰＣなんですが、如何やらメインボードに不具合が生じて電源入るが画面出ず動作しない状態だったようです。

なにはともあれ漸く更新再開です！！
ホントに待たせてしまい申し訳ありませんでした。

では、第五十八話の本編をどうぞ！！

# 第五十八話

朝、太陽が昇る頃、とある一室で……

フェイト「スゥ～…スゥ～…」

バルド「……何故だ？」

此処はフェイトの部屋。そこで何故かバルドはフェイトと同じベッドで横なっていた。

実は昨晩、フェイトの部屋を訪れた時に、彼女は机に突っ伏して寝息を立てていた。

仕事をしている最中に疲れて眠った様である。それを見て仕方がないとバルドは溜息を付いたあとに彼女を抱き上げてベッドに寝かせたのだが……憐れ彼女の手がバルドの服を何時の間にかしっかりと掴んでいて離れなかった。

無理に剥がそうとしたのだが…気付いた時にはフェイトの隣に転がされており、抱き枕宜しくホールドされている状態になっていた。

身動きが取れない状態のバルドは仕方がなくそのままそこで一夜を過ごしたのだ……

そして、今に至るのだが……今朝、目を覚ますとそこにはフェイトの顔がある。

それはいい。だが問題は……

何故か……

彼女は……

下着姿で寝ているからだ！！！！？（。Д。；）ナ、ナ、ナンダッテエエエエエエエエ！？

さあ、諸君も想像してみようではないか！？朝起きた時に目の前に眠る女神様を！！

しかも、その格好が下着しかない状態だというのは…ぶはぁぁぁぁ！？

く、黒の下着が彼女を大人っぽくさせている！？あどけないその寝顔に黒の下着が彼女の白い磁器の様な柔肌を更に強調させる！！

その肌から少しだけ見える汗と仄かに鼻孔を擽る彼女の好い匂い。

それが彼女をより艶っぽくそして、心悩ませる！！呼吸と共に上下する胸！！体をもぞもぞさせる所為で少し肌蹴ている下着！！
そして、そこから見えそうで見えない、二つの大きなかじｔ――ごはあっ！？↑吐血

メーデー、メーデー！！誰か、医者を、医者を今すぐ呼べ！！このままだと出血多量で多くの死人が出る！！
諸君、これ以上の想像は危険だ！！直ぐに脳内妄想回路を停止し鼻にティッシュを詰めるのだ！！
自身の鼻に触れて見ろ、そこからは赤いものが垂れて……ぶはぁぁぁ∴∴（。Д。；）！？

作者は、出血多量で強制搬送されたｗｗｗ

フェイト「クゥ～……クゥ～……」

バルド「何故こうなった……」

バルドとてこれはキツイ。柔らかな感触が自分の胸の辺りに当っている。直視できない彼女の状態に彼は頭痛がした。

ケルベロス《よぉ、相棒～。随分とハッピーな状態だな～ウヒャヒャ！！》

バルド《ケルベロスか……。一つ聞くぞ、何でこいつは下着しか来てないんだ？寝かせた時は服着てただろ！？》

ケルベロス《まあ、相棒が寝た後だから知らないけどよ～。嬢ちゃんは一度起きたんだよ》

バルドの問いかけにケルベロスがこの様な状態になった過程を語り始めた。

～数時間前～

バルドが眠り少し経った頃……突然フェイトが起き上がる。

フェイト「…ふわぁ？何で私ベッドで……？」

ケルベロス［おや、嬢ちゃん起きちまったのか？］

フェイト「あれ？何でケルベロスが……」

ケルベロス［嬢ちゃんは机でそのまま寝ちまったんだよ。んで、相棒が嬢ちゃんを寝かせてくれたんだよ］

フェイト「うにゅぅ～……」

ケルベロス［嬢ちゃん？お～～い……］

フラフラと体が左右に揺れるフェイト。如何やら寝ぼけている様子。そして、横で寝ているバルドを視界に捉えると。

フェイト「えへへ～……バルドだぁ……」

何やらホワホワした笑顔を浮かべるフェイトは突然着ていた服を脱いで下着姿になる。そして、そのままバルドの隣に潜り込んで……

フェイト「スゥ～……スゥ～」

ケルベロス［ありゃりゃ、寝ちまったよ……］

何とも幸せそうな顔をして眠っていたのだった。

～回想終了！！～

ケルベロス《って事があったんだぜ？》

バルド《止めろよ馬鹿が！！》

ケルベロス《幸せそうな嬢ちゃんを止めろと？そりゃあ無理な相談だぜ相棒よ！？いいじゃねぇか、嬢ちゃんの柔らかいもの押しつけられて役得だろ？ウヒャヒャヒャ！！》

バルド《アホか！？脳ミソが沸騰するっての！！ったく…男に対して無防備すぎんだろうが》

ケルベロス《まあ、こんな事すんのは相棒だけだと思うがね～ウヒャヒャヒャ！！相棒よ～そのまま襲っちまえよ！》

バルド《はぁ！？お前何言ってんだ！？》

ケルベロス《冗談だぜ冗談、ウヒャヒャヒャ！！》

バルド《このナマクラが……後でへし折ってくれる》

フェイト「スゥ～…スゥ～…んっ、んぅ～…」

そんな風に念話で会話をしていた時だ、フェイトが急にモゾモゾと動き更に強く抱き付いてきた。

結果……

バルド「うおっ！？」

自分の胸に当る柔らかな物が更に強く押しつけられる。これは非常～～に不味い！？何とかしたいのは山々だが、動けない……。

如何したものか……と、バルドが悩んでいたその時……

バルド「ん？」

ケルベロス《相棒？如何したんだよ？》

バルドは急に頭の中で何かが見え始めていた。

そう、感応現象だった。

何処かの花畑、そこにいるのは幼い金髪の少女、それを優しげな表情をして見つめる女性。

それに少女は手を振って笑顔を振りまく。それに女性も同じく微笑み手を振るのだった。

とても幸せそうな家族風景、自分はもう手に入る事はないだろう、憧れの光景……。

だが、映像はそこで途切れ、次に映ったのは容器に入った何かの液体の中で眠る少女、そして、その隣にも同じ様な少女が同じく容器

の中で眠っている。瓜二つの少女が眠る容器を前にあの優しげに微笑んでいた女性は何処か憔悴した、疲れた様な、いや、野望に満ちた目をしていた。

？？？「もう少し、もう少しで……あと少しで、あぁ…待っていてね私の大事な――――」

自分の大事な者の名を口にする女性。

それを最後に映像は途切れた。

バルド「今のは……」

恐らく目の前で寝ている少女、フェイトのものだ。

だが、今の映像を見て彼は何かが引っ掛かった。前にも感じたこの感覚は何なのか……。

その映像を改めて思い返したバルドは一つの真実に辿り着いてしまった。

バルド「そういう事か……」

ババムート《若？如何したのですか？》

バルド《今、感応現象が起きた》

ケルベロス《おっ！そういう事なら嬢ちゃんの過去が見えたのか？》

バルド《いや、今見てようやく分かった事がある。フェイトは、共鳴者じゃない》

バハムート《なっ！？なんですって！？》

ケルベロス《はあ！？如何いう事だよ相棒！？》

バルドの突然の発言に長年相棒をしていた二振りの剣すら驚く。共鳴者は絶対だ。宇宙の誕生から続く、絶対真理。バルドはそれを否定したのだ。

バルド《ヒントは、プロジェクトFだ……》

バハムート《プロジェクト、F？……っ！？まさか！？》

ケルベロス《おいおいおいおい！？それは冗談だろ！？それじゃあ、嬢ちゃんは……！？》

バルドが放った単語にバハムートとケルベロスは暫し思考してバルドと同じ答えに辿り着いてしまった。

今二つの剣が人であったなら間違いなくその答えに頭を抱え、言いようの無い怒りに壁を殴っていただろう何ていう事だ！？では、ではこの少女の想いは……！！捻じ曲げられた運命……。その真実はこれ以上にない衝撃をバルド達に与えたのだった。

プロジェクトF……。それは、間違いなく彼女と、そして、バルドをも巻き込んでねじ曲がった運命に落としたのだ。だが、これでハッキリした。フェイトは本当の共鳴者では無い。

本当の共鳴者は……

バルド（だが、そうだとしても…俺の残りの命はもう少ない。フェイトを、こいつを幸せにする為に俺は命を捨てる！！）

例えそれが真実だったとしても、自分がフェイトを守る事に変わりはない。この命尽きるその時まで彼女を守るのが自分が決めた確固たる意志だ。

フェイト「んぅ……」

バルド「……取り敢えず脱出するか」

……まあ、幾ら決心しても今の現状あまり宜しく無い。バルドは、フェイトの腕の拘束から脱出を試みた。

しかし……

フェイト「んんぅ～……やぁ～……」

バルド「もがっ！？」

なんという事でしょう！？
バルドが脱け出そうとした途端にフェイトは腕を伸ばしてバルドの頭を再度拘束！！
そして、彼の頭は彼女の……谷間に落ちたぁぁぁぁぁ！！

な、何て羨まｓ――ゲフンゲフン！？けしからん展開だ！！

バルド「フェ、フェイト……起き…ろ……い、息が出来ねえ……」

フェイト「んにゅぅ～……スゥ～…スゥ～」

彼女の柔らかな二つの凶器に挟まれ呼吸が出来ない。
呼んでみるも彼女は起きない。それどころかより一層抱きしめて来る。

あっ、俺、決心するまでもなく今日此処で死んだかも……なんて事考えながらバルドの意識は真っ暗になった……

そして……

フェイト「きゃあああああああああああああああ！？　バルド、しっかりして！！　誰なの！？　バルドにこんな酷い事したのは！？」

ケルベロス（嬢ちゃん……アンタだよ……）

起きて早々、フェイトがそんな事を宣（のたま）ったのは言うまでもないだろう……

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

そんな今朝の出来事があり、フェイトはバルドにこっ酷く叱られた。

そんな彼女は、今一人で廊下を歩いていた。その彼女の前に突然、何か白く光る物体が宙に浮いて現れた。

フェイト「な、なに！？」

いきなりの出来事に狼狽するフェイト。その間にそれは姿を形作り始める。それは、徐々に人の輪郭を取り、その身をローブが包み込み顔をフードを深く被って隠した姿となった。

フェイト「貴方は、一体……！？」

？？？「……」

その姿は前に見た事がある。自分の意識の中、その最奥で出会ったその人に……。

問いかけるフェイトにその者は何も答えず背を向けて駆けだした。

フェイト「ま、待って！！」

その後をフェイトを追いかけた。廊下を駆け角を曲がり外に出ていく。

そして、その者が走るのを止めたのは六課の近くにある森の奥深くだった。

？？？「……」

フェイト「貴方は…何が目的なの！？」

？？？「時の歯車が動き出した……」

フェイト「え？」

???「もう、止められない。あの人は死に向かっていく……。もう止まらない、止める事が出来ない……！何故、なぜ貴方は止めてくれなかったの！！」

突然、糾弾される事にフェイトは戸惑う。だが、此処で引き下がる訳にはいかない。
この子が何を目的としているのかそれを聞きだすまでは……！！

フェイト「彼って誰なの！！貴方の言っている人って誰！？」

???「貴方しか止められないのに……！！貴方は間に合わなかった！！捻じれた運命の螺旋は動き出した……！！彼は、貴方には救えない！！」

フェイト「その彼って誰なの！？教えて！！」

???「その人は貴方の知っている人……。世界の真実を理解する、永遠の者…。私がたった一人愛した、大切な人……。人によって、肉親によって殺され、闇を統べる者となった世界の、星々の管理者……」

フェイト「私の……知っている人…！？」

自分の身近な者が命の危機に瀕している。その事に驚愕するフェイト。

その者の名を聞こうとしたその時だ……

――ドクンッ！！――

フェイト「ぐ、あああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

突然、あの頭痛が起きる。地面に膝を突き頭を抱える。熱せられた鉄の棒で体の中を穿られる様な耐えがたい激痛が襲いかかる。額から脂汗が浮かび上がり呼吸が激しくなる。

フェイト「ぐ、あああぁぁぁぁ！！あああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

？？？「貴方は知らねばならない。あの人の生きた軌跡を……！！その為に、貴方の中の共鳴の力を早める！！もう残された時間は僅かしかない。残された時間で、あの人を救って……捻じ曲げられた運命を持つ者よ…！！」

フードを被った子が手を翳す。それと同時に激痛が更に酷くなる。言い様のない激痛にフェイトの悲鳴が森の中に響き渡る。激痛に合わせて彼女の頭の中で何かが映し出される。
数多の星々が、銀河が流れ、巨大な、途轍もなく巨大な大宇宙が映し出される。

その中の一つの星、いや、一つの世界で爆発が起こる。

そこを中心に周囲に数多の光が、いや、漆黒の炎と青い氷の閃光が飛び散る。
その閃光は星と同等の大きさでそれが星々の間を通り抜けると衝撃波で星達が砕け、消滅する。

その閃光に負けない漆黒の光が同じく飛び散る。その光は星達を呑み込み跡形もなく消し去る。
その破壊的な閃光を放つ中心となる世界にそれはいた……。

生き物の息吹を感じない、荒廃とした大地。

しかし、そんな世界に突然黒い火柱や青い氷の柱が立ち上がった。
そこには、３つの影があった。一つは黒い丸みのある体に目が一つだけの不気味な存在と二頭の巨大な蛇がいた。

蛇の方は無数の目を持ち背に大きな翼を持ち、腕もあることから、さながら龍のように見えるが角が無く、髭も無いのでやはり蛇だろう。

そんな二頭の蛇は、目の前の巨大な球体に話しかける。

？？？「ここまでだ、ダーク。お前には長い眠りについてもらう」

ダーク「おのれ…この私に牙を向けるとは、この『イモータル』の面汚しが！！」

？？？「生憎、お前への借りはもうとっくに返したはずだ。それに、俺はもうお前に付いて行く気はない！」

？？？「ああ、お前の考えには俺ももう付いていく気が無くなった。だからお前には眠ってもらうぞ！！」

ダーク「おおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

球体から数十発の巨大な閃光が撃ち出される。それは、二頭の内一体を飲み込んだ。煙が晴れると、傷だらけだがそれでも立っていた。

？？？「無限の創製剣（インフィニットソード）……」

傷だらけの蛇がそう呟くとその蛇の周囲に剣が現れた。その数は…数千本にも、数万、数億にも達した。

ダーク「なんだとっ！？」

？？？「貫け……」

そう告げた瞬間、一斉にダークに剣が殺到する。

ダーク「ぐおおおおおおおおおおおおおお！！」

？？？「原子よ我が前に集え！！」

もう一体の前に一振りの大きな槍が現れる。

？？？「全てを薙ぎ払え！！運命（ロンギヌス）の槍！！」

その槍をダークに向けて投擲した。それは空気を切り裂きながら飛んでいきダークの体を貫いた。

ダーク「ぐおおおおおあぁぁぁぁ！！」

体中を貫かれ黒い球体の様な体を捻じり苦悶の声を上げるダークに、二頭はある術を発動させる。
それは、巨大な魔法陣でダークを挟むように展開された。

ダーク「これは……！？」

？？？「おやすみだダーク。時が来るまでその中で眠ってろ！！」

それは段々とダークを押し潰す様に動き出す。

ダーク「おのれ！創造の獣、崩壊の獣め！お前達は今完全に我らの敵となった。貴様らはもう何処に行こうと追われる身になった。貴様らに安息の時はもうこない！！」

フェイト「ダークに……創造の…獣……崩壊の獣……！！」

激痛の中、その単語を拾う事に成功する。それは、あの本に載っていた世界を観測する者達、『闇の五大王』、『銀河意思』…それが、何故戦っているのだ！？混乱する頭の中、話は進んでいく。

？？？「はっ！上等だ。逆にお前みたいな間違った思考持った奴らをもう一度、闇に還してやるよ」

？？？「さようならだ、ダーク」

ダーク「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

そして魔法陣は、ダークを押し潰しそして消えていった。

？？？「ぐっ……」

それを見届けた後、傷ついた蛇はその体を横たえた。

???「大丈夫か？」

???「ハハハ、ちょっとヘマした。けど早く逃げないとヤバいよな」

ボロボロの体い鞭をうって再び起き上がると、彼の周囲の空間が歪み始めた。

???「俺は一度、別の空間に行く。そこで傷を癒してから行動を始める」

???「そうか…なら暫しの別れだな」

???「次に会うのは何十年後か……はたまた何百年後か、何万年後か……。じゃあまたな、崩壊の獣、ガルド」

そう言って傷ついた蛇は消えていった。

???「ああ、また会おう。我が兄弟にして創造の獣、バルド」

フェイト「え……！！」

そう言ってもう一頭もそこから消えていった。そして、その世界から完全に生命反応はなくなった。

映像が歪み、切り替わった。

それは、何処かの小高い丘……。そこにいるのは、一人の小さな銀髪の少女、まだ十歳くらいだろう。

その少女が語り出す。

？？？「ねえ、バルド。私はね、全ての人類は互いに手を取り合えると思うんだ」

バルド「はあ？」

フェイト「バルド…！？」

少女がバルドと名を呼び、自身の思った事を言うとそれにポカンとした顔をした、バルドが座っていた。

そして、暫くして突然大笑いした。

バルド「ぷっ、はは、ははははははは！！！お前、やっぱ面白い奴だな！！全ての人類が互いに手を取り合えるって……くっ、くく

く、はははははは！！」

？？？「むっ！何で笑うの！？出来ない事はないと思うよ！？」

バルド「お前、アホだな。人間如きが自分とは異なる人と手を取り合う事なんて出来る訳ねえだろが。いいか、長い年月を生きた俺からの、人生の先輩として教えてやる。人間は何処まで行っても愚か者なんだよ。それ以上でもそれ以下でもねえ、人という存在は傲慢で無知な存在なんだよ」

？？？「むぅ～～！私だって人間だよ！！そんなこと言われると面白くないよ！！」

バルド「そうだったな。だが、お前は他の奴らと違ってたな。それなら、少し格上げして、可能性のある馬鹿ってとこか？」

？？？「それって、私もバカって事！？」

バルド「あ？自覚なかったのか？」

？？？「～～～っ、バルドの馬鹿～～！！！」

バカバカと言いながらポカポカとバルドを叩きまくる。ただ、少女の腕力程度ではくすぐったいだけなのかバルドは笑っているだけだ。そして、少女の頭に手を乗せて少しばかり乱暴に撫でる。

バルド「はぁ～、やっぱりお前は面白い奴だな。助けて正解だったぜ」

???「バルド、私以外だったとしても、絶対に助けてよね！」

バルド「そいつが救いようのない馬鹿じゃなかったらな。休憩はお終いだ。さてさて、これから如何なる事やら……」

???「我々の冒険に終わりなど無いのだよ、ワトソン君」

バルド「……お前、頭大丈夫か？良い医者教えるぞ？」

???「もぉ～～！！少しはノッてよ、バルドの馬鹿～～！！」

ポカポカと再び叩く少女。腰辺りで暴れる彼女を微笑みながら撫でて宥めるバルド。
それはとてものどかで、何より幸せそうな光景だった……。

再び映像が変わり頭の中に何かが映し出される。朧げに映し出されるのは雨の降る街の一角、そこに倒れている少女がいた。

バルド「フィフ！！！」

フィフ「あ……バルド……えへへ、ごめんね。私は、もう…駄目みたい……」

そこに駆け寄る男性、バルドがフィフを抱き起こすとその腹部から

大量に出血している。必死に呼びかける彼に彼女は弱々しく笑顔を向ける。

バルド「ふざけんじゃねえ！！まだ、まだ間に合う！！今から契約を行えば、まだ……！！」

フィフ「ねえ、バルド。私はね、今とっても幸せなんだ……。大好きな貴方に抱きしめて貰えてるんだもん……」

バルド「喋るな！！今治療を「もう駄目だよ……」っ！！」

フィフ「ねえ、バルド。私が死んでも…人を……恨まないで……あげ、て……。何時か、きっと……手、をｔ……あえｒ……来るから……。そｓ…て、私の……かｗりに…貴方ｗ……愛ｓ……きっと、くるから……」

目の輝きが濁り始め、声も途切れ始めてきた。フィフは最後の力を振り絞ってバルドに顔を寄せそっと、口付けを交わして離れ涙を流しながら何かを告げる。

フィフ「ごめんね、死んじゃってごめんね……」

涙を流しながら笑顔でそう言い、それを最後に目がゆっくりと閉じて、彼女の手がバルドの手から滑り落ちた。

バルド「フィフ……？おい、冗談だろ？目を開けろよ、目を…くっ、うあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

バルドの慟哭が街中に響く。彼女を殺した人間たちが彼を槍で体を貫かれても彼は泣くのを止めなかった。暫くして、彼の存在が異常と思い人々が後退りする頃には、彼の眼は怒りで燃えていた目の前で大切な者を奪われた彼の眼は、真っ赤に、いや、深紅の瞳の中に六芒星が描かれ、その中央には十字架があるものに変わっていた……。

バルド「お前等もか…お前等も……お前等も人と少し違うというだけで俺達を迫害するのかぁぁぁぁぁぁぁ！！！！許さんぞ……貴様ら人間を…俺は、絶対に許しはしない！！人間よ…滅びろおぉぉおおおお！！！！」

そう吠えて世界を闇に染め上げる。それは、周囲に存在する星も、世界も何もかもを呑み込んで黒に、いや、闇に染め上げた。

それを最後に映像が途切れ、再び森の中に戻って来た。

？？？「これでいい……。これからです。貴方の選択で彼は救われる。あの人を…頼みます」

そう言い残して目の前からその子は消えた。フェイトはそれに答える事が出来ない。いや、出来なかった。

手を地面に付いて息を荒げる彼女の汗が頬を伝い地面に落ちる。

彼女の頭の中は激しく混乱していた。バルドが……イモータル？その中でも最も最強の存在の『闇の五大王』の一人？イモータルの主を封印したのはバルドとガルド？

そして、最後に彼が抱き締めていたあの子が、彼が夏のあの夜に呟いていた人、フィフ……。

自分にそっくりな、けど全然違う少女だった。

戸惑いと不安、それと畏れが彼女を震わせる。

その時、彼女の懐からペンダントが零れ落ちる。それを手に取り開く、そこには幼い自分と家族のアルフそしてその自分達と一緒に笑う一人の男性、バルドが映っている。

フェイト「バルド……」

それをギュッと両手で包み込み、胸の所に当てる。違う、彼は人類の敵じゃない！！

そう強く否定する。今のフェイトにはそうする以外に選択がなかっ

たのだった……。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――

数日が経ち、フェイトは街に来ていた。

此処最近、街中で行方不明事件が多発していた。局は対策として夜間の出歩きと夜勤の禁止を行う。
しかし、その努力虚しく住民の消息が絶たれるのが後を絶たないでいた。

そこで、若くして検挙率の高いフェイトが捜査に抜擢されて彼女は街中を調査していた。
その彼女は、バルドと一緒では無い。あの事があってから彼女は無意識にバルドと距離を取っていたのだ。

バルドは彼女の様子の変化に気付いていたが様子を見る為に態と放って置いている。

フェイト「此処だね……」

行方不明者の一人の最後の目撃場所に辿り着き周辺の調査を行う。
だが、その者の所持品などは特に見つからない。
暫く、その辺りを探るも結局、手掛かりは一切なかった。

フェイト「バルディッシュ、行方不明者はどの位いるんだっけ？」

バルディッシュ［一週間以内で総勢三十五名です。その全てが十代から三十代の者です］

フェイト「まだ若い人たちが中心に行方を消すなんて…」

一週間で三十五名、人攫いにしては少し異常な人数だ。それに、一番気になるのが…

フェイト「自宅にいた人も姿を消したんだよね？」

バルディッシュ［はい。三十五名の内、五名程が自室にいたのを家族が確認しています。しかし、翌日になって姿を消しています］

そう、この行方不明事件の気になる事は自宅にいた者も消息を絶つという怪奇現象があった。
何者かと争った形跡もなく、怪しい物音が聞こえた訳でもない突然姿を消したのだ。

謎だらけの事件、だが、一つだけ手掛かりとなりえるものがあった。

フェイト「夜な夜な聞こえる、奇怪な叫び声……」

最近、ミッドで話題になっている謎の叫び声。それは、住民たちに恐怖を植え付けていた。夜にその声を聞いて恐怖で眠れずにいる人が大勢いるのだ。その怪奇現象が発生してから行方不明事件は発生していた。恐らく、それに関与していると思われる。

早速フェイトは、地上部隊本部の下に行きギンガやスバルの父、ゲンヤに今回の事で何か手掛かりがないか聞くと、その怪しい声を聞いた件数が最も多い場所を特定する事が出来た。

その周辺につき調査を始める。お昼の太陽が照り付ける街中、人が多く歩きその間を縫いながら歩き続ける。そして、その人込みの中、フェイトは一人の日傘をさして更に帽子を被っている男性とすれ違った。

フェイト「……あれ？」

バルディッシュ［マスター、如何しました？］

フェイト「え、あ、ううん何でもないよバルディッシュ」

男性で日傘をさす人なんて珍しいなあ…それにしても帽子要らないんじゃないかな……、と思いつつフェイトは再び歩き出す。

その彼女をその日傘の男は目深に被っていた帽子の向こうから目を光らせて見つめていた。

男性「チノカオリ、コレハ、マチガイナイ……」

そして、彼女の後を追い始める。そして、彼女が角を曲がったあとに話しかける。

男性「オジョウサンオジョウサン、ナニカオコマリデスカ？」

フェイト「え？あの…貴方は？」

男性「ワタシデスカ？ワタシハ……」

陽の光の届かないビルに囲まれた人通りの少ない通路、フェイトはその目の前の男性に無意識に恐怖を覚える。

一般市民の筈なのに、背筋を駆けるこの悪寒は一体何なのか！？思わず身構えるフェイト、しかし、目の前の男の姿が陰に溶けて消える。

フェイト「えっ！？」

突然消えた男性にフェイトは、驚くが直ぐに目の前の男性が市民で

ないと判断しバルディッシュをセットアップしようと構えた。

フェイト「バルディッシュ！セットアｐ―「オソイ……」がっ！？」

しかし、彼女がバルディッシュを構えた瞬間、フェイトの背後に男性が突如現れ首に手刀を落とす。

首に来る衝撃でフェイトは力が抜けて地面に倒れる。その時、手に持っていたバルディッシュを落してしまった。

男性「フフフ、『ヤミノイチゾク』ノニオイヲモツムスメ……コレハイイエサニナル」

地に倒れるフェイトを見てそう呟き低く笑う。

遠のき始める意識の中、フェイトは……

バルディッシュ［マスター！！］

フェイト（バルド……助け……て……）

大切な者の名を呼び、そして、フェイトの意識は真っ暗になった……。

バルド「ん？」

ケルベロス［相棒？急に立ち止まって如何したよ？］

バルド「いや、何でもない……（気の所為か？今、フェイトが助けを求めてたような……）」

ふと、頭の中にフェイトの声が聞こえて首をかしげる。

空を見上げると、先ほどまで晴天だったにも拘らず今は曇天が空を覆っていた。

最近起きた行方不明事件、それと同時に時折感じられる闇の気配……。

これは、もしかすると……。今度、ガルドと共に探ったほうがいいなと考えをまとめる。

そこに、カインとなのはを見つけて思考を中断して話しかける。

バルド「お前等、何してんだ？」

なのは「あ、バルドさん。いまねロイド君の見舞いに行ってたの」

バルド「あ～あれ以来、調子が思わしくないもんな。んで、如何だったんだ？」

カイン「如何もこうも、コレットと二人で桃色世界を展開中だったから撤退してきたよ……」

聞く所によれば、二人が入った時にコレットがいてロイドを甲斐甲斐しく看病しており、ご飯を食べさせるという何とも甘い空気を放出しているので早々に退出した、らしい。

その話をしながらバルド達は散歩をしていた。そこに……

カイン「誰か来るぞ？」

なのは「ホントだ。如何したんだろ？」

六課に一般人が来るとは珍しい。そう思ってなのはは如何したのかと聞く為に駆け寄る。

顔がフードで隠れて少し見えない少しばかり怪しい様にも見える。

なのは「あの、如何したんですか？」

市民？「オンナ…は……アズカッタ……取りカエ…シタ……ケレ……バ…一人デ……コイ……」

なのは「え？」

カイン「なのは！！そいつから離れろ！！」

市民？「コイ……イモー…タ…アアアァァァァァァァァァァ！！！
ゴアアァァァァァァァ！！！」

突然雄たけびを上げてなのはに飛び掛かって来た。その時、なのははその人の顔を見た。

青白い生きていない様な肌、生気の感じない虚ろな目、涎を垂らしながら口から生える二つの大きな牙、自分に伸ばされるのは骨と皮だけの細い皺だらけ腕が…迫って来た。

なのは「ひっ！？」

バルド「ふん……」

しかし、その腕は彼女に届く事は無かった。両者の間にバルドが素早く入り、身の丈よりも大きい漆黒の大剣、ケルベロスを横に振るって力任せにその胴を両断、というより引き千切った。

カイン「なのは、無事か！？」

なのは「あ、ああ…カ、カイン君……あの人、人じゃ……」

カイン「バルド……奴は！！」

青褪めて震えるなのはを抱きしめ落ち着かせる様に背を擦りながらバルドに問いかけると、バルドは肩にケルベロスを担いで頷く。

バルド「ああそうだ。この気配、間違いない……不死者（アンデッド）だ」

目の前で粒子となって消えていく不死者（アンデッド）をバルドはジッと見る。見た感じからしてなって少ししか経っていない……。それと、来た方向が首都の方からという事は……。

バルド「まさか……最近の闇の気配は……！！」

なのは「カ、カイン君、バルドさん。あの人、女は預かったって……」

カイン「女？一体誰の事だ？」

バルド「フェイト……！！」

その言葉にバルドの脳裏に大切な少女の顔が浮かんだ。バルドは、二人に背を向け街の方に歩き出す。

カイン「何処に行く気だバルド！？」

バルド「決まっている。このふざけた事をする野郎を倒しに行くんだよ……」

カイン「馬鹿を言うな…今のお前は……」

バルド「行かせろ……。これは、俺の役目だ……」

カインを睨むバルド。その瞳には一切の情はない。恐らく、彼はこの事件を起こした者を許さないだろう。それ程の怒りを感じ取ったカインは……バルドを行かせる事にした。

カイン「分かった。だが、この事はガルド達にも知らせるからな」

バルド「勝手にしろ。その時は全て終わっている……」

そう言い残してバルドの姿が消える。カインはバルドの行ったであろう方向を見る。

なのは「カイン君……一体何が……？」

カイン「その説明は皆を集めてからする。兎に角、皆を部隊長室に集めるぞ」

時は一刻を争う。急がねばフェイトどころかバルドの命すら危険に陥るだろう。
なのはを立たせて二人は急いで六課に戻っていった。

――――――――――――――――――――――――――

――――――――――

バルドは街中を風の様に駆け抜ける。その速さは凄まじく市民には突風が通り抜けた様な感覚しか感じなかった。

ケルベロス「相棒！！バルディッシュの反応が近くにあるぜ！！」

バルド「分かっている。この角の先だ！！」

角を曲がった先に行くと、そこは日当たりの悪いビルとビルの間、太陽が当らぬ陰の世界。
そこに、闇には似つかわしない、金に輝く物が落ちていた。そう、フェイトのデバイス、バルディッシュだ。

バルディッシュ「バルドさん！！」

バルド「バルディッシュ、一体何があった？」

バルディッシュ［マスターが連れ攫われました。この状況を簡単に説明します！！］

バルディッシュは簡単に状況を説明する。それを聞いてバルドは、やはりそうかと理解した。

バルド「兎に角、フェイトの捕らえられている場所に向かう」

バルディッシュ［場所は分かるのですか？］

バルド「ああ、分かる。こんなにキナ臭せぇ臭いを残していく屑にフェイトは連れて行かれたのか……！！」

――ドンッ！！――

バルドの隣のビルの壁から激しい音が聞こえ、ビル全体が揺れた。よく見ると、バルドがビルの壁を拳で殴っていてその箇所を中心に大きく壊れている。
そして、自分の唇を切れる程に噛み締める。

バルド（俺が……俺が守らないといけねえのに、何やってんだ俺は！！！これじゃ、あの時と同じだ！！あいつを、フィフを守れなかった時と一緒じゃねえか！！）

嘗て、自分が守れなかった最愛の少女、彼女と共に世界を旅する為に交わす約束をした永遠の誓い。
それを果たす為に彼女は十六まで待って欲しいと言った。だから、彼は待った。その時が来るのを……。

だが、それは果されなかった。彼女は、愛する彼女は、誕生日の日に殺された。彼女の世界に住む……愚かな人間に！！

そして、今度はフェイトの命までも脅かされている……。そうはいかない。そうはさせない！！
自分のこの命を投げ捨ててでも、彼女を…フェイトを救う！！

バルディッシュをケルベロス達と同じ空間に収納し、バルドは地面を蹴る。
それだけで、バルドの足元のアスファルトは巨大な亀裂を生み、砕け、彼を中心に凹む。
バルドは、天高く飛んだあと気配のする方角に向かって最大速度で飛ぶ。

それは、空気が振動する位の速さだった……。

バルド（この速度なら、着くのは夜か……。今日は、満月か……）

恐らく相手も同じ存在。なら、完全に殺しつくすだけだ！！自分の大切な者に手を出した事、魂の底から、いや、輪廻の底から、いや、存在そのものから後悔させてやる！！

そして、バルドの姿が消えて、残るのは彼の進んだ跡を残す赤い残光だけだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

一方、六課の方でもカインから集合を掛けられた主要メンバーが集結する。

カイン「フェイトが連れ去られた」

皆が集まって早々、カインはそう発言した。

はやて「なんやて!?」

エリオ「それは本当なんですか、カインさん!!」

キャロ「お母さんは、お母さんは無事なんですか!?」

カイン「それは分からない。フェイトを攫った奴の意図が見えないからな。だが、今はバルドが先に向かっている」

クラウド「バルドがか……？」

カイン「ああ。そして、その犯人は、不死者（アンデッド）を操って伝えに来ていた」

ガルド「なにっ！？」

その事に一番驚いたのはガルドだった。それに続いてロイド達も状況の不味さに気付いた様だ。

何の事か分からない六課陣はその存在について問う。

スバル「不死者（アンデッド）？それって……なに？」

ガルド「簡単に説明すれば…死んだ存在が生きて動いているって奴らの事だ」

ティアナ「死んだ存在が……！？そんなの有り得ないわよ！？」

セフィリア「ううん。実在するんだよ。私の世界、魔界にもロイドの世界にも、ゾンビっていうのは存在するんだ。そして、不死者（アンデッド）はゾンビとは違うけどある存在の僕にして下僕、ただ、命令に従う操り人形。生きた人間を餌として襲い、吸血して、その者も自分達と同じ下僕に変える闇の存在……」

ガルド「こうしてはいられん！！直ぐにバルドを追わねば！！」

ヴィータ「けどよ、あいつは結構強いぜ？一人でも勝てんじゃねえか？」

ガルド「ああそうだな。だが、その時はあいつも……死ぬ」

アイネ「なっ！？」

その言葉に激しく反応したのはアイネだった。

アイネ「バカな！？あいつほどの者が死ぬだと！？有り得ん！！」

はやて「ど、如何したんやリインフォース？いきなり大声出して！？」

ガルド「そうか。お前は確か、バルドの力を知っているか……」

アイネ「あいつが死ぬなど考えられん！！如何いう事か説明しろ！！」

ザフィーラ「如何したのだ、アイネよ？」

エリオ「そ、そんな事よりも、父さんと母さんを助けに行きましょう！！」

コレット「そうだよ！！急がないと二人とも危ないんだよ！！」

ロイド「今回は俺も行くぜ！！仲間のピンチの時に病室にいるなんてできっかよ！！」

セフィリア「ロイド大丈夫なの!?」

ロイド「もう動ける!!俺もバルドを助けに行くぜ!!」

ガルド「そうだな。兎に角説明はあいつ等を助けた後にする。直ぐに出撃させてくれ」

はやて「わ、分かったで!!みんな、いくで!!」

ガルド「場所は俺の指定する所に行ってくれ。そこにバルドとフェイトはいる筈だ」

ヘリを動かし、その場所に向かわせる。

シリウス「今日は満月か……。これは…バルドは本気になるな~……」

はやて「シリウス君、何か言った?」

シリウス「んにゃ、な~んにも」

恐らくバルドは本気になる。だが、今の彼は非常に危険だ。もし、あれを使用すれば最悪の場合、彼は……死ぬ。

ロイド（絶対に使うんじゃねえぞ、あの魔眼を!!!）

仲間の安否を心配するロイドはただ、その恐るべき力の解放をしない事を願っていた。

## 第五十八話（後書き）

如何でしたか？遂にフェイトが何者かに捕まってしまいました。
さてはて、今後は一体どうなる事やら……？

なのは「フェイトちゃんを捕まえた人は一体何者なの！？」

それは次回のお楽しみ……。まあ、恐らく読者の皆様は分かっていらっしゃると思われますが……。

次回の更新は早くしたいです。一様このＰＣを触れなかった間に構成は考えているので出来上がるのは早いと思います。これを読んでくれている読者の皆様、ホントに今回は申し訳ありませんでした。
これからも、精進しますので宜しくお願いします！！

怒れるバルドは果たしてフェイトを救えるのか！？

次回もお楽しみに！！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第五十九話（前書き）

五十九話更新！！
謎の人物に捕まったフェイトを果たしてバルドは救えるのか！？

今回は少しばかり長めです。それと少しばかり流血シーンが多いのでご注意ください。

貴方は大切な者を守るために自らの命、投げられるか……？

では、本編をどうぞ！！

# 第五十九話

暗い、真っ暗な空間。その暗い部屋の天井から水滴が溜まり落ちて床に倒れている少女の頬を打つ。

フェイト「う……うぅん……」

頬を打つ冷たい感覚に少女、フェイトは意識をゆっくりと覚醒する。ぼやける視界に最初に映るのは真っ暗な空間であった。

フェイト「こ、此処は……つっ!?」

首に残る痛みに手を当てようとしたが腕が上がらないのに気付いた。自身の腕を見ると、何かの拘束具が自分の両手、足に付けられてそれが鎖を通して床に縫いつけられていた。

フェイト「な、何これ!?「お目覚めかな?」っ、誰!?」

声がした方を見るとそこには一人の男が椅子に座っていた。

フェイト「貴方は一体……」

？？？「俺は、第十一の使徒ディグ。くくく、まさかこんなにも早く実験の餌が手に入るとは思わなかった……」

フェイト「じ、実験！？一体何をする気なの！？」

ディグ「くくく、プロジェクトFの遺産、フェイト・T・ハラオウン。確かに興味はあるが、今はお前を解体する気はない。だが、この実験を終えた後に解体してその構造を調べて見る気はあるがな」

フェイト「っ！！」

そう言ってフェイトを下から上までじっくりと観察する様に見て来る。拘束具は少しばかり体を動かす程の余裕があるのでその視線から恐怖を感じ逃げる様にフェイトは少しばかり後ろに下がる。

ディグ「くくく、そんな実験材料にいい物を見せよう」

ディグが指をパチンと鳴らすと目の前に大きな映像が映された。そこには、大勢の人が捕らえられていた。そして、その人達を囲んで見張っているのは同じ行方不明者だった。だが、その見張っている者達は何処か虚ろな目をしていて何より生気が感じられなかった。

ディグ「如何だ？素晴らしいであろう。その見張っている者達は俺の下僕だ」

フェイト「まさか、貴方がこの失踪事件を起こした犯人！？」

ディグ「くくく、そうだ。これも実験の為の材料に過ぎない」

そのディグの手に持つグラスに何時の間にか傍らに現れた失踪者の一人が赤い液体を注ぐ。

フェイト「あの服装…失踪した人！？君、目を覚まして！！その人は貴方達を攫った犯人だよ！！」

ディグ「ふふふ、無駄だ。この者にはもう意思はない。あるのは、俺という主に対する命令を聞くという思考しか残っていない」

フェイト「如何いう事！？」

ディグ「この者達はな、もう死んでいるのだよ」

フェイト「え……」

ディグ「見て分からぬか？この青白い肌に殆ど骨と皮だけの体、そして、生気を感じられない白い目。そう、この者達は死んで新たに『不死者（アンデッド）』に、俺の僕として生まれ変わったのだよ！！」

フェイト「そ、そんな……」

ディグ「だがな、この様に弱々しい姿をしているがな……やれ」

ディグが顎を動かすとその者が動き出しフェイトの前に来る。そして、徐に彼女の首を掴み片手で持ち上げた。

フェイト「が…かはっ……！？」

ディグ「この様に力は普通の人間の五倍以上の力を持つようになるのだよ」

そのまま、フェイトの首がギュッと締められた。呼吸が出来ずもがく。その手を離そうとするが拘束具と鎖で動けない状態でされるがままの状態だった。酸素が足りず、首を絞められる事による激痛で視界が明滅して意識が遠のく。だが、その寸前で首を絞めていた手が離れる。受け身も取れず地面に倒れ込むフェイト。

フェイト「ケホッ、ケホッ、ケホッ！！」

ディグ「ふむ、危うく実験の餌を殺してしまう所だった。まだまだ、操るには慣れが必要か……。だが、素晴らしいであろう？出来損ないよ。身体能力が数倍に跳ね上がった者達。たった一人で数人のＡ級魔導師を相手出来る力を持つこれが数体いれば管理局などあっという間に壊滅できる……」

クククと声を殺して笑うディグ。もし、此処に彼の仲間がいたらその変化に驚いているだろう。

フェイトは、呼吸を浅くして何度も息を吸い込む。こんな危険な事をする者をこれ以上野放しにする訳はいかない。

フェイト「そ、そんな事…！！」

ディグ「出来るのか？デバイスも持たずに拘束もされてまともに動けない者が俺と俺の僕を倒せると思うのか？」

フェイト「っ……！！」

ディグ「くくく、まあそこで俺の実験成果を聞いてろ。俺は、長年研究をし続け遂に手に入れたのだよ。闇の一族『イモータル』の力をな」

フェイト「なっ！？」

ディグ「くくく、その名を聞いて反応を見せたという事はその存在の事を知っている様だな。いやはや、俺も驚いたぞ。こんなにも早く『イモータル』に関わりを持つ者が現れるとはな」

その事にフェイトは驚く。自分がイモータルと関わりを持っているとは如何いう事だ！？

自分は会った事もない筈だ。その事が表情で分かったのかディグは鼻で笑った。

ディグ「はっ！まさか、イモータルの存在を知っているが会った事がないと思っているのか？お前は本当に馬鹿だな出来損ない。お前は既にその存在に会っている。いや、それと共にいるだろう。その様に闇の気配をプンプンと纏わせているのが証拠だ！！中々に強大な力を持つ存在の様だが……これから会うのが楽しみだ」

その時、建物内が激しく揺れる。そして、映像には囚われた人達のいる部屋の壁を破って入って来る者がいた。

フェイト「バルド！？」

そう、彼女の最も大切な者、バルドだった。

---

壁をケルベロスで軽く破壊して内部に侵入する。
そこには、最近行方不明になっていた人達が捕まっていた。

そして、バルドに向かって飛びかかる数体のアンデッド。

バルド「雑魚に用はない……」

ケルベロスを一振りし一体を葬る。次に来た一体の頭を鷲掴みにしてそこから漆黒の炎で焼く。

悲鳴を上げてそれは頭を一瞬で焼き尽くされ、更に黒炎が体にも伝わって消失する。

更にきた一体の腕を擦りぬけケルベロスの柄で顎をかち上げ宙に浮かし回し蹴り、吹っ飛んだアンデッドはその後ろから突撃しようとした者にぶつかって壁に激突。

そして、動く暇もなくバルドが瞬時に目の前に現れケルベロスで突き刺す。壁ごと貫かれた二体を葬る為にバルドは力を入れる。

バルド「安らかに眠れ……」

ケルベロスに炎が纏いアンデッドを内部から焼き、そして、斬り上げた。その一撃で焼失し壁が爆発して砕けた。ケルベロスを軽く振って肩に担ぎ市民を見る。

バルド「如何やら怪我はない様だな」

市民「は、はい……ですが、貴方は？」

バルド「管理局のもんだ。お前等を救助に来た。ただ……今斬った

のは同じ失踪者だろ？」

それに市民達は俯く。バルドは指を鳴らすと目の前に黒い炎が一つ出来あがる。

バルド「残念だが、あの者達は手遅れだ。今から俺はこの先にいる犯人と話を付けないといけない。悪いが、お前達だけで此処から脱出して欲しい。退路は確保している。この先を真っ直ぐ進めば人が来てくれる。それまで、この炎がお前達を守ってくれる」

バルドの指さす方角には彼が通ったのだろう、漆黒の炎の道が出来ていた。

失踪者の少女「あ、あの！！」

バルド「ん？なんだチビッ子？」

失踪者の少女「大丈夫なんですか……？」

そう聞かれてバルドはフッと笑って少女の頭に手を置いて撫でる。その暖かく大きな手は人を安心させる何かを持っているのを少女は感じた。ただ……

バルド「まあ、なる様になるさ。全員無事、脱出してくれよ。じゃ

あな」

そう言って此方に背を向けて歩むその人の背が、如何しても死を背負っている様に見えてしまったのだ。

――――――――――――――――――――――――――――

ディグ「くくく、やはり下僕では相手にならんな」

フェイト「バルド……」

ディグ「もう直ぐ奴は此処に辿り着くだろう。だが、それでいい……」

ニヤリと笑う。そして、直後壁が轟音を立てて崩れた。そして、煙の立ち昇る中からバルドが姿を現す。

そこに、ディグの隣にいた者が手に刀を持ち斬りかかる。しかし、バルドはまるで火の粉を払う様にその者を両断して斬り伏せた。斬られた者は漆黒の炎に身を焼かれ跡形もなく焼失した。

フェイト「バルド！！」

バルド「フェイト……」

ディグ「いや～漸く会えたよ！！この時をどれ程待ちわびたか！！！」

ディグの歓喜の声にバルドはフェイトの隣に何時の間にか移動したディグを見る。

バルド「お前、使徒か……？」

ディグ「そうだ！！俺の名はディグ。第十一の使徒ディグだ！！」

バルド「フェイトを離せ。あいつは関係ない筈だ」

ディグ「そうはいかない。おっと、動くなよ？動いたら……」

フェイト「きゃあっ！？」

ディグが指を鳴らすとフェイトの影から黒い何かが現れ彼女の体に巻き付いて宙に浮かし、まるで十字架に縛られた様な恰好にされた。そして、彼女を縛っている鞭の様なものが一つ喉元に来て鋭い針に変化し軽く当てる。

フェイト「っ！？」

ディグ「動けば、出来損ないを思わずプスリと刺してしまうぞ？」

バルド「下衆が……！！」

ディグ「さあ、持っている武器を捨てるんだ。でないと……」

フェイト「バ、バルド……」

バルド「フェイトは関係ない。彼女の命は助けてやるんだ」

ディグ「……いいだろう」

ケルベロス「駄目だ相棒！！あいつは、嬢ちゃんも殺す気だぞ！！信用すんな！！」

バルド「うるせぇぞケルベロス……。お前は黙ってろ」

バルドはケルベロスと空間からバハムートまで取り出して床に投げる。

二振りの剣の重さで床がそこだけ陥没した。

バハムート［若！？］

ケルベロス［馬鹿野郎が！！なにして――！！］

バルド「黙ってろ馬鹿共が……」

バルドは二振りの剣の突きささる方に向けて手を翳すと障壁がケルベロス達を包み込んだ。

バルド「これでいいんだろ？」

ディグ「くくく、それでいい……」

それを確認してディグはニヤリと笑う。そして、ディグの周囲に闇の鞭が出現した。

ディグ「では、実験開始といこうか！！！」

ディグの体の色が変化する。青白い肌に鋭い爪が生え、口からは鋭い牙が生えた。
そして、魔力とは違う禍々しく、そして、全身から悪寒が駆け廻る様な感覚がフェイトを襲う。

バルド「やはりそうか。お前があの人間をあの姿に変えたんだな？」

ディグ「ククク、ソウダ。コノゼッタイナルチカラ『イモータル』ノチカラデ、アノモノタチヲ、アンデッドニカエタノダヨ！！」

バルド「……」

ディグ「マズハ、コテシラベダ！！」

ディグは徐に懐から拳銃を取り出す。人間の頭など、脳髄を軽く吹き飛ばすほどの火力を持ったその拳銃をバルドに向かって発砲した！それはバルドの頭に当り、彼は吹っ飛ぶ。

フェイト「バルドォォ！！！」

フェイトが悲鳴を上げる。だが……

軽く吹っ飛んだバルドは直ぐに脚を踏ん張り止まる。その額には銃弾が凹んでくっ付いていた。
それが落ちて地面に跳ねる。なんと、彼は銃弾を頭に受けたにも拘らず怪我を負っていなかった。
その光景にフェイトは驚愕の目で見ていた。

フェイト「バ…ルド……？」

ディグ「ククク、ヤハリジュウダンテイドデハ、コロスコトハデキナイカ……」

ディグは次にバルドに向かって自身の作った複数の剣を生み出して投擲した。それは真っ直ぐバルドに飛び、彼の腹を貫いた。

バルド「つっ！！」

フェイト「いやあっ！！」

ディグ「ククク、デキソコナイヨ、メヲソラサズヨクミルノダ！！」

顔を逸らして見ない様にするフェイトの頭を掴んで無理矢理その方向を向かせた。

そして、彼女の見た光景は……剣を自力で抜き取るバルドの姿があった。

抜き取る度にそこから血が出て足下を濡らす。その光景にフェイトは青褪めた顔で見る。

ディグ「ククク、アレガ、オマエノナカマノ、ホントウノスガタダ……」

フェイト「あ…ああ……あああ……」

バルドが剣を全て抜き取りそれを地面に投げ捨てる。すると、バルドの出血が急に止まった。そして、なんとバルドの穴の空いた腹が急速に塞がったのだ。そう、傷一つも残らずに……

ディグ「サスガダナ。モウキズノカイフクヲオエルカ。ヨクワカッタダロ、プロジェクトエフノイサンヨ。アレハ、ニンゲンデハナイ。アレコソ、セカイヲスベル、ヤミノイチゾク『イモータル』ダ」

その言葉にフェイトは愕然とする。バルドが……イモータル？

嘘だ……。嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ！！！

信じたくない。信じられない。それでは、彼は人間の……人類の敵という事なのか！？

信じられない事にフェイトは現実を受け入れられなかった。

フェイト「いや……。嘘だ……。バルドは……そんなものじゃ……！！」

ディグ「ハハハハハ！！ドウダ、イモータルヨ？ナカマニ、ミズカラノソンザイヲヒテイサレタキモチハ？」

バルド「………ふっ」

ディグ「……ソウカ。ナラバモットアソンデヤルヨ！！！」

バルドに対して一方的な攻撃が始まった。剣を出してそれを幾つも投擲し彼の体を貫く。続けて闇の鞭で殴る。腹に一撃を受けてバルドが苦痛の表情を浮かべた。その彼を打ち上げて、直ぐに叩き落とす。地面に勢いよく叩き落とされるバルドに続けて剣が周囲を囲み落された彼のいる場所に向かって一斉に放つ。

肉を穿つ嫌な音が断続的に聞こえフェイトは悲鳴を上げる。それが治まり静まり返る空間。その煙の中から何かが立ち上がる影が見える。そして、煙が晴れるとそこには、体中が剣で貫かれているバルドがいた。しかし、その突き刺さった剣が勝手に抜け落ち傷付いたバルドの体が徐々に塞がり始める。

ディグは再び攻撃を再開した。今度は闇の鞭を鋭く尖らせて放つ。それが、バルドの体を穿つ。バルドが口から血を吐きだす。その彼を宙に浮かせて放り投げる。その彼の下から槍が生み出され下からバルドの腹を穿った。更に上から闇の槍が放たれ両肩と脚、腕を貫き地面に叩き落とす。

落した彼にディグが魔法を使い、雷を落とした。それによってバルドのいる場所を中心に爆発が起きた。煙立ち昇る中からバルドは立ち上がり姿を現す。その体は焦げていて痛々しい。しかし、その焦げた体も穿たれた場所も少しずつ回復していく。そこに、ディグは闇の鞭を剣に変えて振り下ろす。刀身が伸びそれはバルドの左腕を斬り落とした……

バルド「ぐっ、がぁぁぁ!?」

フェイト「バルド!?お願い、もう止めて!!バルドが……バルドが死んじゃう!!!」

ディグ「クカカカ!!ドウシタイモータル?オマエハ、ズイブントヨワイナ!!」

切り落とされた部分から大量の血が噴水の様に噴き出し床はもう殆どが彼の血で赤く染まっていた。
鉄臭い臭いが辺りに充満していてフェイトは吐き気がした。
だが、フェイトは目の前の光景からもう目が離せないでいる。あれ程の攻撃を受けて、本当ならば彼は死んでいる筈だ。だが、彼は生きている……。少しずつだがその穴のあいた体を回復しているのだ。

だが、ディグはその傷が回復するのを待たない。何度も、何度も何度も何度も執拗な攻撃を続けた。
それでも彼は立ち上がる。だが……フェイトは気付いてしまった。

バルドの回復速度が最初の頃よりも極度に減少しているのに……。
バルドの様子も変だった。最初は問題なさそうな顔をしていたのに、今は呼吸も荒く、珠の様な汗を流す位に体力を消耗している。

それに気付かないディグではない。

ディグ「クカカカ！！イモータルヨ……モウオシマイカ？ナンダ、ヤミノイチゾクトテ、タイシタコトハナカッタカ」

フェイト「もう……止めて……！！お願い……バルドに、もうこれ以上、酷いことしないで……！！」

ディグ「ソウダナ。コレイジョウハヤメルトシヨウ……」

バルドの痛々しい姿にフェイトは涙を流して嘆願する。
ディグはそれに応えた様に見たが……直ぐにニヤリと笑う。

ディグ「コレデオワラセテクレヨウ……」

フェイト「え……？」

ディグ「シッテイルカ、デキソコナイ？イモータルノジャクテンハ、タイヨウダケデナイ……。ドウゾクノ、ヤミノイチゾクノモノノコウゲキハトオルノダ。ソシテ……モウヒトツノジャクテンハ……」

ディグの前に禍々しい魔法陣が出現した。その魔法陣の前に闇が集束する。そして、それは一本の槍となりバルドにその穂先を向けた。

ディグ「シンゾウヲ、ウガテバ……シヌ！！シネ、ヤミノイチゾクヨ！！！」

フェイト「や、止めてえぇぇぇぇぇ！！！！」

そして、槍が放たれた。猛スピードで飛ぶ槍は真っ直ぐバルドの心臓目掛けて飛び、

彼の心臓を……

貫いた……

穿たれ、大穴の開いた場所から……

鮮血が……

噴き出した……

バルド「っ！？がはっ……！！」

フェイト「あ、ああ……バル、ド……！！」

バルド「フェ……イト……」

そして、バルドはフェイトの前でうつ伏せに倒れた……。
その彼の下から新しい鮮血が、広がった……。

フェイト「あ、ああ……あああ……いや、いやだよ…。バルド、
そんなのって……いや、いや……いやあああああああああああ

ああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

バハムート「若あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ケルベロス「相棒！！くそがあああああああああああああああああああああ！！この偽物め……ぶっ殺してやる！！！！！」

ディグ「ククク……ハアハハハハハハハハハハハハハ！！！！ツイニ、ツイニタオシタゾ！！！アルジデスラ、タオセナカッタ、ヤミノイチゾク、『イモータル』ヲ！！！アマタノセカイノ、ブキスベテガ、ケッシュウシテモタオスコトノデキナカッタ、オオイナルソンザイヲ！！アタマスラフキトバシテモ、カラダヲスベテケシトバシテモ、ヤミサエアレバヨミガエル、セカイサイキョウノ、ヤミノケンゾクヲ、タオシタ！！オレハ、シンノイミデ、サイキョウニナッタノダ！！！ファギィィィィィィィ！！！」

ディグの高笑いが響く。だが、フェイトにはそんな煩わしい音は聞こえていなかった。目の前の現実を受け入れられなかったから。あの、バルドが…何時も自分を心配してくれる彼が……何時も自分を助けてくれる彼が……大切な、彼が……死んだ事に……。

これは夢だ……！！夢なんだ！！夢なら覚めて！！そう何度もフェイトは現実を否定するがこれが現実である……決して覆る事のない現実なのだ……。涙で視界が歪む。こんなの認めたくない、認められない！！

自分の目の前で、今度こそ背中を守ろうと決めたのに……今度こそ、

守りたいと思っていた大切な人が、目の前で、目の前で死んでしまった……。

ディグ「フゥ～……。ヤミノチカラヲツカイスギテ、チガタリンカ……」

フェイト「いやあっ！！」

ディグはフェイトの服を掴み引き裂いた。彼女の首筋が晒され白い磁器の様な彼女の首筋に鼻を近づけ匂いを嗅いで来る。

ディグ「ホウ。コレハコレハ…ナントゴクジョウナカオリダ。イママデ、キュウケツシタニンゲンノナカデハサイジョウキュウノカオリダナ。コレヲハタップリト、タンノウデキソウダナ……」

フェイト「いや……止めて……助けて……助けて……バルド……」

フェイトは大切な者の名を呼ぶ。その者は倒れたまま動かない。そんな彼女の項（うなじ）にディグは口を近づけてきた。

ディグ「モウヤツハ、シンダ。オマエモ、オレノシモベトシテ、エイエンノヤミニ、ノマレルガイイ、プロジェクトエフノイサンヨ！！」

フェイト「いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

身動きの取れない彼女の首筋にディグの牙が迫る。

フェイト（助けて……！！助けて、バルド！！！！）

フェイトの悲痛な、助けを求める心の声が、バルドに向かって放たれる。
その声は微動だにしない彼の頭の中に染み込む。

その時だ……

――ズンッ！！――

ディグ「ファギッ！？」

フェイト「え……？」

突然、ディグは強大な重圧（プレッシャー）を感じ、動きを止める。体が勝手に震え、冷や汗と動悸が止まらない。今までにない感覚にディグは恐怖する。
まるで、蛇に睨まれた様な…いや、肉食動物に狙われている様な…
いや、自分に向かって隕石が落ちて来るような…いや、まるで世界（プレッシャー）が、星が、銀河が、宇宙が全て敵に回ったかのようなそれ程の重圧が体に襲いかかって来ていたのだ。

そんな、未体験の恐怖に恐れ戦いているディグの隣でフェイトは見た。涙で歪む視界の中で倒れていたバルドの腕が動いたのを…

そして、彼は……立ち上がった。

フェイト「バル…ド……？」

バルド「……」

ディグ「バカナ！？ジャクテンノシンゾウヲ、カクジツニツラヌイタハズダ！？」

しかし、彼は立っている。俯き加減でその表情はよく見えない。だが、彼から放たれるのは、絶対的な重圧（プレッシャー）。全ての生命が跪く様な、荘厳で、圧倒的で、それでいて禍々しい…。そして、貫かれた胸が塞がり、落ちた左腕も粒子となって彼の下に集まり再び腕となって再生した。

ディグ「ク、クカカカカ…ハハハハハハハ！！！スバラシイナ！！シンゾウヲ、ツラヌカレテモタツカ！！ソレガ、ヤミノチカラカ！！！」

ディグは高笑いし、直ぐにバルド目掛けて闇の槍を放つ。それは再びバルドの心臓を貫こうとする。

だが、それは彼に届く少し手前で……霧散して消えていった。

ディグ「ッ!?ナラバッ!!!」

一瞬だけ驚くが、直ぐに闇の鞭を幾つも召喚しそれを一斉に放つ。
しかし、それはまたしても彼に届く前に霧散して消えていった。今度は雷を頭上から落とすがそれも届かずに消滅する。
何度も執拗に攻撃の雨を繰り出すも、結果は全て同じく霧となって霧散する事となった。

ディグ「ナゼダッ!?ナゼ、オレノ、ヤミガキエル!?」

それに応える様にバルドがゆっくりと顔を上げた。そこには……

バルド「俺が……殺したからだ」

何時もの満月の様な金の瞳をした彼ではなく、真っ赤に染まった真紅の目、その中には
六芒星が描かれており、その中央には十字架が描かれたバルドがいた……。その異様な目にディグもフェイトも背筋が凍えた。

ディグ「コロシタダト!?バカナ!?ヤミガ、マホウガ、シヌワケ

ガナイ！！」

バルド「ふんっ、研究者を自称しておきながら否定するか。物分かりの悪いお前に一つ聞こう。そもそも、生とは何だ？」

ディグ「ナニッ！？」

バルド「生きとし生けるもの、その全てに当てはまる事…そう言えば確かにそれは正解だ。だが……世界はそんなに簡単じゃない。有機物も、無機物も、そして…暗黒物質とて生きている。いや、今此処にあるもの全てが、いや、目に見えないものも含めて全てが生を持っているんだよ」

ディグ「ナニヲバカナコトヲ！？ムキブツニモ、イノチガアルダト！？」

バルド「そうだ、例えば今、お前が踏みしめている床も生きている。それは、その形になる以前から既に生を持っている。目の前にある空間もそれと同じで生きている。生きているからこそ、そこに存在し、造り出している。それは、魔法も同じだ。そもそも魔法とは何だ？魔法は、その役目を与えられた事で生まれ、役目を果たし死ぬ……。それこそが魔法の最初の原理だ。魔法も、魔術も、錬金術も、事象も、ありとあらゆる方法は役目を持って生まれ、役目を終えて死を迎える。それは、例え、『神』だろうと、何であろうと、あらゆるものが持つ生と死の絶対概念……」

ディグ「ファギィィィィ！！！」

ディグは雄たけびを上げて更に濃い弾幕を打ち出す。しかし、それ

はバルドに届く事は絶対になかった。

全て、彼の前で霧散し消える。まるで、本当に死を迎えたかのように……。

バルド「例え相手が『神』だろうと、なんだろうと、ありとあらゆるものはその眼の前では殺されたも当然……俺は生きとし生けるもの全てを殺す、それが、俺の魔眼、『死(デス)の眼』だ」

フェイト「魔…眼……『死(デス)の眼』……」

バルド「ディグと言ったな?その薄汚い手と偽りの闇から彼女を離せ……!!」

バルドが一歩踏み出す。凄まじい闇が彼のその一歩と共にディグの体を吹き抜ける。

背筋が毛が逆立つような感覚にディグは直ぐにフェイトに槍を近づけ警告する。

ディグ「チカヅクナ!!チカヅケバ、コノデキソコナイガ「その手を離せと言っている、雑魚が!!」ファギャアアァァァァァ!?」

バルドが睨んだ瞬間、フェイトに向けていた槍とディグの左腕が霧となって消えた。激痛に声を上げるディグは後退りした。その間にバルドは、フェイトの元に行き彼女の拘束具や巻き付いている闇を見るとそれ等は全て霧散して消えていった。

フェイト「バ…ルド……？」

バルド「……」

ディグ「オオオ！？ナゼダ！？ナゼ、サイセイシナイ！？」

バルド「お前のその腕は完全なる死を迎えた。如何なる力を持ってしても再生する事はない……」

バルドがディグに近づく、その時、フェイトもディグすら見えた。

バルドの背に漆黒の闇が湧き起こりそれが形作り、蛇の様な姿になったのを……。

それは、無数の真紅の目を持ち、口が十字に裂け、その口の中には数え切れない数の牙が生えていた。

その闇が咆える。それだけで、背筋に悪寒が奔り、体が縫いつけられた様に動かなくなった。

フェイトが今まで見てきたあの存在、『創造の獣』それであった。

絶対的な死を具現化した存在が目の前にいる。それが、それを見たフェイトとディグの感想だった。

バルド「人間は時にとんでもない事を考えるのだな。俺達、闇の一族になるなどと考えるとは……あまりにも傲慢で無知な考えだな。人間如きが真の闇を理解できる筈がない。一つだけ言っておく、お前のその姿は、『イモータル』ではない。それは下級種族『吸血鬼（ヴァンパイヤ）』、それ以下に過ぎない」

ディグ「ナ、ナンダト!?ソンナバカナコトガアルカ!?」

バルド「イモータルがその程度の闇しか操れないなど有り得ねえよ。俺達は単体で数多の世界を滅ぼす存在。だが、たった数十人を一週間かけて捕らえる程度しか出きない奴は、『吸血鬼（ヴァンパイヤ）』以下、下僕の『不死者（アンデッド）』程度だ」

バルドの殺気が更に濃くなる。もうディグは顔が真っ青だ。

バルド「お前に、いい物を見せてやろう……」

バルドの真紅の瞳が怪しく光る。すると突然、暗い空間だった場所が変化し気付いた時には荒野に立っていた。そして、その荒野一面には無数の剣や槍、ハンマー、銃槍、太刀、トンファー、棍棒、弓、銃などありとあらゆる、数多の武器が地面に突き刺さっていた。

ディグ「ナ、ナンダココハ!?」

バルド「ようこそ、――究極にして極限の闘争世界（インフィニット・ブレイズ・ザ・ワールド）へ……。此処では俺が真理（ルール）だ。そして、これが本当のイモータルの力だ」

バルドから圧倒的な力が溢れだす。大地が鳴動し大気が震える。荒野の空をバルドから湧き出た闇が覆い尽くす。世界が深淵の闇に染まる。

バルド「不死者の祭典（アンデッドカーニバル）」

大地が所々盛り上がり、そこから数え切れない数の人が、いや、不死者（アンデッド）が現れた。
それは自分の近くに突き刺さっている得物を次々と手に取った。

バルド「奴に本当のお前等の力を見せてやれ、不死者の鎮魂歌（アンデッドレクイエム）」

一斉にアンデッド達が奇声を上げてディグに襲いかかった。斬り、殴り、砲撃し、銃撃し、殴打する。圧倒的な数の暴力。ディグの身体がグシャグシャにされるが彼の身体は再び元の姿に（左腕は再生しなかったが）戻る。それを再びアンデッド達が原形をも留めない位に破壊し尽くす。

それが暫く続き、最後にバルドがケルベロスとバハムートを手に呼び戻し、それを持ってディグの体に十字の傷を付けた。

ディグ「ファギャアアアァァァ！？」

バルド「物理攻撃では『イモータル』はどんな事をされても死なない。例え、核攻撃でだろうと、星を壊す砲撃だろうと人の英知では到底殺すのは永遠に不可能だ。その力を中途半端に手に入れたお前は、苦痛を浴びて嫌でも蘇る。それは、終わる事のない地獄でしかない」

空間が歪み元の暗い部屋に戻る。全身傷だらけの状態のディグは何とか逃げようと体を動かすが急に体が動かなくなる。

ディグ「ナ、ナンダ！？ナゼ、ウゴケナイ！？」

バルド「お前には普通の死すら生温い……」

バルドが左手を前に出し、掌を上に向ける。その掌の上に闇の粒子が集まり小さなディグの形をしたものが出来ていた。

バルド「お前は、欲を出し過ぎた。そして、フェイトに、俺の大切な者に手を出した……。それは、万死に…いや、死すら生温い！！」

ディグ「マ、マサカ……クウカンゴト、アラユルモノヲ、スベテヲコロセルノカ！？クウカンショウメツヲ、ツカエルトイウノカ！！？」

ケルベロス［あの技は……！！よせっ、相棒！！それを今は使うん

じゃねえ！！」

それに、バルドは答えず無言で右手を上げ爪で切り裂く様な構えをする。真紅の紅い瞳が暗い闇の世界に怪しく光る。まるで、それは死そのものの様だ……。

バルド「その身は再生する事なく、天でも地獄でもない、お前の存在そのものを殺す……。転生も、魂の輪廻もさせない。お前という存在をこの世にある全ての世界から完全に殺し尽くす……。永久の死の世界へ消えろ……！！」

ディグ「ハ、ハハハ、ハハハハハハハハハハハハハハ！！スバラシイ、サ、サスガハ、イモーｔ――！！」

言いきる前にバルドはディグを模写したその左手の上にあるそれを、切り裂く様に右手を振るう。

左掌の上にあったその物体はそれによって掻き消され……それと同時に目の前の本物のディグが同じ様に空間ごと歪んで、次の瞬間には、ディグの姿が消えた。彼のいた場所の空間も消えており、そこには禍々し穴が出来ていた。周囲の空間が集まってその穴を修復し元に戻る。

彼のいた場所の床や壁や天井には夥しい血の跡が残っているだけだった。

その血の跡すら霧となって消えていく、そして、跡が残らず全て消えた……。

静まり返る空間。フェイトはゆっくりと立ち上がってバルドの背を

見つめる。

フェイト「バルド……」

バルド「……」

バルドは答えない、しかし突然、彼の背から溢れ出ていた蛇がもがき苦しみだす。
そして、それが霧散して闇に溶けて消えると同時に彼の体がふらつき傾いて床にうつ伏せに倒れた。

フェイト「バルド！！」

慌てて駆け寄ってバルドを抱き起こした。
その時に気付いた……彼の眼が閉じていて呼吸が感じられないのを……

フェイト「っ！？息が……止まってる！？」

直ぐに胸に耳を当てて心音を確認する。が……心音が聞こえない。
そう、心臓が止まっているのだった。絶望の色で顔が真っ青になる。

フェイト「そんなっ……！？」

ケルベロス［嬢ちゃん！！直ぐに相棒を外に連れ出して月の光を当てるんだ！！］

フェイト「えっ……！？で、でも……！！」

ケルベロス［早くしろ！！此の侭相棒が死んでもいいのか！！！］

バルドが倒れたことで檻が消えて自由になった二振りの剣がフェイトに寄る。

そして、ケルベロスのその言葉でフェイトは震える。バルドが死ぬ……？そんなのは嫌だ！！

フェイトはケルベロスが空間から出したバルディッシュを持ち直ぐにセットアップ。

そして、バルドの肩を支えてバルドの来た道を猛スピードで飛行して外に出る。

そこは、森の中にある廃墟となった研究所だった様だ。

急いで近くの月の光が最も当たる場所を特定してそこに降り立ち寝かせる。

だが、そこで気づいた。

フェイト「そ、そんな……」

バハムート［月が……！！］

そう、空は分厚い雲で覆われていたのだ。月は何処にも見えない……。

バハムート［世界は、星は、若を殺す気なのですか！！若が…若がどれだけ貴方方を守って来たかを知っているのに…！！］

ケルベロス［バハムート！！俺を喰って封印を無理やり破れ！！］

バハムート［ケルベロス！？何を言ってるんですか！？］

ケルベロス［悔しいが、俺の攻撃力はお前の総合的な攻撃力に負ける！！なら、お前が封印を解いてあの雲を全て吹き飛ばせ！！俺なら一つ死のうが問題ねぇ！！］

バハムート［何を言ってるのです！！貴方は一つでも首が無くなれば、それは魂の三分の一が死ぬのと同じ意味ですよ！？そんな事、出来る筈がないじゃないですか！？］

ケルベロス［じゃあ如何すんだよ！！このままじゃ相棒が死ぬんだぞ！！］

そうこうしている内にバルドから黒い粒子が溢れだし彼の体がぼやけ始める。
輪郭が薄れていき徐々に消え始める。焦る二振りの剣は更に口論を激しくする。

フェイトは何か方法がないのか、と必死に考えるも思いつく筈がなかった。

そこに……

バルディッシュ［マスター、私を使ってください。マスターの新フォルム、ヴァジュラフォームで全力の攻撃を撃てばあの雲を吹き飛ばす事も可能です］

フェイト「バルディッシュ！？そんな事したら、バルディッシュの方が……！！」

バルディッシュ［私は構いません。マスター、私はまだ彼に恩返しが出来ていないんです。十年前に、マスターを孤独から救ってくれる手助けをしてくれた彼を……。だから、私は恩返しがしたいんです！！マスターを救ってくれた彼を……。今がその時です。ですから、私を使ってください！！］

フェイト「バルディッシュ……」

バルディッシュはずっとその事を考えていたのだろう。自分のマスターのフェイトを守ってくれる存在に恩返しがしたいと……。

その強い想いをフェイトは感じ取る事が出来た。だからこそ……

フェイト「バルディッシュ、ヴァジュラフォーム…！！」

バルディッシュ［イエスッサー！！ヴァジュラフォーム、ロードアウト！！！］

フェイトの魔力が膨大な量に膨れ上がる。バルディッシュのコアが七つに分れそれぞれが剣になる。

ケルベロス［嬢ちゃん！？何をする気だよ！？］

フェイト「雲を……吹き飛ばす！！」

持っている大剣を強く握りしめる。そして、六つの剣がその大剣に集結し巨大化する。
それをフェイトは構えると足元に魔法陣が出現する。その周囲で雷が発生し更に膨れ上がる。
制御しきれない雷がフェイトの手に流れ彼女は痛みを耐える為に唇を噛む。
カードリッジが数発排出される。天を仰ぎ月のある場所を計算し、その分厚い雲を睨む。バルドは死なせない……！！その要因となるものがあるのなら…それを打ち砕く！！

フェイト「雷神…一閃！！ヴァジュラザンバーブレイカアアアアアアアアア！！！」

巨大な砲撃が天に昇る。雲を吹き飛ばす金の閃光が街からも見える。
しかし、吹き飛ばせたのは地上から見れば米粒程度しか出来ていな

い。まだ足りない！！もっと、もっとだ！！
更にカードリッジを排出する。砲撃が勢いを増し更に巨大化した。
だが、勢いが凄まじく手が震えだし、照準がブレだす。衝撃が周辺の大地にも広がり、罅割れ、隆起し、宙に岩塊が浮き上がった。

フェイト（まだだ…！！まだ、まだ、まだ、まだあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！）

歯を食い縛り自分に喝を入れてそれを無理やり抑え込む。制御出来ない雷がフェイトに襲いかかり、バリアジャケットの左手の手甲と両腕の部分が爆ぜた。腕から出血が起き、続けて肩の部分が爆ぜそこからも血が噴き出る。
それでも、更にカードリッジを断続的に排出。あまりの酷使でバルディッシュのフレームに罅が入る。膨大な出力にバルディッシュの耐久力が持たなくなってきている。

バルディッシュ［マスター、気にしないでそのまま撃ち続けてください！！！］

フェイト「はあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

分厚い雲の一点に巨大な穴が開く。だが、それだけでは駄目だ！！
フェイトは、その制御の効かない砲撃を無理矢理動かす。それに合わせて天を貫く閃光が動き出す。腕が引き千切れるかの様な激痛を歯を食いしばって堪える。

腕の筋肉が、その繊維一つ一つが、千切れそうな感覚に手からバルディッシュが抜けそうになる。
それを強い意志でしっかりと握る。特大の砲撃が雲を切り裂き、円を描く様にフェイトと同じ様に回り出す。

フェイト「雷神一閃、ヴァジュラザンバー、ブレイカーーーー！！」

そして、その場で一回転しバルディッシュを振り抜いた。

フェイト「エクス、プローーージョォォォォォォォォォォォン！！！！」

直後、空で大爆発が次々に巻き起こり、残っていた分厚い雲を全て、そう、全て吹き飛ばした。
大気が振動し地上にいたフェイトの髪を激しく棚引かせる程の巨大な衝撃波が全方向に広がる。
それは、ミッドに突風となって吹き抜る程だった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

一方、そのフェイトの砲撃が放たれた直後、なのは達はその光景を見ていた。
バルドの下にヘリで行く途中で行方不明だった市民を発見し、ヘリに乗せてヴァイスに六課に撤退させ、自分達は飛行して現場に急行している最中だった。

なのは「あれは、フェイトちゃんの砲撃なの！！」
はやて「なんや！？何時も以上にでかいで！？」
ロイド「すっげ～、雲を突き破ってるぞ！？」

その砲撃が動き出した。円を描く様にして……こっちに来た。
そう……こっちに来た……こっちに……来たあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？
？。。（ Д ；）えええええええええええええええ！！？？

シリウス「あるぇ～～！？こっちに来た～～！？」
はやて「ぎゃあ～！？」
なのは「にゃあぁぁぁぁぁぁ！？」

慌てて全員回避行動を取る。そこを通り抜ける砲撃、そして直後、大爆発が起きて皆仲良く吹っ飛んだ。

シリウス「あたたた……」

ティファ「威力が凄まじかったね。多分、クラウドの『２００パーセントツインバスターライフル』と同等の威力を持ってたと思うよ……」

セフィリア「それはくらいたくないね……」

ガルド「呑気に話している場合じゃないぞ。バルドの生体反応が消えている……」

エリオ「そ、そんな!?それじゃあ、父さんは……!?」

ガルド「いや、まだ間に合う。急いであそこに行くぞ!!」

急いでフェイトのいるだろう場所に向かって飛んで行った。

フェイト「はあ、はあ、はあ、はあ……」

肩で息をするフェイト。その感覚のない手からバルディッシュが落ち、地面に転がる。罅割れた個所から煙が上がっていて時折火花が迸っていた。

フェイトも膝を付いて地面に手を付く。その時、首にかけていたペンダントが長年付けていた事で老朽化が進んでいた所為か今の衝撃で鎖の部分が千切れてしまった。地面に落ちたペンダントは衝撃で蓋が開き中の写真がフェイトの目に入った。

フェイト「あ……」

地面に転がる大切なそれを手を伸ばして取ろうとしたが、腕に力が入らずそのまま倒れる。
それでも、フェイトは地面を這ってその大切なペンダントを腕から伝ってきた自身の血に汚れた手に取る。そして、近くに寝かせているバルドに向かってそのまま這って近づく。殆ど魔力を出し尽くした事でバリアジャケットが消えて元に戻る。

やっとの事でバルドの下に辿り着いたが、そこで力尽き彼の胸の上に倒れる。

フェイト「はあ、はあ、はあ……」

腕を上げるのも億劫になる程の疲労感が襲う。その倒れている二人に雲一つない夜空から月の光が二人に降り注ぐ。バルドの体から黒い粒子の放出が止まり消えかけていた体が元に戻る。
だが、それでも彼は目覚めない。心音も聞こえない……。

フェイト「バルド……嫌だよ……。貴方が死んじゃうなんて…私、

嫌だよ……。お願い、眼を覚まして……」

なのは「フェイトちゃん！！」

そこに仲間達が集結する。そして、フェイトとバルドを見つけ駆け寄り、バルドの様子に気付いた。

エリオ「父さん！！」

キャロ「お父さんしっかりして！！」

ガルド「二人とも下がれ……」

バルドを揺するエリオとキャロの肩を掴んで下がらせ、フェイトに肩を貸し立たせてセフィリアに代わらせる。落ちていた激しく損傷したバルディッシュをなのはが拾い上げる。

此処まで激しく酷使したのは今までにない。無理もないだろう。あの雲を全て吹き飛ばすなんて事をすれば、インテリジェントデバイスとて破損する。

ガルドはバルドの横に膝を付いて体に手を当てる。

ロイド「これは……！？ガルド、バルドはやっぱり……！！」

ガルド「ああ、ロイド、お前の予想通りだ。やはり、魔眼を使った

か……。著しく魔力と闇の力が低下しているな……今なら、まだ間に合うか……」

ガルドはそう呟くと彼の手から漆黒の光が溢れて、それがバルドを包み込んだ。
暫くそれを続け一分程して止まる。

ガルド「シャマルに連絡してくれ。月の光が一番当たる部屋にベッドを用意しておけ、と……」

なのは「ガルドさん!!バルドさんは大丈夫なの!?」

ガルド「その事についてだが、お前達にこれから話したい事がある。六課に着いたら皆を集めておけ」

クラウドがリリスを呼び出して救急搬送用の輸送機を持ってこさせ、それにバルドを乗せ、それに皆も乗り地上を離れる。
特殊な材質で出来ているのか、機内は全く揺れる事なく六課に向けて猛スピードで飛んで行った。

## 第五十九話（後書き）

フェイトの魔法説明。
ヴァジュラザンバーブレイカー・エクスプロージョン。
フェイト最大最強の砲撃型魔法で巨大な砲撃を放つと同時に周囲に炸裂効果を持つ魔法が発生し周辺一帯を爆発で吹き飛ばす。それはまるで最終戦争のごとき、攻撃範囲を持つ、多分、今作では二、三回位しか出ないだろう代物……。

次回の前書きにはバルドの魔眼の能力の説明する予定…。

バルド、フェイトを助けるために己が命散らす……。
な、なんだってぇぇぇぇぇ！！？

カイン「おい、作者……」

なのは「フェイトちゃんを泣かせる様な事させて、どうなるか分かってるの…？」

お、おおおおっと！？な、何故に皆様、私めに得物を向けるのですか！？

アイネ「バルドは大丈夫なんだろうな？」

さ、さあ……。それは次回のお楽しみと言う事で……。

カイン「なら早く次を投稿しろ……」

リアルがね…。月曜日にテストがあるのだよ！！だから、更新はす

ぐに出来ないのさ！！

一同「消し飛べぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

あぎゃあああああああああああああああああああああああああっす！？

作者は消滅しました……。

カイン「次回も無理やりにでも早く投稿させる。読者の皆様、こんなダメ作者だがこれからも宜しく頼む。それでは、次回もお楽しみに」

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第六十話（前書き）

六十話更新！！

さて今回はバルドの魔眼についての説明をば……。

バルドの魔眼は、ありとあらゆる存在を問答無用で殺す魔眼で、また、あらゆる方法で対象を殺す事が可能である。例えば、圧殺、爆殺、滅殺、絞殺、刺殺などあらゆる殺しの方法で相手の息の根を止める。

そして、あらゆるものが持つ生と死、そして存在という絶対概念に干渉し、相手は回避も、防御も（そもそも防御自体も張っても死ぬから意味がない）ままならなず、殺される。

それは、魔法などの他の事象も例外でなく、例え、不死身やある特定の攻撃しか通らない敵すら問答無用で殺します。

最大出力で放つと地平線の彼方まであらゆるものが死んで消滅します（人間の姿をしてる時は）。そして、相手を輪廻転生はおろか生命の回帰すら許されず、永遠にその存在は世に還ることはない‘完全なる死’を与える。

っとまあ、簡単に言えばどんな敵も殺せる、転生させない、輪廻にも回帰させないといった事が出来るってこと。

クラウド「一気にぶっ飛んだ能力だな……」

バルドだからね。因みに、魔眼の力を解放状態にしている時は彼は身体能力がかなり上がります。

カイン「鏡とかベクトル反射とかで防げないのか？」

無理です。鏡が死にます。ベクトルが死にます。兎に角、魔眼状態＝超ヤバイ！

っと言う事です。さて、長くなりましたが本編をどうぞ！！

今回は遂に、遂にフェイトさんは……！！！

# 第六十話

六課について、まず始めにフェイトの腕の治療をした。彼女は、両肩から手首の辺りまで怪我を負っていて今は包帯を巻いている。その姿は少し痛々しかった。

そして、六課の一室にバルドが寝かされている。
ガルドの闇の力を少しばかり得る事であの後、何とか息を吹き返したのだが、意識は今だ戻らず現在も予断を許さない状態は続いている。その彼には月の光が当っていてその光で少しばかり神々しく見える。

はやて「ガルドさん、話してもらうで。何でバルドさんは体から黒い煙みたいなのを出しておったかを……」

ガルド「……」

セフィリア「ガルド……」

ガルド「なのは達には話してはいないが俺達は、俺とバルドは……人間じゃない」

フェイト「っ！！」

ヴィータ「は？それって、力がって事がか？」

スバル「ティア、如何いう事？」

ティアナ「今は黙って話を聞いてなさいよ……！！」ゴツンッ！！

スバルの問いかけにティアナは声を低くして拳を頭に叩き落とす。
鈍い音がしてスバルは頭を抱えて蹲る。そして、涙目でティアナを見る。

スバル「痛いよ、ティア～……」

ティアナ「静かに聞いてなさいって、多分……今から話されるのは、二人について重要な事かもしれないから…」

ティアナには何となくガルドから感じる空気に今から話されるのはバルド、ガルドの正体の事だと理解できていた。

ガルド「そうではない。この際だからハッキリと言おう。俺達は人間ではない存在、宇宙の管理者にしてお前達人類の敵、闇の一族、『イモータル』だ……」

なのは「えっ！？」

はやて「何やて！？」

エリオ「父さんとガルドさんが……」

キャロ「人類の……敵……？」

ロイド「ガルド！！お前、それは昔の話だろ！？」

ガルド「そうだな。だが、事実だ。俺達は過去、数多の星に住む人類を、数多の世界の人間を葬った。それも数え切れないほどにな……。そして、その『イモータル』界の中でも最も強大な存在だった者だ。……フェイト、お前なら俺達の真の名を、知っているだろ？」

なのは「フェイトちゃん……？」

全員がフェイトを見る。ガルドの問い、その答えを知っている。何故なら、文献で読んだ事があるから、夢で見たから…。バルドとガルドの真の名、それは……

フェイト「『創造の獣』、『崩壊の獣』……そして、『イモータル』の中で最も強大な存在、『闇の五大王』……」

ガルド「正解だ。俺達は闇を統べる『イモータル』の中で最も強大な闇の力を持つ存在、永遠とも言える悠久の時間を生き続ける闇の存在、『闇の五大王』、その一柱だ。俺は『崩壊の獣』ガルド、そして、あいつは『創造の獣』バルドだ……」

フェイト「もしかして、私達が十年前の冬に会ったのは……」

ガルド「そうだ。お前達が十年前の冬に会ったのはバルドだ」

はやて「なんやて！？ほんなら、闇のプログラムを破壊して、リインフォースを連れってたあの存在って……！？」

なのは「バルドさんなの！？」

なのは達がアイネを見る。彼女はゆっくりと頷きそれを肯定する。

アイネ「はい。十年前に私を全て儚き理想郷（アヴァロン）に連れてったのは彼です」

クラウド「何故、フェイトが二人の正体を知っている？」

ガルド「文献で見たのだろ？まあ、今はそんな事は如何でも良い。問題はバルドの方だ」

フェイト「バルドは！？バルドは大丈夫なの！？」

セフィリアが代わりに答える。

セフィリア「正直言うと…あまり良くないよ。寧ろ、生きているのが不思議なくらい。今、彼は『魔眼』を使った事で闇と魔力が極度に低下してる……」

シグナム「魔眼とはなんだ？」

ガルド「魔眼とは、簡単に言えば強大な力を秘めた眼の事を言う。そして、バルドは自身の魔眼を使用した。あらゆる存在を殺す眼…その名も、魔眼『死（デス）の眼』……」

エリオ「魔眼『死（デス）の眼』……？」

ガルド「こいつの魔眼は非常に危険なものだ。こいつの魔眼はあらゆるものを殺す最凶の眼。その眼に認められしものは魔法だろうと何だろうとあらゆるものは問答無用で殺される。勿論、相手が『神』だったとしてもだ……」

はやて「な、なんやねんそのチートな能力は……」

セフィリア「けど、今のバルドが使うにはこの魔眼は危険すぎるものだった……。元々少ない残りの魔力と闇の力をこれに注いで使徒を『生命の輪廻』から完全に切り離して殺した。これは、今の彼の命にも関わるものだった……。それを使ってしまったから、このままだとバルドは遠からず闇に溶けて消滅する……」

エリオ「そ、そんなっ！？」

キャロ「やだよ！！お父さんが死んじゃうなんて、そんなの嫌だよ！！！」

アイネ「何とかならないのか！？お前達はあの銀河を、宇宙全てを統べる闇の眷族だろ！！」

ガルド「残念だが……。これほど衰弱した場合、いくら『イモータル』とて完全復活はほぼ不可能だ」

ティアナ「そんな事って……」

スバル「ティア……」

もう、バルドを救う手立てはないと言われた様なものだ。それを聞かされてなのは達は絶望に打ちのめされる。救えないというのか！？仲間を、大事な仲間を救ってくれた者を……自分達では救えないというのか！！

重苦しい空気が漂い始める。だが……

ロイド「なあ、ガルド。あれなら可能性はあるんだろ？」

フェイト「え……？」

コレット「ガルドだって同じ状態に陥っても復活出来たもん。出来る筈だよね？」

ガルド「……ああ、そうだ。絶望的な状況だが、たった一つだけ方法がある」

その言葉にフェイトは弾かれる様にガルドに詰め寄り問いただす。

フェイト「如何すればいいの！？如何すれば、バルドを助けれるの！？」

ヴィータ「フェイト、落ち付けって！！」

ガルド「元々、俺達イモータルは、実際は違うが人間からは吸血鬼（ヴァンパイヤ）の上位種として認識されている。それは、俺達が主食としていたものから来ている。だが、俺やバルドは過去数億年もそれをしなかった。俺達は世界の行く末を、人間の可能性を見る為に人間の血を、吸血行為を摂らなかった」

シグナム「吸血行為だと……？」

ガルド「そうだ。バルドの場合、今もその吸血行動を摂っていない事から闇の力が著しく低下し、今回の結果に繋がった」

なのは「それじゃあ、バルドさんに血を与えれば……？」

ガルド「闇の力も回復し、復活する可能性はある」

フェイト「なら…なら私の血を使って！！」

エリオ「ぼ、僕のもお願いします！！」

キャロ「わ、私も！！」

一縷の希望を見出せた事でバルドを助ける事が出来る。その事にフェイトやエリオ、キャロは自分達の血液を使って欲しいと言う。

だが、それをガルドは首を振る。

ガルド「輸血をするという事ならそれでは駄目だ」

はやて「なんでなんや？」

ガルド「俺達、闇の眷族は輸血の血程度では回復は乏しい。そもそも、血が体から出ていった所で鮮度が落ち大した効果を発揮しない。故に、血を得るには直接その者から血を吸い取らないといけない。つまり、吸血する事でしっかりとした回復をする事が出来る」

フェイト「あ……」

それにフェイトは思いだした。確か文献では、血を吸われた者は……。それが表情に出ていたのか
ガルドは頷く。

ガルド「そうだ。直接血を吸われた者は、闇の一族の下僕『不死者（アンデッド）』に変貌する。その者にはもう意思はない。ただ自分の主に従う人形になるだけだ」

エリオ「で、ですが！！さっき、ガルドさんも同じ様な状態になったんですよね！？それなのに如何して元気でいられるんですか！？」

ガルド「俺の場合は、セフィリアに血を貰っているからだ」

キャロ「それでも、セフィリアさんは『不死者（アンデッド）』ではありませんよね！？如何してなんですか！？」

セフィリア「私の場合は、元から魔力が強いし、魔王の子孫だからね。強大な力を同じ強大な力を使ってなんとか相殺できたからだよ」

ガルド「だから、普通ならそれは不可能だ。普通なら、な……」

アイネ「如何いう事だ？」

ガルド「たった一つだけ、その法則を回避する事が出来る可能性を持つ方法がある。セフィリアもそれを使って不死者化（アンデッド）を未然に防いだ」

ティアナ「それって……？」

ガルド「俺達、闇の一族の中では禁忌とされた人間とイモータルが共に生きる為に作られたもの。それが意味するのは、永遠の誓い。禁断の儀式、『血の契約（ブラッドエンゲージ）』だ」

なのは「血の契約（ブラッドエンゲージ）……？」

セフィリア「イモータルの世界で最も忌み嫌われる儀式だよ。一度それを行った者は例え生まれ変わったとしても必ずその者と再び結ばれる、一言で言えば呪いの様なものなんだ。イモータルの吸血能力は人間以外も例外なく不死者（アンデッド）に変える位強大なんだ。当然の事なんだけど、闇の一族の放つ『闇』ってのは近くにいるだけでも人にとっては猛毒なんだよ。それに加えてガルドもバルドも『イモータル界の王』。その闇は全てを呑み込み、全てを闇に変える。生命は一瞬で闇の眷族になって、『アンデッド化』する。それを防いで愛する者と永遠の時間を生きたいと願う者に与えられた禁断の儀式、それが『血の契約（ブラッドエンゲージ）』……」

ガルド「これを生み出したのは、俺達が賢者、『始まり（ファースト）の闇』と呼ぶイモータルが作り上げた。『始まり（ファースト）の闇』は、人間の女性を愛しその者と永久を共にする為に、彼女に永遠の命を与える為に造り出

したという。その者と結果、如何なったかは誰も知らぬが…恐らく成功したのだろう、俺達の元主、銀河意思ダークはそいつの名を出すと不機嫌になったからな。今もこの広大な世界の何処かで愛する女性と世界の行く末を見ているだろう」

ヴィータ「それならその儀式をすれば、バルドは助かるかもしれないって事か？」

ガルド「ああそうだ。この儀式は、イモータルの低下した闇の力を回復する事も可能でバルドならある程度まで回復する事が出来る筈だ。俺達には闇と月の力は必要不可欠だ。俺達は昼間、外にでも出たら一瞬で蒸発して消えちまう」

ザフィーラ「ん？二人は普通に昼間、行動できているではないか？」

ガルド「俺やバルドは元々強大な力を持っているからな。普通のイモータルが出来ない闇のカーテンを自分の体に纏わせているから昼間だろうと太陽の目の前を歩こうと問題はない」

ヴィータ「なんだよそのチート能力は……」

ガルド「兎も角、『血の契約（ブラッドエンゲージ）』をすれば、バルドは助かる。だが、誰がやっても成功する訳じゃない。成功する確率はそうだな……広大な砂漠でミクロサイズのダイヤモンドを見つける位の確立だ」

はやて「何やて！？」

あまりにも確率が低すぎる。

だが……

フェイト「私がやる……」

そんな事は如何でもいい。フェイトにとってバルドが助かるならば……どんなに低くてもやりたい！！
自分が契約すれば、彼が助かるかもしれない。願ってもみない方法にフェイトは藁にも縋る思いでいた。

なのは「フェイトちゃん……」

ガルド「…フェイト・T・ハラオウン、お前がやるのか？」

フェイト「私がやる……。私が契約すればバルドは助かるんだよね！？」

ガルド「可能性はあるな。だが、一つだけ言っておく」

ガルドの空気が急に重くなる。まるで、全身に氷柱が突き立てられているかのような感覚だった。

ガルド「もし、その儀式をするならフェイト、お前には人間を辞めてもらう」

フェイト「え……？」

はやて「な、なんやてっ!?」

なのは「フェイトちゃん!?」

シグナム「如何いう事だ、ガルド!?」

ガルド「言った筈だ。この儀式は禁忌とされていると……。何故だか分かるか?それは、契約をする時に……契約者同士が互いに吸血行為をしなければならないからだ」

エリオ「えっ!?それって……!!」

ガルド「さっきも言ったが、この儀式とて完璧ではない。成功する確率は極端に低い。吸血される事で人間の方が闇に呑まれ不死者化(アンデッド)する事もあれば、両方とも闇に溶けて消える可能性もある。過去、この儀式を行った者は少なく、その中で成功を収めた者は……『始まり(アースト)の神(フ)』のみだ。そして、これは永遠を生きる『イモータル』と共に生きる為に造られた儀式。つまり、人間を捨て、永遠の命を与えられるという事だ。それは人間からすれば途方もない苦痛に満ちた世界しか待っていない。フェイト、お前にその覚悟があるか?」

フェイト「私は……」

ガルド「時間はあまりないがゆっくりと考えろ。俺の力で毎晩満月にして少しでもバルドを延命させる。あとは、俺が昔の事を思い出して何かほかに方法がないか探す」

クラウド「分かった。けど、俺達も黙っている訳にはいかない」

ティファ「私達も出来るだけ頑張って他の方法を探してみるよ」

ロイド「俺もオリジンとアルファディオスに何か手はないか聞いてみる！！」

コレット「ロイド、私も手伝うよ！！」

ガルド「兎に角、これで言うべき事は言った。お前達も自分の仕事に戻れ。時が来れば、自ずと答えが出る筈だ」

そう言ってガルドは話を切り、ロイド達はその部屋から駆け出して自分達に出来る事を探しに出て行った。なのは達は、まだ納得はいかないがしかし此処に何時までいても答えは見つからないとアイネが諭した事で重い気持ちを背負ったまま出て行く。

そして、最後にフェイトが出て行こうとしたが……

セフィリア「フェイト、少しだけ付き合ってくれる？」

フェイト「セフィリア？……うん」

今の気持ちでは仕事もまともに作業できない。そう思ったフェイトは頷き彼女と共に外に向かった。

虫の奏でる音色が大気に曲を作りだし、夜空では満天の星空が輝いている。そして、その中でも一際輝くのは美しい満月だった。それはまるで、バルドの瞳の様に綺麗で吸い込まれそうな感覚になった。

セフィリア「フェイトに聞きたい事があるんだけど……」

フェイト「えっと……何を？」

セフィリア「フェイトは、バルドの過去を見たことある？例えば、夢とか……頭痛とかが起きた時に？」

フェイト「っ！？」

その問いにフェイトは息を呑んだ。見た事がある。それも、毎回、頭痛や夢の中で……！！

その驚きようにセフィリアもフェイトが見た事があると分かった。

セフィリア「やっぱり……フェイトしかバルドは救えないみたいだね」

フェイト「如何いう事！？」

セフィリア「フェイトの見たのはね、唯の夢とか妄想じゃない。それは全てバルドの過去。バルドが見てきた、体験した全ての事柄だよ。私達はそれを『感応現象』って呼ぶんだ。それは、『共鳴者』…つまり運命の相手と出会った時に見る事が出来るものなんだ」

フェイト「『感応現象』……？『共鳴者』……？」

セフィリア「『感応現象』は『共鳴者』と出会った時に見る相手の

過去、その記録。世界が、ううん…宇宙が出来た時から存在する絶対真理なんだ」

フェイト「バルドが…私の……運命の人？」

セフィリア「そう思ってもいいと思うよ。私もガルドとは『共鳴者』だもん」

そう言われて少し前に聖王病院で聞いた言葉を思い出した。確か、ガルドは共鳴者と言っていた。セフィリアとガルドは『共鳴者』なのか……！？

セフィリア「だから、フェイトなら大丈夫な筈だよ。言いたい事はそれだけ。これから先の答えは貴方が見つけ出すんだよ」

フェイト「セフィリア……」

セフィリア「フェイト、一杯悩んで。悩んで悩んで、悩み続けた先にきっと貴方の答えはある筈だから」

ちょっと時間はないかも知れないけどね……と最後に苦笑いして言う。

しかし、大丈夫と言われても…フェイトには如何返せばいいのか分からなかった。

それに俯いて応えるしかないフェイトにセフィリアは微笑みながら頭を撫でてくれた。

その日、彼女は夜明けまで自室で悩み続けたのだった……。

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――――

あれから二日経った。

ロイド達はバルドの救命策を模索する為に色々飛びまわっている様だ。

なのは達とて黙っている訳ではない。空いた時間に無限書庫に赴き、ユーノに事情を説明して書庫内にある本を片っ端から読んで探している。

だが、その存在自体が幻とも言えるイモータルだ。その記述はフェイトに貸した書物の他は少なく、それ以前に禁忌の儀式など書物に載っている訳もなかった。

それでも、探すしか方法はない。何もしないでジッとしている事などなのは達には到底無理なことだったから……。

六課の外に出て歩きながらフェイトは未だ悩み続けている。

自分がバルドと儀式を行えば彼は助かる。しかし、もし失敗すれば自分が不死者（アンデッド）になってあのディグに操られていた市民の様な姿になり、なのは達を襲うかもしれない。

フェイト「はあ……」

重い溜息を吐き空を見上げる。昨夜に続き今夜も満月だ。恐らくガルドが本当に満月にしているのだろう。月すら操る強大な力を持つ『イモータル』、その力の片鱗をフェイトはあの日見た。

あの圧倒的な力を手にしたディグ、それすらも手の届かない力をバルドは見せた。空間諸共そこにいる存在全てを完全に殺したバルドの魔眼『死の眼（デス）』……。

あらゆる命は、空間は、事柄は、事象は、存在するもの全ては、あの眼の前では膝を屈するしかない。それ程に強大な力だった。

そんな力を持つバルドを本当に自分は救えるのだろうか……？

足取りの重い彼女。そこにある人物が視界に入った。

フェイト「ロイド……？」

ロイド「ん？よっ、フェイト。こんな時間に如何したんだよ？」

そこには、ロイドがいた。彼の前には何時も使用している、魔剣『エターナルソード』と聖剣『エレメントソード』が宙に浮いていた。

フェイト「ロイドこそ、こんな時間に此処で何をしてたの？」

ロイド「俺か？俺はこいつ等に何か手はないか聞いてるんだ」

ロイドがこいつ等と言って見るのは二振りの剣。

ロイド「なあ、ホントに他の方法がないのか？オリジン、アルファディオス？」

その問いに二振りの剣は刀身を発光させてまるで喋る様にして答える。

エターナルソード？［イモータルは精霊界では名を聞いた事があるだけで、我も今まで見た事はなかった。契約者よ、それは前にも話したであろう？］

エレメントソード？［我も、直接対峙した事はない。元々我は闇が来る事の出来ない天界を統べる者、その者の名を知るだけで他に延命措置があるかどうかを問われても無駄であるぞ、契約者よ？］

ロイド「なあ、オリジンにアルファディオス、その堅苦しい言葉遣いそろそろ止めてくれないか？肩凝るんだけど……」

フェイト「ねえロイド、さっきからオリジンとアルファディオスって言ってるけど、この剣ってエターナルソードとエレメントソードじゃないの？」

ロイド「ん？ああ、確かにこれはそういう名の剣だけど、今この剣を通して会話してんのがこの剣を作った精霊王オリジンと天海王アルファディオスさ」

オリジン［ふむ、この娘が今回の問題を解決する方法を持つ者か……］

アルファディオス［資格なき者よ、汝は何を望む］

ロイド「お前等、初対面の相手に対して自分の名前を名乗れよ……。まあいいや、所でフェイトは、まだ決心はついてないんだな？」

フェイト「うん……」

ロイドに問われてフェイトは俯いて答える。バルドは助けたい。けど、けど……

フェイト「ロイド……。私、凄く怖いんだ……」

ロイド「怖いって…何がだ？」

フェイト「私が……もし、姿が変わったら……皆の態度が変わっちゃいそうで、怖いの……」

そう、フェイトはそこが一番怖いのだった。
もし、儀式によって自分が変わったら、仲間達が、親友が自分を見る目を変えてしまうのではないか、と。それが、何より一番怖い。
また、独りぼっちになるのではないかと思うと怖くて、怖くて、怖くて体が震えるのだ。それを見てロイドは、フェイトに安心させる様に語りかける。

ロイド「大丈夫だって。なのはも、はやても、皆も、例えフェイトが人間じゃなくなったって前と同じ様に接してくれる」

フェイト「そんな確証……何処にもないよ……」

ロイド「確証なんていらないだろ?例えどんな姿になっても、フェイトはフェイトだ。誰もフェイトの事をそんな目で見る奴なんていないぜ。俺だってフェイトがもしそうなったとしても、態度を変える気はないぜ」

オリジン［ふむ、相変わらずの理想論を語るのだな、契約者よ］

アルファディオス［そんな男に希望を見出す我らも聞いているだけで、恥ずかしくなるセリフだな］

ロイド「……お前らって、ホントにタイミング良く水を差すな!?良い性格してるよお前等は!!」

オリジン［褒められたのか、我等は？］

アルファディオス［そう受け取ってもいいのでは？］

ロイド「ったく、兎に角、その…えーっと……ああっもう！！兎も角、フェイトはそんな事を悩む必要はないって事だ！！フェイトはフェイト、誰が何と言おうとフェイトはフェイトに変わりないんだから胸張って堂々としてればいいんだよ。そんで、今フェイトがバルドを如何したいのか、それに素直になって考えればいいのさ。俺から言いたいのはそれだけだよ」

フェイト「ロイド……」

どんな姿になってもフェイトはフェイト、か……。ロイドらしいセリフだ。彼は多分、いや、ホントに自分がどんな姿になっても態度を変える事はないだろう。それに、親友のなのはもはやても、仲間達もロイドの言うとおり態度を変える事はない筈だ。それが分かって少しだけ肩の荷が降りた様な気がする。

ロイド「さて…と、コレットの方は如何か聞きに行くかな。それじゃあフェイト、バルドを救えるのはフェイトだけなんだ。あいつを、バルドの事を頼むぜ！！」

そう言って、ロイドは二振りの剣を腰の鞘に収めて走り去っていった。

その彼を見てフェイトは再び思考の海に沈む。

自分がバルドを如何したいのか、か……。

助けたい、バルドを……大切な人を助けたい。それに、まだ自分の想いを彼に伝えていない。伝えたい、この想いを……伝えたい。

そう思ったフェイトは六課に向かって走り出す。この想いをまだ、伝えてない。この大事な想いを……今すぐ大切な人に伝えたい！！、とその気持ちに任せて彼女は駆けだした。

廊下を掛けるフェイト、しかしその彼女の前に光が現れた。立ち止まりその光を見つめる。

フェイト「……来ると、思ってた……」

そう、バルドの下に向かう時、必ず現れると理解していた。バルドを最もよく知り、彼に最も長く連れ添った存在、死んでも尚、バルドを想い続けて彼の命の危機にいち早く動いた、少女を……

フェイト「貴方は……フィフなんでしょ？」

フィフ「そうだよ……。私はフィフ……」

フードが取り払われる。そこには……美しい銀髪で何処までも澄みきった空の様に綺麗な青色の瞳を持った自分そっくりの少女が姿を現した。

フィフ「こうして素顔を晒して話すのは初めてだね」

フェイト「そうだね……」

フィフ「あの人は、今さっき眼を覚ました。……バルドに、想いを告げに行くの？」

フェイト「そうだよ。どんな結果が待っていても私は構わない。この胸の奥から来る暖かい想いをバルドに絶対に言うんだ」

フィフ「そう……。別にそれは構わないよ」

フェイト「え……？」

フィフ「私はもう、あの人を愛せない。ううん、愛する事が出来ない。この身は死んで、バルドが天へと送っていったから…でも、あの人はそれでも毎年、私の墓に来てくれる。それだけでも、私には十分幸せな事だから……。貴方がバルドを愛しているのなら、彼が幸せになってくれるのならそれは私の幸せでもある。でも、もう遅い……貴方は間に合わなかった」

フェイト「っ！？」

フィフ「捻じれた運命は、回り出した。貴方は間に合わなかった。

あの人は……死ぬ。闇に溶けて、消える」

フェイト「捻じれた運命……!?それって一体何なの!?」

フィフ「貴方は本当の『共鳴者』じゃない……」

フェイト「っ!!!!」

その言葉にフェイトは心臓を抉られたかのような衝撃を受ける。自分は共鳴者ではない？如何いう事だ？セフィリアから聞いた話では、共鳴者は宇宙の絶対真理の筈だ。それを彼女は否定した。

その答えをフィフは答える。

フィフ「貴方は、本来違う存在。それが、運命を操作する力によって作り出された偽りの共鳴者。あの人は、あの人の共鳴者は、貴方ではなかった……。プロジェクトF、それが全ての始まり……」

フェイト「プロジェクトF!?」

自分を生み出したあの計画が関係しているのにフェイトは驚愕する。

フィフ「プロジェクトF、それは禁じられたクローン技術……。貴方を生み出した技術はその時は何の因果か元となる者の運命すら引き寄せ、媒体となる者に捻じり込む力を持っていた。そう、本来なら完成してはいけない禁断の技術だった……」

フェイト「あ……」

その言葉にフェイトも気づいてしまい青褪める。
自分を生み出したプロジェクトFは運命すら媒体に受け継がせる力を持っていたという事……。では、では本当のバルドの共鳴者は……！！！

フィフ「そう。貴方の、貴方が生まれる元となった者、それが……あの人の本当の共鳴者」

フェイト「アリ……シア……！！」

足場が一気に崩れる様な感覚が襲い、フェイトはその場に膝を折って崩れる。
何て言う事だ……！！では、では自分が生まれた所為で、彼は…バルドは、自分の捻じれた運命に巻き込まれたという事か！？その所為で、彼は、本来出会う筈だった共鳴者と出会わず、挙句、あそこまで衰弱したという事か！？

もし、自分が最初に彼に会わなければ、自分が生まれなければ……バルドは、例えあの時アリシアが死んでいても出会う事が出来て、何らかの方法でアリシアは目覚め、新たな共鳴者として出会う筈だったのだ！！

その真実にフェイトは目の前が真っ暗になる。頭がズキズキと痛くなり、脂汗が額から浮かび、呼吸も浅くなり息が荒くなる。

フィフ「捻じれた運命、それはもう止まらない……。動き出した運命は、貴方と彼を巻き込んで……」

フェイト「あ、あああ……そんな、そんな事って……！！私が、私が生まれたから……生まれた所為で……バルドは……！！」

フィフ「答えを見つけて、捻じれた運命を持つ者よ。捻じれた運命を元の正常なものにするにはそれしかない……。お願い、彼を、私の大切な人を、守って……」

そう言い残してフィフは光に包まれて消えていった。

暗い廊下の中、フェイトは希望の中から絶望に叩き落とされ暫く動けなかった。

最後のフィフの言葉の意味も理解できぬまま、フェイトは覚束ない足で立ち上がりフラフラとして歩きだした……。その足の向かう先は……バルドの寝かされている部屋でなく、外に再び向けられていた……。

---

フラフラと幽鬼の様に歩くフェイトは近くの森の中を彷徨っていた。

その目には最早、希望が映っておらず、あるのは絶望に染まって濁った瞳だった。

フェイト（私が……私がいた所為で……！！）

フラフラと歩きながらそんな事を考えていた彼女の耳にふと、聞きなれた音色が響く。
そう、魂の奥底から安らげる柔らかな草笛が……聞こえた。

その音が聞こえる先を見ると、そこには……

ケルベロス［だ～か～ら～～、安静にしてろって言ってんだろうが！！物分かりの悪い相棒だな！！］

バルド「うっせぇな。人が気持ち良く草笛吹いてるってのに……見ろよ、周りの奴から抗議の音が聞こえるぞ？」

目覚めたバルドは部屋を抜け出して大きな岩の上に座って草笛を吹いていたのを止められて顔をしかめた。そして、バルドの言うとおり、ケルベロスに向かって植物が風もないのに葉を揺らし、水が激しく跳ね、動物の遠吠えが聞こえ、虫達が一斉に騒ぎだした。

ケルベロス［だぁ～～もう、うっせいぞコラ！！相棒は重症患者な

んだ！！！テメー等も空気読め～～！！！」

バルド「別にいいだろうが。笛を吹く程度……ん？なんだ、フェイトか…」

フェイト「あ……」

バルドが座っていた大きな岩から飛び降り、フェイトに近づく。それに合わせてフェイトは後退りをしだした。

そして、急に背を向けて走り出した。

バルド「フェイト！？おい、待てって！！！」

フェイト「駄目、ついてこないで！！！」

闇夜で此処が何処らへんか全然分からない。それでも彼女は闇雲に走る。暗い闇の中、僅かに照らされる月の光が彼女の足元を照らす。だが、それでも人が走るにはあまり宜しくない環境だった。

前が良く見えていない状態で走ればその先に何があるのかも分からないのも当然、故に、彼女はその先にあった深い溝に気付かず踏み外した。

フェイト「あ……」

視界が一気にズレて落ちる。そう感じてフェイトは暗闇で底の見えない穴がある様に見えて、死を覚悟した。

だが、それは寸での所で止まった。

バルド「ったく、あぶねえだろうが馬鹿野郎！！」

バルドが追いついていて彼女の腕を掴んで落ちる寸前に助けたのだ。腕を引かれて引き上げられて、そのままバルドの胸の中に収まる。だが、直ぐにフェイトは脱け出して逃げようとする。そうはさせまいと、バルドは腕を掴んでいてフェイトは逃げる事は出来なかった。

フェイト「離して！！」

バルド「落ち着けって、無暗にこんな夜道を走ろうとすんなよ。第一何で俺から……」

何で逃げようとしたんだ？そう問いかけようとしたバルドだがフェイトの顔を見て口を噤む。

彼女の眼から涙が流れていたから……。

バルド「何で、泣いてんだ？」

フェイト「……っ……私ね。本当は、ずっと、ずっと前から貴方に

言いたい事が、伝えたい事があったんだよ…」

バルド「なんだよ？」

フェイト「貴方を見るだけで、貴方を思い出すだけで、胸が熱くなるの。心臓も、速くなってドキドキするのが止まらなかった。貴方と一緒にいるだけで、隣で寝てくれただけで、ドキドキしたんだよ。ずっと、ずっと貴方だけを見ていた。他の男性よりも、貴方だけが輝いて見えてた。貴方の事が頭から離れた日は無かった。私は……私は、貴方の事が……大好きなんだよ！！！」

バルド「っ！！」

フェイト「何時も私を見てくれる貴方が好き！！何時も困ってる時に手伝ってくれる貴方が好き！！何時も傍にいてくれる貴方が好き！！貴方の事が全部好き！！！胸が痛くなる位に、貴方の事が大好きなんだよ！！！ううん、大好きなんかじゃ納まり切れない！貴方の事が愛しくて、愛おしくてたまらない位に愛しているの！！！」

バルド「フェイト……」

突然のフェイトの告白にバルドはどう答えればいいのか分からなくなる。

しかし、彼女の言葉はまだ続く。

フェイト「でも、私は、貴方を好きになる権利なんてない……！！」

バルド「……如何いう事だよ？」

フェイト「私は、フィフに会った……。貴方の愛した人に会った！」

バルド「っ！！」

フェイト「そして、教えられた！！貴方の、貴方の本当の共鳴者は私じゃないって事を！！バルドの共鳴者は私じゃない、本当は……アリシアなんだ！！！」

バルド「フェイト……」

フェイト「アリシアが本当のバルドの共鳴者。でも、アリシアが事故にあって私が生まれた、ううん、造り出された！！そして、プロジェクトFでアリシアのコピーとして生まれた。その所為で、アリシアの運命を私がコピーしたんだ！！それが、バルドまで、バルドの運命まで巻き込んだ！！私の所為で、私の所為でバルドは苦しんでるんだ！！」

バルド「違う……違うぞフェイト！！これはお前の所為じゃない！！これは……！！」

フェイト「ううん違くない！！バルドが此処まで苦しんだのも全部、全部私の所為なんだ！！私が生まれた所為で、バルドが、バルドの運命が狂ったんだ！！」

フェイトはまるで今までの罪を全て吐き出すかのように叫び続ける。今まで知らなかったとはいえ自分の所為でバルドが苦しんでいると、自分が生まれたからバルドの運命が狂ってしまったと……叫び続け

る。

バルド「止せ、それ以上は言うなフェイト……！！」

バルドは、危惧した。フェイトにそれ以上は言って欲しくない。それ以上言ったら、この体の奥底から来る沸々と湧く溶岩の様に熱い感情が爆発しそうだったから……。

そして……

フェイト「私なんて、生まれなければ良かったんだあぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

バルド「っ！！！！！！」

バルドの怒りが爆発した。

バルドはフェイトの胸倉を掴み、そのまま隣にある大木に背中を叩き付けた。

フェイト「きゃあっ！？」

バルド「もう一遍言って見ろ……その時は、お前のその減らず口をへし折るぞ……！！」

バルドの怒りがフェイトだけに注がれる。それは、今迄に体験した事のない、寒気が彼女を襲う。その凄まじい怒気にフェイトは声を詰まらせた。だが、それは一瞬の事で、その怒りは霧散し次の瞬間には悲しみが感じられた。

バルド「そんな事、もう言うな……。俺は、お前にそんな事を言わせたいが為に助けたんじゃねえんだよ……」

フェイト「バル、ド……」

バルド「寧ろ、お前を苦しめてんのは全部俺の所為だ。俺が、無駄に生きている所為でお前を苦しめている……」

フェイト「え……。ち、違う！！バルドの所為じゃ……！！」

バルド「いや、俺の所為さ。途方もない時間を生き続ける俺がお前の運命を引き寄せて、巻き込まれただけだ。お前の所為じゃない、俺がもっと早くに消滅してれば良かったんだよ……」

フェイト「そんな事……言わないで……！！私は、バルドに会えて嬉しかったんだよ！！独りだった私を、なのは達と巡り合わせてくれる切っ掛けをくれたんだよ！！もし、バルドがいなかったら私はずっと孤独だった！！」

バルド「いや、お前ならきっとなのはと必ず分かり合えたさ。そして、はやて達とも出会えてた。俺は、何もしていない。フェイト、それは自ら動いたからこそ、その結果に辿り付けたんだよ」

フェイト「違う……違う！！私が生まれたから、バルドは……バルドは……！！！」

しかし、それ以上フェイトは言葉を紡ぐ事がなかった。何故なら、バルドに抱き寄せられ、その胸に包まれたから。

フェイト「あ……」

バルド「それ以上言うなって言っただろ……」

ギュッと強く抱きしめる。少し痛い位にバルドは強く彼女を抱きしめた。
きつく抱きしめられてフェイトは彼の腕の中で少しだけ身じろぐ。

フェイト「バルド、痛いよ……」

バルド「お前が余計なこと言ったからだ。これはその罰だ……」

バルドは、フェイトが生きている、それだけで十分だった。

全ての始まりは魔力が空になり消えかけのリニスと虚数空間で出会った事からだった。
リニスを気まぐれで救った事で彼女からフェイトを助けてほしいと頼まれた。
それを、気まぐれで約束した事から自分の止まったままの歯車が動

き出したのだ。彼女は、フェイトは、自分の愛した少女、フィフに被って見えた。そのコロコロ変わる表情も、寝顔も、何もかもがそっくりだった。だが、それだけではなかった。

彼女は自分にも重なって見えた。自分は生まれ持ったこの魔眼の所為で村人からも、そして、最後には両親からも疎まれ、そして、殺され、ダークによって生まれ変わった。

彼女もプレシアに始めは疎まれてた。だが、それでもプレシアの中には少しだけ良心があった。

それを諭した事で最後にはプレシアもフェイトの事を自分の娘として想い、そして虚数空間に落ちた。彼女は、救われた。本当の意味で家族となれたと思う。

フェイトを救った。それでリニスとの約束を果たしたのに、今度はそのあと助けたプレシアと約束をしてしまっていた。今でも思う、何故あの時、再び約束を交わしたのか、それは一体何故だろうか……？

ケルベロス《相棒……。そろそろ気づいたらどうだ？》

バルド《ケルベロスか。一体何にだ……？》

ケルベロス《相棒が嬢ちゃんに固執するのは、何もプレシアやリニス、それにアリシアとの約束だけじゃねえだろ？》

バハムート《若、そろそろ自分の想いに気付いている筈ですよね？》

バルド《俺は……》

バルドは思考の海に沈む。何故、彼女を此処まで守ろうと思ったのか？プレシア達と約束を交わしたからか？

それもあるだろう……。

自分の腕の中で涙を溢れさせながら見上げて来る彼女を見る。

溢れる涙で潤う瞳に瑞々しく光る唇、少しばかり朱に染まっている頬、そして満月の光で淡く光る艶やかな金の長髪。自分から決して目を逸らさないで真っ直ぐ此方を見て来る彼女をジッと見つめていて彼は漸く分かった。

バルド（そうか……俺は、こいつに……フェイトに惹かれていたのか……）

フェイト「バルド……？」

自分の中で渦巻いてたものが一気に晴れる。

なら、今、目の前で自分の存在を否定している大事な、いや、愛しい存在に生きる理由を与えなくてはいけない。自分の奥底に閉じ込めていたあの淡い感情をフェイトに伝える為に……。

バルド「フェイト……俺は、お前が好きだ」

フェイト「っ！！」

バルド「お前が死にたいって言うなら、俺がお前に生きる理由を与える……！！お前は生きていていいんだ。いや、生きていかなきゃいけないんだよ。これがその証だ……！！」

フェイト「バルd――んっ！！」

月夜に照らされた二人の影が重なった。互いの唇が重なり合い呼吸の音が聞こえる。

フェイトは一瞬だけ驚きで眼を見開くが、直ぐに目から涙が毀れ落ち、ゆっくりと目を閉じて、バルドの首に腕を回して強く離さない様にする。バルドもフェイトのその細い腰に腕を回して強く抱き寄せる。互いの唇から息が時折り零れる。それでも二人は離れない、いや、もう離さない。今この瞬間を強く、強く互いに求め合った。

フェイト「んぅ……ちゅ、はぁ…んっ、く…ちゅく、はぷっ……んんっ、んぁ……ちゅぱ……」

互いを求める様な口付けが続く。何度も唇が重なり、舌と舌が絡み合い、強く抱きしめ合う。

暫くの間、二人は情熱的なキスを止める事なく十年もの間、空いた温もりを求めるかのように唇を合わせ続けた……。

そして、二人の唇が離れそれと同時に銀の橋が出来あがり、それがプツンと切れる。

フェイトは潤んだ瞳でバルドを見上げる。

フェイト「はあ…はあ……バルド、いきなり酷いよ……／／／／／／」

バルド「知るかよ。お前が悪いんだぞ、そんな物欲しそうな目で見て来るからだぞ」

フェイト「そんな、そんな目で見てないよ／／／／／／／んっ！！」

その彼女の唇を再び塞ぐ。そして、直ぐに離れる。
バルドは何時になく落ち着いた微笑みを浮かべている。
その余裕な表情を見てフェイトは朱に染まった頬を少しばかり膨らませて拗ねる様な仕草をする。

フェイト「バルドの意地悪／／／／／／そうやって、何時も私を苛めるんだ…／／／／／／」

バルド「ははっ、お前ほど弄りやすい奴はいないからな。こうして弄りたくなるんだよ」

頭を優しく撫でる。その大きくて優しい手に撫でられるととても安心する。

フェイト「バルド……私と、契約して」

バルド「それは、あれをするってことか？」

フェイト「うん。私と…『血の契約（ブラッドエンゲージ）』を交わして欲しい」

バルド「……」

フェイト「やっぱり、いや……？」

バルド「嫌な訳ねえだろ……」

フェイトを強く抱きしめる。彼女もそれに応えて背に腕を回して抱きしめる。

彼女の頭の直ぐ傍でバルドの心臓の音が聞こえる。彼が生きている証……もっと、ずっとこの音を聞いていたい。彼の傍でずっと寄り添っていたい。その想いはドンドン膨れ上がるばかりだ。

バルド「けど、結果がどうなるか分からねえんだ。成功すればいいが、もし、しくじれば……」

フェイト「そんなの分かってるよ」

バルド「じゃあ、なんで……？」

フェイト「私は、バルドと、貴方と一緒にいたいから……。私は貴方に生きていて欲しいから……ただ、それだけ。好きな人が生きてくれるのは本当に嬉しい事だから……」

そう、ただそれだけだ。自分の好きな人が、愛する者が生きてくれるなら、それがどんなに困難でも成し遂げたい。それは、フェイトの想いでもあり決意だった。

バルドもその気持ちを理解してくれたのか頷いた。

バルド「分かった。俺はお前と契約を交わす。例えそれがどんなに困難だろうと、俺はお前を決して『不死者（アンデッド）』にはさせない」

フェイト「私もなる気はないよ。私だって私のままでずっとバルドと一緒にいたいから……」

互いの気持ちが一緒なのを確認し互いの顔を見てクスッと笑う。

バルドは、フェイトの頬に手を当てる。フェイトはそれに目を閉じて応えた。

そして、月夜の晩にもう一度、影が重なった。

それを、風もないのに草木が揺れ、水が波紋を広げ、動物達がそれぞれ音色を奏でて祝福の歌を上げたのだった。

ガルド「そうか。フェイトと契約を行うのか」

バルド「ああ、もう俺は過去を引き摺らない。俺は、前を見て歩く事にする」

セフィリア「私はフィフの事を知らないけど、その子もバルドのその選択を待っていたと思うよ？」

コレット「それで、儀式をする場所って決めてあるの？」

バルド「ああ、月の力の強い世界……『ルナサイト』で儀式をする」

ロイド「聞いた事ない世界だな？」

ガルド「あの世界は、強大な生命が数多く息づく場所だ。なのは達を連れていくなら長居は出来ないな」

バルド「みんな、すまない……」

ロイド「如何したんだよ急に？」

バルド「みんなに迷惑をかける。だが、もう少しだけ付き合って欲しい」

バルドは頭を下げる。それをロイド達は笑顔で答えた。

ロイド「何言ってんだよ。俺達は『仲間』だろ？」

コレット「そだよ。バルドも私達の仲間なんだから、困っている時は助けるよ～！」

クラウド「俺達もそうだ。お前には色々と世話になったからな。この位で一々気にするな」

バルド「……ありがとう」

頼もしい仲間にバルドもフッと笑い礼を述べた。

一方、なのは達も……

なのは「フェイトちゃん、決心したんだね」

フェイト「うん。私はバルドと契約をする」

はやて「大丈夫なんか？失敗すれば……」

フェイト「大丈夫だよ。私は不死者（アンデッド）にはならない。それに、例えど

んな存在になっても皆は今まで通りでいてくれるよね？」

なのは「当然なの！！」

はやて「せや、例えフェイトちゃんがどんな姿になってもうちらはずっと友達やで！！」

シグナム「ああ、テスタロッサがどんな存在になろうと私達の仲間には変わりない」

エリオ「母さんは母さんです！！」

キャロ「お母さんはお母さんですよ！！」

なのは達がそれぞれ頷く。

フェイト「みんな、ありがとう！！」

シャマル「でも、これでフェイトちゃんが一番乗りだね～♪」

フェイト「ふえ？」

シャマル「だって、したんでしょ？キスとか……？」

フェイト「ふえっ／／／／／／／／／！？」

シャマルの言葉にフェイトがポンッと音を立てて頭から首まで真っ

赤になる。
それは最早、肯定と言っている様なものだ……。

エリス「クスクス、初めての大人のキスはイチゴの味って聞くよ～♪」

はやて「フェイトちゃん……少し、うちらと話をしよっか～♪」

フェイト「ふえ、ふえええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!?」

頼りになる仲間、……訂正、恋に花咲く乙女たちに、フェイトは連行され暫しその時の事を詳しく聞かされる事になった……。

そして、取り残されたエリオは……

エリオ「父さ～～ん!!母さんが、大変です!!!」

バルドに救援を求めに走っていった……。それを、クスクスと笑いながらエリスとクラレンスは見ているのだった。

# 第六十話（後書き）

フェイトとバルド、遂に結ばれる。そして、バルドを救う唯一の方法『血の契約（ブラッドエンゲージ）』を行う事を決意するの巻。
今回の話は作者は物凄く力を入れたつもり。如何でしょうか？

カイン「フェイトは本当の共鳴者ではなかったのか……」

実はバルドの本当の共鳴者はアリシアさんでした。ですが、プロジェクトFによって生み出されたフェイトさんはその運命をコピー、結果、捻じれた運命に二人は翻弄されたという訳です。

なのは「でも、フェイトちゃんがバルドさんと結ばれて本当に良かったの！！」

はやて「せやね、あの後根掘り葉掘り聞いてうちら、もう身悶えした…」

一応、キャラクター紹介のところに魔眼の説明を更に詳しくしたものを何時か書こうと思うのですが、何時なるかは分かりません。ってか、改訂版として新しく投稿した方がいいかもしれん……。

ロイド「次回はどんな内容なんだ？」

次回は、満月世界『ルナサイト』で契約をする話にする予定です。果たして二人は無事、儀式を成功させる事が出来るのか！？

お気に入り登録して下さった皆様、ありがとうございます！！もう感謝で視界がぼやけて見えません！！！

これからも益々精進しますのでこれからも宜しくお願いします！！
次回も頑張るぞぉぉぉぉ！！では、今回はこれにて！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第六十一話（前書き）

六十一話更新！！

いやはや、今回は難産だった……。

カイン「今回は無人世界ルナサイトに行く話だったか？」

そうですよ。そして、力の衰えたバルドを助けるべく、フェイトは儀式を行うという訳です。愛があるからこそなせるものですね～。

クラウド「本来のバルドに戻るにはやはりフェイトとの儀式を成功させないといけないか……」

そう言う事です。では、本編をどうぞ！！

# 第六十一話

満月世界『ルナサイト』……無人世界に所属し、その地には強大な力を持つ生命が息づいており、人間の侵入を拒み続ける第一級危険世界に認定されている場所である。

月と闇の力が十分にあるその世界でバルドとフェイトは『血の契約（ブラッドエンゲージ）』を行う事になり、バルドは数日の間でそこで行う儀式の準備をするという事で今は、六課で皆待機している。その間にフェイトのデバイス、バルディッシュを急ピッチで修復する作業を行う。

そしてシグナムは、六課の医務室に来て部屋に入る。

シグナム「具合は如何だ、ジーク？」

ジーク「烈火の騎士か……今日も来たのだな」

フェイトとバルドが決意を固めた翌日にジークが目覚めたのだ。
その時はエリスもクラレンスも大いに喜んで彼に抱き着いてはしゃいでいた。
今その二人はヴィヴィオと一緒にザフィーラで遊んでいるが……。

ザフィーラ曰く、「三人の相手は流石にキツイ……」だそうだが、まあ、大丈夫だろう。

シグナム「お前には色々と世話になったからな。私にはこれ位しかできん」

ジーク「別に、いらんのだが……」

シグナム「私が勝手にしてるだけだ、気にするな」

ジーク「六課とは随分と騒がしいのだな……」

ジークがそう言って周囲の音に耳を立てると、

はやて「おんどりゃあぁぁぁぁ!!シリウス君!!今日はマジでキレたで!!!」

シリウス「いいじゃんか!!減るもんじゃないし、ちょっとパンツ見たぐらいでプリプリしないでよ!?」

はやて「それが……イ・カ・ンといっとるんやぁぁぁぁ!!」

シリウス「ふっ、今日のはやての下着は、水玉模様!!何とも可愛らしい新たな一ページが、俺の脳内の第三層に永久保存された!!」

はやて「うが～～～～!!!リイン、ユニゾンやぁぁぁぁ!!」

リイン「はやてちゃん、ここでのユニゾンは禁止です～～！？」

ガッシャ～～ンッ！！

コレット「ロイド～♪」

ロイド「コレット！？なんでそんなに段ボールの山抱えてんだよ！？ってか、こっちくんな！？」

コレット「あっ……」

ロイド「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

ガラガラガッシャ～ン！！

コレット「きゃぁ～！？ロイド、ロイド～～！？」

エリス「剣聖の発掘開始～クスクス♪」

クラレンス「親方、発掘準備整いました～クスクス♪」

リリス「うむ、では発掘開始だ！！慎重に、丁寧に掘り進むのです！！」

エ・ク「「イエス、アイマム♪」」

コレット「三人ともお願いね！！」

リリス「任せろなのです！！ご主人様は私が救助するのですよ～♪」

ロイド「って、遊んでないで段ボールどかせよ！！」

エリス「親方～、化石が勝手に動いたよ～クスクス♪」

リリス「怪獣、ゴシュジンサマです！！直ぐに捕獲してお嬢様にお届けするです！！」

エ・ク「「イエス、アイマム～♪」」

ロイド「うわ、うわ～～～～！？」

ドンガラガッシャ～～ン！！！

ジーク「……随分と、騒がしくないか？」

シグナム「気にするな。これが、普段の六課の日常なんだ……」

最早言う事はあるまい。といったかのようにシグナムは頭を抱える。

コレットは、よくコケて壁を粉砕し、シリウスは、はやてを弄る。

最近は、フェイトもコレットの影響を受けたのかコケて壁をぶち抜いた……。

最近六課で起きた事を、テイルズのスキット風にしてみると……

～風穴～

はやて「ん？あ～～！！」

ロイド「はやて如何したんだ？」

はやて「誰や！！六課の壁にこんな大きな穴開けたんは！！」

フェイト「凄い大きいね……」

エリオ「何か人の形に見えます」

ロイド「あ～、それコレットが開けた穴だな…」

フェイト「え、コレットが？」

エリオ「髪型までしっかり分かりますね……」

ロイド「あいつ、何でもない所でも転ぶからな。多分この辺で躓いてぶち抜いたんだろ」

エリオ「この…壁をですか？でも……鉄ですよこれ？」

ロイド「これくらい訳無いぜ。あいつ少し前にもっと分厚い鉄の壁をぶっ壊したことあるし…」

コレット「あっ！ロイド～！！」

ロイド「おい、コレット。走るとまた転ｂ――」

コレット「あっ……」

ガッシャーン！！

はやて「あ～！！また穴開けよった～！！」

フェイト「派手にぶつかったね……」

エリオ「コレットさん、大丈夫なんでしょうか？」

コレット「えへへ…、またやっちゃった／／／／」

フ・エ「「無傷？（ Д｀ ；）！！？」」

～メリットとデメリット～

はやて「はあ～、どないしよこれ……」

ロイド「如何するんだはやて？治すか？」

はやて「経費を下ろす訳にもいかんしな……お願いできるか？」

ロイド「えっ！？いいのか治して！？」

はやて「如何いう意味なんや？」

ロイド「コレットの開けた穴って結構な観光名所になるんだぜ？…ほら、これ」

はやて「五つ星観光名所？」

フェイト「あっ、これって結構有名な情報誌だよね？」

エリオ「フェイトさん、この写真にある店の壁に同じ穴が開いてます」

はやて「上位三位にランクインしてるで！？」

ロイド「前にさ、そこを通りかかった時にコレットの奴転んでさ、壁をぶち抜いたんだよ。でも、次の日からそこの店は何故が物が飛ぶように売れたから店長が修理代要らないって断ったんだよ。今じゃ、一大企業にまで登ったとか噂が立ってるけど？」

はやて「……」

ロイド「やっぱ治すか？」

はやて「いや、このままでええで☆」←サムズアップ

フェイト（銭に走っちゃったよ……）

～似ている二人～

ロイド「なあ、バルド……」

バルド「何だ、ロイド？」

ロイド「俺さ、コレットとフェイトって何処か似てると思うんだよ」

バルド「奇遇だな、俺も今そう思っていた所だ」

ロイド「声も少し似てるし」

バルド「天然入ってるし…」

ロイド「おまけに何でもない所で転ぶ…」

バルド「変なところで融通が利かない…」

ロイド「似てるよなぁ～」

バルド「確かにそうだな……」

コ・フ「「ふみゅっ!?」」

ガッシャーーン!!

ロイド「同時に転んだな……」

バルド「ああ、見事に声までハモってな……」

ロ・バ（（やっぱ似てるな～～））

～中の人などおらん!!～

ロイド「やっぱり似てるよな～あの二人……」

シリウス「二人とも深刻そうな顔して如何したのさ?」

バルド「いや、コレットとフェイトが似ているなあっと思って見ていただけだ」

シリウス「そんなの当たり前じゃん!」

バルド「まさか、生き別れの姉妹なんて言うんじゃないだろうな?」

シリウス「そんなベタな事言わないよ。だってさ、二人とも……」

ロイド「二人とも？」

シリウス「中の人がおなj――」

ロ・バ「「それ以上は言うな！！！」」

コ・フ「「？？？？」」

なんて事があった。

ジーク「……剣聖達は随分と色んな意味で想像以上だな……」

シグナム「ああ、あれで世界を幾つも救ったと言われても全く想像できんのが現実だ……。ところで、私達は明日、仲間達と共にある世界に向かわねばならない」

ジーク「そうか。では、俺も行った方がよさそうだな。そこは、エリス達から聞いたが手強い生物が生息していると聞いた。なら、人手は多い方がいだろう」

シグナム「だが、お前はまだ本調子では……」

ジーク「心配するな……。例え本調子でなくとも烈火の騎士の背を

守る事くらいは出来る」

シグナム「……シグナムだ」

ジーク「む……？」

シグナム「前に一度、呼んでくれただろ？その時の様に私の名を呼んでくれ」

ジーク「む、む〜……」

シグナム「ジーク……」

ジーク「……シ、シグナム……／／／／／／／」

シグナム「っ！！ああ！！」

ジークが自分の名を呼んでくれたのが嬉しくてシグナムは微笑んだ。
それを見てジークは顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――

～～満月世界『ルナサイト』～～

年中、闇夜に包まれるこの世界は人工の明かりが存在しない。
それで、頼りになるのは空に輝く美しい月とその世界に生息する虫
……

なのは「……」

カイン「なのは、手を離してくれないか？歩きづらいんだが……」

なのは「うぅ～だって～……」

リリス「如何したです～？」

なのは「にゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

リリスが明かりを持って近づいた途端、なのははカインの背に隠れた。

何故ならリリスの持つ明かりはこの世界の生き物で、それは、掌サイズの大きなホタルなのだ。

ただ、大きさが大きさなだけに、台所の奥様方の宿敵Ｇに見えなくもないのだ。
それが飛んでいるので丁度なのはの目線辺りを漂う、それがなのは

にはキツイらしくホタルと分かっていても如何してもゴキ○リに見えてしまうのだ……。

なのは「うにゅぅ～～……」

リリス「如何したです？そんなカインの陰で縮こまって？」

エリオ「リリスさん、そのホタルが原因だと思います……」

シリウス「う～ん、大きさ的に如何見ても発光するゴキｂ――「それ以上言ったらあかん！！」ぶっ！？」

リリス「情けない話です！！」

シャマル「リリスちゃんはその……黒いのを見つけたら如何してるの？」

リリス「モチのロンで、問答無用でガトリングガンで殲滅です！！」

ロイド「待て、リリス！！それじゃあ、何時もグランディオンの食堂が穴だらけになってんのは、お前の所為か！！」

リリス「リリスが悪いんじゃないですよ！？あの黒いドチクショーの所為なのですよ！！」

コレット「リリス、後で詳しくお話を聞かせてね？」

リリス「……ごめんなさいｏｒｚ」

コレットの笑顔にリリスは素早くジャンピング土下座をする。

バルド「お前等、この世界であんまり騒ぐなよ？」

フェイト「ねえ、バルド。儀式の準備って何をやってたの？」

バルド「ん？そうだな……。取り敢えず、儀式に使う術式を構築して、次に満月の加護を強化する術式に、あとは、お前が不死者化（アンデッド）しない様にする為の抗体術式の構築とその配置順、あとはそれの発動タイミングとかを計算してた」

あの短い日数でそこまでやっていたのに驚くフェイト。だが、同時に自分の事を大事に思っていてくれるのが分かって嬉しくなった。

フェイト「バルド、ありがとう／／／／／／」

バルド「まあ…お前が無事でいてくれる為にしただけだし、それにこんだけやっても成功する確率が少し上がるだけで如何なるかはまだ分かんねえぞ？」

フェイト「それでも嬉しいよ……」

そんな感じで二人で会話をしてたら……

シリウス「いいな～、バルドは。フェイトとイチャイチャ出来て～」

フェイト「ふえっ／／／／／／／／！？」

バルド「何言ってんだお前？俺は別にイチャついてなんかいねえぞ？」

シリウス「自覚なしか……。ロイド並みだな……」

ロイド「ん？俺がどうかしたのか？」

クラウド「カップルが一人増えると此処までカオスになるのか……」

ティファ「候補は、あと三人ほどいますが……？」

エリス「クスクス、シグナムとジークは成立してるもんね～♪」

シグナム「な、何の話だ／／／／／／！？」

ジーク「？」

クラウド「ところで、何故使徒の者達も来たんだ？お前達には関係はないと思うのだが？」

クラレンス「そんな事ないよ～。シグナムが関係するのは私達も関係ありだも～ん、クスクス♪」

何時の間にか使徒の三人と馴染んでる辺りロイド達は凄いと思うが

……。

そんな感じで会話をしながら歩を進めて、辿り着いたのは巨大な湖だった。
その真上付近に大きな満月がその水面を照らしている。

バルド「此処だ……」

コレット「わ～、凄く広くて綺麗だね～♪」

セフィリア「そうだね～」

バルド「それだけならいいんだがな……」

ロイド「どうかしたのかよ？」

バルド「この湖には一つ問題がある」

ヴィータ「それは、なんだよ？」

――ザバーーーンッ！！！――

モンスター［ギャアスオオォォォォォォォォォ！！！］

バルド「此処には大型モンスターが生息してるってことだ……」

なのは「……（゜Д゜）」

フェイト「……（゜Д゜；）」

はやて「……？（゜Д゜；）」

いいタイミングでモンスター登場！！なのは達がポカーンと口を開けてその巨体を見上げる。

全長凡そ百メートルは下らないだろう、長い胴体に、その体からは無数の触手の様なものが動いている。

ロイド「ようするに、あれを狩れ、と……？」

バルド「まあ、直球で言うならそれだな……」

シグナム「くくくく、ハハハハハ！！！燃えてきたぞ！！私の剣技が何処まで通じるか勝負だ！！」

シャマル「シグナムちゃんが挑発しちゃってる！？」

ザフィーラ「彼女の悪い癖だな……」

ヴィータ「呑気なこと言ってる場合かよ！？」

エリオ「あわわわ……！？」

スバル「か、か……」

ティアナ「か？」

スバル「カッコいい～～！！」

ティアナ「馬鹿がいるわ……」

コレット「えぇ～、可愛いの間違いだよ～？」

ガルド「此処にもいたか……」

ロイド「いや、寧ろコレットは天然……」

クラウド「これ以上喋るな……。此の侭だとカオス化する」

ティファ「そうだね。向こうも待ってくれないと思うしね……」

キャロ「来ます！！」

巨大なモンスターが動き出した。その大きな口を開いてそこから圧縮した水流を吐き出す。散開して避ける。先程までいた場所に水流が当ると地面が大きく削れ抉り取られる。そして、リリスに向かって触手が一本向かって来る。

リリス「面白い敵なのです！！ですが……」

それをひらりと体を逸らして避ける。そして、隙だらけとなった所に素早く滑り込む。

リリス「遅過ぎて欠伸が出るのですよ～。くらうです！！虎の噛み付き、タイグレス・バイト！！ブチかます、シュートッ！！」

素早い拳の連撃を加え、回し蹴りを連続で繋げてそこから勢いを付けて後ろ向きからスタンプする様に蹴りを加え、更に足に装備した散弾銃が火を噴いた。その強烈な一撃で触手一本が半ばから千切れた。

リリスやクラレンスにはその大きな尾が振るわれてきたが彼女達に当ると二人が罅割れて砕け、ガラス片が無数の弾幕となってモンスターに襲いかかる。当の本人は背後に何時の間にかおり伸縮剣で高速突きを繰り出しその胴体を穿つ。

漸く、リボルバーナックルの修理が完了したスバルはティアナからの援護を貰って、一気に距離を詰めその大きな頭、正確には額に向かって拳を叩き込む。軽い脳震盪を起こしてふらついた所にシリウスが接近しアッパーで顎を打ち上げる。だが、敵とてやられっぱなしではない。頭を何度か振るったあとシリウスを睨み、水流を吐きだす。それを避けた彼に続いて触手で弾き飛ばそうとする。

シリウス「おおっ！？いい攻撃～。でも、受けよ大地、玄武！！」

シリウスが神威を消して新たにナックル系の武装、亀の甲羅の様な模様が腕まで覆う玄武を装着する。それを盾の様にして構えて触手の一撃を防御。

弾かれたシリウスが地面に悠々と着地すると、その彼の目の前には次の攻撃の巨大な尾が迫って来ている。

シリウス「受けろ、岩塊！！アーステッパー！！」

シリウスが足下を殴ると正面に地面が盛り上がって壁に変貌する。分厚い地面の壁はその尾を受け止めた。シリウスは跳躍し壁の上に飛び乗る。

シリウス「闘気よ、食らい付け！！蛇魂晶弾！！」

シリウスの闘気が打ち出されると、それは形を変え蛇に変貌した。その蛇たちは別々に動き相手の触手に噛みつき、巻き付いた。蛇を引き剥がそうと暴れている所にはやてがフレースベルグを放ちその体にダメージを与える。シグナムが距離を詰め縦一閃、続けてジークが横一閃、最後に二人が傷を付けた中央にガルドが槍を突き刺す。

ガルド「絶氷槍！！」

槍の先端が極低温になり敵の内部から凍りつかせる。痛みで仰け反るモンスターに人の姿をとったザフィーラが拳を頭に打ち込む。それによって額が割れてモンスターが悲鳴を上げてのたうつ。セフィリアの神速の抜刀が触手を全て切り落とし、ロイドの素早い斬撃が相手の体に傷を付ける。そして、最後になのはがディバインバスタ

ーを、コレットがエンジェルフェザーを放ち頭部に直撃させ見事にその巨大なモンスターは倒れ伏した。死んだモンスターが粒子となって消えてそこには先程までと同じ静寂が訪れた。

ヴィータ「なんか、呆気なく終わったぜ？」

ロイド「見た目以上に手強くなかったな？」

ガルド「それはそうだ。あれは、この世界ではそこまで強くないレベルのモンスターだ。もっと手強いのが周囲にわんさかと居る」

リリス「レベル上げに丁度いいのです！！今度、兵隊さん等を此処に落してみよ～なのです」

クラウド「止めとけ、二日ともたずに全滅する……」

バルド「それよりも早く終わらせるぞ」

バルドはフェイトを見る。彼女が頷いたのを確認してバルドは湖に入った。深さは腰くらいまでしかなかった。

ロイド「腰くらいまでしか深さは無かったのか……」

ティアナ「あの巨体がどうやってあの水深に隠れてたのよ……」

リリス「ティアティア、世の中、知ってはいけない事情があるのですよ……」

フェイトはなのはとはやてを見る。二人の親友は、最初こそ大丈夫だと言ってはいたが本当は、不安だった。もし、フェイトが失敗したら……そう、思うだけで背筋が寒くなった。

なのは「フェイトちゃん……」

フェイト「なのは、大丈夫だよ」

はやて「せやかて、もし失敗したら……」

フェイト「ううん、絶対に成功する。私は、絶対に不死者（アンデッド）にはならない。だって、なのはもはやても大事な家族が、皆が、仲間がいるから。私は、絶対に闇に呑まれない！」

フェイトの強い意志を感じた。なのはとはやては互いの顔を見て頷いてフェイトを軽く抱きしめる。

フェイトも二人を抱きしめ、そして離れ、彼女もバルドを追って湖に足を入れた。

湖の水温は低く、入れた瞬間体が震えたが、グッと堪えてそのまま腰まで入る。

バルドの後を追いかける。バルドはどんどん進んで湖の丁度真ん中で立ち止まった。

フェイトは何度か足を縺れさせて転びそうになったがなんとかバルドの下にたどり着いた。

バルド「ここを満月が通り抜ける。その時に俺達は契約を行う」

フェイト「分かった……」

バルド「フェイト、無理はしなくてもいい。怖いんだったら止めても……」

最後まで言い切る前にフェイトはバルドの口に人差し指を当てて止める。微笑みながら彼女は、バルドに気持ちを伝える。

フェイト「正直怖いけど……でも、バルドを助けたいから…私はずっとバルドといたいから……だから、私はやるよ。バルド、私と契約して？」

バルド「……分かった」

そして、満月の光が二人の真上に差し掛かった。二人は湖に反射し、描かれた満月の中央に立っている。

バルド「月が真上に来た。これから月を固定する。始めるぞ……」

フェイト「うん……」

バルドが周囲に術式を発動して配置する。月がその動きを止め二人

の真上で止まった。
なのは達は無事成功するのを祈りながら見ていた。

なのは「フェイトちゃん……」

カイン「成功する確率は、五分五分……。だが、あの二人ならきっと……」

ガルド「みんな、あれを見るのは構わないが……少しだけ頼みがある」

アイネ「何をだ？」

ガルド「これから二人は吸血をする事になるが、その血の臭いを嗅ぎつけてモンスターが来る。そいつ等を足止めして欲しい」

はやて「了解や、フェイトちゃんとバルドさんの大事な儀式、絶対に成功させたるで！！」

ジークとエリス、クラレンスは湖の真ん中にいる二人を見ている。

エリス「あの人が、イモータルかぁ～」

クラレンス「あの人が、主を倒した存在と同じ存在なんだね～」

ジーク「お前達、俺達もシグナムと共に戦う準備をするぞ」

エ・ク「「は～～い、クスクス♪」」

主が知ったらさぞ驚くだろうな～などと、姉妹は楽しそうに考えながらジークについて行き、シグナムと共に戦いの準備を始めた。

――――――――――――――――――――――――――――――

バルド「覚悟はいいな、フェイト……」

フェイト「うん……でも少しだけ待って」

バルド「如何した？」

フェイト「最後に……もう一回、キスしてもいい？」

彼女の体が震えている。別に寒いからではない。ただ、やはり何処まで気丈に振る舞っても怖いものは怖いのだ。それに……もしかしたらこれが人として、人間の自分としての最後かもしれないから…

フェイト「人間でいる、最後かもしれないから……だから――んっ！？」

フェイトの言葉を最後まで言わせまいとバルドが彼女の唇をキスで塞いだ。一瞬だけ驚いたが彼女も直ぐにそれに応え、ゆっくりと瞼を閉じてバルドの首に腕を回し離れない様にして口付けに意識を集める。

フェイト「んっ……ちゅ、はぁ…んぅ……ふぁ……あふぅ…んんっ……ちゅぷ…」

互いを求めるかのように口付けを交わし、舌と舌を絡めて相手の温もりを感じた。暫くして二人は口を離すと銀の橋が二人の間に掛かり切れた。上気した頬に潤んだ目でフェイトはバルドを見上げる。

フェイト「バルドの意地悪。最後まで言わせてよ／／／／／」

バルド「アホ、最後とか言うな。これからも、お前は人間であり続けるんだよ」

バルドの眼はしっかりとフェイトを見据えている。その目からは絶対に成功するその未来しか見ていない様に見えた。フェイトも頷く。それと同時に周囲に配置された魔法陣が光る。

バルド「これより、『血の契約（ブラットエンゲージ）』を執り行う。契約者、フェイト・T・ハラオウンよ」

フェイト「はい」

バルド「汝、我が半身となり、その悠久の時を我と共に生き抜く事を誓うか？」

フェイト「…誓います」

バルド「汝、その身を人ならざる者になろうとも、闇に呑まれず、我と共に永遠を生きる事を誓うか？」

フェイト「…誓います」

バルド「汝、たとえ死しても、我と再び結ばれる事を永久に誓うか？」

フェイト「…誓います」

バルド「契約の証しとして、我と汝の名を、契約の方陣に刻む。我が名は、バルド。闇の五大王、『創造の獣』バルド」

フェイト「私は、フェイト、フェイト・T・ハラオウン。此処に私の名を刻みます…」

二人の間に現れた魔法陣に二人の名が刻まれる。そして、それが完了すると魔法陣が折り畳まれそれはゆっくりと二人の足元に下り、水面に反射する満月の中に溶け込んでいった。契約の方陣が全て溶けきると水面に反射する月は光輝き二人を照らす。

バルド「これより契約の最終段階に入る。……行くぞ、フェイト」

フェイト「……うん」

彼女が頷くとバルドは突然、短剣を取り出しそれを自分の左の首筋に深く突き刺した。

そして、一気に引き抜いた。そこから激しく血が溢れだして彼の漆黒の服を赤黒く染める。

フェイト「バルド！？」

バルド「お前には牙はないだろ？だから、こうするしかない。心配すんな、暫くすれば勝手に塞がる」

バルドはフェイトを抱き寄せ、強く抱きしめる。フェイトもそれに応えて腕を背に回して強く抱きしめる。バルドの心音が聞こえ、それが恐怖を打ち消してくれた。彼はフェイトの耳元に顔を近づけ囁く。

バルド「本当はこんな事はしたくはない。お前には幸せに人としての生と死を謳歌して欲しいと思っていた」

フェイト「ううん、私はこれで良かったと思う。だって、貴方の全てをこれから本当の意味で理解できるから……。だから、バルドお願い……」

バルド「……分かった」

二人は一度離れ互いを見つめる。そして、決心したバルドはフェイトに近寄り彼女の肩に手を掛ける。バルドの口から吸血鬼の様な鋭い牙が二本見えた。ゆっくりと、彼女の服をずらして左肩の、彼女の項（うなじ）を晒す。白く磁器の様な肌が月の光で反射して、まるで幻想の様な雰囲気を醸し出す。

バルドは、その幻想を手放すまいと、ゆっくりとフェイトの首筋に顔を近づける。

フェイトは、緊張していた。今から吸血されるがそれが一体如何なるのか分からないから……。

激痛が来るのかもしれないと思い、それに備えた。

そして、バルドの口がゆっくりとフェイトの首筋に吸い付き、牙が彼女の首筋に食い込んだ。

フェイト「あ……」

その瞬間を語るとすれば、どう表現すればいいのか分からない。ただ、激痛は一切なく。逆に心地よさが彼女の全身を駆け巡る。血が抜かれるのが何となく分かるのだが、それよりも体がフッと軽く、空に浮かぶ様な浮遊感と、チクリとした痛みが甘美な感覚となって彼女の脳髄を刺激して来る。

フェイト「あぁ……んぅ！……ふぁ～……んんっ……！」

フェイトの口からは無意識に切なく、艶っぽい声が漏れた。このまま、血が抜かれ続けたら別の意味で昇天しそうだった。だが、自分だけ吸われている訳にはいかない。これは契約の誓い、自分もバルドの血を得なければ契約は成立しない。

フェイトは、脳を刺激する痛覚、いや快楽を堪えて、バルドの左肩に口を付けて血を飲み始める。

フェイト「んく……んぅ……んく……」

鉄の味しかしないそれをフェイトは吸い続ける。バルドもフェイトの首筋から口を離さず彼女から吸血を続ける。それは長い間続いた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

その幻想的な光景になのは達は目を奪われた。
湖の真ん中で行われる行為はまるで長年離れたいた男女が再び出会い抱き合うかのようだ。
湖で反射する月の光が闇夜と混じり合って光と闇が曲を奏でる。
それは、まるで自分達が歴史の目撃者になったかの様だ……。

だが、その幻想を見るのを邪魔する者達がいた。
突然、周囲の空気が重くなりピリピリとした殺気がなのは達に圧し掛かる。

ガルド「来たか……」

シリウス「やれやれ、もう少しこの幻想郷を見たかったのになぁ～、空気読めよモンスター」

リリス「此処のモンスターに空気を読めというのは無理な相談ですよ～」

セフィリア「みんな、戦闘準備はいい？」

シグナム「ジーク、あまり前に出るな。お前はまだ傷が完治できていないのだからな」

ジーク「心配するな。この程度で負ける気はない。貴方こそ後ろで見ていていればいい」

エリス「クスクス、ジークはシグナムの事が大事なんだよ～♪」

クラレンス「ジークは、シグナム一筋～クスクス♪」

シグナム「なっ／／／／／／／！？」

ジーク「お前達！？」

エ・ク「「クスクス♪」」

真っ赤に染まる二人の顔を姉妹は口に手を当てて上品に笑った。
そこに近づく殺気、その方を見ると…無数の影と光る目が森の向こうから現れる。

シグナム「ジーク、エリス、クラレンスよ、行くぞ！！」

ジーク「分かってる！！」

エリス「クスクス、遊んであげる～♪」

クラレンス「クスクス、壊してあげる～♪」

森から出てくるのは2メートル程の人型の黒い生命体。頭はトカゲの様で尾も生えている、特徴的なのはその腕には肘の少しまでかけて鋭利な刃物の様なものが付いており口からは絶えず白い息が漏れている。

モンスター［フシュルルルルッ！！！］

湖から漂う血の香りに殺気立つモンスターは目の前に見つけた獲物を狩るべく一斉に動き出した。
ジークがバルムンクを抜き放ち地面を蹴って肉薄、その彼に一頭が同じく地面を蹴って迫る。その巨体からは想像できない程の身のこ

なしで接近しジークに向けて肘よりも少しばかり長い刃で切り裂こうとするそれを彼は受け止める、激しく両者の得物が火花を散らす。

ジーク「くっ……この生物は……！？」

シグナム「ジーク！！」

シグナムが横から素早くレヴァンテインを持って斬りかかる。それをバックステップで後方に飛び退いて距離をとって再び地面を蹴って今度は二人を纏めて仕留めようと両腕を大きく振りかぶって来る。だが、その選択は間違っていた。並みの相手なら確実に仕留められるが相手は、夜天の守護騎士、シグナムとその弟子だった蒼火の騎士、ジークである事だ。

その大きな隙を逃す筈もなく、二人が同時に踏み込み懐に入り振り抜く。二人の一撃は見事に決まり、モンスターは倒れた。

ジーク「烈火の騎士、気をつけろ……。こいつ等は…」

シグナム「ああ、分かる。この身のこなし、かなりの手練だな……」

たった一度、刃を交えただけでも分かった。このモンスターはかなりの強敵だ、二人は頷いて二手に分れて別々の敵を狙う。シグナムに向かって一体が刃を構えて飛び掛かる。

シグナム「確かに、お前達は強い……だがっ！！」

凶刃が迫るがそれを紙一重で身を低くして回避する。彼女の長髪がふわりと舞う。

シグナム「ベルカの騎士に、一対一で挑むには……まだ足りん！！」

素早く、振るわれたレヴァンテインがモンスターを捉え、その一撃でその生物は倒れる。
そこに続々と地面を蹴って迫るモンスターの群れにシグナムはレヴァンテインを構えて地面を蹴り突撃していった。

エリス「クスクス♪鬼さん此方、手の鳴る方へ～♪」

クラレンス「このトカゲはなんていう名前かな？トカトカって如何？クスクス♪」

エリス「可愛いね～♪クスクス♪」

嵐の様なモンスターの攻撃を踊る様にステップで避けて手を口に当てて上品に笑う二人。
そして、二人の姿がスッと消えて刃を空打ったモンスターは辺りを見回して二人を探す。

エリス「鬼さん遅〜い、クスクス♪」

クラレンス「背中にタッ〜チ♪クスクス♪」

何時の間にか背後に回った二人が笑いその背に軽く触れた。それに反応して振り向きざまに刃を振るうがそこにはもう二人はいなかった。

エリス「君、つまらないから……死んじゃえ、クスクス♪」

エリスが上品に、しかし見る人が見れば残忍な笑顔で笑い人差し指をその遊んでいたモンスターに向ける。そして、何時の間にかその背に刺さっていた針状の魔力弾が光り、爆発しそのモンスターはバラバラに吹っ飛んだ。

クラレンス「クスクス♪次の遊び相手は誰かな〜♪」

エリス「もっと遊びましょ〜♪もっと、悲鳴を聞かせてよクスクス♪」

相手が小さいからという事で侮っていたモンスター達はエリス達の凶暴性を感じ取り、油断無く飛び掛かる。それを二人は一人が二人に、二人が一人になる不思議な動きを見せて相手に困惑と恐怖を与えながら自らやって来た玩具（えもの）に襲いかかっていった。

はやてに飛び掛かるトカゲのモンスターをアイネが殴り飛ばし、ヴィータがアイゼンで叩き潰す。
はやての真上から迫ってきたモンスターをザフィーラが人の姿となって障壁で受け止め、拳を振るい追い払う、別の方から来たモンスターもシャマルが風の護盾で攻撃を抑え、そこにシリウスが入り、玄武を装備した拳で相手の腹を殴り吹っ飛ばした。

はやて「みんな、うちの事は心配せんでもええ!!こいつ等、少しでも綻びが見えたら襲ってくるで!!」

ヴィータ「何言ってんだよ、はやて!?はやてが一番狙われやすいのに、それをカバーしないで如何すんだよ!?」

ザフィーラ「主は我等に気にせず魔法を使ってください」

シリウス「そうそう、ザフィザフィの言う通りさ。こういう大群戦ではやての魔法は効果的なんだから、ガンガンいっちゃおう!!」

ザフィーラ「うむ、それとシリウス、私はザフィーラだ……」

そんな会話をしていると、一体がザフィーラに向かって飛び掛かって来た。それを自身の障壁で受け止める。

だが、突然障壁に接触している刃が不気味な音を立てて振動を始める。すると、ザフィーラの強固な障壁に罅が入ったではないか!?

ザフィーラ「なにっ!?くっ!!」

障壁が割れてその振動する刃がザフィーラに迫る。それをギリギリ身を捩じって避けて難を逃れる。
そして、隙だらけのモンスターの横っ面をザフィーラの拳が捉えて吹っ飛ばした。
錐揉みして吹っ飛んだモンスターは木にぶつかって動かなくなる。

はやて「ザフィーラ、大丈夫なんか!?」

ザフィーラ「大丈夫です、あるj――主!!後ろです!!」

はやて「なっ!?」

はやてが振り向くと、背後にいたモンスターが自身の刃を高速振動させて何もない所で両腕の刃を同時に振るった。それは真空波に変化して空気を斬りながらはやてに迫る。
はやてを断ち切らんと飛んでくる刃はしかし、彼女の目の前で霧散して消えた。

ヴィータ「なんだよ、今のは!?」

シャマル「真空波を放った!?」

シリウス「はやて、大丈夫!?」

はやて「だ、大丈夫や!!（あ、危なかった……。もし、フォースフィールド張ってへんかったら死んどった……）」

彼女は、戦闘の始まる前にフォースフィールドを発動していてそれがあったお陰で危機を回避できたのだった。フォースフィールドは効果があるのはあと七回まで。敵の意外な中距離攻撃に冷や汗が出た。

シリウス「こうなったら～～術でボッコボコにしてやんよ!!」

シリウスの足元に魔法陣が出現する。更に両手にも術の魔法陣が出現した。それを止めるべくモンスター達が一斉に彼目掛けて真空の刃を飛ばす。それは、シリウスを捉えて彼を両断する、がそのシリウスは霞の様に歪んで消える。

シリウスの使う『夢幻』と呼ばれる幻術だ。彼は術を発動しながら相手を幻覚で惑わせたのだった。

当の本人は相手の見ている方の反対側に何時の間にかおり、そこで術を完成させた。

シリウス「唸れ岩槍、ロックランス!!潰れろ、ロックブレイク!!頭上注意、ロックマウンテン!!」

更にシリウスの力、『魔法連鎖（チェーンマジック）』が発動した。相手の足元から岩の

槍が出て相手を浮かし、更に続けて、大きな岩塊が下からモンスター達を突き上げて宙に吹っ飛ばす。そこに上空から何処からともなく大きな岩が降り注ぎ次々に相手を下敷きにして地面に落ち潰した。

シリウス「これでフィニッシュ！！愚かな贄を喰らい尽くせ、グランドダッシャー！！」

最後に地面が赤く光り割れてそこから溶岩が噴き出して地面に押しつぶされているだろうモンスターを焼き、大岩をも破壊した。

シリウス「はい、終了～～！！」

と思ったのも束の間。木から影が幾つも飛び出しシリウスの真上からモンスターが遅い掛かって来た。彼目掛けて無数の真空波が放たれて降り注ぐ。

はやて「シリウス君！！！」

シリウス「あるぇ～～！？だあぁぁぁぁぁぁ！？」

幻術を使ってなかったのか慌ててシリウスが回避した。その彼に向かって一体が仲間の腕を踏み台にして弾丸の様に迫る。そして、彼を両断せんと振るわれる刃を玄武で受け止める。その玄武ごとシリウスを両断しようと考えてるのか刃が振動し始める。

アイネ（あの刃は、スバルの振動破砕と同じ効果を持っているのか！？）

シリウス「いや～、中々の攻撃だね。でも、残念だねトカゲボーイ……」

シリウスが笑みを作る。その不敵な笑みでモンスターは少しばかり狼狽したように見えた。
そして、はやてには見えた。シリウスの背から異様な気配が溢れているのが……。

はやて（な、なんやあれ……？さ、寒い……）

背筋を凍らせる様な気配がシリウスから感じられる。禍々しいその気配にアイネ達も気づき額から汗が伝う。

シリウス「玄武の甲羅の堅さは、世界一ぃぃぃぃぃぃ！！！」

しかし、それは直ぐに霧散しシリウスは相手の得物を弾き上げる。
隙だらけの胴体に潜り込みその懐に向かって拳を構える。

シリウス「玄武鉄甲撃！！」

一撃を相手の腹に打ち込むシリウス。連打系の攻撃が多い彼には珍しく一発だけだった。
しかし、その一撃の衝撃は凄まじく、相手の体を貫通して後方の地面が吹き飛んだ。
遅れてその衝撃でモンスターは弾丸の様に吹き飛び、上空に飛ばされた。
それに続いてシリウスも飛び、彼目掛けて襲いかかろうとしていた数体のモンスターを狙う。

シリウス「蛇咬連彗衝！！」

シリウスの背後から無数の大蛇が現れそれがモンスターに襲いかかった。不規則な動きで相手の攻撃を回避してその体に巻き付き締めつける。骨がメキメキと折れる音が鳴る。
モンスターの瞳孔が開き口が開いたまま絶命した。それを大蛇達は確認すると霧となって消える。それでも、モンスター達は闇夜の森の向こうから次々に現れて来る。

はやて「数が多過ぎるで！！」

ヴィータ「はやてはもう少し下がっとけ！！あたし等が前で抑える！！」

ザフィーラ「シャマル、主を守る為に我等は下がるぞ」

シャマル「ええ、そうね」

アイネ「シリウス、どの位いける？」

シリウス「まあ、それなりかな？やってみないと分かんないねぇ～」

それぞれが出来る行動を考えながら突撃して来るモンスターの群れを迎撃しにシリウス達は突撃して行った。

# 第六十一話（後書き）

と言う訳で、ルナサイトは前編と後編に分けました。
ルナサイトは無人世界でしかも、魔導師も手を焼く手強いモンスターの巣窟になっているため今まで殆ど手が入っていない状態です。

ガルド「始まったな……」

セフィリア「二人の儀式が成功するか否かは、二人に掛かっているね」

そうですね……。二人の儀式の成功を無事祈るとしましょう。
さて、次回も早く更新したいのですが、リアルの定期試験がまだ全部片付いていないのが問題ですね！！しかもまた月曜に二つ試験が残っているという事実……。

執筆に集中できんのじゃあぁぁぁぁぁぁぁ！！！
そして、湿気！！いつまで続くんだよ！？ベタベタベタベタしてキーを打つのも億劫になるわ！！

シリウス「気合と根性さ！！」

吠えてやる！！明日に向かって吠えてやる！！うあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！

カイン「作者が壊れ始めたから今回はこれにて！！」

読者の皆様、ありがとおおおおおおおおおおおお！！！これからも、頑張りますよおおおおおおおおおおお！！！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第六十二話（前書き）

六十二話更新！！

いやはや、今回も難産だ……。

ガルド「今回はルナサイト編の後編だったか？」

はいそうですよ。果たして、フェイトは無事、バルドと契約出来るのか！？

では、本編をどうぞ！！

# 第六十二話

ティアナ「スバル、アンタ治ったばかりなんだから無理すんじゃないわよ！？」

スバル「大丈夫だってティア、ってうわっ！？」

スバルに向かってモンスターが刃を振るってきた。それを間一髪、体を逸らして避けて飛び退く。
そこにティアナがクロスミラージュで援護し、エリオが代わりに接近する。ティアナの魔力弾をその刃をもって破壊または弾き攻撃を凌ぎ、接近するエリオに真空波を飛ばしてきた。咄嗟にストラーダで防御するが衝撃で後方に吹っ飛ぶ。

地面を蹴り猛スピードでエリオに迫るモンスターを復帰したスバルが割り込んでアッパーを喰らわせて顎を打ち上げて、直ぐに肘を入れて更に押し返し、リボルバーナックルに魔力を込める。

スバル「リボルバーシュート！！」

魔力弾を至近距離で受けて吹っ飛んだ。しかし、直ぐに体勢を整え地面に足を付けて地面を抉りながら踏ん張る。

モンスター［フシュルルルゥゥゥ！！！］

口から白い息を吐きながら啼き、地面を蹴って此方に突っ込んで来る。軽快な走りでキャロのアルケミックチェーンを飛び抜けてエリオに迫る。振るわれる刃をエリオは受け止める。火花を散らし互いの得物を弾く。素早く体を切り替えて反対の刃でエリオを切り裂かんとするがそれを読んでいたエリオはバク転で避ける。そして、彼の後ろから来たのはスバルだった。

スバル「どりゃあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

渾身の一撃は見事に相手を捉えて吹っ飛ばした。その一撃でノックダウンしたのか動かなくなった。

しかし、敵はこれだけではない。

その森の向こうから同じ姿をしたモンスターが続々と現れて来る。

キャロ「まだ、あんなにっ！？」

ティアナ「不味いわね、たった一体でも結構厳しいのにこの数は……」

モンスター［フシャルララララララッ！！！］

そんな彼女たちの心境などお構いなしにモンスターは一斉に突っ込んで来る。このモンスター、数も多ければ実力も中々にある厄介な敵だった。一体の実力を例えるなら、一人でイノセント?型を二体相手する様な感じだ。今のシグナム達ならそれは問題ないだろうが、ＦＷ陣はまだそれは厳しいものだ。

それ程の戦闘力と計算するのは、まずあの素早い動きだろう。二足歩行で駆ける姿は人間にも見えるが、しかしそれは狩人の様な身のこなしに素早いターンなど普通の人なら反応すら出来ない動きから来る。それに続いて、あの肘まで伸びる鋭い刃だ。『ナルガクルガ』の様な刃物は中々に切れ味を持ち、しかもこの刃は高速振動を起こす事で更に切れ味を上げて、更にその振動を活用して振るい放たれる中距離攻撃も驚異的だ。

二体一組となってＦＷ陣に迫る。ティアナはフェイク・シルエットを発動してエリオ達を幻術で援護しながら魔力弾で迎撃する。二体は、素早く散開し魔力弾を避けるとティアナの姿をした幻術に飛び掛かり両断する。そして残りの一体が本物のティアナに向かって斬りかかる。素早く身を伏せてそれを避け、続けて来た真空波を飛び退いて避ける。

ティアナ（くっ、速い！！）

思わず舌打ちしたくなる状況にティアナは焦る。周りを見れば、スバルは二体の素早い動きに辛うじて反応して避けている。エリオは、

キャロの援護に回りたいようだがそれを二体のモンスターが阻んで邪魔をしている。キャロはフリードを竜魂召喚で大きくさせて炎を吐かせて攻撃するがそれを避けて地面を蹴って飛び上がりフリードの喉を掻き切ろうとするモンスターの攻撃を防御するので手いっぱいの様だ。

このままでは、防衛線が突破されてしまい儀式中のバルドやフェイトに危険が及んでしまう。それだけは何としても防がねば！！と思っていた時だ、一瞬の隙でティアナは懐に侵入を許してしまった。

ティアナ「しまっ……！？きゃあっ！？」

スバル「ティア！？」

振るわれた刃がティアナの首を斬り落とさんと迫る。しかし、辛うじて体を逸らして間一髪で避けれたのだがバランスを崩して地面に尻餅をついてしまった。そして、振り上げられる刃に彼女は目を瞑って来るだろう痛みに備える。

――ヒュッ！！――

風切り音が聞こえた。しかし、何時まで経っても何も来ないので恐る恐る目を開けると……

ティアナ「ロイド…！？」

ロイド「ギリギリ間に合った……」

ロイドが目の前でエターナルソードを横に振るった恰好で立っていた。ティアナを倒そうとしたモンスターはその一撃で絶命したのか、その場で倒れて動かなくなった。エリオ達を狙っていたモンスター達は何かを感じ取ったのか急に攻撃の動きを止めてロイドを見る。野生の本能か何かが告げているのだろう、ロイドを見た途端にモンスター達の様子がおかしくなる。一度だけ、後退りをしたのだ。

モンスター［フシュルルルル！！！］

ロイド「掛かって来い！！」

ロイドが駆けだすと同時にＦＷ陣を狙っていた残りの七体も吼えて、一斉に彼に向かって襲いかかった。最初の一体がロイドに刃を振るうがそれを彼は受け止めて弾き飛ばす。その後ろから、二体目が来るが姿勢を落として避ける。彼の上を空振りした刃が通り過ぎ、その瞬間にロイドは剣を振るい二頭目を斬り伏せる。三頭目が死角から飛び掛かるが、予測してたのか左足を軸にその場で回転し遠心力を利用した攻撃で弾き飛ばす。直ぐに彼は真上に飛び上がるとそこを一体が通り過ぎた。

体勢を空中で切り替えて地上から飛び上がって来た四頭目を迎え撃つ。真空波を放つモンスターに対しロイドも斬撃を飛ばしてそれを相殺、そのまま彼はその身に炎を纏い火の鳥となって突撃、四頭目を貫き着地、直ぐに振り向いて斬撃を飛ばすと背後を追いかかろう

としていたモンスターに直撃して怯んだ。その怯んだ相手を無視してその隙に攻撃しようとした最初の一体目の刃を受け止め、弾き上げて胴を横一閃し斬り伏せ五体目に突撃、先程攻撃を受けた仲間を援護しようとしていたのか反応が遅れる。

ロイド「虎牙破斬!!」

素早い斬り上げと斬り下ろしが決まり、倒れ伏す。六体目はその場で何度も刃を振るって真空波を断続的に放つ。ロイドは、それを潜りぬけて接近し姿勢を落として相手の視界から一瞬だけ消える。その瞬間、相手の視界がぶれて顎が持ち上がる。

ロイドは、相手の懐に潜って素早く体を捩じって足を真上に打ち上げて相手の顎をカチ上げたのだ。宙に軽く浮いた六体目を斬り上げで仕留め、三頭目が上空から斬りかかって来たがそれを避け再び虎牙破斬で斬り伏せた。最後に残った七頭目を狙う。仲間を一瞬で失って弱腰になったモンスターは、半ばやけくそに飛び掛かる。それを、足を一歩ずらして避けて剣を振るう。咄嗟に反応して両腕をクロスして受けるが腕ごと両断されてしまった。

ロイド「烈風空牙衝!!」

その場で烈空斬を繰り出し着地と同時に瞬迅剣を繰り出して胸を貫いた。その一撃で最後の一体も絶命し地面に倒れ伏した。

スバル「す、凄い……」

エリオ「あの数を、一人で……！？」

ロイド「皆無事だな？」

キャロ「ロイドさんは大丈夫なんですか！？」

ロイド「まあ、まだ本調子じゃないけど対応できない訳じゃないな！それにしても、間に合ってよかったぜ！！」

ティアナ「あ、ありがとう……／／／／／／」

ロイドが尻餅を付いているティアナに手を貸して立ち上がらせる。彼の手を掴んだ時、意外と大きなロイドの手に少しばかりドキッとしたティアナ。それを見たスバルはニヤニヤと笑う。

スバル「あれあれ～？ティア、顔真っ赤～♪」

ティアナ「なっ／／／／／／！？うっさいわよ、バカスバル！！べ、別に赤くなんかないわよ／／／／／／／！！」

ロイド「ティアナ、風邪か？無理はすんじゃねえぞ？」

ティアナ「うっさいわよ！！何でもないっての！！」

ロイド「……なあ、何で俺は怒られたんだ？」

エ・キ「「あ、あはははは……」」

スバルにからかわれて顔を真っ赤にして怒る彼女を風邪と勘違いして心配するロイド。それに何でもないと怒鳴る彼女に何故怒られたのかと首を傾げるロイド。何故怒られたのかを問われエリオとキャロは苦笑いするしかなかった。

そこに、先程よりも大きな気配が感じられた。視線をその方向に向けると、木よりも高い……二足歩行の巨大なモンスターが此方に接近していた。全長は五十メートルはいくだろうか、頭部がドラゴンの様で胴体は鱗でなく人の皮膚の様に柔軟なものでその背から炎が噴き出ている。

ロイド「みんな、バルドとフェイトが儀式を終えるまで絶対にこれ以上は行かせる訳にはいかねえぞ！！」

エリオ「はい！！」

キャロ「いくよ、フリード！！」

フリード「キュクルー！！」

スバル「ティア、行けるよね？」

ティアナ「当たり前よ！！スバルこそ遅れるんじゃないわよ！！」

モンスター［アグルアアァァァァァァァァ！！！！］

咆哮を上げるモンスターがその大きな口を開き、そこから灼熱の炎を火炎放射の如く吐き出す。
全員散開してそれを避ける。少し離れていてもその熱が焦がすかのようにチリチリと肌に突き刺さる。

エリオがフォトンランサーでその胴体に当てる。だが、その魔法を食らっても殆ど反応がない。キャロがアルケミックチェーンで両腕と両脚を拘束しようと試みるが、巻き付いた途端に力尽くで引き千切られる。モンスターはエリオ達を無視して一番気配の強い者、ロイドに向かってその巨木の様な拳を振り下ろす。それを上に飛び上がり回避してその腕に飛び乗り駆け登っていく。その彼を追い払おうと背から炎が噴き出し、それが意思を持つように姿を変え狼の様に変貌しロイドに向かって飛び掛かった。

ロイド「させるかよっ！！」

しかし、彼はそれを両断し、回避して突き進む。炎では止められないと判断したモンスターはロイドに反対の拳を横から打ち出す。ロイドは、足場にしている腕からジャンプしてそれを回避する。そこに、タイミングを計らってウィングロードで駆け昇るスバルとティアナが隣に来た。

ティアナ「行くわよ！！」

ロイド「おうっ！！」

そのウィングロードからティアナがジャンプし、ロイドの方に落ちる。ロイドは姿勢を切り替え、右手のエターナルソードを水平にしてティアナをその剣の腹に着地させた。そのままロイドは、彼女が足に力を込めたのを見計らい彼女を乗せた剣を思いっきり振るう。

ロイド「おりゃあああああぁぁぁぁぁぁ！！！」

ティアナがそれを同時に跳躍、剣を振るった時の力と彼女の跳躍力が合わさり、ティアナは大ジャンプした。その高さはモンスターの顔の目の前まで届いた。素早く彼女はクロスミラージュを構える。

ティアナ「クロスファイヤー、シューートッ！！」

モンスターの顔面にティアナの魔力弾が殺到する。それは、効いたのか若干顔を仰け反らせる。怒りで目を輝かせたモンスターがティアナを狙って反撃の拳を放つ。
しかし、それはスバルがティアナをウィングロードに乗せて飛んで行った事で空振りした。その腕の影から飛び上がる二つの人影……

ロ・エ「「うおおおおおぉぉぉぉぉぉ！！！！」」

ロイドとエリオだ。二人が隙だらけの顔に向かって斬撃を入れる。
今度は大きく仰け反って頭を何度も振るっている。その二人を狙っ

て炎が放たれ追跡する。二人は飛行してそれを上手く掻い潜って分散、その炎をティアナが魔力弾で相殺、スバルがディバインバスターをキャロがフリードにブラストレイを撃たせる。二人の攻撃は直撃して踏鞴を踏むモンスター。

ロイド「エレメントソード、属性変更、氷！！」

エレメント［御意……］

刀身が白く変化し冷気が白い帯を作る。モンスターが背の炎を再び放ちロイドに仕掛けるも、彼はそれをエレメントソードから空気をも凍らせる衝撃波を放ち炎自体を凍らせた。天使の翼が羽ばたき頭上でロイドが剣を高く振り上げる。

ロイド「魔神氷連斬！！氷凰烈破！！」

剣から低温の衝撃波が複数放たれる。それが、相手に直撃し、当った場所から凍らせた。
更に背後に瞬時に回り込み氷で出来た鳳凰を放つ。それが炎を噴き出す背に当り、氷漬けにする。
背中の武器を使用不能にされて暴れるモンスターだが、キャロが再びアルケミックチェーンで今度は足を何重にも縛り動きを封じ、地上からティアナが正確に相手の頭部を魔力弾で攻撃する。そして、スバルがウィングロードを駆け抜けて拳を強く握って振りかぶる。

スバル「ディバイィィィン、バスタアァァァァ！！！！」

全力の拳が相手の胸を捉え砲撃が放たれる。暫しの静寂が訪れたが、モンスターの体がゆっくりと後ろに傾き、地面を揺るがせて倒れた。

スバル「な、なんとか倒せた……」

ティアナ「一体で此処まで疲れるなんて、何て体力があんのよ……！！」

フリード「キュク～～！！」

キャロ「皆さん、まだ来ます！！」

膝に手を当て、地面に落していた視線を持ち上げて前を見ると、同じ様なモンスターが続々と接近しているのが見えた……。

エリオ「ま、まだあんなに……！？」

ロイド「皆、大丈夫か？無理だったら俺が抑えるけど……？」

スバル「大丈夫だよロイド！！」

ティアナ「ええ、私達はまだまだいけるわ！！」

ＦＷ陣はその申し出を断った。ロイド一人にやらせる訳にはいかない。仲間としてロイドを精一杯フォローしなくてはいけない。それに、此処で音を上げてしまえば使徒と渡り合う事など到底不可能だ。ＦＷ陣の決意を感じ取ったロイドは、それをニッと笑って承諾する。ただ、問題はある。……ティアナの事だ。彼女は飛行が出来ないという事を本人から聞いていたが、彼女が自力で飛行できるようになれば、戦略の幅は大幅に広げる事が出来る。

ロイド（リリスに頼んで今度何か取り寄せてもらうか……）

そう考えたあと思考を切り替え、ロイドは巨大モンスターの群れに向かって翼を羽ばたかせて突撃して行った。

---

仲間達が必死の防衛線を行っている中、フェイトとバルドの儀式は続いていた。

フェイトは長い時間バルドの血を吸い続け、彼の肩の傷が消え始めたので口の中に残された血を嚥下する。

フェイト「んく……ぷは……」

バルド「ふぅ～……」

互いに口を離す。フェイトの項（うなじ）には二つの小さな穴があり吸血の後を物語る。
そこから血が滲みだしたが、バルドがその傷を舐める。

フェイト「んんっ……」

くすぐったい感覚にフェイトは艶っぽい声が漏れる。バルドが口を離すと二つの吸血痕は残っていたが血が止まっていた。

バルド「フェイト、体に違和感はないか？」

フェイト「うん……大丈夫d――」

体に異常を感じられないのでフェイトはそう答えようとしたが……

――ドクンッ！！――

フェイト「ぐっ、があ、あああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

あああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

突如、体の奥から言い様のない感覚にフェイトは声を上げた。

まるで、体の奥底から何かが膨れ上がる様な、圧迫してくる様な感覚、それと同時に自分の体が周囲から何かを取り込む様な感覚と、自身の魔力がそれと同じくして外に押し出される様な感じがした。それと共に起きる激痛が彼女に襲いかかる。そして、彼女の体から金色の魔力が溢れ出てそれが周囲に雷となって拡散し森を焼く。

バルド「フェイト！？くそっ、やっぱり始まったか！！」

フェイト「あああああああああ！！くっ、くあああぁぁぁぁ……。うあああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

バハムート［フェイトさんから闇の力が……！？］

ケルベロス［ヤバいぜ相棒！？このまま嬢ちゃんの魔力の放出が治まらなかったら、嬢ちゃんがアンデッドになっちまう！！］

バルド「分かってる！！フェイト、魔力を自分の体内に閉じ込める様にしろ！！！抑え込まないと、お前は闇に堕ちるぞ！！」

フェイト「あああああああ、くうぅぅ……うあああああ！？」

バルドが彼女の肩を掴んで声を上げて語りかけるも、彼女には聞こ

えていないのか悲鳴を上げて痛みに悶えている。バルドは彼女を抱きしめる。力の限りギュッと抱きしめ、自分ごと周囲に障壁を張る。アンデッド化を抑制する為の抗体術式を練り込んだその魔法陣が出現する。フェイトの魔力がそれに当り弾かれる。だが、何度も当る事でその魔法陣をも破壊してフェイトの魔力が変化して雷になったものはその障壁を破って外に放出された。

ケルベロス［やっぱ急ごしらえの抗体術式じゃ相棒の闇の力を抑えきれねえか！？］

バルド「くそっ！！」

バハムート［フェイトさんの体内に入った若の闇の力が増大してます！！このままでは危険です！！］

その雷は周辺で戦っているなのは達の方にも飛んで来た。

なのは「きゃあ！？」

クラウド「雷と同エネルギーの反応を確認、フェイトとバルドの方だ……」

全員がフェイトの方を見ると、彼女から凄まじい魔力が放出されていてそれが変化して雷になって周囲に放出されている光景があった。

その雷は無差別に広がり森や大地を砕き、モンスターをも焼き殺した。

はやて「フェイトちゃんは如何したんや！？」

ガルド「不味いな。魔力の放出が酷い……」

なのは「一体如何いう事なの！？」

セフィリア「あれは、アンデッド化の予兆です。アンデッドに必要なのは闇です。今のフェイトはアンデッド化が進んでいて周囲から闇の力を取り込んでいて、それが彼女の本来の魔力を外に無理やり押し出してるの！！このままフェイトが魔力を全て体内から放出してしまったら完全なアンデッドに変貌しちゃう！！」

コレット「何とかならない！？」

ガルド「無理だ。あの儀式は二人だけのもの、何人も入る事は許されない。フェイト自身があの闇に打ち勝つしかない！！」

その会話をしている所にモンスターの群れが襲いかかる。なのは達は散開して回避する。

なのはに向かってトカゲの頭を持った、人型のモンスターが襲いかかる。

面倒なのでこれからは『リザードマン』と呼ばせて貰う。

なのは「くっ！？」

自分の喉元目掛けて振るわれる刃を紙一重で避ける。直ぐにレイジングハートをブレードモードに切り替え横に一閃、それはしかしバク転されて避けられた。別のリザードマンが跳躍して上から斬りかかる。それを受け流し、弾いて斬り伏せて直ぐにしゃがむ。その上を背後から来た別の一体が直後に刃を振るった。空振りしてがら空きになったそれを魔力弾を当てて吹っ飛ばす。更に複数体のリザードマンがなのはに迫って来た。

なのは「邪魔、しないで！！ブレードバスター！！」

なのはの砲撃が放たれる。砲撃は、剣の様な形に変貌して大地を斬り、粉砕しながらリザードマンの群れに飛ぶ。幾つかが巻き込まれてその奔流にのまれたが数体が回避する。

なのは「はあぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

なのはがレイジングハートをそのまま横に振るった。砲撃はそれに従う様に動き、避けたリザードマンどころかその周辺にいたモンスター達を巻き込んで行った。森諸共彼女の砲撃は前方にいる多くのモンスターを一度の砲撃で薙ぎ払ったのだ。

だが、彼女の砲撃を大型のモンスターは耐えきる。そして、隙が出

来た彼女に向かってその大きな口から火炎放射を放つ。避けきれないと判断し、前方にプロテクションを張りそれを防御する。更にモンスターは背からも炎を放ちなのはに集中させる。

なのは「くっ！！」

執拗な攻撃になのはの表情が険しくなる。徐々に押され始めなのはの体が後ろに下がり始めた。このままでは弾き飛ばされる。と思ったその時だ、モンスターに向かって砲撃が直撃する。その衝撃で攻撃を中断して踏鞴を踏み怒りを纏わせながら自分を攻撃してきた敵を睨む。

そこには、モンスターにライフルモードにした干将・莫邪の銃口を向けているクラウドがいた。

クラウド「ターゲットを破壊する……」

背中にバーニアをふかして動くクラウド。その彼にモンスターは背中から炎を出しそれが蛇となって彼に襲いかかる。しかし、クラウドはその攻撃を絶妙なタイミングで体を逸らして回避してビームを放って破壊する。その彼にモンスターは拳を打ち出すが、白い翼を大きく羽ばたかせて真上に飛翔しそれを回避、そして干将・莫邪を合わせて照準を合わせる。

クラウド「エネルギー充填、１２０パーセント。ターゲット、照準（ロックオン）

！！……破壊する」

エネルギーが集束し、銃口から火花がバチバチと音を立てる、そして轟音を立てて巨大な光が放たれそれがモンスターを呑み込んだ。そのまま、閃光は地面を抉りながら遠くまで飛んで行き大爆発を起こして周辺を呑み込んだ。地面が紅く光り、それが遠くまで及んでその先には大きなキノコ雲が立ち昇っていた。勿論、それを直撃したモンスターは跡形もなく消し飛んだ。

クラウド「敵の消滅を確認、次のターゲットを選定する……」

ファンネルを周囲に展開してクラウドはモンスターに突撃して行く。それに続いてティファもドラグーンで牽制しながら次々にモンスターを蹴散らして行く。ガルドが、パラディンランスを持ち、敵の攻撃を盾で防ぎながらそれで撃破して行く。セフィリアは五姫を召喚しそれぞれに指示を出し、自身も剣を抜刀して突撃を開始した。

セフィリア「前姫は前衛で敵を薙ぎ払いなさい！！後姫は後方で護身術式を展開、皆を守って！！赤姫は中衛で射撃と補助を！！蒼姫は赤姫の護衛を、黄姫は私と一緒にいくよ！！」

五姫はセフィリアの指示を頷き応える。

前姫は薙刀を振り回し敵を吹き飛ばし、後姫は前姫を背後から狙おうとしたモンスターを護身術で封じ、それを前姫が腰に挿した刀を

抜いて一閃して両断、赤姫が味方全体に攻撃力を上げる術を発動し援護射撃し、その赤姫を狙う敵を蒼姫が棘付きの盾で体当たりして串刺しにする。セフィリアが黄姫と共に突撃して神速の抜刀で一気に五体も両断する。黄姫は馬に乗った状態から突進してその槍を持ってして敵を蹂躙する。

ガルド「邪魔だ……！！」

ガルドが槍で一体を貫く。彼に同時に複数のモンスターが飛び掛かり刃を振るう。それを彼は自身の盾と原子で生み出した岩の盾で防ぐ。

ガルド「俺の守りを破るには……まだまだ足りん！！」

その巨大な槍を軽々と振るい自分の周りの敵を吹き飛ばす。原子を集め複数の槍を生み出しそれを水平に放つ。その槍は真っ直ぐリザードマンの群れを貫いた。

ガルド「全てよ、原子へ還れ！！アトミッククラップス！！」

ガルドが咆えると彼を中心にあらゆるものが粒子となり原子へと還る。それはモンスターとて例外でなく半径百メートルにいたもの全てが消えた。そして、その原子達を集めて一本の槍を生み出す。

ガルド「聖人殺し、運命の槍（ロンギヌス）！！全てを打ち貫け、聖なる槍よ！！！」

左手に持ちそれを前方に投擲、弾丸の様に猛スピードで放たれたそれがモンスターの群れの間を飛んで行く。それが飛んで行く周囲にいたモンスターはそれから放たれる強力な波動で分解されて消滅、その槍に貫かれたドラゴンも光に包まれて消滅していった。

カイン「壱の太刀、霞！！弐の太刀、朝菊！！」

一振りで無数の斬撃を起し敵を切り刻む。そして、背後を振り向き太刀を振るって三日月状の斬撃を無数に放つ。それは、モンスターを次々に両断していく。更にカインは足下に魔法陣を展開し呪文を唱え始める。

カイン「天光満る時に我はあり、黄泉の門開く所に汝あり、出でよ神の雷、インディグネイション！！」

天から銀の雷が落ち数多のモンスターを消し飛ばした。太刀を再び構え群れに肉薄、高速の剣術が敵の命を次々に刈り取る。複数の方向から同時に攻撃が来るがそれを雷切とサイフォスで全て弾き、両断する。

カイン「二刀流壱の太刀、小雀桜！！」

カインがその場で回転し一気に両方の太刀を振るう。彼の周囲に白い輝く刃が出現、それが破片になって散らばり周囲に拡散する。それはまるで桜の華吹雪の様に舞い踊り敵を切り刻んだ。

カイン「なのは、まだいけるか？」

なのは「うん、まだいけるよ……でも……」

心配そうに湖の方に目を映す。今すぐにでも親友を助けに行きたい。その思いが彼女を引っ張っているのだ。カインは、そんななのはの頭を軽く叩く様に撫でる。

カイン「心配すんな。フェイトなら大丈夫だ。バルドがきっとフェイトをアンデッドにはさせない筈だ」

なのは「……うん、そうだね。カイン君の言う通りなの！！バルドさんはきっとフェイトちゃんを守ってくれるの！！」

カイン「ああそうだ。だから、俺達は絶対に此処から先にモンスターどもを行かせる訳にはいかない。行くぞ！！！」

なのは「うん！！！」

なのはも頷いてカインと共にモンスターの進行を止める為に駆け出していった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

気が付いた時、フェイトは暗い闇の中に立っていた。

フェイト「此処は……」

周囲を見回すも辺りにあるのは闇、闇、闇、闇、闇、闇、闇、闇、闇、闇、闇、闇、闇、闇、闇、闇、闇、闇、闇、闇、闇だけだった。背筋を撫でるのは冷たい冷気、まるで自分の首に死神が鎌を当てているかのような言い様のない不安が彼女に襲いかかる。

兎に角、此処から抜け出さねば……。そう思って足を踏み出した途端、彼女の足は何かに掴まっているかのように動かなかった。

フェイト「え、な、何これっ！？」

もがく彼女、必死になって足を動かすがまるで動かない。足首まで

闇に呑まれていて動けない状態だった。その闇が徐々に昇って来る。足首だけだったのが、今では脛にまで来ていた。此の侭だと、闇に呑まれる！？本能的に理解したフェイトは無我夢中でその闇から抜けようともがく。そして、暴れる彼女の周囲の闇が波紋を生み出しその中から腕が伸びてきた。その後に顔が出てきてそれをフェイトは見た途端に息をのんだ。

フェイト「ひっ！？」

その顔は生気がなく青白い肌に骨と皮だけの体、そして口から生える二本の大きな歯。そう、闇に堕ちた人、アンデッド化した人間たちだった。

アンデッド［憎い……全てが憎い……闇は……世界を覆う……］

アンデッド［闇は、語る……。世界を見つめる……闇に…お前も、道連れ……］

アンデッド［生ある者、皆、闇に落とす……］

アンデッド［闇恐れし者、闇に呑み込む……。世界は、闇そのもの……。輪廻の先には、闇がある……。全ての種は、闇を知る……。お前も、闇の仲間へ……］

次々にフェイトに向かって伸ばされる腕、それが恐ろしくてフェイトは震える逃げたいのに足が動かせない所為で動けない。

だが、それが彼女に届く前に全ての腕が止まった。その手が震えている。

アンデッド［アアアア……ヤミガクル！！！］

アンデッド［スベテ、カエル。ヤミヘトカエル！！］

アンデッド［ヤミハ、セカイ。セカイハ、ヤミ！ヤミガアルカラ、セカイハマワル！！！］

アンデッド［オオイナルヤミヨ、セカイヲ、ノミコメ！！ナンジノ、ソンザイハ、スベテノシンリダ！！］

そう口々に言ってアンデッド達が闇に溶けて消えた。その代わりに闇の中から巨大な存在が現れた。白き純白の蛇の様な姿に腕が生えその頭部には十字に裂けた口に無数の紅く輝く目。その中には黒い六芒星があり更にその中に十字架がある。

フェイト「創造の獣……「そう、あの人のもう一つの姿、銀河を、宇宙を、世界を見守る存在」っ！！」

その声に横を向くと何時の間にか隣にはフィフが立っていた。

フェイト「フィフ！？」

フィフ「フェイト、貴方は今、あの人を畏れましたね？」

それにビクッと体が震える。確かに自分はバルドのもう一つのあの姿を見て畏れてしまった。その身から溢れる絶大な魔力と闇の波動、全ての生命を闇に還す大いなる力を感じてしまいフェイトは畏れれてしまったのだ。

創造の獣「ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛゛！！！」

フィフ「彼を……私の大切な人を、否定しないで」

フェイト「っ！！」

フィフ「怖がっては駄目、あの人は何時も一人だったんだよ……。生まれた時からあの人はずっと一人だった。両親があの人を愛していたなんて嘘、ホントは怯えながら育てていた。成長して、いずれ自分達に牙を向けると怯えながら……。あの人も何となくそれは分かっていた。だけど、それでも自分を認めてもらいたくてあの人は何でもやったって言ってた……」

フェイト「それじゃあ、バルドがイモータルになった原因って……！？」

フィフ「そうだよ。実の両親に、肉親に殺されたからだよ……」

その言葉にフェイトは息を呑んだ。実の両親に殺されるなどどれ程辛い事か…。例え周りが敵視しても味方でいてくれる筈の親に刃を向けられた時の彼を想像してしまい、思わず涙が零れた。

フィフ「私にはもうあの人を抱きしめて、人の温もりを与える事が出来ない。あの人に温もりを与えられるのは、もう貴方しかいないの。あの人に再び、人の温かさを教えてくれた貴方に……」

フェイト「わ、たし……？」

フィフ「貴方に出会ったからあの人はもう一度、人を信じる事が出来た。私も、貴方があの人を、バルドと一緒なら嬉しい」

フェイトの懐から鎖の無くなったペンダントがひとりでに出てきた。それが開く。そこから淡い光が毀れて周囲を優しく照らす。それと同時にフィフの体が徐々に薄くなり始める。そして、光が闇を照らし始めた。フェイトを呑みこもうとしていた闇が徐々に降下していき、遂に消えてフェイトは自由の身となる。

フィフ「フェイト、彼の全てを本当の意味で受け入れて。闇を恐れてそれに呑まれては駄目、私達は常に光と闇が合わさるこの世界に生きている。光だけを求めてはいけない、世界はこの二つがあるから今がある。私達は生かされているんだ。恩恵の光、安息の闇……、この両者があるから命は育まれる、星は生れて、死んで再び目覚め、繰り返す。貴方が愛している人はそれそのもの。だから、恐れないで全てを愛してあげて……貴方になら出来る。捻じ曲げられた運命は、貴方自身で元に戻すんだよ」

フェイト「フィフ!?待って!!」

フィフ「お願い、私の愛した、最愛の人をこれからも、ずっと……！！」

目を瞑る程の光が全てを包み込み世界が白に染まる。光が治まった時には闇一色だった世界は白い空間に変貌していた。フィフの姿はなく、目の前には創造の獣の姿をしたバルドだけがいる。その目は先程まで真紅の瞳だったのが今は月の様に美しい金色の目をしていた。二人の間には二人の思い出のペンダントが浮いている。それをフェイトは手に取り両手で包んで胸のところまで持って来る。

フェイト「バルド……」

創造の獣「……」

その巨大な姿がフェイトに向かって進む。そして、目の前まで来てその顔を近づけて来る。十字に裂けた口が少し開くだけでそれはフェイトを易々と呑み込む事も可能だ。ギュッと手の中にあるペンダントを包み込むように握る。彼女は今度は恐れない、逃げない、怯えない。目の前にいるのは孤独な時間を永遠とも言える程に生き続けた愛する者。幼き頃、孤独だった自分に友達が、仲間が出来るきっかけをくれた人……。今でも変わらない、この胸の奥から溢れる熱い想い、自分の最も愛する最愛の人……。

創造の獣「ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛！！！！」

目の前で大きく口を開きその向こうにある深淵が見える。声の衝撃波がフェイトの髪を棚引かせる。肌を突き刺すような膨大な魔力と闇の力が彼女を呑みこもうとする。だが、それでもフェイトの目から恐怖の色は出ない。ただジッとバルドの目を見つめるだけだ。

フェイト「バルド、私は貴方が好き。例え貴方がどんな存在でも、私は恐れない、逃げない、目を逸らさない。私は、貴方が、バルドがずっと大好き。…ううん、愛してる！！」

フェイトの体が光に包まれる。そして、彼女はバルドに近づきキスをした。

その瞬間、目の前のバルドは、創造の獣は闇の粒子となり、彼女の放つ光と闇の粒子が天高く昇る。二つの相反する存在は、光と闇は、混ざり合いフェイトの体に取り込まれた。

光と闇（フェイトバルド）は今、完全に繋がれ、世界は闇と光が混ざり合う。
その不思議な世界は闇と光の閃光が包み込んでいった。

――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――

抱き締めていたフェイトの魔力の放出が突然止まる。そして、彼女から感じられるのは魔力と……闇と月の力。

バルド「フェイト……？」

フェイト「バルド、私は闇に呑まれない。私は闇と一緒にバルドと歩み続ける！！」

フェイトの髪が風がないのに揺れ、同時に髪が淡く月の光を纏ったかのように輝き魔力が溢れだす。その中には闇と月の力を感じ取った。その事にバルドは驚いた顔をするが、直ぐにフッと笑い右手にケルベロスを肩に担ぎ、バハムートを反対の手で持つ。

ケルベロス［よお、相棒に嬢ちゃん！！体調は如何だい？］

フェイト「うん、何時も以上に力が湧き上がるよ！！」

バルド「まあ、吸血して体調が悪いなんて事はまずねえな。力が有り余るほど回復したぜ！！」

バハムート［では、皆さんを助けに行きましょう］

ケルベロス［いや～、嬢ちゃんには驚かされるぜ！闇と共に歩もうだなんて流石としか言いようがないね！！］

ババムート［二人ともおめでとうございます］

フェイト「ありがとう、ケルベロス、ババムート！！」

バルド「それじゃあ行こうぜ、フェイト！！」

フェイト「うん！！バルディッシュ、セットアップ！！」

バルディッシュ［イエス、サー！！］

フェイトを光が包み込む。バリアジャケットが彼女の身に纏いハーケンフォルムを形作る。しかし、彼女のバリアジャケットは今までと少し違っていた。その身に纏っていた白いマントが変化して純白のまるで吸血鬼の翼の様なものに変貌していた。

バルド「遅れるなよ？」

フェイト「バルドこそ、付いてきてね？」

互いに不敵な笑みを浮かべる。そして、同時に飛び上がると一瞬で姿を消し、金と漆黒の残光がなのは達の下に向かって飛んで行った。

その頃なのは達は、敵の数に徐々に押され始めていた。残りの魔力も少なく、戦闘の殆どが今ではロイド達がカバーする様な形になっている。

カイン「なのは、無理するな！！」

なのは「ううん！！私はまだ大丈夫なの！！」

そうは言うが顔には珠の様な汗が浮いていて呼吸も荒い。回りを見れば、はやて達も息を切らしていてロイド達やエリス、クラレンスが殆ど防御に回っている様だ。

エリス「もう、遊び相手が多過ぎるよ～♪クスクス♪」

クラレンス「クスクス♪これはかなり不味いんじゃないかな～？」

ジーク「お前達、遊んでないで体を動かせ……」

シグナム「まだいけるか、ジーク？」

ジーク「ああ、問題はない……ただ、傷が開いた……」

シグナム「なにっ！？何故それを早く言わなかった！？」

ジーク「い、いや……まだ、問題はないとおｍ――「その油断が命取りなんだこの馬鹿者が！！」うむ…すまない……」

リリス「いやはや、すっかりシグナムはジークの師匠に戻った様な気がするのですよ、おっとっと……」

ロイド「リリス、あとどのくらい敵はいるんだ！？」

リリス「ほいほい、あと三十体はいるですよ～」

コレット「ロイド、前からドンドン来るよ！？」

ガルド「不味いな、なのは達は厳しいだろうな。援護に回るぞ、セフィリア！！」

セフィリア「うん、分かった！！」

クラウド「全員に通達、上空から無数の敵を確認……数は十五だ」

はやて「嘘やろ！？もううちの魔力はすっからかんに近いで！？」

シリウス「うわ～、幻体がやられた。こっちに増援きそうだよ。ザフィザフィ、援護よろ～」

ザフィーラ「お前は少し緊張感を持って欲しい。あと、私はザフィーラだ……」

ヴィータ「あぁもう数が多過ぎんだよ！！この野郎！！！」

シャマル「はやてちゃんは下がって此処で私が抑えます！」

アイネ「シャマル、私も手を貸す！！」

スバル「うわわっ！？」

ティアナ「少し前に出過ぎよ、バカスバル！！」

エリオ「キャロ後ろ！！」

キャロ「フリード上昇して！！」

フリード「キュクル～！？」

ティファ「ＦＷ陣の防衛ラインが後退しているのを確認……。援護に回ります……」

状況が悪化して大混乱だ。敵味方入り乱れる中で、なのはにモンスターが襲いかかる。

なのは「アクセルシューター、シュート！！」

無数の魔力弾が敵に向かって放たれる。それを、リザードマンは地を蹴って跳躍、追跡する魔力弾を真空波で破壊した。

なのは「ディバイン、バスターー！！！」

だが、空中にいる事で回避の出来ないモンスターは次に来たなのはの砲撃を諸にくらって轟沈する。ホッと息を吐いたなのは。

しかし、

レイジングハート［マスター、後ろです！！］

なのは「えっ……！？」

振り向くと別の一体がなのはに向かって飛びかかろうとしていた。
鋭利な刃が彼女に迫る。回避も防御も間に合わない！！

その刃がなのはの喉元に迫って来る。覚悟を決めたなのはだが、その時目の前に金の閃光が一瞬通り抜けると同時にモンスターの姿も消えた。

残っている魔力から親友の魔力を感じ取った。

なのは「今のは……フェイトちゃん！？」

フェイト「間に合って良かったよ。大丈夫だった、なのは？」

微笑みながらフェイトが振り向く。

そう、そこにはフェイトがモンスターを吹き飛ばして立っていた。
そして、フェイトの姿を確認した六課陣が見て驚く。普段の彼女のバリアジャケットの一部が変化していて魔力の他に別の力も感じ取れたからである。そして、彼女の髪が淡く、まるで月の光を帯びて

いるかの様に光り輝いていたのだ。その美しさたるや周りの者達が見惚れる程だった。

なのは「フェイトちゃん、大丈夫なの……？」

フェイト「うん、儀式は成功したよ。あとは、此処から撤退するだけ！！」

バルド「フェイト、退路を作るぞ！！」

フェイト「うん！！！」

バルドもフェイトの隣に現れる。そして、同時に動き出した。バルドが一瞬で右側の敵の軍勢に接近しバハムートとケルベロスを振るってモンスターを薙ぎ払う。

バルド「全力で行くぞ！！魔王地顎陣！！」

バハムートに闇の力を込めて一気に地面に振り下ろす。そこを中心に地面が割れ、そこから岩塊と漆黒の溶岩が噴き出す。
その溶岩はモンスターを呑み込み、半径二百メートルの敵を大地諸共一瞬で焼き殺した。その漆黒の溶岩の中をバルドは平然と立ち、地を蹴り上空に集まり出した鳥の様なモンスターを二振りの大剣で薙ぎ払う。

フェイトも左側の軍勢を縫うように飛びながら高速でバルディッシュを振るって両断する。その速さはソニックムーヴでも使用してるかのように目にも止まらない速さで、モンスターは視界に捉えきれずに斬られていた。

フェイトは一気に上空に飛び上がり地上を見下ろす。彼女を仕留めるべくリザードマンが跳躍してくる。

フェイト「ヴァジュラランサー、ファイヤー！！！」

彼女の周りに雷が槍となって出現し一斉に射出される。それを回避できずにそのリザードマンは撃ち抜かれて轟沈した。更にフェイトの攻撃は続く。地上にいるモンスターと上空から襲いかかろうとしたモンスターに一瞬でバインドを掛けた。そのバインドはライトニングバインドの強化魔法『ヴァジュラバインド』でその強固なバインドはモンスター達の動きを完全に封じた。

フェイト「バルディッシュ、久しぶりに使うけど大技いくよ！！」

バルディッシュ［イエス、サー。遠慮なくどうぞ！！］

フェイトの上空に今までにない大きさの魔法陣が出現する。更にそこから無数のスフィアが現れる。そこからは、火花が散り、雷が迸っていた。その光景を見てなのはは十年前を思い出した。

なのは「フォトンランサー・ファランクスシフト！？」

エリオ「えっ、あれが母さんの最大の魔法ですか！？」

なのは「うん、でも……昔のと違う！？前よりも凄いかも！？」

ロイド「うわっ！？雷が落ちてきた！？」

カイン「こいつは不味いぞ！？皆後退しろ！！」

普段の彼女からは有り得ない程の魔力が溢れ、それが雷に変化して周囲の地上に落ちてくる。大気が振動して轟音を上げている。

フェイト「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、閃光を従えし雷神、今導きのもと降り注げ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。ヴァジュラランサー・ファランクスシフト。撃ち破れ、ファイアーーーー！！」

生成されるスフィアはなんと７８基！！　そこからヴァジュラランサーの斉射が開始された。地上に降り注ぐヴァジュラランサーがモンスター達を呑み込む。それが８秒継続して砂塵が空高く舞い上がった。その無慈悲な攻撃の雨を見て全員唖然としていた。

シリウス「うわ～～、何ともえげつない攻撃……」

スバル「今、フェイト隊長…何発撃ち込んだ？」

ティアナ「分かる訳ないじゃない、あんな弾幕見た事もないわよ！？」

はやて「なのはちゃんは昔あれくらったんかいな……」

なのは「ううん、私がくらったのよりもずっと多いの！？」

リリス「計算出来たのですよ～。今のフェイトが使った弾幕数は、スフィアの数７８基にそこから毎秒１０発の弾幕が八秒間継続したのですよ～。つまり、合計６２４０発の弾幕が敵陣に降り注いだ訳です！！いやはや、なんとも凄まじいですの～」

合計６２４０発……あまりにも膨大な弾幕数に全員が唖然とした。

ガルド「あの力……やはり間違いないな」

エリオ「ガルドさん如何いう事ですか？」

ガルド「フェイトから感じられる魔力とは別の反応、これは闇と月の力だ……」

キャロ「それじゃあ、お母さんはアンデッドに！？」

ガルド「いや違う……。フェイトは、『吸血鬼（ヴァンパイヤ）』に…いや、『イモータル』になっている！こんな事例は今まで見た事もない」

嘗て、この術式を編み出した『始まりの神（ファースト）』と結ばれた人間ですら永遠の命を得ただけに終わったものをフェイトは更に闇の一族の力も得てしまったのだ。この事には、流石のガルドも驚きを隠せないでいた。

両サイドのモンスターの群れが二人だけで一掃され残るは中央にそびえる、たった一体……。

その大きさは百メートルもあり大気を震わせる咆哮を上げる。その前にフェイトとバルドが立つ。

バルド「さて、残るはこいつだけだ」

フェイト「一気に行くよ、バルド！！」

二人が同時に跳躍、二人を蹴散らすべくその巨木の様な腕を振るってくるが高速移動でそれを回避する。バルドが敵の顔に火球を生み出して放ち牽制し注意を自分に向けさせる。フェイトは直ぐにライオットフォームへ切り替える。切り替わっても背にある羽は消えず残った。フェイトは魔力を刃に通すと刀身が巨大化、それを一気に振り抜いた。その一振りで巨木の様な腕が斬り落とされた。

それに雄たけびを上げて怒りを露わにしフェイトに向かって拳が放たれるがその前にバルドが現れてケルベロスを振り上げた。それによって拳は軌道を逸らされ、そこに素早くバルドはバハムートを振るって残りの腕をも斬り落とす。

バルド「これで決めるぞフェイト！！」

フェイト「うん！！」

バルド「ケルベロス、２ｎｄフォルム！！」

ケルベロス［ヒーハーー！！派手に踊ろうぜ！！］

バハムートを消して代わりにケルベロスをフォルムチェンジさせて両手に『一対の燃える剣（コラーダとティーソン）』を持ち、フェイトと共に動き出す。二人は左右に飛んで相手を撹乱させる。そして、瞬時に敵に接近し交差する様に敵を斬る。

何度も何度も超高速で交差して攻撃を加えられた事で巨体が徐々に浮き上がる。

徐々にその速度も上がり、月夜に黒と金の閃光が幾重にも交わる。

そして、二人は同時に空高く舞い上がる。その時モンスターの眼には、満月の光を背に光り輝く髪を棚引かせて舞う、女神が……いや、月下美人が映し出されていた。バルドとフェイトは刃に魔力を通し、雷と炎を纏わせる。

バルド「これで終わりだ、行くぞフェイト！！」

フェイト「うん！！複合奥義……！！」

フ・バ「「スカーレット、インフェルノ！！！！！」」

二人が同時に弾丸の如く急降下。そして、敵に向かって得物を振るう。同時に炸裂した炎の剣と雷の剣が敵を裂く。二人が地に着地し、

残った炎と雷が交わり紅い閃光が周囲を照らす程の大爆発を起こした。

バルド「初めてにしては、いい感じだな、フェイト」

フェイト「えへへへ♪」

迫りくるモンスターを全て打ち倒し互いを見て微笑む二人。

その姿は月夜にとても映えていた。

## 第六十二話（後書き）

新魔法　ヴァジュラランサー・ファランクスシフト

フェイト最大最強の広範囲殲滅魔法ｏｒ一点集中殲滅魔法の二つの特性を持つ魔法。

スフィアを７８基生成してそこからフォトンランサーの強化魔法『ヴァジュラランサー』を毎秒１０発の弾幕が八秒間続く。合計弾幕数は、驚異の６２４０発という敵から見れば悪夢のような弾幕が来る。

詠唱も若干長くなるだけであまり変化がないのが特徴、掛け声は

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、閃光を従えし雷神、今導きのもと降り注げ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。ヴァジュラランサー・ファランクスシフト。撃ち破れ、ファイアー！！」

遂に契約を完了す！！そして、フェイトさんはなんと『イモータル』の力を得た！！

ガルド「何故、フェイトをイモータル化させようとしたんだ？」

いやさ、フェイトさんを見るとさ、何となくだけど……吸血鬼になってもめっさ似合うように見えんだよ！！

カイン「それだけ？」

いや、それだけじゃないけどさ。でも、作者的にはこれが一番強かったからフェイトさんをイモータルにしちゃったぜ！！

クラウド「次回は如何するんだ？」

次回は、またグダグダになるんじゃないですか？

お気に入り登録して下さった皆様、ありがとうございます！！これからも、駄作者ことテッテルは益々頑張りますよ！！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第六十三話（前書き）

六十三話更新！！

ロイド「今回はどんな内容なんだ？」

今回は、『イモータル化』したフェイトさんの簡単な説明とかを書いてみました。
相変わらずの駄文ですが……。

シリウス「最初の頃と比べると随分と文章増えたよね～？」

カイン「駄作者故の実力か……」

否定できないところが悔しいです！！！（´；Д；、）

では、本編をどうぞ！！

# 第六十三話

ルナサイトから何とか脱出し一同は六課に戻って来た。

フェイトは今、ケルベロスとバハムートの前に座っている。六課に帰ってきても未だその金の髪からは淡い光がまとっている状態だった。彼女の隣にはエリオとキャロがいて同じく真剣な表情で話を聞く姿勢を見せている。

ケルベロス［さて、嬢ちゃんは無事、相棒との『血の契約（ブラッドエンゲージ）』を成功させた。そん事についてはおめでとうと言っておくぜ］

フェイト「ありがとう、皆がいたから私は成功したんだよ」

バハムート［いえ、フェイトさんの強い意志があったからこそ儀式は成功したんですよ］

エリオ「あの、如何して僕達も呼ばれたんですか？」

ケルベロス［それはだな、実は嬢ちゃんは今回の儀式で何の因果か『イモータル』になっちまったんだよ］

キャロ「えっ！？お母さんが！？」

バハムート［正確には完全な『イモータル』ではありません。人とイモータルの両方の力を持つ者、『半イモータル』になる事が出来ると言った方が正解ですね］

ケルベロス［嬢ちゃん、意識を集中させて体の奥で湧きあがるものに蓋をする様にしてみてくれ］

フェイト「わ、分かったよ」

フェイトは一度眼を閉じて意識を集中させる。すると、体の奥底で何かが湧きあがっている様な感覚が感じ取れた。それに、蓋を被せる様に意識するとそれは塞がり再び目を開けた時にはフェイト髪を包んでいた淡い光が消え月と闇の力も同時に無くなり魔力だけしか感じられない、普段の彼女に戻っていた。

ケルベロス［嬢ちゃんは、人の姿から『半イモータル』の姿に変化できる所謂『イモータル化』ってのが今後出来る筈だ。まあ、普段はそれは隠して戦った方がいいな。そこで、だ……。嬢ちゃんには、イモータルとは何ぞやって言う事を簡単に話す。それはエリオの坊ちゃんもキャロ嬢ちゃんもしっかりと聞く様に］

エ・キ「「は、はい！！」」

バハムート［まず、フェイトさんは人間であり、イモータルでもある『半イモータル』と成りました。それはつまり、フェイトさんの体内時計の停止を意味します］

ケルベロス［嬢ちゃんはこれから緩やかに人間としての成長が止ま

って、それ以降は歳をとらない、所謂、不老の存在になった訳だ。
それと、嬢ちゃんは吸血行為をする必要はないぜ。相棒と契約を交わすって事は常に相棒から力を供給されている状態って事になる。
まあ、これは魔力じゃなくて月と闇の力の事だ。成り立ての嬢ちゃんはまだ完全に力を操れる訳じゃないから『イモータル化』は万が一の時以外は極力控えた方が良いぜ」

フェイト「ねえ、私は『イモータル』に近い存在になっちゃったんだよね？それじゃあ、私はもう日中は歩けないの？」

ケルベロス「いんや、そうとは限らねえぜ。元は人間の嬢ちゃんは、スペックが人間だからな。多分こっちの方が性質上強い。だから、日差しが強い場所で『イモータル』になっても何ら問題はねぇぜ。
まあ、此処が『半イモータル』の強い点だな。それに、夜間の力も跳ね上がるって事も重要なとこだな。嬢ちゃんは夜間はこれから体の治癒能力が段違いに上がる。月があれば掠り傷程度ならものの数秒で完治できる筈だ。まあ、骨折とかは最低二日、三日間以上は掛かるだろうけどな。身体能力も僅かばかり上昇してる筈だぜ？つっても、１００メートルを三秒で走れるなんて特殊な能力じゃなくて、昔より少し速くなれるって言う程度だけどな」

バハムート「ですが、フェイトさんには一つやって貰わねばならない事があります」

フェイト「え？それは……？」

バハムート「確かにフェイトさんのお陰で若は命を救われました。ですが、それは命を拾っただけ……。本来の若に戻るには途方もない力が必要です。そこで、フェイトさんには定期的に若の吸血を受けて貰いたいのです。『イモータル』には闇と月、そして…血が必

要なんです。『イモータル』の主食は本来は血であり、若やガルドさんは皆さんと一緒に食事を摂ってはいますが、それは本来あまり効果的な栄養の摂取ではないんです。『イモータル』にとって人の血こそが最大の食事であり、最も効果的な栄養の摂取方法なんです」

キャロ「で、でもそんな事したら……お母さんは…」

ケルベロス「心配すんなってキャロ嬢ちゃん。嬢ちゃんは相棒と契約を結んだ。これからは血を抜かれても『アンデッド化』なんかはもう起こさねえよ。まあ、貧血を起こすかも知れねえけどな……。そこは、相棒と相談して摂取量を決めておけ。それと、嬢ちゃんの首筋に付いたその傷はもう消えねえからな」

フェイト「えっ!?なんで!?」

フェイトの項（うなじ）にはバルドに噛みつかれた時にできた牙の痕が残っている。
それが消えない事に少しばかりビックリするフェイト。

ケルベロス「それは、相棒との契約の証しを表に見せる為の云わば証明書みたいなもんだ。そこからは、相棒の力の波動が溢れていてそれは他の『イモータル』、相棒の許可がない奴らは近づかせない様にする所謂、虫避け効果もある。まあ、当然の事だけどな、自分の女には信頼した者以外を近づけたくないっていうもんだからな。他にも諸々の特典があるが……まあ、説明する必要性はあんまねえから今回は割愛するぜ」

バハムート「私達から説明できるのは以上です。あとは、若から詳

しく説明を受けてください。エリオさんもキャロさんも分かりましたか？」

エリオ「え、えっと……何となくですが……」

キャロ「えっと、お母さんはこれからも普通の生活が出来るという事でいいんですよね？」

ケルベロス「平たく言っちまえばその通りだ。という訳で長い説明会は終了だ！！」

エリオとキャロが部屋を出る。フェイトも続いて部屋を出てデスクワークやこの事をなのは達にも伝えに行こうとしたが、

ケルベロス「ああそうだった。嬢ちゃん、ちょっと耳貸してくれ」

フェイト「え、なに？」

ケルベロスに呼ばれ、顔を近づける。そして、ケルベロスはフェイトの耳元でトンデモない事を語ったのだ。

ケルベロス「人とイモータルの間じゃ、出生率が低いからな？子供欲しいんだったら、うんと相棒と頑張れよ～♪」

フェイト「はわっ／／／／／／／／／／／／！？」

囁かれた爆弾発言にフェイトはボンッ!!と音が出る程、顔だけでなく首まで真っ赤に染めた。
その彼女の慌て様にケルベロスは大爆笑だ。

ケルベロス［ウヒャヒャヒャヒャヒャ!!!相変わらず嬢ちゃんの反応は面白いぜ!!］

バハムート［ケルベロス、フェイトさんに何を言ったんですか?］

ケルベロス［な～に、将来起きるだろう事についての講義をだよ、ウヒャヒャヒャ!!じゃあな、嬢ちゃん!!夜は腰が砕ける程に頑張ればいいぜぇ～ウヒャヒャヒャヒャ!!!］

バハムート［フェイトさん、あのクソ犬の発言にはあまりのせられない様に気を付けてくださいね?それでは……］

二振りの剣は虚空に消えてフェイトだけ残された。

フェイト「ふ、ふにゃあぁぁ～～……／／／／／／／／／」

ただ、今の彼女は頭から湯気が出る位に混乱状態、というかオーバーヒートを起こしていたのは言うまでもないだろう……。

数日後、訓練室ではＦＷ陣がロイドと摸擬戦をしていた。

ティアナ「私が援護するからスバルは前線でロイドと交戦して！！
エリオは一撃離脱の戦法で奇襲！！キャロは後方で二人に強化魔法
を加えながらロイドの動きを封じて！！」

ス・エ・キ「「「了解っ！！」」」

ＦＷ陣は散開しそれぞれの持ち場に着く。スバルとティアナは前衛
と中衛に分れる。ティアナは魔力弾を複数展開しそれをロイド目掛
けて連射、その弾幕を剣で斬り払って防ぐロイド。
その彼に向かってスバルは一気に距離を詰め始める。

ロイド「最初はスバルか！！」

スバル「いっくぞ～～！！」

ロイド「掛かってこい！！」

リボルバーナックルを振りかぶり思いっきり叩き込む。ロイドはそれをエターナルソードで防御し、弾いた。弾いた所から直ぐに姿勢を落として足払い。だが、スバルはバク転を何回か繰り返して後方に下がり回避、そこにティアナが再び魔力弾の弾幕で牽制し動きを制限させる。

エリオ「そこだあぁぁぁぁぁぁ！！」

ロイド「うわっ！？」

そこに弾丸の如くエリオが魔力を爆発させて突進。間一髪ロイドは回避する。
その避けたロイドに無数の鎖が腕や足に巻き付く。

ロイド「キャロのアルケミックチェーンか！？」

キャロ「スバルさん、今です！！」

スバル「だりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

動きを抑えたキャロが合図を出す。スバルはマッハキャリバーの出力を全開にして特攻、拳を固めて大きく振りかぶり吠えながら打ち出した。その拳はロイドの腹目掛けて真っ直ぐに飛ぶ。

ロイド「っ、させるか！！」

しかし、ロイドは鎖を力任せに破る。そして、すぐさま剣を動かしてスバルの拳を受け止めた。

スバル「うそぉ！？」

ロイド「うりゃあっ！！」

スバル「う、うわあっ！？」

弾かれて踏鞴を踏むスバル。その懐にロイドは潜り込んだ。

ロイド「獅子戦吼！！」

スバル「あだあぁっ！？」

獅子の形をした闘気がスバルに直撃、彼女は衝撃で盛大に吹っ飛んだ。だが、途中で姿勢を治して地に着地し衝撃を抑える。如何やら当る瞬間に吹っ飛ぶ方向に体を動かして勢いを流したようである。それでも、今のは効いた様で少し咳き込んでいる。

ティアナ「スバル、大丈夫！？」

スバル「な、なんとか～……」

ロイド「ふぅ～、今のは危なかったぜ……」

なんとか立ち直ったスバルが再び突撃、ティアナが援護射撃で牽制する。飛んでくる魔力弾をロイドは次々に両断、そこにスバルが拳を打つ。エターナルソードの腹で受け止め、次にスバルは拳を下げてそこから回転蹴り。それを左手の甲で受け、弾きそこから直ぐに剣を振るう。

しかし、彼女は体を捩じってそれを避ける。そこに素早くエリオが突撃しストラーダを突き出す。スバルへの攻撃を止めロイドはそれを受け止めて上に弾き、連続突きを繰り出す。エリオは避けれるものを避け、避けきれないものは弾くがそれでも少しは掠める。直ぐに飛び退くエリオに変わってティアナが魔力弾を連射して牽制。

弾幕を避けてロイドは地を蹴り真上にジャンプそこから体をねじり地上に向けて魔神剣を放つ。

衝撃波が地面に着弾し地面を吹き飛ばす。砂塵が舞いティアナの視界が悪くなる。空中にいたロイドにフリードがブラストフレアで攻撃、それを体を捻って回避して地面に再び着地する。

スバル「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

そこにスバルが接近する。ロイドはそれを迎え撃とうと剣を構えると彼女は飛び上がった。

スバル「シリウス直伝の……牙連猛襲脚！！」

ロイド「うわっ！？」

スバルが高速連続蹴りを繰り出してきた。突然のスバルの猛攻にロイドは剣をクロスさせて防御する。
無数の蹴りでロイドの体が押される。そこにエリオも突撃、体の奥から力を放ち、それを腕に集束させ、それをデバイス先に溜める。
そして、一気に抜き放った。

エリオ「魔神剣！！」

純粋な物理攻撃が動きを抑えられたロイドに向かって真っ直ぐ進む。
ロイドは素早くスバルの蹴りを避けエリオの方を向く。

ロイド「魔神剣！！」

直ぐに剣を振るい衝撃波を放ちエリオの魔神剣とぶつかり相殺された。

ティアナ「今よ！！クロスファイヤー、シュート！！」

スバル「リボルバー、シュート！！！」

エリオ「フォトンランサー、ファイヤー！！」

キャロ「シューティングレイ！！」

四人の同時攻撃がロイドに炸裂、爆発で彼の姿が隠れた。爆煙で彼の姿が隠れる、だが……その煙の一角が膨らみそこから何かが突き破って天に舞う。虹色の翼を背から生やしたロイドが空に羽ばたいていた。

ロイド「極・魔神剣！！！」

特大の衝撃波がＦＷ陣付近に落ちる。砂塵が起きて視界が悪くなる。

ロイド「極・鳳凰天駆！！」

そして、火の鳥となったロイドが彼女達の近くを通り抜けた。遅れて彼女達に強烈な風圧が襲い吹き飛ばされ空中に投げだされる。ロイドが剣を手の中で回転させて鞘に収めると同時にＦＷ陣が地面に落ちた。それと同時にアラームが鳴る。

アナウンス［ＦＷ陣、規定ダメージオーバー、摸擬戦を終了します］

スバル「ええっ！？もう！？」

エリオ「目、目が回ります……」

キャロ「ふわ～……」

ロイド「皆大丈夫か？」

ティアナ「そう思うんなら少しは加減しなさいよ！」

ロイドの前にＦＷ陣が集まる。スバルはまだまだ戦いたかった様子で、エリオとキャロは目を回しており、ティアナは抗議を上げている。ロイドは、頭の後ろを掻いて苦笑い。

ロイド「手加減って、あれでも十分加減はしたんだけどな……。でも、皆凄かったぜ！スバルは何時の間にかシリウスから技教えてもらってったのには驚いた。エリオも少しずつだけど基本技を習得出来てきているし、キャロも良く周りを見ている。ティアナも皆への指示とかが速くなってきてるじゃないか」

ティアナ達をそれぞれ褒めるロイド。褒められてエリオとキャロは嬉しさで互いを見て笑顔になり、スバルはよっしゃー！！っと雄たけびを上げてバンザイする。ティアナも満更でもない様でそっぽを向きつつも照れているのか顔は赤い。

そこになのはがやって来る。

なのは「ロイド君、摸擬戦してくれてありがとうなの」

ロイド「気にすんなって。仲間の為なら出来る事はやってやるさ。あっ、そうだった」

ロイドは何か思い出したように近くに置いてあった麻袋を漁る。そして、そこからカードの様なものを取り出した。

ロイド「ティアナに渡すもんがあったんだよ」

ティアナ「なに、それ？」

ロイド「グランディオンで使用している一般兵用の飛行ユニットさ。リリスに取り寄せて貰って独自に改良して少量の魔力を使っても飛行できるようにしたんだ。これで、ティアナも地上だけじゃなくて空でも戦闘が出来る様になる！」

エリオ「え、グランディオンの装備を持ち出していいんですか！？」

ロイド「大丈夫だって、ウルフからも了承は貰ってる。一応これにも鎧装と同じ様にフェイズ…なんとかとか付いてるから物理攻撃はある程度は凌げるぜ？」

スバル「すご～い！！それじゃあ、ティアは今度から飛行もできるんだね！！やったじゃんティア！！」

なのは「良かったね、ティアナ」

ティアナ「あ、ありがとう／／／／／」

ロイド「気にすんなって仲間だろ?あとは、使い方とかはリリスから詳しく聞いてくれ」

ニッと笑うロイド。そこに……

シグナム「では、次は私とジークの相手をして貰おう」

ロイド「へ?」

何時の間にかシグナムに襟首掴まれておりズルズルと引き摺られていた。

シグナム「ふふふ、まだまだ元気そうだな。なら、私達二人の相手をしてもらうぞ」

ロイド「だぁ〜〜!シグナムにジークまで一緒ってしんどいっての!?」

そのままロイドはシグナムに連れていかれて結局、二人を同時に相手する羽目になったのは言うまでもない。

リリス「そんな忙しいご主人様の代わりにリリスが鎧装についての説明をするです！！」

ＦＷ陣が席についている前にリリスが立っており、彼女は隣にスクリーンを出して講義を始める。

リリス「まず、今回ティアナに支給した鎧装（フレーム）はこっちの一般兵の多くが使用するごく普通の鎧装なのです」

映像で出てきたのは先程ティアナが受け取った鎧装が映されている。胸部を守る様に装甲が施されており、腕全体を覆い、脚部は脛から膝までを覆っている。そして背には翼があり、それは折り畳む事で速度を上げる事も可能なようだ。

リリス「まず始めに、鎧装を装備する時の諸注意です。必ず、バリアジャケットを展開してから鎧装を発動するのです」

キャロ「それは、何か理由があるんですか？」

リリス「いい質問なのですよ。元々、鎧装は魔法技術の無い世界のものです。もし、鎧装のあとにバリアジャケットを展開したら……」

ティアナ「したら……？」

リリス「処理できない情報に上から圧力を掛けられて過負荷で装備者諸共、粉砕、玉砕、大喝采、大・爆・発！！なのですよ！！」

映像を交えながらのリリスが説明する。曰く、バリアジャケットを展開してから鎧装を展開すればバリアジャケットの表面にくっ付くだけなので負担も少ないのだとか、らしい……。

リリス「まだまともな解析が出来てないですから、使用する際は絶対に気を付けるのですよ？」

ティアナ「わ、わかったわ……」

リリス「次に鎧装の基本的に使用するエネルギーについてなのです！！」

スバル「前に使ったライフルとかと一緒で太陽の光じゃないの？」

リリス「そうですね。この鎧装の基本エネルギーは太陽エネルギーなのですが、実は大気中の酸素、水素、窒素等々のものをとり込んで、そこから使用するエネルギーだけを充填して飛行する事も可能なのです。勿論、燃料でもいいですよ」

エリオ「大気からエネルギーを得るんですか？」

リリス「そうです。ただ、長時間の飛行は危険なのです。光や大気を取り込んでエネルギーを充電して飛行するのですが、供給量より消費量の方が断然多いので長時間飛行したら燃料切れで落っこちる

ので注意するのです！！つまり、定期的に帰還してエネルギーを補充する必要があるのです。しかし、ティアナの鎧装はご主人様が改良した試作品。実は、少量の魔力でも飛行が可能なのです。という訳で、もし燃料切れを起こしたら自分の魔力で飛ぶのも出来るのですよ～」

スバル「ティアはいいな～。リリス、私達にはないの？」

スバルがリリスに問うが彼女は首を横に振る。

リリス「残念ながらこれはティアティアくらいしか今は装備出来ないのですますよ」

エリオ「如何してですか？」

なのは「なにかあるんじゃないかな？例えば、魔力制御とか？」

リリス「流石はなのはっち！！そうなのですよ！！幾らご主人様が改良した物でもまだ試作段階、魔法から来る負担に完全に耐えきれないから少量でも十分に負担が来るのです！！」

つまり、ＦＷ陣で例えると、普段からセンターガードなど後方からの攻撃が得意なティアナは誤射などをしない様に集中しているから魔力を上手く制御して撃っている。その事から自然とそれが上達しており一番制御に関しては実力はトップクラスなのだ。

次にキャロで最後は接近型のエリオとスバルだ。二人は相手に接近してダメージを与える事に集中するのでそういう細々とした事をす

る時間もないからである。

なのは「つまり、魔力制御を上手く出来ないと鎧装は装備出来ないって訳なんだね？」

リリス「結論を言えばそうなのですます！！何時かは魔導師でも装着可能な鎧装を作る予定ですが、何時になる事やら……」

スバル「残念……」

エリオ「でも、何時かは僕達も装備できる日が来るんですね！」

リリス「当然なのです！！リリスに任せるのですよ！！」

エッヘンと胸を張るリリス。しかし、今は子供サイズの姿の所為で背伸びしている様に見える。
その愛嬌ある姿に皆は微笑み、何時かは来るだろうその時を心待ちにするのであった。

---

～グランディオン第八区　兵器研究所～

此処は機装国家グランディオンの兵器研究室。此処では日夜、戦場で戦う兵士達を守る為の武器を開発している。そして、此処に新しく建造された施設がある。

ウルフはその施設に足を運ぶ。警備をしていた者が敬礼で応える。それに挨拶をして応えて先に進み一つの部屋に辿り着く。

ウルフ「全員、お勤め御苦労様」

研究員「ウルフ閣下！？」

ウルフの来訪に研究員が驚き慌てて敬礼する。彼に気付き続々と研究員が敬礼するのをウルフは苦笑いして楽にするように伝える。

ウルフ「まあ気楽にしてくれ。それで、首尾は如何だい？」

研究員「それが……あまり宜しくはないです」

チラリとモニターの方を見る研究員の一人。その映像には何か小型戦艦の様なものが映されていた。
それに幾つかのコードが入力されているがそれは全て『拒絶』という表示が出て弾かれている。

研究員「幾つかのパターンを試したんですが……やはり駄目ですね。エラーコードを表示させて受け付けてくれません」

ウルフ「やっぱ少しばかりの情報じゃ上手くいかないよな……」

研究員「申し訳ありません閣下……」

ウルフ「気にしなくていいさ。それに、君達もあまり乗る気じゃないだろ？」

研究員「い、いえ、その……はい」

ウルフに問われて研究員は最初は首を振ったが、最後には小さく頷いた。それを見てウルフも素直な研究員に微笑んだ。

ウルフ「誰だってそうさ。如何して自世界を襲撃した他世界の為にこんな事する気になる。けど、何時までも過去を引き摺る訳にはいかない。俺達は今、此処に生きている。一分一秒ほんの一瞬の時間を俺達は歩んでいるんだ。止まる訳にはいかない、何時までも、後ろを振り返る訳にはいかないのさ」

研究員「……」

ウルフ「だから、例え襲撃した奴らでも、今では友だ！！前を向いてそいつ等と目を合わせて、共に歩む必要があるんだ。同じ人間なんだからな」

研究員「前を、向いて……そう、ですね、何時までも引き摺っていられませんよね！」

ウルフの言葉を聞いて研究員たちは頷きあっている。それを見てウルフはフッと笑う。

ウルフ「なら、急がないといけない。魔導師達の、なのは達の為に、この高機動決戦鎧装『彗星（コメット）』を！！」

研究員一同「サー、イエッサー！！！！」

密かに開発されるのは、高機動決戦鎧装『彗星（コメット）』。これは今後、次元管理局の先頭を行くだろうなのは達の為に開発されている小型戦艦の様なものだ（見た目は流星（ミーティア）とほぼ一緒）。今の戦力では今後来るだろう激戦には彼女達は対応しきれないと判断したウルフの独断だ。

ウルフ（また今度あっちに赴いてこの件について話を付けに行かないといけないかもな……）

そう思いながらウルフは、研究所を去り他の部署の書類などを目に通しながら次の訪問場所に向かって歩を進めた。

そして場所は再び変わって、とある無人世界。

そこには、大きな古ぼけた遺跡がある。長い年月で表面には植物達が這い上がっている場所もある。
その遺跡の内部に無数の人影があった。

コブン１「ア～ニ～キ～～！！これ、重いっすよ！！？」

スカー「気合いを入れろ！！これくらい持ち上げなきゃ、今後やっていけねえぞ！！」

コブン２「アニキは手を貸してくれないんすか！？」

アニキと呼ばれている男それは、ＳＳ級犯罪組織『ドルフィン』の大将、スカーである。ＳＳ級犯罪組織『ドルフィン』は現在、犯罪組織の中で唯一ＳＳ級に認定されている一大犯罪組織。
主な罪状は窃盗や違法発掘等で、狙った獲物は必ず奪い姿を消す。
主に大富豪等の金持ちから物を盗みそこが如何に厳重だろうと突破して誰ひとり捕まることなく逃げ去る極悪犯罪者。

っと周囲では言われているが実のところは彼等は義賊だ。金持ちから金品や奪われた思い出の品を奪い、それを貧しい者達や返ってくるのを願う者に配り自分達は見つかる前にとっととトンズラして姿を眩ます。故に金持ちからは嫌われ、貧しい者達からは『英雄』等と見られており、彼等が来ると民は富豪達から見えない所ではしゃいだりする。

一応、子分達の生活費などの分は盗んだ金品やらロストギアやらを貰ってそれを売って生計を立てているらしい最も、最近はロストギアをバルド達が秘密裏に買い管理局に匿名で配達するというお茶目な悪戯をしている。

そして、彼らはスカーの拾った孤児達が大半を占めていたりする。

スカー「いいかお前ら！こんくらいの柱を簡単に持ち上げられなきゃ、ドルフィンの名折れだ！！」

子分1「いやいやいや！？これめっちゃ重いっすよ！？アニキも手を貸して下さいっす！！」

スカー「いやだね。俺は、この雑誌を読むのに忙しいんだよ！！」

子分一同「働け、この物臭ボケが！！」

機装国家情報誌『点々丸』の雑誌を開いてそう答えるスカーに子分

一同が素早くツッコミを入れる。息の合った漫才をする一同、その時スカーはある項目を見つけた。

スカー「な、なななななな…なんだってぇぇぇぇぇぇぇぇ!?」

子分2「アニキ、如何したんですかい!?」

スカー「バルドの旦那が……バルドの旦那が……女性と交際を始めただってぇぇぇぇぇぇ!?」

子分一同「えええええええええええええええええええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!?」

スカー「しかも、その相手が管理局の若き執務官、あの時一緒にいたフェイト・T・ハラオウンだとぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!!??」

子分一同「えええええええええええええエエエエエエエエエエエエエエ江江江ヱ恵枝絵柄獲柄絵江江ヱ恵枝絵柄獲柄絵江江ヱ恵枝絵柄獲柄絵江江ヱ恵枝絵柄獲柄絵江江ヱ恵枝絵柄獲柄絵」。。。Σ（□）／／

雑誌にはこう書かれていた。

激写!!グランディオンの英雄の一人バルド、熱愛発覚!?お相手は、管理局の執務官の女性!!

我々『英雄パパラッチ隊』は驚愕の現場に居合わせた。その日も今日も今日とてかの英雄の一人バルドを発見し早速パパラッチを開始した。

＊忠告するが犯罪ではない。

重要な事だからもう一度言う。

犯罪ではない！！

しかし、だ……。その時我々は、驚愕の現場を目撃することになる！！彼の隣に寄り添う一人の金髪の美しい女性を見てしまったのだ！！そして、その女性はバルドと一緒にベンチに座って昼食を摂り始めた。彼女は自分の箸で料理を摘み、それを彼に向ける。それを彼は平然と口にしていた！？

そのあまりにも驚愕的な展開に我々は何度も目を擦った。だが、しかし！！それは紛れも無い現実！！しかもそれで終わってはいない！！昼食が終わった後に今度は女性が彼にしな垂れかかる。その彼女の肩に手を回して優しく抱きしめる光景が……！？そして、二人が見詰め合って顔を近づけていってそのまま……ぐふぁぁ！？

調査団が全員、緊急搬送されこれ以上記事に出来ませんでした。

尚、後の調査でその女性がフェイト・Ｔ・ハラオウンと判明。彼女は我等の英雄と１０年前からの知り合いで彼女自身が彼に好意を寄

せていたらしく、つい最近互いの想いを告げて恋人になったそうだ（ｂｙ機動六課の子狸からの情報）。

子分１「だ、旦那があの綺麗な人と恋人に……」

子分２「う、羨ましい！！」

子分３「ってか、旦那達の交際する人って何でこうも美少女率が高いんだ！？」

子分４「ロイドの旦那はコレット様だろ、ガルドの旦那も王女セフィリア様だろ、クラウドの旦那もティファ様と仲良いし……」

子分５「これが……主人公補正なのか！！？」

スカー「お前らうっせーぞ！！少しはまじめに働けよ！？」

子分一同「お前に言われたくねぇよ！！」

愉快なトークを交えながら先に進む一同。遺跡の奥へと辿り着くと狭かった通路が開けた空間に変わりその中央に台座が置かれている。その上には、白く輝く宝玉が置かれている。子分の一人がスキャナーをそれに向け、本物であると確認する。

子分１「これが、今話題の『覇王の御珠』の一つ、『白の御珠』かぁ～」

子分２「これ一個でＳＳ級ロストギア扱いだから凄いよな～？」

子分３「割と簡単に手に入りやしたね？」

特別製のロストギア保管箱に慎重に白の御珠を入れ、スカーに言うが彼は部下達の方を見ておらず真っ直ぐに自分達が通った通路を睨んでいた。

子分１「アニキ、如何したんですか？」

スカー「お前等、コードＳを発令する。準備しろ」

子分１「アイアイサー、お前ら隠れるぜ！！」

子分一同「蜘蛛の子散らしてエッサッサ～♪」

そのスカーの一言に子分達がふざけた表情のまま直ぐに姿を消しその部屋にはスカーしかいなくなった。

その後直ぐに通路を吹き飛ばして一人の男が入ってきた。

アグリス「此処に最後の御珠があんのか？」

ナーガ「アグリス！！あまり破壊行動をとってはいけません。御珠に傷でも入ったら如何する気なのですか？」

アグリス「問題ねぇだろ？主の御珠がこんくらいで傷つく訳ねえし。さて、っと……御珠は何処だ？」

御珠を捜そうと二人の使徒は辺りを見回そうとしてその動きを止めた。

何故なら、此処にいる筈のない予想外の客人がいたからだ……。

スカー「おや？こんな辺境の世界に人が来るとは珍しい」

アグリス「おい、ナーガ……こりゃ如何いうことだ？なんで、俺達以外の人間がこの世界にいる？」

ナーガ「分かりません。そこに貴方、何故この世界にいるのですか？」

スカー「おやおや、そこ綺麗なお嬢さん。一つ俺とデートしませんか？」

ナーガ「えっ！？わ、私ですか！？」

スカー「他に誰がいるんです？此処には男二人以外貴方しかおりませんよ？で、如何ですか、夜景でも見ながら乾杯とか？」

ナーガ「そ、そんな事…は、初めて言われました／／／／／／」

アグリス「って、話を逸らすんじゃねえよ！！俺達が聞きたいのは何でテメーがこの世界にいるかって事だ！！」

いきなり口説かれてナーガは頬を赤く染めて困ったような顔をする。しかし、アグリスが吼え、ナーガもはっとなって思考を切り替えて相対する。スカーは、作戦が失敗したと呟いてやれやれと首を竦める。

スカー「気の早い男だ。まあ、いいや。そんなの簡単だろ？此処に来るって言ったら……」

アグリス「ロストギア探し。テメー、持っているな……」

スカー「はて、何の事やら？」

アグリス「惚けんじゃねえ！！」

スカー「そうだな。ボケんのも此処までにするか。そうだ、俺は持ってるぜ。あんた等の、使徒の探している御珠、『白の御珠』をな」

ナーガ「っ！？……貴方は何者ですか？ただの盗賊ではないようですね？どうやってこの場所に御珠があることを嗅ぎ付けたのですか！？」

スカー「いんや、俺はそこいらの次元犯罪者と同じだぜ？その質問には企業秘密って事で。そんなに知りたきゃ、俺と来るかい美しいお嬢さん？今夜は寝かせないぜ？」

アグリス「テメーが持っているのは分かった。なら……」

アグリスはマンゴーシュを装着して構える。ナーガも同じく戦槍『アクアグリム』を持ち穂先をスカーに向ける。それに対してスカーはニヤッと笑う。

スカー「いいねぇ……。賊の基本は欲しいものは奪う、盗む、それだけだからな……。さてと、俺も久々にやってみますか～」

スカーは腰に挿していた二振りの剣を抜き放ち構える。
見る人なら分かるだろう。その剣の構え方が、ロイドに似ているのが……

スカー「旦那直伝の剣術、俺には何処まで使いこなせるかねぇ……」

アグリス「御珠はお前が持つのは相応しくねぇんだよ!!」

ナーガ「推して参ります!!」

使徒二人が同時に地を蹴って飛び出す。先に攻撃を仕掛けたのはアグリスだった。
スカーに距離を詰めマンゴーシュを思いっきり打ち出す。
それをスカーは右手の剣で外に向かって受け流しかわす。続けてナーガがその後ろから鋭い刺突を繰り出す。心臓目掛けて飛んでくる穂先をスカーは冷静に左手の剣の腹で叩いて軌道をずらして避ける。

スカー「剛・魔神剣！！」

そのまま素早く両方の剣を地面に振り下ろす。前方に大きな衝撃波が広がりアグリスとナーガが軽く後方に飛ばされた。続けてスカーは剣を何度も振るって斬撃を何度も飛ばす。
それをナーガはステップで避け、アグリスはレアスキル『鋼血天鎧（スチールオブブラッド）』で受ける。

スカー「まっ、俺じゃこの程度か……それでも、俺的には上出来なんだけどね」

自分にそう呟きながら評価するスカー。そこに接近したナーガが槍を振るう。
それを伏せて避ける。続けて高速で無数の突きを繰り出してくる。
それを受け流し後方に飛び退いて距離を取る。

ナーガ「アクアシュトローム！！」

そこにナーガが自身の前に無数の球体を生み出す。それは一つ一つが渦巻いている。
槍が振るわれるとその回転する魔力弾が猛スピードで射出される。

スカー「うおっと！？」

スカーは身体を捻ってそれを回避、魔力弾は彼の後方にある壁に直撃する。
轟音を上げて煙が立ち昇る。チラリとその壁の状態を確認すると、壁は抉り取られたかのように当たった場所だけ削れていた。

スカー（うへ～、あれはくらったらやばそうだな～）

ナーガ「外しましたか……」

スカー「いや～、ビックリしたね。まさか此処まで威力が高いとは……『美人は強いの法則』は本当のことか～」

ナーガ「次は当てます！」

スカー「そいつはゴメンだな。だから俺は……」

スカーが身構えるので二人も思わず身構えた。暫し、緊張した空気が辺りを包む。

そして、スカーはクルッと周り背を向けたと思うと……

スカー「逃げるのだ！！！」

ロケットスタート宜しくそのまま二人に背を向けて逃げた……。

スカーの突然の行動に暫しポカ～ンっとした顔でその背を見送っていたが、相手が逃げたのにハッとなって気付いた。

ナーガ「に、逃げたっ！？」

アグリス「てめ、待ちやがれ！！」

スカー「待てと言われて待つ賊はいないのさ～ははははのは～！！」

慌てて二人もスカーの後を追いかける。それを嘲笑うかのように逃げる。

アグリス「逃がさねえ！！爆炎砲！！」

アグリスが狭い通路にも拘らず、砲撃を放って来た。これには流石のスカーもビックリする。

スカー「うおっ！？やばやばやばやっば～～～～！！？」

背後に迫る砲撃をダッシュで逃げるスカー。前方には別の出口が見える。そこに向かって全速力で駆ける。

スカー「だあああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

遺跡の外に身を投げ出す様にして飛び出すと同時にその出口が爆発で吹っ飛んだ。直ぐに立ち上がってダッシュ、その後を煙を突き破って追い突いた二人が駆ける。移動しながらの攻防が始まる。

アグリスの鋭い蹴りが放たれる。それを身を屈めて避けるとそこにナーガの槍の一撃が来る。
それを剣で弾いて地面を蹴り木の幹を更に蹴って離れて再び駆ける。ナーガの回転する魔力弾が飛んでくる。それを身を捻って避けて更にアグリスの砲撃が飛んできた。それを辛うじて避けるが背後にあった大木に当りその爆風で吹っ飛んだ。

スカー「流石に、一人じゃ無理かねぇ……」

アグリス「覚悟しろ!!」

アグリスがスカーに向かって飛び掛かる。それに対してスカーは不敵な笑みを浮かべた。

スカー「まあ、予定通りさ。今だ、やれお前等!!!」

部下一同「アイサーーー!!!!!」

スカーの合図と同時に周辺の影から子分達が一斉に飛び出した。

アグリス「なにっ！？」

ナーガ「伏兵ですか！？」

子分１「必殺、蜘蛛の子爆弾！！！」

子分２「ばら撒き天国！！！」

子分３「蜘蛛の子散らしてエッサッサ～～！！」

子分達が懐から一斉に何かを辺り一面にばら撒いた。それは指先程度の小さな蜘蛛の様なもので地に下りた瞬間に一斉に散らばる。そして、ある程度、走った後に突然赤く発光した。

次の瞬間に辺り一面を吹き飛ばす爆発が起きてアグリスもナーガも爆発に呑まれた。

スカー「今だ、逃げるのさ！！！」

子分一同「スタコラサッサのサ～～♪」

そして、相手の様子を確認せずに背を向けて土煙を上げて脱兎の如く逃走、あっという間に姿が消えてしまった。

一方、爆発に呑まれた二人はというと……

アグリス「ヘッ、キシュン！！エッ、キシュン！！！な、なんだこりゃあ！？」

ナーガ「クシュン！！こ、これは胡椒ですか！？」

煙の中でクシャミを連発していた。如何やらさっきのは胡椒をふんだんに詰めた爆弾だった様で、辺り一面には胡椒が粉塵となって漂っていた。眼からも涙が止まらず絶えずクシャミを続ける。

アグリス「この……チクショーが！！！」

アグリスが周辺に魔力を放出させてその衝撃で胡椒を全て吹き飛ばした。

アグリス「ふざけた真似しやがって……あいつは何処に行った！？」

キョロキョロと辺りを見回すが既にスカーの一味はこの世界から逃走していてアグリス達は彼を見失ってしまっていた。

ナーガ「逃げられましたね……」

アグリス「チッ！！戻るぞ、ナーガ！！急いでクロヴィスに報告だ

！！」

ナーガ「分かってます」

目的の物を強奪されてしまいアグリス達は急いでこの事を伝える為に姿を消した。

# 第六十三話（後書き）

と言う訳で、フェイトさんは体内時計が停止していって何時かは歳を取らない状態になってしまいました。

カイン「随分と説明が長かったな？」

いやこれでも結構削ったんですがね……。まあ、取りあえずは彼女はこれからも普段通りの生活をすることが可能です。それと普段はフェイトさんは『イモータル化』は殆どしないです。

クラウド「まだ、慣れていないからか？」

そういう事です。まだ、使い慣れていないので使用は控えています。そして、ＳＳ級犯罪組織『ドルフィン』がやっちゃってくれました！！

スカー「盗めるものは何でも盗む！！捕まりたくないからトンズラぶっこく！！」

油断していたとはいえ使徒二人を相手に逃げれるとは……作者もビックリです。

基本彼らは逃げる時は見つからないようにして逃げますが、もし発見されると今回の様に胡椒とかを使って相手を撒いて逃げます。

カイン「次回は如何するんだ？」

次回はほのぼのとした話にしたいなあっと思っていますが、果たしてどうなる事やら……。
次回も頑張りますんで読者の皆様、これからもこの駄作者を宜しくお願いします！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第六十四話（前書き）

六十四話更新！！

今回はほのぼのとしたのが基本な話になったと思う。

うん、それしか説明のしようがない……。

では、本編をどうぞ！！

# 第六十四話

ミッドに陽が昇り始める。その暖かな光は眠っている生き物達の目を覚まさせ新たな一日を始める。

それは此処、機動六課も同じである。

～バルドの部屋～

陽の光がバルドの部屋を徐々に明るくさせる。
ベッドには人がいるだろう二つの膨らみが……ん？二つ？

そう、そこには……

フェイト「ん……んんぅ……」

ベッドでは彼に寄り添う様にして眠っていたフェイトがいた。

仄かに暖かい陽の光がカーテンの隙間から零れてそれが彼女の顔に当る。閉じていた瞼が震えてゆっくりと目が開く。

フェイト「んん～～」

起き上がりグッと背を伸ばして眠気を吹き飛ばす。そこに虚空よりケルベロスとバハムートが現れた。

ケルベロス［よお嬢ちゃん、おはようさん！］

バハムート［おはようございます、フェイトさん］

フェイト「あ、おはようケルベロス、バハムート」

バハムート［よく眠れましたか？］

フェイト「うん、ぐっすり寝れたと思うよ」

ケルベロス［ってか、嬢ちゃん……なんでまた、下着姿なんだ？］

そう、今のフェイトは……また黒の下着姿でいた！！！

女神が、女神が此処にいらっしゃるぞ！？下ろした状態の髪が零れ日に当ってキラキラ光っている！！

それにも増して彼女の白い磁器の様な肌が煌めいていて直視できない！！目が、目が～～～～！！？

フェイト「だって…バルドの体ってポカポカして暖かくて気持ちいんだもん」

ケルベロス［パジャマくらいは来た方がいいぜ……］

フェイト「着たままだと暑くて眠れないんだもん……」

な、なんとうらやまｓ――エフンエフンッ！！けしからん！！

そして、そんな会話の中でもまだ起きないバルドをフェイトは肩を揺すって起そうとする。

フェイト「バルド、朝だよ。起きて？」

バルド「ぐぅ～……」

フェイト「もう、ほらっ、朝だよ～！」

バルド「んぐぅ～…」

フェイト「きゃっ！？」

何度も揺すられてたバルドが急に眉間に皺を寄せて自分の肩に乗せていた彼女の手を掴んで引き寄せた。小さく悲鳴を上げた彼女はそのままなすすべもなく再びバルドの胸の中に……。そのままバルド

はフェイトの背に腕を回してホールド、ギュッと少し力強く抱きしめられた。

フェイト「あっ……／／／／／／」

ケルベロス［ありゃりゃ、またか……。嬢ちゃん、相棒を起こすのはもう少し穏便にしないと駄目だぜ？］

バハムート［若も困った人ですね……］

フェイト「バルド、起きてよぉ～……／／／／／」

バルド「ぐぅ～……ぐぅ～……」

ケルベロス［無駄だって譲ちゃん。相棒は朝に弱いの知ってるだろ？起したいんだったらお目覚めのキッスだぜ！！］

フェイト「ふえっ！？キ、キス／／／／／／／／！？」

その言葉に激しく反応して顔が見る見るうちに真っ赤になった。寝ている愛しい人にキスするなど、想像しただけで動悸が激しくなる。

ケルベロス［なに躊躇ってんだよ？嬢ちゃんはもう相棒の恋人なんだろ？そんくらいやっても罰は当たらないぜ～ウヒャヒャヒャ！！］

フェイト「え、で、でも……／／／／／／」

恥ずかしいものは恥ずかしい。だが、起きた時のバルドの反応も見て見たい……。
ドキドキと自分の鼓動が速くなるのを感じる。思わず唾を呑む。

フェイト「バルド、起きないと……キ、キス…しちゃうよ／／／／／／／？」

バルド「ぐぅ～……」

フェイト「ほ、本当に……しちゃうよ／／／／／／／？」

バルド「ぐぅ～……」

フェイト「も、もう、止めたって駄目だからね？ホ、ホントにするからね／／／／／／／？」

バルド「ぐぅ～……」

フェイトの問いかけに寝息が返る。まるで寝息で返事でもされている様だ……。
そして、意を決して彼女は徐々に顔を近づける。近づくに比例して彼女の頬は少しずつ赤みを増していき、呼吸も早まり、吐息が艶っぽくなる。

遂に、彼女の唇が……バルドに届く瞬間……！！！

バルド「ぐぅ～……ん…？」

なんと、バルド起床～（笑）

だがしかし、もう止まらない、止められない！！
フェイトの唇はそのまま起きたばかりのバルドと重なった……。

バルド「んんっ！？」

フェイト「ん、っちゅ……」

は～いやってまいりました、フェイトのキスタ～～～イム！！！

重なった唇が何度か傾き、彼の口の中に侵入した彼女の舌がバルドの舌と絡まる。熱い吐息を口から時折り吐き出しながら熱い口付けが交わされた。

フェイト「ん、ふぅ……ちゅ、はぁ…んん、ちゅく、んぅ…ちゅぷ……」

熱い口付けの艶めかしい音が静かな部屋に一際響く……。
それから二人は暫しの間、唇を重ね合わせていた。

～暫くお待ちください、暫くお待ちください、暫くお待ちください、暫くお待ちください～

たっぷり五分ほど重なり合った唇が離れる。二人の間に銀の橋が掛かりプツンと切れた。
艶っぽい呼吸をしながら頬を赤く染めたフェイトがバルドの腕の中で上目遣いで見つめる。

フェイト「バルド、おはよう／／／／／／」

バルド「お・ま・え・は・な・に・を・やって・るんだ……！！？」

フェイト「バルドが悪いんだよ？私が何度も起こそうとするのに、全然起きないから／／／／／／」

バルド「だからって…何でキスなんだよ／／／／／／！？」

フェイト「だって……顔しか動けないんだもん／／／／／／」

よくよく自分達の状態を確認すると、自分がフェイトを拘束していて確かにフェイトは首から上しか動けない状態だった。

フェイト「バルド、目が覚めた？まだ眠いんだったら、もう一度…／／／／／」

バルド「いや、大丈夫だ。バッチリ目が覚めた！！ああそうだ、バッチリと目が覚めたぞ！！」

フェイト「そ、そうなんだ……ちょっと、残念だな～……」

バルド「ん？何か言ったか？」

フェイト「え！？な、何でもないよ！？……えへへ～／／／／／／」

ホワホワとフェイトが頬を緩ませて笑う。

何とも凄まじい程の桃色空間が部屋一杯に広がっている。もう、あれだね！！トラン○ムバーストだね！！！

もう、私、身悶えしながら書いてます……もうダメポ……ｏｒｚ

そして、その余波を受けた被害者がもう一人……

ケルベロス［うおおおぉぉぉぉ……。バ、ババハムートよぉ、お、俺、もう此処にいるの無理だわ……ｏｒｚ］

バハムート［ふっ、所詮は獣、この程度でくたばるなどまだまだですね？寧ろ、私は、若とフェイトさんのあの甘い空間を見て萌えます！！！！］

ケルベロス「乙女チックなのも大概にしとけ〜……」

バハムートの意外な乙女精神を発見してしまったケルベロスだった……。

――――――――――――――――――――
―――――――――――

バルドとフェイトが甘々空間を全開にしている頃、はやての寝室の前に人影があった。

それは……

シリウス「読者の皆様、こんにちわ。シリウスです！今回ははやての寝顔ドッキリ大作戦を決行したいと思います……」

部屋をそっと開けて抜き足差し足で移動する。そして、ベッドの前まで来る。布団には人が寝ているだろう膨らみがありそれがゆっくりと上下している。

シリウス「ふふ、ぐっすり寝てるね。さて、今日のはやての寝顔は如何に♪ザ、御開帳～♪」

今日も今日とてはやての寝顔を確認しようとその布団の端を掴みゆっくりと上げたその瞬間！！

はやて「先制攻撃っ！！！」

シリウス「そして、閉幕っ！！？」

はやてが布団から飛び出しそこから素早くシリウスの顔面に鋼鉄ハリセンを叩き込んだ。
避ける間もなく直撃し煙を上げて哀れ轟沈するシリウス。そんな彼を腰に手を当てて何やら勝ち誇った顔をして見下ろす白いパジャマ姿のはやてが立っていた。

はやて「ふふふ、甘い、甘いでシリウス君。かき氷にガムシロップを大量にかけた後に更にマヨネーズを掛ける位に甘いで！！！うちがそう何度も寝顔を見せると思っているんか？」

何やら最初の方でトンデモない物同志をブレンドした物体の名が上がった様な気がするが……そこは気にしないで置くべきだろう。

沈黙したシリウスに勝利の高笑いをするはやて。

だが……

――ポフンッ！――

はやて「へ？」

目の前で沈黙していたシリウスが突然、煙となって消えてしまった。

はやて「き、消えた！？ど、何処に行ったｎ「こっちだよ……ふぅ～～」ひゃあぁぁ／／／／／／／！？」

消えたシリウスを探そうとしたはやての背後から彼女の耳に息が吹きかけられた。それに体が上に軽く跳ねあがる程に驚いて慌てて後ろを向くと…そこには、はやてのベッドの端に座っているシリウスがいた。

はやて「シ、シリウス君！？い、何時の間に……！？」

シリウス「ふふ～ん♪忍法、変わり身の術。な～んてね♪ホントは、最初からはやての部屋の天井にいたのさ」

はやて「な、なんやと……！？つ、つまりは、うちは最初から寝顔を見られたって事かいな…！？」

シリウス「ごちそうさま～～♪」

またしても、負けた……。その事実に暫し、ｏｒｚ、な恰好になるはやて。

シリウス「さて、敗者は大人しく……」

はやて「へ？ひゃあ！？」

落ち込んでいるはやての傍に来たシリウスは彼女を抱き上げた。所謂、お姫様だっこである。
そのまま彼女をベッドまで運んでそっと降ろした。

はやて「あっ……」

シリウス「くくく、ベッドに横になってるはやては差し詰め、眠り姫かな？それとも……メインディッシュ？」

その言葉に思わず自分の体に腕を回して小さくなるはやて。その頬は若干赤く染まっている。

はやて「な、何する気なんや／／／／／／！？」

シリウス「敗者は、勝者の言う事を聞くのが世の常だよ……？」

はやて「ダ、ダメ……／／／／／／／／」

シリウス「何がダメなのかな？」

はやて「う、うちにもそういうのは決める権利があるんや／／／／／／そ、それに、まだ、心の準備が／／／／／／／／」

シリウス「敗者の意見は聞かないよ？」

シリウスの手が迫る。はやては目をギュッと閉じて覚悟を決めた。

そして、はやての体に布団が掛けられた……。

はやて「へ？」

シリウス「うむ、ミッションコンプリート！」

はやて「シリウス君……これは如何いう事なんや……？」

シリウス「如何いう事って……はやてに布団を掛けただけだけど？」

はやて「それは分かる。けど、何でベッドに戻したんや？」

シリウス「まだ朝早いからもう少し寝てていいよ？時間なったら起してあげるから。ったく、ホントははやてが起きる前に書類片付け

ようと思ったのに、いきなり先制攻撃するんだもんビックリしたよ～」

はやて「じ～～～～～……」

シリウス「あ、あれ？はやて、如何してそんなにジト目で見るのかな～？」

はやて「シリウス君、最初にうちの寝顔を見ようとせぇへんかった？それに、最初っから天井にいたっていっとったし、またうちが寝たら見てる気やないのか？ホントの目的はそっちなんやないのか？」

シリウス「ナ、ナナナナナンノコトカ、サッパリワカラナイナ～～？」

はやて「カタコトなってる時点でバレバレや～～～！！！！」スパ～ンッ！！！

シリウス「ナイスツッコミ！？」

見事、シリウスの顔面にハリセンがクリーンヒット！！轟沈するシリウスを見て、ふぅ～と溜息を吐く。まったく、変な奴に自分も目を付けられたものだ……。

だが、別に彼の事はそんなに嫌いにはならなかった。寧ろ、好いている方だろう。シリウスはこういう悪戯はしょっちゅうして来るが、決して相手を嫌な気持ちにはさせない様に気配りをしてくる。

はやて（まったく、シリウス君のそういう所が憎めないんや……。

寧ろ、けっこうすk――はっ！？うちは何を考えとんのや／／／／！？ないないない！！うちはシリウス君の事、別に何とも思ってへん／／／／！！）

頭を何度も振って考えていた事を消し去って、布団に頭まですっぽりと潜り込む。今、自分の顔を見たら絶対に真っ赤だ。ドキドキと心臓が早鐘を打っているのが分かる。

結局、仕事の時間まで彼女は悶々とした状態で寝れなかったのは言うまでもないだろう……。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

その日の昼下がり、シグナムとジークは訓練場で剣を交えていた。数十合、いや、百数十合はぶつかり合っただろう。

シグナム「ふぅ……今日はこの位にするぞ」

ジーク「……わかった」

互いにいい汗を掻いた。シグナムの額や項で光る珠の様な汗が光に反射して彼女を少々色っぽくする。それに加えて運動で血流が早くなって色づいた肌が更に彼女を美しくさせている。

そんな彼女を一瞥してジークは自身のデバイス、バルムンクを目の高さに持って来る。

ジーク「……」

シグナム「ん？如何した、ジーク？」

ジーク「……いや、やはりまだまだ腕が甘いと思ってな……」

シグナム「それを言うなら私もまだまだだ。ロイドを相手に二人がかりで勝負しても掠る程度だったからな……」

ジーク「俺と二人で挑んでもまだ加減をされていたのは分かっていた。……あれ程の腕になるには相当の修羅の道を歩まねば辿り着けないだろう……。剣聖は、それ程の戦いを超えてきたのか……」

自惚れていないがジークとて相当な戦いを潜り抜けてきた。それでも尚、ロイドやカインなどにはまだまだ加減されている。あれが時の英雄と謳われる者達を纏める男か……とジークは感慨に耽った。

シグナム「しかし、私ももう少し腕を上げたいと思うのだが、如何すればいいのか……？もっと踏み込むべきだろうか？」

ジーク「いえ、貴方はそれ以上相手との距離を詰め過ぎるのは危険です。距離を詰め過ぎるとかえって敵の動きの機微に反応が遅れてしまいます。それに敵も必ず一人という訳でもないですから、近づき過ぎれば挟み撃ちされる危険性もあります」

シグナム「そうか……」

ジーク「貴方は些か、失礼な事を言わせて貰えば、猪のような時があります。猪突猛進は、時と場合を考えて欲しい……」

シグナム「い、猪……」

弟子にグサッと来るような発言を受けて暫し、呆然となるシグナム。

まあ、確かな事なので反論が出来ない……。

エリス「あ、シグナムとジークを発見～クスクス♪」

クラレンス「二人ともおつかれさま～クスクス♪」

そこにエリスとクラレンスが現れ、思考の渦の中にいたシグナムは現実に戻って来た。そんな彼女の胸の中に二人は飛びこんで抱き付いてきた。

エリス「う～ん♪シグナムの胸は柔らかくて気持ちいい～♪」

クラレンス「ポカポカして暖かくて眠くなりそうだよ～♪」

シグナム「お、お前達、や、やめっ…！く、くすぐったいぞ！」

シグナムの胸の中に顔を埋めている二人。それがくすぐったいのかシグナムは二人を剥がそうと必死である。

エリス「ジーク～、シグナムの胸ってホントに柔らかいんだよ～♪クスクス♪」

クラレンス「ジークも如何？クスクス♪」

シグナム「なっ／／／／／／／！？」

ジーク「……断る」

そう言ってそっぽを向く。如何やら見ているのが恥ずかしい様だ……。

シグナムはなんとか姉妹を剥がして降ろす。少々物足りないといった風の顔をするエリスとクラレンス。

エリス「ジークも混ざればいいのに……」

クラレンス「ジークは根性が足りないね～クスクス♪」

ジーク「それは関係ないだろ……」

エリス「ねえねえシグナム？」

シグナム「な、なんだ…？」

クラレンス「シグナムは如何してそこまで大きいの？」

純粋な疑問の眼でシグナムの豊かな二つのかじｔ――ゲフンゲフン！！を見る。

シグナム「は、はあ！？いや、如何と言われてもだな……！」

エリス「ジーク、シグナムは元から大きかったの？」

ジーク「ぶっ！？」

突然話を振られて吹く。しかもその内容が男が触れてはいけない琴線の話だ。その衝撃も凄まじい。

まあ、正直に言えば如何だったかはおぼろげにしか思い出せない。そもそも、ジークは彼女をそういう風に見た事はなく、純粋に彼女を慕っていたからそんなのは如何でもよかった。

さて、どう答えればこの姉妹は納得するだろうか……？

頭の中で四苦八苦する。

そこに……

はやて「教えたる。こうやったからや！！！」

シグナム「っ！！？」

突如、シグナムの背後から我等が子狸登場！！そして、両手でその果実を鷲掴みにする！！

はやて「こうやって、スキンシップしとるから大きくなったんやで～♪」

シグナム「あ、主！？や、止めてくだｓ――うぅん／／／／／／！？」

はやて「ふふふ、シグナムのは相変わらず揉み応えあるやないか。フェイトちゃんといいなのはちゃんといい、如何して六課の女性陣は、大体が平均より大きいんやろうな……ああ、妬ましい……」

最後に何か恐ろしい事をぼそりと呟く。そんな二人のじゃれ合いをエリスとクラレンスはジッと見て合点がいった。

エリス「そっか、シグナムは、タヌキとじゃれ合うから大きくなったんだね～♪」

はやて「だれがタヌキや！！」

クラレンス「あれ？如何したのジーク、こっちに背を向けて耳栓なんかして？」

ジーク「……目と耳の毒だ」

こっちに背を向け耳栓を付けている。その彼に気付いたシグナムも羞恥に顔を真っ赤に染めて慌ててはやてに進言する。

シグナム「あ、主はやて！！ジ、ジークもいるんですよ／／／／／／！？」

はやて「ええやないか、ええやないか！！ジークにも聞かせたらええやないか！シグナムの色っぽい声を！！ここか！？ここか！？ここがええんのか！？」

シグナム「や、止めてｋ――うぅん、んぁ／／／／／／！？そ、そこは駄目ですあるｊ――あぅんっ／／／／／／！？」

はやて「この乳か！？この乳が悪いんや！！ほらほらほらほら！！」

シグナム「あ、あるｊ――ひゃうっ！？そ、それいｊ――くふぅんっ／／／／／／！や、やめてくだｓ――はぅっ／／／／／／！？」

ジーク「心頭滅却すれば、雑念もまた涼し！！うおおおおぉぉぉぉおおおおおおおおっ！！！！」

エリス「クスクス、ジーク面白いね～♪」

クラレンス「何時もより多く素振りしてま～す、クスクス♪」

シグナムが時折り出す色っぽい声、彼女の顔が段々と朱に染まる。
一方、雑念を振り払うが如く、残像すら見える位の速度で素振りをし続けるジーク。そんな彼を見てを見て姉妹はクスクスと笑う。

なんだこのカオスは……

もう一度言う

なんだこのカオスは……！！！？

---

さてそんな事もあったりした数日後の晩……

フェイトは再びバルドの部屋に来ていた。

フェイト「ねえ、バルド？」

バルド「なんだ？今、明後日までの書類を片付けてっから待ってろ」

明後日の分までって……凄まじく膨大な量なのだが……。まあ、彼の実力ならそれ位の事などあっさりと出来るのだろう。

ものの数分で片づけてしまい、それをディスクに保存してパソコンを切った。

バルド「んで、聞きたい事は何だ？」

バルドはテーブルに先に用意しておいたコーヒーを飲みながら聞く。フェイトは手の中でコーヒーの入ったカップをクルクルと回しながら聞いた。

フェイト「私の血を何時になったら飲むの？」

バルド「……」

突然の爆弾発言に彼は機能停止。少しして再び稼働して真剣な顔つきでフェイトを見る。

バルド「何で急にそんなこと言いだしたんだ？」

フェイト「だって、契約の時に吸ってから数日経ったんだよ？バハムートから聞いたけどバルドってまだ本調子までは遠いんだよね？だったら、一杯血を吸って早く良くなって欲しいなあって、思って…その……」

人差し指同士をツンツンと合わせて上目遣いで見てくるフェイト。

……あかん、鼻血出ます！！！

フェイト「それに、なんか最近ムズムズするんだよぉ～／／／／／」

バルド「何処が？」

フェイト「首筋辺りが……。これって、契約と何か関係があるんだよね？」

バルド「……まあ、そうだな」

フェイト「私は、バルドに早く元気になってほしいの。お願い……」

目をウルウルさせて見てくる。必殺の乙女の涙！！世の男を完膚なきまでに撃沈させる最強の精神攻撃。フェイトのお願いにバルドは軽くため息を吐いたあと、席を一度立ってフェイトの隣に再び座った。

そして、彼女の肩に腕を回して自分の方に少しばかり強引に引き寄せる。

フェイト「あ……」

その強引な抱き寄せにフェイトは胸が高鳴る。ドキドキと自分の鼓動が速くなるのが分かり、バルドにもそれが分かるのではないかと頬を朱に染める。そんな彼女の耳元で彼はそっと囁く。

バルド「如何したフェイト？随分と鼓動が速くなってるじゃねえか？」

フェイト「うぅ～、バルドの意地悪／／／／／／！そんな事知ってるくせに～／／／／／／」

バルド「ふっ、そうだな。惚れた女の事くらい分かってやれないとな。さて、それじゃあいくぞ？」

フェイト「う、うん……お願い」

フェイトから了承の返事が返って来たのでバルドはフェイトの服を少しばかりずらし、彼女の項を晒す。その白い磁器の様な柔肌にバルドは口を付けて鋭い二本の牙で噛みついた。

フェイト「んんっ……！？ん、ふぅ…ふぁ……」

甘美な痛みが彼女の脳髄に奔った。思わず色っぽい吐息が口から零れる。バルドは、フェイトの背に腕を回して離れない様にしっかりと固定し一滴も彼女の血を零すまいと血を吸う。フェイトは、自分の血が抜ける感覚を感じて体が蕩けそうになる。

まるで、幻想の様な光景は暫し続いて、たっぷり十分くらいは経っただろうか？バルドは口を離した。彼女の項には契約した時にできた穴とは別の二つの穴が出来ており、それが新しく血を吸われた事を物語っている。その新しく出来た傷から血が滲みだすが、バルドがその箇所を舌で軽く舐める。

フェイト「んぅ……」

くすぐったい感覚に少しだけ声が漏れてしまった。舐められた場所にあった傷が彼の舌が離れた時には塞がっていた。そして、急に来た脱力感にフェイトは崩れかけたがそれをバルドが抱きとめて自分の胸の中に包み込んだ。

フェイト「バルド…如何だった？」

バルド「そうだな……。この世にあるどんな料理よりも、甘美で、後味が良くて、それでいて病み付きになりそうなそんな味だったぜ？」

フェイト「えへへへ～……何かそう言われるとちょっと嬉しいな／／／／／」

腕の中で彼の方を見上げて微笑む。そんなフェイトにバルドも微笑み暫く二人は見つめ合っていた。
そして、フェイトがゆっくりと目を閉じたのを合図に二人の唇が重なる。

フェイト「ん……ふぅ…っちゅ」

恋人となってから何度となく交わした口付けは、やはり何度しても甘酸っぱい味がした。
二人は何度も唇を重ねて時々吐息を零しては舌と舌を絡ませて互いを求めあった。

暫くして、二人のキスは終わり顔が離れる。銀色に輝く橋が一瞬で来て直ぐに切れる。
互いを見つめ合い、暫くしてクスッとどちらともなく笑う。

その時、十二時の鐘が鳴る。

バルド「そろそろ、寝ろ。明日も早いんだろ?」

フェイト「うん、そうだね……。あっ、バルド」

バルド「なんだ？」

フェイト「今日も、此処で一緒に寝てもいい？」

バルド「……好きにしろ」

その返事にフェイトは華の様に笑顔になって彼の布団に一緒に潜り込んで幸せな心地の中で眠りに就いたのだった。

---

それから数日後

六課でデスクワークをしていたなのは達。そこに扉が開いて現れたのは配達屋だった。

配達員「ちわ〜〜っす！！イルカヤマトの宅急便です！！六課にお届けもので〜す！！」

はやて「誰宛てなんや？」

配達員「えっと〜、六課宛てなんで……じゃあ部隊長さん、お願いしま〜す！！」

はやて「ほいほい、判子、判子っと……」

配達員「ありがとうございやした〜！！では、さようなら〜！！」

配達員がはやてに小包を渡して去っていった。
その両手で持てる位の小包をなのは達も興味津々で集まって来た。

なのは「はやてちゃん、それは何なの？」

はやて「さあ、うちにも分からへん。誰かなんか頼んだんか？」

一同を見回すも全員が首を横に振る。そこにガルドが入って来た。

ガルド「ん？如何したんだ、全員集まって？」

エリオ「あ、ガルドさん。あの小包ってガルドさん達の誰かが頼んだ物ですか？」

ガルド「……いや、俺達は何も頼んではいないが……？」

エリオの指さす物を見てガルドも首を傾げる。だが、その小包に張ってあるイルカのシールを見つける。

ガルド「そう言う事か……」

スバル「あれ？ガルドは何か知ってるの？」

ガルド「またあいつ等は、堂々と侵入したのか……」

フェイト「ガルド、一体何の事？侵入って……？」

ガルド「ああ、そうだな。一つヒントをやろう、その郵便屋は何と言っていた？」

なのは「え？」

そう言われてその場に居た全員が思考を巡らせる。

たしか……

――ちわ～～っす！！イルカヤマトの宅急便です！！六課にお届けもので～す！！――

イルカヤマトの宅急便
↓
イルカ・ヤマト
↓
イルカ
↓
ドルフィン

…………………………………………………………

六課一同「ああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？？？」

如何やら理解した様だ……。六課内に本日最大の声が響き渡った。

フェイト「SS級次元犯罪組織『ドルフィン』！！？」

はやて「ちょっ、嘘やろ！？堂々と六課に侵入って…！！逮捕や逮捕！！今すぐ逮捕に向かうで！！」

ガルド「残念だが……」「お〜い、なんかスカーのとこの子分と会ったんだけど……」もう帰った様だ……」

如何やらドルフィンの人は渡す物渡して、とっととトンズラぶっこいた様だ。

丁度良く来たロイドの発言にガルドは苦笑いする。

因みにその子分、ロイドと鉢合わせした時、彼にサインをねだって、受け取って『私、今、幸せです！！』的な空気を纏いながらスキップで帰っていったという……。

ティアナ「あんなふざけたのが、ＳＳ級って……」

エリオ「あれで、一度も構成員の一人も捕まらないんですよね……」

ロイド「あれ？何でなのは達は落ち込んでるんだ？」

ガルド「ロイド、なのは達は管理局で働いてるんだぞ？スカー達は犯罪者として追われているのは知ってるだろ？」

ロイド「ああ、そっか……。あいつ等も苦労してるよな～」

しみじみと呟く。そこにクラウドやバルド、他のメンバーが集まる。

クラウド「ん？皆でそこで何をしてるんだ？」

バルド「デスクワークを早くやっとかないと後が悶えるぞ？」

ロイド「スカーの所から何か来たみたいだぞ？」

バルド「ったく、あの馬鹿共は何を送って来たのやら……」

バルドははやてから小包を受け取りその包みを丁寧に剥がしていく。
そして、その中からは何かの箱が現れた。

はやて「なんやこれ？」

シリウス「これはロストギア保管箱だね～。これは安全に且つしっかりとした封印を施す術式が組み込まれている箱なのさ」

ティアナ「ま、まさか……！？」

キャロ「この中にあるのってロストギアなんですか！？」

なのは達一同がその一見何の変哲もない箱を見る。これが自分達のデバイスのシーリングとほぼ同等の性能を持っているなどと想像できない。

バルド「取り敢えず、開けるぞ」

そう言ってバルドが手を掛ける。なのは達は固唾を呑んでその先にある物を見守る。
そして、箱がゆっくりと開けられると、そこからは……！！！

――バアァァァァンッ！！――

???『ひぃいいいやああほおおぉおおおおおおおいっ！！！！』

なのは「にゃあああぁぁぁぁぁぁぁ！？」

フェイト「ひゃあっ！？」

スバル「うわっ！？ビックリした……」

エリオ「し、心臓に悪いです……」

箱から飛び出したのは、面白い顔した物だった。所謂、ビックリ箱
……それになのは達が驚いて飛び上がる。

バルド「うるさい……」

???『ぐはっ！？』

そのバネでビヨンビヨンと跳ねる物をバルドは平手で叩き落とした。
それは地面に落ちて何度か跳ねて、起き上がる。

???『いててて、バルドの旦那……容赦ないっすねぇ～』

ヴィータ「え……」

アイネ「玩具の顔が、しゃべったぞ……」

シグナム「面妖な……」

突然言葉を発してきたのに一同驚く。それを呆れた顔をして見るのがロイドやバルドだった。

ロイド「ビックリしただろうが……」

バルド「一体何の様だ、スカー」

スカー『お久しぶりっす、ロイドの旦那にバルドの旦那!!そして、皆さんもお久しぶりっす、元気でしたかい!?』

コレット「私達は元気だよ～。スカー達はだいじょぶ?ちゃんと、ご飯は食べてるの?」

スカー『御心配には及ばないっすよ、コレット嬢!!皆、元気にやってるっす!!そして、おはよう機動六課の諸君!!俺が、『ドルフィン』を纏めるスカーってもんだ。以後よろしく!!』

カイン「登場の仕方が酷過ぎる。まずはそのビヨンビヨンと上下に跳ねる締まりのない顔をなんとかしろ」

なのは「にゃはははは……」

取り敢えず、その跳ねる頭を止めてやった。

そして、話の本題に移る。

カイン「それで、一体何の様だ？」

スカー『へい、今回は旦那達にお届け物っす！！！その箱の一つ目の底板を外してくだせい』

カイン「これか……？」

箱をよくよく見ると、箱の底板がその箱の本来の底板よりも高い事に気付いた。

それで、カインはそれに手を触れた。

その瞬間、彼の眉が若干動く。

なのは「カイン君如何したの？」

カイン「……スカー、お前まさか……」

スカー『へい、漸く見つけやしたぜ……』

カインがその底板を持ち上げる。

するとそこには……

スカー『見つけやしたぜ、使徒の探している最後の御珠『白の御珠』

を……』

眩い輝きを放つ白い珠が置かれていた……。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

～？？？～

クロヴィス「で、お前達はまんまと御珠を持っていかれた、と……？」

ナーガ「ええ、してやられました……」

アグリス「クソが！あいつ等、俺達を虚仮にしやがって！！！」

デミテル「ですが、そうなると御珠の行方は分からなくなってしまったという訳ですね。困りましたね……」

使徒達の集まるとある場所で今回の件を聞いてデミテルは思案顔になる。
謎の賊に自分達の集めている御珠を持っていかれてしまいその行方が分からなくなってしまったのだ。

ギル「面倒だ。片っ端から賊共を消してけば御珠も見つかるだろう」

ゴルドゥ「面倒だがそうするしかねえな……」

アカギ「……面子は如何するのだ？」

パオラ「そうね……」

次々に周辺の賊の掃討を考え始める面々。
だが、それに待ったをかける者がいた。そう、クロヴィスだ。

クロヴィス「待てお前達……」

アグリス「ああ？クロヴィス、なんだよ？」

クロヴィス「御珠を探さずとも問題はない。あれはいずれ見つかる……」

ゴルドゥ「はあ！？一体如何いう事だよ？」

パオラ「またそうお告げだかが出てるの？」

クロヴィス「ああ……」

デミテル「それは何時なんですか？」

クロヴィス「それはまだ分からん。だが、星が語る。‘時が来る’と……。その時は私が動く……」

パオラ「本当に当るの？その『星詠み』は……？」

クロヴィス「さあな、これ自体は私の能力の副産物でしかない。それが突然変わるかもしれない、当るかもしれないは私ではどうにもできないからな」

ゴルドゥ「お前のその能力なんぞ、信用できねえよ。俺としては早くあのクソ野郎をぶっ潰してえんだよ！！」

デミテル「貴方をいいようにあしらった英雄の一人『夢幻の覇者』ですか？」

ゴルドゥ「あの野郎にはきっちり落とし前付けてやるよ！！」

ギル「お前があの男を相手するなら私は兄弟を相手するぞ？今度こそ、我が物にしてくれる夜天の主、その守護騎士共よ！」

その空間に新しく一人の使徒が戻って来た、第十六の使徒、フォスティルだ。

フォスティル「今戻ったぞ」

クロヴィス「管理局の方は如何だった？」

フォスティル「如何やら、機装国家という世界と同盟紛いのものを結んだようだ」

アグリス「同盟紛い？如何いう事だよ？」

フォスティル「奴らは、自分達よりも強大な戦力を持っている奴らを恐れている。我々、『神の意志（プロヴィデンス）』と次元海賊に奴らは同盟した者達をぶつけて疲弊させる気の様だ……。無論、その時は手を貸す事は当然だがな」

ゴルドゥ「はっ！！質力兵器は危険だ！！とか言いながら自分達は戦艦とか戦車を所持してる時点で矛盾してんだよ！！力を使うのが危険だ～？自分達魔導師を棚に上げてよくもまああんな綺麗事言えるよな？」

フォスティル「最終的には俺達とその世界が疲弊した所を両方取り入れる気なのだろうな……」

デミテル「浅はかですね……。まだ、私達は奥の手を出していないというのに……」

アカギ「だが、力の質としては向こうの方が高い……。機装国家とやらは完全な武装世界らしい、つまり戦闘能力に関しては管理局を遥かに上回るだろう。それに、剣聖共も加わって更に戦力は上がる。幾ら、次元海賊をぶつけたとしても恐らく長くはもたないだろう……」

クロヴィス「だからこその、『イノセント』だ。質で負けるのなら、此方は数で勝負だ……」

パオラ「クロヴィス、アンタに一つ聞きたいんだけど。あのイノセントってのはなんなのよ?アンタが見つけてきた戦力だから信用はしてるけど、ただの何処かの世界の巨大生物じゃないでしょ?」

クロヴィス「ふむ……。そうだな、強いて言えば……『我々に近くて遠い存在』と言っておくべきだろう」

アグリス「ああ?如何いう事だよ?近くて遠かったら元の位置に戻るだろうが?」

ナーガ「アグリス……。クロヴィスは、そう言う意味で言ったのではないと思うのですが……」

ゴルドゥ「考えんの面倒くせえや。クロヴィスに任せるぜ～」

クロヴィス「そうか……。では、また何かあったら集合するぞ。それまでは、お前達は自分に何が出来るか考えてくのだ」

それに一同は頷いて姿を消す。一人残ったクロヴィスは背を振り返る。そこには主無き大きな玉座が置かれている。その周囲を漂うのは、集めた六つの御珠。

クロヴィス「……」

それを無言で暫く見つめた後、クロヴィスは姿を消した。そして、再びその空間には静寂が訪れた……。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

～機動六課屋上～

六課の屋上にシリウスは一人佇んでいた。穏やかな風が吹き彼の髪を棚引かせる。

シリウス「今宵は新月か～星がきれいだね～……」

空を見上げても月はない。あるのはここぞとばかりに輝く星達だけだどれもこれも同じ様な大きさのサイズにしか見えないが、あれは全て何万、何億光年も離れたものだというのだから世の中は本当に不思議だらけだ。

シリウス「それを考えると、人ってのも……本当に不思議な生き物だねぇ……」

今まで多くの者を見てきた。その一人一人が違う性格で、特徴も、癖も全然違う。
だが、変わらぬもの、真実がある。
それは……

シリウス「何処に行っても人は争いを繰り返す、か……」

どの世界に行っても変わらぬ答え……。
人の隣に必ず存在している彼等の闇……。同族を殺す野蛮な種族、自らを優良種と思い込む哀れな動物。自らの子孫すらその手で殺める事もある愚物。

シリウス「なんで、あれ等はこうまでして世界に広がったのかな～……」

同じ過ちを繰り返すのに、何故こうまで数が増えるのか？
分からない、如何考えてもとっくに滅びるだろう種の筈なのに今でも生きながらえる。

シリウス「まあ、そんな存在を俺は友と呼んで、恋もしてるとは…
…世の中ホントに不思議だね……」

何故、人に恋するのか？此処まで愚かな種と分かっていながら何故に彼女に恋慕を抱いたのだろうか？
まあ、その答えは見つからなくていいだろう。前にも考えていたがやはり、答えなど見つからなくていい。見つかってしまったらその後がつまらない。見つからずに、その疑問の答えが見つからずにいればそれで十分、世を楽しめる。

シリウス「守れる者はこの掌の中に収まるだけでいい。その他の人間なんて如何でもいい。ただ、自分の周りにいるのだけは絶対に守らなきゃね……」

シリウスはそう呟くと自分の周り、半径3メートル位を不可思議な結界で包む。
その中央に立ち意識を集中する。夜中に暴れる気はないが、何やら風や海や……自然がざわついている。

一番危険に敏感なのは彼らだ、彼等は伝える。この世界の危険を…
そして、人は知らずに滅びる。
自らの母が伝えてくる種の危機を……。

シリウス「その為には……自分の力を高めておかなきゃねぇ～……」

そう呟き己が力を高める。莫大な魔力ともつかない寒々しい気配が膨れ上がる。それが、外には漏れる事はないが結界を激しく震わせた。

そして、シリウスから金色の耳と、九本の長く美しい金色の尾が生えた。

その彼を物陰で見ていた者がいた……。

はやて「……っ！！？」

そう、はやてだった。

彼が屋上に向かうのを偶々見つけて追いかけてこの場に居合わせてしまったのだ。

シリウスから耳と尻尾が生えて思わず声が出そうになり慌てて両手で口を押さえて声が出るのを抑える。

前にも彼から耳や尻尾が生えたのを見た事があるがあれは、半透明で魔力の塊が具現化したものだと分かっていた。

だが、目の前の光景は何だ！？シリウスから生えているのはまるで本物のような美しさだ。時々動くその尻尾は意思を持つかのように動く。

それは、生物のそれであるかのように……

九つの尾を持つ存在と言ったら自分は、あれしか思い浮かばない。

かの昔に絶対的な力で世に恐怖を与えた太古の存在……！！

では、彼は……！！

それを否定する様にはやてはその場から逃げる様にして出ていく。
そして、自らの部屋にたどり着いてそのままベッドに潜り込んだ。

はやて（シリウス君……。アンタは一体、何者なんや……！！！）

その答えが分かる筈もなく。はやては一人、悶々と眠れない夜を過ごしたのだった……。

# 第六十四話（後書き）

バルドとフェイトさんがやたらと桃色世界を形成するのはこれ如何に！？

リリス「いいんじゃないです？どうせ付き合ってるんですから？」

これ読みなおした時に血反吐を何度吐いた事か！？でも、修正効かなかったからこのまま投稿しちゃったぜ！！

そして、はやてはシリウスが何かを隠していると気になり始めたようです。

セフィリア「此処から二人はどうなっちゃうんだろうね？」

さあ、それはお楽しみで。

さて、最近スランプ気味で内容をまとめるのに四苦八苦している自分がいたりする。執筆が未熟ゆえ、他の作者様のような素晴らしい内容が書けない自分が恥ずかしいです。

はやての魔法の為に和独辞典でも買おうかな……？

カイン「それだけの為にか！？」

うん。此処だけの話ですが、実は作者は、それだけの理由でドイツ語の授業を受けようかなって思ったりもしていた。けど、その担当の人が面倒くさそうだったから出来なかった（この根性無しがっ！！

そんなダメ作者ですが。これからも頑張りますので読者の皆様、これからも宜しくお願いします！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

## 第六十五話（前書き）

六十五話更新！！

今回も殆どほのぼのと行きますよ～！！

では、本編をどうぞ！！

# 第六十五話

バルド「次元海賊の居場所が分かっただと？」

六課に『白の御珠』が届けられて数日後、バルドとフェイトはクロノに本局に呼ばれてやって来た。そして、彼の待っている部屋に来るとそこにはクロノだけでなく彼の母親のリンディの姿もあった。そんな彼から来て早々発せられた言葉にバルドは眉をしかめる。

クロノ「ああ、まえに攻めてきた艦隊の一隻に発信機を付けておいたんだが、ついさっき居場所を特定できた。先に先行した偵察班からは、イノセントと組織の一員も確認したそうだ」

フェイト「それじゃあ……」

クロノ「僕たちはこれからその世界に行って彼等を捕縛する。出来れば、その時にイノセントの一体でも捕獲出来ればもっといいんだが……」

バルド「止めておけ、二兎追う者は一兎も得ずと言うし今回はそっちを捕まえにいった方がいいだろ」

クロノ「僕もそう思う。けど、上層部はその両方をやろうって考えらしい。既に、戦闘班と捕獲班の編成を始めている。多分、三日後には出発すると思う」

フェイト「そうなんだ……」

バルド「んで？俺達が呼ばれたのは何か訳があるんだろ？」

そのバルドの疑問の声にリンディが答える。

リンディ「二人には、私達と同じ戦闘班として加わって欲しいのよ」

バルド「……何か裏があるのか？」

リンディ「ええ、そこには誰かが使っていると思われる研究施設も確認されているわ。私達はそこに突入して確保、その後は敵部隊の捕縛に移る手筈になってるわ」

クロノ「けど、編成した人数がかなり少ないんだ。もし僕達が外れたら指揮系統にも支障が出る。だから、バルドにはグランディオンから兵を派遣してもらいたい」

バルド「俺にか……？」

クロノ「君はあの世界で中将なのだろ？だったら、部隊も持っている筈だ。出来れば、グランディオンにもこの戦いには参加してほしいと言うのが上の心情らしいけど……」

フェイト「バルド……？」

バルド「……まあ、確かに俺は部隊は持ってるぜ。けど、グランディオンの兵を動かすには理由が足りないな。そりゃあ、あいつ等は敵と見なしているが……そもそも、あいつらは自分達の世界とその同盟世界に支障を齎す様な時に動くのが基本なんだ。まだ管理局は同盟して日が浅いし、前の事件もある。ウルフが許可しても殆どの部隊は動こうとはしないだろうな」

クロノ「やっぱりそうか……」

バルド「けど、個人なら動かせると思うぜ？」

クロノ「個人……？それじゃああまり戦力には……」

バルド「まあ、その日まで楽しみに待ってろ。そうなると、ガルドとセフィリアを連れていった方がいいか……」

フェイト「シグナムとかは……？」

バルド「いや、シグナムを連れていくとなるとあの三人も一緒に来るだろう……。そうなると後が面倒になる」

フェイト「あ、そっか……」

シグナムを連れて行くとなると、絶対にジークやエリス、クラレンスは一緒に来るだろう。そうなれば管理局の者とぶつかる事は目に見えている。今は、三人を六課で保護している様なものだが本局には取り調べ中としか返答していない。もしばれたら後が面倒くさい。

バルド「エリオやキャロもまだ早いし、本当ならお前も二人の為に残って欲しいんだが……」

フェイト「ううん、私も行くよ」

バルド「まあ言うとは思っていたがな……」

フェイト「バルドの背中は私が守るから！」

バルド「まあ、足引っ張らない様に気合い入れて付いて来いよ？」

そう言って微笑み、フェイトの頭をポンポンと撫でる。子供扱いされているのが分かり少し頬を膨らませる。その仕草がまだまだ子供っぽいのでフッと笑う。

ただ、それを見ていたリンディが二人に爆弾を落としてきた。

リンディ「あら？二人とも随分と仲良くなってるわね？」

バルド「そうか？前と差して変わりないぞ？」

リンディ「そう？フェイト……」

フェイト「なに？」

リンディ「今晩は、皆で赤飯かしら？」

フェイト「はわっ／／／／／／／／／／／／／／！！？」

その言葉にフェイトの顔がボンッ！！と音を立てて一気に朱に染まった。

リンディ「あらあら、もう彼とそこまでいったのね？孫が何人出来るか楽しみだわ～♪」

バルド「おいこら、別に俺とフェイトはそんな関係じゃないぞ？」

フェイト「そそそそそそ、そうだよ！！ちょっと、毎晩一緒に寝てるだけｄ――「余計な事を言うなバカ！」ふえ？はわわわわ／／／／／！？」

折角バルドがはぐらかそうとしたのにフェイトがあっさりと最近の事を暴露してしまった。そして、真っ赤になりながら目を回すフェイトを見てバルドは、もうダメだこりゃと諦めて頭を軽く抱えた。

リンディ「あらあら、随分と……／／／／／／」

クロノ「毎晩……一緒、だと……！！？」

フェイト「ち、違うの！！これは、その、えっと……／／／／／！！そう言う事じゃなくて、ただ一緒にいるだけで別にそれはまだ先の話ｓ――「フェイト、もう止めとけ。それ以上言うと自分の首が

締まっていくぞ……」ふえええぇぇぇぇぇぇん……／／／／／／」

クロノ「如何いう事だ、バルド。事の次第によっては、まず先にお前を逮捕しなくてはいけない様だ……」ゴゴゴゴゴ！！

バルド「面倒くせえな……。まあ、何時かは通る門だし、それが少し早くなっただけの事だからいいか……。ああそうだよ、俺はフェイトと付き合ってんだよ」

そう言って隣にいる彼女の肩に腕を回して抱き寄せる。もうフェイトは恥ずかしさで顔を真っ赤に上気させて完全に混乱しきって目を回している。

その後、勝ち誇った表情でフェイトを腕の中に抱いているバルドにクロノがシスコンよろしく、喧嘩上等！！といった感じで彼と取っ組み合いを始め、フェイトはフェイトで母、リンディにそこまでの事を詳しく、根掘り葉掘り聞かれる事になったのは言うまでもないだろう……。

恐るべきはハラオウン家か……。

結果的に言えばクロノはあっさりとバルドに負けた……。

一方、なのは達は六課の一室に厳重に保管されているロストギア『白の御珠』の周りに集まっていた。少し離れていても感じられる膨大な魔力の波動。これ一つでも十分な脅威となる。

なのは「これが、昔のベルカ王『皇帝』の持っていた御珠の一つ、『白の御珠』……」

シャーリー「凄いですよ。これ一つで、余裕で街一つが吹っ飛ぶ位の魔力が込められています！！」

一応、本局にロストギア確保の旨を伝え、管理の事を話し合った結果、此方が厳重に管理しろという返答が来た。

コレット「なんか、とても危険な感じがするよ？」

クラウド「破壊するという事はできないのか？」

はやて「それはあかんで、ロストギアっちゅうのは何が起こるか全く見当がつかへん。もしかしたら、大爆発する可能性も……」

リイン「ともかく、破壊はダメなのです～」

クラウドの破壊するという案は却下される。ロストギアは本当に何が起こる分からないのだ。細心の注意で扱わねば、何かを切っ掛けに発動してしまう可能性がある。

アル［グルルルゥゥゥ……］

コレット「アル達もすごく警戒してる……。よっぽど危険なんだね～、ロストギアって…」

あのアル達ですら、その一つの珠から発せられる波動を感じて威嚇している。

はやて「シャーリー、此処に置いとくしかないで。これの解析を頼んでええか？」

シャーリー「了解です！！」

シャーリーにロストギアの事を任せてなのはとはやては訓練所にそのまま向かった。

そこには、今まさに摸擬戦を行おうとしているセフィリアとシリウスがいた。

その二人を同じく訓練所に来ていたＦＷ陣も見ている。

セフィリア「シリウス、何時でもいいよ！！」

シリウス「よ～し……いっくぞ～～！！！」

両手に神威を装備してシリウスが地面を蹴って一瞬で距離を詰める。拳を作ってそれを一気に打ち出す。その一撃をセフィリアは地面を滑る様な体捌きで避け、そのままシリウスのサイドに移動しそこから潜身脚を繰り出す。

足払いをシリウスはジャンプで避けて空中で体勢を整え上空から青い炎で出来た狐を幾つも生み出して射出、不規則な軌道でセフィリアに飛んでくる。

セフィリア「神速一閃、葬刃！！」

目で追えない抜刀剣が繰り出され狐たちが全て両断される。そして、その斬撃はシリウスを捉えるが彼は直撃した途端に二つに裂けて霞んで消える。

セフィリア「もう幻術を発動してた……？なら、そこっ！！」

素早く反転しながら鞘から剣を抜き放つと金属同士がぶつかる様な

高い音が響く。
セフィリアの剣の先にはシリウスがいて神威と激突している。

シリウス「いや～やっぱばれるよね～」

セフィリア「それなりに一緒に行動してるからね。大体の癖は覚えているよ？」

シリウス「それは、こっちも同じ……っさ！！！」

互いの得物を弾いて後方に飛び退く。地面に降り立ったシリウスの体から魔力が溢れる。

シリウス「第六リミット解除、狐高夢淵（ここうむえん）…発動」

シリウスの身を魔力が覆い、獣耳と六つの尾が形成される。
それに対してセフィリアも魔力を溢れさせる。

セフィリア「それじゃあ、こっちも……。王家の魔眼『イビルアイ』発動」

セフィリアの目が鮮やかな紫色になる。二人の魔力が中央でぶつかり合って激しく競り合う。その衝撃で地面が割れて、宙に浮き上がる。

二人が同時に動き出す。シリウスは魔力の尾を伸ばしてまるで鞭のように激しく動かす。セフィリアは、その尾を剣で弾き、時にはその上に飛び乗ったりと猛攻をやり過ごして隙あらば剣を抜刀して斬撃を飛ばす。その斬撃をシリウスの尾が盾となって防いでいる。一進一退の攻防が続く。

ティアナ「なに、あの戦い……」

スバル「うわ～、全然見えないよ……」

エリオ「うぅ～～、か、辛うじて、ぼやけて……見えない！！」

キャロ「シュミレーションの街がもうボロボロだよ……」

最早、二人が暴れる周囲の街は原型がない。尾が横に振るわれるとその先にあるビルが一撃で倒壊、セフィリアの抜刀剣が繰り出されると建物はバターを切るかのようにすっぱりと両断される。

動かなかったシリウスが遂に動きだす。無数に迫る魔力の尾が縦横無尽にセフィリアに襲いかかるが、彼女はそれを全て反応して防ぎ、体を流れる様な体捌きで回避する。

セフィリアは、自分の横を通り過ぎる尾を蹴って一度離れる。地に降り立つと同時に彼女の足元に魔法陣が出現する。それと同時にシリウスも魔法陣を展開。二人同時に詠唱を始める。

セ・シ「「天光満る時に我はあり、黄泉の門開く所に汝あり、出でよ、神の雷!!!インディグネイション!!」」

二人の前に紫色の魔法陣が出現、それに光が集まり次の瞬間、強烈な閃光と同時に雷が水平発射。地面を抉り周囲の建物を破壊して飛び、互いにぶつかり合った。二つの強力な魔術が互いを喰い合う様に攻防する。ぶつかり合っていた魔術は遂に大爆発を起こし、シュミレーションで出来た街全てを消し飛ばした。

はやて「なんやねん、あのえげつないもんは……」

なのは「にゃははは……。ブレイカー同士をぶつけた時みたいな加害範囲だね……」

その爆心地にいた二人はというと、全くの無傷で立っている。セフィリアは前方に魔術障壁を、シリウスは自身の魔力の尾で自分の身を包んで被弾を避けていた。

再び二人が動き出す。街一つが消し飛んだにも拘らず二人は未だ疲れの色が見えない。寧ろ、笑っていた……。

シリウス「烈破墜塵脚!!」

セフィリア「烈震虎砲!!」

シリウスの蹴りとセフィリアの闘気がぶつかる。衝撃で互いが吹っ飛ぶが難なく体勢を整えて着地。

セフィリア「魔眼解放！！」

セフィリアの目が淡く輝く。それに呼応して彼女の魔力も跳ね上がり地面が彼女を中心に割れて浮き上がる。その岩の様な大きさの塊がまるで意志を持つかのように動きだしシリウスに襲いかかる。彼はそれを尾で問題無く破壊しながらセフィリアに向かって一本の尾を振るった。しかし、それが当る直前に彼女の姿が一瞬で消えてその一撃は空振りに終わる。

シリウス「あっ、やば……！」

セフィリア「はあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

シリウスが気付いて上空を見上げる。そこには、宙に浮いていた岩の断片を蹴って弾丸の如く落ちてくるセフィリアがいた。彼女は鞘に収めた剣の柄を持って構える。

セフィリア「神速一閃、葬刃・零式！！！」

シリウスの直ぐ脇に弾丸の様な速度で落ちて、そのまま着地する。その手には彼女の持つ、魔剣『ディスインテグレイト』がありそれ

をゆっくりとした動作で鞘に収める。キンッという音が鳴ると同時にシリウスに縦の線が奔る。そして、上下にずれていき二つに割れた。そんな彼を彼女は冷静な声でしゃべる。

セフィリア「それ……幻体でしょ？」

シリウス「ご名答～♪」

縦に割れたシリウスがニヤッと笑うと、ポンッと音を立てて煙となって消えた。

セフィリアはそれを軽く一瞥したあとに反対の上空を見上げる。

そこには、シリウスがまるで椅子に座っているかのように空中で腰掛けて足を組んでニコニコと笑いながら彼女を見下ろしていた。

セフィリア「幻術『夢幻』……。時間が経つにつれてドンドン凶悪になるね……」

シリウス「ってかあれが幻体だって気付いてたでしょ？なんで、そのまま戦っていたのさ？」

セフィリア「だって、楽しいでしょ？」

彼女の口からそんな言葉が出ると、シリウスもニヤッと口の端を大きく上げて笑う。互いに得物を構える。そして、二人が再び……

はやて「やめやめやめ〜〜〜〜いっ！！！！！此の侭やったら訓練所が壊れるわ！！！！」

ぶつかることなくはやてによって強制終了された……。

――――――――――――――――――――

はやて「ホンマに、訓練所が壊れるかと思ったで……」

シリウス「いや〜、申し訳ない。ついつい、やっちゃうんだよね〜♪」

ケラケラと笑うシリウスを見てはやては溜息を吐く。彼等が本気でぶつかり合ったらホントに街一つでは済まないだろう被害になるのは容易に想像できた。ってか、島一つが海に沈没するのではないだろうか……？

はやて「…………」

シリウス「ん？はやて、どったの？」

突然黙りこんだはやてに首を傾げて声掛ける。しかし、それにも返事はない。

今のはやては思考の海で漂っていた。シリウスが先程摸擬戦で見せたあの尾……。

あの晩に見たあの尻尾とは全然違った。さっきのは魔力で出来ていて半透明の金色だったが……あの日の晩のシリウスの尾は…質量のある感じの本物の尾だった様に見えた。

シリウス「はやて～？お～～い？」

では、彼の本当の姿は……？時々思うのだ、シリウスは本当の姿を隠しているのではないか？と……。

最初に見たのはグランディオンでイノセントに呑まれて殺されそうになった時、次にモンスターの世界でギルを追い払う時に見せた魔力で出来た尾……。

だが、それではない質量のある尾を見てしまった。それでは……。

知りたい、彼の事を……シリウスの事を知りたい。この時はやては、そう思ってしまった。そうだ聞いてしまおう。聞いてしまえばこのモヤモヤする気持ちも晴れる筈だ……。

シリウス「は～や～て～、返事しないと胸揉んじゃうぞ～？」

はやて「シリウス君……」

シリウス「はい、すいませんでした！！胸を揉もうだなんて冗談ですはい！！」

何かシリウスが目の前でジャンピング土下座を繰り出しているが、今はそんな事は如何でもいい。はやては疑問に思ったそれを彼に聞くことだけを考えていたから……

はやて「シリウス君は……一体、何者なんや……？」

シリウス「はやて……？」

はやて「知りたいんや、シリウス君の事……。もしかして、シリウス君は――」

はやては思っていた事を口に出そうとした。

だが……その時だ

――ドクンッ！！――

はやて「うっ、く、くぅぅ……！？」

シリウス「はやて？」

突然、胸のあたりが苦しくなり彼女は膝を付いた。その痛みはドンドン上に登って来ており遂に頭にまで侵入してきた。

はやて（な、なんやこれ……！？あ、頭が…痛い！！）

シリウス「はやて、如何したのさ！？」

ジリジリと焼けるような感覚が頭の中で暴れる。
そして遂に、彼女の頭の中で何かが破裂した。

はやて「くっ、あああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

言い様のない激痛が彼女の頭を支配する。身を引き千切られそうな激痛が続いて起きる。呼吸が浅くなり、額からは珠の様な汗が噴き出てくる。

その彼女の頭の中で何かが映し出されてきた。

多くのまるで陰陽師の様な人が札を構えていてその先には九つの尾を持った…何かがいた。それはその尾を巧みに操り、人を吹き飛ばし、放たれた札を何かの波動で消し飛ばして、青い炎で街を焼いた。その澄み切った緑色の目が燃え盛る炎の中で怪しく光り、その者は口の端を大きく上げて笑っている。

はやて（な、何やこれは……！？）

ぼやけている映像に彼女は戸惑う。激しい痛みの所為で徐々に意識が遠くなり出す。

シリウス「はやて！！はやてしっかりしろ！！」

最後に見たのは、自分を必死になって呼ぶシリウスの姿だった。

そして、はやての意識は真っ暗になった……。

---

気が付いた時、はやては森の中に横になっていた。

鳥の囀りが周囲から聞こえ、栗鼠などの小動物が木の実をかじっていた。

はやて「此処は……何処なんや？」

起き上がって周りを見回すもあるのは木、木、木、木、木、木、木、木、木、木、木、木、木、木、木、木だけ。完全な森の中にはやてはいた。

さっきまで自分はシリウスと共に六課にいた筈なのに、何でこんな所にいるのだろうか？

はやて「兎も角、皆のところに戻らへんとな……」

さっきまでの頭痛もなくはやては立ち上がって歩きだす。

暫く歩き続けると、先に光が見える。出口だと思って駆けだす。森が切れてそこは開けた草原だった。そこに、一本の大樹があり、そこに金髪の誰かが座っていた。

？？？「ふぅ〜、客人か……」

声からして男性だろう。その人はその大樹の木陰で座っていてその掌に綺麗な青い蝶が止まっていた。
何故だろうか、その人の顔がよく見えない。

はやて「あ、あの……」

声を掛けるが返事はない。ムッとしてはやては、近づいてその肩に手を伸ばすがそれは男の体を擦りぬけて通り抜けた。それに驚きているとその男がピクリと動く。

そうこれは、映像……。誰も変える事の出来ない過去の映像。
彼女は、今、誰かの過去を覗いているのだ……。

???「如何してこの地に足を踏み入れるのだろうね、人間……」

蝶を見ていた緑色の目が鋭くなり此方を睨む。その眼つきにはやては背筋が寒くなる。だが、その目はよく見ると自分を見ていなかった。その目線の先は、自分の背後……。はやては、自分の通った道

の方を振り向く。

――シャン、シャン……――

何か細い金属同士がぶつかるような音が闇の向こうから聞こえる。
気付けば、周囲で声を出していた鳥達が静まり返っていた。

そして、森の中から錫杖を持った法師の様な人が現れた。

頭に目深に被っていた笠を軽く上げてその人を見る。木の下にいる男性は動かないでその法師を見ている。

法師「この地に住まう悪しき妖怪か……」

???「……だったら?」

法師「いま直ぐにこの地より立ち去るがよい。さすれば、手荒なまねはせん……」

妖怪?「……やだね」

妖怪と呼ばれた男はそれにあっさりと拒否の返事をする。

妖怪?「俺がこの地を去ったら、この地に住む動物達は如何なる?

どうせ、直ぐ近くの村の奴らに言われたんだろ？この地に住んでる妖怪を退治してくれってさ……」

法師「分かっているなら……」

妖怪？「だから嫌だって言ってるだろ？禿が……。俺が去ったらこの地は人間が開拓してしまう。そしたら、この地に住んでるこの子らは出て行かなくちゃいけない。食物連鎖の真理を捻じ曲げる人間なんか滅びればいいのに……」

法師「私から、村人に言っておくぞ？」

妖怪？「無理無理。その約束は絶対に三日ほどで崩れるって。人間の口約束ほど信頼できないものはないからね～」

法師「ならば、いかしかたあるまい……」

法師が笠を外して横に投げて錫杖を構える。それを男はニヤリと口の端が持ち上がる程の笑みを作る。青い蝶が天へと舞い上がると同時に立ちあがる。

妖怪？「お前は、俺を楽しませてくれるのかい？この、『千年血樹（せんねんけつじゅ）』の下に転がっている奴らよりも……？」

はやて「ひっ！？」

彼の足元にはよく見ると、何かの骸が転がっていた。それも、一つ

ではない……十も、百も、いや、それ以上の骸が転がっておりそれにその大樹の根が絡み付いていた。それを見て、法師が目を細める。

法師「その木も妖(あやかし)の類か……」

妖怪?「そうさ、人間の身勝手な争いに巻き込まれて長い年月純粋な水でなく穢れた血を吸い取り続けた所為で妖怪化した哀れな木さ……。こいつは、あと一人で満たされる。あと一人で、こいつは満たされこの地を統治するに値する力を得る事になる……」

法師「そうはさせん!!私が滅してくれる!!」

妖怪?「お前に、出来るか?小さき生命(いのち)よ……」

男の体から魔力とは違う別の禍々しく、寒気の奔る気配が漂い出した。

法師「これ程の妖気……!?貴様は、唯の妖怪ではないな!?」

妖怪?「答える訳ないでしょ?それっ、行くよ!!沢山、足掻けっ!!!」

男の周りに青い炎で出来た狐が幾つも現れる。それが、放たれて法師に襲いかかる。法師は、錫杖の柄の先を地面に強く打ちつけると周囲に光が集まりそこから人が五人現れた。光を衣の様に淡く纏っている人達は、法師の前に集まり障壁の様な物を張る。炎の狐はそ

れに当ると弾かれて霧散した。

その光の人達を見て男は目を細める。

妖怪？「へえ、五暁守人（ごぎょうもりびと）ね……。此処まで姿をはっきりと顕現した精霊は始めて見るね～」

法師「あの妖（あやかし）を滅せよ、守人達よ！！！」

法師の声に弾かれる様に五人の精霊は飛びだす。神の使いたる羽衣に身を纏った彼等を男は余裕の笑みで迎え撃つ。一番長身の守人が光球を幾つも放つ。それを男は青い炎の狐を召喚して放ち、相殺する。

次に、接近してきた二番目に背の高い守人が右手に光を集束させてそれを放って来た。それを片手で逸らして男は飛び上がる。上空に浮いた彼を狙って札を構える女性の守人。札を幾つも自身の周囲にまるでそこに壁があるかのように張り、不思議な陣を描くとそれが光り、そこから巨大な閃光が放たれる。

真っ直ぐ飛んでくる閃光を彼は足に妖気と呼ばれるそれを纏って振る。蹴りがタイミングよく当り、閃光は空高く打ちあがって消える。その隙に死角から一番背の小さい守人が光の剣で斬りかかるが、そのまま男が回転し妖気を纏った足でその守人を蹴り飛ばした。

そして、直ぐにその場から飛び退くとそこを光の線が描かれる。その線が飛んで来た方を見ると弓を構える最後の守人が立っていて、此方に矢を向けている。

妖怪?「いいね……。いままでで一番、連携の出来てる奴らだ……」

その彼を中心にひし形をした青い宝石が四つ浮き上がり淡く光る。
それに気付いた彼は少しばかり驚いた顔をする。

妖怪?「おっ!?これは……!?」

法師「封っ!!!」

法師が声を上げると、そのひし形の宝石が光りだして彼の左右と上下に移動して次の瞬間には何か結界の様なもので彼を閉じ込めた。

法師「四元護法陣!!」

妖怪?「おおっ!?まさかの禁法!?人間風情が……!!」

法師「悪いが、直ぐに終わらせてくれる!!五暁守人!!最大攻撃だ!!!」

それに守人達が動き出し、何かを描く。それは、五芒星となってその中央に結界に閉じ込めた彼がいる。その彼に向かって各々が光を集束させる。

法師「これで、終わりだ！！！」

妖怪？「くそ、この……人間がぁぁぁぁぁぁ！！！」

法師「滅っっ！！！！」

法師と守人達が一斉に特大の閃光を放った。五つの方向から妖を滅する神聖な光が彼に直撃する。彼を包み込む様に閃光が混じり合い巨大な球体となる。

妖怪？「ぐがあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

そして、彼の断末魔の様な叫びと共に光球が爆ぜて大爆発。そこには、何も残されなかった……。

妖怪を退治したと思った法師が息を軽く吐く。

法師「ふぅ……。残るは……この大樹ｋ――「ふぅ～ん、これで終わり？」なっ！？」

しかし、法師の背後から声が聞こえて慌てて振り向くとそこには、男が怪我一つなく悠然と立っていた。

法師「馬鹿な！？あの攻撃で滅せないだと！？」

妖怪?「いや～、凄まじい威力だね。確かに今の一撃を喰らったら痛いだろうね。たぶん、掠り傷くらいは出来たと思うよ?」

クックックッと声を殺して笑うその男の前に守人達が集まり再び得物を構える。

法師「くっ、ならばもう一度……!!」

妖怪?「もう一度?君、何を言ってるのかな?俺は、一度も攻撃されていないよ」

法師「何だと!?」

妖怪?「クックックッ、君一度、自分が攻撃した方を見てみなよ?」

そう言われて法師はその方角を見る。上空には何もないだが、その遥か高くに不思議な壁がある。そしてそれは若干斜めに傾いており、その角度の方向には……黒煙を上げて燃え上がる村があった。

法師「ま、まさか……!?」

妖怪?「そっ、君は何もない空間に最大級の攻撃をした訳。そんで、その攻撃は俺が最初から作っていた反射板に当って見事、村に命中♪あの村の人間はもれなく全滅……。これで、この森の脅威は少しは無くなった訳だ。ご苦労だったね、法師……」

法師「くっ、貴様あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

だが、再び振り向くとそこには誰もいない。

妖怪？「君さ…。俺が何て呼ばれていたか知ってるかい？」

背後から耳元で囁かれる。錫杖を振るうがそこには誰もいない。気配や妖気を探るが、全方向からそれは感じ取れた。そして、悪しき気配には敏感な守人達もその位置を特定できない様で激しく戸惑っている。

法師「くっ、姿を隠してないで出て来い！！！」

妖怪？「俺は最初から逃げも隠れもしてないよ？そもそも、俺は最初から一歩も動いていない」

声だけしか聞こえない恐怖に徐々に焦りが混じり出す法師。

そんな中、はやてはその者の位置が何となく分かった。この戦法は前に見た事がある。それに、感じるのだ……。法師から百メートル離れた正面に彼がいる……！！その彼が三日月の様な笑みを作りゆっくりと動き出した。

妖怪？「妖怪の鉄則は……相手を如何に騙し、相手を畏れさせるかだ……」

擦れ違いざまに長身の守人に鋭い爪を生やした手を振るって、両断した。急に仲間が消えて精霊が恐怖で悲鳴を上げて周囲に散る。しかし、そもそも方向感覚すら効かないこの男の作りだした場では、何処に逃げようとも、景色が変わっても目の前からは全く動いていない。

それを理解できない（そもそも理解すら叶わないが……）法師を含めて守人は慌てふためくだけだ。そして、一人、また一人と守人は消える……。

妖怪？「俺は、ちょっとだけ綺麗な空気のある此処でゴロゴロしてたのにさ、そんな憩いの場を下らない理由で開拓しようだなんて、やっぱり人間はつまらないねぇ～」

法師「くっ！？何処にいる！？」

妖怪？「此処さ、此処にいるのさ。って言っても理解できないよね？そもそも君は夢を見てるのさ……。そう、人間として、法師として悪を滅する旅をしているっていう夢をね……」

法師「な、なんだと！？」

妖怪？「全ては、夢幻の如し……。君たち人間は、夢を見てるのさ。

この世の絶対君臨者と思い込んでいる夢をね……。この世には君達『人』よりも強大な者達は幾らでも居るのさ。そう、俺を含めて、ね……」

法師「夢幻だと……っ！！！ま、まさか…お前は！？」

妖怪？「気が付いた？でも、もう遅い。さあ、夢から覚める時間だよ……」

法師の前に男が現れる。その笑みは何処までも残忍であまりにも恐ろしい笑みだった。彼が手を翳す。法師の動きが止まる。彼はその手を動かして、千年血樹に向けると法師の体が浮きその方角に進む。

そして、その掌を徐々に握ると、それに合わせて法師の体が縮みだす。

法師「ぐ、ぎ、ごあぁぁぁぁぁぁぁ……！？」

妖怪？「これで、この地は平和になる。もう此処にいる必要は無くなったかな……」

法師「こ、の……天、ｂ――！！！」

妖怪？「黙れ……」

そして、冷徹な顔でギュッと手を握る。それと同時に法師が潰れる。

肉と骨の潰れる嫌な音が響き、はやては顔を青ざめて目を閉じて耳を塞いでしゃがみ込んだ。そして、ゆっくりと目を開けるとそこには、法師は居らずあるのは、新たに骸の仲間入りした、新しい肉塊だけだった……。

はやて「うっ……！！」

思わず込み上げる吐き気に口に手を当てて何とか堪える。

その死骸に大樹が根を伸ばして巻き付き血を吸い取る。徐々にカラカラに干からびていき、ついに骨と皮だけになる。骸の仲間入りをした法師の残骸を男は見下ろす。

妖怪？「その名を呼ぶな。それは俺が認めた奴以外は絶対に言わせねえよ」

その時目の前の大樹が赤く輝き美しい真紅の花を咲かせる。その花から一枚の花が舞い落ちる。

それは男の掌の上に落ちた。赤く美しく輝くその花をくれた大樹を見上げる。

妖怪？「くれるのかい？」

それに大樹は揺れて応える。それを見てフッと笑いそのまま彼は背

を向けた。

妖怪？「んじゃ、この地は君に任せるよ。何時か、この地は妖怪と動物の最後の楽園になると思うから……」

その一つの花を彼は大事にする様に何かの術式で包み込んだ。そして、虚空にその花は消えた。

妖怪？「さて、久々に京に行くかな～。あいつ、会ったらどんな顔するかね～♪」

そう呟きながら彼は森の奥深くに姿を消した。それと同時に大樹を、いや、その森一帯を濃い霧が包み始める。その赤く輝く美しい花に青い蝶が一匹だけ飛んで来てとまる。

それを最後にはやての視界も真っ白に染まった。

はやて「く、ううぅ……ううん……」

再びはやてが目を覚ますと、今度は何時も見慣れた六課の天井が目に映った。自分は、誰かが（恐らくシリウスだろう）ベッドで寝かせてくれたのだろう布団も丁寧にかけられていた。そして、布団から起き上がると軽く頭痛が起きて手を頭に添える。

そこに丁度良くドアが開いてシリウスとリインが入って来た。

シリウス「いいかい、リイン。はやては今、就寝中だからし～だよ？し～？」

リイン「はいなのです。し～ずかに～っとです……」

はやて「起きとるで？」

リ・シ「「どひゃあぁぁぁ～～！？」」

はやての声に二人は大げさなリアクションで飛び上がった。

オーバーリアクションにはやては苦笑いする。

リイン「はやてちゃん、起きてて大丈夫なのです？」

はやて「ありがとうなリイン。けどもう大丈夫やで、ちょっと立ち眩みしただけやから……」

シリウス「いやいや、立ち眩みってレベルじゃ無かったよ?今日は、安静にして寝ているがよろし」

はやて「せやかて……」

シリウス「はいはい、文句は後で聞いてあげるから横になる!ふぅ～、はやてに回される書類の数が多いのかな?……今度、他の部署に均等にプレゼントするべきか……」

リイン「シリウス君、今何か言ったです?」

シリウス「ん?な～んにも言ってないでござるよ♪」

最後辺り、周りの部署への問題発言をした様な気がしたが……気にしないでおこう。

それにしても、不思議な夢だった……。

はやて「人は、夢を見ている、か……」

シリウス「ん?はやて、どったの?」

はやて「シリウス君、人は夢を見てるんやろか?今、生きているっていう夢を……?」

思わず、シリウスに問いかける。それをシリウスはニコニコと笑い

ながら答えてくれた。

シリウス「そうだね。人は夢を見ているんだよ。この世の絶対君臨者と思いこむ夢を……」

その言葉にはやては目を見開く。それは、あの夢で語っていた人物が言っていた言葉とほぼ同じ……！！

更にシリウスは言葉を紡ぐ。

シリウス「全ては夢幻（ゆめまぼろし）……。胡蝶の様に美しく、そして、儚い……。そして、良い夢だけじゃない、悪い夢、悪夢だって見るさ。けど、その悪夢も含めて、それを抱いて歩むことこそが……夢幻（むげん）なのさ。夢を見る者は全て儚き生命（いのち）……。短い一生で叶えたいと思うものを具現化する、それこそが夢さ……。だから、人は夢を見る。自分達が生命の食物連鎖の頂点に立つ者っていう夢をさ……」

シリウスははやての前髪を軽く掬う様に撫でながら語る。何処か悟った様なそんな風に見える。

けど、はやては思うのだ。

違う、人はその夢を見るだけではないと……。

はやては、自分の髪を掬うその手をそっと掴む。

シリウス「ん？」

はやて「違うで、シリウス君。人は、そんな夢を見ているばかりやない……。うちは、別にそんなものに興味なんてあらへん。うちは、皆とずっと仲良くいたい…。その夢を叶えたいから今を歩んでるんや…」

そのまま、自分の胸にそっと乗せる。シリウスの手にはやての心音が伝わる。驚く彼を彼女は微笑んで見つめる。

はやて「人は、夢を見てはいる。けど、今を生きてるから見ているんや……。夢を見たいから、希望を見たいから生きているんや。うちも今此処に生きてるんやで…」

シリウス「……ふふっ。いやはや、はやてには一本取られたね～。人は希望を見るから夢を見るか……。うん、中々に面白い考えだね～♪」

はやて「ちょっと、臭いセリフやけどね／／／／／」

シリウス「ううん、そんな事ないさ。俺はそんな事考えもしなかったからね、うん、とってもいい言葉だよ」

そうして、二人はクスッと笑う。和やかな空気が漂う。

シリウス「ところでさ、はやて……」

はやて「なんや？」

シリウス「俺はこの後、如何すればいいのかな？結構、理性を保つの大変なんだけど……／／／／／」

はやて「へ？」

そう言われてはやては気付いた。今自分が何をしているのかを……。

そう、自分の胸にシリウスの手を乗せているのだ……。一気に血液が頭に上昇していき顔が真っ赤に染まりボンッと音を立てた。

リイン「はやてちゃん大胆です～／／／／／／／！！」

はやて「ち、ちがっ／／／／／！？リイン、これは違うねん／／／／／／！？」

シリウス「う～～ん、はやての胸のサイズは、なんと以外のｂ――「個人情報漏洩禁止や！！！」粛清！？」

素早くシリウスの顔面に鋼鉄ハリセンを叩き込んで黙らせる。そして、直ぐにシリウスとリインに背を向けて布団に潜り込んだ。

バクバクと心臓が早鐘を打っており、自分の頬が物凄く熱を持っているのが分かる。

はやて（何でうちはあんな恥ずかしい真似をしたんや～～／／／／／／！！）

今更になって羞恥に悶えるはやて。

もうこうなったらあれだ……！！　夢を見よう！！　そうだ眠ってしまえば万事問題無い！！

そう思い込んではやては、必死になって眠れ～眠れ～と自分に暗示を掛ける様に頭の中で語り続ける。

しかし、さっきの事が思い浮かぶ。人間恥ずかしい事をすると中々忘れる事の出来ないものだ……。

結論から言えば、はやては何度も同じ映像が浮かんでしまって、悶々と悶えていた……。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

その日の晩、シリウスは自室の窓際に腰掛けて片手に酒ビンを持って月見をしていた。

シリウス「生きているからこそ命は美しい、か……」

ついつい昔の旧友が語った言葉を口に出す。フッと笑って酒を軽く煽る、年代物の酒は彼の喉を潤す。

シリウス「前は全然理解できなかったけど、今なら何となく理解できるな……」

昔の自分にも教えてやりたいと思う、人はなんと美しき希望を持っている。自分の恋した彼女はなんと秀麗で可愛らしい存在だと……。

シリウス「時は回る、クルクルと止まる事無く～世界の終焉が、全てが終わるその時まで～♪」

彼は静かに歌う。目を閉じて昔を懐かしみながら…今を楽しむ様に……暫し、彼の部屋から歌は途切れる事無く奏でられていた。

そして、歌い終わり軽く息を吐いてから再び酒を飲む。全く、長い月日を生きると中々、酒では酔えないな……。自分を酔わせる事が出来るのは……そう思ってクックックと声を殺して笑う。

掌の上に虚空からある物を取り出す。暗い部屋でも分かる程に赤く輝く美しい花がそこにはあった。

シリウス「今の俺を見たら、君は、如何思うんだい？暁之姫巫女（あかつきのひめみこ）よ

……？」

それを見ながら決して枯れる事なく花を咲かせ続けるそれに問いかける。

花は答える事なく静かにその存在をその場に表しているだけだった。

シリウスはフッと笑って再び歌を口ずさむ。誰も聞いていない、彼だけの時間は静かに過ぎていく。

静かな夜は時を刻みながらゆっくりと回る、止まる事なく一歩一歩、踏みしめていく。

それだけである……。

# 第六十五話（後書き）

オリジナル技紹介

葬刃・零式

相手の目の前から一瞬で消えて懐に飛び込んで零距離で葬刃を放つ、葬刃のバリエーションの一つ。気付いた時には両断されていると考えた方がいい。

孤高夢淵

解析不能な不可思議な力を解放する。魔力で出来た尾を自在に振り回して攻撃、防御など多様性の利く技。射程はかなり広め。

さて、はやてにも異常が起きましたね。

ガルド「あれも、感応現象か……」

一体誰の夢を見たんでしょうかね?それにしても、初々しいね～はやてもシリウスも。

クラウド「どっちかって言うとシリウスははやてをからかっている様に見えるな……」

シリウス「可愛い子ほど、苛めたくなるのは男の性さ！！」

はやて「んな訳あるかい！！」

シリウス「ナイスツッコミ！？」

あまり此処で暴れないでね～。さて、次回の更新もなるべく早く出来るように頑張りますよ！！読者の皆さん、これからも宜しくお願いします！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第六十六話（前書き）

六十六話更新！！

いやはや、今回も難産だった……。

ロイド「今回はどんな内容なんだ？」

ふむ、簡単に言えばフェイトさんとバルドは出張に出かけます。

カイン「前回の話で出た、海賊どもの拠点叩きに行くのか？」

そうですね。

では、本編をどうぞ！！

# 第六十六話

三日が経ちフェイトとバルドがクロノ達と共に出発する日がやって来た。

なのは「フェイトちゃん、気を付けてね？」

フェイト「うん。行って来るね！！」

手を振りながら転送装置で待つバルドとガルド、セフィリアの下に駆けていき。四人は管理局本部に転移していった。

本局に着いた四人はそこからクロノ達が待つ格納庫のところに向かう。そこには、ＸＶ級大型次元航行艦が六隻と他中型戦艦が多数出撃の準備を終えていた。そして、その戦艦の周りには多くの魔導師達が待機していた。

その中にクロノの姿を見つけてフェイトは声を上げる。

フェイト「クロノー！！」

クロノ「ん？来たか……」

バルド「二百人程か……それなりに集めたな」

クロノ「これでもまだ足りない位だと僕は思うけどね。この人数から分けて戦闘班を百人、捕獲班を百人に分けるって言うから無茶だと思う……」

バルド「まあ、無理だって思うのは着いたら分かるさ」

クロノ「それで、グランディオンからは……？」

バルド「ああ、そろそろ着くと思うぞ？」

その時、直ぐ傍で空間が歪む。それに何事かと周囲の魔導師が集まりデバイスを構える。そして、その中から三人の人物が現れた。

それは……

ニーア「バルド、来てやったわよ」

フレア「此処が管理局ですか……」

シェリド「うん、中々にいい設備だね」

グランディオンの元帥、ニーア、フレア、シェリドだった。突然現れた三人に魔導師達は警戒する。そこを割ってバルド達が三人の下に集まる。

バルド「よお、来たか」

ニーア「悪いわね。アリア達は向こうに待機させたわ。流石に元帥を総動員させる訳にはいかないのよ」

ガルド「別に気にするな」

クロノ「バルド、この人達は……」

バルド「グランディオンの元帥だ。こいつ等が今回同行してくれる」

ニーア「まあ、よろしく頼むわ」

シェリド「以後よろしく」

フレア「短い間ですがどうぞ宜しくお願いします」

集まっていた魔導師もクロノが話を付けて再び出撃の準備に散る。取り敢えず、クロノの艦の『クラウディア』の中に案内してその中にある部屋に招く。

そこには既に連絡を受けていたリンディが待っていた。

リンディ「皆さん来て頂いてありがとうございます」

ニーア「気にしなくていいわ。寧ろ悪いわね。こっちはあたし達以外はいないわ」

リンディ「いえ、来て下さっただけ本当に助かります」

そして、出撃の時間が来る。各艦が動き出して次々に転移を開始する。移動中にリンディはニーア達からグランディオンの事を色々聞く。

グランディオンには幾つもの軍隊に分けられていてそれぞれが役割を持っている。自世界の防衛、警邏、同盟世界の派遣、災害の発生時の救助作業、情報収集、物資の搬送の援助などなど様々な事を、それこそ市民の小さな事にも動く。人員が豊富であるからこそ成せる事が多い。

訓練もそれに伴い厳しくなる。訓練時間の中には大訓練と呼ばれる長時間の訓練がある。一日の四分の一、つまり六時間だ。それを三日のローテーションで全ての部隊が行う。そして、忘れてはいけないのが戦闘の実践である。

各部隊がチームに分れて戦略を立てて相手の拠点を制圧及び降伏させるのが勝利条件だ。戦略はなんでもあり。戦車を主体に突撃するも、航空機で爆撃するも、固定砲台での援護射撃もざらである。ただ、それに使用するのは全て摸擬弾である。彼等は鎧装で完全武装して戦闘するので当っても大した怪我はない。その戦いでは毎回

全部隊が新しい戦術を練り戦闘を行う為に新人兵には非常に勉強になる。それだけではない、戦った部隊はその後にもう一度戦闘を見て今後の為にレポートを纏めたりする。

そんな事を毎日行われているそうだ。その話には流石にリンディもクロノもただただ驚くしかなかった。

今後の管理局の為にも、もっと色々聞きたいところだったが艦内にアラートが鳴る。

クロノ「如何やら着いたみたいだ」

バルド「管理外世界じゃ、管理局に見つかる訳ねぇよな……」

フェイト「でも、大丈夫なのかな?罠があるかも……」

ニーア「そん時は罠ごと突破すればいいのよ」

フレア「ニーア、そんな無茶は駄目ですよ?」

バルド「んで、俺達は如何すりゃいいんだ?」

クロノ「僕たちはこれから艦隊から離れて研究施設を制圧に動く。上層部もそれは知っているから僕達の艦は戦闘が始まると同時にそこから一時離脱する」

ガルド「それで、俺とセフィリアは管理局の艦隊の護衛か?」

クロノ「そうなるな」

ガルド「まあ、出来るだけやるが……統率のとれない部隊を何処まで守れるかは分からないぞ？」

セフィリア「ガルド、一緒に頑張ろうね？」

セフィリアの微笑みにガルドはやれやれと肩を竦めて了承した。

――――――――――――――――――――――――――――――

管理局の艦隊が次々に管理外世界に転移する。そこは無人世界で犯罪組織が隠れるにはもってこいの世界だった。

そして、管理局の艦隊が姿を現すと同時に海賊達もそれを捉えており慌ただしく動き出す。

兵士「管理局だ！！」

兵士「総員、戦闘配備！！動かせる艦を直ぐに動かすんだ！！！イ

ノセントの出撃準備開始だ！！」

次々と森の中に隠れていた艦が動き出して空に浮き上がる。その中にはプロヴィデンスの主力艦のＸＶ級大型次元航行艦『ドレイク』の姿も確認できた。更には輸送兼戦闘用大型航空機『グレイヴ』も数機も確認された。

通信士「敵艦隊を確認！！」

管理局艦長１「総員戦闘準備！！」

管理局艦長２「全砲門開放！！敵は絶対に殺めるなよ、全員を捕縛するんだ！！」

魔導師一同「サー、イエッサー！！！」

艦から魔導師達が次々に出撃する。対する次元海賊も兵を次々に出撃させ、スティンガーとイノセントも出撃させる。イノセント？型は五体一組の編成に瞬時に形成、赤い目で魔導師達を捉えると次々に突撃を開始した。

通信士「イノセント接近！！！」

艦長「砲撃開始！！撃ち落とせ！！」

戦艦から砲撃が開始。その砲撃にイノセント?型達が呑みこまれる。
それでも、怯むことなく?型達は猛スピードで突き進む。海賊達と敵艦隊から砲撃が開始される。

激しい艦隊同士の砲撃戦の合間で魔導師と海賊達、イノセント、スティンガーの攻防が始まった。

その戦闘から少し離れた所にクロノ達はいる。

クロノ「これより僕たちは敵の研究施設に侵入を試みる!!」

クロノの艦『クラウディア』は戦闘区域から離れる。その最中にハッチが開きガルドとセフィリアが姿を現す。

セフィリア「行くよ、ガルド!!セフィリア・ドム・バロム、行きます!!!」

ガルド「ガルド・ドム・バロム、出る!!!」

二人が飛び降りる。セフィリアは足裏に魔力を纏い空を蹴って駆ける。ガルドもその後を同じ様に駆けて管理局の魔導師達が戦う戦場に飛び込んでいった。

戦闘区域から少し離れた所にその研究所はひっそりとあった。

しかし、クロノの艦が近づいた時だ。艦内にアラートが鳴り響く。

クロノ「如何したんだ!?」

通信士「前方から熱源反応!!これは……イノセントとスティンガーです!!」

研究所がモニターで映されると、そこから次々にスティンガーやイノセント?型と?型、そして海賊達が飛び出してきたのだ。?型がいきなり口にエネルギーを集束させて砲撃を放つ。無数の砲撃が飛んで来てクロノは慌てて防御を指示する。艦の前方に防御フィールドが出現、?型の砲撃を受け止めた。

通信士「防御フィールド、８０パーセントに低下!!」

リンディ「直ぐにダメージチェックを!!戦闘班はいま直ぐに出撃!!砲門を全て開放して!!」

フェイト「バルド!!」

バルド「……まあこうなるのは予想できたさ。クロノ、悪いが俺達は先に行くぜ?」

クロノ「な、何を言ってるんだ!?あの数の中を突っ込むって言うのか!?」

バルド「そうなるな。まあ、面倒くさいが何時もの事だ」

ニーア「あたし達も行くわよ!」

フレア「はい、シェリド行きましょう?」

シェリド「ああ、戦場で舞うフレアの美しい姿を見れるなんて僕は幸せ者だよ」

フレア「まあ、シェリドったら／／／／／／」

ニーア「馬鹿やってないでさっさと行くわよ……」

シェリドとフレアが桃色空間を形成していちゃついてるのにニーアは溜息をついてさっさと移動。
その後を二人も慌てて追いかけ、先に転送装置で待っていたバルドとフェイトと合流した。

ニーア「んで、あたしはこの艦の防衛にまわればいいの?」

バルド「そうだな。ある程度片付いたら来てくれ。シェリドはニーアと一緒にこの艦の防衛だ。フレアは俺達と来てくれ。お前の演算能力が必要だ」

フレア「分かりました」

シェリド「うわ……。フレアの戦う姿を見れないなんて、なんて不幸なんだ！？」

フレア「シェリド、そんなに落ち込まないで？私達は何時も一緒なんですから、帰ったらまた一緒にお茶にしましょ？」

シェリド「うん……。そうだね、早く終わらせて帰ってお茶にするとしようか。それなら、俄然ヤル気になって来たぞ！！！」

ニーア「現金な奴め……」

バルド「準備はいいな？じゃあ、行くぞ」

転送装置が動き出し、バルド達は空に転移する。重力落下しながらフェイトはバルディッシュを掴む。そして、ニーア、フレア、シェリドも懐からカードを取り出した。

フェイト「バルディッシュ、セットアップ！！」

バルディッシュ「イエッサー、ハーケンフォームセットアップ！！」

フ・シ・ニ「「「鎧装（フレーム）、セットアップ！！」」」

カード一同「「「「コード認識完了、鎧装（フレーム）セットアップ」」」」

それぞれバリアジャケットと鎧装（フレーム）を展開する。ニーアは水色を基調とした鎧装で大きなバインダーの様なものが四つ付けている。左手に左腕盾付きパイルバンカーがセットされ、右手にビームライフルを持つ。
フレアはオレンジ色を基調とした鎧装で、盾に円盤状の物体が付いている。右手にはバスターライフルを持つ。
シェリドは黒を基調とした鎧装を装備し、両手に一丁ずつビームライフルショーティーを持った。その後を魔導師達も次々に出撃を始める。

イノセント?型の群れがフェイト達を見つけて一斉に襲撃を掛ける。前足から銃弾を連射してくる。その弾幕の中を掻い潜りニーア、シェリド、フレアは猛スピードで敵との戦闘を開始した。

ニーア「さあ、派手に行くわよ!!!ファンネル!!」

背後にある二つのバインダーからフィンファンネルが射出、意思を持つかのように不規則な動きを見せて次々にビームを放ち、?型を撃破する。?型達もファンネルを落そうと銃撃するがその弾幕を高機動で回避して?型を撃ち落としていく。

フレア「敵との距離を算出、行きなさいドラグーン!!」

フレアの背にあるドラグーンが切り離され一斉に火を吹く。その彼女を?型が集束砲で攻撃してくる。その砲撃をフレアは自身の盾を構えてそこから円盤状の物体を射出、自分の周囲に展開した。そこ

から障壁が発生し砲撃を防ぐ。その隙にシェリドが一気に接近し？型の目の前に来た。

シェリド「フレアは、やらせないよ！！！」

ビームライフルショーティーを連射して牽制する。しかし、それは堅い装甲で弾かれてしまう。
そこに？型が巨大な腕を振るってくるが、シェリドはそれを飛び上がる事で回避、素早くビームライフルをしまい右手からアンカーランチャーを発射、？型の頭に突き刺した。

？型「キュアアァァァァァ！？」

シェリド「隙だらけだ、遅いっ！！」

アンカーを一気に巻き取り猛スピードで接近しその赤く光る目に強烈な蹴りを叩き込む。
弱点を叩かれて大きく仰け反る？型にシェリドは背負っていた対艦用大型ビームソードを抜き放つ。

シェリド「はあっ！！」

それを一気に振り下ろす。その巨大なビームソードに頭から胴体までを両断され真っ二つになり崩れ落ちる。直ぐにそのビームサーベ

ルを収納してビームライフルを持って周囲にいるスティンガーとイノセント?型を撃ち落とす。

フェイトにスティンガーが接近する。戦闘機形態からミサイルを一斉に放ち攻撃、それをフェイトは高速で飛び交いながらフォトンランサーで撃墜し、そのままスティンガーも撃墜する。

フェイト「ハーケンセイバー!!!」

高速回転する魔力刃が放たれスティンガーの翼を斬り落として撃墜する。その彼女の背後に別のスティンガーが接近、人型に変形してビームサーベルを抜き斬りかかる。

フェイト「くっ!?」

それに反応してバルディッシュで受け止める。互いの得物を弾いて飛び退く。スティンガーが戦闘機に変形してミサイルの一斉掃射を行う。無数のミサイルがフェイトを狙って飛んで来た。
それを、高速移動しながら避けるがその後をミサイルが執拗に追う。フェイトは反転してフォトンランサーを放ち幾つも撃墜し、そこを飛び抜けて残りのミサイルを回避して一気にスティンガーに距離を詰める。スティンガーも人型に再び変形してビームサーベルを抜き、斬りかかった。その一閃をフェイトは僅かに体をずらして避ける。
そのまま流れる動作でバルディッシュを振り抜きスティンガーに横一閃、胴体を斬られて火花を散らして爆発した。

続けてフェイトはカードリッジをロード、バルディッシュの魔力刃が大きくなりそれを構える。

フェイト「はあああああああっ!!!」

気合いの声と共に一閃!!上空に金色の線が奔りそれが通った場所にいたイノセントとスティンガーが次々に爆発して撃破された。研究所までの一本道がそれで出来あがる。フェイトはスピードを上げてそこに向かう。迎え撃つは?型、巨大な砲撃を彼女に向けて放つ。

バルド「黒旋輪!!!」

そこにバルドが間に飛び込んでケルベロスに漆黒の炎を纏わせて振るう。高速回転する黒い炎の刃が砲撃とぶつかり合い相殺する。そして、隙の出来た?型にニーアが接近する。

ニーア「デザートはいかが!?パイルバンカー!!!」

左手に装着していた盾を打ち込むと同時に収納されていたパイルバンカーが起動。分厚い鋼鉄の壁すら打ち抜く強烈な攻撃がイノセント?型の堅い装甲をぶち抜いた。パイルバンカーから薬莢が一本排出される。続けて二発、三発と計六発を断続的に打ち込み、最後の

一発でその巨体が耐えきれずに衝撃で打っ飛んだ。

ニーア「ま、人生は何事も勝負よね！」

パイルバンカーのリロード部に弾薬を装填しながら不敵な笑みを浮かべるニーア。その彼女に無数の？型とスティンガーの群れが迫る。

ニーア「数が多いのは大歓迎よ。シザービット！！」

前の二つのバインダーから大きめのピッドが射出、そこからそれよりも小さなビットが無数に射出され、更にそこから小さなビットが無数に射出された。そして、その数え切れないビットが一斉に動き出し次々にイノセントやスティンガーを撃ち落としていく。

ニーア「後は任せて！！」

バルド「サンキュー！！行くぞフェイト、フレア！！」

フェイト「うん！！」

フレア「分かりました！！」

その場をニーア達に任せてバルド達は施設に突撃していった。

ニーア「さあ、掛かってきなさい！！」

シェリド「命が惜しくなければね……」

兵士「ちくしょう！！一斉にかかれ！！数で圧倒しろ！！！」

海賊達が一斉にニーア達を狙う。ニーアとシェリドは不敵な笑みを浮かべてそこに突撃、その後を魔導師達も突撃していった。

---

研究所内に突入すると待っていたのはイノセント？型と賊達だった。

一斉に銃弾とレーザーを撃ってくる。それを掻い潜りバルドはケルベロスを構えて接近してきた？型を頭から胴体まで横に一閃して両断する。続けてきた別の一体の突進を避けてその体を蹴って壁に向かって飛び、その壁を更に蹴って銃撃してくる賊の一人の銃を斬り落とし続けて狼の闘気を当てて吹っ飛ばした。

フェイトは、バルディッシュをザンバーフォームに切り替えて接近する。突撃してきた？型を上段切りで真っ二つにしてそこから素早く体を入れ替えて横一閃、次に来た？型を上下に両断し、賊に向か

ってフォトンランサーを放ち持っていた銃にヒットさせて破壊した。銃を壊された賊達はビームサーベルを抜き放ってフェイトに肉薄、一斉に斬りかかる。

しかし、振り下ろしたビームサーベルの先にはフェイトの姿はもうなく、彼等の背後にバルディッシュを振るった恰好でいた。

彼女が軽くバルディッシュを振ると襲い掛かって来た賊達が次々に気を失って倒れる。そこに?型が光を集束してレーザーを放つ。それを飛び上がって体を捩じって避ける。避けた彼女の先にはバルドが既に移っていてケルベロスを構えていた。

フェイト「行くよ、バルド!!」

バルド「こい!!」

空中で体を入れ替えて体勢を変える。バルドは、フェイトの動きに合わせてケルベロスを彼女に向かって振るう。フェイトは、そのケルベロスの剣の腹に足裏をしっかりと合わせて力を込める。

バルド「おらあっ!!!」

フェイト「はあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

バルドがケルベロスを一気に振り抜く。フェイトは同時に剣の腹を蹴ってその勢いを利用して弾丸のように飛ぶ。賊や?型が捕捉する

速度を上回って飛んで来たフェイトはバルディッシュを構えて賊達の間を通り抜けざまに思いっきり横に振るった。

賊達の後方で床に膝を片方付いて着地、勢いを足を踏ん張り止める。彼女が立ち上がるとともに遅れて衝撃がやって来た賊達は一斉に真上に吹き飛ばされた。そして、彼女の背後から？型が襲いかかるがそれはバルドの漆黒の炎を纏った斬撃を受けて焼失、通路の安全を確保した。

フレア「二人とも凄いコンビネーションでしたね？」

バルド「そうか？」

フレア「ええ、意思疎通も良かったですよ」

フェイト「えへへ…／／／／／／ありがとう」

バルド「まっ、褒められて悪い気はしないな」

褒められてフェイトは頬を赤く染めてもじもじとする。バルドも軽い感じで返事をしているが満更でもない様だ。その後も、？型や賊が襲撃を掛けてくるがそれを問題無く撃破していき、遂に施設の最奥に辿り着いた。

フェイト「此処みたいだね？」

フレア「では、少しばかりこのコンピュータ内に侵入してみます」

バルディッシュ［私も手伝います］

そう言うとフレアはコンピュータの前に立ってキーを高速で叩きながら次々に項目を出しては消していく。バルディッシュはフレアの出したデータを取り整理する。それがしばらく続いていたが突然フレアの動きが止まる。

フレア「これは……！？」

フェイト「如何したの？」

フレアの訝しげな声にフェイトもその画面を覗き込む。それは、何かの設計図の様だ。

フェイト「Ｂ－２７４型『デストロイ』……？」

フレア「Ｂとは武装という意味ですね……。という事は、新型鎧装の開発コードですね……」

バルド「だが、人が武装するには全長がでか過ぎるぞ？全長４０メートル以上か……」

フレア「この鎧装……最近造られた様ですね。試験走行は……今日！？」

フェイト「えっ、場所は!?」

フレア「待って下さい、今出します……!!っ!?最悪な事態ですね……」

ケルベロス［如何したんだいフレア嬢ちゃんよ?］

フレア「試験場所は……ミッドです!!」

フェイト「うそっ!?」

フレア「それも、いまさっき出撃したみたいです!!今此処で戦っている部隊は全て後詰めの部隊で主力隊は既に出撃しています!!」

フェイト「た、大変!!急いでクロノに知らせなきゃ!!」

緊急事態にフェイトは直ぐにクロノに連絡を入れる。

クロノ『如何したんだ?』

フェイト「大変だよクロノ!!此処にいる部隊は後詰め部隊で、もう主力部隊はいないみたいだよ!!」

バルド「それだけじゃねえぞ。主力隊と共に新型が一緒だ。攻撃場所は……ミッドだ!!」

クロノ『何だと!?くそっ!!いまミッドは手薄な状態だ!!地上部隊だけしかまともに動かせない状態で如何すれば……!!』

フェイト「兎に角、なのは達にも連絡を入れるよ！！今ならまだ被害を抑えられる筈だよ！！」

クロノ『ああ、たのm――『艦長！！ミッドからの緊急連絡です！！』遅かったか！？』

バルド「フェイト、兎も角なのは達にこの事を直ぐに伝えろ。もう此処には何も残ってない筈だ。俺達は直ぐに本隊と合流して此処から急いで戻るぞ！！」

フェイト「う、うん！！」

フェイトも急いでなのは達に連絡を入れて慌ててクロノ達と合流する為に通って来た通路を戻った。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

～機動六課～

フェイト達が驚愕の事実を知る数時間前……

六課ではカインを相手にＦＷ陣が奮闘していた。カインは右手に雷切を持ったまま彼是一時間、一歩も動いていない。

スバル「おりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

スバルが再び突撃を仕掛ける。彼女の拳はカインの顔目掛けて真っ直ぐ放たれる。
だが、気付いた時にはスバルはカインを通り過ぎていた。

スバル「うわっとっとっと……！？」

勢い余ってつんのめる。慌てて足に力を入れて踏ん張り転ぶのを堪えた。
もう一度言うが、カインは一歩も動いていない。ティアナは初めはカインが幻術でも使っているのかと思っていた。だが、その様な痕跡は全くない。

ティアナ（なんで、カインに攻撃が当らないの！？）

エリオ「おおおおおおおおおぉぉぉぉぉ！！！」

スバル「どりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

エリオとスバルがカインを挟む様に突撃を行う。その時だ、二人の攻撃が当る寸前にカインの持っている雷切が軽く動いた様に見える。すると、エリオとスバルは真上に吹き飛ばされていた。

エリオ「うわっ！？」

スバル「いだっ！？」

そのまま地面に受け身も取れずに墜落。その二人を見てカインは軽く息を吐きながら肩に雷切を担ぐ。

カイン「相手の動きをよく見ろ。一撃を入れるのにそんなに大振りで当ると思っているのか？」

スバル「うぅ～、これでも前以上にコンパクトにしたのに……」

エリオ「これ以上小さなモーションって如何すればいいんですか？」

カイン「そんな事自分で考えろ。他人に教わってもそれは何の意味もない。最小限の動きで最大限の効果を上げる……それは、どの武器も必要とされる基本的な技術だ。持っている得物を自分の体の一部と思え、そうすれば自ずと出来るようになる」

ティアナ「そうは言うけど、そんなの簡単にできる訳ないじゃない！」

カイン「だからこそ、自身の相棒との意思疎通は必要なのさ。意思

の通じない武器は自分の手足とは呼べない、ただの重りだ。だからこそ理解しろ、自分の得物は自分の手足だと、な！」

スバル「うぅ～～……。よく分からないけど、兎に角ぶつかれば分かる！！」

エリオ「スバルさん……」

スバル「あれ？何でエリオはそんな目で私を見るの！？」

カイン「まあ、スバルらしい解答だな……」

スバル「なんかカインに馬鹿にされた！？こうなったら絶対にカインをそこから動かしてやる！！行くよエリオ！！」

エリオ「え、あ、はい！！」

カイン「ティアナもキャロも遠慮なんかすんなよ？」

ティアナ「……いいわ、やってやろうじゃない！！」

キャロ「カインさん、お願いします！！！」

カインは不敵な笑みを浮かべてそれに応える。スバルが突撃し、ティアナがそれの援護射撃を行う。

幾つもの魔力弾が一斉にカインに迫るが、それを一振りで消した。

続けてキャロがシューティングレイで上空から攻撃、エリオがそれと同時にストラーダの切っ先をカインに向けて魔力を爆発させて一気に突進する。それにスバルが並走し二人がキャロの魔力弾と共に

同時攻撃をした。

これなら幾らカインでも避けざるおえない筈だ！！そう思った一同だが……。

カイン「ふっ、まだ甘い！！」

笑みを浮かべて彼は雷切を横一閃、一振りでシューティングレイが二つに割れて消滅。

エリオとスバルは再び真上に吹き飛ばされた。だが、その吹き飛ばされた二人は突然霞んで消えた。

カイン「ティアナのフェイクシルエットか！？」

スバル「そっこだあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

エリオ「うおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

先程の攻撃はフェイントだったのに気付いて驚きの表情を浮かべる。

そこに、スバルとエリオがディバインバスターとサンダーレイジを放つ。カインを挟む様にして二つの魔法が迫る。

カイン「それでもまだだ！！」

しかし、それにカインは左手にサイフォスを取り出して真上に太刀を振り上げる。
二人の魔法はそれだけで軌道を大きく変えて真上に飛んで行った。

エリオ「これでも!?」

スバル「まだまだぁぁぁぁぁぁ!!」

ティアナ「こらっ!!勝手に突撃するんじゃないわよ、バカスバル!!」

キャロ「フリード行くよ!!」

フリード「キュクルー!!」

カイン「来い、お前達!!」

カインが二つの太刀を持ってＦＷ陣を迎え撃つ。それを、なのははハラハラしながら見ていた。

なのは「カ、カイン君…あまりＦＷ陣を苛めないでね～!」

??「あはは、カインは相変わらずだね?」

その声に振り向くとそこには……。

なのは「ユーノくん！？」

ユーノ「なのは、久しぶり」

そう、ユーノであった。普段は無限書庫にいる彼が此処にいるのに驚くなのは。如何して此処にいるのかを聞くと、部下の人達に休暇を与えられてしまったのだと返事が返って来た。如何やら、毎日働きづめの彼を見て彼の補佐をしている部下達が勝手に休暇届けを出したのだとか……。

それで、仕方がないので休みを貰ったのだが……まあ、結論から言えば六課に遊びに来たと言った方が近いだろう。

ユーノ「カインは……随分と暴れているね……？」

なのは「にゃはは……カイン君張り切り過ぎなの……」

二人の前にある映像にはＦＷ陣がカインにいい様に遊ばれている様子が映されている。

我武者羅に突っ込んで来る四人を軽くふっ飛ばしまくる。

なのは「もう、午後の訓練の前に皆が筋肉痛になっちゃうの……」

ユーノ「あはは……毎日、こんな訓練してるんだ……」

なのは「そうなの！！カイン君って本当に訓練でも容赦がないんだ

よ！！この前なんて、訓練し過ぎて私が筋肉痛になったのにカイン君ったら『柔軟体操しないから筋肉痛になるんだぞ』って言ったんだよ！？もう、私が筋肉痛になったのはカイン君の所為なのに……！？」

プンプンと頬を膨らませて怒っているなのは。全然怖くも何ともなく寧ろ、可愛い……。

その時、訓練終了のアラームが鳴る。カインは太刀を背の鞘に収め、ＦＷ陣を見る。

カイン「午前の訓練は此処までだ。ゆっくり休んで午後の訓練に備えておけ……って、聞こえてないか……」

ＦＷ陣の状況を見て苦笑いする。スバルは何とか息を切らしても立っていたがティアナは完全にダウン、地面に突っ伏していた。エリオとキャロなんかはもう完全に目を回していた（フリードも同じく……）。

なのは「もう、カイン君やり過ぎなの！！」

カイン「何言ってんだよ。これ位できなきゃ実力付けるのは難しいぞ？俺は基本動かないからＦＷ陣も楽だと思うんだが…？」

なのは「寧ろ一番訓練で厳しいの！？ロイド君みたいに動いて戦ってほしいよ！？」

カイン「ん？そうか？それじゃあ、今度は動いて見るか……」

ユーノ「相変わらず無茶苦茶だね、カイン……」

カイン「ユーノか？何で六課にいるんだ？」

ユーノ「休暇を貰ったんだよ。それで、少し遊びに来たんだ」

先程なのはに話した事をカインにも話す。そして、ちょうど昼時なので場所を移して食堂に移動する事にした。

ＦＷ陣は午前の訓練の汗を流す為にシャワーを浴びた後に食堂に入った。

エリオ「モグモグモグ！！」

スバル「バクバクバク！！」

ティアナ「……アンタ達、前より食べる様になったんじゃないの？」

二人の横には凄まじい程までの皿の山が……。昔よりも食べる量が増えているのに彼女は唖然としていた。

スバル「ふぁっふぇ、いっふぁいふぁふぇないと、うごふぇふぁいんふぁ…モゴモゴ」

ティアナ「口の中に詰まっている物を呑んでから話しないさいよ！！」

スバル「んぐっ……。だって、一杯食べないと動けなくなるんだよ～。それに、ティアだって前より食べてるじゃん」

ティアナ「え、うそ！？」

気付けば自分も昔よりも食べている事に気付く。比較すると１．５倍くらいだ……。

ティアナ「……あとで測らないと……」

エリオ「ティアナさん、何か言いました？」

ティアナ「何でもないわ……」

キャロ「エリオくん、これは女性共有の悩みだから聞いちゃ駄目だよ……」

エリオ「？？？？？」

ロイド「よっ！今日も頑張ってるな！！」

コレット「あまり無理はしないでね？」

そこに丁度良くお昼を摂りに来たロイドとコレットがやって来る。
ＦＷ陣はすこし詰めて座って二人も座れる様にする。それに礼を言って二人も座り食事を始める。

ロイド「それにしても、スバルもエリオもよくそんなに食べられるな？」

コレット「すごいねぇ～、お皿が山みたいになってるよ～♪」

スバル「えへへ、一杯食べないと午後もまともに動けなくなるからね」

エリオ「でも、クラウドさんやティファさんには負けます……」

少し離れた所の席にいるクラウドとティファを見る。二人ともスバルとエリオの皿を合わせた量位を普通に食っていた。どう頑張ってもあの量は無理である……。

ロイド「まあ、あの二人はあれくらい食べないと戦闘にも影響が来るからな……」

コレット「でもやっぱりあんなに食べると気になるね～」

スバル「あっ、そうだロイド！！ティアナを抱っこして見てよ！！」

ティアナ「ふぐぅ!?」

スバルの唐突な発言に料理を口に入れていた彼女は咽た。

ロイド「ん?行き成り如何したんだ?」

スバル「いいでしょ?」

ティアナ「ちょっ!?スバル、アンタ何言ってんのよ／／／／／／!??」

親友の突然過ぎる発言に頭が回らず混乱するティアナ。

ロイド「う~ん、抱っこっておんぶするって事か?「違う、違うぞロイドよ!!」って、シリウス、何が違うんだよ?」

何時の間にかシリウスが来ていてはやても一緒である。

シリウス「抱っこってのは……お姫様だっこの事でこうする事さ!!」

はやて「っ／／／／／／／／／／!?」

そして、素早くはやてをお姫様だっこする。突然の事で硬直するはやて。

シリウス「そして、お姫様だっこは非常に難しいから、これを簡単にできる俺はカッコいい訳だよ……」

エリオ「シリウスさん、地面に突っ伏した状態で言ってもあまり説得力がないですよ……？」

はやてにハリセンで打っ叩かれて地面にうつ伏せに倒れているシリウスが雄弁に語る。
だが、その姿故に全く説得力が感じられないのが非常に残念なものである。

ロイド「出来た！！」

その声がする方を見るとロイドがコレットをお姫様だっこしている姿があった。

ロイド「しかも全然軽いぜ！！俺ってカッコいいか！？」

コレット「ロイド凄いね～♪」↑天使の羽生えてます

エリオ「凄いですね……（これは、言わない方がいいかな……？）」

スバル「次はティアもやってよ！！」

ロイド「おう、いいぜ！！」

ティアナ「ええっ！？い、いいわよ別に！？って、ひゃあ！？」

あっさりとティアナも持ち上げられてしまった。服を通して伝わってくる彼の意外としっかりとした肉体の感触にティアナはドキドキと鼓動が速くなる。

スバル「ロイド、どう？」

ロイド「いや、全然軽いぜ？ティアナ、ちゃんと飯食ってるのか？」

ティアナ「た、食べてるわよ！！っていうか早く降ろしなさいっての／／／／／／！！」

顔を真っ赤にしてゼーゼーと息を荒くしているティアナ。それを見てニヤニヤとするスバル。

スバル「あれれ～？ティアってば、顔真っ赤～♪」

ティアナ「うっさい！！バカスバル／／／／／／！！」ゴツンッ！！

スバル「あだっ！？」

ロイド「あはははは！ティアナもスバルも相変わらず仲良いな！」

コレット「そだね～♪」

そんな感じでワイワイやっているのをカイン達は見ていた。

カイン「ったく、ロイドは何をやってんだか……」

なのは「にゃはははは、でも楽しそうなの！」

ユーノ「あはははは……」

そんな感じで会話をしていた時だ、突然通信が入る。

なのは「あれ、フェイトちゃんからだよ？」

カイン「何かあったのか？」

なのは「如何したのフェイトちゃん？」

フェイト『大変だよなのは！！そっちに時空海賊の本隊が向かってる！！』

なのは「えっ！？」

カイン「なにっ！？」

フェイト『それに相手は新型をｔ――！！』

しかし、最後まで言い切る前に映像にノイズが入り通信が途絶えてしまった。

なのは「フェイトちゃん！？フェイトちゃん！！」

カイン「通信妨害か……不味いな。今、管理局の部隊が減っている って時に……！！」

はやて「うち等も直ぐに出撃準備をするで！！ＦＷ陣も準備してや！！」

ＦＷ陣一同「「「「「はい！！！！」」」」」

すぐさまＦＷ陣もなのは達も直ぐに出撃準備を始める。

ヴァイスの操縦するヘリには、なのはとはやて、ヴィータ、シリウスやカイン、ＦＷ陣が乗る。

クラウドやティファはそのまま飛行して行く事になった。そこにロングアーチからイノセントの軍勢がこっちにも接近しているとの連絡が入った。そこで、ロイドとコレット、シグナムと使徒の三人はミッドからこっちにまで進行してくるイノセントの迎撃に向かう事になった。

はやて「ヴァイス君！！急いで向かうで！！」

ヴァイス「了解です！！」

クラウド「フレアからも情報が来た。相手は新型の兵器を使っている筈だ」

ロイド「皆、気を付けてくれよ！！」

なのは「ロイド君達も気を付けてね！！」

六課からヘリが飛び立ち、クラウドとティファもそれに追従して行った。

ロイド「ザフィーラ、それにシャマルも此処は頼むぜ！！」

ザフィーラ「守護の盾の名にかけて主達の帰る場所は守ってみせる」

シャマル「ヴィヴィオちゃんは私達と一緒に皆の帰りを待っていましょ？」

ヴィヴィオ「う、うん……」

～ミッドチルダ首都～

その日、ミッドの警邏を行っていた地上部隊の魔導師はふと、空を見上げた。

魔導師「ん？なんだあれ？」

空に黒い点が見えた。それが徐々に大きくなる。目を細めて見ると……それは、巨大な黒い機動兵器の様な物だった。

魔導師「な、何だあれ！？」

その巨大さに驚愕しているとその兵器に続いてイノセントとスティンガーがミッドに向けて続々と出現した。敵の出現に魔導師は急いで本部に連絡をした。地上本部は緊急事態宣言を発令、住民の避難と地上部隊に配属されている魔導師を全て出撃させる。

管理局本部にもこの連絡は届き、残っていた魔導師と戦艦を出撃させる。その間にその巨大な兵器、Ｂ－２４７型『デストロイ』はミッド付近に降り立つ。人型のその目が怪しく光る。その機体の傍にはカオスとエグザスの姿があった。

カオス「ったく、俺も乗りたかったぜ」

エグザス「そう愚痴を零すな。あいつが一番この試作機と同調で来たんだ。このデータを元にお前も乗れる様にするからな」

カオス「分かったよ。おい、ガイア！！派手に暴れてやろうぜ！！」

カオスの向いた方向にはその巨大な機体がある。そう、ガイアはこの機体に搭乗しているのだ。
様々な方向を映し出したモニターがコックピットに座っているガイアの前にある。

ガイア「怖い奴……皆、落とす！！」

ガイアを乗せたデストロイが動き出した。そのデストロイの上空に管理局の戦艦が出現する。
戦艦に乗っていた艦長はその巨大な姿に驚きの表情になる。

艦長「なんと巨大な機体だ！？」

通信士「如何いたしますか！？」

艦長「あんなものをミッドに近づけさせる訳にはいかない！！全砲門起動！！目標、敵巨大兵器！！」

通信士「砲門開放！！敵射程内です！！」

艦長「よし、撃てえぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

艦から砲撃が発射される。その巨大な砲撃は寸分狂わずデストロイに直撃、大爆発を起こしその巨体が煙に隠れた。

通信士「敵、巨大兵器に直撃！！」

艦長「やったか！？」

しかし、爆炎の中から悠然とデストロイは姿を現した。その身には一切の傷は見当たらなかった。

艦長「ば、ばかな！？」

ガイア「堕ちろおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！」

その艦に向けてガイアはデストロイを操作して胸部に搭載されている兵装、『スーパースキュラ』を発射した。その強烈なビーム砲を管理局の艦は回避行動を取るが、突然の事でしかも三つの連なる大きな砲撃を回避し切れる訳もなくその内の一発を受ける。左側に当り爆発、炎上し海面に不時着した。

エグザス「おお～凄いねぇ……。これなら、あっという間にミッドを制圧できるかな？」

ガイア「敵は……倒す！！」

再びミッドに向けて歩きだす。その黒い巨大な悪魔に魔導師達も市民達も震えあがった。

## 第六十六話（後書き）

ミッドに再び危機再来！！しかも今度はかの有名な某ガンダム種運命に出てきたあの巨大ＭＳと酷似した大型鎧装！！ってかこれもう人が装備するもんじゃねえだろ！？

カイン「ぶっちゃけ搭乗……」

まあ、そこは気にせんといてや……。しかし、あの凶悪な火力は此処でも健在！！
管理局の戦艦を一撃で撃沈させました。

はてさて、これからどうなる事やら……。次回の更新も早くしたいと切に願う今日この頃……。
読者の皆様、これからも精進しますので宜しくお願いします！！

そして、夜御倉　龍元様、感想ありがとうございます！！
これからも頑張りますので如何か宜しくお願いします！！

では、今回はこれにて！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

# 第六十七話（前書き）

六十七話更新！！

今回もミッドで大暴れな敵勢力との戦闘が主体です。

果たして、黒き悪魔に彼女達は如何立ち向かうのか！？

では、本編をどうぞ！！

# 第六十七話

燃え盛るミッド。そこでは、激しく魔導師達が激戦をしていた。

魔導師「これ以上は先に行かせるな！！」

魔導師「第十八部隊、戦闘継続不能！！救援を！！」

魔導師「こっちにもイノセントが来たぞ！！」

魔導師「市民を守れ！！」

そこら中で起きる爆発と怒号。その中で一際目に映るのはその巨大な機体。魔導師達が魔力弾や砲撃などを放つがそれは前方に張られる障壁で防がれる。

ガイア「邪魔な奴、消えろおぉおぉおぉおぉ！！！」

魔導師一同「ぐあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

指先からビーム砲を放ち魔導師達を次々に行動不能にしていく。それに追従するエグザスやカオスも魔導師達を撃墜して行く。

カオス「へっ！相手にならねえな！！」

エグザス「まあ、所詮は権力の上に立っている奴らの部下だからな。実力なんてこの位だろ」

通信兵『緊急連絡、新たにこのエリアに接近する部隊を確認』

カオス「命知らずだな。何処の誰だよ？」

通信兵『確認完了。敵は機動六課です！！』

エグザス「来たようだね～。よし、イノセントとスティンガーを向かわせろ！！ガイア、一発だけ奴らにお見舞いしてやれ！！」

ガイア「敵は……殺す！！」

デストロイの口部に搭載されているツォーンｍｋ２を上空に向けて発射した。
それは、ヘリに乗っていたなのは達に迫る。

ヴァイス「あぶねえっ！？」

咄嗟に操縦かんを動かして緊急回避をする。そのスレスレを巨大な砲撃は通り過ぎて行った。その回避行動で機内にいたなのは達が揉みくちゃになる。

はやて「な、なんや今のは!?」

シリウス「う～ん、顔に何か仄かな膨らみの感触が、これはまさかおp……「言わせへんで!!」ぶっ!?」

なのは「カ、カイン君……／／／／／／そ、そこを握っちゃ、ひゃん／／／／／／／!?」

カイン「わ、悪いなのは!?」

なのは「そ、そこは駄目／／／／／／!?にゃん／／／／／／く、くすぐった、やん、う、動かな、うぅん、駄目なの～／／／／／／」

エリオ「えっと、此処がこうで、あそこから…」

キャロ「きゃっ!?エリオくんのエッチ／／／／／／!!」

エリオ「うわわ!?ご、ごめんキャロ!!」

ティアナ「ちょっと、何処に手を突っ込んでのバカスバル!?」

スバル「しょうがないじゃん!!何処をどう動かせば出られるのか分かんないんだもん!?」

ヴィータ「何かあたしだけスンナリ脱出できたのがすんげーショックなんだけど……」

リイン「リインもです～……」

その光景を外で見ているクラウドとティファ、それにアイネは溜息を吐く。

クラウド「何やってんだか……」

アイネ「しかし、今の砲撃は何処からだ？戦艦からか？」

ティファ「いえ、攻撃は地上からでした。恐らくフェイトやフレアの言っていた新型かと……」

燃え盛るミッドが見えてきた。そして、そこには……ビルよりも大きい巨大兵器が一機その炎の中佇んでいた。何とか揉みくちゃ状態から脱出できた一同はその惨状に眉を顰める。

カイン「これは、酷いな……」

はやて「あそこにおるのが、今回の新型かいな！？」

ヴィータ「でけえな……」

ヴァイス「こっちにイノセントとスティンガーの軍勢が接近してま

す！！」

前方から無数のイノセントとスティンガーの軍団が飛んで来ている。イノセントは上空から?型、地上から?型が、スティンガーは戦闘機形態で編隊を組んで接近してきた。

なのは「皆、行くよ！！」

ヘリのハッチが開いて全員が飛び降りる。バリアジャケットを展開して飛行する。ティアナはスバルのウィングロードに乗り、キャロは竜魂召喚で巨大化したフリードに乗る。

シリウス「いっちょ派手に行こうか！！風よ刃となって敵を斬り裂け！！エアブレイド！！」

カイン「雷の一撃を受けよ、ライトニングブラスター！！」

シリウスが風の刃を飛ばし、カインが扇状に雷を放つ。その魔術にイノセント達とスティンガーの軍勢は呑みこまれる。しかし、それでも多数のイノセント達は気にせずに突撃をしかけてきた。

カイン「なのは達は先に行け！！此処は俺達が何とかする！！」

はやて「了解や！！皆いくで！！」

なのは「カイン君!!気を付けてね!!」

なのは達六課陣はミッドに向かって飛んで行く。それをカイン達が援護、飛行先にいる?型とスティンガーを魔術で次々に撃墜して行く。なのは達よりもカイン達の方が脅威と判断した?型の群れは狙いを彼等に向ける。

?型達が一斉に銃撃をしかける。自分に当りそうな銃弾だけカインは太刀を振るって弾く。クラウドが照準を合わせてバスターモードの干渉・莫耶で砲撃を行い、射線上にいる敵を消し飛ばす。ティファの精密射撃が敵の急所を的確に撃ち抜き撃墜し、続けてドラグーンを射出、フルバーストで殲滅を行う。シリウスが蹴りや拳で敵を叩き潰し更に魔術で周辺を一掃していく。

一方なのは達にも地上にいた?型が集束砲を放ち攻撃を仕掛ける。それを回避してなのはがディバインバスターで反撃、頭部に直撃して頭が吹っ飛ぶがすぐさま再生し今度は巨木の様な腕を振るって来る。空気の振動する重低音を響かせながら迫るそれを掻い潜り距離を詰めた。

なのは「ディバイン、バスター!!」

ゼロ距離からの頭部から胴体に向かっての砲撃を諸に受けて大穴のあいた?型は地響きを立てて沈む。そのなのは達に次々に?型やスティンガーが集まり出す。

はやて「なのはちゃん！！」

なのは「うん！！ＦＷ陣の皆は逃げ遅れた人の救助を！！ヴィータちゃんはアイネさんと一緒にスティンガーの相手を！！はやてちゃんはイノセントをお願い！！」

ヴィータ「なのはは如何する気だよ！？」

なのは「私は…あれの相手をするの！！」

なのはの視線の先にはあの巨大な機体。今も街を破壊しながら魔導師達を撃墜している。あれの進軍を止めなくては街が崩壊してしまう。そうはさせる訳にはいかない。レイジングハートを強く握る。なのはの無茶な行動に気付いたヴィータは慌てる。

ヴィータ「何言ってんだよなのは！？あんなの相手したらなのはの身があぶねえんだぞ！？」

なのは「大丈夫だよ、ヴィータちゃん」

ヴィータ「んな事言ったって…「それでは、私も援護するです！！」リリスか！？」

何時の間にかリリスが近場のビルの屋上に巨大なライフルを展開して攻撃していた。その強烈な銃弾、と言うよりは砲弾だろうか？そ

れを受けて?型は頭部を粉砕され胴体を穿たれ穴だらけにされて次々に沈んでいく。周囲の?型が沈んだ事を確認してリリスはライフルを収納して新たにビームライフルを装備してなのは達のところに下りてきた。

なのは「リリスちゃん!?如何して此処に!?」

リリス「グランディオンにフレアから連絡が来たのですよ。それで、モーゼス爺を後方待機させてウクルスとアリアと一緒に出撃してきたのですます!!」

アリア『み、皆さん!!私が援護します!!』

そこにアリアの通信が入る。彼女は如何やら相当離れた場所にある森の中に隠れているらしく映像には木々が生い茂っている光景が見える。その彼女が持っているのはライフルと呼ぶにはあまりにも長い銃身を持ったライフル銃、『超長距離スナイパーライフル』を構えていた。それが一度火を吹くとイノセント?型が撃ち抜かれ、スティンガーを破壊し、賊を撃墜していた。

敵は何処から狙撃されているのか分からずに混乱状態に陥りまるで的の様に撃ち抜かれていた。そして、?型や?型の攻撃を避けて接近戦をしているウクルスがいた。

ウクルス「おらおら!!前を通る奴は叩き落とすぜ!!」

ビームブーメランを投げて?型を撃墜、戻って来たブーメランを掴んですぐに反転し、高エネルギービームガトリングを持って連射しスティンガーの群れを撃墜する。素早く銃をしまい左手にある左盾搭載パンツァーアイゼンを発射して?型の首を挟む。そして、思いっきり引っ張り引き寄せて対艦用大型多変形ビームサーベルを片方の手に持ち振り下ろす。頭部にある赤い目に突き刺さり悲鳴を上げる?型。その頭部から一気に胴体までサーベルを刺した状態で飛行し最後に振り抜く。真っ二つにされた?型はそのまま静かに左右に割れて沈んだ。

リリス「一応、ウルフは出撃準備をしてるです。もう少ししたらご主人様達の部隊も動いてくれると思うですよ?」

はやて「ほんまか!?」

リリス「グランディオンは、管理局はまだ嫌いですが民間人は見捨てないです!!」

そこにビームが飛んでくる。それを回避して飛んで来た方を見るとカオスが此方に向けて銃を向けていた。

カオス「テメーらしつけえんだよ!!」

リリス「あれの相手はリリスがするですよ。なのはっちは行くといいです」

なのは「ありがとう、リリスちゃん!!」

カオス「いかせｎ――「おっと、リリスを無視するなです！！」っち！！」

なのはを狙おうとライフルを向けるがリリスからの射撃にそれを断念してリリスの方を見る。リリスはビームライフルを連射して牽制する。それを避けてカオスもリリスに向けてビームライフルを連射、それをリリスは回避し接近し蹴りを入れる。それを持っていた盾で防御すると当った場所で爆発が起きてカオスが吹っ飛ばされた。見ると、リリスの足にはバズーカが付いていてそれがゼロ距離で爆発したのだと分かった。

リリス「リリスの相手をするにはまだまだ青いな青年よ！！」

カオス「テメー、絶対に落とす！！」

リリス「リリスを落とそうなんて百年掛かっても無理なのですよ～♪」

リリスがカオスと戦闘を始める頃、なのはもあと少しで巨大兵器に近づける所まで来ていた。

しかし、

レイジングハート［マスター、右です！］

なのは「くぅ！？」

右から突然、砲弾が飛んでくる。体を捩じってこれをギリギリ回避して攻撃してきた相手を見る。そこには、リニアガンを此方に向けているエグザスの姿があった。

エグザス「いや～、これ以上行かせる訳にはいかないんだよねお嬢さん？」

なのは「こんな事をして何になるの！？」

エグザス「さぁね？お偉いさんが決める事だから軍人の俺は何も知らないさ。ただ、これ以上は絶対に行かせるなって言われてるんだよね！！」

なのは「くっ！？」

なのはに向かってリニアガンを撃ってくる。それを回避しながらアクセルシューターで反撃、エグザスは鎧装を戦闘機に変形して高機動でそれを回避して再び人に戻りＭ５４アーチャー連装ミサイルを四発なのはに向かって発射する。追尾してくるミサイルを空中を飛び交って振り向きざまに魔力弾を飛ばして撃墜する。

なのは「邪魔、しないで！！ディバイィィィン、バスタアァァァァ！！！」

エグザス「おっと……！」

なのはの得な砲撃が正確にエグザス目掛けて飛んでくる。しかし、彼はそれを絶妙な軌道で避けてみせた。それは流石の彼女も驚きの表情を見せた。

エグザス「いや～聞いてはいたけど、此処まで凄い砲撃だなんて思ってもいなかったね」

なのは「避けられた！？」

エグザス「管理局のエースオブエース、高町なのは。得意スタイルは遠距離からの砲撃、有名になれば成る程、その対策は容易いのさ！！！行け、ガンバレル！！」

背にあったバレルが独自に動きだしなのはに襲いかかる。多方向からビーム砲で撃ってくるバレルを何とか回避し続ける。背後から一発が来てそれを体を捻じって避けると今度は上から一発が飛んでくる。

それをプロテクションを瞬時に展開して受け止め、直ぐに後退し魔力弾を飛ばすがそれをガンバレルに搭載されているビーム砲で撃ち落とされてしまう。左から飛んでくるビームを避けると今度は右斜め上から別の砲撃が来る。それを避けると今度はＭ５４アーチャー連装ミサイルを四発飛ばしてきた。

慌てて空を舞い反転して追って来るミサイルにディバインバスターで撃墜、直ぐに魔力弾を形成して動きの止まった自分を狙おうとし

たバレルに飛ばして追い払う。

エグザス「どうだ？オールレンジ攻撃による砲撃封じは！？」

なのは「くっ！！負けられない、負けられないの！！レイジングハート、ブレードモード！！」

レイジングハート「イエッサー、ブレードモード！！」

レイジングハートの先に大きめの魔力刃が形成される。魔力を爆発させて一気に距離を詰めに掛かる。

エグザス「なにっ！？」

なのは「はあっ！！」

突然の接近戦に対応が遅れる。そこを逃すなのはではない。レイジングハートを振り下ろし斬りかかるがエグザスは咄嗟に後方に飛び退いてこれを回避、しかし完全には避けきれず左手に持っていたリニアガンを斬られてしまった。

なのは「ブレード、バスタアァァァァ！！！」

エグザス「あぶなっ！？」

更に彼女はカードリッジをロードして砲撃を続けざまに放つ。剣の様な形になって飛んでくる砲撃をギリギリ避ける。避けられた砲撃は其の侭真っ直ぐに進んで……『デストロイ』に直撃した。

エグザス「しまった!?」

なのは「これで……!!!」

今の一撃は完全に相手の不意を突いた形となった筈である。幾ら巨大兵器だろうと今のは効いた筈だ。そうなのはは思っていた。

しかし……

煙の中からは無傷のデストロイの姿があった。その腕から巨大な特殊シールド『陽電子リフレクター』を展開して彼女の砲撃を無効化したのだった。

なのは「うそ……!?」

得意の砲撃が効いていない事に驚愕する。そして、その目が怪しく光りなのはを捉える。

ガイア「そこかあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

デストロイの胸部から『スーパースキュラ』が発射される。戦艦すらその一撃で撃墜させた凶悪な砲撃がなのはに迫る。反応が遅れた事で巨大な質量に広範囲を呑みこむ砲撃は回避行動を取っても回避しきれないものだった。

そこでなのははプロテクションを横に最大出力で展開しその反対方向に全力で回避行動を取る。
プロテクションによって軌道が僅かにずれ彼女の横を巨大な砲撃が通り抜けていった。

なのは「きゃあっ！？」

しかし、プロテクションも長くは持たず、破壊されてしまう。その衝撃でなのはは軽く吹き飛ばされてしまい飛行魔法が解除されて墜落してしまう。

ガイア「怖い奴、消えろおおぉぉぉぉぉぉ！！！」

ツォーンｍｋ２を発射、落ちるなのはに向かって飛んで行く。だが、彼女は再び飛行魔法を発動し上空に舞い上がりそれを回避、外した砲撃はそのままビルに直撃し木端微塵に破壊した。

何とか空中で姿勢を整えてその巨大な悪魔の様な兵器を見上げる。
今までのとは比較にならない凶悪な機体、魔法を無効化するシールドと装甲、そして戦艦すら撃墜する破壊力。
だが、これ以上この街を……第二の故郷とも呼べるこの街を壊させはしない！！
不屈の魔導師は、最悪の兵器を一人迎え撃つ。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

一方、ＦＷ陣は逃げ遅れた人や負傷した魔導師を救助しながら攻撃してくるイノセントやスティンガーの軍団を撃墜していた。

エリオ「このぉ！！！」

ストラーダを横に振るって鋭い爪で切りかかって来る?型を両断する。続けて銃弾を撃ってくる?型が突撃してくる。それを空中を高速で飛び交って回避していくがその後を?型が執拗に追う。
更にスティンガーが戦闘機になって?型と追従してマシンガンを連射してくる。

エリオ「くっ！フォトンランサー、ファイヤー！！」

体の向きを変えて背後を向いて魔力弾を発射する。スティンガーはその機動力を持って回避、？型は反応が遅れて直撃を受けて撃墜される。スティンガーは変形してマシンガンを手に持って連射、それをエリオは避けて再び魔力弾を飛ばす。スティンガーはミサイルを四発発射して素早く戦闘機に変形、魔力弾を回避した。
発射されたミサイルはエリオを狙って飛んで来て彼は高速移動で振り切ろうとするが白煙を出しながら猛スピードで追尾してきて、更に本体も戦闘機形態からマシンガンを連射して追って来ている。

しかし、彼とてこのままやられる気はない。猛スピードで飛んでいたエリオは急制動をかけて速度を一気に落とす。ロックオン範囲から急に消えた彼をミサイルはその脇を飛んでいってしまう。そこからエリオは素早く体を入れ替えながら再び最高速度で飛びだす。飛んでくるマシンガンを避けてストラーダを構える。

エリオ「おりゃあっ！！！」

強力な突進をそのままにストラーダで相手を突き刺し貫いた。貫かれたスティンガーは墜落し空中で爆散した。続けて魔力弾を形成して放ちスティンガーと？型を撃ち落とす。

キャロ「エリオくん！！」

エリオ「キャロ！！大丈夫だった？怪我してない？」

キャロ「大丈夫だよ。エリオくんこそ大丈夫？」

エリオ「僕も大丈夫だよ。一度、ティアナさんとスバルさんと合流しよう」

キャロ「うん」

地上ではティアナとスバルが？型を迎撃して民間人の避難を促していた。

？型が背にある長距離リニアガンを発射、スバルがプロテクションを張ってそれを防ぎ、ティアナが魔力弾で？型を撃ち落とす。上空から無数の？型が飛んでくるがスバルがディバインバスターで撃破する。

エリオ「スバルさん！！ティアナさん！！」

キャロ「大丈夫ですか！？」

そこにエリオとキャロも合流、上空を飛び交うイノセントやスティンガーを撃墜していく。

それでも減らない敵の数に徐々に押され始める。

はやて「来(こ)よ、白銀(はくぎん)の風、天よりそそぐ矢羽となれ、フレースヴェルグ！！」

だが、そこにはやてが砲撃魔法を発動。一気にその周辺のイノセントやスティンガーを殲滅する。

スバル「はやて部隊長！？」

はやて「みんな、イノセントやスティンガーはうちがなんとかする。せやから、民間人の避難を――！！」

リイン《はやてちゃん、後ろです～！！》

はやて「くっ！？」

背後からいきなり三日月状の刃が飛んでくる。はやては慌ててそれを身を捩じって回避、攻撃してきた敵を見る。

アカギ「……外したか」

そこには第十五の使徒、アカギがサーフボードに乗って此方を見降ろしていた。

スバル「使徒！？」

ティアナ「こんな時に……！！」

思わぬ敵の出現にＦＷ陣はデバイスを構える。

アカギ「……海賊共力はそれ程でもないか。……このままだと、いずれは負けるだろう。だが、早過ぎると色々と不味いな。此処で時間稼ぎをさせてもらう！！」

アカギの魔力が膨れ上がる。サーフボードを操り、一気にＦＷ陣に接近し魔力弾を放って来た。それを全員散開して避けて戦闘に移った。

スバル「はやて部隊長はこのままイノセントとスティンガーをお願いします！！」

はやて「了解や！！皆も気を付けてな！！」

はやてにイノセント達の事を任せてＦＷ陣は使徒との戦闘に意識を集中させる。

アカギのサメの形をした魔力弾が一斉に発射される。まさに、獲物を狙うサメの様に素早い動きでＦＷ陣に向かって突撃する魔力弾をティアナが撃ち落とし、スバルが接近する。

エリオがフォトンランサーで牽制をしてキャロがエンチャント・デフェンスゲインを発動、スバルの防御を上げる。ウィングロードを滑ってスバルが近づき拳に力を込める。アカギはスバルに魔力弾を放つが彼女は前方にプロテクションを張ってそれを防ぎ、距離を詰

める。

スバル「どりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

スバルの拳が放たれる。しかし、アカギはサーフボードを巧みに操りその場で回避、スバルの拳は空振りする。そして、その場でサーフボードを回転させボードの先端の方でスバルの頭を強打した。

スバル「がっ！？」

強烈な一撃に彼女は吹っ飛ばされる。落ちそうになるが何とか堪えて揺れる視界を頭を何度も横に振ってはっきりさせる。

ティアナ「スバル、大丈夫！？」

スバル「う、うん……なんとか……」

ウィングロードを駆けてきたティアナがスバルを心配そうに見る。それに答えてスバルは再び戦闘を再開する。エリオが魔力弾を放った後にブーストで一気に突撃を行う。アカギはその魔力弾を自身の魔力弾で相殺して続けてきたエリオの突進をボードを軽く上にあげる事で上昇して避ける。

キャロがシューティングレイを放ち、続いてアルケミックチェーン

で拘束を試みるが、アカギはサーフボードを巧みに操りそれ等を回避した。フリードが炎を吐くがそれを障壁を張って防ぎ、逆に三日月状の刃をナイフを振るって飛ばして来る。それをフリードは空を切って飛翔して避ける。

ティアナはウィングロードから一定の距離を保ちながら魔力弾を撃ちまくる。しかし、それを素早く動いて回避しサメの魔力弾を放つ。それをスバルが新しくウィングロードを展開して道を作りティアナはそこに横飛びして魔力弾を回避、スバルが一気に上昇してアカギに近づき蹴りと拳を高速で放つ。

その連打をアカギはサーフボードの上で器用に動いて蹴りには蹴りを拳には自身の持っているナイフで受ける。その隙にティアナは魔力弾でアカギの背後を狙うが、それに気付いたアカギはスバルを蹴り飛ばして上昇しサーフボードの向きを変えて一気に降下。弾丸の様に落ちてきてナイフでティアナに斬りかかる。

彼女はそれをギリギリでウィングロードから飛び降りて回避、落ちる彼女は近くのビルにアンカーを撃ち込みそこから振り子の要領で勢いがついた所でアンカーを切り離して別のビルの屋上に降り立つ。そこにアカギは魔力弾を飛ばして来るのでそれを避けて魔力弾を放って応戦する。

その魔力弾を空中を高速で飛び交い避ける。そのアカギにスバルとエリオが急接近してデバイスを振るうがそれもまた、避けられてしまう。

アカギ「……これならどうだ！！ジェットウェーブ！！」

スバル「えっ！？あわわ！？」

エリオ「うわあ！？」

アカギを中心に見えない何かを受けてスバルとエリオは吹き飛ばされた。空中で慌てて体勢を整えて次の攻撃を警戒する。

スバル《エリオ、今の如何思う？》

エリオ《分かりません。ですけど、何かに、風の様なもの押された様な感じがしました》

アカギ「……来ないのか？ならば、此方から行かせて貰う、ジェットシャーテンス！！」

スバル「うわっ！？」

アカギは自身の周りに何かを纏いそのまま突撃をして来る。慌ててそれを避けるとその後に続いてきた突風で二人は真上に吹き飛ばされた。吹き飛ばされた二人を風が竜巻の様になって閉じ込める。アカギは、その真下にそのまま高速で入り一気に上昇する。

アカギ「エキサイト、サーキット！！！」

スバル「がはっ！？」

エリオ「ぐあっ！？」

弾丸の様に真上に飛ばされている二人に飛翔し二人の前でサーフボードを回転させる。横になったボードが丁度二人の喉に直撃、そのままボードを振り抜いて二人をその勢いで吹っ飛ばした。地面に受け身も取れずに二人は落ちてしまう。

キャロ「今のは……風！？」

スバル「ゲホッ、ゲホッ！！エリオ、大丈夫！？」

エリオ「は、はい……何とかですが、ゲホッゲホッ！？」

今の一撃をくらって二人は確信した。相手は風を使っていると。

ティアナ（風……！？まさか、相手は風の魔力変換質持ち！？）

アカギ「……分かっていたとしても、見えない攻撃に対抗出来るか！？」

再び突風が発生し今度はキャロも巻き込まれる。強い風圧でスバルとエリオも足を踏ん張る事で飛ばされるのを堪えるので精一杯だ。ビルの上にいるティアナもその風を肌で感じる事が出来た。

接近すれば吹き飛ばされ遠距離では届く前に弾かれてしまう。どう対抗すればいいのだ！？

そんなＦＷ陣に再びアカギは襲いかかっていった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

～機動六課本部～

複数の場所で魔導師が激しい戦闘を行っている中、六課に一人の男性が姿を現した。

職員「如何したんですか？」

？？？「すみません、此処は機動六課で間違いないですか？」

職員「ええ、そうですが……？」

？？？「ミッドから逃げてきたんですが、何処に避難すれば分からなくなってしまって……すみませんが何処かに避難場所はありませんか？」

職員「それならですね……此処を右にｍ――」

民間人が避難してきたのだと思った職員は親切にその人に避難所の場所を教えようとした。

だが……

――ドスッ！！――

職員「が、はっ……！？」

突然首に来た衝撃で職員は意識を失って倒れる。その倒れた職員をその男は冷めた目で見下ろしていた。

？？？「随分と警戒の薄い場所だな。機動六課、今日が貴様等の最後と知れ……」

その男の周囲に次々にイノセント？型が出現した。赤い目が光り、その鋭い牙をカチカチと鳴らしている。

？？？「いけ、イノセント共。あの建物を、制圧しろ」

？型［キシャアアアアアァァァァアアアアアアアアアアァァァ！！！！］

雄たけびを上げて？型達が一斉に六課に突撃を開始した。正面からドアをブチ破ってはいる者、壁を登って高い所から侵入する者など幾つもの所から同時に六課に雪崩込んだ。

職員「イノセントだあ！！？」

職員「逃げろ！！」

？型が建物内で次々に攻撃を開始した。顔の前に光を集束してレーザーを放つ。壁を破壊して雄たけびを上げる。そこかしこで爆発が起きる中、シャーリーはデバイスルームにいた。

職員「シャリオさん此処から逃げるんだ！！イノセントが直ぐそこまで来てる！！」

シャーリー「もう少しだけ待って！！」

シャーリーは、保管していたロストギア『白の御珠』の入った箱を

保管場所から取り出す。それを持って慌てて部屋から飛び出し廊下を職員達と駆ける。敵は間違いなくこのロストギアを狙っている。

だが、これは絶対に敵に渡してはいけない！！これを手にしてしまったら……！！

――ドガーンッ！！――

?型「キシャアアアアアアァァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

職員「なっ！？ぐあああっ！？」

職員「ぐはっ！？」

職員「ぎゃあっ！？」

そこに、壁を破壊して?型が姿を現す。そして次々と職員をその強靭な足で吹き飛ばし壁に叩き付けた。シャーリーも例外ではなく、吹き飛ばされ壁にぶつかる。その拍子で頭を強打してしまった。倒れる時、手から箱が落ち、蓋が開く。そこから御珠が転がり外に出てしまった。

薄れゆく意識の中、足音が聞こえる。燃え盛る炎の中から人が現れ、ロストギアを手にする。?型はそれをギチギチと牙を鳴らして見ている。それを最後にシャーリーも意識を失った。

燃え盛る炎が猛りそのフードを巻き上げる。そのフードを被った男は……。

クロヴィス「目的の物は手に入った。……あとは、もう一つの目的を果たそう」

第一の使徒、クロヴィスであった。彼はその場から背を向けて炎の中に再び姿を消した。

---

機動六課本部の近海でロイド達はイノセント?型とスティンガーの軍勢を相手に激しい戦闘を繰り広げていた。

ミサイルやら銃弾やらが飛んでくる中、ロイドとコレットはそれを掻い潜ってチャクラムや剣でスティンガーとイノセント?型を次々

に斬り伏せる。

シグナムもレヴァンテインを振るいイノセントを斬り伏せる。スティンガーがミサイルを放ってくるがそれを紙一重で回避、距離を詰める。彼女の魔力が膨れ、レヴァンテインから薬莢が飛び出す。

シグナム「紫電一閃！！！」

必殺の剣技が前方にいた無数の?型とスティンガーを屠る。素早くシュランゲフォームに切り替えて連結刃で次々に撃墜していく。

ジーク、エリスにクラレンスも嘗ての戦力であろうと容赦なく落としていた。

エリス「クスクス♪遠慮はしないよ～♪」

クラレンス「壊してあげる～クスクス♪」

伸縮剣を巧みに操り、イノセントやスティンガーを突き刺し、両断し、穿つ。続いて針状の魔力弾を形成して周囲に一斉に解き放つ。それに刺さってしまった者はエリスが指を向けると爆発し木端微塵に消し飛んだ。

ジーク「バルムンク、ファングフォーム！！」

バルムンク［エクスプロージョン！！］

刃が一つ一つ分れて独自に攻撃を開始する。縦横無尽に襲いかかる刃にイノセントやスティンガーは回避も間に合わず撃墜されていた。

ジーク「シグナム……」

シグナム「如何した、ジーク？」

ジーク「可笑しいと思わないか？何故奴らは、一定の距離を保ったまま俺達と戦っているんだ？」

シグナム「そういえば、そうだな……」

それを聞いてシグナムも違和感に気付いた。敵は此方との距離を一定に保ってあまり近づかず、されど離れ過ぎない位置で戦闘している。罠があるのか？それとも、何かを待っているのか？

何故、敵はあのような行動を取っているのか？敵の意図が見えずにシグナムは思考しながら時折り襲いかかるイノセントやスティンガーを斬り伏せていく。

イノセントをチャクラムを飛ばして撃墜していたコレットはふと、耳に何かが聞こえて動きを止める。

ロイド「コレット、如何したんだ？」

コレット「何か聞こえる……。何かが、爆発する様な音が……」

その方向を見る。その方角には六課がある。その方向から聞こえる断続的に鳴る爆発音。

それが意味するのは……

コレット「ロイド！！六課が襲われているよ！！」

ロイド「何だって！？」

シグナム「コレット、それは本当か！？」

コレット「うん、間違いなよ！！六課の方から爆発する音が聞こえる！！それも、何回も！！」

ロイド「しまった！！こいつらは、囮か！？」

まんまと、誘い出された事に気付いたロイドは舌打ちする。急いで戻らねば、六課が壊滅してしまう！！慌てて戻ろうとするが前をイノセント達が何重にも並んで塞いだ。

ロイド「くそっ！！行かせない気か！？」

コレット「ロイド、上！！」

ロイド「ちっ！！」

上空からスティンガーの編隊が一斉にマシンガンを撃ってきた。それを回避して斬撃を放ち数機を叩き落とす。ジークがファングでイノセントやスティンガーを撃墜するが、彼を狙ってミサイルが飛んでくる。それをエリスが魔力弾で破壊し、クラレンスが伸縮剣で相手を貫く。

シグナムが邪魔するイノセントを攻撃を避け、受け流しながら斬り伏せる。その彼女の背後を襲いかかるイノセントがいたがコレットが投げたチャクラムに頭部を斬りおとされて墜落していった。

ロイド「コレット！！」

コレット「うん！！」

ロ・コ「「複合奥義、スターダストレイン！！！」」

二人は互いの手を握って天高く上げる。すると、上空から無数の流星が降り注ぎ前方を塞いでいるイノセント達を撃ち落としていった。

仲間が次々に落とされてイノセント達は牙を打ち鳴らし出す。それは、空に吸い込まれる様に鳴り響く。すると、上空の空間が大きく歪みだし、そこから巨大なイノセント?型が姿を現したではないか。

ロイド「でかい！？」

エリス「クスクス♪あのイノセントの母体だよ」

初めてミッドを襲撃してきた時に現れた？型の母体らしき生き物だった。さしずめ、イノセント？型・クイーンと呼ぶべきだろうか？

クイーンは、雄たけびを上げて前足から拳大の銃弾を連射してくる。それをロイド達は避けて接近を試みるが翅を羽ばたかせて衝撃波を出して彼等の接近をクイーンは拒む。

続いて胴体の横に付いている長距離リニアガンを撃つ。ジークはシグナムの前に立ってシールドを展開してそれを防御する。ロイドはコレットの前に出て粋護陣という護身術でそれを受けた。

その隙にエリスとクラレンスが針状の魔力弾を放つがクイーンはマイクロミサイルを背から大量に出してそれを相殺、そのまま残りが彼女達に飛んでいく。エリスとクラレンスは直撃して爆発に包まれるが、そこから無数のガラス片が雨の様にクイーンに飛んで行った。

それを、巨体に見合わず素早い動きで回避してロイド達を狙う。？型達がスティンガーと共に動き出す。その横合いから何時の間にかエリスとクラレンスがいて魔力弾を雨の様に飛ばして？型やスティンガーを撃墜していく。

エリス「クスクス♪クラレンス行くよ♪」

クラレンス「は～い、姉さん、クスクス♪」

二人が手を合わせてクラレンスが空いた左手をエリスが右手を相手に向ける。口の端が三日月になる程の笑みを浮かべる。彼女達の前に巨大な魔法陣が出現した。

エリス「玩具は踊れ～♪」

クラレンス「壊れたら、死んじゃえ～♪」

エ・ク「「スティンガーブレイカーα」」

前方の巨大な魔法陣から扇状に魔力弾が放たれた。その弾幕は……今迄の比ではなかった。

圧倒的な数で、しかも高速で飛んでくる魔力弾にイノセントやスティンガーは落とされていく。イノセントやスティンガーは回避行動を取るが、なんと魔力弾はその後を追尾してきた。それを必死になって飛んで逃げるが前方から別の魔力弾が飛んで来てそれに当り、動きの鈍った所に魔力弾が殺到してイノセントは爆散した。

エリスとクラレンスの使う共同魔法、『スティンガーブレイカーα』は使徒内でもトップクラスの弾幕数と追尾能力を持つ。敵が避けて

も反転して追い掛ける程の追尾能力を持ち、それが扇状に拡散して飛んでくる事から回避しても正面から飛んでくる事もある。

その弾幕には多くのイノセントやスティンガーを撃墜して残るのは僅かになった。

続けて、コレットが天使術を発動した。彼女の足元で幾何の魔法陣が光り輝く。

コレット「聖なる翼よ、此処に集えて神の御心を示さん、真なる力、解放せよ!!エンジェルフェザー・フルバースト!!!」

コレットの天使の翼が巨大化そして、その翼から七色の光が雨の様に降り注いだ。
その一つ一つが意思を持つかのよう飛び、飛びまわるイノセント達を追尾し撃ち抜いた。

子供たちを殺されていくのに怒るクイーンがマイクロミサイルを一斉に発射、ロイド達に襲いかかる。

ロイド達は空中を飛び交う、その後をミサイルは執拗に追いかける。
飛行しながらコレットがチャクラムを投げてエリスとクラレンスの背後を追いかけるミサイルを両断して爆発させる。エリスとクラレンスはジークの背後のミサイルを魔力弾を飛ばして破壊した。ロイ

ドは、ミサイルを体を反転させて魔神剣を飛ばして破壊、爆発の衝撃波を利用して天高く舞う。ジークがシグナムの背後に素早く周り、衝撃防楯（ソニックシールド）を構えてそれを防ぐ。

それを見ずとも理解できたシグナムはそのまま飛翔してロイドと並び剣を構える。

ミサイルが効かないと判断したクイーンは、自らの爪に電気を奔らせて二人に向かって飛ぶ。

その巨体ながら素早い動きで二人にプラズマクローを振り下ろした。

……がその瞬間、クイーンの目から二人の姿が掻き消える。

標的を失いその爪は空を切る。見失った相手を探すべくその広範囲を見渡せる目で辺りを探す。

その時、一瞬だけ陽の光が陰る。

ロイド「うおぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

シグナム「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

太陽を背に二人が急降下してくる。弾丸の様に落ちてくる二人に反応が遅れてしまい、苦し紛れにマイクロミサイルを発射するがそれを体を捩じって、紙一重で避けてロイドがエレメントソードに炎を纏う。続けてシグナムもレヴァンテインに炎を纏わせる。薬莢が飛び出して彼女の魔力が跳ね上がる。

シグナム「行くぞ、ロイド！！！」

ロイド「おう！！複合奥義！！」

ロ・シ「「鳳凰、一閃っ！！！！！！」」

火の鳥となった二人がクイーンの胴体を通り抜ける。途中で制止してUターンし、火の鳥のまま正面から突撃、クイーンを一筋の赤い線が奔りロイドとシグナムがクイーンの斜め上で制止する。
そして、自らの剣を軽く振って鞘に収めると同時にクイーンの体が十字に両断し炎に包まれ最後に爆散した。

シグナム「これで、邪魔する奴らは全部倒した筈だ…」

ロイド「よし、皆急いで戻るぞ！！！」

それにコレット達も頷き猛スピードでなのは達の大事な帰る場所へと飛んで行った。

# 第六十七話（後書き）

アカギのレアスキルは風の魔力変換質、いや～結構な能力だなこれ……。

更に、ミッドだけでなく遂に六課も襲撃を受ける！！

そして、動き出す第一の使徒クロヴィス。この後一体どうなるのだろうか！？

なのは「ヴィヴィオ達が危ないの！！！」

はやて「またあの時を繰り返す訳にはいかへんのや！！」

果たしてどうなる事やら……次回の更新は早くしたいな……。

では本日はこれにて、読者の皆様、これからも宜しくお願いします！！

一同「大いなる力で未来を切り開け！！」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7441o/

魔法少女リリカルなのはStrikerS〜時の英雄〜

2011年10月9日00時56分発行